

ハイスクールD×D
wizard 希望の赤龍帝

ふくちか

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

伝説の赤き龍に選ばれし少年は、その両手に魔法の指輪と言う2つの輝きを宿し、絶望を希望へと変える……。これは、赤龍帝「兵藤一誠」と仲間が織り成す正史とは異なる物語である。ハイスクールDXDと仮面ライダーウィザードのコラボで、こちらもまたpixivにて連載しております作品です。

目次

第一章：旧校舎のディアボロス

『主人公＋相棒紹介（随時更新予定）』

1

MAGIC 1 『俺、赤龍帝で魔法使いで

す』

13

MAGIC 2 『俺、殺されかけます』

24

MAGIC 3 『俺、勧誘されます』

35

MAGIC 4 『俺、戦います』

55

MAGIC 5 『聖女、出会います』

81

MAGIC 6 『聖女と、遊びます！』

92

MAGIC 7 『友達、助けます！』

119

MAGIC 8 『俺、ブチ切れます』

151

MAGIC 番外編 『使い魔、ゲットだぜ

？』

170

MAGIC 番外編 『俺、デートします

？』

199

第二章：戦闘校舎のフェニックス

MAGIC 9 『俺、童貞捨てます!?!』

	210	MAGIC10 『焼き鳥、参上!』			
	234	MAGIC11 『修行、始めます!』			
262		MAGIC12 『俺達、戦います!前編』			
	292	MAGIC13 『俺達、戦います!後編』			
	336	MAGIC14 『俺、殴り込みます!!』			
	349	MAGIC番外編『メイドさんと、出会います!』			
391		MAGIC21 『共同戦線!』			
	406	MAGIC番外編『追憶!』			
		ト			
		第三章：月光校庭のエクスカリバー			
		MAGIC15 『聖剣!』			
	420	エクスカリバー			
		MAGIC16 『精神世界!』			
	433	アンダーワールド			
	462	MAGIC17 『憎悪!』			
	480	MAGIC18 『一触即発!』			
	506	MAGIC19 『進化!』			
	531	MAGIC20 『聖剣、破壊します!』			

- MAGIC 33 『会談、始まります!』
802
- MAGIC 34 『激突する天龍』
835
- MAGIC 35 『激闘の果てに』
876
- MAGIC 番外編 『メイドさんと、イ
チャイチャデート!』
891
- 第五章：冥界合宿のヘルキヤット
- MAGIC 36 『家、増築う!』
905
- MAGIC 37 『野獣の再会』
914
- MAGIC 38 『野獣、吼える』
924
- MAGIC 39 『魔力は食事』
944
- MAGIC 40 『明日の命、今日の命』
962
- MAGIC 41 『冥界、突入!』
997
- MAGIC 42 『冥界満喫ナウ』
1018
- MAGIC 43 『特訓、始めます!』
1035
- MAGIC 44 『薄幸の白猫』

1052 M A G I C 4 5 『若手集結と再会』

1074 M A G I C 4 6 『決闘前夜』

M A G I C 4 7 『VSシトリー眷属！』

前編 1126

M A G I C 4 8 『VSシトリー眷属！』

後編 1151

1183 M A G I C 4 9 『さらば夏休み』

1198 M A G I C 番外編 『三者面談』

第六章：体育館裏のドラゴンフォーメー

シヨン

M A G I C 5 0 『悪夢と新学期と転校生』

1210 M A G I C 5 1 『転生天使と種目決め』

1220 M A G I C 5 2 『序章く空間歪曲く』

1233 M A G I C 5 3 『終章く乱戦・合戦・ドラゴン乱舞く』

1257 M A G I C 5 4 『眼福！コスプレパーティ！』

1281 M A G I C 5 5 『新ヒーロー・爆誕？』

1304

- M A G I C 5 6 『怒りの進撃・前編』
 1314
 M A G I C 5 7 『怒りの進撃・後編』
 1330
 M A G I C 5 8 『絶望の嘆き・希望の凱
 旋』
 1383
 M A G I C 番外編 『幼児退行といつて
 も別に薬を無理矢理飲まされたわけじゃ
 ない（ある意味似てるけど）』
 1428
 第七章：放課後のラグナロク／オールド
 ラゴン
 M A G I C 5 9 『人は彼を、魔法使い
 と呼んだ』
 1444
 M A G I C 6 0 『思惑』
 1449
 M A G I C 6 1 『波乱のデート』
 1465
 M A G I C 6 2 『神、来日』
 1476
 M A G I C 6 3 『確執』
 1487
 M A G I C 6 4 『悪神』
 1495
 M A G I C 6 5 『暴かれた真実』
 1520
 M A G I C 6 6 『親子の絆』
 1543
 M A G I C 6 7 『その答えは』
 1553
 M A G I C 6 8 『悪神、攻略』
 1562

M A G I C 6 9 『息抜きと、約束と』 1578
 M A G I C 7 0 『開戦』 1588
 M A G I C 7 1 『消えない希望』 1623
 M A G I C 7 2 『果たす約束』 1664
 M A G I C 番外編 『真・メイドさんとデート!?!』 1679
 M A G I C 番外編 『ドラゴンの鳴いた日』 1690
 第八章：異世界事変のソーサラー
 M A G I C 7 3 『Another』 W

M A G I C 7 4 『対面する龍帝』 1753
 M A G I C 7 5 『その頃の仲間達』 1762
 M A G I C 7 6 『赤龍帝の激突』 1770
 M A G I C 7 7 『強さの根源』 1784
 M A G I C 7 8 『狙われた少年』 1791
 M A G I C 7 9 『動き出した悪意』 1791
 a g o n 『 1740
 o r l d F r o m W e l s h D r

M A G I C 8 6 『別れ』 ————— 1864
 M A G I C 8 5 『終わりのフィナーレ』 1853
 M A G I C 8 4 『赤き幻魔の龍』 1837
 M A G I C 8 3 『終局を告げし者』 1824
 M A G I C 8 2 『極龍乱舞』 ————— 1817
 M A G I C 8 1 『絶望の魔導士』 1810
 M A G I C 8 0 『決断の時』 ————— 1806
 M A G I C 番外編 『異世界での出来事』 1798

M A G I C 9 1 『合流』 ————— 1930
 M A G I C 9 0 『京の物の怪』 1921
 M A G I C 8 9 『赤龍帝の介護』 1915
 M A G I C 8 8 『不運な男』 ————— 1909
 M A G I C 8 7 『修学旅行・前哨』 1900
 ショーン
 第九章：修学旅行でウィザード・プロモーション
 P a r t 2 ————— 1885
 P a r t 1 ————— 1878
 M A G I C 番外編 『異世界での出来事』 1878

- 1938 M A G I C 9 2 『退屈な京都』
- M A G I C 9 3 『真実』
- M A G I C 9 4 『変異』
- 1967 M A G I C 9 5 『陰に隠れた陰謀』
- M A G I C 9 6 『投げられた賽』
- 1978 M A G I C 9 7 『作戦会議』
- M A G I C 9 8 『開戦』
- M A G I C 9 9 『強襲』
- 2024 M A G I C 1 0 0 『英雄VS英雄』
- 2032 M A G I C 1 0 1 『魔龍進化』
- M A G I C 1 0 2 『希望の戻る時』
- 2045 M A G I C 1 0 3 『さよなら京都』
- 2065 M A G I C 番外編 『そして彼は線を越える』
- M A G I C 番外編 『羽ばたかない不死鳥』
- M A G I C 番外編 『拉致されるフェニックス』
- M A G I C 番外編 『羽ばたけ、フェニックス』
- 1993
- 2001
- 2016
- 1951
- 2078
- 2088
- 2098

2565	M A G I C 1 3 4	『目指せ上級悪魔』	
2557	M A G I C 1 3 3	『試験開始』	
2546	M A G I C 1 3 2	『試験勉強+α』	
2538	M A G I C 1 3 1	『無限との対談』	
2530	M A G I C 1 3 0	『無限との邂逅』	
	M A G I C 1 2 9	『発情期』	2525
	M A G I C 1 2 8	『獣の難』	2520
	M A G I C 1 2 7	『激励』	2509

2676	M A G I C 1 4 0	『欠落せし希望』	
	ファイニティー		
	第十二章：補習授業のウエルシュイン		
	てーりー』		2644
	M A G I C 1 3 9	『終幕、そして』	2633
	p e G a m e		
2611	M A G I C 1 3 8	『生と死のE s c a』	
	M A G I C 1 3 7	『氷解の時』	
2586	M A G I C 1 3 6	『龍を喰らう者』	
	M A G I C 1 3 5	『再戦』	2575

- 鬼』
- MAGIC147 『牽制と復活』 2755
- MAGIC146 『英雄と言う名の悪
た者、英雄である者』 2864
- MAGIC145 『若手悪魔連合』
- MAGIC144 『目覚める龍』
- MAGIC143 『聖と魔の王』
- MAGIC142 『深淵の魔人』
- MAGIC141 『集いし戦士達』
- MAGIC148 『帰還』 2781
- MAGIC148 『徹底抗戦』
- MAGIC149 『希望よ来たれ』
- MAGIC150 『極の白龍』
- MAGIC151 『英雄とヒーロー』
- MAGIC152 『英雄になろうとし』
- MAGIC147 『希望よ来たれ』
- MAGIC148 『徹底抗戦』
- MAGIC149 『希望よ来たれ』
- MAGIC150 『極の白龍』
- MAGIC151 『英雄とヒーロー』
- MAGIC152 『英雄になろうとし』

MAGIC158 『色々、やっています』 2968
MAGIC157 『契約だよ！契約！』
MAGIC156 『明け方の訪問者』 2958
MAGIC155 『合格発表』 2902
MAGIC154 『不滅の信念』 2881
MAGIC番外編 『上級悪魔昇格の儀』 2936

第十三章：進路指導のワロツク

MAGIC162 『出発の時（リアス達が）』 3023
MAGIC163 『何時もと違う夜の一幕』 3048
MAGIC164 『そして日常は崩れ去る』 3053
MAGIC160 『これからの動向』 2992
MAGIC159 『ファンガイア……ではなくヴァンパイア』 2977

MAGIC165 『救出開始』

3064

MAGIC166 『大乱闘デビルマジ

シャンズ』

3072

MAGIC167 『絶望の魔法使い』

3082

MAGIC168 『出揃った役者』

3094

MAGIC169 『邪龍狩りじゃああ

!!』

3109

第十四章：課外授業のディウオーカー

MAGIC170 『平凡なようで、平凡

でない』

3129

MAGIC171 『新しい眷属』

3139

MAGIC172 『裸でエロゲと言う

概念』

3151

MAGIC173 『クーデターをやら

れた』

3166

MAGIC174 『クーデター撲滅イ

ベント』

3176

MAGIC175 『吸血鬼の国』

3189

MAGIC176 『聖杯の女王』

3203

MAGIC177 『明けの明星（ルシ

フ
ア
ー
』

3219

M A G I C 1 7 8 『呪われし血族』

3234

M A G I C 1 7 9 『ヴァレリーとの約

束
』

3243

第一章：旧校舎のディアボロス

『主人公＋相棒紹介（随時更新予定）』

兵藤一誠

年齢：17歳

神器：『赤龍帝の籠手』
ブーステッド・ギア

容姿：原作と同じ

使い魔：『天魔の業龍』
カオス・カルマ・ドラゴン ティアマット

『神喰狼』
フェンリル ハテイ・スコル

ランク：『兵士』
ボーン

この作品の主人公。通称イツセー。

原作と違い魔力を持つっており、既に禁手にも覚醒済み。
バランズブレイカー

そして、魔法使い『ウィザード』としての顔も持つ。

ウィザードとしての資格、即ち体内にファントムを封じたのは、物語開始から半年前のサバトを体験して手に入れた。

現状では、フレイムドラゴンまで覚醒済み。

物語開始前からそれなりに場数を踏んでおり、ドライグとの地獄の特訓によって、身でも中級悪魔や中級墮天使なら3回強化で互角に渡り合える。

原作イツセーと性欲は然程変わらないが、こっちのイツセーはちゃんとTPOは弁えている。

その為、木場と並ぶイケメンとして密かに人気。

両親とは、過去に交通事故で死別しており、中学に上がるまで、叔父の兵藤茂に育てられる。

中学から元の家で独り暮らしをしていた為、料理はそれなりに得意。

ただし食えれば良いと言うスタンスなので、味は気にしない。（但し、マトモな料理作った次の日はカツプ麺等のインスタント食品になる）

好物はドーナツ（特にプレーンシユガー……と言うかそれ以外食べない）

体術は勿論、ウィザードガンによる銃撃や剣術（我流）、ひいては魔法を使った戦法を得意とする。

ただし基本肉弾戦。

ウィザードとして戦うときは足技。

歴代の中で特にドラゴンショットを極め、様々な種類のドラゴンショットを使い分ける。

時間があれば、叔父の茂の指輪屋『面影堂』でアルバイトしている。

過去に冥界で修行中にグレイフィアと面識ありだが本人は良く覚えてない。（後に思いつく）

サバトの出来事は、今尚夢で映る程のトラウマとなっており、密かに親しい者達に壁を作りたがる程、深い傷跡になっている。

だがロキとの戦いを経てある程度改善され、紆余曲折を経てグレイフィアと恋仲に。

ドライブグ

声：原作と同じ

『ウエルシュユ・ドラゴン赤い龍』と呼ばれる伝説のドラゴン。

イツセー曰く、昔はもう少し威厳があつたが、今では威厳の欠片もないほどにだらけてる。（無論原因はイツセー）

イツセーの事は、『歴代で最高な赤龍帝』と評すほど気に入っている。

だらけてる為、基本ボケ。

ただし真面目に決める時もある。

過去には、沢山のメスドラゴンからモテモテだったとは本人談。その度にライバルが邪魔しに来たのが、喧嘩の原因だとか。

アニメ大好きで、イツセーが使う技の一部はアニメキャラの技。と同時にスケベ。

好きなタイプは未亡人と若妻。

イツセーの中に潜むドラゴンを嫌っている……筈だが以前と違いしりとりする仲。
（本人達曰く、『仲良くない！』）

だらけてしまった理由は『コイツ（イツセー）の前だと威厳を張るのが馬鹿らしくなってきた』から。

イツセーとは幼稚園児からの仲。

イツセーが何かを忘れてる事があっても、大抵はドライグが覚えている。

イツセーの戦いの師匠兼父親兼兄貴分。

故にイツセーとの絆は強い。

兵藤茂

原作、仮面ライダーウィザードにおける輪島繁と同じポジション。

人が良く、アーシアのホームステイも快く承諾した。

基本は『面影堂』に住んでおり、時々まイツセーの家に来る。

普通の指輪の他、イツセーが使う魔法の指輪も作っている。

ただし、本人にも魔法の効果は使うまで分からない。

因みに三大勢力の事を知っている。

何故なら、悪魔等がたまに指輪を買いに来るため、そう言うのには敏感。故にイツセーが悪魔になったのも見抜いている。

原作と違い、年齢は30代

立神吼介

CV：小西克幸

神器：『???』

本作品オリジナルキャラ。（容姿は仁藤功介をそのままアニメ画にし、少し幼さをプラス）

ビーストドライバーとビーストウイザードリングで古の魔法使い・ビーストへ変身す

る。

イツセーの中学時代の悪友であり、考古学者志望の少年。
実は悪魔の父と人間の母との間に生まれたハーフ。

夏休みを利用してとある遺跡を調査していた所、封印されていたビーストドライバーとビーストウィザードリングを発見し、中に封印されていたビーストキマイラと半ば強制的に契約。

ビーストの力を得た。

神器持ちではあるが、あまり進んで使わない。

人の話を聞かない傾向が強く、思い込んだら一直線な所もあるが、悪いと感じたら素直に謝罪もする。

良くも悪くも向こう見ず。

騙されやすいらしく、イツセー曰く「中学時代は周りの嘘によく振り回されていた」
のこと。

名前の由来は仁藤功介＋立神吼

エリス・キメリイエス

CV：堀江由衣

本作品オリジナルキャラ。(容姿は神羅万象チョコに登場する『光魔后妃リリス』と『最強銀河 究極ゼロ 〜バトルスピリッツ〜』に登場する『明の明星のエリス』)

先の戦争によって断絶したキメリイエス家唯一の生き残り。

(補足：代々キメリイエス家は『魔槍』と呼ばれる武具を保管・管理する役割を持っており、武具を扱う悪魔の中では一強とも言われていたが、戦争により断絶した事で、魔槍は全て散り散りになってしまった)

(補足その2：『魔槍』とは呪いや強力な魔力が込められた槍の総称である。一般的に魔剣と同じ種類に分類されるが、『魔槍』は手にした者の精神に悪影響を及ぼしたり、誰彼構わず呪いを与えたり、周囲に甚大な被害をもたらしたりする等常人には扱えない代物である。これらの『魔槍』を扱えるのはキメリイエス家の血を持つ者のみである。更に『魔槍』は持ち手の欲望に反応し、その者の負の心を増幅させたり、持ち手の意識を奪い体を支配する、揚げ句の果てには使用者の生命を削ると言う厄介な物も存在する)

魔槍を回収する道中で、サーゼクスと出会い恋に落ちる。

グレモリーと言う後ろ楯を得れば魔槍集めもスムーズに進むと言うこともあり、彼と結婚し、ミリキヤスを授かる。

現在はミリキヤスを養育する傍ら、サーゼクスからの情報を元に魔槍集めに奔走する。

本来なら彼女がサーゼクスの『女王』となるはずであったが、戦いに彼女を巻き込む事をサーゼクスが躊躇った事、そうなれば魔槍集めに支障を来すと言うグレイフィアとサーゼクスの判断により、グレイフィアがサーゼクスの『女王』となった。

その為、グレイフィアやセラフォルの影に隠れてしまうが、彼女も女性悪魔の中では強者の部類に入る。

尚、悪魔には珍しい褐色肌である。

プライベートではグレイフィアと親しい間柄であり、サーゼクスとも順風満帆な様子。

が、サーゼクスはこの二人には頭か上がらない。

名前の由来は『明の明星のエリス』とガンダム・キマリスから。

あまぎ
天城カイト

CV：内山昂輝

神器：『光子の錬術士』
フォトン・アルケミスト

ヴァーリチームに所属する青年。

チームには後述する目的を達する為に入った。

以前までは家族と共に過ごしていたが、半年前に剣を持った異形により家族を殺され、以降その異形を殺すべく活動を始めた。(ヴァーリと出会ったのもこの頃)

情報を得るべく、『禍の団』に所属していたが、尊大な態度で命令を下す旧魔王派の連中に嫌気が差し、ヴァーリチームに加わった。

他者を寄せ付けないキツイ性格をしているが本質は優しい。

ヴァーリチームに加わる以前までは全く感情を見せず、ただ復讐にのみ取り付かれていた状態であった。

現在も基本的に無口ではあるが聞かれたら答える程度にはまともになっている。

ヴァーリの事をリーダーと呼び、不躰な態度ではあるが信頼はしている。

中でも同じ人間のアーサーとは馬が合うらしく、日常ではよく会話をしている。

黒歌と美猴に関してはぞんざいな扱い。

まれにイツセーが気になっている黒歌をアーサーとからかう事も。

戦闘に関しては、アーサーと同じく人間ではあるが、手数を駆使して戦う技巧派で、神器を使った高速移動は祐斗の目にも止まらない程の速さを誇る。

剣術に関しても心得があるようで、アーサーと互角に打ち合える。

一応ヴァーリやイツセーより年上。

実は自身より歳上の幼馴染がいる。

元ネタは遊戯王ZEXAL及びARCVでお馴染み天城カイト。

見た目そのまま、名字もてんじょうをあまぎと呼び変えただけである。

神器：『光子の錬術士』

高速で振動するフォトン粒子を生成、操作する事が出来る。単純に武器や四肢に纏わせたり、光子を集めて憲兵を造りだし操ったり、肉体を操作し、高速で動いたり出来る。

ただし、武器の創造に関しては、伝説の武器は無理。造る武器に関しても知識がある程

度なければ生成不可。カイトは主に肉體操作で高速移動したり、これにより創造した劍を使う。禁手はギャラクシオンの力を鎧とする光子極化・輝光龍の鎧鱗

発動の際は、左目に青い隈取り『光子の片眼鏡』（元ネタで言うD・ゲイザー）が浮かび上がる。

単なる飾りではなく、体内に流す、及び生成するフォトン粒子の量を調節したり、発動者の眼力を高める。

形状はデュエルディスク（ARC-Vのリアルソリッドビジョンタイプ）で、発動中はディスク部分が展開される。

憲兵はフォトンモンスターやサイファーモンスターが元ネタ。

禁手は輝光子。パラディオス＋銀河眼の光子龍

『エタニティ・ブライト・ドラゴン光輝なる銀河星龍』

幻龍、或いは星龍とも呼称される古の時代に存在したとされるドラゴンの一体。通称ギャラクシオン。

このギャラクシオンは銀河を司るドラゴン。

現在の時代まで眠りに付いていたが、カイトが自らが掛けた封印の十字架を解いた事で目覚め、カイトの神器に宿った。

魂のみで肉体は遙か昔に朽ちているが、カイトの神器のフォトン粒子により二天龍と違い、擬似的な肉体を得た。

が、封印の影響でその肉体でも僅かな時間しか現世に干渉できない。

力を発動する際は、カイトの背後に現れ鎧となる。

この鎧を発動中は如何なる量のフォトン粒子を軽々と扱える様になり、普通なら肉体が崩壊する膨大なフォトン粒子を体外に放出できる。

普段はあまり喋らず、現世には干渉もしない。

が、自我もちゃんと有しており、カイトとの仲も悪くはない。

ドライブとアルビオンの事を知っている様だが……………？

元ネタはカイトが使う『銀河眼の光子龍』

ネタバレすると進化する。

MAGIC1 『俺、赤龍帝で魔法使いです』

『起きろ相棒、朝だぞ』

「んー……」

目覚まし時計が鳴り、更に中に宿ってる相棒の声で俺は目を覚ました。

「ふあく……もう朝かよ」

『取り敢えずランニングでも行くか?』

「そうっすかな……目覚ましに丁度良いし」

そう言つて俺は、椅子に掛けてあつたジャージを羽織つて外に出る。

「よし、行くか」

数分後……

「よし、飯作るか」

ランニングから戻つた俺は小さいフライパンを取り出し、朝食を作る。

因みに内容は目玉焼きと白米だ。

『久々に行くのか？学校』

「そーだな〜」

相棒に言われ、少し考える。

え？さつきから誰と話してんだって？

こいつはドライグ。

伝説のドラゴンって言われてるけど、今は魂だけの存在。

んで、俺はそのドライグを宿した「赤龍帝」ってやつなんだ。

まあ、幼稚園の時にはよく分からなくて、「すげードラゴン」って印象だったけどな。

今じゃ頼れる、兄貴兼親父兼戦いの師匠だ。

『いい加減行かんと、茂殿に申し訳ないだろ』

「うっ……べ、別におっちゃんも事情分かってくれてるしさ」

おっちゃん、と言うのは俺の父さんの兄。だからおっちゃん。

え？両親どうしたんだって？

今は天国だよ。

『相棒、丁度いい感じだぞ。目玉焼き』

「おつ、ホントだ！でかした！」

ドライブグに言われフライパンを見ると、目玉焼きはいい感じに仕上がってた。

よっしやー！

「じゃ……頂きます」

俺は中学からお馴染みの一人飯に没頭する。

寂しいって言えばそうだけど、おつちゃんに世話になりっぱなしって訳にもいかねーからなあ。

「ご馳走様つと」

『はい、お粗末さま』

「お前は母ちゃんか」

『一度ドラマでやってたのを見てやりたくなった。後悔はしてない』

「さいですか」

俺は二日ぶりに制服に腕を通した。

「よし、窓OK。ガスの元栓OKつと」

『別に盗られるもんそんなねーじゃん』

「一応だよ」

戸締り等を確認した後、鞆を持って玄関の戸を意気揚々と開ける。

「さあ、出発だ！」

そう言つて俺は自分の愛車に跨る。

『……相棒、別にバイクで行くほど距離離れてねーだろ』

「そ、そうだったな」

いっけね、何時もの癖だ。

……さあ、気を取り直して。

「さあ、出発だ！」

『TAKE 2』

やかましい！

ああ、そういやまだ自己紹介してなかったな。

俺は兵藤一誠。

赤龍帝と魔法使いの、二束の草鞋を履いた（自称）普通の高校生さ。

「さて、二日ぶりの学校だな」

「ここが、俺が何時も通ってる学校、「駒王学園」だ。

でも驚くなかれ、この学校、いや俺の住んでるこの町「駒王町」は、とある悪魔の領土なんだと。

俺もドライブに教えられた時はびっくりしたな。

え？悪魔って何だよって？

実は俺達の世界には、悪魔、天使、堕天使の通称「三大勢力」が存在してるんだ。

驚きだろ？

んで、ドライブはその三大勢力にもう一方のドラゴンと一緒に「セイクリッド・ギア神器」てつてのに封印

されたんだ。

……話が逸れちゃったな。

そんなもんだから、この学校の生徒の一部や上層部は悪魔なんだ。

「あ、兵藤君だー！」

「おはよ〜！」

「おう、二日ぶり〜」

後、女の子の比率が多いつても特徴だな。

「おお！イッセー！」

「久しぶりだな！」

そう言つて俺の後ろから声を掛けてきたやつがいる。

振り向いてそいつ等を見たとき、俺は溜め息を吐いた。

「どうしたよ。松田、元浜……そのたんこぶ」

朝から頭にたんこぶを作つていたからだ。

「また女子更衣室を覗いたんだな、お前ら」

俺がそう言つと、目の前の悪友——丸刈り頭の松田、眼鏡を掛けた元浜は、うぐつ

と言いながら、たじろぐ。

「何で分かつた!？」

「何年お前らの悪友やつてると思つてんだ？つーかこの間も覗いてたろ」

「見つけたわよっ！」

「ひい！」

おおつと、女子陸上部の皆さんのお出ました。

こいつ等も年貢の納め時か？

「全くアンタ達は——此間も覗いてたでしょ!？」

「今日という今日は許さないんだから！」

すげえ気迫だな。

でもちよつと気の毒だから、助け舟を出しますか。

「まあまあ、もうそのぐらいで勘弁してくんねーか？」

「兵藤君…!？」

俺が前に出ると、陸上部の皆顔を赤くしちやつた。

よく分からんが、取り敢えず庇ってやるか。

「もう授業始まるしよ。それにこいつ等にもちやんと言つとくから、な？」

「ひよ、兵藤君が言うなら……………」

部員の一人がもじもじして言ったかと思うと、今度は松田たちを指差した。

「今回は兵藤君に免じて許してあげる！でも次覗いたら……………」

「煮えた鉛飲まさすからね!!」

こええ！

煮えた鉛つて、考えること過激だな…………。

『もう女子の言うことじゃねーよ。槍持つて野を駆け回る人の言うことだぞ』

ドライグ、お前の意見に全面同意だ。

「ありがとな。…………ほれ行くぞ、お前ら」

俺は松田と元浜を立たせ、教室に向かう。

「ずりーぞイツセーばっか！」

「お前も俺たちと劣らないレベルの変態なのに！」

「自分の性癖を大っぴらに語るほど馬鹿じゃねーよ」

事実そうだ。

俺は親しい友達、こいつ等以外に猥談はしない。

「さっさと行くぞ！あ、それと元浜」

「ん？」

「後で休んでた分のノート、みしてくんね？」

「分かったよ。助けてもらった恩返しだ」

「ふいー、やっと昼休みだな」

授業を終えて、待ちに待った昼休み。

俺は自販機でジュースを買った後、中庭に向かった。

「さ、お楽しみの……」

俺は笑顔で手に持った袋からそれを取り出した。

『……何時も思うが、昼飯ドーナツで足りるのか?』

「それは気持ちの問題だよ。それに弁当作るほど、オカズなかったし」

それはドーナツだ。

砂糖のかかったプレーンシュガー、俺のお気に入りなんだ〜!

「……………ん?」

プレーンシュガーを食べると、なにやら向こう側が騒がしい。

まあ大方、あの人たちだろうな。

「相変わらず綺麗だなく……」

其の正体は、学年一のお姉様。

リアス・グレモリー先輩と、姫島朱乃先輩だ。

『悪魔だけどな』

「だからこそじゃね?」

遠目から見ながら、ドーナツを平らげる。

正直、高嶺の花過ぎて、近づくのも躊躇っちゃう。

「チャイム鳴ったら起こしてくれ、ドライグ……」

『分かった』

ぼかぼかな日に見守られながら、俺は昼寝に入った。

だけど放課後、また一騒動あるとは、この時は知らなかった。

次回、D×Dウィザード。

BGM: Life is SHOW TIME

天野夕麻「えっと、兵藤一誠君、ですか？」

イツセー「いい加減正体見せたら？墮天使さん」

リアス「ふうん：兵藤 一誠か」

第二話「俺、殺されかけます」

ドライグ『これで決りだ！』

イツセー「それウィザードちやう、Wや」

MAGIC 2 『俺、殺されかけます』

イツセーside

「よし、帰るか」

いつも通りの平凡な授業を終えて、俺は家に帰ろうとする。
まあ、この平凡な日常が俺は好きなんだけどね。

つーか日直のせいで帰りが何時もより遅れちまったよ……。

『相棒、今日の晩飯は?』

「うーん、カレーにしようかな?」

確か今日は近所のスーパーで特売セールがあつたはず。

序でに冷凍食品も買つとくか。

「あ、あの!」

「ん?」

だけど校門を出ようとした時、俺は誰かに呼び止められた。

誰だ?

「兵藤、一誠君ですよね？」

そこにいたのは、長い黒髪が特徴の可愛らしい女の子だった。

見た感じ、駒王学園の子じゃないな。

「そうだけど……君は？」

「あ、ごめんなさい！自己紹介がまだでしたね……。私、天野夕麻って言います」

そう目の前の女の子、夕麻ちゃんがお辞儀をしてくれた。

「……………ここだと少しあれですから、向こうの公園まで来てもらってもいいですか？」

「ああ、良いぜ」

特に断る理由もないしな。

それに、俺も確かめたいことがあるからな。

『相棒、此奴は……………』

『わーってるよ。堕天使、だろ？』

俺はドライブからの呼びかけにそう答える。

『気づいていたか』

『まあね。第一、普通の人間と雰囲気違うしな。だからこそ、彼女が何かしでかす前に、

止めないとさ』

『考えたな、相棒』

ドライブとの会話を打ち切り、俺は夕麻ちゃんの後についていく。

「ごめんね。いきなり呼び出して」

「良いよ」

俺と夕麻ちゃんは学校からそう離れてない公園についた。

「で、話って？」

俺が切り出すと、夕麻ちゃんは恥ずかしげに口を開いた。

「そんなに難しいことじゃないの。その……」

もじもじしているその姿は、第三者から見たら間違いなく告白シーンだろうな。

でもまあ、

『おいおい、魔力が粗ぶってるぜ。これじゃ正体バラしてるもんだなあ』

俺の相棒からすればバレバレだけどな。

どうせ、付き合ってくれて言ってきた、翌日のデートかなんかで俺を殺すつもりなんだろうなあ。

だから、俺が言うことは一つだ。

「悪いけど、君が言おうとしてることに俺は答えられない。それにさ、こんな回りくどいことやめねーか?……………墮天使さん?」

「っ!?!」

俺が言ったその一言に、夕麻ちゃんの顔が凍りついた。

「……………な、何のことかな?」

「とぼけんなくて。俺、そういうのには敏感なの」

しらを切ろうとする夕麻ちゃんの言葉を一蹴する。

すると、夕麻ちゃんは突然肩を震わすと、

「そっか。じゃあ……………死んで?」

そう静かに呟くなり、俺に光の槍を放った。

「よつと!!」

「何っ!?!」

サイドステップで躲した俺に夕麻ちゃんが驚いている隙に、俺も自分の神器を展開する。

そう、これこそドライブの魂を封じ込めた神器、『ブーステッドキア赤龍帝の籠手』だ。

「おりゃあ!!」

「！ぐうっ！」

即座に踏み込んで、俺は夕麻ちゃんに殴り掛かるが、夕麻ちゃんも負けじと魔法陣を展開して俺の攻撃を防ぐ。

「なあ〜なんだ？神器を宿してるからマークしてたのに、ただの『龍トウワイズ・クリティカルの手』じゃない。焦って損したわ！」

まあ、赤龍帝の籠手は伝説の神器だからな。

こんな高校生に宿ってるなんて考えるはずないもんな。

『……………相棒、あの女、八つ裂きにしろ』

おお、珍しくドライブがキレてらっしやる。

まあ、間違われちゃあ怒りたくなりますわな。

『良いのかよ？そんなことして』

『丁度お逃え向きに結界まで張ってくれてんだ。それに俺の意見は絶対だ』

『何処の暴君？』

『暴君なんてもんじゃない。ただの天龍さ』

「ちげえねーな!!」

ドライブにそう答え、俺は巨大な光弾を放つ！

「そおら!!」

「っ!!」

光弾は命中せずに、地面に巨大なクレーターを作っただけだった。

「だけど、

「隙だらけえ!」

「がはあ!!」

俺のドラゴンショットを躲して、一息ついて隙だらけの夕麻ちゃんの腹に爪を突き立てる。

「そしてそのままあ!!」

マシガン・ドラゴンショット
「拡散する龍波動お!!!」

「ぐうううっ?!?!」

ゼロ距離からの連撃に、夕麻ちゃんは大きく仰け反り、地面に倒れ伏す。

「おお、腹から大出血してるぜ。」

「おいおいどうした?普通の高校生にやられてんじゃねーかあ!」

「ぐうっ!生意気な餓鬼があ……………!!」

夕麻ちゃんは立ち上がり、更に莫大な光の矢を作り出した!

「へっ!そうこなくっちゃん……………ん?」

構えた途端、公園の一角から謎の魔法陣が現れた。

「あれは、グレモリーの紋章……！チツッ！」

夕麻ちゃんも舌打ちすると、光の矢を消して自らの足元に魔方陣を展開した。「覚えていなさい、兵藤一誠！貴様はこのレイナーレが殺すっ!!」

俺を睨み付けながら呪詛の言葉を吐き、レイナーレは姿を消した。

『…相棒、早くこの場から消えた方が良いぞ』

「……みたいだな」

《コネクト・プリーズ》

俺は魔法で現れた魔方陣からバイクを取り出し、その場から走り出した。

忘れ物に気づかず……。

イツセーside out

リアス side

「これは……!?!?」

私はリアス・グレモリー。

この辺り一帯の領土を所有する悪魔よ。

今私は、巨大な魔力が探知された学園の近くにある公園にいる。

だけどそこはまるで、嵐が直撃したかのような有様だった。

遊具は殆ど吹き飛び、木々の一部はへし折れている。

「この波導……光」

その場に微かに残った波導が、肌にピリツと来たことから、恐らくは天使か墮天使。

だけど、このもう一方の、三大勢力の何れとも違うこの異質な波導は何?

すると、

「これって……?」

近くにある物が落ちていたため、それを拾ってみると、駒王学園の生徒手帳だった。

中を見てみると、そこには一人の男子生徒の名前が記されていた。

「兵藤 一誠……」

私は静かにその名を読み上げた。

「私と同じ学園の生徒……。確かめてみる必要があるわね」

この時私は知らなかった。

この出会いが私たち、そして三大勢力にとって重要な事を引き起こす事になろうとは。

リアス s i d e o u t

イツセー s i d e

「ぶえつくしよんっ!!」

俺はヘルメット越しで盛大なくしやみをした。

『誰か噂でもしてるんじやねーか?』

「イヤー、モテる男は辛いねえ」

『もしかすると、誰かが五寸釘で相棒を呪ってるのかも』
「いや、古いよ。それに感じるなら普通寒気じゃね?」

スーパーの袋を持って、取り敢えず家にたどり着いた。
気づけば、辺りは既に真っ暗だ。

「……もう寝るかな?」

『カレーは?』

「あれの後だと、作る気にもなんねー」

『あの程度で疲れてちやまだまだだぜ』

「うるへえ」

リビングに荷物を置いたと同時に、

『相棒、奴らが現れたようだぜ』

ドライブグから言われ、俺は再びヘルメットを持った。

「……ホント空気よまねーな。アイツ等」

『Fight power! Fight power! F i F i F i F i F | F | F | F |
Fight!』

「レモンエナジィの変身音は良いから！」

さ、もうひとつ走り行きますか。

こりや、明日の学校は休み確定だな。（疲れたな意味で）

次回、D×Dウィザード

イツセー「し、失礼しましたあああ!!!」

リアス「悪魔に、私の眷属になってくれる？」

ドライグ『俺は相棒の意思に従うさ』

第三話「俺、勧誘されます」

ドライグ『定めの鎖を、解き放て!』

イツセー「漢字それであってるのか？」

MAGIC3 『俺、勧誘されます』

やあ、僕の名前は木場祐斗。

この駒王学園の二年の生徒さ。

今日はある生徒に用があるんだ。

その名は兵藤一誠。

昨夜に公園で発生した事件の関係者だと部長が睨んでいるから、彼に話を聞こうと思ってるね。

ん？部長って？

言うのが遅れちゃったね。僕は悪魔なんだ。

そして僕が所属しているクラブは我らが「二大お姉さま」の内一人、リアス・グレモリー部長が率いるオカルト研究部なんだ。

因みにもう一人の「二大お姉さま」の姫島朱乃さん、一年のマスコットキャラ的存在の塔城小猫ちゃんも所属してるんだ。

つと説明してる間に兵藤君のクラスに着いたようだ。

「ちよつと良いかな？」

僕は教室内にいた女の子に声を掛けた。

すると、その女の子は興奮した様子で大声を上げた。

「き、木場きゆんだーっ!!!」

「ど、どうしたんですかっ!?!」

「ちよつと!何声掛けるのよっ!?!」

「も、もしかして告白っ?!」

うーん、質問しにくいなあ。

「いや、兵藤一誠君っているかい？」

「え、兵藤君ですか？」

「今日は来てないですよ」

え？

「ほ、ホントに？」

「はい。と言うより最近は何んたり来たりの繰り返して……」

「昨日も二日ぶりに来たんですよ」

まさか、僕らが接触してくることを警戒しての休みなのか？

取り敢えず、部長に報告しないと。

「そっか。ごめんね」

「い、いえ！」

「き、木場きゆんの笑顔が間近に……がくっ」

「しっかり！意識を保つのよ!!」

「そうよ！折角夏コミの材料が増えたのに！」

「兵藤君×木場きゆん……イイ！」

た、倒れちゃったけど大丈夫かな？

後、最後の言葉に背筋がゾクツと来たのは気のせいかな？

「そう……」

僕は兵藤君が来てないことを部長に告げた。

「ご苦勞様、 祐斗」

「はっ」

部長は溜め息を吐いて、紅茶を飲んだ。

「でも、定期的に来てないって事は、サボりの可能性も……」

小猫ちゃんがプリンを食べながら部長に静かに進言した。

あ、あのプリンは……購買で10個しか売ってないマンゴープリン！流石小猫ちゃんだな……。

「あらあら、昨日は来ていましたのに……。どうしますか？部長」

朱乃さんが部長に聞いた。

すると部長は、

「彼の所在は把握してるわ。取り敢えず、放課後彼の自宅に行きましょう。これも返さないといけないしね」

部長は彼の生徒手帳を懐から取り出した。

「放課後、ここにまた集合するようにね」

「はっ」

そして放課後……………

「さ、出発しましよー！」

部長の号令のもと、僕達は兵藤君の家に向かった。

生徒手帳に書かれてた通り、兵藤君の家はそう遠くなかった。

「……………」

部長が呼び鈴を鳴らすが、

反応がなかった。

「あれ？おかしいわね……………」

顔を曇らせながら、部長は2、3度呼び鈴を鳴らすがまったく反応がなかった。

「まさか、逃げた……………？」

部長は今度は扉を強く叩いた。

「……………部長、人の気配です」

小猫ちゃんが静かに拳を構えながら、静かに呟いた。

その言葉に、僕達も自然と構えていた。

すると、

「だから新聞いらねえっていつも言ってるだろーが!!」

バン!と力強くドアを開けた僕と同年ーおそらく兵藤君が、怒声を上げて出てきた。

それもパンツとシャツだけの姿で。

「「「……………へ?」」」

暫くの沈黙が続いていたが、それは兵藤君が破った。

部長達の存在を確認して、自分の今の格好を凝視して直ぐに、

「す、すいませんでしたああああ!!!」

大声で謝って、ドアを一瞬で閉めた。

僕達は暫く沈黙したままだった。

祐斗 side out

イツセー side

「す、すみませんでしたああああ!!!」

よう、皆お早う。イツセーだ……って挨拶してる暇じゃねえ!!

何で俺んちにリアス先輩達が来てんだよ!?

しかもパンツで出ちまったよおお!!

兵藤一誠人生最大の恥だああ!!!

『まー新聞の勧誘だと勘違いしたお前の自業自得だな』

うるせえ!!

多分昨日の事なんだろうなあ……はあ、どうやって誤魔化そうかなあ?

『取り敢えず早く着替えて上げないと失礼だぜ』

ドライグの言う通りだ!

パンツ姿まで見せられて待たされたたんじや怒りのボルテージがトップギアだよ！
ってかもう夕方かよ！どんだけ寝てんだ俺!!

『深夜にカレー作ってたからだろ。さっさと寝りや良かったのよ……』

そうですね！全部俺のせいだな！はっはっは!!

一応下にジャージを履いて、慌てて玄関に向かう！

ドアを開けると、リアス先輩達がまだいてくれた。

「だ、大丈夫……？」

「は、はい………」

ゼーハーゼーハー言ってる俺に優しく声をかけてくれた！

良かった……怒ってない。

「え、えーっと、取り敢えず、上がりますか？」

「え、ええ。お邪魔させてもらおうわ」

先輩達を上げて、居間に案内した。

さあ、どう切り抜ける？

「今、お茶入れますね」

俺は久方ぶりのお客さんに茶を出すために湯を沸かした。

「ゆっくりしててください」

「御免なさいね。急に押し掛けちゃって……」

先輩は申し訳なさそうにそう言った。

おお、高飛車かと思つたけど違うんだな。

「……………そう言えば、貴方のご両親は？」

先輩は家が静かなのが気になったのか、俺にそう聞いてきた。

「……………そこです」

俺は静かに仏壇を指した。

すると先輩は、

「御免なさい。無神経なことを聞いて……………」

再び申し訳なさそうに謝ってきた。

「大丈夫です。気にしてないのです！」

俺は普通に先輩にそう返した。

そりや気になるのも仕方ないことだしな。

「粗茶ですが……………どうぞ」

「ありがとう」

「あらあら、これはご丁寧に」

「ありがとう、ございます……………」

「すまないね」

其々がお茶を飲んで一息つくと、リアス先輩の目が真剣さを帯びた。

「兵藤一誠君。今日は貴方に聞きたい事があつてきたの」

来たな。

「実は昨日、駒王学園の近くの公園で謎の事件が起きたの。木々が倒され、遊具が壊れていた……」

「……何でそれを一般人の俺に？」

俺が知らなさげに言うと、先輩は溜め息を吐いて、

「しらを切るの？ だったら、何故一般人の貴方の私物が落ちてるのかしら？」

懐から生徒手帳を取り出した。

あ、あれは………

俺の生徒手帳じゃねーかああ!!!

『あーあ。ヘマやらかしたなあ』

ドライグが呆れ果てた様に言った。

ホントだよ！これじゃあごまかせねえ!!

何ポカやらかしてんだ俺!!

「……………そうつすよ。昨日、公園で駄天使とドンパチ騒ぎ起こしました」

こうなつたら言い逃れは出来ないかと判断した俺は包み隠さず話す事にした。

「墮天使……………やはり知っているのね。でもどうして?」

「俺に宿つてる神器が厄介とかどうとか言つてましたけど」

「神器!? 持つているの!?!」

先輩は興奮した面持ちで俺に詰め寄つてきた!

おおう。すげえおっぱいだ! こりゃ松田達が騒ぐのも無理ないな!

「……………鼻の下伸ばしてます」

そんな俺に、確か一年の塔城小猫ちゃんが辛辣に突つ込んだ。

すみません、鼻の下伸ばして!

「貴方の神器、今この場で出せる?」

『どうする、ドライグ?』

『良いぞ相棒。もう隠し事は聞かんだろうしな』

ドライグの許可をもらつて、俺は神器を発動することにした。

「来い! 『赤龍帝の籠手』ア!!」

力強く叫んで左手の赤龍帝の籠手を発動した!

「赤龍帝の籠手……まさか!？」

『お察しの通りだ、リアス・グレモリーよ』

まさかと思つた先輩の言葉をドライグが肯定するように話しかけた。

『俺の名は赤い龍、ウエルシユ・ドラゴン通称ドライグだ』

「まさか、生きているうちに二天龍の声を聴けるなんてね……」

先輩は信じられないといった感じに呟いていた。

他の人達もそんな面持ちだった。

『俺を宿している即ち、この兵藤一誠こそ今代の赤龍帝だ』

ドライグがそう言うと、皆の視線が一気に俺に集まった。

「イヤー、何か恥ずかしいな……」。

「昨日襲つてきた墮天使は君が赤龍帝だと気付かなかつたのかい?」

「ああ。同系統の龍の手だつて勘違いしてた。それにこんな高校生が赤龍帝つて普通は思わないだろ?」

「確かに……」

俺の言葉に全員が納得したように頷いた。

「これは、ある意味幸運なのかしらね?」

「?」

「ねえ、兵藤一誠君」

「は、はい」

先輩は一人微笑むと、俺にある提案を持ちかけた。

「悪魔に、私の眷属になる気はない？」

それはとんでもない提案だった。

「……………え、悪魔に？なれるんすか？」

先ず俺が抱いた疑問がそれだった。

人間から悪魔つてなれるもんなのか？

「ええ。この『イヴァルピニス悪魔の駒』を使えばね」

先輩はそう言うのと、懐から何かを取り出した。

「チエスの…………駒？」

「そう。これは魔王様の一人が考案したシステムで、他種族を悪魔に転生させることが

「可能なの」

「すげえハイテクじゃん！」

「でも、何でそんなものを開発したんすか？」

「そうね。今、先の戦争の影響で純粹悪魔の数に限りがあるの。そして純粹悪魔同士での子作りでも中々出生率が低いのに」

「はあ、中々深刻だな……。」

「悪魔つてもうち多いもんかと思ってた。」

「そしてこれで悪魔は転生させて眷属を増やして尚且つ仲間を減らすことなく実戦経験を詰めれるための今の政権で流行っているゲーム、『レーティングゲーム』も行われているの。まあ、私達は成人してないからまだ出来ないのだけれど」

「ふくん、ゲームねえ。」

「仲間を増やしつつ、悪魔陣営の強化を図ってるわけか。」

「私の目標は、レーティングゲームで上位のランクに上り詰める事。だから、今から眷属を集めているの。これぐらいかしらね？」

「ああ、大体分かりました。でも、何で俺なんですか？」

「貴方は昨日、恐らく生身で墮天使とやりあった。違う？」

「はい」

アレを使うほどでもなかったからな。

「貴方ほどの人材を手放すにが実に惜しいし、何より眷属全体の強化に繋がるかもしれないと思ってるの」

「強化？」

「ええ。生身で堕天使と戦える詰まり、ここにいる私たち全員より強い……そう思うの」

『確かに相棒はここにいる全員より場数は踏んでる。実力が上なのは確実に言えることだ』

ドライグが先輩の意見を肯定した。

別にそこまで強い自覚ないけどなあ。

「勿論、貴方の意見は尊重するわ」

先輩は微笑んで悪魔の駒をテーブルに並べた。

『なあ、ドライグ』

『ん？』

『悪魔になれば俺の世界も広くなるかな？もつと強くなれるか？』

『ああ。それに、どちらを選んでも俺は相棒と共にあるさ』

そっか。でもやっぱ俺も赤龍帝なんだな。

強くなれるってだけでこんなにもうずうずしちまうなんてよ。

「俺で良ければ喜んで、貴方の眷属になります」

俺がそう言っていると、先輩は笑顔で頷いた。

「分かったわ。ならばその命、燃え尽きるまで私の為に生きてくれる？」

「モチ！男に二言はないです！」

俺がそう言っていると、先輩は俺に向かって悪魔の駒を差し出し、

「我リアス・グレモリーの名に於いて命ずる！兵藤一誠よ、悪魔となりて我と共に生きよ

!!

そう叫ぶと、俺の体に変化が――

「あ、あれ……う？」

訪れなかった。

え、何? どういう事?

「まさか、『兵士』では転生出来ないの……?」

先輩はそう呟くと、次に別の駒を出して叫ぶも、全く変化は起きない?

『こりや相棒が規格外過ぎるな。通常の駒では価値が足りない、という事かもな』

「そんな事って……」

先輩がガツクリしたその時、

「っ!」

「これは…?!」

突如、机に置かれていた悪魔の駒——恐らく兵士の駒が輝きだした。

すると、その内の四つに不思議な現象が起きた。

「い、『悪魔の駒』が……」

「色が、変わってる……?!」

四つの色がそれぞれ、赤、青、緑、黄色に変化したかと思えば、残りの四つ纏めて俺の体に吸い込まれるように入ってきた!

「まさか……変異の駒?!」

み、変異の駒?

なんだそりゃ?

「本来なら複数の駒を使うであろう素質を持った転生体をその駒一つで済ませる物なんだ」

つ、つまり……?

『お前は変異の駒四つ含めてでなければ転生できなかった。俺を宿してるだけなら八つの普通の駒で行けたかもしれんが……奴の影響だろうな、恐らく』

『だよな……。あの色、俺が使う指輪と同じだった……』

すると、俺の背中から悪魔の翼が生えてきた!

ドラゴンの翼とあんまし変わらないんだな……。

「……では気を改めて、自己紹介ね」

何とか動揺から回復した先輩達も背中から翼を生やした!

「私はリアス・グレモリー。駒は『王』よ。宜しくね、イツセー♪」

「姫島朱乃ですわ。『女王』を務めさせていただきますわ。宜しく、イツセー君」

「僕は木場祐斗。『騎士』をやらせてもらってるよ。」
「塔城小猫です…。『戦車』です…。宜しく願います、イツセー先輩」

「兵藤一誠。さつき言った通り赤龍帝をやらせてもらってます。まだ勝手がよく分からないので、迷惑をかけるかと思いますが、宜しく願います!!」
取り敢えず、魔法使いの事は伏せとくか。

拝啓、天国の父さん、母さん。

俺、悪魔になりました。

次回、D×Dウィザード

イツセー「新聞配達みてーだな」

リアス「見せてくれる？ 貴方の実力」

???「何だ貴様らは？」

第四話 「俺、戦います」

イツセー「次回もショータイムだ！」
ドライグ『仕事盗られた!!』

MAGIC 4 『俺、戦います』

よお皆、こんばんは。イツセーだ。

え？こんな夜中に何してるかって？

町中の家のポストに簡易魔法陣のチラシ配りをしてるんだ。

悪魔だから、そりゃあ人間の欲望を叶えるもんだからなく。

んで人間の欲望を叶える代わりに対価を貰う……それが悪魔との取引ということらしい。

因みに対価はその欲望に応じて比例するんだとか。

まあ、大きすぎる願いだとそれ相応のリスクも伴うって事だな。

『新聞配達みてーだな』

「まあ良いじゃん。悪魔になったお陰で、夜になるとバリバリ動きたくなくなるしさ。だから今の内に配るのが最良なんだろ」

そう、悪魔になって少し俺の生活態度に変化が訪れた。

それは、夜、凄く体が軽くなるのだ。

逆に昼間などは体がだるくなる。

やっぱり悪魔だからな、日の光とかは苦手なんだと。

それでも暫くすれば慣れるらしいから、我慢我慢。

部長達は普通に動けてるしな。

あ、後、怠けるのを許してくれなくなった所かな？

俺がサボるのを防ぐため、毎朝俺んちに迎えに来るんだよ！

どんだけ信用ないんだよ!?

『そのお陰で手料理食えるじゃん』

そう、ドライグの言う通り、部長は毎朝俺んちに迎えに来るだけでなく、朝ごはんまで作ってくれる。

それが美味しいのなんのって……………!!

部長と結婚する奴が羨ましく感じたよ。

「つと……………これで最後だな」

気づけば、俺は全てのチラシを配り終えてた。

「で、一旦部室に戻らなきゃ駄目なんだっけ？」

『ああ』

はあ………悪魔って意外にめんどくせえ……。

「ただいま戻りましたー」

俺がオカ研の扉を開けて言うと、部長が笑顔で労ってくれる。

「お帰りなさい、イツセー。お疲れ様」

「いえ、大丈夫です！」

くうく、部長の優しさが五臓六腑に染み渡るぜ！

「じゃあ早速なんだけど………契約者の所に行ってきたくれる？」

「え!?マジすか！」

ヤベ、緊張してきた！

上手くやれるかな？

「ええ。小猫に指名が2つ来ちゃってね。もう一人の方をお願いしようと思ってるね」

「お願い、します……………先輩」

小猫ちゃんがペコリとお辞儀をしてきた。

「分かった。でもあんまり期待しないでね？」

「面白いですね、先輩……………」

小猫ちゃんがクスツと笑ってくれた。

そ、そうかな？

「それじゃ、早速準備をするわ。朱乃」

「はい、部長。イツセー君、失礼しますわ」

朱乃さんは俺の手の甲に何かを書いた。

魔方陣？

「これで契約者の元に一瞬で飛べますわ」

「へー、便利っすね」

「ではイツセー君。そちらに」

「はい」

朱乃さんに言われて、俺は魔方陣の上に立った。

「頑張つてね、イツセー」

「お気をつけて、イツセー君」

「はい！兵藤一誠、頑張らせていただきます！」

よーし、行くぜ！！

そう意気込む俺は光に包まれー

気付けば別の場所にいた。

おお。びっくり！

「あれ……………小猫ちゃんじゃないのかい？」

「ああすみません。彼女、別の人の方に行つて、変わりに俺が……………」

暗がりの中から声が聞こえたため、そちらの方に向かつて行くと、

「あれ？一誠君じゃないか！」

「も、森下さん!？」

知り合いの森下さんだった。

知り合いと言っても、魔法使いの仕事の時に出会って、その時の縁でたまに会うんだ。

「君悪魔になったのかい？」

「はい。つってもこないだなつたばかりなんすけど……」

お互い知ってる者同士、会話がスムーズに進むなあ。

「そっか……。今日彼女にこれを着てもらおうと思っただけだなあ」

と言つて森下さんはクローゼットから綺麗なドレスを取り出した。

「それ着せてどうするんすか？」

「勿論これを着てもらつてお姫様抱っこを……」

「するんすか？」

「いや、その逆」

「してもらうんかいっ!？」

思わず突っ込んだ俺は悪くない筈。

とまあ、こうして悪魔として目一杯やって過ごしたんだ。

一番驚いたのが、魔法使いになりたいって言ってきた「ミルたん」って人だったな……。

と言うかアレを人としてカテゴライズして良いのかどうか……。

取り敢えず、筋トレこなせば魔法使いみたいになれるって言ったら契約とれた。

対価が謎のノートだったのは、完全な余談だ……。

んで次の日の夜。

俺達とはある廃墟に来ていた。

なんでもはぐれ悪魔の討伐、なんだとか。

因みにはぐれ悪魔ってのは、眷族である悪魔が主を殺し、主なしという状態になる極めて稀な事件らしい。

そんなはぐれ悪魔がグレモリー領であるこの町に潜入していて、毎晩人をおびき寄せでは喰らっているらしい。

『物騒な世の中だなあ〜』

『相棒、少し話しておきたい事がある』

『何だ?』

『暫くの間、赤龍帝の籠手の機能を制限しなくてはならない』

.....え?

『な、なんで?』

『相棒の体は悪魔に変化した。つまりその体に合う様に調整しなくてはならないんだ』

『な、成る程.....』

『だから暫くは『バランス・ブレイカー禁手』が使えなくなる』

マジかよ.....。

『一応他の機能は使える様にする。と言っても制限はかかるが。すまん』

『良いよ、気にしないで。寧ろそれだけでも有り難いよ』

『そう言つて貰えると助かる』

ドライグと精神世界で会話をしていると、

「.....血の匂い」

小猫ちゃんの眩きで、俺の意識は現実に戻された。
確かに嫌な匂いだ……。

「イツセー、いい機会だから貴方にも悪魔としての戦い方を経験してもらおう」

「……………それって俺も戦えってことっすか？」

「ん〜……………確かに貴方の力も間近で見たいけど、それはいざってときに、ね。後悪魔の駒の各駒の特性と由来をレクチャーするわ」

お、それは俺も知りたかった。

確か部長は『王』、朱乃さんが『女王』で、木場が『騎士』、小猫ちゃんが『戦車』だっけ？

「そう言えば部長、俺の駒は？」

「イツセーの駒は……………」

そこまで言って部長は言葉を止めた。

『相棒、敵さんのお出ました』

分かってるよ、ドライグ。

さつきからずつと感じてたからな。

俺の視線の先には馬鹿みたいに大きな、上半身は女、しかし下半身は化物のように四

足という存在がいた。

オマケに手には槍みたいな獲物……なるほど、これがはぐれか。

「不味そうな匂いがするぞ？ だがうまそうな匂いもするぞ？ ぎやぎや！」

おお、口開いたらすげえ言葉飛び出た。

『気色悪っ』

良いぞドライブ、もつと言ってやれ。

「己の欲を満たすために主を殺したはぐれ悪魔、バイサー……悪魔の風上にも置けない貴方を消し飛ばしてあげる！」

部長はそんな相手にも臆さずビシツと言つてのけた！

格好いい!!

「小娘が……。逆に貴様らを消し飛ばしてやるう!!」

相手の脅しに取り合わず、部長は、

「祐斗」

「はい」

部長の声に木場は腰に帯剣してた剣を引き抜き、常人には目にも負えないような速度で動いていた。

「じゃあイツセー、気を取り直して駒の特性を説明するわ」
すると部長は木場の方を見た。

当の木場は非常に速い速度ではぐれ悪魔の槍による攻撃を全ていなし、軽くかわしている。

「祐斗の駒の性質『騎士』……あのように騎士になった悪魔は速度が増すわ……そして祐斗の最大の武器は——剣」

すると木場ははぐれ悪魔の槍を持った片腕を、一瞬で切り落とした！
速い………！

真剣に目を凝らさないと見失う、それぐらいのスピードだった！

『速いな、あの小僧』

「ぎやああああああああ!!」

ドライグが感嘆の声を漏らす中、はぐれ悪魔の絶叫が聞こえてきた。

はぐれ悪魔の切断された腕からは血が止まらない！

そうしている中、絶叫の途中のはぐれ悪魔の足元に小猫ちゃんがいた！

「小猫の特性『戦車』。その力は……」

すると、はぐれ悪魔は小猫ちゃんをその馬鹿デカイ足で押しつぶそうとしていた！

まずいと思い、俺は助太刀しようとするが……部長に止められる。

「大丈夫よ……小猫は『戦車』。その力はいたってシンプル」

踏まれているはずの小猫ちゃんが、はぐれ悪魔の足をぐぐぐつと持ち上げてた。

アレ？

「馬鹿げた力と、圧倒的な防御力！あんな悪魔じゃあ小猫はつぶれないわ」

そうこうしてる内にはぐれ悪魔の巨体はみるみる持ち上がり、

「……………えい」

そしてその小さな拳ではぐれ悪魔の巨体を殴り飛ばした!!

す、すげえパワー……普段の可愛い一面とはすごいギャップだ。

『ギャップ萌えてレベルじゃねーぞ!』

ドライブ、少し黙ってて！

言いたい事は分かるけども！

「最後に朱乃ね」

「あらあら、うふふ……分かりました、部長」

朱乃さんはそう言うのと、そのまま悪魔の方へと歩いてゆく。はぐれは木場の切断と小猫ちゃんの打撃で既に戦闘不能だった。つと、あのはぐれが槍を少し動かしているのに俺は気付いた。

「あぶね！」

《ディフェンド！プリーズ》

咄嗟に右腕の指輪を付け替え、魔方陣で部長を槍から庇う！

ふいふ、間一髪だけ……。

「い、イツセー……」

「大丈夫ですか、部長!？」

「ええ……。それより今のは……」

「ああ、気にしないで下さい」

「……………分かったわ」

俺がそう言うのと、部長は気を取り直して朱乃さんを見た。

「あらあら、うふふ……………部長に手を出すなんて、おいたが過ぎましてよ！」

すると、朱乃さんの手からバチバチと、電気のようなものが発生する。

「朱乃の駒『女王』……『女王』は『王』を除いた全ての特性を持つ、最強の駒。最強の副部長よ」

するとはぐれ悪魔の上空で雷雲のようなものが発生し、次の瞬間、そこから激しい落雷がはぐれ悪魔を襲った！

「ぐぎゅゅゅゅ……」

「あらあら……まだ元気みたいですわねえ」

……鬼だ。

鬼がいる!!

末に瀕死のはぐれ悪魔に、これでもかっていう位、雷撃を浴びせ続けている!?

そこまですますか!?

見た感じ、あの雷撃は一撃一撃は相当強いはずだ……。でも何より、朱乃さんの表情が……

「うふふふふふふふふ！」

………笑ってるよ！

もう楽しいのがこの距離で分かるくらいに雷撃を浴びせることを楽しんでるよ、あの人!!

「朱乃は魔力を使った攻撃が得意なの。特に彼女が得意なのが雷………そして何より、彼女、究極のSだから」

部長がサラリと告白するけど、寧ろあれを見てそうじゃないって言える人はいねえよ!!

「ふふふふふ!!まだですわ!!」

ほら、まだまだつとといったように未だに雷を撃ちい続けているし！

表情もなんか生き生きしてるよ!?

何か同情したくなってきた!!

『………ちよつと踏まれてみたいかも』

おい、ドライブ!?

何言ってるのこのドMドラゴン!?

……………俺はこの人には絶対に逆らわないでおこうと決めたのだった。

「大丈夫よ、朱乃は味方にはすごく優しいから」

「ホントですか……………?」

俺は苦笑いでそう呟く。

「うふふ……………そろそろ限界かしら?とどめは部長ですわ」

すると朱乃さんは雷撃を止め、部長に道を譲った。

ああ、良かった。あれ以上は見えてられないよ!

「何か言うことは有るかしら?」

「……………殺せ」

はぐれ悪魔はその一言と同時に、部長の手より極大の魔力が生まれる。

その魔力は黒と赤を混ぜたような少し気味の悪いオーラを放っており、危険な匂いがプンプンしていた。

「そう……………なら消し飛びなさい」

その一言とともに部長から発せられた魔力の塊を受け、はぐれ悪魔は跡形もなく消し

とんだ。

『バアル家特有の消滅の波動か……。相棒のアレと真逆だな』

まあな。

アレは魔力を凝縮して一気に放出だからな。

そして俺は部長に、一番気に気になっていることを投げかけた。

「それで部長……。俺の駒は？」

「……まあ大体予想はついてるけどさ？」

今思い出したら、転生の時チラッて聞こえてたからさあ？

予感というか、予想というか……。そしてそれは普通に的中した。

「『兵士』よ？」

「……笑顔でそう言う部長に、俺は肩を落とした。

つてか結局兵士の役割教えて貰ってねえし……！」

「あら、『兵士』は『王』を除いた駒の特性全てを使えるのよ？」

「そうなんすか!？」

「まあ、私の許可が必要だけどね」

何だよそりや……。

それは兎も角、仕事を終えた俺達は部屋に戻ろうとすると、

『この匂い……悪魔か?』

ソイツは姿を現したのだ。

イツセーside out

木場side

僕達が帰ろうとした時、

『この匂い……悪魔か?』

声と共に、廃墟から謎の異形が現れた!

何だアレは……少なくとも冥界の魔獣には見えない。

「貴方は?」ここで何をしているの?」

『それを悪魔風情に教えてどうする?』

月明かりに照らされたソイツは、部長の言葉を一蹴した。

頭に角を生やした、何処と無くミノタウロスを彷彿とさせるソイツは、

『まあいい。目障りだ、消えろ!』

手にした槍から、光波を放ってきた!!

「部長!!」

咄嗟に朱乃さんが防御魔法で防ぐも、軽く吹き飛ばれる!

何て威力だ!?

「朱乃っ!?!」

部長が朱乃さんを支えるが、今の部長達を守るものが……!!

すると、

『ぐああ!?!』

何処からともなく飛んできたナニかが、異形を吹き飛ばした!

僕らは飛んできた方向を向くと、

「ホンツトお前ら空気読まねーなオイ。俺眠たいのによ……」

イツセー君が、見たこともない銀色の銃を構えていた。

するとさつきのはイツセー君が……。

『何だ小僧!? やる気か!』

「……そうだと云つたら?」

イツセー君は不敵に笑つて腰に右手を当てる仕草をすると、

《ドライバーオン! プリーズ》

何処からか不思議な音声が聞こえたかと思うと、イツセー君の腰に銀色のベルトが装

置された!

『フンツ、威勢が良いな小僧! ならば、後悔させてやるつ!!』

するとソイツは、口から火炎弾をイツセー君に向けて放つた!!

「イツセー! 避けて!!」

部長がイツセー君に叫ぶも、無情にも、火炎弾はイツセー君に命中した……つ!!

「ああつ……」

「そんな……………!!」

「先輩……………!!」

「イツセー、君……………!!?」

『ふん、呆気ないな!次は貴様らだ』

そう言つてソイツは僕達の方を向いた瞬間、

『オイオイ、ファイナーレにはまだ早いぜ?』

爆炎の中からイツセー君の声が聞こえた!

『何だどつ!?!』

ソイツが振り向くと同時に僕らもそちらを見ると、

《フレイム、プリーズ。ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!!》

そこには、魔法使いの様な姿のイツセー君がいた!

奴が吐いた炎は、手元に現れてる魔方陣に吸い込まれていたつ……………!!

『貴様……指輪の魔法使い!?』

ソイツは驚いた様子で叫んでいた。

指輪の、魔法使い？

そうだ、アレは!!

冥界でも噂になっている、

「魔法龍帝……!」
ウイザード

部長が小さく呟くと、イツセー君はその場で1回転して、

『さあ、ショータイムだ』

左手を上げてそう言うのと、異形に向かって行った!

イツセー君は手にした銃を操作すると、ソレは剣に変形していた!

『ぬおおおっ!!』

『……はっ!』

『ぐはあ!?!』

異形の槍の太刀筋を見切って、イツセー君は異形を切り裂いた！

『そうらよつと！』

『ぬおつ！』

『はあつ!!』

『ぐつ！』

そこから肘打ちで怯ませ、お腹を蹴って壁まで飛ばした！

『くつ……おのれえ！』

『お次はコイツだ』

イツセー君は右手の指輪を入れ替え、腰のベルトを操作すると、真ん中に右手を翳した。

すると、

《ビッグ！プリーズ》

現れた魔方陣に手を突っ込むと、その手が何と巨大化した！

『ほいつ！』

『ギャアア!!』

イツセー君は巨大化した手で容赦なく異形を外に叩き出した！

イツセー君も外に出て、僕達もそれを追いかける。

『ぐつ、うう………！よくも、俺の角をお！』

見ると、異形の角が片方だけ折れていた！

さっきの一撃か……。

『悪いけど、これでファイナーレだ』

イツセー君はそう言うのと、再びベルトを操作した。

《ルパッチマジックタッチゴー！ルパッチマジックタッチゴー！》

呪文らしき物が詠唱されている内に、イツセー君は指輪を入れ替えて、それを翳した。

『チヨーイイネ！キックストライク、サイコー！』

そう音が響くと、イツセー君は再び1回転する。

すると、魔方陣が展開し、イツセー君の右足に炎が集中してきた！

『くつ、このままでは………！』

『逃がすかよ！』

イツセー君は逃げようと背を向けた異形に向かってロンダートをして、空中で反転、
そして、

『だあああああ!!!』

『ぐあああああ!!!』

異形に向かってキックを放った!!
それを受けた異形は、大爆発を起こして、消滅した!

その爆炎を背景に、イツセー君は

『ふい〜』

いつも通りに、一息ついた。

次回、D×Dウィザード

リアス「貴方が、ウィザードだったのね……」

アーシア・アルジェント「ありがとうございます!」

イツセー「可愛いな……」

MAGIC4 『聖女、出会います』

ドライブ『俺はMじゃないよ。いたぶられる事に快感を見出だしてるだけだよ』

イツセー「うん、
ドMだわ」

MAGIC5 『聖女、出会います』

突然だけど俺は今、リアス部長に尋問？されてるんだ。

「まさか、紅蓮の魔法使いが貴方だったなんてね……」

部長は感心した面持ちで呟いた。

「っつーか俺、紅蓮の魔法使いとか魔法龍帝とか呼ばれてたのかよ！恥ずかしいわ！！」

『厨二ネームだよな』

『何処の誰が付けたんだよ……！』

ドライブにも厨二ネームと突っ込まれた！

そりやそうだよな！

「で、さつき使った魔法は……」

「あ、こうするんです」

《コネクト、プリーズ》

俺は指輪を付け替え、腰のウイザードライバーに翳し、現れた魔方陣に手を突っ込んで、中からドーナツを取り出す。

「はい」

「……私達が知ってる魔法とは、随分違うのね」

「やっぱ魔法って実在するんすね」

「ええ、貴方のは結構違うけどね」

あー、じゃああれか。

ステツキ持ってベホマとか唱えるやつか。

でもそれは何か違うな……

「……黙っててすみませんでした」

取り敢えずは謝ろう。

危ないとは言え、部長達に隠し事してたからな。

「……謝らなくてもいいわ。寧ろ、此方は感謝したいぐらいよ」

「え？」

だが意外や意外、部長は怒る所か俺に感謝の言葉を言ったんだ。

どゆこと？

「貴方のお陰で私の町に住む人達は助かってる。それに、貴方に助けられた悪魔も多いと聞くわ」

そう言えば、冥界の入り口とかで助けたな。

つつても、雑兵だったけど。

「だからありがとう、イツセー」

部長は微笑んで、俺を優しく抱き寄せた！

おおっ、おっぱいが！

「改めて、私は幸運なのかも知れないわね……………」

くうー！部長の笑顔、素敵っす！

何と言うか、やっぱり女の子の笑顔は見ていて凄く良いもんな！！

「ハイ！男兵藤一誠！全身全霊を持って部長をお守り致します！！」

「ええ。頼むわね、イツセー」

んで、次の日。

休日つっー事で、久々に出掛けることにしたぜ！

「修行も良いけど、たまにはこうやってのんびり過ごすのも悪くないな」

中学時代は大体修行してたからなく。

青春らしい青春送った覚えがないぜ、ハハ……………。

「はう！」

「ん？」

何か可愛らしい声が聞こえたぞ。

俺は声が出た方を振り替えると、

「いたた……………」

白のヴェールを被った可愛らしい金髪の少女が尻餅を付いていた。

ツ……………可愛い。

『相棒、見惚れてないで手を差し伸べてやれ。それが紳士つてもんだ』

『わ、分かってるよ！』

取り敢えずその女の子に近づく事に。

「だ、大丈夫かい？」

「あ、すみません……………」

女の子の手を取って立ち上がらせる。

何かシスターっぽいな。

「……………私の言葉が分かるのですか？」

「ん、ああ！俺、そう言うの詳しいんだ」

流石に悪魔だから何でも日本語に聞こえる、なんて言えねーよな。

と言うか、色んな言語に変えるって下手な翻訳機よりすげえと思う。

「俺は兵藤一誠。君は？」

「あ、アーシア・アルジェントと申します！」

「アーシアか！良い名前だな！」

「ありがとうございます！」

と、自己紹介も済んだ事だし、

「で、どうしたんだ？こんな所で」

「あの……この辺りに教会はありますか？」

教会……か。

そう言えば！

「町の外れに一件寂れた教会あるけど……もしかして用事か何か？」

「はい！でも、初めての場所ですし、何より私、方向音痴で……」

「初めてだったら仕方ないって！良かったら案内するぜ？」

「本当ですか!?ありがとうございます！これも神の御加護なのですな……！」

アーシアはそう言って十字を切った。

み、見るだけで頭が痛くなってきた……………。

「どうしたんですか？」

「い、いや、何でもないぜ。それより、行こうか」

「ハイ！」

そう言つて俺達は並んで歩いた。

教会までの間、俺達は色んな事を話した。

「へえ、アーシアは仕事で日本に来たんだ」

「はい。色々な人達に神の御加護を広めようとして……」

「立派だなあ、尊敬しちゃうぜ！」

「そ、そんな尊敬だなんて……」

近くの公園を通り過ぎると、

「うわーん！」

と、男の子の声が聞こえて、二人してそちらに向かった。

そこには転んで怪我をした男の子がいて、俺が指輪を付ける前に、アーシアはその子の血が出ている膝へ手を当てる。

そして次の瞬間、俺は少し目を見開いた。

「あれは……」

『神器だな。それも高レベルの物だ』

アーシアの手から淡い緑色のオーラのような光が発せられ、すると男の子の膝の傷がどんどんなくなるようにみるみると治っていき、終いには傷が完全にふさがったんだ。

「はい、これで大丈夫です」

アーシアは男の子にそう言うが、当然、男の子には通じていない。

するとその時、男の子の母親らしき女の人がアーシアを怪訝な表情で見ている、そして男の子を連れて公園から早歩きで立ち去ろうとしていた。

「お姉ちゃん！ありがとうございます!!」

「……………」

当然、アーシアには通じていないらしく、俺はアーシアの方まで近寄った。

「ありがとう、だってよ」

「……すみません、つい」

アーシアは舌を出して小さく笑うと、嬉しそうにほほ笑んだ。

「……………その力ってさ」

「はい、治癒の力です……………神様から頂いた、大切な……………」

……………アーシアはどこか表情を暗くさせる。

………何で神様からの頂いたって言うのに、そんなに暗い顔をする？

それに助けてあげたのに、母親からはあんな怪訝な表情………なんか、報われない。この子は優しい子だから報いとかそう言うのはどうでもいいんだらうけど………。

俺はいてもたっても居られなくなり、アーシアの頭を撫でた。

「俺からしたら、凄いなと思うぜ。それにあんな優しい光、俺には出せないからさ」

「………イツセーさん」

少しは表情は晴れたみたいだな。

うん、暗い表情よりこっちの方がずっと良い！

と、教会の目印が見えてきたな。

「教会はもうそこだから道はもう大丈夫か？」

「はい！ありがとうございます、イツセーさん！何かお礼をしたいのですが………あ、お礼を教会で！」

「いや、いいよ。俺はお礼が欲しくて助けたわけじゃないし」

と言うより、体全体が拒否反応を起こしてる。

これ以上入るなって本能が叫んで………！

アーシアに言った言葉も本音だけだな。

「そうですか……」

「じゃあな、アーシア！困ったら何時でも頼ってくれよ！」

「……はい！」

アーシアは笑顔で教会に入っていた。

「良い娘だったな〜」

『今時あんなに信仰心が高い人間はいないぜ。人間も捨てた物じゃないな』

ドライブと話ながら家に戻った。

また会えると良いな、アーシア……。

アーシアを教会まで送り届けたその日の夜、俺は部室で少し怒っている部長に怒られていた。

「二度と教会に近づいたらダメよ」

部長はいつになく表情が険しく、とても怒っていた。

流石に他の部員も苦笑いをしたり、相変わらずニコニコしたり、ともすれば無関心で俺のドーナツ食べてる後輩ちゃんもいる。

って小猫ちゃん！勝手に俺のブレーションシユガー食べないで！！

「良い？イツセー……私達、悪魔にとつて教会とは踏み込めばそれだけで危険な場所なの……それこそ、いつ光の槍が飛んでくるかわからないわ」

……部長は、本当に心配そうな表情でそう淡々と怒る。

部長は……自分の眷属をとても大切にしているからかな？

これは木場から聞いたことだけど、グレモリー家は悪魔の中でも情愛が深いことで有名らしい。

つまり身内を大切にする、か……。

俺は素直に頭を下げた。

「次からは、気をつけます……」

「……いえ、私も少し熱くなりすぎたわ、ごめんなさい。でもこれだけは言わせてちょうだい……悪魔払いは私達、悪魔を完全に消滅させる。悪魔の死は無よ。それだけは覚えていて」

無………か。

その日は特に何もなく、お開きとなった。

次回、D×Dウィザード

フリード「ヒヤアツハアアー!!」

イツセー「遊びに行くか!」

レイナーレ「久しぶりね、兵藤一誠君」

MAGIC7 『聖女と、遊びます!』

ドライグ『次回は聖女攻略会!』

イツセー「人をタラシみたいに言うな!」

ドライグ『えっ』

イツセー「えっ」

MAGIC 6 『聖女と、遊びます!』

次の日の夜、俺は契約を取ろうとする人の家に転移した。

だが着いた途端、俺の全身が凍り付いた!

『何だ、この感覚……っ』

俺は警戒心をMAXにして、辺りを見渡す。

……やけに静かだな。

その部屋から出て、俺は階段を下り、リビングの扉を開ける。

すると、

「お前、何してる?」

——血を出して倒れる人と、それを見下ろしている白髪の神父服のような服を着ている男がいた。

「おお? これはこれは、下種で下種な存在な悪魔君じゃありませんか?」

……ふざけた口調だ。

俺の第六感が告げてる……こいつが殺ったとっ！

「お前が、やったのか？」

「ええ？ ああ、これでありますなあ……そう！ 俺たちです、はい！ こんな悪魔を頼る糞みてえな人間なんかジ、エンドですよ！！ 死んで当然、殺されて当然、むしろ俺という至高に殺されたんですからねえ……感謝感激いい！！」

……ふざけた野郎だな。

決めた。やることは一つだ。

「そうか。なら……」

《boost!》

俺は赤龍帝の籠手を展開し、直ぐ様

「死んで詫びろお!! この糞神父がよお!!」

そいつのムカつく顔面に拳をぶちこんだっ!!

「ぐほおっ!!………なあくに俺たちのイカしたイケメンフェイスにグーパンめり込ませてるんですかあ!! 君みてーに最低な悪魔君は即！ 死刑執行で `understand` ？ つて事でバイちゃー！」

……イカレ神父が刀身のない柄だけの剣を仕舞い、懐より銀色の拳銃を取り出し、

光の弾丸を撃ってきた！

だが!

「おせえ!!」

俺は真正面から手刀で切り裂いた!!

「……………おいおい、まじつすか!?なに簡単に俺の弾丸砕いてんの!あひやあひや、すんばらしいいい!!悪魔のくせに糞みたいな根性してますね、ひやは!それでそれで!?!今度はこの俺、フリード・セルゼンに何を見せてくれるわけよ!!」

目の前の糞神父ーもといフリードは今度はさっきの剣を取り出した。

剣の柄より光が眩く生まれ、光の刀身となった。

『あの装備……………恐らく悪魔払いだな。一発でも貰ったらアウトだぜ。油断するなよ、相棒』

「OK…………」

《Boost!》

やっぱりあんまり倍加は進まないかっ!?

「何ぶつぶつ独り言ほざいてんすかああ!?!そんな気色悪い悪魔君は首チョンパ!が良い処刑方ですな!!」

フリードは此方に向かって剣で斬りかかって来た!

「そんな滅茶苦茶な太刀筋で、俺を斬れると思ってるんじゃねえ!!」

俺は籠手を纏った左手で受け止め、右手でソイツを再び殴った!!

その勢いのまま、フリードは壁に激突した!

「ひやははははは! 殴った!? 悪魔が神父を二・度! も殴った! おいおい罪深いですねえ、あ! 悪魔ですからね? 悪魔だけに!? ははは、上手いっしょ! ……そう言うわけでさ、そろそろホント、マジで死んでくれよお!!」

するとフリードは服をまさぐり・・・もう一丁、持ってたのか!

あの光の弾丸を撃てる拳銃を両手に持っていた。

「封魔弾の二銃流つすからあ・・・死んでねえええ!!」

イカレ神父は二丁の拳銃で俺へ弾丸をぶち込む仕草に入ろうとした

——その時だった。

「やめて下さい!!」

俺の耳に、聞いたことがある声が聞こえた……

何でここにいるんだ……俺は耳を疑った。

あの子が何で……どうして……何でだ!

「——アーシア!」

そこには……部屋の扉の入口には、アーシアが立っていた。

前に会った時と同じシスター服に身を包み、ヴェールを被るアーシア。

「おやおや? 助手君のアーシアじゃありませんか? 結界は張り終わったのかな? なら邪魔しないでね、こいつを今から蜂の巣にしちやうんでね!!」

「何を言つて……!! い、いやああああああ!!」

アーシアは床に倒れている、何度も切られた跡のある男の死体を黙視すると、悲鳴に近い叫び声をあげたッ!

「見るな! アーシア!!」

俺はアーシアの元に行こうとするが、フリードが俺に銃口を向け、硬直状態になった。「可愛い悲鳴、いただききい! アーシアちゃんも教訓として神父のお仕事を学びなさいねええ! 特に悪魔に魅入られた人間なんかは即、首はねつてことでえええ!」

「そ、そんな………え?」

……不意に、アーシアの視線が俺の方に向けれた。

目を見開いて、まるで……驚愕するような、表情をしていた。

「い、イツセー、さん……どうして、ここに？」

「おやおや!?!もしかしてアーシアちゃんはこの悪魔とお知り合いですかあ? そんなのノンノン! 悪魔は殺す! 問答無用ってわけっすわ!」

「イツセーさんが、悪魔?」

「……アーシア、俺は」

アーシアは信じられないような目で呆然と俺を見ている。

……そうだったんだな、アーシアは。

アーシアはあいつの仲間で、恐らくはぐれと呼ばれる存在なんだろう。

「あれあれ?もしかしてまさかのシスターと悪魔の禁断の恋?でも残念!悪魔と人間の恋なんて皆無、皆無ってやつですよ!それに俺たちは神の加護から見放されたはぐれなんで? 堕天使様の加護がなかったら生きていけないんですぜ?」

アーシアは未だ、呆然としている。

……堕天使の加護?

まさかアーシアはあの墮天使と繋がってたのか？

んな訳無いだろ、と俺は即座に否定する。

アーシアはあんな野郎たちと一緒にじゃない！フリードの様な糞神父と一緒にするの
も甚だしい！

きつと騙されてるだけなんだ!!

「まあその辺はどうでもいいんでええ……とにかく俺様、その悪魔君を殺さないと
気が済まないんすよねえ！封魔銃の二丁ばりでこいつの体全体に風穴空けてやるぜい
！」

フリードは二丁拳銃を構える。

その時だった……今まで、呆然としていたアーシアが俺とイカレ神父の間に入り、
俺を庇うように腕を広げ、イカレ神父をじつと見た。

「……おいおい、アーシアちゃん？自分が何してんのか分かってんでしようかああ!？」

イカレ神父はアーシアの行動に明らかに不機嫌になる。

「フリード神父……この方を……イツセイさんをお見逃しください」

アーシア……君は、俺を……庇ってくれるのか？

「もうやめてください……!! 悪魔に魅入られただけで人を殺すなんて、間違ってます!!」
「はああああああ!! こんの糞シスター! 頭湧いてんじゃねえか!? 悪魔はゴミ屑で、死する存在って教会で習っただろうが!!」

「悪魔だって……悪魔だって良い人はいます!」

「いるわけねえだろ、このバアアアアアアアアアア!! 目を覚まそうぜ!!? その糞悪魔殺してさ!!!」

「嫌です!! イッセーさんは良い人です!! こんな私を助けてくれました! だから私は悪魔だって良い人がいるって思えたんです!!」

アーシアは、イカレ神父に断言し、拒否する。

……その時だった。

イカレ神父は、アーシアに銃口を向け、そして光の弾丸を放とうとした。

そうは行くかよ!!

「アーシア! 下がって!!」

「きやあつ!」

俺はアーシアを自分の後ろに引き寄せた。

《Boost!》

『ドライブグ！解放だ!!』

『了解!』

《Explosion!》

倍加した力を解放し、

ウエルシュ・エクスカリバー

「赤龍帝の聖剣!!」

魔力を伴った手刀をあの野郎に向けて放つ!!

「えっ!?何これ!こんなアニメみてえな馬鹿カッコいい攻撃があああ!!」

そんな断末魔を上げてフリードは吹き飛ばされる。

《Burst》

その音声と共に、籠手は解除された。

と同時にぐらつく体。

「おっと……………」

「イツセーさんっ!?!」

ハハ……アシアを心配させちまったな。

これじゃ格好つかないな……。だけど先ずは、

「アシア……ごめんな、悪魔だって、黙ってて」

悪魔なのを隠してた事、謝らないとな。

「……イツセイさんは良い人です！また私を助けてくれました……。だから謝らないで下さい！」

ハハ、優しいな。アーシア……。

……こんな優しいのに、何で墮天使の加護なんて受けてるんだ。

その時、大きな部屋の一点に赤い、グレモリー家の紋章が現れた。

……召喚のための、魔法陣。

「やあ、兵藤君……助けに来た……。けどもう終わったのかい？」

「……見りやわかんだろ？」

俺はその場から立ち上がり、あの神父に殺された人の元に向かう。

既に、息は絶えてる。

この人は俺を呼んでくれた人だ……。してほしいことがあって、自分ではどうにもできなくて悪魔を頼った。

「……俺がもつと早く来ていれば、救えたかも知れない命だ……。ごめんなっ……。！」

俺はまだ弱い……。

救えたはずの命も、救えないなんてさ……。っ！

「……イツセイ、貴方はそこにいる女の子の正体を知っているのね？」

「……シスターと悪魔は、相容れないって言いたいんですか?」

そう語ってきた部長を少し睨んでしまう。

分かっている、部長の言いたいことは理解できる……でも!

「——ツ!部長、この近くに墮天使のような気配がここに近づいていますわ」

……朱乃さんは何かを感じ取ったように部長にそう言うと、部長は手を開いてその場に魔法陣を出現させる。

「イツセー、話しはあとで聞くから今は帰るわよ!」

「ならアーシアも!」

「無理よ。この魔法陣は眷族しか転移されない。だからその子は無理なの。そもそも彼女は墮天使に関与している者。だったら尚更よ」

「だったら俺が……!」

俺は立ち上がり、墮天使全員ともう一度、戦うことを示す。

するとその時だった。

「……イツセーさん」

アーシアが、俺の背中に手を添えてきた。

その手はほんの少し震えていて、俺は首だけアーシアの方を向けると……アーシアは微笑んでいた。

「私は大丈夫です……だから行ってください」

「な、何言ってるんだよ？アーシア、大丈夫だよ……俺は戦えるし、あんな墮天使何かに負けは……」

「イツセーさん、大丈夫です……またきつと……会えますッ!!」

……アーシアは涙を流しながらも笑顔だった。

そしてその笑顔のまま、俺の背中を押し、俺は押されるがまま部長が展開させた魔法陣の中に入る。

「……感謝するわ、シスターさん」

「アーシア!」

俺はアーシアに向かって手を伸ばすも、でもその手がアーシアを掴むことはなかった。

「……また、会いましょう!イツセーさん!」

そうして、俺たちは光に包まれ、そしてそのまま駒王学園の部室へと転送されたのだった。

俺はあの日からずっとぼんやりとしていた。

理由は分かっている。アーシアの事だ。

あれから無事なんだろうか？

ずっと寝る前にも考えてた。

あの後、部屋帰ってからの沈痛な面持ちで語った部長の言葉を思い出す。

『あのシスターのことは諦めなさい。初めから教会側の人間と悪魔は相容れないのよ、悲しいけど……それにそれ堕天使と戦ったら私達も堕天使たちと争うことになるわ。それで私の可愛い眷属を失うのは嫌なの……分かってちょうだい、イツセー……』

……部長の言いたいことは最もだ。

俺の気持ちだけで、他の部員を危険な目に遭わせるわけにはいけない。

だけど、放っておいたら、嫌な予感がする……。

『相棒、町に出掛けたらどうだ?』

「……………そう、だな」

ドライブに言われて、気分転換という事で外に出ることに。

暫く歩いてると、俺は見知った姿を見つけた。

白いヴェールを頭に被ったシスター服の女の子……あの後ろ姿は………ア—
シア!

今度は道の真ん中で周りをキョロキョロしながら困った様子でいた。

……割と人通りが多い町中だからな、おそらくは迷子かな?

って言うてる場合じゃねえ!!

居ても立ってもいられず、俺は早足でア—シアの元に向かった。

「よ、ア—シア!」

「い、イツセーさんっ!」

「無事だったんだな……よかつたあ!」

俺は安堵の溜め息を漏らした。

いや、ホントに良かったよ……。

「んで、どうしたんだ?迷子か?」

「は、はい……」

アーシアは顔を真っ赤にして俯いた。

くうく、可愛いなあ!

「その、ご飯を食べようと思ひまして……………」

「そっか……。そうだ!アーシア、この後用事とかないか?」

「え?はい」

「だったら今日一日俺と遊ばないか?」

あんな思いしちまったんだ。

リフレツシユさせてやりたいからな!

「わ、私と居てもそんなに楽しいことなんて……………」

「楽しいことは見つける物だ!行こうぜ!」

「……………はい!」

よーし!今日一日はお遊びタイムだ!

「イツセーさん!これは何ですか!?!」

先ずは腹ごしらえという事で俺達が向かったのは某チェーン店のハンバーガーショップだった。

そしてアーシアはまた、紙に包まれたハンバーガーを見ながら右往左往している。

教会出身であるアーシアがジャンクフードのような食べ物に縁がないのは当たり前で、食べ方が分からないのも当たり前前つてもんだ。

「アーシア、それはな？こうやって食べるんだ！」

そういうと、俺はハンバーガーの紙を取っ払い、一口かじる。

久々だからか、食べると凄く美味い！

アーシアは俺の食べる姿を見て、目を見開いて驚いた。

「はわわ！そんな食べ物がこの世にあるなんて！」

「ほら、アーシアも騙されたと思って食べてみなよ」

「は、はいっ！」

するとアーシアは小さな口でハンバーガーを上品に食べる。

シスターとハンバーガーのアンバランスさが何故だか絵になるなあ……。

んでその後は、

「うう、私の力……5レベルですう……」

「大丈夫だ！シスターだからしょうがないよ！」

パンチングマシンでアジアが『パンチ力たったの5……ゴミめ!』と言われガチへコミしてなだめたり(その電工掲示板は殴った)、アジアが欲しがった人形を取ってやったりして楽しんだんだ!

『因みに幾ら使った?』

「聞くな!!」

ゲーセンに行った後は、屋台でタイ焼きを買って二人で食べたり、服屋で服を見たり……

そうしているうちに、時間は既に夕方になっていた。

俺とアジアは立ち寄った公園の水辺付近のベンチで二人して座っている。

「そういやここは、俺が初めて堕天使と戦った場所か……」

「ははっ、さすがに疲れたなあ……」

「は、はい……でもこんなに楽しかったのは、生まれて初めてですっ!!」

「俺もだよ。こんなに楽しく女の子と遊んだのはアジアが初めてだよ」

「だからかな……滅茶苦茶緊張してた。」

楽しんでくれてるかなって思ってたら、アジアの笑顔は凄くキラキラしてた。

うん、やつぱりどんな女の子でも笑顔が一番だな！

「その、イツセーさん……私、イツセーさんに少し聞きたいことがあるんです」

「……良いよ。俺もある。それにアーシアの聞きたいのはこれのことだろ？」

俺はそう言つて、赤龍帝の籠手を展開した。

「……イツセーさんも、神器を持っているんですね」

「ああ。アーシアほど、優しいもんじゃないけど……」

「優しい、ですか……」

……俺の言葉を聞いたアーシアは、復唱するようにボソツと呟く。

「……アーシア？」

そして……アーシアは、一筋の涙を流した。

いや、一筋なんかじゃない……、ずっと絶えずに涙を流し始める。

俺はその姿を見て、もっと知りたくなつた

アーシアのことを。

俺はまだアーシアの過去を知らない。

だけど、こんな悲しい顔を、涙を流させたくなかつた。

「私の過去……聞いてもらえますか？」

「俺で良いなら、幾らでも聞くよ」

するとアーシアが語り始めた。

「聖女」とあがめられた一人の少女の、救われない末路を、涙を流しながら。

それはアーシアが小さい頃、彼女は欧州のとある地方で生まれ、生まれてすぐ捨て子として教会に捨てられたところから始まった。

そこで育てられたアーシアだったが、転機は8歳の時のことだった。

アーシアはある日、怪我をした犬を発見し、そしてその犬を助けようと思った時に神器

を目覚めさせ、そしてその回復の力で犬を救ったらしい。

そしてその回復の力が教会中に知れ渡り、そしてアーシアは人の傷を癒す力を持つ「聖母」として崇められたらしい。

傷を癒すシスター……崇められるのは必然だったのだろう。

そう——彼女が望んでいなくても、それは当たり前のように行われた。

どれだけアーシアの地位が高くなっても、どれだけの名声を浴びせられても……アーシアの心の隙間は埋まるどころか広がっていった。

だってアーシアが望んでいたものはそんなものじゃなく、もつと単純で……だからこそ大切なこと。

……アーシアはただ、友達が欲しかったんだ。ただどそれは出来なかった。

出来るはずがなかった。

例え誰かを癒すことのできる優しい神器を持っていたとしても、それは人ならざる力だ。

他人はアーシアを異質な目で見られるようになり、そしてアーシアはずっと孤独。

友達はいない、誰も守ってくれない、味方がいない……神器に目覚めた者が受ける確執、孤独。

アーシアは幼い時からそれをずっと味わってきたんだ。

……そんな状況だった。

そしてアーシアの人生が大きく変わってしまったもう一つの転機は……ある日、アーシアが教会の前にいた黒い翼を生やした悪魔を救ったことだった。

神器とはそもそも神聖なものではない。

どの神器もそれぞれの力は世界に対して平等に働き、そしてそれはもちろん多種多様な種族に影響する。

……つまり悪魔すらも癒すことが出来る。

悪魔をも救えるその力は聖なるものではない、魔女のものだと教会は判断し、そして

……

アーシアを追放し、そして見捨てた。

だからこそ、アーシアは行き場がなくて極東の……日本のはぐれ悪魔払いの組織に入って、墮天使の加護を得るしかなかった。

それがフリードがあの家で言ったことの真相だ。

「これは修行なんですよ……神様が私に与えてくれた、修行……これに乗れ越えさせれば、きっと友達だって……」

アーシアは自嘲気味に笑いながら、そう語った。

「辛い思いをしなければ幸せになれないなんて、間違ってるよ」

「イツセー、さん？」

アーシアは俺の方を目を丸くして見ている。

「そんな方法で友達なんて出来ても幸せにはなれないさ。こうやって、楽しさをお互いに分ち合ってこそ、友達ってのは出来るんだ……。だからもう、俺達は友達だろ？」

俺は力強く、アーシアにそう告げた。

アーシアの中の悲しみを、少しでも亡くせる様に。

「イツセーさんは、私なんかの友達に、なつてくださるのですか？」

「当たり前じゃないか！もう俺達は、今日一日楽しんだんだ！それだけで、友達だ！だから、宜しくな！後な……………」

「……………」

「もし何かあつたら、俺の名前を呼んでくれ。そしたら、絶対助ける。そして、絶望しそうになつたら、俺がアーシアの最後の希望になるよ。約束する」

アーシアにそう言うと……………アーシアは涙を浮かべてるけどすつきりとした、笑顔を見させてくれる

嬉し泣きだと、良いな…………。

『相棒、空気の読めない来訪者だ』

『ああ、分かつてるよ』

「——友達？そんなのは無理よ」

……………その時、俺の知っている声が上空から聞こえた。

しかしそれは既に俺達も探知して知っていた——墮天使。

「アーシアが逃げ出したと聞いて急いで追いかけてみたら……まさか男とデートなんてねえ……アーシアに妬いちやうわ」

本気で言っていない……こいつはそう、あの時俺を殺そうとした、レイナーレ。

あの時とは違う格好で噴水口の上に浮いていて、そして気味の悪い笑みを浮かべている。

だが俺に気付くと、その顔は憤怒に彩られた。

「貴様、兵藤一誠……!?!」

「気付くのおせーよ、レイナーレ」

「ふうん……この波動、悪魔になったんだ。最悪ね」

墮天使は俺を嘲笑する。

こいつ、典型的に悪魔を下等と思っているタイプか。

いや、自分の種族以外の全てを下に見ているタイプだ。

「最悪?とんでもないブーメラン発言だな」

「何イ……!」

俺の安い挑発に易々と乗ってくると、殺りやすいねえ。

「れ、レイナーレ様……」

アーシアが俺の後ろから、体を震わせてそう呟いた。

「アーシア、帰って来なさい。あなたの力は私の計画に必要なものの。だから……」
アーシアに近付こうとしたレイナーレに、真空波を顔にぶつける。

途端、レイナーレの頬からは血が流れる。

「貴様ア……」

「あなたにはお似合いの血化粧だな。それにテメーがアーシアに触れたら汚れちまうだろ？」

「……………殺す!!」

レイナーレは光の槍を作り、此方に向かって投げてきた。

が、俺はそれを赤龍帝の籠手で霧散させる。

「たかが龍の手で私に勝つつもり？馬鹿なの？」

「その馬鹿に追い詰められたのは何処の誰だろうなー？」

「馬鹿にしてっ……………!!」

激昂したレイナーレは更に多くの槍を投げる。

「拡散する龍波動オ!!」
マシンガン・ドラゴンショット

指の間から無数にドラゴンショットを放ち、相殺する！

「な、何処に……………!」

「此方だ」

「なっ」

《Explosion!》

「らあっ!!」

「ぐううううっ!!」

殴る瞬間、俺は前もって倍加した力を解放した!

その勢いのまま、レイナーレは木々の中に倒れる。

「ぐっ、ふうっ……………」

「終わりか?随分あつけな「きゃああああつ!!」っ!」

レイナーレに言いかけた言葉に被さる様にアーシアの悲鳴が聞こえ、後ろを振り向い

た!

すると、スーツ姿の墮天使がアーシアを抱えていた!

「レイナーレ様、この男は私に任せて、貴方はこの娘を儀式場へ……………」

「ぐっ……………」ソイツは私の手で殺したいけど、貴方に任せるわ。ドーナシーク」

「はっ」

「っ!待て!!」

ちくしょう!

失念してた、奴に仲間がいるという事位考え付くだろ!!

アジアが拐われたこともあり、俺は冷静さを失っていた。
そして何より、自分自身が許せない!!

「さあ、小僧。お前の相手は私がー」

「どけ……ウエルシュ・エクスカリパー赤龍帝の聖剣!!」

「……………な、に!?!」

目の前のスーツ野郎が言いきる前に切り捨て、ぶっ飛ばした。

それより、アジアは!?

『もうこの辺りにはいないな……………』

アジアを守り抜けなかった、その思いのまま、俺はその場に暫く立ち尽くした。

次回、D×Dウィザード

リアス「駄目よ」

イツセー「アジアあああ!!」

ドライブ『貴様は、選択を誤った』

MAGIC 『友達、助けます!』

ドライブ『次回もオ!ぶっちぎるぜ!』

イツセー「懐かしいな、それ」

MAGIC7 『友達、助けます！』

——パシン！

……室内に、乾いたその音が響き渡った。

その音の源は俺であり、今、俺の頬は赤く染まっていた。

そう、俺は部長に本気の平手打ちをされた……部長の表情は、本気で怒っているようだった。

あの後、俺は一人でアーシアを助けに行こうとしたが、一日中俺を探し回っていたらしい木場に公園で発見され、そして近くに墮天使の死体があることに気付き、無理矢理に俺を部室まで連れてきた。

そして俺は部長に事の顛末を話し、アーシアを救いに行くということを伝えると、それを止められた。

それでも尚食い下がったら平手打ちを喰らった訳だ。

「何度言ったら分かってくれるの!? イッセー、あなたがしようとしていることはほとんど自殺行為よ! ……この間に言っただけはまずよ、諦めなさいと!」

……部長が怒るのは分かる。

あんなに自分の眷属を大切にする部長だから………けどそれでも!

俺はアーシアのことを諦めることなんてことだけは出来ない!

アーシアの希望になるって誓ったから!

だから——

「ごめんなさい、だけど俺はこれだけは譲るわけにはいきません」

俺は自分の意見を、考えを全て包み隠さずに言った。

「これは貴方だけの問題じゃないの! 私や他の部員に被害が及ぶ可能性だってあるの! 貴方の主は私よ! 主として、眷属を危険に晒すことなんてできないわ!」

「……それは俺が、悪魔だから、なんですか?」

「……そうよ、悪魔になったからには、私たちのルールを守ってもらおうわ」

部長は俺を睨みつけながらそう言ってくる。

……悪魔だから? だったら簡単だ。

「確かに皆に迷惑をかけたくありません……でも、俺をはぐれにしたら、迷惑は掛からない筈です」

「「ツツ!!」」

その場にいる全ての人が、俺の発言に目を見開いて驚いた。

そりゃそうだよな、自分からはぐれにしてくれなんて先ず言わないもんな。

「はぐれはどの勢力からも殺されるべき対象でしょう? ……だったら、俺がはぐれになってアーシアを救えば誰の迷惑にもかかりません」

「ふざけないで! あなたは私の大切な眷属で下僕よ! イツセー、どうして分かってくれないの!？」

部長だって、譲れない部分があるはずだ。

眷属を守り、愛し、一緒に戦う……それが部長のだから。

確かにそれはすばらしいことだって分かる……状況が状況なら、俺だって部長のために一緒になって必死についていく。

でも……俺にだって譲れないものがある。

「アーシア・アルジェントは俺の友達です。だから部長……俺は友達を見捨てません。

何があっても!」

俺はこれだけは絶対に、たとえ神様でも、魔王様でも譲るつもりはない!

俺はアーシアに友達だって豪語したからな……助けに行かなくて、友達を語れるかよ!

「イツセー、貴方は素晴らしい性質を持っている……だからこそ、貴方を失いたくないの!」

部長はいつになく悲しそうな目をする。

それは部長だけじゃない。

小猫ちゃんも不安そうな表情をしているし、木場だって心配そうな顔で俺を見ているし、朱乃さんも今日に至ってはいつものニコニコ顔じゃなくて真剣そのものだ。

……本当に、悪魔と思えないような良い人たちだよ。

だけど、俺は悪魔で、部長の眷属である以前に——!!!

「俺は、赤龍帝で、魔法使いだ!!俺は絶望しかけてる人がいるなら、手を差し伸べる!それが誰であっても!!ましてや友達なら当然助けなきゃならない!!これは理屈じゃない!俺が俺である為なんです!!!だから……ごめんなさい!!!」

《バインド・プリーズ》

「「「ツ!?!」」」

俺は魔法で鎖を呼び出すと、部長達を縛る!

「ぐっ……イツセー!!」

窓から飛び出そうとする俺に、部長が声を掛けてきた。

「このままじゃ、手遅れになります。奴等は儀式がどうか言ってみました∴奴等が希望を奪おうとする前に、止めなきゃならないんです!!」

部長が何かを言う前に、俺は飛び降りた!

「ドライグ!奴等の居場所は!?!」

『あの寂れた教会だ。それにしても相棒、良くぞ言ったな。それでこそ、俺の知る兵藤一誠だ』

「へっ!」

《コネクト・プリーズ》

コネクトでバイクを呼び出すと、俺はあの教会まで向かった!

待つてろよ、アーシア!!

イツセーside out

木場side

外から聞こえてたバイクのエンジン音が遠ざかると同時に、僕達を縛っていた鎖も消えた。

どうやらイツセー君が遠ざかると自然に魔法も消えるみたいだね。

「イツセー……ッ!」

部長は窓からイツセー君を心配していた。

すると、朱乃さんが部長に近づき、何かを囁いた。

すると部長は、

「私と朱乃は大事な用事が出来たから、今から席を外すわ」
朱乃さんを伴って何処かに行こうとした。

「だけど扉を開ける前に、

「祐斗、小猫。イツセーを宜しく頼むわ。それと——つて、イツセーに伝えて頂戴」

「っ！部長」

「……頼んだわ」

それだけ言うと、部長は今度こそ部室を後にした。

「……さてと、じゃあ行こうか？」

「小猫ちゃん、準備は良い？」

「はい……後、先輩は少し殴ります」

「……戻ったら大変だよ、イツセー君。」

木場 side out

リアス side

「それで部長……イツセー君を行かせても良かったのですか？」

私……リアス・グレモリーは、『女王』である朱乃を連れて、ある森に来ていた。

「結果オーライと言えば良いかしらね。これだとイツセーの本当の力を見ることができ
るからね」

「……変異の駒を4つも消費しましたからね」

朱乃の言うとおりに、イツセーを悪魔にする時に信じられないような現象が目の前で起
きた。

イツセーを転生させる際に変異の駒になった私の『兵士』の駒の4つ、更に残りの兵
士の駒を全てつぎ込んで、漸くイツセーは悪魔になった。

単純計算で兵士30個分の価値。

彼の中に、一体なにかあるのか私は気になった。

「それと、単純に墮天使達を許せないと言うのがあるしね」

そうこうしていると、木々の上から黒い羽のようなものが落ちてくる。

私はそれが墮天使のものであるとすぐに気がついた。

「あらあら、うふふ……思ったより早い到着ですこと……」

「……貴様らか、ドーナシックを殺した悪魔の仲間は！」

良く見ると、そこには二人の墮天使がいた。

どちらとも性別は女。

「ええ、私の下僕が貴方達の仲間を切り裂いたらしいわね……でも彼は振りかかる火の粉を払ったまですよ？」

「黙れ！悪魔風情か!!どうせその下僕もドーナシークの油断をついたに決まってる!!」

「そうそう！えつくと兵藤一誠だっけ？あんなチャラ男にドーナシークさんが普通に負けるわけないじゃん？見かけ倒しで、守る守る行つて結局守れないし弱いし？挙句ただ自己満足に浸ってるだけの偽善者だもん！きゃはははは!!」

……この堕天使、今、なんて言ったのかしら

私の耳が正しければ、イツセーが見かけ倒し？チャラ男？弱い？……偽善者？

その言葉が頭に広がった瞬間、私の怒りは頂点に達した。

「とにかく貴様らは死ね！悪魔が!!」

「そうよ！あたしとカラワーナの光の槍で死んじやいな!!」

堕天使が、私と朱乃に光の槍を幾重にも打ち込んでくる。

そんな脆弱な力で、私を殺そうというのかしら？

「……あらあら、うふふ。怒らせる相手を間違ったようですね」

朱乃が一步、私から離れる……ええ、良く分かってるわね、朱乃。

「お前達が私の可愛い下僕を語るな」

……墮天使の光の槍が、私の魔力で完全に消滅した。

「な!?!」

「う、うそ?!?!」

墮天使の表情は青ざめていて、そして私は墮天使に

「……私の可愛いイツセーを馬鹿にしたわね。その報い、万死に値する……消し飛ばす」

自分が持てる全ての魔力を放出した!

リアス side out

イツセー side

「ライダアープレイク!!!」

教会に辿り着いた俺はバイクに乗ったまま、教会の門をぶち破った！

『Boost!』

『何年か前の仮面ライダーがやってたな、それ』

「おお！憎き愛しのオ!!イツセー君じゃあくありませんk」

「邪魔だあ!!」

「あじゃばー!!!!」

突然出てきやがった白髪の男——多分フリードがなんか言ってたけど気にしてる暇なく跳ね飛ばした!!

直後、フリードは瓦礫の中に消えてった。

『流石相棒。その強引き、嫌いじゃないわ!』

「ありがとよっ!!」

ドライグのキモい声援に多少戦慄しながらも、バイクを走らせて教会にあつた階段を下っていく!

なんか森の方から雷やら爆発音が聞こえたぞ!?

『恐らくリアス・グレモリー達だな』

「部長達が!?何で………つて!」

突如前方から飛ばされた光刃にバイクが倒される!

いってえな、オイ!

「悪魔祓い……随分お出ましたな」

見ると、地下への入り口を大人数の悪魔祓いが塞いでいた!

上等だ……!

俺は赤龍帝の籠手を展開して殴りかかろうとすると、

「やらせないっ!」

「……えいっ!」

突如として疾風の如く、悪魔祓いが薙ぎ払われた!

何だ? って今の声は……

「木場、小猫ちゃん……!?!」

何で二人がここに!?

そう思つて口を開こうとすると、

「話は後だ、イツセー君。それより聞いてくれ。部長からの伝言だ」

「は?」

「部長は敵地において昇格条件に出した……つまり部長は悪魔のつての敵陣——つまり協会を敵地と認めた」

敵地と認めて、尚且つ昇格の許可を出した。

じゃあつまり……

「暴れてもOK、と言う意味です……」

小猫ちゃんサムズアップで簡単に言ってくれた！

「じゃあ、それを伝える為に態々……？」

「当然だよ。それに、君には縛られたけど、僕等の仲間だからね」

「腹パン一発で勘弁してあげます……」

あの怪力で腹パン!?

俺死ぬって！どっかのホモ怪盗はライダーにされても異能生存体だから生きてたけど、俺血反吐吐くの確定だよ!!

「プレーンシュガーで、勘弁してくんない？」

「それで許してあげます……」

よっし！交渉成立!!

「……それより、速く行つた方が良いんじゃない？」

と、密かに喜ぶ俺に木場が声を掛けてきた！

そうだった！だけど悪魔祓いや神父が……！

「イツセー君、ここは僕等に任せて」

「あのシスターさんを、助けてあげてください……魔法使いさん」

それ死亡フラグ、なんて茶化す暇はないな。

「頼むぜ……」

それだけ眩くと、俺は再びバイクで扉に向かってダイブした!

悪魔祓いや神父は——

「イツセー君にはっ!」

「一歩も近づけません……っ!」

俺の頼れる仲間が受けてくれるからなっ!

木場や小猫ちゃんの思いを胸に、俺は教会の地下に辿り着いた!!

そして——見つけた!!

祭壇の上で、キリストのように十字架に体を磔にされているアーシアを!

そして、その傍にいる………墮天使、レイナーレをツ!!

「アーシアあ!!」

俺は力の限りアーシアに向かって叫んだ!

すると、目の前に神父達が立ち塞がった!

「はっ、随分な歓迎だな」

だけど儀式……アーシアを拘束……何でアーシアを拘束する必要がある?

そもそも何の儀式だ?

ここに来るまでにずっと疑問に感じていたことだ。

アーシアの力は、回復——種族を問わない程の力………ツ!!

そこまで辿り着いた俺は、猛烈に嫌な予感がした。

そうか、アイツは、レイナーレの本当の目的は!!

と、後ろの扉から木場と小猫ちゃんがやって来た!

「イツセー君、これは……」

「木場、小猫ちゃん! 神父の相手を頼むっ!!」

「先輩!!」

「イツセー君っ!!」

神父達を任せて、俺はレイナーレに向かって駆け出した!!

『Boost!』

何度目かも覚えてない倍増を行う!

確かに制限が掛かってるけど関係ない!!

俺は祭壇を登る階段の途中でもう一度アーシアの名を叫んだ!!

「アーシアああ!!!」

「……イツセー、さん?」

……さっきまで目を瞑っていたアーシアが俺の存在に気付く。

「……ほんつとー! ヒトをいらつかせるのが得意なガキね!!」

だけど、俺の前にあの堕天使が舞い降りた。

両手に光の槍、そして俺を囲む多くの神父。

「あともう少し何だから、邪魔しないでもらおうわ!」

「……後もう少し? だったら尚更邪魔してやる! アーシアは返してもらおうぜ!!」

堕天使レイナーレを含む神父共は俺に向かって光の剣やら槍を振るって来るが、俺はそれを全て避けつつ、拳でいなしながら戦闘を続ける。

その戦いに少なからず、敵も動揺を隠せていなかった。

「ツ！なんで……何で私の槍が当たらないの!？」

「そんなちんけな攻撃で、俺を倒せるわけねーだろうがあ!!！」

俺は墮天使の槍を籠手で打ち砕き、そしてそのまま懐に拳を放った。

レイナーレはそれでその場に蹲りそうになるが、翼を織りなして後方に飛び、体勢を整えた。

「が………ツ!?…相変わらずの馬鹿力ね。まるで最近悪魔に転生したばかりの人間とは思えないわ。………でも残念」

……すると、レイナーレは突如、翼を織りなして空を舞う。

傷だらけのレイナーレは、アーシアが磔にされている祭壇の傍に降りて……そして彼女の手にそっと触れる。

——それは次の瞬間だった。

「い、いやあああああ!!！」

アーシアの悲鳴が聞こえた。

何かを失いそうなことに恐怖するようなアーシアの悲痛な悲鳴。
そうしている時だった。

アーシアの胸に・・・あの優しい緑の光が灯ってる？

俺はさつき感じた嫌な予感を思い出した。

——予感的中かよ!!

『ふざけるなよ、レイナーレエエエツ!!!』

『Explosion!』

俺は力を解放し周りで行く手を遮る神父たちを魔力弾で蹴散らし、祭壇の頂上に到着する。

そしてその勢いで祭壇を壊す!!

じゃないと、アーシアが死んでしまう!!

「間に合えええ!!」

俺は倍増した全ての力を拳に込めてアーシアのいる祭壇を拳で完全に破壊し、そして祭壇から落ちるアーシアを抱きとめた。

「い、イツセイさん……?来てくれたんですか?」

「当たり前だろ!?!大丈夫だ、こいつなんかには、お前の優しい力は渡さない!」

……こいつらの目的は、アーシアの神器。

神器はいわば魂、心臓と同じようなものなんだ。

つまり墮天使レイナーレの目的は、アーシアの中に存在している悪魔でも関係なく傷を癒してしまう神器を抜き取り、自分のものとする。

どういう原理かは分からないけど、そんな事はどうでも良い。

——神器を抜き取られた人間がどうなるか、こいつは分かっている筈だ!?

俺はその事実を理解すると、目の前の墮天使に更に殺意が芽生えた。

「……褒めてあげるわ。あの人数の敵を相手に、よくもまあここまで来てアーシアを手にとれたわね——でも残念ながら手遅れよ」

「何ほざいてんだ?!アーシアはもうこの腕の中にいる!」

俺はアーシアを庇う様に強く抱きしめて、拳を握った。

アーシアを取り戻した今、こんな下級墮天使を倒すことは造作もない。

俺はアーシアから離れ、最後の決戦に身を投じようとした——その時だった。

「い、いやあ!! イツセーさん、イツセーさんッ?」

「…なんで、何でだよ!」

アーシアの胸から、淡い緑の光が抜け落ちるように離れた。

そしてその光は……静かにレイナーレの元に行く。

「ふふふ……あはははははははははは!! これよ!! これぞ、私が長年求めてきた力! 至高の存在になるための、最高の力!!」

「やらせるかアア!」

俺はアーシアを置き、レイナーレがああ神器を自分の中に取り込む前に倒そうとする。

まだいける! 届け、届いてくれ!!

今届かなきゃアーシアを救えないんだよ!!

「邪魔よ!」

光の槍を俺に向かって放つが!

「プロモーション、『戦車』!!」

『戦車』の特性で攻撃力を上げ籠手で打ち消す!!

「まだよ!!」

墮天使は、俺に何度も槍を放つ!

こうしている間にも、アーシアは傷つく。

神器が持ち主を離れるのは、魂が離れるのと同義だ!

だから放つておいたらアーシアは死んでしまう……だから俺がこいつを!

神器がレイナーレの中に入ってしまいう前に、こいつをぶつ飛ばす!

「アーシアの力を、返しやがれえええ!!」

俺の拳は……そのまま一直線にレイナーレの頬を貫いた。

「ぐはあつ!!」

レイナーレはその衝撃に耐えきれずに、祭壇の壊れた十字架に激突する。

そして俺は、その場に浮遊している緑の光を手に取りろうとした。

「……ふふふ……残念でした!!」

指先が触れた瞬間、アーシアの淡い光が、消えた。

俺は一瞬呼吸が止まった。

「あははははは!!すごいわ!!致命傷の傷がみるみる治る!!これが聖母トワイライト・ヒーリングの微笑の力!!」

「…アー、シア?」

俺は耳障りな笑い声を無視し、おぼつかない足取りでアーシアの元まで歩いて行く。
アーシアは、息絶え絶えとしていた。

「イツセー、さん…また、怪我してますよ?」

アーシアは俺の頬の傷に手をかざす…でも何もおきない。

結局、俺は——!!

「——あ、あ、ああああ!!!」

俺は頭を掻きむしり、己の不甲斐無さを嘆く。

俺は助けられなかった…!

護るって、言ったのに!!!

希望になるって誓ったのに!!

自責の念に囚われている…その時、アーシアの冷たい手が俺の頬を包んだ。

「イツセーさんの、せいじゃないです…」

アーシアは精一杯の笑みを見せながら、そう呟く。

俺はアーシアをもっと安全な場所に置くため、アーシアを抱き上げてそのまま祭壇を

駆け降りた。

恐らくはレイナーレだろうな・・・墮天使が俺へ光の槍を撃ちこんでくるが、俺はそのまま走り去る。

「イツセー君!!君はその子連れて早く上へ!」

「……………ここは私たちが食い止めます、イツセー先輩ッ!」

……………二人は俺がアーシアを救えたと思っているんだろう。

アーシアを安全なところに連れて行かせようと、道を作った。

「……………頼む!」

俺はそう言うしか・・・なかった。

俺は、教会の聖堂の椅子の上に、アーシアを寝かしている。

「アーシア、今助けてやるからな……………」

《リカバリー・プリーズ》

俺はアーシアに指輪をつけて、回復の魔法を発動させる。

が、アーシアの顔色は一向に良くならなかった。

『相棒……………』

分かってる、分かってるよドライブ!!

神器を抜かれた者は、アーシアは、もう助からないって……………っ!!

「アーシア! お前にはまだまだ教えたいことがあるんだよ! なのに何でお前が諦めてんだよ!」

嘘つきだな、俺。

自分だって察してるのに、気休めの言葉しかいえないなんてさ。

弱い、俺は弱い。

「私は……………少しの間でも、友達が出来て、幸せ……………でした」

——頭の中に、アーシアと過ごした時間が次々に映し出される。

本当に少しの時間だけ……………だからこそ、こんな別れはあんまりだ!!

「何言ってるんだ! 少しの間じゃない! ずっとだ! アーシアと俺は!」

もう自分自身何言ってるのか分からない。

涙が止まらない、目の前で苦しんでる女の子一人も救えない。

「また遊びに行くんだよ! 次はさ、カラオケとかボーリングとか! 俺のダチも呼ぶから

さー！スケベだけど良い奴等なんだ！絶対にアーシアと仲良くなれるからさ！！だからさ！！」

こんなところで消えて良い命じゃない！

「なあ、神様！！少しくらい助けてやってくれよお！！こんなに良い子なのにさ！！」

俺は涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながらいるか分からない神様に祈った。

「私のために…泣いて、くれる……。祈って、くれる…」

アーシアは、俺の頬を優しく撫でた。

ぐちゃぐちゃになった俺の顔を見て微笑んだ。

「こんなにも、良い人が…、私の友達なんです。もしイツセーさんと、一緒に国に生まれて……一緒にの学校に通えたら…」

「通おうぜ！毎日俺達と一緒に登校してさ、ごはん食べて、一緒に帰って！！俺のおっちゃ人も良い人だから、絶対アーシアを歓迎してくれるさ！！」

俺は、俺はッ！！

「イツセー、さん——ありがとう……泣いてくれて…」

「アー、シア？」

俺はアーシアの声音がどんどん小さくなっていることに気がついた。

「助けてくれて・・・ありが、とう・・・」

「違う!俺は助けられてなんてない!!君の希望になるって約束したのに、結局何も出来なかった!!」

俺は泣きながらそう言っても、アーシアは・・・首を弱々しく横に振る。

「いいえ・・・救われ、ました・・・今もこうやって、私の傍にいてくれる、イツセー、さん」

アーシアの俺の頬を触る手が、離れた。

その落ちそうになる手を、俺は強く握り締める。

それしか、出来ないなんてさっ・・・・・・・・

「初めて、だったんです・・・あんな本音・・・言ったの・・・それ、を・・・何も言わず、自分のことみたいに、聞いてくれて・・・私は、救われたんです・・・・・・・・!」

「アーシア・・・・・・・・」

「主よ・・・・・・・・あなたは、最後に・・・・・・・・私に、とても大切な思い出を、くれたのです、ね?」

「・・・・・・・・違うよ、アーシア・・・・・・・・」

自分の言っている言葉すら理解できなかつた。

アーシアの頬に俺の涙が・・・零れ落ちる。

「嬉しいです、イツセー、さん。こんなわたしを、大切に想ってくれて・・・」

「当たり前だろっ！……こんなとか、言うなよ！アーシアは、俺の大切な友達だから！！」
「……ありがと、イツセー、さん。それだけで私は、幸せ……なんで、す」

アーシアの力が抜ける。

目を瞑る……まるで安らかって位に、穏やかに。

「おねがい、します……もう、泣かないで……イツセーさんは、笑顔でいて……」
「無理だよ、そんなのツ！君を助けられないで、笑えるわけないだろ!？」

「だめ、です……そしたら、私……未練でお化けに、なっちゃいま、す……よ?」

冗談めかすアーシアの体は、確実に冷たくなっていた。

くそつたれえ!!

「イツセー、さん……もし私が生まれ、変わったら……その時、もし近くに貴方がいたら……」

「ああ……ああ!!」

「きつと、とても、幸せなんで、しょう……」

声が気薄になる。

「あは……ダメ、そんな夢物語……絶対に、無理……ですよね……」

「無理じゃない！夢物語じゃない!!」

もう俺に出来ることは嘘で励ますことだけだ。

でも、それでもアーシアが笑顔でいてくれるなら……!

「ああ! 約束する! 俺がきつと、君を幸せにする! だから死ぬな!!」

こんな言葉、気休めの嘘だ。

でもアーシアはそんな嘘でも、笑顔を咲かせた。

「ありがとう、ごさいます……!」

次第にアーシアの声が、小さくなっていく。

そして、アーシアの鼓動が、止まった。

「アーシアああああ!!!」

俺は慟哭した。自分の無力さを嘆いた。

何が魔法使いだ、何が赤龍帝だ!!

死にゆく女の子一人救えないで、何が希望の魔法使いだ!!!!!!

「あら。もしかしてアーシア、死んじゃったんだ？」

すると、声が聞こえた。

あの耳障りな声が。

「あらあら、殺気立ってるわねえ。見てよ、この傷。ここに来る間に君のところのナイト君にやられたのよ」

俺は力なく、そいつ——レイナーレに振り向いた。

「でもアーシアの素晴らしい治癒の力があれば瞬間で治るわ…本当に素晴らしい力……！」

その光悦な表情すら、今の俺の神経を逆撫でする。

……結局、俺は甘かったんだな。

こんな糞野郎の命を摘み取るのを躊躇してたなんてよお!!!!

そのせいで、俺の甘さで、アーシアが……………!

『ドライグ、アレは使えるか』

『ああ。思い切りかましてやれ。俺自身、奴が憎たらしくてどうにかなつちまいそうだ。俺の分まで、頼むぞ』

『……………おう』

赤龍帝の籠手の宝玉が、俺の思いに答えるように強く輝いた。

『Over Explosion!!』

俺は、解放されていた力を、更に倍増させ、*“解放”*した。

途端、俺の魔力は膨れ上がった。

「ツ！何よ……………この、魔力!? 貴様、何者なの!?!」

俺の魔力を感じ取ったのか、レイナーレは顔に恐怖を貼り付け、こちらに光の槍を

放った。

が、俺を覆う魔力に触れた途端、それは霧散した。

「何!?!なぜ貫けないの!?!」

『墮天使レイナーレよ』

「っ!誰!?!」

ドライグの声に過剰な反応を見せながら、あたりを見渡すレイナーレ。

『お前は、選択を誤った』

その言葉が終わった瞬間、俺は地面を蹴っていた。

次回、D×Dウィザード

イツセー「立て…!」

リアス「貴方の傲慢が導いた結果よ」

レイナーレ「お願い、私を助けて…!」

MAGIC 6 『俺、ブチ切れます』

ドライグ『これが終わればフェニックス編!』

イツセー「次回もショータイムだ!」

MAGIC8 『俺、ブチ切れます』

木場side

僕は今、同じオカ研部の小猫ちゃんと一緒に教会にて悪魔祓い、神父と交戦している。イツセー君がああのススターさんを助け出せたから、後はコイツ等を退けるだけ！

すると突然、

ドオオオオオオツン
!!!!!!

「!？」

凄まじいまでの地響きが聞こえ、その余波で神父と悪魔祓い達が吹き飛ばされた。

あの方向は……………!

「先輩が、いる場所……………」

小猫ちゃんがぼそりと呟くと、僕は正気に返った。

「行こうー！」

「は……！」

僕と小猫ちゃんは、その場所まで駆け出した！

イツセー君、無事でいてくれよ……！！

木場 side out

イツセー side

「ぐっ……うう……！！」

俺は今、目の前に情けなく倒れてる墮天使レイナーレを見下ろしてる。

「おい、どうした？まだ………戦いは終わってないぜ？」

「う、あああああ!!!」

自分でも吃驚するほどの低い声で呟くと、レイナーレは狂ったかのように俺に光の槍を投げてきた。

………温いな。

「かあっ!!!」

俺は槍!に向かつて、一声吼えた。
すると、槍は霧散し消え去った。

「な……………」

驚いてるのは良いが、体が硬直してるのは落第点だな。

そんなんじや…………

ウエルシュ・ハンマーバレット
「赤龍帝の鉄鎚弾お!!!」

良いのだ!!

「が、はあ!!」

体内のドラゴンの魔力で硬化させた拳の一撃を受けたレイナーレは、体をくの字に折り曲げ吹っ飛ばされた。

「か、回復が、追いついてない……………!? 貴様は、一体……」

レイナーレは体を起こそうとしてるが、なかなか起き上がれずにいた。やっと立ち上がっても、傷の治りが遅い事に気付いたみたいだな。

「たとえ、どんな傷も直ぐに回復させる事が出来るアーシアの神器でも、その回復が追いつかない勢いで叩けば良いだけだ……そして、今!!!」

「ひっ……!!」

俺が一步一步近づく度に、レイナーレは口から怯えの悲鳴を漏らす。

「俺にはその為の力がある!!」

「く、くるなあ!!」

完全に俺の出す気迫に怯え、レイナーレは翼を広げ飛び去って行こうとした!

逃がすかよ!!

俺は悪魔の翼を広げ、レイナーレの背中に乗りかかる!

「な、何を……」

「何を?……こうするんだよっ!!!」

俺は力を込めて、レイナーレの背中から生えてる翼を——引き千切った。

「ぐ、あああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

相当の激痛だったのか、レイナーレは狂った様に悲鳴を上げて、空中でもがき苦しむ。
だが、まだだ!

「おいおい。穢れきった天使に翼なんていらねえだろ?それにな……アーシアは、お前以上の苦しみを受けたんだ!!その苦しみを与えたためえが、こんなモンで根を上げんじゃねえ!!!」

俺はレイナーレの背中を蹴り、拳を振り上げる!

「喰らいやがれえええええええええ!!!!!!」

「ぐうあああああああああ!!!!!!」

持てる力を全て込め、奴の背中めがけて叩き込む!!!!!!
レイナーレはそのまま大地に叩き付けられ、教会が一気に吹き飛んだ。

『Over Burst』

地面に降り立ったと同時に、解放が限界を迎えたのか、解除された。

イツセーside out

木場side

僕と小猫ちゃんは、爆発音がした場所に向かった。

すると、そこには、レイナーレが白目で気絶していた。

よく見ると、翼がない……。

「……………」

辺りを見渡していると、無言でシスターさんの傍に佇んでいた。

「イツセー君……………」

僕等は労りの声をかけようとした時、言葉を失った。

何故なら、イツセー君は見たこともない位に、泣いていた……。

「もしかして……………先輩」

「……………わいい、木場、小猫ちゃん」

その言葉の意味を理解した時、僕らは沈黙した。

「……………助けられなかった…ッ！」

そう悲しみを堪える様に絞り出した声に、居た堪れない気持ちになった。

「俺が、俺の甘さが、アーシアを…ちくしよ、ちくしよ、お…ッ!!」

……違う！ イッセー君のせいじゃない。

悪いのは、ここにいる墮天使達だ！

そう言いたかったけど、僕らは言えなかった。

すると、

「ぐっ、おのれえ……………」

「「！」」

巨大なクレーターの中心にいたレイナーレが起き上がってきた！

その眼は、完全にイッセー君に対する怨念に染まっていた。

「たかが下級悪魔の分際で……この私の翼を！」

……まさか、イツセー君が引き千切ったのか？

それは幾らなんでも、無茶苦茶というか………つ！

「まだ、生きてたか……！」

イツセー君から途方もない殺気が溢れ、今にもレイナーレに飛び掛かる体勢をしていた！

「そこまでよ、イツセー」

すると、その場に似つかわしくない凜とした声が響いた。

——— 我らが部長のお出ましだね。

「部長……？」

すると、イツセー君は動きをピタリと止めた。

木場 side out

イツセー side

「部長……？」

俺は拳を下し、部長に振り向いた。

「貴方には積もる話もあるけど、それはまた後でね」

ニツコリしながら言ってますけど……部長、怒ってます？

やつぱバインドで縛つたの不味かったかな……？

『そりやそうだろ』

ドライブグに突っ込まれ、何も言えなくなる。

そうですね、ご主人様を縛る下僕なんて普通いませんよね！

そうドライブグとやりあつてると、部長は墮天使の元に歩いて行った。

「こんにちわ、墮天使さん」

「あ、あなたは……」

「ええ、あなたが随分と可愛がつてくれた眷属の主……リアス・グレモリーよ」

部長はにっこりと笑い、レイナーレにそう言い放つ。

……だけどその笑みは、俺の時とは違う怒りに満ち溢れているように見えた。

「ぐ、グレモリー家の娘!？」

「どうぞお見知りおきを……と言っても、貴方はもうすぐ、死ぬのだけれども」

……部長の言葉で、墮天使の表情は青ざめた。

「まあ死ぬ前にいくつか教えておいてあげるけど——まずはイツセーのことよ。貴方は……いえ、現に私も彼を少し甘く見ていたけれど、彼の中に眠る力はそれは恐ろしいものよ」

部長は、話を続ける。

「昔、三大勢力によつて神器の中に封じ込められた最強のドラゴンの片割れ……赤龍帝の力が封じ込められた神をも屠る13種の神滅具の一つ——ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手」

「ぶ、ブーステッド・ギア……10秒ごとに力を倍増させる、神を殺せる力を宿した最強の神器……」

「そうよ……そして、貴方の敗因は、この子を甘く見た傲慢さ……何か申し開きはあるかしら?」

部長は静かに目を瞑り、ほんの少し手のひらに魔力を集める。

それで俺は察した。

……部長は、レイナーレを殺すつもりだ。

この墮天使は人を傷つけ過ぎた。

アーシアを傷つけ、恐らくこれまでたくさんの人を傷つけてきたんだろう。

償いは当然であり、当たり前。

……まあ、ナノ単位で同情するぜ。

俺も部長のお仕置きが待ってるしな。

「ま、待って！ イッセー君！ 私、任務の為にこんなことをしてしまったけど、本当は貴方の事が好きなの!!」

「……」

「あの時言いそびれちゃったけど、貴方の事を愛してる!! だからお願い！ 助けて!!」

「……」

「魔法使いは、困ってる人を助けてくれるんじゃないの!?!」

……………やっぱまだ甘いな、俺。

助かりたい一心でこんな心にもない言葉を吐くコイツに同情しちまうなんてさ。

『相棒』

わーつてるよ。

こんな奴の為に、部長の手を汚させる訳にいかないからな。

「私の可愛い下僕に言い寄るなっ……………イツセー!?!」

俺は部長が振り下ろそうといた手を掴み、止めさせる。

「俺に任せてください」

そう呟いて、部長の手を優しく下す。

「レイナーレ、いや……………夕麻ちゃん」

「イツセー君……………!」

レイナーレは偽りの愛情で染まった瞳で見つてくる。

「死んでくれないかな？」

だから、俺も笑顔であの時みたたく……………告げた。

「……………え？」

レイナーレはポカんとした表情で俺を凝視した。

「何驚いてんだよ？君が俺に以前言ったことじゃないか」

俺が事もなげにそう言うと、本気と悟ったのか顔を青ざめさせ、喚き散らした。

「嫌よ！こんなところで死ぬのは！私はアザゼル様とシエムハザ様の寵愛の為に生きなくちやならないの!!」

「愛の為……………か」

「だからこんなところで死ねないのよ！貴方の様な甘ちゃんに崇高なる墮天使の私を殺すなんて——」

その言葉は、俺が左手に魔力を宿した途端に、途切れた。

部長に朱乃さん、木場、小猫ちゃんも驚いてる。

それ程までに、異質な魔力を貯めてんだもんな。

「崇高な……………何だって？」

「あ、ああ……」

「愛の為、他人の希望の為に生きるのとは良いことだ。……でもな、お前は汚れきつてる。誰かの希望を踏み躪ってまでの愛で誰かを幸せになんて出来やしねえ!! てめえがやってることは、ただの独り善がりの偽善だ!!」

「た、助け……」

デリート・ドラゴンショット
「消滅の龍波動オ!!!」

「レイナーレの命乞いを無視し、必殺の一撃を叩き込んだ!!」

「レイナーレは悲鳴を上げることそのままならず、その場から消え去った。途端、俺の体がグラついた。」

「思った以上に、限界、か……」

「イツセーッ!?!」

「慌てて俺を支える部長。」

「だがそれを遮って、アーシアのもとに向かった。」

「アーシア……ゴメン、ゴメンなあ……ッ!」

その場に崩れ落ちながら、アジアに謝る。

「先輩……………これ」

小猫ちゃんは俺に何かを持ってきた。

これは……………

『この娘の神器、だな』

トワイライト・ヒーリング
聖母の微笑み……………。

消滅せずに、残ってたのか？

「神器……………！」

すると、部長は何かを思いついたのか、懐からある物を取り出した。

「それ……………悪魔の駒？」

それは、悪魔の駒だった。

確か、僧侶の駒？

「神器と肉体があれば、転生させて甦らせる事が出来るわ。それに、こんなに良い子を死なせるわけにはいかないわ」

「！そ、それって……………」

「ちよつと規格外だけど、このシスターを転生させるわ」

そう言うと、部長はアジアの周りに魔方陣を描いた。

「我、リアス・グレモリーの名に於いて命ず！アーシア・アルジェントよ、悪魔となりて
私の元に舞い戻れ!!」

部長が転生の際の呪文を唱えると、聖母の微笑みと僧侶の駒がアーシアの中に吸い込
まれていった!

光が収まると、

「うーん……あれ、私……イツセイさん!」

前に会った時と変わらない穏やかな声を出し、アーシアは目覚めた。

「どうしたんですか?!?その涙は……それに、私は」

何か言おうとする前に、俺は頭を撫でながら、

「大丈夫、目にゴミが入っただけだから……」

何でも無い風にそう告げた。

エピローグ

「転校生のアーシア・アルジェントさんだ。皆、仲良くするんだぞ。じゃあアーシアさん、一言どうぞ」

「えつと……私はアーシア・アルジェントと申します！日本に来て日が浅いですが、皆さんと仲良くしたいです！」

「ええええええ!!？」

翌日の学校、悪魔となったアーシアは俺んちにホームステイすることになり、部長がアーシアを学校に通わせてくれる様にしたんだ。

まあ、俺は朝聞かされたから驚いてないけどね。

「おお、元浜！金髪のカワイ子ちゃんだ!!」

「むっふっふっ！これは覗きがいがありますねえ!!」

——取り敢えず、コイツ等にはお灸を据えてやるか。

「では、改めまして……ようこそ、アーシア・アルジェントさん。オカルト研究部に」

「はい！一生懸命部長さんのお役に立ちます！」

「ふふ、その意気でなくちゃね」

その日の放課後、俺んちでパーティーを行った。

でも何で俺んちなんだ…？

——まあ、いつか。

「おい木場！ドーナツ取ってきてくれ！」

「了解！」

こんなに楽しいのは久々だしな!!

新しく元シスターのアーシアを仲間に加えた俺達の向かう先は、何処なんだろうな？

旧校舎のディアボロス・完

次回、D×Dウィザード

アーシア「良かったです〜！」

リアス「私を……………抱いて」

イツセー「……………へ？」

第二章 戦闘校舎のフェニックス

MAGICI 『俺、童貞捨てます!?!』

ドライブ 『代金取立手形の略語か?』

イツセー「んな訳ねーだろ！お前テレビの見すぎ！」

MAGIC番外編『使い魔、ゲットだぜ?』

『ぐははあ!絶望しろお!』

「ひい!誰かー!!」

駒王町のとある休日の日、一人の男性が怪物に襲われていた。

男性は必死で逃げるも、逃げようとした先に石のような怪物が立ち塞がっていたため逃げ場を完全に失った。

『ヴう……』

『もう鬼ごっこはお仕舞だな。観念してファントムを生み出せえ!!偉大なるワイズマン様の為に!』

「ああ………!」

もう駄目だと、男性が諦めて目を瞑った時——

「……………あ、あれ?」

もう死んだのかと思いい目を開けてみると、さっきの石の怪物は全員倒れ伏しており、自分の目の前には、学生服を着た少年が立っていた。

「おいおい、戦えない人相手にリンチかよ？ 見苦しいねえ」

「き、君は……？」

「早く遠いところに逃げてください！」

「わ、分かった！」

少年に言われた男性は一目散に駆けていった。

『小僧、何者だ？』

「俺か？ 聞かれて名乗るのも烏滸がましいが、特別に教えてやるぜ」

少年の前に立ちをはだかる怪物——名はケプリ——は少年を睨み付けた。

だがその少年は臆することなく右手を腰に翳した。

すると、

《ドライブオン！ プリーズ》

と、何処からともなくこの雰囲気似つかわしくない音声が響き渡ると、少年の腰に銀色のベルトが表れていた。

少年は腰のベルトを操作する。

《シャバドウビタツチヘンシーン！ シャバドウビタツチヘンシーン！》

するとまたしても喧しいくらいの声が響いた。

怪物が五月蠅そうにしていると、少年は今度は左手の指に赤い宝石がついた指輪を取り付けた。

そして左手を右斜め上まで持っていていき、

「変身ー!」

そう叫び、左手を腰のベルトに宛がった。

《フレイム・プリーズーヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!》

腰のベルトからそう音声が流れたかと思うと、少年は左手を横に持っていく。

すると、左手を伸ばしている方から赤い魔方陣が表れ、少年の体を通り過ぎていく。

魔方陣が消えると、そこには全く別の存在がいた。

黒を基調とし、ところどころ赤が盛り込まれた風貌。

そして指輪を思わせるその仮面。

だがその怪物は知っていた。

それは、自分たちの敵だと言う事を。

『貴様、指輪の魔法使いか!?!』

怪物が狼狽えながら聞くと、その戦士は答えず、その場で軽く一回転し、

『さあ、ショータイムだ!』

左手の宝石を見せつけながら、そう呟いた。

イツセーside

よう、皆!イツセーだ。

早速だけど、俺はファントムと戦闘を行ってる。

しっかし奴さんの見た目が…ねえ?

顔の半分が口で埋まってるんだよなあ。あれ見えてんのか?

『まあ良いや。さっさと片付けさせて貰うぜ』

《コネクト・プリーズ》

俺はコネクトで魔方阵から専用武器——ウィザーソードガンを取り出し、ソードモードで切りかかる!

『そんな鈍らで、このケプリ様の体を切れると思うな!』

だが奴はその体で剣戟を受け止めやがった!

なんつー硬さだ!?!切ったこつちの腕がしびれるぞ!

『だったら!』

俺はすかさず接近して蹴りを入れ込む!

が、結果はお察しの通り……………

『いってえくっつ!』

『ハッハッハ!これでも喰らえ!』

痛みに悶絶する俺にファントムはパンチを放ってきた!

いてえ!馬鹿力もちかよ!?

『くっそお…!』

『相棒、ランドならどうだ?』

壁に激突した俺に対し、俺の相棒のドライグがアドバイスしてきた。

そうだな、パワーにはパワーだ！

俺は再びウィザードライバーを操作し、左手の指輪を黄色の宝石がついた指輪に入れ替える！

《シャバドウビタツチヘンシーン！ランド・プリーズ！ドツドドドドン、ドンドツドドン！》

今度は黄色の魔方陣をくぐり、大地を司るランドスタイルにフォームチェンジ！

『さつきから五月蠅いぞ！そのベルト!!』

『うるせえな！慣れろや!!』

『無理だ!』

『無理じゃない！俺だつて慣れた!!』

『嘘つくな!』

『なんで敵のお前に突っ込まれなきゃならねーんだよ!』

フアントムも五月蠅いって思ってたんだな、このベルト。

いや、確かに俺も最初は五月蠅かったけど、今じゃもう慣れっこだよ。

『色が変わった所で俺の怪力には敵わん!』

と言いながらフアントムが突っ込んでくる。

『そいつはどうかなッ!』

『!俺の突進を受け止めただと!』

『そーらよつと!』

『ぐおお!!』

そつちが怪力ならこつちも怪力だ!

ファントムの突進を真正面から受け切った俺は、ファントムを押し返しウイザードリングを付け替え、ウイザードライバーに翳す!

《ロック・プリーズ》

『はあつ!』

『ぬおおお!』

魔法の効果で奴の足元から岩をはやし、空中に浮かせる。

お次はコイツだ!

《ハリケーン!プリーズ!フー、フー!フーフーフーフー!》

手を上に掲げあらわれた魔方陣をくぐって、風を司るハリケーンスタイルにチェンジ!

風に乗って空を駆け、風を纏わせたウイザーソードガンで切り裂く!

『があああつ!!』

ダメージを負ったファントムは地上に落下!

更に追撃で蹴りを叩き込む！

『フィナーレだ！』

蹴られた反動で地面に着地し、ワイザーソードガンのハンドオーサーを開く。

《キャモナスラツシユシエイクハンド！キャモナスラツシユシエイクハンド！》

あーもう！これも相変わらずうるせえな！！

まあいいや！握手！！

《ハリケーン！スラツシユストライク！フーフーフー！フーフーフー！》

『ぐ、おお………！』

何とか立ち上がったみたんだけど、これで決まりだ！！

『だああああ！！』

風を纏った斬撃を放つ！！

『ぐああああ！！こ、こんな五月蠅い魔法使いに我等ファントムが倒されてるなんてええ

!!!』

そんな断末魔を残して、ファントムは爆散した。

なんか、ごめんなさい……五月蠅いベルトで。

そんなことを思いつつ、変身を解除する。

『オツカーレ』

「マツハかよ。確かにアレも五月蠅いベルトだけど」

『まあ、何にせよ。これで暫くあのゲートは狙われないだろう』

「そうだな。じゃ、帰るか」

そう言つて俺はバイクでこの場を後にした。

んで、その日の夜。

「「使い魔?」」

オカ研に呼ばれた俺とアーシアは部長に言われた事を鸚鵡返しに聞き返した。

因みにアーシアはもう悪魔稼業が板についてんだ。

まあ、夜のチラシ配りは同行したけどね。

夜は変な人が多いし、何かあつてからじゃ遅いからな!

因みに他の部員はと言うと、本を読んだり、ニコニコしながらお茶を啜つたり、俺の

ブレーションシユガーを食べていたりする。

つてか小猫ちゃん気に入ったの? だったら店教えるから、勝手に食べないでくれよ!

でも、こないだのレイナーレ騒ぎの時のお詫びか……まあいいや。

「そう、悪魔は大体が自分の使い魔を持っているの。イツセーの場合はもう何件も人間と契約を結んでいるし、アーシアも仕事に慣れてきたからそろそろ使い魔を持たせようと思ったわけよ」

アーシアが契約を結ぶお客様は、大抵が癒しを求めている人間らしい。

仕事でストレスが溜まり、それをどうにかしたいがために悪魔を呼んだサラリーマンの男のヒトや、家事などのストレスを抱えた主婦。

そんなストレスを抱えた人に対してアーシアは心配し、話を聞いてあげるのが定番となっっているらしい（小猫ちゃん情報）。

より親身に話を聞いてくれるアーシアはりピーター力が凄まじいとのこと。

まあアーシアは聞き手としちゃ充分過ぎるほどだよな。それに優しいし、可愛いもんな！

「はあ……。それで、どこで獲得するつもりですか？」

「それは……」

部長が俺達にそれを伝えようとしたときだった。

オカルト研究部の部室の扉が、唐突に開かれた。

誰だ、と思っていると部屋の中にどこかで見たことのあるような数人の女子生徒と一人の男子生徒が入ってくる……

うーん、最近は休んでばっかだったからなあ。

……そうだ！この人たちは駒王学園の生徒会役員の面々だ！

えーと確か、名前は……

『生徒会長の支取蒼那だろう』

そうだった！サンキュードライグ！

「イツセーさん……あの人達は……？」

アーシアは不安そうな表情で、部室の入口に立っている生徒会役員の面々の方をみている。

そっか、アーシアは会うの初めてか。つっても俺も久々だからな……ドライブの方が覚えてるってどういう事だっばよ……？

「アーシアは初めてだったな。あの人達はこの学校の生徒会の人たちなんだ……まあ、簡単に言ったら学校を支えてくれてる人だな」

「はう！その様な人たちのことを知らないなんて、ああ、主よ！罪深い私をお許しください——ひゃう!!」

オーイ、アーシアちゃん？

俺達悪魔だからお祈り厳禁だぜ〜？

「忘れてました〜……うう」

「まあしやあないって」

よしよしと頭を撫でてやろう。

ホント可愛いなあ〜！絶対嫁には出さんぜ!!

「予想はしてたんですけど、やっぱり生徒会も悪魔の集まりだったんですね？」

「あら、イツセー……気が付いていたのね？」

部長は俺の言葉に関心を持ったようにそう言う。

まあ学園に悪魔がいるってこととか、悪魔が学園の上の方にいるということもドライグに教えてもらったからな。

でも生徒会が悪魔とはすつごく予想外だったけど…

「リアス、その彼はもしかして…」

「ええ……最近、私の眷属の『兵士』になった兵藤一誠、そしてイツセーの後ろに隠れているのが『僧侶』で元シスターのアーシア・アルジェントよ」

部長は会長に俺達を紹介すると、俺とアーシアは一步前に出て頭を下げる。

「リアス部長の下僕で『兵士』の兵藤一誠です」

「そ、『僧侶』のアーシア・アルジェントと申します!」

すると会長は俺達に少しお辞儀して、にこりと笑ってくる。

「はじめまして…学園では支取蒼那を名乗っていますが、本当の名はソーナ・シトリー。上級悪魔でシトリー家の次期当主です」

…まるつきり部長と立場被ってるな。

そして上級悪魔……ドライグの情報が正しければ、三勢力の戦争ほぼ全ての純粋な悪

魔を失った生き残り。

72柱の生き残りの名家だ。

「それでソーナ……今日は何用なの？」

「ええ。お互い、下僕が増えたようですし交流を兼ねてと思ひまして……匙」

「はい、会長！」

すると今まで会長の隣にいたこの中の唯一の男子生徒が大きな声を上げて、前に出てくる。

ちなみにアーシアは俺の背中に隠れている。

やっぱ人見知りし易いタイプだなく。

「生徒会書記として会長の下僕になった匙元士郎だ！まさかお前が悪魔になっているとはな、問題児兵藤!!」

……なんか俺の方を指さして自慢げにそう言ってくるんだけど、誰だよ。

しかも初対面の奴に向かって問題児とか……

『お前は否定出来んぞろ』

まあそうですけどね!?

それにしたって礼儀とかあるだろ!

「えっと……何方ですか?」

俺が恐る恐る言うのと、目の前の匙? って奴が凍り付いた。

ど、どうした? なんかもずった?

「ま、まあ? ただの『兵士』でサボり魔のお前には俺の偉大さが分からないかもな! 俺は兵士の駒、4つ消費のエリート! ほんと残念だよ、兵藤!」

だつてさ、ドライブ。

『相棒、遠慮なく言つてやれ。え、4つ、マジねーよwワロスwwって』

それは俺の礼節が疑われるから遠慮しとくぜ。

「止めなさい、匙」

すると会長は匙の頭を強くはたいた

途端に匙は頭を押さえて、その場にうずくまると、会長が俺に頭を下げてくる。

「か、会長! なんてそんな奴に頭を下げるんですか!」

「黙りなさい。ごめんなさい、兵藤君。私の下僕がご無礼を……」

「や、良いつすよ。俺も気にしてませるので」

そう言うのと、会長は頭を上げた。

「…匙の言った言葉は気にしないで。彼、普段休んでた貴方に対抗心を燃やしてるだけ

で、面識がある訳じゃ無いから」

「あ、そうなんすか？まあ、会ってても普段学校休んでましたし。それに記憶力弱いし」俺もアイツみたいな事してたら頭叩かれてんだろうなあ。

そう考えると、我慢して正解だな。うん。

「ほ、ほくら見る！普段サボってるお前と俺じゃ、天と地の差がある！成績だって俺の方が——」

うん、ちよつと流石に腹立ってきた。

事情を知ってる部長はもう米神引き攣ってるし！

すると、そいつの言葉を遮って、

「匙……止めなさい」

…途端に、会長の凍りそうなくらい低い声が響いた。

「匙、あなたは勘違いしているのかもかもしれませんが、そこにいる兵藤君はリアスの『兵士』の駒を8つ消費しています…しかもその内、4つが変異の駒で単純計算で『兵士』30個分以上の駒を消費して転生できたほどです」

「30ウ!？」

「そして彼は紅蓮の魔法使い——『ウイザード』です…」

「ウイ、ウイザード…!?この兵藤が!?!」

「あなたでは勝つことはおろか、戦いにすらならないでしょう。無礼を詫びなさい、匙」
匙は会長に怒られて、俺の前にでて頭を下げる。

「すまなかった、兵藤……」

「いいって。気にすんな——まあ、取り敢えず」

ポンと肩を叩き、

「うちのご主人様に謝ってくれ」

親指で部長を指すと、途端に匙は青ざめ、土下座で部長に謝った。

取り敢えず問題を解決し、会長は部室を去っていった。

使い魔捕獲のメンバーは俺、アーシア、部長、小猫ちゃん、朱乃さんだ。
木場は悪魔家業の仕事が入ったらしい。

そして今、俺達は悪魔を使役する使い魔が多く生息している地域らしい。

「そう言えばイツセーさんは、使い魔もってませんでした?」

「ん? ああ、アイツらか」

「……イツセー、持つてるの?」

その地域に着いた時、アーシアに聞かれたことにこたえてると、部長が驚きながら聞いてきた。

「まあ、一応使い魔つちやあ使い魔、かなあ……」

懐から指輪を取り出し、簡易版ウィザードライバーに翳す。

《ガルーダー・プリーズ》

そう響くと、俺の目の前にプラモみたいな物体が表れた。

部長達が驚いていると、俺は真ん中の窪みにさっきの指輪を付けた。

すると、プラモは途端に一匹の小さい鳥になった。

「コイツと……」

《ユニコーン! プリーズ》

《クラーケン! プリーズ》

更に青、黄の指輪でモンスターを生み出す。

青は小さい手乗りサイズの馬、黄色がタコみたいな奴だ。

「あらあら……可愛らしい使い魔ですわね」

「意外です……」

朱乃さんと小猫ちゃんは興味津々で其々ユニコーン、クラーケンを指で突つつく。

「凄いわね……」

「まあ、主にファントム探食用ですけどね」

なんて事を話しながら使い魔捕獲専門の人を待っていると、

「ゲットだぜい!!」

「ひゃー!」

突然の声に、アーシアは可愛い悲鳴声を上げながら俺の後ろに隠れる。

えっと……あれが使い魔専門悪魔か。

夏休みの少年が虫取りに行くようなラフな格好で帽子を逆に被っている、おっさんがそこにいた。

「俺はザトユージ、使い魔マスターだぜ! リアス・グレモリーさんよ、その者たちが電話で言っていた子たちか?」

「ええ。よろしくお願ひしますね」

「Ok!…なるほど、その金髪美少女に茶髪な野性的な男前か…」
ザトユージさんはアーシア、俺を見てそう呟いた。

『マサラタウンのサトシだとよ、シトロン』

『それ元ネタのスーパーマサラ人な、オダマキ博士』

ドライブに突っ込み返す。

シトロニックギア、オン!とかいわねーから。

だからそんな期待する眼差し辞めなさい、小猫ちゃん!

なんでドライブとの会話ネタを聴けるの!?

君ひよつとしてNT!?

「イツセー、アーシア、この人は使い魔のプロフェッショナルよ。今日はこの人の言うことを参考にして、使い魔を手に入れなさい」

「はい!」

そんな訳で、使い魔捕獲が始まったのだ。

「ちなみにザトユージさん。ここらで最も強い魔物つて何ですか?」

「おう!それはこいつしかいねえ!龍王の一角、そして龍王最強と謳われる伝説級のドラゴン!天魔の業龍、ティアマツト!時たま姿を現しては暴れまわるらしいが、まあ

手にれられた悪魔などはいないぜー!」

『ほう、ティアマツトか。懐かしい名だな』

ドライグは俺の中でしみじみといったように呟く。

なんだ、知り合いなのか?

『ああ…昔、何度か戦ったことがある。そのころの力を求めた俺は奴を何度も完膚なきまで倒しちゃったのさ。…それで奴は俺のことを嫌ってんだ。そう言えば、歴代の赤龍帝で何人がが奴と遭遇したことがある』

龍王って魔王クラスの實力保持者だろ?

すげえな、ドラゴンは。

「赤龍帝に龍王…イツセー、命令よーティアマツトを使い魔にしなさい!!」

「死ねってか!?!」

「だって見てみたいじゃない。赤龍帝と龍王のセット」

そんな軽い感じで言わないでください!

ってか普通に部長にタメ言っちゃったよ!!

まあ、龍王もいいなと考えてしまう。

だって、龍王ほどの力がいれば、修行の時も有意義な物になるだろーしなあ。

「…それにしても今日の森は静かすぎる」
するとザトユージさんは怪訝な顔つきになった。

そして次の瞬間、辺りに凄まじい強風が吹き渡り、そして突然、轟音のような音が響いた！

——肌で感じる事が容易なほどのこの威圧感。

俺は空を見上げるて…：…巨大なドラゴンの姿があつた。

蒼穹の体軀が目立つ美しいドラゴン。

そう——龍王ティアマツト！

——面白れえ!!

『相棒！マジで奴を使い魔にする気か?!』

大マジだ!!

っていうか龍王を使い魔とか、正直無理ゲーだろうけども——挑戦はやってみなく

ちや分らないだろ！

作者だつてモンスターボールでミュウツーゲットした事あるしな！

『それはゲームだからだよ!!』

そう言うドライグを無視し、俺は赤龍帝の籠手を展開し、飛び立つ！

「よお！龍王——ティアマツト！」

「何だ、貴様は？」

こいつ、言葉を話せるのか！しかも普通の女性の声だし！

するとティアマツトは俺の左手を見た途端、その目つきを鋭くさせる!!

「……その神器、まさか赤龍帝——何の用だ？」

「何、簡単な話さ。ティアマツト！俺の使い魔になれ！」

俺は率直にティアマツトにそう言った。

「使い魔だと？」

「そ、使い魔！アンタ龍王なんだろ？そう言われてるあんたを使い魔にしたいってわけだ！」

俺は嘘偽りのない言葉で真っ直ぐティアマツトを見て、拳を目の前の巨大なドラゴンに向ける。

するとその時だった。

「ふはははははあ!! 私を使い魔か! そんなことを言う悪魔がこの世に存在するとはな!!
赤龍帝の小僧というから、どれだけの戦闘狂と思えば!!」

ティアマツトは、可笑しそうにそう笑いをこみ上げた。

……龍王の王者の余裕ってわけか。

「——私を使い魔にしたければ、それ相応の力を見せてみろっ!!」

笑い終えたティアマツトは空高く飛び上がった!

行くぞ、ドライブ!

『しあーねえな。ならばお前の強さ、見せてやれ! 相棒!』

おうよっ!!

『Boost!』

まずは1段階強化あ!

からのお——!

「プラネット・ドラゴンバースト惑星破壊の龍撃弾お!!」

一回り以上の大きさにしたドラゴンショットの派生技を放つ!!

「ふんっ! 当たらなければどうと言う事もない!!」

ティアマツトは鼻で笑うと、口から燃え盛る程のブレスを吐き出した！
すげー威力だ！相殺させやがった!!

「だつたらコイツだ！」

《《バインド・プリーズ》》

バインドの魔法でティアマツトの巨軀を拘束する！

「この程度の鎖で、私を縛れると思つたか!？」

ティアマツトは翼をはためかせ鎖による拘束を解いた！

「お次はあ！」

《《ビッグ！プリーズ》》

ビッグの魔法で巨大させた拳で殴りつける!!

『Boost!』

「むっ！」

ちよつとは効いてるな！

『Explosion!』

「くらええ！エクスプロージョン・ドラゴンショット爆裂の龍波動!!!」

さつきより一回り小さいドラゴンショットを放つ！

「どうした!? この程度の攻撃で私を——ッ!!!?」

ティアマツトはその巨躯で掻き消そうとするが、触れた瞬間

——強烈な音と共

しやあつ!! 引つかかったな!

が、ティアマツトの鱗からは僅かに煙が立ち込めるのみ。

無傷かよっ!?

「良い一撃だな、小僧……」

その称賛の声の後に、俺を取り囲む色とりどりの魔方陣。

……………詰んだわ、これ。

『相棒。取り敢えず防御に専念しとけ』

分かってるよ、んなこと!!

という訳で、俺は魔力砲台の光に飲まれた——。

「いつてて……………」

「いい強さだったぞ、小僧」

そう言いながらティアマツトは魔方陣に包まれ————そこにいたのは、青髪の綺麗なお姉さんだ。

「ティアマツト、なのか?」

「?ああ、そうだが…………どうした?」

「いや……………スゲー美人だなんて」

「な…／／／」

ん、何だ?

急に大人しくなったぞ?

『はあ、お前はまた…………』

な、なんだよドライグ。

その溜息は。

「…？どうだった、俺の強さ？」

「…ああ。荒削りだが、延び代がある。気に入ったよ」

ティアマツトは手を差し伸べた。

その意味を理解した俺はその手を握る。

「宜しくな、ティアマツト！」

「ティア」

「へ？」

「ティア…：…そう呼べ。えつと…」

「ああ、俺は兵藤一誠。イツセーで構わないぜ」

「そ、そうか…：／／／」

ティアはそう言うと、急にモジモジしだした。

だ、大丈夫なのか？

とまあこの後、部長に凄く怒られ、アーシアも知らない間に蒼雷龍を使い魔にゲツト

してた

そんなこんなで、
使い魔のティアマツト！
ゲットだぜ！！

MAGIC番外編『俺、デートします?』

よう皆、イツセーだ。

突然だが俺は今、駒王町でも割と大きなショッピングモールに来ている。

何でかって?

それはだな……………

「アーシア、何か欲しいもんはあるか?」

「え〜つと……………そうですね〜」

アーシアとデート?に来てるんだ。

まあ、今朝一緒に出掛けませんか?と言われたからだけだな。

それにしても……………やっぱアーシア可愛いなあ〜。

見ていて癒されると言うか何と言うか……………兎に角癒されるんだよな〜。

何でだろうな〜?

『ま、これを機に女の扱いに慣れとけ』

扱って……………

アーシアは物じゃねーぞドライブ!

『それは分かってる。だがお前はやはり歴代に比べ女心を理解してない様だからな』

『女心か……………お前はわかんのかよ?』

『まあ、大体な』

大体って……………何処の世界の破壊者だよ?

「……………さん。イツセーさん!」

「……………ど、どした?」

つと、話しすぎてアーシアの話聞いてなかったな……………。

「このお帽子……………」

するとアーシアは、手に赤いベレー帽を持っていた。

……………よし!

「じゃあこれ買うか?」

「!いい、良いんですか!?!」

「良いって。アーシアにはお世話になってるしな!それに似合いそうだし!」

「そ、そんな……………// //あ、ありがとうございます!」

な、何だ？急に赤くなってもじもじし始めたぞ？
大丈夫か？

『……………はあ』

何だ今の溜め息は！

と、取り敢えずは会計済みますか。

「はいよ、アーシア」

「わあ……………」

俺は買ったベレー帽をアーシアに被せてやった。

うん、やっぱり似合ってる！

「ど、どうでしょうか？」

「ああ！良く似合ってるよ」

「くっ！ありがとうございます！」

アーシアは本当に表情がコロコロ変わるなあ。

見えて飽きないよ。

「キヤアアアアア!!」

だが、そんな細やかな楽しみは突如として聞こえた絶叫に消えた。

『……………相棒、ファントムだ』

「……………分かった。アーシア、ここにいろ」

「気を付けて下さいね……………」

「おう」

アーシアにここにいろのように言い残し、悲鳴が聞こえた方向に向かった!

————悲鳴が聞こえた方向に着くと、ファントムが女性を襲っていた!

『さあ、絶望しろお……………』

「い、いやあ……………誰か……………助けて!」

『誰も助けてはくれな……………がはあ!』

俺はファントムに飛び蹴りを浴びせ、女性から引き剥がす!

「早く逃げて!」

「は、はい！」

女性をその場から逃がし、俺はフアントムを睨み付ける。

そのフアントムは直ぐに起き上がり、俺を睨み返してきた。

『小僧、何の真似だ……………？』

「フアントムから人を、希望を守るのが、魔法使いの役目でね」

《ドライバーオン・プリーズ。シャバドウビタッチヘンシーン！シャバドウビタッチヘンシーン！》

「変身！」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

ウィザードライバーを顕現させ、ハンドオーサーを操作、そこに変身用のリングを翳し、ウィザードに変身する！

『……………指輪の魔法使い。本当に悪魔になっていたとはな』

「……………っ！何故それを……………！」

急に言われたソレに、俺は警戒する。

何でフアントム達を知ってんだよ!?

『あのお方の言われた通りだな。だが、貴様と戦うのはまた今度だ！』

「逃がすともっ！」

《コネクト・プリーズ》

コネクトでウィザーソードガンを取りだし、撃とうとするが、

『さらばだ!』

何とそのファントムは光の槍を放ってきた!

「うおっ!?!」

ウィザーソードガンをソードモードにして何とか往なすが、その隙に逃げやがった

……!

『あの波動……アレは墮天使の物だな』

「………やっぱり、か。前にレイナーレ達と戦ったのと同じが似てた」

『だが、アレは……上級墮天使のソレだ』

「何でファントムが墮天使の波動を………?」

『さあな』

「……………」

釈然としないものの、俺は変身を解除し、アーシアの元に戻った。

「実は……逃げられちゃって」

多分、使い魔のコウモリで見てたろうから、誤魔化さずに答えた。

「そう……ゲートの人は?」

「取り敢えず、プラモンスターを付けてます」

ガルーダ達に頼んで、ゲートを見張ってもらってる。

何かあるかもしれねーしな。

「……貴方達、これから何処に?」

「ああ、夕飯の材料買いに行こうかなって」

「そうだ!」

「部長達もどうですか?一緒に夕飯」

「あら、良いの?」

「良いか、アーシア?」

「はい!……でも、お口に合うかどうか……」

「あらあら、アーシアちゃんの手作りですか?楽しみですわあ」

おお、部長達皆乗り気だ。

「でしたら……イッセーさん。今日はお鍋にしましょう!」

「お、良いな!じゃ、材料の買い出しは任せてくれ!行くぞ木場!」

「ふふ、了解」

木場と一緒に鍋の材料を買いに行くことに。

そしてこの後、アーシアお手製の鍋で、一段と仲を深めたのでした！

『ーーーーー様、魔法龍帝と遭遇しました』

『そうか……。やはりワイズマンの言葉通りか』

『如何いたしますか？』

『今はまだ動く時ではない……。下手に動けば、奴等に感付かれる危険が高い。もう暫くはこのままだ』

『はー！』

第二章：戦闘校舎のフェニックス

MAGIC9 『俺、童貞捨てます!?!』

皆、おはよう！イツセーだ。

久々の投稿だけど、皆忘れてないよな？

俺は今、朝のランニング中だ。

目覚ましにも良いし、鍛練にもなるからな！

『ん(ヾ)……………』

……………つて、ドライグまだ寝てんのか。

まあ神器の調整が忙しいみたいだからな、仕方ないか。

『ピーー!!』

「お！どうした、ガルーダ」

暫く走っていると、俺の使い魔のガルーダが寄ってきた。

「ファントムがいたのか?」

『ピーー』

ガルルーダは首を、と言うか全身を横に振った。

まあ、こんな朝早くに出られてもめんどいけどな……………。

「そっか、じゃあ戻って良いぞ。サンキューな！」

『ピイー！』

ガルルーダは嬉しそうに鳴いて、指輪に戻った。

後で魔力補給してやるか！

「うし、戻るか」

腹も減ったし、家に戻りますか！

「おはようございます、イツセーさん！」

「頑張ってるな、イツセー」

俺が戻ると、既にアーシアが朝食を用意していた。

後、使い魔の龍王、ティアマツトことティアも何故かいた。

「おーティア、お前も食べるのか？」

「ま、まあ……………」

「むう〜!」

俺が仲良さげに話していると、アーシアは不機嫌そうに頬を膨らませた。
か、可愛いけど、どうしたんだろ?

「イツセーさん、早く食べないと遅刻しますよ!」

「お、そうだった!」

俺は急いでアーシアが作った朝食を食べる。

うん、美味しい!

「アーシア、ホントに上手になったな〜! 呑み込みが俺より速いもん」

「そ、そんな……/ 茂さんの教えが上手なだけですよ〜」

「謙遜しなくて良い。本当に美味しい」

「テイアさんも……! 嬉しいです!」

アーシアは結構呑み込みが速い。

こないだまで料理をしたことがないってのが嘘みたいだもんな。

学校でも今や人気者だ。

アーシアは人が良いからな〜。

「ご馳走さま! うしっ、アーシア! 玄関で待ってるぜ!」

「あ、待ってください! イツセーさん!」

「気を付けてな、二人とも」

ティアに見送られて、家を出発！

「競争すつか、アーシア？」

「絶対負けちゃいますよ〜！」

「そうかあ？」

不思議だよなあ。

今じゃこんなに学校に行くのが楽しみなんてな。

アーシアの笑顔もあるんだろうなあ。

この子は、毎日の学校を楽しそうに過ごしてるからな。

「お早う、二人とも」

と、後ろから我らがリアス部長の声が！

「お早うございませす、部長」

「お早うございませす、部長さん」

「ふふつ、仲が良いわね」

イヤー、これって俗に言う「両手に花」ってヤツか？

……んな訳ないよな。

「アーシアも嬉しいんじゃない？ イツセーと一緒に登校して」
「はう！ 部長さん〜！」

「ふふっ、でも良いことよ。それは……………」

なんてやり取りの後、部長は小さく溜め息を吐いていた。
まるで何か思い悩んでる…………そんな感じだ。

……………どうしたんだろ？ 部長。

イツセーside out

何処かの廃工場にて、一組の男女がとある会話をしていた。

『おいメデューサ！いつになったら魔法使いと殺らせてくれんだよ!?』

『お前は魔法使いにやられてまだ万全ではない……………大人しくしておけ』

『ケツ！もの足りねえな……………』

『だが、お前を倒した魔法使い……………興味がある』

そう妖しく微笑む女を見て、無精髭を生やした男は少し感心した。

『ほおー、お前も戦うのか?』

『手を見るだけだ……………それに』

『……………!まさか』

『魔法使いの使い魔も、ここを探知した様だから……………』

イツセーが飛ばしたガルーダを眺め、そう呟いた。

イツセーside

学校行事を終えた俺とアーシアは、帰路についていた。
でもやっぱり気掛かりなんだよなあ……………。

「イツセイさん、部長さん……………どうかしたのでしょうか?」

「……………そう、部長だ。」

才力研での活動の時も、心ここにあらずって感じだったんだ。

木場が声を掛けても、ボーツとして……………何か何時もの部長らしくなかったんだよなあ。

「そうだな……………」

「もしかして、私が無かったのでは……………!?!」

「いや、それはないと思う……………ん?」

アワアワするアーシアを宥めてると、ガルードが此方に向かってきた。

「どうした?」

『プイー!』

ガルードは一声鳴くと、来た道に戻っていった。

付いてこい……………ってことか?

《コネクト・プリーズ》

俺はコネクトでバイクを取り寄せ、アーシアに鞆を預ける。

「アーシア、先に帰っててくれ。ちよつち用事ができた」

「……………気を付けて下さいね」

「おう！」

ヘルメットを被り、俺はガルーダの後を追跡した。

ガルーダの後を追って30分、俺は何処か分からない廃工場についた。

「(っ)っ、か……………」

『ピーー』

ガルーダはそうだとばかりに頷いた。

「取り敢えず、中に入るか……………」

俺はバイクを止めて、中へと進んでいった。

10分位進んで行くと、

「待っていたぞ…………魔法使い」

俺は誰かに呼び止められた。

それに……………何で俺のこと知ってるんだ？

振り向くと、紫を基調とした服装の女が、ソコにはいた。

「何だアンタ？」

「この前は私の仲間が世話になったな……………」

女は妖しく微笑むと、髪を靡かせる。

すると、急にその姿を変えた！

さつきと同じく紫を基調とした体、でも髪の毛は蛇になってやがる。

まるで……………神話のゴーゴンとかだ。

けどコイツは神話の中のヤツじゃねえ！

「フアントム……………」

『我が名はメデューサ……………。さあ、お前の実力を見せてみる』

「……………上等！」

《ドライバーオン！プリーズ……シャバドゥビタッチヘンシーン！》
「変身！」

《ウオーター・プリーズ。スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜！》

即座にベルトを発現させ、青い指輪を翳す！

……取り敢えずは魔力の高いウオータースタイルで様子見だ！

《コネクト・プリーズ》

「さ、シヨータムだ！」

手にした剣でメデューサに斬りかかる！

だが向こうも手に持っていた杖でガードしてきた！

だったらごり押しで、乗り切るっ!!

『ぐ……っ！生意気、なっ！』

メデューサが目を光らせた途端、俺の体が宙に浮いていた！

何だこれ!?

『ふっ、お前の魔力……何れ程の物かな?』

メデューサは小さく笑うと、蛇を俺に向けて伸ばしてきた。

俺は指輪を付け替える前に、縛られた！

「ぐっ……ああああっ!!」

この蛇……………魔力を吸ってるのか!?
にやろうっ……………っ!

『ほう……………中々の物だな。魔法使い』

「……………いい気に、なってるんじや、ねえ!」

俺は強引に蛇の拘束を引き千切った!

何とか着地するけど、魔力が……………!

『……………これだけでもう息が上がるとは……………興奮めだな』

「なっ、待て……………ええ!」

『ふんっ!』

「っ!」

杖から放たれた光球を剣で消すが、もうメデューサはそこにいなかった。

「何だアイツ……………フェニックスより強い……………!」

前に戦ったフェニックスよりも、レベルが上だ……………!

あんなのがまだいるってのか……………!?!

……ここでもうだうだ考えててもしょうがねえよな。
帰るか。

「お帰りなさい、イツセーさん」

「ただいま」

「何処もお怪我はないですか？」

「ああ、大丈夫だ」

帰った俺を出迎えてくれたのは、アジアだった。

くうく、エプロン姿も可愛いなあ！

メデューサに魔力吸いとられたけど、そんな疲れも吹っ飛んだ！

「もう飯は作ったのか？」

「はい、今日はカレーです！」

「お、マジか！楽しみ〜！」

ってな訳で、一緒にカレーを食べて談笑した。

うん、やつぱり美味しい!

ー

「ふうつと」

あの後風呂に入り、神器の使い方の特訓したりして、あつという間に夜に。

んで、アーシアは疲れて寝てる。

今日は悪魔の仕事もないからな。

「んー、ドライグの奴……結構手間取ってるな」

そう、今日は殆どドライグとの会話をしていない。

それほどまでに神器の調整に手こずってるのか?

『力になりたいけど……なにやりやあ良いかわかんねーしなあ。それに部長の事も気

掛かりだし……』

なんて色々と考えてると、

「グレモリーの、魔方陣？」

突然、俺の部屋の隅にグレモリー眷族の紋章の魔法陣が浮かんだと思うと、そこから俺の見知った人が現れた。

「部長………う？どうしたんですか？」

そこにはリアス部長がいた。

でもどこか表情に曇りがあった。

俺はベッドに横になっていて、そして部長は俺の姿を確認すると、俺に馬乗りになつた!?

「え、部長?! どうしたんですか!」

思ってもない出来事に困惑する俺に構わず、部長は——

「イツセー………私を、抱いて」

とんでもない事をおっしやった。

だ、抱いてって……………まさか!?

あらぬ妄想を抱いてると、部長はどんどんと自分の服を脱ぎ出した！
っておいおい！

「部長！何してんすか!?!」

「いきなりでごめんなさい……………。でも、時間がないの……………」

じ、時間？

確かにラブホテルとかは時間制限あるみたいだけど……………ってそんなボケてる場合
じゃない！

明らかに様子が変だ！

何時もの部長じゃない!!

「ちよつと部長、落ち着いて……………」

ムニツ。

俺は慌てて部長を止めようとするが、掌に伝わる胸の柔らかさに言葉が詰まった！

や、やわらけえ……………!

こ、これがおっぱいなのか!?

これがおっぱいの柔らかさなのか!?

思わずのめり込みそうだった俺はしかし、部長が次に言った言葉に冷静になれた。

「お願い、今は黙って私を抱いてッ!ただの都合のいい女と思っただけから……既成事実が出来れば……私は……!」

——違う、違うよ。

まるで何かに縋るように、何かから逃げるように自分を卑下してそう魅惑の言葉を並べる。けど……

「手、震えてますよ……」

「……っ」

瞳を曇らせて、そして掴まれた手から伝わってくる、部長の震えが。

こんな形で部長を抱いても、全然嬉しくもない……それに、部長も後悔する。

俺は体を起こして部長の肩を出来る限り、優しく抱き寄せた。

部長は少し強張ったけど、俺は構わず部長の頭を撫でた。

「こんなの、部長らしくないです。自分を都合のいい女なんか呼ばないでください。ホントに都合のいい女なら、震えたりしません。何かに焦って、好きでもない男に抱かれるなんてダメですよ」

「で、でも……………っ!」

「だから、部長を抱いたり、しません。こうやって、落ち着くまで抱き締めたり、話を聞くぐらいなら、出来ます。俺は部長の「兵士」ですから」

「……………イツセーっ」

部長は声押し殺して、俺の胸で泣いた。

宣言通り、俺は落ち着くまで部長を優しく抱き締めた。

「ありがとう、イツセー……………」

数分後、落ち着いたのか、部長は俺から離れた。

……………何処か名残惜しそうだったのは、気のせいかな?

「私がかかしてたわ。それにこんな事したら、アーシアに悪いもんね」

……………何でアーシアが出てくんだ?

良く分からないけど……部長はある程度元気になったみたいだな！

と、その時だった。

俺の部屋の床に、またしても、今度は銀色の魔法陣が浮かんだ。

銀色ってことは、俺達の眷属の一員じゃない……？

「……………来たわね」

部長はあれの正体を知っているようだけど……そして少しすると、魔法陣から人が現れた。

「こんなことをして破談に持ち込もうということですか？」

……そこから現れたのは銀髪の髪にメイド服らしき服装の女性。

服越しても分かるそのスタイルに見惚れそうだが、それ以上に――

『相棒、コイツ……………今までの悪魔と違うぞ』

急に出てきたドライグの言う通り、その波動はレベルが違った。

……………この人、上級悪魔か？

『にしても誰かに似てるな、あのメイド』

と、ドライブが俺の緊張を和ませようとそんなことを振ってきた。

『あれだ。弾幕ゲーのメイドさん』

『ああ、あの時を止めるメイドか。だが胸部装甲は雲泥の差が……………』

……………ドライブ、この話題、止めるか。

『そだな。どっかからナイフ飛んできそうだしな……………』

うん、気付いたらあの世なんてゴメンだぜ。

なんか殺気を感じたし……………!

『と言うか、あのメイド……………何処かで見たような』

するとそのメイドさんは俺のことをじっと見つめてきた。

「……………こんな下賤な輩に操を捧げるといふことをすれば、貴女の御兄様や旦那様が悲
しみますよ?」

げ、下賤つすか……………。

なんかひでえ言われようだな……………。

『童貞は罪、つて事だろ』

ああ、そうですか！

結局童貞はキモオタ扱いですか!?

「私の貞操は私の物よ……………！それに、

この子は下賤ではないわ。イツセーは私が暴走しているのに私を宥めてくれた。だから今の私は冷静よ」

部長が俺の名前を言った時、メイドさんは僅かに眼を見開いた。

「イツセー……………」

「グレイファイア？」

「……………どちらにしろお嬢様はまだ学生なのですから、殿方の前で肌をさらすのはおやめください」

だが直ぐに元の澄まし顔に戻すとメイドさんは部長の脱ぎ去った衣服を部長に手渡しすると、部長は少し不機嫌な表情でそれを受け取る。

まあ、メイドさんの言うことにも一理あるわな。

そしてメイドさんは俺の方を見て、頭を下げてきた。

「先程の無礼を謝罪申し上げます。はじめまして、私はグレモリー家に仕えるグレイフィアと申します」

ついさつき俺を下賤呼ばわりした人とは思えないような丁寧なあいさつだな……。

俺は感心していると、部長は既に服を着こんでグレイフィアさんの前に立っている。

「グレイフィア。貴方がここにいるのはお父様のご意思?それともお兄様のご意思かしら?」

「……………全部です」

今の部長とグレイフィアさんの会話から察するに、恐らく部長のお家事情がこの状況の発端になっているんだろうな……。

俺には部長のお家事情は分からない。

でも、多分大丈夫だろう。

少なくとも俺に馬乗りになった時のあの焦りようは感じられないし、冷静っていうのもあながち嘘じゃない。

……するとグレイフィアさんは俺のことをもう一度、見透かすような視線で、ともしれば穴が開く様にじっと見ていた。

「……もしかしてこの方が？」

「ええ。私の下僕にして今代の赤龍帝にしてウイザード……兵藤一誠よ」

するとグレイフィアさんは、まるで納得したような表情になる。

……何か、嬉しそうな感じがするのは気のせいだろう。多分。

「なるほど……私に対しての僅かな警戒はそのためですか」

「どちらにしろ、一度私の根城に戻りましょう。話はそこで聞きましょう。朱乃も同伴でいいかしら？」

かしら？」

「ええ。『王』たる者、傍らに『女王』を置くのは当然でありますから」

グレイフィアさんはそう言って、部屋の床に銀色の魔法陣を展開させる。

部長はその最中、俺の元に近寄ってきた。

「ごめんなさい、イツセー……今日のごことは気にしないで」

「あ、いえ……」

すると部長は俺の顔に唇を近付けて……途端に俺の頬に柔らかい感触が伝わる。

い、今のって……………!!

「今日はこれで許してもらえるかしら?」

き、キスされたあああ!?

「は、はいっ!?!」

俺は突然のことで頷くことしか出来なかった!

そりゃそうだよ!

ほっぺにチューすら初めてなんだぞ!?

「また、部室で会いましょう」

「では兵藤一誠様……………またお会いしましょう」

そう言うのと部長は魔法陣に入って、そしてグレイファイアさんも何だか面白くなさそうな顔で一言言うのと、一緒に部屋から光のように消えていく。

……………アレ?俺グレイファイアさんに何かしたか?

なして名前で呼ばれたんだ?

後何で俺、グレイファイアさんに睨まれたんだ………？
そんな疑問を感じつつ、俺は眠りにつくのだった。

次回、D×Dウィザード

木場「ooooooooフェニックス」

ドライグ『ただの焼き鳥じゃねえか』

グレイファイア「レーティングゲームで、お決めにします」

次回！『焼き鳥、参上！』

ドライグ『やつとチエイサー変身したな』

イツセー「別のチエイスはまだ魔進だけだな」

MAGIC10 『焼き鳥、参上!』

「ふあゝあ……………」

……………よう、皆。イツセーだ。

ん? 何で眠たそうなのかって?

そりや昨日の事がフラツシユバックして寝れなかったんだよ……………!

そんな訳で、深夜に冥界でティアと修行してたんだ。

……………忘れて、とは言われたけど……………あんなインパクトありすぎて忘れられるか
!

『童貞のお前にとつちや良い刺激だろ』

うるせえドライグ!

お前に俺の気持ちがあつたまるか!

『ああ分かんないね。俺非童貞だからなあ! 悔しいでしょうねえ!』

死ね!!

『まあまあ、ティアマツトとの修行でブレスの仕方覚えてラッキーじゃん』
……まあ、そうだけどき。

つい数時間前に、ティアに炎のブレスを習ったお陰で攻撃のバリエーション増えたけどどき。

「大丈夫ですか？ イッセーさん……」

と、そんな眠たげな俺を心配して、アーシアが声を掛けてくれた。

ああ……その声だけで癒される。

「勿論さあーさ、行こーぜアーシアー！」

「はうーま、待つてくださあい！」

ま、気にしても仕方ないもんな。

後で木場にでも聞くとするかな。

「おっすイッセー！」

「おっす」

席につくと、元浜と松田が駆け寄ってきた。

……その目がキラキラしてるのには、嫌な予感しかしないなあ……。

「ムッフッフッ！ イッセー、実は新しいブツが手に入つてな……」

「あー分かったよ。昼休みな」

コレでも一応、木場と同じ扱い受けてんだから辞めてくれよな……マジで。

まあ、コイツらも悪気がある訳でもないしな。

「兵藤眠そうね」

何て眠い頭でぼんやりと考えると、メガネを掛けた女子がこつちにやつて来た。

「んだよ、桐生……その物言いたげな感じは」

コイツは桐生藍華。

眼鏡をかけているからなんかインテリっぽく見える女子……そんなものはまやか
しだ。

コイツは松田と元浜よりも厄介な人物なんだ……!

桐生は掛けている眼鏡で「男性の尊厳」に関わる物を数値化する能力を持つ……ら
しい。

そんな訳で「匠」の別名を持つ。

ある意味じゃスカウターより便利だな……。

『相棒のナニは……普通だな』

大きなお世話だ！

いざつてときに研ぎ澄まされたら良いんだよ!!

桐生は俺の質問にニヤニヤしながら、

「イヤー眠たそうだからね、昨日はアーシアと激しかったのかな〜って」

そんな爆弾をかまして来やがった。

「んな訳ねーだろ。朝っぱらから何いってんだよ?」

「またまた〜隠さなくても良いって」

「だー! 違うってんだろーが!!」

ああ、俺の朝はなんでこう騒がしいのかねえ……………?

因みにアーシアがその質問が気になって桐生に聞くと、顔を赤くして倒れた。

…………取り敢えず桐生にはちやんとお灸を据えた。

「ああ、ここは落ち着くな〜」

昼休み、俺は屋上で昼寝をしていた。

そしてその手には

『夏の思い出　〜プールサイドの情愛〜』

と言う名前前のエロアニメのDVDが握られていた。

内容は……まあ純愛物ね。

俺、レイプ系統は嫌いだから。

『アイツ等、中々良いモノ貸してくれたなあ……早速帰ったら見ようぜ、相棒』

ドライグは少し興奮した声で俺に言ってきた。

因みにドライグも変態だ。俺に負けず劣らずの。

「そーだなく……しっかしスク水は良いなあ」

多分俺の顔は今どうしようもなくにやけてるんだろうな。

『俺はチャプター2の更衣室でのにやんにやんが気になるぜ……!』

にやんにやんって……。

ふ、古いぞドライグ……!

『じゃ、交尾って言えばOKか?』

ストレート過ぎるわ!

もうちよいオブラートに包もう!

って、そういやドライブ。

まだ禁手は使えないのか？

『ああ、すまん。だがお前には最高の状態で使って欲しいんだ。だからもう少し時間をくれないか？』

……………何いってんだよ。

そんなの言われたら、断る訳ないだろ！

『感謝する。……………だが先ずはそっちを見たいんだが……………』

……………やっぱお前も男だな。

しやーねえな。アーシアが風呂入ってる時に見るか。

『おっしやあつ!!』

テンション上がり過ぎい!!

そして時は流れて放課後……………俺は木場とアーシアと共に、オカルト研究部の部室に向かっている。

「なあ木場」

「なんだい、イツセー君？」

「昨日、部長の様子変だったろ？何か知ってるか？」

「部長さん、何か悩みでもあるのでしょうか……？」

すると木場は思案顔になり、

「うーん、確かにそうだったね。でも、僕も良く知らないんだ。朱乃さんなら何か知ってるかも」

そう俺達に答えてくれた。

「朱乃さんが？」

「うん。彼女は部長の懐刀だからね」

「そっか、朱乃さん女王だもんな」

何て話し合っていると、

『……………相棒、部室にお客さんがいるみたいだぞ』

……………ホントだ。

つてかこの気配……………昨日の？

「どうしたんだい、イツセー君？」

部室の扉に着いたとき、黙りになった俺に木場が聞いてきた。

「いや、誰か来てるみたいだからさ」

「……っ、何処から気づいてたんだい？」

「ついさっきだよ」

ドアノブに手を掛けながら、木場は感心した様に呟いた。

「？」

アーシアは事態を飲み込めてないみたいだな。

まあ、直ぐに分かるから大丈夫か。

「……」

「多分敵じゃないと思うぜ」

「え？」

俺は木場の疑問を無視して、木場の代わりに部室の扉を開けた。

……まあ予想通りだわな。

そこには昨日に会ったグレイファイアさんの姿があり、そしてその傍に不機嫌な形相の部長、そしてニコニコ顔だけど、どこか表情が冷たい朱乃さんに、小猫ちゃんに至っては、まるでその場にいたくないって感じで隅っこに座っていた。

………穏やかじゃないな、空気が。

『相棒、コレは……』

うん、エロアニメはまたの機会にお預けだな。

『ウソダドンドコドーン!!』

我慢しろ！俺も見たいけどさ！

っーかお前良くこんな状況でボケれるな！

「全員そろったわね……でも部活を始める前に少し、話があるの」

と、部長が重苦しげに口を開いた。

「お嬢様、私がお話ししましょうか？」

「いいえ、私が説明するわ」

部長はグレイフィアさんの申し出を断ると、席を立つて何かを言おうとした。

「実はね……」

部長が何かを言おうとした時だった。

部室の床の一面に、魔法陣が出現した。

それと共に広がる熱い炎。

「きゃっ!？」

アーシアは驚いたように俺の背中に隠れた。

……………取り敢えず、火傷から守らないとな。

だがそれは見慣れたグレモリ―家の紋章ではなかった。

「……………フェニックス」

俺の傍で木場がそう呟く。

それにしてもフェニックス、か……………。

録な思い出ないなあ。

そんなことを考えてると、その紋章から炎の熱気が部屋の中を包み、そしてその炎の中心に男の姿があった。

ソイツは炎を振り払う様に腕を振るった。
すると炎は消え去りそこにいたのは、

「ふう……久々の人間界だ」

金髪のスーツを着た男だった。

スーツだけどシャツを着崩して着ていて、ボタンを胸が見えるくらいまではだけている状態。

容姿は整ってるけど、ちよい悪ホスト風イケメン……つて奴だな、コイツ。

「やあ、愛しのリアス」

何とそいつは、部長を見ながらそんなことを軽い口調で言う。

……後ナルシスト属性も追加だな。

つーかマジで誰だ、アイツ？

「兵藤一誠様」

するとグレイフィアさんは誰か分からない俺の様子を察知してくれたのか俺の前に来て、話し始める。

「この方は古い家柄であるフェニックス家の三男坊にして将来が有望視されている上級悪魔の一人……ライザー・フェニックス様」

グレイフィアさんは「そして」と付け加える。

「この方はグレモリ―家の次期当主……すなわちリアスお嬢様の婚約者であらせられています」

……………あ？

「この婚約者って事は……部長の旦那さん？」

「はい」

数秒の沈黙、そして

「ええええええええええつ!!!?」

部室内には俺の驚きの叫び声が木霊した。

後ろではアーシア達も驚いている。

つーか木場と小猫ちゃんも知らされてなかったのかよ!

「……………つ!おいおい、リアス。下僕の教育がなっていないんじゃないか?俺を知らないとは……………」

「教える必要がないもの」

部長がきつぱりとそう断言した。

……………何か何時もより辛口だな、部長。

まあ、何はともあれ、一応客人なので朱乃さんはソイツに茶を差し出した。

「いやあ……………リアスの『女王』が淹れてくれたお茶は美味いなく」

「痛み入りますわ……………」

朱乃さんは何時も通りニコニコしてるけど、何故だか何時もの笑顔とは違った。

て言うか、ほぼ演技の微笑みだ。

いつもの朱乃さんの自然体の笑顔ではなく、形式ばった微笑みで朱乃さんの心情が大
体理解できた。

そしてライザーの隣に座る部長は、不機嫌な表情で腕を組んでいる。

時折、ライザーが部長の綺麗な紅髪を触ったり、太ももを撫でてやがるのが目につ
く。

……ああ、殴りたくなってきた。

アイツ本当に貴族なのか、ドライグ？

『多分本当なんだろうが……あれじゃ品性の欠片もないな。リアス・グレモリーの気
持ちも分かるな。あんな焼き鳥坊主より、相棒の方がずっとましだ。リアス・グレモ
リーとは提灯に吊り鐘だぞ』

……それは兎も角、前に戦ったあのフェニックスより強い感じがしない。

でも、曲がりなりにも上級悪魔なんだよな……アイツ。

『確かに強さで言えばファントムのフェニックスの方が強いだろうな』

ドライグも肯定するように呟いたとき、

「いい加減にして頂戴、ライザー！私は前にも言ったはずよ。私はあなたとは結婚しない！私は私の旦那様を自分の意思で決めるって！」

部長はライザーの手を振り払って、そしてソファーから立ってそう言い放つ。

「しかしリアス……先の戦争で純粋な悪魔の72柱の大半は消えた。この縁談はそんな純粋な悪魔を減らさぬよう、俺の父やリアスの父、そしてサーゼクス様の考えの総意なんだよ。それに君のお家事情はそんなことを言えるほど、切羽詰まっていけないものでもないだろう？」

「家は潰さないし、婿養子は迎え入れるわ……。でもそれは私が本気で好きになった人だよ。だからもう一度言うわ。ライザー、私は貴方とは絶対に結婚しない!!」

部長が真剣な瞳でそう言うと、ライザーは部長の目の前に立って睨みつけ舌打ちをする。

すると周りに殺気が放たれた。

………それなりに強いな。

「リアス……俺もフェニックスの看板を背負っているんだよ。名前に泥を塗られるわけにはいかないんだ。俺はお前の眷属全員を燃え殺してでもお前を冥界に連れて帰るぞ」
ライザーの意志に呼応するように、周りに炎が燃え盛った。

アーシアに燃え移ったらどうすんだ、この野郎が……！

「何ほざいてんだおっさん。俺の仲間を焼き尽くす………つて聞こえたんだけどよ」

俺はライザーの殺気を消すように、殺気を放った。

勿論、アーシア達には届かないように。

「……っ。気に入らん、転生悪魔の分際で、この俺に意見するとは」
「だから？」

俺は嘲笑を込めてライザーに返した。

するとライザーは、案の定表情をイラつかせた。

やっぱこう言う相手には挑発が有効だな。

「お前みてえな焼き鳥がぎゃあぎゃあ鳴いた所で怖くもねーんだよ。まだ鶏の方がましだぜ？」

「貴様ア……っ！フェニックスを愚弄するか!？」

「おお、怖い怖いwww」

ちよつと闇マリクに似てたか、ドライグ？

『おう、似てる似てるwww』

「このクソガキイ！」

「そーいやフェニックスつて死なないんだよな……？俺の仲間を殺すつてんなら、俺がお前に教えてやるよ………死ぬ恐怖をな」

まさに一触即発の空気になった時、

「おやめください、兵藤様、ライザー様」

すると俺とライザーの真横にいつの間にかグレイフィアさんの姿があった。

そしてグレイフィアさんの体から漏れる魔力……それは恐ろしいほどに強力なものだった。

「私はサーゼクス様の命によりここにいます故、この場に置いて一切の遠慮はしません」

「……………最強の女王候補と称されたあなたに言われたら俺も止めざるおえないな」

取り敢えずは俺も大人しくする。

するとグレイファイアさんはため息を吐いた。

「……グレモリー家もフェニックス家も当人の意見が食い違うことは初めから気づいていました……です。もしこの場で話が終わらなければということ。最終手段を用意しました」

「最終手段？」

部長はグレイファイアさんにそう質問すると、グレイファイアさんは話し続ける。

「お嬢様が自らの意思を押しとおすのであれば、ならばこの縁談を『レーティングゲーム』でお決めになるのはどうでしょう」

『レーティングゲーム』……確か部長の説明だと、爵位もちの上級悪魔が自分の下僕を戦わせるゲームのことだ。

でも確かそれは成人を迎えた悪魔でしか出来ないはずだけど……だけど非公式なら、OKだとも言ってたな。

すると途端にライザーは得意げな顔をして嘲笑した。

「リアス、俺は既に成人していて、レーティングゲームを幾度も経験している……それに勝ち星も多い……どう考えても、君が勝てるとは思えないけどな」

『確かに、これは圧倒的不利だな』

ドライグはライザーの発言を聞いて、そう呟く。

俺もそれに対し頷く。

すでに何度もゲームを経験しているライザーと、まだ一度もゲームをしていない部長とでは、圧倒的な戦力差がある。

何か出来レースの臭いがするな……これ。

「おい、リアス……もしかしてと思うが、君の眷属はここにいるだけで全部か？」

と、ライザーは俺達を見渡してそう部長に問い掛けた。

「ええ、そうよ」

すると、何が可笑しいのかライザーは大きく笑いだした。

ポーポボみたいな笑い方だな。

「あはは！おいおい、それでこの俺と戦おうと言っているのか？君の下僕では『雷の巫女』と謳われる君の『女王』くらいしか、俺の眷族とまともに対抗できないと思うが……」

それに」

ライザーは朱乃さんの二つ名を呟いた後、某大佐宜しく指を鳴らす。

すると部室の床にまたもやフェニックスの紋章が現れた。

そして部室は再び、炎に包まれて、そしてその炎の中には————15にもなる人影があつた。

「俺の眷属は全部で15名。フルでそろっているわけなんだが……だから君が俺に勝てるとは到底思えないね」

俺はその人影を見る……何とそこには、男の姿はなく、全てが全て、美少女や美女と呼べるような女の子だらけだったのだ！

コイツ、もしかしなくても……

『典型的なハーレム野郎だな、この焼き鳥』

ハーレム完成させてるうー!?

………駄目だ！羨ましいと思うなア！

つーかただの松田と元浜の成功例だよこの焼き鳥は！

「どうだい下僕悪魔君？童貞の君にとつては羨まし———」

「うん、羨ま死ね」

ニツコリと笑ってそう吐き捨ててやったぜ!

「なっ!? 貴様、俺を愚弄するつもりか!？」

「うるせえよ、コサンジ!! ハーレム見せてどや顔か!? 童貞笑って楽しいか!? そんなに自慢したいのか!? てめえが童貞の時にされたらどんな気持ちかも忘れてんのかこの腐れ焼き鳥野郎があああ!!!」

「腐れ焼き鳥野郎だど!? 貴様アアア!! それとコサブロウだ!! 間違えるな!!」

「妙なノリの良さ見せてんじやねーよライザー!」

「コサブロウだっつってんだろうが!!」

え? そこで自分の本名否定かよ!?

「ライザー様、落ち着いてください……」

するとあいつの眷属の一人らしき大きな杖を持った女が、ライザーに近づく。

「ユーベルーナ……。ああ、そうだな。少し落ち着こうか」

すると、ライザーはその女性を抱き寄せるとキスをしやがった!

しかもこんな公衆の面前でデープキス……。

ふざけてんのか、コイツは……！

「お前、部長と結婚するつもりでこの場にいるんじゃないのか？」

俺は怒りを押し殺してそうライザーに問い掛けた。

するとライザーは眷属の口元から唇を離し、そして俺の問いに答えた。

「ああ、愛するぞ？俺のハーレムの一人としてな」

っ……………この野郎は！

コイツは部長を、女を自分の道具の様にしか考えてないっつか…………？

「人間界のことわざで、英雄、色を好むってのがあるだろ？それだよ、それ」

「てめえの何処に英雄要素があるんだ？ただの盛りのついた猿じゃねーか」

俺は遠慮もなしにそう断言し、部長の前に庇う様に立つ。

「お前には部長は不釣合いだ……………！この変態焼き鳥野郎が！」

「ふん……………ミラ、やれ」

ライザーは小さく近くにいた棍棒を持った小柄の女の子に命令する。

その子はこっちに向かってくるが、無視だ無視。

ドライグ、フェニックスをブチのめす方法はないのか？

『有るにはある。1つは魔王級の攻撃を浴びせる事だ。そうすりゃアイツらの再生能力を上回れる』

迫り来る棍棒攻撃をかわして、ドライグの話にのみ耳を傾ける。

「くっ、ちよこまかと……!」

あーうるせえな……。

だけど禁手ぐらいしかなくね?そんなの。

『確かにそうだ。だがもう1つはお前でも簡単だ』

何だそれ?

『あの焼き鳥野郎の精神がへし折れるまでタコ殴り。精神までは不死身ではないからな。ね、簡単でしょう?』

成る程な。

そりゃ、龍化でも出来るわ。

『だろ?……そろそろ相手してやれ、可哀想になってきた』

あー、そういやいたっけな。

めんどくさいなあ……。

『お前の魔力流せば終わるだろ』

それもそうだな。

俺は疲れている女の子の額に人差し指を当て、

「……………弱いね、君」

そう呟き、魔力を少し流し込んだ。

すると暫くして、

「アアアアアアツ!!!」

その子は頭を押さえて苦しみ出した。

うくん、女の子にはあまり使うべきじゃないな、コレ。

「ミラっ!? 貴様、俺の眷属に何をした!?!」

何をした……………って言われてもなあ?

「ただ俺の魔力を流し込んだだけだよ。その子が苦しんでるのは、俺の魔力を追い出そうと体が過剰反応してるだけさ」

「どういう意味だ……………!?!」

「アナファイラキシ―シヨック……………過敏性、ですな?」

グレイフィアさんはそう確認するように粒いた。

「正解です。擬似的な物、ですけどね……………。人の体って良く出来たもんでな、一度毒やウイルスに感染すると、体はその抗体を自動で作り出すんだ。ま、その辺は悪魔も同じだからな。……………少し例え話をするかな、一度スズメバチとかの毒バチに刺されても、大体は毒が強くない限り助かる。そしてさっき言った様に、その人の体にはその毒への抗体が出来るんだ」

「……………」

「でも2度目刺されちゃうと、その抗体が仇になるんだよ」

「ど、どうしてですか?」

アーシアは疑問に思ったのか、俺に質問してきた。

「耐性が出来るのは良いけど、2度目に同じ毒に感染すると、1度目に精製された抗体はその毒を全力で追い出そうと過剰反応をお越しちゃうんだ。そんでまあ、何やかんやあって結局シヨック死……それがアナフィラキシーシヨックだ。人間界じゃ、主にオオスズメバチが有名だな。俺の魔力は、三大勢力の何れにも属さない異質な物でな、俺の師匠は普通の魔力を+の魔力、俺の魔力を-の魔力って呼んでる。そして普段はその子の体には+の魔力が巡回してる。でもその中に違う流れの……の魔力を流し込んだとする……………つまり」

「つまり……………?」

「対象の体に違う魔力を流してその流れを乱す。その結果、+の魔力は-の魔力を追い出して正常な流れに戻そうとして、過剰に反応しちまう。そして対象の体は過剰反応に耐えきれずダメージを受けちまうのさ。ま、暫くすれば回復するよ。あくまで一時的な物だしな」

「貴様、よくもミラを！」

「俺はただ振り掛かる火の粉を払っただけだぜ? ライザーさんよお」
怒るライザーと不適に笑う俺、すると、

「いい加減にしてください、お二人とも」

グレイフィアさんが本気の殺気を放ってきた。

あまりの殺気に寒気がするほど……………っ!

「これ以上、事に及ぶようなら、サーゼクス様の意志の元、貴殿方を肅清します……………!」
「……………分かりました。ならばゲームで決着をつけよう、リアス！」

「ええ。望む所よライザー! そして消し飛ばしてあげる!」
すると部長は俺の前に立って、ライザーと睨みあう。

「……ではゲームはこれから10日後の深夜。それにて全てを決着とします」
グレイフィアさんの言葉で、ライザーは魔法陣を展開させて眷属と共にその中に入る。

「その下級悪魔。10日後だ……その時、貴様をフェニックスの炎で焼き殺してやろう。せいぜい怯えて暮らすが良い」

「へえ、それはこわいなー」

「絶対に殺す………!」

ライザーはそう捨て台詞を言うと、そのまま魔法陣から消える。

10日間……それは俺達に与えられた猶予だ。

まだ未熟な俺達の、準備期間。

だったら!

「部長……俺、結構猪突猛進なんで止まらないけど……それでも、必ず貴女に勝利を与え

ると約束します！」

絶対にー！ー！勝つ!!!

次回、D×Dウィザード

イツセー「大人数の修行は初めてだなあって」

木場「行くよ、イツセー君！」

リアス「せめて、リアス・グレモリーではなく、ただのリアスとして、添い遂げたいの……………」

MAGICIー『修行、始めます！』

イツセー「俺が、部長の希望になります……………！」

MAGIC 11 『修行、始めます!』

おつす!おら悟k……イツセーだ!

この間、リアス部長と焼き鳥野郎改めライザーとの、婚約を懸けた『レーティングゲーム』が10日後に決まったその翌日。

俺達はその日まで自分達を鍛えようということになった。

ちなみに修行場所は人間界のある山奥で、そこにはグレモリー家の別荘があるらしく、更にそこはその場所のほとんどがグレモリー家の所有地らしい。

別荘だけじゃなく土地まで……どんだけ凄いなだ、部長の家は。

取り敢えず、今回の特訓は戦闘に慣れると言う至極シンプルなものだ。

何時も俺がやってるような自分の体を苛め抜くっつー方法はこの短期間じゃ無理だと言うわけで、ドライグが発案したのだ。

んでまあ、今はその別荘まで徒歩で向かってる訳だ。

後は、ファントムが出ないことを祈るしかないよなあ。

『まあプラモンスター達やティアマツトもいるから、大丈夫だろ』

それもそうだな。

いざって時は戻れば良いしな。

「ふう…意外ときついものだね、イツセイ君」

「の割には涼しい顔だな」

明らかに重いであろう大きなリュックサックを持つ木場は、爽やかな汗をかきながらそう言ってきた。

しっかしまあ、汗一つでも絵になるな、イケメンってのは…………。

「いや、騎士はこういう力仕事は苦手なんだ…」

「まあ、お前線細いしな」

ある程度までは電車で向かい、そしてそこから徒歩で基礎体力をつくる鍛錬。

もうかれこれ二時間は経ってる。

ちなみに俺の荷物は小さいけど、何故か部長と朱乃さんとアーシアの荷物まで持たされてるから木場以上の積載だ。

小猫ちゃん? 自分で持つてるよ。

……俺の二倍以上の。

にしても、小学生の時にやったかばん持ちを思い出すなあ。

『そんなに友達いたっけか? 相棒』

失敬な!

ちゃんといたぞ!!

『冗談だ』

まったく…!

それにしても、何で女性ってこんなに荷物が多いのかねえ…?!

まあ、小猫ちゃんとアーシアは少ないけど、それでも俺よりは多いわな。

『女には色々あるのさ。それにお前は一々かばんに詰めなくてもコネクトで取り寄せれるからな』

ふん…。

女心なんて、一生理解できない気がするよ。

『何だ？ 一生を童貞で過ごすのか？』

……そうなるかも。

『おいおい……。流石に童貞の赤龍帝なんてはずいぞ』

だつて相手いないしさあ……。……！

『ほんとお前は……』

？ 何で溜息吐いてんだよ。

『いんや……』

…気になるけど、まあ良いか。

「もうそろそろ到着だからもうひと踏ん張り、頑張りなさい！」

「あらあら、うふふ。男の子の汗を見ると拭いたくなってきましたわあ」

「頑張ってください、皆さん！」

お、もう到着か。

俺は少しへばつてる木場の背中を叩いた。

「うわっ!？」

「ほれ、もう少しだ! 気合入れていこうぜ!」

「げ、元気だね……イツセー君」

「先輩、競争です……」

「上等!」

よし、木場は置いていこう!

「ちよ、ちよつと待つてよ……!」

おお、頑張れば走れんじゃん!

俺達は意気こんで、部長達の元に駆け足で向かうのだった。

因みに途中、小猫ちゃんが転びかけて受け止めた際、手が胸に触れちゃったことは、完全な余談だ。

そして、俺達は合宿を行う別荘の前に着いたのだが――

「ここは10日間、私たちが合宿を行う別荘よ」

「俺の知ってる別荘と違う！これ完全に城ですよ!!」

「大きいです……」

そう突っ込んだ俺の視線の先には、本当に漫画とかに出てくる位、大きな屋敷のような建物があつた。

これが別荘なら、部長の家はどれだけ凄いなだよ!?

なんか小さいログハウスを想像してた俺は間違つてない筈だ……!

しかも周りにプールとかも見えないし、今さらながらグレモリ一家の凄さを身を感じる。

だけど、ドライブは辺りの環境に関心していた。

『こいつは修行にもつてこいの場所だな。結果で部外者は入れない様にしてあるし、人間界にこんな場所があつたとはな』

すげーよな、ほんと。

冥界の山で山籠りしてた自分がなんか馬鹿らしくなってきた……アレ?目にゴミが……。

『ぶっぶっぶ』

馬か!

それは兎も角、部長に案内されて別荘の中に入っていく。

別荘の中は良く掃除されていて、埃一つなかった。

窓とか光ってるしな。

俺と木場は一つの部屋に案内されて、そこで修行できる格好になるように言われて着替えることにした。

つつても、学校のジャージだけどな。

「イツセー君、結構ガツシリしてるね」

「そうか?」

「うん。女の子に人気なのも頷けるよ」

「お前が言うのと嫌味にしかきこえねえよ」

なんて言いながら俺と木場は着替え、そしてそのまま部長が指定した別荘の中庭に向かうのだった。

第一レッスン、木場との剣術特訓。

「はあ！」

「おっと！」

木場が俺へ真正面から正確な剣戟で切り込んでくる！

！
現在、俺と木場は部長に言われるがまま、互いに木刀を持って剣術の訓練をしていた

俺は神器を使うことを禁止されている……理由は神器なしでどこまで戦えるということを理解する、らしい。

「ちいー！」

俺は木場を左横に往なす！

すると木場は、すぐさま横一閃に木刀を放ってきた！

「甘いぜっ！」

「なっ!？」

俺はジャンプして、木場の木刀を踏み台にして、地面に着地した。

木場は一瞬呆気にとられていたが、好機と見たのか俺の背中に向かってきた!

そうはさせないぜ!

「ぬあつ!」

「っ!」

俺は木刀の刃を背中に回し、木場の木刀を受け止めた!

流石に木場はこれに驚きを隠せずにいるが、隙だらけだっ!

「油断大敵!」

「うわ!」

俺はターンして木刀を払い除け、木場の木刀を吹っ飛ばすと、逆手持ちにした木刀を木場の横っ腹に突きつけた!

「…僕の負けだ」

「……俺は剣術からつきしだけどな、お前の動きは教科書通り過ぎるんだ。それだと、太刀筋も読まれちゃうし、フェイントにも引つ掛かる。後、戦いの最中は一々驚くな。戦闘中は何が起こるかわからないんだ。そんな様じゃあつという間に首が飛ぶぜ」

「…今のでからつきしなんだ」

「ほぼ我流だからな。お前のちゃんとした剣術に比べりゃ、俺のはチャンバラだよ」

「後、逆手持ちにもびつくりしたよ」
「だろ？」

第二レッスン、朱乃さんとの魔力訓練

「魔力と言うのは体から溢れるオーラを流れるように集めるのですわ。このようにして……」

と、朱乃さんはある程度の説明を済ませると、小さい魔力の光球を作り出した。

「ふわぁ……！」

「では、やってみて下さいな」

木場との訓練を終えた俺は、アジアと共に朱乃さんに魔力の訓練をしてもらっている。
る。

アジアは朱乃さんの説明を熱心に聞いていた。

まあ、魔力の制御は手に入れてから死に物狂いで練習したけどな。

「あらあら、イツセイ君……中々上手ですわ。だけど、やはり禍々しいですわ……」

「な、何ででしょうね?」

…言える訳ないよな。俺の魔力の源がファントム、だなんて。

ファントムが持つ魔力はゲートの絶望などと言った負の感情が混ざり合ってる物らしいから、こんな禍々しいんだと。(ドライグ談)

すると横にいるアーシアの手元には小さな緑の魔力を集中したものを出している!

「あらあら、うふふ。アーシアちゃんは魔力の才能があるかもしれませんね」

「すげーよアーシア!俺の時より飲み込み早いよ!」

「ほ、本当ですか?嬉しいです」

ああ、照れてるアーシアも可愛いなあ!

こうして、俺とアーシアは魔力の基礎を学んだのだった。

第三レッスン、小猫ちゃんとの組み手

「えい……！」

「おっと！」

朱乃さんのレッスンを終え、俺は小猫ちゃんとの組み手に興じていた。

アーシアは朱乃さんと一緒に神器の回復の波動を飛ばす練習中だ。

小猫ちゃんの重いパンチを受け止め、鋭いキックも足でガードするけど……重いなっ

！

やっぱり、「戦車」の力は凄まじい！

「当たって、下さい！」

「だが、断るっ！」

確かに力強い————だけど木場と同じように単純だし、それに木場と違い目で追える速度の攻撃だから、かわせないわけがない！

それに、俺もただで受け止めたらダメージはあるが……魔力でその部分を覆えば、威力を殺せる。

だからこそ、こうして受け止められるわけだ。

「今度は、こっつちからだ！」

「っ！」

俺は小猫ちゃんの目でギリギリ追える程度のスピードで掌低を放つ!

寸止めはしているが案の定、小猫ちゃんはガードが少し遅れてしまった。

「……今のを受けてたら、内臓にダメージが行き渡ってたよ」

「……参りました」

小猫ちゃんはペタンと座り、そう呟いた。

俺も同じ様に座って、小猫ちゃんに自分が感じた事を伝えた。

「小猫ちゃんは敵に攻撃するとき、何処を狙う?」

「……?」

「小猫ちゃんの攻撃を一通り見たけどね、君は取り敢えず殴ってる。そんな感じだった。

でもホントは違うんだ」

「じゃあ、イツセー先輩は何処を攻撃してるんですか?」

「中心線さ」

「中心、線……」

小猫ちゃんは鸚鵡返しに呟いた。

「そう。打撃は中心線を狙って、的確に挟り込む様に打つ!……そうすれば、力も分散せ

ずに、相手の一点に伝わるんだ」

「成る程……」

ま、全部ドライブから教わったんだけどね。

「今のを踏まえて、もう一回やろうか」

「はい……！」

そうすると、小猫ちゃんはさつきと違って力を集中させ、俺の中心線を狙うようになってきた！

「良いよ！その調子だ！」

「絶対に、一本は取りますっ！」

そうして、時間はあっという間に過ぎ、気づけば夜になっていた。

「美味しいわ、イツセー」

「マジですか!?!良かったー……」

そして夜、俺達は晩御飯を食べていた。

メニューは合宿の定番、カレーライスだ。

「料理も出来るんだね、イツセー君」

「上手ですわ、イツセー君」

「意外…」

「美味しいです〜!」

イヤー、気に入ってもらえて良かった…。

何せ、料理は殆どアジアが作ってるからなあ。

「…ドライグ、今日の特訓を見てどう思ったか、正直に言ってくれるかしら?」

『総合力なら、相棒が一番だな』

…確かに。

各分野でなら、剣術、体術、魔力の扱い、それだけなら劣るだろう。

『一分野で勝ったとしても、全体の平均値の合計は相棒がダントツだ。勿論、お前らに非がある訳ではない』

「…確かに。勢いだらけだけど、力量なら普通に押されてたよ」

「…あの修行中に先輩に手傷を負わせたのは一度だけでした」

「魔力の総合戦なら、間違いなくイツセー君に分がありますわ」

「魔力の扱いが上手でした!」

皆は俺と一緒に修行したことに対する感想をそれぞれ言う。

確かにそうだったな。

「とにかく、イツセーは眷属の中では頭一つ飛びぬけているわ。戦闘センスはもちろん、自分を追い込めるほどの覚悟と根性、そして神器を使った戦術……正直、イツセーは『王』が一番、向いていると思うわ」

「……そんなことないですよ」

『ああ。それに相棒も元から強かった訳ではない』

ドライグの言葉に全員が耳を傾けた。

『相棒のこの強さは、全て努力によって裏付された物。お前達と違って、相棒は最初、何の才能も、そして魔力も持っていないかった。それに比べれば、お前達は恵まれた方さ。後は、残りの特訓しただい』

「——強いといっても、胡坐を掻いてたら、直ぐに錆びます。だから、みんなより強い分、俺に出来る事があるならなんでもしますよ！打倒ライザーに向けて！」

……そうだ、今はこれを胸に動けば良い。

10日なんて、あつという間だからな。

「それもそうね、ならまずはお風呂にでも入って今日の体の汚れでも落としましょうか」

部長は話題を転換してくれた。

すると、何故か俺の方を見ながら、部長が悪そうな顔をしている……何か嫌な予感が。「イツセー、一緒にはいる?ここは露天風呂だから、それに日本には裸のお付き合いつて言葉があるのでしょうか?」

はい、的中うううう!!!

「何処で聞いたんですか日本の悪しき風習を!そ、そもそも男女で一緒のお風呂なんか皆、嫌に決まってるでしよう!」

「…だそうだけど、皆はどう?」

どうって!

もう入る前提っすか!?

「わ、私は大丈夫です／＼／!」

アーシア、嬉しいけど少しは嫌がって!

お兄さん嬉しいけど複雑だよ!

「あらあら、でしたらイツセー君のお背中を流させてもらいますわ」

朱乃さんも乗らないで!

目が本気と書いてマジだこのお姉様!

「……タオルを巻いてだったら、別に構わないです：／／／」
小猫ちゃん、君もか!!

それはそれで俺のリビドーが暴走するよ！タオル越しが一番やばいんだよ！

ええい、こうなったら!!

「木場！男二人でどっぷり浸かるぞ!!」

「ちよ、ちよっと!」

木場の首根っこを引っつかんで俺は風呂場に向かった！

あんな空気に耐えられるか!!

『へタレ』

ほっとけ!!!

うああ……………!

たすけてえ……………!

嫌だ、もう……………!

———また、この地獄だ。

俺はとある海岸沿いの崖にいた。

そこには俺以外にたくさんの人が———いた。

だが、紫の輝が入ったかと思うと、その人達は、ファントムへと変貌していた。

今、今助ける…っ!

だから、絶望に負けるな!!!

『お前はまだ足掻くのか?』

うるせえ…

『誰からも本心から賞賛されない、日の光が当たることもない。そんな戦いに意味などあるのか?』

黙れ………!

『結局、お前は誰も救えない。誰も、守れないまま…朽ちていく』

ダメレエエエエ

!!!!!!!

「ハッ!?!」

俺は寝汗とともに目を覚ました。

……また、あの夢かつ。

『相棒……』

……なあドライブ。

やっぱり、忘れられないわ。俺。

後悔してても、前に進めないのにさ……!

『あの地獄を、簡単には忘れられんさ』

……かもな。

水でも、飲もう……。

キッチンで水を飲んだ俺は、そのままテラスに向かった。

何だか、眠れる気分じゃなかったんだ……。

すると俺は部長を発見した。

部長はテラスの方のベンチで座りながら本を読んでいるようだった。

俺は部長の元に近寄っていくと、部長は俺のことに気がついたのか、本を閉じて出迎

えてくれた。

「あら、イツセーまだ起きていたの？」

「部長？」

部長は眼鏡をかけて、寝巻らしき赤いネグリジエを着ており、幾つも重ねられている本を横にして椅子に座っている。

「あ、これのことかしら？」

すると部長は俺の視線に気がついたのか、眼鏡を指差して説明してくれた。

「何かに集中したい時にこれを掛けると集中できるの…単なる願掛けね。人間界にいるのが長いから、人間の風習になれたのかしら」

部長は苦笑いをしながらそう言うと、俺の視線は部長の手元の本に行く。

レーティングゲームに関しての資料…？

「部長、これは…」

「正直、こんなものを読んでも気休めにしかならないんだけどね…」

部長は本のカバーを指でなぞりながら、自信なさげにそう呟く。

「部長は、ゲームに勝つ自信がないんですか?」

「……………正直、勝てるかどうかと言われれば、難しいわね」

……らしくもない、弱々しい声だった。

部長のいつもの威風堂々としたものじゃない——もっと不安で、そんな気持ちに押し負けそうな声だ。

「普通の悪魔なら、資料を呼んである程度は対策を練れるかも知れない。でも相手はフェニックス…そう、不死鳥なのよ」

「死なない、鳥…」

「ええ。あなたも知っている通り、不死鳥とは聖獣として有名だわ。どんな傷でもその涙は癒し、殺しても死なない永遠の鳥、不死鳥…そしてその能力と悪魔のフェニックス家は同じ力を有している」

部長は本の一冊を積み上げられている本の上に更に重ねる。

「つまりライザーは死なないのよ。攻撃してもすぐ再生する。彼のレーティングゲームの戦績は10戦2敗…その2敗は懇意にしている家への配慮だから実質無敗。既に公式でタイトルを取る候補として挙げられているわ」

「不死鳥の王。そんなの反則級に無敵ですね」

「ええ。正にその通りよ。フェニックス家はレーティングゲームが始まって一番、悪魔の中で台頭してきた一族：」「死なないから、負けない：単純だけど、分かり易い強さですな」

俺は嘆息する。

たとえ、あいつに力がなくても不死鳥の性質からあいつは負けることがない。

そんな相手に、まだ学生の部長にこの賭けをしろって言うのはやっぱりあまりにも仕組まれているな。

初めから部長が婚約を嫌がるのは分かっていて、それで最後は勝てるはずのないレーティングゲームで決めさせる。

これじゃあ：

「ハメ手——チェスで言うスウィンドルね。初めからライザーが勝つように仕組まれている」

…やっぱりな。

それでも部長は、戦おうとしている。

何でだ？

負けることが分かっているなんて、そんなのは言い訳だ。

でも部長はそんな勝負でも諦めようとしなない。

「部長は、どうしてこの縁談を破棄したいんですか？ 焼き鳥野郎の問題はともかくとして……」

自由じゃない恋愛なんてしたくはないなんてことは分かっている。

ライザーの性質を垣間見て、あんな野郎とくつつこうなんて気持ち、普通は持つなんてありえない。

だけど悪魔の発展的な意味だけで言えば、フェニックスとグレモリーの婚姻は間違っ
てはいない……はずだ。

互いに強力な力を持つ家系、その二つの家から生まれる新たな命のポテンシャルは計
り知れない。

そして、その命は、悪魔の未来の為に……重要な礎。

だけど部長は自分の意志を通す。

例え仕込まれた勝てない戦いだろうと。

「私はリアス・グレモリー——でもね、誰も私を“リアス”とは見てくれないの……」
……部長は淡々と話し始めた

「どこまで行つても、どこに言つても私は“グレモリー”としてみられるわ。名家のご令嬢、グレモリー家の次期当主。もちろん、自分がグレモリーということは誇りよ。でも、せめて自分を愛してくれる人には、“リアス”と見られたい………接してほしい。それだけよ」

「……」

何が、何がらしくないだ……。

俺は数分前の自分を殴りたくなつた。

部長はただ、誰よりも当たり前前の幸せを望んでいるだけなんだ。

一人の女の子として、好きな人に愛されたい、好きな人を愛したい、恋したい。

家とかそんなもの関係なく、年相応の恋をして、結婚したい。

こうして、自分の胸の内を語ってくれた部長を見捨てたら、俺は男じゃない！

「俺には部長のお家事情も、悪魔の事情もあまり良く分かんないです。でも、俺にとつて、部長は部長です！俺は部長の事、部長として好きです！」

「イツセー……」

部長は目尻に涙を溜めて、俺を見詰めてくる。

……そうだよ。部長に、女の子に涙なんて似合わない！

「だから、そんな悲しそうに泣かないで下さい。……それでも、涙が零れるなら、俺がその涙を宝石に変えます！部長を笑顔にします！こんな事言っても、何の励ましにもならないですけど、俺が貴女の最後の希望になります……！俺が貴女を守ります！」

何時もならこんな歯が浮く様な台詞は言わないけど、何故かこの時はすらすらと言えたんだ。

それを聞いてくれた部長は笑顔になった。

「イツセーがアジアに好かれる理由、分かった気がするわ……そんなこと、真正面から言われたら……」

部長はそう言うのと、本を持ってその場に立ち上がる。

「イツセー…ありがとう。貴方の言葉で、私は戦えるわ。…もし、私が絶望しそうになつたら、その時は——」

「必ず助けます。それが、俺の使命ですから!」

「…おやすみなさい、イツセー」

「はい」

そして部長はその場から居なくなる。

部長は最後に笑顔を見せてくれた…。

俺に出来るのは、あの笑顔を守ること。

『ドライブ、久々に龍化——やるわ』

『あい分かった!』

次回D×Dウイザード

イツセー「ショータイムだ!」

木場 「これが、赤龍帝の力…!!」

ドライグ 『準備は万端だ、相棒!』

MAGIC12 『俺達、戦います!』

イツセー 「さあ、お楽しみはこれからだあ…!!」

MAGIC 12 『俺達、戦います！前編』

ライザー戦に向けた特訓から10日が経った。

俺達は自分に来る最大限の事をし尽くした。

でも強くなったのは俺だけじゃない。

小猫ちゃんの木場は戦いに少しは慣れた様子で、これなら心配は無用だろうと言えるくらいに強くなっているはずで、アーシアも朱乃さんとの特訓で神器による回復の速度が著しく上がったはずだ。

幸いにも特訓中にファントムは出て来る事はなかった。

そして今、家に戻ってきた俺は瞑想をしていた。

レーティングゲームは今日の夜、外はまだ夕暮れ時だ。

瞑想は俺が落ち着く時にやってることだ。

ドライブに勧められてやり始めたけどこれが中々良いんだよなあ。

『結局、禁手は間に合わなかったな』

『すまん、相棒…』

ドライグが申し訳なきように謝ってくるけど、大して気にはいなかった。

『良いって。その為の龍化だろ?』

『相棒……頭まで変化させるなよ』

わーってるよ。

……つと、誰が入ってきたな。

まあ、オーラで分かるけどな。

「アーシアか?」

「目を瞑ってるのに分かるんですか?」

「こうしてるとな、何時もより五感が研ぎ澄まされるんだ。後は……雰囲気だな。で、どうしたんだ?」

俺は瞑想を中断してアーシアと向かい合った。

目を開けると、そこにはシスター服を着たアーシアがいた。

「それ……」

「はい。部長さんが一番、落ち着ける服を着てきなさいと言われたもので……やっぱり悪魔が修道服なんて、変、ですよね?」

「いや、良いと思うよ。少なくとも、俺は似合ってると思う」

これは事実だ。

初見じゃ絶対悪魔だとは気づかれない位に似合ってる。

すると、アーシアは嬉しそうに微笑んだ。

だけど、その体は少し震えていた。

「……怖いのか？」

俺がそう尋ねると、アーシアは少ししてから頷いた。

「……はい。こういうの、初めてで、それに部長さんの未来がかかっていると思うと……」

「しょうがないさ。それが普通の反応だよ」

「少し……くつついても良いですか？」

「……ああ」

そう言うのと、アーシアは俺の隣に座り、腕に抱きついてきた。

「イツセーさんは、怖くないんですか？」

「……怖がってたら、皆不安になっちゃうだろう？だから、俺は大丈夫さ。こう見えてプ

レツシャーには強いぜ？俺」

「……ふふっ。イツセーさんといると、安心します。だから、部長さんの希望に……なっ

あげて下さい」

「…勿論だ」

すると、突然部屋の扉が開かれた。

「ティア……」

「イツセー、勝てよ。あんな女を自分の道具のようにしか考えてない奴、殲滅してやれ」
「物騒だな、オイ」

まあ、やる以上は手加減なんて出来ないけどな。

『殲滅の、タキオンスパイラルツ!!!』

お前銀河眼じゃねーだろ！

「後、アーシアも守ってやれよ」

「当たり前だろ？」

「…頑張つてな／＼／」

…うゝむ、なんか最後が乙女チックだったのは気のせいかな？

『もうシラネ』

何だその諦めは!?

なんて一幕があつたが、俺達は暫く時間まで駄弁りあつた。

レーティングゲームの開始時間が近づいた頃、俺とアジアを含めたグレモリー眷族の皆はオカルト研究部の部室に集まっていた。

小猫ちゃんは拳に皮のオープンフィンガーグローブを付けて、木場は静かに本を読んでおり、部長と朱乃さんはさすがと言ったほど落ち着いていて、アジアは俺が傍にいるからか、比較的落ち着いていた。

うん、皆いい感じに落ち着いてるな。

ほんじゃまあ、俺も……

『ま、お前らしいな』

そう、プレーンシュガーを食べることだ。

うん、久しぶりに食ったからか凄く美味しく感じるな。

「先輩、私にも一口……」

「へ？これしかないんだけど、良いかい？」

「問題ないです……」

「じゃあ、全部やるよ」

そう言つてドーナツの袋ごと渡すと、小猫ちゃんは驚いた顔をしていた。

「良いんですか……？」

「ああ。俺は一口食べたからね」

「このお礼は。必ず返します……」

律儀だなあ。

今度、店教えてやるかな。

「……皆様、準備はお済になりましたか？」

……すると試合開始の10分ほど前に銀色の魔法陣が展開され、その中からグレイ
ファイアさんが現れた。

「この10日で随分と変わられましたね。お嬢様、私の立場的に言いにくいのですが

……頑張ってください」

「勿論よ。最善はつくさせて貰うわ」

そう言うのとグレイフィアさんは部長から視線を外し、今度は俺の方に視線を合わせてきた。

「兵藤一誠様」

「い、イツセーでいいつすよ」

「……ではイツセー様。この様な立場ですが、リアスお嬢様をお願いします」

……さっきの応援でも感じてたけど、この人は部長を妹みたいに思ってる。

じゃなきゃ頑張ってくださいとか言わないし。

「……任せてください!」

そんな事を言われたら、こう答えるしかないよな? ドライグ…

『誰も同じじゃない、それこそが生きてる意味だから……え? わりい、聞いてなかったわ。ゴメン!』

何で歌ってんだよ!?

暢気だなお前!

「では皆様、この魔法陣の中にお入りください」

グレイファイアさんは部室の真ん中に魔法陣を展開させる。

そして全員が魔法陣の中に入ると、次の瞬間、魔法陣が光を出し始める。

「これにより皆様を戦闘フィールドにご案内します。それでは、ご武運を祈ります……」

そして次の瞬間、俺達は光に包まれながら転移していった。

目を開けると、そこは何の変哲もない今までいたはずの部室だった。

アレ？ 転移してないじゃん。

『皆様、この度、フェニックス家とグレモリー家の試合に置いて、審判役を任せられました。グレモリー家の使用人、グレイファイアと申します』

するとアナウンスのような音声で、どこからかグレイファイアさんの声が聞こえた。

『この度のレーティングゲームの会場として、リアス・グレモリー様方の通う、駒王学園の校舎を元にしたレプリカを異空間に用意させていただきました』

い、異空間に学校のレプリカア!?

豪勢っつーか、悪魔の技術力がスゲエっつーか…。

『相棒、窓の外を見てみる』

え?窓の外?

ドライグに言われて見てみると、空はなんつか……紫?に覆われていた。

『両者、転移された場所が本陣でございます。リアス様は旧校舎、オカルト研究部部室、ライザー様は新校舎の生徒会室でございます。『兵士』は互いの敵地に足を踏み込めた瞬間、昇格を可能とします』

ほう、中々分かりやすいな。

新校舎に入ればもう昇格可能って訳だ。

「全員、耳に通信機をつけなさい」

「通信機?そのことっすか?」

部長の言葉に俺は少し首を傾げる……ってというか通信機つてもしかして、この光の球のことか?

俺は部長の周りで浮遊するいくつかの球体を見ながらそう思った。

「通信機と言っても、魔力を介した物よ。この光を耳に入れば、仲間間で会話ができるわ」

へえ、すげえな。

そう部長が説明してくれると、俺は部長に言われるがまま、光を耳に入れる。

「…準備は完了だよ」

部長は席を立ち上がる。

それと同時に校内にグレイフィアさんの声が響いた。

『それでは0時になりました。開始の時間となります。制限時間は人間界の夜明けまで。ゲームスタートです』

……そして校内に鐘の音が鳴り響く。

それはまるでゲームの開始時間と暗に告げているようだった。

「さあ、始めましょうか……とその前にイッセー、こっちに」

「へ？」

朱乃さんと小猫ちゃん、木場が準備の為に出たので、いよいよ俺も出陣か？と思っ
ていると、部長は俺を自分の太ももの所に指差して、多分寝なさいと言ってくる。

——なんで?!

俺がそう尋ねようとした時、部長はそれを見越して話しを続けた。

「この戦いは貴方が要なの。だからイッサーには体を休めて貰わないと…」

「はあ………」

言われるがままに、俺は部長の太ももに頭を乗つけた。

ああ、不謹慎だけど寝ちまいそうだ……。

「むう〜」

アーシア、怒らないで。

予想はしてたけどもさ!

部長はクスクスと笑うと、俺の頭を優しく撫でてくる。

——すると、俺の中で何か外れた気がした。

「ぶ、部長、これって……!」

「…貴方を悪魔に転生させる際にね、貴方の力はあまりにも大きすぎたの。だから私はたかだか人間がそんな力を持って転生したら、体が持たないと判断し、貴方の力をいくつかに分けるようにして封印したのよ…杞憂だったけどね」

…つまり、部長は俺の中に存在する封印を解いたってことか？

だから俺は力が溢れている。

……めっちゃ動きたい！

「あなたが悪魔に転生出来たのは今さらながら奇跡でしょうね。変異の駒を4つも使ってじゃないと転生できない30個分の『兵士』…最強の『兵士』よ、イツセーは」

最強の『兵士』、か・・・良い響きじゃん！

『部長、僕と小猫ちゃんの準備、整いました』

『こちらですわ、部長』

木場と朱乃さんの声が通信機から聞こえる。

ならとうとう俺の出番か。

「朱乃は旧校舎の屋根で待機、祐斗は相手の『兵士』を森で警戒しながら待機しておいて…そして小猫はイツセーと合流、そして体育館に向かいなさい」

その言葉で俺達は同時に了承する。

「さあ…グレモリー眷属を怒らせたらどうなるか、フェニックスに分からせてあげましょう!」

それは宣戦布告としてはありがたいほど、意気の入った声だった。

さあ、ショータイムだ!

俺は体育館付近で小猫ちゃんと同流し、そのまま裏口から体育館に入る。

俺達は舞台袖で相手がいるかどうか窺った。

まあ、気配で分かるけどな。

「小猫ちゃん、敵さんのお出ました。どうせ隠れてても意味ないからな」

「潔いですね…イツセー先輩」

「…今、あんまりじつと出来ないだけさ。何なら俺一人でも良いけど?」

「…行きます」

「良いね。その思い切りの良さ、好きだぜ」

「ツ!へ、変なこと言わないでください!／／／」

おろろ？ 恥ずかしかつたかな？

まあ、俺も何でこんなこと言っちゃまったのかねえ？

そう思いつつ、俺達は舞台の真中に立つと、すでに体育館の中心にはライザーの眷族の数人がいた。

チャイナドレスの女の子、ブルマ姿の双子の女の子、そしてライザーの命で俺を襲って返り討ちにした棍棒を持ったミラっていう女の子だ。

「こんにちわ、グレモリー眷族の下僕さん……つとあなたでしたか。あのライザー様に喧嘩を売った魔法使いさん」

「俺売られた側なんだけどなあ。つと、俺は兵藤一誠だ。リアス部長の下僕にして唯一の『兵士』だ……。そう言えば、この前はゴメンな？ミラちゃん」

「あ、ハイ……」

オイオイ、ポケーツとしてるけど大丈夫か？……イテツ!?

「な、何小猫ちゃん?!俺なんかした!?!」

「なんかムカつきました……」

「理不尽な!!」

『やーいやーいー!』

お前は黙ってる!

小学生見てーな煽りすんな!

「私はライザー様に使える『戦車』、シユエランよ」

「『兵士』のイルでーす!」「ネルでーす!」

双子の女の子とチャイナドレスの女の子がそう言つて自己紹介してくる。

うむ、可愛いな。

「この前の雪辱…は、晴らします!」

なんか顔赤いけど大丈夫か?

風邪の相手に勝つても微妙なんだけどな。

まあ良いか!

「小猫ちゃん、俺達のデビュー戦だ。気張ろうぜ!———いいか、ライザーの下僕!ここからは、俺達グレモリーのショータイムだ!!」

「……はい!」

そして俺と小猫ちゃんは相手の方に向かって舞台から飛び降りて、そのまま向かって行った！

《Boost!》

先ずは一段階強化！

赤龍帝の籠手を展開して同じ『兵士』の双子ちゃんに向かうが――

「バツラバラ、バツラバラ♪」

『「……………え？」』

俺とドライブは同時に変な声を上げてとまっちまった。

何でかって？

目の前の女の子がチェンソーを取り出してきたからだ。

ボーっとしてる俺に向かって双子ちゃんはチェンソーを振り回して……コツチキ

タアアアア!!!?

「なんつー物振り回してんだよ!?!ギャップ萌えってレベルじゃねえー!!」

ヤベツ、可愛い容姿と相まって何かこええ!

俺と小猫ちゃんはライザーの『戦車』一人と、『兵士』3人と対峙している。

正直、俺一人でも良かったんだけど、どうしても小猫ちゃんは相手の『戦車』と戦いたかったみたいだ。

たぶん自分の修行の成果を試したいんだろうな。

だから俺は『兵士』3人と対峙しているわけだけども……

「きやはは!お兄さん、カッコいいからバラバラしがいいがあるよ!」

「バラバラにしてあげる!!」

「ありがとよっ!でもチェーンソーも直してくれたらもっと嬉しいかな!」

俺は双子ちゃんが振り回すチェーンソーとミラちゃんの棍棒をかわしつつ、指輪をつけて魔法を放つ!

《ライト・プリーズ》

「太陽拳ツ!」

「きやあああ!!」

「目が!目があああ!!」

「くうっ!?!」

ノリ良いなオイ!?

……だけど隙だらけだっ!

既に五段階まで強化されていた力を解き放つ!

《Explosion!》

「龍牙雷光ツ!!」

こいつ等相手にはこれだけの開放で十分だ!

喰らえ!獅子……もとい龍の牙を!!

「「きやあああああつ?!?!」」

高速拳で縦横無尽に殴りつける!!

3人は何とか立ち上がるも既に満身創痕だった。

「な、何今の…!」

「昇格してないはず……!」

「今の……上級悪魔クラス!」

なるほど、今の俺は上級悪魔クラスの魔力なのか。

それは良いことを聞いたな。

つつても、まだ5段階だからもっといけるんだけど。

『今のお前と奴等の実力は雲泥の差だ。一気にやっちまえ、相棒』

まあ、それも良いけど……体力は温存しときたいしな。

それに、彼女達も強いぜ? ドライグ。

「まだまだ、ですつ……!」

「こっからが、本番……!」

「ライザー様の、為に!」

……あんな野郎でも慕われるんだな。

—— 良いぜ、だったら!

「君達の心意気、好きだぜ! 全力で倒すだけの価値が、あるっ!!」

俺は一気に3人と距離を詰めた!

「イル、ネル! こうなったら相打ちでもこの人を倒します! この人は危険です!」

いい発想だ、感動的だな、だが無意味だっ!!

3人が纏めて得物を振り翳していくが——

《リキッド・プリーズ》

俺は予め嵌めておいた指輪を翳して、体を液状化させた。
そのお陰で、3人の攻撃は空振りに終わった！

「えっ！」

「何!?!」

「体が、水に…!?!」

俺は怒りの王子、バイオ！ライダーツ！なんてな！

さて、小猫ちゃんもそろそろ決めそうだから、終わらせますか！

「えい……!」

「ぐあっ!!」

「おらあ!!」

「「ぐああ!!」「」」

小猫ちゃんが敵の『戦車』をアッパーでぶっ飛ばし、俺も液状化を解いて彼女達を殴り飛ばした！

「ふい、やるね小猫ちゃん」

「いいい……」

無言のピースサインが何か怖い……つと。

「じゃあ、行こうか？」

「はい……」

俺達は後ろを振り向かず、体育館を後にした!

『イツセー、小猫。体育館から離れたようね、さすがだわ』

——次の瞬間、今までそこにあつた体育館が激しい落雷によつて消し飛んだ!!

「——テイク」

その言葉と共に、体育館の上空にいる巫女服姿の朱乃さんの姿があつた。

『ライザー様の『兵士』3名、『戦車』1名、リタイア』

同時に今まであそこにいた4人がリタイアしたことを知らせる、グレイファイアさんのアナウンスが入った。

さつすが朱乃さん!

「凄いですね、朱乃先輩……」

「な」

《Reset》

そう呟くと、倍増がリセットされた。

『良くやったわ、イツセー、小猫。なら次は祐斗と合流なんだけど…』
「今すぐ向かいます」

部長との通信を終え、俺は小猫ちゃんに向き直る。

「つし。小猫ちゃん、行こうか？」

「はい」

と呟くと、俺達は光に包まれた。

「ふふふ……まさか攻撃されるとは思っていなかった？ 狩りを終えて油断した獲物は一番狩りやすい……基本よ」

「……確かに基本だな。タイミングも完璧だったし、だけどやるなら殺気を抑えないと駄目だぜ？」

「!!?」

……俺の声に随分とライザーの『女王』は驚いているようだった。

それはそうだよな——確実に不意を突き、事前から用意していた術を全力で放つて、しかも直撃したことを確信したのにも関わらず、なんともない声が聞こえたんだからな。

俺は拳を振るい、爆炎による煙を振り払って空に浮かぶ敵を見る。

今のは簡単にこいつの攻撃する気配を察知して、魔法で防御しただけ。

多分狙いは…小猫ちゃんだろうな。

ま、一步タイミングが遅れたら不味かったけどな。

「殺気の抑え方習った方が良いぜ? オバサン?」

「小僧……殺すっ!!」

おお、良いね。俺の安い挑発に乗ってくれるなんてさ。

ってか怒るって事は自覚あんじゃね?

「大丈夫? 小猫ちゃん」

「はい、あるがとうございます……」

「良いって事よ」

とは言え、こっからどうすつかな……?

「イツセー君、小猫ちゃん……先を急ぎなさい」

「朱乃さん！」

そう思っていると、ちょうどあの『女王』と相對するように上空から下りてくる、朱乃さんの姿があつた。

「心配はご無用ですわ。私の大切な後輩に不意打ちで傷つけようとする不屈き者。オカルト研究部副部長として…倒しますわ」

朱乃さんは目を開くと、その魔力が跳ね上がった！

「分かりました！でも、気をつけてください！」

それだけ伝えると、俺と小猫ちゃんは木場の元に向かつていった。

『ライザー様の『兵士』3名、リタイア』

すると更に三名がリタイアしたというアナウンスが入った。

兵士三人…。。なるほど、木場のやつか！

「これで半分近くのあいつの駒を殲滅出来た…あとは！」

俺と小猫ちゃんは運動場付近に到着すると、俺はすぐそばに木場がいることに気がつく。

そして俺は腕を引かれた。

「やあ、イツセー君、小猫ちゃん。無事でよかったよ」

そして腕を引いた張本人は涼しい顔で無傷でいた木場だった。

「元気そうだな、木場」

「まあね」

お互いに軽口を叩き合う。

「さて、これからどうする?」

「次の敵は小猫ちゃんとは相性の悪い騎士や僧侶だらけだ……ここは」

「小猫ちゃんを待機させる……か?」

そう言うと、木場は静かに頷いた。

それを聞いていた小猫ちゃんは苦い顔だった。

「ですが……」

「小猫ちゃん、君の気持ちも分かるよ。だけど、俺達に負けることは許されない。何より

駒の数じゃ俺達は圧倒的に不利なんだ」

俺が諭す様に言うと、小猫ちゃんは小さく頷いた。

「ごめんよ、小猫ちゃん。俺と木場がピンチになったら、その時は……助太刀してくれるか?」

「…分かりました」

小猫ちゃんが頷くのを見て、俺と木場は静かに立ち上がった。

「さて…、そろそろ隠れてこそこそやるのが面倒なんだよなあ」

「同感だね。僕も面倒なのは嫌になってきたところだよ」

そう言うと、俺達はどちらともなく笑った。

考えることは一緒か…なら！

「オカルト研究部の男子コンビで、あいつらの目が飛び出るくらい驚かしてやろうぜ！
んで見せつけるんだ——俺たちの底力を」

「当然だよ！僕たちは舐められて終われないからね」

そして俺と木場は拳を殴り合わせ、そして用具倉庫から飛び出る。

「出てこい！ライザーの眷属共！俺達は逃げも隠れもしねえ!!」

俺は運動場に出て叫ぶようにそう言い放ち、そして籠手を出現させる。

《Boost!!》

……お出ましたな。

「堂々と真正面から現れるなど、正気の沙汰とは思えんな——だが!」

……運動場から霧が現れたと思うと、そこから甲冑姿のライザーの下僕が現れる。

「私はお前らのような馬鹿が大好きだ!」

「……」

……多分、こいつも相当の馬鹿なんだな。

とにかく、あいつは恐らくは『騎士』……剣を帯剣しているくらいだしな。

「私はライザー様に使える『騎士』、カーラマインだ。さあ、グレモリーのナイトよ、名乗れ!」

「僕はグレモリー様に使える『騎士』、木場祐斗。ナイト同士の戦い、待ち望んでいたよ!!」

……木場が帯剣していた黒い剣を引き抜き、何度か振りまわすとその剣先を相手に向け

た。

「良く言った、リアス・グレモリーのナイトよ!!」

ツ！

すると相手の『騎士』が高速で動きははじめる！
木場と遜色のないほど速度……さすがは『騎士』！

つつーか木場、お前も実は劍馬鹿だな？

「……全く、カーラマインは劍馬鹿なんだから」

……なるほどねえ。

「全員投入とはさすがに俺も驚いたぞ」

……そこにはライザーの持つ、全ての駒が集結していた！

ツインロールの金髪の女の子に、仮面をつけたいかにも近接戦闘を得意とするような女性、和服の女の人に、これまた双子の猫耳少女に大剣を持った奴……

…流石に多いな、フルは。

「それにしても随分と物静かだな、リアス・グレモリーの『兵士』」

仮面の女が俺にそう言ってくる。

「悪いが、これぐらいで焦っているようじゃあいつに喧嘩を売らないし、魔法使いもやってられないんでね」

「ほう、面白い。ならばその力を見せてもらおう!私はライザー様に使える『戦車』イザベラ。さあ、行くぞ!!リアス・グレモリーの『兵士』!」

「上等!!」

《boost!》

俺と『戦車』の近接戦闘が始まる。

——ツ!!

パワーだけで分かる……。こいつはさっきの小猫ちゃんが戦っていた戦車よりも明らかに強い!

俺はこいつの全ての攻撃を避けていくけど、拳の風圧だけで火傷しそうだぜ!

「ほう!良く避ける!さすがはライザー様に啖呵を切る男だ!」

「そいつはどうも！」

俺はイザベラに攻撃をした瞬間、籠手に包まれた拳を強く握り、素直にストレートを放ち狙う！

紙一重で交わすも、そして体勢が崩れ攻撃してきたところを、回し蹴りでカウンター
!!

「ぐうツ!!」

勢いに勝てず、イザベラは地面に叩きつけられる。

「……………これほどとは。ならば全員で掛かるまで!!」

すると俺を囲むように金髪の女の子を除く全ての駒が臨戦態勢になる。

「………
って、え？」

「……………あの子は戦わないのか？」

俺はイザベラさんに尋ねると、彼女はなぜか歯切れが悪そうに答えた。

「あ、ああ。その方は戦わないのだ。なぜならその方の名は……レイヴェル・フェニックス」

……………フェニックス!?

「つまりライザー様の実の妹君だ」

「……………は?」

えーっと、つまり、あの子はライザーの妹で尚且つアイツの眷属Ⅱ駒?

「変態じゃねーかああああああ!!!」

「なんか、すまない……………」

すると、ライザーの妹は溜め息を吐いて木場と交戦している『騎士』を見た。

「まったく、カーラメインも馬鹿ですわ。お兄様が言ったサクリフェイスに唯一顔を顰めて……………あちらの殿方も顔は良いですが、カーマラインと同じ穴の貉ですね」

あ、この子あれだ。

高飛車系のお嬢様だ。

俺の苦手なタイプだ……!

「……………ま、まあ良いや。倒すのに変わりはない」

俺は魔力を左手に集中させた。

「はああああつ………!!」

「この魔力……!始末しろ!この男を動かすな!!」

イザベラさんが気づくも、ちよつち遅かったな。

俺はその場から飛び上がって木場に魔力を譲渡する!

「受け取れ木場あ!赤龍帝の贈り物!!」

《Transfer!》

「つ!こ、これは…!?!」

「木場!お前の神器を使え!!」

「…魔劍創造!!」

木場が地面に神器『魔劍創造』を使うと、地面から幾重もの太い魔劍が生え、ライザー

の下僕全員の腹に突き刺さっていた。

「こ、これが……」

「ドラゴンの、力……!?!」

彼女達が眩くと、

『ライザー様の『兵士』2名、『騎士』2名、『僧侶』1名、リタイア』

光に包まれて消えていった。

「イツセー君、今の力は……」

「ああ。赤龍帝の籠手は、自分の力を増やすだけじゃなくて、それを他人や物に渡せるんだ。あんまり使った事ないけどな」

「凄いです、先輩……」

すると、

『イツセイさん!聞こえますか!?!』

アーシアの通信が突然に響いた。

焦ってる?何かあったのか?

「どうした、アーシア!何があった!?!」

『大変なんです!部長さんが…部長さんが!!』

…なんだ、この胸騒ぎは。

アーシアの焦り声と、どこからともなく感じる嫌な予感に俺は冷や汗を掻きながらアーシアの言葉を待つ。

そして、その嫌な予感は的中したのだった。

『部長さんが単騎で相手の本陣に向かいました!!』

…それは衝撃的なことで、俺は目を見開いて驚いた。

そして――

『リアス様の『女王』1名、リタイア』

更なる追い討ちを掛けるようにそのアナウンスが響き渡った。

俺はアーシアが何を言っているのか分からなかった。

次いで俺の耳に聞こえた、朱乃さんのリタイアを知らせる音声。

「アーシア、一体何があった!?! どうして部長が…」

朱乃さんのことは当然、心配だ。

だけど今は部長が最優先だ!

『向こうからの通信で、部長さんとの一騎打ちで決着をつけるって!』

じゃあ…

「部長は……!」

それと同時に、俺は新校舎から怒る爆発音と轟音に気付く!

…新校舎で、部長とライザーが戦っているツ!

くそつたれ!こうなったら!!

「木場、小猫ちゃん!相手の『女王』は朱乃さんを倒した!次に狙われるのは部長か、アシアがいるところだ!だからアシアの所に向かって…!」

その時、通信機からアシアの叫び声が聞こえた!

くそ、予感的中かよ!?

「急げ、木場、小猫ちゃん!あの付近には朱乃さんが仕掛けた罠があるけど、それも通用しない!俺は今すぐ部長のところに行く!」

「ああ、分かった!……イツセー君、頼んだよ!」

「先輩も、気をつけて……！」

…木場と小猫ちゃんは急いでアジア達の所に向かう。

敵の狙いは俺たちの生命線であるアジアの撃破。

そして部長を自身で葬り、保険としてアジアを潰す。

だけど木場と小猫ちゃんが相手の『女王』を押さえてくれたえら、俺はライザーに集中できる。

でも敵は朱乃さんを倒したほどの悪魔だ…強さは相当なはず。

「もう貴方方に勝ち目はありませんわ。こちらの女王、ユーベルーナ。彼女にはフェニックスの涙を一つ、持たせていますわ」

……それが、どうした？

「だつたら何だ？」

「っ!？」

俺は殺気をぶつけると、ライザーの妹は怯えの眼差しになった。

「いいえ事はそれだけか？なら消えろ。金髪ドリル」

《boost!》

俺は一言吐き捨てる、部長の下まで飛んでいった!

間に合ってくれよっ!!

イツセーside out

新校舎の屋上——そこでは、リアス・グレモリーとライザー・フェニックスによる一騎打ちが始まっていた。

「リアス、いい加減諦めろ……君はもう詰んでいる。君の本陣には我が最強の女王、ユールーナを送った。もうじき、リタイアになるだろう。そしてここで君が倒されればそこでもう終わりだ……投了しろ、リアス」

「誰が!!」

リアスはライザーの顔に向かって大質量の魔力を放つ……だがそれが直撃し、ライザー

の顔は消し飛んでもまた再生する。

さきほどからその繰り返し、だが確実にリアスの精神力は削がれていった。

「リアス、言っておくが今の君では俺に何度やつても勝てない。未成熟な力に未成熟な心…君はあまりにもまだ弱いさ」

「そうかもしれないわね…確かに私の攻撃は一切通らない。全てあなたの言う通りかもしれない。……だからって諦めるものですか！」

何度も何度も、リアスはライザーに滅びの魔力を放ち続ける。

決して諦めまいと、自身を鼓舞するように。

「私が諦めるわけにはいかないわ。まだ戦っている下僕がいる！それなのに王である私がどうして諦めなければならぬの！」

そう言い放つと、リアスは大出力の滅びの魔力を放った。

「確かにそれはすごい力だ…。だがな、リアス！単調過ぎるぞ!!」

が、ライザーはそれを易々と避け、業火をリアスにぶつけた。

「ああああっ!!」

ライザーの業火に身を焼かれ、リアスは絶叫した。

火が消える頃には、もはや虫の息だった。

「…リアス。出来れば君を傷つけたくはなかったが、俺も『王』だ。君はここで、終わる…」

そう言うと、ライザーは手に炎を集中させた。

『私、もう……』

リアスは薄れ行く意識の中で、自身が敗北する事を自覚した。

『ごめんなさい…朱乃、祐斗、小猫、アーシア、——イツセー』

その中でリアスは、合宿の夜を思い出した。

そして、唯一の『兵士』の言葉を——

「俺が、部長……貴女を自由にします」

「俺が貴女の希望になります!」

『イツセー、貴方は…グレモリーに縛られていた私に希望を見せてくれた。貴方は、何時も明るかった』

でも、もう自分は――

「本当に絶望しそうになったら、俺の名前を呼んでください。絶対に、駆けつけます」

そして、彼は屈託のない笑顔で、そう言った――

「……………て」

それを思い浮かべた瞬間に、リアスはうわ言の様に呟いた。

「ん？」

「……………けて」

「ふふ……………心配するなリアス、もう苦しまなくて済む――」

「…助けて、助けて！助けてよっ！！約束したじゃない！！助けてくれるって！！私の希望になつてくれるって！！助けてよっ！イツセーッ！！」

その瞬間、ライザーは金網に叩き付けられた。

「呼びましたか、部長？」

その声は、とても静かで、とても穏やかで、とても明るかった。

「あ、ああ……………」

その声を聴いた瞬間、リアスは涙を浮かべた。

悲しさではない、嬉しさを滲ませた声で——

「イツセーっ!!!」

その正体は、兵藤一誠その人だった。

イツセーside

間に合った……間に合ったよ、神様！

部長はボロボロだった。

そんな目にあわせてしまった不甲斐ない自分を殴りたくなかったが、今はそれどころじゃない。

「後は、任せてください」

「……ごめんなさいっ」

——謝らないでください。

俺は部長に自分の服を被せ、ライザーを睨み付ける。

「貴様、赤龍帝の糞餓鬼……」

「よう。随分俺のご主人様を痛めつけてくれたな……」

お前は、お前だけはッ!!

「俺がッ!ぶちのめすっ!!!」

そう咆哮すると、俺は体に力を込める!

「うおおおおおつ!!!」

赤いオーラが俺の体を覆っていくと、俺の右腕、両足、胴体が赤い鎧の様な鱗に変化していく!!

それに合わせ、俺の犬歯、耳も鋭く尖っていき、額からは一對の角が生えた!

そして俺は両拳を叩き合わせ、オーラを吹き飛ばした!

「なっ、その姿は……!?!」

まあ、驚くのも無理ないよな。

何せ今の俺は——

「さあ、お楽しみは、これからだあ……!!」

小さいドラゴンのような風体だからな。

次回、D×Dウィザード

龍人イツセー「おらあ!!」

ライザー「ぐはあ!!」

リアス「ありがとう、イツセー……」

MAGIC13 『俺達、戦います!後編』

MAGIC13 『俺達、戦います!後編』

「さあ、お楽しみはこれからだあ……!」

龍人と化した俺は焼き鳥野郎——ライザーに向かって拳を構える……!

久しぶりだぜ——こんなに誰かを殴り飛ばしたいと思つたことはよお!!

「…化け物がッ!」

「化け物…? 違う、俺は、悪魔だあ!!!」

ライザーは忌々しそうに吐き捨てると俺に向かって炎を放つてきた……けど!

「しやらくせえ!!」

「何い!?!」

「ぶつとべえ!」

「がはあっ!!!」

俺は拳で炎をかき消し、ライザーを校庭まで殴り飛ばした!

だがライザーは直ぐに立ち上がり、その炎の翼を広げた。

「このクソガキい!!消し炭にしてくれるわあ!!」

ライザーは怒号とともに殺気を放ってくる。

大した殺気だ……だけどなあ!!

「怒りなら……俺の方が上だあああ!!!」

俺も怒号を上げて、ライザーに殴り掛かるツ!!

「燃え尽きろお!!」

「がああつ!!!」

奴の炎を拳で相殺し、再び殴り飛ばす!!

「ぐはっ?!」

今度はちゃんと踏ん張ったみたいだな……そうでない面白くねえ!

……ぐ!

『楽しんでる余裕は無いぞ、相棒』

分かってる!!

「はああつ!!!」

「ちい!」

連続で炎を放ってくるライザーに対し、俺は拳を地面に叩きつけて強引に飛び上がり、回避する!

「食らえ!ドラゴン・ブレスッ!!!」

俺は口から灼熱の炎を吐き、ライザーにぶつける!

「ぬうつ?!此れしきの炎で……」

「あめえ!!」

「何イイツ?!」

炎に気を取られてるライザーの隙を狙い、俺は地中からドラゴンの腕を伸ばし追撃する!!

「くっ!」

「スタンピング・ドラゴンレッグ踏み砕く巨龍の足!!!」

「なっ……!!!」

ジャンプして腕の攻撃を躲したところに、巨大化させた足で——!!!

「…ッー」

「ぶつつぶれろお!!」

踏み砕くッ!!!

ドオオオオオオオンツ
!!!!

「……………ん？」

……手ごたえが、ない？

「おい、クソガキ!!」

——ツ!?

新校舎から聞こえた声に驚いて振り向くと、そこにはライザーが!!

まさか、あの一瞬で……………転移したのか!?

だけどそれよりもっ!!

「ぐ、うう……」

「部長ツ!!!」

ライザーが部長の首根っこを掴んで仁王立ちしていた……………アイツツ!

「小僧!このままリアスを傷つけて欲しくなかったら、その姿を解け!」

「ツ!?てめえ……………」

「俺もフェニックス家の看板を背負っている身だ!こんな試合で、負けることは許されんのだっ!!」

くっ!

俺は……………俺は…!!

『リアス様の『戦車』1名、『僧侶』1名、『騎士』1名、ライザー様の『女王』1名、リ

タイア』

——皆！

俺はそのアナウンスに愕然とした。

もう、皆は……………ツ！

くそつたれえ!!

ライザーに言われた通り、俺は龍化を解いた。

『相棒…………』

何も言うな…………ドライブ。

「ふつ、それで良い……………さっきの殴られた分、今ここで返す!!」

ライザーはさっきの意趣返しとばかりに俺に炎をぶつけてきた！

「ぐあああああつ?!?!」

ぐつ……………耐えろ!!俺が耐えきつて、奴が油断さえすれば、勝機は……………ツ!!

くそつ、龍化の負担が……………!

「イ、イツセー…ツ！」

「ハハツ！良い様だなあ赤龍帝！所詮貴様は赤龍帝の籠手がなければ無力な存在だ!!」

ううツ……………言いたい放題言ってくれやがって！

——— 何も出来ない……………！

『相棒……………すまんっ！』

へ、へへっ……………謝るなよ、ドライグ……………お前は、何も悪くないよ。

「止めなさいライザー！動けない相手をいたぶって、何が楽しいの!?!」

「大丈夫です、部長ツ!!俺の事は、気にしないで、くださ……………うわああっ!?!」

熱い、熱い……………！

けど、耐えろ！耐えるんだ！

「ふん、まだ気は収まらんが……………楽にしてやる!!」

ライザーは勝ち誇ったかのようにさつきより大きく炎を集め、俺に向けて放った——

その時だった。

「このっ！」

「ぬう!?!」

部長がライザーの顔に滅びの魔力をぶつけ、奴をひるませたかと思うと、強引にライザーの腕を振り払いこつちに向かってきた!?

「イツセー!!」

「部長……ツ!?!こつちに来ちゃ…!!」

俺が言い切る前に、部長は俺を庇う様に前に立ち

部長はその炎に飲まれていった。

「ぶ、部長ツ!!!」

俺が叫ぶも、部長はそのまま力なく倒れた。

「い、っせー……」

「何で、何で……俺なんかの為にッ!」

俺は部長を抱えながら、必死に部長に問いかけた。

「苦しむのは、皆一緒だから……私ひとり傷つかずに、なんて……そんなの嫌だから……」

「馬鹿ですよ……そんなの、馬鹿ですよッ!!」

泣きながら言うも、部長は光に包まれていった。

「ねえ、イツセー……本当に、ありがとう。助けてくれて……」

「……助けてなんかない、助けてなんて、ないですよ!!」

「ううん……貴方は、グレモリーの名前に縛られた私に、希望を見せてくれた。さつきだって、私が呼んだら、来てくれた……」

「当り前じゃないですかッ!!俺は貴女に誓った!絶対に助けるって!それなのに……!」

「……イツセー、その約束、まだ……有効?」

「……はい、何時までも、ずっと!」

部長を包む光が、一段と強くなった。

「これから先も、私が、ライザーの元に嫁いでも、助けてくれる……?」

「…当り前です!!助けを呼ぶ声が無くても、助けます!!俺は、貴女の———!!」

「そ、つかあ……ありがとう、イツセー……でも、出来るなら……」

「貴方と、ずっと一緒に、いたかった……」

部長はそう力なく呟いて、その場から消えた。

「助けて……」と呟き、涙を流して……。

『リアス様の『王』、リタイア……よってこのゲーム、ライザー・フェニックス様の勝利です』

俺は———無力だ。

助けを求める女の子一人も、守れないなんてさ。

俺の近くに魔法陣が出現する。

でも俺はそれを無視して、少し離れたところにいたライザーに告げた。

「勝利おめでとう、ライザー」

「!..貴様.....」

俺は自分でもビックリするような低い声でライザーに呼びかけた。

「けど、その内後悔させてやるよ.....誰を怒らせたのかを」

それだけ告げると、俺は朦朧とした意識で魔法陣の上に乗った。

『相棒.....今更だが、神器の調整が終わった』

「そうか.....」

だけど、今は――

『ああ、ゆつくり休め………奴への怒りは、俺も同じだ』

それを聞いた俺は、目の前に銀が見えたを最後に意識が飛んだ。
！。

次回、D×Dウィザード

グレイフィア「お目覚めですか……？」

アーシア「部長さんを、連れ戻してきてください！」

イツセー「ヒーローは遅れて登場するもんさ」

《Welsh Dragon Balance Breaker!》

次回！MAGIC14 『俺、殴りこみます!!』

ドライグ 『漸く俺の本気だー!!』
イツセー 「次回もショータイムだ!!」

MAGIC14 『俺、殴り込みます!!』

「……………ん」

頭に響く鈍痛によって、急激に俺の意識は覚醒した。

ここは……………？

『家だ』

ドライグ……………ってそうだ！レーティングゲームは!?

『……………』

そう、だったな……………俺達、負けたんだったな。

でも、そこから記憶が…

『龍化の反動でお前は気を失ったんだ。あのレーティングゲームからもう二日経ってるぜ』

そうか……………。

「お目覚めですか……………？」

え？

誰……………つて、

「グレイフィア、さん？」

「はい」

な、何でグレイフィアさんが……。

「説明いたしましたでしょうか？」

『いや、俺が言う』

説明しようとしたグレイフィアさんの言葉を遮ってドライグが口を開いた。

『あの後、気絶したお前はこの女に介抱されたんだ』

「……ちよつと待てよ。アーシアは？」

アーシアだけじゃない……木場、小猫ちゃん、朱乃さん、それに……部長は！

「眷属の皆様は無事に治療を終えています。今、アーシア様が下で水を……」

「イツセーさん!!」

……アーシア！

良かった、元気そうだ……………ッ!?

俺がホツと一息つくつと、間髪入れずアーシアが抱きついて来た。

「良かった、イツセイさんが目を覚まして…っ！」

「アーシア……」

震えながら俺に抱きついて離れないアーシアを見て、俺は頭を撫でる事しか出来なかった。

心配、かけちゃったな……。

『この二人、お前をずっと心配して交代で看病してたんだぜ』

そうなんだ……。

あの後、アーシアは下に降りてティアに報告しに、俺はグレイフィアさんに一番聞きたいことを聞いた。

「部長は……」

「…リアスお嬢様は、約束どおりにライザー様との結婚です」

「日付は……」

「今日の夜です」

今は…夕方!?

…こうしちゃいられない!

「……どうなさるお積もりですか？」

部屋を出ようとした俺にそうグレイフィアさんが静かに語りかけていた。

……そんなの、決まってる。

「……部長を助けに行きます」

「今更貴方が行っても、どうこう出来る物では無いのですよ？」

……そうかもな。

「そうっすね。俺が今やろうとしてるのは、悪魔の未来をぶっ壊すかもしれない……」

「でしたら……」

「でも」

決まりとか、そんなのはどうだって良い。

「これは、俺の意地です。部長は……助けてって言った。泣きながら」

「……」

「未来が大事とか、大人はそう言います。確かに、未来は大事です。けど………たつた一人の女の子の幸せを！想いを！踏み躪る社会に、安寧の未来なんてある訳ない!!!」

「……」

「まずは目先の未来より、今を！今を変えなくちゃ未来なんてわかる訳無いんだ!!」

…そうだ。未来なんて、何時も真つ暗闇の中だ。

それを知りたいから、俺達は、今を生きてるんだ!!

それに――

「魔法使いは…諦めが悪いんです。だから、助けに行く。俺は部長の、最後の希望だから」

「……」

ぐく……………

なんて力強く語ってたら、突然俺の腹が鳴った。

そういや、何にも食べてなかったっけ？ハハ……………しまらねえなあ。

『お前って奴は……………ククッ』

笑うな!!

「ふふっ……」

と、グレイファイアさんが静かに笑い出した。

…何か、意外だな……アレ?

俺、この人の笑顔……知ってる?

そう言えば、初対面の筈なのに、そんな気がしなかったのも……何でだ?

「さすがです、イツセー様。もしもあなたが弱音の一つでも吐こうものなら、サーゼクス様から叩いても目を覚まさせろと言われたのですが……どうやらとんだ検討違いだったのですね」

なんて唸る俺に構わず、グレイファイアさんは静かに、だけど何処か嬉しそうに語りだした。

「貴方のその強い意志を秘めた瞳……あの時から変わる事無く、寧ろ輝きを増している……だけど、何処か気が抜けている……ふふっ」

「???'」

な、何だ？

なんか、すげえ俺の事語ってるんですけど?!

『まさか……お前』

オイ、ドライグ。何がまさか何だよ？

「……少々お待ちください」

そう言うと、グレイフィアさんは俺の部屋から出て行った。

くくくく一分後

グレイフィアさんは手にお盆を持って戻ってきた。

何か、良い匂いだな……。

「まずは腹ごしらえ……ですな?」

そうイタズラっぽく微笑むと、グレイフィアさんはお盆を俺の目の前に置いた。

……お握り？

『…あー！思い出した!!』

え、何を思い出したんだよ!?

いきなり大声で叫びやがって!

『まあ、食ってみろ。お前も思い出すだろ』

……分かった。

ドライグに言われるがままに、俺はそのお握りを頬張った。

……この味、知ってる!!

俺はがつつく様にお握り三つをあつという間に胃袋に収めた。

そうだ、この人……!

「冥界で、修行した時……!」

「…漸く思い出してくれましたね」

そうだよ！俺がまだ小学生の時、冥界の山で修行してた時に会って、それで、冥界で修行の許可を貰ったんだ!!

そして、その時に魔王様に会ってるんだ!

何でそんな大事なことを忘れてたんだろ…？

その時に、このお握りを貰ったんだ…。

『んでお前そんな時に……』

……うわーっ！思い出したよ！！

俺、その時グレイフィアさんに……！

『……つて、今は冥界に向かうことが先決だろ』

そうだった！恥ずかしがるならまたの機会だ！！

「イツセー様、これを」

するとグレイフィアさんはポケットから一枚の魔法陣を取り出し、俺に渡してきた。

「これは？」

「その魔法陣は婚約会場へと続く魔法陣です……そして、魔王様から一言です「妹を救いたくば、会場に殴りこんできなさい」……」と

「…妹云々は置いといて、何で俺に？」

ぶっちゃけドライブグナビがあれば余裕なんだけどな。

『無茶言うな。確かにリアス・グレモリーの魔力探知は出来るが、道筋は知らんぞ』
え、そうなの？

何だよー、下手なカーナビより役立たずじゃん。

『言ったなテメエ!!』

冗談だよ、冗談！

今グレイフィアさんが説明してるだろ!!

『相棒、覚えてろよ…』

「冥界の事は知ってても、その道筋は知らないだろうと言う事で」

うわー、バレバレじゃん！

さっすが魔王様だな。

「では、私はこれで……」

「あ、グレイフィアさん」

説明を終えたグレイフィアさんは魔方陣で転移しようとしたが、俺はそれを呼び止めた。

「はい？」

「…お握り、ご馳走様でした！」

俺がそう言うのと、グレイファイアさんは目をきよとんとさせ、次には笑っていた。

「またお望みでしたら御作りいたしますよ。では、私からも……」

「？」

「リアスの事、頼みます……」

「……モチのロンです!!!」

俺が力強く言うと、グレイファイアさんは微笑んで今度こそ消えた。

……結婚会場だろうな。

「さて、腹ごしらえも済んだし……行くか」

……だけど、その前に、

「いるんだろ、アーシア、ティアア？」

「ふっ、流星はイツセーだな」

まあオーラで分かるし。

「イツセーさん……」

「アーシア、行つてくる……」

「……なら、私も!!」

涙を流して懇願するアーシア。

だけど、連れてはいけない……。

「…ゴメン、アーシア。だけど、アーシアもまだ万全じゃない…そうだろ？」

「……私は！」

「大丈夫」

俺はアーシアを抱き寄せた。

「その気持ちだけでも、俺は戦える。約束する、ちゃんと部長達も一緒だ」

「……必ず、部長さん達と、無事に帰ってきてくださいね…！約束ですよ？」

「ああ……ティア、アーシアを頼む」

「任せろ。イツセー」

「ん？」

「やり過ぎるなよ」

「……善処するよ」

それだけ伝えると、俺はコートを着て外に出た。

「…頑張つて下さい！」

「ま、気楽にな」

「おう！」

俺はバイクを吹かし、冥界へと向かっていった——！！

待ってて下さい……部長!!

イツセーside out

木場side

僕、木場祐斗はリアス部長の婚約会場にいる。

僕だけじゃない。

ドレスを着こんだ小猫ちゃんに和服姿の朱乃さん。

僕もスーツを着込んで会場の一角にいた。

既に上級悪魔の面々が会場にいて、話をしたり、ごちそうを食べていたりする人もいる。

「……この前のゲーム、拝見させていただきました」

…するとそこには同じ駒王学園の生徒で生徒会長、そしてシトリー眷属の『王』、ソーナ・シトリー様がいた。

「ソーナ会長」

「……正直、納得できない部分も多いです。ですが負けは負け。それはおそらく、誰よりもリアスが分かっているでしょう」

「あらあら……さすがは幼馴染が言うことは違いますわね」

ソーナ会長は実際にあのゲームを見ていたのか、僕たちに対してそう話しかける。それに対し朱乃さんはいつも笑い声でそう言った。

朱乃さんがあの『女王』に負けたのは、どうやらフェニックスの涙が使われたかららしい。

一度は追いつめ、魔力が尽きたところを涙で回復され、そしてそのまま敗北。

逆に言えば涙さえなければ負けることはなかったというわけだ。

「あのゲーム、私は素晴らしいものだと評価します」

「ありがとうございます。でも、お気遣いは無用ですわ」

朱乃さんは微笑みながらソーナ会長にそう言った。

「……まだ、終わってません」

それに続くように、小猫ちゃんも静かに呟いた。

……そうだ、まだ終わってない。

そうだろう、イツセー君？

すると、僕達に近づいてくる人影があった。

「……グレモリー眷属の皆様、少し宜しいでしょうか？」

「確か貴方は……」

「お兄様の眷属で『僧侶』のレイヴェル・フェニックスですわ」

……そこには金髪のツインロールの髪形をしていて、紫色のパーティードレスを着ているレイヴェルさんの姿があった。

イツセー君なら、ドリル頭とか言うんだらうなと思いつながら。

「それで…どうしたのですか？」

「…その、この前のゲームのことを謝りたくて——兄の蛮行、謝罪申し上げます」

…すると彼女は僕達に頭を下げてきた。

どういふことだろう。

するとレイヴェルさんは頭を上げて、話し始めた。

「…お兄様は『王』として勝利を求めました。あの時の様な事も…ですが私はあれが…お兄様の最後の行為がどうしても許せませんの。だから兄に代わって、妹である私が謝ろうと思ひまして…」

「あらあら…構わないですわ、そんな頭を下げないでください」

「…ゲームはゲーム。もう割り切りました」

するとレイヴェルさんは少し、安堵の表情となった。

彼女は相当、緊張していたみたいだね…これだけの眷属に面と向かつて頭を下げるこの子の芯の強さ。

正直、あのライザー・フェニックスの妹とは思えなかった。

…僕は相手の『女王』と相打ちになり、そしてリタイアして治療を受けている最中、イツセー君のそれまでの戦いを見ていた。

正直、唾然としたよ。

頭以外を龍のものに変えて、彼はフェニックスを、部長を人質に取られるまで圧倒していた。

僕達が思っていた以上に、彼は強かった。だけど、怖かった。

戦いを、楽しんでいた……。

あの時のイツセー君は、見た目だけでなく、心までもがドラゴンその物だった。

そして——心底愉しそうに笑っていたんだ。

その戦いを見ていて、朱乃さんと小猫ちゃんも僅かに震えていた。

……それは、僕も同じだった。

そんな風に、笑ってほしくない……………とも祈っていた。
何時もの様に、明るく笑ってほしいと。

「……………それで、赤龍帝は、どちらに？」

「……………」

……………イツセー君は、いない。

彼はあの後、まるで死んだかのように眠り続けていた。

その反動は、僕達よりダメージが大きいとお医者様は言っていた。

フェニックスの炎より、内的なダメージがデカイ、との診断だった。

だけど

「彼なら大丈夫さ。今はここにいないけどね…」

「イツセー君は、自分を、そして他人を裏切らない人ですわ」

「諦めが悪い……………でも、それが、先輩の長所です。先輩は、絶望している人を決して見捨てません……………」

その時、あの男……ライザー・フェニックスが炎に包まれながらという派手な演出で会場に登場した。

「冥界に連なる貴族の皆様！お集まりいただき、大変うれしく思います……この度、皆様が集まっていたいたしたのは名門、グレモリー家の次期当主、リアス・グレモリーと、私、ライザー・フェニックスの婚約という、歴史的瞬間を共有していただきたいからでございます」

……貴方は、ある意味幸せなのかもしれない。

彼の、僕らの『兵士』の怒りを、知らないのだから——

「ではご紹介しましょう！わが妃！リアス・グレモリー！」

……グレモリーの魔法陣がライザー・フェニックスの隣に浮かび、そして少しして、ウエディングドレス姿の部長が現れた！

部長の表情は硬く、その眼も閉じられており、何時もの活発な部長とは、別人だった。

そしてあれよあれよと演説（下手なサウンドステレオより五月蠅いと、イツセイ君な

ら言うんだらうなあ）が続いていった……………つてアレ？

イツセー君……………？

「我々のこの婚約は、悪魔の未来を繁栄させる、礎となり得るでしょう!!」

ライザーが手を上げて熱演すると、周りの上級悪魔の方々も嬉しそうに声を上げた。

「これは……………」

「あらあら」

「遅い、です……………」

イツセー君、まだ来ないのかい？

「ら、ライザー様!!」

すると、入り口付近から警備悪魔がライザーに近づいてきた。

どうしたんだらう？

「何だ貴様？今は大事な……………」

「そ、それが……………可笑しな男がバイクで侵入して来て……………」

うわあーっ!!

ひいーっ!!

警備悪魔が言い終わる前に、外から何やら悲鳴が聞こえた。
ま、まさか……………

ドオオオオオオオオオオ!!!

「ライダー、ブレイク!!」

「ぎゃああつ!!」

「のおおおつ!!」

僕が何かを予感したと同時に、式場の扉がぶち破られた!!

さらに何人かの警備悪魔が投げ出された!

ブウンツ!!

その人物は、バイクを捻りながら止めて一言、

「ギリギリセーフ……………つてどこか?」

そうその場の雰囲気似つかわしくないのんびりとした口調で一人呟いていた。

「貴様あ！何者だ!？」

「てめえに名乗る名前は無いと言いてえが、特別に名乗ってやるぜ。鼻毛真拳継承者！」

「誰がポーポポだ!!」

その人は、そう呟くとヘルメットを取っ払った。

「お、お前は……!」

「チヨリーっす」

僕らの予想通り、兵藤一誠その人だった。

と言うか、結構古い挨拶だよ、それ……。

「オイドライグ！全然受けてねえぞ!!」

『本気でやりやがったコイツ！ダーッハッハッハッハ!!』

「てめえだけは許せねえ!!」

『おっと。暴力はいけません!』

うん、元氣そうだね。でも漫才は帰ってからでも出来るよね？

「警備兵！取り押さえろ!!」

ライザーの叫びで数人の悪魔が取り囲むけど、

「へえ、随分感激してくれるねえ……つと!」

イツセー君は不適に笑うと、ヘルメットを警備悪魔めがけて蹴っ飛ばした!

そのコントロールは抜群で、一気に取り囲んでた警備悪魔を気絶させた!

「へっへーん」

「このおー!」

「おっと」

「がふっ!?!」

背後からの奇襲も、鮮やかにかわして後頭部をヘルメットで殴った!

さ、流石に悪魔でもやり過ぎじゃあ……。

「さてと、ここは一発でかく言っときますか!?!」

『イヨツ!!』

それに構わずイツセー君は部長を指差すと、高らかに宣言した。

「部長、いやリアス・グレモリー様は俺の女だ!!その艶やかな紅髪も、心も、唇も、処女

も!!全部ひつくるめて、俺のもんだああああ!!!」

いつそ清々しいまでの変態発言だった………!!

木場 side out

イツセー side

「部長、いやリアス・グレモリー様は俺の女だ!! その艶やかな紅髪も、心も、唇も、処女も!! 全部ひつくるめて、俺のもんだああああ!!!」

へっへーん、言っちゃったぜ☆

もうこうなったら大胆なほうが良いだろうしな!

「やあイツセー君」

すると後ろから木場達が出てきた。

「随分遅い到着でしたわね」

「ヒーローは遅れて来るもんですよ」

まあ、バイク何処に止めようか迷ってたんだけどね。

結局特攻した訳ですけどね。

「今度、ドーナツ下さい……」

うん、分かった！腹パンよかずつとマシだ！！

だからその拳を収めて！！

「これはいったい!?!」

「リアス殿！いったいどうなっているのだ!!」

周りがざわつく中、俺はひとときわ目立つ赤髪の長い男性が、ちょうど部長に近づいて行くのを見た。

……部長と、似ている。つつかガキの時にチラツつと会ってたつけ。

あんまし覚えてないけど。

「私が用意した余興ですよ」

「さ、サーゼクス・ルシファー様!?!」

貴族の一人が慌てた表情と声で、その名を呼んだ。

「サーゼクス様！このようなら勝手は困り」

「…いいではないか、ライザーくん」

…魔王様、もといサーゼクス様はライザーの言葉を止める。

俺はその様子を見て、立ち止まった。

「この前のゲーム、拝見させてもらったよ。しかしゲーム経験もなく駒も半数に満たないリアス相手に、随分と小ズルイ、もつと言えば卑怯な妙手を使ったそうではないか」

「ツ!!……それはサーゼクス様、貴方様はあのゲームを白紙に戻せと？」

「いやいや、そこまでは言っていない。魔王である私がどちらかに肩入れすることは不可能だ」

するとサーゼクス様は俺の方を見てきた。

「ならばサーゼクス、お前はどうしたいのだ？」

すると赤髪のダンディーチックな悠然としている男性がサーゼクス様に話しかける。

恐らくは、部長のお父さん、なんだろうな。

近くには部長に似た女の人もいるから間違いないだろうな。

「その少年は今代の赤龍帝の力を有しているそうではありませんか。ドラゴンとフェニックス。私はその戦いがみたいのですよ……それにそうしなければその彼は止まりませんよ」

…サーゼクス様がそう言うのと、会場の視線が俺に集まった。

……分かってらっしゃる。

「兵藤一誠君、どうやらお許しが出了たそうだ。もう一度、君のあのドラゴンの力を見せてくれないか？」

「——望むところですよ」

俺は赤龍帝の籠手を発動させ、掌を叩いた。

「……いいでしょう。このライザー・フェニックス、これを最後の試練として迎え入れましょう!!」

「勝負は成立……ならば兵藤一誠君、君は勝った場合の代価は何がいい？」

サーゼクス様が俺にそう言ってくると、途端に周りが騒がしくなった。た、対価？

「サーゼクス様！たかだか下級悪魔にそんなことを！」

「お考え直してください！」

「黙れ」

サーゼクス様の低い声が響く。

その途端、会場は水を打ったかのように静かになった。

「下級であろうと、上級であろうと悪魔は悪魔だ。こちらは頼んでいる身、ならばそれ相應のものを出さなければ……それで君は何を願う？爵位か？それとも絶世の美女かい？」

爵位、それに絶世の美女か……悪くないな。

『オイ』

わーっつてるよ!!

「魅力的ですけど、それは頑張れば得られる。俺が望むのは、部長……リアス・グレモリー様を、自由にしてほしい。ただそれだけです!!」

元々の目的もそれだからな。

つつーかそれ以外別にいらねえ!!

『美女に揺らいでたのは、何処の誰かなあ?』

誰だソイツは!この俺自ら逆さ吊りにしてやる!!

「いい答えだ。ならば勝つたらリアスを連れて行きたまえ」

サーゼクス様はどこか嬉しそうな笑顔でそう言うと一緒に下がる。

「この前の言葉、忘れていないな?——決着を着けるぞ、ライザー」

「いいだろう、小僧……お前にフェニックスの力を分かせてやろう!」

決まりだ……!

だけどその前に……

「部長」

俺は部長の手を取って、右手の指に指輪を通した。

「これは……?」

「この指輪に誓います。必ず、貴女を自由にします」

それは基本、俺が絶望したゲートに使用する、エンゲージって言う魔法の指輪だ。効果は、指輪をつけた他人の精神世界——アンダーワールドに入れる。

今回は——ただの、約束手形。

だけど、それは必ず救う——そう約束する指輪だから。

そう部長に約束すると、俺は急遽用意された戦闘フィールドに繋がる魔法陣から転送された。

戦闘フィールドの中心辺りに俺とライザーは立ちすくんでいる。

今は開始の合図を俺達は待っていた。

「小僧、お前の強さ……それは認めよう。だが……!」

『では、試合を始めたまえ』

そうサーゼクス様が告げると、ライザーは不死鳥の炎の翼を広げた！

「この間も言つたように、俺もフェニックスの看板を背負っている!!わがフェニックス家に、敗北は許されんのだ!!」

……どうやら、敗句は詠み終わったようだな。

推奨BGM「Trip — innocent of D—」

「お前の背負ってるものの重さなんて知るか。けどな、そんなプライドごときで部長を傷つけたテメエを！俺はぶっ倒す!!!」

俺は力強く踏み込んで、ライザーに駆け出す！

「力も万端！準備はOK！だから俺は今！望む！不死鳥を吹っ飛ばせる力を寄越しやがれドライブ!!いや、ウエルシュ・ドラゴンツ!!!」

『ふっ、良いだろう！ならば思う存分に振るうがいい相棒!!否ッ、兵藤一誠!!!』

燃え盛るようなドラゴンのオーラを滾らせ、今！叫ぶ!!

バランス・ブレイク!!
「禁手化!!!」

《Welsh! Dragon Balance Breaker!!》

「さあ、ショータイムだつ!!!」

同時に、俺の体に次々に鎧が装着されていく!

そして全ての鎧を装着し、そして俺は地面に舞い降りた!

「これが龍帝の力! ブーステッド・ギア・スケイルメイル 赤龍帝の鎧だつ!!!」

俺は空に浮かぶライザーにそう言い放った!

「ば、バランス・ブレイカーだど!?!」

ライザーは驚愕な表情になっていた。

「ああそうだ。この間は使えなかったが……ロンギヌス 神滅具の真の力、その身に受けやがれ!!」

『Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!』

一気に限界まで強化され、力が数倍に跳ね上がる!!

「うらあ!!」

「ごはっ!?!」

猛スピードでライザーに近寄り、そのままの勢いで殴り飛ばした!

マシガン・ドラゴンショット
拡散する龍波動!!」

掌からドラゴンショットを拡散させ、地に落ちたライザーに放つ!

「ぐうつ!?何というパワー……貴様、本当の化け物か?!」

「化け物……?だから、俺は悪魔だっつってんだろ!!」

牽制のドラゴンショットを放ちながら拳を構える。

お次はコイツだ!!

ドラゴンック・ブラズマ
「龍牙雷光!!」

「ぐあああああ!!?!」

全方位から殴りつける!!

からのお!

エクスプローション・ドラゴンショット
「爆裂の龍波動オ!!」

「ふ、ふん!その程度……!」

ライザーが振り払おうとした瞬間、連鎖的に爆発が起こった!

「あく言つてなかつたつけ？それ、ちよつとも触れたら爆発するって」

「が、はあ……!!」

「苦しいか？けどな……部長のほうがもつと苦しかった!!お前が今味わってるそれより、ずつと苦しい痛みを!!味わってきたんだ!!」

ただではたおさねえ!!

泡吹くまでやってやる!!

ウエルシユ・エクスカリバー
「赤龍帝の聖劍!!」

「ぐおあつ!!」

手刀でライザーを切り裂く!

ライザーに接近し、俺はこれでもかと殴り続ける!!

「どうした!俺をつ、焼き尽くすんじゃ、無かったのか!？」

「がはっ、ぐほっ、ごはあ!!」

「何とか言えエ!」

「ぐっ!？」

俺は頭突きでライザーを怯ませ、足を掴んで投げ飛ばす!!

ライザーは柱から這い出るも、既にポロポロで、再生力も追いついていない様子だった。

俺はそれでも容赦なく、ライザーを殴り続ける。

「づうあつ!!」

「いほっ……!」

硬化させた拳を叩き込んで、ライザーを地面に叩き伏せた。
直ぐに立ち上がるも、その表情は絶望一色だった。

「安心しろ、楽にしてやる………だったか?」

俺は持てる全ての魔力を、左拳に集中させた。

こいつが、ラストアタックだ…ッ!!

「や、止めろ! 貴様、分かっているのか!? この婚約は悪魔の未来のためのものだ!! お前のような何もしらないガキが、どうこうしていい問題ではないんだ!!!」

「確かにそうだな。だが、俺にとつちやどうでもいい!」

俺はライザーの命乞いに近い叫び声を切り捨て、にじり寄った。

「俺がやろうとしてる事は、悪魔の未来を壊す最低な事だ。けどな、これだけは言える。

……お前なんか、部長を泣かせるお前なんか!!」

『イツセー……』

「あの人の隣に立つ資格なんてねえんだよ!!!俺は誓った!あの人が涙を流すなら、俺がその涙を宝石に変える!!あの人が絶望するなら、俺がその絶望を希望に変える!!今俺がお前をブツ飛ばす理由はア!!!」

一気に踏み込み、

「それだけで十分だああああ!!!」

「……………ツ!!?」

ライザーの腹部に叩きこんだツ!!!

それを受けて崩れ落ちるライザーに、

「ファイナーレだ、ライザー・フェニックス……………！」

そう言い放った。

つつても、聞こえてねーだろうけどな…。

「お兄様!!」

すると、ライザーの妹さんが現れ、ライザーを庇う様に立った。

「震えてるぜ……………？」

「っ」

「安心しろ、もう気は済んだ。ソイツが起きたら伝えといてくれ。文句あるならいつでも来い！つてな」

「あ……………／／／」

何故か顔を赤くしたその子に構わず、俺は魔方陣目指して歩を進めた。

『相棒……………やっぱりお前は最高だ』

……あんがとよ。

俺は魔方陣で部長達が待つ場所に戻ってきた。

俺は鎧を解除し、部長に手を伸ばした。

「部長、迎えに来ました……」

部長は目に涙をためて、俺の手をとった。

「イツセー……!」

……ふいふ。

戦いを終えた俺は、グレイファイアさんに渡された魔法陣が書かれた紙を掲げた。すると、何やら頭は驚なのに、体はライオンみたいな奴が現れた。

「これは、グリフォンね」

「へえ〜」

これがグリフォンか。

何か、普通だな。

「あらあら、うふふ。ではイツセー君が部長をお送りして差し上げたら？」

「ええっ!？」

朱乃さんが面白そうにそんなことを言ってきた！

まじで!？」

「そうね……じゃあ、お願いできるかしら？ イツセー」

げ、部長まで乗り気じゃない!？」

……ま、良いか。

「部長がそう仰るなら、喜んで！」

俺と部長はグリフォンに跨り、冥界の空を飛んだ！

「先に部室で待つてるぜ〜!!」

~~~~~

「…バカね、イツセー。そんなに傷だらけになって、私なんかの為に……」

「なんか、じゃないです。部長だから、助けたんです」

「ッ！」

部長は顔を真っ赤にして、俺から視線を外してしまう。

でも俺の首に腕を巻きつけたまま、抱きしめてくる。

「でもありがとう、イツセー……今回は破談になったかもしれないけど、また次の婚約が来るかもしれないわ」

「もし次、そんな婚約があっても、助けを呼ぶなら、俺は何時だって部長をお助けします。だって俺は……」

「……………」

「リアス・グレモリーの『兵士』で、貴女の最後の希望ですから！」

そう言った瞬間、俺は唇に何か柔らかいものが当たっていた。

それが何かは最初理解できなかったけど、何故か部長の顔がどアップだった。

……………要約：部長とキスしてる。

「ぶ、部長……………い、今のって…!!」

一分近いキスを終え、俺は錆付いたロボットみたいに声をうまく出せなかった。

「日本ではファーストキスは女の子は大事にするものなのでしょう？だからあなたにその、あげたのよ——責任、とらないと後がひどいんだからね？」

「ふあ、ファーストキスう!!」

マジかよ!?! 処女でキスも未経験だったのかよ!!

でも、幸せだあ……………!!

「それと私、イツセーの家に住むことにするから」

「へえ、そつすか!?! ってええええええええ!!?!」

「当然よ。イツセー、貴方は私の下僕なんだから、交流を深めないと。ね？」  
なんかまた、騒がしくなりそうだなあ。

第二章：戦闘校舎のフェニックス・完



## MAGIC番外編 『メイドさんと、出会います!』

よう、皆！イツセーだ。

俺は今、ドライグが何時も見ているカードゲームのアニメをアジアとリアス部長、そして龍王で俺の使い魔であるティアマトと一緒に視聴中だ！

……女の子が楽しめる要素多分ないと思うけどなあ。

『よっしや行け！そこだ!!』

『旋風の、ヘルダイブスラッシュャー!!』

『グオオオ!!』

『ギヤアアア!!』

『アイツ………融合と言う名前の癖に融合を使わなかったぞ！どう言うことだ!?!』

『俺はユーゴだ!!』

……スタツフも楽しんでるだろ、コレ。

「あのドラゴンさんかっこよかったです」

「機転の聞くプレイングをするわね、あの子……」

『相棒！コレ覚えよう！新しい技はコイツで決まりだ!!』

何でだよ!!

まあ、風纏えば出来ねえ事ないと思うけどさ……。

「しかしこの様なアニメにハマるとは……お前のライバルが見たら泣くぞ。確実に」

『人は……何時か必ず変わるモンだよ』

「開き直るなツツーの」

俺は左手の甲を叩いた。

『ふう……今週も満足だぜ』

「ホント楽しそうだな、お前」

「じゃあ、折角だしおやつでも食べましようか?」

「あ、準備しまーす!」

早速俺とアーシアはお菓子を、部長とはお茶の準備を始めた。

「くうく、美味しい!部長のお茶、最高つすよ!」

「体がぼかぼかしますく……!」

「うん、美味しい」

「ふふつ、喜んでいただけで何よりだわ」

そのまま和気藹々と話が弾んでいくと、ここでアーシアが俺にある事を聞いてきたんだ。

「そう言えばイツセーさん」

「ん？」

「部長さんのお家のメイドさん……グレイフィアさんとお知り合いなのですか？」

「あー……」

そう言えばまだ言ってなかったつけ？

すると、部長とティアも興味深げに目を細めた。

何か、嫌な予感が……

「確かに親しげに話していたな……」

「それは知らなかったわ……イツセー、話して貰えるかしら？」

いや、部長……魔力たぎらせておいてその質問は……！

それもう答えなさい、って言ってますよね!?

でも何時か話す事だしなあ……しやーないか。

「えっと、あれは確か……」

~~~~~

俺がまだ小学生の時に、夏休みを利用して冥界に修行に来てた時だ。

え？何で来れてんのかって？そこはドライグの力だよ。

「よーし！行くぜ、ドライグ！」

『おう』

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

その時俺は冥界の山で猛獣相手に禁手の力をコントロールするための特訓をしてたんだ。

「おりゃあッ!!」

「グギヤアアアッ!?!」

まあ普通にぶん殴ったりしたり、筋トレとか普通の特訓だ。

そのお陰で、ここまで成長出来ただけだな！

《Balance over》

「うわっ!?!……もう解除かよー?」

『今度は45分……この前の修行の時よりかはマシになってるさ。嘆いても、持続時間は伸びんぞ』

「ちえーっ」

『まあ、腹が減っては何とやらだ。取り合えず、休憩だ』
「やったー！……っつて！」

『どうした相棒？』

「お、お握り………忘れた」

『……あらら。どうすんだ？』

「うゝ………そこの猛獣、美味いかなあ……？」

「生で食う気かお前？絶対腹壊すぞ」

「でも腹減ったよゝ!!」

あの時はホント困ったな。

んで、そんなときに出会ったのが……

「……人間の、子供？」

「んあ？」

グレモリー家のメイド長、グレイファイアさんだったんだ。

「お姉さん誰？」

「…………それは此方の言葉です。何故貴方の様な小さな子がこんな辺境に?」

「ん〜…………修行!」

「修行…………ですか」

「うん!」

「…………ここが何処だか「冥界でしょ?」ツ!?何故、この場所の事を…………!」

「えつと…………俺の師匠に教わった!」

「その方はどちらに?」

「え〜つと…………」

俺が赤龍帝の籠手を展開しようとした時に、

ぐう〜…………

俺の腹が鳴ったんだっただな!

あん時はホント恥ずかしかったな〜

「…………お腹が、空いてるのですか?」

「うん…………実は昼御飯のお握り忘れちゃって」

「……………少し、お待ちを」

「へ？」

グレイフィアさんは転移魔法で消えて、次に来たときは手に皿を持ってたんだ。そこに乗ってたのが、お握りだった。

「…少ないですが、どうぞ」

「……………良いの？」

「はい」

「…いったただきまーす!!」

腹が減ってた俺は、無我夢中でそのお握りを平らげた。

それぐらい腹が減ってたし、それぐらい美味かったんだ！

「……………何故、疑いもなく食べたのですか？」

「ふい／＼……………え？」

「私が毒を盛っていた可能性を、考えなかったのですか？」

「う／＼……………何となくだけど、お姉さんそんな事する人に見えないもん。でしょ？」

「ツ！／＼／＼」

「…どしたの？顔赤いけど」

「な、何でも御座いません……………！」

「???

そんな事があって、俺はグレイフィアさんに色々と質問を受けた。

「……成る程。では、今までにこの冥界の結界をくぐり抜け、冥界の山に来ていた人物も、全て貴方なのですね?」

「うん、多分そーだよ」

「この様な事をした理由は?」

「だから修行だつて!嘘は付いてないよ!」

「……………分かりました。信じましょう」

「え?」

今度は俺がびっくりしたよ。

まさか信じてくれるなんて思わなかったからな。

「先程の言葉を借りるなら……貴方は嘘を付く人間に見えないから……です」

「……へへっ、そっか!……あ、だったらさ!これからこの山で修行する許可くれよ!町とかには降りないからさ!」

「……それは、魔王様に聞かねばなりません。それでも、宜しいでしょうか?」

「うん!」

そもでもつて俺はグレイフィアさんと転移魔法で、魔王……サーゼクス様の元に

向かったんだ。

「成る程……………だが何故君の様な子供がここに？ご両親は心配するのではないのか？」

俺はサーゼクス様の前で話を聞いていた。

「両親は…亡くなりました」

「……………軽率な質問、すまなかつたね」

「……………」

その時俺は呆然と見ていた。

何故ならサーゼクス様が俺なんかには頭を下げていたからだ。

「…意外そうな顔だね」

「あ、いや！まさか、謝る魔王様っているんだな〜と思ひまして、ハハ……………」

「ハハハ、縮こまらなくて良いよ。それではさっきの話だが……………許可しよう」

「ホントですか!?!」

「勿論だ。先程の御詫びも兼ねてね。ただし、町には降りないでくれ。住民が混乱してしまふからね」

「了解です！」

「では、君をあの山に送り返そう」

「では、修行も程々にね」

「はい! ホントにありがとうございます!!……………それと、メイドさん!」

「…何か?」

「お握り、ご馳走さまでした!」

「…………ツ／＼／」

「じゃ!」

「グレイファイア…………君にも春が来たんだね」

「さ、サーゼクス様?!」

「うんうん、何も恥ずかしがらなくて良い。彼は中々良い顔立ちをしているしね。そう

だグレイファイア、暫くは彼にご飯を持っていくと良い」

「…それは」

「うん、命令だ。父上と母上には、話を着けておくよ」

「サーゼクス様……畏まりました」

sonde その次の日から、グレイフィアさんは俺に昼御飯を持ってきてくれた。

グレイフィアさんの作る弁当は何れもすげえ美味しくて、小学生の俺はどう表現したら良いかわかんねー位美味かったんだ。

「…そう言えば、お名前をお伺いしてませんでしたね。何とお呼びすれば、宜しいでしょうか？」

「うくん、イツセーで良いよー」

「畏まりました、イツセー様」

修行の休憩中は、ドライグと話す訳にいかないからグレイフィアさんと会話をしていた。

「…ふふつ、イツセー様はリアスお嬢様より一っ年下なのですね」

「リアス、お嬢様……?」

「魔王様の妹様です」

「へえ、魔王様には妹さんがいるんだ」

「イツセー様はご兄弟は？」

「いないんだ。俺一人っ子だからさ。メイドさんは？」

すると、グレイフィアさんはその時、あまり覚えてないけど、表情を曇らせていたんだ……………。

「ええ、います……………弟が。ですが……………」

「……………」

「今は、行方不明なんです……………何処で何をしているのか、私には全く分からないのです」
「……………だからメイドさんは、そんなに悲しそうなの？」

「…え？」

「だって、何か心からあんまり笑ってない感じがして…。でも、そんなんじや弟さんもきつと悲しく感じるよ！何処にいたって、きつと心の中じや、メイドさんが心から笑う事を願ってるよ！だって……………姉弟だもん！」

「っ！」

俺の言った言葉に、グレイフィアさんは衝撃を受けたか様に動かなかった。

でも、きつとそうだよ！

「……………それでも辛いなら、俺がメイドさんの心の支えになるよ。弟さんが見つかるまで」

「……………？」

「死んだ父さんと母さんが言ってくれたんだ。俺は希望なんだって。だから、これからも皆に希望を与えていけて、俺は最後の希望だって、言ってくれたんだ」

「……………」

「俺、まだまだ弱いけど……………何時か強くなったら、改めて、メイドさんの希望になる。そう言うよ！何時か、必ず！」

「……………ツ、うう……………」

すると、その時のグレイフィアさんは俺に抱きついて凄く泣いていた。

まるで、溜め込んでいた悲しみを吐き出すかの如く……………

『……………ドライヴ、俺、悪い子だな。女の子泣かせて』

『…女の子って歳ではないぞ。寧ろ“女”だ』

『でも女の子だよ、今のこの人は。涙を流してる女の子は、何歳でも女の子なんだよ！』

『……………コイツ、将来凄くことになる気がする』

「すみません、いきなり……」

「ううん、良いよ!泣きたいときは、泣かなきゃ!」

「……貴方がまた今より強く、逞しくなったら、あの言葉を言ってくれますか?」

「……うん!」

「…ありがとう」

チュツ……

「へ……………?!」

「ふふっ、前払いです」

「そうだよ、俺……グレイフィアさんにキスされたんだよ!!」

「頬だったけど、その時のグレイフィアさん、凄く可愛かったんだよ!!」

「まあ、こうして俺はグレイフィアさんと会ったんだ……………」

「(あ、ちゃんとキスされた事は部長達には伏せてるぜ☆)」

~~~~~

「……つて感じですね、つてアレ？」

俺が話し終えると、皆ウンウン唸っていた。

どうしたんだ……？

『グレイファイアがライバル……これは厳しいわね。でも

、負けないわ！』

『まさかイツセーさんとグレイファイアさんが出会ってるなんて！で、でも！絶対に負けません！』

『ふん……あのようなメイドに、イツセーは渡さん！』

『まあ、コイツ自身、あまりその時の事……特に魔王との会話は覚えてないけどな』

「俺会話したのか、マジで……」

『ああ、思い出したんだ』

# MAGIC番外編『追憶——サバト』

人には、忘れたくない記憶がある——

例えば、テストで100点を取ったり、好きなあの子と付き合えたり……と、多種多様だけど、皆にもある筈だ。

俺……兵藤一誠にも、それは存在する。

それは——俺が魔法使い、ウィザードになる切欠になったとある儀式……

今日は皆だけに、それを教えよう……。



くくくくくくくくくく

あれは、俺が高校一年の時……。

俺はその日何故か、とある海岸にいた。

そこには、俺を含めて、20人程の人達がいた。

何でいきなりそこにいたのか、それは未だに謎だ。

「なあドライグ。何で俺、こんな所にいるんだ？」

『さあな……』

俺だけでなく、周りの人達も同じ様に首を傾げていた。

「そう言えば、今日は日食なんだよな……」

『……相棒、始まったぞ』

ドライグに言われて空を見上げると、青空は雲に包まれ、

太陽が月に覆われていた。

「綺麗……」

「すげえ……!」

周りの人達も感心しながら日食に見惚れていた。  
かく言う俺も、初めて見る日食に心奪われていた。

『……何だ。この異質な魔力は?』

だけど、ドライグだけは違ったんだ。

『どうしたんだ?ドライグ』

『……相棒、この場から逃げろ。今すぐにだ!』

『は?いきなり何言って……』

うわあああッ!!

ドライグと会話していた俺は突然の悲鳴に現実に戻された。

すると、驚きの光景が目に映った。

「あ、あああ………!!」

そこにいた内の一人の体全体に、紫の輝が走っていた。

「ぐ、グオオオオオ!!」

かと思うと、その人の体が割れたガラスの様に消え去り、そこにいたのは、冥界でもないであろう……怪物だった……。

唖然とした時、その場に笛の音が響き渡った。

すると、大地から大規模な魔力が溢れ出てきた。

その当時まるで魔力の才能がなかった俺にも分かるほど、それは恐ろしい質の魔力だった。

「い、いやあああああっ!!」

「ああああああっ!!」

「た、助けて……くれえ!!」

最初の悲鳴を皮切りに、周りの人達も同じ様にどんどん

と紫の輝が走り、次々に化け物へと変わっていた。

尋常ではない、悲鳴を残して………

「何だよコレ………ウグウツ!」

『相棒! どうし……っ!』

そしてそれは俺にも表れた。

「が、ああああああっ!!」

自身の体の内側に大地から溢れる魔力が流れ込み、自身の体の内側から抑えきれない

”ナニか”が湧いて出てくるのを、感じたんだ。

それはまるで、住みかを求める野獣の様に…

『相棒! 気を確かに持て! 自我を失うな!!』

「あ、がああ……!!」

『相棒!!』

「ウワアアアアアアア!!」

ドライグの声も殆ど聞き取れず、自分に走る輝も大きくなっていく。

俺が何とか踏ん張ってる間にも、他の人達は、どんどん化け物へと成り果てていた

……。

「へ、へへ……ドライグ、ゴメン…俺、何か……いし、きが……」

『相棒………くそつたれえ!!何故俺は何も出来んだ!!』

「責めん、なよ……。お前は、何も…わる、く、な………だろ………」

もう意識すらまともに機能してなかったその時、その声は聞こえた。

………俺に全てを委ねろ。そうすれば楽になれるぞ？

「ら、くに……？」

『相棒！オイ聞いてんのか相棒!!』

……………ああ、なれるとも。それに、この様な苦痛に耐えて、何になる？もうこの世には、お前の両親も、いないと言うのに？

「そ…だよな……。俺、もう、頑張らなく、て…い、よな…？」  
……………さあ。全てを、俺に―――!

その甘言に惑わされ、全てを委ねようとした俺の耳に聞こえたのは、

『…お前は！死んだ両親の、そして茂殿の最後の希望なのだぞ!?それなのに、こんな所で果てると言うのか!』

必死に、涙を堪えながら語りかけてくる、相棒の声だった……。

「き、ぼう……………?グアアッ!……………そうだ、俺は……!」

その時、背中からナニかが生えてきたが、俺はそれを無視して、日食の光に、手を伸

ばしたーーーー

「俺はーーーー！！！」

~~~~~

『……………ぼう！相棒！！』

「ん……………」

それから何時間とも言える時間が過ぎた後、俺はドライグの声によって目を覚ました。

「…………アレ？俺、どうなって…」

『…相棒。信じられない事だが…………お前は、』

そのドライグの言葉を遮る様に、

「ハッハッハッハア！漸く出てこれたぜえ！！」

緑色の、細かい棘が沢山生えた怪物が、目の前に現れた。

「何だお前は!」

「オオツ!? 人間はつけくん! 殺っちゃいますかア!」

ソイツは剣を取り出して、俺に飛び掛かってきた。

俺は咄嗟に赤龍帝の籠手を展開しようとすると、

《エクスプロージョン・ナウ》

そんな音声が聞こえたかと思うと爆発が起き、目の前の怪物は吹っ飛ばされていた。

「グハアツ!? な、何だ一体……!」

ソイツが呟いたそれに答えるようにして、

「……………」

その攻撃の主……魔法使いが、姿を現したんだ。

「な、何だテメエ……!」

「…命が惜しくば、今すぐに消えろ」

「け、ケツ! 気分が削がれたぜ……!」

その魔法使いの言葉から感じる殺気に圧されたのか、ソイツはその場から消えていった。

「アンタは……」

「…よくぞ希望を捨てずに生き残ったな。お前は、魔法使いになる資格を得た」

「………は?」

最初は理解出来なかったよ。

いきなり魔力もろくに持ってなかった俺が、魔法使いだぜ?

《コネクト・ナウ》

その魔法使いは魔方陣を展開すると、その中に手を突っ込んだ。

次にその手には、手形の付いたベルトと、4つの色をした指輪だった。

「これから先、お前は奴等……ファントムに否応なしに狙われるだろう。その為の、力だ」

「……」

「そして、兵藤茂の指輪店を訪ねろ……………」

「……オイ、アンタ！何でおっちゃんの事……」

《テレポート・ナウ》

俺の質問に答えず、白い魔法使い（俺とドライグはそう呼んでる）は一瞬にして、その場から消えた。

「……アイツ、一体」

『……………話を戻すぞ、相棒。お前は…魔力を得たんだ』

「……へ？ちよ、ちよつと待てよ。俺、魔力なんて……！」

『…自分でも分かかってる筈だ』

……そう、あの時のドライグの言う通り、俺は今まで自分に感じなかった筈の魔力を、感じていた。

「だけど、何で魔力が……？」

『原因は恐らく、先程の出来事だ。推測するに、膨大な魔力が流れ込んだ影響で、お前の中に眠っていた魔力が活性化され、目覚めたんだろう』

「……成る程、な」

俺は白い魔法使いから手渡された指輪とベルトを眺め、真実を知るために、おっちゃんの前に向かった。

~~~~~

「イツセー……！どうしたんだお前、ずぶ濡れで！」

「おっちゃん……この指輪、何か知ってるのか？」

「……お前、何でそれを……」

あの後俺は中学まで俺を育ててくれた叔父の、兵藤茂を訪ねた。

貰った指輪を見せると、おっちゃんの顔色は変わった。

「そうか……そんなことが……。すまないイツセー。俺が作った指輪のせい……」

「謝らないでよ、おっちゃん。おっちゃんはただ頼まれて作っただけなんだからさ」

『……で、相棒。どうすんだ？これから』

「……俺は」

俺はおっちゃんとドライグに答えるようにしてベルトを着けた。

「っ！」

『相棒、お前！』

「…魔法使いに、なるよ。もう…あんな悲劇を起こさせない為に！」

「…分かった。俺も協力しよう」

「おっちゃん……」

「俺はお前の為に指輪を作る。それが、せめてもの罪滅ぼしだ……そうしないと、晴人と曆に申し訳ない」

『……茂殿が協力して、俺が何もしないのはアレだからな。俺も一緒だ、相棒！』

「ドライグ…ありがとよ」

そこから、俺の魔法使い……ウィザードとしての戦いが、始まったんだ。

~~~~~

俺は決して忘れない、あの悲劇を……。

あんな地獄を、2度と起こさせない為に――

「さあ、ショータイムだ！」

俺は今日も戦い続ける。

皆の希望を守る為に、そして――

皆の希望になれるように……………。

第三章：月光校庭のエクスカリバー

MAGIC 15 『聖剣———エクスカリバー』

「ほう、アイツがどうかしたのか？」

とある洞窟では、とある二人組が会話をしていた。

一人は女、だがもう一人はそこに何故か安置されたベッドを覆うカーテンに隠れ、姿の確認は出来ない。

「アイツはファントムを増やそうとしていません。寧ろ自身の野望の為に、ファントムの力を利用している……！」

「それで？」

「あの男の処罰を………ワイズマン！」

頑張るねえ、と女の後ろでしゃがみこんで他人事の様に見える無精髭の男はファントムであり、名はフェニックス。

そして女の方は、以前イッセーと邂逅した女ファントム、メデューサ。

「……………好きにさせておけ」

「なっ……………」

だがメデューサの話し相手……ワイズマンはそう事も無げに言い放った。

「奴は元々墮天使……………己の欲に忠実な存在だからな」

「で、ですが……………」

「……………度が過ぎれば、私自らが処罰する。それで良からう……………」

「……………ハイ」

納得は行かなかったが、他ならぬワイズマンの意志。

メデューサは逆らえず、フェニックスを伴ってその場から去って行った。

「……………」

ワイズマンは、ただ静かに佇んでいた。

「オイメデューサ、アイツの何が気に食わねえんだ？」

生い茂る森を歩きながら、フェニックスはメデューサに問い掛けた。

「決まっている……ワイズマンのご意志に逆らわぬ奴の傲慢さ、それだけだ」

そう不機嫌に返すメデューサに、「傲慢さならお前も負けてねえよ」と内心突っ込むフェニックス。

「けどよお、それ以外だったら奴は俺らと同じぐれえに強いぜ？俺だって一度死を覚悟したぐれえだしな。……ま！」

そこで言葉を切ると、フェニックスは荒ぶる炎をたぎらせた。

「一度魔法使いの野郎に殺られたんだ……今の俺だったら負ける気はしねえぜ！」

「……戦闘凶が」

そう鼻息荒く叫ぶフェニックスに、メデューサは心底面倒そうに溜め息を吐いた。

~~~~~

イツセーside

「……………朝、か？」



日の光が窓から差し込み、鳥の囀りを聞きながら俺は目を覚ました。  
さあて、起きますか……………

「すう……………すう……………」

って何で部長が俺の部屋でしかも裸で寝てんだよおおおおお!!?

……………あ、そういやライザーとの決戦後、部長が急に俺の家に住むって言ってたっけ。

一応、おっちゃんには報告済みだけど、何故怪しまずに快諾したんだよおっちゃん……………!!

お陰で心臓に悪い目覚めだよ!!でも朝からおっばい見られるからありがとうござい  
ます!

「んん……………おはよう、イツセー」

「お、おはよう、ございませす…」

寝起きの部長は何かこう、色っぽいなあ……………って、違う違う!

「えっと、何で俺の部屋に……？」

「…イツセーの温もりを感じたかったからじゃ、駄目……？」

ぐはっ！何と言う官能的な言葉ア!?

上目遣いでそれは反則です！

「で、では、何故に裸で……？」

「私、裸じゃないと眠れないのよ」

「それは不味いと思いますが……」

少なくとも思春期の男子高校生には刺激が強すぎるよ！

朝のスタンドアップがあるしき……。

「ご免なさいね。でも、こうしてイツセーとくつつくと、凄く落ち着くの……」

部長は愛しげに俺の頭を抱きながらそんな事を耳元でおっしゃった！

くうく、下僕冥利に尽きます!!

「イツセーさあん！起きてますか〜？」

……なんて気分浸つてると、アーシアが扉をノックしてきた！

ま、マズイ！こんなところアーシアに見られたら……！

「あら、アーシアおはよう。今すぐに行くわ」

「っ！」

ああ、扉の向こうで驚いたな……。

すると、アーシアは間髪入れずに扉を開けた。

「ふふっ、おはよう」

「よ、よお………」

数秒間の沈黙……だがそれはアーシアによつて破られた。

「わ、私も脱ぎますううう!!仲間外れは嫌ですううう!!」

だあああ、脱がなくて良いよおおお!!?

『よー相棒。朝から修羅場ってんな』

やかましい!!

楽しそうな声で言うんじゃない!!

イツセーside out

木場 side

やあ、僕目線は久しぶりかな？

もう時間帯は放課後で、オカルト研究部の活動前の時間だ。

………つてアレ？

「部長、イツセー君は？」

何時もその窓際でドーナツを食べてる筈のイツセー君が今日はいなかった。

「ああ、イツセーはアルバイトなの」

「先輩、アルバイトをしてるんですね……」

でも聞けば独り暮らしが長いから、生活費を稼ぐ為だろうね。

「でも何のアルバイトかは教えてくれなかったんですよ……」

アーシアさんが首を傾げながらそう呟いた。

へえ、何だか気になるね……。

「……一応、彼に私の使い魔をつけてあるから、所在は把握済みよ」

部長、それ一步間違えたらストーカーですよ……。

ま、まあ、イツセー君は以前墮天使に襲われてるから、その為の監視……つて考えた  
ら大丈夫、かな？

と言うか彼の場合、襲われても返り討ちにしそうだけどね。

「……では部長。今日の活動は？」

「イツセーのバイト先に視察よ」

何だか部長がイツセー君のお母さんに見えてきたよ……。  
でも、どんなバイトをしているかは気になるしね。

「さ、出発しましょ！」

~~~~~

部長の先導によって辿り着いたのは、「面影堂」と言う名前の小さいお店だった。

「部長、ここにイツセー君が？」

「ええ、この子が見てるしそれに……ほら」

部長が指差した先にあつたのは、先日冥界に乗り込んだ際に乗っていたバイクだった。

「イツセーさんのバイトです……。でも何だかドキドキします〜！」

「ここに間違いなくいますね……まるで、刑事ドラマみたいですね」

うん、確かに。

……でもその原理だと、イツセー君が何だか犯罪者に見えてきたよ…。

「では、入りましょうか？ 部長」

朱乃さんの発言で、部長はお店の扉を開いた。

すると、

「いらっしやいませ！………って、部長？」

赤色のエプロンを着けたイツセー君が接客していたんだ。

木場 side out

イツセー side

な、何で部長達がここに？

「おいイツセー、どうしたんだ？」

驚き固まっている俺を心配してか、おっちゃんが奥から出てきた。

「あ、茂さん！」

「おお、アーシアちゃんか！」

そういうやアーシアはおっちゃんと顔合わせてるけど、部長達は初めてだったな。

「おっちゃん、紹介するよ。オカルト研究部のリアス部長とその部員達だよ」

「リアス……この間の電話で言っていた子か？」

「初めまして、兵藤茂さん。私はオカルト研究部部长、リアス・グレモリーです。兵藤一

誠君には、お世話になっていきます」

「おお、ご丁寧にも。イツセーの叔父の、兵藤茂です。此方こそ、甥がお世話になって申し訳無い」

挨拶を終えたおっちゃんは、部長達を部屋に上げた。

丁度店仕舞いだったから、序でに上がっていつてくれとの事だ。

と、前に俺が使っていた部屋で部活動の報告等をしていると、おっちゃんが段ボール

を持って入ってきた。

なんか、嫌な予感……………!!

「茂さん、それは？」

「ああ、良かったら皆に見てもらいたいんだ。イツセーの小さいときのアルバムだよ」

はい、的中ううう!!

「べ、別に良い」「是非っ!!」俺の意見は無視かよおおおお!!?」

ちくしょう!

おっちゃんは意気揚々とアルバムを開いて、皆それを興味津々に眺める!

「これが5歳の時のイツセーだ」

「あらあら、サッカー少年ですわね」

「この時からドーナツ食べてたんですね…………」

くっそう……………こんなに恥ずかしいとは思わなかったぞ!

親族以外の人にアルバム見られるの!!

「小さいイツセー小さいイツセー小さいイツセー……………」

「部長さん!その気持ち、分かります!」

「アーシア！」

何か部長とアーシア意気投合してるし！

「大変だね、イツセー君……」

「うるせえよ……もう俺のライフはゼロだよ！」

「アハハ………ッ！」

苦笑いしながらアルバムのパージを捲った木場は、そのページを見た瞬間、その目付きを鋭くさせた。

「イツセー君、この写真は……？」

「ん？……ああ、これか。今いない幼なじみとのだな。何か親父さんが教会出身者だとか、何とかで……」

「この、剣は……？」

「剣………これの事か？……ってオイ」

俺はその時、木場の目を見た。

その瞳に揺らいでいた意思是————怒り、憎しみと言った、負の感情。

「この剣は————聖剣だよ」

次回、D×Dウィザード

ガーゴイル『さっさと絶望してほしいんすけどねえ』

少年「僕は……!」

イツセー「諦めるな!!」

M A G I C 1 6 『精神世界————アンダーワールド』

「来い!ドラゴン!!」

MAGIC 16 『精神世界——アンダーワールド』

よお、イツセーだ。

今日は学校が休みで、アーシアとお出掛け真つ最中だ。

部長は冥界の方にお呼ばれしていて、今はいない。

「いっぱい買いましたね」

「まあ、こっただけ買えば暫くは飯の心配は大丈夫だな！」

何時も出掛けるショッピングモールに行くと、何やらセールをやっていて、大量に買い込んだ訳だ。

んで、今はその帰り。

「アーシア、学校楽しいか？」

「はい！皆さん凄く優しく、私も嬉しいです！」

「そっか！」

……過去に辛いことがあったからこそ、今のアーシアは出会った時より輝いて見える。

何時までも、この笑顔を守らないとな…!

と、そんな時、

「うわあああ!!」

急に近くから悲鳴が聞こえてきたんだ!

「な、何でしょう…?」

「……行こう!」

「は、はいっ!」

俺とアーシアは、悲鳴の聞こえた方向に走っていった。

するとそこには、

「く、来るなあ!」

『ここで会ったが何年目か知らねえつすけど、さつさと絶望してもらおうつすよ』

丸まった体に翼の生えた怪物が、中学生位の男の子を襲っていた！
白昼堂々ファントムかよ!?

「このやろっ!」

『ぐへえ!』

俺は近付きキックでファントムをその子から遠ざけた!

『何なんすかお前? 俺様の仕事の邪魔をしないで欲しいんすけど』

「お前らの仕事の邪魔をするのが、俺の仕事なんすよ!」

《ドライバーオン・プリーズ》

俺はベルトを発現させて指輪を付けながら、ベルトを操作した。

《シャバドウビタッチヘンシーン! シャバドウビタッチヘンシーン!》

「変身!」

《フレイム・プリーズ! ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!》

割りと久しぶりに変身すると、ファントムは驚いた様子で俺に向かって叫んだ。

『ああ! お前が噂のウィザードって言う指輪の魔法使いっすかあ!?!』

「へえ、俺も有名になったなあ。アーシア! その子を頼む!」

「わ、わかりました!」

《コネクト・プリーズ》

魔方陣からウィザードソードガンを取りだし、ソードモードに変形させてから、俺はフアントムに斬りかかった！

『うおっ!? 不意討ちとは卑怯っすよ!』

「すっすっすうるせえっす!!」

『おまえもうるせえっす!』

「でやあ!」

『むうっ!?』

っ、受け止めやがった!?

『うぼあ!!』

「どわっ!？」

しかも炎まで吐いて来るし!

確かに見た目少しドラゴンっぽいもんな…。

『どうしたんすか? 攻めてこないんすか?』

「余計なお世話だっ!」

だったら突き攻撃だっ!

けど……………

『はあ!』

ガアン!

フアントムは力を込めると、その体が石みたいになつた!
いてえ!なんつー固さだ!?

『この俺、ガーゴイルには傷ひとつつけられない、つすよ!』

「なっ……………ぐあああつ!」

の、のし掛かりかよ!?

くっそう、このスタイルじゃ持ち上がらねえ…………!

『ほくれほれ!どうしたんすか!?!さっさと攻撃しないと、死ぬつすよ?』

「…の、野郎…………!」

フアントムは余裕綽々で俺にのし掛かりを続ける!

その体の固さを活かしてな、コイツ……………!

けど、何時までも殺られっぱなしじゃねえ!

「っ、今だ!」

浮かび上がった瞬間に指輪を付け替え、スタイルチェンジだ!

《シャバドウビタツチヘンション……………ランド・プリーズ!ドツドツドツドツド、ドン

ドツドドン! 》

『色が変わったア!?』

落ちてくるファントムを立てて受け止める!

くそつ、やっぱり重いな……!

けど、これで!

「そうらよつと!」

『のわくつ!?』

俺は受け止めたファントムを投げ飛ばした!

だが、ファントムは落ちる寸前に空に浮かんでやり過ぎした!

「てめえ! 浮かぶとか卑怯だぞ!」

『誰も浮かべないとか言っつてないっすよ〜! そんなじゃ!』

「つ! オイ待て!!」

………つて、俺この状態だと翼出せねえんだつた!

俺は逃げるファントムを見送るしか出来なかつた………。

「くつそお! ドライグ、アイツの魔力は?」

『安心しろ。既に記録済みだ』

取り敢えずは、また現れても大丈夫だな……。

「……つと。君、大丈夫か？」

「あ、はい……」

「ここじゃ何だし、別の場所で話聞くとよ」

俺はアーシアとその子連れて、行きつけのあの店に向かった。

「あ〜！ びっくりなんだあ〜！ いらつしや〜い！」

「ちわつす」

その店とは、俺が小さい頃からお世話になってるドーナツ屋さんだ。

車にドーナツを並べて、そこに並べられたテーブルで食べるオープンテラス的な感じで、そこそこ人気だ。

んで、今俺に挨拶したのがこの店の店長（年齢不詳）だ。

黄色い髪をポニーテールで結わえた、笑顔が素敵な人……この店の人気の一つなんだ。

「あつ、そうだ！ 新作のドーナツ作ったんだ〜！ その名も、”ドラゴンフルーツドーナツ

”!”

……そしてこの人は、結構アイデアウーマン? って奴だ。

ちよくちよくこうやって、新作ドーナツを作って試行錯誤してる……けど、そのセンスが凄くぶっ飛んでると言うか、何と言うか……。

普通ドーナツにドラゴンフルーツは乗せないよ!!

相変わらず奇抜過ぎるよ!

まあ、でも——

「食べる? 食べる!?! 勿論——」

「プレーンシュガー3つで」

俺が食べるのは決まってるけどね。

「ああん!……って、3つ?」

「うん、ちよつとね」

もう一タリアクションには突っ込まんぞ……!

店長も訳ありと悟ったのか、それ以上は何も言わずにドーナツを差し出してくれた。

「サンキュー、店長」

「はい！毎度あり〜」

ドーナツ3つを受け取って、アーシアとその男の子に差し出した。

「はい、どうぞ」

「い、頂きます……」

まあ、いきなり怪物に襲われたんだ。

いきなり話を聞くのも野暮だしな。

「君、名前は？」

「えっと、葛葉直樹です」

「直樹君か。えっと……どうして、怪物に襲われてたか、心当たりはあるかい？」

「心当たり……ですか。分からないですけど僕、此方に来たの久し振りなんです」

「久し振り？」

元々駒王町の出身じゃないのか？

「はい。元々北の方で生まれたので……此方に来たのは、父と一緒に来た時以来なんです」

「今回はいないみたいだけど、お父さんは仕事かい？」

「………いえ。僕が中学に上がる前に、事故で……」

「…ゴメン。嫌な事聞いちゃって」

「い、いえ！ただ……」

「ん？」

「その、父さんの死の真相を、知りたくて……」

「どういう、事ですか……？」

アーシアの疑問は俺も同じだ。

事故で亡くなったんじゃ……

「……実は、父さんが死んだ事故は、色々と不明瞭な点があつて。此方に来た時の旅行中だったんですけど、車が大破したのに僕は無事だったのもそうですが、父さんの死因が圧死と言うのが……明らかに事故での死因じゃないのが、怪しくて」

「それを調べようと……？」

「はい」

「因みに、事故が起きたのは？」

「7年前です」

「そっか……」

……圧死、か。

ドライグ、どう思う。

『恐らくは、その父親がゲートだったのかもしれない。そう考えるのが普通だろ？』
確かに、な……………」

『何か引つ掛かる事でもあるのか？』

いや、だったら生き残った直樹君を狙う必要性はあるのかなって。

ゲートじゃないなら、奴等も基本騒ぎは起こさない筈だし。

『……………まさか』

…そうじゃない事を、願うけどな。

「……………それは？」

「…父さん、警察だったんです。これは、死んだ父さんとの、唯一の繋がりなんです
直樹君は警察手帳を取りだし、そう語ってくれた。

「何時か、父さんの様な立派な警察になる……………。僕はそう誓ったんです。この手帳に」
「それは……………直樹君の希望なんですね」

「はい」

希望、か……………。

取り敢えずは話を打ちきり、直樹君を家に泊める事にした。

~~~~~

「ガーゴイル、お前指輪の魔法使いに邪魔されたんだって？」

「そうなんすよ〜」

夜のビル街、その一角で、フェニックスと作業着を着込んだ男が会話をしていた。

「魔法使いめ。忌々しい奴だ……」

メデューサは忌々しそうに吐き捨てた。

「けどよお、どうすんだ？また魔法使いに邪魔されちまうぜ？」

「もしそうなら、俺が真正面からぶっ倒すっす！」

「お！良い意気込みじゃねーか！」

フェニックスはそれを聞き、楽しそうにその男——ガーゴイルの背中をどついた。

「そう言うならば、干渉はせん。やってみろ、ガーゴイル」

「了解っす、姐さん！」

~~~~~

「ん……朝か」

部長まだ帰ってこないんだな……。

「い、イツセーさん！」

起きてポーツとしてると、アジアが慌てた様子で駆け込んできた。
どしたんだろ？

「な、直樹君が……いないんですっ！」

「なっ！」

不味い！

今、直樹君を一人にしたら……！

「くっ！」

「イツセーさん!?!」

驚くアジアに構わず、俺は家を慌てて飛び出した。

『相棒！当てるのか？』

……っ、だけど！

……そうだ。

俺はバイクに跨がり駆け出した！

『相棒、何処に行く!?!』

ちよつとな！

~~~~~

その頃、直樹はとある道路の脇にいた。

そこには花やお酒と言った物が添えられていた。

「父さん……」

そう、この場所が直樹の父親が亡くなった場所である。

受験等であまり来られなかった直樹は、ここで亡き父親に色々と報告をしていた。

「…俺、やっぱり父さんの死が、ただの事故死には思えないんだ。何で俺が無事だったのか、犯人が誰なのか、絶対に突き止めるんだ……だから、「見守ってくれ……っすか?!」」

だがそんな直樹の背後から何者かが現れた。

作業着を着込んだ男————ガーゴイルである。



「やつと二人きりつすね」

「お前……………」

「イヤー、感動感動。亡き父親に真相を解き明かす事を誓う息子！そんなに真相が知りたいなら教えてやるつすよ……………君のお父さんを殺したのは、俺つすよ」

「!？」

驚愕に目を見開く直樹に構わず、ガーゴイルは饒舌に語りだした。

「あの時の君は幼くて楽勝と思つてたんすけど、君の父親が立ち塞がつて邪魔をしてきたんすよね。だから、殺したんすよ。そしてさあやろうつて時に警察の奴等が来やがるから、絶望出来なかつたんつすよねえ」

「お前が、父さんを……………よくもお！」

果敢にもガーゴイルに向かう直樹だが、あつさりと言なされて首を掴まれる。

そしてその姿を、ゲートだった男から真のファントムの姿へと変えた。

「……………ぐつ、うう……………」

『君はこの辺には住んでないから諦めようかと思つてた矢先にやって来てくれたから、これで暫くは寝て暮らせるもんつすよ！さあ、さつさと絶望するつす!!』

「ほ、僕は……………」

その時、ガーゴイルに数発の弾丸が命中し、ガーゴイルは弾かれるように倒れた。  
『ぐあつ！』

「……………え？」

何が起こったのか分からず、直樹は周囲を見渡した。

「ふう、間一髪ってとこだな」

すると、その影は姿を現した。

その人物は、兵藤一誠その人だった。

「兵藤さん！」

「大丈夫か？直樹君」

「どうしてここが？」

「ん？おっちゃんに聞いたんだ」

イツセーはあの時、叔父の茂に聞きに行っていたのだ。

7年前に起きた自動車事故の場所は？と。

茂がそれを覚えていたために、イツセーはこの場所に辿り着けたのだ。

『お、お前……!!』

「よお、フアントムさんよお。また邪魔しに来たぜ？」

《ドライバーオン・プリーズ》

フレイムウィザードリングを付けながら、茶化す様にイツセーはガーゴイルにそう言った。

『クツソー！何処まで人の邪魔を！ホント迷惑な出しやばり野郎つす!!』

《シャバドウビタツチヘンシーン！シャバドウビタツチヘンシーン！》

「ソイツあ結構！俺のキャッチフレーズなんでね。変身！」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

現れた赤い魔方陣を潜り、イツセーはウィザードFSに変身した。

「さあ、ショータイムだ！」

ウィザードガンを使い、ガーゴイルに再び弾丸をお見舞いした。

『ぐううー!』

「はっー!」

『うお?!』

ガーゴイルの怯んだ隙を見逃さずに、ウィザードFSは蹴りを腹に放った。

少し宙に浮かんだガーゴイルに、更なるキックで追撃する。

『ぐおっ！……だったらこれはどうっすか!?』

ガーゴイルは呻きながら何やら石の様な物を取りだし、辺りに投げた。

すると、その石は忽ち複数の兵隊『グール』へと成り変わった。

『さあ、行けっす!』

『『『『ヴウ……!』』』』

「ちい!直樹君、逃げろ!」

《エクステンド・プリーズ》

「おらあああっ!」

『ヴウウウウツ!!』

ウィザードFSは直樹に逃げを促しながら、手足を自在に伸ばす魔法、”エクステン”を使い、グールの群れを一掃する。

『忌々しいっすね!くあっ!!』

「っ!うわあ!?!」

「ぐっ!」

怒ったガーゴイルが目を光らせて衝撃波を起こし、直樹と近付こうとしたウィザードFSは吹き飛ばされた。

その拍子に、直樹の懐から父親の形見である警察手帳が落ちた。

「ああつ……………、手帳が！」

『ん？アレが君の心の支えつすか……………それなら！』

それを見たガーゴイルは、何と警察手帳を炎で焼き払った。

「あ、ああ……………」

塵になっていく警察手帳を見た直樹の体に、紫の輝が走った。

「なっ……………」

『はっはっはっはっ！これで俺の勝ちつすね、指輪の魔法使い！』

「この野郎……………ブツ飛ばす!!」

その光景を見て笑いを上げるガーゴイルにキレたウィザードFSは、ウィザーソードガンをソードモードにしてガーゴイルを切り裂こうとした。

『無駄無駄あ！』

「くっ……………」

だがまたしてもガーゴイルは体を石の如く固くしてその一撃を受け止める。

『ただだけやっても、俺に勝つことは出来ないつすよ！』

悔しげにそこから離れたウィザードFSに、ガーゴイルは嘲笑しながら大声で言い

放った。

「……それはどうかな？」

『はあ？』

だがウィザードFSは、不敵に微笑みながら、とある指輪を取り出した。

それは、フレイムウィザードリングに似ているが、装飾が少し派手なのが特徴的なり  
ングだった。

「コイツ使うとドライグが喧しいから控えたけど………後悔するなよ？フアン  
サービスの時間だ!!」

ウィザードライバーのハンドオーサーを操作して、左手に付けた新しい指輪を翳し  
た。

《フレイム・ドラゴン！ボー、ボー、ボーボーボー!!》

翳した瞬間、魔方陣から炎のドラゴンが現れ、咆哮を上げながらウィザードFSに取り  
込まれた。

フレイムスタイルと同じ赤、だが先程と違いローブは真紅に染まり、両肩にあしらわれた赤い魔法石、そして胸部のドラゴンの頭を模した鎧。

魔法龍帝ウィザード、フレイムドラゴン。

ウィザードFDは、改めてウィザードソードガンを構えた。

『へん！幾ら姿を変えても、俺の固さに勝るものなしっすー！』

そう意気込み、ガーゴイルは体を硬化させる。

「……そうかな？」

《ビッグ・プリーズ》

ウィザードFDはウィザードソードガンのハンドオーサアの親指を引き、開いた手と握手するようにビッグウィザードリングを翳した。

「さあ、行くぜ……！おりゃああっ!!」

魔方阵を通じて、効果により巨大化したウィザードソードガンをガーゴイルに叩き付けた。

『ぐあああつ!?!』

流石に耐えきれずに、ガーゴイルは硬化を解除しながら吹っ飛ばされた。

『ん、んなの………反則……!』

「わりいがとつとと決めさせて貰うぞ」

《ルパッチマジックタッチゴー!ルパッチマジックタッチゴー!》

ウィザードFDは、フレイルムウィザードリング等と同じく赤い、龍が吐息を吐いているウィザードリングを右手に付け、そのまま翳した。

《チヨーイイネー!スペシャル・サイコー!》

そう音が響き渡ると、再び龍の咆哮が木霊し、ウィザードFDの背中に吸い込まれていった。

すると、ウィザードFDの胸部には、ドラゴンの顔が現れていた。

そのままウィザードFDは空中へと浮かび上がった。

「フィナーレだ」

そう短く告げると、ドラゴンの口から大火力の炎が放たれた。



『ぐ、ぐあああつ!』

その様な一撃に耐えられる筈もなく、ガーゴイルは爆発と共に消滅した。

「直樹君!」

一息つく暇もなく、ウィザードFDは直樹に駆け寄った。

直樹の顔は、絶望一色に染まりきっていた。

「もう、駄目だ……………僕は、僕は……………」

「…諦めるな!!」

「……………」

だがそんな直樹を、ウィザードFDは叱り付けた。

「大切な形見を燃やされて悲しいのは分かる!けどな、このまま絶望に負けたら、君の誓いは、一生叶えられないんだぞ!?!お父さんに誓ったんだろ!?!だったら諦めるなよ!」

「イツセー、さん……………」

「君は生きなくちゃならないんだ。君を命懸けで守った、お父さんの為にも!!だから

……………俺が必ず助ける!」

ウィザードFDはエンゲージリングを取りだし、直樹の右手に嵌めた。

「安心しろ。君の絶望は、必ず打ち砕く。約束する、俺が最後の希望だ!」

《エンゲージ・プリーズ》

ウィザードFDはそう言って直樹を優しく寝かせ、宙に現れた魔方陣の中へと飛び込んでいった。

~~~~~

『直樹！』

『お父さん！お帰り！』

『俺、大きくなったらお父さんみたいな警察官になるんだ！』

『そっかぁ！期待してるぞ！』

「ここが、直樹君のアンダーワールド……………っ！」

直樹のアンダーワールドは、父親と仲良さげに話す微笑ましい空間だった。

だがそんな平穏を壊すかの様に、その映像を突き破りファントムが姿を現した。

「気色わるっ……！」

ウィザードFDが思わず粒いた巨大ファントムの威容は、緑色のまるでナメクジの様

なファントムだった。

上半身は人間の手と同じ感じだが、その指に当たるモノは蛇となっており、掌には蛇の目が開かれていた。

「おーし、今回初めての出番だぜー！」

ウィザードFDから若干のメタ発言が飛び出たが、それは気にせず右手のウィザードリングを付け替え、ウィザードライバーに翳した。

《ドラゴラ〜イズ！プリーズ》

「来い！ドラゴン!!」

《グオオオオツ!!》

その叫びに呼応するかの様に、空中に現れた魔方陣から出てきたのは、銀を基調とした巨大なドラゴンだった。

そのドラゴンが現れた瞬間、ウィザードFDは解除され、元のフレイムスタイルへと戻った。

このドラゴンこそ、兵藤一誠の中に潜むファントム……ウィザードドラゴン。

ウィザードラゴンは巨大ファントム——ヨルムンガルドを捉えると、勢い良く交戦を開始した。

だが、巨大ファントム同士の戦いにアンダーワールドが耐えられる筈もないために、崩壊を助長させてしまっている。

「だーっ、やっぱ言うこと聞かぬーか?」

《コネクト・プリーズ》

ウィザードFSはそうぼやくと、コネクトによつて魔方陣からバイク——マシンウインガーを取り出すと、それを運転し始めた。

「ドラゴン！俺に従え!!」

『グオオオオツ!!』

だがそんなウィザードFSの言うことにも耳を貸さず、ウィザードラゴンは本能のままに暴れる。

「くっ！だつたらあ!!」

ウィザードFSは、ヨルムンガルドに吹っ飛ばされ地面を転がるウィザードラゴンにそのまま突っ込んでいった。

すると、マシンウインガーが半分に開いたかと思うと、ワイザードドラゴンの背中にくつついた。

「おらあつ!!」

マシンウインガーを背中に取り付けたワイザードFSはエンジンを吹かした。

それに答えるかの様に、ワイザードドラゴンは尾でヨルムンガルドを弾いた。

「っシヤア!行くぜ、ドラゴン!」

『グオオオオオツ!!』

先程まで言うことをまるで聞かなかったワイザードドラゴンだが、今は大人しくそれに答えるように吼えた。

ワイザードドラゴンは火球を吐きながらヨルムンガルドを追い詰めていく。

『ヴウウウウウ!!』

ヨルムンガルドも抵抗するように、光弾を放つもそれは全てワイザードドラゴンの羽ばたきによってかき消された。

「さあ、ファイナーレだ!」

《ルパッチマジックタツチゴー！チヨーイイネー！キックストライク・サイコー！》
 ウィザードFSは魔法を発動させると、ウィザードラゴンの背中から飛び上がった。
 続いて背中に取り付けたマシンウインガーが外され、ウィザードラゴン自身も、変形
 していく。

変形が完了し、マシンウインガーが背後に取り付くと、ウィザードFSはマシンウイ
 ンガーに足を合わせ、そのまま必殺キック——ストライクエンドを放った。

「だああああああつ!!!」

炎に包まれた一撃にヨルムンガルドは耐えきれず、押し潰されて爆発した。

「……つと。ふい〜」

『グオオオオツ!!』

~~~~~

それから2日後——

「そっか、もう帰るんだな」

「はい。故郷に帰ってーから改めて勉強します」

「頑張つて下さいね！」

「勿論です！じゃ、イツセーさん！アーシアさん！お世話になりましたー！」

直樹君は何か立ち直り、故郷に帰つて勉強するんだそうな。

父よりも凄いい刑事になる！……そう改めて誓つて。

「直樹君、警察になれますか？イツセーさん」

「ん？そんなのやってみなきゃ分かんないさ。でもなれるんなら、彼は良い警察になれるさ。な？」

「…はい！」

「うし！俺達も戻るか！部長が帰ってくるしな！」

「あう！ま、待つてくださーい！」

MAGIC17 『憎悪』

よう、皆。イツセーだ。

直樹君の事件から2日が過ぎたんだけど……

木場の様子がどうにも変なんだ。

つつてもおっちゃんの家で聖剣が写っている写真を見て以来、妙に呆然とすることが増えた。

まるで考え事をしているかのような立ち振る舞いをしていて、それで最初のほうは部長も気にかけていたけど、とうとう木場は悪魔家業にまで影響を及ぼしたらしく、結果昨日は部長に怒られた。

だけど木場はそれでも相変わらずだった。

どうしたんだよ、木場………



~~~~~

バチンツ！

次の日の夜、工場跡地の外でそのような乾いた音が響く。

頬を叩かれる音……叩かれたのは以前は俺だったが、今回は俺じゃない……木場だ。

はぐれ悪魔討伐に訪れていた俺達だけど、木場は何時もの冷静さを欠いてミスを犯し危うく全員殺られてしまう所だったんだ。

後から遅れてやって来た部長に状況を説明して今の状態に至る……というわけだ。

「今ので目が覚めたかしら？ 祐斗、あなたが行った独断行動がどれだけ危険なものだったか分かっているかしら？ 相手のはぐれ悪魔はA級クラスの危険指定のはぐれ悪魔だったのよ。イツセーがいてくれたから大事には至らなかつたけど、下手をすれば誰かが傷ついていたかもしれないの」

「……………」

部長は本気で怒っていて、厳しい口調で木場にそう言うが、木場は無表情で無言のまま

まだ。

『アイツ……考えすぎて逆に顔に出てないな』

……確かに。

……
 ドライグの言う通りだけど、俺には木場がそこまでになる程の事情が分からないんだ
 ……

「すみませんでした。自分一人で何とかできると思いましたが、結局イツセー君がいなければ僕は何もできませんでした。今日のごことは全面的に僕が悪いです……だから今日
 日はもういいですか？」

っ、コイツ……!!

淡々と、そして何処か面倒くさそうに部長に言い放ちやがった!

部長はそれを見てもう一度掴み掛かろうとしたが、俺は部長を止めた。

多分、今の木場に言っても意味がない……そう感じたから。

「イツセー、離しなさい。私は祐斗に言わなければいけないの」

「今言っても逆効果です。こいつのごことは俺に任せてください………木場」

「………何だい」

俺は背を向けて去ろうとした木場を呼び止めた。

木場は面倒くさそうに振り返った。

「木場……お前本当にどうしたんだよ？何時ものお前らしくないぞ」

「僕らしくない………？ふふっ、可笑しな事を言うね。僕は何時も通りさ……思い出したんだよ」

「……？」

「僕はそもそも、部長のために悪魔になったんじゃない。僕は僕の目的のために悪魔になった……」

『聖剣、か？』

「………流石は二天龍の一角、だね」

木場はドライブグの言葉を肯定して、その手に一つの魔剣を作った。

木場はそれを某世界の破壊者みたく撫でた。

『相棒の幼い時の写真に写った聖剣を見たお前の瞳を見た時点で察しはついたがな』

「お前……聖剣を、恨んでるのか？」

「そうだよ、僕はこの世で最も聖剣を嫌う……その中でも僕はある剣を嫌悪している。僕はそれを壊すために生きている」

木場は手に持っていた魔剣を消して、雨の降る空へと顔をあげた。

「僕は復讐のために生きている。僕はね、許さない……そう、聖剣を」

そしてその名称を——言った。

「僕はエクスカリバーを許さない」

……その言葉が嫌に俺の耳に響いた。

こいつ……木場の憎悪、全てが箆ったそれだけの言葉で、鳥肌が立った。

本気だ、木場は……本気で復讐のために生きている。

『復讐か………下らんな』

だがドライグは木場の思いを一蹴した。

それを聞いた木場はかつてない程に……まるで別人の様に激昂した。

「貴方に何が分かるっ!?!何も知らない癖に、僕の憎悪を、理解しての発言なのか!?!」
 『ああ、それを聞いて、理解した上で言った迄だ。俺は復讐者の末路を見てきた。歴代の赤龍帝にも復讐者は存在したが………どいつもこいつもろくな死にかたをしなかった。復讐に取り付かれたままだと、お前自身を亡くすぞ、小僧』

「……っ!それでも、僕は止まらない……止まるわけにはいかないんだ!!」
 ドライグの言葉にも耳を貸さず、木場は雨が降りしきる中、その場から去っていった。

イツセーside out

くくくくくくく

木場side

僕は雨にうたれてながら夜中の道を歩いている。

傘の代わりなんか、神器を使えば創れるけど、でも今の僕の沸騰した頭を冷やすには
 丁度いい。

……ろくな末路、か。

僕はさっきドライブに言われた事を思い出した。

『そんな事……分かってるさっ』

分かってはいる……でも、あんな言われ方をされると、其れまで復讐を糧に生きてきた僕自身を否定された様な気がした。

『……イツセイ君』

彼には、きつと憎悪なんて、憎んでいる物なんてないのだろう。

彼の笑顔には、裏表がない……様に見える。

でも、それが良いんだ。

彼に、復讐なんて似合わない。

「……………」

僕は魔剣を創造し、それを構える。

何故なら、路地裏から突然、神父服を着た男が現れたからだ……だけどその様子はどこか違った。

すると神父服の男はふらつきながらその場で倒れる。

「死んでる……」

そう、既に息絶えていたんだ。

そして体には、至るところに致命傷になりえる急所を的確に突いた後があった。

……ここまでの確なら、死ぬのに苦しみすらなく死ねるだろう。

でも、誰がこんなことを……僕がそう思った時だった。

「あらあら、そこにいる美男子君は悪魔君ではあくりませんか！ おひさつすねえ」

……つといても話すのは初めてでありんすけど！ ぎやははは!!」

……こいつは、アーシアさんの件で墮天使側についていたはぐれ神父！

フリード・セルゼン！

……まさかこいつがこの神父を？

「いや、ほんとここに来なけりや死ななかつたんすけどねえ？ まあ来たからには仕方

ないでございますから？せめて苦しみを与えないように殺してあげたんでありますよ
〜！きやはは！僕チン、天才？」

相変わらず、下種な笑いだね。

だけどちようど良い。僕はいらついていた所だ。

「まさかまだこの町にいたとはね……でも悪いけど、今の僕は機嫌が悪いんだよ」

「ははは、こりや怖いですわ！正直、悪魔を殺すことは今となつてはどうでもいいんすけどお？でもこいつの試し切りに付き合ってくれるんなら、ご協力お願いしまあ〜つす!!
あ、拒否権はないので、悪しからず！」

……この男、以前と少し何かが違う。

この男が悪魔のことをどうでもいいと言うだろうか……でも今は関係ないか。

僕は魔剣をもう一本創り出した時だった。

「……その剣、一応は名称を聞こうか」

……僕はフリード・セルゼンの握る剣の輝きとオーラを見て、自分の中のどす黒い部分
が現れる。

「……あれはツ！間違いないくそうだ！」

「お察しのとーり！最強の聖剣、エクスカリバーくくくつす！さあて、おまえさんのその魔剣っぽい剣と、俺様のエクスカリバーの力、どっちが上かを試させてもらおうですぜ？ひやはは!!」

エクスカリバーツ!!

木場 s i d e o u t

イツセー s i d e

俺は木場と別れたあと、家に帰って風呂に入り、部屋でごろごろしながら考え事をしていた。

すると部長とアーシアが俺の部屋に来て、木場のことで話があると切りだした。そして俺とアーシア、部長は同じ部屋で今は話を聞いていた。

「……聖剣計画？」

部著の口から語られたその単語、それは木場の過去の最も大きな出来事のことだった。

聖剣計画と呼ばれる事件のこと。

部長の話によると、それは教会サイドで行われていた聖剣、特にエクスカリバーを扱える子供育成するための計画のことだった。

数年前まで当たり前のようにあったその計画は、悪魔にとつては究極の兵器ともいえる聖剣を人為的に操れる人間を創るための計画。

そう、それだけの計画なら良かった……のに、部長の口から更に言葉が続けられる。

「でも祐斗はその計画での成功なんてものにはならなかった……いいえ、言い方が悪い

わ。その計画に置いて、成功者なんか一人もいなかったの」
「……………」

俺とアーシアは黙って部長の話を聞く。

「そして、誰一人として成功者を出さなかったその計画の果て、祐斗達は処分という形で全員が殺された……………不良品というレッテルを張ってね」

「……………ツ…そんなこと、主がお許しになるわけが！」

……………アーシアが泣きそうな表情でそう言う。

そりゃあ、信じられるわけないよな。

少し前まで自分のいた世界で、そんな非人道的なことが起こっていたことに。

「でも事実なの……………嫌悪するわ。ただ勝手に計画のために子供を使って、それが失敗だったからって全てを処分という形で毒ガスで殺す……………許せないわッ！」

部長は悔しそうな表情を浮かべながらそう言った。

それは俺も同じだった。

エゴに、欲望に取り付かれた人は時として悪魔以上に残酷な事を仕出かす。
そういう意味では、人は化け物だ。

……………フアントムと、同じように。

聖剣計画はそれの成れの果てだ。

人の欲望が渦巻いて、子供の未来を奪い、そして殺した。

……………なんてデジヤヴだ。

サバトと、何ら変わらない。

「祐斗はね……………唯一、命かながら施設から逃げたの。私が祐斗を発見した時には既に毒ガスを多く吸ってしまったから、雪が積もる森の中で息絶えた……………私はその時に祐斗を悪魔に転生して生き返らせた……………だから彼は唯一の生き残りだと思うわ」

「木場……………」

生き残り、仲間だった者のための復讐……………あいつが生きる意味っていうのはそれなん

だろう。

それが、死んでいった他の子供達との繋がり……言い換えれば、希望…。

でもあいつもグレモリー眷属の一員だ。

放っておけるわけがねえ。

「……もうこんな時間だわ。イツセー、そろそろ寝て明日の朝に備えた方が良いわ」

部長は俺にそう言っ……

制服を脱ぎ始めた。

な、何を言ってるかわかんねえと思うが（ry

「ちよつ!!部長!何やっているんですか!?!」

「何って……最近、私はあなたの体の温もりを肌で感じないと眠れないのよ。今日の朝だって裸で寝てたでしょ?」

「だからって年頃の女の子が男の前で簡単に脱いじやイカンでしょ！ つつーか合宿の時のネグリジエー！ アレ着てくださいよ!!」

ホント朝起きたら裸は勘弁してほしい……………思春期の童貞にはキツイんだよ、色々！

だけど時既に遅く、部長は既に下着姿になっていて、そしてそれを見ていたアーシアは顔を真っ赤にして頬をぷくつと膨らませる!!

な、何かスゴいこと言いそうな予感が……………!!

「部長さんだけずるいです！ 私だってイツセーさんの温もりが欲しいです！」

アーシアちゃんん!?

別に対抗して脱がなくても良いから！

「ならアーシア、貴方はイツセーの右側よ。私は左側、これでどうかしら？」

「はい！ それでいいと思います！」

俺に発言権は!?

ちよつとは俺の意見も聞いてくれよオオオ!!

この後何とか食い下がって下着だけでも着けて寝てもらおうことになったけど……どう考えても寝れる訳がねえ……。

『どうすんだ、相棒』

……………取り敢えず、トイレで発散するわ。

かれこれ二週間ぐらい自家発電してないし……。

『童貞は悲しいねえ……』

うるせえ!!

くくくくくくくくく

朝……………。

結論から言おう、寝れるかボケえ!!

だって左向けば破壊力抜群のスタイルを誇る部長、右向けば控えめだけど健康的なスタイルのアーシアと一緒に寝れるかよオオオ!!

まだ裸じゃないだけマシだけどき……………!!

そんなせいかな、何時もより早くに目が覚めちったよ。
ドライブは呑気に寝てるし……………良いよなあドライブは。

「コンビニ……………行くか」

俺はバイクに跨がって近所のコンビニへと向かった。

「あーっ！アレは!!」

…ん？何だ？

こんな朝早くに近所迷惑な…………。

まあ俺には関係なさそうだから、無視してコンビニに向かった。

それが新たな波乱の幕開けとは知らずに…………。

「もうっ！幼馴染みを無視するなんて〜ッ！」

「……アレが、君の幼馴染みなのか？イリナ」
「そつ。いつか話した、兵藤一誠君よ。……ゼノヴィア」

次回、D×Dウイザード

イツセー「お、お前は……！」

木場「君らの先輩……かな？」

イツセー「アーシアの優しさを知らうとしないお前らや神様は大馬鹿野郎って事だよ、優しさの欠片もねえシスターさん？」

MAGIC18 『一触即発』

ドライグ『これで決まりや！』

イツセー「何で関西弁？」

MAGIC18 『一触即発』

『タキオン・トランススミグレクション!!』

さて、俺が朝早くに目覚めてからもう放課後の事だけど……何？時間飛ばしすぎって？
？気にしたら負けってやつだよ。

別にドライグが叫んだ技名は何にも関係ないから。ないっつらない。

ええ、言い切りますとも。

「…それで、今まで悪魔を敬遠してきた教会側が一体、私達に何の用かしら？私達と交渉するくらいなもの……相当なことがあったのでしょうか？」

…つとまあ現実逃避はこの辺にして、今オカ研の部室では緊迫した話し合いが行われているんだ。

リアス部長の向かい側に座るのは、フードを身に付けた二人の女の子。

片方は緑のメツシユが入った青髪の子……名はゼノヴィア、もう片方は栗色のツインテールの女の子……名は紫藤イリナ、らしい。

まあこれは余談だけど……

『久しぶりつ、イツセー君!』

と、紫藤イリナは俺に元気よく挨拶してきた……んだけど、

『お、お前は……!』

どちら様でしょうか?』

ズドン!!

ボケじゃなく、本当に会った覚えがないために尋ねたら、向こうは若手雛壇芸人ばりにずっこけた。

この子お笑い芸人目指せるんじゃないやね? そう思ったね。

『わ、忘れちゃったの!?! 私的事! 幼馴染みのイリナよ!?!』

『そ、そう言われても……!』

その時は全く分かんなくて、新手の詐欺か?と思ったけど、

『相棒、この前の写真に写ってたろ?あの子供だ。小さいとき遊んでたろ』

小さいとき、写真……………あーっ!!

『お前、あのイリナか?!』

『やつと思いい出してくれたね〜って言うか遅いよ!!』

『わりいわりい!女の子だと分かんなくてさ〜』

イヤー、あんときは男だと思ってたからなあ〜。

まあ、ソレよりも俺は二人の側に布にくるまれて置かれた物体に、何やら寒気を感じていた。

木場は木場で睨み効かせてるし……………何だか昨日より激しくなってる気がする。

その緊迫した空気の中、青髪の女の子が静かに口を開いた。

「簡潔に言おう。我々教会はある聖剣を所有している。その聖剣……………エクスカリバーが、墮天使によって少し前に奪われた」

その名前を聞いた俺達は驚きを隠せなかった。

「……聖剣エクスカリバーって！」

『ああ。先の大戦で全て折れたとされる伝説の聖剣だ』

……俺の手刀は某星座アニメに倣ってウエルシュ・エクスカリバーなんて呼んでるけど、それらは本当の聖なる剣……しかもレア中のレアって訳だ。

先の大戦で折れた……とは言うけど、ドライグ曰くそれから年月が経過し、エクスカリバーは新たな形で生まれた。

それはエクスカリバーを七つに分散させるという形……早い話がエクスカリバーは7本あるらしい。

「私たち教会は3つの派閥に分かれていてね、所在が不明のエクスカリバーを除いて6本の剣を2つずつ所有していた。それが少し前、墮天使によって3本が奪われた」

「……………」

俺たちはあまりにも突然のことに驚いている。

何一つか、話のスケールが思ったよりデカイ。

よりもよって、こいつらがここに来たのはエクスカリバーの関係……か。

「先に言っておこう。我々は聖剣使いだ……エクスカリバーのな」

「「「ツ!!」」」

な、何だとウ!?

俺達は思わず身構えた。

あの布にくるまれた物——何かの聖剣かと勘繰ってたけど、まさかエクスカリバーなんてよ……!

そしてエクスカリバーの使い手……って事は、木場の復讐相手。

「私の使う聖剣は破エクスカリバー・デストラクシオン壊の聖剣」

「私のは擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣よ」

ゼノヴィアは布にくるまれたデカイ剣を見せ、そしてイリナは手に巻かれた紐らしき物体を指差した。

……あんな紐が聖剣ねえ。

『擬態の名の通り、あらゆる物体に変化させることが可能だ。破壊はそのまんま、万物全てを壊すんだ』

成る程、持ち運びに便利だな。

アレだったら飛行機の手荷物検査にも引つ掛からないな！

『……まあ、そうだな』

良い例え思い付かないんだよ！

全て壊すんだ……って、何処の遊戯王？

「我々がこの地に来たのはエクスカリバーを奪った堕天使がこの町に潜伏したからだ。我々はそれを奪取、もしくは破壊するためにここにきた」

「堕天使に奪われるくらいなら、壊した方がマシなもの」

「…貴方達の聖剣を奪った堕天使のことを教えて貰えるかしら？」

部長は事務的にゼノヴィアにそう尋ねた。

確かに厳重に保管してある教会から聖剣を盗むことが出来るほどの堕天使なら、気になるのも仕方ないわな。

そう思っていると、ゼノヴィアは特に戸惑う事なく応えた。

「堕天使、コカビエル」

コカビエル……………つて、

『先の大戦で生き残った墮天使だ。相当のビッグネームだな』

上級墮天使だろ！

何でそんな奴が聖剣を……………？

「これは大物ね……………それで？貴女達の要求は？」

「なに、簡単だ。今回の件に、悪魔の介入を許さない。それが我々、教会側の総意だ。つまり、今回の事件で悪魔側は関わるなということだ」

ゼノヴィアの発言に、部長のオーラが少し怒りになる……………まあそりやそうだ。

今回の事件はほぼ協会側に責任があるつてのにこの上からの態度……………怒って当然だろう。

『何だ？最近のシスターは礼儀の一つもまともに出来ねえのか？アーシア・アルジェントを見習えってんだ』

それは全面的に同意するわ。

……………つーか木場、いい加減殺気納めろ。駄々もれだぞ。

「…そろそろ帰らせてもらおう。お茶などの気遣いは無用だ……つと、君は確かか？
アーシア・アルジェントだったな」

「は、はい……」

ゼノヴィアは俺たちの隣を横切って通り過ぎようとした時、アーシアの顔を見てそう聞いてきた。

「……まさかこんな地である『魔女』と会うことになるとはな」

「ツー」

”魔女”、その言葉にアーシアは体を震えさせた。

「あなたは確かか、一部で噂になっていた元聖女……悪魔をも治癒してしまう力のせいで教会から追放された少女……」

イリナも気付いたのか、ゼノヴィアとは違い憐れみを込めたな眼差しでアーシアを見ている。

「まさか悪魔になっているとはな……安心しろ、このことは上には報告しない。…だが、堕ちれば堕ちるものだな。聖女と崇められた者が、今では本物の魔女になっているとは……」

………は？

『相棒、落ち着け』

…サンキュー、ドライグ。

危うく殴り飛ばす所だったわ、コイツ等を。

「だが君はもしかして、まだ神を信じているのか？ 君からは罪の意識を感じながらも神を信じる信仰心がまだ匂う。抽象的だが私はそう言うのに敏感だね」

「捨てきれない、だけです…ずっと、信じてきたものですから…：…ツ！」

アーシアはゼノヴィアの質問に涙を浮かべながらも答える。

…：…そうだよ。アーシアはそれを糧に地獄とも呼べる日々を過ごしたつてのによ…：…コイツ等は、

「そうか。ならば私達に斬られるといい。我々の神は罪深い君でも、それでも救いの手を差し伸べてくれるだろうからな…：…せめて私が断罪しよう。神の名においてな

………っ！

………もー駄目だ。我慢の限界だ……！

「さつきから聞いてりや、元聖女だの魔女だの………挙げ句の果てには断罪？何様だよテメー等は」

居ても立つてもいられずに、俺はアーシアとゼノヴィアの間に入った。

「イツセーっ!？」

すんません、部長。

だけど、家族同然の仲間を叩かれて、黙ってられるかよ………っ!!

「何も間違った事は言っていないと思うが？彼女はそう呼ばれるだけの存在ではある」

「そうかい………少しでも自分等の求めている物と違ったら掌返し、か。テメー等みたいな物騒な連中に信仰されると思うと、パトリオット教だか何だかの神様も不憫だねえ………つて、アーシアの願いの一つも叶えねえバ神様に、不憫も糞もないわな」

「っ！」

「ぜ、ゼノヴィア！落ち着いて！」

イリナ………だっけか？が慌てて諫める。

ふん、気に入らねえ事があつたら直ぐ聖剣か。

「勝手に聖女に祭り上げて、悪魔にも注げる優しさを見たら直ぐ魔女呼ばわり……身勝手だなオイ。だつたら分かりやすく言つてやるよ……アーシアの優しさを知ろうとしないお前らや神様は大馬鹿野郎つて事だ!!」

そうだ……コイツ等何かに、アーシアの何が分かるんだ!!

「確かにアーシアは悪魔になつてからも時折祈ることだつてある! いや、それ以前から、この子は信仰心を忘れないでいた! お前らがもし同じ立場になつても、それをして、今みたいに貶されても平気なのかよ!? テメー等は傷の癒えてない相手の傷口を平気で抉れんのかよ! ……それに、アーシアは聖女に祭り上げられても嬉しくなかなかつたんだ! ただこの子は、友達が欲しかつたんだ!」

「……………聖女は神に愛される存在だ。そんなものが、他人から愛や友情を求める時点で、聖女の資格はない」

「資格? 勝手に呼んどいてその言い種かよ……………もう一度言つてやる! この子の優しさを、想いを! 理解しようとしないうお前ら教会の馬鹿共と神様は大馬鹿野郎だ!!」

「…………随分言つてくれるな。なら君は彼女の何だと言うのだ?」

「友達で、家族だ!! アーシアを否定するお前らを、俺は肯定なんてしない!!」

「一介の悪魔風情が…………ならば」

『一介の悪魔風情……か。随分人の相棒に言ってくれるな。下衆の極みなシスター』

「っ!?この、声は……」

ゼノヴィアが俺の左手を凝視した。

すると、勝手に赤龍帝の籠手が展開された。

……ドライグ、お前も我慢の限界か。

「その、籠手は……っ」

『俺はドライグ……名前ぐらいなら聞いたことはあるだろう』

「伝説の……二天龍!?まさか」

『貴様等風情が、相棒を、相棒の家族を侮蔑する事は許さんぞ。言っておくが相棒……兵

藤一誠はお前からより強いぞ』

「……まさか伝説の赤龍帝に会えるとはね、光栄だよ」

「……ぶつ潰す!」

「イツセー、止めなさい!」

「いや、イツセー君の言うとおりだ」

……部長の言葉を遮り、木場がそこで声を上げる。

「教会は一度滅ぶべきだ。間違いしか犯さない愚かな存在……だから僕が相手になるう」

「……誰だ、君は」

「君たちの先輩だよ……失敗作のね」

木場が言葉を切ると、部室に夥しい数の魔剣が生えた。

そんなこんなで俺と木場は、ゼノヴィアとイリナと旧校舎前にある芝生の空間で対峙している。

ここら一体に结界を張っていて、辺りには騒動は広がらないはずだ。

「イツセー君、幼馴染みだからって容赦しないよ。怪我したくなかったら、謝った方が良くと思うけど……」

「幼馴染み……？俺の家族に魔女だの色々と抜かすような奴は知らないね……御託は

良いから、さっさと来い」

「っ……行くよー!」

イリナは腕に巻かれた紐——擬態の聖剣を

日本刀の形に変えると、俺の頭目掛けて一閃してきた!

が、

《リキッド・プリーズ》

俺は予め嵌めておいた指輪を翳し、体を液状化させて、イリナの攻撃をかわした。

「えっ……!?!」

驚くイリナの隙を逃さず、背後で液状化を解くと、そのまま二の腕で締め上げた。

「ぐう……!」

「隙だらけだな、オイ」

「イリナ!」

「余所見とは余裕だねっ!」

「ちいっ!」

木場とゼノヴィアが斬りあつてるのを他所に、イリナを解放して、そのまま拳を突き

つけた!

「ひっ……………」

「何だ？ビビってんのか？だったら消えろ…………！」

殺気を真つ正直からぶつけられたイリナは崩れるように気を失った。

「部長、俺は終わりました」

「は、早いわね……………そう言えば彼女と親しそうな間柄みただけど…大丈夫なの？」

「…………大丈夫つすよ」

一応腐つても幼馴染みだ、殺すのは気が引ける。

『口ほどにもないな……………後は木場祐斗だが……………酷いな』

「うおおおっ!!」

木場は光を喰らう魔剣をゼノヴィアの周囲に造り出すも、それらは全てゼノヴィアの破壊の聖剣によって跡形もなく粉碎された。

「私の聖剣は破壊……………君に食い止めは出来ない！」

「だまれええ!!」

木場は激昂すると、自分の背丈程の巨大な魔剣を創造した……………あの馬鹿！

「……残念だよ、木場祐斗」

ゼノヴィアは静かに嘆息すると、真正面からその剣を斬り合う。

結果、壊れたのは木場の魔剣の方だった。

そしてゼノヴィアはエクスカリバーの柄を木場腹部を抉りこませる！

「がは……っ!？」

木場の口からは血が吐かれ、そのまま気を失った。

ただの柄の一撃でも、防御力のない木場は打撃と衝撃波で終わる……つまりこの勝負は

「君の負けだよ、『先輩』……君がもつと冷静であればいい勝負が出来ただろう。だけど君の強みは速度。それを潰すその大きな魔剣を創った時点で、君の敗北は決していた」

そう、木場の完敗だ。

ゼノヴィアは気絶した木場に背を向けると、次に俺に何故か聖剣を向けた……………え？

「イリナの敵討ち……………って訳じゃ無さそうだな」

「ああ。個人的に、君と戦ってみたのさ……あの不可思議な魔法、そして、鋭いドラゴンのオーラ……………君と戦えば、私はもっと強くなれる、そう思ってたね」

「はあ……………部長、良いっすか？」

「……………ただで引いてはくれなさそうね。良い、イッサー？ 刀身に触れてもアウトよ」
「はい……………！」

部長のお許しが出たところで俺は臨戦態勢に入った。

すると、ゼノヴィアの眼には……小さいながらも、明らかな怯えが見て取れた。

「ツ……………オーラだけでこれ程とはね」

『ドライグ、俺のオーラってそんなに凄いのか？』

『お前自身には分からんが、お前のオーラは常人なら失禁する程度の強さだ』

……………例えばアレで良くわかんねえ。

『まー強いつてことだ』

「そうかい……………だったら！」

俺はゼノヴィアに向かって飛び出した……

「があっ!!」

箒が、ゼノヴィアの影から飛び出た炎によって木に叩き付けられた。

な、何だよ一体……!

『ククツ、油断大敵とは良く言った物だな』

「っ! な、何だ貴様は!？」

影から現れたのは、炎を纏った犬……を連想させるファントムだった。……………

ん?!

『コイツ、前に倒した箒じゃ……?』

兎に角、今はコイツを倒す!

《ドライバーオン! プリーズ》

『来るか? 魔法使い』

「お前は俺に倒された箒なんだけど……けど、もう一度倒す迄だ! 変身!」

《シャバドウビタツチヘンション! フレイム・プリーズ! ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!》

魔方陣を潜って、ウイザードに変身すると、ファントム……確かヘルハウンドは何処からともなくバイクを呼び出し、跨がった。

『来い！ウイザード！』

「上等………だぜ！」

《コネクト・プリーズ》

俺もバイクを呼び出すと、先に飛び出したヘルハウンドを追いかける！

「部長！ちよつと行つてきます！」

「気を付けるのよ、イツセー！」

了解です！

イツセー side out

「何だ、あの怪物は？」

「……ファントム。人の絶望の隙間から現れる怪物よ。そしてイツセーは赤龍帝であると同時に、ファントムから人々を守る魔法使い……ウイザードよ」

「ウイザード……」

ゼノヴィアは静かに呟くと、気絶したイリナを担いで立ち去ろうとした。

「もう帰るの?」

「ああ。あのまま続けても、私の負けだ………だけど、私は井の中の蛙………と云うのを
思い知った。それだけでも充分な収穫さ」

ゼノヴィアはリアスにそう返すと、そのまま今度こそ去って行った。

人のいない道路にて、フアントム……ヘルハウンドとウィザードFSの交戦は続
いていた。

『くあつ!』

「でや!」

ヘルハウンドが放つ炎を、ウィザードFSはウィザードソードガンガンモードで華麗に
往なす。

『ちいつ! 喰らえ!』

「…はっ!」

ヘルハウンドが放った巨大な炎を、ウィザードFSはバイクをジャンプさせてそれかわす。

『何イ!?!』

《キャモナシユータイングシエイクハンド! キャモナシユータイングシエイクハンド!》

驚くヘルハウンドに構わず、ウィザードFSは浮かび上がったバイクに立ち、ウィザードガンのハンドオーサーを操作して、左手のフレイムウィザードリングを翳した。

《フレイム、シユータイングストライク! ヒーヒーヒー! ヒーヒーヒー!》

「でやっ!」

『ツ………グアアアア!!』

フレイムシユータイングをバイク共々受けたヘルハウンドは近くの廃工場にぶつ飛ばされると、そのまま爆発した。

だが、ウィザードFSはバイクを工場の入り口に止めて、別のウィザードリングを嵌めた。

「わりいがお前とは一度戦ってた。2度も同じかくれんぼはゴメンだぜ?」

《ライト・プリーズ》

工場を強烈な光が照らすと、ヘルハウンドはウィザードFSの背後に倒れ伏した。

『な、何故分かった……………!?!』

「……………まあ、今はお前より仲間が優先だ。早いけど、ファイナーレだ」

《ルパッチマジックタッチゴー！チヨロイイネ！キックストライク・サイコー！》

「はあああ……………でやああああつ!!!」

『こ、コレが再生怪人の定めかあああ!!』

メタい台詞を残して、ストライクウィザードを受けたヘルハウンドは爆発し、消滅した。

「ふい……………ん?」

ウィザードFSは立ち去ろうとしたが、炎の中に輝く何かが見え、それに近付いた。

『相棒、これは……………』

「まさか、今のファントムが……………?」

~~~~~

イツセーが学校に戻ると、何やら木場とリアスが言い争っていた。

「どうしたんだ、アーシア？」

「実は、木場さんが……」

「待ちなさい、祐斗！あなたが私から離れることは許さないわ。はぐれになんてさせない……あなたは私の大切な『騎士』よ！」

木場はその復讐を果たすために、敢えてリアスの眷属から抜け、『はぐれ悪魔』になるつもりらしい。

だが、それを眷属を何より大切にするリアスが許す筈もなかった。

「それでも僕は……エクスカリバーを！」

「木場」

見てられなくなったイツセーは木場に声を掛けた。

「イツセー君……」

「お前を無理に止めようとは思わない……でもな、復讐だけが、お前の生きる全てか？」

「……………僕に、違う生き方があるとでも？」

「それは、お前自身が分かっている筈だ」

「っ、何を分かった風に!!」



自分を論そうとしたその態度に——大切なものを奪われた事もないイツセーに言われたことに腹を立てたのか、木場はイツセーに掴み掛かる。

「祐斗!!」

その態度を咎めようと近付くりアスだったが、

「……………」

顔を険しくさせた、まるで何かを堪えるような表情こイツセーを見て、動きを止めた。そしてそれは、その顔を間近で見た木場も同じであった。

「……………」失っているから、分かるんだよ」

イツセーが漸く発した呟きは、虚空に溶けていく——木場は何も返さずに、部室を去って行った。

~~~~~

『はあああ………でやああああつ!!!』

『ここ、コレが再生怪人の定めかああああ!!』

先程のウィザードFSとファントム、ヘルハウンドの戦闘を見守る人物がいた。

「第2の、進化……………良い具合だな」

白のローブに、同じく白の体に掛けられた無数の銀の指輪、そして何より目を引くのが――

背中に生えた、灰色の翼だった。

次回、D×Dウィザード

アーシア「木場さん……………大丈夫でしょうか？」

饅頭屋の親方「馬鹿野郎！こんな饅頭お客様に出せるかあ！」
茂「イツセー、出来たぞ」

MAGIC18 『進化』

《ビューー！ビューー！ビュービュー、ビュービューー！》

MAGIC19 『進化』

イリナとゼノヴィアのシスターコンビとの出逢いから翌日、イツセーは変わらずにリアスとアーシアの3人で学校に通う。

だが、その顔は決して晴れやかではなかった。

「祐斗……」

「イツセーさん、木場さんは……大丈夫でしょうか？」

「うくん……こればかりは、本人が乗り越えるしかないからな」

イツセーの言う通り、これは木場の問題。

彼自身が、復讐心に打ち勝つのを待つしかないのだ。

「でも、そんなに心配することはないよ。アイツは……木場はきつと勝つ」

「イツセー……」

「イツセーさん……」

「だから、信じて待ちましょう」

イツセーの言葉に、リアスは少し顔が晴れる。

「そうね……あの子は私の眷属だものね。主である私が信じない訳にはいかないわ。ありがとう、イツセー」

リアスは微笑むと、イツセーの頬に唇を押し当てた。

「ぶ、部長?!」

「ふふつ。今は外だから、ね?」

「むう……!イツセーさん!」

「お、怒らないでよアーシア〜!」

なんて和気あいあいとしながら、3人は学校の門を潜った。

~~~~~

「イツセーさん。これから何処に向かうんですか?」

学校が終わり、今日はオカルト研究部の活動もないため、久しぶりの速い帰宅となったが、イツセーは家とは違う方向に向かっていった。

リアスは生徒会長のソーナとお茶会だ。

「ん?おっちゃんに饅頭買ってこいって言われてな」

「茂さんが、ですか?」

「ああ。おっちゃん、饅頭好きだからな」

と言っている内に二人は饅頭屋、『松木庵』に辿り着いた。

「馬鹿野郎！」

ガツシャーーン!!

入った途端、店の奥から何かを落とす音が聞こえ、アーシアは肩をビクツと震わせた。  
「はうつ?!」

「大丈夫だぜアーシア。……すみませーん」

イツセーは苦笑しながら、アーシアの頭を撫でる。

撫でながらイツセーは奥に声を掛けるが、返ってきたのは怒鳴り声だった。

「こんな饅頭お客様に出せるかあ!!」

「す、すみません……!!」

「な、何だか凄く怒られてます……」

「この親方さん厳しいからなく……すみませーん！」

「つたくよく、………全くスママセンお見苦しい所をお見せして………つて兵藤の坊っちゃん！」

「お久しぶりです、親方さん」

現れたのは、如何にも職人と言った風貌の男性と何処か頼り無さげな青年。

この店の店長の和菓子職人松木と、弟子の徹也だ。

「一誠君、いらつしやい……そちらの子は？」

「えーと、今俺の家でホームステイしてる、アーシア・アルジエントさんです」

「は、初めまして！アーシア・アルジエントと言います！宜しくお願いします！」

「おうおう、可愛い子だねえ！坊っちゃんもやるねえ！」

「ちよ、そんなんじゃないっすよ！」

顔を赤くして否定するイツセーだが、若干だが満更でもない様子。

それは無論アーシアもだった。

「はっはっは！良いねえ、若いつて！それで、今日はどの饅頭を？」

「えっと、何時ものやつと……アーシア、何が良い？」

「ほえ？」

いきなり話を振られたアーシアはキョトンとする。

「饅頭、食べたことないだろ？ここの饅頭は美味いぜ」

「良いんですか？」

「勿論。好きなを選んで」

「えっと……では、これで」

アーシアが指したのは桜色の饅頭。

イツセーはそれを見て、「これも下さい」と頼んだ。

「毎度あり！」

「ありがとうございました！」

買い物を終えた二人は松木庵を後にした。

「イツセーさん」

「ん？」

「ありがとうございます！」

アーシアは嬉しそうにイツセーの腕に抱き着いた。

何時もと違う大胆な行動にドキツとするイツセー。

「お、おうよ！」

「真っ赤ですよ、イツセーさん♪」

「そ、そんなことは……ユニコーン？」

何とか言葉を返そうとしたイツセーの足を、ブルーユニコーンが突っついて来た為、イツセー達は足を止めた。



「どうしたんでしょうか？」

「まさか……………ファントム？」

『ヒヒーン！』

「……………アーシア、おっちゃんに渡しといてくれ」

「は、はい！」

頷くように嘶くユニコーン。

イツセーはアーシアに荷物を預けると、ユニコーンの導きに従って走り出した。

~~~~~

「な、何だよお前?！」

『フッフッフ……………』

お得意先の料亭に松木が作った饅頭を運んでいた徹也だったが、途中で怪物に襲われていた。

背中に羽が生え、槍を携えた一見鳥にも見えるファントム……ヴァルキリーだ。

「う、うわあああああああ！」

『むうん！』

ヴァルキリーは徹也を強引に退かすと、徹也が運んでいた饅頭をめっちゃめっちゃにして

しまった。

「変身！」

《ハリケーン！プリーズ。フー、フー、フーフーフー！》

「おらあ！」

『ぐおっ!?!』

だが、そこにウィザードHSに変身したイツセーが駆けつけ、ヴァルキリーを蹴っ飛ばした。

『お前……ウィザードか』

「お前の好きにはさせないぜ。さあ、ショータイムだ！」

《コネクト・プリーズ》

ウィザードHSはコネクトでウィザードソードガンを取り寄せて、ソードに変形させるとヴァルキリーに斬りかかる。

対するヴァルキリーも槍で応戦する。

『はあ！てやあ！』

「……ッ！」

『悪いが君の相手をするのは今度だ。私はもうノルマを達成したのでね』

「どういう、意味だ！」

『さらば!』

「うおっ!」

罅迫り合いをしていた所に、ヴァルキリーは翼を広げ飛び上がったためにウイザードHSは前のめりになる。

「てめっ!待てコラ!」

《エクステンド・プリーズ》

ウイザードHSは腕をエクステンドで伸ばして足を掴もうとするも、

『ムダア!』

「いてっ!」

ヴァルキリーは手にした槍でウイザードHSの腕を斬り払った。

無防備に近い場所を叩かれた為に、ウイザードHSは魔法を維持できなくなった。

結局ウイザードHSが痛みに悶える中、ヴァルキリーは去って行った。

「いってて……あんにやろう!」

ウイザードHSは立ち上がって変身を解くと、徹也に向き合った。

「大丈夫ですか?徹也さん」

「あ、ああ。でも……」

徹也が向いた先には、ヴァルキリーによってめっちゃめちゃにされた饅頭の成れの果てが転がっていた。

「どうしよう……親方に何て説明したら……!」

『これは……あの青年を絶望させるためか?』

『……だったら、今ここで去る必要はないだろ?』

『それもそうか……』

何故か饅頭をめっちゃめちゃにするだけで去ろうとしたヴァルキリー。

イツセーとドライブはファントムの謎の行動に頭を悩ませた。

~~~~~

「饅頭が化け物に襲われてない?……何の冗談だ?」

「ほ、ホントなんです!」

「言い訳は聞きたくない。悪いが、付き合いはこれつきりだ」

「そ、そんな……!」

「……すみませんでした」

「親方……」

「徹也、お前も謝れ」

「……………すみませんでした」

だが、饅頭が化け物に襲われて出せなくなった等と信じられる筈もなく、料亭との契約も打ち切られてしまった。

「……………一応、徹也さんの言ってる事は本当なんです」

「事の真偽は大切じゃない、職人としての信用を失っただけだ」

「そんな……………でも、料亭との契約を切られたら、店を畳まなきゃ……………」

「徹也!!」

大声で制止され、徹也はビクツとなる。

だが、松木は何も言わずに店の奥に引っ込んでいった。

「親方……………何とかしなきゃ……………」

徹也は何とかしようかと決心すると、松木庵を出ていった。

「……………」

イツセーは相変わらず思案顔だった。

~~~~~

「此方、美味しい饅頭ですよ！一つ如何ですか？」

店を畳ませまいと徹也は外で饅頭を売っていくが、あまり芳しくない。

と言うよりも、この数では焼け石に水と言うことは徹也にも分かつていた。

「はあ……………」

溜め息を吐いた所に、

「あの、少し宜しいでしょうか？」

スーツを着こなした眼鏡の男が近づいてきた。

「はい……………」

「そちらの饅頭…………一口貰えませんか？」

「ああ、どうぞ」

徹也が渡した饅頭を一口食べると、男は感激の声を上げた。

「おお！何と言う美味しき…………おっと、自己紹介が遅れてすみません。私、駒王デパートの菓子担当バイヤーの桐谷と申します。どうでしょう？明日から毎日500個程仕入れたいのですが……………」

「ほ、本当ですか!？」

「はい」

笑顔で頷く桐谷と言う男に、徹也は希望を抱いた。

これなら、松木庵を閉じなくても済む……と。

「早速親方に話しておきます！」

「何だと？」

「親方！この話、受けましょうよ！」

あの後名刺を貰った徹也は早速松木に話を通した。

だが松木はあまり乗り気ではなかった。

「……何かあるんじゃないか？話がうますぎるぞ」

「でも、ウチは今そんな事言ってる余裕はないですよ！是非乗るべきですよ！」

「……分かった。明日の朝までには仕上げるぞ」

頭にハチマキを巻いた松木はキッチンに入ってしまった。

後を追いつけるように徹也も入っていく。

「……どう思う？ ドライグ」

『いくら何でも話がうますぎる。まさか……』

「名前は、桐谷……聞いてみるか」

物陰から話を聞いていたイツセーはバイクに乗ると、駒王デパートに向けて走り出した。

~~~~~

翌朝、松木と徹也は昨夜に作り上げた饅頭を桐谷のデパートに運んでいた。

饅頭の名前は「きぼう」——自分達の希望になってくれるからこそ付けた名前だ。

「やりましたね、親方」

「へっ、喜ぶのはまだ速いつての」

「その通りです……お楽しみはこれからです」

と、饅頭を運ぶ二人の前に現れたのは、桐谷。

「あ、桐谷さん！」



「アンタか、ウチの鰻頭見込んでくれたのは……………」

「フッフッフ……………」

「……………な、何か？」

だが桐谷は二人を見て可笑しそうに笑い、松木はいぶかしむ。

「ホントにそんな上手い話があるとしても？大変ですねぇ、出来損ないの弟子を持つのは……………」

桐谷は眼鏡クイツ、をやるとその姿を変化させた。

それは、昨日徹也を襲ったフアントム、ヴァルキリー。

そう、桐谷の正体はヴァルキリーだったのだ。

「き、昨日の化け物!!」

「な……………」

『昔から言うでしょう？上手い話には裏がある…………とね』

「ま、まさか……………」

『嘘に決まってるじゃないですか。それにしても昨日のソレ……………いやはや我々に味が分からないのでね、粘土を食べてるような錯覚を感じましたよ』

意気揚々と語るヴァルキリーに、松木はシヨックを受けたように膝を着いた。

『さあ、さっさと絶望してファントムを生み出してー』

だが、そんなヴァルキリーに濃密な魔力の塊と銀の銃弾が放たれた。

『ぬうつー……何者だ!』

それを受けて倒れ込んだヴァルキリーだったが、直ぐ様立ち上がり辺りを見回した。

「やっぱお前らファントムはえげつないな。そんな事させるかっての」

物陰から現れたのは、ウィザーソードガンを構えたイツセーとリアス、アーシアだった。

『貴様は………何故分かった!』

「昨日、ちよつとアンタの言ってたデパートに聞いてみたのさ。桐谷さんっていうバイヤーさんはいますか?」

昨日イツセーは駒王デパートに伺ってみたが、桐谷と言う男は半年前程に行方不明で

とつくに解雇されてる………」と。

「本物の桐谷さんは半年前のサバトで亡くなつてた………そこでお前は生まれた。違うか？」

『貴様……儀式の生き残りか!?!』

「さあてね。お前に答える必要はないよ」

《ドライバーオン・プリーズ》

「人の心の優しさを利用して踏みこむその傲慢さ……万死に値するわ！ イッサー！」

《シャバドウビタツチヘンシーン！ シャバドウビタツチヘンシーン！》

リアスが啖呵を切ると、イッサーはウィザードライバーのバンドオーサーを操作。

「了解です、変身！」

《フレイルム・プリーズ！ ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

生成された魔方陣を潜り、イッサーはウィザードFSに変身。

そのままヴァルキリーに突撃した。

『ぬう！ 邪魔をするなア！』

「やだねっ！ 部長、アーシア！ 今のうちに二人を！」

「ええー！」 「は、はい！」

何とか二人からヴァルキリーを引き剥がした隙に、リアスとアーシアは松木と徹也を

連れてその場から離れる。

だがヴァルキリーは1つ解せない事があった。

『……………何故、絶望しない？ ショックを受けている筈……………何か他に希望があると言うのか!』

そう、松木は絶望していないのだ。

混乱するヴァルキリーに、ウィザードFSからの攻撃が入る。

「へっ、お前にはわかんねえだろうさ!」

『ぐっ、小癩な……………!』

歯軋りするヴァルキリーは翼を広げ、空中から攻撃を仕掛ける。

「ちっ……………どうする?」

腕を伸ばしても距離には限界がある。

策が見つからないウィザードFSに、リアスとアシアが何かを投げ渡した。

「イツセー!」

「受け取って下さい!」

「おっ!?!……………完成したか! おっちゃん仕事速いな」

それは、装飾が少し豪華になったハリケーンウィザードリングと、龍と稲妻が描かれた魔法のウィザードリングだった。

くくく

先日のヘルハウンドの戦いを終えたとき、イツセーはあるものを回収していた。

『魔法石………』

それは大きい緑の魔力が宿った石——魔法石だった。

イツセーはそれを回収すると、ゼノヴィア達との一騒動の後に、この魔法石を茂に渡した。

『おっちゃん、これで指輪出来る?』

『んん………この大きさなら二つ出来るな』

『マジで!?!』

『ああ。けど少し時間が掛かるが………大丈夫か?』

『全然良い!』

そして先程完成し、イツセーが知らない間にリアス達に渡されていたのだった。

くくく

「うしっ! 早速使ってみつか!」

ウィザードFSはウィザードライバーを操作し、先程のウィザードリンググーリーハリケーンドラゴンリングを翳した。

《ハリケーン！ドラゴン！ビューー！ビューー！ビュービュー、ビュービュー！》

途端に凄まじい風……いや、嵐が吹き荒れ、ウィザードFSの身体を包んでいく。そして風が消えると、ウィザードはその姿を大きく変えていた。

緑のローブに、両肩の魔法石、更に鋭さを増したような仮面……ウィザード、ハリケーンドラゴン。

『パワーアップ、だと……？』

《コピー・プリーズ》

「ハアツ！」

『グガア！』

呟いたヴァルキリーに答えず、ウィザードHDはコピーでウィザードソードガンを増やすと、空中のヴァルキリー目掛けて2丁拳銃の様に蜂の巣にした。

『ぐ、おのれえ………えやああああ!!』

ヴァルキリーは怒り狂い、鋭い光弾を放つも、全てウイザードHDの操る風に相殺された。

『なっ!』

驚くヴァルキリーを他所に、ウイザードHDは赤いウイザードリンググーリースペシャルを爆炎の中、使用した。

《チヨーイイネー! スペシャル・サイコー!》

すると、ウイザードHDを包む爆炎を振り払う様にして、背中から鋭いドラゴンの翼が生えた。

『き、貴様も空を……?!?』

「さあ、シヨータムだ!」

何時もの決め台詞を決めると、ウイザードHDはヴァルキリーを体当たりで吹っ飛ばした。

『ぐあっ! ……調子に乗るなああ!!』

「ふっ!」

そのまま二人は空中で壮絶な鬼ごっこを開始する。

ヴァルキリーとウィザードHDの翼がぶつかり合い、周囲の建物を避け、剣を交わす。

「おおッ！」

『ぐはあ!!』

だがウィザードHDは手慣れた様子でヴァルキリーの上を取り、蹴りを入れ込んだ。

『貴様、何故そんなに……………』

「悪いけど、空を飛ぶのは初めてじゃないんだよね〜」

《ルパッチマジックタッチゴー！ルパッチマジックタッチゴー！》

「ファイナーレだ」

《チヨイイネー・サンダー・サイコー！》

ウィザードHDは二つ目の指輪……サンダーウィザードリングを使い、ヴァルキリーの周囲を高速で旋回する。

『な、何を……………?』

訳が分からないヴァルキリーだったが、突如稲光が聞こえ上を向くと、雷が立ち込めていた。

ウィザードHDは更にスピードアップして、発生させた風によってヴァルキリーを上へと押し上げる。



『なっーーーーー!!』

あれよあれよと言う間に一番上に押し上げられたヴァルキリーは発生した緑色の雷を諸に喰らい、悲鳴を上げることなく爆発した。

「……ふい〜」

地上に着地したウイザードHDは、何時もの安堵の息を吐いた。

~~~~~

「親方、すみません！俺のせいで……」

無事にフロントムを倒し終えたが、「きぼう」はヴァルキリーによって潰された。

が、

「徹也」

「……ーっ、無事だ」

松木が饅頭の箱を差し出すと、そこにはーっだけ、無事な姿の「きぼう」が。

松木は微笑むと、徹也に言い放った。

「これ、作り直して俺の所に持ってこい」

「……え？」

「早くしろー！」

「は、ハイいいー！」

怒鳴られた徹也は慌てて店へと戻って行った。

「良かったら、来るかい？」

「え？」

「宜しいのですか？」

「ああ。アイツの饅頭、評価してやってくれ」

「……………どうぞ」

数分後、作り直した饅頭を松木達に差し出す徹也。

松木達はそれを一口食べた。

「……………美味い」

「……！」

「合格だ、徹也。これで晴れて、一人前だ」

「親方……………！」

認められた嬉しさで涙を流す徹也。

そしてイツセー達も感想は同じく、

「美味いっすよ！」

「はい！凄く美味しいです！」

「うん……これなら、お店を出せることだって出来ますわ」

「い、いやあ……」

「なあーに浮かれてんだ！良いか、この店はもう閉店しちまうが、お前は俺の知り合いの所で続けろ！」

「親方……」

「松木庵の味………全てお前に託したぜ」

「……ありがとう、ございましたっ!!!」

「俺が、親方が作れない分まで頑張るよ。俺は親方の希望だからな」

「その通りですよ！それと、徹也さん、また買いに来ます」

「お店が遠くなっちゃうのは残念ですけど………でも、絶対に来ますね！」

「何時でも来てくれよ。腕によりを掛けた饅頭、食わせるからさ！」

イツセー達にお礼を言うと、徹也は晴れやかな顔で松木庵を後にした。

「イツセー、分かったたの？」

「何がです？」

「松木さんの事よ。徹也さんが、松木さんの心の支えだつてこと」

「ああ。まあ、憶測でしたけどね。でも、徹也さんなら、親方さんの希望になつてますよ。これからも」

「……………そうね」

「また今度は、オカルト研究部の皆さんと一緒に食べたいですね」

「そうだな！朱乃さんのお茶と合いそうだしなく……………って、二人とも。何でそんなにしかめっ面なの？」

「……………部長さん。私、お茶の入れ方を勉強します！」

「そうね……………二人で頑張りましょ！」

「??？」

『ハアアア、こいつは全く……………』

「何だよドライグ！その溜め息は!!」

MAGIC 20 『聖劍、破壊します!?!』

おっす！オラ、イツセー！何か久々の俺視点だけでも、まあ置いといて。……………そうそう！この間、新しい力に目覚めたんだ。

その名もハリケーンドラゴン！

コイツもフレドラに負けない位強いぜ〜！

『これでヘルダイブスラッシュャー出来るな、相棒！』

まだ言うかドライグ!?!やらないってば！

……………多分。

現在、時刻は夜。

リアス部長とアーシアは俺の部屋でぐっすり寝てる。

『それより、どうした相棒』

「何か、胸騒ぎがしてな……」

『胸騒ぎ?』

「ああ」

この間、ゼノヴィア達教会の人間が来たろ?

『ああ。そして聖剣奪取の犯人が……コカビエル』

そうそう……そして、この前に会ったフアントム、覚えてるか?

『確か、墮天使の波動を持つフアントムだったな』

そう。普通のフアントムから墮天使の波動なんて感じられないだろ?

それに、あの犬みたいなフアントムも……前に倒した筈なのに、ゼノヴィアの影

に潜んでた。

『しかも、向こうはお前の事を知らなかったからな』

甦ったにしては変だよな……でも何でゼノヴィアの影に……?

『ふむ、確かにな』

……奴は、聖剣を盗んで何を企んでんだ?

「なあ、ドライグ。もしかしたら……っていう可能性、あるかな?」

『……どうだろうな。だが、ないとは言えんな』

だろ?

でも、問題は木場もだ。

アイツ、あのままだと相討ちになっても構わなさそうだしな。

『……………相棒、良いこと思い付いたぞ』

何だ？

『かくかくしかじか』

これこれうまうま……………意外に行けるかも。…でも部長にバレたら…！

『そんなときはそんなとき、だろ？』

……………そうだな、考えるのはやめだ！

『そうと決まれば明日に備えて寝な』

おう！

~~~~~

「よし、行くか」

「でも、簡単に見つかるでしょうか……………？」

「何で俺も……?」

翌日、俺小猫ちゃんと序でに匙を伴って朝早くから人探しをしていた。  
誰をつて?

イリナとゼノヴィアのシスターコンビさ。  
だけど……

「えー………迷える子羊に恵みの手を」

「どうか天にかわつて、哀れな私達に救いの手を!!」  
なあにあれえ。

………つってもそれがゼノヴィアとイリナのコンビなのは一目瞭然だろう。

「お、おい兵藤。あれが噂の………」

「そ。聖剣使いのシスターだよ。ソーナ会長から話ぐらいは聞いてるだろ?………つ



「つーか何してんだおめーら」

「君は……………」

「あつー！イツセー君!!」

「名前で呼ぶな！知り合いだと思われたくねえ!!」

『声掛けてる時点で手遅れだと思っぜ』

うるしゃい……………ふむ、そうだな。

「取り敢えずお二方……………ひとつ走り付き合えよ？」

~~~~~

「はむっ……………むぐっ……………日本の料理は、こんなに美味しいのだなっ！初めて知ったよっ……………」

「やっぱり故郷の味は最高〜！涙が出ちゃう〜!!」

……………コイツら、こんなに細い身体の何処に入るんだってぐらい食うな、オイ。

金、足りるかな……………

「兵藤、これは……………」

「俺とお前で割り勘な」

「ええっ!？」

「女の子に払わず気かお前は……………?」

「そ、それもそうか…」

悲しいかな、女の子に払わずのは失礼と思う男の性は。

数分経つと、二人は漸く食べるのを止めた。

「まさか悪魔に助けられるとは……………人生何があるか分からないね」

「ああ、主よ! 幼馴染みのイツセー君達にご加護を!」

「「イテッ!」」

いってえ……………! 頭がズキズキする!

「イリナ、俺等が悪魔つてこと忘れんなよ……………!」

「あつ、ゴツメーン!」

ゴツメーン! じゃねーよ、本気で痛いんだよ十字架は!

「……………それで、私達と接触してきた理由は?」

ゼノヴィアが単刀直入にそう尋ねてくる。

……ま、隠し事はなしだな。

「単刀直入に言う。お前たちが行おうとしていること……エクスカリバーの奪還、もしくは破壊に協力させてほしい」

俺の発言に、二人は目を丸くして驚く。

そりやそうだよな。

こないだ関わるなど言つて更にはいざこざを起こした俺らがそんな事言い出すもんな。

「オイ兵藤！おま、本気か!？」

「マジだよ」

「この間のことを忘れたのか？ 私たちは悪魔の手は借りない」

「強がんな。どう考えても、お前ら二人では戦力不足だろ？」

「っ……」

お、凶星だな。

「相手は墮天使のトップクラス、コカビエルだ。エクスカリバーの聖剣使いだろうが、そんな簡単にはこことは運ばないはずだ」

「確かにそれはそうだ……。だが、我々は命に代えてでもエクスカリバーを壊す。堕天使の手に渡るよりはマシだ」

「命をかけるほど、か……。それが、教会の為に戦うことが、お前の希望なのか?」

「ああ、そうだ。神に仕え、剣を振るう。勝利を神に捧げる。これが、私の希望だ」

……。成る程ね。

「……木場の事だけだな、アイツも聖剣を壊すのに命をかけてる。復讐の為だけど、言い換えれば……。それはアイツ生き甲斐、希望なんだ。聖剣を悪用されたくない教会側のお前ら、聖剣を壊したい俺達……。利害は一致してるはずだ」

「……話しは理解した。だが、何故君はそこまでして」

「……ダチだからな、それに……。同じグレモリー眷属として、アイツを死なせる訳にいかねーんだ」

「……君は不思議だな。悪用なのに、その眼差しは真っ直ぐだ」

「そうかな? 結構ひねくれてる方だと思うけど……。それに、俺は赤龍帝だ。戦力にはなるぜ」

「……。まあ、一本位ならば」

「良いのゼノヴィア?! イッセー君達悪魔……。いたっ!?!」

「声がでけーよ……!」

大声を上げたイリナの頭を叩いた。

「安心しろ。いざとなったらお前共々守ってやるよ。……………腐っても幼馴染みだからな」

「イツセー君……………」

「つと、そろそろ来る頃だな」

「誰が来るんだ？兵藤」

「……………お待たせ」

低く、だけど爽やかな声が聞こえ、匙と小猫ちゃんは驚きながら振り向いた。

「いんや、話は今纏まった所だぜ……………木場」

そこに来たのは、俺がついさっきトイレでメールを送った木場だ。

来ないと思ったけど、「聖剣関連の情報のやり取りだ。損にはならねーと思うぜ」って打ったら案外来るもんだな。

~~~~~

「……………成る程、大体分かったよ」

「何処の世界の破壊者だよ、と言う突っ込みはこの際なしにして……………木場はコーヒーを啜りながら先程の話を理解した。」

「それにしてもまさか、貴方からそんな譲歩が出るとはね」

「こちらも方法を選んでいられないということだ。私だって、まさか悪魔に頼ることになるとは思ってもいなかったよ」

途端に睨み合う二人。

コイツら、相性悪すぎだろ……………。

例えるならクリアウイングと効果モンスター全般、みたいな？

『ありやあダベリオンも殺せるからなあ』

そうだっけか？まあ、良いや。

「なら僕も情報を提供しよう。君達以外にこの町に来た神父はいたかい？」

「ああ。ただ、この町で何者かに殺されていたが……………」

「それをやった人物を僕は知っている。……………しかも聖剣……エクスカリバーを持つていた人物だ」

「「「ツ!?!」」」

俺達は木場のまさかの情報に驚いた。

まさか木場の奴、既にエクスカリバーと接触していたとはね……………。

「殺った相手はイツセー君が知っている人物…………フリード・セルゼンだ」

「アイツ……………生きてたのか」

前バイクで轢いちまったからなく死んだかと思ってたけど……………アイツは異能生存体確定だな。

G 越えてるよ絶対。

「聞いた話では、君はあの聖剣計画の被害者らしいな」

「ああ……………」

「……………君の憎しみは、もつともだ。あの計画は、我々の間でも最大級に嫌悪されてい

る。故にその首謀者だった男も教会から追放され、今では墮天使側の人間だ」

「それは、一体……」

「バルパー・ガリレイ。皆殺しの大司教って呼ばれた男よ」

「……………バルパー・ガリレイ」

木場はゆつくりとその名を呟く。

そして次には決意したように言ってきた。

「僕の同士の敵であるバルパーが関わっているのなら、僕が黙っている理由はない。力を貸そう」

「……………決まりだな」

「では、また会おう赤龍帝。この借りは必ずや返すよ」

「じゃあイツセー君、またね」

ゼノヴィアとイリナはレストランを去っていった。

因みに会計は俺と匙で払う予定だったが、木場が少し出してくれたお陰で出費が少し防がれた。

これは嬉しい誤算だった。



~~~~~

「はあ、緊張した〜……」

「悪かったな、匙」

取り敢えず、匙にはお礼を言わないとな。

「イツセー君。この間はすまなかつた……でも、これは僕の問題で」

「死に行きそうなダチを放つとけ、つてか？ そんな事出来るほど薄情じゃねーよ

……ダチだから手を貸す。そんだけだ」

それを言うのと、木場は気まずそうに顔を反らした。

すると、小猫ちゃんが木場の服を掴んで上目遣いで木場に言った。

「……私も、祐斗先輩がいなくなるのは、辛いです」

それがとどめになったらしく、木場は苦笑いを溢した。

「……………はは、小猫ちゃんにそう言われたら仕方ないね。分かったよ、僕も自分のこ

とを話そう。匙君も何知らずに関係するのは納得がいかないだろうから」

「お、おうー」

それから木場は話した——『聖剣計画』の全てを。

それから数分後、

「うおおおつ!!木場!俺、お前の事いけすかないイケメンだと思ってたけど、そんな辛い過去背負ってたんだな!!俺は自分が情けねえ!!俺に出来ることなら何でもする!会長のお仕置きも覚悟するぜええええ!!」

無駄にテンションアップしたな、匙。

涙まで流して……………。

『お前もだろ…………グスツ』

オメーもな…………グスツ。

「それを聞いちや、尚更勝たないとな。コカビエル!」

「…………ああ」

「はい…………」

「おう!」

MAGIC 21 『共同戦線!』

よー皆、イツセーだ。今日の俺はいつもと違う格好で歩いている。

厳密に言うとはフリードと同じ黒い神父服を着て町を徘徊している。俺だけじゃなく、木場や小猫ちゃん、そして匙も一緒だ。

木場とゼノヴィアからの情報を照らし合わせた結果、恐らくフリードは手に入れたエクスカリバーの性能を試すために神父を切り殺してると推測できた。

要は囹捜査的なノリだ……あ、首からぶら下げてる十字架は作りもんだぜ。

本物だとダメーシ受けるしね。

「しかし、悪魔が神父服だなんて………」

「文句言うなよ、俺だって複雑なんだからさ」

このアイデアの発案者は、実はドライグだったりする。

無作為に探し回るより、こうして神父を装っておけば向こうから現れるはずだ………つてな。

『それにこうしてコソコソ探し回るほうが、リアス・グレモリーにも感づかれにくいだろうしな』

「流石、伝説のドラゴンは違います………」

小猫ちゃんの言うとおり、やっぱドライグの知恵は流石だなあ。

伊達に長生きしてないわな。

『褒めてんのか、ソレ?』

も、勿論さあ。やだなあ、全くドライグは……H A H A H A。

…と、その時だった!

「神父の一団に御加護ありい!!」

そんな大声を発しながら上空からフリードが斬りかかって来た!!

「大声出してちゃあ不意打ちにはならねえぜっ!」

《コネクト・プリーズ》

コネクトでウィザードソードガンを取り寄せると、エクスカリバーによる一閃を受け止める!

そのままフリードの腕を掴むと、コンクリートの塀に投げ飛ばした。

「うおっとお!? つて、あゝらら! 神父一同かと思えば、この間俺を華麗に轢いてくれやがったあゝくま君と試し斬りし損ねたあゝくま君ではあゝりませんか!!」

「元氣そうだな、クソ神父」

ちっ、コンクリりにぶつけたのにピンピンしてやがんな、コイツ……。

「エクスカリバー……壊す!!」

「へっへえ! 良いですねえ、その殺氣! 僕チンピンピンに感じちゃううう!! つてねえ!!!」

木場は憎悪に彩られた視線でフリードを睨むと、魔剣を一刀創り出すと、フリードに向けて駆け出した……が、

「速いねえ! だったら僕チンも、本気出しちゃうおつかなくく!!?」

なんとフリードの奴、騎士の特性を發揮した木場のスピードに平然と向き合ってる!?

「祐斗先輩と、互角……!!?」

「は、速過ぎて何がなんだか……!!」

小猫ちゃんも匙も驚いているが、俺も同じ位にビックリだ……!!

『まさか……あのエクスカリバーか?』

「くうっ!」

「イケメン悪魔君の首、取ったりいい!!」

って、危ないっ!

《エクステンド・プリーズ》

刀身が当たる寸前、俺は腕を伸ばして木場の首根っこを掴み、此方側に引き寄せた!

「匙!今だ!」

「おうよ!いけえ、アブソープション・ライン黒い龍脈!!」

匙は手の甲に黒い神器を発現させると、そこからカメレオンの舌みたいなロープを伸ばし、フリードの動きを封じる!

「く、何なんですかこれえ!きれねえんですけどおお!!?」

「フリード・セルゼン、覚悟っ!!」

「っ!ちい!」

その時別で探索していたゼノヴィアが動けないフリード目掛けて破壊の聖剣を振り下ろすが、フリードは強引に匙が伸ばしたラインを切断すると、真正面からエクスカリバーを受け止めた！

「ご免ねイツセー君！遅れちゃって！」

「いや、ナイスタイミングだぜ！二人とも……」

「ちいつ、エクスカリバー持ちのクソビッチが二人とか、かーなーり分が悪くね？」

「……………確かに。少しお前には分が悪いようだ、フリード」

誰の、声だ？……………爺さん？

「まさか……………バルパー・ガリレイ!!」

「——ツ!!」

その姿を見た瞬間、激昂のような声音でその名を叫ぶゼノヴィア。

木場はその名を聞いた瞬間、目を見開いて怒りの表情をあらわにさせる。

「バルパー・ガリレイ!!」

木場はフリードの傍に立つバルパーへと襲いかかろうとするが、木場の剣はフリードの阻まれ、そのまま鏝ぜり合いになった。

そして木場は魔剣の限界を察知して、フリードから離れる。

「もしや君は……聖剣計画の生き残りかね?」

「そうだ……僕は一度、貴様に殺され、そして悪魔となつて生き延びた。僕のこの魔剣は僕の同士の無念を顕現したものだ!!だから僕は貴様を殺して復讐を果たす!!」

クソツ、完全に頭に血が上つてやがる!

「これは分が悪い。聖剣使い二人に赤龍帝がいるのならば、計画に支障をきたすかもしれない。ここは一端引こう」

「おお、バルパーの爺さん!さすがの僕チンも兵藤君相手はまだ拒否したい気分っすからねえ」

聞きたいことは山ほどあるけど、まずはこいつらを抑える……逃がさねえ!

「はい、ちゃらば!!」

「ちっ!逃がさん!!」

フリードは閃光弾のようなものを地面にたたきつけ、そして俺達は全員が眩しさから目を瞑った。

ゼノヴィアはその仕草を早く察知したのか、エクスカリバーでフリードに切りかけたが、しかし目を開けるとそこにはフリードとバルパーはいない。

『なんつー古典的な……………』

ドライグがあきれながら眩いたのと同時に、

「イリナ、追うぞ！」

「分かったわ！」

イリナとゼノヴィアが逃げた二人を深追いする！

「絶対に逃がすものか！」

つてオイ！木場!?

「祐斗先輩！」

あの二人のスピードに負けず劣らずのスピードで追い掛けていきやがった。

ドライヴ、まだ追いつけるか!?

『ああ、だが速く追いつけないと見失うぞ』

「ああ、分かっている! 匙、小猫ちゃん! 先に帰っていてくれ! 俺はあの三人を追いかける――」

「何を追いかけるのかしら? イッセー……………」

「こ、この声は……………」

恐る恐る振り向くとそこには、

「随分と勝手な事をしてたみたいね、イッセー?」

予想的中と言いますか、そこには笑顔だけですがすごい寒気がするくらいに怒っている部長、更にソーナ会長、そして……………確か副会長の椿さんに朱乃さんがいた。

……………俺、死んだわ。

~~~~~

まあ、今の状況を簡潔に説明すると……………近所の公園にて、俺達は正座で説教を受けていた。

「まったく貴方は……………っ！」

「いたいつ!?ご、ごめんなさい会長!!これは兵藤に騙されて……………!」

「言い訳は聞きません」

「ぐあああ!!」

南無、匙……………匙は会長の魔力を込めたお尻叩きを受けていた。

「イツセー。あなたが何をしていたのか…:理解はしているわよね。賢明な貴方ですもの。理由がなくこんなことをするとは思えないわ」

「……………木場の為とはいえ、結果的に匙と小猫ちゃんを巻き込んでしまったし……………言い訳はしないです」

「ええそうね。下手をすれば三勢力の均衡を崩壊させるほどのものよ。でも過ぎたことをこれ以上、言う気はないわ」

部長はそう言うと、俺と小猫ちゃんを大切そうに抱きしめてくれた。  
心配かけて、すみません……………。

「さあ、後一万回ですよ!」

「会長! 万単位は洒落にならないですううう!!」

「洒落にならないことを仕出かした貴方が言いますか!」

「兵藤! 助けてくれええええ!!」

……………匙が何か言ってる気がしたけど、部長の温もりに抱かれてる俺にはどうでもよかったです。

「あら、イツセー。他人事じゃないのよ?」

……………あ?

と、ここで俺は部長を見上げると、そこには魔力を手に集中させる我等がリアス部長

のお姿が……………!!

ああ、読めた……………この先の展開が。

「それはまさか、小猫ちゃんも、ですか……………!?!」

「首謀者は貴方でしょう? さ、お尻を突き出して、千回叩かれるか、私の言うことを何でも一つ聞くか、どちらが良いかしら?」

それ、どっちもいやな予感しかしないっす!!

『男だろ? もう出すもん出して楽になっちまえよ』

なんか言い方がやらしいわ!!

この後、深夜の公園にて俺の悲鳴が木霊したのであった。

~~~~~

「や、ヤベエ……………尻が、真つ二つだあ」

『落ち着け相棒。元から尻肉は割れてる』

今の俺はお尻を押さえてすごい不自然に家へと向かっています。

というかこんな様だから、バイクにも乗れない……………!

木場のことは部長の使い魔を使って探索しているらしく、俺と部長は帰路についているところだ。

あれから尻叩きは千回で終わったが、匙は本当に一万回叩かれていて、最後は静かに倒れた……………

アイツ、生きてるかな？

「イツセー、貴方は今回、仮に墮天使コカビエルと遭遇したらどうするつもりだったの？」

「…そりゃあ、戦いますよ。それが……………」

俺が言葉に詰まると、部長は怪訝な表情をした。

「それが……どうしたの？」

「……何でもないです。俺は皆を守り抜いて、戦い抜くだけですから」

もう、俺の目の前で、誰かが死んでいくのは………見たくないから。

「……それは確かに素晴らしいと思うわ。でも、ウィザードとして、赤龍帝として戦ってる貴方は、傷ついてばかりよ」

「……それで皆の希望が守れるなら、俺は幾らでも傷つきますよ」

「だめよっ、そんなのっ!!」

部長は力強く俺の手を握って、真剣な表情でそう言ってきた。

「イツセーは自分を蔑にし過ぎよ！自分のことをまるで考えてないっ！自分が幾ら傷ついてでも助けるなんて——」

「それでも俺はっ!!もう誰にも絶望を味わって欲しくないんですっ!!」

そうだ……もう、あんな地獄を繰り返さずぐらいなら、俺が傷つくだけで防げるなら

——俺は幾らでも傷ついて構わない。

「……それに、ヒーローが自分の為に力を使っちゃ、駄目ですし、ね？」

「イツセー……………」

部長は複雑な面持ちで俺の手を離した。

「早く帰りましょう、アーシアも待ってますし」

「……………そうね」

何か言いたげな様子だったが、部長は何も言わず俺と一緒に歩き出した。

「イツセーさん、お帰りなさい!」

「お疲れ、イツセー」

「ぶはっ!!」

うん、君達は何してるんだ!?!何故に裸エプロン!?!

似合ってるけどもき!!

「……………アーシア、ティア、負けはしないわ!!」

部長は目付きを鋭くさせると、奥のリビングに引っ込んでいった。

「な、なんちゅー格好を……!」

「うん? イッセーはこういう格好が好きではないのか? お前の部屋にあったDVDのパッケージに乗ってたんだが……」

「ちよおいつ! 何でばれた!」

「す、スースーしますけど……似合ってますか? イッセーさん」

「お、おう……!」

な、なんと言うか、チラリズムがハンパネエ……ティアなんて隠しきれてないし! と、ここでリビングから部長が舞い戻った。

「どう、イッセー? 似合ってるかしら……?」

もう、最高です!!!!

MAGIC 22 『邂逅———墮天使』

さて……………リアス部長からのキツイ愛の鞭を受け、そして裸エプロンを見て癒されたその日の夜。

俺は今部長とアーシア3人と就寝していた。

ま、このまま何事もなく時が過ぎてくれれば良いんだけどな……………

『…相棒、光の波動だ』

……………ですよねー、奴さんが簡単に寝させてくれる訳ないわな。

すると部長も光の波動を感じ取ったのか、直ぐ様起き上がった。

…意外にもアーシアも起きた。何か感じ取ったんだろうけど……………すげえな、やっぱ。

「イツセー、これは……」

「ま、見てみりや分かりますよつと」

ガラツと窓を開けると、やはりと言うか何と言うか、そこにはこちらを見下ろしている白髪のクソ神父ーもとい、フリードがいた。

多分光の波動はこいつの持つエクスカリバーだろうな。

フリードは此方を見てニヤツと挑発するかの様な笑みを浮かべると、何故か後ろへと下がった。

……………何だ？こねえのか？

『……………つ！相棒』

どうした？

『とんでもねえのが来るぜ……』

何言つて……っ!!この感じ、まさか！

フリードの後ろから現れた“ソイツ”を見た途端、部長も驚きを隠せずにいた。

そして直ぐ様、部長はアジアの前に立った。

「おお〜！漸く気付いたのねん！そう、この方が！俺っちの今の上司！！墮天使、コカビエル様です！！」

黒い翼が10枚、そして見るからに極悪そうな面構え。

コイツが……！

「墮天使、コカビエル……っ!!」

部長だけでなく、後から魔方阵で来た朱乃さんと小猫ちゃん、そしてソーナ会長と副会長の椿さん、匙も驚いていた。

「…フン、サーゼクスの妹君か。相変わらざるの紅の髪……兄上を連想させるほど吐き気がするな。それに、セラフォルの妹君もか」

っ、この野郎……！部長の紅の髪を貶しやがって！

「貴様を犯しつくした上で殺し、その首を冥界に見せれば、怒れるサーゼクスを見れそうだが……っ」

「カビエルは吐き気がするほどの台詞を吐くと、今度は俺の方を振り向いた。

「ほう、貴様が今代の赤龍帝……………いや、魔法使いと呼んだ方が良いのか？」

「……………お前、何で知ってんだ」

「解せない、と言った面持ちだな。良いだろう、貴様らに見せてやろう……………俺の新たな姿を!!うおおおおつ!!」

「カビエルが低く唸った途端、ヤツはその姿を……………変えた」。

「っ…この、姿はっ」

『ふ、フフフ、ハハハハア!!どうだ!この美しい姿!これこそ俺に与えられた新たな力
!』

それは正しく「闇」だった。

背中に生やす常闇の様な漆黒の翼と同じ黒の体躯、鴉のように鋭い眼光。そして胸に剥き出しになって埋め込まれた紫の魔法石。

厨二心を撥るフォルム。だがその姿、その魔力は———

「やっぱり、ファントムになってたのか……………！」

そう、正しくファントムその物だ。

『貴様、俺がこの姿になれるのを知ってたのか』

「……………確証はなかったけどな。以前、俺はこの町で墮天使と同じ波動を持つファントムと会った。そして、今回の聖剣強奪事件……………その首謀者がお前だと知った」

『それだけで俺の正体を見抜ける訳がないだろう』

「慌てんなよ……………。そしてこの間、この町に來た聖剣使いの影に潜んでたファントム。ソイツからは微弱だけど、光の波動を感じた。そこから行き着いた推理だよ……………コカビエルはファントムなんじゃ無いかって」

『ほう、大した奴だ』

まあ、外れて欲しかったけどな……………！

「イツセー……貴方」

「黙ってたのは謝ります。でも、不確定要素だったんで……」

そう言うのと、部長は何も言い返さなかった。

……ありがとうございます。

『赤龍帝、何故貴様はそんな女の元にいる？』

「……何が言いたい」

『ソイツと貴様ではあまりにも釣り合わん。身体でたらしこまれたのか？だとすればあまりにも惨めな赤龍帝だな』

「コカビエル……っ！」

「……俺は自分の意志でこの人の眷属になった。てめえには関係ないだろ」

俺は自分で出せる全力の殺気をぶつける。少なくとも、コイツをブツ飛ばす理由が増えたな。

『……中々上質な殺気だな。まあ、俺の計画の支障とはならんがな』

へっ、やっぱり先の大戦を経験してる奴にはそよ風程度か。

「今度は此方から質問だ。そこの白髪野郎の後を追っ掛けた奴らを……どうした？」

『フン。青髪の女と金髪の小僧は逃げ仰せたが……コイツの事か』

そう言うってコカビエルが此方に何かを投げ飛ばした……イリナ!!

「あぶねっ！」

俺は咄嗟にイリナを何とか抱き止める。が、イリナは身体中傷だらけだった。

「へっへーん！どうよ!? その糞ビッチが持ってた聖剣も、もう俺っちの物だよーん!!」

バツ、とフリードが良くいる露出狂みたいな感じでコートを左右に広げると、そこには聖剣———エクスカリバーが2本!

イリナから奪ったのか……だけど今は!

「アーシア、回復だ!」

「は、はい!」

俺はアーシアにイリナを預け、再びコカビエルを睨む。

『……………フリード、さっさと例の場所に向かえ』

「あいあいさっ! それじゃイツセー君、ばいちゃ!」

……………つて、また閃光弾かよ!

光が晴れると、そこにフリードはもういなかった。

「…………コカビエル、貴方の目的は何なのかしら?

悪魔と天使に喧嘩を売って、貴方は一

「体何をしたいのかしら？」

部長が強クコカビエルを見据え聞くと、コカビエルは、

『簡単だ。今の平和ボケした世界はつまらないからさ』

そうつまらなさそうに吐き捨てた。

その顔は心底うんざり、と言った感じだ。

『戦争が終わり、俺のとこの幹部は戦争に消極的になりやがった。しかもアザゼルに至っては神器の研究に没頭して戦争をしないと断言する始末……………どいもこいつもふざけてやがる!!』

アザゼル？それって確か……………

『堕天使の総督だ』

そうそう、それぞれ……………ってことは、アザゼルは、アイツの上司か。

『そう言う事だな』

「そうか……………。ならお前は……………戦争を望むのか？」

今度は俺がそう聞くと、コカビエルはその眼光を光らせた。

『分かっているな、赤龍帝！そうだ！俺は戦争がしたい！殺して殺して、殺しが正当化されるものを望む！エクスカリバーを奪えば天使側は戦争は攻めてくる思ったんだが、送ってきたのは雑魚神父と、その聖剣使いのみ……………』

ならば次はお

前達、悪魔に喧嘩を売ろうと思ったわけだ』

「……………狂ってんな、オイ」

正しく戦闘狂だな、アイツは……………。

けどもう一つ、解せない事がある。

「最後にもう一つ聞く。お前は何でフアントムになった？」

『……………俺がこの計画を始動させる前、俺はある男に会った。ソイツは俺にこう言っ
た……………お前に力を授ける、とな』

……………コカビエルにそんな事を？

『俺は初めは高を括っていた……………が、ソイツの力は圧倒的だった。この俺が手も足も出ん程にな』

「貴方でも、手が出ない相手って……………！」

部長の驚きは最もだ。あのコカビエルにそんな事を言わせる程の実力者がいるって事だからな。

「ケルベロス……………!?!」

そう、良くファンタジーにも出てくる三つ首の獣、ケルベロスだ!

『何か外側の頭の外に向いた目が白目だぞ。アレはガルベロスだ』

関係ねえ!!

つつーか結局ケルベロスじゃん!元ネタそうだし!

「……………部長!ここにいらに結界を」

「もう張ってるわ!大丈夫よ!」

「…なら、コイツは俺に任せて下さい!部長達はコカビエルを!!」

「……………分かったわ!でも、必ず生きて来なさい!」

了解っす!

「……………っし!行くぞ、ドライブグ!!」

『おうっ!』

《Boost!》

部長達が転移したのを確認した俺はケルベロス目掛けて駆け出した———!!

『私のイツセーに牙を向くとは良い度胸だな犬ツコロがあ!!』

『ギャウンツ!!』

けどその前に、ティアがケルベロスをプレスで焼き尽くしたーっ!!

「て、ティア……………」

「全く……………無事か? イツセー」

「お、おう……………」

お、俺が残った意味は……………

「行くのだろうか? ならば行け。この家は、私が守る」

「……………頼んだぜ、ティア!!」

「ああ」

《コネクト・プリーズ》

俺はティアにその場を任せると、バイクに跨がり駒王学園まで駆け出した!

皆、無事
でいてくれ
よっ
!!!

MAGIC 23 『決戦！コカビエル 前編』

イツセーがコカビエルの呼び出したケルベロスと格闘？していた頃……………

「悪いわね、ソーナ。結界を任せて……………」

「構いません。それに私は貴方にそれ以上のものを任せてしまったのですから……………」

ソーナを含めその眷属達は現在、学園の周りに被害が出ないように結界を張っており、そしてリアス達に課せられたのは……………コカビエルを止めること。

既にコカビエルは運動場にてフリードとバルパー・ガリレイと何かをしていた。

何をしているかは分からない。だがソレが最悪の事態を引き起こす事は察知している。

「リアス、もうこれは私たちだけで済む問題ではないわ。サーゼクス様を呼びなさい」
ソーナは眼を細くしてリアスに進言した。

「……………奴の目的はお兄様を表に出して戦争を起こすことよ？ そんな事、出来るわ

「現実を見なさい。今、この場には兵藤一誠君はいない。聖劍使いのイリナさんだって、怪我をして今は兵藤君の家で休ませている。木場君やもう一人の聖劍使いもない……魔王様を呼ぶ以外、方法はないわ」……………」

だがサーゼクスに迷惑を掛けられないリアスはそれに対し顔をしかめるが、ソーナの有無を言わさない正論に押し黙る。

リアスにもそれは分かっていた。だが自分の領内で起きた事件は自分で尻拭いをしなければ……………その思いがあつた。

そして、自分達には——

「大丈夫よ、ソーナ。私達には、希望が……イツセーがいるもの。彼は絶対に来る。あの子は、必ず約束を守るわ。イツセーが来るまで、耐えられる事は可能よ」

リアスの自信たっぷりな笑顔に、ソーナも少しだけ顔を綻ばせる。

「……どうか、ご無事でいてください。私は一応、もしもの時のためにお姉さまをお呼びします」

「……わかつたわ。私もお兄様に連絡をいれるわ」

と、リアスがサーゼクスに通信しようと魔方陣を展開する前に、

「あらあら、それならもう連絡しておきましたわ。冥界からの軍勢は1時間ほどで到着するとのことですよ」

リアスの後ろから朱乃が笑顔でそう言ってきた。

「流石朱乃ね。敵わないわ」

リアスがホッと呟いた。

「……………行きましょう、部長」

「ええ。アーシア、危ないと思っただら直ぐに転移しなさい。約束よ?」

「は、はい。でも……………」

アーシアは途端に俯いて、だが直ぐに顔を上げると、真つ直ぐに告げた。

「部長さん達を見捨てて助かるより、皆さんと一緒に傷ついた方がマシです! イッセーさんなら、絶対にこう言います!」

「アーシア……………」

「あらあら、うふふ。イッセー君の癖が移っちゃってますわね」

朱乃が微笑ましそうに笑うと、つられてリアス達も微笑む。

「……………分かったわ。貴女の決意…。貴女は必ず守るわ、アーシア」

「部長さん……………」

「……………さあ! 今はイッセーが来るまでに、私達に出来る限りの事をしましょう!」

そう言うとりアスは、運動場の真ん中で何やら魔方阵を展開しているバルパーを見据える。

そしてその上空には、コカビエルの姿も。

「貴方達!一体何をしようとしてるの!?!」

リアスが叫ぶと、バルパーは振り向き狂気に満ちた声で答えた。

「何、エクスカリバーを一つにするだけじゃよ。まあ、その余波でこの町は消し飛ぶがの」

「「「「ーっ!!」」」」

『バルパー、エクスカリバーの統合はどのくらい掛かる?』

上空にいるコカビエルが尋ねると、バルパーは自信満々に告げた。

「5分もあれば十分じゃわい」

『そうか………ならば時間稼ぎをして暇を潰すか』

コカビエルは指を鳴らすと、地上に幾重もの魔方阵を展開させる。

するとそこからは、更に数頭のケルベロスが現れた。

『『『グオオオオオオオ!!』』』

『俺のペット達と遊んでもらおうか』

「……上等よ。アーシアは下がって回復を！小猫と朱乃は戦闘準備よ！」
「「はい！」」

リアスは手に滅びの魔力を集めると、それをケルベロスにぶつける。
が、まるで怯む様子もなくリアスに向かってくる。

「雷よ！」

『グギユウウウ!!』

「えい……………」

『グオオオオオオオ！』

流石は地獄の番犬。リアス達とも対等に張り合う程の実力で、戦いは平行線を辿っていた。

『ほお、中々粘るな。だが……………』

「きやあああつ!!」

「っ！アーシア!？」

何とアーシアの目の前に現れたケルベロスが、今にも飛びかからんとしていた。

「くっ！退きなさい!!」

リアスがゴリ押しで押し通ろうとするが、ケルベロスはしつこく食い下がる。

そして遂にケルベロスの牙がアーシアを捉え————

「やらせはしないよ」

る前にケルベロスは地面から無数に生えた魔剣により串刺しとなっていた。

こんな芸当が出来る人物は、リアスの知る限り一人しかいない。

「遅いわよ、祐斗……………」

「遅れてすみません、部長」

その正体はリアス・グレモリーの『騎士』、木場祐斗その人だった。

そして、現れたのは木場だけではなかった。

「加勢するぞ、グレモリー眷属！」

更に朱乃と小猫が苦戦するケルベロスを破壊の聖剣が放つ一閃の元に葬り去るゼノ
ヴィアも現れたのだった。

「…………祐斗！」

「っ!？」

安心しきった木場の後ろから残りのケルベロスが向かってきた。

木場は咄嗟に魔剣を創り切り裂こうとするが、ケルベロスの方が速い。

「アーシアさんっ、逃げて!!」

「祐斗さん!?!」

木場はアーシアをケルベロスの被害が及ばない場所まで苦そうと立ち塞がる。そしてケルベロスは容赦なくその爪を振り下ろした!

「っ!!」

木場は反動で眼を瞑るも、何時まで経つても衝撃が来ない。

不思議に思い眼を開けると、眼前には止まったままのケルベロスが。

「おいおい、木場。一匹ワンちゃん潰しただけで安心すんなよな〜」

そんな時、暢気な声が聞こえたかと思うと、ケルベロスが”割れた”。

頭から真つ二つに別れたケルベロスの肉体は左右共に倒れた。

「これはっ……………と言うより今の声は!」

木場だけでなく、リアス達もつられて振り向くと、

「すんませーん、部長!遅れました!」

既にウイザードライバーを発現させた兵藤一誠が、そこに立っていた。

「イツセーっ!!」

「イツセー君!!」

全員嬉しそうにイツセーの元に駆けつける。

『ほう、来たか赤龍帝。待っていたぞ!』

「別にお前の為に来たんじゃねーからな!」

『ツンデレ乙』

「喧しいドライブ!!」

《シャバドウビタツチヘンシーン!シャバドウビタツチヘンシーン!》

「変身!!」

《フレイム・ドラゴン!ポー、ポー、ポーポーポー!》

普段通りでは歯が立たないと思ったのか、イツセーはのっけからウイザードFDに変身し、ウイザースードガンを振り回す。

だがその姿は何時ものフレイムドラゴンとは少し違っていた。

「イツセー、その手の甲の宝玉は……？」

そう、ウイザードFDの手の甲には、赤龍帝の籠手にあつた緑の宝玉が取り付けられていた。

「赤龍帝の力の一部を、ウイザードと混ぜ合わせたんです。これでウイザードの時には使えなかった倍加、解放、譲渡が使えるようになるんです」

『今回の敵は正直勝てるかどうか分からん。だからこそ、力不足のお前らに譲渡して戦う………そう言う訳だ』

ウイザードFDとドライグの説明に全員納得した様に頷いた。

「今ここで、皆に分け与えます。ここに来るまでに倍加した力を」

《Transfer!》

宝玉から音声が鳴ると、リアス達に強化した力が流れ込んだ。

「これで暫くは戦える筈です。さてと………木場、お前は」

「………僕はバルパー・ガリレイを討つよ」

ウイザードFDにそう告げて、木場はバルパーを睨み付けると、バルパーは突然叫び声を上げた。

「ふははははは！遂に……遂に完成だ!!」

狂喜に満ちた声を上げるバルパーに、全員がそちらを振り向くと、そこには4本の輝くエクスカリバーが。

「まさか、エクスカリバーを、1つに……?!」

「そうだ！漸く私の夢が叶う!!新しいエクスカリバーの誕生だ!」

更に輝きが強くなり、そして光が晴れると、そこには1本の剣が。

「君に1つ教えてあげよう。君達は聖剣の因子を持ち合わせていなかったのではない。ただ、少なかっただけだ」

「何を、言つて……?!」

「言葉通りだよ。聖剣を扱うための因子が君たちには不足していた……ならば不足している出来損ないはどうすればいい?……答えは簡単。因子を抜けばいいんだよ」

「何……?!」

動揺のあまり動けない木場に代わり、ウィザードFDが木場の言葉を代弁する。

「因子を抜いて、それを集めて結晶化出来れば、聖剣が第三者が扱うことが出来る!たとえ才能がなくてもな!そして私は研究の末、ソレを完成させた!だがどうしたものだ

「!!教会は私を異端者と追放した挙句、私の研究成果を奪う!」

「だったら、木場達を殺す必要はなかったはずだろ!?!因子を抜いて捨てれば、木場達は………!」

激昂した様に怒鳴るウイザードFDに、バルパーは何でもない風にその言葉を吐いた。

「ははは。何を言っている? 貴様たちは実験動物だ。使い終わったモルモットは、殺すに決まっているだろう?」

モルモットトローその言葉を聞いた木場は、ガクリと膝を付いた。

そんな木場に、バルパーは青い塊を投げた。

「今、君の足元に落ちて居るのは君たちから抜き去った因子の残りだよ………そんな残り屑、君にあげよう。そんなゴミは私にはもう必要ない」

「バルパー・ガリレイ! 貴方と言う人は! 何処まで人の命をつ!」

リアスの叫びを無視し、高笑いを続けるバルパー。

「………木場」

「……………皆」

ウィザードFDの言葉に耳を貸さず、木場はそれを大切そうに拾い上げる。泣きながら結晶を握り締めて、体を震えさせて。

「僕は、ずっと思っていた……。何で僕が生き残っていたんだろうって……」

涙を流しながら、木場は胸に留めてた想いを吐き出した。

「僕は生き残って、それで部長の眷属になって、学校に通えて、友達が出来て……………僕だけが幸せになっていいのかと考えた……」

ずっと木場は考えていた、自らが独り生き残った理由を。

「僕は復讐者だ……………そして、僕はずっと独りだ!!」

「……………貴方は一人じゃないよ。」

そう自暴自棄になる木場に、優しい声が響いた。

その声は、木場だけでなく、ウィザードFD達にも聞こえていた。

そして、声は更に増えていった。

『泣かないで。どうして一人なんて寂しいことを言うの?』

『死ぬなんて、悲しいよ……』

『君は生きていいんだよ。だって僕達の希望なんだから』

『どう、して……ッ。皆……！』

木場の周りには、薄ら青い透明な人影……小さい人影、大きい人影があった。

その影は木場を囲むように、声を掛ける。

「僕は何も出来なかった！何も……皆を見捨てて、今は平和に暮らすなんてそんなこと許されるはずがない!!」

木場は結晶を両手で握り締めて震え泣きながら叫ぶ。

『見捨ててなんかないよ』

『だって君はずっと、僕達のことを想ってくれていた』

『たとえそれが復讐なんだとしても、君が私たちを忘れた日はなかった』

『それに……今も涙を流してくれている』

木場は何度も何度も涙を拭うも、それは後から後から溢れてくる。

『私達もあなたを大切に想う』

『あなたはひとりじゃない』

『一人の力は弱くても、みんなと一緒になら大丈夫だ』

『だから受け入れよう・・・』

人影達は木場の手に、自らの手を添える。そして、木場の手の中の青い結晶を指した。

『歌おう。みんなで歌った歌を……』

木場の周りの光から、聖歌のようなものが響く——それはウイザードFD達にも聞こえていた。

リアスは驚いていて、アーシアは涙を流している……全員優しい表情をしていた。

『聖剣を受け入れよう』

『神が僕達を見放しても、君には神なんていない』

『君には私達がいる』

『たとえば神が僕達を見ていなくても僕達はきつと……』

一つだー。。

そう聞こえたかと思うと、木場に人影達が取り込まれ、目の前に1本の剣が現れた。

『相棒』

「何だ……?」

『奴は至った』

「は?」

『神器は所有者の思いを汲み取り、進化していく。だが劇的な思いとなると、それはこの世界の流れに逆らうー。ーそんな変化だ』

「まさか……」

『そう、それこそー。ー』

その剣から溢れる光は闇夜を切り裂き、

『禁手』

新たな境地に至った木場を祝福している様だった。

~~~~~

木場 side

僕は目の前の剣を掴んだ。そして感じた。

皆が、僕を内側から励ましてくれてるのを……!

「木場!お前の、お前の同士の想いが詰まった剣が、エクスカリバーなんかには負けやしねえ!!だから勝てよ!ダチ公!!」

「イツセー君……………」

魔法使いの姿のイツセー君は、僕に激励を送ってくれる。

いや、イツセー君だけじゃなかった。

「負けないで下さい!祐斗さん!!」

アーシアさんが、

「やっちゃって下さい……………祐斗先輩……!」

小猫ちゃんが、

「祐斗君、負けたらお仕置きですわ」  
朱乃さんが、

「祐斗！貴方は私の、グレモリー眷属の『騎士』よ！だから……思いっきりやりなさい！！」

そして、リアス部長がそう言ってくれる！

「……はい！」

だから、負ける理由なんて………ない！！

「その様なこけおどしに、私のエクスカリバーが負けるとでも？フリード！」  
「あいあいさっ！」

バルパーはフリードにエクスカリバーを手渡す。

『ならば赤龍帝！貴様は俺と戦え！！』

「良いぜ、一走り付き合ってやるよっ！！」

その間に、イツセー君はコカビエルと上空でぶつかり合う！

「今ここに誓おう……僕は剣になる。皆を守るための……眷属の剣となる!!  
双覇の聖魔剣!!この聖魔剣と共に!!」  
ソードオブ・ビトレイヤ

「ひやははあ!!そんなこけおどしが、俺つちに通用する訳ねえくだろうがあああ!!!」  
フリードは高速で僕の周りを動き回る……天閃の力だね。

だが速度ならっ!

「僕も負けてないっ!!」

「どわおっ!?だったらこれでどうだい!」

今度は鞭状に変化させ此方に向けてくる……あれは擬態の力……急に透明化した!?

「見えない一撃を読めるかい!」

恐らくは他のエクスカリバーの力……だけど!

ギインツ!

死角から襲い来るエクスカリバーを受け止めるっ!



「な、んなアホなあ!? 刀身は確かに消えてた筈っしょ!」

「確かにね……………でも、僕は刀身なんて見てない。エクスカリバーの聖の力を探知したままだよ」

そう、姿を消せても気や質量は消えない……………まあ、これはイツセー君に教わったんだけどね。

「糞がつ! 気に入らねええええ!!」

フリードは怒り狂い、エクスカリバーを滅茶苦茶に振るう!

「そんな乱れた剣で、僕達の想いが詰まった聖魔剣を、折れると思うなあ!」  
「どわっ!」

聖魔剣を一閃すると、僕は後方に下がる。すると、何か声が聞こえた。

「……………あれは」

「あん?」

そこにはゼノヴィアさんがいた。彼女は、僕達が斬り結んでる最中にも何かを呟いていたけど……………。

「ペトロ、バシレイオス、ディオニシウス、そして聖母マリアよ。我が声に耳を傾けてくれ」

——ゼノヴィアさんはそう呪文のようなものを唱えると、彼女の手元の空間にひびが入った。

そしてそこから……鎖で包まれている大剣が出現した。

——あれは聖剣。しかもエクスカリバーよりも大きなオーラを有している！

「この刃に宿りしセントの御名において、我は解放する……デユランダル!!」

ゼノヴィアは宙に出現する剣の柄を掴み、そのまま振り抜く。

その剣を拘束していた鎖は、まるで糸が切れるように粉々になり、ゼノヴィアはその

聖劍——伝説の聖劍・デュランダルの剣先を僕たちの方に向けていた。

「デュランダル!? 貴様、エクスカリバーの使い手ではなかったのか!? それに私の研究ではデュランダルを扱うまでの所までは到達していない!」

彼女の発言にバルパーはひどく驚いている……僕も驚いているよ。

デュランダル………エクスカリバーに並ぶほどの聖劍の一つだ。

「私はイリナやその男とは違って天然ものの聖劍使いでね。そして、私の本来の使い手は——このデュランダルだ」

「………何すか? 何なんすか? ここにきてのこの展開はあ!?! 胸糞悪いつたらねえぞオイ! この糞アマア!!」

フリードは激昂しながらエクスカリバーをデュランダル目掛けて振るうも、彼女がデュランダルを振るうと、

ピシィッ!

「なっ……………!?!」

フリードのエクスカリバーに亀裂が!

「……………凄い」

たったの一閃で……………!

「……………何だこの程度か。これなら、彼の聖魔剣の方が強いな。木場祐斗、後は君が決める」

「……………言われるまでもないさ!」

ゼノヴィアさんに言われる前に、僕はフリードに向けて駆け出した!

「糞がっ、糞がっ、糞がああああ!!!」

フリードは怒鳴りながら封魔銃を乱射するが、僕は全て聖魔剣で往なし、亀裂の走ったエクスカリバーに向けて一閃!!

ガアンツ!!

「ば、かな……………っ!?!」

フリードは鮮血を撒き散らして、その場に倒れた。  
エクスカリバーの破片と共に。

「皆、僕達の想いが……勝ったよ」

僕は聖魔剣を掲げて、同士達に伝える。

「やったな、木場祐斗」

「ゼノヴィアさん………君にも感謝するよ」

「礼などいらさないさ。今度は、是非君とも……」

ドオオオンツ!!

ゼノヴィアさんの言葉を遮る様にして、何か僕らの側に堕ちてきた。

それは……

『この程度か………? 赤龍帝』

さつきとは違う姿をした魔法使い……イツセイ君だった。

MAGIC 24 『決戦!コカビエル 後編』

イツセーside

「はあっ!」

『フンッ!』

木場がフリードとぶつかり始めたのと同じタイミングで、俺は上空にいるコカビエルと肉薄した!

《Boost!》

『中々のパワーだな!』

「そりゃ、どうも……つと!」

『ぬっ!?!』

俺のウィザードガンと奴の光の槍の鏝迫り合いになるが、俺はコカビエルの腹を蹴り距離を置く。

そしてその合間に、

「やあっ！」

「雷よー！」

リアス部長と朱乃さんは強化された滅びの魔力と雷を放ち、コカビエルを攻撃する！

『小賢しいっ！』

コカビエルはそれを魔方陣で防ぐが、辺りは煙で充満した。

「……………ていつっ！」

『……………っ!?!』

その隙を縫うように小猫ちゃんが拳でコカビエルを殴る！

『……………くくっ、この程度の力とはなっ！』

「…っ!?!」

だがコカビエルは強化された『戦車』の一撃を容易く受け止めると、小猫ちゃんをぶん投げた！

「小猫っ！」

部長が何とか小猫ちゃんを抱き止めるが、

『隙だらけだ!!』

コカビエルは夥しい数の槍を生成し、部長達に撃ち放った!

「させませんわ!」

「こなくそお!」

《ディフェンド・プリーズ》

俺と朱乃さんはそれを防ぐ!それを見てコカビエルは面白そうに笑うと、

『防戦一方とはな!バラキエルの娘よ、父の名が泣くぞ?!』

「……………っ!」

朱乃さんにそんな事を言い放った……………バラキエル?

「私を……………あの者と一緒にするなああ!!!」

すると、朱乃さんはその名を聞くと激昂した!

ど、どうしたんだ!?

朱乃さんの掌からは何時も以上の極太の雷が放たれた!

『流石はバラキエルの娘だっ!だが無駄だ!!』

「っ!?!」

コカビエルは何とそれを片手で受け止めつつ、もう片手に極太の光の槍を形成した!

「っ!朱乃!」



不味い！今の朱乃さんは、冷静さが……………！！

『むうんっ!!』

コカビエルは光の槍を朱乃さん目掛けて投げた……………けど！

「させるかああ!!」

《エクステンド・プリーズ》

当たる直前に朱乃さんを俺の方に引っ張り槍への接触を防ぐ！

「……………イツセイ君」

「大丈夫つすか!?朱乃さん！」

「え、ええ……………」

くっそ、あの野郎……………！

「よくも朱乃さんを殺そうとしやがったな！ぜってえ許さねえ!!」

《コピー・プリーズ》

「っ!／／／」

俺は後ろで朱乃さんが顔を赤らめるのに気付かず、ウイザーソードガンをコピーで増やし二刀流の構えを取り、コカビエルに攻撃する！

《Boost!》

「うおおおお!!」

『ほう、お前単独で攻めるかっ!?』

コカビエルも対抗する様にして、光の槍を2本作ると俺と連続で斬り結ぶ!!

《《キャモナスラッシュシユシエイクハンズ!フレイム・スラッシュユストライク!ボーボー  
ボー!ボーボー!》》

「だらああああ!!!」

フレイムドラゴンの指輪の力をウイザーソードガンに翳し、凄まじい焰を纏った斬撃を見舞う!

『ぐあっ!?』

一刀目でコカビエルの光の槍を消し飛ばし、二刀目でコカビエルの体に傷をつける!

『……………くつくつく。やるな、赤龍帝!だがっ!』

「っ!うわあああ!!」

「イツセーっ!?」

「イツセーさん!」

コカビエルはそれに対しあまり堪えた様子を見せず、光の波動で俺を吹き飛ばした!

だが!

《チョーイイネ！スペシャル・サイコー！》

「喰らいやがれっ!!でやああああ!!」

受け身を取りつつ指輪を入れ替えて、俺はドラゴンの頭を顕現させ、即座に攻撃に転じるっ!!

『っ！ぬうううううっ!!!かあっ!!』

「……………嘘、だろ…!？」

が、何とコカビエルはドラゴンブレスを魔方陣で防ぎやがった……………!

あのフェニックスも倒した攻撃でも、駄目かよ!?

『……………これだけでお仕舞いか？貴様のトリックは』

「……………へっ。何言っただよ？まだまだファイナーレには早いぜ。それにな……………俺の魔法はトリックなんかじゃねえよ!!」

《ハリケーン！ドラゴン！ビューー！ビューー！ビューービュー、ビューービューー!》

フレドラで駄目ならハリドラだ!

俺はウィザードソードガンを拾い、逆手に持ち直し再びコカビエルに接近する!

「はああああ!!」

『くくっ!やはり貴様の強さは本物だな!こんなに血沸く戦いは久方ぶりだぞ!』

くそっ!なんて強さだ……………隙が見出だせない!

「イツセー!加勢するわ!」

『貴様ら雑魚はコイツらと戯れてろ!』

コカビエルは何やら石を部長達の方に投げると、その石は忽ち石の怪物——グールになった!

グールは部長達を先に進ませない様に立ち塞がった!

『ヴウ……………!』

「くっ!邪魔よ!」

「ですが、これは……………!」

「多過ぎ、です……………!」

部長達は何とかグールを退けようとするも、グールは一向に減らない、そして木場とゼノヴィアはフリードと交戦ナウ……………って事はだ。

「現状、俺一人って訳か……………!」

《Boost!》

今は俺一人でコイツを相手取らないといけない訳だ。

『心にもない事を……………貴様にとつて奴等は足手まといだらう?』

「へっ!……………部長達を甘く見てつと、大怪我するぜ……………っ!」

俺はコカビエルの体を蹴り、空中回転しつつもう一度スペシャルリングを翳す!

《チヨロイイネ! スペシャル・サイコー!》

「行くぜ……………うおおおお!!」

『ッ!』

背中にドラゴンの翼が生えるのを確認して、俺は空中へと飛び上がり、そのまま回転

! ！  
そしてその勢いのまま緑の風を纏い……………コカビエルに突貫!!

……………恥ずかしいけど、これで決めてやるっ!!

『旋風の、ヘルダイブスラッシュャーっ!!』

つてお前が叫ぶんかい!? まあいいや!!

「切り刻んでやるぜえええええ!!!」

『ぐううううっ!!』

コカビエルは苦悶の声を上げつつ、俺のヘルダイブスラッシュャーを何とその体で受け止めつつ、更に回転する俺を抱き締めるかの様に腕を回し踏ん張った!?

『これしきの力で……………この俺を倒せるかあ!!』

「っ?!ぐあああああっ!!」

コカビエルは完全に俺のヘルダイブスラッシュャーを止めると、そのままグラウンドに投げ飛ばした!!

ドオオオンツ!!

「がっ、はあ……………!!」

『この程度か?……………赤龍帝』

「へっ、まだ……………まだだぜ……………!!」

何とかウイザーソードガンを杖にして立ち上がると、そこには木場とゼノヴィアが驚いた様子でこつちを見ていた。

「赤龍帝、なのか……………?」

「……………ん？ おお」

「イツセー君…大丈夫かい？」

そう語りかける木場の近くには、倒れ伏したフリードと粉々になった剣が  
……………つて事は、

「勝ったみてえだな…木場」

「……………うん、君達のお陰でね」

木場は晴れやかな表情でそう語った。……………一皮剥けたな、コイツも。

「はあっ！ アーシア、イツセーの回復を！」

「はいっ！ イツセーさん！」

アーシアは走りながら俺に近づくと、神器の力で俺を回復してくれた……………ああ、  
癒される。

「イツセー、大丈夫!？」

「はい、何とか……………」

再び集った俺達オカ研部+ゼノヴィア……………すると、バルパーは何やら木場を  
見て狼狽えながら口走った。

「ば、馬鹿な……………そんなことがあり得るわけがない！聖と魔、二つの相反する力が混ざり合おうなどと!!」

……………は？何言ってるんだ、コイツ。

『……………相棒、木場祐斗の剣をよく見ろ』

見ろって……………まさか、これは……………

『ああ、聖と魔の力が融合してやがる。あのクソジジイの言う通り、普通は有り得ない現象だ』

「……………そ、そうか、わかったぞ！聖と魔、二つが混ざり合うということは、つまり神が創ったシステムは消失しているということ！つまり魔王だけでなく神も—————」

……………が、バルパーが全てを言い終わることはなかった。

奴の腹部に巨大な光の槍が刺さっていたから。

そしてバルパー・ガリレイは……………光の藻屑と成って消えていった。



『バルパー、貴様は非常に優秀だった。貴様がその真理にたどり着いたのは、優秀だからであろう……だがお前がいなくとも、俺は別に一人で何とかできたさ』

「……………てめえ、仲間を簡単に殺しやがって……」

俺は怒りを隠せずに叫ぶと、コカビエルはそれを鼻で笑った。

『仲間……………？俺はただ、奴の計画が面白そうだったからこそ付き合っただけだ。それにして……』

コカビエルはチラリと何やらデカい聖剣を握るゼノヴィアを見ると、嘆息しながら呟いた。

『よく主がいらないのに信仰心を持ち続けられるな、聖剣使いよ』

「何……………？」

ゼノヴィアはコカビエルの言葉にピクリと肩を動かした……………主がいらない？

………待てよ。

聖と魔の融合………これは本来起こり得ない現象だ………神様がそんな真似は、絶対させない筈………

ゼノヴィアの希望は、そんな主………神に仕える事………

そしてこの間、ゼノヴィアの影に潜んでたファントム………もし、奴がコカビエルの差し金で、そして今から奴が言おうとしてる事は………

『ああ、そうだ。神に仕え、剣を振るう。勝利を神に捧げる。これが、私の希望だ』

『………そ、そうか、わかったぞ! 聖と魔、二つが混ざり合うということは、つまり神が創ったシステムは消失しているということ! つまり魔王だけでなく神も………』

『よく主がないのに信仰心を持ち続けられるな、聖剣使いよ』

.....っ  
!!!!

そうか……そう言うことかよっ！

「止めろコカビエル！それ以上真実を……っ!!?」

止めようと叫んだ俺だったが、コカビエルが放った波動砲により吹っ飛ばされ、同時に変身が解ける……くそっ、限界かよ……！

だげど止めないと……!!コレを聞いたら、彼女は……!!

『……神は既に死んでいるんだよ、当の昔に……戦争の時に魔王どもと共にな  
!!!』

……その言葉を聞いて、そこにいる全員が目を見開いた。

……いや、二人だけ違う。……アーシアと、ゼノヴィアだ。

「う、嘘だ！神が死んでいるなど、そんなわけが！」

『いいや、死んでいる……その聖魔剣使いが良い証拠だ。本来、聖と魔がまじりあうこ

とはないーそう、神がいればそんなことは起きないはずなのにな」

……………そう。聖と魔、二つの相反する力が一緒になるってことは、以前ドラッグに聞いた神様が創ったと言われる聖と魔のシステム……………それに欠落がないと出来ない。

つまり、聖魔剣はバグの様な物って訳だ。

そして神様がいればそんな欠落は存在すらしない……………でも存在するから神様はいない。

「そんな……………なら、神の愛はいつたどこに……………」

アーシアはシヨックを隠しきれず、膝を付いた。

だがゼノヴィアは未だに信じられないのか、大きく叫ぶ。

「……………だ。…そだ。嘘だっ！そんな事、信じられないっ！！主が、主が死んでいるなどっ！！」

『神の愛なんて存在していないさ。神がいなのだから当たり前だ。それでもそれでもミカエルは良くやっている。神の代わりをして人、天使をまとめ上げているのだから……………所詮貴様らが感じる愛など、偽物だ』

「そ、んな……………」

ゼノヴィアはガクリと膝を付き、聖剣を手離してしまう。

そして、

ピシイツ…！

彼女に紫の亀裂が————走ったのだった。

イツセーside out

〽  
〽  
〽  
〽  
〽  
〽  
〽  
〽  
〽  
〽

木場side

どういう事だ……!?

神が死んでいる……それを聞いたゼノヴィアさんは、アーシアさんと同じ様に膝を付いた途端、体に紫の亀裂が走った。

『……………フン、その女は悪魔だからか。いや、元々ゲートではなかったのか?』

コカビエルはアーシアさんを一瞥すると一人呟いていた……すると、僕らの後から怒声が響いた。

「……イッサー君だ。」

「てめえ! 始めから……………始めからゼノヴィアを絶望させるのが目的だったんだな!!」

『そうだ! 聖剣使いならば、上質なファントムを産み出すだろうからな! ついでにその女も絶望させるのも一興だと思ったが……………その女はゲートではなかった様だな』

「くそっ……………変身っ!」

《フレイム・プリーズ! ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!》

イッサー君は歯をくいしばりながら、再びウィザードの姿に変身すると、

「皆……………受け取ってくれえ！」

《Transfer!》

その姿のまま左手を掲げて、赤龍帝の譲渡を発動し、僕らに力を譲渡した！  
すると全員が何時も以上のオーラに包まれた！

「イツセー！」

「部長、皆……………少しの間だけで良い！時間を…時間を稼いでくれ！頼む!!」

「先輩は……………どうするんですか…!?!」

「彼女を………ゼノヴィアを助けるっ！」

そう言うときイツセー君は足を引き摺りながらもゼノヴィアさんの元に向かう。

『無駄な事は止める、赤龍帝。ソイツは貴様にとつても敵だろう？なのに何故助ける必要がある?』

「黙れ！敵かどうかなんて関係ない！俺は誰であつても、絶望してる人を見捨てたりはしないっ!!もう、誰一人俺の前で絶望させやしない!!」

『……………下らん。実に下らん』

コカビエルは背を向けているイツセー君に光の槍を放つーっ!!

だけど、槍はイツセー君に届く前に消え失せた。

『リアス・グレモリー……………』

そう、部長の滅びの魔力だ。

「イツセー、行きなさい。だけど、1つ約束して」

「……………」

「必ずゼノヴィアさんを……………その子を助けなさいっ！」

「っ……………はい!!」

力強く返事をする、イツセー君は彼女の前にしやがみ込んだ。

『フン、そんな真似を……………』

「させやしない……………かい？」

部長と僕だけじゃない、朱乃さんと小猫ちゃんもコカビエルの前に立ち塞がった。

「悪いけど……………友達の頼みだ。全力でお前を、止めるっ!!」

『……………まあ、余興にはなるか』



そう言うと、コカビエルは手に光の剣を作り出す。

「……………行くわよ、私の可愛い眷属達！ショータイムよ!!」

「「はいっ！」」

部長の言葉を皮切りに、僕らはコカビエルに向かって駆け出す！

頼んだよ、イツセー君っ!!

木場 side out

~~~~~

ウイザードFSは、ゼノヴィアの元に着くと、近くにいたアーシアを伴いゼノヴィア

にエンゲージリングを嵌める。

「アーシア……………コイツは、君の悪口も言った。君にとっては、辛い相手だ。今のアーシアの辛さも分かる。だけど、今は彼女の手を握ってて欲しいんだ」

「……………分かりました」

アーシアは僅かに微笑むと絶望しかかっているゼノヴィアの両手を優しく包み込んだ。

「……………もう、放っておいてくれ。私に、生きる希望なんて」

「生きる希望なんて……………これから先の人生でたくさん見つかる。だから、簡単に諦めるなよー!」

「……………」

「例え神様がいなくても、お前が今まで培ってきた信仰心は紛れもない真実だ!だけどこのまま絶望すれば、それすらもファントムに喰われちまう!それでも良いのか!」

「っ」

僅かに瞳が揺らいだゼノヴィアに、ウィザードFSは微笑んだ。

「……………見出だせないなら、俺がお前の支えになる。約束する、俺がお前の、最後の希望だ」
《エンゲージ・プリーズ》

ウィザードFSは、エンゲージリングの効果を使い、ゼノヴィアのアンダーワールド

へと潜っていった。

「……………」

「大丈夫です」

ゼノヴィアは力無く横を向くと、そこにはアーシアの笑顔が。

「イツセーさんは、絶対に約束を守ります。ですから、ゼノヴィアさんも負けないで下さい。私も、一緒ですから」

「……………アーシア・アルジェント」

~~~~~

『ああ、主よ!』

『ゼノヴィア、神への信仰心……………これを怠ってはいけませんよ』

『はい! シスター!』

.....

.....

.....

.....

「ここが、ゼノヴィアのアンダーワールドか………っ！」

恐らくは幼少期のゼノヴィアの思い出出………そんなアンダーワールドの情景を見ていると、そんな場面を壊すかのように巨大ファントム………ヘカトンケイルが現れた。

ウィザードFSは即座にドラゴライズウィザードリングを翳す。

《ドラゴライズ！プリーズ》

「来い、ドラゴン！」

『グオオオオオンツ!!!』

ウィザードFSの思いに答えるかのように力強く吠えながら、ウィザードラゴンは姿を現した。

ウィザードラゴンはヘカトンケイルを見つけると、直ぐ様戦闘を開始。

《コネクト・プリーズ》

ウィザードFSは魔方陣からマシンウインガーを取り寄せると、そのままウィザードラゴンを追い掛け始めた。

『グオオオオオオツ!!!』

『グギヤアアアツ!!!』

ウィザードラゴンとヘカトンケイルは互いにぶつかり合うも、そのせいでアンダーワールドにはどんどんと亀裂が。

「だーもう！いい加減慎重に戦えっての!!」

ウィザードFSはウィザードラゴンの背中にマシンウインガーを取り付け、何とかウィザードラゴンを制御する。

「行くぞっ！」

『グオオオオオオンツ!!!』

ウイザードFSはウイザードドラゴンを巧みに操り、ブレスや体当たりでヘカトンケイルを追い詰めていく。

『グギヤアアアアツ!!!』

ヘカトンケイルが6本の腕から攻撃を繰り出すも、それらをかまし、ウイザードは必殺技の体勢に。

《チヨーイイネ!キックストライク・サイコー!》

「でやああああ!!!」

炎を纏ったキックストライクエンドの前に、ヘカトンケイルは大爆発を起し、消滅した。

~~~~~

『……………正直、驚いたぞ』

墮天使コカビエルは感嘆した風にリアス達にそう漏らした。

『貴様らごときが、赤龍帝の力込みとは言えここまで粘るとはな』

あの後、リアス達はイツセーから貰った力により何とかコカビエルの猛攻を凌いでい

た。

その過酷さを物語る様に、身に付けた服はボロボロだった。

「……『窮鼠猫を噛む』とは良く言った物だよ」

『……………フン、貴様ら蛆虫共が俺に噛みつく？馬鹿も休み休み言えー！』

コカビエルが木場の言葉を一蹴した時、木場の後ろから何者かの銃弾がコカビエルに命中した。

「言っただろ？もう……………俺の目の前で、誰一人絶望させやしないって」

その声は、リアス達にとっては待ちわびた声であり、コカビエルにとっては聞こえる筈のない声だった。

「「「イツセー（君）（先輩）！！」」」

コカビエルを撃つたのは、ウィザーソードガンガンモードを構えた、ウィザード・フレイムスタイルだった。

『赤龍帝……………!?!』

「よう、コカビエル……………てめえの計画ぶつ潰すまで、死ねるかよ…。アーシア、サンキューな」

ウィザーソードガンをくるくる回しつつ、アーシアの頭を撫でながらそう茶化すウィザーDFSだったが、

『相棒……………何か策は?』

『うくん……………思い付いてない』

コカビエルを倒す策は何一つなかったのだ。しかも、イツセーの魔力も既に限界ギリギリ。

『つつーかさ、フレドラもハリドラも駄目な奴にどう勝ってんだよ……………』

『禁手か?』

『最終手段は、それだな……………』

ウィザードFSはドライブと対話しつつも、コカビエルに向けて臨戦態勢は解除しない。

『今更貴様が出てきた所で、最早何も変わらんっ！死ねえ!!』

コカビエルはウィザードFSに向かって巨大な光球を投げつけた。

「くっ……………!!」

ウィザードFSがそれをかわそうとするよりも前に、

「っ……………?」

『なん、だと……………!?!』

何処からともなく笛の音が聞こえたかと思うと、光球は跡形もなく消滅していた。

「い、今のは……………?」

『どうなっている……………!?!』

ウイザードFS達とコカビエルは笛の音が聞こえた方角を向くと、

「……………あ、アンタは!」

「……………イツセーと、同じ…魔法使い?」

全身が白い、槍の様な横笛を携えた、魔法使いの様な人物が、そこにはいた。

リアスの言う通り、ウイザードFSと立ち姿こそ似ているも、イツセーが変身するウイザードが磨かれた宝石とするならば、その人物は、磨く前の石……言わば原石の様な仮面だった。

「……………使え」

「うおっ……………これは?」

白い魔法使いは、コカビエルを一瞥すること無くウイザードFSに向かって何かを投げ渡した。

それは、赤い丸、青い菱形、緑の三角、黄色い四角が四隅に刻まれた指輪……ウイザードリングだ。

「……………それを使えば、コカピエルとも互角に戦えるだろう。後は、お前次第だ。兵藤一誠」

《テレポート・ナウ》

「お、おい！」

白い魔法使いはそれだけ伝えると、ウィザードF Sの制止を聞かずにその場から消えた。

「……………」

『相棒、お前まさか…………』

「…今は、白い魔法使いの言葉を信じるしかない。もう、考えてる余裕もないしな」

ウィザードF Sはドライグの制止を振り切り、渡された指輪を嵌め、ウィザードライバーに翳した。

《スペシャルラッシュユ！プリーズ！！ フレイム！ウォーター！ハリケーン！ランド！》

「う、おおおおおおおお！！！！」

翳した途端、ウィザードF Sはウィザードドラゴンを象った炎に包まれて炎を振り払う

と、

『何だ………その姿は!?!』

そこには、ウイザードラゴンの顔、翼、尾、爪を装備した、ウイザードFDがいたのだ。

だが普通のフレームドラゴンではない。

イツセーの体内に潜むウイザードラゴンの力を強制的に引き出しその力を合わせ
た
ー
ー
ー

ウイザード・スペシャルラッシュ。

「すげえパワーだ……………ぐう！」

ウィザードSRは体の内側から溢れる力に驚くが、その力に体が耐えきれないのか膝を付いた。

『相棒。コイツはどうやら、体内の奴の力を強制的に引き出した形態らしい。体に掛かる負担はその為だ』

「成る程な……………つまり？」

『短期決戦で決めろ。でないとな体が持たん』

「良いね、そっちの方が……………分かりやすいぜっ!!」

『っ!?!』

ウィザードSRが地面を蹴った次の瞬間には、コカビエルは吹っ飛ばされていた。

ドオオオンツ!!

たったキツクの一撃で、コカビエルは結界に叩き付けられる。

「イツセ……………!!」

「凄いパワーですわ……………」

「凄いです……………」

「うん。だけど……………」

「……………イツセー先輩、苦しそうです……………」

リアス達はただ見守るしか、なかった。

ただ歯痒い思いをしつつ、見守るしかない自らの未熟さを、噛み締めていた。

「何をへこたれてるの、皆!まだ私達にも出来ることはある筈よ!」

「部長……………」

「リアス……………」

「確かに……………そうですね」

だがリアスの叱責により、全員コカビエルでウィザードSRの戦いをしつかりと見る。

まだ、自分達も役に立てる筈だ……と。

「おおおおお!!!」

『フザケルナアアア!!!』

コカビエルは怒り狂いながら魔方陣から光の槍やら光球やらを連続で放つが、全てウィザードSRの魔方陣を介して分裂したラッシュユテイルに相殺される。

『ナニイイイ!?』

「でああああ!!!」

『グオアアアアア!』

その合間を縫うようにして、ウィザードSRはラッシュユヘルクローでコカビエルの体を切り裂いた。

すると、ウィザードガンでは傷一つ付かなかったコカビエルの体に、大きな爪痕が残った。

『……っ!バカナア、コノオレノカラダニ、キズヲツケルダトオオオ!!!ミトメン、ミトメンゾオオオ!!』

「ぐっ!!………まだだああ!!!」

襲い来る痛みに顔を歪めながらも、今度はコカビエルの周囲を旋回し、灼熱の大嵐の中に閉じ込め、ラッシュユウイングで四方八方から切り刻む。

「ハアアアアアッ!!!」

『グキヤアアア!!』

ふらふらになったコカビエルに、今度はラツシユスカルによる火炎放射を放つ。

コカビエルは魔方陣で防ごうとするも、フレイムドラゴンより威力の上がつたドラゴンブレスを防ぎきれず、地面に叩き付けられる。

『ヌウ、ヌウ………!コンナコトガ……!』

「はあ、はあ………!これで、ファイナレ、だつ!!」

《チヨイイネ!キックストライク・サイコー!》

ウィザードSRは、キックストライクウィザードリングを翳し、右足に炎を集中させる。

そしてそのまま飛び上がり、回転しながらコカビエルに突っ込んだ。

『……ファイナレナド、アルモノカアア!!』

コカビエルは特大の魔方陣から特大の光の槍を生成すると、向かってくるウィザードSR目掛けて飛ばした。

『相棒、今の状態でアレ喰らったら不味いぜ』

「はあ!?!今更止まれるかよーっ!!」

叫びながらもウィザードSRは止まらない。

すると、

『が、アあああああああああ!!!』

ストライクウィザードにより胸の魔宝石が砕かれ、コカビエルは普段の姿とフロントムの姿がごちゃごちゃになっていた。

「はあ、はあ……………はあつ……………うつ」

一方のウィザードSRも、限界を向かえ、変身が解除される。

「イツセー!!」

「イツセーさん!!」

「イツセー君!!」

「イツセー先輩!!」

リアス達は、慌ててイツセーに駆け寄る。

「大丈夫!? イツセー!!」

「あ、あんまり……………ですかね? ハハッ……………」

「……………無茶して! 馬鹿!」

リアスはへろへろなイツセーを抱き締める。

「こ、これで、終わると思うな……………っ！赤龍帝……………リアス、グレモリー!!」
『!?』

全て終わったかの様に思えたが、コカビエルはまだ立っていた。
リアス達の間緊張が走るが、

「いや、もう終わりだ。コカビエル」

突如としてソーナ達の張っていた結界が破られた。

「！！！！」

「ぎ、貴様は……………!!」

驚愕するリアス達の眼に映ったのは、

「白」だった。

MAGIC 25 『白との邂逅』

イツセー side

俺は朦朧とした意識の中、突如空中に現れた何者かを見ていた。

ソイツは全身が白い鎧で覆われ、背中には青く光る翼……………そしてその鎧は何処と無くドラゴンを思わせる。

……………何か、既視感があるな。と言うより、何時も見てる、そう……………赤龍帝の鎧に、似ていた。

「つ、ヴァーリ……………何故お前が!？」

「何、アザゼルにお前を連れ戻す様に言われてね。お前の目論みは全て筒抜けだ」

「ぐ……………おのれえ!」

「黙れ」

白い鎧野郎の容赦ない攻撃により、コカビエルは血を噴き出した！

「があっ!？」

「墮天使としての誇りを捨て、別の異形に乗り換えたお前に、最早自由はない。――コキユートス行きは確定している」

「あ、アザゼルーっ!!」

その言葉を最後に、コカビエルは俺達の前から姿を消した――。

鎧野郎はそれを見届けると、今度はグラウンドを見渡した。

「……はぐれ神父は逃げたか。まあ良い」

……何かを呟いたソイツは、俺達――正確には俺を一瞥した。

「……それにしても、俺のライバルは随分奇妙な魔法を使うんだね。だが、魔法を使わずとも……君は強い。そう俺の本能が告げるんだ」

「へっ、そうかい……」

此方はもうへろへろなんだけどな……。

「だが、万全でない状態で勝っても嬉しくないからね。またの機会に取っておこう
……君との闘いは」

「……………」

コイツ……多分俺より強い。
まだ拳を交わして無いけど、そう感じる。

『オイオイ、久々のライバルに挨拶も無しか？……白いの』
すると、左手に赤龍帝の籠手が展開され、周りにドライグの声が響いた。

『起きていたか……赤いの』

今度は、凜とした高い……女性の様な声が響き渡る。

ん？白いの？赤いの？……まさかアイツが、

「これは、一体……？」

「……二天龍同士の、対話」

部長の疑問に答えたのは、俺ではなくゼノヴィアだった。

『随分変わった宿主だな、ドライグ』

『お前の方も戦闘凶つばいけどな、アルビオン』

『しかし……一番変わったのは我等かもしれん。だが』

『へっ、運命の激突は近い……ってか？』

『ああ、その通りだ』

……珍しいな、ドライグがこんなに喋るなんて。

「また何れ会おう……俺のライバル君」

そう言うと、ソイツ……白龍皇はその場から飛び去った。

……もう限界だっ。

俺は眠る様にして、意識を手放した。

部長や遠くからの匙達の呼び掛ける声と、何かが壊れる音が、最後に聞こえたけど、今の俺にはどうでも良かった。

~~~~~

イツセーが意識を手放した瞬間を、白い魔法使いは魔方陣から見ていた。

そして、スペシャルラツシユリングが砕け散るのも。

「……………やはり所詮は試作品か」

白い魔法使いは然程残念な様子も見せず、一人呟いた。

「だが、私の眼に狂いはなかった……………兵藤一誠」

白い魔法使いはそう言うと、懐から何かを取り出した。

それは、手甲の部分に龍の模型が着いた、タイマーの様な物だった。

~~~~~

そして、コカビエルとの死闘の翌日の駒王学園。

「という訳で、私も悪魔になった」

バツ！、と悪魔の翼を展開させドヤ顔を晒す、ゼノヴィアが俺の目の前にいた。

「……なして？」

「支えるべき主がいらないからね、破れかぶれで転生したんだ！」

「お、おう……」

そんなもんで転生すんのか？

『お前も大分似たような物だろ』

……返す言葉も御座いません。

「……と、言うわけでゼノヴィアは、私の眷属になったから」

『騎士』のゼノヴィアだ。改めて宜しく頼む」

ゼノヴィアはそう言うところから、突然頭を下げた。

「えつ、ゼノヴィア、さん……？」

「すまなかった。君の事を魔女と呼んで………許してくれなくても良い。だ

が——謝らせてくれ！」

心からの謝罪に、アーシアは一瞬驚いた顔をするも、直ぐに微笑んでゼノヴィアの手を取った。

「私はもう気にしていませんよ。だから、顔を上げてください」

「つ……………アーシア・アルジェント、いや、アーシアと呼ばせてくれ！」

「?…はい！」

うんうん、仲良きことは美しきかな！

「イツセー君」

なんて微笑ましげに見詰めてると、木場が側に寄つて来た。

「ん?」

「今回の件、本当にありがとう」

「……………気にすんなよ。俺のお節介だからさ」

「いや、それでも言うさ」

「何だそりや…ハハ」

……………ま、コイツも過去を乗り切ったし、めでたしめでたしかな?

俺も……………何時かは乗り越えなきやな。

『そういや相棒』

「うん？」

『あの指輪……………壊れたぞ』

「えっ!?!……………何で!?!」

『さあな』

MAGIC番外編 『何故彼は禁手に目覚めたのか』

これは、『赤龍帝』兵藤一誠の奥底に眠る記憶――。

だが一誠、そしてドライグはそれを覚えていない。

これから、読者の皆様だけにお見せする――兵藤一誠の禁手に至った切っ掛け。

是非見て欲しい……………。

~~~~~

悪魔が住まう人間界の地下に存在する冥界。

そこに聳え立つ山の一角にて、修行に精を出す少年がいた。

『ゴオオオオオ!!』

「おおおお!!」

《Explosion!》

威厳ある男性の渋い声が響くと、少年はその小さい体で猛獣の突進を受け止めた。

『ブモツ!!』

「ぐぬぬぬぬ……………そおいつ!!」

自身より数倍の背丈を誇る猛獣を、少年は何と持ち上げて、床へと叩き付けた。

『グ、グウ……………』

「はあ、はあ……………いや、やったあ……………!」

衝撃により気絶した猛獣を見て、少年は安堵の息を付くと、地面に寝そべった。

『お疲れさん、相棒』

すると、少年の左手から、先程と同じ男性の声が響いた。

「お、おう……………!」

『だが、やはりまだ目覚めんか……………』

「ご、ごめん……………!」

『いんや、気にすんなよ。ま、じっくり鍛えようや』

少年の名は兵藤一誠、男性の声は嘗て最強と謳われた二天龍が一体――  
『ウエルシュ・ドラゴン赤い龍』ドライグ。

「中々なれな―な、禁手」

『それもそうだし、何よりお前に宿る魔力も一向に目覚めんな』

ドライグの言う通り、イツセーの体の奥底には高い魔力が眠っているのだが、これが中々開化しないのだ。

「俺って才能ないのかな〜……………」

『そんな事は……………ないぞ?』

「そこは強く否定してくれよ…」

「キュ〜」

「ん?」

げんなりとするイツセーのお腹に、小さい兔のような動物がリンゴを持って乗って来た。

「キュ〜キュ〜♪」

「くれんのか？」

『コイツの母ちゃんも食べろってき』

チラツと横を見ると、この動物の母親らしき動物も唸りながら促していた。

「じゃ、いただきます！」

「キュ〜！」

お言葉？に甘え、イツセーはリンゴを一口頬張った。

『しっかしお前も大分なつかれてるな』

兎はドライブグの言う通り、胡座をかいたイツセーの膝の間で寛いでる。

「何でだろうな？」

『さあな。ま、動物は人の心に機敏と聞く……………お前の穏やかさに心を許してんだろ

うさ』

「ふーん……………」

仕舞いには寝てしまった兎を撫でながら、イツセーはリンゴをまたかじる。



「グルルルル……………」

「?どしたんだろ……………」

すると突然、周りにいた動物が低く唸りだした。

イツセーの膝で寛いでいた兎も震えていた。

まるで何かを警戒してるかの様に。

『お前が、赤龍帝か』

「っ!？」

低い声がイツセーに向けて放たれ、イツセーは威圧感を感じつつも直ぐに立ち上がった。

そこにいたのは、白い体に何やら紫の宝石らしき物が埋め込まれた異形なナニかだった。

「お前……誰だ？」

『我が名は……ワイズマン。神が創りしこの世界を否定する者』

「……ワイズマン？」

『早速だが……お前の力、試させてもらおうぞ』

「!!」

ワイズマンはそう言うと、胸から紫の魔力の塊を連続で放った。

イツセーはそれを避け、赤龍帝の籠手を展開する。

《Boost!》

「へっ！だつたら存分に味わいなよっ!!」

イツセーは素早く踏み込むと、ワイズマンの胸目掛けて強化されたパンチを見舞う。  
が、

『……その程度か？』

「っ！うわっ!!」

ワイズマンにはまるでダメージが伝わっておらず、ワイズマンは腕を鋭い刃に変化させイツセーにカウンタアタックをけしかけるも、イツセーはこれをバックステップで回避。

『……どうした？何故禁手を使わない？』

「……………」

《Boost!》

ワイズマンの連続攻撃を避けつつ、イツセーは倍加を引き続き行う。

「……………お前なんかに使ったら、勿体ないからな!」

『フツ……。お前は”使わない”のでは無く、”使えない”……………そうではないのか

?』

「っ」

痛いところを突かれ、イツセーは押し黙る。

それを見たワイズマンは嘆息すると、紫の魔方陣を周囲に展開した。

『そうか……………ならば、使わざるを得ない様にしてやろう』

「何を……………っ!？」

その瞬間、イツセーを襲ったのは、濃密な殺気。

まるでワイズマンに心臓を鷲掴みにされてる様な錯覚を感じ、イツセーは動けずにとた。

「グルルルウ!!」

「ギャウウウウ!!」

しかしその隙に、周りにいた動物達から悲鳴が上がった。

ワイズマンの狙いは、この山に住まう動物達。

濃密な魔力弾を喰らい、動物達は次々と血塗れになって倒れていく。

イツセーが漸く動けた時には、既に数体もの動物が死んでいた。

「て、てめえ！狙うなら俺にしろ!!」

『クツクツ……どうした？早く禁手にならなければ、私はここの生物を殺し尽くすだけだ』

「っ……このやろお!!」

《Boost!》

何とかして止めようとするイツセーだったが、ワイズマンの攻撃に弾かれてしまう。

「ぐあっ！……あ、あぁー！」

辛くも立ち上がるイツセーの目の前には動物達の骸が。

『………臆したか？』

「……」

哀しむイツセーの前に、ワイズマンが立ち塞がる。

ワイズマンから放たれるプレッシャーに、イツセーは指一本動かさずにいた。

『相棒！動け！でなければ死ぬぞ！』

「っ……………うあああつ!!!」

ドライグの声に反応し、イツセーは弾かれるようにワイズマンから離れる。だがその顔は恐怖に染まっていた。

「キューー！」

『……………？』

「っ…………お前」

その時、イツセーとワイズマンの間にさっきの兎が立ち塞がった。

まるでイツセーを守らんとしている様だ。

「キューー！キューー！」

『邪魔だ……………』

「や、やめろおおおお!!!」

ワイズマンを止めようと走るイツセーだったが、それよりも早く、魔力弾が兎に命中した。

「あ……………ああああああ!!!」

その光景に絶叫しながら、イツセーは兎の元へと駆け寄る。

兎の体はボロボロで、その命は最早尽きかけていた。

「お、お前……………俺を守ろうとして…」

「き、キュー……………」

イツセーが震えながら抱き抱えると、兎は嬉しそうに一声鳴くと、そのままピクリとも動かなくなつた。

「……………俺は」

俺は、弱いーーー。

そう小さく呟くと、イツセーは体を震わせる。

『何で、何でこんな時に何も出来ないんだよ!!俺は、俺はーっ!!』

「うああああーっつ!!!!」

涙を流しながらイツセーは天高く吠えたと、イツセーの体を赤いオーラが包み込んでいく。

そのオーラは、次々と鎧を形成していき、イツセーの体を覆っていく。

『まさか……………』

『相棒……!』

「うああああーっつ!!!!」

自らに心を許した者達を守れずに、見殺しにした弱い自分への激しい怒り……………それが強い切っ掛けとなり、赤龍帝の籠手は今、

《Welsh Dragon Balance Breaker!!》

絶対の境地……………『バランス・ブレイカー禁手』へと至った。

『相棒、お前……!』

「……………てめえはもう、謝っても絶対許さねえぞ……………このクズ野郎!!」

イツセーは先程と比べ物にならないスピードでワイズマンの懐に潜り込み、ストレー  
トを放った。

『っ!』

ワイズマンは辛うじてそれを受け止めるが、イツセーはその間に限界まで倍加する。

《Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!》

「でやああああ!!」

『……………ぬう!』

全身に掛かる負担を無視して、イツセーはワイズマンに特攻を続ける。

怒り狂う今のイツセーに、負担など関係ない。

ただ、目の前の敵を潰す。それだけを考え、攻撃しているからだ。

『……………ハッハッハ!素晴らしい、素晴らしいぞ!!お前こそ、我が計画の要になりうる



……!!」

「ぐう……! 訳わかんねえ事ほざいてんなよ……っ!!?」

ワイズマンは笑いながらイツセーに向けて手を翳すと、突如イツセーの体を纏うオーラがワイズマンの胸のコアらしき物に吸い取られた。

それだけでない。イツセーの雀の涙程の魔力も、同じ様に吸収されていった。

「ぐっ、ああ………っ! 力、が……!」

『コイツ……相棒の魔力を吸収してるのか!?』

「それが……どうした、あ!」

《Boost!》

足で踏ん張りながら残り少ない魔力を増やすも、ワイズマンはそれを嘲笑うかの様に吸収していく。

「く、そつたれえ………!!」

《Balance Over》

だが既に限界を迎えていた為に、鎧が解除されてしまった。

それと同時に、イツセーも崩れ落ちる。

『相棒!!くそっ、やはりまだ体が耐えきれんのか…!?』

「うう……………っ!」

『……………フム、まだ力が不足しているな。少年よ』

「なん……………っ!」

ワイズマンはイツセーの頭に手を翳し、魔方陣を展開すると、イツセーはその場から姿が消えた。

『私との関わりの記憶……………全て封じさせてもらうぞ。だが漸く……………』

漸く見つけた……………終末の依り代が。

そう狂喜を滲ませたワイズマンの呟きを聞いたものは、誰一人としていなかった。

『お前はもう、修羅の道しか歩めん……………だが、それがお前を強くする』

~~~~~

「……………ん？」

次にイツセーが目を覚ましたのは、近所の公園だった。

「あれ？俺、一体……………」

「イツセー！」

「…おっちゃん？」

何をしていたか頭を唸らせていると、叔父の茂がイツセーに駆け寄ってきた。

「どしたの？」

「大変なんだ！お前の両親が、父さんと母さんが……………」

「……え？」

茂から事の顛末を聞いたイツセーは、近くの病院へと走り出した。

「父さん！母さん！」

イツセーが病室に飛び込むと、そこには呼吸器を付け、包帯が幾重にも巻かれた両親——晴人と暦の姿が。

「……イツセー、か？」

「父さん!!しつかりしてよ、父さん！母さん！」

「もう……イツセー、ここは、病院よ……静かに、しなきゃ……!!」

「！母さん!!」

暦の言葉が途切れ、イツセーは叫びながら両親の手を握った。

「良いか……イツセー……」

「父さん……!!」

すると、イツセーの想いが伝わったのか、晴人が僅かに目を開いた。

「お前は……俺達の希望だ。だから、悲しそうな顔をするな……お前は……皆の、

き、ぼ……………」

「先生！患者両名、心拍数が!!」

看護婦達の慌ただししい声をバツクに、イツセーは朝まで両親の手を握り続けた。

その翌日、イツセーの両親は眠る様にして息を引き取った……。。

くくくくくくくくくくくく

あれから三日後……。。

イツセーは両親の葬式が終わると、会場を抜け出し、近所の公園のベンチに座っていた。

「……………なあドライブ」

『……ん?』

イツセーは穏やかな声でドライグに語りかけた。

「俺さ、もつと強くなるよ。今以上に、もつと」

『……………そうか』

「もう、こんな想いを、味わいたくないからさ」

『……………そうか』

ドライグは静かにそれを聞き入れる。

『……………なあ相棒』

「ん？」

『……………泣いても、良いんだぞ』

ドライグの言葉通り、イツセーはこの三日間、全く泣くことはなかった。ただ黙々と、葬儀の準備を手伝っていた。

ドライグには分かっていた、イツセーの胸中が。

だからこそ、泣いてほしかった。

気に入った相棒だからこそ、悲しみを押し止めて欲しくなかった。

だが、イツセーはそれに対して、笑った。

「何いつてんだよ？もう四年生だぜ？俺。泣いたら、天国の父さんと母さんに笑われちゃうよ。……………だから、泣かない」

『……………』
イツセーはドーナツの紙袋を取り出すと、中のプレーンシュガーを一口頬張った。

「……………なあ、ドライグ」

『ん？』

「何時もさ、これ甘いのにさ……………」

『……………』

「何でさ、こんなにしょっぱいんだろう………つ！」

『そのしょっぱさを忘れるな………もう、そんな味のドーナツなんて食いたくないだろ？』

「うん………うん………つ!!」

『でも………今は、今は………思いっきり泣け』

「う、うう………グスツ………うあああーっ!!!」

ドライグの見守る中、この日イツセーは大粒の涙を流した。

この日限り、イツセーはもう、泣くことは無くなった。

強くなる為に、もう大切な人達を失わない為に――――

「よしっ！行くぜドライブ！」

『応っ!!』

兵藤一誠は、今日も鍛え続ける。

第四章：停止教室のヴァンパイア

MAGIC 26 『総督、襲来』

「くらえええ！夢剣、ドリームソード!!」

「なんの！シャドーカオスは終わらんよ!!」

「げっ！ダークインビシ!?!」

よー皆！イツセーだ……何してんのかって？悪魔家業だよ。

悪魔は契約者の呼びかけに応じて色んな要望に応えるからなく、んで最近はこのダン
デーなおじさんによく呼ばれるのさ。

まあ主な内容はゲームの対戦したり酒飲みにつき合ったり猥談したりetc
………しかもこのおじさん、それに見合わないぐらいの対価の物——例えば宝石
だったり有名な絵画だったり色んな物をくれるんだ。

「これでファイナルだ！ダークワイドオオオ!!」

「ぐあああああ!!」

よっしや！昨日のリベンジは果たしたぜ！！

「イヤー、今日は俺の負けだ。つえーな、悪魔君」

「そんな事ないっすよ、結構ギリギリでしたし」

どっこらしよつと、と言っておじさんは立ち上がった。

「ちよつと待つてな。今飲みもん用意するから」

「あ、お構いなく」

「遠慮するなつて……………赤龍帝」

「じゃあ、お言葉に甘えますわ……………堕天使さん」

俺がそう言うつと、おじさんは12枚の黒い翼をバサツと拵げた。

「ほう、気づいていたか。なら改めて自己紹介を……………俺はアザゼル。堕天使の総督だ」

「……………総督なのに、独身なんすか？」

俺が茶化すように言うつと、おじさん——アザゼルは、

「喧しい！寧ろ独り身の方が色々出来るから良いんだよ！！」

顔を赤くして怒鳴つてきた……………つてホントに独身かよ!?

『な？俺の言つた通りだろ』

流石はドライグ……………だな。

「てめえ言つてはならん事を言つてくれたなあ！今日は帰さねえからな！！」

アザゼルはそう言うとな度はジュースの代わりにプレイマットとデッキを持ってきた。

「デッキ持ってきてんだろ赤龍帝!？」

俺は返事の代わりに自分の専用デッキを取り出した。

「今日も焼き尽くして差し上げますよ……………」

「ふっ…………俺を昨日までの俺と思うなよ!」

お互いにカードを中央のサークルに置き、

「スタンドアップ!ヴァンガード!!」

5分後……………

「これでファイナレだ!ドラゴニック・オーバーロードTHE ACEでアタック!!」

「ぐあああああああ!!!俺のクラレットソードオオオオオオオ!!!」

焼き尽くしてやりましたとも、ええ。

「ぐつ……何故勝てんのだ!?!」

「イヤー、かげろう強いわー」

「……………次こそは!」

「朝まで付き合いますよ、総督さん?」

「うがあああああああ!!!今度はリンクジョーカーで勝負!!」

その日は結局、朝までヴァンガードファイトした。

~~~~~

「冗談じゃないわ」

翌日、夜の部室にて部長はご立腹だった。

「墮天使の総督とは言え悪魔と接触するなんて！協定に思いきり抵触してるじゃない！それにイツセー、貴方もよ！！相手が何をしてくるか分からないのに……………少しは警戒して！そして気づいていたなら直ぐ報告すること！！」

「……………はい」

部長の正論にぐうの音も出ない……………確かに軽率だったな。

『まあまあリアス・グレモリー落ち着けて。相棒も無事なんだ、し……………』

「……………は？」

『マジすんませんっした』

おい、二天龍！弱すぎる！！

『仕方ねえだろ！怖いんだもん！！』

もんって言うなし！

他の部員も苦笑いだったりアワアワしたり……………はあ。

「アザゼルは昔からそう言う男だよ、リアス」

……すると聞いたことがあるような声が聞こえた。

俺達はその声が聞こえたほうを見ると、そこには今までいかなかったはずの長い紅の髪をしたイケメンさんがいた。

ま、魔王サーゼクス様だ!!

「お、お兄様?！」

部長はその顔を見て目を見開いて驚いて、祐斗、朱乃さん、小猫ちゃんはその場に跪く。

ただアーシアは何が起きているのか理解できておらず、新米のゼノヴィアに至ってはきよとんとしている。

仕方がないとはいえ、取りあえず教えよう。

「二人とも、あの方は魔王様だ」

「え、そうだったのですか!？」

「……まさか、リアス部長の兄が魔王だとは」

まあ、そりゃビックリだよな。

「いやいや、頭を上げたまえ。私は今日はプライベートで来ているのだよ。そんな畏ま

る必要はない。くつろいでくれて構わないさ」

……するとサーゼクス様は気さくにそう言ってくれたので、三人は頭をあげた。

「こんにちは、イツセー様」

「お久しぶりです。グレイファイアさん」

と、後ろにいた『女王』のグレイファイアさんに挨拶されたので挨拶を返す。

すると、部長とアーシアは面白くなさそうに顔を顰め、グレイファイアさんは顔を綻ばせる……なんか、可愛いな。

「リアスお嬢様から倒れたと聞いたときは驚きましたが……ご無事そうで何よりです」

「あく、すいません。心配かけちゃって」

「ハハハ、イツセー君。彼女ったら、君を心配するあまり仕事にも身が入らなかった——」

スパンツ！

と、最後まで言う事無くサーゼクス様はグレイファイアさんのハリセン突込みで沈黙し



た。

「サーゼクス様、あまり御ふざけが過ぎるなら奥様にお伝えしますよ!」

「さ、気を取り直して——」

……まさかサーゼクス様つて、恐妻家?

「やあ、我が妹よ。そしてまた会えたね? 赤龍帝、兵藤一誠君にリアスの眷属達……会うのはライザー君の一件以来かな?」

サーゼクス様は柔らかい笑顔でそう言うと、俺達の緊張が少し緩む。

あの笑顔に何人もの女性悪魔が射抜かれたんだろうな……。

「それにしても殺風景な空間だ。リアス、君はまだ若いんだからもつと可愛らしいものでもおいたらどうだ? 流石にこの空間に魔法陣とはいささか……」

「……それよりもどうしてここに?」

するとサーゼクス様は一枚のプリントを出してきた……あれは確か、

「何を言っているんだ? もうすぐ授業参観だろう。これは兄として来なければならぬ理由だよ」

「ぐ、グレイファイアね! お兄様に言ったのは!!」

するとグレイファイアさんは当然の様に頷いた。

「サーゼクス様がこの学園の理事をしています故、私にも当然学園の情報は入ってきます。そして私はサーゼクス様の『女王』ですから、聞き耳を立てるのは当然かと」

「そうだ、リアス。たとえば魔王の仕事が激務であろうと、我が妹の頑張る姿は私的にも見たいものでね？ 仕事を光の速さで済ましてきたよ」

それどういう比喻ですか!?! 光の速さって……………んでこの人シスコンだな。

そーいやおつちゃんも行くって言ってたな……………主にアーシアを見るために。

……………俺、休んでもいんじゃないやね？

「ちなみに後から父上も来るらしいよ?」

「なっ!?!」

おお、部長が赤くなつて驚いてるよ……………こんな恥ずかしがっている部長を見るの初めてだなあ。でも可愛いつす!!

あれかな? 思春期だから、親にあんまりそういうのに来てほしくないってやつかな?

ま、俺は去年の授業参観サボったから分かんないけどね。

『叔父不幸が』

うるせえよ、おっちゃんも忙しいから良かったる!!

「しかしお兄様は魔王ですよ!? 一悪魔を特別視するのは……」

「いや、これも仕事のうちなんだ。何故なら、近いうちに三すくみの会談はこの駒王学園で取り行われるからね」

ま、マジか……まあ、先日的事だろうな。

「何しろここには今代赤龍帝であるイツセー君に、聖魔剣へと至ったらしい木場祐斗君、聖剣デュランダル使いに魔王セラフォル・レヴィアタンの妹がいる。更にそこにファントムとなったコカビエル、そして……白龍皇が襲撃してきたからね」

……白龍皇、ねえ。

「だが私は思う。ここまで様々な力が入り混じって強者が来たのは、君が理由と想っているよ……赤龍帝・兵藤一誠君」

確かにそうかも。赤龍帝は、特にドラゴンは強者を引き寄せる性質を持っているらしいからな。

今回のコカビエルが良い例だよ……俺に平穩はないのかねえ。

その時、俺の近くにいたゼノヴィアが静かに立ち上がってサーゼクス様の方に向かって歩んだ。

「あなたが魔王か。私は聖剣デユランダルの所有者、ゼノヴィアというものだ」

「君のことは既に聞いているよ……よもや伝説の聖剣であるデユランダルの担い手がリアスの眷族になるとは、聞いた時は耳を疑ったよ」

「……先に言っておこう。私が悪魔になったのは、絶望していた私を救ってくれた赤龍帝・兵藤一誠がいたからだ。破れかぶれとはいえ、今までの敵側についたんだ……私は何より、イツセーや仲間のために力を振ろうと思う」

恐れ知らずか、コイツ………！

「ハハハ。リアスの眷属は面白いな。ならばそれでいい……リアスのために、君の思うがままに力を振るってくれ」

「無論そのつもりだ」

だけどサーゼクス様は気にすることなく微笑みをみせてそう言った。

寛大だなあ………流石魔王様だ！

「さて、小難しいのはこれで終わりにして世間話でもしようじゃないか。とはいえ、今はもう時間が遅くなりつつあるね。今から宿泊施設は空いているだろうか？」

……時間はもう9時を回ってるし、探せばあるだろうけど……あ！

「でしたら——」

~~~~~

「イヤー、まさかリアスさんのお兄様がいらっしやるとは。さき、どんどん食べてください

い」

「では遠慮なく頂きます」

そう、俺の出した案はサーゼクス様を俺の家に泊める事だ。

最初はキョトンとしたサーゼクス様だったけど、直ぐに了承した。

んで、序でつて言っちゃあアレだけどおっちゃんも呼ぶ事に。

今サーゼクス様はおっちゃんの作った料理を美味しそうに食べている。

俺？俺はと言うと……

「……そうです、そんな感じですよ」

「成程、コツは掴みました」

グレイフィアさん達に俺が先日アザゼルと遊んでたゲームのやり方をレクチャーしてた。

何でも、やってみたくなくなったからだとか。

「ウイルスさん可愛いですよ」

はは、アーシア。どんどんHP減ってるよ。

「これで何者も怖くないわ！」

……部長はグレイガ相手にリフレクメットだけのフォルダで挑んでる。グレイガはホント気の毒なボスだよなあ。

「やりましたよ、イツセー様」

どれどれ……ブツ！

『コスモマン相手にほぼノーダメかよ……すげえ』

俺は何回も死んだのに……すげえ。

~~~~~

「イツセー……」

「イツセーさん……」

部長とアーシアは目をウルウルさせて此方を見るけど……なあ。

なぜこうなってるのかと言うと、俺の横にいるサーゼクス様が俺と一緒に話をしたいからだそうな。

それで普段、俺の部屋で寝ている部長とアーシアは今日は俺の部屋で眠れないと言うことでこうなっている。

因みにおっちゃんも酔い潰れて父さんの部屋で寝てる。

「二人とも、行きましょう。私も同じ気持ちですから……」

ぐ、グレイフィアさん?! 貴女と一緒にだと俺ねねえ（緊張的な意味で）!

「グレイフィア……そうね、分かったわ」

「で、ではイツセーさん。お休みなさい」

「お、おう……」

3人は其々の部屋に戻っていった。

「本当に私がベッドで構わないのかい?」

「はい! 全然構わないです!!」

魔王様を地べたに寝かすとか出来ねえよ!!

と言う訳で俺は雑魚寝だ。

「コカビエルの件はご苦労だったね」

「……いえ、大丈夫ですよ」

「でも報告を聞いて驚いたよ。あの記録に載るほどの墮天使でありしかも戦争時より強くなったコカビエルを、君は圧倒したそうじゃないか」

「……一応は、そうですね」

まあ、白い魔法使いからもらった指輪がなかったら、恐らく俺達では勝てなかったろうな。

「……そう言えば、あの場にもう一人の魔法使いが現れたとリアスから聞いたが、君はその魔法使いから」

「……はい。ソイツから、俺は魔法使いの力をもらいました」

「……彼の正体は？」

「………わかんないです。ただ、人間ではない事は」

アイツが一体何者なのかは、全く分からない。

でもドライグ曰く、人間ではないらしい。

「………空気が重くなってしまったね、話を変えようか。君はリアス達をどう思ってい



るんだい？」

サーゼクス様は俺の面持ちを見て空気を換えようとそんな話題を振ってくださいった。

「それって……異性として、って事ですか？」

「うん。特に——我が妹、リアスの事をどう思ってるのか、ね」

どう、か……………。

「良い仲間……ですかね？」

「……それは飽くまで」

「仲間としてです。……俺に、誰かを愛する資格なんてないですから。——ファン

トムを宿してる俺なんて」

俺は自分の本心を、少しだけサーゼクス様に打ち明けた。

この人には、嘘なんて通じそうにないからな。

「では君は……日蝕の日に行われた」

やっぱり、サーゼクス様は知ってたのか……。

「やっぱり知ってるんですね……」

「いや、私も詳しくは知らない。ただ、この地上で大規模な魔力の流動が発生していたとの報告があつてね」

「……………お願ひがあります。これから話す事、まだ部長達には黙っててくれますか？」

「…約束しよう」

そこから俺はサーゼクス様に全てを打ち明けた。

あの日の——サバトの出来事を。

イツセーside out

くくくくくくくくくくくくくくくく

……とある森の奥。

豪華なベッドが安置されたその場所にて、ワイズマンが蠢いていた。

『さて……………お前の誘う先は絶望か？兵藤一誠…』

ワイズマンの手には、海のように青い魔法石があった。

# MAGIC 27 『夏とプールと水着』

魔王サーゼクス・ルシファア様が俺の家に泊まった翌日の昼、俺達オカ研部の部員達は学校のプールにいた。

因みにサーゼクス様は日本を観光中だ………と言うか神社のオーラを消し飛ばすとかアリか!?

『やっぱ魔王はスゲーよな』

凄いつてレベルじゃないんですかそれは………!

で、なんでプールにいるのかと言うと、この間のコカビエル戦でソーナ会長達には世話になったからそのお詫びと言う事だ。

「掃除が終われば先に使っても構わないそうよ。さ、皆頑張りましょう!」

「オッス!」

さ、お掃除タイムだ!

「イツセーさん、後で泳ぎを教えてくださいますか?私、こう言うの初めてで……」

「私も、お願いして良いですか……?」

デッキブラシでゴシゴシ掃除していると、アジアと小猫ちゃんがそう言ってきた。

「おう、良いぜ！」

ま、野郎に泳ぎ教えるよりよっぽど楽しいしな！

数分後、掃除を完璧に終えたので、朱乃さんと俺で水を入れる事に。

《ハイドロ・プリーズ》

朱乃さんの魔法と俺の魔法で一気に水でいっぱいになった事で、早速着替えタイムだぜ！

「しっかし暑いなあ……………」

男子の着替えは比較的早いので女性陣を待っていると、

「やっぱリイッサー君の体は逞しいね…」

後ろからそんな事を木場がのたまいやがった！

「お、お前…………その言い方止めろよ！気持ち悪いわ！」

「そんな事言わないでよ。だって僕等はグレモリー眷属唯一の男子メンバーだよ？もつ

と親睦を深めなきや」

「……………何か、木場の態度が最近気持ち悪いよ！」

「ことある毎に名前で呼んでほしいとか乙女の表情で言いやがるんだよ!!」

「どうしたんだよ、一体!？」

『こりやあホの字ですすなあ』

「止める、この変態赤トカゲ!!」

『あんだとお!!?この変態マントヒビが!』

「お待ちせしました〜!」

「おお、我が天使のアーシアちゃんは……………スク水ですすな!

胸の「あーしあ」ってゼツケンもいい味出してる!!」

『おお……………カワユス』

「お前は見るなドライグ!アーシアが穢れる!

『理不尽だ!!』

「小猫ちゃんもスク水か〜!可愛いぜ!」

「……………いやらしい目線で見られないのは、それはそれで複雑です」

「え、なんかマズった?

『無視かテメエ!!!』

「どうかしら？ イッセー」

「おおお！ 部長のビキニ！ ビキニ！！ おっぱいがすげえ！！！！

「あらあら、イッセー君。私のは如何かしら？」

「朱乃さん！ 何でそんなにスタイルが宜しいのですか！？」

「さつきから息子の昂ぶりがヤバいです！！」

「つて、ゼノヴィアがいないな……着替えに手間取ってるのかな？」

「まあ、後から来るだろ。」

「……ぷはー、ぷはー」

「よーし、その調子だよ」

「小猫ちゃん、頑張ってくださいい〜！」

「と言う訳で現在は小猫ちゃんに泳ぎを教える最中だ。」

「アーシアはプールサイドで小猫ちゃんの応援で、部長達は優雅に泳いでらっしゃる。」

「……すみません、イッセー先輩」

「良いって良いって。可愛い後輩の為なら何肌でも脱ぐさ」

「か、かわっ……／／！」

うんうん、照れる顔も可愛いな！

「イツセー！ちよつと来てほしいんだけど〜」

「はい！…ゴメンな小猫ちゃん」

「大丈夫です、暫く休憩しようかと思っていましたので……」

「じゃ、また後で！」

「…はい」

俺は駆け足で部長の元へと急ぐ……良い子の皆はプールサイドを走つちやダメだ

ぞ！

「どうしました？部長」

「貴方にオイルを塗って貰おうと思ったんだけど……ダメかしら？」

「ぜんっぜん！むしろバッチコイです!!」

まさか合法的に部長のお体を触れる日が来るなんて……最高だ!!

「じゃ、お願いね」

部長はビキニの紐を外してマットに寝転がった……よし、やるぞ！

取り敢えず手に馴染ませてから慎重に部長のお背中に塗っていくけど……部長の肌、

すげえモチモチしてる！

ずっと触つても飽きが来ないもん!!



ムニユツ

「あらあら、部長だけ狡いですわ〜」

はうあ……こ、この背中に伝わる柔らかな感触は！

「うふふ、どうかしらイツセー君？」

あ、朱乃さん！

つつーか柔らかな感触の中に少し固さが……まさかビキニ無しっすか!?

「ちよ、ちよつと朱乃！邪魔しないでくれるかしら！」

俺の手が離れた為に慌てて起き上がる部長だが……当然綺麗なサクラランボ丸見え!!

は、破壊力が高すぎるぜ……!!

「うふふ、イツセー君は本当に可愛いですわ。ねえ部長、イツセー君を私に下さらない

？」

「ダメよ！その子は髪の毛一本に至るまで私の物なんだから！」

部長、それはヤバい人ですよ。

「あらあら、でしたら強引に説得するしか無いようですわね」

朱乃さんはオーラを煌めかせてそう言うと、部長の方も臨戦態勢になった！

「上等じゃない……私のイツセーを誑かした罪は重いわよ！」

ひい！俺の所有権でバトルおっぱじめたよお姉様方！  
ここは一先ず退散だ！

『やっぱお前はヘタレなんだねえ』  
うるせえ！！

「はあ、はあ……」

な、何で俺なんかの為に争うんだ？

「…イツセー、か？」

「うおっ!?……ぜ、ゼノヴィアか」

び、ビックリした。そう言えば何してんだ？

「初めての水着で、少し手間取ってしまっただけ」

そうやって出てきたゼノヴィアは、青のビキニを身に着けていた。

「おお、似合ってるじゃん」

しかしアレだな。部長や朱乃さんの陰に隠れがちだけど此奴も結構スタイル良いもんな。

「あ、ありがとう……。そうだ、時に兵藤一誠」

「別にイツセーで良いぜ。仲間なんだしき」

「…ではイツセー。私と子作りしないか？」

……………は？

「こ、子作り……？」

「ああ、そうだ」

な、なして此奴はこんな事を……!?

「私は以前まで協会のシスターとして活動してきた。その生活で私達は私欲を持っていなかった。だが悪魔は自らの欲に忠実な生き物だとリアス部長に教えられたんだ」

「そ、それで、小作り……？」

「うん。女らしい欲だろう？それに、子供は希望と言うじゃないか。それを君との間に授かりたくてね」

確かにそうだけど………って!。

「お、お前何言ってるか分かってんのか!? 一生モンなんだぞ！そんな理由で好きでもない奴相手に処女捧げるなよ!!」

「……私は誰彼構わずこんな事は言わない。イツセーだから言うんだ」

「お、俺だから……!?!」

「ああ。君は私を絶望の狭間から救ってくれた……そんな君だからこそ、私は言うんだ」  
ゼノヴィアはそう言うのとビキニを取り払った!

「どうかな? 確かにリアス部長や朱乃副部長には負けるが、それでもアーシアや小猫より揉み応えもあるぞ?」

こ、コイツ、なんつー蠱惑的な事を……!!

「さあ、抱いてくれ……イツセー」

「や、でもここだとアレだし何より部長にバレたら……!」

「バレたら……何かしら? イツセー」

……ああ、オワタ。

ここの後部長達にこっ酷く叱られましたとさ……。

『その後、相棒の姿を見たものはいない……………』

勝手に殺すな！生きとるわ!!

~~~~~

「はあ、色々酷い目にあつた……………」

『モテる男の性だな』

そういうもんかねえ……………ん？

ふと校門を見ると、そこには綺麗な銀髪をした美少年が立っていた。
「いい学校だね」

「……………そうか？ま、その通りだけどな」

まさか、

「この間以来だね……………赤龍帝」

「そうだな……………白龍皇」

「こんなところでライバル？と再会するなんてな。

「良く分かったね」

「この間の鎧野郎とオーラが同じだったからな」

「ふ、やはり君は強い……………何れ戦う時が楽しみだ」

それだけ言うと、ソイツは去っていった。

部長達に気取られないように来たのかよ……………。

「……………あ！名前聞くの忘れた！」

くっそ〜！…ん？

『ガウ！』

「……………ケルベロス？」

魔力の反応がしたので振り向くと、小さい三つ首の手乗りサイズのケルベロスが此方をジツと見つめていた。

『……………ガウ！』

「あ！おい待て！」

ケルベロスは一声吠えると、まるで俺を誘導するかのよう林の中に駆け込んだ。

っつーか指輪らしき物付いてたな……まさか。

『恐らく、あの白い魔法使いの使い魔かもしれんな』

……とにかく追ってみるか。

数分後、俺はケルベロスの導きで何処かの洞窟についた。

「随分学校から離れたな………ん？」

洞窟に足を踏み入れると、そこには何故かカーテンで仕切られたベッドが置かれていた。

何でこんなトコに………

『ガウ！』

「…捲れって事か？」

ケルベロスはベッドの前で止まり、俺に吼える。

なんかこえーけど………ッ！

俺が意を決してカーテンを開けると、

「……………?」

そこには何もなかった。……………そう、ベッドに置かれた青の魔法石を除いては。「やっぱさっきのケルベロスは……………アレ? いない」

俺が振り返ると、そこには既に誰もいなかった……………。

~~~~~

イツセーが首を傾げながら洞窟から出るのを見守る人物がいた。

『ガウ!』

「ご苦労だったな、ケルベロス」

ケルベロスにそう労りの言葉を掛ける人物——白い魔法使い。



## MAGIC28 『悪夢・前編』

プールでのドタバタ騒ぎとイツセーが青の魔宝石を手に入れた翌日。

「御免なさいね、イツセー。買い物に付き合わせちゃって」

「大丈夫ですよーどうせ暇だったんで」

この日、イツセーはリアスと一緒に買い物に繰り出していた。

昨夜、魔宝石を茂に預けたイツセーはその後でリアスに誘われたのだ。

因みにアーシアはゼノヴィアと桐生と一緒に不出掛けしており、今はいない。

『な、何かこれって……で、デートじゃね?!』

『それは幻想だ』

『ダニイ!?!』

イツセーがドライグと漫才を繰り広げてる間にもリアスは楽しそうに歩を進めていく。

「イツセー、早く♪」

「あ、待ってくださいいよー!」

リアスを追い掛けようとしたイツセーだったが、

「ば、化け物だー！ー！ー！！」

怯えながら何かから逃げるようにして走る男性の姿を見て顔色を変えた。  
無論それはリアスも同じであった。

「化け物……まさかファントム!?!」

「行きましょう、イツセー!」

「はい!」

買い物そつちのけで二人は男性を追いかける事に。

~~~~~

「はあ、はあ………ッ!」

『漸く追い付いたぞ………ぐう!』

近くの廃校に逃げ込んだ男性にジリジリとにじり寄る化け物——ファントムの幹部、メデューサ。

だがメデューサの背後から濃密な魔力の塊がぶつけられ、メデューサはたじろぐ。

『何者だ………!』

「それ以上の蛮行は許さないわ、ファントム!」

「白昼堂々人を襲う何ぞ良い度胸だな、変身!」

《ハリケーン・プリーズ! フー、フー、フーフーフー!》

《コネクト・プリーズ》

イツセーはウィザードHSに変身して、コネクトでウィザードソードガンを取り寄せると、メデューサに斬りかかった。

『ウィザードに悪魔風情が………邪魔をするな!』

「そうはいかないんだよ、ねっ!」

「はっ!!」

『ちい!』

ウィザードHSが空中に飛び上がりその間にリアスが滅びの魔力を放つ。

メデューサはそれをアロガントで往なすも、ウィザードHSはその間にハリケーン

ラゴンにスタイルチェンジ。

《ハリケーン！ドラゴン！ビューー！ビューー！ビューービューー、ビューービューー！》

「さあ、シヨータムだ！」

《コピー・プリーズ》

コピーでウィザードソードガンを増やすと、二刀流でメデューサを攻め立てる。

「おらおらおらおらおらあ！！」

『くっ……調子に乗るな！』

メデューサの瞳が妖しく輝くと、ウィザードHDは金縛りにあつたかのように動けなくなつた。

「な、んだ………これ!？」

「イツセーツ!!」

『次はこうは行かんぞ………!』

「っ、待ちなさい!」

リアスが引きとめようとするも、メデューサは霧を発生させ姿を消した。

「つて、イツセー!大丈夫!？」

「ええ、何とか………大丈夫ですか?」

「っ!………あ、ああ」

変身を解いたイツセーは男性に声を掛けると、男性はイツセーの顔を見て驚いていた。

まるでイツセーの事を知っているかのように。

「……………えつと、どつかで会ってます?」

「…や、人違いじゃないか?」

男性は首を傾げながらそう言うと、尻を払って立ち去ろうとするが、イツセーは彼の肩を掴んで引き止めた。

「このままサヨナラって訳にも行かないんですよ。貴方の事、守らせてくれませんか?」

「……………じゃあ、頼むよ」

渋々と言った感じで男性はそれを承諾した。

『……………コイツ、何処かで』

一方、ドライグは目の前の男性を懐疑的に見詰めていた。

~~~~~

イツセーとリアスは男性を引き連れて面影堂へとやって来た。

すると中には、叔父の茂の他に一人の女性がいた。

「おお、イツセー……其方の方は」

「ゲートの人だよ、さつき襲われててさ………つて、その人は？」

「……さとおつち!？」

「や、やあ」

すると女性は驚きながら男性に詰め寄り、男性はぎこちなく返事をする。

「やあじゃないわよ！バカ！……皆がどれだけ心配したか分かってるの!？」

「ぐ、ぐめん……」

急に泣き出した女性を慰める男性の絵を見てイツセーとリアスは、

「えと……おつちゃん、彼女はいったい誰？」

「見た所知り合いのようだけど……」

「ああ、えつとなあ」

曰く、彼女の名前は千鶴と言ひ、昔に自主映画に出演した事があるらしく、店に飾られた映写機を偶然見かけ、懐かしさから訪れたとの事。

だがその映画の監督は突如失踪、行方知れずとなり未完成のままなんだとか。

「へえ………つて事は、あの人が」

「確か名前が、石井悟史君だったかな？」

「さどつちどうしたの？卒業してから音沙汰なかったけど……」

「あー、ふあ、フアントム！フアントムから逃げてたんだ！」

悟史がそう言うも、千鶴は当然分かる筈もなく、

「何それ……？もしかして、借金取りに追われてたの!？」

凄く斜め上の解釈を披露し、イツセーはずっこける。

「や、フアントムってのは化け物なんですよ。簡単に言うと、命狙われてるんです！悟史

さん」

「……………へ?」

「そ、そう」

この後、イツセーが簡易的に魔法を披露してどうか彼女に信じさせる事ができた。

「ホントに魔法使いなんだ！一誠君って」

「そう、そう」

「じゃあさとつちが命を狙われてるのも……」

「ホント、ホント」

そっか、と眩くと千鶴は悟史の方へと顔を向け、

「じゃあ、映画の完成どころじゃないよね……」

「……え?」

そう残念そうに言うと、悟史はポカンとなる。

「ホラ、あの映画だよ！未完成のままなんでしょ？」

「……そ、そんなんだよ！編集が残っててき！」

思い出したかのようにそう言う悟史は、ドーナツを食べていたイツセーに詰め寄った。

「二誠君。俺、やっぱりこんな所でじつとしている場合じゃないんだ。一刻も早く映画を完成させなきゃ！じゃ、じゃあ！」

「お、おい！アンタ命狙われてんだぞ?!」

「そうよ！今はここで大人しくしてなきゃ……」

イツセーとリアスが引き止めるが悟史は、

「映画は俺の命だ！」

そう力強く言うと、面影堂を出て行ってしまふ。

「だくもう！俺も行くよ、ちよつと待ってって！」

仕方なく、イツセー達も同行する事に。

~~~~~


「へえ〜ここが……」

現在イツセー達は悟史と千鶴の母校である大学の映画研究会の部室に来ていた。

「俺こんなの初めて見たなあ〜」

『……………』

テレビでよく見るマイクを持ちながら興味深々と言つたイツセーだったが、ドライブがあまりにも沈黙していたので声を掛けてみる事に。

『どうしたんだよドライブ？やけに静かじゃんか』

『……………いや。あの悟史とか言う男、一度会つてる気がするんだよ』

『まっさかあ。俺は初対面だけ？考えすぎだよ』

『……………そうだと良いがな』

ドライブとの会話を一先ず打ち切ると、イツセーは壁に掛けられた写真を見つける。

「これ、千鶴さんですか？真ん中の」

「え？あゝ、懐かしいなあ。これ、自主映画のクランクアップで撮つた写真なんだよね〜」

！

等と千鶴が懐かしんでいると、

「もう出てつてくれよ！集中したいんだよ！」

「きゃっ!?!」

「うおっ!?!」

「さ、さとつち!?!」

悟史が突然そう言うのと、全員を力ずくで追い出してしまおう。

「じゃあ、向こうでお話しましょうか?」

「そう、ですね」

悟史を集中させる為にイツセー達は中庭で千鶴の昔話を聞く事に。

「へえ、千鶴さんって女優なんですか?」

「凄いですね!」

イツセーとリアスが感心したかのように言うと、千鶴は恥ずかしそうに頬を掻く。

「まだ卵だけだね。あの自主映画が切欠で目指したんだ……。学校歩いてたらさとつちに捕まって、「俺の映画の主演女優になってくれよ!」って。初対面で、行き成りよ!」

「でも、引き受けたんですよね?」

「暇だったからね」

そう懐かしそうに千鶴は自主映画の撮影の事を語りだす。

「あの時はたったの一週間だったけど、なんだか毎日が凄く濃くて……。でも、あの頃は

凄く楽しかったなあ」

「……………今は、楽しくないんですか？」

「え？」

「あの頃は、つて言ったから……………」

イツセーがそう尋ねると、千鶴は自嘲気に呟いた。

「そうね……………正直、さとつちに持ち上げられてその気になっちゃったけど、レッスンじゃ怒られまくつて、オーデイションも落ちまくりで。もう、やめちゃおうかなうなんて……………」

「千鶴さん……………」

掛ける言葉が見つからない為に、少しでも雰囲気が悪くなってしまう。

「つて、ごめんなさい！暗いこと言っちゃって……………さとつち、どうなったか見に行きましょー！」

千鶴がそんな雰囲気を変えるべく部室へと様子を見に行くと、

「……………さとつち!？」

部室はもぬけの殻だった。

「どうして!？」

「まさか……手分けして探そう!!」

フアントムに襲われた事を考えたイツセー達は、手分けして悟史を探す事に。

~~~~~

一方の悟史は、自らの意思で部屋から逃亡したのだった。

「はあ、はあ……漸く抜け出せたぜ」

そう安堵の息をつく悟史に、女性が近づいていた。

「良かったわね、ゲートの記憶が役に立って」

「!？」

その声にビクついた悟史だったが、声は逆方向からも掛けられた。

「俺達が逃がすとも思ってたか？」

逆方向からは髭を生やした粗暴な男が。

「なあ？」

「ねえ？」

『リザードマン』

男——ユウゴは赤いフアントム、フェニックスに、女——ミサは紫のフアン

トム、メデューサに姿を変えて、悟史にそう問いかけた。

すると、悟史もその体を緑の異形——リザードマンへと姿を変える。

リザードマンは直ぐに二人に向けて臨戦態勢をとる。

『勝手に人間を襲い、ゲートを減らした貴様の罪は重いぞ………』

『だ、だから何だつてんだよ!』

『まあまあ焦るなよ。テメエにチャンスをやるよ』

『ちや、チャンス?』

リザードマンがそう言うと、メデューサは彼の耳元で囁いた。

『指輪の魔法使いを消せ。奴はお前をゲートだと思っ込んでいる、この状況を利用するのね』

『へっ、精々頑張れよ』

それだけ告げると、二人はその場を後にした。

『ふっ………面白そうなゲームじゃねえか!』

~~~~~

「つたく、どこに行つたんだよ……？」

イツセーは悟史を探し奔走していた。

すると、イツセーの後ろから悟史の声が。

「おーい、一誠君！」

「ん？………悟史さん！何処行つてたんですか」

「イヤーごめんごめん。ちよつと作業に煮詰まっちゃつて」

「……とにかく戻りましょうよ。千鶴さん心配してましたよ」

「………ああ、そうだな」

悟史はイツセーに気取られぬよう、ニヤリとほくそ笑んだ。

帰り道、悟史が「ここが近道なんだ」と言い連れて来られたのは自動車のスクラップ工場。

「すげえ……」

車をスクラップにする光景に目を奪われていたイツセーの隙を突き、悟史はリザードマンになり、リフトを使い車をイツセーの頭上に移動し、車を落下させた。

『相棒!!』

「ん？うおおっ!!」

寸での所でドライブが気付いた為に、イツセーは何とか助かった。

「大丈夫か？」

「……何とか。でも巻き込まれなくて良かったです。さっさと行きましょう」

そう言っつてイツセーは再び歩き出す。

『ちっ、こうなったら………』

悟史は直接始末しようとりザードマンの姿をとる。

が、車のミラーに変身する場面が映ってしまい、それを見たイツセーは直に振り返った。

「アンタ……ファントムだったのか!？」

『へっ、そうだよ！石井悟史なんて人間は、もう死んでるんだよ!!あの時の儀式でなあ！』

「儀式………ッ！」

「ここでイツセーは思い出した。

目の前のフアントムが嘗て自身のみ生き延びたサバトにて襲い掛かってきたフアントムだと言う事を。

「思い出した……お前、あの時の！」

『思い出してくれたか？まあ今更どうでも良いけどな……今日の死体役、お前に決定！』
「ソイツは真つ平御免だ！変身！」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

イツセーはウィザードFSに変身すると、取り出したウィザーソードガンでリザードマンと戦闘を開始する。

『さっさとくたばれえ！』

「くたばるのはっ、テメエだ！」

『があああ!!』

リザードマンの剣を受け止め、腹に蹴りを入れ、そのまま追い討ちで切り裂いた。

『くそがああ！』

リザードマンは蜥蜴宜しく壁を這いずると、頭から無数の針を飛ばして応戦する。

「くっ！」

《デイフェンド・プリーズ》

ウィザードFSはそれを炎の壁で防ぐ。

『しゃああああ!!』

リザードマンは壁を蹴り、ウィザードFSに斬りかかる。

『しつかし気色悪いもんだよなあ!ファントム宿した悪魔なんてよお!!』

「るっせえよこの蜥蜴野郎が!テメエの方がよっほど気色悪い見た目してるくせによっ

!」

「……………」

その戦いを影から見下ろすのは、メデューサ。

すると、その場に千鶴がやって来てしまった。

「あの女……………」

「さどつち?」

「!千鶴さん、来ちゃ駄目だ!!」

「まさか……一誠君!？」

『隙有りい!』

「っ!ぐあっ!!」

千鶴に気を取られてしまい、ウィザードFSはリザードマンに切り裂かれ、千鶴を人質に取られてしまう。

『おっと動くなよ!動いたら喉を掻っ切るぜ!』

「テメエ……!」

だが千鶴を人質に取られてしまった以上、ウィザードFSは迂闊に動けない。

だが、

『ぐあっ!?!』

「きゃっ!」

メデューサの攻撃がリザードマンに襲い掛かり、リザードマンは千鶴を手放してしま
う。

『何すんだメデューサ!魔法使いを消せば良いんじゃないのか!?!』

『それより、その女を殺されたら困るのよ』

意味深な事を言うメデューサを前に、ウィザードFSはその意味を理解した。

「まさか、彼女が……………」

『はあ!』

ウィザードFSが駆け出した瞬間、メデューサの頭の蛇が千鶴に襲い掛かった――

!

次回、D×Dウィザード

千鶴「どうしてさとつち一人にして私を助けたのよ!」

リアス「イツセーは貴方の為に――」

ウィザードWS「悪い夢は、終わりにしよう」

MAGIC29 『悪夢・後編』

《ジャバジャバババシャーン、ザブンザブーン!》

MAGIC 29 『悪夢・後編』

『はああ!』

「させるかつ!」

《ランド・プリーズ!ドツドドドドドン、ドンドツドドン!》

《バインド・プリーズ》

メデューサの蛇が千鶴に襲い来る寸前でウィザードはランドスタイルに変身し、バインドでメデューサを拘束する。

拘束された事により、蛇も消えて何とか千鶴は無傷だった。

「千鶴さん!逃げて!!」

「う、うん!」

何とか千鶴を安全な場所まで避難させることに成功したウィザードRSだったが、その際に鎖を破るメデューサ。

「さあてどーするよ?俺とフリートークと洒落込むかい?」

『ふん………はあ!』

だがメデューサは余裕の態度を見せると、リザードマンと共に姿を消した。ウイザードRSは変身を解除して一息吐くも、その表情は浮かなかつた。

『……皮肉なもんだよな』

「……………ああ。千鶴さんが必死に守ろうとしてる悟史さんがファントムで、千鶴さんがゲートなんてさ」

皮肉、そして残酷な運命に人知れず苦悩するイツセーだった。

一方の千鶴は、大学の映画研究部の部室にやって来ていた。

もしかしたら悟史もここに逃げ込んでいるかもしれない……………そう淡い期待を持って扉を開けるも、

「さ……つち……………」

そこに悟史の姿はなかつた。

千鶴は壁に貼られた写真を剥がすと、部室を後にした。

「ふうん。だから行き成り俺を攻撃しやがったのか」

「ええ」

某廃ビルでは、悟史はミサから先ほどの事情を聞いていた。

「と言う訳だから、魔法使いのことは良いわ」

「あ……？」

訳が分からずいぶかしむ悟史だったが、ミサは妖艶に微笑みながら言葉が続ける。

「貴方、あのゲートと知り合いなんですよ？」

~~~~~

「悟史さんが、ファントム………!?!」

面影堂に戻ったイツセーは真相をリアスに告げた。

「はい………」

「…イツセー、彼女には伝えたの？その事」

「……言っていないです。それと、ゲートは千鶴さんです」

「…そんな事って」

何を言って良いか分からず、沈黙が続く中、面影堂の電話がなった。

「もしもし……千鶴さん!?!今何処ですか……え、悟史さんのアパート!?!分かりました、俺も直ぐ向かいます!」

「イツセー!」

「ちよつと行つて来ます!」

「何かあつたら直ぐ駆けつけるわ!」

「お願いします!!」

受話器を置くと、イツセーは千鶴に言われた住所のアパートへとバイクを走らせるのだった。

「相変わらずいい表情するな、千鶴」

先に悟史のアパートに着いた千鶴に、何故か悟史はカメラを回していた。

行き成りそんな事を言われた千鶴は当然困惑の声を上げる。

「は?何言つてんの急に……」



「まあまあ。それより女優業はどうなの？大きな役とかもらってるの？」

そんな千鶴に構わず、悟史は相変わらずカメラを回し続ける。

「……しないよ。あれから一步も進んでないし」

気落ちした声でそう呟く千鶴に、

「一步も、つて事ないだろ？思い出してみなよ。何かある筈だ。夢のために、お前が必死

で掴んだ小さな足掛かりが……」

「え？」

そうゆらりと立ち上がり、悟史は自分の本性を見せようとするが……

「千鶴さん！」

その直前にイツセーが部屋に入って来た為に、取り敢えずは中断する。

「あ、一誠君」

「良かったー、無事で」

イツセーの姿を見た悟史は気づかれる事なく舌打ちする。

「魔法使い君も来たんだ」

「そりゃあゲートをファントムから守んなきゃいけないからな」

「へえ、カッコいいね。でもさつき、ファントムに逃げられてたよね？」

痛いところを突かれ押し黙るイツセーをよそに、悟史は千鶴の腕を掴む。

「千鶴、俺達だけで逃げよう。こいつは頼りにならない」

一緒に逃げることを薦めるが、そうはさせまいとイツセーは悟史の腕を掴む。

「待てよ」

「…離せよ」

悟史の正体を知ってるイツセーとしては、彼女と一緒にさせるわけには行かない。

互いに一触即発の空気を醸し出す中、

「ちよつと！ 訳の分かんない事で揉めないでよ！ 私とさとつちだけでどうにかなる訳無

いんだから、一誠君もいたほうが良いに決まってるでしょ！」

ここで千鶴から正論が放たれ、ぐうの音も出なくなってしまう。

そしてそのまま、千鶴は二人の腕を掴み、外へと引つ張って出てきた。

「……そうだ！ 映研行かなきゃ！」

思い出したかのように道中の公園で叫ぶ千鶴。

「映研？」

「フィルム、あの映画の」

「えっ？」

「映画は、さとつちの命なんでしょ？ 肌身離さず持つてなきや。この先、何時でも何処でも完成させられるように」

「千鶴さん……………」

イツセーは千鶴の想いを静かに聴いていた。

「今すぐは無理かもしれないけど、何時か……………。何時かで良いから、必ず完成させてよね」

「何で、お前がそこまで？」

「……………見たいんだ。あの映画が、私、女優真中千鶴の原点。今の私の、心の支えだから」  
そう笑顔で言う千鶴を静かに見ていた悟史だったが、しかし、

「そうか……………それが、心の支えか」

「してやったりな微笑を見せる。」

「へ？」

『…不味いつ！』

「これで、お前を絶望させられる！」

悟史がリザードマンに変身しようとするよりも早く、イツセーは千鶴の視界を遮る為

に、仕方なく彼女を抱きしめる。

「キヤツ!?ちよつと、何よ!?!」

驚きながらイツセーを押し退ける千鶴だったが、何とか悟史が変身した所は見えていない様子だ。

だが、千鶴の目の前にはリザードマンが迫っていた。

「フアントム……さとつちは?」

『へへっ、俺と一緒に来てもらおうぜ』

リザードマンは千鶴を連れ去ろうと迫る。

「危ないっ!」

それを阻止しようとして、千鶴の腕を引っ張るイツセー。

すると近くに置かれていた滑り台に頭をぶつけ、千鶴は気絶してしまう。

「やべっ、しまった!」

『相棒、兎に角彼女を守らんと』

「わーつてるよ!」

《ドライバーオン・プリーズ》

だがこれで見られたり聞かれたりする心配は無くなったので、心置きなく戦える。

「変身!」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

ウィザード・フレイムスタイルに変身し、そのままの勢いでリザードマンと交戦する。

《コネクト・プリーズ》

「はあ！」

『ちい！いい加減しつこいぜ！』

「しつこいのがウリだかな！魔法使いつてのは！」

『クソがつ！』

リザードマンはウィザードFSを押し退けると、木に飛び付きそこから飛び降りては攻撃と、敏捷な動きで次々と位置を変え不意打ちのような攻撃を繰り返す。

「だーっ！ウゼエ！」

《エクステンド・プリーズ》

ウィザードFSはエクステンドで足を伸ばし蹴撃を浴びせようとすることも、それすらもかわされてしまう。

しかもその合間に足に棘攻撃をもらってしまふ。

「いつてえ〜!？」

『ハツハツハア！ざまあみろ!!』

「んの野郎……………!!」

食い付かん限りの勢いで睨むウィザードFS。

「あらあら、私の可愛い後輩を傷付けるなんて…………お仕置が必要ですね」

『あびやあー!?!』

木の上に得意げに踏ん反り返っていたリザードマンの上空から、何者かの電撃が浴びせられ、リザードマンは木から落ちてしまう。

「……………えい!」

『ぐっほお!?!』

更に落下中に小さい何かの攻撃を受け、リザードマンは壁に叩き付けられる。

「魔剣創造っ!」

『むうあっ!?!』

そこに追い討ちを掛けるかのように無数の剣が降り注ぐ。

リザードマンは寸での所で棘を飛ばして相殺する。

「はあ!」

『ちっ!今度は何だよ!?!』

一息吐いていた所に濃密な魔力の塊が飛ばされ、リザードマンは苛立ちを込めた声を

上げながら剣で薙ぎ払う様に掻き消した。

「通りすがりの悪魔……かしら？」

「…部長！皆!!」

そこに集まったのは、アーシアとゼノヴィアを除いたオカ研のメンバーであった。

「大丈夫かい、イツセー君」

「…おうよ。つて、アーシア達は？」

「ゼノヴィア先輩の日本観光と言う事で、呼んでないです……」

イツセーの疑問には、小猫が答える形に。

「なるほどねえ、イテテ……」

「さあ、どうするのかしら？フアントムさん」

『ふん、まあ良い！先にフィルムを手に入れるか!』

リザードマンは木から木へと飛び移っていきながら、姿を消した。

「くそつ、逃げられた……!」

「…一先ず、彼女を面影堂に連れて行きましょう」

場所は変わって面影堂。その一室でベッドに寝かされている千鶴。

そこにはリアス達が付き添っており、イツセーは扉の前にいた。

「部長…彼女をお願いします」

「分かったわ。イツセーも、ゆっくり休みなさい」

「……はい」

一回に降りたイツセーは頭を抱え、苦悩していた。

『彼女に、真実を告げるのか……?』

そんなイツセーの心情を察してか、ドライグはそんな事を言ってきた。

「それは……何だか駄目な気がするんだ。……それに、彼女の希望は本当に映画のフィルムなのかな?」

ふとイツセーは先程から感じていた疑問を口にした。

『本人がそう言っていたのだから、間違い無いんじゃないのか?』

「……」

黙々と魔宝石を磨く茂の傍らで、イツセーは知らず知らずの内に眠ってしまった。



場所は変わって映画館。リザードマンはフィルムを回収したらしく、何故か映写機を持ち込み鑑賞している。

その足元には転がっている警備員の姿が。

『へッ！くつだらねえ！こんなの作って、何が楽しいんだ』

退屈そうに悪態を吐きながら鑑賞するリザードマン。

すると、そこへ新たな観客——メデューサとフェニックスがやって来た。

『こんな所にいたのか…』

『フィルムを手に入れたんだろ？サボってねえで、とつととゲートを絶望させに行けや  
！』

『うー！』

ドン、とリザードマンの座る椅子の背凭れを蹴るフェニックス。

呻き声を上げながらも、リザードマンは手でフレームの形を作る。

『そう急かすなつて……練つてんだよ。あの女を一番効果的に絶望させる演出プランを。ほら俺、映画監督だったからさ』

リザードマンが形作るフレームの中には、千鶴の笑顔があった。

~~~~~

朝、面影堂。リング台に嵌められていた魔法石を鑪で磨いていた茂。

その手を止めると完成したのか、にんまりと笑っていた。

そして作業机の上には既に完成したらしい変身リングも

その一方で、リアス達は今後の事について話をしていった。

「やっぱり千鶴さんの出た映画のフィルムがなくなってるって……」

「そのフィルム燃やされちゃったなら、千鶴さんは……」

深刻な顔になるリアスと木場だったが、対照的にイツセーは静かだった。

「本当にフィルムなのかな……?」

「えっ? イツセー、どう言う—— 「一誠君!!」」

リアスが尋ねるよりも早く、二階から千鶴が降りてきた。

「ねえ! 何がどうなってるの? どうして急にさとつち、いなくなっちゃったの? あの時、

一体何があったの? 答えてよ、一誠君。さとつち、どこ行っちゃったの?」

イツセーに問い詰める千鶴を制止させようとしたリアスを止め、

「……一人で、逃げた」

そう苦々しい表情で告げた。

「じゃあ、あのファントムは？」

「……逃げた」

「信じらんない……!」

逃げた、としか言わないイツセーに失望したかのように、千鶴は捲し立てるように言い放った。

「どうしてさとつち一人にして、私の事、助けてるの？ねえ、逆でしょ？狙われてるの、さとつちななのよ!」

「千鶴さん、落ち着いて!」

「落ち着ける訳無いでしょう!?!さとつちの言った通り……:ゲートを守る魔法使いだとか言って全然頼りにならない!!」

「……いい加減にしてください!」

「幾らなんでも、言い過ぎですよ!」

「イツセー君がどんな思いなのかも知らずに、そんな事言わないでくださるかしら?」

更にはイツセーを非難する声まで上がったため、周りのグレモリー眷属が我慢できなくなり、反論に転じた。

「イツセーは貴方の為に——」

「良いんだ皆!……彼女の、言う通りだ」

それにより、全員沈黙してしまった。
その雰囲気能耐えられなくなったのか、

「もう良い!!」

そう叫んで飛び出して行く千鶴。

「千鶴さん!」

リアスが引き止めようとするも空しく、千鶴はいなくなってしまう。

「イツセー。迷えば迷う程、彼女を苦しめるぞ」

作業台から降りてきた茂は、イツセーにそう言った。

「……………そう、だな。おっちゃんの言う通りだ」

イツセーは立ち上がると、千鶴の後を追いかける様にして出て行った。

『相棒、見当は』

「ついてるさ。多分……………あそこだ」

嘗ての映画のラストシーンの撮影場所の海沿い、そこに千鶴はいた。

「さどつち……お願い。無事でいて……」

と、そこにイツセーも到着した。

「一誠君……」

「千鶴さん。ここ、映画のラストシーンの場所ですよね？」

「……よく覚えてるのね」

「………大事な事なんです。正直に話して欲しい」

波立つ水音をバックにイツセーは彼女に問い質した。

本当の希望を。

「千鶴さんの心の支え、ほんとは映画のフィルムじゃないんですか？初めての映画を一緒に作った人と一緒に過ごした時間……。いや……。悟史さんそのもの、ですか？」

暫く沈黙が続く中、千鶴はダムが決壊したかの様に語りだした。

「そうよ……。悟史よ！悟史がいたから私、女優になろうって思ったの。悟史が褒めてくれたから。でも……。全然うまくいなくて……。ずっと顔が見たかった……。やっと再会出来て、生きてるって分かったのに……。さっきは謝っても許されない事を言っただけ……。……。お願い、一誠君。悟史を護って！」

涙を流しながら頭を下げて懇願する千鶴。

そこに、イツセーの携帯にリアスから連絡が。

「イツセー、ガルちゃんがファントムを見つけた。今そっちへ向かってる！」

「分かりました」

通話を終わると、イツセーは改まって彼女と向き合う。

「千鶴さん。今度こそファントムを倒して、貴女の希望を、護ります」

「一誠君……」

「だから……ごめんなさい」

《スリープ・プリーズ》

イツセーは素早い動作でスリープの指輪を千鶴に嵌め眠らせた。

そこへグレモリー眷属がやって来た。

「イツセー君、新しい指輪ですわ」

「茂さんから、預かってきたんだ」

木場と朱乃から青いウイザードリングを受け取る。

「千鶴さんは、任せてください……」

「勝ちなさい、イツセー。約束よ」

「……はい！」

リアス達が千鶴を避難させて少し経った後、フィルムを手に悟史がやって来た。

「主演女優が到着したら、目の前でこいつをズタズタにする。ラストシーンに相応しい演出だ。……んっ?」

だがそこにいたのはイツセー。

「魔法使い。何でお前が、ここにいる? 千鶴はどうした?」

「眠ってもらってるよ。悪い夢を見せたくないんでな」

「へえ〜……。何だか知らねえけど、だったら俺が、叩き起こしに行つてやるよ!」

「させねーよ。お前は今、俺がここで倒す」

《ドライバーオン・プリーズ》

悟史がリザードマンに変身したのと同じタイミングで、イツセーはワイザードドライバーを操作。

《シャバドウビタツチヘンシーン! シャバドウビタツチヘンシーン!》

「変身!」

《ウォーター・プリーズ。スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜!》

《コネクト・プリーズ》

「はっ!」

ワイザード・ウォータースタイルに変身し、ワイザーソードガン・ガンモードによる

精密射撃でフィルムを弾く。

『しまった!』

「でやつ!」

『あぐつ!』

驚いた隙にウイザードソードガン・ソードモードに切り替えたウイザードWSに斬撃を喰らい吹っ飛ばされる。

『ならコイツはどうだあ!?!』

リザードマンは全身から無数の棘を飛ばして攻撃する。

「もう見飽きたよ、そんなの!」

《リキッド・プリーズ》

『なに!?!』

だがウイザードWSは冷静にリキッドの魔法で体を液状化させて、棘攻撃を無効。

即座に実体化して連続で蹴りを入れる。

『ぐうつ!……:テメエ!』

《キャモナスラツシユシエイクハンズ!ウオーター!スラツシユストライク!スィー!スィー!スィー!》

ウイザードWSは螺旋状に刀身に沿って噴き上がる水流を斬撃で放つ。

『ぐぬうううっ!!がああ!』

何とか耐えたりザードマン。

その間にウイザードWSは歩み寄りながら、先程もらった新しい指輪を嵌める。

「悪い夢は………終わりにしよう」

《シャバドウビタツチヘンシーン！ウオーター・ドラゴン！ジャバジャバシャーン、ザブンザブーン！》

水で形作られたドラゴンが周囲を旋回し、ウイザードWSの体に吸い込まれるように溶けていった。

ウイザード・ウオータードラゴンスタイル。

新たなる姿を見たりザードマンは、

『やばい………っ!!』

身の危険を察知したのか慌てて海に飛び込む。

「逃がすかつ!」

《チヨーイイネ！スペシャル・サイコー！》

ウイザードWDはスペシャルウイザードリングを翳す。

現れる魔方陣を潜ると、ウィザードWDの尻には巨大な尻尾が。

「おお、尻尾か〜！って感心してる場合じゃないな……………はああ!!」

ウィザードWDはその尻尾——ドラゴテイルを海面に叩き付けると、さながらモーゼの奇跡宜しく海が割れた。

『な、何……………ツ!?!』

困惑するリザードマンに構わず、また新たな指輪を嵌める。

《チヨロイイネ！ブリザード・サイコー！》

「はあっ!!」

ウィザードWDが手を翳すと、割れた海ごと凍て付かせながらリザードマンへと奔っていく氷の結晶のような魔法陣が現れる。

『ぐっ、ああああ………………………………………』

魔方陣が通過すると、リザードマンは氷で地面に釘付けとなってしまう。

「フィンナーレだ!」

凍結した海底へと飛び降り、そのまま氷の上を滑走していくウィザードWD。

「はっ、でやああああああっ!!」

接近するとドラゴテイルの一撃でリザードマンを粉砕。

アイスタストのようにキラキラと舞うように降ってくる氷の欠片と共に、空高く舞い

ながら元の位置に着地するウイザードWDは

「……………ふい〜」

何時も通りの安堵の息を吐いたのであった。

そして、そんなウイザードWDを影からコツソリと見守る人物が。

「はあく、あれがリアスちゃんの新しい眷属の子かあく！サーゼクス君の言った通り、ホントに魔法使いなんだく、スツゴク綺麗！それに、何でかな……………凄くドキドキするよ〜
／／……………よし！今度サーゼクス君に名前聞いておこうつと☆」

この騒がしい人物とイツセーが会おうのは、そう遠くない……………。

〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜
〜

「ん……………ハハハハ〜」

「映研ですよ」

あの後、イツセー達は眠った千鶴を映研部室へと運び、目が覚めるのを待っていた。そして今しがた目を覚ました千鶴にフィルム缶を渡すイツセー。

「これ」

「えっ？これって……」

それは間違いなく、千鶴が大学生時代に撮った映画のフィルム。

「預かったんですよ、悟史さんから」

「預かったって？」

「……………悟史さんはアメリカに行きました」

「アメリカ？」

彼女に真実を知らせるのは、まだ早い——そう思ったイツセーは彼女を絶望させない様、嘘を吐いた。（編集はリアス達が総出で行った）

苦しそうに言葉を紡ぐイツセーの表情は、グレモリー眷属だけが読み取れた。

「はい。元々、映画の勉強をしに海外にいくつもりだったんですって。ファントムからも逃げられるし、一石二鳥だからって。この町に戻って来たのも、その準備だったみたい、です」

「そう……………そうだったんだ……………」

「千鶴さんに伝言」

「えっ?」

「『俺もあつちで頑張るから、お前も頑張れ』って。…………自分で言えば良いのに、なあ」
「ほんとよ……。出会った頃から、いつつも自分勝手なんだから」

幸いにも彼女はイツセーの言葉を信じてくれた。

千鶴はその場で上映し、イツセー達も鑑賞させてもらうことに。

「うん……。いいと思うよ?そういうところ」

「和也とのここでの時間が、これからもずっと続けば良いのにつて、思ってた」

「雪子、俺……」

「良いんじゃない? 夢でも何でも勝手にすれば。泣きべそかいて戻って来ても、あんたに貸す胸なんて、もうないんだからね」

「お前、最高の女優だよ!」

「馬鹿……。こんなの見せられたら、また頑張らなくなっちゃったじゃない」

泣き笑いの表情でそう言った千鶴を見守るイツセー。
そして、小さな思い出の映画は、幕を下ろした。

~~~~~

「皆さん、本当にありがとうございました！」

グレモリー眷属に頭を下げる千鶴。

その手には、映画のフィルムが。

「大丈夫ですよ！それよりも、女優の仕事、頑張ってください！」

「誠君……うん！」

改めて頭を下げると、フィルムを抱え去って行く。

「いつかは、ちゃんと伝えなきゃいけないな。でも、今は……」

「良いんじゃない？人に希望を与えるのは、現実だけとは限らないわ」

「……そう、ですね」

リアスの言葉に僅かながら頷くイツセー。

やはりその横顔は、少し悲しそうだった。

「イツセーさくくん！みなさくくん！」

と、向こう岸からイツセー達を呼ぶ声が。

見ると、沢山の荷物袋を持ったアーシアとゼノヴィアが。

「おお、お帰り！アーシア！」

「はいっ！……皆さんお集まりでどうかしたんですか？」

「ちよつと夕焼けを、ね？イツセー君」

「だからそう言うのは女の子に言えよ!!」

「日本………凄く奥が深いな！今日はこのちゃんこ鍋を食べようと思ってね」

「何処に観光に行ったんですか………でも、美味しそうです」

「ああ。桐生も太鼓判を押すぐらいだからな！」

「だったら、茂さんも呼んで皆で鍋パーティーでも開きましょうか」

リアスの提案は満場一致で賛成に。

「あらあら。でしたら、イツセー君の食べるお手伝いをさせて頂きますわ」

「え、マジっすか!?!」

「あら朱乃。それは部長である私の役目よ？」

「わ、私もイツセーさんに食べさせますっ！仲間外れは嫌ですうう!!」

「………そうか、これも桐生が言っていた花嫁修業の一環ッ！イツセー、私に任せるんだ

！

「でしたら、私も…………お世話になってるので」

「い、イヤー、困るなあ！」

『相棒、モテモテだねえ』

「だったら、僕も…………」

「ナニイツテンダ！フジャケルナ!!」

騒がしくなりつつも、帰路へと着くイツセー達であった。

次回、D×Dウィザード

茂「可愛いぞく、アーシアちゃん！」

???「やつほく！兵藤一誠君☆」

リアス「は、恥ずかしいわ…………！」

MAGIC 30 『授業参観と魔法少女？』

ドライグ『次回も、START YOUR ENGINE!』

イツセー「ソレやるの久々だな」



ドライグ 『今回全然出番なかったからな！』  
ティアマツト 『悔しいでしょうねえ』

# MAGIC30 『授業参観と魔法少女?』

よー皆。イツセーだ!

久々すぎな投稿だけど、俺たちは元気だぜ!

今回は前の予告どおり、授業参観だぜ!

え、メタいつて?そんなの俺の管轄外だ。

「千鶴さん、上手くいってるかな、女優業」

『まあ大丈夫じゃね?あの様子だと、挫けても立ち上がるだろうしな』

ま、それもそうだな。

「こ、こう言うの初めてなので、凄く緊張します〜…」

「確かに……戦いの時以上の緊張感だね」

戦いつて……ま、ゼノヴィアらしい例えだな。

「まあ気にすんなよ。おっちゃんが来るけど、何時も通りに振舞えばいいからさ」

「そ、そうなんですか?」

「ああ。おっちゃん張り切ってたぜ。アーシアちゃんとゼノヴィアちゃんの晴れ舞台

DA! ってな」

『実の甥っ子なんてアウトオブ眼中だったもんな』

地味に傷つくから止めてくれよ……。

「所でイツセー、先日はずまなかった」

「え?……ああ、別に良いって」

ただ時と場所を考えてくれれば、まあ、別に……。

「行き成り子作りなど突飛過ぎたと反省してね……。やはり何事も練習は大事だと気付いたんだ」

「うん……別に俺は……は?」

な、何か雲行きが怪しくなってきた様な……。

「そこで日本ではこんな物を使って練習すると聞いてね。イツセーに渡そう」

そう言うどゼノヴィアは自信満々に色取り取りの袋に包まれたソレ—— って!!!

「アウト——っ!!!」

俺は叫んでゼノヴィアからソレ……もといコンドームを取り上げる。

当然回りも蒼白になる! 当たり前だ!!

「なんちゅーモン持つてんだ!?! っつーか何処で手に入れた!!」

「いや、桐生からだか?」

ほほーう……………

「桐生ちやくん?」

「な、何かしら…………?」

「勝手な事吹き込んでんじやねえ!!」

「ぶぎゃんっ!!?」

「つたく、このエロメガネ(not元浜)は……………」

「兎に角、これは没収!!良いな!」

「あ、ああ……。だが使いたい時は何時でも言ってくれ」

「アホキヤあー!!」

「使うかよ!!こんなもん捨ててやる!!」

『まあ財布にでも忍ばせとけよ』

リアルでもいるけども!」

「ゼノヴィアさん、今のはどういった時に使うのですか?」

「うん、アーシアも知っていて損はないからね。ゴニヨゴニヨ……………」

「っ!きゅく……………//」

「ああもう!!吹き込まなくても良いからあああああ  
!!!!!!」

一応学び舎だからな、オイ!

~~~~~

さて、問題の授業参観の時間だ。

「さて、今日は美術だが……粘土によるアート作成だ。松田、元浜、間違っても変な物作るなよ?」

まあ、釘刺しとかなないと美女の裸なんて作りそうだなもんな。

しかしアートか……小学生の時以来だな、こういうの。

『すげえぞ相棒。茂殿お前を一切映そうとしてねえ』

言うなドライヴ。だけど傷つくぜおっちゃん……。

去年の授業参観サボった事まだ怒ってんのかな?

『まあ良いじゃん。ティアマットは見に来てるし』

え、マジで!?

俺が振り向くとそこには赤いドレス調の服を着こなした美人——人間体のティアアがいた。

ありがとう、ティアア。俺、やるよ!

「出来たぞ、イツセー!」

「ん?どれどれ……………OH」

ゼノヴィア、何をどうしたらそんなクトウーラみたいなのが産まれたんだ…………?

「一応聞くけどよ、それ、何をモデルにして作った…………?」

「ん?イツセーだが」

俺はスペースビーストか!?

「良い出来だと思わないか!」

「と、取り敢えず人の形に戻せ……………先生、ドン引きしてるから」

顔引き攣ってんもん……………後周りからの同情の視線も痛い。

「で、イツセーは何を作るんだ?」

「む……………あ、そうだ」

俺は思いついた途端に手を動かし、そして気付けば二体のドラゴンが出来上がっていた。

「ひ、兵藤、お前デザイナーになれるぞ…………」

「そ、そうっすか?」

「かつけー!!ドラゴンだ!」

俺の目の前には粘土で作られたドライグ、そしてドラゴンが悠然と佇んでいた。

『ほお、中々上出来だぞ相棒。生前の俺の肉体美を見事に再現してくれたな』

『兵藤一誠……………こいつの方の首の向き、変だぞ』

え、マジかよ……………あ、ゴメンドライグ。首落ちちやった。

『おいしいいい!!』

『まさに（首が折れる音）だな!!実に滑稽だ!』

『糞が……………相棒!こいつの方の翼、形が歪だぞ!!』

え……………うわ、翼取れた!

『貴様……………!何たる事を!!』

『フアーwwww』

何だお前ら仲良いじゃん。

『冗談言うな!!!』

息ピツタリじゃん……………。ていうかボドボドじゃねーか俺の粘土アート!!

もうしよーがねえから合体させるか…。

『イヤアアアア!こんな奴とポタラ合体するんだつたら成仏した方がマシよ!!』

『悔しいが同感だ!!貴様の様な変態ドラゴンと合体など死んでもゴメンだ!!』

だーうるせえええ!!!

!!!

後ドライブは女言葉止めろ！キモい!!立木さんボイスでそれは精神に効く!

『超同意。今すぐ消えるかその粘土細工に乗り移れ。兵藤一誠、どうせなら面白おかしく作り変えてやれ』

『オイ俺の扱い酷くね?』

もういや、どーでも……………。

!!
まあそんなこんなで、結局はティアを作りました……………だって二人とも煩いんだもん

昼休み、俺達は食堂でご飯を食べていた。

「いや〜二人とも可愛かったぞ!おじさん感動!」

「は、恥ずかしいです〜〃〃」

おっちゃん、そんなだから30代になっても彼女が出来ないんだよ……………。

「ん?何だイツセー」

「何でも」

危ない危ない。おっちゃん勘が鋭いからな〜。

「やあイツセイ君」

「ん？つてサーゼクス様!!」

声を掛けられたので顔を上げると、そこには魔王サーゼクス様とリアス部長、グレイフィアさん、そしてダンディーなおじさんがいた。

「始めまして、兵藤一誠君。こうしてお会いするのは初めてだね。リアスがお世話になってるよ」

「…部長の、お父様？」

そう言えば婚約パーティーの時にいたっけ。

「は、始めまして！あの時は失礼なことをしてしまい、すみませんでした!!」

「いいや、あれは私の過失でもある。むしろ君には感謝したい。……君のお陰で私は目が覚めたよ」

部長のお父様はそう言つて朗らかに微笑んだ。

やっぱサーゼクス様のイケメンはこの人の遺伝なんだな。

「オイ急げよ！今すげー可愛い魔法少女が体育館にいるつてさ!!」

「マジかよ!?!」

な、何だ? やけに騒がしいな……。

「まさか……」

部長は何か心当たりがあるかのようだ。

「部長、もしかして知ってる人ですか」

「……」一応ね。取り敢えず、向かってみましょう」

俺達は部長に続いて体育館へと足を運んだ。

何なんだ、一体?

~~~~~

俺達が体育館へと到着すると、そこでは…魔法少女風のコスプレをした女の子が写真撮影を行っていたのだ!

「な、何だありや……」

「ほーれほれ! 写真撮影は禁止だぞー! さっさと戻れー!」

呆然としていると、生徒会の匙が父兄と生徒諸君を追い払っていた。

「貴女も保護者なんですからそんな格好辞めてくださいよ！」

「え〜？だつてこれ気に入つてるんだもん☆」

「おーい匙」

「ん？お〜兵藤！」

匙は俺たちに気付くと此方に向かつてきた。

「大変だな、生徒会の仕事も」

「ああ。でも遣り甲斐あるぜ」

「ん〜？あ〜君は!!」

魔法少女は俺の顔を見ると此方に駆け出し、匙を壁に叩き付けた！

「ぐへえ!!」

「匙ー!!」

「ねえねえ君あの時の魔法使い君だよね!!」

え……………!?!

「な、何のことですか…?」

「惚けてもダメだぞ？私見てたんだから！君が青い魔法使いになつて凄い氷の魔法発動したのー！」

こゝ、此間の戦闘を見てたのか!?でも一体この子は……………?」

「あれを見てから私君の事が気になってしょうがないの〜! ねえねえ、結婚しよ? 兵藤一誠君☆」

「け、結婚?!」

な、何故話が跳躍するんだよ!!

と、ここでこの場の気温がグツと減ったような……………

「イツセー、どう言う事かしら? セラフォル様と何時お会いになったの?」

やつばそうですよねえええ!!

グレイフィアさん達もなんかご立腹だ!!

「や、俺も何時あつたか定かでは……………」

「あ、リアスちゃん!」

…え? 部長と知り合い? それに部長が「様」付けて……………

「イツセー様。此方は最強の女性悪魔であり冥界を率いる現魔王の一人、セラフォル・

レヴィアタン様です」

「…魔王!? こんなコスプレ少女が!」

「うん! 気軽にレヴィアタンって呼んでね☆イツセー君!」

うつそーん……………俺女の子、て言うか魔王様に押し倒されてる!

ってか軽い！ノリが軽い！

「セラフオルー、イツセー君が困ってる。降りてあげなさい」

「あ、サーゼクス君。でもイツセー君モテモテだもん。だから先に既成事実作つところかなって☆」

『!!?』

『良かったな相棒。童貞卒業できるぜ』

してもその後死ぬ未来しか見えねーよ!!

「セラフオルー殿。相変わらず奇抜な格好ですな」

「おじ様。これは今若者の間で流行っておりますのよ☆」

「成る程…最近の流行は進んでいるのだなあ」

嘘教えないでください。そして信じないでください。

そんなのが流行したらこの国ダメダメじゃねーか！

「匙！」

「か、会長……！」

と、ここで生徒会長のソーナさんがお出ました。

「揉め事は速やかに済ませろとあれほ、ど………」

ど、どうしたんだ？急に無言に………つてえ!?

「ソーたああああん!!!」

会長見た途端セラフオール様が疾風の如きスピードで会長に迫ったーっ!?

「お、お姉さま……!!!」

え、ええええええええええ!?

か、会長のお姉さんんんんん!?

『あーでも……そう言われると若干にてるなあ』

確かに……!-

「ソーナたん、酷いわ!私はこんなにもソーナたんを愛しているのに!」

「私の名前にたんを付けないでください!」

す、スゲーシスコンぶりだなあ……。

「兵藤君、貴方の魔法でどうにかしてください!」

「え、あ、はい!」

《バインド・プリーズ》

「きゃんっ!」

俺がバインドでセラフオール様を縛るのを確認すると、会長は脱兎の如く逃走した!

「まってえええ、ソーたああああん!!!」

「うそおい!」

ば、バインドを力ずくで引き千切りやがった……何処にそんな力があんだよ!?」  
「一緒に百合百合しようよおおお!!」

「もう帰ってくださあああああ!!」

な、何か新鮮だなあ。あんな会長見るの。

『嵐のような魔法少女だな』

っつーか魔王少女だな。

そんな訳で、俺達のドタバタな授業参観は終わりを迎えたのであった。

あ、後何やかんやでセラフォル様とメアド交換しました。

次回、D×Dウィザード

ギヤスパー「いやああああ!!!」

ドライグ『なん、だと……!!?』

イツセー「俺だつて怖いさ。多分……この眷属の中じゃあ一番にね」

MAGIC31 『ヴァンパイアの指導法』

ドライグ『次回もフルスロットルだ!』

## MAGIC 31 『ヴァンパイアの指導方』

よお皆、イツセーだ。

今は授業参観の翌日の放課後なんだけど、俺達グレモリー眷属は旧校舎一階の所謂「開かずの間」と言われる部屋の前にいた。

何でもこの閉めきった扉の向こうに、もう一人の『僧侶』がいるらしい。

とは言っても俺やアーシア、そしてゼノヴィアも一切その眷属については聞かされてない。

まあ俺が悪魔になるよりも前にいたらしいけど……

何でもソイツが持つ能力が危険視されて封印されてたんだと。

以前までの部長の技量では扱いきれない為に封印されていたけど、ここまですべて色々な死闘を潜り抜けて来た故に、今ならば大丈夫だろうとの事で解禁されるらしい。

……もう何つーか危ない感じだよな。

扉に『keep out!』のテープが幾重にも貼られてるし。(おまけで呪術の刻印



も)

『ドライグ、どんな奴だと思う?』

『さあね。俺にも想像がつかんよ』

俺がドライグと話してる内に封印を解きながらではあるが部長から説明された。

「二日中ここに住んでるの。一応深夜には術が解かれて旧校舎だけなら部屋から出ても良いのだけれど……中にいる子自身がそれを拒否してるの」

「それって……要するに引きこもり?」

俺がそう聞くと、部長は溜め息を吐きながら頷いた。

マジかよ……………。

「ですが中にいる子は眷属一番の稼ぎ頭なのですよ」

へえー、そうなんだ。

引きこもりで稼ぎ頭とは……ウゴゴ。

『と言うとパソコンでの特殊な契約か?』

「そうですわ。中には私たちに会いたくないという人達もいますので、別の形で交渉して関係を持つのです」

ネットビジネスは悪魔界にも浸透してんだな。

……と、気付けば刻印も消え去り、ただの扉となっていた。

「どんな人なんでしようか？」

「アーシアと同じ僧侶だもんな、仲良く出来ると良いな！」

「はい！」

と話していると部長が扉を開けると――

「イヤアアアアアッ!!」

うおっ!? キーボードクラッシュャーか!?

何かとんでもない音量での絶叫が聞こえたんですけど!

けど部長は驚くことなく中に平然と入っていった。

すると暫くして話し声が聞こえてきた。

『元氣そうで良かったわ』

『な、な、何事ですかあああ!?!』

んー、中性的な声だな。

何かスゲー狼狽えてるな。

『狼狽えるな小僧どもー！ー！！』

やんなくて良いよ！教皇シオンは冥界に帰って！

『あらあら、封印が解けたのですよ？もうお外に出ても大丈夫ですよ』

おお！朱乃さんの優しい声だ！

だけどー！ー！

『いやですううう！！ここが良いですううう！』

……………重症だな、オイ。

『相棒、見てみようぜ』

そーだな。俺は恐る恐る部屋の中に入ると……………

「おお……………？」

何と言うか、女の子っぽい飾り付けでビツクリ。だけどカーテンも閉めきられており、如何にも引きこもりっぽい部屋だ。そして何より目立つのが、

「棺桶………？」

そう、部屋の隅に置かれた大きな棺桶が安置されていた。

何かこの飾り付けとミスマツチだよな……？

『何か呪術的な趣味でもあるんじゃないかねーか？その眷属』

もしそうだとしたら仲良くやってける自信ねーよ……。

そう思い部屋を見渡すと、部屋の奥に部長と朱乃さんがいた。

もしかしてそこにいるのかね？

更に近付いて見ると、そこには

「あうう………」

月の光に照らされた、金髪の赤い瞳をした女の子がいたのだっ！  
か、可愛いっ！！

「外国の女の子じゃないですか!!」

『やるじゃねーかりアス・グレモリー!!』

俺もドライブも嬉しそうに叫ぶ！

そりゃ嬉しいよ！金髪のダブル僧侶だもん!!

「イツセー、その子……見た目は女の子だけれどちゃんとした男の子よ」

だが部長は首を横に振りながらそんな事を仰った……………へ？

『え、あの部長／リアス・グレモリー、今なんと……………』

「男の子よ」

「女装趣味があるのですよ」

刹那、

『ウゾダドンドコドーン!!!』

「ヒイイイイ!!ゴメンなさあぁい!!」

俺は地面に手を付いて嘆いた!!多分ドライグもOrtの態勢に違いない!!

そして俺達の叫びにビックリして悲鳴を上げる女装少年!だがそんな事はどうでも良い!!

マジかよ!これで男か!?

何処をどう見たって女の子じゃん!!

『相棒!コイツにナニが付いてるか確認しろおお!!』

「おおおお!!」

「ヒイイイイ!!乱暴しないでえええ!!」

俺は金髪女装少年(仮)の股間に手を当てると……………その容姿にあつてはならないモノが付いていた…っ!

「これが、絶望か……………」

『くそう…………何故神はこう無慈悲なんだ……………!!?』

ドライグ、神様はいねーんだよ……………!

「オイお前!何で引きこもりなのに女装してんだよ!」

『そうだそうだ！誰に見せる訳でもないだろうが！何で俺達に無駄に夢を見せたのだ！？』

俺達の言い分に女装少年は反論する。

「だ、だって、女の子の服の方が可愛いもん……………」

「可愛いもん、とか言うなやああ!!!」

『返せ！俺達の夢を！金髪ダブル僧侶を一瞬でも夢見た感動を返しやがれええ!!』

「人の夢と書いて、夢い……………」

『ウアアアアアア!!!』

俺達は某ダディヤナザン宜しく絶叫する!!

女の子だと思ったら、実は女装少年でした！なんて笑えるかよおお!!!

「と、所で、この方は誰ですか？」

女装少年が俺やアーシア、ゼノヴィアをチラ見して聞くと部長はソイツに説明した。

「あなたがここに居る間に増えた眷属よ。『兵士』の兵藤一誠、『騎士』のゼノヴィア、そしてあなたと同じ『僧侶』のアーシアよ」

まあ取り合えずは挨拶をするが、女装少年は「人が増えてるううう!!」と言って怖がるだけ……………対人恐怖症も発症してるのか？こりや大変だぞ。

「お願いだから、外に出ましょ？もうあなたは自由なのよ？」

それでもめげずに部長が優しく言うが……

「嫌ですうう！僕に外の世界なんて無理なんだああああ！怖い！お外怖いいいい！！」

「オイお前」

何か腹立ってきた。部長がこんなにも説得してるのに、無理だ無理だって決めつけて

……

「部長が外出ろって言ってー……」

「イヤアアアアアア！」

すると一瞬、時が止まったかのような錯覚を感じた。

それは直ぐに消えたけど、相変わらず女装少年は俺から離れようともがいてる。

………ん、アレ？皆は……って！

「何だこりや……！」

皆、石像になったかのように動いてなかったのだ！

まさか、今の錯覚が!?

「お前、今何したんだ?!」

「ぐううう………って、止まってない？」



その子は驚いてるが、俺はそれ以上に驚いてる。  
すると全員が再び動き出した。

「部長、コイツ今……」

「その子は興奮すると、視界に映した全ての物体の時間を停止させる神器を持つてるの」  
時間、停止……………？チートじゃん！

じゃあさっきの違和感は、俺達の時を止めたのか……………って、何で俺は動けたんだ？

『見た所、その力は格上過ぎる相手や少し上の相手には効かない様だな』

「つてことは、俺には通用しないつて事か？」

『ああ』

「彼は神器の力を制御出来ないの、大公及び魔王サーゼクス様の命でここに封じられていたのです」

成る程ねえ。確かに制御出来ないのに外に出してたらあらゆる時間を止めちゃうもんな。

言うまでもなく凶悪だ。

と、ここで部長は女装少年を優しく抱き締めて、その子の紹介を行った。

「この子はギヤスパ・ヴラディイ。私のもう一人の『僧侶』。一応駒王学園の一年生なの。そして……転生前は人間と吸血鬼のハーフよ」

何と、新しい後輩は女装趣味を持った吸血鬼だった。

~~~~~

「フォービトウン・パロール・ピュ停止結界の邪眼？」

『ほう、もしやと思っていたが……中々の上玉だな』

あの後どうにかギヤスパを外に連れ出すと、部長からギヤスパに宿っている神器の名前を聞いて、先程までへこたれていたドライグが感心したかの様に呟いた。

『だがリアス・グレモリーよ。よく眷属に出来たな……って、まさかあの』

「ええ。『変異の駒』よ」

変異の駒って……俺にも使われたアレか。

『成る程。だから駒一つで済んだ訳だ』

「どういう事だ？ ドライグ」

『ハーフとは言え、恐らくコイツは由緒正しい吸血鬼の家柄だろう。強力な神器は人間としての部分で手に入れている。吸血鬼本来の力も有してるだろうし、恐らくは魔術にも秀でてると見た。とてもではないが、駒一つで転生は出来んだろうさ』

「流石は赤龍帝ね……………全部その通りよ」

うへえ、そんなにスゲーのか。この引きこもり君は。

そしてそのギヤスパー本人は部屋から持参した段ボールにまた引きこもってるが。

『吸血鬼は家柄によつては人間の魔法使いが使う魔術にも秀でるんだよ。あ、相棒の使う魔法じゃないから』

わーってるよ。つつーか俺悪魔だし。

「そう言えば、日の光とかは大丈夫なんですか？」

「彼はデイウオーカーと呼ばれる日中活動できる特殊な吸血鬼の血を引いてるの。でも苦手ではあるそうだけど…」

そんな吸血鬼いるんだな……………。

「日の光嫌いですうう！ 太陽なんて無くなっちゃえば良いんだあああああ！」

太陽無くなったら俺達生きて……………行けたわ。悪魔は夜行性だしな。

特にコイツは二重でキツいんだろうな。

「……へたれヴァンパイア」

おお、小猫ちゃんの容赦ない毒舌。

もつと言つてやれ！

「うわあああん！小猫ちゃんが苛めるううう！」

でも言い返さない辺り、自覚はあるんだな。

それだけでも良いと思うぞ、ギヤスパー！

こりやどうした物かねえ……………？

くくくくくくくくくくく

さて、部長は朱乃さんを伴つて今度開かれる三竦みのトップ会談の会場打ち合わせの為にその場から居なくなった訳だが……………（木場？サーゼクス様に呼ばれてたよ。聖魔剣の事だつてさ）

「ほーれ、走れー。でないと一発で昇天だぞー」

「ヒイイイイイ！滅ぼされるううう!!」

旧校舎にて吸血鬼を追いかける聖剣使いの光景……………どう見ても吸血鬼狩りです

本当に（ry

「止めんかゼノヴィア！」

《バインド・プリーズ》

「あうんっ！」

俺はギヤスパーを追いかけ回すゼノヴィアをバインドで拘束する。

「い、イツセー……………これは、俗に言う緊縛プレイなのか／＼／？」

「んな訳あるかっ!!」

……………まあ、何故ゼノヴィアがギヤスパーをデュランダル振り回して追っ掛けたのかは訳がある。

三竦みのトップ会談の会場打ち合わせに行く前、俺達はギヤスパーの教育を部長に任されたのだ。

そこでどうしようか四苦八苦してたら、ゼノヴィアが「任せてくれ」と自信満々に告げたので任せたら……………こう言う結末だ。

「イツセー先輩、私に妙案があります……………」

お、小猫ちゃんが挙手した。こりゃ何か策があるんだな。

「うしー！じゃあやってみてくれ」

「はい……………」

と、小猫ちゃんは懐からビニール袋を取り出すと、中から何かを取り出した
……………つて、ニンニク？

「小猫ちゃん……………それ」

「ギャーくん、ニンニクを食べれば、健康になれる……………」

「やああああんっ！ガーリックくらめええええ!!」

小猫ちゃんはギヤスパーにニンニクを見せつけながら延々と追いかけて回し、ギヤスパーは必死で逃げる……………これ何でデジャヴ？

あーもう！

「小猫ちゃん、タンマ！」

《バインド・プリーズ》

「にやつ!」

全くもう……………

「良いかい？部長はあくまでギヤスパーの人嫌いを少しでも緩和してみたくれつて事で教育を任せただぞ。それを度胸付けさせる体で追っかけ回しても、逆効果だろ？」

「うっ……………」

「だ、だが………やはり先ずは度胸を……」

「その結果があれだろ」

俺が指差した先に展開されてたのは、段ボールに再び引きこもったギヤスパーと何とか宥めるアーシアという絵だった。

「うう、皆して僕を苛めるんだ………もう嫌だよおおお！」

「ぎ、ギヤスパー君。大丈夫ですか？」

「余計に拗らせちゃったじゃんか………」

「おーつす！グレモリー眷属！」

と、そこへ生徒会の匙が現れた。

「よーつす、匙」

「よつ、兵藤。解禁された引きこもり眷属がいるとか聞いたからちよつと見に来たぜ」

「おおそつか。ほーれギヤスパー、顔ぐらい見せてやれー」

「きやんつ!？」

俺は無理矢理ギヤスパーを段ボールから引つ張り出して座らせると、匙は嬉しそうに叫ぶ。

「おー！アーシアちゃんと同じ金髪の女の子か〜！羨ましいぜ兵藤！」

「男だけだな」

「……………え？」

「女装野郎だよ」

「ウゾダドンドコドーン!!!」

匙も俺達同様膝を付いて項垂れた。まあ、気持ちは分かるぜ。

「どうどう。俺もお前と同じ気持ちだったよ」

「兵藤……………」

うん、やっぱコイツとは波長合うわ。

良いダチに巡り会えたぜ！

「つてお前は何してんだ？」

「俺か？花壇の手入れだよ。学園を綺麗にするのは生徒会の『兵士』たる俺の役目だから

な！」

「要は雑用か」

「……………ハハハ。何を馬鹿な事を兵藤君。雑用等会長が俺に押し付ける訳が……………」

ハア」

お前も自覚あんじゃねーか……………悪いこと言ったかな？

……………つと、お偉方のお出ましたな。

「ほおー、魔王眷属の悪魔達はここでお遊戯してる訳か」

「一応特訓んだけどな……アザゼルさん」

『!?』

俺がその名を言うと、全員臨戦態勢に入った。

アーシアは俺の後ろに隠れ、ギヤスパーは木の木陰……まあ、コイツがいきなり喧嘩吹っ掛けはしないだろうが、一応は赤龍帝の籠手を展開する。

「ん？あんまり驚いてないな、赤龍帝」

「まあ何となく心配してたからね」

「ひ、兵藤！アザゼルって………!!」

「安心しろよ。格上がいきなり喧嘩する訳ないから………だろ？アザゼルさん」

俺の言葉にアザゼルはその通りだと言わんばかりに頷いた。

「で、何の用？ヴァンガードならまた今度にしてくれよ」

「や、それはまた後日に………新しいデッキ組んだから」

ほお、それは楽しみだ。

どんなデッキでも俺のオーバーロードで焼き尽くしてやんよ！

「聖魔剣使いはいねーのか？」

「木場なら留守だぜ」

「何だ。折角来たつてのに……つと、そこのヴァンパイア」

「ヒツ!？」

アザゼルは木陰に隠れてたギヤスパーをジツと見つめた。

まあ当然ギヤスパーは震えまくってるが。

「停止結界の邪眼の持ち主なんだろ？ソイツは使いこなせないと害悪になる代物だからな。五感から発動する神器の持ち主のキャパシティが足りないと自然に動き出して危険極まりない」

ギヤスパーの眼を覗き込む様にして言うアザゼル。

何か、やけに詳しいな。

そしてアザゼルは今度は匙の方を振り向いて、匙の神器『黒い龍脈』を指差した。

「それ、『黒い龍脈』か？練習ならそれを使ってみろ。このヴァンパイアに接続すれば暴走も少なくなつて練習にもつてこいだ」

へえ、アレ縛るだけじゃないんだ。

その説明に匙も驚いていた。

「お、俺の神器で、相手の神器の力も吸えるのか？」

「つたく、これだから最近の神器所有者は自分の力をろくに知ろうとしないな……。『黒

い龍脈』は伝説の五大龍王の一角、黒邪の龍王ブリズン・ドラゴンヴリトラの力を宿してんだ」

『ほお、ヴリトラか』

知ってんのか、ドライグ？

『ああ、奴の力は中々侮れなかつたぜ。ま、また今度教えてやんよ』

「それに、成長すればラインの数も増える。そうなりや吸い取る力も倍々つて訳だ」

案外高性能だな………こりや油断してるとヤバイな。

「んじやな。頑張れよ、悪魔君達」

それだけ言うとなアザゼルは去っていった。

そして、アザゼルの言うとおりにしてみたら、本当に暴走も少なく捗った。

まあふとした拍子に誰かを見ちまって停止させたとかもあつたけど。

~~~~~

んで、次の日の夜。

「ギヤスパー、出てきてちょうだい。イツセーに連れていかせた私が悪かつたわ」

ギヤスパアの部屋の扉の前で部長が謝っていた。

「イツセーと仕事をすれば、もしかしたら貴方の為になると思つて……」

『ふええええんっ！』

ん？何でこんなことになつてゐるかつて？

いやね、大分練習した後で俺がギヤスパアを仕事に連れていつても良いか？つて頼んだんだよ。

まあそこまでは良かったんだけど……森沢さんが予想以上に反応してしまつて、俺でさえもビビつた。

そして森沢さんを一瞬だけ停めてしまった……という訳だ。

『ぼ、僕は、こんな力いらないうっ！だ、だつて、皆停まつちやうんだ！怖がる！嫌がる！僕だつて嫌だ！と、友達を、仲間を、停めたくないんだ……！大切な人の停まつた顔を見るのは、も、もう嫌だ……！』

そう言つてすすり泣くギヤスパア。

「困つたわ……またこの子を引きこもらせてしまうなんて……。『王』失格ね、私」

部長は悲しそうにそう呟く。

違う。部長も、ギヤスパアも悪くない。悪いのは……俺だ。

「部長、ギヤスパアの事…俺に再び任せてくれますか？」  
「イツセー…？」

「部長この後、サーゼクス様との打ち合わせでしょ？大丈夫です、何とかして見せますからー！」

俺の申し出に、部長も強く断れなかった。

そりゃこの打ち合わせもとても大切だからな。

「……分かったわ。お願いできる？イツセー」

「はいー！」

部長は微笑んで頷くと、その場を後にした。

「さあーて……ギヤスパア！お前が出てくるまで、俺もここを動かないからな！」

まあ色々考えたけど、やっぱこれが一番手っ取り早いだろうな。

そう、座り込み！

……………一時間後。

ぐつ、中々出てきてくれないな……………。

まあ座ってるだけじゃ駄目だよな。

「……なあ、怖いか？ 神器の力が」

『……』

俺は返事がないのも無視して語りかける。

「確かに力が怖いのは分かるぜ。俺も昔はそうだった……けどな、何時までも怖がつてる様じゃ、ダメだ。何時かは、その力を飲み込まなきゃならない。ギヤスパー、それは今なんだ」

『………で、でも、先輩は強いから、僕みたいに弱くないから、制御出来るんです……』  
強い、か………。

「結構買収されたな、俺も。………ギヤスパー、俺は強くなってるよ。寧ろ……弱いと思ってる」

『っ』

お、少し反応アリだな。

「皆から見たらそりゃ強く映ってる様に見えるんだろうけどな、本当は何時もビクビクしてんだぜ？ 何時この力に溺れて、ダメ人間になるんだろう………っさ」

ガチャ………と言う音と共に、ギヤスパーが部屋から少し顔を覗かせた。

「じ、じゃあ、先輩はどうして、真っ直ぐに立ち向かえるんですか………？」

「ん………死んだ父さんと母さんが教えてくれたんだ。俺は皆の希望なんだって」

「希望……?」

眼をぱちくりさせながらそう呟く。

「ああ。俺が元気に振る舞えば、それだけで皆明るくなれるつてな。それに———人が絶望する光景は、もう見たくないんだ」

サバトの様な光景は、二度とゴメンだからな。

「その希望の俺がへこたれてたら、皆も不安になっちゃうからな。皆がいるから、俺は前を向ける」

「……」

「その皆には、お前も含まれてんだぜ? ギヤスパー」

「っ……」

ギヤスパーは驚いた様に息を飲んだ。

「だから、俺はお前から逃げない。どんどん頼ってくれよ。これでも実生活じゃ先輩だぜ? お前の怖がる物、全部ブツ飛ばしてやるよ!」

俺はギヤスパーの頭をガシガシ撫でて、不安を消せるような笑顔で言う。

「だから、約束するよ。俺がお前の、最後の希望だ。お前が泣いてたら、一目散に駆けつけるよ」

「イツセー、先輩……………」

……………べ、別にドキツとなんてしてないからな!

「それにさ、俺はお前の能力が羨ましいけどな」

「えっ?」

心底驚いたと言う反応……………でも驚くか?

「だってよ、停めれるって事はさ、女の子の時間も停めて視姦し放題だろ!? そんでもって  
おっぱいとか触れたらー……うはっ、ヤベエ!……………って、ゴホン!」

しまった、つい本音が……………

『何でお前は何時もそっちに行くかねえ……………』

「うるせえドライグ!……………ま、まあ兎も角だ。例えばさ、鉄骨が人の頭上に落ちてきたと  
するだろ? お前がその力を使いこなせたら、鉄骨だけを停めれて、その人は助かるだろ  
? 他にもさ、ぬかるんだ道で滑った人を停めて、何とか元の位置に立たせたりさ  
……………そうやって人助けにも使えるって思ったら、スゴいと思わないか!」

これも俺の本音だ。赤龍帝の籠手じや、そこまで人助けには向いてないからな。

「……………優しいですね、イツセー先輩」

すると、ギヤスパーは微笑んで此方を見ていた。

「僕、一度もこの力を、良い方向に向けられなかったのに……………先輩のお陰で、少しだけ



希望が見えてきた気がします」

「へへっ、そっか！それで良いんだよ！要は気持ちの問題だ！」

「……はい！」

よーし、良い返事だ！

「よーし、じゃあ親睦を深める意味を込めて———猥談でもするか？」

「わ、猥談……ですか？」

「おうよ。まあ自分の性癖を暴露したりするみたいな軽いもんさ」

やっぱ話し合いが一番だよな。

その後から来た木場も交えて男三人で猥談を始めたが———収穫が一つ。

木場も意外にスケベだった。

# MAGIC 32 『朱乃さん、救います』

よお、イツセーだ。

ギヤスパアの教育も何とか終えた俺はこの日、朱乃さんに呼ばれてんだ。

一体何だろうな？

『相棒、そろそろ着くぞ』

え、もう？……………って、この先神社だったような。

神社って悪魔は入れないだろ。(え、サーゼクス様入ってたって？あの人魔王様だから)

と言いつつも俺はバイクのスピードを落とす……………すると、俺の視界には石段が。

「やっぱり神社、だよなあ……………」

上を見上げるとそこには赤い鳥居が聳え立っていた。

何だろうな、魔王の城に乗り込む気分だけ……………。

『馬鹿なこと言ってるねーで鳥居の下見ろ』

うるへえ！って、あれは……………

「いらつしやい、イツセー君」

我らが二大御姉様が一人、朱乃さんだ。

それも巫女服で。

「上がつても大丈夫ですわよ？ 此方の神社は悪魔でも入れる様になってますから」

「分かりました！」

そう言つて軽やかに石段を駆け上がる。

おお、肌もピリピリしてない……………？

『て言うか鳥居の下に姫島朱乃がいる時点で察せよ』

「良いじゃん別に」

「ふふつ、イツセー君はドライブと本当に仲良しですわね」

「そ、そうつすか？ あ、その服装スゲー似合ってます！」

「ありがとうございます」

微笑みながら例を言う朱乃さん。

くう〜！ 正に大和撫子だなあ！

「そう言えば、今日他にも誰か来てるんですか？」

「……………鋭いですわね。何時から気づいてましたの？」

「鳥居を潜った時……ですかね？」

何と言うか、聖なる力を感じたんだよね。

「成る程、中々の力量ですね。今代の赤龍帝は」

とか思っていると、第三者の声が不意に聞こえたので、そちらを振り向いた。

するとそこには輝く金色の羽を漂わせる、頬に大きな傷痕が付いている美青年が俺を見ていた。

後服装も何か豪華なローブだし、でも何か頬に大きな傷痕付いてるし……って！  
「わ、輪っか!？」

俺が驚き叫ぶのに構わず、青年は優しく微笑み、握手を求めてくる。

「初めまして。赤龍帝、兵藤一誠君」

え？俺の名前知ってる？何で？

何なの、この人!？

『まさかお前……』

とドライブが何か確信したように呟くと同時に、青年の背中から金色の12枚の翼が

現れた。

「私はミカエル。天使の長を勤めております……しかし久しいですね。正にこのオーラ、ドライブグその物です」

まさかの大物だったよーっ！！

~~~~~

とまあ、自己紹介も終えた所で俺達は神社の本殿にいた。

そこはかなり広く、デカイ柱が何本も立っていた。

だけど何よりーっ！凄く肌がピリピリする。

でもそれは恐らくミカエルさんではない筈……寧ろ柱の中央からそれは感じる。

「そこまで顔を険しくしなくても大丈夫ですよ。今日は貴方にこれを授けようと思いましてね」

へ？何かくれるの？

と、ミカエルさんが指差す方角を向くとーっ！そこには一本の剣が浮いていた。

この波動………もしかしなくても聖剣、だよな？

と言うか何かデュランダルとかエクスカリバー以上に体が拒絶してんだけど………っ
!

「これはゲオルギウス……聖ジョージと呼ばわりやすいでしょうか？彼の持っていた龍ドラゴン・スレイヤー殺しの聖剣、アスカロンです」

じ、ジョージ？ライダーマンか？

『有名な龍殺しだ。別にデストロンの科学者でもG A C K Tでもない』

わ、分かってたよバカだなくははは。

っつーかドラゴンの俺がドラゴンを殺す龍殺しの剣なんて持つても大丈夫なのか？

「特殊な儀礼を施してあるので悪魔の貴方でもドラゴンの力があれば扱えますよ。貴方が持つと言うよりは、赤龍帝の籠手に同化させると言った感じですね」

ど、同化か………まあ多分出来るだろうな。神器は想いを汲み取り進化していくらしいから。

「でも、何で俺にこれを？」

まあ疑問には思う訳よ。

だって本来なら天使のこの人と悪魔の俺は宿敵同士だし、先の戦争でえらく迷惑掛けたドラゴン宿してる。

結構傍迷惑な存在だと思っただよ。

「私は今度の会談は、三大勢力が手を取り合う大きな機会だと思っと思っています。既に御存知ですでお話しますが、我等が創造主——神は先の戦争で亡くなりました。敵対していた旧魔王も戦死し、墮天使の幹部達も沈黙。アザゼルも戦争を起こす気はないと口にしています。言わばこれは好機です。無駄な争いを無くすためのチャンスです。このまま小規模なイザコザが続けば、何れ三大勢力は滅んでしまう………。仮にそれを避けたとしても他の勢力……例えば、日本神話や貴方が秘密裏に戦っていたフアントム達が攻め込んで来るやもしれません。これはその為のプレゼント、という訳です」

………やっぱりこの人？も知ってたか、フアントムの事。

そして言いたい事も大体分かったし理解も出来る。

「それに貴方はこれから『パニシング・ドラゴン白い龍』を始め、様々な強者達に狙われる事でしょうから、補助武器にと思っしています」

や、止めてくださいよ！出来れば平和に過ごしたい男ですよ、これでも！

『補助武器つつてもコイツにや魔法があるからな』

「そう言えば良く聞きますよ、面白い魔法を使うとか」

俺の魔法、面白い扱いかよ………。

や、まああんだけ騒がしかつたらなあ……。

「先の戦争時、三大勢力は一度だけ手を取り合いました。今度も手を取り合える事を祈って……貴方に願を掛けたのですよ」

……願掛けまでされちゃあ、受け取らない訳にもいかないよな。

って、触っても大丈夫なんだよな？

おっかなびつくりではあるが、俺はアスカロンを手を取った………おお、何ともない。

「この神社にて最終調整をしていたのですよ。ですから、悪魔でもドラゴンの力を持っていればOKですわ」

成る程。……で、同士はどうやんのさ？

『相棒、赤龍帝の籠手に意識を集中させろ。後は俺がフォローしてやる……アスカロンを神器の波動と合わせろ』

分かった。言われた通りに赤龍帝の籠手を現出させ、波動を合わせる。

………おお、聖なるオーラが神器に入ってきてる。まあ、気味は悪いけど、直ぐに馴染んできた。

……カッ！

と、赤い閃光が走ったと思うと——あらビックリ！
「かつけえ……………」

何と！籠手の先端から刃が飛び出ていた！テツテレー！
何てふざけてると、ミカエルさんはポンと手を叩いた。

「つと、時間ですね。私はそろそろ行かねばなりません」

「ああ、ちよつと待って下さい！」

そうだよ、俺一言言いたかったんだ！

「お話でしたら、会談の席か、会談後に聞きます。ご安心を」
と言って、ミカエルさんはこの場から消え去った。

「お茶ですわ」

「あ、ありがとうございます」

ミカエルさんとの邂逅後、俺は朱乃さんが普段生活していると言う境内の部屋にお邪魔
してた。

えーつと、確か……………

『器を三回回してから飲めよ』

そうそう、それぞれ！俺は三回回して飲む……………苦い。

朱乃さんは俺の反応を見てクスクス笑った。は、恥ずかしい……………！

……………そうだ、ちよつと訊きたい事があるんだ。

俺は先日のコカビエルとの戦いから気になってた事を訊いた。

「あのー、1つだけ聞いても良いですか？」

「ええ」

「……………朱乃さんって、墮天使の幹部の……………」

俺の問いに朱乃さんは顔を曇らせた。

「……………そうよ。私は、墮天使バラキエルと人間との間に生まれた物です」

やっぱりか……………コカビエルが「バラキエルの力を宿す者」って言ってたからな。

「母は、この国のある神社の娘でした。ある日、傷付き倒れていた墮天使の幹部のバラキエルを助け、その時の縁で私を宿したそうですわ」

と、ここで朱乃さんは背中から翼を広げる……………。

でも、それは何時もの悪魔のソレではなく、片方が墮天使の翼だった。

朱乃さんは憎々しげに墮天使の翼に触れる。

「この羽が嫌で、私は悪魔になったの……でも、生まれたのは墮天使と悪魔の羽の両方を併せ持ったもつとおぞましい生き物。ふふつ、汚れた血を宿す私にはお似合いかもしれませぬわ」

……朱乃さん。違うよ、穢れてるのは……寧ろ、俺の方だ。

「イツセー君はどう感じます？墮天使は嫌いよね？アーシアちゃんの命を奪い、この街を破壊しようとした墮天使に、良い思いを抱く筈ないわよね」

「……………そうですね」

こういう時は、偽っっちゃ駄目だよな。

「墮天使は、嫌いです」

それを聞いて、朱乃さんは悲しそうに顔を歪める。

だけど、俺は続ける。

「でも、朱乃さんの事は、好きです」

「……っ」

朱乃さんは少し驚いた様だった。

「すみません、嫌な事聞いちゃって。俺、ホントに無神経ですよ、人のヤな事聞いて

……」

「そうではありませんわ。私は墮天使の血を引いてるのよ？」

「……でも、朱乃さんは朱乃さんじゃないですか」

俺は朱乃さんが言おうとする言葉を遮った。

「えつとお、朱乃さんは優しく、頼りになる先輩です。確かに墮天使は嫌いですけど、それとこれとは違うって言うか……。それに……例え嫌われたくなくて色仕掛けしたとしても、俺、朱乃さんの事嫌だとか思った事ないつすよ。それに今の事聞いても、嫌いにならなかつたし……。ええと、今でも好きだから問題ないんじゃないつすかね？」

「だあ、ホント語呂力ないな俺って……。支離滅裂じゃねーか。」

「でも……」

「そう、これだけはちゃんと伝えないと。」

俺は朱乃さんの手を優しく取り、不安を吹き飛ばせる様に笑った。

「もし周りが朱乃さんを否定しても、俺は朱乃さんを否定しません。もし絶望しても、絶対見捨てたりしません。俺が貴女の……希望になります」

「……………」

俺が言い終わると、朱乃さんは……泣いていた。

「やべつ、俺何か不味い事言っちゃった!？」

『ハア、お前は何で何時もそうやって……』

『ウエルシユドラゴンよ、その気持ちは同感だ』

『……こう言う所では仲良く出来そうだな、俺達』

『だな』

何だよお前ら！ 愚痴り合ってないで助けてくれよ！

だけど、朱乃さんは嬉しそうに笑い、涙を拭った。

「……………殺し文句、言われちゃいましたね。…そんな事言われたら、本当の本当に、本気になっちゃうじゃない……………」

……………えっと、殺し文句とは聞こえたけど、何かまずったかなあ？

だが朱乃さんは迷わずに立ち上がり、俺に近付くと……抱き着いて来て倒れ込んだ！

つまり、押し倒されてる……!!

「あ、朱乃、さん……………」

「…決めましたわ、私、決めました。イツセイ君……………」

「は、はい……………」

や、やべえ、良い匂いとかおっぱいの柔らかさで意識ががが……………!

「……三番目で構いませんわ」

「……………へ？」

三番目……？はて、何の事やら……………？

「そう、三番目。割りと良いポジションだと思えますわ。何より浮気って感じで燃えま
すわ。うふふ、イツセー君、私にもっともっと甘えてくれても良いのですよ？部長の代
わりに膝枕もして上げますわ」

「ま、マジっすか!？」

朱乃さんの膝枕……………俺得過ぎるぜ!!

「ねえ、イツセー君。朱乃って呼んで？」

「そ、そんな……………先輩を呼び捨てになんて、呼べませんよ!」

「……………じゃあ、一度で良いから。お願い」

……………ぐっ、そんな潤んだ上目遣いでお願いされたらっ!

俺は唾を飲みながら、意を決して口を開く。

「……………あ、朱乃」

「…嬉しいっ、イツセー」

ぎゅっと抱き着く力が強まった!

し、しかも……………!今の声、モロ普通の女の子ボイスだったぞ!

何時もの御姉様口調じゃなかった！でも可愛いです!!
「ねえ、これから二人の時は、朱乃って呼んでくれる？」

の、脳髓が蕩けそうな程の甘えた声で囁かれる！

もう『オカ研の副部長』とかじゃない！普通の女子高生だよ！

んでもって今の体勢は、膝枕っ!!

柔らかい、それに温かいっ!!

人生で三度目の膝枕に、俺泣きそうだよ！

更におまけで頭を撫でてくれる……その手付きの優しいと言ったらもう……感激です

!

「うふふ、イツセー君、気持ちいい？」

「最高です!!でも、この場面を、部長に見られたら……」

『『相棒／兵藤一誠、それはフラグだ』』

「部長が、何ですって……?ねえ、イツセー……?」

はうあ……………つ!!

俺は慌てて頭を起こして立ち上がり、声の方を振り向いた。

するとそこには、某野菜人4宜しく紅色のオーラをたぎらせる俺のご主人様が、いま
した……………。

『こ、殺されるつ!!!』

『『ガクガクブルブル』』

俺は悟った。だってドライグ達も怯えてるもん!!

「部長っ！これには、その……………」

駄目だ、どう言い訳しても退路がないっ！

部長はずんずんと近付くと…………俺の頬を引つ張った！

痛い、痛いっす！

「例の剣は？」

「も、もらいまひた！」

「ミカエルは？」

「か、帰りまひた！」

「ならもう帰るわよ！」

と、部長の後に続いて俺も退出した。

「一番候補の部長が羨ましいですわ」

と、何やら呟いた朱乃さんの声に、部長は一度立ち止まる。が、直ぐに俺の腕を引いていく。

何だか、俺を遠ざけようとしてるみたいだな……………。

~~~~~

そして、相変わらず石段を下りる部長の足音は、素晴らしく怒りに満ち溢れていた。え、何で他人事なのかって？ 現実逃避だよ。

今触れたら問答無用で消されそうだもん！

何と言うか、部長はどうも下僕の俺が女性に触れられるのを嫌ってる傾向にある。いや、アーシアとか小猫ちゃんはOKみたいだけど、朱乃さんは駄目らしい。

……………いや、まさかな。有り得ない有り得ない。

「ねえ、イツセー」

と、部長は不意に立ち止まって俺の名を呼ぶ。

「は、はい？」

何を答えるべきかとも思っていたが、部長の問いは全く予想していない物だった。

「朱乃は、朱乃なのね……」

「……へ？」

「朱乃は副部長。けれど、『朱乃』、なのね……じゃあ、私は？」

……

「部長……ですけど」

俺はそう答えると、部長は肩を落とした。

「……そうね、その通りよ。……でも、『リアス』なの」

そして、一問置いて、

「……………何が、一番候補よ……私だけ遠いじゃないっ」

そう、悲しそうに呟いたのだった。

『相棒、お前……………』

良いんだ、良いんだよ。

俺に————他人を愛する資格なんて、ないから。

# MAGIC33 『会談、始まります!』

うつす、イツセーだ。

今日は待ちに待った三大勢力のトップ会談が行われる日だ。

因みに場所は職員会議室だそうな。

そして周りには結界が張られており、蟻の子一匹抜け出せないし、入り込めない。

……まあ、三竦みのトップが一挙に集まる訳だしな。

こんなにも嚴重になるわな。

「……さて、皆…行くわよ」

部長の一言で全員頷く。

『み、皆さんお気をつけてえええ!!』

うん、ギヤスパーはお留守番だ。

一応神器の特訓は捗ってるけど、まだまだ未熟だからな。もしかしたら三竦みのトップ停めちゃうかもしれないし。

「ギヤスパー、一応俺のゲームとドーナツ置いてるから。暇になったらそれ食ったりしとけよー!」

「は、はいいい!!」

よし、大丈夫そうだな。

俺は頷くと、部長達の後に続いた。

「やっぱりイツセー君、面倒見が良いね」

「そうかあ?」

……ま、出来れば抱えてる物を軽くしてやりたいしな。

『それが面倒見が良いって言うのさ』

~~~~~

コンコン、と部長が会議室の扉を叩く。

「失礼します」

そう一言告げて部長が扉を開けると、特別に用意させたらしい豪華絢爛なテーブル。そしてそれを囲む見知った人達が座っていた。

……中々緊張感あるねえ。

っと、アーシアが不安そうに服の端を掴んできた。

『大丈夫』

その思いを込めて俺はアーシアの手を軽く握ってやる。
するとアーシアは落ち着いたのか、顔を綻ばせる。

『やっぱり全員真面目な服装だな』

そりゃ、こんな重要な会議にコスプレとか浴衣とかで来るわけないだろ…。

セラフオール様もアザゼルもちゃんとした礼装だし。

そして……アザゼルの隣に座る銀髪の「白龍皇」。

こつち見てフツと笑いやがった。

『目え付けられたな、相棒』

嬉しくねえよ、見た感じ戦闘凶っぽいし。

おつ、グレイフィアさんは給仕係りなのね。

「私の妹と、その眷属だ」

サーゼクス様が他陣営のお偉方に紹介すると、部長も軽く会釈する。

「先日のコカビエルの件では、彼女達が活躍した」

「報告は受けてます。改めて礼を申し上げます」

ミカエルさんが部長に笑顔で礼を言い、それに対して部長も冷静に再度会釈する。

「イヤー悪かったな、俺んとこのコカビエルが迷惑掛けて」

うわあ、なんつー態度だよ。

部長の口元ひくついてんぞ……………。

『独身だからマトモな謝り方知らないんだろ』

なるほど、一理あるな！

「その席に座りなさい」

サーゼクス様の指示を受けて、俺達はグレイフィアさんに促されて椅子に座る。

そこにはソーナ会長が座っていた。

俺達が着席したのを確認すると、サーゼクス様が口を開いた。

「全員揃った所で、会談の前提条件を一つ。ここにいる者達は、最重要禁則事項の『神の不在』を認知している」

って、アレ？会長もご存知なのかな？

『大方姉貴の魔王少女から聞いたんじゃない？驚いてないし』

……確かに。驚いてない。

グレイフィアさんも何時も通りって事は、多分前から知ってたんだろな。

「では、それを認知しているとして、話を進める」

そしていよいよ、三大勢力の会談が始まった。

~~~~~

とは重々しく言ったけど、会談自体は順調な様だった。

「と言うように我々天使側は——」

とミカエルさんが意見を述べれば、

「そうだな。その方が良いのかもしれない。このままでは確実に三大勢力とも滅びの道を——」

サーゼクス様も肯定しつつ悪魔サイドの意見を述べる。

「ま、俺達墮天使は特に拘らないけどな」

たまにアザゼルが余計な一言を放ち場を凍り付かせたりしたけど、まあ順調だ。

つつーかこの人はその状況を楽しんでるだけだな。

……………しかし暇だ。



何かする事は……………

『相棒、ならしりとりでもしようぜ』

しりとりか…………よし、ドラゴン！お前もやろうぜ。

『…………別に構わんが。なら栗鼠』

リスか。

『…………スルメイカ』

か、か…………かき揚げ！

『下痢』

『林檎飴』

メバル！

『ルビー』

『烏賊飯』

白滝！

『金木犀』

『イカスミパスタ』

何で飯縛りなんだよドライグ……………ん？

ふと手に重みを感じて見てみると、部長が俺の手を握っていた。

部長の手は、僅かに震えていた。――緊張してるのか？  
ならば！

俺は無言で手を握り返す。

俺は何時でも部長の味方だからな！

『……俺らだけでやるか』

『そうだな……蛸』

『こ、こ、小岩井コーヒー』

『糸』

『トマトパスタ』

『……卵』

『ご飯ですよ』

『……飯縛りウザいわああああ!!!』

『良いじゃねーか別によおおお!!!』

だーうるせえよおおお!!

「さて、リアス。そろそろ先日の事件について話してもらおうかな」

「はい、ルシファー様」

何て突っ込むと、部長と朱乃さん、そして会長が立ち上がってこないだのコカビエル

戦の一部始終を話し始めた。

そしてそれを真剣に聞く三大勢力の方々。

「……以上が、私、リアス・グレモリーと、その眷属悪魔が関与した事件の報告です」  
「ご苦労。座りたまえ」

全てを話し終えた部長達は、サーゼクス様の一言で漸く着席した。

お疲れ様です！

「ありがとう、リアスちゃん☆」

セラフオルー様、貴女は良い意味でも悪い意味でもムードメーカーですな。

「……さてアザゼル。この報告を受けて、墮天使総督の意見を聞きたい」

サーゼクス様の問いに、全員の視線が独身総督に向けられた。

だがアザゼルは臆する事なく笑みを浮かべて淡々と語りだした。

「だからよお、奴の処理はうちんとこの白龍皇が行って、地獄コキョトの最下層トスで永久冷凍の刑に処した……ってこないだの資料に書いただろ？それとおんなじだ」

だいがザツクリした説明だな。分かりやすいけど。

「説明としては最低の部類ですね。……ですが、貴方個人が我々といざこざを起こしたくない、それは事実でしょう？」

「ああ、俺は戦争なんて興味ねーよ」

多分本当だろうな、コカビエルも神器がどうのこうのって言ってたし。

「ではアザゼル。何故ここ数十年神器の所有者をかき集めていたのだ? 最初は戦力増強を図っている」と踏んでいたが……」

へえ、そんな事してたんだ。

『んな事する暇あるなら婚活すりゃ良いのにな』

『同意』

うんうん。

とここでアザゼルが机を叩いた。

「さっきから堪えてたが……もう限界だ!! おい赤龍帝!!」

な、何さんしよ?

「さっきからお前ら地の文で独身独身と……! 人の傷口抉るのも大概にしろよコラア!!」

おお、まさか地の文に突っ込むとは。

『サスガアザゼルサンダナー』

「うがあああああ!!」

ってかこの場で突っ込まなくても……! ……サーゼクス様達もポカンとしてるし。

アザゼルはそれに気付いたのか、咳払いして着席した。

「ハア、それは神器研究の為だよ。俺の信用は三竦みの中でも最低かよ」

「「そうだな（ですな／ね☆）」」

「チツ……わーったよ。……なら、和平を結ぼうや。元々お前らもそのつもりだったんだろ？」

「……おお、まさかアザゼルからそんな事が飛び出るとは。」

他の陣営の方々も驚きに包まれてる。

「……と、ここでその沈黙を破った人？がいた。」

ミカエルさんだ。

「貴方から和平と言う言葉が出るのは意外ですが……元より私はそのつもりでした。このまま三竦みの関係を保つても、今の世界の障害になつてしまう。天使の長の私が言うのも何ですが……戦争の大本の神と魔王は、消滅したのですから」

うん、これは先日聞いたものだ。

アザゼルは嘔き出したけど。

「変わったなミカエル！あれほど神様一筋だったのによ」

「………確かに失つた物は大きい。ですが、いないものを何時までも求める訳にはいきません。人々を導くのが、我らが使命。神の子らを見守り、先導していくのが一番大

事な事だと、私達セラフのメンバーの意見です」

「オイオイ、今の発言は『墮ちる』ぜ?……ま、天界の『システム』はお前が受け継いでたっけ。良い世界になったもんだぜ」

ま、まるで意味が分からん。専門用語のバーゲンセールかよ……………。

そしてサーゼクス様と同意らしく、頷いた。

「我らも同じだ。魔王がなくとも種を存続する為、悪魔も先に進まねばならない。戦争は我らも望まない。……次の戦争をすれば、悪魔は滅ぶ」

「ああ。次の戦争を起せば、三竦みは今度こそ共倒れ。そして、人間界にも多大な影響を及ぼし、世界は終わる……………今は、ファントムなんて謎の勢力もあるしな」

ふざけていた様子のアザゼルも、そんな一面あったのかよ!と突っ込みたくなる程真剣な面持ちで語る。

「神がいなくても、世界は回る。ここに俺達が元気で集まってるのが、何よりの証拠さ」  
「アザゼル、その台詞……………まるで『彼』を思い起こしますね」

「……………それもそうだな。これは『奴』の口癖だったな」

……………奴?誰の事だ?

「アザゼル、ミカエル。奴とはまさか……………」

「ああ。ま、ここでは話すことじゃない」

「……………そう、だな」

……奴つてのが気になるけど、話は勢力云々……主にファントムとか日本神話とか……に移っていった。

「つと、こんなところだろうか？」

サーゼクス様の一言で、お偉方は息を吐いていた。一通りの話は終わったみたいだな。

グレイフィアさんがお茶を入れている中、ミカエルさんが俺に視線を向けた。

「さて、話し合いもだいぶ良い方向へ片付いたので、そろそろ赤龍帝殿のお話を聞いても宜しいかな？」

その言葉に全員の視線が俺に集まる！

俺は一瞬アーシアの方を振り替える。

アーシアは、ニコリと微笑んで頷いてくれた。よしっ！

「……彼女を、アーシアをどうして追放したのですか？」

俺の質問に、全員が驚きの顔をした。

まあ、何でこの会談で聞くんだ？ って気持ちは分かるが、俺は墮天使以上に、許せな

い部分を天使側に感じてた。

「ただ、ミカエルさんは真摯な態度で答えてくれた。

「それに関して、申し訳ないと言えません。……………神が消滅した後、加護と慈悲と奇跡を司る『システム』だけが残りました。この『システム』は、神が行っていた奇跡等を起こすための物。神は『システム』を作り、これを用いて地上に奇跡をもたらして来ました。悪魔払い、十字架等の聖具へともたらす効果……………これらも『システム』の力です」

なるほど。

「神がいなくなつて、『システム』に不都合が起こつた……………そうなんですか？」

俺の疑問にミカエルさんは頷いた。

「正直、『システム』を神以外が扱うのは困難を極めます。私を中心に『熾天使』全員で『システム』をどうにか動かしていますが……………神がご健在だった頃に比べると、神を信じる者達への加護も慈悲も行き届きません……………残念な事ですが、救済出来る者は限られてしまうのです」

『コカビエルも言っていたな』

確かに……………それでも良くやっているって。

「その為、『システム』に影響を及ぼす可能性の有るものを教会に関する物から遠ざける



必要があったのです。影響を及ぼす物の例としましては、一分の神器「アーシア・アルジェント」の持つ『トワイライト・ヒーリング聖母の微笑み』も含まれます。そして、貴方の持つ『ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手』、白龍皇の持つ『デアバレン・テイバイティング白龍皇の光翼』も同等の物です」

「……『ロンギヌス神滅具』じゃないアーシアの神器が弾かれるのは、悪魔や墮天使も回復出来るから、ですか？」

ミカエルさんは再度頷いた。

「はい。信徒の中に『悪魔と墮天使を回復出来る神器』を持つ者がいれば、周囲の信仰に影響が出ます。……信者の信仰は我らの天界に住まう者の源。その為、『聖母の微笑み』は『システム』に影響を及ぼす禁止神器としています。それと、影響を及ぼす例に「アーシア」

「神の不在を知る者……ですね？」

ミカエルさんの言葉を遮って続けたのは、ゼノヴィアだった。

「ええ、その通りです、ゼノヴィア。貴女を失うのは此方としても痛手ですが、神の不在を知った者が本部に直結した場所に近づくと『システム』に大きな影響が出ます。アーシア申し訳ありません。貴女とアーシア・アルジェントを異端とするしかなかった」

と、ミカエルさんはなんと頭を下げた「アーシア」謝ってる！

「頭を上げて下さい、ミカエル様。悪魔に転生した事は、私の日常に彩りを与えてくれます。こんなことを言ったり、他の信者に怒られるかもしれませんが……私は、今こうして仲間達と、私の希望、兵藤一誠と過ごせる生活に満足しています」

……………何か、嬉しいけど恥ずかしいな。

でも、そんな風を感じてくれるとは、こっちも嬉しいよ。

アーシアも続けるように手を組んで口を開く。

「ミカエル様、私もです。今の生活がとても幸福なのです。大切な人達や、沢山のお友達が出来ましたから。それに、憧れのミカエル様に御会いできて、お話も出来たのですから光栄です!」

ミカエルさんはアーシアとゼノヴィアの言葉に安堵の表情を見せた。

「すみません。貴女達の寛大な心に感謝します。……デランダルはゼノヴィアに一任します。サーゼクスの妹君な眷属ならば、下手な輩に使われるより安全でしょう」

よし、これで胸のつかえは取れたぜ!

「……さてと、そろそろ俺達以外に、世界に影響を及ぼす奴等の意見を訊こうかねえ。無敵のドラゴン様にな。まずはヴァーリ、お前は世界をどうしたい?」

む、この銀髪はヴァーリって言うのか。覚えておこう。

『お前のおつむだと歩いて3歩で忘れそうだな』

鶏か!!

「俺は強い奴と戦えればそれで構わないさ」

「……………そんだけ？」

「マジな戦闘狂じゃねーか。」

「何時も通りか。じゃ赤龍帝、お前は？」

「……………そんなの、決まってる。」

「俺は……………皆の希望を守れば、それで良いです。誰かが絶望してるなら、誰であっても手を差し伸べます」

「ふむ、他人のため…か。そんな事言う赤龍帝は初めてだな」

『その通りだ。だからこそ、俺はコイツに力を与える』

手の甲の宝玉が光り、そこからドライグの声が響く。

「成る程ねえ」

『……………つと、相棒』

「どうした、ドライグ？」

『身を構えとけ』

「えっ……」

その瞬間、会議室は一瞬静寂に包まれた。

~~~~~

まさか、今は……………

『オイオイ、眷属殆んど止まってんぞ』

え……………うわっ!

アーシア、朱乃さん、小猫ちゃん、会長も停止していた!

まさか、朱乃さんと会長まで停めちゃうとは……………!

逆にお偉方とヴァーリは普通に動いていた。

「眷属で動けるのは、私とイツセー、祐斗、ゼノヴィアだけの様ね」

俺は兎も角、木場は恐らく俺同様に禁手に至ってるからだろうけど、ゼノヴィアは

……………っ!

『ほう、デュランダルを盾にしたのか』

「ああ、時間停止の感覚は体で覚えていたからね」

脳筋じゃねーか、やってることが!

「もしかしてこれ……………」

「もしかしなくても、テロだな」

やっぱり……………!!

窓の外を見てみると、校庭の上空に夥しい数の魔術師が攻撃してきた。

「所謂魔法使い……………お前さんと違い向こうが一般的な奴等だ」

ですよね。指輪と喧しいベルトの魔法使いなんて俺だけで充分だよ。

「時間停止は……………多分ギヤスパアの力を利用させられたのか」

「察しが早いな、赤龍帝」

とは言うが、アイツやっぱり潜在能力の塊だな。

「許せないわ……………大事な会談の邪魔をするためだけに私の下僕を利用するなんてっ

!!」

おおっ、部長が怒ってらっしやる!

アザゼルは一息吐くと、窓に手を向けた。

すると、外の上空に無数の光の槍が現れ、アザゼルが手を下ろした瞬間に魔術師達に

降り注いだ!

『ほお、独身の癖に中々強いな』

うん、独身だけど流石は総督名乗ってるだけあるな!

「独身独身うるせーぞ!!童貞赤龍帝!!」

「童貞で何が悪い!!」

言い合う俺達を嗜める様に、サーゼクス様が近づく。

「兎に角、今はテロリストの活動拠点となっている旧校舎からギヤスパ―君を取り返すのが目的だ」

まあ、お偉方は下調べとかで動けそうにないしな。

主に誰がこのテロの糸を引いたのか、それを調べなきゃだしな。

「お兄様、私が行きますわ。ギヤスパ―は私の下僕です。私が責任を持って奪い返します」

「言うと思っていたよ。だが旧校舎までどう行く? 魔術師が沢山いる以上、通常の転移も阻まれる」

「部屋に、未使用の『戦車』を保管していますわ」

「…成る程、キヤスリングか」

キヤスリングって確か……………『王』と『戦車』の位置を瞬間的に入れ換えるんだっけか?

レーティングゲームの特殊技の一つだったと思うけど。

確かにこれなら相手の隙も付けるし、一々外に出て袋叩きに合わずに済む。

流石部長！

「よし、それで行こう。だが一人で行くのは無謀だ。グレイフィア、キャスリングを私の魔力方式で複数人転移可能に出来るか？」

「そうですね、ここでは簡易的な術式しか展開できませんが……お嬢様ともう一方なら転移可能かと」

「なら、俺が行きます！」

世話係りを任されたんだ、ほっとく訳にはいかねえ!!

「おい赤龍帝」

「兵藤一誠で良いぜ」

「なら兵藤一誠、これ持ってけ」

アザゼルが此方に何かを投げて寄越したので受け取ってみると……腕輪？

「ソイツは神器がある程度抑える力を持つ腕輪だ。あのハーフヴァンパイアに嵌めてやれ。そうすりゃ制御できるだろうさ」

「ほーっ、流石は独身」

「茶化してないでさっさと行け！つとヴァーリ、お前は外で派手に暴れる。敵の目を引くんだ」

「……了解」

そう言うと、ヴァーリの背中に光の翼が現出する。

あれが、ヴァーリの神器か……。

「……バランス・ブレイク禁手」

《Vani shing Dragon Balance Breaker!!!》

女性とも取れる中性的な音声が続いた後、ヴァーリの身体を白いオーラが覆った!

光が止み、見るとそこには白い輝きを放つ全身鎧に包まれたヴァーリがいた。

………何か、向こうの方がカッコ良くね?

『バカ言うな! 赤龍帝の鎧も負けてねーよ!!』

でもあんな翼あるし……。

何て呟いてると、ヴァーリは外に飛び出し、魔術師相手に無双していた!

………なんつー規模の強さだよ。俺以上じゃん!

「そう言えばアザゼル」

「ん?」

「神器を集めて、何をするつもりだったんだ?」

「………備えていたのさ。とあるテロ集団に対抗する為にな」

「……テロ集団?」

………サーゼクス様も知らないのか? 一体何なんだよ、そのテロ集団は?

「カオス、ブリゲード。ま、俺もつい最近知ったんだけどな」

「……カオス、ブリゲード？」

良くは分からんが、とんでもない集まりなのは分かるぜ。

「以前からうちの副総督のシエムハザが不審な集団に目え付けてたのさ。他にも、禁手に至った人間達や神滅具持ちも複数存在してる」

「成る程……その首謀者は？」

「それは——」

『貴方達を知る必要はありません。何故なら、ここで死ぬのですから』

「カツ！とアザゼルの声を遮るように聞こえた声と、部屋に魔方陣が浮かび上がった！

「つ！グレイフィア、リアスとイツセー君を飛ばせ！」

「はっ！」

「オイオイ何がどうなって——」

口を開くより早くに、俺達は旧校舎に転送させられた。

~~~~~

「よりにもよって君が来るとはな、カテレア」

「お久し振りですね、サーゼクス殿」

イツセーとリアスが転移した後、部屋に現れた招かざる客は、旧魔王——カテレア・レヴィアタン。

「今この時を持って伝えましょう。我ら旧魔王派の者達は禍の団に協力することに決めました」

ここにきて、旧魔王派が敵に寝返ったと言う事実には、衝撃を隠せない木場達。

「カテレア、それは言葉通りと受け取って良いのかな?」

「その通りです、サーゼクス。今回の攻撃は我々が受け持っております。そして我らはこの世界を滅ぼし、再構築するのです! 理念、法、『システム』も含めてね」

カテレアが自信満々に切った所で、

「ぐつ、クツクツク……」

アザゼルだけは笑っていた。

可笑しいと言わんばかりに。

「何が可笑しいのです、アザゼル」

カテレアは怒りを隠さずにアザゼルに問いかける。

「オイオイ、今時世界の変革って………TVの中の悪役だけだと思ってたぜ？そういうの、直ぐに死ぬ奴程ほざくんだよなあ」

「アザゼル……貴方は何処まで人を愚弄する!!」

激昂したカテレアは魔力をたぎらせる。

「……サーゼクス、ミカエル。手え出すなよ」

「………カテレア、降るつもりはないのだな？」

「ええ、サーゼクス。貴方は良い魔王でした……が、最高の魔王ではない。だから、私達ら新しい魔王を目指します」

「そうか、残念だ」

ドッ!!

サーゼクスがそう呟いた瞬間に、アザゼルは校舎の窓際を吹き飛ばした。

「へいカテレア。俺とこっちよハルマゲドンでも洒落こもうか？」

「望む所よ! 堕ちた天使の総督!!」

言うと同時に、カテレアとアザゼルは空に飛び立ち、光と魔の攻防を繰り広げた。

「木場祐斗君。私とミカエルは結界を強化し続ける。だから悪いのだが、外の魔術師達を始末してくれないだろうか?」

「……はい、勿論です!」

「私も行こう。私も、リアス・グレモリーの『騎士』だからな」

木場とゼノヴィアは互いに頷くと、校庭に向かっていった。

~~~~~

「背後からコンニチワ! ってな!」

「ぐああ!!」

「チイツ、悪魔風情が………!!」

「これ以上ギヤスパーには指一本触れさせないわ!」

「ぎゃあああ!!」

転移したらやっぱりそこは敵陣のど真ん中でした! つと。

まあそんな事はもうどうでも良かったので、俺は魔術師をぶん殴り、部長は滅びの魔

力を無数の針にして飛ばしたりして、悪魔無双を行っていた！

「部長！イツセー先輩！」

おお、ギヤスパー発見！

椅子にくくりつけられてるだけっぽいな、良かった！

「僕、僕は……もう嫌です。僕を……僕を、殺してください！」

「バカ言うなって！」

「ぐほっ！」

俺はギヤスパーに襲いかかる女魔術師を肘鉄でブツ飛ばす！

「そうよギヤスパー。私は貴方を決して見捨てないわ。貴方を転生させた時、言ったわよね？生まれ変わった以上は、私の為に生き、そして自分が満足できる生き方も見付けなさい……って」

でも、部長の言葉はギヤスパーには届かず、首を横に振る。

「……見つけられなかった。迷惑かけてまで僕は……生きる価値なんて……」

「おいギヤー助！良く聞け！」

ドオンツ！

目の前の魔術師をドラゴンショットで沈黙させた俺は、ギヤスパーに言い放つ！

「人間にしたってそうだけだな、俺達は生きてる以上誰かに迷惑かけちゃう物だ！でも

な、死んじまったらその迷惑かけた分恩返しも出来ねえ!でも今お前は生きてるだろ!?!
 じゃあこの先、もしかしたら部長達に恩返し出来るだろ!?!前にも言つたろ……………もう
 ちよい前向きに、バカになれって」

「そうよ!ギヤスパ、私達にいっぱい迷惑を掛けてちょうだい。私は何度も何度も
 叱ってあげる!慰めてあげる!————私は、決して貴方を放さないわ!!」

さあ、ギヤスパー!

俺達のご主人様にここまで言わせてんだ、お前はどうか答える!?

「ぶ、部長……………僕は、僕はっ!!」

泣き出すギヤスパー……………だけど、それが悲しさから来るものじゃない。

————嬉しさからくる物だ。

「ギヤスパー」

俺はギヤスパーに近付きながら、手刀で右腕を切り裂く!イテエ!

「恐れるな、逃げるな、泣き出すなっ!これがグレモリー眷属男子メンバーのモットーだ
 ぜ!!これはその門出祝いだ!!飲め、ギヤスパー!!」

ギヤスパーは強い眼差しで頷くと、右腕から流れ出る俺の血を舐めとる！
すると、この室内の空気が一変した………つて、ギヤスパーいないじゃん！

チチチチツ!!

ギヤスパーが消えたと同時に、室内からコウモリの鳴き声が聞こえたかと思うと、天井から無数の赤い瞳をしたコウモリが襲いかかる！

「変化したのか!? 吸血鬼め!」

「おのれ!」

毒づきながらコウモリに向けて攻撃するが、何かに引っ張られて大きく体勢を崩した！

あれは……影から手が伸びてる!?

影から出てる手は、彼女達を影の中へ引っ張ろうとしていた!

「ならばっ、くらえええ!」

魔術を叩き込むが、そりゃ悪手だな。

向こうは影だから効果はなく、ただ霧散するだけ。

そしてその隙にコウモリは魔術師達の各部位を噛んだ。

「血を吸うつもりか!？」

「いや、私達の魔力も吸いだしている!」

魔力も吸血するのか……とんでもないサラブレッドだな!

「くっ、ならばこうするだけよ!」

魔術師達は攻撃の標準を俺達に向けて放つ……が、それらは空中で全て停止した

!

『無駄ですよ! 貴女達の動き、攻撃は全部僕が見ています!』

コウモリの視線から神器を発動してるのか!

『そして貴女達も停めます!』

カッ! と赤い瞳が輝くと、この部屋に残った魔術師達の時間が全て停止した!

『今です! イツセー先輩!!』

「任せとけ!」

《Explosion!》

停まつてるから聞こえてないだろうが………聞け! 龍の咆哮を!!

「————ドラゴンック・ブラスマ龍牙雷光アツ!!」

強化された腕から放つ高速拳で、停まった魔術師達を一網打尽だ!

魔術師達を縛り上げた俺達は、冥界にある役所へと送り届けた。

「イツセー先輩、腕は大丈夫ですか?」

「ん? おお、ドライグとのイメージ空間での修業に比べたら、屁でもないさ!」
うん、ドライグとの特訓なんて何度死にかけたか……………。

「…………よし、全員彼方へ転送したわ! さて、イツセー、ギヤスパー! 魔王様の元へ帰るわよ!」

『はい!!』

元気良く返事を返し、急いで駆け出した!

『なあドライブ!』

『ん?!』

『連中をさ、纏め上げる程の力を持ってないと、こんなテロ集団なんて出来ないよな? 一体誰なんだろうな』

『力を持った奴……………まさか』

俺は走りながら、脳裏にある少女の姿が映った。

『……………我、イツセーといると、楽しい』

いや、まさかかね…………。

その考えを消して玄関を出た時だった。

ドオオオオオオンツ!!

うおっ、ケタロスか!?

俺達の前に何かが落下してきたんだ!

煙が晴れると、そこには――

「……チツ。この状況で反旗か、ヴァーリ」

多少の傷を負った墮天使総督と、

「そうだよ、アザゼル」

俺のライバル――白龍皇、ヴァーリがいた。

傍らに、露出の激しい服を着たお姉さんを侍らせて。

MAGIC34 『激突する天龍』

あ、ありのままに起こった事を話すぜ！

上からおっさんが落ちてきたと思ったら、裏切り者が俺のライバル、白龍皇ヴァーリだったんだ！

「アザゼルさん！どうなってんすか、この状況！30字以内で説明して下さい！」

「無理だ！」

4文字で纏めやがった！……ってな事言ってる場合じゃないな。

「悪いなアザゼル。俺としては此方の方が面白そうなんだ」

「……つたく。俺もやきが回ったもんだな。なあヴァーリ、一つだけ聞くんぜ」

「ん？」

アザゼルは背中に翼を生やすと、ヴァーリと同じ目線まで浮かび上がる。

「うちの副総督のシエムハザが、三大勢力の危険分子を集めた組織———禍カオス・ブリゲードの団が

動き始めてるのを察知してんだ」

「ほう、流石はアザゼル。情報網が速いな」

「そして……そのトップに立っているのが———」

次いでアザゼルが口にした事実には、俺は信じがたい物を感じた。

『無限の龍神』ウロボロス・ドラゴン オーフイス！

oooooooooo!!?

「オーフェイス!?……神も恐れた、最強のドラゴンが……テロ集団のトップだなんて！」

部長達も驚いていたが、それ以上に俺は信じられなかった。

『相棒……奴は結局、家を取った訳だな。ま、それ以外の事には眼中にないだろうが』

……そう、か。 そうだな。

「……ああ、そうだよ。 だけど、俺も彼女も世界だの覇権だのには興味がなくてね。 カテレア達は彼女の力を利用しようとしてくっついてきただけだ」

「ヴァーリ、貴方は本人を目の前にしてよく言ってくれますね……………」
つて、あの人が？悪魔なんだろうけど……………誰？

「カテレア・レヴィアタン……………旧魔王の一人だ」

え、えええええっ!?

レヴィアタンつて…………セラフオール様じゃないの!?

「…………ヴァーリ、あの子は一体何者？ただならぬオーラを感じるけど」

「兵藤一誠。俺のライバルの赤龍帝だ」

「ふうん……………見たところ残念そうだけど、殺すの？」

……………聞こえないけど、多分物騒な事言ってるんだろうなあ。

「止めておけカテレア。お前だと恐らく負ける」

「それほどなのかしら？」

「オイオイお前ら、俺を忘れるなよ」

と、ここでアザゼルが口を開いた。

「そうでしたね……………さあアザゼル、覚悟を決めてもらいましょうか」

カテレアはアザゼルの嘲笑いながら魔力をたぎらせる。

「…………チツ、さつき膨れ上がったオーラの量、オーフィスに何貫った？」

アザゼルの問い掛けにカテレアは笑った。

「無限の力を、世界変革の為に借りたのですよ。お陰で貴方と戦える。サーゼクスやミカエル、そしてセラフォルも倒せるチャンスです」

……………それって、

「ただのドーピングじゃね？」

『素の実力じゃ敵わないからって奴の力を借りて変革って……何かアホくせえなあ』

俺とドライブは思った事をそのまま口にした。

どうやら上空にいる二人にも聞こえたらしく、方や笑い方や怒っていた。

「ダーハツハツハ!! 確かにな! お前の言うとおりでござい兵藤一誠!」

「っ、黙りなさい! 愚かな総督の癖に!」

「確かにな、俺は愚かだ。シエムハザがいなけりや何も出来ねえただの神器マニアだ。

だけどな、サーゼクスやミカエルの方がお前らよりは優秀だ」

アザゼルの言葉にカテレアは顔を歪ませた。

「世迷い言を! 良いでしょう……ならばここで、新世界創造の第一歩として、墮天使の総督である貴方を滅ぼす!」

強い口調だけ……完全に死亡フラグです本当にありがとうございますごさいます。

だがアザゼルは愉快そうにしながら、懐から短剣みたいなのを取り出した。

「それは……」

「……俺あ神器マニアが過ぎてよ。自作で作ったりもするんだよなコレが。まあ、殆んどはガラクタ同然の奴ばっかだけだよ。全く、神器を開発した神はスゲーよ。俺はそこだけは神を尊敬してんだぜ？」

「安心なさい。新世界で神器等と言った玩具は絶対に作らない。そんなものがなくとも世界は機能するのですから。……何れは北歐のオーデインにも動いてもらわなくてはなりません」

そうカテレアが口を歪めた時、アザゼルは吐き捨てた。

「それを聞いて益々ヘドが出るぜ。ヴァルハラ!?アース神族!?横合いからオーデインに全部かつさらうつもりかよ。まあ良いや……と言うよりもな、俺の楽しみを奪う奴等は……消えてなくなれ」

ゾツとするほどの底冷えした殺気を放つと、アザゼルの持つ短剣が形を変えた!
な、何だ!?

「……アザゼル、まさか!?!」

「……バランス・ブレイク禁手!」

一瞬、閃光が辺りを包み込んだ。

かと思うと、閃光は直ぐに晴れ、そこにいたのは……まるでドラゴンの様な全身

鎧を纏ったアザゼルツ！

な、何かカツコよすぎるぞ！

黒と金とか………厨二心操られるチヨイスじゃん!!

パニング・ドラゴン

『『白い龍』』と他のドラゴン系神器を研究して作り出した、俺の傑作人口神器だ。

ダウンフォール・ドラゴン・スピア

『墮天龍の閃光槍』、その擬似的な禁手状態——『墮天龍の鎧』《ダウンフォール

ドラゴン・アナザー・アーマー》だ」

すげえオーラだ！ティアアやドライグにも負けない波動の力強さ！

それにいとも簡単に禁手になりやがった！

『いや、ありやあ正確な禁手じゃないな』

へ、違うの？

『神器をバーストさせて強制的に禁手にしてるんだろう。所謂暴走だ。ま、核が無事ならガワを作り直すだけで良いんだろうが……』

つまり、使い捨ての神器？

『だろぅな』

「ハハハ！流石はアザゼル！凄いや!!」

おおう、奴さん笑ってるぜ。

何処までも戦闘狂だな！

「ヴァーリ、てめえの相手もしてやりたい所だが……赤龍帝に自己紹介でもしとけ」

「……ふむ、それもそうだな」

ええ……相手取って下さいよ。

するとヴァーリはこつちを向いて俺に語り始めた。

「改めて始めましてだな、兵藤一誠。俺はヴァーリー……本名、ヴァーリ・ルシファー」

………は？ルシファー？

「俺は先代魔王の血を引く者でね。旧魔王の孫である父と、人間の母との間に生まれたんだ。『白龍皇の光翼』も、半分人間だから手に入った」

……な、何だよそれ。旧魔王で、伝説のドラゴン宿すとか！

「嘘よ！そんな事が………」

部長や皆も驚いてる……………そんなの当たり前だ！

だがカテレアと睨み合ってるアザゼルは肯定した。

「いいや事実だ。そう……コイツは過去現在、そして未来永劫に於ても、最強の白龍皇だろうさ」

「奇跡と言う言葉は、俺のためにあるのかもな」

そう呟くと同時に、ヴァーリの背中から、光翼に被さる様にして幾重もの悪魔の翼が生えた！

「さあーて待たせたなカテレア……………来いよ」

「舐めるなっ!!」

特大のオーラを纏って、カテレアは猛スピードでアザセルに飛び込むが……

ザンツ!!

「オイオイ、折角意気揚々と禁手したのによ……………ま、良いや」

「ガッ…ハッ……………!?!」

コンマの世界での攻防で、アザゼルの方に軍配が上がった。

「これ程とは……！ですが、ただでは死にません!!」

カテレアは血を吐きながらも何やら体に怪しげな紋章を浮かばせながら、アザゼルの左手に触手を巻き付けた！

「ッ、あれは自爆用の術式だわ!」

ええ、マジで雑魚要員じゃん!自爆って………!!

「ほお、安っぽい考えだな」

「こうなった以上、貴方に逃げ場はありません!私が死ねば貴方も……」

バシユツ!!

だが、そんなカテレアを嘲笑う様にして、アザゼルは躊躇なく左手を切断した!

ま、マジかよ……!!?

そんな、ピッコロさん宜しくぶったぎるなんて!

「ほれ、逃げ場は出来たぜ」

「自分の、腕を……ッ!?!」

「左手ぐれえお前にやるよ。だから、消えろ」

アザゼルは吐き捨てると、カテレアの腹に光の槍をぶっ刺した。

カテレアの体は爆発することなく、塵になって消えた。

「呆気ないな、カテレア」

ヴァーリは何事もなく眩き、俺達を変わず見下ろしていた。

「ま、そろそろ停まった連中も動くだろうな。どうするよヴァーリ、俺と踊るか？」

アザゼルは片手で光の槍を作ると、切っ先をヴァーリに向ける。

が、ヴァーリは一瞥しただけで今度は俺に視線を向けた……アレ？

「確かにそれも面白そうだけど……俺は先ず君と戦ってみたいんだよ、兵藤一誠」

「お、俺？」

「ああ。君自身は気付いてないだろうが、君の持つオーラはとてつもなく強い。リアス・

グレモリーの眷属にいるには勿体無い程にね」

「……部長が弱いつてか？」

俺が言うと、奴は首を横に振る。

「いや、そうではない。ただ、余りにも釣り合わないと思つてね」

「……………」

「さあ兵藤一誠。俺と戦おうじゃないか」

ヴァーリは静かに構えるが、俺の言いたい事は一つだ。

「……………だが断る！」

「……………?」

そんな身勝手な理由で戦いたくねえよ！

「俺の力は誰かの希望を守るために使う。お前みたいにならだ戦いたいから、なんて下らねー理由で使いたくない」

「……………君の性格からすればそう言われるのも考えておくべきだったな。ならばこう言うのはどうだ？」

するとヴァーリはさも楽しげに、言い放った。

「君は復讐者になるんだ。君の叔父、兵藤茂を俺が殺そう」

.....は？

コイツ、今なんて言っただんだ？

「.....オイ、もう一回言ってくれよ。聞こえなくてさ」

「君の叔父を殺そう。そしたら君は俺と戦うことになる。嫌でも仇を取るために戦わねばならないだろう？ 君の叔父も、老いて普通に死んでいくよりはよっぽど劇的だ。うん、我ながら良い考えだな」

.....やっぱそう言っただんだな。

.....ぶっ殺す。

「オイ、この糞野郎……………」

大地が揺れるのを感じる。

体の奥底から怒りが沸いてくるのを感じる。

だがッ！それ全てをぶつけても、足らねえ!!

「覚悟は出来てんだろうなああああッ!!!」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

激情のままにオーラを放出し、直ぐ様鎧を身に纏う!!

コイツは、コイツだけはっ!!

「俺がぶっ倒してやるよおおおッ!!!」

イツセー side out

~~~~~

木場 side

「ソード・パース  
魔劍創造ッ！」

「デュランダル!!」

「ぐああああ!!」

僕とゼノヴィアは、迫り来る魔術師達を粗方片付けた。

「これで殆どか？」

「恐らくね……………」

すると、

「お待たせしましたわ」

「すみません。ご迷惑をお掛けしました……!」

「不覚……」

朱乃さん、アーシアさん、小猫ちゃん達がやって来た!

良かった、ギヤスパ―君の停止能力が切れたんだ!

「アーシア、無事か!」

「は、はいっ!ゼノヴィアさん、苦しいです」

ゼノヴィアは余程心配してたのか、アーシアさんをきつく抱き締めていた。

本当に苦しそうだよ、ゼノヴィア……。

「ご苦労だった。木場祐斗君、ゼノヴィア」

後からやって来たサーゼクス様に労いの言葉を受けた。

うん、頑張った甲斐があったよ。

「……どうした?グレイフィア」

だけど、後ろにいたグレイフィアさんは何やら浮かない顔をしていた。

「何か、嫌な予感がします……イツセイ様に、何か起こりそう……」

全員が首を傾げた時だった。

ゴオオオオオオオオオオオツ  
!!!!

突如大地が揺れたと思うと、グラウンドから赤いオーラが立ち上った！

このオーラは……………イツセー君!

「……………行こう」

サーゼクス様が静かに呟いたのと同時に、僕たちは走り出した！

すると、そこには、

「懺悔の用意は出来たかア!? ヴァーリイイイイ!!!」

激しい怒りを見せるイツセー君と、白龍皇ヴァーリがいたんだ。

「よおサーゼクス、ミカエル」

「アザゼル……その腕は」

部長とギヤスパー君の側にいたアザゼルは何と片腕がなかった。

恐らく、この前に感じたオーラの持ち主と戦った結果なのだろう。

「……すまない」

「謝らなつて。こつちもヴァーリの裏切りが出たからな。それにしても……お前の妹はとんでもないのを眷属にしたもんだ」

……だけど、以前のイツセー君はこんなオーラを放出してはいなかった。

それに――

「だが解せねえな」

「どうしたのです?」

「俺の知る赤龍帝の鎧はあんなにも鋭くなかった筈なんだがな」

「……確かに。以前見た物とはまるで違う」

そう、ライザーと戦った時と、鎧の形状がまるで違った。

全身を覆う鎧はまるで針の様に鋭くなり、イツセー君を覆うオーラもまた同じく鋭

かった。

そして、全身を走る緑色のスパーク。

何れも、以前見た赤龍帝の籠手の禁手形態とは大きく違っていた――。

「イツセー……」

部長が呟いたイツセー君の名前は、

「ぶっ殺すツ!!!」

「そこなくつちやな!!」

赤龍帝と白龍皇のぶつかり合う音に、掻き消された。

木場 side out

~~~~~

イツセー side

「ッ、これ程とはな……！だが見ろアルビオン！兵藤一誠の力が桁違いな迄に膨れ上がったぞ！！」

『神器は、思いを力の糧とする。彼の純粹なまでの怒り、殺意がお前に向けられてるのさ。だがそれこそ、ドラゴンの力を引き出せる、心理の一つだ。しかし……歴代の赤龍帝の何れにも属さない程の力だ。やるからには気を抜くなよ』

「フッ、当然！」

奴の語る言葉全てが癩に触るッ！

「訳わかんねー事ほざいてんじゃねえッ!!!アスカロンッ！」

《Blade!》

籠手に内蔵されたアスカロンを伸ばし、ヴァーリに一閃!

すると結界と共に、雲が斬れた!

『龍殺し……一太刀でも浴びれば無事では済まんぞ』

「当たらなければどうと言う事もない。さあ兵藤一誠!俺を楽ませてくれ!!」

だったら!

「楽ませてやるよ……泣くほどになあ!!!」

オーラを纏い、ヴァーリ目掛けて高速で接近するッ!

「oooooooooo!速いなっ!」

「うらあああああっ!!」

ヴァーリの魔力の弾幕を掻い潜り、顔面に拳を食い込ませるッ!!

「ガッ……ッ!!」

《BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost》

StBoostBoost!》

「オラアッ!!」

怯んだヴァーリの頭にハンマーナックル!

落下していくヴァーリ目掛けて、

「エクスプロージョン・ドラゴンショット爆裂の龍波動オツ!!」

「ぐっーーーーーッ!!!」

落下しながら魔方阵で防ぐが、爆裂の龍波動は触れた瞬間に爆発する！
ヴァーリの周囲に連続して爆発が起こる！

が、ヴァーリは鎧を再生させながら煙から姿を見せると、高速のタツクルをーーーーーッ!!!

「フンッ!!」

「グウツ……!!!」

僅かに上に浮かんだ俺の手を掴み、術式を発動し、魔力の弾丸を零距离で浴びせてきやがった!!

イテエ!!

当然俺の体は落下していく。

ヴァーリは落下していく俺に向けて手を翳す。

《Divide!》

白龍皇の光翼から音声が聞こえたかと思うと、急に俺の力が消失する！

何とか着地し、奪われた分を倍加で補う！

《Boost!》

『相棒、一端冷静になって聞いてくれ。奪われた力は俺の力で元に戻る……が、白いの他の能力が厄介だ』

……どういこうった、ドライグ？

『奴は相手の力を半分にするだけじゃない。減らした分の力を自らに加算する。つまり、お前の力を奪い、自分のパワーにしているのさ。あくまでパワーだけだがな』
つまり、俺がマイナスからゼロになっても、向こうはプラスになる訳か。

笑えねえ………ッ！

『そう言うこった。だが、どんなに宿主がスゴくとも限界はあるさ。キャパシティを越える力は背中の光翼から吐き出すことで上限を常に維持できるって訳』

へっ、成る程なあ……。

『ほらほらッ! どうした!?! 君の力はその程度ではあるまいっ!』

「チイツ……マシンガン・ドラゴンショット拡散する龍波動オツ!!」

「フツ!」

《Divide Divide Divide Divide!》

奴が繰り出す攻撃と相殺させる……!

《Explosion!》

ドラゴンック・ブラズマ

「龍牙雷光アツ!!」

「高速拳もかわせばなんと虚しいかつ!!」

なっ、龍牙雷光をかわしやがった!?

「だが君はやはり強いっ!こんなにも心踊るのは久方ぶりだっ!」

「ああそうかい!?こっちは胸糞悪いんだよッ!」

くそっ、曲がりなりにも最強の白龍皇だけあるなっ!

こっちの攻撃がまるで往なされてるッ……!」

「だったらあ!」

何時もよりオーラの消費が多いけど、気にしてられねえ!

魔力を火種に変換……そしてッ!

《Transfer!》

「ドラゴンブレスッ!!」

空中のヴァーリ目掛けて焔を放つ!

奴は防御壁で防ぐが、その熱量に顔を歪めていた!

「グツツツツツ!なんとと言う熱量だッ……!?!」

そう、その隙が欲しかった！

「これは……ッ！」

俺は予め地中に手を突っ込み、ドラゴンブレスが消えた瞬間にヴァーリの下から手を伸ばす！

「……だあ！」

ガシッ！

「ヴァーリの光翼を掴んだ!?」

「ドライグウ！ヴァーリに力を譲渡するぞ!!」

『合点承知!』

《Transferrer!》

ヴァーリに力を譲渡した事で一気に力が抜ける！

ヌグウツ!!

「どうしてヴァーリに力を!?」

部長が背後で驚いているがそりやそうだ。

でも、これで良いんだ！

「お前の吸い取る力と吐き出す力を一気に高めてやるよ！この翼が処理しきれなくなるほどになア!!」

「チイツ!!」

キイイイインツ!!

奴の白龍皇の鎧の宝玉が滅茶苦茶な点灯を繰り返すようになり、奴の体から感じていたドラゴンの力が消失する!

「そうか……白龍皇の光翼の機能をオーバードライブさせたのか」

そう、アザゼルの言う通りだ!

過剰な迄に処理しきれない力を奪い、同時に過剰な迄に力が吐き出される。

結果、白龍皇の鎧の機能を停止させたのさ!

『ヴァーリ!一度体勢を立て直せ!このままではっ!』

「わかっーーーーー」

「させるかよおツ!」

俺は左手のオーラを薄く、極限まで研ぎ澄ます。

《Explosion!》

「赤龍帝の聖剣ツ!!」
ウエルシユ・エクスカリバー

アスカロンの波動を込めた赤龍帝の聖剣、喰らいやがれえ!!

「ガッーーーーーツ!!!」

赤龍帝の聖剣を諸に受けたヴァーリの鎧はいとも簡単に消滅し、校舎の壁に叩きつけられた！

「まさか……アスカロンの波動を、今の手刀に？」

「恐らくは土壇場で思い付いたんだろうな。けどとんでもねー才能の塊だな」

そうだ、今の一撃にはアスカロンの波動も混ぜたのさ！

だからヴァーリの鎧も呆気なく消滅したのさ！

ヴァーリは血ヘッドを吐きながらも立ち上がった。

「フフツ、俺がここまで追い詰められるとは……流石は、俺のライバル……ッ！」

だが次の瞬間にはもう鎧が再生される！

なんつースタミナだ……って、

「何かよ……何時もよりスタミナの消費が激しくないか……？」

そう、何時もより魔力やオーラの消費が多いんだ。

くそっ、このままじゃじり貧だ……ん？

「これは……」

刹那、俺の中にある光景が映った。

……物は、試しだなッ！

「へっ、だったらその目かつぽじってよく見とけ!! 『パニシング・ドラゴン白い龍』アルビオン!そして
ヴァーリ!貰うぜ、お前達の力アツ!!」

ガキンツ!!

俺は右手の甲に填められた宝玉を叩き割り、そこへ白龍皇の宝玉をぶちこむ!!

さつき、俺の頭に思い浮かんだのは、木場の聖魔剣。

そう、不可能な筈の現象が先日のコカビエルとの戦いで起きた。

——なら、奴等の消失の力を、取り込めるかもしれない!!

右手に嵌め込んだ宝玉から、白いオーラが発生し、俺の肉体に——想像を絶する
痛みが伝わって……………ツ!!

「うがああああああああああつ!!!」

……ドライグツ!!

「そうだツ!!これぐらい、この状況も!チャンスに塗り替えるツ!!だから……俺を否定するな、消失の力よ!俺もお前を否定しないツ!!お前の力も……俺の希望だあああああつ!!!」

刹那……

《Vanishing Dragon Power is taken!!!》

俺の右手が真つ赤に……ゲフン、眩い白い光に包まれ、同じく真つ白なオーラが包む!

そして……俺の右手は白い籠手に変わっていた!

「へへっ……『ディバイディング・ギア白龍皇の籠手』完成ツ……てか!」

でも赤い鎧なのに右腕だけ白いから、結構不恰好だな……まあ良いや!

『有り得ん！こんなことは有り得ない！』

『ハア、ハア……言つたろ。うちの相棒は常識の物差しで計れないって』

何時そんな事言つたんだお前!?

まるで俺が非常識な奴みたいじゃなか!

『まあ良いじゃん。だが確実に寿命を縮めたぞ。いくら悪魔が永遠に近い時を生きるとしてもだ』

「云千万年も生きるつもりはねーよ。……最低千年かな?」

『充分過ぎるわ』

「喧しい! 兎に角ヴァーリ! これでお前の力をー!」

パチパチパチ。

……ん? 俺、何でヴァーリに拍手送られてんの?

「面白い! 面白いよ兵藤一誠! ならば俺も、白龍皇の真の力で答えようツ!!」

ヴァーリは空中に浮かび、手を大きく広げた!

／(o^o)／オワタポーズ………? ?

「何だ? ダークシンクロでもする気か?」

《Half Dimension!》

宝玉の音声と共に眩いオーラに(また)包まれたヴァーリが眼下に広がる木々に手を

向けるとーーーー

「なっーーーー!!?」

木々が一瞬で半分になった!?

まさか……………

「周囲の物体ーーーーつつか質量まで半分にすんのかよ!？」

その言葉は多分間違いない。

事実、あれよあれよと周囲の木々が半分に圧縮されていく!

どうすんだよオイ!?

すると、

《Half Dimension!》

『く〜』

奴の質量半減に釣られるようにして俺の白龍皇の籠手から音声が届いたかと思
うと――

ゴゴゴゴゴゴゴツ!!!

「うおおおおおおお!!」

な、何か勝手に質量半減の力が発揮されやがった……ッ!?

って、駒王学園の校舎まで圧縮されてる!!

このままじゃ部長達まで……ッ!!

「なっ……!!」

『バカな………白龍皇の真の力まで発動させたのか!?!』

『いや! 恐らくそっちの力に触発されて発動しちゃった様だな! 相棒よく聞け!』

「何だ!?!」

次にドライブから発せられた言葉は、信じがたい物だった!!

『このままじゃ学校だけじゃなくな！リアス・グレモリー達のおっぱいまで半分こだぞ
!!』

.....な、

「何だとおおおおお!?」

ソイツは死活問題だ！絶対に止めないと!!

「ふんぬうううううううつ.....!!ダメだ、止まる気配がないっ！」

ドライグ、助けて！

『無茶言うな！白龍皇の力は俺の管轄外だ！』

役立たず!!

くっそー!!.....って！

「俺の鎧まで圧縮されてる!？」

「このままじゃマジでヤバイ!!」

「何とかしなきゃ……………ツ!!」

《Wizardragon Operation!》

すると、新たな音声が鳴り響いたかと思うと、急激に質量半減の力が弱まった。

「……………へ?」

『兵藤一誠、この力は俺が内側から抑える!その隙に漏れているオーラを抑えろ!』
「この声は……………ドライグとも違う渋い声……………」

「ドラゴン!?!」

普段は俺のアンダーワールドで寝ているファントム、ドラゴンだった!

「で、でも何で……………!!?」

『勘違いするな、ただの気紛れだ!それに…………お前を破滅させるのは俺の力だ!!ウエルシユドラゴン!ドラゴンのオーラなら抑えられるだろ!今うちにやれ、さつさと!』

『命令すんなボケ!』

『何だとカス!』

『やんのかグータラ!?!』

『上等だスツトコドツコイ!』

『パスタ!』

『滝坪!』

『ボーリング!』

こんな時に喧嘩するなよお前ら!?

つつーかさっきのしりとの続きなら明日以降やれ!

「うおおおおおッ!!!」

「半減のオーラが、静まっていく……………!?!」

「イツセーさん……………」

ドラゴンの協力のお陰で、何とか抑えられたぜ……………!

向こうも影響受けてたみたいでへロへロだけだな。

こっちはそれ以上にへロへロだよ……!

ただどヴァーリは何かを企む様にほくそ笑む。

「……アルビオン。兵藤一誠ならば、白龍皇の『ジャガーノート・ドライブ覇龍』を見せるだけの価値があると思うだろう?」

「ヴァーリ、この追い詰められた状況でそれは無謀だ。無闇に覇を唱えれば、ドライブの呪縛が解けるかもしれない!」

「願ったり叶ったりだ、アルビオン。……我、目覚めるは、覇の理に……!」
 な、何だ? 覇龍って……しかも何か唱えてるし!

『自重しろヴァーリッ!! 我が力に翻弄されるのがお前の本懐か!?』
 おおう、アルビオンが怒ってらっしやる。

何もしないなら今のうちに……!

と思つたら、俺達の前に誰かが舞い降りた。

……見た感じ三国志に出てきそうな男だ。

「ヴァーリ、迎えに来たぜい。つて、ボロボロじゃねーかい」

……何か、場に似つかわしくない呑気な声だな。

ヴァーリは不機嫌そうに口許の血を拭いながら立ち上がった。

「……何の様だ、美猴」

「それは酷いんだぜい？ 相方がピンチつつーから遠路はるばる来たつてのによろ？ 北のアース神属と一戦交えるからさっさと逃げ帰つてこいつてよ？」

「……そうか、もう時間か」

何勝手に話し込んでんだ？

「おい、誰だその猿顔」

「猿顔言うない！ 俺たちは美猴……闘戦勝仏の末裔だい」

は？ とーせんしょーぶつ？

「ま、この名前なら分かるかもな？ 孫悟空つて」

……孫、悟空？

「『カカロットオオオオオオオオ』
『カカロット言うない！』
『!!!』」

「や、もうメンドクセーからカカロットつて呼ぶわ」

「ウツキーツ!! 俺たちは美猴だい!!」

「……それより早く行くぞカカロツ……美猴」

「ヴァーリイイイ!? お前は信じてたのにく!!」

うわー、友達? のヴァーリにも間違えられたよ美猴。

……………あ、俺のせいか!

「ま、そんな訳で、次会う時まで宜しくな! 赤龍帝」

「お、おう」

何かフレンジリーなテロリストだな……………つて!

「逃がすかー!?!」

止めを刺すべく一歩足を踏み出した途端、鎧が解除され膝を付く。

くそつ、こんな時に……………つ!

『無茶するな、相棒。お前は自覚してる以上に疲労している。今戦うのは無理だ』

そんな事言っても! 今が倒せるチャンスかもしれないんだぞ!?

だがあれよあれよと言う間に、美猴ーもといカカロツとヴァーリは足元に出

現した黒い穴に吸い込まれていく。

「そう急かすとも君が強くなればまた会える。では、次に戦う時を楽しみにしてるよ。

兵藤一誠」

「じゃーな赤龍帝! 今度は俺っちと戦ってくれい!」

その言葉を最後に、白龍皇は孫悟空と共に闇に消え去った。

MAGIC35 『激闘の果てに』

旧魔王こと白龍皇のヴァーリが、後からやって来た美猴……もといカカロットと共に去ってからは大変だった。

主に半壊した校舎（無論原因は俺）や折れたり半減した木々（これも俺、一部ヴァーリ）の修復や、負傷者の回復………うーん、困ったことしてくれたよ。アイツ等も。

『一部お前のせいだろ』

『と言うか半分以上はお前のせいだろ』

……返す言葉も御座いません。

んで、現在はアーシアの神器に癒してもらってる。

ああ、疲れが取れるぜ………。

「大丈夫ですか？ イッセーさん」

「うん。大分楽になったよ」

「しかし凄いオーラだったぞ、イッセー。改めて惚れ直したよ」

「んなっ！」

コイツ、よく臆面もなくそんな恥ずかしい事を……！

「…ゼノヴィアのこの積極性も見習わなきゃね」

「……そうですわね」

な、なんか対抗心燃やしてるよお姉様方！

……つと、何やらサーゼクス様達が話し合ってるな。

「さて、私は一度天界に戻ります。和平の事や、『禍の団』についての対抗を講じねばなりませんしね」

「すまなかつたミカエル。会談の場を設けた我々としては不甲斐ないばかりだ……」

「そう責任を感じないで下さいよ、サーゼクス。私としては三大勢力が平和の道を歩めるのが何より嬉しいのですから」

「ま、納得できねえ配下も多いだろうがな」

うわ、皮肉。

だがミカエルさんはそれでも笑顔で応えた。

「それは仕方ありません。長年憎み合つて来たのですから……ですが、これからは少しずつでも変わっていくでしょう。では私はこれにて——」

「あ、あのー！」

俺は立ち上がってミカエルさんを止める。

「何でしょう、兵藤一誠君」

「一つだけお願いがあるんですけど……」

「時間がありませんが、一つだけ聞きましよう」

これだけはどうしても聞いて欲しいんだ。

「アーシアとゼノヴィアが祈りでダメージを食らうのは『システム』って奴のせいなんですよね？」

「ええ。……それが何か？」

「……アーシアとゼノヴィアのダメージを無くすこと、出来ませんか？」

コレが俺の願い。

苦笑いしながら見てたけどさ、やっぱりお祈りぐらいさせてやりたい。

悪魔だけど、信じるものは自由でも良いだろうし。

「……っ」

ミカエルさんは目をパチクリさせて驚いていた。

が、直ぐに小さく笑うと、うんうん頷いていた。

「……分かりました。二人分位ならば、何とかなるかもしれません。二人は既に悪魔ですし、教会本部に近付く事もないでしょうからね。アーシア、ゼノヴィア、貴女達に問います。神は不在です。それでも祈りを捧げますか？」

ミカエルさんの問い……だが二人は迷うことなく頷いた。

「はい。主がおられなくとも、私はお祈りを捧げたいです」

「同じく。主への感謝……そして、ミカエル様への感謝を込めて」

二人の答えに、ミカエルさんは微笑んだ。

「分かりました。本部に戻ったら、早速そうします。ふふふ、祈りを捧げてダメージを受けない悪魔が二人いても大丈夫でしょうからね」

よっしや！

『よく言ったな相棒！』

『フン、本当にお人好しだな。貴様は』

お人好しで結構……おっと！

「イツセーさん！」

アーシアは涙を溢しながら抱きついてきた。

「へへっ、これでお祈りし放題だぜ……神様いないけどね」

「……イツセー、ありがとう」

「気にすんな、これからバンバン祈れよ」

ゼノヴィアの頭を撫でてやると、俯いて顔を震わせた……アレ？怒らせちゃった？

「……………もう、我慢の限界だ！イツセーッ！」

「は……………んツ!？」

「……………っん」

あ、ありのままに起こった事を話すぜ!

ゼノヴィアが顔を震わせたと思うと、顔面にゼノヴィアが度アップで映ってた!

そして唇に何やら柔らかい感触が……………って!!

き、キスされてるうー……!!

周りの人達が固まる中、ゼノヴィアは名残惜しそうに離れた。

そして唇を撫でて、恥ずかしげに呟く。

「ふふっ、私のファーストキスだ。少し恥ずかしいな／＼」

「な、なななななッ!／＼」

ふ、ファーストキスカよ!!

「もう! イッセーッ!」

「いや部長俺は全然悪くないですってー！！」

怒り心頭の部長から素早く距離を取るッ！

……でも、ゼノヴィアの唇も、柔らかかったなあ。

「俺は和平を結ぶ。墮天使は今後一切天使、悪魔と争わない！不服な奴は去って構わない。だが！次に会うときは遠慮なく殺す！着いてきたい奴だけ、俺に着いてこいッ！！」

『我等が命！滅びの時までアザゼル総督の為にッ！！』

おお、アザベルスゲエカリスマ性誇ってんなあ。

んで、現在はごく少数の人数だけになった。

「じゃーな、兵藤一誠。お前さんとその僧侶も今度鍛えてやんよ」

ゑ？何を仰ったの、あの総督……………

「白は力、赤は希望ー……どっちも分かりやすい程に、純粹で単純だな」

それだけ言うと、アザベルは今度こそ去っていった。

~~~~~

『三大勢力が和平を……………』

月が差し込む華奢な寝台。

そこにいるのは、フアントム達の長、ワイズマン。

『ぬうつ……………』

ワイズマンの胸のコアが輝くと、眼前には黄色い魔宝石が。

『結局お前達は、神に縛られた俗物と言うわけだ……………』

そう呟くと、ワイズマンの背中からは————灰色の翼が生えた。

~~~~~

さて、白龍皇ヴァーリとの激闘から早数日後――

「つてな訳で、今日からこのオカルト研究部の顧問になったアザゼル先生だ。ま、総督呼びでも構わんぜ？」

何故かオカ研の部室には、スーツを着崩したアザゼルがいた。

「……何故貴方がここに？」

ため息を吐きながら尋ねる部長。

「んあ？セラフォルーの妹に頼んだらこの役職だったって訳だ」

「……そういや、その片腕どしたんすか」

そう、アザゼル……先生の腕は自分で切り落とした筈だ。

……まさか、生えてきたのか!?

「生えてねーよ！義手だよ義手！ロケットパンチも出来るし、小型ミサイルも付いてるぜー」

おお！無駄にロマン溢れてる！

『とんだロマンチストだな!』

何!?

「オイオイ、ZEXALごっこは家でやれ。兵藤一誠、白龍皇の籠手は機能するのか?」

「…ああ、それなんすけどー」

カッー

俺の言葉が続くより速く、俺の右手には白い籠手が発現した。

「何か、時たまこうやって現れるんすよ。オーラは抑えてるんすけど……」

「ま、元々は違う性質だからな。力は使えるのか?」

「……………多分?」

でもあれから使ってないし。

「ふーむ、そこは要修行次第って事か……………」

「で、でも、それはイツセーの寿命を削るんじや……………」

部長が心配そうに言うが、アザゼル先生は否定した。

「大丈夫だろ。常に力が解放されてる訳じゃないからな。それにキャパシティ外の半減をしなけりゃ体力の消費だけで済むだろうからな」

ふーん……………つて、抑えなきやな。

俺は右手から溢れる魔力をドライグの魔力で覆い、元の腕に戻す。

「オーラの使い方も中々達人だな。こりや鍛え甲斐がありそうだぜ！」
嬉しそうだな。

「それに、赤龍帝の籠手の禁手も未知の領域に目覚めかけてるからな……………今度の夏休みでそれを目覚めさせる！」

未知の領域、か……………面白そうだな！

—————第4章：エピローグ

さてさて、時系列は夏休み直前の1日。

「こんにちは」

「今日からお邪魔するよ、イツセー」

俺んちに朱乃さんとゼノヴィアが大荷物を持ってやって来た。

朱乃さんは俺を確認すると、

「イツセー君！」

直ぐ様抱きついてきた！い、いきなりっすか!?

突然の事でカチコチになる俺に対し、朱乃さんは、

「朱乃、只今貴方の元に到着しました、イツセー君……」

潤んだ瞳で見詰めてそう言ってくるのだ！

き、きゅんってしちゃうよ………！

『ハートのキュンキュン、止まらないだな！』

『寧ろドキがムネムネじゃないか？』

大体合ってる！

「……あ、朱乃とゼノヴィアも同居する事になったの。お、お兄様の提案でね。後日、小

猫も呼ぶそうよ………」

何やら遺憾そうだが……一番遺憾なのは俺だと思う。

でも女の子一杯なのは嬉しいけどね！

『『全然遺憾に感じてないだろお前』』

ハモって突っ込むなよ！

『『ってハモるな!!』』

ハハツ、仲良しだな。

『仲良くない……………つてだからハモるな!!』』

まあ、ほつといても大丈夫だな。

おつちゃん？余裕で快諾したよ。

で、朱乃さんは俺にべつたり抱きついて離れないんだ！

くうく、おっぱいの感触とか最高だぜ！

でも、部長とアーシア、ゼノヴィアの視線が痛いです…………。

「イツセー君、イツセー君♪私と今夜、一緒に寝ましょう？うふふ、一度ベッドの中でイツセー君と一夜を共にしたかったの♪」

「や、やったぜええええ……………イテテテテ!!アイタツ!!」

喜びで吠えると、部長とアーシアにほつぺたを引つ張られ、ゼノヴィアからは鼻つ柱にデコピン食らった……………痛い、痛いよ皆。

「でも、そろそろこのお家も狭くなつてきそうね……………決めたわ」

え？何をです？

「夏休み中に改築するわ。お兄様にも連絡を取ってみるわ」

ええつ、改築う（；。Ⅱ。）!?

ちよつ、そんな勝手に……………まあ、良いか。

『オイ……っつて、だから被るな!!』

とまあ、そんなこんなで一学期は幕を下ろしたのであったー。

「うーん、この街に帰ってくるのも久々だなあ！アイツ、元気にしてつかないかな？まあ、ともかくにも、先ずは宿探しだな！」

『ピーツ！』

「おお、サンキューグリフォンちゃん！」

そして、夏休みに俺はある男と再会する事を、この時は知らなかった。

次回、D×Dウィザード

イツセー「な、何じやこりやあああッ!?!」

茂「イヤー、ビックリだなく。気付いたらイツセーの家と合体してるなんて」

???「おはようございます、oooooooo様」

ハイスクールD×D wizard 新章 冥界合宿のヘルキャット

MAGIC37『家、増築ウ!?!』

イツセー「今年も残すところ後僅か!」

ドライグ『作者は休みを利用して出来る限り投稿するぜ!』

ドラゴン『まあ、期待せずに待っててくれ』

『さあ、次回もショータイムだ!!』

MAGIC番外編 『メイドさんと、イチヤイチヤデート
!?!』

ピンポーン

「ん？誰だろう……………」

白龍皇ヴァーリとの激闘から数日後の兵藤家。

この日あんまり鳴らない筈のインターホンが鳴り響いた。

「郵便かしら…?」

「あ、部長。俺が行きますよ」

「お願いするわ、イツセー」

部長が出ようと立ち上がったが、部長のお手を煩わせる訳にはいかなないので俺が出る
んんん。

取り合えずさつきまで触っていたV i t aを置いて玄関に向かう事に。

「宇宙を貫く雄叫びよ！遙かなる時を遡り、銀河の源より蘇れ！顕現せよ！そして我を

勝利へと導け!! N o . 1 0 7

ギョラクシーアイズ・タキオンドラゴン
銀河眼の時空龍ツ!!!」

「はう！ゼノヴィアさんノリノリです！」

「あらあら、ですがRUMがありませんわね」

「コレが俗に言うミザチャンスなのね……ッ！」

おいゼノヴィア、勝手に人のタッグフォースやるなよ！

それに部長、その知識は何処から仕入れたんですか!?

『間違つてないだろ』

『蘇生条件満たしてないアレか……』

使いどころがだよ！

つて、早く出ないと……！

「す、すみませーん………つて」

俺は固まった。

何故かって？

その人は別に借金取りとか新聞勧誘とかでもなかった。

黒を基調とした所々に銀の縦縞が入ったカジユアルな服装に、服越しにも分かる（俺が出会った女性の中で）トップクラスのスタイル。

そして、どんな雪景色にも負けない程に輝く綺麗な銀髪。

「こんにちは、イツセー様」

グレモリー家のメイド長、グレイフィアさんが私服姿で微笑んでいた。

~~~~~

「ぐ、グレイフィア?!」

グレイフィアさんが来たことを知るや否や、部長は慌てて佇まいを直していた。

因みにアーシアと朱乃さんはお茶汲み、ゼノヴィアはテーブルを拭いていた。

「大丈夫ですよ、お嬢様。今日は休日なのでプライベートですから。ですが、奥様が元気  
にしているのかご心配されてましたよ」

「そ、そう……………また後でお義姉様に連絡しなきゃ」

お義姉様って……………サーゼクス様の奥さんか。

一度会ってみたいな。

「どうぞ、グレイフィア様」

「ありがとうございます」

グレイフィアさんは朱乃さんから出されたお茶を優雅に飲む……………凄く綺麗だな。

何と言うか、お茶飲む仕草一つで見惚れちゃった。

『おい相棒。死にたくなけりゃ絶対それ口にするな』

『でないと明日の日は拜めんぞ』

何その死亡予告、怖いんですけど！

まあ、こんなキザったらしい台詞言わんけども。

『すげえブーメラン』』

何だと!?

「でも休暇で此方に来るのは珍しいわね。何処か用事でもあるの?」

「用事と言えば……………用事です、ね」

そう言うのとグレイフィアさんは気恥ずかしそうにしながら俺と目線を合わせる

……………と同時に、4方向からもすんごい視線を浴びせられた!

俺が何を仕出かしたと言うんですか、皆さん……………?

『自覚がない分更に質が悪いな』

『宜しい、ならば死刑だ』



『具体的な内容は？』

『相棒がガンプラの箱をカモフラージュにして隠してあるエロ本を燃やす』

『よし、直ぐ様執行だ』

よしじゃない！

俺の秘蔵コレクション燃やさないで！アレないと生きてけないよ俺！

「リアスお嬢様。今日一日…イツセー様をお借りしても宜しいでしょうか？」

「イツセーを……？」

んん？俺の事か？

『女が男に用があると云えば二つしかないだろ』

『死ぬか搾り取られるか、だな』

選択肢ねえ!!

アツチの意味でも死ぬのかよ!?

「はい。その………イツセー様と、で、デートをしてみたいと思ひまして」

「………へ？」

全員が驚いた声を上げたと思ったら、

「うええええええつ!？」

今度は俺の悲鳴が家に轟いた。

「じゃ、じゃあ、行きましょうか」

「はい……宜しくお願ひいたします。…イツセー」

くうく、グレイフィアさんの呼び捨てとは、男冥利に尽きるぜ!

それに言い淀んだ所もナイスです!!

とまあ、今日俺は一日だけグレイフィアさんの彼氏になった。

んで、当然部長達は抵抗したけど、何処からか現れた俺の使い魔にして龍王のティア  
マツトことティアにたしなめられ、承諾した……と言う訳だ。

ホントティアにはお世話になってるなく、今度お礼しないと。

「イツセーの手……大きくなりましたね」

「そ、そうっすか？」

因みに今はデートなので手を繋いでる。

でもグレイフィアさんの手凄く綺麗なんだよなあ。それに良い匂いもするし……釣

り合いそうもないよ、俺じゃ。

「はい。初めて会った時よりも、大きくて、遅しくなってます」

「な、何か照れますね……」

こんなな女性に褒められた事ないから、なんかむず痒いな……嬉しいけど。

「私も含めて、この手が、人々の希望を守ってるのよね………素敵な手」

「っ……／／／」

や、やべえ……真顔を保てない！

褒めちぎりで顔真っ赤だ、俺！

『凄い惚れ様だな』

『相棒が幼少期に建てたフラグだからな。これはリアス・グレモリー達にはない利点だ』

『……時に聞くが、貴様は兵藤一誠が誰と添い遂げようとも構わんのか？』

『相棒を見捨てずに、過去も受け止めてくれる奴なら………まあ、相棒が選ぶ女なら俺

は否定せんがな』

『……フツ、ただの親バカか』

『うるせえ』

なんて会話をしてるのも気付かず、俺はグレイファイアさんの嬉しそうな横顔に、見惚れてた。

何はともあれ、俺達は町のショッピングモールへとやって来ていた。

グレイファイアさんは色んな店があるのに興味津々なご様子。

まあこないだ来たときはサーゼクス様の付き添いだったからな。

「イツセー、あのクレープと言うのは……?」

「え?」

あー、もしかして冥界にクレープってないのか?

「ホットケーキの仲間ですよ。食べてみます?」

「……はいっ」

あ、ダメだ。可愛すぎる。

一瞬で俺の脳は吹っ飛んだ。

「……………そ、そうだ! 味は何か良いですか?」

「……では、このイチゴと生クリームのクレープで」

「分かりました！すいませーん！イチゴと生キャラメルのクレープ一つずつで！」

「ハイ毎度！」

一分後には、クレープが出来上がり、その辺りの椅子に座りながらグレイフィアさんはワクワクを隠しきれずに、でも上品にかじりついた。

「……………美味しい」

「でしょ？んじや俺も……………うん、美味しい！」

久々だけど、やっぱり美味しいな！

プレーンシユガーも良いけど、たまにはね？

「あ、グレイフィアさん。クリーム付いてますよ」

「へ？」

「あ、取ってあげますね」

俺はグレイフィアさんの口の端に付いていた生クリームを指で掬い、舐め取る。

「くっつ／＼／＼」

グレイフィアさんは恥ずかしそうに少しばかり唸るけど、顔を上げると楽しそうに微笑んでいた。

「ふふっ、行きましようか」

「あ、はいー」

ここから先はダイジェストだけど、どれもこれもグレイフィアさんが可愛すぎた。それだけは言える。

服屋で様々な服を着て、俺だけでなく店員さんも見惚れた。

恥ずかしそうに「……似合ってますか？」なんて聞かれて、似合っていないとかほざく奴はいないと確信した。

いる奴は俺がウエルシュフルポッコしてやる！

本屋に行ったら、難しそうな哲学書やら意外なチョイスの料理本や恋愛本を買っていった。

どうも以前までの休暇は本を読んで過ごす事が多かった様らしい。

お昼ではファーストフードではなく、レストラン街で優雅にランチタイム。

グレイフィアさんはどんな仕草でも凄く丁寧な感じが現れて凄く好感が持てる。

そして何故だか「カップルパフェ」なる物が提供された。

だけど、何時どんな時でも、楽しい時間は終わりを告げる物だ。  
辺りはもう既に夕焼けに染まっていた。

「今日はありがとうございました。イッセー」

「いやあ、全然！俺で良ければ何時でもお相手しますよ！」

これは本音だ。

凄く楽しかったし、また行きたいとも思える程に充実した一日だったと思う。

「では、少しばかりのお礼を……………」

「イヤー、そんなの全然……………」

悪いので断ろうとした俺の言葉を遮るように、グレイフィアさんは俺に迫り、俺とグレイフィアさんの距離がゼロになる。

こ、これって……………キス？

うええええええっ!?

お、俺！また女の子にキスされてるううううつ

『やっぱりねー』

『どうせこんな締め方だと思ったよ……ったく』

や、柔らかい！柔らかいよ、グレイフィアさんの唇！

「……………んはあ」

グレイフィアさんは艶かしい声を上げて、唇を離れた。

状況がのめり込めず、未だ金魚みたいに口をパクパクさせる俺に苦笑いするグレイフィアさん。

「私のこの想いは……誰にも負けるつもりはありませんよ、イツセー」

「……………俺は」

本当なら、今ここでグレイフィアさんの、いや、皆の想いにも答えてやりたい。

でも、今の俺には無理だ。

「大丈夫」

何を言うべきか迷っている俺に歩み寄り、唇に人差し指を当ててきた。

「貴方がどんな闇を背負ってるのかは分からない……………でも、私もリアスお嬢様達も、イツセーの闇を聴いて逃げたりは、しません。何時か、貴方の口から聞きますから。」



その時まで、返事はしなくても大丈夫ですから」

「……………ホント、不甲斐ないよな。俺。」

女の子にここまで言わせて、何も答えないなんてさ。

「スミマセン……………」

「良いの。それに、今日はずっと貴方といれたから……………それだけで幸せ」

グレイフィアさんは笑顔で言うと、足元に魔方陣を展開する。

「では……………またお会いしましょう。イツセー様」

「……………はい！」

最後に飛びつきりの笑顔を見せると、グレイフィアさんはグレモリー家に帰っていった。

「……………」

俺は暫く、グレイフィアさんの言葉を繰り返し思い出していた。

『貴方がどんな闇を背負ってるのかは分からない。……………でも、私や、リアスお嬢様達も、イツセーの闇を聴いて逃げたりは、しないで。何時か、貴方の口から聞きますから。その時まで、返事はしなくても大丈夫ですから』

.....俺は、幸せになって、良いのか？

『相棒.....』

『.....』

少し胸がモヤモヤしながら、俺は帰路についた。

そして、部長達にキスをされたことが何故かバレ、『イチャイチャし過ぎ！』と全員に怒られました。

女心は、難しい.....。

## 第五章：冥界合宿のヘルキヤット MAGIC36 『家、増築う!?』

えー、皆さん。この世界では夏になりました。

そう言う訳で俺の高校生活も夏休みに突入しました。

皆さん、新年はどうでしたか？

え、メタい？んなことあどうでも良いじゃない！

俺？俺は現在、何でか動けないのさ。

んまあ時間は早朝、日課のランニングでも行こうかと起きたら両隣には何時もの様にリアス部長とアーシアちゃんが寝てた。

まあ、それは何時も通りだから何も言わないけどねー！そう！今、何者かがタオルケットの中をモゾモゾ動きながら此方に迫ってきてるんだ！

さつき起きたばかりだけど、この気配は見覚えがある！

そして先程からすんごく柔らかいナニかが当たってるんだよ！

皆も気になるだろ？その正体は——

「うふふ。おはよう、イツセー君」

黒髪の美少女、姫島朱乃さんのお出ました！

「お、おはよう、ごさいます……………」

俺はと言うと分かってても、おっぱいとか脚の柔かさに翻弄されてカチコチで動けないのが現状！

やべえ、流石は副部长……俺のツボを的確に突いてくるぜ……！

しかもだ、夏だからか、素っ裸なんだよおおお!!

だから柔かさとか何やら硬い凝りとかがダイレクトで伝わってガガガガ……！

「とーちやく」

そんなアホみたいな事をしている俺に構わず、朱乃さんは脳髓が蕩けそうな甘い声で囁くと、抱き付いてきた！

ああ、朱乃さん良い匂いだなあ……………。

ちゅっ……………

「……っ！」

い、今！不意討ちだけど、首にキスされたあああ!!

先日のグレイフィアさんのキスをスゲエ意識してしまっう！

朱乃さんの唇、肌でも分かる！柔らかいと!!

「…イツセー君のお体、凄く逞しいわね。私達に会う前からかしらっ？」

「そ、そうっすね……。以前からドライグと鍛えてました、から……。でも、気持ち悪いでしょ？」

寝汗とか掻いてる筈だから、絶対触ってて気持ちのいいもんでも無いだろうに……。

「そんな事ありませんわ。男の人の肌って、想像してた物より気持ちいいのね。それとも、イツセー君の体だから？」

「ど、どうでしょう……っ？」

「ねえ、イツセー君。私の体、気持ちいい？」

「は、はい！最高です！」

根っこがスケベな俺は正直に白状すると、朱乃さんは嬉しそうに微笑む。

「うふふ、嬉しいわ。この体、もつと楽しんでくれても良いんですよ？私もイツセー君の体、深く知りたいわ。……と言っても、怖いお姉さんが隣で寝ているから限界があるわ

ね。でも、バレるかバレないか、この瀬戸際が楽しくもあるわ」

た、楽しんでやがる！楽しんでやがるよこの状況を！

朱乃さん、Sを抑えてください！

朱乃さんはしかし狼狽する俺に構わず、身を起こして覆い被さった！

そしてどんどん顔を近付けてー！ー！って、コレは！

「このまま、時間が止まってしまえば良いのにね……………」

俺と朱乃さんの唇が重なると思ったその時——

「朱乃、何をしてるのかしら？」

あがつ……………！

もうこの場合声だけで分かるけど、一応振り向くと、我らがリアスお姉さまが不機嫌を隠そうとしない半眼で睨んでいた！

怖い！怖いよご主人様!!

だが朱乃さんは怖がる事なく俺と繋がった手を見せつけた。

それ、火に油注いでるレベルじゃないっすよ！

「スキンシップですわ。私の可愛いイツセー君と素敵な朝を向かえようと思ったので侵

入りましたわ。だって、独りのベッドは寂しいもの」

朱乃さんの一言——多分「私の」って所に反応した部長は片眉をつり上げる！

こ、これは間違いなくキレてる！

「私の」……？ 貴女、何時からイツセーの主になったの？」

ぶるぶる全身を震わせて部長は口を開く。

「主でなくとも後輩ですわ。後輩を可愛がるのも先輩の努めですし」

部長は顔を朱乃さんに近付けて怒りのこもった声音で言う。

「先輩……そう、そう来るわけね。——ここは私にとって聖域に近いわ。唯一絶対的な癒し空間なの。アーシアなら兎も角、他の者まで入れる訳にはいかないわ！ここは私とイツセーの部屋なのだから」

「部長、ここ）俺）の部屋ですからね！ 貴女の部屋は別にありますから！」

これだけは言わんと！ 部長の我儘発言は凄まじい影響力があるからな！

「あらあら、お嬢様は独占欲が強いですわね。ですが、あまり嫉妬が過ぎるとイツセー君に嫌われますわよ？」

「ツ……一度、貴女とは話し合わなくてはいけないわね」

うおおおつ！ 俺の自室で臨戦態勢は止めてください！

「あら、話し合う割には攻撃的なオーラですわね」

こっちもかーい!

俺が内心嘆くのに構わず、お姉さま方は枕投げで攻防を始めた。

って、朝っぱらから何してんですか!?

「大体ね!朱乃は直ぐに私の大事な物に触れようとすからイヤなのよ!」

部長の弁舌と共に枕が放たれ、朱乃さんの顔面にシユウーツ!超!エキサイティン!

等と内心騒いでると、朱乃さんはカツと目を見開いた!

「ちよつとぐらい良いじゃないの!リアスはケチだわ!」

落ちた枕を投げ返し、今度は部長の顔面にシユウーツ!超!エキサイティン!!

ああつと!部長、ちよつと涙目だ!今のモロに入ったもん!そりや泣くよ!

「この家だつて改築したばかりだし、朱乃の好きにはさせないんだから!」

遂に気品溢れる姿とか言動を彼方に投げ飛ばし、枕を再び投げました!

朱乃さんはそれを避けて、今度は俺の枕を投げた!

「サーゼクス様は眷属仲良く暮らしなさいと仰つてたわ!」

「ここは私とイツセーの家なの!お兄様も朱乃も私とイツセーの邪魔ばかりするんだも

の!もうイヤ!」

「だから部長!ここ俺の家ですつて!」

もういつそ清々しい迄の我儘発言ありがとうございます!俺の苦手な感じだけど、年



相応で可愛いです！ありがとうございます！

……………ん？改築？

俺はその言葉に引つ掛かりを覚え、枕を投げ合うお姉さま方を放つて部屋を見渡し  
た。

「あれ？俺の部屋……………こんなに広がったっけか？」

「そういや、ベッドもやけに大きくないか？だって、部長と朱乃さんがベッドの上で未  
だ枕投げしても余裕あるぜ？」

「こ、これって……………天蓋？」

嫌な予感として部屋を改めて見渡すと……………無茶苦茶広くなってる！

テレビも最新の薄型テレビだし！ゲームも最新機種ばつか揃ってる！

うわ！パソコンも最新だ！

俺はバツと外に飛び出した！

「何だこりゃ……………!？」

廊下が倍ぐらいのスペースに！階段も上下に……………って、俺の家は二階建てだった筈だ

！

俺は階段を駆け下りて、おっそろしく広くなった玄関を飛び出た!

「はあ、はあ、はあ……………なっ!」

俺の目線の先には、何とー

「何じやこりやああああああああああ!?!」

拜啓、天国の父さん母さん。

俺の家、倍以上の敷地に、六階建てになりました。

次回、D×Dウィザード

イツセー「冥界に?」

ドライブ 『こん中で一番相棒に近いのはグレイファイアかもな』

??? 「腹、減った……………」

MAGIC37 『野獣の再会』

ドライグ／ドラゴン 『俺達一才出番なかったじゃねーか!!』

# MAGIC37 『野獣の再会』

えー……朝の我が家増築事件から何とか気を持ち直したんだけどな、その………

「いやー、びっくりしたよ。まさか朝氣付いたら面影堂がイツセーの家の隣に建ってるなんてなあ」

そう、何故か俺の家の隣におっちゃんの家が建っていた。

悪魔の技術力は世界一イイイイ！………なのか？

『一番凄いのはそれに対して微塵も動揺してない茂殿だよな』

『確かに』

それは思うよ、ホントに。

おっちゃんもう少し驚いてくれ……。

他の部員達は気にせず黙々とおっちゃんの作った朝食を食べてる。

まあ、十中八九サーゼクス様達だろうな。

でもさ、六階もいらないだろ!?

さつき聞けば地下とかプールとかあるし！

『風呂もえらく増えたもんな』

『だが結局は混浴なんだろうな』

うっ……………否定できない。

根っこがスケベな俺は否定できずホイホイ混浴になるんだよなあ……………嬉しいけ

どさ、男として見られてないと思うと複雑だよ。

『お前がスケベなのが悪いんだよ』

何だと!?

「しかしイツセー、良かったなあ。女の子がこんなに増えて」

「そ、そう?でも下僕間での交流の為だよ」

朝朱乃さんも似たような事言ってたし。

「とは言え、これで天国の晴人達も喜ぶよ。叔父としても嬉しいさ」

「……………あんがと」

……………おっちゃんのこういう所、変わらないや。

「…で、イツセー。本命は誰なんだ?」

「ブフツ!」

み、味噌汁が気管に……………っ!

なんつー話題投下してんだよ、おっちゃん!?

ホラ！皆の目が怖いもん！

小猫ちゃんも目キラキラさせてるし！

「本命って……………」

『まあこん中ならグレイフィアが一番近いかもな、正妻には』

「ドライグ!?!」

やめてくれよ！皆の目が鋭くなったよ！俺を射殺さんばかりに睨んでるよ!?!

『あの銀髪メイドか。確かに、兵藤一誠は少し気になってる様だな。コイツのアンダーワールドにも映る位だ』

「マジで!?!」

俺、そんなにグレイフィアさんの事気になってるのか……………?

「イツセイさん、私ではやはり駄目なのですか……………?」

あ、アーシアちゃん！そんな悲しそうに目をうるうるさせないで……………凄く罪悪感が！

『ウーム、恐らくは母性だろうな』

「母性?」

全員の声ハモった。

『相棒は幼い頃に両親を喪つてゐる。幾ら隠してもやはりその年頃は母性や父性に甘えたい所もある。だが相棒は両親を亡くしてから独りで生きてきた。経済的な意味ではなく、精神的な方だな。だが本心では、甘えたいと言う願望も少なからずあるからな』  
「そ、そうか？そんな事は……」

『そんなもん自覚できる訳ないだろ。無意識での願望なんだからな。まあ、そう言う訳だ、相棒は母性の強い女に惹かれやすい……………多分』

『確信持てよボンクラ』

『何だと殺るつてのかこの粗チンヤロー』

『上等だ非童貞（笑）』

『俺は真性の非童貞だああああ!!!』

おー、相変わらず仲のよろしいこつて。

『仲良くねえよこの真性童貞が!!』

んだとコラアアア!!

『……………えつと、まあその何だ。グレイフィアを除くなら姫島朱乃が最有力、か?』

……………そうかも。朱乃さん、凄くお母さんつて感じだもん。

それを聞いた朱乃さんは誇らしげになり、部長達に俺は頬つぺたを引つ張られた。

何故だ……………？

~~~~~

「冥界に？」

朝食を食べ終えた後、俺達オカ研メンバーは何故か俺の部屋に集まり、夏休みの予定を部長から聞いていた。

「ええ。毎年実家に帰るのだけど、今年は眷属のメンバーも増えたからね」

「へえ、恒例行事なんですね」

「こうやって正規のアレで冥界行くななんて初めてだな。」

「冥界か……………よし！アーシア、死んだつもりで行こう！」

「は、はい！」

や、君達、何？死んだつもりって？

別にそんな気持ちはいらねーから！

「そう言えば、イツセイ君は冥界に行ってたんだっけ？」

「ん？まあ……………でも山にしか行ってないしな」

「さ、流石イツセー先輩ですうう！僕には出来ませええん！」
ギヤスパー、いい加減度胸付けような。

って、誰か玄関から入ってきたな……………

「どうかしたのかい、イツセー君」

「……………成る程ねえ、あの人が考えそうな事だな」

『???』

まあ、皆わかんねーよな普通。

「よ、俺も冥界に行くぜ」

『ツ!?!』

ほら、我らがオカ研顧問の登場だ。

「アザゼル……………何時からこの家に!?!」

「ついさつき普通に玄関から入ってきたぜ？見たところ赤龍帝しか気付いてなかったっばいな」

「イツセー、どうして言わなかったの?」

「や、黙ってた方が良くないかと思ひまして……………」

「じゃなきや面白くない、とか言いそうでもないこの総督先生は。」

「で、先生も行くんですね」

「ああ、向こうでサーゼクス達と会合があるんだ。それで、お前らをもつと鍛える」

ほお。

「鍛える？」

「ああ、確かにお前達は個々の力は凄まじい。だがまだ伸び代があるからな。個々の強化トレーニングだ」

「おお、楽しそう！」

「墮天使総督の特訓か……どれだけ強くなれるかな!？」

「イツセー先輩、目が輝いてます……」

「小猫ちゃんにボソリと突っ込まれる……どうしたんだろう、小猫ちゃん。何か元気ない感じだけと……」

「んでリアス。冥界に行くのは何時からだ？」

「一週間後よ。皆にも準備は必要でしょうから」

「了解つと。あ、イツセー」

「はい」

何だ？

「あのヴァーリとの戦いで見せた鎧姿……アレを夏休み中に覚醒させてやるからな。覚悟しとけよ?」

「……はあ」

とは言うけど、あの時の事はあんまり覚えてないんだよな。

まあオーラとか魔力の減り方は尋常じゃ無かったけどさ。

「イツセー、特訓には私も付き合うからな」

「ティアア!」

今度はティアアまで!

「龍王との特訓か………俄然燃えてきたぜ!」

これは冥界が楽しみだぜ!

と、この時の俺は予想して無かった………まさか、そんな気持ちを一瞬でどん底に叩き落とす程のサバイバルだとは。

とまあ、何は兎も角、久し振りにドーナツを買いに出掛けてます。

「買うのも久し振りな気がするな〜……………うお!？」

あ、ありのままに起こった事を話すぜ!

俺は気分るるんでドーナツを買いに出掛けてたら、背中にリュック背負った人が倒れてたんだ!

何を言ってるかわかんねえと思う g (r y

「ちよっ! 大丈夫ですか!？」

「うう〜ん……………腹、減った……………って、その声は……………」

「ん? もしかして……………」

そう言えば、何だか初めて会った気がしない……………あ!

「い、イツセーじゃねーか!!」

「……………吼介!? 吼介か!」

俺の中学時代の友達、立神吼介————運命の、再会だ。

次回、D×Dウィザード

吼介「お前も変わったなあ」

イツセー「くっ………毒、か!？」

マンティコア『何者だ、貴様は!？』

MAGIC38『野獣、吼える』

《L・I・O・N！ライオン！》

仮面ライダービースト『さあ、食事の時間だ!』

MAGIC 38 『野獣、吼える』

今度、冥界に行くと言われた俺は、その前に中学時代の友達、立神吼介と出会った。

「お前元気してたかよ!」

「あつたり前だろ! お前も元気そうで何よりだよ、吼介!」

そりゃ嬉しいよ、何せ久しぶりの再会だもんな!

「そういや、学校は休みなのか?」

「ん? ああ……実はさ、今度駒王学園って所に転校する事になったんだよ」

「俺と一緒にの学校じゃん!」

「へえー!? マジかよ!」

「でも何で転校してくんだ?」

しかも二学期という中途半端な時期に……?」

「駒王学園ってさ、考古学とかの授業も受けれるらしいからさ。善は急げってね!」

「ああ〜! そういややってたな……」

でも受けてる奴殆んどいなかったと思うけど……まあ良いか。

「で、イツセー！」

「どした？」

「……………何か、飯食うところ、ない？」

吼介は腹を押さえて踞った。

「そういやお前空腹で倒れてたな……………近くにドーナツ屋あるから、行くぞー！」

「おお！ドーナツ……………」

それを聞いた吼介は目を輝かせて立ち上がった。

「よーし！早速行こーぜイツセー！！」

「オイ待てって！」

相変わらず猪突猛進だな、コイツは…………。

「いらつしやーい！あらいツセー君！」

「ちわーっす、店長！」

行くのは久し振りだからな。店長の顔も懐かしい…………。

「あー？そつちの子は？」

「ああ、俺の友達です」

「ひえー、美人……」

ま、そう言いたくなるのも分かるよ。

でも俺がガキの頃から見た目変わってないような気もするんだよな………まあ、考えたら負けか。

「で、どうするどうする？ 今日には新作のフランクドーナツがあるよ！ ドーナツの間にソーセージを挟んでるの！」

「へえ、ハンバーガーみたいですね」

色々考えてるなあ。

「じゃあ決まりね！ 今日のメニューは……」

「プレーンシユガー！」

これだけは譲れない！

そう断言すると、店長はガツクリ肩を落とした。

「もうっ、やつぱり食べてくれないのね！」

「やー、だってこのプレーンシユガーが一番ですもん」

『そんなんだから何時まで経っても童貞なんだよ』

んだとコラアアアア!?

「イツセー、何一人でキレてんだ？」

「や、キレてないっすよ」

「何年前のネタだよ……あ、俺その新作ドーナツで！」

「毎度！」

俺達はドーナツを受け取ると、席に座り思い出話に浸った。

「そーいやお前、まだ独り暮らしなのか？」

「ん？いや、今はホームステイで色んな人と住んでる」

「ホームステイで？」

「ああ。で、そっちもか？」

「おう。親父もお袋も忙しいからな、仕送りだけしてもらってる」

「大変だな……」

そーいや昔から思ってたけど、吼介のご両親って何の仕事やってんだろーか？

聞いたことないけど、普通のサラリーマンとかかな？

「ん〜！美味しい！でも何か一味たんねーんだよなあ」

そーやって吼介は懐から黄色いプラスチックのビン〜〜〜キュー〜のマヨネーズを取りだし、あろうことかドーナツにかけた！

忘れてたわ。コイツ……………

「ちよっ！君何してるのよ!？」

「あー、店長気にしないで。コイツ、重度のマヨラーだから」
「マヨラー!?!」

思えば中学の学食とかにもマヨネーズかけてたっけ。

そのせいか、影で妖怪マヨネーズ童子とか言われてたな。

「んー、やっぱりマヨネーズは最高の調味料だぜー!」

「……むー。でも、新作ドーナツのアイデアには持ってこいかも!」

「マジすか店長」

正直ドーナツにマヨネーズ使ったらもう惣菜パンだよ。

「……そこのお二方」

「うえっ!?!」

び、ビックリしたく……って、誰だ?

振り替えると、そこには黒づくめの格好をしたおっちゃんが立っていた。

それも手元にはタロットカードを持って。

「お二方の運命、今なら無料で占って差し上げますよ……?」

「う、運命?」

な、何か怪しげなおっちゃんだな……。

「……その茶髪の方」

「お、俺？」

おっちゃんは手に死神のカードを持っていた。

多分、俺の占い結果だよな……？

って！死神って悪いんじゃないの!?

「貴方には死相が見えます……」

「死相って……」

『主に女関連でか』

『成る程、腹上死か』

何で俺の女性関係Ⅱ死なんだよ!?

こないだも死ぬか搾り取られるかとか言ってたよなお前ら!!

「では、もう一方は……っ!？」

「あれ？吼介!？」

アイツいつの間になくなったんだ!?

「イツセー君、彼なら何か腹減ったとか言って何処か行っちゃったけど……」

「ええ!？」

アイツそんな大食いキャラじゃないだろ！

って……………

「あのおっちゃんもいない……………」

『…………相棒、あの男だな』

ん？何だドライグ？

『実は…………』

……………

一方、吼介はと言うと……………

「あー、駄目だ……………ホントに飢え死にだよ、このままじゃ…」

先程ドーナツを食べたのにも関わらず、何処か満たされない様子だった。

「その君」

「んあ？…………さつきの占い師か？」

そんな吼介の前には、先程イツセーに死神のタロットを掲示した占い師が。

「君の相が気になってね……………少しばかり占っても良いかな？勿論、お代は結構だ」

「マジで!？」

タダと聞いて、吼介は喜んで占い師に促されて川辺へと訪れた。

「……………むーこのカードは」

表になったカードには、魔術師の絵が。

「いや、皆まで言わなくていい!俺の中で渦巻くもんが、俺の命を蝕んでいる……………そう言いたいんだろ?」

「ああ……………。良く分かったな。しかも、かなり絶望的な暗示が出ている」

それを聞いた吼介は感心した様に頷いた。

「やっぱり!流石は占い師。何でもお見通しか」

「とは言え、見た所、まだ絶望し切ってはいいないようだな。君には、何か心の支えでもあるのかね?」

「心の……………支え?」

「ああ。あるなら、聞かせてくれないかね?それを」

そう言つて顔を近づける占い師。

「成る程な。でもおつちゃん!心配しなくても良いぜ!俺はそんな絶望も取つ払える!」

「……………は？」

だがあつげらかんと笑顔で言い放つ吼介に、占い師は呆気にとられる。

「つまりだ！ピンチはチャンスって事なんだよ。分かるか？」

「ああ……………」

「窮地に落ち込まれた時こそ新しい発想が閃くし、落ち込んだ時こそ周りが良く見える。あんたもさ、人を占う商売やってんだつたらさ、そう言うアドバイスをもっと積極的にやっていった方が良いと思うぜ」

「そうだな……………。参考にさせて頂きます」

何故か意気揚々とアドバイスを送る吼介に、しかし占い師は苦虫を噛み潰した様な表情をする。

「……………で？」

「で？」

「私が知りたいのは、君の心の支えだ！」

「……………あんた、良い奴だなあ！」

痺れを切らしたかの様に叫ぶ占い師に、吼介はまたも笑顔で賛辞を送る。

「……………はあ？」

「通りすがりの俺みたいな奴に、そんな一生懸命になつてくれてさー！」

「それには訳が……」

「えっ？」

「あ、いや。何でもない」

「でも兎に角、俺なら大丈夫だ！」

「何？」

「さつきも言っただろう？ピンチはチャンスだつて。つて事は、俺にとつちや、絶望も希望になつちまうんだなあ、これが！ははは……！」

あくまでポジティブシンキングな吼介に、段々とフラストレーションが溜まっていく占い師。

「そんな事はあるまい！自分の心の奥を、もつとよく覗いてみたまえ……」

「オイオイ、それ以上はプライバシーの侵害だぜ？ファントム！」

徐々に吼介にじり寄り寄る占い師を制止する声が、土手に響き渡った。

「おお！イツセー!!つて、ファントム!!」

「……何？」

そこに駆け付けたのはイツセー。

腰には既にウイザードライバーを顕現させており、臨戦態勢を取っている。

「隠しても無駄だぜ。アンタ、俺のダチ狙いなんだろう？」

「……………ふっ、バレてるのなら仕方がないな」

占い師は一人笑うと、その身体を人ならざる異形……ファントムへと姿を変え
る。

ファントム、マンティコアはそのまま近くにいた吼介の首を締め上げる。

「ぐうっ!!」

「吼介!!」

「……………はっはっ！やっぱりピンチはチャンスだなー！」

『…何?ぐあっ!』

驚いている隙に、イツセーはウイザーソードガンでマンティコアを撃つ。

「つたく……………相変わらざるのポジティブシンキングだなお前は。変身!」

《フレ임・プリーズ!ヒール、ヒール、ヒールヒール!》

イツセーは早速ウイザードFSに変身すると、ウイザーソードガンをソードモードに
切り替えて、マンティコアを攻撃する。

「おらあっ!」

『ちい!』

対するマンティコアは近づけまいと、巨大化させたタロットカードをウィザードFSにぶつける。

「うおっ!?!だつたら!」

《シャバドウビタツチヘンション!ランド・プリーズ!ドッドドドドドン、ドンドッドドン!》

《メタル・プリーズ》

メタルの魔法で身体を硬質化させてそれを往なし、

《ロック・プリーズ》

魔方陣から岩石を召喚し、マンティコア目掛けて蹴り飛ばす。

『ぐああ!』

「まだまだ!」

《エクステンド・プリーズ》

畳み掛ける様にして、ウィザードLSはウィザードガンにエクステンドの魔法を発動させて、刀身を鞭の様にしならせマンティコアを切り裂く。

『ぐうううっ!……成る程、更に魔力を上げていると言うのは本当だったか』

「つたりめえよ!……ガッ!」

自信満々に胸を張るウィザードLSだったが、その胸にはマンティコアの蠍の様な尾が突き刺さっていた。

「イツセー!!」

吼介の叫びも虚しく、ウィザードLSは力なく倒れ、しかも変身まで解除される。

「なっ……………毒、か!」

『その通り。やはり君の運命は死! 免れない様 Deathね!! ハハハッ!』

「くそがつ……………ドラゴン宿してる奴は、大抵の毒に強いんじやねーのかよ……………!」

『私の持つ毒をそんじよそこらの毒と一緒にしないでもらいたい。例え伝説の赤き龍を宿す君でもその内楽になれる。さて……………ん?』

障害となりうるイツセーを排除したので、次なる標的は吼介。

なのだが、彼は今頻りに鞆を探っていた。

「おおくあつたあつた!」

「吼、介……………逃げろっ!」

「やだね! 折角の食事に、死にそんなダチまでいるのに、逃げたら男が廢るぜ!!」

「しよ、食事……………!」

戸惑うイツセーに構わず、そう高々に言う吼介の手には、二つの指輪が。

「あれは……………指輪!」

「ふんっ！」

《ドライブバーオン！》

獣の叫びと共に、吼介の腰にベルトが顕現する。

そして吼介は大きく身振りしながら、

「変、身ッ!!」

《セット！オープン！》

左手に填めた指輪をベルトに押し付け、半回転させる。

すると、ベルトの中央部の扉が開き、中には金色の獅子の顔が。

《L・I・O・N！ライオン！》

テンションの高いボイスと共に金色の魔方陣が現れ、吼介の身体を通過。

魔方陣が消え去った後、吼介はその姿を大きく変えていた。

左肩には金色の獅子を模したアーマー、そして同じ獅子を模したマスク。

まさに野獣の様な姿の吼介が、そこには立っていた。

「吼介……!!」

『貴様、何者だ!?!』

マンティコアの問いに、

「俺は魔法使い、ビースト! さあーて、食事の時間だ! ……: 牙吠!!! 何てね!」

吼介改めビーストは勇ましく吠えると、ビーストドライバーから細身の剣、ダイスサーベルを取りだし、マンティコアと交戦する。

『舐めるなっ!!』

マンティコアは先程と同じくカードを巨大化させてビーストにぶつける。

「よっ、ほっ!」

ビーストは身軽にそれを避けながら全てダイスサーベルで切り払うと、そのままマンティコアにダイスサーベルを叩き付ける。

「がるっ!」

『ぎゃあっ! ……: おのれえ!』

「んんっ、おっと!」

マンティコアは尾をしながらしてビーストを穿とうとするが、ビーストはそれをマトリックスばりに回避。

が、それだけで終わるはずもなく、マンティコアは尾を湾曲させて、無防備なビーストの腹に突き刺す。

「がはっ!？」

『フッフッフ……君達二人は、油断大敵という言葉も知らないのかね?』

「不味いつ……このままじゃ……!」

最悪の状況にイツセーは憤るが、自分も毒で動けない。

まさに四面楚歌。

「ぐっ、そうか……イツセー、お前、こんなに苦しかったんだな。ちよつと、待つてろよ……!」

だがビーストは諦めずに青い指輪を取り出すと、それを右手に詰め、ビーストドライバーの右サイドに押し当てる。

《ドルファイ!・ゴード・ド・ド・ド・ドルファイ!》

すると、何やら動物の鳴き声と共に今度は青色の魔方陣がビーストを通過し、次にビーストの右肩にはイルカの頭部を模したアーマーと青いマントが装備されていた。

「何だありゃ……!」

「動くなよ、イツセー！ほりやー！」

ビーストはドルフイマントを翻すと、青い粒子がビーストとイツセーを包み込む。
すると、

「……毒が、消えてる？」

『何!?!』

マンティコアが二人にかけた毒が、綺麗サツパリ消えたのだ。

「治癒の魔法だ」

『私の毒が、効かないだと…?!』

「そういうこつたな！じゃ、止めはコイツだ！」

ビーストはドルフイリングを外すと、今度はオレンジのリングを詰め、ビーストドラ
イバーのリングスロットに押し当てる。

《ファルコー！ゴー！ファ・ファ・ファ・ファ・ファルコー！》

すると、今度は隼を模したアーマーとオレンジのマントを装備する。

驚くマンティコアを尻目に、ビーストは低空飛行からの斬撃でマンティコアを打ちの
めす。

『ぐうううっ!』

「さあーで、メインドイツシュだ！」

ビーストは降り立つと、ダイスサーベルのビーストダイスを回し、リングスロットにファルコリングを押し当てる。

止まった数字は、6。

《シックス！》

「おおっし！邪気、退散ッ!!なーんてな！」

《ファルコ！セイバーストライク！》

『ぐあああああつ!!』

ダイスサーベルを振り回して展開された魔方陣から、魔力で構成された6匹の隼に集中攻撃を受けたマンティコアは、耐えきれずに爆発する。

すると、爆発場所から魔方陣が現れ、それがビーストドライバーの中央に吸い込まれていった。

「ふうく、ごつつあん！」

「……アイツ、魔力を食ったのか？」

呆気にとられるイツセーに、ビーストは変身を解いて駆け寄る。

「よ、大丈夫か？」

「ああ、助かったぜ。吼介」

「ま、でも明日からはこうはいかないぜー！何たってライバルだからな！」

「ハア？」

「惚けんなよ！イツセー、お前も魔法使いならアイツ等食べるんだろ？」

「や、俺はな……」

「皆まで言うな！分かってるから！けど、今回は俺の飯って訳だから！じゃーな！」

否定しようとするイツセーをせき止め、吼介は捲し立てる様に言いたい事だけ伝えると、そのまま何処かへ去っていった。

『何だアイツは……？』

「まー………吼介あんな奴だから」

『……古の魔法使い、か』

そして、ビーストの戦闘を見ていたワイズマン。

何やら、ビーストの事を知っていそうだが………？

次回、D×Dウィザード。

吼介「ファントムの魔力を食わなきや、俺は明日をも知れない命なんだよ」
ミサ「私たちに協力しなさい」
ウィザードWD「お前、何で!？」

M A G I C 3 9 『魔力は食事』

MAGIC39 『魔力は食事』

「新しい魔法使い？」

俺の親友が魔法使い、ビーストになった事を知った俺は、その日の夜、部長に報告した。

「はい。俺と同じ指輪使つてても、ファントムの魔力食べてました」

「魔力を………?」

「………どうかしましたか？」

魔力を食べる、と聞いた部長は何か思い当たる節があるのか、目を細めた。

「………いえ、何でもないわ。所でイツセー、体の方は大丈夫なの？」

「はい。何とか」

ホント吼介の魔法便利だな。

俺にも使えないかねえ？

『まーお前のは自分には使えんからな』

………で、でも、アーシアちゃんいるから、大丈夫だよ！

『相棒、そう思うなら泣くなよ…』

な、泣いてない！これは脳汁だっ！

『キツシヨ！』

罵声でハモんな！

「行きます！ドラゴニック・カイザー・クリムゾンで、レギオンアタック!!ヴァーミリオ
ンさんのスキルで、前列全てに攻撃！」

「や、止めてくれアーシア!!私のファントムブラスターがっ!!」

いやー、アーシアちゃんとゼノヴィアも楽しそうだ。

~~~~~

翌日ーーーー

「うゝん、良い朝だ！」

駒王町の神社に（勝手に）テントを張って暮らしていた吼介は、目覚めを迎えた。

その後ろには、箒を持った神主が。

「…君、この神社で何をしてるんだね？」

「ん？おおー、お早うございます！…この神社広くていいなー！住み心地最高！…まあ、ちよつと頭痛いけどな」

ふるふる震える神主に構わず、焚き火の上で肉を焼いてマヨネーズを駆ける吼介。

「……………出ていきたまえー!!」

「ぬわあああ!!」

まあ、こうなるのは至極当然だろう。

「はあーあ、追い出すことねーじゃねーか」

リュックを背負いとぼとぼ歩く吼介は、昔よく遊んでいた公園へと足を運んだ。

「おー、変わってないな」

入口から見える遊具を見て顔を綻ばせる吼介だったが、公園内から聞こえてきた声に笑みを消した。

「ば、化け物お!!」

「つー……………つてことは、ファントムか!」

顔を強張らせたかと思うと、好戦的な笑みを浮かべて公園内へと走る。

そこには、吼介の予想通り、ヒトデらしきファントムとそのファントムに襲われているスケッチブックを持った男性がいた。

「食事はつけーん！」

『…何だ、貴様は？』

「お前を喰う奴だ。変、身っ!!」

《セツト！オープン！L・I・O・N！ライオン！》

吼介は意気揚々とビーストに変身。

ダイスサーベルを振りかざして飛び掛かるも、ファントム……ヒドラは触手を伸ばしてビーストをがんじからめに拘束する。

『俺の仕事の邪魔は困るぜ？魔法使い！』

「くっそー、何のこれしきく……うおッ!？」

『ちいつ、誰だ!？』

だが何者かの横槍により、ヒドラの触手は撃ち抜かれ、ビーストは解放される。

「ファントムの邪魔をする者……人、それを「魔法使い」と呼ぶッ！」

「はあ!?……って、この声は!？」

『貴様、何者っ!?』

その男は、明るい日差しをバックにし、優雅に銃らしき物を構えた、

「テメエに名乗る名前はねえッ!!」

「イツセー!!」

「おい名前言うなよ吼介!折角決まったのに〜!」

やっぱりかっこよくはなれない、ウィザード・フレイムスタイルの登場だ。

「おいイツセー!ソイツは俺の飯だぞ!横取りすんな!」

「や、あのな吼介。俺は」

「わーってる!皆まで言うな!けど、これは俺が先に見つけたんだ。先に喰う権利があるのは俺だかな!」

「じゃあ勝手に喰えばいいじゃねーか!!」

フアントムを他所に口喧嘩を始めてしまうビーストとウィザードFS。

『ま、魔法使いが二人いるなんて聞いてねーぞ！ここは一時退却だ！』

「「つて待ちやがれ!!」」

だが時既に遅し、ヒドラは公園の池に飛び込んで姿を消してしまった。

「あー！逃げられた…！」

「お前のせいで逃げられたじゃんかよイツセー！」

「フアントムは兎も角、ゲートは何処だ？」

「は？ゲート？」

ゲートという単語に訝しげになるピーストに、ウィザードFSは「まさか」と漏らす。  
『コイツ、ゲートの事知らないのか？』

~~~~~

「でも驚いたわ。まさかもう一人の魔法使いがイツセーの知り合いだったなんて」

「…おいイツセー。こんな美人さんとひとつ屋根の下で暮らしてんのかよ!?羨ましいってレベルじゃねーぞ！」

「え、おお……でも案外我が儘だぜ？」

「あー、確かにそれっぽい」

取り合えず、今後の事を話し合う為、イツセーはリアス達とはんぐりくを訪れていた。因みに吼介は新作のマヨネーズドーナツ、イツセーは何時ものプレーンシユガー。

「……で、ゲートって何なんだよ?」

「ホントに知らないの……。ゲートってのは、潜在魔力の高い人間の事だよ。ファントムは、そのゲートを絶望させてファントムを産み出す。だからファントムはゲートを襲うんだよ」

「ふうーん。……あ、そーいや絵描いてたおつちゃんに襲われてたっけな」

「何で早く言わねーんだ(言わないの)!!?」

ガタツと席を勢いよく立つ二人に吃驚させられる吼介。

「じゃあきつとその人がゲートよ。早く探さなきゃ……!」

「あーっと、待て! って事は、ゲートを張ってれば、ファントムと遭える。つまりゲートは、ファントムを誘き出す餌って事か!」

「何をどう聞いたらその発想に至るんだよ……全然違うからな」

思わず転けてしまうイツセー。

「って言うか! イツセー! お前、魔法使いの癖に、ファントムの魔力を食わずに生きてられんのか?」

「おう」

「狡いだろ！」

「つて言うか吼介……………そもそもお前、どうやって魔法使いになったんだ？」

イツセーに尋ねられた吼介はドカツと腰を下ろす。

「…まあ、言つても信じられねーだろうけどな。コイツと指輪は、とある遺跡で見つけたんだ」

「遺跡？」

「ああ。そこでフアントムに会つて、コイツを使えつて声がしてさ。使つたら、キマイラつて奴が出てきた」

曰く、魔法を受ける代わりにそのキマイラに魔力を与えなければならぬ。

曰く、もし魔力の供給を怠れば、その命はない。

「……とまあそういう訳だ。魔力を喰わなきゃ、俺は明日をも知れない命なんだよ」

「…その割には全然悲壮感がないわね」

「まあ、こういう奴ですから」

突つ込むリアスに、言外に突つ込むなと言うイツセー。

「そーいやイツセー。お前は魔力喰う必要ないんだろ？なら何でフアントム追つてんだよ？」

「ゲートを守るためだ」

「とは言うけどよ、赤の他人だろ？ 恩とかもないのに」

「別に。ただ、ファントムのせいで誰かが絶望するのを放っておけないだけだよ」

「ふーん。相変わらずのお人好しだな」

「ちよつと！ イッセーはね……」

「大丈夫つすよ、部長」

興味無さげに呟く吼介に、リアスが激昂して立ち上がるが、イッセーがそれを制す。

「兎に角、これだけは覚えといてくれ。ファントムに絶望させられるとゲートは……」

「いや、皆まで言うな。お前が一生懸命なのは、よく分かった。だが、お前もよく覚え

えといてくれ。こっちも命が懸かってんだ。魔力を食わなくて良いなら、俺の邪魔を

するな」

自分の言いたい事だけ伝えると、吼介はその場から去った。

「……やっぱり絵を描いてるっただけじゃ見つからないか」

吼介が去った翌日、イツセーとリアスはゲートを探して奔走するも、いかんせん手掛かりが少ないせいで、難航していた。

「朱乃達にも探して貰ってるから、何かあるまで私達も探しましょう」
「そうっすね」

今日も今日とてイツセー達は走るのであった。

一方の吼介はと言うと——

「今日こそ飯に、ありつけます様にと」

《グリフォン！ゴー！》

ビーストドライバーに緑の指輪を嵌め込み、一体のプラモンスターを召喚した。

「頼むぜ。グリフォンちゃん」

《ピーッ！》

元氣よく頷くグリフォンを見て満足げに頷いた吼介はテントの中に潜ろうとした。
が、背中をグリフォンにつつかれ、そちらを振り向く。

「いててッ!? どうしたんだよグリフォンちゃん……………っ!!」

『初めまして、古の魔法使い』

吼介の目に映るのは、蛇をイメージさせるフアントム……メデューサがいた。

「フアントムか！飯の方から来てくれるなんてラッキー！」

ビーストドライバーに指輪を嵌め込もうとしたが、それをメデューサが制する。

『その前に、話があるの』

メデューサは人間態の姿へと戻った。

「おお……可愛い」

思わずそう漏らした吼介だった。

メデューサ、ミサの話とは………？

「……………はあ」

リアスからの要請を受けて、ゲートを搜索していた小猫だったが、あまり気分が乗らず、近くの川を見詰めてため息を吐いた。

「……………私は」

「兵藤一誠の仲間だな？」

「ッ!？」

だが不意に背後から声を掛けられ、勢いよくそちらを振り向くと、そこにはコカビエルとの戦いで姿を見せた、白い魔法使いが立っていた。

「貴方は……………」

「まあ構えるな。戦うつもりはない」

臨戦態勢に入る小猫を制止すると、白い魔法使いは魔方陣から黄色の魔宝石を取り出す。

「これを……………兵藤茂に渡してほしい」

「魔宝石…………？」

「……………」

《テレポート・ナウ》

それだけ告げると、白い魔法使いはテレポートで姿を消した。

~~~~~

川の畔にある公園、そこには先日ファントムに襲われた男性、及川が絵を描いていた。  
「ツ……駄目だ」

だが上手く作業が捗らないのか、早々に身支度をして帰ろうとした。が、

『よお。また会ったな』

「……うわあ！」

そこにファントム、ヒドラが現れた。

『今度こそ逃がさねーぞ。及川博……！』

「ぐうううっ……!!」

及川の首を締めるヒドラだったが、そんな彼に弾丸が降り注ぐ。

『ぐああ！』

「俺ともまた会ったな！」

『指輪の、魔法使い……！』

そこに間一髪でイツセーが駆け付けて、事なきを得る。

「変身！」

《シャバドウビタッチヘンシン！フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

早速ウィザード・フレイムスタイルに変身すると、ヒドラに蹴りをお見舞いする。

「ほりやつ！」

『ぐへえっ！くっ、やりずれえ……なら此方で勝負だ！』

ヒドラはウィザードFSの三段蹴りをかわすと、川へと飛び込む。

「生憎、こつちも水中戦は得意なんでね」

《ウオーター・プリーズ。スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜！》

「はっ！」

即座にウオータースタイルにチェンジし、川へと飛び込みヒドラを追撃。触手を伸ばし、離れた間合いから攻撃するヒドラ。

それをウィザソーガン・ソードモードで斬り払うウィザードWS。

「よしっ、コイツだ！」

《リキッド・プリーズ》

身体を液化化させ伸びてくる触手を透過、そのままヒドラに近接して斬撃。

『うおっ!?!』

「はっ！」

そのまま水上へと放り上げると、それを追うようにウイザードも水上へとジャンプ。まだ空中にいるヒドラを岸へと蹴り飛ばすウイザードWS。

『ぬあっ!!』

自身も岸へと着地すると、

《シャバドウビタツチヘンシーン！ウオーター！ドラゴン！ジャバジャバシャーン、ザブンザブーン！》

流れる勢いでウオータードラゴンへとスタイルチェンジ。

「さあーで、一気に決めるぜ！」

《チヨロイイネ！ブリザード・サイコー！》

『糞っ、こんなもの……っ!!』

ヒドラはせめてもの抵抗に触手を伸ばすも、全てブリザードの魔法で凍り付かされて粉々に砕け散った。

『なっ!?!』

「うしっ、フィナーレだー」

《バッファア！ゴー！バッバ・ババババッファア！》



「悪く思うなよ、イツセーツ!!」

必殺技を発動しようとしたウィザードWDを邪魔したのは、バッファマントを装着したビーストだった。

奇襲同然の攻撃を何とかやり過ごすウィザードWD。

「吼介…お前、何で!?!」

「うるせえよ!よくも俺を騙そうとしやがって!お前もファントム魔力が目当てなんだろう!」

「何でそうなるしつ!?!」

ダイスサーベルを振り払い、ビーストの腹に蹴りを叩き込み、距離をとる。

「ぐふっ!?!…惚けんなよ!女のファントムに聞いたんだからな!」

「女のファントム?…:…アイツか!」

同時に脳裏に浮かんだのは、以前会った女ファントム、メデューサ。

先程ミサと吼介との間で行われた会話は、吼介を騙す為の嘘を吹き込まれ、それを真に受けたビーストはこうして襲いかかってきた訳だ。

「だーっ、騙されてるし…:…コイツこう言うところがめんどいんだよな」

「あん?何か言ったか?…:…つと、ちようど良い機会だ。改めて聞かせてもらおうじゃないか。魔法使いとファントム、どっちが俺の得になるのかをな!」

『何ふざけた事抜かしてんだ!?!』

すると、一旦ゲートを放置して此方に向かうヒドラ。

「あー来やがった! 吼介、ソイツ任せたぞ!」

「あつ! おい待て!」

『死ねえ!!』

ビーストを攻撃するヒドラ。

ゲートを保護しようとするウイザード。

どちらにも対応しなくてはならず、苛立つビースト。

「あー……もうっ!」

混戦極める三つ巴の戦い、果たして勝者は――

次回、D×Dウイザード

ビースト「ゲートは預かるぜ!」

及川「今の私にはもう、何もない。その絵と話す事だけが、私の生きる希望なんだ」

イツセー「明日の命より……まずは今日の命だ」

MAGIC40 『明日の命、今日の命』

《ランド・ドラゴン！ダン・デン・ドン・ズ・ド・ゴーン！ダン・デン・ド・ゴーン！》

# MAGIC40 『明日の命、今日の命』

ゲートである及川を取り合うように揉めるヒドラ、ウィザードWD、ビースト。

「どけっ！」

「お前がどけよ！」

『えーい、どけっ！』

「うーん……………ハッ！」

そうしている間に気絶から目覚め、逃げ出す及川。

「あーっ！こうなったら……………」

《ファルコ！ゴー！ファ・ファ・ファ・ファルコ！》

何を思ったか、ビーストはファルコマントを装着し、展開された八角形の魔法陣を潜ると飛翔、及川を小脇に抱え空に。

「う、うわああああああああ」

「ゲートは預かるぜ！」

「『あっ！！』」

そう言つて離脱していくビースト。

肝心なゲートを連れ去られてしまったヒドラは、

『チイツ…また出直しだ!』

舌打ちを残してその場から逃走。

一方のウィザードWDはヒドラを追わずに変身を解いた。

「あんのバカマヨネーズ……!」

「えつ、マヨネーズ君がゲートを!?!」

「はい……ファントムに嘘を吹き込まれたみたいで」

結局足取りも分からないので、イツセーは家に帰りリアス達に報告。

『名前で呼ばれてねえなあのマヨネーズ少年』

『貴様もマヨネーズ呼ばわりしてるだろうが』

「……兎に角、ゲートの人とマヨネーズ君を探さなきゃ。…あら、小猫」

そう意気込んだリアスの後に、小猫が帰って来た。

「お、お帰り小猫ちゃん」

「……イツセー先輩、これ」

小猫は懐から、先程白い魔法使いに渡された黄色い魔宝石を手渡す。

「魔宝石!? 小猫ちゃん、これ何処で手に入れたの!？」

「あの白い魔法使いが、茂さんにと………」

「…指輪を作れって事か。ま、俺が持っても仕方ないからな」

そう言つて、イツセーは隣に住む茂に魔宝石を渡しに行つた。

「…で、小猫。何かゲートの情報は得られた?」

「それなんです………」

~~~~~

都内のBBQ場。焼きあがった焼きそばを器に入れると、たつぷりマヨネーズをか
け、

「おお……よ〜し」

それを及川に出す吼介。

「ほい。お待たせ」

「いらん」

「あれ？マヨネーズ嫌いな人？」

断られた吼介はそれを自分で食べることに。

「私を誘拐してどうするつもりだ。金目当てなら見当違いだ」

「んあ？ああ、違う違う！俺が欲しいのは……あんたの中のファントムなんだ」

「ファントム？何だ、それ？」

「一っだけ教えてくれ。どうすれば、あんたの中からファントムが生まれるんだ？」

「……はっ？」

沈黙。

「…………や、何か、あんだろ！ほら、あの……呪文とかさ。月の満ち欠けとか？」

「……ハア」

事情を何も知らない及川からすれば、吼介は意味の分からない言葉を並べられている様なものだ。

スケッチブックや画材を抱え、立ち上がる及川。

「あ、おい！どこ行くんだ？」

「家に帰る。君の妄想には、付き合ってる暇はない」

「お、おい！ちよつと待てよー！」

慌てて及川の後を追い掛ける吼介。

家へと帰つて来た及川と、それについて来た吼介。

「ただいま」

「おじやましませ〜す!」

「どうやら、面倒な事に巻き込まれたみたいなんだ。変な奴もついて来るし……すまんね」

「誰と話してんだ?」

「ここにはいない誰かに語りかける様に話す及川に訝しげながら尋ねる吼介。

すると、吼介が及川の前にはある女性の肖像画を発見した。

「誰?」

「妻だよ」

「えっ?!これが奥さん?」

「どうやら及川の妻の肖像画らしい。」

「そうだ。妻は体が弱くてな。毎日、絵を描きながら話すのが、私と妻の日課だった」

「くっそー、せめてアイツの魔力を探知できたらなあ……………ん？」

と、そんなイツセーの元に昼間なのに蝙蝠が。

『イツセー、聞こえる？』

「部長!? ……ああ、使い魔か」

『ゲートの事が分かったわ！名前は及川博さん。結構有名な画家さんらしいわ』

「よく分かりましたね…」

『小猫が地道に聞き込みをしてくれたお蔭よ』

それを聞いたイツセーは、今度ご飯を奢ってあげようと決意した。

『私も及川さんの家に向かうから、そこで合流しましょう』

「了解っすー！」

パタパタと去っていく蝙蝠を見届けた後、イツセーは及川の家に向けてマシンウインガーを走らせる。

数十分後、及川家のチャイムが鳴った。

「あつ、待って待って。俺が出る」

及川の代わりに玄関のドアを開ける吼介。

「ちわーっす、魔法使いでーす」

そこにいたのはイツセーとリアスと朱乃。

「あつ、どうも〜！魔法使いなら間に合ってますんで、はい。失礼しま〜ギャアアアアア
!!」

扉をにこやかに閉めようとした吼介に、イツセーは容赦なく、そして迅速に目潰しを喰らわす。

「部長、朱乃さん。お願いします〜！」

「や、やり過ぎじゃない？イツセー」

「大丈夫っす、コイツ馬鹿なんで」

激痛に蠢く吼介をイツセーが外に追いやると、リアスと朱乃が「失礼します」と玄関に入る。

「な、何ですか？」

「及川さんですよね？ちよつと、お話があります」

リアスが少し魔力を当てると、及川は催眠に掛かったかの様に静かにリアス達に席を譲る。

「どうぞ」

「失礼します。私達は、あなたを守りに来たんです」

リアスは及川に掛けた催眠を解き、朱乃と一緒に事の顛末を説明する。

その間に、イツセーは改めて吼介にゲートの事を説明する。

衝撃の事実を突き付けられた吼介は、激しく狼狽する。

「何だ?! じゃあ、何か? ファントムが生まれるって事は……あのおっちゃん死ぬって事か?」

「そうだ。ゲートが絶望した時にファントムが心の中で生まれ、ゲートの全てを奪って現実に現れる。夢も希望も、その命も奪ってな」

「嘘だろ……」

シヨックの余り、その場にへたり込む吼介。

「つたく、簡単に騙されやがって。お前は中学時代から騙され上手だったっけな。分かったら、もうゲートにファントム産めなんて無理難題吹っ掛けんよ」

「待てよ! じゃあ、俺はどうなんだよ! 俺はファントムの魔力を食わないと、明日をも知れない身体なんだぞ!」

「ゲートの命は明日じゃない。今、危ないんだ。そして、それはお前もだろ?」

「えっ?」

「明日の命より……まずは今日の命だ」

それだけ伝えると、イツセーは及川家の中に戻っていった。それを見届けた後、吼介は後ろに倒れ込む。

「こつちは一応伝えました」

「こつちも伝えましたわ」

「アイツの荷物は……」

「あつ、私が持つてくわ」

吼介のザックを持ち、庭へと出たリアス。

「何だよ？」

「あなたに言っておきたい事があつて」

「んっ？」

「あなた、イツセーはただのお人好しつて言つてたけど、それは間違いよ。イツセーはゲートを守る為に、本気で自分の命を懸けてる」

「自分の命を……？他人の為に……？」

「ええ。……私達はイツセーの過去は知らないわ。でもゲートを絶望してフアントムを生み出すところを、イツセーは見てるのだと思う……。だから人一倍、他人の為に動けるの。この悲劇を止められるのは、魔法使いだけ。だから、俺が戦うしかないつて……そう言つてたわ」

「……………」

「他人の為ならどんな危険も顧みない。それはあなたも分かってるんじゃないの？」

それを聞いた吼介は頭を掻いて激しく葛藤する。

「ううー、ああつ!!」

面影堂では、作業室で削った魔法石を台座にあて確認すると、また削り始める茂。

そこにコーヒーを淹れ、運んできた小猫とギヤスパー。

「……………」

「こ、これ！サンドイツチですう！」

「ん？おお、ありがとう。小猫ちゃん、ギヤスパー君」

「ふえ？僕が男って分かるんですかあ？」

「ああ。何時もイツセーは君達の事を話してるからね。自慢の後輩だ！って」

「イツセー先輩が…」

「僕達の事を…………？」

「うん。だから、自分が情けないとか、そう言うネガティブな考えは持つちゃダメだよ。」

アイツはリアスさんや君達の強さを信じてるからね」

「……はい！」

「……………」

及川邸、肖像画の前に立っているイツセー。

「この絵が生きる希望、なんですね」

「ああ……。妻がまだ、そこにいると思うと心が休まる」

「お握り出来たわ」

「おっ！待ってました！」

「及川さんどうぞ」

「…すまないね」

リアスと朱乃が及川の家のキッチンを借り、簡易的な夜食を作り、全員で食べることに。
に。

「あらあら、立神君ったらバーベキューをしていますわ」

朱乃の言葉に釣られて見ると、そこには肉にマヨネーズをかけて頬張る吼介の姿が。

「…随分暢気ね」

「……寧ろ逆だと思えますわ」

「「え？」」

「私だつたら……落ち着かなくて、ご飯なんか咽喉を通りませんわ。だつて……フアン
トムの魔力を食べないと明日をも知れない命なんですよね？ 本当は……怖いから、ああ
やって気を紛らわせてるとか」

朱乃の言葉に納得させられたのか、リアスとイツセーは黙ってお握りを頬張る。

その吼介はバーベキュウの串を手に、ベルトのバックルを眺める。

「どうすつかなあ……」

吼介は先日、ミサに言われた事を思い出した。

『目の前のフアントムを食べれば、今日は生きられるかもね。でも新たなフアントムが
生まれない限り……何れあなたの明日は無くなるわ』

「ああ……確かに、あの女の言うとおりだ。けど、明日の為にゲートを犠牲にするのは、
後味が悪いし……かと言って、フアントムを食わないと俺が死んでしまうしなあ……」

『明日の命より……まずは今日の命だ』

「今日の命………か」

~~~~~

翌日。

及川邸の壁から絵を呼び出したゼノヴィアと一緒に外すイツセー。

「慎重に頼むぜ」

「ああ、任せろ」

「何してるの？」

「希望の絵なんで面影堂に持って行こうと思って」

丁寧に取り外した絵を包もうとして、イツセーは額の裏に封筒を見つける。

「……？」

「イツセー、何をしてるんだ？」

「ん、ああ悪い。今包む」

丁寧に包んだ後、玄関先に絵を出す時、庭に張れたテントの傍らに座り込んでいた吼介と目が合うも、無言のまま去るイツセー。

吼介は手にしていた変身リングとは異なる意匠のリングに目を落とす。

「何に使うんだろこれ……………」

誰に尋ねるでもなく、小さく呟いた。

及川を連れ面影堂へと向かうイツセー達は、公園の噴水脇を通りかかる。

『……………相棒、この気配は』

「……………ツ!!」

ドライブに言われて噴水の方に目を向けると、

『待つてたぜ。ゲートに魔法使い』

そこには最悪のタイミングと言うべきか、ヒドラが立っていた。

「寒い中ご苦勞なこつたな」

『へっ、ゲートさえ絶望させればその苦勞も帳消しさ。お蔭でゲートの心の支えも分

かったしなあ!」

「:張り込んでたつて訳か」

『すまん相棒、俺も気付けなかった』

「謝んなよドライグ。今ここでコイツを倒せば万事解決だ」

《ドライバーオン・プリーズ》

腰のウイザードライバーを顕現させ、ハンドオーサーを操作する。

「変身!」

《シャバドウビタツチヘンシーン! フレイム・プリーズ! ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!》

《コネクト・プリーズ》

ウイザード・フレイムスタイルに変身すると、コネクトでウイザーソードガンを取り

寄せる。

「皆! 及川さんと絵を頼む!」

「ええ!」

「任せましたわ!」

「イツセーの頼みならば、全力で答えよう! デュランダルツ!」

及川の近くに現れたグルルの群れをそれぞれ蹴散らすリアス達。

「さあ、シヨータイムだ!」

『チイツ、奴等も悪魔か！』

ウィザードガンでヒドラに肉薄するウィザードFS。

「へっ、あんな雑兵じゃ、部長達に敵わないぜ！」

『ふんツ、ならこうするだけだあつ！』

ヒドラは地面に触手を突き刺すと、それを及川の元に一瞬で移動させ、絵に穴を開けた。

「「「ツ!!」」」

「ああつ……………」

『ヒャーハツハツハ！後はこれで完成だ!!』

「ぐっ!?!」

ウィザードFSを強引に引き剥がすと、自身の触手で貫いた絵を手繰り寄せ、力任せにキャンバスを引き裂いた。

「なっ……!!」

それを見て膝を突き、及川の体には紫色の輝が生まれる。

「あつ……………ああ……………」

『ははっ。いいぞ、いいぞ！ファントムを生み出せ……ぐっ!?!』

狂喜するヒドラの顔面に何者かの蹴りが入る。

「……………吼介」

蹴りを入れたのは、吼介だった。

「及川さん！」

「大丈夫ですか？」

グールの群れをゼノヴィアに任せ、及川に駆け寄るリアスと朱乃だが、及川の輝は止まらずに、どんどん広がっていく。

一方の吼介は、ウィザードFSに近づく。

「何しに来た？」

「明日の命より、今日の命だったな」

「おう」

「取りあえず、明日の事は今日は考えない事にした。今日は今日をちゃんと生きる」

そう短く伝えると、ビーストドライバーを顕現させる。

《ドライバーオン！》

「明日の事は、それからだ。変、身ッ!!」

《セット！オープン！L・I・O・N！ライオン！》

ビーストへと変身した吼介に、更にグールを向かわせるヒドラ。

『グール！やれ！』

「じゃあ……ランチタイムだ！」

「んじゃ、召し上がれ」

「牙吠ッ!!」

そう吠えると、勢いよくグルルの群れに飛び込むビースト。

「不味いわイツセーッ! 及川さんが!!」

「っ! 今向かいます!」

『させるか!』

向かおうとするも、グルルとヒドラに阻まれるウイザードFS。

「くそっ、コイツら……キリがないッ!」

「下がってな嬢ちゃん! 一気に片す!!」

《バッファア! ゴー! バツバ・バババツファア!》

雄牛の雄叫びと共にバッファマントを装着。

「前菜纏めて頂くぜッ!! 牙吠!!」

力強く地面を殴り付けると、衝撃波が広がり一気にグルルを殲滅。

グルルの魔力は魔法陣と化し、それを喰らうキマイラオーサー。

「うしっ!……っつと、イツセー! 俺がこの人助けるから、ソイツ任せたぜ!」

「おう、任された!!」

『くそっ、離しやがれっ!!』

及川からヒドラを引き剥がすウイザードFS。

その間にビーストは及川の側に膝まづく。

「悪かったな。俺があの時ファントム倒してりや……………今、助けてやつから!」

及川の指に庭で眺めていたリングを嵌めると、その手をキマイラオーサーに翳す。

《エンゲージ・ゴー!》

「しゅっ……………お邪魔します!」

展開される魔法陣に飛び込むビースト。

「つとー……………ここがおっちゃんの心の中か」

ダイブした先は及川邸の庭先。

病床の奥さんの傍らで絵を描いている及川。

そこに入った亀裂を割り、巨大ファントム、バンダースナッチが出現。

「うおおっ!でかつ!」

初めて目にしたらしく、巨大ファントムに圧倒されるビースト。  
「わっ、おおおー！どうすんだこれー!？」

「ハッ！」

『チイ!』

地上では、ウィザードFSとヒドラの交戦が続いていた。

《シャバドウビタツチヘンシーランド・プリーズ！ドツドドドドン、ドンドツドドン！》

ウィザードFSはランドスタイルにチェンジ。

《ドリル・プリーズ》

ドリルウィザードリングによりその場で高速回転、地中へと潜り込む。

『なっ、何処行きやがった!?!』

「イツセーにばかり目が行きすぎだッ!!」

『ぬおっ!?!』



不意打ちで放たれたゼノヴィアのデュランダルの一撃を辛うじてかわすヒドラ。だがその隙をついて、ウィザードLSは高速回転した頭突きを喰らわす。

『ぐへえっ!!?』

「うおっと!あー…目が回った」

ふらつきながらも着地するウィザードLS。

と、そこへ、

「イツセー先輩ツ!!」

「あ、新しい指輪ですううう!!」

小猫とギヤスパアの一年生コンビが、茂が今朝完成させたウィザードリングを投げ渡した。

「おっと!ナイスパス、二人とも!」

『流石茂殿だ。仕事が速いぜ!』

手渡された指輪を嵌めて、ハンドオーサーに翳す。

《シャバドウビタツチヘンション!ランド・ドラゴン!ダン・デン・ドン・ズ・ド・ゴーン!ダン・デン・ド・ゴーン!》

砂で構成された龍が旋回し、ウイザードLDに吸い込まれる様に溶け込む。

そこには、マスクがランドスタイル以上に角張り、派手目な黄色いローブを翻すウイザードの新形態、

ウイザード・ランドドラゴンが佇んでいた。

「改めて……ショータイムだ！」

ウイザードLDは地面を掴むと、何と地層を持ち上げて、ヒドラ目掛けて投げ飛ばした。

「ふんぬおおお!!!!」

『な、何じやそりやああ?!』

慌ててかわすも、

『ロック・プリーズ』

ロックウイザードリングにより召喚された岩を、ウイザードLDは槍状に形成し、撃ち放つ。

『ぐあああ!!』

まともにそれらを浴びたヒドラは勢いよくぶつ飛ぶ。

一方、アンダーワールドでは……………

「うおーっ！やるしかねえだろおおお！」

ダイスサーベルで向かっていくも、バンダースナッチにはね除けられる。

「ぐあっ！……くーっ！とんだ大ピンチだぜ！だがピンチとチャンス裏表！勝つか負けるか俺次第ってね！来い、キマイラ！！」

《キマイライズ・ゴー！》

その時、不可思議な呪文が響き渡ったかと思うと、ビーストの左肩に顕現した魔方陣から、ビーストドライブバーに封印されたファントム、ビーストキマイラが召喚される。

「しやつ、行くぜえええ！！」

『グオオオオオツ！！』

背中に乗ったビーストの掛け声にビーストキマイラは力強く吠ええると、バンダースナッチ目掛けて駆け出し、その爪を振るう。

その一撃は重く、バンダースナッチは苦しむも、ビーストキマイラは容赦なく噛み付き攻撃を行う。



「へへっ……ごつつあん！」

『グオオオオオツ!!』

side 地上戦。

「ハア!!」

『ぐあああ!!』

ヒドラはウィザードLDに巴投げを喰らい、地面に叩き付けられる。

その際に、ウィザードLDはもう1つの指輪を嵌める。

「何の魔法かな〜つと」

《チヨーイイネ！グラビティ・サイコー！》

発動した瞬間、ヒドラの頭上に展開された魔法陣が、そのまま降下していく。

『お……重い……!!』

すると、ヒドラの体が魔方陣に押し潰されるかの様にのめり込んだ。

ウィザードLDは右手を今度は前に突き出し、徐々に上へと上げていくと、ヒドラの体も上へと昇っていく。

「ほいつー！」

かと思うと、再び地面に落とされる。

『ま、まさかコイツ……………重力を操ってるのか!？』

「おおーっ、めっちゃ楽しい！」

驚愕するヒドラを他所に、ウィザードLDは新しいオモチャで遊ぶ子供の様にはしゃいでいる。

『相棒、止めを差してやれ。可哀想になってきた』

「……………ちえーっ。分かったよ」

《チヨーイイネー！スペシャル・サイコーー！》

スペシャルリングを使うと、砂塵が舞うようにしてドラゴンが出現し、ウィザードLDと一体化すると、ウィザードの両腕に巨大な爪が具現化。

「おおー!!カッケー!!」

『お前は子供か』

『う、うう……………!』

「うるせえ……………さ、ファイナーレだ！」

魔力を込めてダツと駆け出し、一気にドラゴヘルクローの間合いに踏み込むと、力任せにヒドラを引き裂いた。

「でやああああッ!!」

『ぐああああああッ!!』

新技、ドラゴンリッパ―を受けたヒドラは、為す統べなく爆発四散した。

「……ふいふうおわっ?!」

「やったな、イツセー!」

一息吐くウィザードLDに、ゼノヴィアが飛び付く。

「やりましたね、イツセー先輩!!」

「おうよ!!」

ギヤスパ―にサムズアップで応えるウィザードLD。

カツコよく見えるかもしれないが、ゼノヴィアが抱きついているので、あまり貫禄はない。

『イツセー先輩は、どんどん強くなっていく………他の人達も。それなのに、私は

………ッ』

だが小猫だけは、それを複雑そうな顔で見ている。

それは隣のギヤスパーも、ゼノヴィア相手に困惑するウィザードLDも気付かなかった。

一方のビーストも、魔法陣から出て来ると、

「ふう〜！何とかなったぜ！」

一息吐くと変身を解いた。

「よっ、吼介」

「片付いたのか？」

「モチ」

「流石ですわ、イツセイ君」

「吼介君も中々だったわ」

健闘を讃え合うが、それ所ではないと気持ちを切り替える。

「ん……」

「大丈夫ですか？」



ここで目を覚ました及川。

だがイツセー達には目もくれず、絵に駆け寄る。

「ああつ！あつ………あつ………ああつ！私の希望が……」

「……ごめんさい、守れなくて。でも、まだ希望はなくなっちゃいません」  
懐から取り出した封筒を渡すイツセー。

「これは……」

「奥さんからの、手紙みたいです。絵の裏に、隠してありました」  
受け取ったそれを読む及川。

「あなたへ」

あなたがこれを読む頃、私はそばにいないんでしょうね。  
でも、悲しまないで。

私の事を振り返るより、新しい絵をいっぱい描いて。

私達の家が、あなたの絵で埋まるくらい。

それが、私の希望です。―――由貴子」

手紙には、そう書かれていた。

「奥さんは今も、及川さんの絵を楽しみにしてる。その希望を叶えてやる事が、あなたにとつても希望なんじゃないですかね？」

「ああ……そうだな。その通りだよ……由貴子、ありがとうっ」  
静かに嗚咽を漏らす及川を、イツセー達はただ見守っていた。

~~~~~

「今日はありがとうよ、吼介」

帰路を歩くイツセーは、吼介に礼を述べた。

「俺は責任を取っただけだ。気にすんなよ」

だが吼介は恥ずかしいのか、そっぽを向いて答える。

「……そう言えば、イツセーが吼介君のアンダーワールドに入って、キマイラを倒せばファントムを食べなくて済むんじゃないかしら？」

と、ここでリアスがキマイラの食料問題を解決する最大のアイデアを思い付いた。

「……思い付かなかった。ナイスです、部長！」

「確かに、そのキマイラを倒せば、あなたは死なずに済む」

「うし、吼介。手え出せ」

「……………」

無言で手を差し出す吼介。

が、イツセーがエンゲージリングを嵌める寸前で手を引つ込めた。

「やっぱ無しで！」

「は？」

「男に指輪を嵌めてもらう趣味はねーからな！」

「俺だつて野郎に指輪嵌める趣味ねーよ！何で遠慮すんだよ!？」

「それに、俺の中にいるキマイラは強えからなあ。返り討ちにしちゃったら、後味が悪

い。次は、正々堂々と勝負だ！」

ドーンと告げる吼介に、イツセーは肩をずらす。

「勝負つて……………」

「どっちが先にファントムを見つけて倒すかな。我がダチ公よ……………さらば！」

片手を上げ、去つて行く吼介。

「……………しよーがねえ。付き合つてやるとしますか！」

「ふふっ、あなたらしいわね」

「そうですわ、イツセー君。今回頑張ったご褒美でデートして頂けますか？」

「マジすか!?喜んでーイーイテテテッ!?」

「イツセー、それは私も含まれるわよね？」

「私も頑張ったからな、イツセー!早速子作りと行こうじゃないか!」

「な、何でそうなるんだよ!?!」

「……へえー、子作りねえ」

「……どういう訳かみっちり聞かせて貰いますわ、イツセー君」

「……最低です」

「さ、流石イツセー先輩ですううう!僕には真似出来ませええん!」

「イツセーさあーん、皆さーん!……はう!」

「あ、アジアさん。大丈夫かい？」

「アジアに……木場?どうしたんだ？」

「いや、晩御飯の材料を買っていたら、アジアさんとスーパーで出会ってね」

「ふーん……アジア、今日は何作るんだ？」

「えっと、オムライスです!」

「おお!……そうだ、木場!ギヤスパー!お前らも食ってけよ!」

「じゃあ、お言葉に甘えようかな？」

「は、はい！では頂きます！」

何時も通りの騒がしきな、オカ研メンバーであった。

「第一段階は、完成だな……………」

そんな彼らを、白い魔法使いが見詰めていた。

次回、D×Dウィザード

イツセー「いよいよ冥界か〜！」

ドライグ『…………デカいな』

ドラゴン『ああ…………』

アザゼル「やっぱ風呂は良いねえ……………」

MAGIC41 『冥界、突入!』

ドライグ 『俺達出番あるよな? な? な? な?』

作者 「次回をお楽しみに!」

ドラゴン 『何も答えないのが怖いな……』

MAGIC 41 『冥界、突入！』

よう皆、イツセーだ。

今日から俺は冥界に暫くお泊まりだよ！

今はグレモリー家の所有する列車に乗ってる所だ。

つか家が列車持ちこた……改めて部長の家は凄いなあ。

『ワカメに……ワカメに負けた……ort』

『いい加減に泣き止んだらどうだ……ウザイ』

まだ泣いてんのかよ……つか冒頭の質問は何の意味があつたのかね…。

「イツセーさん、見てください！空が紫色ですよ！」

そーいやアーシアは冥界に行くの初めてだったな。

まあ俺も初めて来た時は驚いたもんさ。

『ワカメなんて、ただ食べるだけじゃねーか……俺の方が、断然格好いいのに……！』

『食べるか否か、だろう。貴様は食べれないからな。恐らくこの小説を読んでる読者の

大半はワカメに投票するだろうよ』

『何だ?! そんな訳あるか! この小説を読んでも読者の大半はドライグファンなんだよ!』

『貴様のファンを数えるより、米粒を数えた方がまだ有意義だ!!』

『貴様ア……謝れ! 全国のドライグファンに!!』

『俺は寧ろそんなに墮落した様を謝るべきだと思うが?』

『……や、この墮落ぶりは俺のファンに対するファンサービスの一環で』

ハア………癒されたい。

つてな訳で俺は到着する間ずっとアジア達と雑談に興じた。

決してこの二人がめんどくさくなくなった訳じゃない、良いね?

けどその道中、ずっと小猫ちゃんは上の空だった。

隣のギヤスパーも、声を掛けづらそうにしていた。

どうしたんだろ、小猫ちゃん……？

『間もなく、グレモリー本邸前に到着します。皆様、ご乗車有り難う御座いました』

おつ、終点か。

『ギヤースギヤース!!』

おいお前ら、いい加減喧嘩は止めろ！

部長の家に着いたから！

そうこうしてる内に列車は静かに停止し、ドアが開いた。

「ん？アザゼル先生は降りないんですか？」

そう、一緒に乗っていたアザゼル先生はそのまま座席に腰かけていた。

「ああ、俺はこれから魔王領に向かわなくちゃならねーんだ。サーゼクス達との会談でな」

「あ、そうなんすか」

「まあ終わったら俺もそっちに戻るから、挨拶済ませてこいよ」

ヒラヒラと手を振る先生。

うーむ、やはり大変なんだなあ。

「お兄さまに宜しくね、アザゼル」

「おう」

列車が発車したのを見届けた俺達オカ研メンバーは駅のホームに降りると――

『リアスお嬢様、お帰りなさいませっ!!』

そんな怒号の様な声の後、銃声が空に鳴り響き一斉に音楽が流れる!

更に空には変な動物?に跨がった兵士さんが旗を振っていた!

『オイオイ、随分仰々しいな』

何か、場違いな感じがする……。

木場達が驚いてない所を見ると、多分毎年恒例か……そういや山で修行してた時、すげえ音が聞こえてたっけ?

アレの正体はこれかよ!

「ヒイイイ……ひ、人が一杯ですう……!」

そう言ってギャスパーは俺の背中に隠れる。

あー、引きこもりの人見知りにはちと辛いなコリヤ。

『兵士だけでなくメイドや執事も多いな』

確かにドラゴンの言うとおり、ビシツと服を着こなしたメイドさんや執事の人達が一斉に並び、一斉に頭を下げている。

「有り難う、皆」

部長も満面の笑みで手を振ると、従者さん達も笑みを浮かべる。

「お嬢様、お帰りなさいませ。お早いお着きでしたね」

お、グレイフィアさん！

相変わらず綺麗だなー。

『出たな。今の所相棒の正妻候補ナンバーワンのメイド』

『俺達だけでなく、読者の皆もそう思ってるのだろうな』

……何の話だ？

『お前は知らなくて良いことだ』

どうせ聞いても教えてくくんないんだろ、分かってるよ！

「さあ、眷属の皆様も馬車へお乗りください。本邸までこれで移動するので」

すげえ、馬車だ……俺馬車に乗るの初めてだ。

冥界の馬って人間世界のと若干違うのか？何か体躯も大きいし、目もギラギラしてる

し。

『例えるなら黒王号だな』

限られた奴しか乗れねーじゃねーか!

何? 世紀末覇者専用馬車なの? コレ。

『相棒、近付くなよ。お前は蹴られちまうからな』

蹴られたらひでぶっ! じゃ済まなさそうなんですけどそれは……。

『つてかお前にはバイクあるだろ』

やだいやだいや! 馬車乗るんだい!

『駄々っ子か』

『私は下僕達と行くわ。イツセーとアーシアが不安そうだから』

『分かりました。何台かご用意しましたので、ご自由にお乗りください』

つて言うか部長の領内でバイクで走る度胸ねーよ……と思いつつ俺は先頭の馬車に乗り込んだ。

「ふわあ……私、馬車に乗るの初めてです!」

「実は俺もなんだ。乗り心地良いな」

「はい!」

うん、やっぱり女の子には笑顔が一番だ!

『おい相棒前見ろ』

ん……………はうあ!!

「ぶ、部長…あれ……………!」

お、俺の目の前には「城」と見間違う程の立派な豪邸が佇んでいたのだ!

「ああ、私のお家の一つで本邸なのよ」

「あ、そうっすか……………」

今「一つ」って言ったよな…何?まだ家あるの?

『デカイな…………』

『ああ…………』

なんて俺の中のドラゴン達は惚けてるけど…………お前らの方がデカイだろ!

なんて呟きつつも馬車を降りると、俺は改めて部長の実家の凄さを認識する。

「大きいです……………」

「凄いね…………こんな大きな建物、初めて見たよ」

すげえな、ホントに…………。

周りにもズラリと部長の家のメイドさんや執事さんが並んで頭を下げてる。

俺、こんなに頭を下げてる人見るの初めてだよ……………と、そんな大勢の人だからから小さい人影が部長に抱きついた!

「リアスお姉さま、お帰りなさい!」

お、お姉さま? 弟かな?

見たとこ男の子っぽいけど……………。

「ミリキヤス! 大きくなつたわね!」

部長も部長でその子を愛しそうに抱き締めろ。

『あの紅髪からするに恐らくはグレモリー家の者だろうな』

『何処と無く魔王に似てるな』

……………言われてみれば、確かにサーゼクス様に似てる気がする。

「皆、この子はミリキヤス・グレモリー。お兄様…サーゼクス・ルシファー様の子供で、私の甥なの」

……………超サラブレッドじゃん!

つて、でもルシファー性じゃないのな。

『ルシファーではないのは、魔王の名は襲名した者のみにしか名乗れないからだ。だからこの子はサーゼクス・ルシファーの元の性のグレモリーなんだろうよ』

……成る程。

『貴様にしては分かりやすい説明だな』

『どや?』

『ムカつく』

『テメエ最近ストレートに罵るなオイ』

あー喧嘩すんなもう。

「ミリキヤス、挨拶しなさい」

「はい、お姉さま！僕はミリキヤス・グレモリーと申します！よろしくお願いします！」

お、おいどうすりや良いんだ!?

俺は敬語使わなきゃだよな!?

『まーサラブレッド坊っちゃんに比べりゃ、お前はTHE・平民だからな』

平民舐めんなよ!?

「え、えーと……俺、や、私は、リアス様の兵士の兵藤一誠です！よ、よろしくお願いしますー！」

か、噛んだ……っ！

『しゅくつて……………ククッ』

『緊張しすぎだろ……………ブフッ』

わ、笑うなよ!!

何か居たたまれないわ!!

『アツハハハハハハ(*、▽、)!!!!』

「ふざけるなテメエら!!」

「…へ?」

あ……………しまった!

ミリキヤス様の前で叫んじまった!

「あー、えつと、すみません!!」

「…ハハッ!」誠様って、お父様やグレイファイアが言うように面白い方ですね!」

え、そんな事言われてたの?

俺がグレイファイアさんを振り替えると、グレイファイアさんは申し訳なさそうに苦笑いを浮かべていた。

まあ、好意的に見られるから良いかな?

「あら、リアス。帰ってきたのね」

ん？誰だと思ひ声のした方を見ると、ドレスを着こなしたためっちゃ可愛い女の子がやって来ていた。

部長のお姉さん……でも、部長に姉がいるなんて聞いたことないし……

「ただいま帰りましたわ。お母様」

あ、部長のお母様か！成る程……

「つて、ええええええええええつ!？」

う、嘘だろ!？」

「ぶ、部長のお母様ですか?!何処をどう見ても女の子じゃないですか!!」

これは一番の驚き！

だって普通に女子校とか大学にいても違和感ないぞ！

「あら、女の子だなんて嬉しいこと仰いますのね。兵藤一誠君」

うわー、頬に手を当てて喜んでらっしゃる！

すげえ、もろ美少女だよ！二児の母とは思えん!!

『人妻か……ゴクリ』

ほら、ドライグが生睡飲むほどだもん!

『オイ兵藤一誠。コイツ何で生睡飲んだんだ』

ドライグは人妻か未亡人が好みなんだよ……。

『これが伝説の二天龍の片割れとはな……』

世も末っつか?

『そういや悪魔は歳を取れば自由に見た目を変えられるんだっけか? リアス・グレモリー』
「ええ。お母様は何時私ぐらいの年齢好で過ごしてるの」

へえ、すげえな。

「つて言うか、俺……私の事を御存じなのですか?」

俺がガキの頃にも会ってない筈だけど……

「ええ。娘の婚約パーティに顔ぐらい覗かせますわ。母親ですもの」

………いたって事は、あの時の恥ずかしい決め台詞も、覚えてらっしやるって事ですよね?

「あ、あの時は本当に申し訳ありませんでした!」

「いえいえ。それにしても……チョリーツス、でしたっけ? 中々ユニークな眷属ねと思
いましたわ」

止めてください、俺の古傷抉らないで!!

「初めまして、私はヴェネーナ・グレモリー。リアスの母ですわ。改めて宜しくね、兵藤一誠君」

『おい相棒。俺に人格変われないのか?』

変わったとしてどうする気だお前!?

『それは……なあ?』

『この女が危ない。警察呼べ』

よし、言質録つたり!

『ちよ、おまwww』

~~~~~

で、何やかんやあって今俺達はダイニングルーム（当然家より広い）で、これから絶対見ないであろう豪華な料理が凄まじい量で盛られていた!

今は夕食時——何でも、冥界にも夜とか昼間とかの概念はあるらしい。

月も浮かんでるけど、人間界のと違って魔力で再現してるんだとか。

『相棒が乱入した時は昼間だったって事か』

そうなるのかね?

「眷属の諸君、遠慮なく楽しんでくれたまえ」

と、部長のお父様がニッコリと笑いながら発した一言でこの会食は始まったのだ。

どデカイ横長のテーブル、天井には豪華なシャンデリア、座つてる椅子もすげえ豪華  
 そうな装飾が施されている。

……………何か、シャンデリアばっか見てる気がするなあ。

普通の蛍光灯が恋しくなってきた……………。

『やっぱお前はTHE・平民なんだねえ』

慣れてたまるかよ!?

天蓋付きのベッドもだけどき、宛がわれた部屋も大きすぎるんだよ!!

改築された俺の部屋よりデカイわ!

『おまけに風呂、冷蔵庫、トイレ、キッチンetc…一通りの生活必需品は揃ってるから  
 な』

ビックリだよ…………部屋にトイレとか。

俺、あつこで一年過ごせる自身あるもん。

そんな広さからか、アジアとゼノヴィアが俺の部屋に引っ越してきたんだ。

まあ、部屋も有り余ってるから良いかな? と思ひ、グレイフィアさんに言つて二人は  
 俺の部屋で過ごすことになった。

……つと、今は夕御飯だった。

とは言うが、俺作法とか全然知らねーからなあ。

後ろのメイドさんとかに訊いても良いのかもしれんが、他の皆は訊いてないからなあ。

『相棒、さつさと食えよ』

『モタモタしてると冷めるぞ』

俺だつて腹は減つてるよそりゃ！

けど、何時も通りに食べたたら部長の面目丸潰れになるし………木場と朱乃さんは優雅に食べてるなあ。

アーシアとゼノヴィアは……苦戦してるけど、それなりに様になつてる。

ミリキヤス様は上手に食べてる。やっぱ教育が違うからなあ。

ギヤスパーは……縮こまって食べてるけど、ちゃんと様になつてる。

小猫ちゃんは一……って、食べてない？

何時もならいの一……に食べるほど大食漢な小猫ちゃんが………どうしたんだろ？

あ、視線反らされた。

つて！こんなに愚図つても仕方ない！食べないと！

と思ひ、俺はナイフとフォークを目の前の皿に盛られた肉に添える。

な、何とか木場とかの食べ方を真似すれば良いのかな…?

「イツセー君、そんなに緊張しなくても……」

「な、何言つてんだよ木場。お、俺が緊張してる訳、な、ないじゃん」

『相棒。どう頑張つてもナイフじゃフォークを切れんぞ』

え……………はぐっ!

肉を切つてたつもりなのに、フォークを切ろうとしてた!!

は、恥ずかしい…。穴があつたら入りたい……。

『穴……………ゴクリ』

『貴様今何考えた』

ドライブグ、下ネタだったらブツ飛ばすぞ。

「ハツハツハ。兵藤一誠君、そう恥ずかしがらなくて良いのだよ。グレイフィア、彼を手

伝つてあげなさい」

「畏まりました」

へ、手伝う?

「ではイツセー様、後ろから失礼致します……」

と、グレイフィアさんは俺が座っている椅子の背後に回り、俺の両手に手を添えた!

「イツセー様、気を落ち着かせて……肩の力は抜いても大丈夫です」

「は、はい……………／／／」

こ、これは……………違う意味で恥ずかしいぞ！

介護されてるみたいには俺は何とか肉を切り分けるけど……………その間女の子（小猫ちゃん除く）の視線が凄まじかったよ！

だって仕方ないじゃん！俺食べ方知らないんだから！

にしてもグレイフィアさん良い匂いだなあ…アロマな香りと言うか……………ずっと嗅いでたい気持ちだ。

「時に兵藤一誠君」

「は、はいー！」

な、何を聞かれるんだ？

「今日から、私の事をお義父さんと呼んでくれて構わない」

お、お父さん？なして？

『ニュアンスが違った気がするんだが』

……………良くわかんね。

「貴方、性急ですわ。先ずは順序があるでしょう？」

部長のお母様が嗜める。

「う、うむ。しかしだな、紅と赤なのだ、目出度いではないか」

「受かれるのはまだ早い、という事ですわ」

「…そうだな。どうも私は急ぎすぎるきらいがあるようだ」

……話が見えないけど、部長が恥ずかしそうにしているのは分かった。

「兵藤一誠君。いえ、一誠君と呼んで宜しいかしら?」

「は、はい! 勿論です!」

まあ、問題もないしな。

「暫くは此方に滞在するのでしょうか?」

「はい。リアス様が此方にいる間はいますが……それが何か?」

「そう、丁度良いわ。貴方には紳士的な振る舞いを身につけてもらわないといけませんから、少し此方でマナーのお勉強をしてもらいます」

えー、勉強っすか?」

俺勉強苦手なだけだな………。でも、何でマナー?」

すると、大きな物音が聞こえた。

見れば、部長がその場で立ち上がっていた。

「お父様! お母様! 先程から黙って聞いていれば、私を置いて話を進めるなんてどうい



う事でしょうか!？」

その言葉を聞いた部長のお母様は目を細める。

そこには、俺達を歓迎してくれた笑顔はなかった。

「お黙りなさい、リアス。貴女は一度ライザーとの婚約を解消してるのよ? それを私達が許しただけでも破格の待遇とお思いなさい。お父様とサーゼクスがどれだけ他の上級悪魔の片方へ根回ししたと思ってるの? 一部の貴族には『我が儘娘が伝説のドラゴンを使つて婚約を解消した』と言われているのですよ? 幾ら魔王の妹とはいえ、限度があります」

『我が儘娘が伝説のドラゴンを使った』か……………あの時、俺がした行動は正しかったのかな?』

部長もライザーと結婚したくないと言つてた……………でも、あの時の行動は、今思うと本当に正しかったのか?』

『相棒。人の行動に、正解も不正解もない。大事なのは、その芯だ。お前は理不尽な大人の都合からリアス・グレモリーを守つた。それは確かな、一つの正義だ。自分の行動に疑問持つたら終わりだぜ?』

……………そっか、そうだな。

「私とお兄様は……………」

「サーゼクスが関係ないとしても? 確かに表向きはそうなってます。けれど、誰だって貴女を魔王の妹として見るわ。三大勢力が協力体制になった今、貴女の立場は他の勢力の元まで知られた事でしょう。以前の様に勝手な振る舞いは出来ないのです。そして何よりも今後の貴女を誰もが注目するでしょう。リアス、貴女はそういう立場に立っているのです。2度目の我が儘は許されません。良いですね?」

うわ、すげえマシンガントークだ……。部長、ぐうの音も出ずに座ったし。

『まあ、兄と関係ない発言は我が儘ではあるな。否応にもリアス・グレモリーはサーゼクスの妹だからな』

まあ、これからの部長の行動一つでサーゼクス様の立場も揺れるって考えると、我が儘も抑えろってことだろうな。

「コホン……。リアスの眷属の方達にはお見苦しい所をお見せしてしまいましたわね。話は戻しますが、ここへ滞在中、一誠君には特別な訓練をしてもらいます。少しでも上流階級、貴族の世界には触れて貰わないといけませんから」

ちよちよちよっ! 俺の都合は無視ですか!?

まあ、特訓以外すること無いけどさ!

「あの……。何で俺なんですか」

すると、部長のお母様は途端に真剣な表情を見せた。

「貴方は……次期当主たる娘の最後の我が儘ですもの。親としては最後まで責任を  
持ちますわ」

……………マジかよ。

# MAGIC 4 2 『冥界満喫ナウ』

「つまり、上級悪魔にとって社交界とは——」

よー皆、イツセーだ。

え、何してるんだって？

勉強だよ。例の貴族社会のルールとか云々の。

朝から教育係の悪魔さんに上級悪魔、上流階級、悪魔とは何ぞやをこうして聞いているんだよ。

まったく眠たいぜ……俺の意思は無視だもんなあ。

まあ、どうしてこんな事させるのかは何となく察しは付くけどさ…。

でも冥界に関しては知らない事の方が多くから結構タメになるんだよな。

俺の質問にも嫌な顔ひとつせずによく答えてくれるし。

他の部員達は皆一緒にグレモリーの敷地を観光……何で俺、冥界まで来て勉強してんだろ？

あ、そうそう。隣ではミリキヤス様も一緒に勉強してらっしゃる。

「若様、悪魔の文字はご存知でしょうか？」

「え、悪魔文字ですか？分かんないです……」

「よろしい。では、そこから一つ一つ覚えていきましょう」

……けどなあ、この「若様」ってのは慣れないよな。

「若様にはグレモリー家の全てをお教えしなければならぬものですから。お覚悟を」

「あの……その「若様」は止めていただけませんか？なんかむず痒くて……」

「いえ、私共使用人が若様のことを名前呼びなど恐れ多いことです」

くそ、やんわりと断られた。

「あ、おばあさまー！」

ん？おお、部長のお母様だ。

そういうやミリキヤス様にしてみましたらお祖母さんなんだな、そうは見えないけど。

「一誠君、ミリキヤス。お勉強は捗っているのかしら？」

「はいー！」

「えつと……ポチポチです」

悪魔文字とかもミリキヤス様のと比べるとかなり拙いし。

でも部長のお母様は俺のノートを見て微笑んでくれた。

「サーゼクスやグレイフィアの言う通りね。何事も一生懸命のようだよ」

「え、私の事をお教えしてるんですか？」

「こりや意外だ。」

「ええ。特にグレイフィアはとても楽しそうに貴方の事を語るわ。エリスさんと一緒に話してる中にも、貴方の事が話題に上がるようですよ」

「エリス、さん？」

「はて、聞いた事ない名前だな。」

「ミリキヤスの母ですわ」

「……………つて事は、」

「サーゼクス様の、奥さんですか？」

「ええ。普段はあまり表には出ませんが、中々の淑女ですわ」

「お母様は、厳しいけどとっても優しいんですよ！」

「へ〜！」

「一度会ってみたいなあ。」

「さぞや美しいんだろうなあ。」

「もうすぐでリアス達も帰って来るでしょうからそろそろ晩御飯の支度を命じません」

と」

え、もう夜かよ!?

『展開の都合だ………ZZZ』

『諦めて腹括れ………グウ』

メタいわ!

なんつー器用な寝言だよ!

~~~~~

「SURPRISE、世界中がDRIVE♪」

等と歌を口ずさむアザゼル先生……あの後飯を食べた俺達はグレモリー家の所有する温泉に浸かっていた。

「先生って温泉好きなんですか?」

「ん? おおよ。こう見えて温泉とかヴァンガードとかの日本文化は中々好きなんだぜ?」

まあ、初めて会った時にも浴衣だったしな。

「ギヤスパー! そろそろ入って来い!!」

「はう!! で、でも………」

「でもなんだよ？お前男だろーが!!」

「きゃー!」

悲鳴を上げるなそして……何故タオルを胸の位置で巻いてる!!

無駄に似合ってるのが腹立つわ!!

「あ、あの……あんまりジツと見ないでください……」

「誰が好き好んで男の裸何ぞ凝視すんだよ!?女見てーなカツコしてるからこつちも戸惑うわ!!」

「そ、そんな……イツセー先輩、僕をそんな目で見てたんですか……?身の危険を感じちゃいますうう!!」

「ええい、黙れ!俺のコブシが可笑しくなるまで殴るぞこの野郎!!」

埒が明かないので俺はギヤスパーを湯船に投げ込む!

「あつついよおお!!イツセー先輩のエッチイイ!!」

「変な事叫ぶんじやねえええええ!!」

ホラー!今隣から笑い声聞こえたし!!

「だーもう!!」

いったん心頭滅却だ!俺は温泉に頭まで浸かる!

「おいイツセー」

「……はい？」

アザゼル先生がいやらしい顔つきでこちらに近づいてくる。

「お前、リアスの胸は揉んだ事あるのか？」

「…一回、事故で触っちゃった事なら」

あの時の柔らかさはまだ覚えてるもん！

「ほう、事故とは言え主の乳を揉むなんざ、将来有望な獣だな」

「獣？」

「俺あな、こう見えて昔は大ハーレムを気づいた男なんだぜ？」

大ハーレム……だと?!

「だからな、女の事で何か分からない事があつたらいつでも聞きな。お前は、俺を越える

ハーレム野郎になれるかもだぜ？」

「はい！俺、絶対童貞を卒業して見せます!!」

「その意気だ!!……つと、それじゃあ」

アザゼル先生は徐に俺の腕を掴むと

「今の内に女の裸体に慣れとけ!!」

「は——うあああああ!!!」

気を抜いてるところに勢いよく投げ飛ばされた先は——女風呂!!

ドッポオオオオン!!

空中で部長たちと目が会って直ぐに、俺は湯船に叩き付けられた。い、痛い……!
ザバンつと勢い良く湯船から顔を上げると、そこは桃源郷だった。

女の子のは・だ・か!!!

って、普通はここで桶とか投げられるんだけど……皆投げるところか裸体を隠そう
ともしなかった!

「あらイツセー、いらっしやい。体は洗ったの?」

「うふふ、イツセー君ったら大胆ですわあ」

「や!か、隠してくださいよ!!女の子なんですから!!」

「ただ俺の言葉は届かなかったのか、近づく二大お姉様——先着の朱乃さんに
ホールドされる!!」

「イツセー君と、ユナイトですわ♪」

な、生乳の感触があああああ!!

あ、朱乃さんアーマー・アクティブ! って言えばいいの、俺は!?

『キスすれば、良いと思うよ』

『接吻、抱擁、そのままベッドにチョーイイネ』

出来るか甲斐性0の俺によおおお!!

後ドラゴン! お前そんな性格じゃないだろ!!

むにゅんっ!

「朱乃! 私のイツセーから離れなさいっ!」

ぶ、部長まで!

ゆ、夢にまでみたおっぱいサンドイツチだけど……………このままでは俺の意識がマズイ!!

『これは面白い展開だな』

ニヤニヤしないで助けろやこの馬鹿!!

「やーですわ。イツセー君と温泉を楽しむって決めましたの。それにしても……………はあ、イツセー君のお体、ホントに気持ちいい……………」

「ダメよ! イツセーは渡さないわ!! この子の髪の毛から全身に至るまで私のものなのだ

からー……………うん、何だか、変な感じ…イツセーに触れてるから？」

『お嬢様発言極まれりだな』

『……………だが、こりやコイツの弱点だな』

や、ヤバイ……………

「うゝむ、あの二人からイツセーを奪うのは至難の業だね」

「あうう……………私も楽しみたいのに」

「アーシア、しよげる事はないさ。私達はイツセーと同じ部屋なのだから」

「…そう、ですね！」

何やらアーシアとゼノヴィアが言ってるけど……………もう、だめ、だ。

「ぐふ」

「イツセー（君）（さん）!?!」

皆、こんな何も纏ってない状態で異性と密着は、止めとけよ……………こうして、俺の意識は堕ちていった。

小猫ちゃんが憂鬱そうな顔を浮かべてるのに、気付けず。

~~~~~

………ここは。

俺が目を覚ますと、周りは暗黒に包まれていた。

周囲を見渡す俺の周りで——暗黒だったそれは人の形を成した。

『なんで、君は幸せなの……?』

やめろ………

『俺達を踏み台にして、のうのうと………』

やめろ………ッ！

『偽善者』





「夢……………」

そう実感すると、ドツと安堵と倦怠感が襲い掛かった。

隣では、アーシアとゼノヴィアがスヤスヤと寝ている。

『どうした相棒。やけに顔色が悪いぞ』

「…ちよつとな」

『……風呂にでも入ってきたらどうだ？そんなんじや、寝汗もたつぷりかいてるだろうからな』

ドライグは敢えて何も聞かないけど……………今は、ありがたい。

「そうするよ…サンキュ、ドライグ」

『…なあ、相棒』

「ん？」

『……………もう、彼女達に話しても良いんじゃないのか？』

……………

「ごめん……………まだ、踏ん切りが付いてないんだ」

嘘だ。



俺は、怖がってる。

部長たちに、否定されるのを…。

『…イヤ、俺も行き成りですまん』

「……」

俺はそれに応えず、アーシア達を起こさない様にそつと抜け出した。

「……………」

~~~~~

「ふう……………」

流石はグレモリー家と言うべきか、こんな深夜時刻でも風呂は温かった。

俺はこれ幸いと湯船に身を預ける。

「……………隣、宜しいですか？」

「ツ!？」

だ、誰!?

と思ひ勢い良く背後を振り返ると、

「ぐ、グレイファイアさん……………」

そう、グレモリー家のメイド長、グレイファイアさんだ。

「は、はい…………でも、どうして?」

「この時間帯は我々使用人が使う時間帯ですよ」

苦笑いしながら俺の隣に腰を落とすグレイファイアさん。

そ、そりやそうだよな。

「あ、あの…………俺、もう出ますんで」

「お待ちください」

恥ずかしさから上がろうと立ち上がった俺だったが、グレイファイアさんに手を掴まれた。

「な、何か…………?」

「先程、顔色が優れないようでしたので……」

も、もしかして、ここに来るの見られてたの？

「いや、ちよつと悪い夢を……ハハハ、すいません。心配かけて」

「……イツセー様」

ふわり、と俺は顔面を包む柔らかさに気付くのにワントンポ遅れてしまった。

耳を澄まさずとも聞こえる、心地良い心音。

そして、視界に広がる健康的な肌色。

こ、コレッ！ぐ、グレイフィアさんの、おっぱい?!!

「何も、何も言わなくて結構です。ですがっ」

アタフタする俺にグレイフィアさんは抱擁の力を強くする。

「そんな辛そうな笑顔は、見たくないです……ッ！」

………上手く、笑えなかつたな。

『今は、その温もりに甘えとけ。相棒』

そう、するよ……………。

俺は何も言わずに、グレイファイアさんに体を暫く預けるのだった——。

次回、D×Dウィザード

イツセー「特訓キターーーツ!!」

タンニン『ほう、中々良い面構えだな。小僧』

アザゼル「イツセー。お前修行中禁手禁止な」

MAGIC 4 3 『特訓、始めます!』

MAGIC43 『特訓、始めます!』

次の日、俺達グレモリー眷属は広い庭の一角に集まっていた。

服装は皆ジャージ。アザゼル先生もジャージ姿……とは珍しい。

庭に置かれているテーブルと椅子に皆揃って早速修行開始前のミーティングって訳だ。

いやあ、ワクワクするなあ!

「最初に言っておく。今から俺が言うのは将来的な物を見据えてのトレーニングメニューだ。直ぐに効果が出る者もいるが、長期的に見なければならぬ者もいる。ただ……お前らは成長中の若手だ。方向性を見誤らなければ良い成長をするはずだ。先ずはリアス」

アザゼル先生に呼ばれた部長はスツと立ち上がる。

「お前は最初から高スペックの悪魔だ。このまま普通に暮らしていてもそれらは高まり、大人になる頃には最上級悪魔の一角になつてゐるだろう。だが、将来よりも今強くなりたい……それがお前の望みだな?」

「ええ。もう二度と負けたくないもの」

多分、ライザーとの戦いの事だよな……ま、非公式でも俺ももう負けたくないからな。「なら、この紙に記してある通りのトレーニングをこなせ」

先生が紙を手渡すも、部長は首を傾げる。

「これって、特別凄いトレーニングではないと思うのだけれど……」

「そりゃあな。そこに書かれてるのは基本的なトレーニングだ。お前はそれで良い。総合的に高い水準だからな。問題は『王』^{キング}としての素質だ。まあ、威風堂々とあれって事だな」

「……?」

『要するに、甘さを捨てろって事だろう? アザゼル』

「……っ」

ドライグの発した一言に部長の顔は強張る。

だがアザゼル先生は「その通り」と頷いた。

『王』^{キング}ってのは力押しだけじゃなく、時として頭も求められる。ゲーム戦術によるゲームの展開とそれらをスムーズに考察する思考、判断力。そして……何事にも動じない冷徹さだ」

「冷徹さ……?」

部長はピンと来てない様子だが、俺には何となくアザゼル先生が言いたい事が分かる。

「お前のその優しさは最大の美点であると同時に弱点でもある。下僕がやられただけで取り乱す様じゃ『王』^{キング}としては半人前だ。せめて試合中は冷徹になれ。それこそ、眷属を使い捨てにするという覚悟を持てる位にな」

「で、でも……………一人でも欠けての勝利なんてっ！」

「それが『甘い』んだ。そんな綺麗事を達成できる程、レーティングゲームの上位君臨者は甘くねえ。そう言った意味では、お前はライザー・フェニックスよりも未熟だ。仲間がやられても動じるな。頭のお前が動じれば、手足の眷属達にも伝染する。何事にも動じない心……………」

「……………」

部長はぐうの音も出ずに引き下がるが、やはりその顔はまだ納得出来ない、と言った感じだ。

でも部長には悪いけど、そこは直さなきゃいけない事には俺も賛成だ。恐らく、皆も。

部長は優しい……………いや、優しすぎる。

だからこそ、それを直さなきゃいけない。

仲間がやられて動揺するのは百歩譲って良いけど、それを心配するな。或いは激昂して身を滅ぼす様じゃ駄目って事だ。

俺達下僕は基本『王』^{キング}である部長を生かすために行動している。

その仲間に対して一々心配の声を上げるんじゃ、俺達が必死こいて動いた意味も無くなっちゃう。

だからこそ、部長には俺達を使い捨てにする程の冷徹さを身につけてほしいとは、常々思ってた所だ。

『情愛の深いリアス・グレモリーに対して情愛を捨てろとは難題だが、そうでもしなければ強くなれん。この特訓でそれを身につける他あるまい』

だよな。

「次に朱乃」

「……はい」

おお、何時になく不機嫌な御様子だ。

多分、お父さん絡みだろうなあ。

「お前は、自分の中の血を受け入れろ」

「っ!」

朱乃さんもストレートに言われた為か、顔をしかめる。が、アザゼル先生は容赦なく続ける。

「フェニックス家との一戦、見させてもらったけどよ……何だあの様は？ 本来のお前のスペックなら敵の『女王』^{クイーン}も普通に倒せた筈だ。……何で、堕天使の力を振るわない？ 雷だけじゃ限界もある。光を雷に乗せた『雷光』にしなきゃお前の本来の力は発揮できない」

そっか。朱乃さん堕天使の力も使えるから光の力も使える訳か。

けど朱乃さんは複雑きわまりない様子で言葉を紡ぐ。

「……私は、あの様な力に頼らずとも」

「そんなんで強くなれるほど、現実は甘くねえ。否定は、己を弱くする。良いか？ お前は自分を全て受け入れる。でないと、お前は後の戦闘で邪魔になる」

「……………」

朱乃さんは何も言わずに引き下がったけど、やらなきゃいけない事だけは分かるだろう。

「次は木場だ」

「はい」

「お前は禁^{バランス・プレイヤー}手を解放してる状態で一日保たせてみる。それに慣れたら、実践形式の

中で一日保たせる。まあ、ここに先輩がいるから、コツでも聞いとけ」

「え……?」

アザゼル先生はにんまりと笑い、俺を指差した。

「イツセー。ドライグから聞いたぜ? お前、中学時代に一日禁^{バランス・プレイカー}手で過ごしたらしい

じゃねーか」

「ドライグ、何時話したんだよ……」

『昨日お前が風呂で倒れた時だ』

「……イツセー君は、どういう風にして特訓したんだい?」

「ん〜……風呂と飯と寝る時以外は^{バランス・プレイカー}ずっと禁^手で過ごしてたよ。平常でも保たせる

為にな。で、持続時間が伸びれば飯の^{バランス・プレイカー}時にも禁^手、だな」

イヤー、大変だったな。

箸とか何本折ったか。

「コツは……そうだな。あんまり力むなって事ぐらいかな? 力むと余計に力が入って却って長持ちしないからな。呼吸をするようにそれを当たり前の様に少しずつ馴染ませる。そんなぐらいかな?」

「力むな、か……有り難う、参考にさせてもらおうよ」

まあ、全部ドライグからの受け売りだけだね。

「劍系セイクリッド・ギア神 器の方は後でマンツーマンで教えるとして……劍術の方は師匠のもう一度習うんだったな？」

「はい。一から指導してもらおうつもりです」

へえ、コイツにも師匠とかいたんだな。

「次にゼノヴィア。お前はデュランダルを今以上に使いこなせる様になることと……もう一本の聖劍に慣れて貰う」

「もう一本の、聖劍？」

「ああ、ちよいと特別な劍だ。ま、楽しみにしとけ」

アザゼルは次にギヤスパーを振り向く。

「うーし、ギヤスパー」

「は、はいいい!!」

朝っぱらからビビってどうするよ、ギヤスパー……。

「そうビビんな。お前はその恐怖心を克服させる」

恐怖心……

「先生、もずく風呂ですか？」

「イツセー、ボケるならもうちよい場を弁えてくれ。コイツ、ちよつと信じかけてるか
ら」

「も、もずく風呂に浸かるんですか……?」

「ちやうちやう。お前には専用の『墮天使特性!引きこもり脱出計画!これで気になるあの子も開放的!』を組んだから、そこで先ずは真つ当な心構えを身に付けてこい。それが全部出来なくても、最低限人前に出ててもビビらないようにしろ」

最後の気になるあの子も開放的!?!とかはいるのかねえ……?……?……?

『昔のやつすいエロゲでありそうでない感じだな』

まあ、有りそうだな。

「はいいい!!当たって砕けろの精神で望みますううう!!」

『本当に砕けそうだな……』

止めろよドラゴン……俺もおんなじ事思っただけだ。

「よし、続いてはアーシアだ」

「はー!」

おー、気合い入ってるなあ。

前に一度、自分が役に立ってないかもしれないと告白された事があつたけど……そんな事はないぜ。

アーシアの回復力がなきや、危ない場面もあつたし。

「お前も基本的なトレーニングだな。基礎はイツセーと一緒にやってるらしいから問題

はない。メインは神セイクリッド・ギア 器の強化だ」

「強化…ですか？」

「アジアは可愛らしく首を傾げる。

もう、可愛いなあ。

「ああ。回復能力はすげえスピードだと思うが、問題もある。『触れなきや』出来ないって点だ。仲間が怪我してんのに、態々走らなきや回復できない」

「そう言うことか……………」

「もしかして、アジアの神セイクリッド・ギア 器は範囲を広げられるの？」

部長の言葉は、今正に俺が確信したのと同じ答えだ。

先生はそれを肯定する。

「ご名答だ、リアス。ま、裏技みたいなもんだがな」

つまり…………回復範囲を広げれる事だ。

これなら動かなくても瞬時に回復出来るし、アジアが余計に動いて敵にそこを突かれるリスクもない…………アジア、ちゃんと役立てるぜ！

けど、そこにも問題はある。

「だが、問題もある。敵味方の判別が出来ずに回復させてしまうかもしれない所だ」

「…………優しさ、ですか？」

俺の問いにアザゼル先生は真剣な面持ちで頷く。

「アーシアは戦場で敵の怪我を視認したとき、ソイツの回復もしてやりたいと思っ
まうだろうな。それが敵味方判別の神器セクリッドギア能力の妨げになる。この回復範囲拡大は
このチームにとっては諸刃の剣だ。けど、これは覚えて損はない」

アーシアの範囲拡大は、敵のダメージもなかった事にしかねない……それほど、アー
シアの神器は凄まじい回復能力だからな。

「だから、もう一つの可能性を見出だす。……回復のオーラを飛ばす力だ」

「飛ばす……宇宙のチリになれ……っ!! って感じですか?」

アーシアは叫びながら飛ばすジェスチャーをする。

可愛いけど………何で台詞チヨイスがベジータ?

『ご丁寧にギヤリック砲の構えだしな』

「そうそう、直接飛ばす感じだ。今の台詞はいらなからな」

「アーシア、大活躍待ったなしだぜ!」

アーシアは驚きながらも嬉しそうな様子だ!

「直接触れるよりは力は落ちるだろうが、それでも十分に戦略性が幅広くなる。前線に
一人二人飛び込ませて、後方で回復のアーシアとアーシアを護衛する誰かを配置すりや
あ、理想的なフォーメーションが組めるだろうさ」

それを聞いてアーシアは拳を作り、特訓に意気込んでいた。

うむ、頑張れよアーシア！

「うし、基礎トレーニング、サボるなよ？」

「はい！頑張ります！」

「よし、その意気だ……つと、次は小猫だ」

「……はい」

お、小猫ちゃん妙に張り切ってるな。

そういうやこんと元気ない感じだったけど、大丈夫なのかな？

「お前はオフエンス、ディフェンス、『戦車』^{ルーク}としての素質を申し分ないほど持つてる。身体能力も然りだ。……けど、リアスの眷属には『戦車』^{ルーク}のお前よりよオフエンスが上の奴が多い」

「……分かっていきます」

小猫ちゃん悔しそうな表情を浮かべていた。

「リアスの眷属でトップのオフエンスはイツセーだ。次点で木場とゼノヴィア。
ブリステッド・ギア・スケイルメール
 『赤龍帝の鎧』に、バランス・ブレイカー 聖魔剣の禁手、バラン 聖剣デュランダル、凶悪な兵器のオンパレードだ。ここに予定してるイツセーの更なる強化が入ると……オフエンスに隙も間も無くなる」

「……………」

小猫ちゃんは黙りになりながら話を聞いていた。

「小猫、お前も他の連中同様に基礎の向上だ。その上で、お前が封じてる物をさらけ出せ。自分を受け入れななきゃ、成長出来やしねえのさ」

「……………」

小猫ちゃんは「……何も答えなかった。」

さつきまでの気合いも、「さらけ出せ」「……この一言で消え去った。」

力つて……小猫ちゃん、何を抱えてるんだ？

「さて、最後はイツセー。お前だが……………そろそろなんだがなあ」

空を見上げて呟く先生……何が降ってくるんだ？

眷属や俺も空を見上げると「……デカい影が差した!!」

ドオオオオオオンツ
!!!!

うおお!?

驚く間もなくそれは轟音を轟かせ着地した!

砂埃が晴れてそこにいたのは「……」

「ドラゴン!!」

「そうだイツセー。コイツはドラゴンだ」

うおお、カッケー!!

「アザゼル、よくもまあ悪魔の領土に堂々と入れたものだな」

すげえ、喋れるんだ!

しかもダンディー!

「ハッ!ちゃんと魔王様の許可は取ってるよ、文句あるか?ーイータンニーン」

「ふん、まあ良い。サーゼクスの頼みと言うから来てやったんだ。そこは忘れるなよ、総

督殿」

「わーってるよ。てな訳だ、イツセー。コイツがお前の先生だ」

え、

「ええええええ!?このドラゴンが!?!」

「ん?このオーラは………久しいな、ドライグよ」

ドラゴンは俺の方……いや、恐らくは俺の中に語りかける様に話しかけてきた。

すると、俺の左手が赤く輝き、ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手が出現する。

『よお、懐かしいな。タンニーン』

「ドライグ、知り合いか?」

俺が聞くと、ドライグは肯定する。

『ああ。コイツは元龍王の一角だ。前に『五大龍王』の事を話したろ? タンニーンは『六大龍王』だった頃の龍王の一匹だ。聖書に記された龍をタンニーンと言うのだが、コイツを指している』

へえ、そーういやティアも龍王だったな。

「タンニーンが悪魔になって、『六大龍王』から『五大龍王』になったっけな。今じゃ、転生悪魔の中でも最強クラス。最上級悪魔だ」

ドラゴンからも悪魔になれるんだな!

それに、転生悪魔でも上を目指せる……………うん、良いねえ!

『魔フレイズ・ミティア・ドラゴン 龍 聖』タンニーン。その火の息は隕石の衝突にさえ匹敵すると言われる。

今だ現役で活動してる数少ない伝説のドラゴンだ。悪いがタンニーン、この赤龍帝のガキを鍛えてやってくれ」

ええ……………さ、流石にヤバくねえか?

「見たところドラゴンのオーラは申し分ない。恐らく、禁バランス・ブレイカー 手に目覚めてるんだらう

? 俺に頼まずとも、ドライグが教えれば良いのではないか?」

「それじゃあ今回の目標には到達できません。それに、ドラゴンの修行と言えは……」

「元来から実践方式。成る程、俺にこの少年をもっと苛めぬけと言うのだな」

「そゆこと。後もう一人いるんだ」

「何？」

「変わってないな、タンニーン」

と、俺の後ろから女性の声が聞こえたー！ー！って、

「ティア!?」

「……ティアマツト。お前、冥界にいたのか？」

「いや、今はこの男の使い魔だ」

「……………ハツハツハ！ドライグを嫌っていたお前が、赤龍帝の使い魔か！」

「笑うな。それに私はドライグに使えるんじゃない。イツセーに使えるんだ」

そう言つてティアは俺を背後から抱き締めるが……おっぱいが当たってる！当たってる!!

「ほう、お前がそこまで入れ込むのか。益々興味が沸いたぞ、少年」

「せ、先生……流石に二人相手は禁^{バランスポレイカー}手でもキツいんすけど……………」

龍王だろ?!死ぬって!

「ああ、イツセー。お前の特訓に一つ制約を課す」

「な、なんすか」

「お前、バランス・プレイヤー 禁 手禁止な」

.....は？

「や、ちよ、言ってる意味が理解できないんですけど.....」

「お前の新しい力を目覚めさせるには、オーラが分散される禁バランス・プレイヤー 手だと効率が悪いんだよ。つつー訳だ、二人とも。死なない程度にポコつてくれや」

「まるで意味が分からんぞ!!」

俺が叫ぶも、二人は既にノリノリだ。

「安心しろイツセー。ちゃんと手加減はしてやる」

「クツクツク。ドライグを宿す者を鍛えるのは初めてだな.....だが、面白そうだ!」
止めて!俺死んじゃう!!童貞卒業する前にあの世行きだよ!!

が、俺は首根つこをタンニーンのおっちゃんに掴まれる!

「リアス嬢。あそこに見える山を貸してもらえるか?そこで特訓を始める」

「ええ、沢山鍛えてあげて」

「任せろ」

え、何?あれが俺の死に場所!?

冗談じゃねえー！！！！

「イツセー、気張りなさい！」

「そりゃないっすよ部長おおおおお！！！」

拝啓、天国の父さん、母さん。

俺、もしかしたらそっちに逝くかもしれない………皆の希望になりきれなかった、非力な私を許してください

『許してやるよお！！』

揃ってベクターの物真似するんじゃねえ！！！！

MAGIC 4 4 『薄幸の白猫』

夏——それは、誰もが浮かれる熱い季節。

皆は海に行ったり、BBQやったり、祭りに行ったり、気になるあの子とイチヤイチヤしたり——まあ、色々あると思う。

そんな中、俺はと言うとだ。

「うおおおおおっ!？」

《ディフェンド・プリーズ》

山の中で、ドラゴン2体と鬼ごっこを繰り返していた。

っていうかモノローグの時に攻撃は止めてくれよ!

「ほう、今の一撃を受け止めたか」

俺の修行の先生————タンニーンのおっちゃんは感心した様に呟いた。

「デイフェンド越しても腕痺れてんだけど！」

「だが少年、お前の相手は俺だけではないぞ？」

『相棒、地中から熱源反応だ』

下から来るぞ！ 気を付けろ————って！

「フンッ!!」

「うおおおおお!!」

俺は地中からプレスと共に突貫してきたティアを何とかジャンプでやり過ぎす！

まあそれだけでは味気ないから、カウンター撃たせてもらうぜ！

「爆裂の龍波動!!」
エクスプロージョン・ドラゴンショット

「同じ手は食わん！」

が、ティアは口許に魔法陣を展開、そこから光球を作り出すと俺のドラゴンショットと相殺させる！

2つの魔力弾は空中でぶつかり合うと連続で爆発を繰返し消滅した。

マジかよ………。同じ性質の魔力弾を瞬時に創り上げたのかよ!?

「流石だなイツセー。不意討ちにも対応するとは」

そりや、態々付き合ってもらってんのに逃げるなんて失礼だろ？
けど、つつかれたあ……………。

「龍王二人を相手に根を上げないとは流石だな」

「ツ!？」

だ、誰だ!？」

声の聞こえた方に振り向くと、そこには野生的なイケメンが仁王立ちしていた。

「アンタは……………？」

「フツ、ただの見物人だ。お前の根性、中々な物だ……………だがっ!」

「ツ!？」

その人が足に力を含めると、地面に軽く亀裂が走った!

俺は即座に赤龍帝の籠手を展開する!

この人、ただ者じゃない……………ツ!

「根性だけで這い上がれる程、上は楽ではないぞ」

「……………」

「まあ、頑張ってくれ。そして、何れ会おう、兵藤一誠」

それだけ告げると、その人は去っていった。

何者だ、あの人……………

ドゴオオオンツ!!

「うおっ!?!」

「こんな所に隠れてたか」

「フフ、また気配を絶つのが上手くなったな。イツセー」

バレたか……………多分、さつき気を張ったからだろうな。

「上手くなんなきや死ぬからな!」

「それもそうだ、なっ!!」

タンニーンのおっちゃんは俺に拳を向けて振り下ろす!!

「だったら!」

《ビッグ・プリーズ》

俺もおっちゃんの拳と同じ大きさに左手を巨大化させてぶつかり合う……が、体の大きさは変わらないので俺はおっちゃんの体重を支えきれず、吹っ飛ばされる!!

「むん!」

「ぐあああああつ!!」

吹っ飛ばされた俺に接近したティアは尻尾の一撃で更に追い討ちを掛けてきやがったので、俺は地面にめり込んでしまう!!

いつてえ………魔力で体のコーティング間に合ってなかったら、ミンチにされてたよ。

何とか這い出て、俺は改めて対峙する。

「おー、頑張ってるなー」

が、どうやら一時休憩らしい。

あの憎き我らが独身総督、アザゼル先生の登場だ。

何かの包みを複数持ちながら。

~~~~~

「ウマツ！これ美味すぎっ!!」

昼飯休憩という事で、俺はアーシアとグレイファイアさんが作ったお弁当をガツガツ食べる！

目茶苦茶美味しいよ！久しぶりに食べるから尚更……ッ！

「ほらよ、こっちはリアスと朱乃からだ。二人とも火花散らして作ったからな」

「マジすか!?!」

やった！もう幾らでも胃袋に入るぜ!!

今度は部長達の弁当をかつ食らう！

「んで、どうよ二人とも。コイツの力は？」

アザゼル先生に聞かれた二人は、考える素振りを見せずに答えた。

「うむ。禁バランス・ブレイカー手を禁止されているとは言え、中々の力量だ。それに、あの魔法も中々

面白い」

「基礎特訓を怠らずに修行しているからな。そりゃあ強いさ。以前よりも力は上がってると見て良い」

おお、中々好評価だ。

「へえ、良かったなイツセー。龍王2体に太鼓判押されてるぜ？」

「俺は元龍王だがな」

照れ臭そうにおつちゃんはそっぽを向いた。

が、次にはこつちを振り向き、神妙そうな声音で先生に語りかけた。

「アザゼルよ。本当に神セイクリッド・ギア 器の究極である禁バランス・ブレイカー 手の更セイクリッド・ギアに上を行く極致はあるのか？」

「……………確實ではないな。俺は以前イツセーが激情で引き出したあの鎧姿、あれはど  
う見ても俺の知ってる赤ブラステッド・ギア・スケイルメイ龍帝の鎧とは違うようなんだ」

「だが、それは本当に禁バランス・ブレイカー 手の力の一旦那のか？」

「……………神セイクリッド・ギア 器はまだ不明瞭な点が多い。それこそ、創造主たる神ですらな。だか  
ら、俺はあえて禁バランス・ブレイカー 手の更なる極致……………って呼んでるだけさ」

うーん、何やら小難しい話だな……………。

ドライブグ、お前はどう思ってる？

『アザゼルの言う通り、あの力は歴代の赤龍帝では見られなかった力だ。アザゼルの言  
う通り、神セイクリッド・ギア 器の未知なる極致かもしれんが……………俺はお前だからその力を引き出  
せたのだと思う』

…俺だから？

『ああ、自らの為でなく他者のために怒り、泣く。そんなお前だからこそ、引き出された  
のかもしれない。歴代の赤龍帝の大半は力に溺れた奴等ばかりだったからな』

………言い換えれば、俺だけの可能性って事か？

『ま、そうなるな』

「そうダイツセー」

と、アザゼル先生に呼ばれたので意識を浮上させる。

「はい？」

「お前、朱乃の事はどう思ってる？」

唐突だな、オイ。

「どうって………それは先輩として、ですか？」

「違う違う。女として、だ」

「えっと………奥さんだったら嬉しいかなあとは思いますが。まあ、魅力的ですよ。高嶺の花って言うか」

そう言うのと、先生は安堵したかの様に頷いた。

「そうか。いや、お前ならそう言うと思ってた。……朱乃の事だがな、お前になら任せられるかと思ってんだ」

「任せる？」

………もしかして先生、朱乃さんに負い目を感じてるのかな？

だから少し気にしてる素振りを……？

それはまあ兎も角だ。

「任せるって、もしかして……………」

俺がまさかと思ひ探りを入れると、アザゼル先生は驚いたかのように眼を丸くした。

「……………イツセー、お前まさか」

「も、勿論守りますよ！部長も、アーシアも皆！俺が守りますからー！」

その先を言わせまいと、俺は捲し立てる様に言葉を紡いだ。

「……………まあ、その何だ。朱乃はお前にも任せる。それよりもだー問題は大猫だ」

「小猫ちゃん？」

最近調子悪かったみたいだけど、どうかしたのかな？

「どうにも焦ってやがる。と言うよりも、自分の力に疑問を感じてるみてえでな」

溜め息を溢しつつ、先生は続けた。

「俺が与えたトレーニングを過剰に取り組んでな。今朝、倒れた」

倒れたって……………！

「もしかして、オーバーワークですか？」

「ああ。怪我の方はアーシアに治療してもらったが、体力だけは回復しないからな。特

にオーバーワークとなると確実に筋力等を痛めて逆効果だからな」

俺も一度経験あったっけ……………小さい頃、最弱のレットル崩すために鍛えすぎて倒れたな。

あの時はドライグにも父さん達にも怒られたっけ。

「つと、イツセー。一旦お前を別館に連れ戻せと言われてるからな。悪いな二人とも。

明日の朝には戻すから、少しの間だけ返してもらおう」

「構わんぞ」

「どれ、タンニーン。お前の領土はどんな風になってるんだ？」

「ならば来いティアマツト。客人として招待しよう」

ん？俺山から下りるのか？

「先生、誰からの連れ戻し命令ですか？」

「リアスの母上殿だ」

……………な、何で？

疑問は尽きない物の、俺は一度山を下りる事になった。

~~~~~


「はい、そこでターン。ダメね、キレが悪いわ。ほら一誠君、ポケットとしての暇はありませんわ」

……俺、何で踊ってんの？

今俺がいるのはグレモリー本邸から少し離れた別館。

そのの一室で、俺は何故か部長のお母様とダンスの練習に励んでいた。

……もう一度言おう。俺、何で踊ってんの？

しかも俺はこう言うのは夏祭りの盆踊り程度しかかじってないからでダメダメだった。

イヤー、部長のお母様、大分スパルタです！

「少し休憩しましょう」

やっと、解放された……………！

まあドラゴン２体との鬼ごっこよりは幾分楽かもだけどさ。

「あの……………」

「何かしら？」

「何故に私だけなのですか？他の二人は？」

あの勉強会といい、このダンス練習といい何故俺だけこんなの叩き込まれなきゃなら

んのだ？

「木場祐斗さんは既にこの手の技術を身に付けていますわ。ギヤスパークさんは吸血鬼の名家の出。頼りない振る舞いですがそれ相応の作法は知っていますわ。問題は貴方です。人間界の平民出とは言え、一定以上の作法を身に付けていただかないと困ります。貴方はリアスと共に何れ社交界に顔を出さねばならないのですから。冥界滞在中に少しでも習わしを覚えねばなりません」

「……………すみませんね、平民出で」
俺は聞こえない程の音量で呟く。

しかし社交界か……………

「それは俺とリアス様が結婚する前提ですか？」

「つ……………口が滑りましたわ。兎に角、そう言うこともあるかもしれないという話です」

案外口が滑りやすいのかもしれない、グレモリー家は。

部長のお父様然り。

まあ、この話題は置いとくとしようか。

「あの……………小猫ちゃんは大丈夫なのですか？」

「ええ、ただのオーバーワークですので。一日か二日、ゆっくり休めば回復するでしょう」

「そうですか……」

「…彼女は今、懸命に自分の存在と力に向き合っているのでしょう。難しい問題ですけど、自分で答えを出さねば先には進めません」

ん？

「……存在と、力？」

今思うと、俺って小猫ちゃんの事全く知らないよな………。

「……そう言えば、貴方はリアスの眷属になってまだ間もなかったわね。それでしたら、知らないのも無理はありませんわ。…少し、お話をしましょう」

——それは、二匹の姉妹猫の話だった。

ある姉妹の猫は、いつも一緒だった。

寝るときも食べるときも遊ぶときも。

親と死別し、帰る家もなく、頼る者もなく、二匹の猫はお互いを頼りに懸命に生きて

いた。

「二匹はある日、とある悪魔に拾われました。姉の方が眷属になることで、妹も一緒に住めるようになりました。やっとマトモな生活を手に入れた二匹は幸せな時を過ごせると信じていたのです」

でも、その幸せは長くは続かなかった。

姉猫は、力を得てから急速なまでに成長を遂げたそうだ。

隠れていた才能が転生悪魔となった事で一気に溢れ出たと、部長のお母様は言った。

「その猫は元々妖術の類いに秀でた種族でした。その上、魔力の才能にも開花し、あげく仙人のみが使えるという仙術まで発動したのです」

短期間でわ主をも越えた姉猫は力に吞まれ、邪悪な存在へと変貌したそうだ。

「力の増大が止まらない姉猫は遂に主を殺害し、『はぐれ』と成り果てました。しかも『はぐれ』の中でも最大級に危険な存在と化したのです。追撃部隊を悉く壊滅させるほどの……」

上層部の悪魔達は、その姉猫の追撃を一旦取り止めたと言う。

「残った妹猫。悪魔達はそこに責任を追求しました」

『この猫も何れは暴走する。ならば今の内に始末した方が良い』と。

「処分される予定だったその猫を助けたのがサーゼクスでした。サーゼクスは妹猫にまで罪はないと上級悪魔の面々を説得したのです。サーゼクスが監視すると言う事で、事態は収拾しました」

でも、信頼していた姉に裏切られ、他の悪魔達に責め立てられた小さな妹猫の精神は崩壊寸前だったそうだ……………。

「サーゼクスは、笑顔と生きる意志を失った妹猫をリアスに預けたのです。妹猫はリアスと出会い、少しずつですが感情を取り戻していきました。そして、リアスはその猫に名を与えたのです。——小猫、と」

……………じゃあ、今の話しは、小猫ちゃんの!?

と言うことは、小猫ちゃんの正体は……………

「彼女は元妖怪。猫又と言う猫の妖怪。その中でも最も強い種族、猫シヨウの生き残りです。妖術のみならず、仙術も使いこなす上級妖怪の一種なのです」

~~~~~

話を聞き終えた俺は本邸に戻り部長のお母様に教えられた道を行き、小猫ちゃんの部屋の前に着いた。

事前に入っても構わないとの事なので一応ノックして入室すると、朱乃さんがベッドの脇で待機しており、そのベッドには小猫ちゃんが横になっていた。

……………本当に、妖怪なんだな。

俺は小猫ちゃんの頭に生えている猫耳を見て内心驚いていた。

どう見てもカチューシャではないし。

にしても…………可愛いなあ。つとと！そんな事言いに来た訳じゃないだろ！

「イツセー君、これはーローー」

「いえ、一応は聞いているので、大丈夫です」

…特に目立った怪我はないか。

まあ怪我ならアーシアが回復させたって聞くし、まあ体力の問題か。

「やつ、体大丈夫かい？」

俺は笑顔で聞くも、彼女は半眼で呟いた。

「……………何しに来たんですか？」

おおう、大分ご立腹だね。

多分俺が来たからだろうな。

「心配だから来たって理由じゃ怒るかい？」

「……………」

小猫ちゃんは無言だ。

「小猫ちゃん。色々聞いたけどさ、オーバーワークは駄目だよ。体は大事にしなきゃ

「……………なりたい」……？」

すると、小猫ちゃんは俺の言葉に被せて何かを呟いた。

「うん？どうしたの？」

俺が聞き返すと、小猫ちゃんは此方を見詰めてハッキリとした口調で言った。

その眼に、涙を溜めながら……。

「強く、なりたいんです。祐斗先輩やゼノヴィア先輩、朱乃さん……………そして、イツセー先輩の様に、心と体を強くしていきたいんです。ギャー君も強くなって来てます。アーシア先輩の様に回復の力もあります。……………このままでは、私は役立たずになってしまう……。グレモリー眷属の『戦車』<sup>ルック</sup>なのに、私が一番……弱いから……………。お役に立てないのは、イヤです……………。だけど、内に眠る力を……猫又の力は使いたくない……………。使えば私は……………姉様の様に……………。もうイヤなんです……………もう、あんなのはイヤ……」

.....成る程。

「小猫ちゃん、君の気持ちは分かるよ。でも……言わせてもらおう」

「……………」

「自分の体の状態を考慮出来ない奴が何したって、強くはなれないよ」

「ッ!!」

小猫ちゃんは更に悲しそうに顔を歪める。

でも、今の彼女に必要なのは中途半端な同情じゃない。

だから俺は続ける。

「今もお姉さんの様になるって言ってたけどさ、君は君だろ？お姉さんが暴走したとして、君までもが暴走するとは限らないじゃないか」

「……先輩に、何が分かるんですか?! 私はいッサー先輩の様に、強くなってるから!!」

「他人と自分を比べて弱いと理由付けて! 何時までも力から逃げても、強くなってる訳ないだろ?!」

俺は一度呼吸を落ち着けて、静かに言葉を紡いだ。



「小猫ちゃん。君は嫌でも何時か猫又の力と向き合わなきゃならない。ここで地団駄踏んでても、ただ遠退けてるだけなんだぞ？」

「……………」

「それに、君は皆が強いつて言うけど、強くなってる。皆、心では弱さを抱えてる物さ。君の様に」

「…弱さを」

「弱さを抱えるのは、悪いことじゃない。けど、その弱さを乗り越えなきゃ、ずっと弱いままだ。体も、心も」

俺だつてそうだ。

でも、それを理由に眼を背けても、何も始まる訳がない！

「君が味わつてきた苦しみは、君にしか分からない。でも、何時までもそれに阻まれてるんじや、本当の意味で君は部長の足枷になる。それでも良いのかい？」

「……………」

足枷と言う言葉に、悔しそうに目尻に涙を浮かべる小猫ちゃん。

「それに、皆思い通りに、自分にしか出来ないことをやって……………。弱さに挫けて、泣きたくなくても、進まなきゃ何も始まらない。……………。これだけは、伝えたかったんだ。小猫ちゃんも朱乃さんも、それだけは覚えていてほしい」

俺はそこで言葉を切り、部屋を出ていった。

『相棒、何もお前まで嫌われ者にならなくても良いんじゃないか？いや、ともすれば、お前はアザゼル以上に嫌われるかもだぜ？』

それだったらそれでも構わないさ。

それに、何だか今の小猫ちゃんは昔の俺を見てる気がしてさ……………。

『そういやお前も弱いのを理由にして特訓に駄々捏ねてたな』

逃げたって、何も変わらない事を、小猫ちゃんには知ってほしいんだ。

『お前も何だかんだでお人好しだな』

良く言われるよ……………さて、もう人頑張りしますかね。

次回、D×Dウィザード

アーシア「若手挨拶、ですか？」

木場「シトリー眷属との対戦か……………」

黒歌「久し振りにゃん、白音♪」

MAGIC45 『若手集結と再会』

イツセー「これが、俺だけの可能性……………!!」

# MAGIC 45 『若手集結と再会』

木場 side

やあ、皆。僕視点は本当に久し振りだね。

僕達グレモリー眷属はこの一週間修行で強さを磨いていた。

恐らく、皆見違える様に強くなってる……と思うよ。

「やあ木場」

「…ゼノヴィア？」

そこには何の奇怪か、ぐるぐる包帯が巻かれた何かが喋っていた……何と言う未知との遭遇ッ！

………まあ、ゼノヴィアだけだね。

と言うかさつき言っちゃったし！

「随分鍛えたみたいだね」

「まあね。そう言う君もね」

「当然！」

とは言うけど、ミイラ姿じゃ説得力ないよね…。

ま、まあ、体のオーラも強さを増してるけどね？

「ぜ、ゼノヴィアさん?!」

……と、ここで我らがグレモリー眷属の癒し担当、アーシアさんの登場だ。

彼女も以前よりオーラの流れが良くなってるね。

「その声はアーシアか！久し振りだな」

「お、お怪我をなされたんですか?!」

「アーシアさん、多分大丈夫だと思おうよ」

恐らくは手当てした事ないから適当に巻いたとかだろうからね………まあ、そんな

大事な怪我ではないだろう。きつと。

「祐斗さんもお久し振りです！」

「うん。アーシアさんも元気そうで何よりだよ」

ああ、イツセー君が日頃癒されると言うのが分かるね………。

「皆さーん！」

ん？この声は……………

「ぶへっ!？」

「ギャー君、慌てすぎ……………」

ギャスパー君に小猫ちゃん!

二人の姿を見るのも久し振りだね。

「小猫ちゃん、怪我は大丈夫ですか？」

「はい。アーシア先輩、有り難う御座いました……………」

「祐斗先輩、少し肉付きが良くなりましたか？」

「うーん、どうだろう。僕はあんまり肉が付かないからね……………つて!」

僕は衝撃に駆られた!

何故かって?それは……………!

「ギャスパー君が、どもつてない……………!？」

そう、極度の対人恐怖症を抱えていたギャスパー君が、僕とどもらずに喋っていたんだ!  
これにはアーシアさんとゼノヴィアもビックリだ。

「は、はい！身内の人達や一度会った方達なら驚くことも無くなりましたあ！」  
「凄いです、ギヤスパ―君！」

アーシアさんに褒められ、「えへへ……」と照れた様に笑うギヤスパ―君。  
「久しぶりね、皆」

この声は……………

「……部長（さん）!!」

我らが御主人様、リアス部長だ！

「あらあら、部長ったら人気者ですわね」

その背後から朱乃さんもひよっこり顔を出す。

お二人とも以前より格段に強さを増してゐる様な印象を受けるよ……！

「へっ。ちよつと見ない間にマシな面構えになったな」

後ろからアザゼル先生がやって来てそう僕らに言った。

もう今なら普通に先生の気配も察する事が出来るからいきなり現れても驚かないね  
……………

「さて、全員集まったし、魔王領に行くか。確か、恒例なんだろう？若手悪魔の集まりってのは」

「若手挨拶、ですか？」

「ああ。将来有望な悪魔を集めて抱負を語ったりするんだよ」

アザゼル先生の言う通り……………だけど。

「全員？アザゼル、イツセーがいないわよ？」

そう、グレモリー眷属唯一の『兵士』<sup>ポーン</sup>たるイツセー君がいないのだ。

一応今日の集まりがあるのは知ってる筈だけど……………？

「あー、それについては気にすんな。アイツなら今は……………」

その時、僕らのいる場所から少し離れた山から轟音が轟いた！

「最終日って事で熱入ってやがるから、遅れるそうだ。ま、タンニーンが挨拶までには間に合わすと言ってる」

「……………仕方がないわね」

呆れた様に言うけど、部長は笑顔だ。

「それなら、皆行きましよ。後でまた個人の修行結果報告が楽しみだわ」  
嬉しそうに言う部長に続くように、僕らもその場を動いた。



山崩れの様な音を背にしながら。

イツセー君、ホントに大丈夫かな……………？

~~~~~

「皆、もう一度だけ確認するわ。何が起こつても平常心でいること。何を言われても手を出さないこと。———上にいるのは、将来の私達のライバル達よ。無様な姿は見せてはいけないわ」

部長は念を押すように大きい扉の前で僕達に言い聞かせる。

僕達はそれに頷くと、扉を開き、広いホールに出た。

「ようこそ、グレモリー様。此方へどうぞ」

使用人達の後に続いて通路を進むと、そここの一角に複数の人影があった。

部長はその中の長身の男性に駆け寄る。

「サイラオーグ！」

「…む？リアスカ」

向こうも部長を確認すると此方へと近付いてくる。

「部長。この方は……?」

そう言えば、アーシアさんは見るのは初めてだったね。

「そうね。アーシアやゼノヴィアは初めてだったわね。彼はサイラオーグ。私の母方の従兄弟なの」

「では、改めて自己紹介させてもらおう。俺はサイラオーグ・バアル。バアル家の次期当主だ」

筋骨隆々のサイラオーグさんは気さくに挨拶する。

初めて会うアーシアさんとゼノヴィアは丁寧に会釈する。

「それで、こんな所でどうしたの?」

「下らないから出てきただけだ」

「……どう言うことだろう?」

心底嫌そうな顔でホールを向くと、

ドオオオオオオンツ!!

巨大な破砕音が耳に響いた！

い、今のは……!?!

「ハア……全く。だから開始前の会合などいらないと進言したんだ」

サイラオーグさんと部長は躊躇わずにそちらの方へと向かった。

僕らもその後を追うと、そこでは両陣営に分かれた悪魔達が睨み合っていた！

どちらも強い殺気を放っている……ッ！

「ゼファードル。こんな所で戦いを始めても仕方なくてはなくて？死ぬの？死にたいの？」

……確か此方の女性はシークヴァイラ・アガレス。

大公アガレス家の次期当主の女性悪魔だ。

体から放たれる殺気やオーラはとて冷たく、クールビューティーと言う言葉が相応しい才女……と聞くね。

「ハッ、言ってるよクソアマツ！俺が折角その個室で一発仕込んでやるっていつてんのによ！アガレスのお姉さんはガードが固いねえ！」

……で、品性の欠片もないこの不良然としたルックスの男はグラシヤラボラス家の凶兇と名高いゼファードル。

………まあ、特に言うことはないかな？

強いて言うなら先日御家騒動があつて以前の次期当主と交代になつたと聞くけど……
「……血の気が多い連中を集めるからこうなるんだ。————無駄な事に関わる気は無かつたが、仕方ないか」

そう短く嘆息すると、サイラオーグさんは睨み合う両陣営に向かう。
恐らくは仲裁するのだろう。

と、その時だった——。

ドオオオオオオンツ
!!!!!!

先程よりも大きい轟音が会場の外から響いた！

そして————この場を濃密なドラゴンのオーラが包み込んだツ!!

その場にいた全員、凍り付いたかのように動けなかつた……………。

それ程までに、このオーラは……力強いツ!!

そのオーラの持ち主は——、その場に似つかわしくない呑気な声を放ちこの場に現れた。

「すいませーん部長！遅れました！」

………つて、この声はツ!?

グレモリー眷属全員、そちらを振り向くと、

「………つて、アレ？何か御取り込み中でした？」

我らがグレモリー眷属の希望と名高い赤龍帝、兵藤一誠君の帰還だ。

………けど、何て格好だ！

上半身は何も纏ってなくて、下半身には辛うじて大事な所にジャージの切れ端が引っ掛かっていると言う惨状だ！

しかも髪の毛は何やら焦げ臭い……………。

でも……その身に纏うオーラは、以前とは別人の様だった。

木場 side out

くくくくくくくくくくくく

イツセー side

やつと俺の視線だぜ！

……とは言うけどなあ、これ、どういう状況だ？

急いで来たから格好はそのままだったけど……まあ、後で魔法使えばどうとでもなるから良いとして、喧嘩でもあったのか？

「……以前とは比べ物にならないオーラだな」

と、呆けてた俺にあの時修行中に会った野性的なイケメン悪魔さんが声を掛けてきた！

「あ、アンタあの時の………これ、どういう状況なんです？」

何か皆固まつてるけど………。

「若手同士のいざこざだ。兵藤一誠」

「それよりもイツセー………先ずは格好をどうにかしなさい！」

と、笑いながらも赤いオーラをたぎらせる部長が眼前に迫っていた！

「サー・イエツサー!!」

『ローディング』

『ネクロムじゃねえから』

《ドレスアップ・プリーズ》

取り合えず他の皆制服だったから俺も制服に新調する。

イヤー、ドレスアップは便利だなあ。

「……何だよ？そのクソガキは」

あん？誰だ、この不良兄ちゃんは？

まあ、自己紹介ぐらいはしないとな。

「兵藤一誠。グレモリー眷属の『兵士』だ」

「そして、冥界で有名な赤龍帝であり、魔法龍帝だ」

……この人、マジで何者だ？

「く、クククツ、ヒヤツハハハハハハ！こ、こんなガキンチョが赤龍帝かよ!? 笑い話にしちや出来すぎてるぜ！」

…何かムカつくなあ。

「何が可笑しいんだよ？」

俺が一睨みすると、その兄ちゃんは萎縮した様に動かなくなつた。

ん？どしたんだ？

『多分、お前のオーラに怖じ気付いてるな』

へー、マジかよ。

この兄ちゃんも強そうだけどなあ。

「まあ、兎に角だ。このまま暴れるのなら俺も拳を抜かねばならない。これは最後通告だ」

「ハア？何言つてんだよ!? バアル家の無能がー！ー！」

それは、余りにも一瞬の出来事だった。

俺の隣にいたイケメン悪魔さんが放った拳が、奴の顔面を捉え、ブツ飛ばしたのは。

ーーーー速いッ!!

眼を凝らさなければ見逃す程のスピード。

正確に中心線を決る丁寧さ。

そしてーーーー圧倒的な破壊力。

それら全てがあの一つの拳に詰まっていた。

「改めて……俺はサイラオーグ・バアルだ」

「兵藤一誠。リアス・グレモリーの眷属です」

……とまあ、何やかんやで挨拶を終えた後は、御偉方が集まる部屋にて抱負を語る事に。

あ、後シャワーを浴びる事に。

まあ、臭いもんね。来る前にタンニーンのおっちゃんのブレスマトモに浴びたし。

~~~~~

そして、会合が終わり豪華な食事会を前に俺達は一息吐いた。

「シトリー眷属との対戦か」

そう、今日から三日後、ソーナ会長達とレーティングゲームを執り行う事になったんだ。

にしてもだ……………

「あのジジイ共、ムカつくぜ……………!!」

あの偉そうな悪魔のジジイ共、ソーナ会長の夢を笑いやがったんだ!

レーティングゲームの学校を建てる……………だけど、それは身分とか何も関係なく誰もが平等に学べる学舎を作ること。

そんな素晴らしい夢を……………あの糞ジジイ共はッ!

『怒るな相棒。年寄りつてのは得てして頭が固い奴等が多いもんさ』  
でも……………!

『…恐らくは、ソーナ・シトリーは笑われる事を覚悟で述べた筈だ。そこには感嘆すべきだと俺は思う』

ドラゴン、お前……………。

『つて!俺は一体何を……………!?!』

『へへッ、お前も少しは情が理解出来るんじゃないかねーか』

『俺に質問するな!』

まあコイツらは放っておいてだ……………何か俺スゲー睨まれてる?

ドレスを着た金髪の女の子だ。

「お、お久し振りですわね。赤龍帝」

「君は……………誰？」

俺がそう聞くと、その子はズルツと転けそうになった。

だ、大丈夫か？

「レイヴェル・フェニックスですわ！リアス様の婚約の件で争ったフェニックス家の者ですわ!!」

フェニックス……………ああ！

「焼き鳥野郎の妹ちゃんか！」

「全く……………これだから下級悪魔は嫌になりますわ」

「イヤー、ゴメン！全く覚えてなかったよ〜！」

そう言うと、レイヴェルは凄く落ち込んでしまった。

『相棒、お前それは流石に……………』

『俺でもどうかと思うぞ。今のは』

だって、戦ってないし……………！

「えっと、その……………ライザーは元気してるか？」

「……………貴方のお陰で塞ぎ込んでしまいましたわ」

ありやいや、そりゃ悪いことしたな。

「ま、才能に頼っていた所もありますし、良い薬ですわ」

「容赦ないね。一応アイツの眷属なんだから？君」  
「バツサリ切られたぞ、ライザー……………」

「今はお母様の眷属ですわ。お母様が自分の駒とお兄様のを交換なさったの。ですが今はフリーの『僧侶』（ベニヨツ）ですわ。お母様はゲームをしませんから」

あー何か聞いたことあるな。

『王』（キング）の間だけで駒同士を交換できるつて奴。

確か同じ駒なのが絶対条件らしいけど。

「と、所で赤龍帝——」

「なあ、その赤龍帝つて止めてくれるか？呼びづらいだろうし……………普通にイツセーで良（ぜ）い。」

「え……………お、お名前でお呼びしても宜しいのですか!？」

……………ん？何か嬉しそうだな。

いや、俺の勘違いだろう。俺案外見下されてたし。

「で、では、遠慮なく、イツセー様と呼んで差し上げてよ」

「様付けかい。別にいらないよ」

「いいえ、これは大事な事です！」

はあ……………そういうもんかね？

「レイヴェル。旦那様のご友人がお呼びだ」

ん、確か……

「イザベラさん？」

「おお、覚えていてくれたかい。嬉しいね」

まあね。

この人、そこそこ強かったし。

「むう……」

で、レイヴェルは面白く無さそうに顔を歪める。

どうしたんだ？

「こ、コホン！ではイツセー様。今度お会い出来たら、お茶でも如何かしら？わ、私で良ければ、手製のケーキをご用意差し上げてよ。で、では！」

レイヴェルは丁寧に一礼すると、去っていった。

「このオーラ、また強くなったんだね。君が強くなれば、私の話も自慢話になるのかな？」

「どうでしょう？……あの子の付き添い？」

「ああ。……婚約パーティーでの一戦以来、彼女は君に夢中なんだ」

「どーせ愚痴ばかりでしょ？」

「……………寧ろ逆なんだがね。まあ良いか」

「……………あ！お茶はOKって伝えて下さい」

「本当か？それは有難い。レイヴェルも喜ぶよ。それに私も……………つと、失敬した。  
ではこれにて」

最後何て言ったんだ？

良く聞き取れなかったな……………ん、アレ？

「小猫ちゃんがいらない……………？」

さっきまではいたのに……………？

『相棒。彼女のオーラを感知してみろ』

そっか、そうすりゃ速いな。

……………外か。

俺は心配になり、外へと向かった。

すると、俺に気付いたのか、部長が此方に向かってきた。

「イツセー、小猫の所へ行くのね？」

「はい。多分外にいます」

「私も行くわ」

「……………行きましょう」

部長は何か思い当たる節があるようだ。

俺達は使い魔を飛ばして探ると、どうやら近くの森にいるらしい。

~~~~~

「久し振りにやん♪白音」

「……………黒歌、姉様」

こりやすげえ場面に遭遇しちまったな……………。

暗い森の中で俺達は、小猫ちゃんとその小猫ちゃんに良く似た女性と出会った。

『このオーラ……………中々の使い手だな』

うん……………分かるさ、強いって。

「オイオイ、この娘。グレモリー眷属の奴だろお？」

あれは……………美猴改めカカロット！

『ブローリーさんこつちです』

『カアカロットオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

等と漫才やってたせいとか、向こうが不意に此方を振り向いた。

「気配消しても無駄だぜい？俺つちや黒歌みたいに仙術知つてると、気の流れの僅かな変化だけで大体分かるんだよねい」

……バレバレかよ。

『致し方ない。仙術使い相手に不意を突けると思わん方が良いぞ』

仕方ないか……ま、小猫ちゃんのお姉さんには確認したい事もあるし。

茂みから出ると、小猫ちゃんは驚いたと言った面持ちだ。

「部長、イツセー先輩……！」

「ようカカロット。ヴァーリは元気か？」

「カカロット言うない！ま、元気だぜい。そつちは………へえ、かなり強くなつてるねい」

へえ、やつぱ仙術使いは分かるんだ。

俺も覚えれるかな？

『素質によるな。まあ仙術は俺の管轄外だから教えられんが』

ふーん。

「テロリスト二人でテロでも起こすのか？」

直球に聞くが二人は笑うのみ。

テロ目的じゃないのか？

「いんや、そういうのは俺っちらに来てないねい。ただ、冥界で待機命令かわ出てない。俺も黒歌も非番なのさ」

テロリストに非番とかあんのかよ……………そっちの方に驚きだよ。

「けんどよお、黒歌が悪魔のパーティー会場見学したいって言って戻ってこねえからよ、こうして迎えに来たわけ。OK？」

「イエッサー」

《ローディング……………》

《テンガン・ネクロム！メガウルオウド》

クラッシュ・ザ・インベーター……………って違うわ！

『言い出しっぺはお前だろ』

返す言葉も御座いませぬ……………！

「ん、美猴。誰？この子」

「赤龍帝」

それを聞いたお姉さんは眼を丸くした。

「へえー、この子がヴァーリと互角に戦った魔法使いの現赤龍帝なのね」

互角だったのかな……………ぶつちやけ怒りで頭一杯だったからなあ。

「おい黒歌く、もう帰ろうや。俺達やパーティーに参加できないし、無駄さね」

「そうだ帰れ。こんな所で油売ってる暇あるならバブルス君追っかけとけ」

「ムツキー!!だからカカロットネタやめい!俺っちはサイヤ人じゃねえやい!!」

「あれ、美猴。あんた最近界王拳マスターしたとか言っただけか?」

ほら、やっぱカカロットじゃん。

「俺っち死にたくなってきた……………」

「まだ心臓病は早いぞ」

「人造人間とか魔人もいるわよ?」

「いい加減にしろい!!」

って、漫才やってる場合じゃないな。

「おい、小猫ちゃんのお姉さん!」

「はあーい♪私は黒歌よん♪宜しくにゃん、赤龍帝ちん♪」

……………何か調子狂うなオイ。

「アンタに聞きたい事がある」

「何々?あ、私はまだ処女にゃん♪」

「聞いてねえ!!」

処女なのか……………ってちやうちやう!

「アンタ……本当に力に吞まれて主を殺したのか？」

俺がそう問い掛けると、黒歌は楽しいげな雰囲気を感じずに応えた。

「どーかしらねー？赤龍帝ちゃんはどう思う？」

「俺は真面目に聞いてるんだ。話は聞いたけどよ……アンタは力に吞まれてないんじゃないか？」

それを言った時、黒歌は眼を丸くした。

黒歌だけじゃない。部長と小猫ちゃんもだ。

「……どーしてそう思う訳？」

「俺は馬鹿だからよ。仙術の事は詳しくない。でもな、馬鹿なりに仙術の事は調べたんだ」

仙術は生命に流れる大元の力……所謂チャクラや気、と言った者を扱う。

悪魔が使う魔術とは根本的に違う性質の力なのだ。

例えば、相手の気を乱して体調を崩したり、植物の気を乱して花を咲かせたり、逆に枯らしたり……生命の流れを操る術の総称が、仙術と言うものだ。

「でも、仙術は使い方を誤れば世界に流れる人の悪意をも吸収し、暴走する………当時

のお前がどれ程成熟してたかは知らない。でも小猫ちゃんはまだ幼かった筈だ。そんな未成熟な状態で仙術を行使すれば、小猫ちゃんが――死ぬ」

「「ッ!」」

死ぬ、の一言に、部長と小猫ちゃんは顔を強張らせる。

そして、それは黒歌もだった。

「でもお前は多分その悪意を吸収していないんだろ? そんなに仙術に精通してるお前が、簡単に呑まれる訳ないと思ってる」

「……………」

「そんな希少な力を、お前の主が求めない訳がない。だから幼かった小猫ちゃんにも迫った筈だ。でも、小猫ちゃんが使えば、死ぬ事が分かってた! だから已む無くはぐれになったんだろ!?! 小猫ちゃんを守る為に!」

「……………何それ? 何でアンタの願望を聞かなきゃいけない訳?」

願望? 違う!

「それはお前の紛れもない本心だ! 小猫ちゃんを守りたい――だって、たった一人の肉親だろ!」

「……………本つ当にメンドクサイにゃん」

黒歌は静かに呟くと、

「……もう、殺して無理矢理連れていくにやん♪」

殺気を放ち、ゆらりと立ちはだかった！

刹那———空気が変わった。

「これは………空間を操る術?! 黒歌、貴女！」

「…時間は操れはしないけど、空間はそこそよ? この辺一帯の空間を結界で覆ったわ。

だから、ここで派手なイザコザ起こしても外にはバレないって訳にやん♪」

「———ふん、随分とこの場に似つかわしくないオーラだな」

その時だった———空高くから、威厳ある声が響いたのは。

「タンニーンのおっちゃん！」

「兵藤一誠とリアス嬢がいなくなったと聞いて探してみれば、こんなことになろうとは

……」

「わりい、おっちゃん」

「何、気にするな。こやつらをぶちのめせば問題あるまい」

おお、頼もしいねえ！

「ひえー、龍王のタンニーンか！一丁遊んでくれよい！」

「面白い……………来い！小猿ツ!!」

カカロットは足元に金色の雲を出現させて、空中へと向かう！

そしてそれに対抗するべくブレスを放つおっちゃん！

ひよー、すげえドンパチだな！

…………でもおっちゃん大分抑えてるっぽい？

『だろいな。本気出せばこの一帯が消滅しかねない。そんな事よりだ相棒。先ずは目の前の猫に集中しろ』

「にゃん♪」

とは言うけどさドライブ、俺には彼女が小猫ちゃんの事を考えてないとは思えないんだよ。

「つて、何で丸腰？それとも、赤龍帝の籠手を使う必要なしつてこと？舐められたものにゃん♪」

「だから…俺はお前と戦うつもりはない！」

『相棒、お前……………』

分かってるよ！コイツが、小猫ちゃんに絶望を与えた事は！

でも……俺は信じたいんだ！

「じゃあ……丸腰のまま死ぬ」

突如、黒歌からは黒い霧が立ち込める。

この霧は……何かよく分からんが、不味いッ！

「あ………」

「この、霧は………ッ」

途端に、部長と小猫ちゃんは力なく倒れた！

「この感じ……毒!？」

「……あれ、赤龍帝ちゃんには効果ないの？ま、どうでも良いけど」

前に一度これよりキツイ毒は受けてるからな！

「でもお？このままジワジワ毒が回ればあつという間に昇天よ♪」

………クソッ、仕方ないか！

俺は赤龍帝の籠手を展開すると、腰を落として構える。

すると、赤龍帝の籠手から赤いオーラが溢れてきた！

こ、これは!？」

『フッ、相棒。今こそ修行の成果を見せるときだ!』

「どういうこつた!？」

『何、気にするな。このオーラは抑圧されているお前のオーラが漏れだしてるだけだ』

抑圧!?!抑圧つて事は、無理矢理押さえつけてるのか!?!スンゲー濃いぞ、このオーラ
……ツ!

じゃあ、これを解放すれば………

『鬼が出るか邪が出るか………さあ、賽の目を投げようじゃないか、相棒!!』
……このまま受け身になっても、小猫ちゃん達が危ない、か。

—————よしっ!!

「死んでくれるなよ………ツ!」

俺は一言前置きすると、何時もみたく禁^{バランス・ブレイカー}手する感じで力を込めた。

——瞬間、空気が焼け焦げた。

《Welsh Dragon Absolution Breaker
!!!!!!》

籠手から何時も以上に力強い音声が響いたと思うと、俺の体の内側に押さえつけられていたらしいオーラが一気に体外に放出され、天高く昇った!!

自分でも分かる………体の内側にあつたオーラが無限に増えていくのを!

それに、鎧の形状も何時もと異なっていた。

先ず全身の鎧がシャープに、だけど何時ものより異なり異様に鋭くなっていた。更に、鎧の各隙間からは淡い緑色の燐光が漏れだしていた。

そして————全身を更に覆う赤いオーラと緑色のスパーク！

「すげえ……………これが、俺だけの、可能性……………」

俺は信じられずに眩くと、空中から大笑いが聞こえた。

————タンニーンのおっちゃんだ。

「フハハハハハ!! 凄まじいオーラだな、兵藤一誠ツ！ 見ろ、その猫が張っていた結界も消え去ったぞ!!」

お、本当だ!!

「まさか……………展開した時のオーラだけで?!」

黒歌が驚愕の声音で叫ぶ！

俺も信じられねえよ! ……ここまで強くなるなんてよ!

「……………イツセー、先輩」

「……………部長、小猫ちゃん。後ろに下がって下さい。この力、自分でもコントロール出来

そうにないっす」

それを聞いた部長は、小猫ちゃんと共に静かに下がる。

さあーて……………

「悪い猫さんには、お灸を据えなきやなッ!!」

グツと踏み込むと、俺はこれまた鋭くなったドラゴンの両翼で飛び立つ!

黒歌は呆気にと取られていたが、次の瞬間には笑みを濃くした!

「……………なら! 妖術仙術ミックスの一撃をお見舞いしてあげるわ!!」

黒歌の両手に異なる力が収束し、俺に向けて放たれる!

「先輩、避けてッ!」

いやー! 避ける必要はないッ!!

俺は敢えて真正面からその一撃に突っ込み、衝撃で爆発が起きる!

黒歌はニヤリとするが、それは一瞬だけだった。

「何なんだあ、今のは?」

……………ノーダメージだと知ると、黒歌はまたもや驚愕に歯を噛み締めた!

「嘘でしょ……………かなりの妖力を込めたのよ!」

黒歌は驚愕を打ち消すようにまたも同じ攻撃を繰り返すも、全て俺の身に纏うオーラ

に阻まれ、消失する！

「まさか……………オーラで攻撃が相殺されてるの!？」

「……………オラアツ!!」

俺は右拳の拳打を寸前で止めるが、その余波だけで回りの木々が更に消し飛んだ！

「オイ。これだけは言っておく……………自分の妹を、俺の可愛い後輩を、泣かせてんじゃねえよ!!」

「…ツ!!」

その黒歌の瞳には、明らかな怯えが見て取れた。

「……………クソガキが!」

黒歌はバツと俺と距離を取る。

さあーて、後は……………あの猿だけだな！

「ドラゴン……………シヨットオ!!」

「ハハア……………つてヤベツ!」

美猴は寸前で気付き何とかそれをかわすが、かわした一撃は……………雲を消し飛ばした！

「お、俺……………単純に打っただけなんだけど」

『こりや想像以上だな』

俺もビツクリだよ！

まあ驚くのは後だ！ここでコイツらを……………

「何時までも何を遊んでいる？」

「二人とも、悪魔に感付かれましたね」

と、美猴と黒歌の背後から何者かの声が響いた！

新手の仲間か!?

そこにいたのは、白い服を着て左目に青い隈取りがあるのが特徴的な青年と、背広を着た男性。

だが、背広を着た男性の手には、極太の聖剣が握られていた。

「……ヴァーリ以上のオーラですね。赤龍帝」

「あのヴァーリを追い詰めたのは本当らしいな」

青年の手には青い粒子を放つ刀身が透けている剣が握られていた。

何だあれ……………聖剣か？

「つたく、もうちつと遊びたかったのによお。しよーがねえか」

「聖王剣、コールブランドか。まさか、白龍皇の元にあるうとは……………」

コールブランドって、確か地上最強の聖剣、だよな？

『ああ、その認識で合っている』

「……その腰のも聖剣か？」

タンニーンのおっちゃんが聞くと、男性は頷いた。

「ええ、こっちは最近発見された最後のエクスカリバー……『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』です」

「ねえ、そんなに話して良いの？」

「ええ、大丈夫ですよ。赤龍帝殿、聖魔剣使いの方とデュランダル使いの方に宜しく言っておいてくれますか？何時かお互い、一剣士として相まみえたい、と」

ツ……………大胆不敵だな。

「……………その小僧。お前、ドラゴンを宿しているな？」

タンニーンのおっちゃんが次に問いかけたのは、青年の方だ。

……………ホントだ。よく見たらドラゴンの波動を感じる。

「フツ……………どうだろうな。つと、兵藤一誠」

「な、何だよ」

アイツ、おっちゃんの質問うやむやにしやがった！

「次に会うとき、狩らせてもらおうぞ。お前の……………魂を！」

「……………え、はい」

唐突に魂狩るとか言われても、こうなるに決まってるわ！

「さて、逃げますか」

男性はコールブランドで空を斬ると、空間が裂けた！

その場にいた全員が潜り込むと、静かに消えていった。

次回、D×Dウィザード

イツセー「何？山で野宿したのって、俺だけ？」

小猫「先輩……………私は」

イツセー「俺は……………」

MAGIC 46 『決闘前夜』

美猴「読者の皆！皆は俺たちの事美猴って呼んでくれるよな!?!」

??? 「カアカロツトオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」
黒歌 「美猴く、筋肉ムキムキで白目向いた奴がそっち行ったわよ」
美猴 「人違いだああああああああ!!!」

MAGIC46 『決闘前夜』

さて、ヴァーリチームの襲撃を退けた後、グレモリー本邸に戻った俺達はそれぞれの結果報告の為に、（何故か）俺の部屋に集まっていた。

あの時ドタバタしてたから気にする暇無かったけど……皆レベルアップしてるな。特にギヤスパーなんて対人恐怖症を克服してるみたいだしな。

で、俺は自身が体験した特訓のことを伝えたら、軽く……いや、ドン引きされた。んん？おつかしいなあ…。

「…お前らも山籠りしてたんじゃないのか？オイ木場こつち向け」

「や、僕らは……その………」

「私達はグレモリー家が所有する別荘を借りていたぞ」

「……………は？」

なあにそれえ。

「先生、どう言うことっすか?!」

「いや、俺も驚いてただけだよ。てつきりお前もグレモリー家に戻ってんのかと思ってたからさ。まさかそのまま山で過ごしてたとは思ってもよらなかったよ」

「思いもよらなかった、じゃねーよおおおお!!」

何だよそれ?!ふざけんな!!

何が悲しくて俺は無駄に野生児生活を送ってたんだよ!?

「こちとら飯も全部自給自足だったんだぞ!!山で山菜採ったり猛獣ハントしたりで!!つまり何か?お前らは作りたての料理を食べてた訳か!!」

「まあ、そうなるよね」

「葉っぱ一枚地べたに敷き詰めた雑魚寝じゃなく、ふかふかのベッドで寝てたってのか!?!」

「ああ」

「ずつりいいいいいい!!!」

ヒデエ話だ!!

「何だよおおお!!寝てる最中に襲われたり水浴びしてる最中にも襲われた俺の苦しみを誰がわかってくれるんだよおおお!!」

『そのせいで山の中スッポンポンで駆け回る羽目になったもんな』

全く持ってその通りだよ!!

しかもティアが何故だか興奮して滅茶苦茶怖かったよ!!

「あの時は生きた心地がしなかったんだよおおおおお!!!」

「まあ泣くなつて。そのお陰でお前は新しい力に目覚めたんだからよ」

……まあ、そうだけでもさ。

「だがあのオーラの強さは俺も予想外だったぞ」

「俺もビックリつすよ」

「で、アザゼル。あの形態は今後なんと呼べばいいの?」

まあ、通常の禁手とは全く違う感じだからな。

「うーむ………そもそも禁手の更に上のレベル何ぞ聞いた事無いからな。神器の究極が

禁手だから………」

『ならば………』
アブソリューション・プレイヤー
 『極手』というのはどうだ?』

アブソリューション………どう言う意味だ?

「罪の赦し、だな。キリストから与えられた権威に基づいて、司祭が告解の秘跡に際して与える教会罪からの赦免だった筈だ」

「さつすがゼノヴィア。元カトリックだもんな!」

「よ、止してくれ………//」

な、何かちよつと見ない間に可愛くなつてないか？
でもカトリックとキリストつて関係あつたか……？

「ほお、洒落たチョイスだなドライグ。元々の禁手の語源は神が禁じた忌々しい外法だからな。その禁じてから許され至れる境地……うん、良いねえ！」

おお、何か乗り気だ。

まあ、何でも良いけどね。

と言う訳で、俺の新しい形態の名前は、
『アブソリュート・ション・プレイヤー極手』に決まった。

~~~~~

「ふう………」

夜——俺はグレモリー家のテラスで水を飲みながら一息吐いていた。

『相棒。また、あの夢か？』

「ん？ああ………最近よく見るんだよなあ」

あの夢つてのは、サバトのあの惨劇の事。

「ドライブ、俺さ……すごい幸せなんだ」

『そうだな。俺にもそう見える』

「でもさ、幸せになっちゃったら……あの日の出来事を忘れてしまえば、怖いんだ……」

…もしかしたら、最近になって見る様になつてるのは、決して消えることの無い十字架って事を現してるのかも、な。

「お前は、この罪をわすれてはならない」 って言う——

「……………先輩？」

—— ツ!?

そここのいる筈の無い声が聞こえ、勢いよく振り向くと、

「小猫、ちゃん……？」

グレモリー眷属のマスコットキャラクター、小猫ちゃんがいたんだ。  
……以前会った時と同じ様に、可愛い猫耳と尻尾を生やして。

イツセーSIDE OUT

小猫SIDE

「……………ふぁ」

私——塔城小猫は、深夜に目を覚ましました。

理由は、三日後に控えたソーナ会长達とのレーティングゲームを控えて、恐らくですが緊張しているのかもしれない。

私は——その試合で、自身の中で嫌悪していた力、仙術を使うと決めたから。

ですが……………心でそう決めても、頭の方がまだ納得できていないみたいです。

私も、もし姉様の様を守るべき部長を傷つけてしまったらと思うと……………

私は気晴らしに外の空気を吸おうとして、普段は出さない猫耳と尻尾を出してテラスへと向かいました。

するとそこには……………先客がいました。

「……………先輩？」

「ツ!？」

グレモリー眷属唯一の『兵士』<sup>ポイン</sup>、イツセー先輩でした。

先輩は最初俯いて何やら独白していましたが、私が声をかけると、此方を勢いよく振り返り、心底驚いたような顔をしていました。

「……………小猫、ちゃん?全然気づかなかったよ」

「仙術の力を応用すれば、容易いです……………」

私がそう言うのと、「すげえな、仙術つてのは」と、先輩は感心した風に呟きました。

「…イツセー先輩は、どうしてここに？」

「……………ちよつとね。夜風に当たりに来たのさ」

……………嘘です。

今の私は、猫又の力を解放しているから、人の気の流れが分かります。

だからこそ言えるんです。



イツセー先輩は、嘘を吐いている……と。

現に今のイツセー先輩の気には、若干の乱れが見られます……でも、驚きでした。先輩にも、怖いものとかもあるんだ——と。

「先輩……私はっ」

「皆まで言わなくても良いよ。……仙術って、人の心にも敏感なんだったなあ」

……読み取られてしまいました。

「それはそうと……この間は、ゴメンな」

「えっ?」

私は一瞬間の事か分からず首を傾げましたが、直ぐに思い当たりました。

す。——ここで話は逸れますが、私から見たイツセー先輩の事を話したいと思いま

最初は、リアス部長が気にかけて眷族にしてそこから親しくなったのですが……私が感じた先輩の第一印象は、兎に角ヘラヘラしていて、どこか抜けてて軽薄そうな方だと思っていました。

ですが、その軽薄そうな感じを抱いた私はそれを大きな間違いだと気づきました。

先輩は——冥界でも有名だった謎の魔法使い、ウィザードでした。

イツセー先輩は、たとえ守るべきゲートの方から心ない言葉を浴びせられても、決して見捨てませんでした。

自分がどれだけ傷ついても、絶対に絶望させまいと、獅子奮迅の活躍を見せてくれました。

他人の絶望を払い、希望となる——そんな他人の為に精一杯に動けるイツセー先輩だからこそ、リアス部長、アーシア先輩、朱乃副部長、ゼノヴィア先輩は（他にもいますが、割愛します）、惹かれたんだと思います。

かく言う私も……気づけばずっとイツセー先輩から目が離せませんでした。

私が本音を吐いた時もイツセー先輩は、優しく受け止めてくれるといった——今思えば、甘えの考えを抱いていました。

でも——

「他人と自分を比べて弱いと理由付けて！何時までも力から逃げても、強くなつてなれる訳ないだろうっ!？」

イツセー先輩は、厳しい言葉で、私を叱り付けました。

最初はシヨックでした。

どうして、優しく包んでくれないのだろう——と。

でも、アザゼル先生が教えてくれました。

『アイツは、お前の為にあえて突き放したんだろーよ。あそこでお前を甘やかせば、お前は一生自分の弱さを正当化して向き合わなくなり、例えそれを突きつけられても、自身に縋る事で逃げちまうから……全く、嫌われ者は俺だけで良いつてのによ』

イツセー先輩は、私の為を思って嫌われ者を演じようとしてくれたのです。

恐らくそれに気づけなかつたら、私はずっとイツセー先輩に、悪感情を抱いていたと

思います。

「俺、小猫ちゃんが苦しんでるのに、あんな辛い言葉しか掛けられなかった……………駄目な先輩だよ。悩んでる後輩に、慰めの言葉ひとつ掛けてやれないなんてさ」

「そんな事無いです……………先輩は、駄目な先輩なんかじゃないです」  
「……………ありがとな」

イツセー先輩は、私の頭を撫でてくれます。

少し荒っぽいですが、心が温かくなる様な感じですよ……………にやあ♪

「なあ、小猫ちゃん……………」

イツセー先輩は手を下ろすと、真剣な表情で私に語りかけてきました。

「お姉さんの事なただけだよ……………嫌いにならないで欲しいんだ。勿論、アイツが君にどれ程の絶望を与えたかは分かってる。でもっ」

「……………私は、多分一人では姉様を信じる事は出来ません」

私は、イツセー先輩の言葉を遮り、先輩の胸に抱き付きました。

「でも……………イツセー先輩が信じるなら、私も信じます」

「……もしそれで、またアイツに襲われても、俺が小猫ちゃんを守る」  
先輩は、拒む事無く私を抱き止めてくれました……。

「たとえ、仙術に振り回されても、俺が、俺達が受け止めてあげるから。何も怖がらなくて良いんだ……。絶望に苛まれても、俺は絶対に君を見捨てない。約束する……。俺が、小猫ちゃんの最後の希望になるよ」

——こんな、惚れるなど言うのが無理です。

『ゴメンなさい、部長……私、先輩の事〃本気〃になっちゃいました』

その日、ダメ元でイツセー先輩と一緒に寝てくれますか？と聞いたなら、渋りながらも「良いよ」と苦笑いで言ってくれました。

翌日には、アーシア先輩とゼノヴィア先輩に怒られてるイツセー先輩がいましたが……昨日一緒に寝てくれたイツセー先輩の暖かさをずっと思い出していた私には、あまり関係ありませんでした。

覚悟してくださいね、イツセー先輩。

貴方の隣を狙って——  
『冥界猫』ヘルキャットは密かに牙を研いでいますから♪

次回、D×Dウィザード

リアス「いよいよね……」

イツセー「この匂い……ニンニク？」

匙「待ってたぜ……兵藤」

M A G I C 4 7 『V S シトリー眷属！前編』

ドラゴン『敢えて前後編に分けるとは……姑息な手を』

# MAGIC 47 『VSシトリー眷属!前編』

決戦当日――

「……………ここ、駒王学園の近所のショッピングモールだよな」

俺達グレモリー眷属が転移された場所は、見知った駒王学園の近所にあるショッピングモール。

成る程、今回の戦いの場所はどちらも見知ってるから、動き方はスムーズに行くだろうな。

それと、先程グレイファイアさんから指示されたルールは

・『兵士』<sup>ポーン</sup>は敵本陣に乗り込んだ時点で昇格<sup>プロモーション</sup>可能……まあ、これはライザーの時とおんなじだ。

俺達の本陣はここ、2階の東側で、対するソーナ会長達は1階の西側。

参考までに言うと、俺達の陣地の周りにはペットショップ、ゲーセン、フードコート、本屋、ドラッグストアがある。(勿論、品物も存在する)



会長達は食料品売り場と、電気屋、ジャンクフード店舗、雑貨売り場。

こんなもんかな、後は………フェニックスの涙がお互いに支給されてる。  
そして今回は所謂「屋内戦」………そして一番重要なのは、

『バトルフィールドとなるデパートを破壊し尽くさない事』………つまり、ド派手に戦うなって事ね」

そう、あまり派手な技が禁じられるのだ。

言ってることは普通かもしれないが、これは俺達………取分け、ゼノヴィアや朱乃さん、それと俺は不利な戦場だ。

まあ修行で細かく立ち回れる様な特訓は受けてるかもだけど………元々ゼノヴィアは一撃必殺のパワータイプだ。デユランダルの。

朱乃さんも雷を展開する上で、それは範囲が広い。

故に周囲の店を破壊しかねない。

俺は一応テクニク型だけど（ドライグ曰く）本質はパワー寄りだ。

いざとなったら力でゴリ押ししちまうからな………。

「それに、ギヤスパアの『神セイクリッド・ギア器』が使用禁止に指定されてるわ。理由は単純明快、制御できてないからよ」

ふむ、まあそれは予想通りだ。

ギヤスパアは今力を抑えるメガネを掛けてる。

「攻め手にしてもこの吹き抜けですからね。何処からでも進行するのが見られて対策されます。まあ、向こうも同じと思いますけど」

「そうね……………立体駐車場も、向こうは警戒するでしょうし」

「後は屋上からの行動もですわ。ですが…………」

「ええ、分かってるわ朱乃。どちらにしても、中央突破。屋上か、立体駐車場か、この二つのルートで進まないといけないわ。このデパートの外からは攻めれないから」

部長と朱乃さんの話し合いは続く……………うーむ、頭を使うのは苦手だからなあ。

木場は屋上と立体駐車場を視察してる。

車とかも確認するためだそうだ。

「うん…………ギヤスパアは蝙蝠に変化して、デパートの各所を飛んでちようだい。序盤は逐一、知らせてもらおうよ」

「は、はいー」

おい、気合い入ってんな。

そういうやギヤスパは初めてだったな、レーティングゲーム。

まあ何やかんやで10分後に再び集まることになり、全員それまでリラックスモードに入った。

「そうだわ……ねえ、イツセー」

「はい?」

俺は部長に呼び止められ、部長の元に近づく。

部長は俺が近づいたのを確認すると、何やら耳打ちをする。

「……………分かりました」

『しかしリアス・グレモリーよ。よく考え付いたな』

「一応こんなこともあるかと、『セイクリッド・ギア神器』セイクリッド・ギアに関するもそこそこ調べたの。後で小猫にも伝えるわ」

……………部長、多分この中じゃ一番に変わったな。

『ああ。流れるオーラにも、甘さが消えてる。中々良い塩梅だ』

うん……………さーて、どーっすかなあ。

『相棒。本屋行ってみようや』

何でさ?」

『エロ本とかも完全再現されてるかも』

おお、その発想はなかったぜ!

普段は部長達がいるから読めないんだよねえ。

そう思った俺は直ぐ様本屋にたどり着き、エロ本が何処に置かれてるか物色する。

「……お、マスターガイド。これ限定のカード付いてるんだよなあ。持ち帰れないのかな?」

『クリッターが復活か……長いこと生きてると何があるか分からんな』

な、混沌帝龍も帰ってきたしな。

……最近アーシアのデツキで猛威を震ってるけど。

『アーシア嬢は専らエクシーズだろう』

とは言うけどよ、やっぱアイツ脱獄したんじゃねーか?

効果使わなきゃバンバン呼べるしよ。

ダメだ、凄く良い笑顔でタキオン呼び出すアーシアが……怖くてツ!!

……お、新しいエロゲ雑誌だ!

『今年はどんな作物だ?』

うーむ、色々ありますなあ。

ー……むにゆん。

「うえっ!?……………あ、朱乃さんっ!?」

「あらあら、どんな本をお読みですか……………うふふ、とつてもエツチな本ですわね」

ま、不味い!言い訳しなきや!!

「や、これは……………つい、出来心でありまして!その」

「うふふ。私は別に怒りはしませんわ。イツセー君らしくて良いと思いますわ」

けど朱乃さんはニコニコ笑顔でそう言うのと、今度は真剣そうに俺が開いてるページを見ている……………ど、どうしたんだろうか?

「……………イツセー君。今度、この衣装を着てあげましょうか?」

へ?俺は朱乃さんの見ている方を向くと、そこには女の子が露出度高めの衣装を来ている場面だ。

……………これ、下着すら付けられないぞ!ホントに良いのかよ!?

「ま、マジっすか!?!」

「マジっすよ。うふふ、イツセー君だからですわ」

やった!これで俺、一週間は戦える!!

等と脳内で浮かれてると、朱乃さんは俺を抱き締める力を強くした。

「……………どうか、しましたか?」

「イツセー君から、勇気を貰ってるんです」

朱乃さんの切なげな声。

「……………戦う勇氣はありますわ。でも、私の中に流れるもう一つの力を使う……………それが怖い」

……………望んでない力を受け入れるのは、並大抵な覚悟では出来ない。

朱乃さんの気持ち分かる俺は、朱乃さんを抱き締める。

「こんな俺で良かったら、幾らでも勇氣、持って行って下さい」

「…イツセー君、見ていてくれますか?私に光の力を使う所を」

「……………はい!俺が見てるだけで良いなら、安いもんですよ!」

「嬉しい……………私、イツセーと一緒になら、きつと…」

不意に朱乃さんが離れると、徐々に俺の顔に近づいてきて……………え、これは、まさか……………!?

俺と朱乃さんの距離がゼロに……………

「……イツセー先輩、そろそろ集合です」

なる前に小猫ちゃんが現れたああああ!!!

「こ、小猫ちゃん！これはね、その……！」

ダメだ、言い訳が思い付かん！

そんな俺を小猫ちゃんは半眼でため息を吐く。

「あらあら、小猫ちゃんに見られちゃいましたわ。有難う、イツセー君。元氣、貰いましたわ」

朱乃さんは何時ものニコニコフェイスに戻り、その場から去ろうとした、が。

「………次は、必ず貴方と」

何かを呟いて去っていった。

その顔は、何処か名残惜しげだった………。

「………先輩」

「ん？何だい小猫ちゃん？」

小猫ちゃんは背伸びして俺に抱き付いてきた。

俺は驚きこそしたけど、この間に抱き付かれたばかりなので、アタフタすることなく落ち着いていた。

「………私にも、勇気を下さい」

「…しようがないなあ」

俺は小猫ちゃんを抱き締める。

小猫ちゃんは嬉しそうに体を震わすと、

「…勝ちましょう。イツセー先輩」

そう、力強く宣言してきた。

そして、試合開始の時刻となったーーーー

~~~~~

試合の制限時間は三時間ーーーー短期決戦と言う訳だ。

俺は小猫ちゃんのペアは店内から進行している。

木場はゼノヴィアと立体駐車場を経由しての進行で、ギヤスパーは蝙蝠に変化しての
店内の監視と報告。

部長達は進行具合で俺のルートを通るそうだ。

で、現在……俺と小猫ちゃんは自販機の影に隠れている。

「……………向こうから2名、向かってきてます」

「……ホントだ。やっぱ早いね小猫ちゃん。で、このペースだと」

「10分以内に、エンカウントです……」

さあーで、どうした物か……………ッ！

《ライト・プリーズ》

「……ッ!?」

何かを察知した俺は素早くリングを腰に翳し、魔法を発動！

小猫ちゃんも気付いていたらしく、ライトで照らした敵に向かってハイキック！

が、向こうは天井からぶら下がるロープを使い、巧みにかわすと、地面に降り立つ！

「よー、兵藤。やっぱ気付かれてたか」

「まあな…………匙」

俺は襲撃者……匙と、背中にくっついてる女の子を見据える。

匙と女の子は眼を暫くパチパチしていたが、直ぐにそれも直り、此方に向き合う。

「ちっ、ラインは付けられなかったか」

「部長は会長がお前を使って闇討ちするだろうとは読んでたからな
「なら……………構えろよ」

……………へっ、何となく、察したよ。

匙、お前は俺と戦いたかつたんだろ？

俺達は何処か似てるからな。一途だったり、バカだったり、スケベだったり……………
険悪だったのは、最初だけだった。

「まあ、俺達は似た者同士だからな。良いぜ……………とことん殺つてやるよ」

《Welsh Dragon Balance Breaker
!!!》

俺は静かに鎧を展開する。

それを見た匙は顔を強張らせる。

「……………前より、オーラが強いなッ!」

「どうした匙?今からビビってる様じゃ……………」

————ガンッ!!!

「oooooooooo!!」

「俺には勝てないぜ?.....匙」

俺は暗闇に乗じて腕だけを龍化させて、伸ばしたのだ。

そして、僅かに動揺した隙を狙って.....と言う訳だ。

「匙先輩?!」

「oooooooooo隙有りですっ!」

相手の女の子の動揺した隙を小猫ちゃんが逃す筈もなく、白色のオーラを纏わせた拳を打ち込んだ!

すると、匙の後輩は膝を落とした!

「気を纏った拳を打ち込み、更に貴女の体内に流れる気脈にもダメージを与えたので、もう魔力は練れません。もう一つ、内部ダメージも大きいので.....動けません」

.....小猫ちゃんの怪力は相当な物だ。

更に内臓にもダメージを通す仙術を纏った拳oooooooooo外も中大騒ぎって訳だ!

何れだけ外の体を鍛えても、内臓は鍛えようがないからな!

「仁村ooooooooooゴハッ?!」

「.....余所見厳禁、だろ」

動揺して叫ぶ匙の腹に、ストレートパンチ!

匙が膝を付くのと同時に、

『ソーナ・シトリー様の『兵士』^{ボーン}一名リタイア』

匙の後輩のリタイアが告げられた。

がー

『リアス・グレモリー様の『僧侶』^{レシヨツプ}一名リタイア』

次に響いたアナウンスは、俺達側の駒が減った知らせだった。

「ツ!!イツセー先輩、これは……っ!」

「……………ギヤスパー、だな?」

俺は僅かにふらつく匙に確認すべく訊ねた。

すると匙は、小さく頷いた。

「してやられたぜ。恐らく、食料品売り場のニンニクを利用したな?」

「……………ああ。態と不振な動きをさせて、ギヤスパー君をおびき寄せる。そして人間に戻った所を、ニンニクで取る……って訳だ」

部長もそれに気付いてるな……全くギヤスパー！今度から朝飯はガリリツクトーストにするからな！

だが、恐らくはただではやられない筈だ。

「一応、部長はそれを見越して鼻栓渡したけど……あの野郎忘れてたな絶対！」

『……大丈夫よイツセー。一応、ソーナ達の配置は知らされてあるから』

俺は部長からの知らせにホツとする。

「何を息ついてんだよ？お前の相手は……俺だっ！！」

匙は今度は此方の番だと言わんばかりに高出力の魔力の塊を放つ！

この濃度は、鎧でも壊される……そう判断した俺は、

「鏡写しの龍波動！！」
ミラーージュ・ドラゴンショット

俺はティアとタンニーンのおつちゃんとの修行で作り出した新しい技を放つ。

それは普通の大ききさだけど、匙の一撃とぶつかり合うと……霧の様に霧散する！

「……っ!？」

「相手の一撃と、俺の一撃を同じ力にして、打ち消す……。鏡写しつてのは、そう言う意味さ」

でも同じ力にするのは、俺の魔力量に比例する。

相手の一撃が俺の魔力量を大きく上回る物或いは、俺の魔力が枯渇してるとこの技は

効果がない。

牽制用だけど、相手によつては瞬時に相殺できる訳だ。

「……へっ。俺の命懸けの一撃も、無意味つて訳かよ」

……命懸け?

俺は不意に匙の胸部を見ると……ッ!?

「お前……まさか自分の命を!」

「そーだ!俺はお前と違い、魔力は低い……高威力で撃ち出すには、こうするしかないのさ」

「その行為、分かつてるのか?お前……死ぬ気か?」

「そーだ!!」

匙の眼は……真剣だった。

「俺達は、命懸けでお前達を倒す。……お前に、夢を馬鹿にされた俺達の悔しさが分かるか?夢を信じる必死さが分かるか?……この戦いは、冥界全土に放送される。俺達をバカにした奴等の目の前で、シトリー眷属の本気を見せなきゃ行けないんだッ!!」

俺はふらつきながらも向かってくる匙の一撃をかわし、膝蹴りを叩き込む!

血を吐く匙に構わず、俺は胸ぐらを掴み頭突きをお見舞いする!!

匙は勢いよく倒れるが………まだ、立ち上がる。

「やっぱり、お前は俺に似てるよ………匙」

「兵藤オオオオツ!!」

死に物狂いで魔力弾を俺に向けて放つ。

俺は一撃一撃を手刀で消しながら、直接——

ウエルシュ・エクスカリバー
「赤龍帝の聖剣ツ!!」

「ガハアツ………!!!」

オーラを纏った手刀をお見舞いする!!

同時に、匙の心臓に直結していたラインも消え去る!

が、匙は倒れる体を無理矢理止め、後ろに飛び、俺の足にラインを飛ばす!

………身動きさせない気か!!

何とかもがく俺の隙を見計らって、匙は再び心臓にラインを繋いだらしく、ソフトボール程の大きさの魔力弾を手元に浮かしていた。

「これで……ハア、ハア………周囲に影響は出さずっ!お前だけを……ハア、破壊でき

るッ!!」

「先輩!加勢しまー」

「来るな小猫ちゃん!!」

俺は鋭い声で制止する。

「これは匙とのー男と男の戦いだ」

「……今はチーム戦です。協力してこそ」

「分かってるよ。でも、これは理屈じゃない。その気になればコイツは、小猫ちゃんの力も吸えたんだ。なのにそれをしなかった。どうしてだと思う?」

小猫ちゃんは答えられなかったが、匙がにんまり血塗れになった顔で笑う。

「……ゴメンな、塔城小猫ちゃん。俺は、兵藤に、赤龍帝に勝ちたいんだ。『兵士』の俺が!同じ『兵士』である赤龍帝、兵藤一誠に、勝つことが!!俺は赤龍帝に勝つ!勝って、先生になるッ!!差別のない学校を、築くとッ!!」

「……てな訳さ、小猫ちゃん。俺はコイツの、匙元士郎の挑戦を受けたい。そして、コイツを真正面から、本気で倒さなきゃ、いけないんだっ!!」

不器用なバカ……そう呼ばれても良い。

俺達は、何処までも似てるんだから。

小猫ちゃんはそれを聞くと、拳を下ろし、距離を取った。

「サンキュ、小猫ちゃん。……………来いよ、匙。お前の全力、見せてみやがれッ!!」

「……………へへっ、やっぱ、お前は大きいよ。兵藤」

唐突に、匙は語り出した。

「俺さ、お前が羨ましかった……………人を照らす希望の魔法使い、そして、力を持つ赤龍帝。俺は……………同時期にお前と同じ悪魔になったのに、何もなかった……………何も無かったんだよ!!だから、手に入れる。何もない俺でも、赤龍帝であるお前を倒せるんだって、自信をッ!!」

お前、そんな風に見ていたんだな……………匙。

でも……………俺は、俺達は、お前達の夢を乗り越えるッ!

部長には部長の夢がある!俺は……………それを守るッ!!

「これで終わりだ、兵藤オオオオオオオオオッ!!」

匙は渾身の力を込めて魔力弾を撃つ……………寸前に、俺は右手を翳す!

刹那……………

《Divide!》

赤色に覆われていた俺の右手の籠手が白色に変化し、匙の一撃を受け止めた!

魔力弾は直撃したが……………俺は無傷だった。

「俺の魔力弾を、半減させた…………ツ!」

驚愕する匙。

「ああ。簡易的な半減程度なら五回まで使えるようになった。それ以上使うと生命力を削るけどな。それと、モノホンの白龍皇と違って、半減させた力は俺には加算されない。

……………その様子を見るに、会長も俺がこれを使うのを予想してなかったらしいな」

匙には説明してないけど、半減させた力は俺ではなく、右手の籠手に加算される。

当然、籠手にもキャパシティは存在する。

だから、普通の赤龍帝の力で何かに譲渡する或いは解放する……………ま、今は使わな
いけどな。

「さあ、匙……………ショータイムだツ!!」

俺は今この瞬間だけ〃右腕の違和感〃を無視して、匙に接近する!

そしてゼロ距離から、

「放電する龍波動!!」
スパーク・ドラゴンショット

「グギヤアツ!」

魔力を電気の性質に変化させ、匙にぶつける!

匙はその一撃の余波で痺れていたが、構わず俺は蹴つ飛ばし、

《Explosion!》

ドラ「ニック、ブラズマ
「龍牙雷光ツ!!」

「ぐあああああッ?!?!?!」

光速拳で匙を打ち据える!

だが、匙はまだ力なく立ち上がる。

その足元も覚束ない、目線も虚ろだ。だが——匙は叫んだ。

「兵藤オ……………俺は、先生になる!先生になっちゃ、いけないってのかッ!?何で……………俺達は笑われなきやならないッ!?なあ、兵藤オ!!」

俺に向かって——いや、この試合を見ている多くの者達に向かって、匙は吠えた。

「俺達の夢は、笑われるために掲げてる訳じゃ、ないんだ……………ッ!!」

「笑うかよ……………命懸けてまで夢に向かって走るお前らを、笑う訳ねえだろッ!!」

俺は匙を殴り飛ばしながら、そう叫ぶ。

だが匙は踏ん張る。今にも倒れそうな体を鞭打って。

顔は腫れ上がり、左目は完全に塞がれてる。

体には幾つもの痣が、切り傷が出来ても、指も違う方向に折れ曲がっていて

もー。。。それでも、匙の眼光は鋭かった。

お前は。。。本当に強いよ。

俺は、今凄まじいプレッシャーを感じてるんだぜ？

可笑しいよな、俺が勝ってる筈なのに、鎧も、殆んど傷が付いてないのに……俺はこれまで感じたことのない畏怖を感じてんだぜ？

匙、お前によ……………。

だからこそ、

「匙、俺はお前を倒す」

匙が放った、折れ曲がった手で、殴り掛かる。

俺はそれをかわし、カウンターを見舞う。

。。。ガンッ!!!

「……………兵、藤オツ」

手応えは、あつた。

だけど、俺はまだ立ち上がる。そう思っていた。

が、匙は意識を失っていた。

俺の拳を両手で掴みながら。

—————そして、

『ソーナ・シトリー様の『兵士』^{ポーン}一名、リタイア』

匙は消えていった。

けど、俺の拳を掴んでいた手の力は、抜けることはなかった。

俺は————愚直に夢を語り、挑んできた男を、最後まで見届けた。

目を反らせば、また復活する————そう思えた。

「……………先輩」

匙との一騎討ちが終わった俺は、何故だか拳が震えていた。

そんな情けない俺を、小猫ちゃんは手を握ってくれた。

「……………何でだろうな?分かってるのに、さ」

「カッコ良かったです。自慢の先輩です」

「有難う」

……………さて、

「小猫ちゃん、感じるかい?」

「……………はっ」

匙……………今回は、悪いが勝たせてもらう。

お前にも、会長にも。

けど、タイマンなら何時でも受けて立つぜ。

次回、D×Dウィザード

木場「反転の力か……………厄介だね」

ソーナ「此方の手は読まれていた訳ですか……………」

??? 『よお、悪魔共。魔法使いは何処だ?』

MAGIC 48 『VSシトリー眷属!後編』

ドライグ 『オイオイ、次回予告で波乱なフラグ立ったな』
作者 「受け取ってくれよ、俺のファンサービスを!」

MAGIC 48 『VSシトリー眷属！後編』

木場 side

僕とゼノヴィアのペアは立体駐車場を駆け抜けていた。

僕が先に進み、物陰から先を見定めて、後方で待機している彼女を呼び進む。

これを幾度となく繰り返し、徐々に駐車場を進んでいた。

……この気配は。

前方に誰かいることを感じた僕は立ち止まった。

どうやらゼノヴィアも感じていたらしい。

そこにいたのは、黒髪長髪の女性……ソーナ会長の『女王』、真羅椿姫副会長。
手には長刀を構えている。

……確か、かなりの有段者だった筈。

「ごきげんよう、木場祐斗君、ゼノヴィアさん。ここへあなた達が来ることは分かっていたよ」

……………読まれていた訳だ。僕達が攻撃の要だと。

更にその横から2名——長身の女性、『戦車』^{ルック}の由良さんと、日本刀を持つ女性、『騎士』^{ナイト}の巡さん。

「読まれていたなら、仕方ないですね」

僕は手元に聖魔剣を創り出し、ゼノヴィアは腰に帯刀していた剣を引き抜いた。

と、その時だった。

『リアス・グレモリー様の『僧侶』^{ビショップ}一名リタイア』

つ……………恐らくは、ギヤスパー君だね。

「冷静ですね」

「まあ、こう言うのは慣れろって言うのが僕の友達の台詞ですから」

……………とはイツセー君には言われたけど、僕は内心腸が煮えくり返っているよ。

多分、君もだろう？イツセー君。

彼は落ち着いてる様に見える。案外カツとなりやすいからね。

『ソーナ・シトリ様の『兵士』^{ポーン}一名リタイア』

ほら、僕らもやらねばなしじゃないよ。

「……………此方も一本取られましたか」

「さて、やらせてもらうよ。可愛い後輩がやられたので

ね」

ゼノヴィアの体から濃密なオーラが吹き出る！

……………彼女も何だかんだでギヤスパー君を可愛がっていたからね。

お互いに得物を構え————一気に斬り結ぶ!!

ギイイイイインツ!!

「つ……………それは、聖剣!?!」

すると、巡さんはゼノヴィアの得物を見て驚きの顔を見せ、一步下がる。

そう、今彼女が持っているのは聖剣だ。デュランダルではない。

「ああ、これはアスカロン。イツセーから借りた」

『っ!?!』

ゼノヴィアの告白に、全員驚いていた。

彼女の今回の修行内容は、このアスカロンを使いこなせる様にするための物だった。まさか、イツセー君の赤龍帝の籠手から外せるとはね。

アザゼル先生の着眼点は凄いいよ。

そして今、アスカロンは龍ドラゴン・スレイヤー殺しと赤龍帝の両方の力を併せ持つ得物と化している。

……とまあ、説明はこれくらいにしてと。

あまり説明すると「それフラグだから!」とイツセー君に突っ込まれてしまうからね。

「はああっ!」

「ちいっ!」

僕の高速の剣術を舌打ちしながら長刀で往なす副会長。

やはりそう簡単に討たせてくれない、かッ!

……………それと、由良さんにもちやんと警戒はしないとね。

僕は聖魔剣に魔力を纏わせ振るうも、それは空を切った。

……つと、彼女にも動き出したね。

ゼノヴィアは空間に穴を開けると、そこにアスカロンの刀身を近付ける。

巡さん達は何事かと思いい見ていると、その空間から聖なるオーラが溢れだし、アスカ

ロンを包み込んだ！

「……まさか、デュランダルのおーラだけを？」

「その通り！」

「きゃっ!？」

破壊力の増したアスカロンの刀身が、巡さんの日本刀に亀裂を入れた！

これもまたアザゼル先生が着目した点だ。

全く恐ろしいよ。こんな人が僕達の敵だったなんてね！

ギインツ！ガギインツ!!!

とうとうゼノヴィアのアスカロンが巡さんの日本刀を砕いた！

万事休すかと思われた時、不意に由良さんが動いた！

両手を前に翳す由良さんに何かを感じたのか、ゼノヴィアはおーラだけを飛ばした！

「^{リバース}反転ツ!!」

ゼノヴィアが繰り出した一撃は、聖なるおーラが消失し、魔のおーラへと変化した！
幸いおーラだけを飛ばしていた為に、ゼノヴィアはそれを簡単に避ける事が出来た。

は悪手！

それを言うと、彼女は顔を驚きで染め上げた。

「……まさかそこまで読まれるとは。その通り、私もカウンター使いです」

真羅副会長の目の前には装飾された鏡が現れた。

「これが私の『セイクリッド・ギア神器』、『ミラー・アリス追憶の鏡』。貴方の察しの通り、相手の攻撃に左右される力
ウンター系の『セイクリッド・ギア神器』です」

……………やっぱり。

あのままゼノヴィアとチェンジしていたら、聖剣の一撃を返されてアウトだったね。

「とは言っても、貴方の聖魔剣の力もそれなりに大きいです。このまま続けても、防御力の低い貴方では一撃入っただけでアウトです」

確かにね。

でも、それはその鏡に攻撃すればの話だ。

恐らく素早く攻め立ててもあの『セイクリッド・ギア神器』を瞬時に展開されれば終わり……………ならどうすれば副会長に一撃入れられるか？

簡単だ。鏡は無視すれば良い。

彼女は恐らく気付いていない。

今彼女が立っているのは……………

「僕の領域だからね」

「？」

「我が呼びび声に応え、虚空に狂い咲け……………鋭き鉄の華……………」
ブルーム・デイヴィエ・イシヨシ・セイウア
狂い咲く鉄華の剣

刹那……………

「……………ツ!!？」

真羅副会長は虚空から生えた僕の魔剣に串刺しになっていた。

……………あんまり女性には使うべきじゃないね。

勿論、心臓に剣は到達していない。

でも、これで『女王』は取らせてもらった！

真羅副会長が驚愕に目を見開くのと同時に、咯血した。
そして力なく倒れ、

『ソーナ・シトリー様の『女王』、リタイア』

真羅副会長は光になって消えた。

「副会長っ!?!」

「余所見とは良い度胸だなっ!!」

巡さんと由良さんが気をとられた隙を狙って、ゼノヴィアはアスカロンを振り下ろした!
た!

よし!このタイミングなら間に合わない!

そう確信した僕だったが……………

「こうなったら……………ゼノヴィアさんだけでも!」

「ああっ!反転!!」

だが彼女達は予想を遥かに上回るスピードであの反転の力を発動した!

「ッ!!」

ゼノヴィアが放った一撃は魔のオーラに変わり、ゼノヴィア目掛けて弾き飛ばされた！

ゼノヴィアは逃げようにも刀身を白刃取りをされていて逃れようがない！

「ぐううううー……ッ?!?!なら……お前達も道連れだああ!!」

ゼノヴィアは倒れることなく踏み止まると、既にアスカロンに溜め込んでいた聖なるオーラを波状攻撃として撃ち放った!!

「連続では出せまいッ! 聖牙天衝オオオオオッ!!!」

「……ッ!!!」

三日月状の光波は反転の力を発動させる暇を与える事無く巡さんと由良さんに命中した!!

「……後は、頼むぞ。木場」

ゼノヴィアは息を切らしながら光に包まれて消えた。

任せておいて、ゼノヴィア。

君の分まで、僕は剣を振るおう。

木場 side out

~~~~~

イツセー side

「……うし、こんなもんだろ」

「ナイスチョイスです。イツセー先輩」

匙を倒した俺達は、暫くの間ある準備をしていた。

その間に、こちら側は会長の『女王』、『戦車』、『騎士』を打ち取っていた。

だが、こつちも『騎士』が一名リタイアとなった。

木場かゼノヴィアかは分からないけどな。

『オフェンスの皆、聞こえる?』

……つと、部長からの連絡だ。

『これから私はソーナの本陣に向かうわ。イツセー達はモールの中央広場に行ってくれ

る?』

中央広場?

『そこにソーナと思わしき人がいるのだけれど……………ギヤスパークからの情報によれば屋上にいる筈だわ』

「畏の可能性がある…………?」

『そう。それを確認してほしいの。今から私の分身を送り込むわ』  
…………どう思う? ドライグ。

『十中八九結界の類だろう。恐らくは術者の姿を投影する、な』

まあ、あの慎重派な会長がそんなに場を変える筈はないからな。

部長もそこを睨んでるんだろう。

「分かりました」

「了解です…………」

『助かるわ。それとイツセ…………アレはどうだった?』

『……………やっぱり部長の思っていた通りでした』

『そう……………で、作戦は?』

「完璧です……………」

な、小猫ちゃん。

俺がニヤリと笑むと、小猫ちゃんもピースサインを見せる。

それを聞いた部長はホツとする。

『分かったわ。……もうゲームは終盤よ。皆、気合いを入れて……勝つわよ!』  
「はい!」

部長の言葉に改めて気合いを入れ直し、俺達は決戦に赴いた。

~~~~~

『ワイズマン!』

人間世界の鬱蒼と茂る森の奥に位置する洞窟……そこに居を構えるワイズマンの元に幹部ファントムのメデューサが訪れる。

『……何用だ、メデューサ』

『フェニックスの姿が見当たらず……奴め、もし貴重なゲートを手にかけていたら』

『案ずるな』

焦りから声が一段高くなるメデューサを諫め、ワイズマンは手元の宝石を覗き込んだ。

『……………奴は今、現実にはおらんよ』

『…は?』

『クッククック…:どうやら余程フラストレーションが溜まっているらしい』

訳が分からず訝しげになるメデューサに構わず、ワイズマンは不気味に笑った。

宝石には、何処かの警備兵を蹴散らして進む、フェニックスが映っていた。

~~~~~

「ごきげんよう、兵藤一誠君、塔城小猫さん」

「どうも……」

「大胆っすね、会長。『王』<sup>キング</sup>自ら出陣とは」

部長の言う通り、シヨッピングモールの中央広場に、会長は優雅に佇んでいた。

……………この感じ、やはり会長はここにはいないな。

『やはり結界が張られているな。相棒、今日の前のソーナ・シトリーを攻撃しても無駄だぞ』

分かってるよ、ドライグ。

要は部長が来るまでそれを悟られなきや良いんだ。

「あら？あなた方の『王』<sup>キング</sup>も大胆不敵だと思いますけど？」

「言ってくれるわね……ソーナ」

おお、我らがリアス部長のお出ました。

アーシアと朱乃さんは……本物の部長に付いてるな。

そして……結界を貼ってるのは『僧侶』<sup>レベリョット</sup>の子達だな。

会員の眷属は3、対して此方は今来た木場を含めて6。

数は有利だけど、会長が何を仕掛けてくるか分からない。油断はしない。

……く……く……く……

一瞬、俺の意識が遠退いた？

何とか踏み止まるが、混濁はどんどん強くなっていく。

遂には、俺はその場で膝を付いた。

イツセーside out

~~~~~

木場 side

……………イツセー君?

僕はソーナ会長と中央広場で向かい合っていた。

一触即発の空気の中、突如イツセー君が膝を付いた!

「イツセー?」

「先輩!どうしたんですか……………」

「あ、あれ?……………何か、意識が……………」

全員が困惑する中、会長だけが小さく笑った。

「無駄ですよりアス。フェニックスの涙も効果がありません」

「イツセーに何をしたの?ソーナ」

部長は紅いオーラを漂わせてる。

例え分身でも、やはり部長のオーラと遜色変わらない。

「兵藤君の力は驚異です。それは、貴女達グレモリー眷属の柱、いえ、希望と呼んで良いでしょう。瞬時に戦場を見極める視野の広さ、あらゆる属性のドラゴンショットを使い

こなす器用さ、触れるもの全てを砕くパワー、そして……絶対に諦めない『根性』と呼ぶべきもの。それが私達の一番の驚異でした」

……………確かに。

この中なら一番に警戒すべきはイツセー君だろう。

彼は自分は細かい戦いは苦手だと嘯くが、実際は違う。

今ソーナ会長が挙げた例がそれを物語ってる。

「だからこそ、違う形で貴方を倒すしかなかった」

『僧侶』の一人が取り出したのは……輸血パック？

その中身は血の様に赤い……血？

……ッ!!

そうか、あの中身は……ッ!

「成る程……………正当法じゃ無理だからこそって、訳か……」

「そうです。この中身は……貴方の血です。人間がベースとなっている転生悪魔。人間は体に通う血液の半分を失えば致死量です」

「……………強制、リタイア……………ッ!」

イツセー君が倒れたと同時に、イツセー君の右腕に繋がれていたラインが浮き彫りに

なった!

「加えて貴方にはこのラインを見れば何をするか分かった筈です。だからこそ、匙は修行でラインの不可視化を成功させたのです」

ッ!

僕は慌ててラインを切断する。

「無駄です、木場祐斗君。もう彼は、医療ルームに転送されるだけの血を失っています」
会長の冷淡な一言に僕は愕然とする———が、

「ふ、フフフ……………」

部長だけは、それを笑っていた。

ど、どうしたんだ?

「……………リアス、何が可笑しいのです?」

「フフ……………ッ!ソーナ、見てごらんなさい。本当にイツセーの血は散らばっているのかしら?」

「何を言ってる……………ッ!?!」

言われて会長は床を見るが———その途端会長は顔を強張らせた!

釣られて僕らも見ると——

「血が………飛び散っていない?」

そう、切断したラインからは、血が一滴も出ていないのだ。

もしあのラインから血が抜き取られているならば、切った瞬間に血が飛び散る筈………どう言うことだ?

その時だった。

「く、クククツ………アツハハハ!!」

倒れた筈のイツセー君が、笑い声を上げながら立ち上がったのだ!

ど、どうなってるんだ!?

確かにあの血の量は体の半分程だ!

例え頑丈なイツセー君でも、血を失えばどうしようもない筈………。

「兵藤君、何故………!?!」

「イヤー、俺の大根演技も中々捨てたもんじゃないなあ。会長、それ本当に俺の血だと思ってるんですか?」

「何を、言ってる………」

「まあ確かに半分ちよつとは俺の血ですよ。だけど………」

《コネクト・プリーズ》

イツセー君は一旦鎧を解くと、魔方陣から何かを取り出した。

それを見て、会長は目を見開いた！

「そ、それは……………」

イツセー君の手に握られたのは、トマトジュースだ。

「もう半分以上はこのトマトジュースですよ」

「ツ!?!」

「んで、俺に繋がれてたラインは100均ショップで手に入れた奴から作り出したんですよ」

「苦労しました。匙先輩、ラインの気配すら絶たせていましたから。感知するのも、繋ぎ合わせるのも……………」

じゃあ、今のは、演技……………!?!

ってちよつと待って。部長も笑っていたと言う事は……………

「リアス、貴女最初からこの手を見抜いていた……………ツ!」

「そうよ。私だって、『セイクリッド・ギア神器』に関してはそこそこ調べたのよ。『アップロード・システム黒い龍脈』が、所有者の技量次第でラインを不可視に出来ることも」

……………そうか。試合前に部長がイツセー君と小猫ちゃんに声を掛けていたのは、この事

だったんだ!

「敵を騙すにはまず味方から……………。この事を大人数に知られると、却ってやりづらいのよ」

「……………成る程。此方の作戦は、読まれていたと言う訳ですか」

「そう。そして、貴女でチェックメイトよ。ソーナ」

そう言うのと、部長はドロロンと煙に巻かれ、そこにいたのは一匹の蝙蝠。

部長の使い魔だ!

「ツー!」

「最初に取ったギヤスパーはちゃんと仕事して終わりましたよ。会長、貴女の場所もちゃーんと把握済みです。今本物の部長は、貴女の所に向かってますよ。そう……………屋上にね!」

「ツー!キヤアツ!?!」

イツセー君は不意打ち気味に『僧侶』^{ピシヨツ}の女の子……草下さんにドラゴンショットを撃った!

恐らくあまり力は込めてないけど、不意打ちだったので動揺によつて結界を維持できず、結界は消滅した!

途端、結界に投影されていた会長は消滅する。

「さあーて、草下さんだったよな?今から俺達3人相手取るかい?」

恐らくは草下さんも反転の力を有してる筈。

でも、先程の巡さんと由良さんはコンビだったから上手く立ち回れた。

現在草下さんはローロー一人。

恐らく集中力が必要な反転は今のシトリー眷属では複数相手では出来ないだろう。

立ち塞がるイツセー君だったけど、その体は僅かにふらついていた。

「つ……………やっぱ半分ちよつとでも抜かせたのはマズったな」

……………どうやら演技じゃなさそうだ。

だつたら早く決着を付けないと!

「……………仕方ないか」

……………え?」

「木場、小猫ちゃん。この状態じゃ俺は足手まといだ。部長の事、任せたぜ」

「イツセー君……………」

鎧を解いたイツセー君は、かなり顔色が悪かった。

『相棒、お前まさか!よせつ!今の状態では自殺するような物だ!!』

「赤龍帝の力を反転させられても厄介なだけだ!なら……………相反する力だツ!!」

イツセー君は右腕の、ヴァーリから奪った白龍皇の力が宿った籠手を構え、低く吠え

videDivideDivideDivide!》

「くっ、あぁッ!?」

何て事だ………草下さんの魔力が、一気に小さくなった!

イツセー君、君は白龍皇の力まで………!

が……

「……………ゴフッ!」

イツセー君の鎧の口許から、何かが漏れ出した。

………血だ。

すると、鎧は霧の様に霧散し、イツセー君はその場に踞り、尋常じゃない程に吐血した!
た!

「ガハッ、ガハッ!!」

「イツセー君ッ!」

慌てて駆け寄るが、イツセー君は寒くて仕方がない様に震えていた!

近くにいた小猫ちゃんも、顔が青ざめている!

「……ダメ、このままじゃ、イツセー先輩がッ!!」

『グレイファイア!!相棒を強制リタイアさせるッ!!このままでは死ぬ!!』

『ツ!リアス・グレモリー様の『兵士』、リタイア!』

グレイファイアさんも動揺しながらイツセー君をリタイアさせる!

だがイツセー君は消える前に、

「木場、小猫ちゃん、受けとれっ……!」

《Transfer!》

最後の力を振り絞って僕らに草下さんから奪った魔力を譲渡した!
そしてイツセー君は、この場から消えた。

と、同じタイミングで、

ドオオオオオオンッ
!!!!!!

「「ッ!?!」」

シヨツピングモールの壁に穴が空いた!!

何があつたんだ!?

『よお、悪魔共。魔法使いは何処だ?』

粗暴そうな声と共に現れたのは、火の鳥を思わせる異形の化身だった。

「祐斗、小猫!」

「何があつたのですか!?!」

轟音を聞いて、部長と会長も屋上から転移で現れた!

「……ファントム!」

『はっ、俺の事を知ってるのか?』

「フェニックス……?」

会長は目の前の異形を見てそう漏らした。

『ほおー。分かつてるじゃねーか。そうだよ、俺の名はフェニックス。早速だけどよ、テ
メーらに用はねーんだよ………消えろオ!!』

『ッ!?!』

ソイツーフィーフェニックスは手に大質量の炎を産み出すと、此方に投げ付けた!

僕達はそれをかわすが、その一撃はこのレプリカの空間に穴を空けた！

なんて一撃だ………こんなもの食らってたら、持たないっ!!

「よくも私達の試合の邪魔を！」

「許さないわ!!」

部長は手に幾重もの滅びの魔力を、会長は水を様々な動物に変化させ、フェニックスにぶつける！

だがフェニックスは手に持った大剣でそれらを掻き消してしまった！

『テメーら悪魔風情が、俺に勝てると……ヌアアアッ!!?』

そう自慢げに口を開いたフェニックスに息つく暇無く電撃を浴びせた者がいた！

「……朱乃さんだ！」

「この力を、彼の前で振るおうと思っていたのに………覚悟なさい。今からあなたにする事は、全て八つ当たりよっ!!」

『ガアアアッ!!この力、光の力も混ざっているのか！』

「?」

フェニックスは何とか逃れるも、そこには部長の滅びの魔力が！

『ちい!弱い癖にしつけえ!!』

「弱いかどうかは、この状況を見て判断なさい!!」

『……………鬱陶しいんだよッ!!』

会長は高速で振動させた水で形作られた龍を差し向けるも、フェニックスは全身から炎を放ち、会長の水を蒸発させた!!

熱量でもこれ程とは……………明らかに悪魔のフェニックス家より強い!!

『何だ何だ?もうお仕舞いか?なら、消えーーッ!』

『ッ!』

大剣を振るおうとしたフェニックスに、何かが当たりそれは阻止された!

一体……………?

『ああん?……………よお、会いたかったぜ!魔法使いッ!』

ッ!?

そんな、彼は重症の筈……………!

「ハア……………ハア……………ッ!」

「イツセーッ!」

そこにはやはり、イツセー君がいたんだ。

青い魔法使いの姿だけど、壁に寄り掛かった状態だ……！

「ハア………お前、俺が倒した筈だろ？」

『俺は不死身だ。何度でも蘇る！そして……カアッ!!』

フェニックスは炎で形作られた鳥を撃ち放った！

イツセー君はそれを避け、フェニックスが剣で斬りかかって来たので、再び受け止める！

が、やはりイツセー君は膝をついた！

『蘇る度に……強くなるっ!!』

「確かに、な！前より……強くなってやがる！」

『おらあ!』

「ガハッ!？」

フェニックスの蹴りで、イツセー君はいとも簡単に吹き飛ばされた！

そして変身が解かれる！つて不味い!!

「イツセー君はやらせないッ!!」

『またテメエか!!しつこいんだよ!!』

しつこくして結構！

大切な友達を、失う訳にはいかない!!

「アーシアさん!今のうちにイツセー君の回復をツ!!」

「は、はいッ!!」

「加勢するわ、祐斗!!」

けど力量差は圧倒的で、僕はフェニックスに吹き飛ばされる。く、このままじゃ……………ッ!

「フアントム。お前の横暴も、そこまでだ」

『ああん?』

こ、この声は……………!

「お兄様!」

魔王、サーゼクス・ルシファー様だ!

サーゼクス様自らこの場に出るなんて……………ッ!

「若き悪魔達の熱き争いを妨げた罪……………万死に値する」

『へっ!ほざいてんじやーーー』

フェニックスの言葉は、長くは続かなかった。

何故なら、サーゼクス様の放った滅びの魔力で、顔が吹き飛んでいたからだ。

「……………滅べ」

撃ち放った滅びの魔力を再び手繰り寄せたサーゼクス様は、今度はフェニックスの体を消滅させた！

「……………木場祐斗君、それに皆。済まなかった」

サーゼクス様は頭を下げた。

「奴の侵入を許したのは私の落ち度だ。君達には、多大な迷惑を掛けた」

「ルシファー様、頭を上げてください」

けど、部長は気にしてない風に、サーゼクス様に告げた。

「ファントムがここに乗り込んで来るなんて、誰も予想して無かったですし……………それに死者も出ていないから、良いのでは無いでしょうか？」

「それに今度は、ファントムの乱入も視野に入れての防衛もすれば、宜しいと思います」

「リアス、ソーナ……………ありがとう」

「それに……………今はイツセーです」

「そうだった。グレイフィア、今すぐ全員を転移させるんだ！」

『はい！』

結局うやむやになったしまったこのレーティングゲームだけど、この戦いで得られた物は大きいと思う。

だよね、イツセー君……………。

次回、D×Dウィザード

イツセー「俺、一体……………」

エリス「始めまして、兵藤一誠君」

ゼノヴィア「夏休みの宿題だ!!」

小猫「にゃん♪」

MAGIC 49 『さらば夏休み』

イツセー「俺死んでないからな!俺生きてるからな!!」

ドライグ『穏やかな顔だろ?死んでるんだぜ……………』

ドラゴン『何だ、これは……………!?!』

MAGIC49 『さらば夏休み』

木場 side

あれから、色々大変だった。

先ずファントムの侵入を許した異空間のレプリカは予想以上にボロボロだったらしく、僕達が転移した瞬間に崩壊した。

まあこれに関しては使い捨てであるから気にしないでくれと、サーゼクス様に言われた。

他にもファントムの攻勢で傷ついた悪魔達の治療など、主にアーシアさんが大変だったね。

それに一番の問題は……………

「まだ、イツセーは目覚めないか……………」

グレモリー家の一室にて椅子に腰掛けたイツセー君の使い魔、ティアマットがそう静かに零した。

そう、イツセー君が未だに目覚めないのだ。

白龍皇の力を使った事が予想以上のダメージだったのか、イツセー君はファントム乱入事件の後再び倒れたんだ。

と言うよりも医療ルームに運ばれて生命維持装置を付けたばかりなのにそれを無理やり引き千切ってここに来た事も一因だとお医者様に言われた。

因みにソーナ会長との試合から五日ほど経っている。

もうイツセー君にポコポコにされた匙君の怪我也完治している。

「ティアマット。イツセーの奴、白龍皇の禁バランス・ブレイカー手に目覚めていたのか？」

アザゼル先生はいまいち釈然としない顔で訪ねていた。

「……………目覚めた、と言うより偶発的に発現した、と言うべきか」

曰く、タンニン殿との修行中に偶然その力が発動したらしい。

だが、発動後五秒と経たずに解除され、此間の様に血反吐を吐いて昏倒したらしい。

その後、暫く眠りっぱなしで修業にも支障が出たそうだ。

「あの時は三日三晩で済んだが、今回の様に長いのは恐らく生命力が弱ってるにも関わらず魔力を無理に行使したからだろう」

「……そんなに深刻なのね。相反する力を使うというのは」

部長が言うのと、ティアマトは静かに頷いた。

「ああ。それに、本来なら相反する白の力を取り込んだのが異常すぎる。一応修行で簡単な半減なら使えるようになったが……」

「全く恐ろしいな、アイツは……」

アザゼル先生の言う通りだ。

「自らだけでなく、仲間の力も増幅できて尚且つ敵対する者の力を半減できるなんて、バランス・ブレイカーも良い所だ。」

「僕なら絶対に当たりたくないし、ゲームならまつ先に潰すだろう。」

「もしかすると、イツセーの半減の力は下手したら制限がかけられるだろうな」

「だが、それで良いと思う。簡易的な半減にしろ、使い過ぎれば生命力を消費してしまうからな」

と、そんな時だった。

「み、皆さんっ!!!」

「アーシアさんが大慌てで駆け込んできた。」

「ど、どうしたの？アーシア」

「ぶ、部長さん！ イッセーさんが、イッセーさんが……！！」
イッセー君が………何かあったのか!?

「イッセーさんが、目を覚ましたんです………っ!!」

木場 side out

~~~~~

イッセー side

………ん?

「あれ？俺、一体………」

『お早うさん、相棒』

俺の視界に入ってきたのは、見知らぬ白い天井だった。

何処だ、ここ……………そうだ!!

「ドライグ、ファントムは?!」

『落ち着け相棒』

落ち着いてられるか!!皆は無事なのか!?

『だから落ち着けて!ファントムならサーゼクス・ルシファーが倒した』

サーゼクス様が……………!?

『ま、奴の言葉を信じるならまた蘇るだろう』

そう、だな……………。

まあ、その時はまた相手取るけどな!

『んで、お前は白龍皇の力の後遺症で五日間ほど眠ってたって訳だ』

五日間も!?

……………皆心配してるだろうなあ。

『ああ。それにほら』

「?!」

ドライグがそっち向けと言ってるので向いてみると、

「……………イツセー様!？」

グレイフィアさんが水桶を持って入口に突っ立っていた。

「ど、ども。お早うござ——」

言うよりも早く、グレイフィアさんが抱き着いてきた。

あ、ちゃんと水桶は脇のテーブルに置いてな……………つて今は関係ないか。

「御免なさい。心配かけちゃって」

「本当、ですよ……………ッ!バカッ!!」

……………こりや、部長達のアフターケアも大変だな。

『久し振りの修羅場か?』

『もはや死に時だぞ!兵藤!!』

死に時とか言うな!マジで死の淵彷徨ったわ!!

山羊座の金ぴかの人みたいな事言ってるじゃねえよ!

そんでまあ、この後部長達女性陣（十ティアとセラフオール様）に心配かけた罰として一人一人ハグする事になった。

まあ、心配かけすぎたし、この位はね？

~~~~~

「兵藤！」

「よお、匙」

俺は暫く病室暮らしとなっていましたので、ベットに寝転がっていると、匙が訪れた。

「元氣そうで何よりだぜ！」

「まあな。それより聞いたぜ？お前、MVPの証貰ったらしいな」

これは後で木場から聞いた事だけだな。

「あ、ああ……でも、本当に受け取って良いのかなって」

「ばーか。お前は赤龍帝の俺をダウンさせた男だぜ？受け取らなきゃやられた俺が癪だからな」

「兵藤……」

「それにな」

一息置いて、

「お前は弱くなんてないよ」

「!」

何でビツクリしてるんだ？

「お前の魂の叫び、ちゃんと届いたぜ。俺のハートにな」

「魂の叫び……」

「ああ。……だからよ、良い先生になれよ」

「っ！………おうっ!!」

俺と匙は拳を合わせる。

「ほっほっほ。男同士の友情……良いもんじやのう」

「っ!?!」

だ、誰だ!?

見るとそこには、しわくちやの爺さんがいた。

「爺さん、誰だ?」

「農? 農あオーディンっちゆうくたばり損ないのじじいじや」

「お、オーディン!?!」

俺と匙は目を見開いた!

そりやそうだ! オーディンって、北欧の主神だろ!?

「もうオーデイン様！今から魔王様達との会合でしょう!？」

その後、スーツを着た銀髪のお姉さんが現れた。

「わかつとるわい。全く口煩くてなあ……」

「何ですって!？」

「何でもありません」

うわ、白々しい！

「まあまた会えるじやろうて。じゃあの赤龍帝、ヴリトラの主よ」

そう言つてオーデインとスーツの姉ちゃんは去つて行つた。

「……お前、やっぱ凄いやな。北欧の神様引き連れて来るもん」

「あのな……人を事件を引き寄せる某バーローみたいな言うの辞めてくれるか？」

『真実は、何時も一つ!!』

『なお、一つではないとは言つてない』

匙は苦笑いすると、デツキケースを取り出した。

「どうせ暇なんだろう兵藤？一発ファイトでもしようぜ」

「おっ！分かつてるじゃないの」

俺は機の引き出しからデツキケースを取り出す。

「何か賭けるか？」

「じゃ、下の階のジューズな」

「OK!」

「スタンドアップ! ヴァンガード!!」

~~~~~

そこで、何やかんやあつた冥界での合宿も終わりとなつた。

いやー、色々あつたけど楽しかったな。

「じゃあねミリキヤス。体には気を付けてね」

「はい! お姉さまもお体にお気をつけ下さい!」

ああ、ミリキヤス様ええ子やなあ。

よ、グレモリー家の奥から金髪の清楚そうな人が出てきた!

「リアスさん」

「…お義姉様!!」

え、お義姉様って事はもしかして……………

その人はミリキヤス様を持ち上げると、俺を見て微笑んだ。

「初めまして、兵藤一誠君。ミリキヤスの母のエリス・キメリイエスです」

「ど、どうも……………」

め、滅茶苦茶美人だ……………!!

でも、悪魔にしては珍しい褐色肌のね。

確かキメリイエスって元72柱の悪魔じゃなかったっけ？

もう断絶してるとか何とか……………。

「リアスの事、宜しくお願いしますね」

「は、はい！リアス様は俺が守って見せます!!」

「頼もしいですね」

エリスさんはくすくすと上品に笑った。

「ではまた会おう。兵藤一誠君」

「はい、お世話になりました!」

いやー、本当に良い人達ばかりだよ。

とまあ、様々な言葉を交わした後、俺達は人間世界に戻ってきた。

また来たいな、冥界！

「あゝ!!夏休みの、宿題……忘れてた!」

と帰りの電車でゼノヴィアが慌てふためいていたのだった。

まあ………かく言う俺も後半分残ってるけどね!!!

「ん?」

と、急に小猫ちゃんが俺の膝に座った………座った!?

「こ、小猫ちゃん?!」

「にゃん♪」

あ、ダメだ。凄く愛でたい。

俺は半眼の部長、涙目のアーシア、威圧感溢れるニコニコフェイスの朱乃さん、羨ましそうに睨み付けるゼノヴィアの構わず、小猫ちゃんの頭を撫でるのだった……。

家に着いた時が怖いな……ハハ。

『ホーム着いたら刺されればいいのにな』

『全くだ』

止めんかい!!

何て事を言いつつも、俺達を乗せた電車はホームに着いた。

ホームに降りた俺達の前に、突如人影が！

咄嗟に身構えるも、そいつは何故だかアーシアに近づいていた。

「やあ。アーシア」

「貴方は……？」

コイツ……若手悪魔の会合でいたな。

「この傷を見てくれれば分かると思う。僕はあの時、君に救われた悪魔だ」

そいつは胸元を見せると、そこには大きな傷跡があった！

「もしかして……ディオドラ？」

「ああ。あの時は済まなかったね。会合の際に挨拶できれば良かったのだけれど……」

僕は、ずっと君にお礼を言いたかった。そして——」

ディオドラは何とアーシアの手の甲にキスをした!!

な、何してくれてんだこの野郎!?

「君と出会えたのはきつと運命だ。どうか、僕の妻になってくれ」

『はあああああああああああつ!?!』

突然現れたディオドラの告白に、悲鳴を上げるしかなかった俺達であった。

こりやあまた、一波乱ありそうだな……………

『やっぱこの男は騒動を引き寄せるんだな』

『質問。バーローは何時高校生に戻りますか？』

『調整中』

コンマイか!! つか関係ねえ!!

~~~~~

異空間……………

『ああ、いたいた』

『ちっ、くそがあ!!』

イツセー達のレーティングゲームの舞台であるショッピングモールのレストランが
あった場所で苛立ちを隠さず吠えるフェニックスの前に、新しいファントムが現れる。

『探しましたよ、フェニックス』

『あん!?!……ベルゼバブか』

茶の体色が特徴のファントム、ベルゼバブに、フェニックスは喧嘩腰で訪ねる。

『ワイズマンからの命令です。貴方を連れ戻しに来ました』

『なっ……………』

『流石に独断行動が過ぎましたねえ。あの方のお仕置きは恐ろしいですから………本当の
死ぬ恐怖を味わえるやもしれませんよ?』

『……………ちいっ!!』

悪態をつくフェニックスにベルゼバブは可笑しくて堪らないように笑い声を上げた。

第五章：冥界合宿のヘルキャット編・完

MAGIC番外編 『三者面談』

リアス side

「これは、一体……………」

悪神ロキを打ち倒し暫く経った明るる日の朝、私達は怪奇現象に遭遇していた。
「驚きですわ…」

「ええ。と言うよりも朱乃、貴女またイツセーの寢床に潜り込もうとしたわね？」
「あらあら。怖いですわあ」

「お、お二人とも！今は争つてる時ではないですう！」

…それもそうね。

今はこの現象の解明を急がなきゃ。

「これは謎現象だね……………」

「やつぱりイツセー先輩は、良くも悪くもトラブルメイカー……………」

ゼノヴィアと小猫も同様に呻いてる。

え？何が起きてるのかって？

実は……………イツセーが三人に増えたの！

「か……………」

一人は見知った私達の恋焦がれる茶髪のイツセー。

「うーん、もう腹いっぱいだあ……………」

もう一人は、私……………いえ、グレモリー族の紅髪と違う「赤」い髪色をしたイツセー。

顔立ちは見慣れた私達の知るイツセーだけど、口元には無精髭を生やした、所謂オヤジ系なイツセー……………もしかしたら未来のイツセーはこんな感じなのかしら？

「……………サモサモキャット、ベルンベルン」

それは置いておいて、決闘者なら一度は聞いたであろう『デュエリスト覇ジャガーノート・ドライブ龍』とはまた違う

呪詛を呟くのは一人目に紹介したイツセーその人だった。

でも、このイツセーからはイツセー自身が持っていたファントムの魔力が感じられるの。

対して、もう一人のイツセーからはその魔力が感じられない。

これは、一体何が……………まさか、ロキの置き土産!?

あ、今3人のイツセーが目覚めたわ。

「ふあーあ、よく寝たなあ……………」

と飯を食いながら呟くのは赤髪の俺。

声と緑色の瞳から察するに、ドライグだ。

「……まさか、俺が現実世界に出てこようとはな」

こっちは髪色も含めて俺とそっくりな俺。

だけど、その瞳は血の様に赤い。となると、ドラゴンだな。

「もしかして、ロキが何かをしたのかしら……?」

部長が心配そうに呟く。

「……どうやら俺達は意識体だけが浮上したらしい。ドラゴン、アンダーワールドの中を見つめてみる」

「……確かに、俺の体はアンダーワールドで眠ったままだな」

そうなのか。

と言うか、魔力が全然感じられないんだけど……。

「それは魔力の大元を司る俺がこうして浮上しているからだろう。どうやら、この状態だとお前は魔力を行使出来ない様だ」

「そうなる……赤龍帝の籠手も使えない訳だ」

じゃあ何だ……俺、今日一日は丸腰って訳か!?

「大丈夫よイツセー。今日一日、貴方は私達が守るわ」

「ええ。私だけでなく、お父様を守っていただきましたもの。その恩を今返しますわ」
「そ、そんな、恩だなんて……」

ただ単に、ロキの言動にムカついただけだしな……。

まあ、この戦いがあつたからこそ、俺は少し、前に進めたの、かな？
と、それは兎も角だ。

「元に戻れるのか？これ」

「まあ、のんびり気長に待とうや」

「お気楽だな。相変わらずの牙の抜けっぷりと言うか……」

「あん？俺がお惚け野郎だつて言つてんのか？」

「そう言つてるんだよ。全くババロアみてーな脳ミソしやがつて」

「うるせーよ!!俺の脳ミソは……プリンだ!!」

結局プルプルなんじゃねーか!!

「もしかして……何時もこんな感じの雰囲気なの？」

「……はい。概ねこんな感じですよ」

身内の漫才がバレたじゃねーか!!

「漫才してねーよこの童貞小僧が!!」

「んだとこらああああああ!!」

童貞つて言うんじゃねえよ!!

「騒がしいです……………」

「でも、ちよつと羨ましいです」

「え?」

どう言う事だ、アーシア?

「こつやつて何時も本音でぶつかつてたんだなあつて。イツセイさん、全てを抱え込ん

でたわけではなかつたんですね」

「ん、まあ付き合ひ長いしな」

「確かに。以前のイツセイは全く自分を見せなかつたからね」

「でもこつして本音をぶつけれる相手がちゃんといたんだよね!良かった!」

と、教会トリオがそう評す。

「ほう、お前の所もか…………」

『!?!』

だ、誰だ!?

「また会つたな。兵藤一誠」

「カイト!?!」

あまぎ
天城カイト。

ヴァーリチームの一人で、星龍と呼称される『光輝なる銀河星龍』エタニテイ・ブライト・ドラゴン・ギャラクシオンを宿した『神器』、『光子の錬術士』の使い手だ。

「どうして貴方がここに!?!」

部長も驚いてるけど、そりやそうだ!

コイツ等ヴァーリチームは一応テロリスト扱いだからな!

「安心しろ、そう物騒な話じゃない。実はな……」

「やあ、兵藤一誠」

白い魔方陣と共に姿を現したのは……ヴァーリ!?

「お、お前まで!!……って、後ろの女の子は?」

ヴァーリの手には俺がこの間貸したエロゲが握られている……まあ、それは置いていて、後ろに何と女の子を従えていた。

白に近い銀髪に綺麗な白のワンピース。

そして瞳は海を思わせる青。

「ほらアルビオン。そんなに縮こまるな」

「だ、だがヴァーリ! こんな姿、ドライグに見られたら……ッ!?!」

「あ、アルビオン……なのか!？」

俺が信じられないように眩くと、ヴァーリも困ったように頷いた。

だけど、一番びっくりしていたのはドライグだ。

「お前……可愛いじゃねえか／＼／＼！」

「か、かわつ!？」

「つて、俺は何を口走ってる!？」

おー、あんなに恥ずかしそうなドライグは新鮮だなあ。

部長達も衝撃の告白にびっくりしている。

「本当に白い龍はメスだったのね……」

「でも、すごく綺麗です!」

うんうん、分かるぜアーシア!

雑誌とかに出ても可笑しくないもんな!

「朝目が覚めたら、こんな有様だったんだ。まさか、君の所も出ているとはね」

「俺も似たような感じだったよ。朝起きたら同じ顔が二人もいたからな」

「……二天竜のイチヤイチャ、か」

カイトが呆れたように眩く。

「墮天使総督のアザゼルはいないのか?」

「部長が連絡してるけど、全然でないんだよ」

「つと、忘れないうちに。ありがとう、兵藤一誠」

ヴァーリは俺から借りていたエロゲを手渡した。

「どうだったよ？」

「うん、中々悪くなかったよ」

そつか、しつかしあの前魔王の血を継ぐ奴がエロゲに興味持つとはねえ。

「で、何で来たんだ？」

「こんな状態だから、アザゼルに相談しようと思つてね」

「こうなつたら直接尋ねるか？ヴァーリ」

「うん、そうしよう。行くぞアルビオン……………？」

が、アルビオンはそれに答える事はなかった。

何故かって？

それは……………

「や、やはり胸があつたほうが男の気は向けるのだろうか？」

「うん。それは人によるわね…」

「イツセーさんは、胸の大きい方が好みです……………あうう」

「大丈夫です、アーシア先輩。これからですから……」

「そうですね、アーシアちゃん。アーシアちゃんにはちゃんと魅力が十分にありますわ」
「そうだね。でもやはり丁度な大ききのほうがイツセーも満足だろうからね。な、イリナ？」

「え?! わ、私に振るの!?!」

部長たちとガールズトークを繰り広げていたからだ。

「……………どうすんの? ヴァーリ、カイト」

「…取り合えず、俺達だけで聞きに行くよ」

「また後で結果報告をする」

「あ、ああ。頼むぜ」

そう言つて、ヴァーリとカイトは俺の家を後にした。

「…何か俺、勝手に巨乳好きのレッテル貼られてんだけどよ。まあ、巨乳は好きだけど」
「兵藤一誠が巨乳好きだからだろう」

否定できない。

巨乳は確かに好きだ!

対してヴァーリは尻が好きらしい。

曰く、「乳房に勝るとも劣らない魅惑の果実」だそうな。

……………アイツ、こんな事言うキャラだっけな。

そしてまた戻ってきたヴァーリ曰く「前例がないから分からないが、恐らくは神器の不調の類だろうから今日一日断てば元に戻るんじゃないか」との事だった。

その間に、部長達女性陣とアルビオンはすっかり仲良しになっていた。

特にティアとはかなり仲が良かったように見えた。

「どんな感じだ？人の体を持った気分は」

夜、俺は二人に聞いてみた。

因みにこんな事態になってしまったので、部長達には各自の部屋で寝てもらってる。

今日はずっと遊んだんだ。

ヴァンガードや遊戯王やったり、ゲーセンに行ったり、風呂ではしゃいで3人一緒に

部長に怒られたり……………。

「…中々に面白いぜ。こうして料理も食べれるからな」

「本来なら俺はサバトで得ていた筈なんだがな……ま、こういうのも悪くない」
「そっか……。何時かまた、こうして二人と面と向かって遊んだり出来るかな？」

一日だけだったけど、俺は嬉しかった。

こうして、俺と一緒に戦ってくれる相棒達と一緒に時間を過ごせたのが、すんげー楽しかった。

そして願うなら、またその時が来ないかなと、思ってしまう。

「ふっ……そうだな」

「……その時は、また付き合ってやる」

「——ははっ、その時が楽しみだ。お休み」

「……おう」

「……ああ」

そうして、俺達は目を瞑った——。

『『……って、よく考えたら、野郎3人で川の字で寝るって可笑しくね?!』』

第六章：体育館裏のドラゴンフオーメーション

MAGIC50 『悪夢と新学期と転校生』

カン☆コーン！

「……鹿威しがそんな音を立てた、日の差す昼下がり。

「イツセイさん。今まで……本当にお世話になりました」

綺麗な純白の花嫁衣装……白無垢に身を包んだアーシアが改まった座り方を下げる。

「……………つて、ちっがーうツ!!」

「アーシアちゃん、立派になったなあ……………叔父さんは嬉しいぞ!」

おっちゃんは号泣しながら喜んでる!

「アーシア、何時でもここに帰ってきなさい」

「そうですわ、アーシアちゃん。例えば結婚しても、貴女は私達の大切な仲間ですわ」

部長と朱乃さんも涙を拭いながらそんな事を言う!


~~~~~

「うあつ!? ……ハア、ハア……ゆ、夢か……」

『どうした相棒。やけに魘されてたぞ』

「……ちよつと悪い夢を見た」

『悪い夢?』

「アーシアがディオドラに嫁ぐ夢……」

『あー……それは確かに悪夢だな』

ドライグも渋い声で唸った。

しっかし夢で良かったよ。ホントに………つて、何か体が自棄に重いな。

違和感を感じた俺は布団を捲ると、そこにいたのは——

「……にゃあ」

「小猫、ちゃん?」

我がオカ研のマスコット、小猫ちゃんがいたんだ。

しかも本来の猫耳と尻尾を出して!

……実は冥界での合宿以来、小猫ちゃんも家で暮らす事になったんだ。

まあ、それはもう良いんだけど……事ある度に俺の膝に座ったり、今みたく寝床に入

り込んでる事もある。

毒舌とかは変わらなただけど……もしかして、なつかれてる？

「相変わらずプリティですなあ……」

俺は小猫ちゃんの頭を撫でながら呟く。

そして、ふと俺は隣で寝てるアーシアに目線を移す。

そのあどけない寝顔を見て、改めて誓った。

「アーシアは嫁には出しませんッ!!」

とーとー。

そして迎えた二学期当日。

もう始業式も済ませ、駒王学園は体育祭の準備に入っていた。

………そして俺の目の前では、この世の終わりと云わんばかりの顔をした松田と元

浜が情報交換をやっていた。

「隣の組の吉田は、夏に決めやがった……。しかもお相手は3年のお姉様らしい」「クソツタレ！ やっぱ殆どの奴等が童貞捨ててやがった！」

まあ、随分垢抜けた奴等多いもんなあ。

夏に童貞卒業か……。出来れば俺も卒業したかった、かな？

『随分消極的じゃないか、相棒』

いやな、ドライグ。

別に宛もないのに無理して童貞捨てる事もないんじゃないかなって最近思う訳よ。それよりも俺にはフアントムから人々を守るって言う使命があるしさ。

『……。お前、タンニーンとの修業の影響だな。随分と性欲が削がれてる』

削がれてるって言っても、やっぱりエロい事には興味あるぜ？

それに今日は新作エロゲの発売日だし！

『そう言えばそうだったな』

楽しみだねえ。こうやってこっさり部長達に隠れてやるのが乙ってもんだよ！

……。俺のエロビデオは全てそれを隠すためのカムフラージュさ！

『ホントかよ……』

ホントだよ、ドラゴン！



ってかお前最近よく話しかけて来るようになったな。

『……フンツ、勘違いするな。ただ眠るだけでは暇だからだ。そう、暇潰しだ』

『ツンデレ乙』

『嫌いぞババロア』

ホントに仲良いなお前ら。

最初あんだけいがみ合ってたのに。

『仲良くねえよ!!』

「相変わらず童貞臭いわねー、あんだ達」

と、そんな俺達を嘲笑いに来たのは……桐生。

「ふふん。どーせあんだ達の事だから無意味な夏休み過ぎたんでしようね」

「何をお!」

「落ち着けて松田、元浜。どーせコイツも処女のまんまだろうぜ」

「それもそうか」

「どういう意味よ兵藤!!」

おおう、凶星みたいだな。

「ま、まあそれは兎も角。兵藤、最近アーシアの様子が変なんだけど、何か知ってる?」

……多分、あのディオドラとの一件だろうな。

授業中に教科書逆さまにして読んでた事もあつたし。

……………プロポーズ問題、どうしたもんかねえ。

「……………まあ、人にはそれぞれ事情があるからな。下手に詮索してもだろ」

「それは、まあそうだけど……………」

納得いかない、と言った感じの桐生だが、こればかりはアジア本人もどうして良  
いか分からないからな。

「……………そういうや転校生来るんだつたな。誰だろ？」

「あー、この時期に来るなんて珍しいわよね？」

と、話していると、授業開始のチャイムが鳴った。

全員が席に座ると、先生が入ってきた。

「えー、この時期に珍しいかもかもしれませんが、このクラスに転校生が来ます。それも二名  
！」

二人か……………でも一人は察しが付くんですけど。

「じゃあ入ってきて」

先生の声に促されて入ってきたのは、栗毛ツインテールの女の子と、金髪の入り交

じったワイルドな男だ。

その二人（俺は栗毛の方）を見て、俺とアジアとゼノヴィアは固まっていた。特にゼノヴィアは目を丸くしている程だ。

そりゃあ驚きだろ！

だつてコイツ等は、俺達関係者にとつてはいる事自体ビツクリなんだから！

「紫藤イリナです。皆さん、どうぞ宜しくお願い致します！」

「立神吼介だ！好きな調味料はマヨネーズ！宜しく!!」

夏前に来日したエクスカリバー使いのイリナと、同じ魔法使いの吼介だったからだ。

まあ、吼介は今度編入するつて聞いてたから驚かないけど……流石にイリナは予想してなかった！

『お前忘れてただけじゃねーのか？』

マ、マサカソソナワケナ、ナイジャナイカーハハハ。

『忘れてたな、コイツ……』

~~~~~

んで、時間は昼休み。

部長は前から聞かされてたらしく、メールで聞いても驚いた様子は見せなかった。俺はドーナツを食べながら屋上で空を眺めていた。

『相棒。感じたか?』

ああ、何となくな。

イリナの奴、聖なるオーラが強くなってやがった。

まるで天使になったみたいだった。

『だが、悪魔みたく転生機能はまだなかった筈だよな?』

それは確かに気になる。

ま、放課後聞かされるだろうさ。

ドーナツを食べ終わると、俺はその場に横になった。

弁当? 早弁しちやっつたよ。

「ドライヴ、授業前に起こしてくれ……………」

『アラーム掛けるよ……………まあ、良いけどよ』

サンキュー。

取り合えず、疑問は残るものの、俺は暫しの眠りに着いた……………。

次回、D×Dウィザード

イツセー「新しい希望はミカエル様か」

吼介「悪魔？知ってるよ。お前が悪魔になったのも」

桐生「あんたは二人三脚よ。相手は——」

MAGIC51『転生天使と種目決め』

ドライグ『次回予告見ると大分ゆっくり進んでね？これ』

ドラゴン『切る所は切るらしいぞ。何せこの章でドラゴタイマー出すからな』

ドライグ『オールドラゴンは？』

ドラゴン『……それはまだ言えんらしい』

MAGIC 5 1 『転生天使と種目決め』

そして、放課後——

「紫藤イリナさん、貴女の来校を歓迎するわ」

「はい！皆さん！初めまして——と言うより再びお会いした方の方が多いですね。改めて……紫藤イリナです！教会、いえ、天使様の使者として駒王学園に馳せ参じました！」

ワーパチパチパチ！

……何でも話だと天界側の支援メンバーとして派遣されてきたらしい。

そう考えたら、この辺は悪魔とか堕天使とかしかいないな。

お、さつそくイリナが「主への感謝」やら「ミカエル様は偉大」云々言い始めたぞ。相変わらず信仰心つえーな、オイ。

『……この様子だと、神が死んだこと知らないんじゃないか？』

『どうだろ？でも、もしかしたら知らされてるかも』

確か、ゼノヴィアと別れた時には知らなかった筈だし。

「イリナ。お前、神様が死んだの知ってるのか？」

俺がそう聞くと、イリナは大量の涙を流した！

「……知ってるよ。知って、すんごくシヨックだったのよおおおおお!!!心の支え

！世界の中心！あらゆる者の父が死んでたなんてええええ!!イッセー君は分かるでしよ?!この私の悲しみがああ!!シヨックで七日七晩寝込んだのよおおお!!!」

「や、わかんねーよ。俺、無神論者だったし」

「そんなの初耳だわああああ!!」

あー、涙拭け！

机びしやびしやじゃんかよ！

「イッセーさん……?」

「それは聞き捨てならないね……」

やべっ、怒ってる！

「で、でもよ、それは個人の価値観だろ？まあ、君らの信仰心を否定はしないけどさ」

「それは、まあ……」

「うわああああん!!アーシアさん、ゼノヴィアあああ!!」

イリナは今度はアーシアとゼノヴィアに泣きついた！

二人は戸惑うことなくイリナを抱き締める！

「アーシア！この間は魔女だなんて言つてご免なさい！ゼノヴィアもご免なさい！別れ際、酷いこと言つたわ！」

イリナの涙ながらの謝罪に二人は微笑んだ。

「……………何か、こんな感じの議員さんいた気がする。」

「気にしてませんよ。これからは同じ主を敬愛する同志ですから、仲良く出来たら幸いです！」

「私もだ。それに、あれは破れかぶれで転生した私が悪かった。いきなり悪魔に転生だものな。でも、こうして再会できて嬉しいよ」

「「ああ、主よ!!」」

三人でお祈り……………こっちは頭チクチクして仕方ないけどな！

まあ、楽しそうだし……………良いか？

「イツセー君、無神論者だったんだ」

「まあな。昔変身ベルトくれ！って願つても枕元には武器だけが置かれた頃からだな」

そこからだな、神様なんか信じない！って決意したのは。

「武器でも良いじゃないか…………」

「武器だけであの満足感が味わえるか！」

「そういや最近大人向けのベルト出てるよな。あれ、買おうかな……」

「マジすか先生!?!俺にも着けさせてください!!」

「おう!楽しんでしとけ!」

何てことをアザゼル先生と議論していると、不意にイリナが祈りのポーズを取った。

すると……彼女が輝き、背中から白い翼が生えた!?

………て、天使!?

「天界って、悪魔化みたいな現象も作り出したのか!?!」

「……いや、本当はなかった筈だ。って事は」

『悪魔の駒の天使バージョンか』

ドライグの言葉にイリナは頷いた。

「はい!ミカエル様の祝福を受けて、私は転生天使となりました!何でもセラフの方々が悪魔や墮天使の技術を応用してそれを可能にしたとか」

へえー、三大勢力の協力的体勢の賜物って訳だ。

「四大セラフ、他のセラフメンバーを合わせた十名の方々はそれぞれ、Aからクイーン、トランプに倣った配置で『御使フレイブ・セイントい』と称した配下を十二名作ることにしたのです!カードで言うキングの役目が主となる天使様になります」

「成る程。悪魔がチエスなら、天使はトランプか。中々面白いもん作るじゃねーか。ミカエルの野郎！」

アザゼル先生がすんげー喜んでるよ。

しかし御使い、か……。

『アギトの抹殺、か』

「人から可能性を奪うのかよ……」

「違う違う違うー！ そんな事しないもん!! 私達別にアンノウンじゃないもん!!」

「……で、イリナの札は何なんだ？」

改めて俺が聞くと、イリナは自信満々に胸を張った。

「私はAよー！ ふふふ、ミカエル様のエース天使として光栄な配置を頂いたのよ！ 主はいないけど、私はミカエル様のエースとして生きていけるだけで十分なのよおお!!」

「エース○にならないと良いな」

と言う俺の言葉は届いてない様だ。

「新しい希望はミカエル様、か……」

『まあ良いんじゃないか？ 絶望するよかマシだ』

それもそうだな。

とまあ、挨拶も早々に切り上げ、俺達はイリナ歓迎会を行ったのだ。

~~~~~

そして数日後。

「はいはい！私、借り物レースに出まーす！」

元気一杯に声を出すイリナはもう既にクラスに溶け込んでいた。

まあ昔から誰彼構わず仲良くしてたしな。

『もしかしたらミカエルは紫藤イリナのこう言う面を見越してエースの札を与えたのかもな』

そうかもな。

因みに今は体育祭で誰が何の競技をするか決めてる最中なのだ。

「兵藤！去年みたいにサボったら許さないからね！」

「はいはい。つて、好きでサボった訳じゃねーよ！」

あんときは風邪でダウンしたんだよ！

『ただの微熱だったかな』

うるせーよドライブ……………ハア。

俺は溜め息を吐いて机に頭を預けた。

あの後イリナも俺の家に住むことになったんだ。

まあ部屋に全然余裕あるから良いんだよ。けどな、案外肩身が狭いのさ。

そりゃ美少女揃いの豪邸！なんて男子高校生の夢さ。

でも俺は思った。夢は夢のまままで良いんだと。

———そう、昔から伝わる言葉に『女三人寄れば姦しい』という言葉通り、俺が入り込む余地がないんだ。

例えば、アーシア、イリナ、ゼノヴィアが三人集まって女の子トークをし始めたとしても。ようや。

おっそろしく会話に入りづらいんだよ。ここに小猫ちゃんが加わると……………もう俺は付け入れないのさ。

カードゲーム以外で俺はこの家の女の子と会話する余地がないんだよ。

部長と朱乃さんもガールズトークのお姉様バージョンをしている訳だ……………何か俺の家に住んでまでやらなくても良いんじゃないかね？と思うようになったな。

んで、最近はよくおっちゃんの家で仕事手伝いに多く入ったり、おっちゃんの家でゲームしてる訳だ。

………ハーレムつてのも案外遠い夢なんだよなあ。

それでいて寝るときは一緒に！だからなあ。

俺がたまには独りで寝させてくれと頼もう物なら『……駄目？』の上目遣いですよ！俺はその目に逆らえず一緒に寝るけど……部長とアーシア、ちゃんと部屋あるんだからそこで寝なさいよ！と思うのさ。

『……どうにも煩わしそうだな』

『相棒は早くに自立せざるを得なかったからな。つまりこの中だと木場同様に自立心が強い。逆に甘えられるのは苦手だし、当人の為にもならない、って考えが強いんだろうな』

うくん、そうなのかなあ？

まあ女の子と寝れるのは嬉しいけど……部長は事ある毎に裸で寝ようとするから、男として見られてないと捉えちまうんだよ。

でも甘えすぎるとも甘やかすのも駄目だろ？

そうなたら大人になれないし。

『まあそうだがな』

「……………うー……………どう！兵藤！！」

「うおっ!？」

名前を呼ばれてるのに気付いた俺は漸くその方角を見やると、黒板の競技を書き込んでる桐生と目が合った！

「どうしたのよ？ボーツとして」

「や……………ちよつと考え事を」

「ふーん。つて言うか、あんたの競技勝手に決めたわよ」

「ハア!？」

何勝手に決めてんだよこの野郎は!!

見ると、二人三脚の競技だ。

「あんたの相手はー！ー！」

桐生がズビシッ!つとチョークで指した先にはー！ー！ー！ー！ー！

「アーシアと二人三脚よ!」

マジかよ……………!？」

~~~~~

そして次の日から、駒王学園の生徒達は体育祭の練習に明け暮れるんだ。

「なーイツセー」

「何だー吼介?」

イリナとゼノヴィアが短距離走の練習で爆走する中、俺は吼介と黄昏てた。

因みに吼介はパン食い競争だ。食欲旺盛な吼介らしい。

松田と元浜は揺れるおっぱい監察……………相変わらず自重する気ゼロの変態コンビだ。

「お前さー、何時から悪魔になったんだ?」

「うーんとなー……………ハ!」

コイツ……………今とんでもない爆弾を投下しやがった!!

「皆まで言うな。俺分かかってるからさ」

そう語る吼介の横顔は珍しく真面目だったので、俺も隠すのは止めて本当の事を言っ
た。

「……………今年の春ぐらい、かな」

「そっかー。お前もか」

「お前も……?」

「どういう意味だ…!？」

「んあ？俺も悪魔なの」

「……………マジで?!」

「おう。ま、ハーフだけどな」

「ハーフか……ヴァーリと同じなのか。」

「全然気付かなかったよ」

「そりや言わなかつたもんな。それに俺、人間の血の方が強いらしいし」

「へえ。それってどっちの方が悪魔なんだ？」

「親父の方だよ。お袋は人間」

「じゃああれか。転校したのは悪魔関係の仕事か。」

「悪魔と人間のラブロマンスか」

「ああ。親父の奴、酒飲んだら毎回のろけるからな。何度も聞かされたぜ」

「そうなのか……また今度聞かせてくれよ」

「……………多分暫く糖類要らなくなると思うぜ」

マジか。

「プレーンシュガー食えないのは死活問題だな。」

「……冥界行ってる間、フロントムの事、サンキューな」

「気にすんなよ。キマイラも満足してるし」

「そうか」

「それは兎も角よ。そろそろ練習した方が良いんじゃない？」

「それもそうだな。」

「見ればアーシアは桐生にセクハラ受けてるし！」

「よし！アーシア！練習しようぜ！！」

「は、はい！！」

桐生に一言詫びを入れて此方に戻ってきたアーシアとくつつくと、足に紐を結んで

……いざー！練習だ！！

……とまあ、意気込んで練習始めたのは良いけど崩れ落ちてアーシアの胸を触っちまったのは、完全な余談だ。

次回、D×Dウィザード

アーシア「あう、中々上手く行きません……」

イツセー「悪いね。俺は音楽がてんで分からないんでな！」

ベルゼバブ『魔法使い。君の实力はそんなものかい？』

MAGIC 5 2 『序章〜空間歪曲〜』

ビースト「お前は……!？」

MAGIC52 『序章く空間歪曲く』

「いっちにー、いっちにー………ふう、今日はここまでにしようか」

「は、はい……」

休日。今度の体育祭に向けて二人三脚の練習をしていたイツセーとアーシアだったが、今日はもう打ち切ることに。

「あう、中々上手くいきません……ごめんなさい、イツセーさん」

「気にすんなくて。俺も初めてだからさ」

しよげるアーシアの頭を撫でるイツセー。

「二人三脚で重要なのはコンビネーションだからな」

「コンビネーション、ですか？」

「ああ。ま、体育祭までは時間があるんだ。それまでには完璧になる！な？」

「……はい！頑張りましょう、イツセーさん！」

「ああー！」

と、仲良く意気込む二人のもとに、

「助けてええええええええええ!!!」

「!?!」

甲高い悲鳴が聞こえた。

その感じにただならぬ事態だと察した二人は急いでその場所を目指すと、

『さあ、貴様の恐怖に歪んだ顔…もつと見せてくれ』

「ヒツ……………」

多数のグールに襲われている女性と、それを指揮していると思しき茶色のファントムがいた。

《コネクト・プリーズ》

「はっ!」

イツセーは即座にウィザースードガンを取り出すと、女性に掴み掛らんとしているグールに向けて銃弾を放った。

それらは見事に命中し、グールを見事に吹っ飛ばした。

『ヴう……………!!』

「おいおい。ナンパにしちや乱暴すぎんだろ」

『指輪の魔法使いか』

「ザツツ・ライト。変身！」

《フレイム、プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

イツセーは即座にウィザード・フレイムスタイルに変身すると、再び弾丸を打ち放ち、襲われていた女性からグールの群れを引きはがした。

「アーシア！今の内にその人を！」

「はい！」

『フン………グール共！』

茶色のファントム——ベルゼバブはクラシックの指揮者の様にタクトを振るい、グールを使役する。

「ちっ、音楽家気取りかよ！」

『酷い言い草だな。私のゲートは音楽家なのでね』

「そうかい。俺はおたまじゃくしが全く分かんねえから、な！」

《ハリケーン・プリーズ！フー、フー、フーフーフー！》

近づくグールを蹴っ飛ばしながらウィザードFSはハリケーンスタイルにチェンジ。

逆手持ちにしたウィザードガン・ソードモードでグールを切り裂いていく。

その間にアーシアは女性を何とか遠ざけようとしていた。

「さ、今の内ですよ！」

『メールだよ。メールだよ』

「っ！待って！メールが！」

と、女性を取り落としらしい携帯からメールの着信が響き、それに気づいた女性は慌てて携帯を取りに戻った。

『メールだよ』

「そんな事よりも早く逃げないと！」

『……ん？』

それに気づいたベルゼバブが、女性の方を振り返った。

だが絶好のチャンスとも言える場面なのに、ベルゼバブは襲い掛かる事もせずじつと見つめた後、

『……ふっ、面白くなりそうだ』

そう静かに呟いた。

「あ、危ないですよー！」

そうこうしている内にアーシアは何とか女性を引っ張っていく。

そして、ウィザードHSも動き出した。

《ビッグ・プリーズ》

「よっ!と」

『『ヴァアアアアア!!』』

ビッグで腕を巨大化させて、そのままグールを殲滅。

「うし、後はアイツだけだ………って何処行きやがった!？」

だが、そこにベルゼバブの姿はなかった。

「ドライグ、奴の気配は!？」

『……もう見当たらないな』

ドライグの言葉に肩を落とすウイザードHS。

『相棒、今はそれよりもゲートだろう』

「………そうだな。アーシア!」

変身を解いたイツセーは物陰に隠れていたアーシアと女性に近づいた。

「こっちは大丈夫です」

「そっか、良かった……」

「あく!もう繋がらない!」

と、二人の会話に被せるように女性が声を上げた。

「………えつと、ちよつと良いですか?」

「………え?」

と、ここでイツセーに気づいたららしい女性が初めてイツセーに振り向いた。

「君は？」

「…兵藤一誠です。とまあ、自己紹介はここまでにして……」

釈然としない乍らもイツセーは女性、志保に彼女の立場を説明した。

が、

「あ、もしもし。ヒサくん？大変なの！私、今、化け物に襲われて……」

「……………聞いてないし」

志保は漸く繋がったらしい携帯での話し相手との電話に夢中。

「違うの。冗談じゃないの！もう、旦那様なら信じてよ！もうね、すっごい恐かったん

だから」

「……………他の方と繋がってないと駄目なのでしょうか？」

「多分……………」

辟易した様子で話す二人に構わず、志保はまた甲高い声を上げる。

「ああ……………もう、こんな時間！それじゃヒサくん、また後で。友達とランチの約束……」

立ち上がり出て行こうとした志保を、慌てて食い止めるアーシア。

「ま、待って下さい、志保さん！駄目です、駄目です！」

「俺達の話、聞いてました？」

「だって！もし約束破って友達に嫌われたら……あたし……」

「……もう、泣きたいのはこつちだよ〜！」

ガクツと肩を落とすイツセー。

『どうすんだ相棒。あからさまに面倒くさい女だぞ』

『……それでもほつとく訳にも行かねーだろ？』

そう語りかけるドライグの声にも明らかな程に呆れの感情が混ざっていた。

が、それでもイツセーは諦める事無く立ち上がった。

「分かりました！俺達もついて行きますから……！ゴメンな、アーシア。疲れてるだろ？先に帰っててもいいから……」

「い、いえ！私もお手伝いします！イツセーさんも疲れてるのに……放っておけません！」

「アーシア……じゃあ、もうちよつと付き合ってくれ」

「はい！」

~~~~~

「ベルゼバブ、何か良い作戦でも思い付いたみたいね」

「ああ」

とある洒落たバーにて、メデューサの人間態であるミサと、ベルゼバブの人間態が話し込んでいた。

「ふふ、その様子だとじわじわ苦しめる……そんな手法みたいね」

「当然。私はそういった手のほうが好みなんだよ」

そう不気味に笑むと、ベルゼバブは踵を返した。

「あら、もう動くの？」

「いいや、少し彼の見舞いにね」

そう言うと、ベルゼバブは目の前に歪みを発生させると、その中に姿を消した。

——とある樹海の奥深く。

「……………はあ、はあ……………糞があああ!!!」

無精髭を生やした粗暴そうな男——ユウゴ（フェニックスの人間態）が怒りに満ちた咆哮を上げていた。

その体には幾重もの鎖が巻かれていた。

「苦しそうですねえ、フェニックス」

「……………ベルゼバブウ!!」

そんなユウゴの元に先程までミサと会話していたベルゼバブがやって来た。

その顔には隠し切れない侮蔑の笑みが浮かんでいた。

「まあ、自業自得ですね。何せあのワイズマンの待機命令を無視したのだから」

「黙れ……………があああああああああ!!」

哄笑を上げるベルゼバブに沸点を超えたユウゴは激情のままにファントムとしての力を解き放とうとした。

が、その時鎖から怪しげな瘴気が立ち込めたかと思うと、ユウゴの体に電流が走った。

「おやおや、駄目じゃないですか。ファントムの力を使えばそうなるというのに」

「ヴァ、アアアアアアアアア!!……………はあ、はあ……………!!」

「その鎖はある者から齎された北歐の呪鎖。縛った者の異能を全て封印する……………つまり、今の君は不死身ですらないと言う訳だ。……………流星はワイズマン、恐ろしい物をお持ちだ」

「て、てめえ……………ツ!!」

「今の君は本能のままに暴れることも出来ない……………これ程悔しい事もあるまい? んん

「?フェニックス」

「ち、つくしようがああああああああ!!!」

「またもやユウゴの体に流れる電流。」

それは決して彼を殺さない威力ではあるが、強靱な再生能力をも封じられた丸腰の今の彼にとっては生殺し状態だ。

「クツクツク、これは失礼! つい言い過ぎてしまった様だ」

「グウ、アア……………!!」

「つと、ではこれからゲートを絶望させに行かなければならないのでね。また来るよ、フェニックス……………いや、哀れな小鳥君? ハハハツ!!」

最後までユウゴを嘲笑いながらベルゼバブはまたも時空の歪みの中に消えていった。

~~~~~

場面は変わってレストラン、志保に続いて入ろうとするイツセーとアーシア。

「ちよ、ちよつと待ってくださいよ」

「お客様。そのお服装ではちよつと……」

しかしお店のドレスコードに抵触、止められてしまった。

「服装？ 駄目なんすか？ これ」

『ジャージでレストランに入る奴なんて普通じゃないだろ』

「それもそうか……着替えてくる間に襲ってこられたら厄介だしなあ」

「……イツセーさん！ でしたらあの魔法を！」

「あの……？ あつ！ アーシア、ナイスアイデア！」

《ドレスアップ・プリーズ》

アーシアの助言により、イツセーはドレスアップを自分とアーシアに使用。

魔法陣を潜ると、イツセーは黒のスーツ、アーシアは白いドレス姿になった。

「よっし！ これなら行けるだろう！ サンキューな、アーシア！」

「そ、そうですか？ えへへ……」

アーシアの頭を撫でるイツセー。

それに対し、アーシアは照れたようにはにかむ。

「いらつしやいませ」

「よし、関門クリア」

「やりました！」

問題無く通れた事でガッツポーズする二人に構わず会食中のルームに入る志保。
「遅れてごめんなさ〜い！」

が、その場に集まった人達は一瞬視線を向けるも、志保を無視してお喋り再開。

「あ……あの……メールでも言ったんだけど、私、化け物に襲われて……ねえ、もしかして嘘だと思ってる？」

そう弁解する志保だが、全員共にその言葉に耳を傾けていなかった。

「本当なの！ほら見てこれ？その時、擦り剥いたの！」

「どうも。あの、彼女は嘘吐いてないんですよ。彼女は、ほんとに……」

それを見かねたイツセーも弁護するが、やはり聞いてはいない。

「何よー人が死にそうな目に遭ったって言うのに。ちよつと遅刻したぐらいで、そんなに怒る事ないじゃない！」

遂には、部屋を飛び出して行ってしまおう志保。

「あつ、志保さん！」

慌てて志保を追いかけるアシア。

だがイツセーは直ぐには動かず、志保の友人達をじつと見つめていた。

『どうした、相棒？』

「……………いや、何でもない」

一瞬怪訝な顔を見せたものの、直ぐに普通の顔に戻し、志保とアーシアの後を追う。

イツセーが外に出ると、傍のベンチでメールを打つ志保と、その傍らに立つアーシアがいた。

「女って怖いな……」

「わ、私達はあんな事しませんよ……?」

「ハハッ、分かっているって。……志保さん。狙われてるのにあんまりうちよろしたら危ないですから。一度面影堂に……」

と、そこに志保の携帯に着信が。

「もしもし?うん、そうなの……。今から?行く!行く、行く!」

「また?!」

志保のめげない行動力に、揃って呆れ声を出す二人だった。

場面はダンススタジオ。

他の参加者と一緒にミラーの前で踊っている志保。

イツセーとアーシアは見学。

「普通、この状況で踊りに来るかねえ?」

「友達といった方が、気が紛れるんですよ。きつと」

「こここそ話す二人を尻目に、ダンスに精を出す志保。」

「そしていつの間にか、ダンスは終わっていた。」

「ゆうこりん。私、最後まで出来たよ。ゆうこりん、やっぱ凄い上手だね。……ゆうこりん……?」

「……………ふん」

志保を冷たい目で見て、志保の友達達は鼻で笑った。

そのまま志保を仲間外れにし、友達同士で盛り上がるダンス仲間達。

「ねえ…………。ねえ…………ちよつと?…………何よ!何なのよ!!」

志保の叫びに一瞬顔を向けるも、直ぐに背を向けて雑談に興じる志保の友人達。

「私、何か悪い事したかな!?もしそうだったら、謝るからさ!ねえ、ねえ、教えてよ!ねえ!」

「そう言つて友達の人に近づくも、容赦なく突き飛ばされる志保。」

「何やってんの!?!」

「志保さん!大丈夫ですか?!」

「何でよ…………。何でみんな、無視すんのよ!!」

飛び出して行つた志保を追うアーシア。

「ちよつと待つて！志保さん！待つて……！」

それを見送つた後、イツセーは少し怒りながら口を開いた。

「ちよつと駄目でしょ!? ああいうの。皆さんいい大人なんですから………んっ？」

が、イツセーは僅かに違和感を感じ、言葉を切つた。

すると全員様子がおかしく、顔をあげた志保を突き飛ばした友人の瞳は黄金色に。

「これは………ドライグ」

『ああ。どうやらあのゲートに関わる人物皆——操られてる』

そう確信したイツセーは、再び外に向かった。

場面は再度変わり、駒王町にある病院。

「往診いつてきまーす」

と出て来た男——志保の夫は鞆を手に歩き出した。

するとそこに、志保が駆けつけた。

「あー！ヒサクーん！助けて、ヒサクん！あのね、何かみんな変なの！みんな、私のこと無視するの！もう、ヒサクんだけが頼りなの！」

だが、夫はそう言つて抱きついてきた志保を振り払う。

「ふん！」

冷たい目線で見つめ、志保の夫は振り返る事無く歩き出した。

「ヒサく〜ん！ヒサく〜ん！」

慌てて夫を追いかける志保。

構わずに車に乗り込んだ夫にサイドウインドウ越しにしがみ付く。

「ヒサくん、待つてよ！ヒサくん！ねえ！きやつ！ヒサく〜ん！」

が、そんな志保に構わずに車を出し、そのまま行ってしまう。

「そんな……ヒサくんまで……ッ!!」

喉を震わせながら蹲る志保。

と、そこにベルゼバブの姿が。

『哀れな人間だ。貴様なんざ周りにとつちや、鬱陶しいだけの女だったって訳だ。はは

は……。さあ、孤独に絶望しろ』

遂には泣き出してしまふ志保。

が、その悲鳴もベルゼバブにとっては最高の音楽でしかない。

『はは……さあ、絶望しろ！』

「待てよ。志保さんを孤独にさせてんのは、お前だろ」
「……………えっ？」

顔を上げた志保の前には、イツセーの背中が。

「志保さん。コイツが、みんなを操ってんですよ。だから、皆正気じゃなかった」
「へえ。なら、私のせいだって証拠は？」

嘯くベルゼバブに、イツセーは鼻で笑った。

「ハッ、お前のせいじゃないって証拠は？」

『確かにないな』

「案外すんなり認めんだな。けどな、こんな胸糞悪くなる方法使う奴には……………お灸を据えてやるよ」

《シャバドウビタツチヘンシーン！シャバドウビタツチヘンシーン！》

「変身！」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

『ふん……………グール共！』

イツセーはウィザード・フレイムスタイルに変身。

そのままベルゼバブが召喚したグール相手に戦闘を開始する。

「さあーで、コイツを使うかね！」

《エキサイト・プリーズ》

指輪を翳すと、ウィザードFSの筋肉が倍以上に膨れ上がり、それに気圧されるグール達。

「さあ、ショータイムだ！」

『ヴァアア!!』

グールに大した活躍も与えずに、爆発させた。

「おー！すげえ魔法じゃねーか！」

「…ん？つて、吼介！」

と、そこに乱入してきた吼介。

腰には既にビーストドライブバーが。

「お前、何でここが分かった？」

「アーシアちゃんに聞いたんだよ！じゃっ……変、身ッ!!」

《セット！オープン！L・I・O・N！ライオン！》

吼介もすぐさまビーストに変身。

ダイスサーベルを振りかざしてグール相手に立ち向かう。

「つしやあ！ランチタイムだ！」

「任せたぞ吼介！」

「ちやんと取つとけよ！そいつは俺のメインディッシュだかな！」

《カメレオ！ゴー！カカツ・カツカカツ・カメレオー！》

ビーストはカメレオマントを装着。

舌を鞭のように伸ばしてグールをひとまとめに絡めとると、そのまま床に叩き付け撃破し、その魔力を吸収した。

「おお、すげえ」

『軽口を叩いてる暇があるのか？』

ベルゼバブが繰り出す剣をウィザードソードガンで受け止めると、即座に足払いを掛ける。

『ぬおっ!?』

「そおーらよつと！」

『がっ!?』

僅かに浮かび上がったベルゼバブの体を掴むと、そのままブレンバスターを決める。

頭部へのダメージで立ち眩む隙に、ウィザードFSは、フレイムドラゴンにスタイルチェンジ。

《フレイム・ドラゴン！ボー、ボー、ボーボーボー！》

「おらっ！」

ふら付き乍らも立ち上がったベルゼバブに、ウィザードFDはウィザースードガンの切っ先を向ける。

その刺突攻撃は見事に命中した。

「いつてえ!？」

そう、背後にいたビーストに。

「おい、何すんだよイツセー!？」

「…や、確かにアイツを攻撃した筈だ!」

『ふふふふふつ………』

「だっだら!」

今度は蹴りをお見舞いしようと足を振りかぶるウィザードFD。

が、その足はまたも背後にいたビーストへと放たれた。

「あぶねっ!？」

『ハハハハハ……!』

今度は何とか飼わせたビースト。

が、二度も起きた不可解な現象にウイザードFDは確信した。

「コイツ、空間を操るのか……!」

『フツ、肉体でなら私以上だが肝心要の魔力をその程度しか引き出せん貴様に、このベルゼバブ様は倒せないんだよ!』

「そんなもん……やってみなきゃ分かんねえだろ!」

《チヨロイイネ! スペシャル・サイコー!》

スペシャルの効果でドラゴスカルを顕現させ、そのまま火炎放射を放つ。

《コネクト・プリーズ》

更にコネクトの効果で空間同士を繋げる事で、その一撃は背後からベルゼバブに命中した。

「おおう。流石イツセー!」

「……やったか?」

が、

『相棒! 上だつ!!』

「……ッ! グアアアア!!!」

何と、確かにベルゼバブに命中した筈のドラゴンブレスは、返す刃でウィザードFDの頭上から降ってきた。

ドライグのアシストも空しく、ウィザードFDは自身の技をもろに食らい、変身が解けてしまう。

『フッフッフ。残念だったなあ………』

そのまま悠然と気を失ったイツセーに近づくベルゼバブ。

「イツセー!!」

そうはさせまいとイツセーに駆け寄ろうと走るビースト。

が、ベルゼバブがイツセーの元に辿り着く事はなかった。

《エクスペロージョン・ナウ》

『ぐあっ!?!』

何故なら、近づく寸前にベルゼバブを爆発が襲ったからだ。

「な、何だ!?!」

慌てて周囲を探るビースト。

爆炎が晴れるとそこには、白い魔法使いと、気絶しながら浮かび上がるイツセーがいた。

「……………」

「魔法、使い……………!?!」

『何だ貴様は……………!?!』

「……………消えろ」

《エクस्पロージョン・ナウ》

白い魔法使いは短くそう言うと、再び魔法を発動。

ベルゼバブは空間を歪曲させようとするも、その前に空間が爆発し、ベルゼバブは再び吹っ飛ばされる。

『ぐあつ……………コイツは、ヤバイ!』

そう言うと、ベルゼバブは姿を消した。

「アンタ、一体……………」

「…アーキタイプの魔法使いか。精々キマイラに喰われない事だな」

「ツ!?!俺の事、知ってるのか! ってか、イツセーをどうする気だ!?!」

「……………」

《テレポート・ナウ》

「つておい！待てよ!!」

が、白い魔法使いはビーストの質問に答えず、その場からイツセー共々姿を消した。

次回。D×Dウィザード。

イツセー「また、助けてくれたのか…」

白い魔法使い「お前はまだドラゴンの力を半分しか引き出せていない」

ウィザードラゴン『ならば………死ぬ気で耐えてみる。兵藤一誠!』

MAGIC 5 3 『終章 く乱戦・合戦・ドラゴン乱舞く』

「「「さあ、ショータイムだ!!」」」

MAGIC53 『終章 乱戦・合戦・ドラゴン乱舞』

「イツセーが!？」

アーシアからファントムの出現を聞かされたりアス達は現在ビーストから事の顛末を聞いていた。

「ああ。白いローブ着た魔法使いがイツセーを連れ去りやがったんだ」

「……………そう」

「…なーんかアイツ、胡散臭そうだったけど、信用できんのかね？」

「あの魔法使いはイツセーの事を知っていた。恐らく、イツセーに魔法を授けたのは、彼よ。一応、信頼は出来ると思うの」

「成程なあ。つまりアイツもライバルって訳か!」

「……………どうしてそうなるんですか?」

見当外れな事を言うビーストに小猫がジト目で突っ込む。

「……………ですが、イツセー先輩の気配が全く感じられないということは、何処か別の空間にいる可能性が高いです」

「…その様ですね」

「い、イツセー先輩、改造されちゃったりするんですかああ!？」

「イツセー先輩をアレ以上改造する所なんてないよ。ギヤー君」

「……………その突込みもどうかなあ」

「しっかし、どうしたもんかねえ……………」

チラリとビーストが横目で眺めるのは、ゲートである志保。

その志保は現在、膝を抱えて泣いている。

「うっう……………ヒサくん……………」

「アンタもいい加減泣き止めって。いい大人なんだからさ」

「あゝのゝっ!? ヒサ君は化け物に操られてるだけですよね!？」

「えっ!? あー、そうだと思うけどさ……………」

言葉に詰まるビースト。

十中八九ベルゼバブの作業なのだろうが、どういう風にして操っているかまでは分かっていないからだ。

「…そう言えば」

と、ここでアーシアが何かを思い出したかのように呟いた。

「どうしたの? アーシア」

「いえ、あの……………イツセーさんがさつき、志保さんのお友達の方々を見つめてたので、も

しかしたら何かあるのでは………って、ご免なさい！根拠もないのに……」
「ううん。そういう直感も大事よ。そうね………もう一回志保さんのご友人の元を訪れて
みましょうか」

~~~~~

そして、一方のイツセーはと言うと………

「……………うつ」

現在、イツセーは四方が闇に包まれた空間にいた。

『目が覚めたか。相棒』

「ドライグ……………は？」

『分からん』

すると、イツセーは中央の魔法陣が刻まれたテーブルを囲むように、それぞれ四方向に丸いテーブルが安置されているのに気付いた。

そして、その上には四つのドラゴンスタイルの指輪が。

「……………そうだ！志保さんは!？」

『ああ、それなんだが……………』

「安心しろ。ゲートは無事だ」

「……………へ？」

声がした方向を振り返ると、そこには――

「久し振りだな。兵藤一誠」

「…白い、魔法使い」

白い魔法使いが、悠然と佇んでいた。

「また、アンタが助けてくれたのか」

「ふ、お前に死なれては困るからな……それよりも、魔法使いとしても、赤龍帝としても、随分成長したようだな」

まるで世間話でもしているかのような雰囲気。

「コカビエルを倒した時以上だ」

「……そんな事ないさ」

イツセーは俯き気に自分の指輪を眺める。

「指輪があるから、どうにか戦えてるだけだ……。コカビエルの時だって」

「指輪は、お前の魔力を引き出すための道具に過ぎない。言わば補助装置だ」

「けど、さっきだってあのザマだ！肉体が強くなったって、魔力が弱かったら……。……ッ！」

イツセーの脳内には、先ほどベルゼバブに言われた言葉がちらついていた。

「魔法使いとして、もっと……。……！」

「強さを求めるのなら、方法はある」

「えっ……？」

突然の打開策に、間拔けな声を出すイツセー。

が、白い魔法使いは構わずに続けた。

「確かに奴の言うとおり、お前は内に眠る力の半分しか引き出せていない。ならばどう

するか？お前の魔力の源であるドラゴン、奴の力を限界まで引き出せばいい」

「限界まで……」

「尤も、お前が耐えられればの話だがな」

「耐えるさ」

何処か試すように挑発的な声音で問いかける白い魔法使いに、イツセーは間髪入れずに答えた。

それを聞いた白い魔法使いは、満足げに頷いた。

『相棒……』

『大丈夫だ。それに……あのフェニックスに勝つためにも、今以上に強くならなきゃならんねーしな』

『……………』

「ドラゴンに喰われるなよ」

「ドラゴンにも言つてやつてよ。俺に食われんなつて」

不敵にほほ笑むイツセーに、白い魔法使いは何かの術を発動した。

すると、四方に置かれていたウィザードリングから強烈な光が放たれ、イツセーの中心へと入っていく。

何も無い異空間がイツセーの眼前に広がったかと思うと、いきなり丸腰のイツセーに



火炎、水流、暴風、岩石が襲い掛かってきた。

『ぐ……………あああああああああああああツ!!!!!!』

『相棒!!!』

「ウエルシユドラゴンよ。お前の介入は許されない。今は黙って見てもらおうか」

『ぐつ……………!』

絶叫するイツセーを手助けすることは許されない、そう分かっているからこそ、ドライグは歯軋りする。

「……………この、程度で！俺が絶望すると思ってるのか!!?遠慮すんなよドラゴン!……………全力で、俺を食いに来いッ!!!」

『……………ならば、後悔するなよ。兵藤一誠!!』

それに加え、更に温度の上がった火炎、猛吹雪、雷を伴った竜巻、超重力が襲い来る。『ぐおおおおおおおおおおッ!!!』

『これが……………奴の本当の力、なのか!?!』

ドライグはドラゴンの力を見て戦慄した。

その力は、かの五大龍王にすら匹敵するほどだとも、ドライグは確信した。

『お、俺は!!絶対に……………屈したりは、しねえええええええええッ!!!!!!』

そして、遂にイツセーは——生き延びた。

「……完成したな」

「ハア、ハア、ハア……ここ、これは？」

ドラゴンの攻撃が止み、現実へと戻ってきたイツセーが見たものは、中央のテーブルから放たれる光だった。

そして光が晴れると、そこには手甲のようなアイテムが鎮座していた。

「お前の魔力が具現化した魔法具——ドラゴタイマー」

「ドラゴ、タイマー………」

イツセーはドラゴタイマーを手を取った。

まるで、試練を乗り越えたことを確信するかのよう。

「貴様、まだそれ程の力を隠していたとはな………」

「………」

「何故、相棒にそれを委ねた？」

「………さあな」

~~~~~

そして、リアス達はというと。

「ヒサくん」~~~~!!「よ」か」つた」よ」おおおお!!」

「お、落ち着けて志保……………」

無事に、様子が可笑しかった志保の周りの人間を元に戻すことができたのだ。

「まさか、こんな小さな物で人を操ってたなんてね……………」

そう呟くりアスの手には、小さい何かの破片が。

そう。何を隠そう、ベルゼバブはこの小さな僕を使い、他人を操っていたのだ。

「ま、この俺の魔力探知のお陰だな！って、イテテ……………」

そう誇らしげに言うのは吼介……………ただし、その顔は酷く腫れ上がっている。

「…僕を取り払うといつても、普通女性を脱がそうとするなんて、変態のやることです」

そう辛辣に突っ込みを入れるのは小猫。

実は吼介、志保の友人や夫に取り付いた僕を潰そうと、ダンスクラブの女性の服を脱がそうとしたのだ。

当然そんな事を男からされれば一斉に攻撃を受けるのは当たり前なので、このような状態と言う訳だ。

「イツセー先輩でも、流石にそこまではしません」

「お、俺アイツより変態な訳!？」

「…と言うよりどっこいどっこいです」

と言う一幕を演じつつも、何とかベルゼバブの被害者を助け出せたことに安堵の息を漏らすリアス達。

が、その安堵は長くは続かなかった。

「部長!」

「たまた大変ですううう!!」

木場とギヤスパーの只ならぬ雰囲気、何かあったことを確信するリアス達。

「どうしたの二人とも?」

「志保さんの旦那さんと、その友人達が……!」

「また操られてるみたいなんですう!」

『つ!?!』

キャーーーーー!!!!!!!!

二人の報告に顔を強張らせた彼女たちの元に、志保の悲鳴が届いた。

「…マジみてえだな！」

「行くわよ、皆！」

『ハイ！』

リアス達が向かうと、その先には逃げるアーシアと志保、そして目の虚ろな志保の友人、そして夫が二人を追いかけるといふ異質な光景だった。

「おお、何かこええな……つて言うか、僕消したから大丈夫じゃねーのか!？」

「その筈ですわ！まさか……消しそびれた物が!？」

「くそつ、一般の人間だからな……手を上げにくい！」

『ふつ、貴様等の着眼点は悪くなかったさ』

と、その行く手を遮るように立ちはだかったのは、ベルゼバブ。

「つ！フアントム！」

《ドライバー・オン！》

ベルゼバブの登場に、臨戦態勢に移行する。

『だが、一度私の僕に魔力を注入されれば、私がいる限り一生意のままの奴隷なのだよ
！』

「成程なあ。要するに…お前をたおしや万事解決ってことだろ！」

「実に分かりやすいな」

吼介が指輪を嵌める隣で、ゼノヴィアはデュランダルの鍔にしてくれるぞー！」

「さあ、悪しき幻魔よ！我がデュランダルの鍔にしてくれるぞー！」

「勢い余ってこつちにぶつけてくれんなよ。変、身ッ!!」

《セツト！オープン！L・I・O・N！ライオン！》

ビーストは先手必勝とばかりに突っ込み、ダイスサーベルを振りかざす。

『ふん。馬鹿の一つ覚えだな！』

ベルゼバブは動じる事無く空間を歪曲させてその攻撃をいなす。

その合間を縫うように、ゼノヴィアはデュランダルの刺突攻撃を繰り返す。

『ちよこざいな……………っ！』

ベルゼバブは再び空間を歪曲させようとするが、何かの気配を感じてその場を離れた。

すると、先ほどベルゼバブがいた場所に、無数の剣が落ちた。

『ほう、闇雲に突っ込む馬鹿だけではないらしいな』

「そのまま動かなければ、串刺しに出来たものを……」

剣を召喚したのは、木場だった。

彼は空間の歪みを感じすると、その場所に聖魔剣を創造、あわよくば返す刃でベルゼバブを狂い咲く鉄華の剣で串刺しにするつもりだったのだ。

『ふん、私にばかり構っていられる余裕があるのかな?』

ベルゼバブの見つめる先には、操られた人達と志保を庇うリアス達の姿が。

『それに……気絶させようとも私の意志一つで何度だって立ち上がる! さあ、絶望の歌を聞かせろお!』

「この外道がツ!!」

非道な手を使うベルゼバブに怒ったビーストは再び斬りかかるもあつさり往なされ
てしまう。

「いや! やめて来ないで! ヒサ君、しっかりして!」

志保が懸命に呼びかけるも、

「俺の名前を呼ぶな。反吐が出る!」

「あんたなんて存在する価値もない!」

「目障りなのよ」

「早く絶望して消えちゃって」

「消えろ、消えろ、消えろ……」

非常な言葉が、志保を絶望へと追い詰めていく。

「いやあああー！！！！」

「志保さん！気を確かに持って！！」

『さあ、絶望の淵へ落ちな！』

「させるかっての！」

《ライト・プリーズ》

すると操られた人やベルゼバブに強烈な光が。

次にベルゼバブが目を開けると、そこにいたのは――

「待たせてすみません。部長、皆！」

最後の希望、兵藤一誠だ。

「イツセー（君／先輩／さん）！！」

『私に恐れをなして逃げ出したかと思いましたが？』

「笑えねえじようだんだな、そりや。こないだの借り、たつぷりと返してやるよ」

『出来るものか！ゲートが絶望する所を見せてやる…』

「絶望なんかさせない！俺が最後の希望だ！」

ウィザードライバーを操作し、指輪を翳した。

「変身！」

《フレ임・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

「さあ、ショータイムだ！」

『ほぎけ！』

ウィザードFSはウィザードソードガンでベルゼバブに立ち向かう。

対するベルゼバブも武器の剣ど受け止め、そのまま切り結ぶ。

『ふっ！』

「っ!!」

が、ベルゼバブはウィザードFSの前から姿を消したかと思うと、今度は背後に突如として現れた。

そのまま背中に一太刀浴びせようと剣を振るうも、殺気を感じたウィザードFSはそれを背中にウィザードソードガンを回して受け止めた。

『なにっ？』

「不意打ちしたきゃそのうすぎたねえ殺気を消すんだなっ！」

『ちい！』

振り向き様に蹴りを放ち、ベルゼバブを後退させる。

ベルゼバブが体勢を立て直す前に、ウィザードFSはフレイムドラゴンに強化変身する。

「見せてやるよ。ドラゴンの…本当の力を！」

《フレイム・ドラゴン！ボー、ボー、ボーボーボー！》

《コネクト・プリーズ》

迫りくるベルゼバブの剣を受け止めつつ、ウィザードFDは修行で手に入れた新しい力——ドラゴタイマーを取り寄せた。

「……しゃっ！行くぜ！」

《ドラゴタイム！セットアップ！》

右腕に装着し、腕部分のダイヤルを回し、

「ここから先は、俺達のステージだ！」

《スタート！》

ダイヤル部分のカウンターを勢いよく押した。

『何を世迷言を！』

向かってくるベルゼバブに対して、ウィザードFDは冷静に対処する。

そして、ダイヤル部分が青の個所を差したところで、カウンターを押す。

《ウオータードラゴン！》

『何だ……何ッ!?!』

すると、ベルゼバブの横から襲い掛かってきたのは――

「呼ばれて飛び出て、俺参上！何てな！」

ウィザード・ウオータードラゴンだ。

「イツセーが増えた!?!」

「だが、イツセーの分身は……全員が同じ動きをする筈だ！」

「ですがあの分身体のイツセー君は……明らかに別の意志で動いていますわ！」

コピーとは違い、明らかに本体であるフレムドラゴンから独立して動くウオータードラゴンに驚きを隠せないリアス達（ビーストは単純に増えた事に驚いているだけだ）

『どんな手品か知らんが、一人増えたところで何も変わらん!』

「誰が一人って言ったよ?」

《ハリケーンドラゴン!》

再びカウンターを押すと、今度は――

「ヒヤツハア――!!百鬼夜行を叩き斬るう!!」

『ぐあつ!……3人だど!?』

空中から、ウィザード・ハリケーンドラゴンが登場し、蹴りをお見舞いする。

予想もしていなかった場所からの一撃を食らい、後退るベルゼバブ。

「「さあて、どれが本物の俺でしょーか?」」

『…調子に乗るなああああ!!』

煽られて頭に来たのか、今度は魔力による遠距離攻撃を仕掛ける。

「ふふーん。その衝撃の答えはく?」

《ランドドラゴン!》

が、その攻撃は地面から現れた土壁により阻まれる。

土煙が晴れるとそこには――

「答えは全員、俺!!」

ウィザード・ランドドラゴンがいた。

その場に遂に、4体のドラゴンスタイルが揃った瞬間だった。

「うつへえく、こりや壮観だぜ！」

「まさに強靱☆無敵☆最強!!だな」

「さあ、蠅野郎……」

「この地獄絵図、振り切れるんなら振り切って見ろい！」

「一二さあ、ショータイムだ!!」

《ファイナルタイム!》

ドラゴタイマーが4色の光を放ち始めた。

『…所詮馬鹿が4人揃ったところで、私の楽章は止められん!!』

空間歪曲能力を駆使してくるベルゼバブに対し、

「おつ、そつちに来たぞ！」

《ロック・プリーズ》

『ぐあ!?!』

「上からくるぞ! 気を付けろお！」

《ハイドロ・プリーズ》

『がふっ!?!』

「えー、フレイルムドラゴンより、ハリドラに入電! 目標、明後日の方向から来ます！」

「うーっすー！」

《チヨーイイネ！サンダー・サイコー！》

『ぎゃああ!!』

ウィザードは4人の連携での防御、攻撃で圧倒する。

「さて、本日のメインディッシュでございますー！」

《ドラゴンフォーメーション！》

レバーを押すと、それぞれドラゴスカル、ドラゴテイル、ドラゴウイング、ドラゴヘルクローが装備される。

「「「ベルゼバブのフランベ仕立て！土煙・竜巻・冷気和えです！ゆっくりして逝ってね!!」」」

先ずは先制攻撃として、地中に潜ったウィザードLDが足元から回転しつつドラゴンリッパを浴びせ、

「ほいー！」

『ぐほっ!!』

「セイヤー!!」

『ぎゃああ!!?』

続いてそこに突風を纏ったウィザードHDのドラゴンソニックで切り刻まれ、

「ベルゼバブの、叩きだツ!!」

『ぐふう!!』

落下するタイミングで冷気を纏ったウィザードWDのドラゴンスマッシュで叩き伏せられた後、空中に放り出され、

「もつと熱くなれよおおおおお!!」

『ぬああああああ!!』

最後のメとして、ウィザードFDのドラゴンプレスで、こんがり焼かれてしまった。

『ぐつ、まさか……こんな、ことがあ………?!』

が、何とベルゼバブはまだ生きていた!

「おおつ、メのデザート食べたいみたいだぜ!」

「よし!俺、もう一頑張りしちやうぞお!」

「今宵のウィザードガンは一味違うぞ!」

「今、引導を渡してやんよ!」

全員同時にウィザードソードガンのハンドオーサーを動かし、刀身を合わせる。

《《キャモナスラッシュユシエイクハンド!キャモナスラッシュユシエイクハンド!》》

「…ファイナーだ!!」

《《スラッシュ・ユストライク……!!》》

それぞれウィザードリングを翳すと、各々が司る四大元素の力を刀身に纏わせると、

一思いに振り下ろした。

「…だぁー……っ!!!」

『こ、こんなフルコース…私は絶対認めんぞおおおおお!!!』

何処かズレた断末魔を上げると、ベルゼバブは爆発四散した。!

「…ふい〜」

そして、それを見ていたグレモリー眷属はと言うと……

「…騒がしいです」

「ど、どれが本物のイツセーさんなのでしょう?!

「あらあら、全員独り占めするのも悪くありませんわあ」

「何を言ってるのかしら朱乃?」

「…イツセーとの子供が四人……ふふ」

「カッコいいです、イツセー先輩!」

「うん、何てオーバーキル……」

「ずりーぞアイツ! 四人に増えやがって!」

何はともあれ、新しい力を手に入れたイツセー。

今後の戦いは、今後どのように変化していくのか？

次回、D×Dウィザード

ディオドラ「眷属のトレードに参りました」

朱乃「うふふ、どうですか？イツセー君♪」

イツセー「我が生涯に、一片の悔いなしッ
!!!!!!」

MAGIC54 『眼福！コスプレパーティー！』

カカロット「次回は俺たち達も登場……………ってオイ！名前間違ってるって！」

黒歌「もう諦めたら？カカロット」

アーサー「それもまた一興ですよ。カカロット」

ヴァーリ「そうだな。それに、改名すれば運氣上昇にも繋がるとテレビで言っていたぞ？カカロット」

カイト「正直美猴と打つのが面倒だからな」

美猴「そんな理由かよ!？」

MAGIC54 『眼福！コスプレパーティー！』

「全員集まってくれたわね」

部員全員が集まったことを確認すると、部長は記録メディアらしきものを取り出した。

「これは若手悪魔の試合を記録したものよ。私達とシトリーのもあるわ」
戦いの記録。

そう、今日は皆で試合のチェックをすることになったんだ。

部室には巨大なモニターが用意される。

アザゼル先生がモニターの前に立って言う。

「おまえら以外にも若手悪魔たちはゲームをした。大王バアル家と魔王アスモデウスのグラシヤラボラス家、大公アガレス家と魔王ベルゼブブのアスタロト家、それぞれがおまえらの対決後に試合をした。それを記録した映像だ。ライバルの試合だから、よく見ておくようにな」

『はい』

先生の言葉に全員が真剣にうなずいていた。

『俺はあのバアル家の男が気になるな』

へえ、お前が誰かを気にするなんて珍しいなドライブ。

『あれほどの濃密な闘気を纏った悪魔は見た事がないからな』

……ま、かく言う俺も一番注目してるのはサイラオーグさんだったりする。

冥界での修行の時と、若手悪魔の会合の時の計二回しか会ってないけど、他の若手悪魔よりずば抜けたオーラを放っていた。

「まずはサイラオーグ——バアル家とグラシヤラボラス家の試合よ」

お、さつそくサイラオーグさんか。

相手はあのヤンキー悪魔。

あいつ、サイラオーグさんに吹っ飛ばされてたけど、まともな勝負になるのか？

『まああんな成りでも次期党首だろ？善戦くらいはするだろ』

記録映像が開始され、数時間が経過する。

そこで、俺とドライブの予想は大きく覆された。

そこに映っていたのは——圧倒的なまでの『力』だ。

あのヤンキー悪魔とサイラオーグの一騎打ち。

けど、一騎打ちと呼ぶにはあまりに理不尽なほど一方的にヤンキーが追い込まれていた。

ヤンキーが繰り出すあらゆる攻撃がサイラオーグにはじき返される。

まともにヒットしても何事もなかったようにサイラオーグさんはヤンキーに反撃していた。

自分の攻撃が通じないことで、ヤンキーはしだいに焦り、冷静さを欠いていた。

そこへサイラオーグさんの拳が放り込まれる。

幾重にも張り巡らされた防御術式を紙のごとく打ち破り、サイラオーグさんの一撃がヤンキーの腹部に打ちこまれていく。

その一撃は映像越しでも辺り一帯の空気を震わせるほどだった。

「……凶兇と呼ばれ、忌み嫌われたグラシヤラボラスの新しい次期当主候補がまるで相手になっていない。ここまでのものか、サイラオーグ・バアル」

木場は目を細め、厳しい表情でそう言った。

サイラオーグさんのスピードは相当なものだった。

それも、木場が目を奪われるほどの。

スピードが持ち味の木場にとっては思うところがあるのだろう。

『ここまでとはな。あの男、相当あの拳……いや、肉体を鍛え上げたのだろう。でなければあれほどまでのパワーは出せまい』

だよな。

あのパワーは生半可な修行で身につくもんじゃない。

禁手を使っていない俺なんて、足元にも及ばないだろうさ。

『いや、タンニーンとティアマツトとの修行を生身で乗り越えた今の相棒なら何とか爪先まで届くレベルだろう』

……それ、届いてるっていうのか? まあ良いけどよ。

「ゼファードルとのタイマンでもサイラオーグは本気を出しやしなかった」

うへえ、やっぱりかよ。

……まあ、ヤンキーと戦ってる時のサイラオーグさんは映像からも分かるほどに余裕があつたしな。

「やはり、サイラオーグ・バアルもすさまじい才能を有しているということか?」

ゼノヴィアが尋ねると、先生は首を横に振って否定する。

「いや、サイラオーグはバアル家始まって以来才能が無かった純血悪魔だ。バアル家に伝わる特色のひとつ、滅びの力を得られなかった。滅びの力を強く手に入れたのは従

兄弟のグレモリー兄妹だったのさ」

「……………才能がなかった、か。」

『嘗てのお前と同じなんだろうな。地獄と呼んでも差し支えないほどの修業を己に課した結果、なんだろうよ』

と、気づけば試合の映像が終わる。

結果はサイラオーグさん——バアル家の勝利だ。

最終的にグラシヤラボラスのヤンキーは物陰に隠れ、怯えた様子で『投了』宣言をする。

サイラオーグは縮こまり怯え泣き崩れるヤンキーに何かを感じる様子もなくその場をあとにしていく。

映像が終わり、静まりかえる室内で先生は言う。

「先に言っておくがおまえら、デイドラと戦ったら、その次はサイラオーグだぞ」

「は、速くないっすか？」

「……………その前に、グラシヤラボラス家との試合が先だと思っていたのだけれど」

俺の言葉に部長も続いた。

が、先生は首を横に振った。

「奴はもうダメだ。ゼファードルはサイラオーグとの試合で潰れた。サイラオーグとの

戦いで心身に恐怖を刻み込まれたんだよ。もう、奴は戦えん。サイラオーグはゼファードルの心——精神まで断ってしまったのさ。だから、残りのメンバーで戦うことになる。若手同士のゲーム、グラシヤラボラス家はここまでだ」

……心まで絶ってしまふほどなのか。

けど、あれほどの力を眼前で見せられたら、仕方ないのかもしれないな。

部長は深呼吸をひとつした後、改めて言う。

「まずは目の試合ね。今度戦うアスタロトの映像も研究のためにこのあと見るわよ。

——対戦相手の大公家の次期当主シーグヴァイラ・アガレスを倒したって話したものの」「大公が負けたんですか?」

俺は思わず、部長に尋ねてしまう。

ちよつとしか見てないけど、あのお姉さんの方が強いと思つてただけだな。

半ば信じ難いその言葉だったが、部長が俺の問いに首を縦に振ったことで真実なのだと悟つた。

「私もアガレスが勝つものだと思つていたもの。……とりあえず、映像を見てみましょうか」

そう言いながら、部長が次の映像を再生させようとしたときに、部屋の片隅で一人分の転移魔法陣が展開した。

あ、この紋様は見覚えがあるぞ。

グレモリー家の勉強会で習ったことがある。

確か……

「——アスタロト」

朱乃さんがぼそりと呟いた。

そうそう、アスタロトの紋様だ。

『ここでガンダム・フレームの一つに出会えるとはな……』

『鉄血の世界に帰れ』

なに勝手に悪魔をモビルスーツにしてんだよ……。

そんな漫才を繰り広げていると、部室の片隅に現れたのは爽やかな笑顔を浮かべる優男がいた。

そいつは開口一番に言う。

「ごきげんよう、ディオドラ・アスタロトです。アジアに会いに来ました」

~~~~~

部室のテーブルには部長とディオドラ、顧問として先生も座っている。

朱乃さんがディオドラにお茶を淹れ、部長の傍らに待機する。

お茶に一口付けた後、ディオドラは口を開いた。

「リアスさん。単刀直入に言います。『僧侶』のトレードをお願いしたいのです」

……直接貫いて来たのか。

「ぼ、僕の事ですかああ!?!」

「なわけねーだろ」

俺は勘違いしたギヤスパアの頭を軽く叩いた。

つーか奴の狙いはどうせ——

「僕が望むのリアスさんの眷属は——『僧侶』アーシア・アルジェント」

はらな。

ディオドラはそう言い放ち、アーシアの方に視線を向ける。

その笑みは爽やかなものだ。

が、俺にはどうもその顔が気に食わない。

そして名前を言われた瞬間、アーシアは俺の手を握ってきた。

——「嫌だ」、という感情の表れだろう。

「こちらが用意するのは——」

自分の眷属が乗っているであろうカタログらしきものを出そうとしたディオドラへ部長は間髪入れずに言う。

「だと思つたわ。けれど、ゴメンなさい。その下僕カタログみたいなものを見る前に言つておいた方がいいと思つたから先に言うわ。私はトレードをする気はないの。それはあなたの『僧侶』と釣り合わないとかそういうことではなくて、単純にアジアを手放したくないから。——私の大事な眷属悪魔だもの」

部長はそう言い切つた。

元々比べる気もトレードする気も無いのだろう。

さつすが部長！

「それは能力？それとも彼女自身が魅力だから？」

が、ディオドラはそれでも淡々と部長に訊いてくる。

『その諦めの悪さをもう少しほかの事に注げねーもんかね』

ドライブ、その意見には超同意だ。

「両方よ。私は、彼女を妹のように思っているわ」

「——部長さんっ！」

アーシアは手を口元にやり、瞳を潤ませていた。

部長が『妹』と言ってくれたのが心底嬉しかったのだろう。

「一緒に生活している仲だもの。情が深くなくて、手放したくないって理由はダメなのかしら？ 私は十分だと思っただけね。それに求婚したい女性をトレードで手に入れようというのかもしれないわ、ディオドラ。そういう風に私を介してアーシアを手に入れようとするのは解せないわ、ディオドラ。あなた、求婚の意味を理解しているのかしら？」

部長は迫力のある笑顔で言いかえす。

キレてるな。物腰穏やかだけど、その言葉の節々には怒りが滲んでる。

けど、ディオドラは笑みを浮かべたままだ。

……何なのかね、あの余裕は。

「——わかりました。今日はこれで帰ります。けれど、僕は諦めません」  
ディオドラは立ち上がり当惑しているアーシアに近づく。

そして、アーシアの前へ立つと、その場で跪き、手を取ろうとした。

「アーシア。僕はキミを愛しているよ。だいじょうぶ、運命は僕たちを裏切らない。この世のすべてが僕たちの間を否定しても僕はそれを乗り越えてみせるよ」

そう言って、アーシアの手の甲にキスをしようとする。

——が、その寸前で俺は奴の腕を掴んだ。

「お引き取り願おうか。アーシアが嫌がつてるのが分からないか？」  
すると、ディオドラは爽やかな笑みを浮かべながら言った。

「離してくれないか？ 薄汚いドラゴンに触れられるのはちよつとね」

………ほお、そいつがお前の本性ね。

「お前のその胡散臭い笑顔よりかは綺麗だとは思うぜ？」

「……フハハッ！ 魔法使い君はジョークも行けるんだね。でも——」

——パンツ！

ディオドラが口を開こうとした瞬間、乾いた音が部屋に響いた。

見てみると、そこにはディオドラの頬を平手打ちしたアーシアの姿があり、ディオドラは殴られた頬を抑えていた。

そして、アーシアは俺に抱きつき叫ぶように言った。

「そんなことを言わないでください！ イッセーさんは……薄汚くなんてありません!!」

これには全員が驚いていた。無論、俺もだ。

あのアーシアが誰かを叩くだなんて、思ってもみなかったからだ。

……けど、薄汚いって所は、否定が出来ないな。

アーシアには悪いけど。

『相棒………』

分かってるさ、ドライグ。

勿論、アーシアの気持ちは嬉しいさ。

「なるほど。……では、こうしようかな。次のゲーム、僕は——」

「いい加減気づけての。それとも難視なのか？アーシアはお前の所にはいけない。何があってもな」

ディオドラの言葉を遮って俺は言った。

「大方、ゲームに勝てたら、自分の愛に応えて欲しいとかいうつもりだったんだろ？

そういう一方的に気持ちを押し付ける行為はな、世間一般じゃストーカーって言っ

ぜ？」

「……僕をバカにしてるのか？」

「おいおい、難視の次は難聴か？救いようがないな。——馬鹿にしてんだよ。それ

に、俺はお前のその目が気に食わないんでね、どうも。胡散臭くて、何か腐ったもん隠してますよってアピールしてるようにしか見えねえからな」

俺の言葉に怒りを覚えたのか、デイオドラから殺気が放たれるが、そんなもんを無視して俺は続ける。

「お前なんかにはアーシアは譲れない。例え何があるともな………！」  
睨み合う俺とデイオドラ。

その時、先生のケータイが鳴った。

いくつかの応答の後、先生は俺たちに告げる。

「リアス、デイオドラ、丁度良い。ゲームの日取りが決まったぞ。——五日後だ」  
その日はそれで終わり、デイオドラは帰っていった。

~~~~~

その日の夜、俺はバイクで夜の道を走っていた。

ま、気分転換てやつだな。

——と。

「そこに隠れてる奴、出て来いよ」

俺はバイクを止めて目の前の曲がり角にそう呼びかけた。

「あんらら、バレちゃってるみたいだぜい？」

「ヤッホー、赤龍帝ちゃん♪」

そこから現れたのは、カカロットと黒歌。それに――

「やあ、兵藤一誠」

白いシャツ姿のヴァーリだ。

「新しい力に目覚めたそうじゃないか。実に興味深いよ。禁手の更に上の領域だなんて……是非とも戦ってみたいよ」

「はいはい、また何時かな。お前らテロリストの癖してよくブラブラしてんな。で、何の用だ? つーかこんなところで何してんだ?」

「仕事帰りさね」

仕事って……まあ、十中八九テロ関係だろうな。

「まあ、今日は忠告に来たんだ。だから安心してほしい」

忠告……?」

「レーティングゲームをするそうだな? 相手はアスタロト家の次期当主だと聞いた」

「ああ。それが?」

「記録映像は見たか? アスタロト家と大公の姫君の一戦だ」

「おう」

ディオドラが帰ったあと、俺は部長達と共にディオドラ対アガレスの記録映像を確か

に見た。

試合はディオドラの勝ちだった。

ディオドラの実力は圧倒的で、奴だけがゲームの途中から異常なほどの力を見せ、アガレスとその眷属を撃破したんだ。

これを見て訝しげに思ったのはほぼ全員。

けど、ゲーム自体ではなく、ディオドラのみに注目していた。

あいつは急にパワーアップしたんだ。

それまではアガレスがかなり追いつめていたのに途中から急に力強くなったディオドラに敗北した。

力を隠していたといえばまあ頷けるけど、ディオドラの実力はデータ上ではそれほど強いものではなかったはずだ。

先生もディオドラの力に疑問を抱いていた。

先生は生でこの試合を観戦していたらしいけど、事前に得ていたディオドラの実力から察してもあまりに急激なパワーアップに疑問を感じたようだ。

そして、部長と先生の意見は、

「『ディオドラはそこまで強い悪魔ではなかった』」

と、一致していた。

「まあ、俺の言い分だけでは、上級悪魔の者たちには通じないだろう。だが、君自身が知っておけばどうでもなると思ってたね」

「そっか。サンキューな」

俺が礼を言うのとヴァーリは驚いたかのように目を丸くした。

それは、カカロットと黒歌も同様だった。

ん?なんか可笑しなこと言ったか俺?

「なんだよその反応…?」

「……まさか、君に礼を言われるなんてな」

「そんなに驚くことか?」

「だって俺達テロリストだぜい?」

いや、それでも忠告自体はありがたいもんだしな。

と、ここで黒歌が俺に近づいてきた。

「ねえヴァーリ、美猴。先に行つててくれる?」

「んあ?どうしてまた」

「ちよつとこの子と話がしたいにゃん」

話がしたいって言って殺してきたりはしないだろうな?

「……分かった。行くぞ、美猴」

「おう。んじやくなく、赤龍帝」

そういつて二人は曲がり角の向こうに消えていった。

「……んで、話つて?」

「…白音は元気?」

白音……ああ、小猫ちゃんか。

「元気だぜ……つて、それがどうしたんだ?」

「赤龍帝ちゃん……ううん、イツセイちゃん」

「な、なんだよ急に……」

思わず身構えてしまう。

だつて急に名前呼びされたんだぞ?

誰だつて警戒するさ!

「あの子の事……ちゃんと守つてあげてね?あの子、すつごく寂しがり屋だから」

「……………」

「じゃあね♪」

そう伝えると、黒歌は去つて行くこうとする。

が、俺はそれを呼び止めた。

「黒歌!」

「?」

「……何かあったら、必ず守ってやるよ。小猫ちゃんも——お前も」

「っ」

それを聞いた黒歌は僅かに頬を赤くするも、次の瞬間にはその場から消えた。

やっぱ、どこまで行っても肉親ってのは、可愛いもんだよな。黒歌。

~~~~~

「そう、ヴァーリが……」

俺は家に帰った後、自室にいた部長にこの事を報告した。

「取りあえず、この事はまたお兄様達に進言するわ」

「了解です」

連絡を終え、俺は自分の部屋の扉を開けた。

するとそこには——

「あらあら、お帰りなさいイツセイ君♪」



「何をしているのかしら?朱乃」

おうふ……………!!

俺の興奮は一気に急降下した!

そう——我らがリアスお姉様の登場によって!

「あらリアス、いたのね」

うわっ、すげえ挑発的な物言いだ!

部長の顛顛こめかみも引くついでる!

と、そんな時、部屋の物陰から複数の影が飛び出た!

その正体は、それぞれ露出の激しいコスプレに身を包んだオカ研女子部員とイリナだった!

何してんの君たち!?

「うん。動きやすい。下着を着けられないが、機能的に身軽でいいな」

「で、でも、かなりスースーしない?あそこが見えそうで恥ずかしい……………」

「そ、それに…透けてますよ、ね?」

ま、まあ衣装の関係上下着は着けられないからあれだけ……………まさかノーパンの

ノーブラか!?

つて、アーシアの衣装からピンク色の物体がチラリと……つてイカンイカン! アーシアをそんな目で見ちやイカン!!

興奮する俺のもとに歩いてきたのは小猫ちゃん。

小猫ちゃんは巫女服の他に自前の猫耳と尻尾を出していた。

「似合いますか? にゃん♪」

ブツ!!

俺はさらに激しく鼻血を吹き出す!!

「きゃわいいよ小猫ちゃん!! お兄さん感激しちゃう!!」

やべえ、ここがアヴァロンなのか!?

俺もう死んでもいい!!

つつーか写真撮っちゃいけないのかな!?

スゲエ自家発電に使いたい!! ダメっすか!?

「……私だつて負けないわ!!」

おおつと、ここで部長が涙目になって部屋に飛び込んだ!

「……で、何で皆して着替えてるんですか?」

「以前の約束の事を話したら、皆で着替えようということになりましたの  
な、成程……にしても刺激が強すぎるぜ。

やべえ、血、足りるかな……?」

と、ここで部長が舞い戻ってきた!

「どう、イツセー?私の方が似合ってるでしょ?」

が、その姿はエッチな悪魔的な衣装だった!

自前の翼をパタパタさせて、自慢げにポーズング!

おおう、おっぱいがぶるると揺れたぞ!

最高です!!

「はい!!滅茶苦茶似合ってます!!……って、あれ?」

フラリ……と立ちくらみを感じたかと思うと、俺は力なく倒れた。

どうやら、鼻血を、出し過ぎた様だ……。

でも、俺は確かに今日、アヴァロンを見た——



『アヴァロン見たって言うけどよ、結局は童貞だよな』  
『それな』

次回、D×Dウィザード

イツセー「テレビ出演か…」

アザゼル「ヒーロー番組だよ」

ドライグ『なん……だと……?』

MAGI C 5 5 『新ヒーロー・爆誕?』

# MAGIC 55 『新ヒーロー・爆誕?』

アヴァロンを見た翌日、俺達オカ研メンバーは冥界のテレビ局にいた。

昨日気絶から目覚めたときに部長から知らされたんだ——「若手悪魔の特集でインタビューを受ける」んだそうなの。

で、今は部長が取材を受けている。

因みに木場と朱乃さんは別スタジオでインタビューを受けている。

この二人は結構人気が高いらしい。

全く羨ましいぜ、木場の野郎。

スタッフさんの話では、俺達眷属悪魔にも質問があるらしい。

さつきからギヤスパーはビビッて震えっぱなしだ。

『まあ引きこもりにも前に出ろってのは酷だよな』

それは確かに思った。

ある程度対人恐怖症はマシになったけど、それでもやはり大観衆の前は苦手らしい。

「落ち着けて、ギヤスパー」

「い、イツセー先輩は平気なんですか……？」

「これでも緊張はしてるさ」

テレビ出演なんて人生初だもんな。

内心ガツチガチだぜ？ これでも。

「えーっと、兵藤一誠さんはどちらでしようか？」

「はい？」

お、俺の番か。

「あ、どうも！ いやー、すみません。鎧姿の方が印象的でしたたので……」

「それは仕方ないっすよ」

試合中殆ど鎧姿だったもんな。

「それでですね、兵藤さんには収録後、第一会議室の方にご案内いたします。なので、収録後は帰らずにここに残っててもらいます」

「会議室？」

俺、なんかしたのか？

「兵藤さんにはあるプロジェクトに参加してもらおうことになっておりまして……。魔王ル

シフアー様と墮天使総督アザゼル様よりお呼びがかかっておりますので」

「サーゼクス様とアザゼル先生が……ですか」

何だろう、その二人の組み合わせだけで嫌な予感しかないぞ……。

まあ、考えても仕方ないか。

「分かりました。それじゃあ、収録後に」

「ありがとうございます。それでは番組の打ち合わせを再開します」

それから、打ち合わせを終えて、収録に入った。

~~~~~

収録後、俺は予定通り、スタツフさんにテレビ局にある会議室に案内された。

スタツフさんがドアをノックする。

「失礼します、兵藤一誠さんをお連れしました」

『うむ、入ってくれたまえ』

部屋の中から了承の声が聞こえた。

俺はドアを開けて入室すると、中にはサーゼクス様やアザゼル先生の他にプロデューサーらしき人、スーツを着た重役と思われる人など、数名の人が円卓を囲んでいた。

「よお、来たか。まあ座れや」

「はあ……それで、いったい何の話なんです？」

「ああ。実はな、冥界でお前を題材にしたヒーロー番組を作ろうと思つてな」

「……………はあああああああ!!？」

ひ、ヒーロー番組!?

マジか!?俺、ニチアサみたいなヒーローになつちやうの!?

「イツセー君が狼狽えるのも分かる。だが、これには訳があるんだ」

「訳?」

俺が聞き返すと、サーゼクス様は「うむ」と頷いた。

「戦争が終わり、和平を結んで冥界は平和になった。だが、それでも悪魔の絶対数は限られている。我々が今なすべきことは冥界を盛り上げ、後進の悪魔を育てていくことだ」

うんうん。

「けどな、お前が思つてる以上に冥界つてのは娯楽がすくねーんだ。それはお前も知つてるだろう?」

「まあ、何となく……」

だって俺が来る前にはファーストフード店とかゲーセンすらなかったって聞くぐらいだしな。

「そこぞだ!」

「……ここでアザゼル先生は声に力を入れた。

「冥界の民が、特にこれからの世を背負うことになる子供が夢を持てるものを作ろうということになったんだよ」

「……それは理解できましたけど、なんで題材が俺なんですか?」

この疑問に、アザゼル先生は溜息を吐いた。

「お前、もうちよい自分がヒーローだって自覚を持った方がいいぞ」

「は?」

「お前は俺達が接触する以前から多くの人間を救ってるじゃないか。それにこないだの和平会談でも歴代最強の白龍皇と謳われるヴァーリをも退けた。これだけ揃ってりやあまさに打って付けなんだよ」

ヴァーリに関しては共倒れに近いと思うんですけど……。

「それに、君は救うべき人達に「最後の希望だ」と言うと聞いたからね。君でよければ、冥界の子供達の「希望」になってほしいんだ。……どうだろうか?」

………希望か。

俺はその時、ミリキヤス様の笑顔を思い出した。

——よしつ、考えるのは止めだ！

「俺でよければ、喜んで引き受けさせてもらいます」

「ありがとう、イツセー君」

「うっし。話は纏まった所で、お前にやちよつと協力してもらうぜ」

アザゼル先生からの一言により、その極秘プロジェクトの話はどんどん進んでいった。

そして協力していくうちに、俺の方がその完成品が楽しみになっていた。

『俺がヒーローに協力することになろうとは……長生きしていると人生何があるか分からないもんだな』

『俺なんてそういう番組では敵役なのにな……』

ドライグは感慨深げに、ドラゴンは皮肉気に呟いた。

けど、そのタイトルを聞いた瞬間、ドライグとドラゴンが口喧嘩を始めちゃった。俺は案外気に入ってるんだけどなあ。

『ふざけんな!!!』

~~~~~

とまあ、極秘プロジェクトを終える頃にはすっかり夕闇に包まれていた。早く帰らないとな。

「……イツセイ様？」

「…グレイフィアさん?!」

と、冥界を出ようとした所で、グレイフィアさんと久し振りに出会った。

「収録お疲れ様です」

「どうもつす。グレイフィアさんは、サーゼクス様の付き添いで?」

「はい。私はサーゼクス様の『女王』ですから」

——ドキッ



何だ、今の高鳴り？

急に感じた胸の高鳴りを気にしていると、立ち話もなんだというところで冥界の喫茶店に誘われた。

そこへ向かっている間も、俺の胸はドキドキとしていた。

グレイフィアさんはコーヒーを、俺はカフェオレを頼んだ。

「今度、アスタロトとのゲームだと聞きました」

「はい。でも、絶対に負けませんよ」

あんな怪しきMAXの野郎にアーシアは渡さない！

「頑張ってください」

「……はいっ」

……何だろ、この気持ち。

グレイフィアさんの顔を見た瞬間から、何だか俺の胸は疼いていた。

よく分かんないけど、なんか苦しくて、ドクンドクンって心臓も早く脈打って、でも

……全然苦ではなくて——

「イツセー様……………」

「ツ!」

と、気付けばグレイフィアさんの端正な顔が視界一杯に映っていた。

その表情は俺を心配するものだった。

そして、俺の心臓は更に速く脈打った。

な、何なんだよコレ……………」

「どうかなさいましたか?」

「あ、や!何でもありませんよ!アハハ!イヤ、飲み物まだかな?って思いまして!」

誤魔化すように捲し立てると、グレイフィアさんはそんな俺の態度に苦笑いをこぼした。

良かった、バレてないみたいだ……………」

その後、飲み物が運ばれてきたものの、さっきの高鳴りが続いている俺には味なんて全く分からなかった。

「では、イツセー様。お気をつけて」

グレイファイアさんは微笑むと、グレモリー邸へと戻っていった。

——俺は、グレイファイアさんを……………

次回、D×Dウィザード

デイオドラ『ゲームをしよう。リアス・グレモリー』

ゼノヴィア「私に力を貸せええええッ!!」

イツセー「お前だけは……絶対に許さねえ」

MAGIC56『怒りの進撃』

ドライブ『タイトルがZEXALのサントラBGMっぽいな』

イツセー『後頭部召喚とかに使われてたやつか』

# MAGIC 56 『怒りの進撃・前編』

レーティングゲーム前日

冥界から戻った俺は部屋に戻る中で、ずっと考えていた。

——俺は、グレイフィアさんを、愛しているのか？

冥界での軽い立ち話を終えてからずっと考えていた。

それは、敬愛するものへの尊敬の念なのか？

それは、愛する人への恋慕の情なのか？

——分からない。

でも、グレイフィアさんは俺に対して好意を告げてくれた。

それはグレイフィアさんだけじゃない。

リアス部長、アーシア、朱乃さん、小猫ちゃん、ゼノヴィア、ティア——彼女達皆（一部除く）、惜しみなく好意を抱いてることが分かるし、告げてくれたりした。

なら、俺はどうなんだ？

俺は、誰が好きなんだ………？

——いや、考えたって仕方ないな。

それに、俺なんか皆に釣り合うはずもない

幸せにできるなんて、以ての外だ。

——人殺しに等しい事をした俺なんか、な。

『…相棒、お前はファントム共とは違う。お前は、他者の痛みを感じる事が出来る奴だ。そんな奴が、誰かを幸せにできない訳がっ』

『そうだな。でも——もう失うのは、御免なんだ』

『……………』

……………さて！明日はディオドラとのレーティングゲームだ！

さっさと寝て、明日に備えなきや……………ん？

「……………ゼノヴィア？」

「…イツセーか」

俺は兵藤家に存在するトレーニングルームの一室を通りすがった時、中で鍛錬をしているゼノヴィアと遭遇した。

ゼノヴィアは此方に気づき、練習を切り上げてくる。

座り込んだその顔には多量の汗が見受けられた。

「あんまり根を詰め込みすぎると体ぶっ壊すぜ？」

「分かっている。……………ただ、落ち着かなくてね」

そう語るゼノヴィアの瞳は、焦りが見受けられた。

「それに私は——木場より弱いからな」

ゼノヴィアはポツリと呟いた。

瞳は真つ直ぐな物の、その声音には悔しさが滲んでいた。

確かに、出会った当初はゼノヴィアの方が強かった。

でも今は、木場の方が強くなっている。

模擬戦なんかをしても、木場の勝率は俺を除けば高い方だ。

かくいう俺も、アイツの嵌め手に何度引つかかりかけたか……………。

「単純に才能という点では私よりも木場の方が上なのだろう」

ゼノヴィアは少しだけ目を陰らせた。

同じ剣士として木場に嫉妬している部分もあるんだと思う。

「…………才能なんておまけみたいなもんだ。大事なのは本人のやる気次第さ。開花するものもないものな」

「……………」

「ま、才能っていう点なら皆俺よりあるさ。と言うよりもな、才能無一文なんてこの眷属内じゃ俺ぐらいなもんだぜ？」

「…………え？」

ゼノヴィアは信じられないように驚いていた。

おいおい、そこまで驚くかよ？

「だが、あれほど多彩な技を持つているじゃないか」

「あんなもん死に物狂いでやった結果さ。その気になりや朱乃さんだつて出来るさ。あの人は魔力のエキスパートだからなく。しかも、魔力だつて最初は持つてなかった。だから、死に物狂いで特訓するしかなかった」

「……………」

「でもな、やり過ぎは体に毒だ。やる時はやって、休む時は休む。これ大事だぜ？だからよ——」

俺は立ち上がつてポンとゼノヴィアの頭に手を置いた。

「焦るな。そして、自分の才能を信じろ。お前がケガしちまったら、アーシアが泣いちまうからよ」

「……………そう、だな」

ゼノヴィアは目をパチクリさせていたが、すぐに立ち上がつて俺に接近してきた。

「明日に響いたら困るからな。今日は休むとするよ」

「おう、そうしろ。そういう思い切りの良さ、俺は好きだぜ」

よし、これなら大丈夫だな。

「……………イツセー！」

「ん？……………!?!」



振り返った途端、俺はゼノヴィアに唇を奪われていた。

って、またかよ!?!以前にもこんなことあったなオイ!!

「ふふっ、景気付けた」

「お、お前なあ……」

「だが、私のこの気持ちは嘘じゃない。明日——絶対に勝とう。イツセー」  
——っ。

その言葉を聞いた瞬間、俺はまた胸が締め付けられた。

それと同時に、脳裏にはグレイフィアさんの顔が過った。

だんまりになった俺に構わず、ゼノヴィアは自分の寢床へと戻っていった。

そして、夜はあつという間に過ぎていく——

~~~~~

そして、レーティングゲーム当日。

俺達はゲームの舞台になる異空間にやってきていた。

そこは広い場所で、一定間隔で大きな柱が並んでいる。

下は…石造りだ。

辺りを見渡すと、後方に巨大な神殿の入り口がある。

ギリシャで作られる神殿によく似ている。

パツとみでは壊れた個所もなく、出来上がったばかりの様相を見せていた。

ここが俺達のステージ…もとい、陣営か。

短期決戦か長期戦かは分らんが、あのむかつ腹の立つ顔を殴るだけだ。

などと勇みなくかまえていたのだが…

『?』

いつまでたつても審判役の人からのアナウンスが届いてこない。

「おかしいわね……そろそろ試合開始の時刻なのだけれど」部長がそう言う。

僕や他のメンバーも怪訝そうにしていた。

運営側で何かおこったのか？

そんな風に首をかしげて思っていたら、神殿逆方向に魔法陣が出現する。

まさかディオドラか？

「やけに仕掛けるのが早いな……」

この近距離で相対するなんて、短期戦のゲームなのか？

だが、魔法陣は一つだけじゃなかった。

さらに多くの魔法陣が現れたかと思うと光りだし、辺り一面、俺達を囲むように出現していく。

………これは、まさか。

「………アスタロトの紋様じゃない！」

でっすよねえ………。

俺は手に剣を構える木場の言葉で確信を得た。

どっからどう見てもアスタロトじゃないもん。

つつてもバラバラだな。誰の家柄かこれもう分かんねえな。

「全部、悪魔。しかも記憶が確かなら——」

部長が紅いオーラをまといながら、厳しい目線を辺りに配らせていた。

魔法陣から現れたのは大勢の悪魔たち。

全員、敵意、殺意を漂わせながらでてる。その悪魔達は俺達を囲んで激しく睨んでやがる。

何百人か、千人ぐらいか、正確な数は判らないが、数えるのも億劫な結構な数に囲まれている！

「魔法陣から察するに『禍カオス・ブリケードの団』の旧魔王派に傾倒した者たちよ」

——ここで『禍カオス・ブリケードの団』かよ!!

「忌々しき偽りの魔王の血縁者、グレモリー。ここで散ってもらおう」
 囲む悪魔の一人が部長に挑戦的な物言いをする。

刹那——

「キヤツ！」

悲鳴！

この声は——アーシア!?

「イツセーさん！部長さん！ゼノヴィアさん！」

「アーシア!!」

上を見上げてみるとアーシアさん捕えたディオドラの姿があつた。

「やあ、リアス・グレモリー。アーシア・アルジエントはいただくよ」

笑顔のままそう言うディオドラ。

「ディオドラッ!!」

「卑怯者！アーシアを離せ！そもそもどういふことだ！私達とゲームをするんじゃないのか!?!」

ゼノヴィアの叫びにディオドラは醜悪な笑みを見せた。

「バカじゃないの？ゲームなんてしないさ。キミたちはここで彼ら——『禍カオス・ブリケードの団』の

エージェント達に殺されるんだよ。いくら力のあるキミたちでもこの数の上級悪魔と

中級悪魔を相手にできやしないだろう？ ハハハ、死んでくれ。速やかに散ってくれ」
部長が宙に浮かぶディオドラを激しく睨む。

「あなた、『禍の団』と通じてたというの？ 最低だわ。しかもゲームまで汚すなんて万死に値する！ 何よりも私の可愛いアーシアを奪い去ろうとするなんて……ッ！」

部長を纏うオーラが激しく膨れ上がった！

怒りを感じるのは当然だろう。

そして——それはここにいる全員同じだ!!

「彼らと行動したほうが、僕の好きなことを好きなだけできそうだと思つたものだからね。ま、最後のあがきをしていてくれ。——赤龍帝、僕はその間にアーシアと契る。

意味はわかるかな？ ハハハハツ、僕はアーシアを自分のものにするよ。追つてきたかつたら、神殿の奥まで来てごらん。素敵なものが見れるはずだよ」

ディオドラが嘲笑するなか、ゼノヴィアが叫ぶ。

「アーシアは私の友達だ！ お前の好きにはさせん！」

ゼノヴィアはデュランダルを召喚すると、奴めがけて光波を放つが、ディオドラはそれを躲した！

「みなさ——」

空気が打ち震え、空間が歪んでいく。ディオドラとアーシアの体がぶれていき、次第

に消えていった。

「アーシアアアアアアアアアッ!!」

ゼノヴィアが怒りの感情のままに吠えた。

「落ち着け、ゼノヴィア。先ずは目の前の奴らだ」

「イツセー……………ッ」

お前の気持ちは痛いぐらいに分かる。

だが、先ずは——

「死ねえ！偽りのま——」

——ドウツ!!

俺は部長に襲い掛かる悪魔に向けてドラゴンショットをぶちかました。

「こいつらをぶつ倒す。そして、アーシアを助け出す」

「……………ああ、そうだな」

ゼノヴィアも敵意を周りの悪魔連中に向けた。

とは言え——流石に多いな。

どうしたもんかと思案していると、朱乃さんが「きやつ！」と言う悲鳴を上げた！

まさか、傷を負ったのか!?

そう思ってそちらへ視線を向けると——ローブ姿の隻眼のジジイが朱乃さんのスカートをめくって下着を覗いていた。

「うーん、良い尻じゃな。何よりも若さゆえの張りがたま」

「おらあつ!!」

「って何時かのスケベジジイ——もといオーデインじゃねーか!!」

「赤龍帝、ワシを殺す気か!？」

「うるせえよこの腐れジジイ!!何俺の朱乃お姉さまにセクハラ働いてんだよ!その萎びたケツ穴にリコーダーぶち込んでやろうかああん!？」

「ワシのケツはまだ現役じゃああああ!!」

「そんでもってエーデルワイズ吹かせてやる!!」

『相棒。そんな真似したら綺麗な花が穢れてしまう。ここは卒業式の定番、栄光の架橋にしようぜ』

『そんな事してしまえば栄光も糞もあるまい……』

「って、こんなボケ合戦やってる場合じゃない！」

「…どうしてオーデイン様がここに?」

「うむ、話を戻そうか。簡潔に言うとな、『禍の団』にゲームを乗っ取られたんじゃよ。カオス・ブリケード

で、今は運営側と各勢力の面々が協力体制で迎え撃つとる。ま、ディオドラ・アスタロ

トが裏で旧魔王派の手を引いていたのまでは判明しとる。先日試合での急激なパワー向上もオーフィスの『蛇』でももらいうけていたのじやろう。だがの、このままじやとお主らが危険じやろ？ 救援が必要だったわけじや。しかしの、このゲームフィールドごと、強力な結界に覆われててのう、そんじよそこらの力の持ち主では突破も破壊も難しい。特に破壊は厳しいのう。内部で結界を張っているものを停止させんとどうにもならんのじやよ」

「では、オーデイン様はどうやってここへ？」

「ミーミルの泉に片目を差し出したおかげであらゆつ魔術、魔力、その他の術式に関して詳しくなつたんじやよ。結界に関しても同様」

じいさんは左の隻眼の方を俺達にも見せる。

そこには水晶らしきものが埋め込まれ、眼の奥に輝く魔術文字を浮かび上がらせていた。

………何か、すげえヤバそうな感じだな。

龍殺しとも違う悪寒を感じたぞ、今！

「本来ならば、わしの力があれば結界も打ち破れるはずなんじやがここに入るだけで精一杯とは……。はてさて、相手はどれほどの使い手か。ま、これをとりあえず渡すようにアザゼルの小僧から言われてのう。まったく年寄りを使いにだすとはあの若造どう

してくれるものか……」

そうぶつぶつと言いなながらもじいさんグレモリー眷属の人数分の小型通信機を渡してくる。

「ほれ、ここはこのジジイに任せて神殿のほうまで走れ。ジジイが戦場に立ってお主らを援護すると言っておるのじゃ。めっけもんだと思え」

「この数相手にすんのか？」

思わずそう言うと、じいさんはただ愉快そうに笑った。

「まだ十数年しか生きていない赤ん坊が、わしを心配するなぞ——」

すると、じいさんの左手に槍が出現する。

なんだありや？

「グングニル」

それを悪魔たちに一撃繰り出すと、

ブウウウウウウウッ！

槍から極大のオーラが放出され、空気を貫くような鋭い音が辺り一面に響き渡る。

気付けば悪魔たちは先の一撃で数十人にまで数を減らしている。

『流石は北歐神話の主神と言うべきか』

「なーに、ジジイもたまには運動しないと体が鈍るんでな。さーて、テロリストの悪魔ども。全力でかかってくるんじやな。この老いぼれは想像を絶するほど強いぞい」

んじや、お言葉に甘えるとしますか。

「じいさん、死ぬなよ」

「ここはお任せします、オーデイン様。さあ、皆！行きましょう！」

『はい!!』

ディオドラ、覚悟しとけよ？

MAGIC 57 『怒りの進撃・後編』

神殿の入り口に入るなり、皆はオーデインの爺さんから受け取った通信機器を取り付ける。

『無事か？こちらアザゼルだ。オーデインの爺さんから渡されたみたいだな』

聞こえた声はアザゼル先生だ。

『言いたいこともあるだろうが、まずは聞いてくれ。このレーティングゲームは『禍の団』旧魔王派の襲撃を受けている。そのフィールドも、近くのVIPルーム付近も旧魔王派の悪魔どもがうじゃうじゃしている。だが、これは事前にこちらも予想していたことだ。現在、各勢力が協力して旧魔王派の連中を撃退している』

「予想していた？どういう事だ？」

先生の言葉にゼノヴィアが怪訝な表情で問う。

『リアスの耳には入っているだろうが、最近、現魔王に関与する者たちが不審死するのが多発していた。裏で動いていたのは『禍の団』旧魔王派。グラシャラボラス家の次期当主が不慮の事故死をしたのも実際は旧魔王派の連中が手にかけてたつてわけだ』

グラシャラボラスの次期当主候補は『禍の団』に殺害されたのか……。

恐らく、現魔王の血筋だから狙われたのだろうな。

だが、どうしてディオドラの糞野郎が『禍の団』に？

『首謀者として挙がっているのは旧ベルゼブブと旧アスモデウスの子孫。俺が倒したカテレア・レヴィアタンといい、旧魔王派の連中が抱く現魔王政府への憎悪は大きい。このゲームにテロを仕掛けることで世界転覆の前哨戦として、現魔王の関係者を血祭りにあげるつもりだったんだろう。ここにはちょうど、現魔王や各勢力の幹部クラスも来ている。テロリストどもにとつて襲撃するのにこれほど都合なものもない』

つまり、俺達の試合は最初から旧魔王派に狙われていたつて訳か。

敵のターゲットは現魔王と現魔王の血縁者——部長。そして、観戦しに来ていた各勢力の頭であるオーディンの爺さんもターゲットの一人だったのだろう。

「では、あのディオドラの魔力が以前よりも上がったのは？」

部長が先生に問いかける。

『禍の団』に協力する代わりにオーフィスの『蛇』を受け取ったんだろう。『蛇』をもらったやつは三流のやつでも一流並みの力量を得ることが出来る。……まあ、ディオドラがそれをゲームで使ったことは奴らも計算外だっただろうがな。そのおかげで今回のことを予見できたわけだが』

………オーフィスの奴。

でも、アイツはこの混乱だってどうでもいいってスタンスなんだろう。

——自分の故郷に帰る為に。

『成程。あの異常なパワーアップはその為か』

ドライブの納得した声が響く中、先生からの通信は続く。

『あつちにしてみればこちらを始末できればどちらでもいいんだろが、俺たちとしてもまたとない機会だ。今後の世界に悪影響を出しそうな旧魔王派を潰すにはちよどいい。現魔王、天界のセラフたち、オーデインのジジイ、ギリシャの神、帝釈天とこの仏どもも出張ってテロリストどもを一網打尽にする寸法だ。事前にテロの可能性を各勢力のボスに極秘裏に示唆して、この作戦に参加するかどうか聞いたんだがな。どうつもこいつも応じやがった。どこの勢力も勝ち気だよ。いま全員、旧魔王の悪魔相手に暴れているぜ』

どの勢力もテロには屈しない姿勢というわけだ。

ま、そりやそうだな。

「……このゲームはご破算ってわけね」

『悪かったな、リアス。戦争なんてそう起こらないと言っておいて、こんなことになっ

まっている。今回、お前たちを危険な目に遭わせた。一応、ゲームが開始する寸前までは事を進めておきたかったんだ』

「もし、私たちが万が一にも死んでしまったらどうするつもりだったんだ？」

ゼノヴィアが何気なく聞くと先生は真剣な声音で言った

『もしそうなった場合は俺もそれ相応の責任を取るつもりだった。俺の首でことが済むならそうした』

——先生は死ぬつもりだったんだ。

そこまで覚悟して、旧魔王派の連中をおびき寄せたのだろう。

俺は先頭を走りながら先生に通信を入れる。

「先生。アーシアがディオドラの野郎に連れ去られました。取り敢えず俺達はアーシアを助けに行きます！」

『——っ。そうか、一足遅かったか……。止めろつて言っても聞かんのは分かっている……だが、くれぐれも気をつけてくれ。このフィールドは『禍の団』所属の神滅具所有者が作った結界に覆われているために、入るのはなんとかできるが、出るのは不可能に近いんだよ。——神滅具『絶^{ディメンジョン}霧^{ロスト}』。結界、空間に関する神器のなかでも抜きん出ているためか、術に長けたオーデインのクソジジイでも破壊できない代物だ』

「了解です！」

まっさかテロリスト勢に神滅具使いがいるとはな……けど、引くつもりはないっ！
 『最後にこれだけは聞いていけ。奴等はこちらに予見されている可能性も視野に入れておきながら事を起こした。つまり、多少敵に勘づかれても問題ない作戦があると言うことだ』

「つまり、相手は隠し玉を持っている可能性があるということですか？」

木場がそう問いかけると、先生は肯定の意を返した。

『そういうことだ。それが何なのかはまだ分からないが、このフィールドが危険なことには変わりはない。ゲームは停止しているため、リタイヤ転送は無い。だから、十分に気をつけてくれ』

そこで先生との通信は終わった。

~~~~~

ステージの神殿を抜けると前方に新たな神殿が現れ、俺達はそを指す。  
 それを何度か繰り返し返していくうち、とある神殿の中に入ったとき……気配を感じた。



俺達はそこで足を止める。

前方から現れたのは——フードを深く被ったローブ姿の小柄な人影か十名ほど。

ディオドラの眷属だ。

『やー、リアス・グレモリーとその眷属の皆』

ディオドラの声が神殿に響く。

ドライグ、あの野郎は動いてないか？

『ああ、恐らくは魔力による通信だろう。あの糞野郎は微動だにしてない』

ドライグの声音には僅かだが怒りが混じっている。

ドライグもアシアの事は気に入っている。だからこそアイツが気に食わないんだろう。

その気持ちは十分に理解できるぜ、相棒。

『じゃあ、役者も揃ったことだし、ゲームをしよう。中止になったレーティングゲームの代わりだ』

ゲーム、ねえ……アシアを手元に置いてるからか、ちよつと調子に乗ってるな？  
まったく人をムカつかせるのが得意な野郎だぜ。

『お互いの駒を出し合つて、試合をしていくんだ。一度使った駒は僕のところへ来るまで二度と使えないのがルール。あとは好きにしていんじゃないかな。第一試合、僕は

『兵士』八名と『戦車』二名を出す。ちなみにその『兵士』たちは皆すでに『女王』に昇格しているよ。ハハハ、いきなり『女王』八名だけれど、それでもいいよね？ 何せ、リアス・グレモリーは強力な眷属を持っていることで有名な若手なのだから」

「……いいわ。あなたの戯言に付き合っただけ。私の眷属がどれほどのものか、刻み込んであげるわ」

まあ、向こうはアーシアっていう人質を持つてる。

下手に刺激したらアーシアに何仕出かすかわからんからな。

とは言え、いきなり半数ブツコムとか……アイツ、ホントにそんな戦術で戦う気かよ？

バカじゃん。

部長は息を吐くと小猫ちゃん達に視線を向ける。

「イツセーを出すまでもないわ。私達は小猫、ギヤスパ、ゼノヴィアを出すわ。今名前を呼んだメンバーは集まってちょうだい」

小猫ちゃん、ギヤスパ、ゼノヴィアは部長のもとに集まる。

「ゼノヴィア。あなたには『戦車』の殲滅を頼むわ。思いつきりやっていいから。全部ぶつけてちょうだい」

「了解だ。いいね、そういうのは得意だ」

部長がそう言うと、ゼノヴィアは不敵な笑みを浮かべる。

まあ、制限なしのこいつなら『戦車』の二人くらい余裕だろ。

『兵士』は小猫とギヤスパーに任せるわ。オフエンスは小猫。仙術で練り込んだ気を相手に叩き込んで根本から断つ。ギヤスパーはイツセーの血を飲んでサポートに回ってちょうだい」

「……了解」

「了解ですうー！」

二人はそれぞれ頷いた。

俺は親指を歯で噛んで血を出すと、ギヤスパーに差し出した。

ドクンッ！

よーし、これでOK………の前に、

「ゼノヴィア、使え」

俺は籠手からアスカロンを取り出すと、ゼノヴィアに向けて投げ飛ばした。

アスカロンはゼノヴィアの目の前に突き刺さった。

「……有り難く使わせてもらおうよ」

『じゃあ、始めようか』

ディオドラの声と共に奴の眷属が一斉に構えだした。

それと同時に、ゼノヴィアはデュランダルを解放すると、アスカロンと二刀流の構えをして、『戦車』二名の方へ歩み出した。

「アーシアは返してもらおう」

ゼノヴィアの全身からかつてないほどのプレッシャーが放たれていた。

歩みはゆっくりだが、身を覆うオーラは力強く、その眼光は鋭い。

「……私は友と呼べる者を持つていなかった。そんなものがなくとも、神の愛さえあれば生きていける、と」

『戦車』二名がゼノヴィア目掛けて走り出す。

しかし、ゼノヴィアは動じずに独白を続ける。

「そんな私にも分け隔てなく接してくれる者達ができた。特にアーシアはいつも私に微笑んでくれた。出会った時に酷いことを言ったのにも関わらずだ。アーシアは何事もなかったかのように話しかけてくれた。それでも『友達』だと言ってくれたんだ！」

ゼノヴィア……。

「だから、助ける！ 私の親友を！ アーシアを！」

ドンッ！

ゼノヴィアの想いに答えるかのようにデュランダルとアスカロンから絶大なオーラ

が発せられる！

その波動はゼノヴィアに攻撃を仕掛けようとした『戦車』の二人を弾き飛ばした。

ゼノヴィアは二本の剣を振り上げると涙まじりに叫んだ！

「だから、だから頼む！ デュランダル！ アスカロン！ 私の親友を助けるために！ 私に力を貸してくれ……いや、私に力を貸せええええええつ！！」

二本の聖剣から迸るオーラは、留まる事を知らずに溢れ続ける！

ゼノヴィアはそのオーラを御すると、極太の光波を放った！！

「聖牙天衝・双覇斬ツ！！」

ザバアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！！

二つの大浪とも言える聖なる波動は、『戦車』二名を悲鳴ごと飲み込んでいった！

ドオオオオオオオオオツツ！！

神殿が大きく揺れ、砂誇りが舞う。

揺れが収まったとき、俺の視界に映ったのは、ゼノヴィアの前方に伸びる二本の大きな波動の爪痕。

その先にあった柱や壁は全て消失している。

これがセーブ無しのゼノヴィアの攻撃か……。

木場が言っていた光波による攻撃……とは言え予想以上の一撃だ。

ただ、ゼノヴィアは肩で息をしている。

流石に連発は無理か。

……昨日言ってた才能の話だけど、そのパワーは木場には出せない。

それはお前の魅力的な才能だと思っぜ、ゼノヴィア？

残る小猫ちゃんとギヤスパーの方は……二人の方に視線を移すと、ギヤスパーは複数のコウモリに分身して、小猫ちゃんは猫耳を出した状態で体の表面を青白く輝かせていた。

仙術による気を纏っている。

八人の『兵士』は一斉に小猫ちゃんに襲いかかるが、だけど小猫ちゃんは特にその無表情を崩すことなく、相手の気配を読んで全ての攻撃を捌いていた。

小猫ちゃんは自分の力を扱いきれるように日々努力している。

それに最近は多人数との戦闘を想定して俺のドラゴタイマーの分身と戦闘してることも影響してるな。

今回はその成果が見られる。

多分、ここにいる全員、このぐらいの力量相手なら無双ゲーだな。

攻撃が掠りもしないので、相手の『兵士』達は徐々に焦りを見せ始めている。

すると、数人の『兵士』の動きが止まった。

『小猫ちゃん、停止している間に相手を無力化するですううう!!』

ギヤスパーが邪眼の力を活用して相手の動きを止めたんだ。

他の『兵士』も停止させられ、小猫ちゃんは次々に停止した『兵士』を掌底で殴り飛ばしていく。

ギヤスパーが停止させている間に小猫ちゃんが気を纏った攻撃を撃ち込む……理想的なコンビネーションだな。

こりや、近接戦では最強のコンボだな。

若しくは俺の龍牙雷光で一網打尽とかな。

小猫ちゃんに気を乱された相手は魔力を練ることも、立ち上がることも出来なくなる……つまり、小猫ちゃんの攻撃をくらった『兵士』八名は崩れ去り、その場に倒れて動かなくなった。

死んではない。

ただ、起き上がれないだけだ。

数ではこちらが完全に不利だったはずが、結果はこちらは無傷。それも相手を瞬殺している。

圧倒的じゃないか。

戦闘を終えた三人が帰ってくる。

「……終わりました」

「修行の成果が出せていたわね。流石よ、三人とも」

部長が誉めると三人は嬉しそうに微笑みを浮かべた。

さて、とりあえずは一勝だ。

俺達は次のステージに進んだ。

くくくくくくくくくくくく

次に俺達を待っていたのは——敵三名の姿。

全員、ローブを纏っている。

なんで敵はローブ羽織るのが好きなのかねえ……？

「待っていました、リアス・グレモリー様」



三名のうちの一人がロープを取り払う。

あの人は確か、ディオドラの『女王』。

おい、美人さんだな。

とは言え、あの『女王』の人はかなり強かったのは覚えてる。

後の二人は、『僧侶』の女の子だ。

「あらあら、では、私が出ましようか」

そう言つて一步前に出たのは朱乃さん。

「あとの『騎士』二人は祐斗がいれば十分ね。私も出るわ」

と、部長も前に出た。

おお、ここで二大お姉さまのタッグか！

「あら、部長。私だけでも十分ですわ」

「何言つているの。いくら雷光を覚えても、無茶は禁物よ。ここは堅実にいくのが一番だわ」

雷光と滅びの力。

どちらも強力な性質を持つ。

更にはそれを扱う二人も強くなっているから、威力は絶大だ。

それが共闘する。

この勝負も余裕で勝てそうだ。

すると、小猫ちゃんが俺をちよんちよんと小突く。

ん？

どうした小猫ちゃん？

小猫ちゃんは俺にしやがむように促し、耳元に小さな声で耳打ちしていく。

……………ふむふむ、なるほど。

「……………それでいいの？」

とは言え、俺の精神状態でそれを言うのはちよつと躊躇われるんですけど……………。

「…はい。これなら朱乃さんがパワーアップします」

別にパワーアップいらなと思うんだけど……………まあ、良いか。

少しでも無傷で勝てるならそれに越したことはないな。

「朱乃さーん」

俺が呼ぶと朱乃さんが振り向く。

「えつと、その人達に完勝したら、今度の日曜デートしましょう！……………これでいいの小猫ちゃん？」

俺が小猫ちゃんに尋ねるとコクコクと頷く。

いや、俺なんかのデートなんて逆に怒っちゃうんじや……………

バチツ!!バチチチチチツ!!!

……気のせいかな、何かすんごく激しい音が聞こえたな。

『相棒、あれあれ』

……はうあつ!!

そこにはやつぱりというか、凄まじいほどの雷光を纏った朱乃さんがいました……。

「……うふふ。うふふふふふふふふ……イツセー君とデート!」

え、ええええええええ……?」

マジでパワーアップしちゃったよ、オイ!

だって普段以上だもん、このオーラ!

「酷いわ、イツセー!朱乃だけにそんなこと言うなんて!」

ちよ、今度は部長が涙目で俺に訴えてきた!

何、俺が悪いのか?教えてー偉い人ー!!

「うふふ、リアス。これは私の愛がイツセー君に通じた証拠よ。さつきだって、『俺の朱乃お姉さま』って言ってくれたわ。これはもう確定なのではないかしら?」

「な、な、な、何を言っているの!デ、デート一回くらいの権利で雷を迸らせる卑

しい朱乃になんか言われたくないわ！」

おいしいおいしい！なんだか、部長と朱乃さんが口論し出したんだけど！

小猫ちゃん、これ本当に大丈夫なの!?

事態が悪化した風にししか見えないんだけど!?

すると、部長の一言に朱乃さんが片眉を吊り上げた！

「なんですつて？　いまだ抱かれる様子もないあなたに言われたくないわ。その体、魅力がないのではなくて？」

「そ、そんなことはないわ！」

「あら？　何をしたというのかしら？」

「……ベッドの上で胸を触ってくれたわ」

や、それに関しては触らせてくれたといったほうが正しいんじゃないや……まあ、こんな事言っても火に油を注ぐみたいなものだからな。

「……それ、イツセー君の寝相が悪くてそうなたただけではなくて？」

「キ、キスしたもん……」

あ、今の部長、スゲー可愛かった。

完璧に普通の女の子だった。

まあ、俺からじゃないんですけどね。

と、何だかんだ言っていると二大お姉さまの口論はさらにヒートアップしていく！  
それに乗じて神殿も揺れていく!!

「だったら私も今すぐにイツセー君と唇を重ねてきますわ！リアスのキスなんか忘れるくらいに！」

「ダメよ！あなたのことだから、舌も入れるつもりでしょう！」

「当然よ！彼を私色に染め上げて見せますわ！」

「絶対にダメよ！イツセーが獣になつてしまうわ！」

なんつー会話してんすか!?

ほら、相手の方々も困ってますよ！

と、ここで相手の『女王』が痺れを切らしたのか、魔力を纏った！

「あなた方！いい加減になさい！私達を無視して男の取り合いなどと——」

「うるさいっ！」

ドツゴオオオオオオオオオオオン!!!

部長と朱乃さんが特大の一撃を相手目掛けて撃ち放つ！

その威力は見ていてだけで寒気がするほどだった！

滅びの魔力と雷光が敵を容赦なく包み込んでいき、周囲の風景もろとも消し飛ばして

いった!

相手は今ので完全に戦闘不能。

そりやそうだわ!!

だがしかし!この二人の口論は!止まらないんだよねえ!!

「だいたい朱乃はイツセーのことを知っているの!?!私は細部まで知っているわ!」

ちよおいつ!?!今のは聞き捨てなりませんよ!

知ってるんなら今すぐ記憶から消去してください!!

「知っているだけで、触れたことや受け入れたことはないのでしょうか?私なら今すぐにも受け入れる準備は整ってますわ!」

「うぬぬぬぬ!……まあ、いいわ。それはアーシアを救ってからゆつくりの話し合いましょう。まずはアーシアの救出よ!」

「ええ、わかっていきますわ。私にとつてもアーシアちゃんは妹のような存在ですもの」  
ホツ……二人ともやつと意見が一致したか。

どうなる事かと思つたよ。

兎にも角にも、俺達は再び歩を進めた。

俺達はディオドラの『騎士』が待っているだろう神殿に足を踏入れたとき、俺達の視界に見覚えのある者が映り込む。

「や、おひさ〜」

現れたのは白髪の神父。

それは――

「フリード……!」

そう、俺達の目の前に現れたのはフリード・セルゼン。

あのクソ神父だった。

エクスカリバー事件の時以来か。

懐かしいもんだ。

確かヴァーリが回収する前に逃げていたけど……それに、この感じ。

「実はあん時命からがら逃げだしたのさ〜。そんな時に俺ちゃんを拾ったのがテロ組織『禍の団』って訳よ! どうどう? 外道神父の俺ちゃんと外道過ぎる組織のスンバラシイコラボレーション!! 素敵だと思わないでござんすか〜?」

「素敵過ぎて気味が悪いな。それに、お前自身も」

俺のこの一言に皆は訝しげになる。

が、小猫ちゃんは察したのか、鼻を抑えて忌々しげに呟いた。





これが素敵にイカレてて聞くだけで胸がドキドキだぜ！」  
フリードが突然ディオドラの話しを始める。

「ディオドラの女の趣味さ。あのお坊ちゃん、大した好みでさー、教会に通じた女が好みなんだって！そ、シスターとかそういうのさ！」

女の趣味？シスター……………ッ!?

俺の中で、ある考えが直結した。

フリードは大きな口の端を上げながら続ける。

「ある日。とある悪魔のお坊っちゃん、はちょー好みの美少女聖女様を見つけましたとさ。でも、聖女様は教会にとっても大切にされていて、連れ出すことは出来ません。そこでケガした自分を治療するところを他の聖職者に見つかれば、聖女様は教会から追放されるかも、と考えたのでしたあ」

……………どうやら、俺の考えは当たっていたらしい。

道理でおかしいはずだ。

現魔王の血縁者で上級悪魔であるディオドラが教会の近くで眷属も引き連れず、怪我をし、たまたま悪魔も治せるアーシアに助けられる。

考えれば考えるほど、あまりにも話しができてきている。

ア－シアの優しさを……いや、ア－シアだけじゃない。シスター達の敬虔な精神を……あの糞野郎はッ!!!

俺の怒りに呼応するかのように、体中から赤いオーラが漏れ出す。

見れば他の皆も怒りに顔をゆがめている。

だがフリードはそれに構わず、醜い濁声を上げ続ける。

「信じていた教会から追放され、最底辺まで堕ちたところを救い上げて犯す！心身共に犯す！それが坊っちゃんの最高最大のお楽しみでありますううう!!」

「ッ!!」

我慢の限界に達した俺は攻撃の態勢に入るが、それを腕で遮るものが現れた――  
木場だ。

「イツセー君が手を下すまでもない。君はその怒りを、ディオドラ・アスタロトにぶつけるんだ。……………あの煩い口は、僕が閉じよう」

「木場……………任せませ」

頭が冷えた俺はその場を木場に任せた。

木場は静かに頷くと、そのまま歩んでいく。

その身に殺意を含んだ攻撃的なオーラを纏わせながら。

「やあやあやあ！てめえはあのとき俺をぶった斬りやがった腐れナイトさんじゃあーりませんかああああ！イツセー君を殺る前にてめえに仕返しするといきましょーかあああ！色男さんよおおつ！」

木場は聖魔剣をかまえると、しかし冷淡な声で一言だけ一蹴するように告げた。

「君はもういい方がいい」

「調子くれてんじゃねえええぞおおおつ！」

全身から生物的なフォルムの刃を幾重にも生やして木場へと突っ込んでいくフリード。

対して木場は力まずに駆け出す。

一瞬の交差の後——鮮血が迸った。

そう、フリードの血が、だ。

コンマ単位の世界で、木場はフリードの目で追いきれないほどの高速の斬撃を見舞った。

「……………んだ、それ……………強すぎんだろ……………」

辺りにフリードの肉片と血液が散らばる中、フリードの頭部が床に転がり、大きな目

をひくつかせていた。

「……ひひひ。ま、おまえらじゃ、この計画の裏にいる奴らは倒せねえよ……」  
 が、その言葉が続くことはなかった。

フリードの頭部の内側から、無数の剣が咲き誇っていたからだ。  
 「続きは冥府の死神相手に吠えてるといい」

………カッコいいキメ台詞挟みやがって！

ま、此奴の事なんざ今はどうでもいい。

「行こう、皆」

俺達は領きあい、ディオドラの待つ最後の神殿へと走り出した。

~~~~~

最深部の神殿。

ここにアールシアとディオドラがいる。

内部に入っていくと、前方に巨大な装置らしきものが姿を現す。

そして、その中心にアールシアが張り付けにされていた。

見た感じ、外傷は無いし服も破れている様子はない。

「やっと来たんだね」

装置の横から姿を現したのはディオドラ・アスタロトだった。

「……イツセー、さん？」

アーシアが顔を上げる。

目元が腫れ上がり、涙の跡が見えた。

腫れ上がり方からして、かなりの量の涙を流したのだろう。

「……ディオドラ。テメエ、アーシアに話したのか？」

先程、フリードから聞かされたこと。

あれは絶対にアーシアに聞かせてはならないものだ。

だが、ディオドラはニンマリと微笑む。

「うん。全部、アーシアに話したよ。ふふふ、キミたちにも見せたかったな。彼女が最高の表情になった瞬間を。全部、僕の手のひらで動いていたと知ったときのアーシアの顔は本当に最高だった。ほら、記録映像にも残したんだ。再生しようか？ 本当に素敵な顔なんだ。教会の女が堕ちる瞬間の表情は、何度見てもたまらない!!」

アーシアがすすり泣き始めている。

この野郎は………何処までッ。

《Welsh Dragon Absolution Breaker!!!》

俺は禁手を介さずに極手を発動する。

最初はこれすら使うのも癪だったが……………どうせならもつと派手に地獄を味わわせてやる事にした。

「ッ!!!」

俺の殺気に怖気づいたのか、奴は僅かに後ずさりする。

……………情けない様だな。

『相棒、構わん。存分に俺の力を振るえ』

……………当たり前だろ。

《Limit Boost!!》

力が一気に俺の限界地まで強化される。

俺が一步歩むたびに、奴が一步下がる。

「き、消えろおおおおおおおつ!!!」

「——爆炎の龍波動」

奴の放った魔力弾と同時に、俺はドラゴンショットに火種ドラゴンプレスを吹きかけ、奴に放つ。

俺のドラゴンショットが奴の魔力弾を飲み込み、そのまま奴に命中——更に追い打ちで奴は爆炎に包まれた。

「が、あああああああつ!!? 熱い、熱いよ!!」

その情けない悲鳴に俺の怒りはさらに大きくなる。

お前はその悲鳴を、悲しみを——

俺は言葉にするよりも行動で示した。

「ウエルシュ・エクスカリバー赤龍帝の聖剣ツ!!!」

「ぎゃあああつ!!!」

痛みの中のうち回る奴に構わず俺は奴の足を掴み、何度も地面に叩き付ける!!

一頻り叩き付けた後、空中に投げ飛ばし、無防備な奴を空中で袋叩きに殴る!

空中から地面に落ちた奴は何度も地面をバウンドし転がる。

が、奴はフラフラになりながらも立ち上がろうとした。

お前に、立ち上がる権利は、ないっ!!!

《Limit Boost!!》

再び限界まで倍加された俺は高速で接近すると、奴の顔面を鷲掴みにして地面に再び叩き付ける!

何やらもがいていたが、俺はそれを無視して右手にドラゴンシヨットを生成し、掴む。
 そして――

「大撃砕の龍波動オツ!!!」

「――ツ!!!?」

直接奴のどてっ腹に叩き込むツ!!

その一撃は奴の悲鳴を飲み込んで、奴を中心にクレーターが出来上がった!

が、奴はまだ生きてる。

って当然だな。何せ、威力は抑えてるからな。

俺は蹲るソイツをサツカーボールの様に蹴っ飛ばした!

勢いよく飛んだデオドラは神殿の壁に叩き付けられ、俺はそんな奴に起き上がる暇すら与えずタツクルを繰り出す。

更に、急所を態と外す様にしながら鎧を針のように伸ばし、奴を串刺しにするっ!!
 「がはっ!!?.....な、んでっ!!?僕は.....上級悪魔だ、現ベルゼブブの、血筋だツ!!」

離れた俺にそう言いながらにらみつけてくるデオドラ。

「上級悪魔? お前みたいに他人の力を借りてのし上がった奴はな、小物って言うんだよ。」

三下」

こんな奴が、ソーナ会長やサイラオーグさん、アガレスの大公、部長と同じ上級悪魔だと？

そんな訳がないだろ？

いや、断じて認めやしない。

あの焼き鳥ライザーの方がマシだ。

アイツだって他人の力を借りたりはしなかった。

「っ!!」

ディオドラはゼロ距離で俺に魔力弾を放った。

前段命中した事に気分を良くしたのか、奴は途端に饒舌になる。

「ふっ……あはははははははっ!!あれだけ大口をたたいてもやっぱりその程度なんだよっ

!!誇りある上級悪魔に所詮転生悪魔が勝てる訳——」

グワシツ!!

が、ディオドラの言葉が続くことはなかった。

それは、煙の中から突き出た俺の手が奴の顔面を掴んでいたからだ。

「誇りある……? 馬鹿も休み休み言えよ」

対する俺は——無傷だ。

「何時までもふざけた寝言ほざいてんじやねえっ!!」

俺はそのままディオドラを地面に再び叩き付けると、そのまま投げ飛ばした！
奴は力なく再び壁に激突する。

—— ドライグ、いつちよここで実験するか。

『残酷だなあ。まあ、丁度良い実験台だからな。派手にやれ』

《Blade!》

俺はゼノヴィアから返却されたアスカロンの刃だけ出現させる。

「さあ……………振り切るぜっ!!」

《Engine!》

宝玉から響くのは、今までとは違う音声。

夏休みに開発して以来使うタイミングがなかったからな……………いい実験台になるぜ。

《Jet!》

「はあっ!!」

俺が左手を振るうと同時に——ディオドラの。右腕が宙を舞った!

と同時に、右腕があつた場所から鮮血が溢れ出す。

「……………ぎいやああああああああああああっ!!!
!!!」

「ディオドラは声にならない悲鳴を上げる。

「痛い……痛いよっ！」

「痛い？ そうだろ……だがなあ!!」

《Electric!》

俺はディオドラを今度は電撃を纏わせたアスカロンで一閃する!!

「アーシアはもつと痛かった! 辛かった! 友達だつて、テメエの身勝手な欲望のせいで出来なかつた!! アーシアだけじゃない! お前に落とされたシスター達もだ!! ——人の痛みも感じず!!! 人の絶望する様を嘲笑い!!! 痛みを理解せず、自分がされたら身勝手に喚き散らすテメエを!!! 俺は絶対に許さねえ!!!」

「ひっ!? く、来るなあ! 消えろおっ!」

「消えるのはテメエだああああああああつ!!!」

俺はドラゴンの翼を羽搏かせ、奴に接近する!

奴は最後の足掻きなのか、防御魔法陣を展開するが——

「そんな薄っぺらい壁ごときで……俺を止めれると思うなあああああつ!!!」

俺が力を籠めると、奴の魔法陣に亀裂が走っていく!

そして、呆気なく碎け散った!

こいつで最後だ!!

「受け取れっ!!消滅の龍波動ッ!!!」

振りかぶった拳から高濃度に圧縮したドラゴンショットを放つ!!

その一撃は逃げようとしたディオドラの左足に命中し、消し飛ばした!

「ッ!!!」

奴はあまりの痛みに失心するかのように倒れこんだ。

だが、その目から光は完全に消えていた。

「死んだのか?」

ゼノヴィアが俺に近づきながら尋ねてきた。

その手にはデュランダルが。

「いや、辛うじて生きてる。けど、殺しはしない」

「…何故だ?」

「此奴に死は生温過ぎる。此奴にはこれから、とことん絶望しながら生きてもらうさ。なに、サーゼクス様達も相応の罰を与えるだろうぜ」

「……そうか。だが」

「分かっている。此奴がまた俺達、アーシアの前に姿を見せたら」

「その時はまた、容赦なく叩きのめす」

そう気絶しているディオドラに吐き捨てると、俺達はアーシアのもとに向かった。

「イツセーさん……」

「ごめんな、アーシア……助けるのが遅れた」

「いいえ、イツセーさん達が助けに来るって、信じてましたから」

「そっか」

安堵したのか、アーシアは嬉し泣きをしていた。

……俺も、少しは成長したん、だよな？

『ああ。アーシア嬢はお前を信じていた。そしてお前はその信頼に応えた。これを成長してないで何と言う』

サンキュー、ドライグ。

一方、アーシアを装置から外そうと木場達が手探りに作業をし始めていた。

が、直ぐに木場の顔色が変わった。

「………手足の枷が、外れない」

…何!?

試しに俺が腕で引き裂こうとするも、装置はびくともしなかった。

極手でもダメなのか!?

一体どうなって……………!」

俺は気絶したディオドラのもとへ向かうと、奴を殴って強引に目を覚まさせた。

「せ、赤龍帝……………!?!」

「無駄口叩くな!あの装置はなんだ?どうやったら外せる?」

俺が尋ねるとディオドラは言葉少なく呟いた。

「…………あの装置は機能上、一度しか使えない。が、逆に一度使わないと停止できないようになっているんだ。——あれはアジアの能力が発動しない限り停止しない」

「続きを言え」

俺ががそう言うのと苦しそうにしながらもディオドラは答える。

「その装置は神器所有者が作り出した固有結界のひとつ。このフィールドを強固に包む結界もその者が作り出しているんだ。『絶霧』結界系神器の最強。所有者を中心に無限に展開する霧。そのなかに入ったすべての物体を封じること、異次元に送ることすらできる。それが禁手に至ったとき、所有者のすきな結界装置を霧から創りだせる能力に変化した。——『霧の中の理想郷』、創りだした結界は一度正式に発動しないと止めることはできない」

木場が厳しい表情ディオドラに聞いたです。

「発動条件と、この結界の能力は？」

「……発動の条件は僕か、他の関係者の起動合図、もしくは僕が倒されたら。結界の能力は——枷に繋いだ者、つまりはアーシアの神器能力を増幅させて反転させること」

——っ！

つまり回復の能力を反転させる。

それはつまり——。

木場はさらに問いだす。

「効果範囲は？」

「……このフィールドと、観戦室にいる者たちだよ」

その答えに全員が驚愕した。

アーシアの回復の応力は凄まじい。

それが増幅されて反転させられたら……っ！

「各勢力のトップ陣がすべて根こそぎやられるかもしれない……ッ!!」

マズいな……。

そんなことになれば、人間界も天界も冥界にも、世界中に影響が出る。

それを此奴等は、分かかって……!!

他の皆も装置に対して攻撃するも、それらは全く聞いていなかった。
どうすりゃ……このままじゃ！

——
そうだ。

俺は徐にアスカロンを取り出す。

他の皆は怪訝な顔だ。

「……………アシア。防御のために魔力で体を覆っておいて」

「…え？」

「良いから」

「は、はい！」

アシアの体を、薄い緑色の魔力が覆っていく。

よし、これなら大丈夫だろう。

「アーシア。……俺に命を、預けてくれるか?」

俺の一言と行動に、全員驚いたかのように目を見開いた。

何せ俺は今、アーシアに向けてアスカロンを振りかぶっているからだ。

「……はい。信じています!」

アーシアは迷う素振りを見せず、そう俺に返した。

「……ドライブ、行くぞ」

『了解』

《Electric!》

籠手から音声が流れると同時に、アスカロンの刀身に電撃が纏わる。

それを見た部長達は慌てて俺を止めようとする。

「イツセー!何をっ」

「——っ!!」

俺はアーシアに向けてアスカロンを——振り下ろした。

「——っ!!!?」

刀身は当たっていないものの電撃はアーシアの体に纏わり、一瞬強く震えたかと思う

と、アーシアは力なく倒れた。

「……………アーシア?」

ゼノヴィアが呟いたと同時に、装置は音を立てずに消滅した。

『相棒急げ!』

「ああ、分かっている!」

俺は素早く手元にいつもより小さ目なドラゴンショットを作り出す。

「放電する龍波動……………」
スパーク・ドラゴンショット

俺は動かなくなったアーシアの体に傷をつけぬよう、慎重にドラゴンショットを押し当てる。

「イツセー!お前は何をしてるんだツ!」

「ゼノヴィア、説明は後だ!小猫ちゃん、手伝ってくれ!」

小猫ちゃんは茫然としていたものの、俺の意図を察したのか、猫耳を出してくると、アーシアの手を握った。

それと同時に、白色のオーラ——仙術が発動した。

「……………まさか」

俺の目論見に気付いたのか、木場がハツとなった。

そして——

「……………う、ううん」

アジアが、ゆっくりと起きた。

それを見た俺は、安堵の息を吐いた。

「おはよう、アジア」

「イツセイさん……………」

ゼノヴィアは何が起こっているのかわからない様で、ポカーンとしていた。

「ゼノヴィア。イツセイ君はアジアさんを仮死状態にしたんだ。……………そうだろう？」

「ああ」

まあ、一か八かの賭けだったけどな。

「つまりな、あの装置の対象となっていてアジアの状態を死んでいるって誤認させれば解けるんじゃないかねーかなって思ってたよ」

「……………根拠がないのによく実践できましたね」

ははは、手厳しいな……………」

すると、ゼノヴィアはアジアに抱き着いた。

「アジアー！アジア！！……………アジアア！！」

「ぜ、ゼノヴィアさん……苦しいですよ」

と言いつつも、アーシアも頬を緩ませている。

「びえええええん!!よがっだですううう!!」

「泣き過ぎだつてギャー助……」

「ギャー君は、泣き虫……」

小猫ちゃん、君も眼が潤んでるぜ？

「部長さん、皆さん。ご迷惑をかけてすみませんでした」

「気にしないでよ、アーシアさん」

「そうですわ、アーシアちゃん。私達が助けたくて助けたんですから」

「そうよ。だからアーシアは何も気負わなくていいの。それと……」

部長がアーシアを抱きしめる。

「部長さん？」

「アーシア。そろそろ部長と呼ばなくても良いのよ？私にとって貴女は妹のような存在なのだから」

「——はいつ、リアスお姉様！」

部長とアーシアが抱き合っている。

感動のシーンだな！

『ま、一件落着だな』

そうだな。

「帰ろうか、アーシア。俺達の家に」

「はい！と、その前にお祈りを」

アーシアは天になにかを祈っている様子だった。

「何を祈ったんだ？」

尋ねるとアーシアは恥ずかしそうに言った。

「内緒です」

笑顔で俺のもとへ走り寄るアーシア。

うくん、気になるな……………。

——が、アーシアが俺の元に来る事はなかった。

突如現れた光の柱に、飲み込まれたのだ。

「……………アー、シア？」

イツセー side out

~~~~~

木場 side

一体何が起こったのか、分からなかった。

ディオドラ・アスタロトをイツセー君が打倒し、アーシアさんの救出が無事に終わり、この場から退避するはずだった。

でも——アーシアさんが消えていた事だけは、確かだった。

「霧使いめ、手を抜いたな。まさか赤龍帝ごときに破れる結界を創るとは……………計画の再

構築が必要だな」

「その通りだな」

……………聞き覚えのない声だ。

すると、僕達の前に現れたのは、二人の悪魔だ。

底冷えするかのようなオーラを身に纏っている……………彼等は一体？

「……………誰なの？」

「お初にお目にかかる、忌々しき偽りの魔王の妹よ。私は偉大なる真の魔王ベルゼブブの血を引く、正当なる後継者、シャルバ・ベルゼブブ」

「同じく、真の魔王アスモデウスの正当なる後継者、クルゼレイ・アスモデウスだ」

——旧ベルゼブブと旧アスモデウス！

ここに来て、まさかこの騒動の黒幕が出てくるなんて！

と、ディオドラ・アスタロトはシャルバ・ベルゼブブを見ると懇願しながら口を開いた。

「シ、シャルバ……………助けておくれ……………キミと一緒になら、こいつらを殺せる…旧魔王と現魔



王が力を合わせれば——」

が、その言葉は続くことなく、シャルバの手から放射した一撃がディオドラの胸を容赦なく貫いた。

「愚か者め。あの娘の神器の力まで教えてやったのに、モノにできずじまい。オーフィスの『蛇』を使ったにもかかわらずあの無様な戦い方……たかが知れているというもの」  
嘲笑い、吐き捨てるようにシャルバは言う。

ディオドラは床に突っ伏すことなく、チリと化して消えていった。

あれは——光の力か？

『禍の団』は三大勢力の不穏分子が集まっていると聞く。

光を扱う天使や墮天使の協力者から何か提供があったと見るべきだろう…。

「さて、サーゼクスの妹君。突然で悪いが、貴公には死んでもらう。理由は言わずとも分かるであろう？」

「サーゼクス様の妹、だから？」

シャルバが冷淡な声でそう語る。

よほど現魔王に恨みがあるのだろう。

主張と家柄、魔王の座を取り上げられたことを深く恨んでいるようだ。

シャルバは目を細めながら口を開いた。

「その通りだ。不愉快極まりないのだよ。我ら真の血統が、貴公ら現魔王の血族に『旧』などと言われるのは耐えがたいことなのだ。故に我らは現魔王の血族を滅ぼすことにしたのだ。——サーゼクスの妹よ、死んでくれたまえ」

「……………その前に聞かせてちょうだい。アーシアをどうしたの？」

ゴウツと部長の周りを紅い魔力が覆っていく。

声も冷徹さを醸し出すものだ。

クルゼレイはそんな部長の様子を意に返さず、言葉を紡いだ。

「ああ、あの堕ちた聖女か。あの者は私が次元の彼方に送った。——死んだ、ということだ」

「そう。なら——」

部長はカツと目を見開いた！

その瞳に彩られた感情は——怒りだ。

「貴方達を消し飛ばすのに、十分な理由だわ。……………私の可愛い下僕に手を出したこと、万死に値するッ!!」

部長の言葉に——僕達も戦闘態勢に入る！

そうさ………アーシアさんは漸く自分の過去とケリをつけれたんだ！  
僕達や、イツセー君と、改めて歩んでいこうとした矢先なんだっ！

それを、テロだなんて身勝手な理由で、此奴等は………っ!!!

「………殺してやるっ、斬り殺してやるっ!!!」

ゼノヴィアは涙を流しながら、今にも旧魔王派へと斬りかかろうとする。

けど、僕等は何か違和感を感じた。

イツセー君だ。

何時もの彼なら、いの一番に飛び出すはずだけど………と思い、イツセー君を振り返ると………

「……………」

———イツセー君は、ピクリとも動いていなかった。

放心したかのように、微動だにしていなかった。

が、それも束の間だった。

イツセー君は顔を上げると、シャルバ達に向かって覚束ない足取りで一人で歩いて行った。

『リアス・グレモリーよ』

その時、イツセー君の赤龍帝の籠手の宝玉が点滅し、声が響いた。

—— ドライグだ。

「ドライグ？」

『今すぐ眷属共々、ここから離れることを進める。でなければ、見たくないものを見てしまっぞ』

「どう言う………」

『その悪魔よ』

ドライグは部長の質問を無視して、今度はシャルバにその声を向けた。

『お前が何者かはどうでも良い。だがひとつ言っておく。—— お前は選択を、誤った』

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ  
!!!!!!

な、何だ!?

この殺意と絶望に満ちたオーラは!?

イツセー君を中心に赤い、否、赤黒いオーラが渦巻いていた！  
それを見ていたシャルバは顔を歪める。

「——ツ!？」

「イツセー!どうしたと言うの!？」

部長が必死に呼びかけるも、イツセー君には届いていないのか、此方を一切振り向かない。  
ない。

やがてイツセー君が口を開いたのと同時に、鎧が纏われた。

が、その声音は、イツセー君のものとは思えないほど低く、絶望に満ちたものだった。

「我、目覚めるは——」  
〈始まったよ〉〈始まってしまっうね〉

イツセー君だけじゃない、老若男女入り混じった声が聞こえた。

「覇の理を神より奪いし二天龍なり——」  
〈何時だってそうだった〉〈何時だってそうじゃった〉

言葉が紡がれていく度に、鎧の形状も変わっていった。

「無限を噛み、夢幻を憂う——」  
〈世界が求めるのは〉〈世界が否定するのは〉

鎧は極手の時以上に鋭く、生物的になり、腕や脚が肥大化していく。

「我、赤き龍の霸王となりて——」

〈何時だつて力でした〉〈何時だつて愛でした〉

更に、全身に薄暗い銀色が差し込み、手足の装甲、兜に金色の装飾が出現する。

『相棒。俺は……お前にだけはこの力に到達してほしくなかった。だが、お前が望むなら俺は見守るだけだ……ふあが、何でかな。こんなに悲しいのはよ』

そう呟いたドライグの声はかき消された。

〈何度でもお前たちは滅びを選択するのだなっ!!!〉

「汝を紅蓮の煉獄と深淵なる絶望へと鎮めよう——」

そしてその瞳は、何処までも薄暗い——赤色だった。

ジャガーノート・ファントム・ドライブ  
「幻 覇 龍」

《J u g g e r n a u t P h a n t o m D r i v e  
!!!!!!!  
》

そこにいたのは——ファントムのような、一体のドラゴンだった。



## MAGIC58 『絶望の嘆き・希望の凱旋』

アザゼル side

俺——アザゼルはレーティングゲームのバトルフィールドだった神殿の外にて旧魔王派の悪魔共をある程度片付けていた。

これに関してはイッセーの使い魔のティアマットや元龍王のタンニンが協力してくれたお陰で比較的スムーズに事が進んだ。

まあ後は部下達やタンニンの眷属だけで十分だろう。

「……………む、この気配は」

「まさか……………奴が…」

二人が何かを確信したかのように呟いた時、ファープニルを宿した宝玉が光り輝いた。

と同時に、フィールドの隅っこに人影が現れた。宝玉は更に輝きを増した。

——まさか、お前自身が出張してくるとはな。

そこにいたのは、全身真っ黒な少女。

顔付きは端正だが、その視線はフィールドに存在するいくつもの神殿へとむけられていた。

少女は俺達の気配を察知したのか、こちらへと顔を向けた。

そして、薄く笑った。

「アザゼル、ティアマツト、タンニーン。久しい」

「以前あった時はじじいの姿だつてのに今度はロリツ娘とはな。恐れ入るぜ——何しに来やがった。オーフィス」

——『無限の龍神』・オーフィス。  
ウロボロス・ドラゴン

現在交戦中の『禍の団』のトップを務めるドラゴンだ。

「見学。ただそれだけ」

「高みの見物つて訳か。それにしてもここでボスが現れるなんてな。……ここでお前を倒せば一件落着か？」

俺は苦笑しながら光の槍の切っ先を向ける。

二体のドラゴンも臨戦態勢に入るが、奴は首を横に振った。

「無理。アザゼル達に我は倒せない」

だろうな。バツサリ言ってくれるぜ。

「ならば、私も加わったらどうだろうか？」

「……………お前が加わるか。」

「サーゼクス」

「遅れてすまない、アザゼル」

魔王サーゼクスの登場だ。

後ろにはグレイフィアも待機している。

「オーフィス。あれ程まで静観を決め込んでいたお前が、テロ組織を結成してまで動き出す理由は何だ？」

「暇つぶし——何てありがたいかな理由はやめてくれよ。お前の行為で出た被害はもう無視できるレベルじゃないんだよ」

そう、此奴がトップに立って力を与えた結果、各勢力に被害をもたらししている。

死傷者だって日に日に増える一方だ。

だが、そのオーフィス自身の答えは予想外だった。

「……………静寂な世界」

……………は？

「故郷である次元の狭間に戻り、静寂を得たい。ただそれだけ」

——つ。

「懐郷病と普通ならば言うところだろうが……あそこには確か」

タンニーンの言葉に、オーフィスは頷いた。

「そう。グレートレッドがいる」

次元の狭間は現在、奴が支配している。

成程な、奴をどうにかしたいが為に立ち上げた——いや、そう願ったオーフィス

と口実をつけて、奴らはくつついてきた訳か。

……とは言え、こうも静かだっということはまさか。

「旧ベルゼブと旧アスモデウスは、イツセー達の方に向かったわけか……」

となれば、ここで勝てる見込みのない此奴と駄弁り合っても仕方ねえ。

俺とサーゼクス達は即座にイツセー達の元に向かおうとした——が。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

突如として発生した地響きにより、俺達は動きを止めざるを得なかった。

何だ、一体……!?

が、俺達は言葉を失った。

轟音が響いた方角を見ると、異質なほどの魔力の柱が立ち上っていたからだ。

「アザゼル、あの方角は……」

「ああ。あつちには——」

イツセー達がいる神殿の最奥部だ。

やべえな、事が大きくなる前に向かわねえと!

「——イツセー?」

と、ここでオフィスは、イツセーの名を呟いた。

その声音には、隠し切れないほどの懐かしさが込められていた………つて、待て。

——此奴、何でイツセーを知ってやがる?

「オフィス、何でお前——」

「アザゼル。我、用事が出来た」

「っ、おいー！」

俺が止める暇もなく、オーフィスは姿を消した。

「アザゼル。今はオーフィスは放つておいて構わないだろう。今はこの魔力の正体――

――イツセーの方が優先だ」

ティアマットの言うとおりだ。

この異質な魔力の持ち主は、イツセー以外に知らねえ。

「イツセー様……………」

「…………急ごう」

サーゼクスの言葉により、俺達は頷きその場を後にした。

アザゼルス i d e o u t

木場 s i d e

イツセー君がファントムの様なドラゴンの姿になって、僕等がいた神殿は瞬く間に崩壊した。

瞬時に部長がこの場から一旦離れるように指示したお陰で僕達には被害はない。

そして、神殿の跡地は、凄惨な現場になっていた。

「グルルルルルルル………ッ!!」

イツセー君の肥大化した腕の下には、ペシャンコになったクルゼレイ・アスモデウスだった者がいた。

あの姿になったイツセー君は即座に動き、クルゼレイ・アスモデウスを頭から押し潰した——所謂、圧殺だ。

「なっ……クルゼレイもまたオーフィスの蛇をもらって、前魔王レベルまで力が上がったのだぞ?!それを一瞬で………この化け物が——」

ビュッ!!

イツセー君が風を切る音と共に羽ばたき、一瞬でシャルバの元に到達すると、肩を噛み千切った!

何てスピードだ!肉眼では追いきれない!!

「っ!!おのれっ!!」

シャルバが右腕で光の剣を作り出すも、イツセー君は右腕の手刀で地面ごとシャルバの腕を切り裂いた!





i d!!!  
!!!

半減を告げる音声が鳴り響き、シャルバが放とうとしていた光の波動が半分——  
さらに半分と縮小していき、遂には消え去った！

あれはイツセー君が奪った、ヴァーリの力だ！

「おのれ……………何処までも私の前に立ちはだかるか!!ヴァーリイイイイツ!!!」

次にシャルバが放ったのは魔力による攻撃だ！

極太の波動だ！流石のイツセー君もあれを食らったら——

「ぐうああああああああああっ!!!」

だが、イツセー君は今の一撃を咆哮ロウだけでかき消した!!

「ば、バカな……………!?これが本当に『ジャガーノート・ドライブ覇 龍』だと言うのか!?データ上の物とはまる

で力が違うではないか!!」

シャルバの声には恐怖の感情が生まれていた。

その瞳は完全にイツセー君を完全に畏怖の対象として見ていた。

僕達は——呆然とするしかなかった。

部長や他の皆、それに僕自身も、体の震えが止まらなかつた。

精神の底から絶望させられそうなほどのオーラ——今のイツセー君からはそれ

がありありと感じられた。

「ぐ、ううううあああああああああああああ!!!」

イツセー君が吠えると、鎧の胸部分が開き、そこから何と、

ボゴンツ!!グチュアツ!!!

「ヴヴヴヴううう……………!!!」

『……………ツ!!』

全員が目を逸らしたくなった。

何故なら、その部分からは、新しいドラゴンの顔が生まれていたからだ。

だが、その口元にはどす黒いまでの魔力がチャージされていくことに気付いたシャルバは足元に魔方陣を展開した。

「ちっ！私はこんなことで死ぬ訳には……………!!」

が、新たにシャルバを囲う様に四つの魔方陣が現れ、イツセー君が目を赤く煌かせた瞬間、魔方陣から鎖が出現し、シャルバを縛り上げた！

「なっ——」



神殿の跡地に響く、倍加の音声。

そしてチャージが完了したドラゴンの口腔から、赤いオーラが放たれる!!

不味い!この威力だと、僕達まで——!!!

だかもつと離れようとする前にその一撃が放たれ、シャルバはその奔流になすすべなく飲まれていく!

僕は咄嗟に聖魔剣で防壁を作り出し、何とかその余波を凌ごうとした!

「ば、バカな………真なる血族であるこの私が!!ヴァーリにすらまだ一泡吹かせていないのだぞ!?!おのれ!赤い龍!白い龍——ツ!!!」

放射された光に飲まれ、シャルバは跡形もなく裂を消した——。

「——ツ!!!」

その余波は凄まじく!聖魔剣のシエルターが次々と破壊されていく!くっ!!

が、最後の砦が破壊されるか否かのところで、その余波は収まった。僕は剣を開放して全員で外の様子を確認する。

「…っ」

神殿はもはや原型が残っておらず、僅かに残った瓦礫が辛うじて神殿があったことを物語っていた。

これが、赤龍帝の真の力なのか……………。

「ぐおおおおおおおおおん……………」

イツセー君は暴れる様なことはせず、天に向かって吠え続けていた。

…………自我を失つても、アーシアさんを失った悲しみだけは残っているんだ。戦いは終わったんだ…………でも、どうしたら、イツセー君は元に戻るんだ？

「困っているようだな」

——つ、この声は。

全員が声をした方を振り向くと、空間に裂け目が生まれそこから現れたのは——  
ヴァーリだ。

それと後ろには、恐らく孫悟空の末裔、そして見慣れない男性だった。

——多分、イツセー君が出会ったと言う聖王剣コールブランドの所有者だろう。

「ヴァーリ……」

部長の一言に、僕達は臨戦態勢に入る。

が、彼等からは敵意が感じられなかった。

「戦いに来たわけじゃない。美猴」

「はいよ」

ヴァーリに呼ばれた美猴の腕には、見知った女の子が抱えられていた。

「この嬢ちゃん。お前らんとこの眷属だろ？」

——アーシアさんだ！

「アーシア（ちゃん／さん／先輩）!!」

全員がアーシアさんの元に近づく！

「安心しろよ。氣い失ってるだけだからよ。外傷もないしな」

美猴の一言に全員が涙ぐんだ。

僕もこみ上げてくるものがあった。

……本当に良かった！

「だけど、どうやって……」

「私たちが偶然次元の狭間を探索していた時に丁度飛んできたのですよ。ヴァーリが見覚えがあると行ってここまで連れてきたのです。運が良かったですね。私たちが偶然その場に居合わせなかったら、この少女は次元の狭間の『無』に充てられて、消滅するところでした」

僕の疑問にコールブランドの持ち主がそう答えた。

成程、そういう理由だったのか……。

「うわああああああんっ!!」

ゼノヴィアは安堵のあまりその場に座って泣きじやくってしまった。

僕がアーシアさんを彼女の元に下すと、アーシアさんを大事そうに抱きかかえ、笑顔になった。

「後は——」

部長が目線をイツセー君の元へと向けた。

ヴァーリもそちらを見ると、訝しげに目を細めた。

「どうやら、中途半端に覇龍化したらしいな。あの状態だと生命力を枯らして死ぬな」

「……元に戻るの?」

部長の問いに、ヴァーリは難しげな顔を浮かべた。

「中途半端な状態ならば、可能性はゼロではない。——ん、どうしたアルビオン?」

すると、ヴァーリの背中に光翼が現れた。

「何だあの力は……!?あの力は本当に、『覇龍』なのか……?」

「どういう事だ、アルビオン?」

『あの姿は——私の知っているドライグの覇龍ではない』

——っ!?

あれ程の力を誇っていても、本物の赤龍帝じゃないというのか!?

「だが、根本の力は同じな筈だ……………ふむ」

するとヴァーリは空中に飛び上がり、

《Vanishing Dragon Balance Breaker!!!》

白い鎧を纏った!

「一体何を!？」

「まあ……………ただの気まぐれ行為だと思ってくれ」

部長にそう返すと、ヴァーリはイツセー君目掛けて飛び出した!

『ヴァーリ、何をするつもりだ』

「奴の力を抑えるのさ」

『白龍皇の光翼は、対象者の体に触れねばならない。だが、あの状態の赤龍帝に触れるの

は、自殺行為だぞ』

「分かっているさ。だから目には目を——龍には龍さ」

ヴァーリはアルビオンとの会話を打ち切ると、拳を天に掲げた!

「我、目覚めるは——」



〈消し飛ぶよっ!〉〈消し飛ぶねっ!〉

——っ!その呪文は!?

イツセー君の時と同様に、ヴァーリの声のほかにも老若男女様々な声が入り混じる。そしてその声音には——凄まじいほどの怨念が込められていた。

「覇の理に全てを奪われし二天龍なり——」

〈夢が終わるっ!〉〈幻が始まるっ!〉

鎧の形状が変化していき、生物的なフォルムへと変わっていく。

「無限を妬み、夢幻を想う——」

〈全部だっ!〉〈そう、全てを捧げろっ!〉

その体躯は普通のヴァーリ以上の大きさへと変化していく。

「我、白き龍の覇道を極め——」

輝かしいまでの城のオーラが放たれ、

「汝を無垢の極限へと誘おう——」

『ジャガーノート・ドライブ 覇 龍』!!

《Juggernaut Drive》  
!!!!!!

そこにいたのは、圧倒的なまでのドラゴンのオーラを滾らせる、ヴァーリの姿だった。

——でも、何故だろうか。

彼からは、イツセー君ほどの深い絶望のオーラを感じない。

響いていた声からはあれほどの怨念に塗れていたというのに……。

イツセー君は近づいて来たヴァーリに気が付き、臨戦態勢に入った。

ヴァーリは巨大な魔力弾を両手に生成して撃ち放つが、イツセー君は当たる直前に――

姿を消した！

「ツー」

これにはヴァーリも僅かに驚きを見せた！

完全に姿が消えている……おまけに気配も。

ヴァーリが周囲を警戒しているその一瞬の間――何もない筈の虚空からイツ

セー君が姿を現し、拳を振りかぶった！

「グウツ!!」

完全に虚を突かれたヴァーリはこれを諸に食らい、地面に叩き落される！

イツセー君はヴァーリに追い打ちをかけるかのように腕を巨大化させ地面に蹲って

いるヴァーリ目掛けて振り下ろした！

「ふん！」

ヴァーリはそれを躲して複雑な軌道を描きながら、イツセー君に肉薄する！

「さあ、これで条件は整った——っ!!」

が、イツセー君の背後に魔方陣が現れたかと思うと、イツセー君は一瞬で姿を消した。

かと思うと——

「がっ!!」

今度は右側から何者かがヴァーリを殴りつけた！

その正体は——ッ!?

「な、んだと……?!」

そこにいたのは、先程とは異なり全身の鎧が青く染まったイツセー君だった。

『ヴァーリ！背後だ！』

「っ!!」

が、今度はヴァーリの背後から火炎放射が放たれた！

それを躲したヴァーリの目線の先には——先程までいた、赤い鎧のイツセー君だ

！

「何がどうなって——ぐあああああつ!!」

今度は落雷!?

堪らず落下していくヴァーリに高速で近づくとそれは、まるで緑色の竜巻だった。

緑色の赤龍帝………と言う事は、まさか!?

「ぐ、う………つ!!」

空中で踏ん張るヴァーリにイツセー君は高速の一撃を与え、ヴァーリの鎧に傷を与えていく!

腕に風を収束させそれをヴァーリにぶつけ、ヴァーリを落下させる!

そして——僕の予感は当たった。

ドゴオオオンツ!!

「ちっ!!」

落下地点の大地を砕き現れたのは、黄色い鎧姿のイツセー君だ。

ヴァーリもそれを予想していたのか、空中で無理やり軌道を変えて彼の両腕の一撃を

逃れた。

間違いない、あれは――

「ウイザードの、力だ……………ッ!!」

そう、イツセー君が以前手に入れた分身殺法――確かドラゴタイマーによる力だ。

つまり、目の前にいるのは、暴走状態のイツセー君四人と言う事だ!

「……………兵藤一誠が四人、か。少し不味いな」

ヴァーリにしては珍しく弱気な発言だ。

どういう事だろうか…………。

「ぐおおおおおんっ!!!」

「!!ぐっ!!!」

まず黄色の赤龍帝が力強く吠えたかと思うと、ヴァーリは何か耐えるように膝をついた!

「……………重力の、咆哮かっ!!」

そして、動けないヴァーリに追い打ちをかけるかのように、彼の四肢が凍り付いてい

く！

この二つはイツセー君が使ってた魔法だ！

そして、動けないヴァーリの頭上から落雷が降り注いだ！

《Divide Divide Divide Divide Divide!》

が、ヴァーリは落雷を半減の力で弱体化させるとそれを口から放った魔力弾で相殺した。

「ぐうううううう!!」

「——っ!!」

今度は赤い鎧のイツセー君が腕を異常なほどに巨大化させて、ヴァーリを鷲掴みにした！

そしてそのまま、縦横無尽に地面に叩きつけた！

「ぐううううう!!」

空中へと投げ出されたヴァーリを、イツセー君達は停止能力だ停めた！

「おいおい、流石にヤバイぜっ!」

「四人分の停止能力では、ヴァーリと言えども解除ができませんね」

確かに。

ギヤスパー君ならまだしも、今のイツセー君が使えば解除するのは難しい筈だ！

その証拠に今のヴァーリは完全に停止している状態だ！

その間に四人の赤龍帝は胸部分からドラゴンの顔、尾、翼、両腕の爪を肥大化させ、動けないヴァーリに標準を定める!!

「「ぐうおおおおお!!」」

まずは赤色の赤龍帝が先程より威力が落ちた一撃を放ち、鎧が砕けたところに青色の赤龍帝が冷気を帯びた尾を叩き付ける！

「——ッ!!!」

『ヴァーリ……この場から離脱しろっ……このままでは——』

叩き付けられた衝撃か、漸く動けるようになってきたヴァーリだが、その鎧姿は以前見た禁手のと同じだった。

まさか、覇龍が解除されたのか!?

が、理性を失ったイツセー君は、そんなヴァーリのお構いなしに緑色の旋風を纏い突貫する！

その速さはまさに一陣の風と表現するに相応しいスピードで、瞬く間にヴァーリを切り刻んだ!!

「ぐあああああああ——ッ!!!」

そしてとどめと言わんばかりに黄色の赤龍帝が両爪を大地ごと切り裂いて衝撃波を

ぶつける——その時だった！

『——っ!?!』

一瞬、青い光が横切ったかと思うと、次に気づいた時にはヴァーリはそこにおらず、赤龍帝の一撃は空を切った！

それと同時に各色の赤龍帝も消失した。

な、何だ!?

「ふー、一時は如何なる事かと思っただぜい」

「しかし、相変わらずの速さですね」

美猴達は知っているようだ………つと思っていると、僕らの目の前に、傷だらけのヴァーリが降り立った。

そしてその横にいたのは——

「情けない有様だな。ヴァーリ」

「…助かったよ、カイト」

全身から青白い光を放つ、ドラゴンを思わせる鎧を纏った男性だった。

「……そんな状態ではロクに動けまい」



男性は液体の入った瓶を取り出すと、その中身をヴァーリに振りかけた。すると、みるみるヴァーリの傷が回復していった。

フェニックスの涙だ。

「……予想以上だ」

ヴァーリがポツリと、呟いた。

歴代最強の白龍皇と謳われた彼をもつてしても、今のイツセイ君を止められないなんて………！

だけど、そんなヴァーリですら敵わなかった僕達が、イツセイ君を止めることはできない………僕達はその事実にも、ただ歯噛みした。

そんな時だった。

「ヴァーリ、随分ポロポロ」

黒い衣装に身を包んだ女の子が、僕達の前に現れたんだ。

この子は一体………？

「……まさか君が来るとはね。オーフィス」

—— ツ!?

オーフィス…… 『禍の団』のトップと言われる、伝説のドラゴン!?

何故ここに!?

「おいお前ら! 無事か!?

「……アザゼル! お兄様!」

それを追いかけるようにして、アザゼル先生、魔王サーゼクス様やタンニン様たちも現れた!

「—— つ。おいおい、イツセーの奴、『覇龍』を発動したのか?」

「……アーシアさんを殺されたと思って、それが引き金になったんだと思います」

「そうか……」

アザゼル先生がそう呟いた時だった。

「あれ、通常の覇龍ではない」

オーフィスがそれを否定した。

「……どういう意味だ、オーフィス?」

「あの覇龍、確かに歴代赤龍帝の怨念、感じる。でもそれ以上に、イツセーの絶望の心、大きい」

『やはり、あの覇龍は……………』

「そう。ドライグとは違うドラゴンの力、今のイツセーに作用している」

ドライグじゃない別のドラゴン……………？

どういう事だ？

「それは兎も角だ。今のイツセーを直す手立てはあるのか？」

「白龍皇の小僧ですら太刀打ちできなかつたのだろう？それにあの力……………俺やティアマツトですら対処は難しいぞ」

「龍王二人ですらお手上げなのかよ……………」

美猴がげんなりとした様子で呟いた時だった。

「我、イツセーを止めてみる」

オーフィスがそう名乗りを上げた——つて！

「オーフィス、それはどういう意味か分かつて言ってるのか？お前はあいつと敵対している組織の親玉なんだぞ？」

アザゼル先生が厳しい表情で問いかける。

が、オーフィスは構わずに向かおうとする。



激しく悶えだしたイツセー君！

と、そんなイツセー君に、グレイファイアさんが近づいた。

「そうです、イツセー様」

「っ、グレイファイア!?!」

部長が驚いているが、グレイファイアさんは構わずに、イツセー君に呼び掛ける。

「アーシア様は生きています！戦うべき敵も、もういないのです!!だから………戻ってきて、イツセーツ!!!」

「———っ!———ぐ、グレイ、ファイア………」

今のは……イツセー君の声だ!!

今のイツセー君に、声が届くのなら………!!

僕達は駆け出した!

「イツセー!戻ってきなさい!」

「また皆で、たくさん部活動をしましょう!!」

「そうだぞイツセー!私との子作りだって、まだ済んでいないじゃないか!!」

「……先輩がいないと、寂しいんです。だから、戻ってきてください!!」

「イツセー君！また君とドライブグの漫才を、見せてくれよ!!」

「イツセー先輩!!フアイト一発ですううう!!」

「イツセー！私が選んだ男だ：その怨念に打ち勝ってみろ!!」

リアス部長が、朱乃さんが、ゼノヴィアが、小猫ちゃんが、僕が、ギヤスパー君が、テイアマットが叫んだ声は、イツセー君に――

「み、んな――」

――届いた。

そう実感したと同時に、イツセー君を包んでいた鎧が、崩壊していく。

倒れこんだイツセー君を、一番近くにいたグレイファイアさんが受け止めた。

「……………お帰りなさい、イツセー様」

「……………」

気を失っていたイツセー君の顔は、安堵に包まれていた。

木場 side out

~~~~~

イツセー side

.....んあ？俺は、一体……

「イツセー、起きた」

目を覚ました俺に視界に映り込んでいたのは……！！?

「オーフィス……!!」

「久しい、イツセー」

オーフィスは俺の胸に抱き着いた。

「……イツセー、前より大きく、強くなった。とても遅しい」

「ま、まあ……あん時は小学生だったし」

どこか嬉しそうに言うオーフィス……：「そーいや結構甘えん坊だったな。父さんや母さんにも甘えてたし。」

『イツセー（君／先輩／様）!!』

「うおっ!?……皆!」

振り向けば、全員が目には涙を浮かべていた。

……：「また、心配かけちゃったな。」

『よお相棒』

ドライブ……：「お前にも、随分迷惑かけちゃったな。」

『何だらしくないセリフ吐きやがって』

うるせっ!……：「だけど、お前の声も、聞こえてた。」

真黒なものに飲まれそうな瞬間にな。

『忘れろ! あんなの俺のキャラじゃねーよ!』

ハハハ、照れてやんの!……：「ん?」

「やあ、兵藤一誠」

「……ヴァーリ」

何で此奴がここにいんだ？

「イツセー君。彼らが、アーシアさんを助けてくれたんだ」

「——っ。……そっか。サンキューな」

「気にするな。ただの気まぐれだよ」

「……随分迷惑かけちまったみてーだな」

「何、随分と刺激的だったさ」

「さいですか。」

「まあ、それは兎も角だ……」

「そっぴや何してんだ。お前らこんな所で」

「……この場所に俺の見たいものが現れるんだ」

「見たいもの？」

空を見上げたヴァーリに倣って、俺も空を見上げる。

バチッ！バチッ！

空中に巨大な穴が開いていく。

そして、そこから何かが姿を現した。

「あれは——」

そこから出現したものを、俺は驚いて口が開きっぱなしになっていた。

他の皆も同様だった。

「よく見ておけ、兵藤一誠。あれが俺が見たかったものだ」

空中に現れたのは真紅の巨大なドラゴン。

……でええええええ!!

ドライグやドラゴンの倍以上はあるぞ、あのドラゴン!!

『赤い龍』と呼ばれるドラゴンは二体いる。ひとつは君に宿るウェールズの古のドラゴン、ウエルシユ・ドラゴン。俺に宿るバニシング・ドラゴンも同じ伝承から出てきている。そして、もうひとつは『黙示録』に記されし、赤いドラゴンだ」

「黙示録？」

ドラゴニック・オーバーロード………ではないな、うん。

『真なる赤龍神帝』グレートレッド。『真龍』——『D×D』^{ドラゴン、オヴ、ドラゴン}と称される偉大なド

ラゴンだ。自ら次元の狭間に住み、永遠にそこを飛び続けている。今回、俺はあれを確認するためにここへ来た」

『D×D』……………真龍……………。

「あれが、オーフィスの目的であり、俺の目標でもある」

「目標？」

「俺はいつか、グレートレッドを倒す。そして、『真なる白龍神皇』になりたいんだ。赤の最上位がいるのに白だけ一步前止まりでは格好がつかないだろう？」

ヴァーリは苦笑しながら夢を語った。

笑ってはいるけど、目はとても真剣なものだ。

「——ははっ。とんでもなくデカイ目標だな」

「だろう？だがそれには先ず、君と戦って、勝利を得なくてはならない。俺のこの挑戦、受けてくれるかい？」

成程。此奴がテロ組織に身を置いた訳も理解できた。

「時と場合を考えてくれたら、何時でも受けてやんよ」

「ありがとう、兵藤一誠」

俺の差し出した拳に自らのそれを合わせるヴァーリ。

……………俺の胸にはオーフィスがしがみ付いていて、カッコ付かないけどな！


~~~~~

Epilogue

それから二日後。

ばーん！ばーん！

空砲が空に鳴り響き、プログラムを告げる放送案内がグラウンドにこだまする。

『次は二人三脚です。参加する皆さんはスタート位置にお並びください』

そう、今日は体育祭の日だ。

そして、今から俺とアーシアが出場する二人三脚が始まろうとしていた。

俺は自分とアーシアの足首のひもをぎゅつと縛る。

「これで準備は万端だ。いつでもいいから」

「はい！頑張りますよ！」

「おう！」

俺達は気合を入れてスタートの位置に立った。

パンツ！

空砲が鳴り響き、俺達はスタートを切る！

「せーの、いち、に！いち、に！」

二人の声を合わせて走り出す。

うん、良いスタートだ。

二人の呼吸がピツタリ合ってる！

このまま行くぜ！

「イツセー！ アーシア！ 一番取りなさい！」

「いけますわよ！」

部長や朱乃さん、他の部員の皆が応援をくれる！

他にも――

「負けたら承知しないからな、イツセー！」

「頑張れ〜！アーシアちゃん、イツセーく〜ん☆」

「おとおつし！イツセー、アーシアちゃん！きばれええええ!!」

ティア、セラフォル様、おつちゃんもエールを送る！

おつちゃん、キャラが変わってるよ……………。

「フアイトだ、二人とも！」

「もう少しですよ！イツセー様、アーシア様！」

サーゼクス様、グレイフィアさんも、エールを送ってくれる！

「いっちに！いっちに！」

ゴールが間近になった時、俺はアーシアに語り掛けた。

「アーシア、改めて約束するよ。例えどんな事があっても、俺は絶対にアーシアの味方であり、希望であり続ける」

「——っ」

その言葉に、アーシアは僅かに涙を浮かべていた。

が、それを堪えて、ゴールテープ目掛けて足を延ばす！



そして――

「よっしやああああ!!」

俺達はゴールテープを切った!

「やったなアーシア!一位だぜ!!」

「はい!練習の成果が出せました!!」

俺とアーシアら手を取り合って喜んだ!

そりゃ、今までの練習の成果を出せたんだ!嬉しいに決まってる!

フラッ………

「おっと…」

頭に熱が来すぎたのか、俺は僅かにふらつく。

そういや病み上がりだったっけな、ハハハ………。

「イツセーさん、大丈夫ですか!」

体勢を崩す俺をアーシアが支えてくれた。

「ああ、ちよつと疲れただけだよ」

と、そこへ部長がやってきた。

部長は笑顔で体育館を指さした。

「アーシア、体育館なら人気もないし、神器で回復してあげなさい」

「は、はい！」

はは、なっさけねなあ……………。

と、部長の横を通り過ぎようとした時だった。

「頑張りなさい、アーシア」

「——っ」

ん？何を頑張るんだ？

んで何でアーシアは頬を赤く染めてるんだ？

まあそんなこんなで体育館に移動し、俺はアーシアに神器で回復してもらった。

……………うっし！力が漲ってきたぜ！

「よーし！これなら残りのプログラムも余裕だぜ！！」

「——イツセーさん」

「ん？何だアーシア——」

アーシアに呼ばれ、振り返ると——俺に唇に、アーシアの唇が重なった。



The Next Chapter Introduction

「糞が……………糞が……………糞があああああつ!!!」

苛立ちを寄せる幻魔の不死鳥。

「貴殿も、悪魔らしくすればいい……………己の欲に忠実に、ね」

不死鳥を破滅へ導きし、新たな幻魔——

「俺は……………自分の事さえ、信じられないのに」

少年は、己の胸中を吐露する。

「俺は諦めが悪いんでな……………もう二度と、あんな悲劇は繰り返させない!!!」  
《ファイナルタイム!》

過去の迷宮から漸く光を見出した彼は、諸刃の希望に身を委ねる。

——リミッター解除して、闇に立ち向かえ——

第7章：放課後のラグナロク／オールドラゴン

MAGIC番外編『幼児退行といっても別に薬を無理矢理飲まされたわけじゃない（ある意味似てるけど）』

よー皆、イツセーだ。

さて、俺は今何故か大変な事態に陥っています。

「あの、部長、アーシア……何すか、この術式」

俺は現在リアス部長とアーシアに頼まれ自室の中央に座っていた。

そして俺の足元には——何やら魔方陣が。

……………俺、何かしたっけか？

心配かけたと言えばまあそうだけど……………。

「大丈夫よイツセー。害は何一つないから……さ、行くわよアーシア」

「はいーリアスお姉さまー！」

「はあ……………」

とは言え、何をされるのやら……………まあ、危険な術式ではないだろう。

俺は腹を括って目を閉じた。

「はっ!!」

魔方阵から光が発せられ俺を包み込んだ。

そこで俺の意識は——途絶えた。

イツセーside out

リアスside

私とアーシアはイツセーにある術式をかけた。

と言つても、そんなに危険な術式ではない。

それは、対象者を幼児化させる術だ。

以前、茂さんから見せられた幼い時のイツセーの写真を見てから、私とアーシアは小さい時のイツセーに関心があつたの。

そこで今回、その術の習得に成功したので、アーシアと二人がかりで掛けるというこ

とになったのだ。

小さい時のイツセーは写真を見た時からずっと可愛いと思っていたから……成功し  
たら、いっぱい抱き締めちゃうかも。

それはアーシアも同じ気持ちらしく、目には隠し切れない期待で満ちていた。  
光が止むと、そこにいたのは――

「……………んん？」

身長が一回りほど小さくなったイツセー――と言う事は！

「やったわアーシア！」

「はい、成功です！」

私とアーシアは手を取り合って喜んだ！

そして小さくなったイツセーはキョロキョロと辺りを見渡している。

普段の軽そうな中にある勇ましさがなく、まさに子供といった感じのイツセー。

……うん！やっぱ写真で見ただより可愛いわ!!



「イツセー!」

「イツセーさん!」

私とアーシアが近づいた瞬間だった。

バツ!

「……………へ?」

イツセーはそんな私達から素早く距離をとった。

そして左手には赤龍帝の籠手……………つて、え?

「い、イツセー?」

「なんだよお姉ちゃん達……………俺をこんな所に誘拐して何が目的だよ!」

イツセーから出た言葉はこちらに対して警戒心があふれた言葉だった。

「ど、どうしたんですかイツセーさん?!」

「何で俺の名前知ってんだよ? 怪しいな……………見た感じ、悪魔なんだろう? あんた達」  
——つ。

この年でも私達が悪魔だと言う事を見抜くなんて……………つて、違うわ!

「もしかしてイツセー、私達の事……………」

ある考えが浮かんだ私はこの家にいる子達祐斗とギヤスパーを呼んだ。

そして考察した結果——イツセーの記憶までもが退行している事が判明した。

~~~~~

「い、イツセー先輩、ホントに僕のこと忘れちゃったんですかあ?」

「だから知らねえって言ってるんだろ!!」

現在イツセーは質問してきたギヤスパーに嘔み付く様に答えた。

その反応はギヤスパーだけでなく、眷属全員に対して見て取れた。

「もしかして、術が失敗したの…………?」

『いや、術事体は成功しているぞ』

私の疑問に答えるように現れたのは、先程から展開されてる赤龍手の籠手に宿る伝説のドラゴン——ドライグ。

『ただ、お前達が使った術の効果に記憶退行の機能まで含まれていたんだろう。この様子だと、恐らく小学五年の時まで退行してるな』

成程……これに関しては詳しく調べなかった私の落ち度ね。

取りあえず、術式自体は一日で解けるように設定してあるけど……その間ずっと警戒されたままで過ごされるのはちよつと傷つくわ。

「なあドライグ……ここにいる人達、俺より強そうなんだけど、大丈夫かな？」

『心配するな相棒。別に連中に取って食おうって意思はないだろうさ』

……けど、この警戒心はちよつと大袈裟じゃないかしら？

「ねえドライグ。どうしてイツセーはこんなに警戒心が強いのか？」

『ん？そりや俺の教えだからだよ。人間は元より、人間以外のオーラを持つ奴はそう簡単に信じるなつてな』

「あなたねえ……」

これじゃ意思疎通もまともに取れないじゃない！

『仕方ないだろ？相棒は丁度この頃に両親を亡くしてるんだ。もし相棒に何かあったら、俺あ茂殿達に顔向けできないだろが』

う……それもそうね。

『相棒、大丈夫だ。あの時会ったメイド同様、こいつ等は信用に値する者たちだ』

「…ドライグが言うなら」

ドライグに諭されたイツセーは赤龍帝の籠手を解く。

とは言っても、やはりまだ警戒してゐる感じだ。

『…待てよ』

「ドライグ、どうしたの？」

『リアス・グレモリー。あのメイド、今呼べるか？』

……………そうか！

そういえばイツセーが彼女と出会ったのも、丁度この時って言うてたわね。

私は彼女——グレイフィアを専用の連絡網で呼んだ。

「お待たせしました」

「ありがとう、グレイフィア」

グレイフィアは幸いにも手が空いていたらしく、お母様たちから許可をいただいてきたようだ。

「で、イツセー様はどちらに？」

「こつちよ」

グレイフィアをイツセーの部屋へと案内する。

「あらあら、本当にグレイフィア様がいらつしやるなんて」

朱乃はグレイフィアが来たことに驚きを隠せないでいた。

まあ、私もダメ元だったのだけれど……。

「…イツセー様」

「……あーメイドのお姉さん!!」

グレイフィアがイツセーに近づくと、イツセーは先程とは打って変わって笑顔を見せてグレイフィアに走り寄った！

「久しぶり！元気してた？」

「…はい」

グレイフィアは今まで見せたことがないほどの笑顔を見せると、イツセーを抱っこした——べ、別に羨ましいとか思っていないから！

「うわっ！は、恥ずかしいよ………」

「ふふっ、可愛いですね」

「……………なに、これ？」

「完全に、二人だけの世界……」

小猫の言葉に私達は悔しいけど同意せざるを得なかった。

「…イツセー様。先ずはお嬢様たちに自己紹介なさってください」

「……うん、分かった」

ひよいつとイツセーはグレイフィアから降りると、こちらに走り寄ってきた。

そして頭を下げながら自己紹介をした。

「俺、兵藤一誠って言います！さっきは疑って、御免なさい!!」

「大丈夫よ、イツセー。私はリアス。宜しくね」

私を手を差し出すと、イツセーは躊躇なく握り返してきた。

「うん！リアスお姉ちゃん!!」

——っ！

私は眩暈にも似た錯覚を覚えた。

あのイツセーが、お姉ちゃんって……これはなんて破壊力!!

「あらあら、リアスだけ狡いですわ」

「わ、私はアーシア・アルジエントと言いますう！」

「宜しく、アーシアお姉ちゃん！」

「っ！はううっ」

「姫島朱乃ですわ、イツセー君」

「朱乃お姉ちゃん！」

「はあっ………！」

この後、全員がイツセーの天真爛漫さに撃沈していた。
唯一無事なのはグレイフィアのみだった。

心を許したイツセーは、こんなにも可愛いのね!!

~~~~~

「来い、イツセー！」

「へへっ、じゃあ遠慮なく行かせてもらおうぜ！ゼノヴィア姉ちゃん！」

自己紹介を終えた後、私達は近所の公園へとやって来ており、そこではイツセーたちがサツカーをしていた。

イツセーは巧みなボール捌きでゼノヴィアのデイフェンスを躲すと、ゴールめがけて

走り出した！

「通しませんよ……！」

小猫は通さないとわんばかりにスライディングを仕掛けるが、

「よっ！」

「……………」

イツセーはボールと共にジャンプし、それを見事にやり過ごした！

小猫が顔を歪めるが、構わずイツセーは再び走り出した！

「おっと、そこまでだよ！」

「木場！頼むぞ！」

「祐斗先輩……！」

イツセーの前に立ちはだかったのは、祐斗だ。

イツセーは何とか前に進むもうとするが、祐斗は軽快なステップでそれに素早く対処す

る！

「イツセー君が初めて止まりましたね……」

「ええ……さてイツセー、どうするのかしら？」

が、イツセーのとった行動は……

「……………はっ！」



「っ!!」

イツセーはボールを引き込むと、踵で宙に蹴りだした!

予想していなかった祐斗の動きが僅かに鈍った隙を逃さず、イツセーは素早く前に回り込み、祐斗をも突破した!

「す、凄いです! イツセーさん!」

この頃からイツセーは柔軟な思考だったのね……………。

「さあ来いイツセー君!」

ゴールを守るのは、イリナさん。

イツセーは元氣よくシュートを放つ!

「おりやつ!!」

「ふふつ、この私からゴールを奪おうなんて甘————え?!」

けど、イリナさんが何かを言っている最中に、イツセーのシュートはゴールポストに刺さった。

イリナさん……………。

「へっへーん! イリナ姉ちゃん前置きが長いんだよ〜!」

「ちよ、ちよつと酷くない?!」

「酷いのは君だぞ、イリナ」

今回は珍しくゼノヴィアが正論を言ったわね。

そしてイツセーはグレイフィアから差し出されたドリンクを飲んでいる。

「へへっ、こういうの久し振りだからなく」

「そうですの？」

「うん！ いつつもドライグと修行してたからさ」

……………ドライグ。

『え、何この空気？ なに、俺なんか悪いことした？ ねえ教えてー偉い人ー！』

……………何て言う一幕があっただけど、私達は無邪気なイツセーを存分に堪能した。

因みに、今日はせっかくだから泊まって行きなさいとお母様から許可をいただいたグレイフィアが家に泊まることになった。

そして就寝時——そう、それはイツセーと一緒に寝る人物を決める壮絶な戦いが、始まった!!

そして結果は——

~~~~~

「うーん、何か緊張するなあ……」

イツセーは寝付けないでいた。

理由は自分の隣にいる人物が原因だろう。

「ふふ、イツセー様♪」

そう、壮絶なジャンケン勝負に勝ったのはグレイファイアだった。

彼女は満面の笑みで横になっており、対するイツセーは緊張でガチガチだった。

「ねえメイドさん」

「はい？」

「俺さ、絶対メイドさんの最後の希望になるって、胸張って言えるように強くなる！だからさ……待っててくれないかな？」

「……………何年でも、待ってますよ」

グレイファイアは微笑むと、イツセーの額にキスを落とす。

イツセーは恥ずかしそうにはにかむと、目を閉じて眠りについた。

「おやすみ、メイドさん……」

「はい……」

~~~~~

「……………ん？」

あれ、俺一体……………つ!!!

「すう、すう……………」

何でグレイフィアさんが俺のベッドで寝てんのおおおお!?

し、しかも寝間着から谷間が…………おっぱいが見え隠れしてるよ!!

「ん……………イツセー様、元に戻られたんですね」

「へ？」

も、元に戻った？なんのこっちゃ？

「……………いえ、こちらの話ですのぞ」

うーん……………そういや昨日の記憶がなんかすっぽり抜け落ちてるな…………。

部長たちがかけた術式が関係してるのか？

寝起きだからか、目元がとろんとしてるグレイフィアさんはなんだか新鮮で……………凄く

可愛いと思ってしまった。

「お、俺、何か迷惑かけてませんでしたか？」

「はい、大丈夫ですよ」

ほっ、よかった……。

取りあえず他の皆もなんだか安堵してたけど………今度から記憶を失う術は願ひ下げですよ部長。

と、俺はここで気づいていなかった。

机の上に置かれた写真に、何故だか幼い頃の俺と部長たちが移っていることに――

## 第七章：放課後のラグナロク／オールドラゴン

MAGIC 59 『人は彼を、魔法使いと呼んだ』

『フハハハハ!! 今日こそこの世界から砂糖類を無くしてやるわあ!!』

と、テレビの中で高らかに吠える何か悪の組織っぽいやつ。

だが――

『待てっ!!』

その野望に待ったをかける男。

その名は……………

『その声……………貴様は!』

『この星を…否! 糖類を守るために受け継がれてきた秘密の力! それは魔法なり!』

『う、ウィザードラゴン!!』

『覚悟しろ! 無糖將軍ブラックブレンダー!!』

《コネクト・プリーズ》

赤龍帝の鎧にウィザードライバー、そして黒のローブを身にまとったヒーロー……

——魔法龍帝・ウィザードラゴン。

そう、以前持ち掛けられていた娯楽番組の話の正体が、これだ。今、テレビ画面ではウィザードラゴンを振るって戦う俺がいた。

因みに、これは実際に俺が戦っているわけではない。

中に入っているのはスタントマンの悪魔の方で、俺は声のみの収録になってるんだ。そして現在、グレモリー眷属全員で完成した一話を視聴しているのだ。んで、予想外の完成度の高さに俺も驚いている。

「このウィザードラゴン、冥界でもトップクラスの視聴率らしいです……」  
と、俺の膝上に座る小猫ちゃんが教えてくれた。

「それに玩具も完成度が高いからね」

そう語る木場の手には玩具版の赤龍帝の籠手が。

何とこれ！ドライグの生ボイスを多数収録してるのだ！

例えば「おはよう」と声をかけると『よう、相棒』と返ってくるのだ！

もうウザつたいぐらいセリフのバリエーションが多いんだ！

『イヤー、いい仕事をしたな』

ドライブも完成した一話と玩具を見てご満悦の様子だ。

ただ、名前に関してはドラゴンとかなり喧嘩したけどな。

ドライブ曰く『何で俺の名前じゃないんだ!?』、そしてドラゴン側の意見は『勝手に俺の名前を使うな!!』だ。

ま、コイツの正式名称は「ウィザードラゴン」だけどね。

『これだとどめだ!!』

《チヨーイイネー！キツクストライク・サイコー!》

『ストライクウィザードオオオオオオツ!!』

『ぐああああ!!……の、ノンシユガー帝国に、栄光あれえええ!!』

お、必殺キツクが決まった。

そしてその場に現れた人物は――

『ウィザードラゴン、大変大儀であつたぞ』



『プリンセス・シュガー!』

部長の顔をした、お姫様——プリンセス・シュガー。

この物語のヒロインで、主人公が守るシュガーアイランドの王女様だ。

あ、この部長の顔も切り取って合成してるんだぜ☆

……ちなみに、この作品のあらすじはこうだ。

砂糖や甘物をこよなく愛する国、シュガーアイランド。

そして世界中から砂糖類を消そうと企む悪の軍団、ノンシュガー帝国。

シュガーアイランド側はそれを食い止めるべく、かつて砂糖に愛され、魔法の竜を宿した魔法使いを探し当てた。

それが主人公、ウィザードラゴンである。

主人公の正体は、その魔法龍を宿した風来坊の青年で、自らの故郷を探すため旅から旅をしているという設定だ。

……何か、名前はカッコいいのにストーリーが何だか微妙な気がしてならないのは、俺も感じていた。

と言うか、ここまで大受けしているのが驚きだ。

そして何故砂糖を取り扱うのかというと、俺がブレンシユガーばっか食ってたら、アザゼル先生達が甘党だと受け取ったからっぽい……別に俺は甘党じゃないのにな。

「でもイツセー君がここまで人気者になるなんて幼馴染としても鼻が高いわ！昔はよくヒーローごっことかしてたもんね！」

イリナが昔流行ったヒーローのポーズをとった。

おー、懐かしいな。

「こんなのもあつたな。命あるところ、正義の雄たけびあり！って」

「うんうん！けど、私は正義のロードを突き進む！ってフリーズが好きだったわ！」

イヤー、懐かしいな。

こうして話すと、イリナは良い幼馴染だったんだなって自覚する。

「……そう言えば、私は猫科の拳法ヒーローを見ていました」

「へえー。アンブレレイカブル・ボディ！って奴だよね！」

などと懐かしい話を進めながら、俺達はウイザードラゴンの終わりまで余す事無く視  
聴した。

## MAGIC60 『思惑』

よー皆、イツセーだ。

俺達は今、とある廃屋に來ている。

そして俺達の目の前にいるのは、多数の黒い影。

「貴殿が魔王の妹君、リアス・グレモリーだな？」

「ええ、そうよ。——『禍の団』の皆さん」

そう、こいつ等は全員『禍の団』の構成員——なんでも英雄派という派閥らしい。

俺が暴走した事によって崩壊した旧魔王派と違って、全員が神器所有者の人間で構成されてるんだとか。

『しかし敵意満々だな』

そりゃあそうだろ。

人間にとつちや俺たちのような異形が憎くて仕方ないだろうからな。

今のフォーメーションは、前衛が木場、ゼノヴィア、小猫ちゃん。

中衛は俺、イリナ、ギヤスパアの三人。

後衛は部長、朱乃さん、アーシアだ。

本当なら俺も前衛に加わる筈だったんだが、思いの外皆に心配されてな、中衛ポジに付いた訳だ。

敵が俺達のフォーメーションを確認すると、黒いコートを着た男性が手から白い炎を発言させた。

「まーた神器所有者かよ……………」

俺は呆れたかのように呟いた。

「困ったわね。ここ最近、神器所有者と戦ってばかりだわ」

部長の言うとおり、俺達はここ数日間、こいつらと戦ったりするが、どいつもこいつも神器を持つてる奴が多かった。

と、炎を揺らす男がこちらへ攻撃を仕掛けようとした瞬間に。

ドシュツ!!

「がっ、はっ……………!?!」

「悪いね。けど、速めに切り上げさせてもらおうよ」

木場は聖魔剣を創造し、敵に投げつけた。

ただそれだけの事だったが、そのスピードが異様に速かった。

——残像すら残さないほどのスピードを伴ってな。

『速さを求めた一撃、か』

ドライグの言うとおり、最近木場は速さを求めた一撃を試行錯誤していた。早い話が、攻撃に自分と同じスピードを与えられないかって事だ。

木場の剣の太刀筋は素人の俺から見ても鋭いし、狙いも正確だ。

ただ、その初動が遅いと、初撃が必ず防がれてしまう、と漏らしていた。

だったら、相手も目に捉えられないスピードを上乗せすればいい——と言ったのが、ドライグだった。

とは簡単に言うものの、木場はそのスピードに体がついていけなかった為、日夜筋トレなどに励んで試行錯誤していた。

ちゃんと結果が出ている様で安心したぜ。

「っ!!」

いきなり仲間がやられたことで相手もかなり動揺してるな。

だけど、すぐに冷静になったのか、すぐに後ろに下がり、その代わりに何処から異形の戦闘員が前に出てきた。

数が多いな……………だったら!

メテオレイン・ドロゴンショット  
「流星暴雨の龍波動!!」

俺の掌に生成された赤い魔力が無数に枝分かれし、異形の戦闘員に加えて、木場達に突撃しようとしていた構成員に命中した!

「イツセー先輩…………」

「あまり私達の出番を取らないでくれよ?」

「ははっ、わりいわりい」

そうだった、これはチーム戦みたいなものだからな。

と、見れば俺に複数の矢が飛んでくるが——

「僕だっていますう!」

「私もよー！」

ギヤスパーが攻撃した奴ごとその一撃を停止させ、そのスキにイリナの光の槍が構成員を倒していく。

おお、いいコンビネーション！

~~~~~

そして数時間後……………

「これで全員ね。皆お疲れ様」

戦闘は終わり、俺達は生きて捕縛できた戦闘員を冥界に送り込んで、一息吐いていた。「とは言っても、今回も収穫はなさそうだけどね」

部長が溜息を吐く。

一応、捕らえた構成員は冥界に送ることになってはいるが、全員負けた瞬間に英雄派に身を置いていた時の記憶が消去されるらしい。

「しっかし、派手な事をせずに戦闘するってのは俺達脳筋チームにはキツツイよなあ」

「それは仕方ないよ。威力を抑えないと、この街が壊れちゃうし
そりやそうだけでも。」

「英雄派の行動って、何か変じゃない?」
『?』

イリナの言葉に、全員が怪訝な顔になる。
どう言うことだ?

「だって、私達を本気で研究して攻略するなら、二回か三回の戦いで戦術プランは組み立てれると思うの。それで次からは決戦だ! って感じだと思っただけど……でも、前回も、今回も全く同じ戦い方だった。注意深いな! って思っただけど……何と言うか、実験してる感じなのよ」

「実験……私達の?」

朱乃さんの問いに、イリナは首を捻った。

「どちらかと言うと、彼ら……神器の実験をしている感じかな?」

『……そうか。そう言うことか』

イリナのこの答えに、ドライグは確信を得たように呟いた。

「どういう事、ドライグ?」

『簡単な話だ。奴等はお前達に神器所有者をぶつけ、禁手に至らせようとしている』
『ooooooooツ!?』

ドライグの意見に全員の顔が強張った。

『それに、戦闘していた時にいたあの影使いの反応は、間違いなく禁手のそれだ』

……確かに。

俺達は先程まで戦っていた奴の中に、影を操る戦闘員がいたことを思い出した。

そして、奴が去り際に見せた反応も。

「つまり私達は、経験値稼ぎの絶好のカモと言うわけね」

それって要は俺達メタルスライム或いはタブンネ扱いかよ！

「けど、やり方としてはかなり雑ですね……」

『連中からすれば、百人死んでも一人が至ればそれでOKなんだろうな』

どっちにしても最低の発想じゃねーか……！

「……兎に角、ここで結論を急いでも仕方無いわ。一先ず帰りましょう」

『はい』

ooooooooと、俺達は部屋に戻ってくると、何やら朱乃さんが鼻歌を歌っていた。

「あら朱乃。随分ご機嫌ね。何かS的な楽しみでも?」

部長の問いに、朱乃さんは満面の笑みで答えた。

「いいえ。明日はイツセー君とのデートですから。うふふ、明日、イツセー君は私の彼氏ですわ」

あー、そう言えばそうだったな……………と同時に、女性陣の殺意が一斉に俺へと差し向けられた。

こ、怖いよ、皆……………女の子が出て良い殺気じゃないよ！

『楽しそうだなオイ……………って、何かどうにも調子狂うな。奴がいないと』

……………そう、だな。

~~~~~

「どうですか…………？」

「うん、気持ちいいよ」

俺の部屋にて、小猫ちゃんがそう聞いてくると、俺はそう返した。

今何してるんだって？

俺は現在小猫ちゃんに仙術の治療を受けていた。

こうやって気の流れをうまく操れば、疲れとかも取れるし、自然治癒力とかも向上するんだ。

他にも血行促進とかも………実際小猫ちゃんに気を当ててもらってるけど、暖かいんだよなあ……。

けど、俺への仙術治療は他に理由があったりする。

「……こうすれば、イツセー先輩が覇龍で失った生命エネルギーも、少しずつですが、回復していきます」

「……そう、俺が暴走して失った生命エネルギーの回復が主な理由だ。」

『このままだと、お前の寿命は百年もない』

体育祭が終わった後、俺は先生にそう告げられた。

なんでも不完全とは言え、覇龍を発動した影響で、俺の命は目茶苦茶削られたらしく、百年も生きられないと宣告された。

要するに、悪魔の寿命を一気に削っちゃまった訳だ。

けど、最初は何て事ないと思ってたぜ？

何せ人間から転生した俺には、百年なんて充分すぎる位だ。

それでも良いかなーと思ってたら、先生に怒られた。

『百年なんてな、悪魔にしちや短命なんだぞ？このままじゃお前、リアス達と一生を過ごせないんだ』

部長は……それを聞いて泣いていた。

それを言われたら、流石の俺も堪えた。

だって皆と百年でお別れだぜ？悲しいっただらなかつたよ。

『ダイバイディング・ギア白龍皇の籠手』も当面は使用禁止を言い渡された。

元々相反する力を使用してそれなりに寿命を削っていたらしく、今の状態だと使えば死ぬと言われた。

ヴァーリは膨大な魔力を消費して僅かながらに使えるらしいが、それでも数分程度だそうだ。

魔力なら俺も有しているが、今回は暴走しての発動に加え、通常の覇龍と異なる

物——ドラーゴンの力も融合して発動した為か、魔力だけで賄える物ではなかったとドライグに言われた。

『……で、ドラーゴンはまだ？』

『ああ……まだ眠ったままだ』

——その事で更に言うと、俺の中にいるドラーゴンは俺が暴走した後からアンダーワールドで眠ったままなんだ。

どうやらあの『覇龍』発動時に使っていたらしいドラーゴンの力や魔力は、ドラーゴン本人から無理矢理引き出されていたらしく、ドラーゴンの深刻なダメージを与えていた。

魔法や魔力を使う分には何とかなってるけど、アンダーワールドに行く際は現状ドラーゴンは召喚できない。

更に言うと、ドラーゴンスタイルも使えないんだ。

——つと、話が逸れちまったが、生命力を徐々にだが、元に戻す方法はあると言われた。

それが、この仙術治療だ。

「……先輩が死んだら、悲しむ人が多いです。……私も、先輩が死んだら、嫌です。こう

やって、一生かけても私が治しますから……もう、あの状態にはならないで……」  
小猫ちゃんは懇願する様に上目遣いでそう言う。

……キュンってしちゃったよ！

「勿論さ。まあ、俺もどうやって発動したのか今一覚えてないけど……もう覇龍は使わない様に、心掛けるよ」

「……はっ」

小猫ちゃんは一層抱き締める力を強める。

そうだと。も。

俺は童貞卒業するまで死ぬるもんか!!

俺は決意を改めると、小猫ちゃんは何故だか顔を真っ赤にしていた。

「せ、先輩……実は、もつと手っ取り早い方法があるんです」

「へえ、どういふのなんだい？」

「………ば、房中術です」

………なんだそれ？

「房中術？」

「………気の使い方に長けた女性が、男性に気を分け与える事で、生命力の活性化を大きく

促す術です」

「おー、そんな術あるんだ。だったら今度やってもらおうかな」

俺が何気なく言うのと、小猫ちゃんは更に顔を真っ赤にした。

『相棒。お前がまさかそんな事言うとは……………』

な、何だよその含みのある言い方は？

「……………わ、分かりました。で、でも……………私も初めてなので……………」

……………これはその術の内容を聞いた方が良いのかもしれない。

「困みにさ、その房中術って……………どうやるの？」

すると小猫ちゃんは恥ずかしそうに声を震わせる。

「……………だ、男女が、ひとつになることで……………仙術使いの女性から直接気を送る術です

……………」

……………つまり、それは、あれだよね？

「……………え、エッチの事!? エッチの事かい?! いやいやいやいや、出来ないよ! 俺と小猫ちゃんがエッチなんて!!」

「わ、私では、不満ですか……………?」

俺が捲し立てると、小猫ちゃんは此方を覗き込みながらそう言った!

はぐー！そ、その上目遣いは反則だよ!!

「あー、いやー！そう言うわけじゃなくてだね！小猫ちゃんは後輩だし、その……………」

俺が返答に困っていると、小猫ちゃんは決心するかの様に此方に言ってきた!

「か、体と胸はちっこいですけど……………ち、ちゃんと、エッチ出来ます……………子供も、作れます。そ、それに先輩が危なくなったら、強制的に房中術をするしかないと思います……………か、覚悟は出来てます……………」

ブフウウウツツ!!!

俺の鼻から勢いよく鼻血が出た!

「こ、小猫ちゃん！そんな事ダメだ！エッチな子になっちゃダメだよ!」

俺は小猫ちゃんの肩に手を置いて、何とか説得しようとする!

鼻血出てる? 気にしたら負けだ!!

「で、でも……………そっち方面も知っておかないといけない気が……………最近、特に」

「そんな事気にしなくて大丈夫だよ!それに、俺みたいな口クテナシの治療なんかで、大事な貞操捧げちゃダメだよ!! そう言うのは、ちゃんと好きな人同士でやんなきゃ! ね?!」

「……………アーシア先輩だって、頑張ってるのに」

ちよつと残念そうな小猫ちゃん! よし、もう一押しだ!



「小猫ちゃん！無理して部長や朱乃さんの真似しちやダメだ！あんなの、ただの悪影響でしかー！ー！ー」

「悪影響？何の事かしら………イッセー？」

あ。

『まー皆さんご想像通りの展開になっちゃったので、これにて今回はここまで！サラバ！！』

その日の夜、俺は部長にこっ酷く叱られた……。

## MAGIC 61 『波乱のデート』

よお皆、イツセーだ。

今日は朱乃さんとのデートの日だ。

今はこうやって待ち合わせをしているわけだ。

……朱乃さんの私服姿かあ。

和服とかかな？

なんてブレーションシユガー食いながら考えていると、俺の目の前にフリルの付いたピンク色の可愛らしい服を着た女の子が現れた。

「同じ年かな？でも何処かで見たことあるような……………」

「ごめんね。待たせちゃった？」

「え……………もしかして、朱乃さん？」

俺が聞くと、朱乃さんは頷いた。

うええええええっ!?

マジで朱乃さんかよ!?

全然イメージと違うし!しかもブーツだぜ!?

俺が内心叫びながらもかちんこちんになつて凝視していると、朱乃さんが、

「そ、そんなに見つめられると恥ずかしいわ……今日の私、変?」

もじもじしながら恥ずかしそうに言ってきた!

ぐはっ!

可愛すぎだろ!!何時もの年上な感じが全くしない!

もう同年代の女の子か、ともすれば年下にも見えるぞ!

「いえっ!全く以てそんな事ありません!チョコー似合ってます!!」

俺が力みながら言うと、

「やったあ。ありがとう、イツセー」

そう花が咲いたような笑顔で返してきた!

やべえ、今日の朱乃さんは此方を萌え殺しにかかつてきやがる!!

「今日のイツセー君は一日私の彼氏ですわ……イツセー、って呼んでもいい?」

そう上目遣いでのでき込んでくる!!

「は、はい!」

俺が肯定の意を返すと、また嬉しそうに笑う!!

ああ、今日の朱乃さんは可愛いなあ！

なんて俺が鼻の下を伸ばしていると——後方から殺気が飛ばされてきた！

こ、この殺気は一度感じたことがあるぞ……………。

俺が振り返ると、そこには電柱の陰から此方を伺うサングラスかけた紅髪の不審者がのぞき込んでいた！

その隣には眼鏡をかけた金髪の子が……あ、涙目っぽい。

ほかには猫耳出してレスラー風のマスク被った小柄な女の子と頭陀袋被ったジエイソン擬きの奴！

そして後ろでは普段の恰好した木場が此方へ手で謝っていた。

はい、オカルト研究部の皆さまです……………。つっか皆して何やってんの？

って、ゼノヴィアがいねーな……………まあいいか。

全員気配隠す気ないなあ。

「あらあら、浮気調査にしては多いわね」

そう言うと、朱乃さんは見せつけるように腕を組んでくる。

あー、おっぱいの感触と髪の毛から漂う良い匂いのダブルパンチ……………たまらんなあ

！

バキッ

『すげーな相棒。女の嫉妬つてのは電柱を素手で破壊するんだな』

……………言うなよドライグ。見て見ぬ振りしたかったのに！

それと部長、それ立派な犯罪ですからね！

「じゃあ行きましようか」

「は、はい」

俺、生きて帰れるかな……………

~~~~~

さてさて、デートから数時間が経って分かった事が一つある。

それは、朱乃さんがもう完全に年相応な女の子ってことだ。

服屋に入っては、「ねえ、これ似合う？」とか「こっちの方が良いかな？」と俺に聞い

てくる。

まあ、答えはどっちも似合ってる！としか言えなかった。

だってどっちも似合うんだもん！！

露店のクレープを買ったら「美味しいね、イツセー」と寄りかかりながら聞いてくる

！

俺が「クリーム付いてますよ」って指摘したら、恥ずかしそうに俯くんだぜ？

もう二重の意味でお腹一杯だ！

ようしつ、今日はとことんまでやろう！

「朱乃さん！行きたい所があったら言ってくださいね！」

と、意気込む俺！

「うん」

あ、ダメだ。

その可愛い笑顔に俺は一撃で撃沈した。

その後、俺達は水族館に行くことになった。

~~~~~

「深海魚って変な顔の子が多いね」

俺達は水族館を後にした。

いやー、最後に行ったのって父さん達が生きてた時じゃないか？

楽しいもんだなあ。

「で、次は何処に行きましようか？」

「そうねえ……」

と考えている最中、俺は視界の端で紅髪の追跡者様ご一行を見つめる。

ハア………これやると後で盛大に大目玉食らうのは確実だが、致し方ないな。

つつーかここまですべてついてこられると流石に朱乃さんも楽しめないだろうからな。

《コネクト・プリーズ》

「イツセー？」

俺はコネクトでバイクを取り寄せる。

対して朱乃さんは訝しげだ。

「せつかくだし、このまま逃避行と洒落込みますか？ 姫」

俺が言うのと、朱乃さんは「ふふっ」と笑うと、



「うん。じゃあ連れて行ってくれる？王子様」

俺の手を取って嬉しそうに言った。

「喜んでー」

俺は朱乃さんのヘルメットを取り出して渡し、シートに座る。

朱乃さんが乗り込んだのを確認すると、

「さあ……………振り切るぜっ!!」

俺は部長達が駆け出すのをサイドミラーで確認すると同時にアクセルを吹かす！

割と人がいるため部長達は悪魔の力が出せないのに対し、俺達は悠々と人気のない所

へと逃げ込んだ！

『相棒、帰ったら骨は拾っておいてやるよ』

不吉な事言うな!!

何とか部長を撒いた俺達はバイクから降りる。

「ふふっ、すごく速いのね。イツセーのお馬さんは」

「速さがモットーなんで」

俺が敬礼すると朱乃さんは可笑しそうに笑った。

「つか、ここ何処だ……………って！」

見渡すと、「休憩〇円」「宿泊〇円」の文字が書かれた看板があちらこちらにあった。

……どう見てもラブホテル街です本当にありがとうございました、つて違うわああああああ!!!

やべえ、逃避行とかほざいて走ったらラブホテルとか嫌われるじゃんか!!

「や、これは違うんです!し、下心とかは一切なくて………」

ああ、駄目だ!全く言い訳が思いつかん!!

だが、朱乃さんは俺の服の裾を握ると、絞り出すように声を紡いだ。

「わ、私………イツセーだったら、良いよ………」

え、そ、それは………そういう事つすよね?

俺は生唾を飲んだ。

と、同時に路地裏から殺気を感じた。

「朱乃っ!!」

「え?きやつ!!」

何やら嫌な予感がした俺は咄嗟に朱乃さんを押し倒した!

その後炎が飛んできて、朱乃さんが立っていた場所が炎に包まれた！

「えっ？」

「……おい、そこにいる奴、出てこい」

俺が路地裏に向かって言い放つ。

すると――

「誰かと思えば魔法使いじゃねえか」

路地裏から出てきたのは無精髭を生やした粗暴そうな男。

そして、俺はそいつが誰か知っている。

「フェニックス………」

「久しぶりだな！」

そう笑うフェニックスの服には赤い染みが。

「お前、無関係の人を……ッ！」

「俺は俺の欲に従ったまでだ。もうワイズマンも知った事じゃねえ!!うおおおおお

!!!

フェニックスは吠ええるとファントムの姿になった。

それを見た朱乃さんも臨戦態勢になる！

「アイツは……………」

「…前より強くなつてやがるな」

《ドライバーオン・プリーズ》

とは言え不味いな……………ドラゴンスタイル抜きで此奴とやり合うのは分が悪すぎる。

俺は一瞬考えると、戦闘スタイルを切り替えることにした。そう――

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

赤龍帝の鎧で、だ。

『ああん？何だその姿はよお』

「戦えりやそれで十分なんだろ？お前」

『へっ、ちげえねえな！』

フェニックスは炎で剣を作り出すと、大きく振りかぶった。

「朱乃さん。サポートお願いします」

「…無茶はしないでくださいね」

朱乃さんは手に雷光を迸らせる。

「さあ、ショータイムだ（ですわ）!!」

『上等だああつ!!!』

# MAGIC 6 2 『神、来日』

「はあ！」

朱乃さんは周囲に結界を張ると、手に雷光を溜めて撃ち放つ！

フェニックスはそれを手にした大剣でかき消すと、朱乃さん目掛けて跳躍する！

『目障りなんだよ！消え失せろっ!!』

「やらせるかっての!!」

《Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost》

St Boost Boost Boost!》

《Transfer!》

俺はアスカロンに力を譲渡し、

《Engine!》

《Jet!》

強化された高速の斬撃を放つ！

『ツ!?チイ!!』

フェニックスはすんでの所で反応し、それを弾く！  
が——

「隙だらけですわっ!!」

『があああああつ!!』

手を振りかぶっていた体勢のフェニックスに、雷光が降り注ぐ！  
フェニックスは諸にそれを食らい、悲鳴を上げる！

「もう一丁オマケだ！龍牙雷光!!」

『ゴオツ！ガハツ！ゲフウツ!!』

たじろいだ所に高速拳の嵐を見舞う！

『ハア、ハア………て、テメエ等ツ!!』

うし、何とかこのまま一度倒す！

と、思っていたら、

『覚悟しやが———』

さつきまでそこにいた筈のフェニックスの姿が消えた！

「ドライグ、気配は?!」

『……完全にいないな。この辺りには』

……逃げたのか？

いや、そんな感じでもなかった………何だったんだ？

「……考えても仕方ない、か」

俺は鎧を解除する。

それを見た朱乃さんも、結界を解いた。

「大丈夫ですか、イツセー君？」

「はい、何とか。朱乃さんのアシストのお陰ですよ」

多分一人だったらキツかった筈だからな。

「それじゃ、こんな空気ですけど…………続き、しますか？」

———そう、さつきまではピンクな空気だったのだ！

「………うん………行く？」



恥じらいを感じる上目遣いに、俺の理性はぶっ飛んだ！

はい！と即答しかけた所で——俺はまたもや何かの気配を感じて振り向いた。

「ふおふおふお。昼間から女を抱こうとは、赤龍帝は若いのお」

「つて、オーデインのじーさん!？」

現れたのは北欧神、オーデイン！

何で日本にいるんだ!？」

そしてその傍にはスーツを着た美人さんとガタイの良い男性がいた。

「オーデイン様!こゝ、この様な場所をうろろされては困ります!か、神様なのですから、キチンとなさってください!」

そして、見るからに真面目そうなお姉さんがじーさんを叱った。

もしかしてこの人、病院内にいたあの鎧着たお姉さん？

「良いではないかロスヴァイセ。お主、勇者をもてなすヴァルキリーなんじゃから、こういう風景も覚えておくんじやな」

「余計なお世話です!それにあなた達もお昼時からこんな所にいちやダメよ。ハイスクールルの生徒でしょ?お家に戻って勉強なさい勉強」

「何時から学生の本文が勉強と押し付けられたのかねえ……………」

「屁理屈言わないの!」

「……と、横を見れば朱乃さんが付き添いの男性に詰め寄られていた!

「あ、あなたは……!」

「……朱乃さんの知り合い、か?

「朱乃、これはどういう事だ?」

「うお、若干キレ気味だ。」

「すげえ迫力。」

「……関係ないでしょ!それよりも、どうしてあなたがここにいるのよ!」

「朱乃さんの方も目付きを鋭くして、男性を睨み付けていた。」

「そこには何時ものお姉さまキャラも、先程までの乙女キャラは微塵もなく、まるで親の仇の様に睨み付けていた。」

「それはどうでも良い!兎に角、お前にはまだ早い。今すぐここを離れるんだ!」

「朱乃さんの腕を掴むと、強引に引っ張ろうとする!」

「いや!離して!」

「朱乃さんの嫌がる声を聞いた俺は……即座に男の腕を掴んだ。」

「誰だか知らないけど、いきなり女の子の腕を強引に引っこうなんて誉められたもんじゃないぜ?それでもやるってんなら……俺が相手になつてやるよ!」

俺が殺気を放つと、向こうは少し冷や汗を流しながらも口を開いた。が、その答えは俺の予想を遥かに上回る物だった。

「……今日はオーデイン殿の護衛として来ている。墮天使組織グリゴリ幹部、雷光のバラキエルだ。………そこにいる姫島朱乃の、父だ」

………まさかの朱乃さんの肉親だった。

~~~~~

「ほっほっほ。という訳で来日したぞい」

現在俺達は兵藤家の最上階にあるVIPルームにいた。

そこにはオーデインのジーさんもいた。

何でも日本に用があつて来たらしい。

そして序でにこの街を観光していたんだとか。

えー……………拝啓、天国の父さん、母さん。

俺の家、とうとうマジもんの神様が来ました。

結局あの後朱乃さんとのデートは中断。

俺達を探していた部長達と合流し、そのまま家にじーさんを連れて帰ってきた。

……因みに俺はやっぱ部長達にほつぺたを引つ張られた。

いや、言わしてもらえば人のデートに付いてくるあなた達もどうなんですかねえ……？

そして朱乃さんはかなり不機嫌だ。

俺とのデートが中断した事もあるみたいだけど、それ以上にやはりお父さんのバラキエルさんと再会した事も大きいようだ。

「どうぞ、お茶です」

「おお、すまんのぉ」

そして、そんな神様にお茶を差し出すのは、茂のおっちゃん。

「おっちゃん、緊張してないの？」

「へ？これでも緊張してるさ」

嘘だツ!!

「しかしまあ、良い乳をしとるのお。ここの娘っ子は」

するとジーさんはイヤらしい目線で部長達を見詰めた。

……よしドライブ。極手の準備だ。

『落ちて落ち着け』

「もうオーデイン様！イヤらしい目線を送っちゃダメです！此方は魔王ルシファー様の妹君なのですよ！」

と、銀髪のお姉さんのハリセン突っ込みが炸裂した。

良いぞもつとやってやれ！

「全く、頭が固いのお。と、こやつはワシのお付きヴァルキリー。名は——」

「ロスヴァイセです。以後、お見知りおきを」

「彼氏いない歴〓年齢の生娘ヴァルキリーじゃ」

……何だその追加情報は。

途端、ロスヴァイセさんは泣き崩れた。

「わ、私だつて好きで彼氏が出来ていない訳じゃないんですからああ!!好きで処女やつてる訳じゃないんですからああ!!」

うわー、凄く共感できる……………。

俺だつて好きで童貞やつてる訳じゃないんだよ!!!

「まあ、戦乙女の業界も厳しいからのお。そうじゃ赤龍帝」

「んあ?」

「ロスヴァイセを嫁にどうじゃ?」

「ッ!?!」

じーさんの一言に俺とロスヴァイセさんは固まった!

「な、何いきなり……………」

「なに、お主は女の体にも興味津々な年頃じゃろ?それにロスヴァイセは中々スタイルも良い」

た、確かに……………ざつと見てみたけど、この人、出るところは出てるし、引つ込むところは引つ込んでる。

それに可愛いし……………ちよつと良いかもと思つてしまった。

「お、オーデイン様!？」

「ロスヴァイセよ。このまま何時まで彼氏なしでおる気じゃ? そのままだと一生独り身じゃ。それに赤龍帝は実力も備わっておるし、容姿も優れとる。将来有望株じゃぞ?」

「ツ!？」

ニヤニヤと言うじーさんに、ロスヴァイセは此方を見てきた。

そのまま硬直するかと思つたが、どんどんと顔が赤くなつていきーーーー

「よ、余計なお世話ですううううう!!!」

そのまま、じーさんの脳天にハリセンが炸裂した。

~~~~~

『おい！折角良いところだつてのに何で邪魔すんだ！』

『あのまま暴れていけば、例の蛇女に貴殿のいる場所がバレる恐れがあったのでね』  
『チイツ!!』

『焦らずとも、その内きつと戦う舞台を用意する。それまでは待つのだな』



## MAGIC 63 『確執』

あの後、オーデインの爺さんはめげる事なく日本の各地を回って遊んだ。多分アザゼル先生とおっぱいパブに行っただろう。

と言うか声高らかに行きたいとかほざいてたからな！

俺も行きたかった！

『まあそんな事を言えば殺されるのは目に見えてるがな』

言うなよドライグ！

夢ぐらい見させろよな！

『……………相変わらず騒々しいな。貴様らは』

お、ドラゴン！

大丈夫なのか!?

『ああ、何とかな。と言うよりも貴様らが騒がしいせいでおちおち眠れん』

『とか何とか言って起きてるって事は寂しかったんじゃないのかあ?』

『語尾を延ばすな! 気色悪い!!』

『ああん!?!』

相変わらず仲良しだなお前らは……。

まあ良いや……………ん?

一階に行っていた俺は再び最上階へと向かう途中、何やら話し声が聞こえてきた。

このオーラは……………朱乃さん?

「朱乃、お前と話がしたいのだ」

「……………気安く私の名前を呼ばないで」

物陰から伺うと、朱乃さんとバラキエルさんが何やら揉めていた。

朱乃さんに至っては普段のニコニコフェイスではなく、声も今までに聞いたことがないって位冷たい物だった。

「……………赤龍帝と逢い引きをしていたとは、どう言うことだ?」

あ、逢い引きて……………古風な物言いだな。

しかし俺との問題か、これは手厳しいな……………。

「私の勝手でしょ? 何故、それをあなたにとやかく言われるのかしら?」

「彼は性欲に忠実だと聞いている。私は……お前が心配なのだ。卑猥な目に遭っているのではないかと」

うーん、スケベなのは否定できんからなあ……。

それにその答えは父親らしい心配の仕方だ。

と云うか俺にはバラキエルさんが悪い人には見えねーんだよな……。

「彼の事をそんな風に言わないでよー」

だが朱乃さんは強い語気で否定した。

「確かにイツセイ君はスケベだけど、優しくて、頼りがいがある……何より他人の希望を守るために一生懸命に戦う男性よ！……噂や見聞だけで判断するなんて、最低だわ。やっぱり、あなたの事を許すなんてー……」

「私は父としてー……」

「父親顔しないでよ！だったら何であの時来てくれなかったの!?!母様を見殺しにしたのは貴方じゃない!!」

その一言にバラキエルさんは押し黙ってしまった。

俺は二人に気付かれる前にその場を立ち去った。

「俺が悪いのさ。全部な」

この後帰って来たアザゼル先生に事の事情を聞いた。

何でも朱乃さんのお母さん——姫島朱璃さんの管理していた神社に、負傷したバラキエルさんが飛来し、朱璃さんはそれを手厚く看病した。

そしたその縁で、朱乃さんを間に宿したらしい。

だけど、朱璃さんの親類はそれを良しとしなかつたらしく、高名な術者達をけしかけ、朱乃さん達家族を抹殺しようと企んだ。

それらはバラキエルさんの力で退ける事が出来ていた。

けど——

「その日、バラキエルを呼び出した時を切っ掛けに、妻は亡くなった。どうしても奴でなきゃこなせない仕事だったんだよ。けど、その僅かな間に……………」

バラキエルさんが事を終えて戻ると、既に朱璃さんは亡くなっていたそうだと……………」

それから朱乃さんは天涯孤独の身になって、各地を放浪して、部長と出会ったそうだと。

「じゃあ先生は、バラキエルさんの代わりに、朱乃さんを見ようかと？」

「……………さあな。ただ、罪の意識を消そうとしてるだけかもな」

「だったら……………」

そんな悲しそうな横顔はしないでですよ、普通は――。

「……なあ、イツセー」

「はい」

「朱乃の事……お前に頼んでも良いか？」

俺はその申し出に目を見開く。

「本来なら俺がやるべき事だ。けど、お前も分かつてるだろうが、朱乃は――墮天使が嫌いだ。バラキエルと再会した時点で、俺の話だってマトモに聞きやしないだろう。」

「……俺じゃ、アイツら二人を繋ぐ希望には、なれないんだっ！」

先生にしては珍しく、悲壮さを隠しきれない慟哭。

「――任せてくださいよ」

俺は胸をドン、と叩いて宣言する。

「俺が二人をもう一度繋いで見せます！それに……家族だって、何時別れることになるか、想像つきませんから。朱乃さんには、後悔してほしく、ないから」

「……すまねえ」

~~~~~

次の日、俺達グレモリー眷属は冥界で開催されたウイザードラゴンのイベントに主役として参加していた。

「はい、ありがとうな！」

今は握手とサイン会だ。

俺達の前には長蛇の列が出来ており、子供一人一人にサイン色紙を渡して、握手する。子供達は俺が馴れない悪魔文字で書いたサイン（と言うかサインなんて書いたことないが）を嬉しそうに受け取り、握手すると、

「ウイザードラゴン！頑張つてね！」

と、言ってくれるんだ！

『ありがとう少年。君も毎日を楽しく生きるのだよ？』

「うん！」

と、ドライブもバリトンボイスでクールに対応している！

かく言う俺も嬉しい！

俺はこの子供達の希望になれていってるんだって実感して涙が溢れちゃうよ！

木場は俺のライバルキャラ『無糖・ブラックナイト』となって女の人達との握手に、小猫ちゃん、『ヘルキヤットちゃん』と言うウィザードラゴンの味方役として、大きなお友達と握手していた。

イベントは何事もなく終わり、俺達の仕事も終わりだ。

あー疲れた！

『いやー、チビツ子共との握手会、またやりてえなあ』

「それは同意するぜ、ドライグ」

それに、鎧の持続時間の修行にも持ってこいだしな！

「イツセー様、お疲れ様ですわ」

俺にタオルを持ってきてくれたのは……ードリルヘアーのお嬢様、レイヴェルだった。

「サンキュー、レイヴェル」

何でも俺達が冥界でイベント活動するって聞いて、手伝ってくれるのを進言してくれたんだ。

「こ、これも修行の一環ですわー！べ、別にイツセー様やグレモリー眷属の為って訳ではありませんからー！」

「はいはい、ツンデレ乙」

なんてコテコテのツンデレ発揮してるけど、結構真剣に仕事をしてるんだよな、コイツ。

まあ、値は真面目っぽいし、こつちが素なんだろ。多分。

「やっぱりスゲエよな、子供って。真剣に悪くないって思えてきたよ。この仕事」

「子供達は夢中ですもの」

「ああ。だからこそ、守らなきゃなってさ」

俺に何処まで出来るかは分からない。

でも、あの子達が望む限りは、俺はウィザードラゴンでいようと思う。

そう決意した日だった。

MAGI C64 『悪神』

よー皆、イツセーだ。

俺達は今日も今日とてオーデインの爺さんの護衛だ。

まあこんな最強の爺さんに護衛なんているか？と思うかもしれないが、北欧のVIPだからな。

今は空飛ぶ馬車で移送している。

他の皆も翼を出して飛んでいる。

「ふぁーあ…」

「眠たそうね、イツセー」

「すんません…」

俺の間抜けな欠伸に、部長は苦笑いを零す。

けど、こうやって悠々と観光なんて、爺さんも肝が据わってるよなあ。

と、その時、何やら目の前から大きな力を感じた。

『ッ!?!』

その気配を感じて、俺達は臨戦態勢をとる!

この気配、オーラは………まさか!

『そうだ相棒。この力は——神だ』

左手の宝玉から響くドライグの声。

その声音には何時ものふざけた感じが一切ない。

……まさか、久しぶりにまともなドライグが見れるなんてな。

『相棒、ティアマットを呼べ』

分かってる!

俺は魔方陣からティアを召喚する。

「悪いティア。急に呼び出して」

「構わんさ。それほど、事態は急を要するのだろうか?」

ティアも目を細めて虚空を睨む。

「さあ………良からぬ事を始めようではないか！」

空間を引き裂いて現れたのは、一組の男女。

男の方は紫色のローブを身に纏い、女の方は全身真っ黒で日傘を差している。

どちらも凄まじいプレッシャーだ。

「これはこれは…北欧の神ロキ殿にヘルヘイムの女王ヘル殿。こんな所に何ようかな？」

へ、ヘルヘイム？

あの女、オーバーロードなのか？

『違う。北欧に於ける地獄だ』

あ、そうなのね。

「お初にお目にかかる墮天使の総督殿！如何にも！我はロキ！用があるのは勿論………我らが主神、オーディン！」

大仰なりアクションでロキは馬車を指さす。

すると、馬車からオーディンの爺さんが出てきた。

「ワシに何か用かのお、ロキ？」

「…何故、他の神話体系と手を組む？我ら北欧は他からの力添えはいらぬではないか！」

『フハハハハハハハ!!見よ、この美しき肉体！我は今、あらゆる者を凌駕する力を手にしたのだ!!』

「この感じは……………ファントムツ!!」

そうだ——以前戦ったコカビエルの時と同じ現象だ！

それに何より、体の中央には魔宝石が!!

「お主も本気のようにじゃな。まさか異形に身を変えてまで黄昏を起こそうとはのお」

『当然!!』

「ちい、厄介な隠しだねをもってやがったな……………!」

アザゼル先生が舌打ちする。

『……………ん?この魔力』

するとロキは、今度は俺の方を向いてきた。

『……………そうか。貴殿が噂の魔法使いか!』

「…そうだって言ったらどうすんだ?神様」

《ドライバー・オン!プリーズ》

俺はウィザードドライバーを顕現させる。

『数多のファントムを倒してきたその実力、少しばかり拝見させてもらいたい……………へル

!』

「…はい、お父様」

ヘルは日傘を虚空に翳した。

すると——何もなかった空に大きな歪みが現れ、そこから数多くの魔物が現れた！

「ヘルはヘルヘイムの存在する数多の魔物、亡者を使役する。お前ら！特にイツセー！気を抜くなよっ!!」

『はい!!』

「変身ッ！」

《シャバドウビタツチヘンシーン・フレイム・ドラゴン・ボー、ボー、ボーボーボー!!》
いきなりドラゴンスタイルで行かせてもらうぜ！

《コネクト・プリーズ》

《コピー・プリーズ》

俺はウィザードガンをコピーで複製し、二刀流の構えを取ると、そのまま魔物の群れ目掛けて切り込む!!

「おらあああああつ!!」

その怒号を皮切りに、他の皆も魔物に攻撃を加える！

「ぶつとべえええええ!!!」

『『キヤモナシューティングシェイクハンズ! フレイム・シューティングストライク!』
ボーボーボー!』』

《Transfer!》

更に倍加で底上げした力を譲渡し、巨大な火の玉で魔物共を消し飛ばす!

「聖魔剣っ!」

「デュランダル! 聖牙大天衝!!」

木場とゼノヴィアの騎士コンビは、まずゼノヴィアが一撃の元に消し飛ばし、残った魔物を木場が確実に仕留めていく!!

「こ、小猫ちゃん! 今だよっ!!」

「…ていつ!」

次いでギヤスパーと小猫ちゃんの一年生コンビ!

ギヤスパーは神器で魔物を停めると、それを確実に小猫ちゃんが仙術を併用した拳で殴っていく!

「滅びなさいっ!!」

「雷光よ!!」

部長と朱乃さんの二大お姉さまは、大質量の滅びの魔力と雷光のコラボレーション!

一瞬で数多の魔物が消し飛んだ！

「小賢しい虫けら共がっ!!」

「おらおらおらおらおらあ!!!」

「アーメンよ!!」

「消えろっ!!」

「持つていきなさい!!」

先生達も全くもって負けてないぜ！

「……まあ、なんとお強い殿方ですこと」

ヘルは何故だか此方をウツトリした眼差しで見ってくる。

な、何だ……？

「私……ゾクゾクしてきましたわ……ッ！」

すると、その昂ぶりに答えるかのように魔物はまた現れてしまう！

『……ほう、ヘルをときめかせるとは……予想よりやるではないか!』

「うるせーよー！」

好きでときめかせる訳ねーだろ!!

『それでこそ……ワイズマンが目を付けているだけのことはある』

「……ワイズマン?」

『そうだ。かの日食の日に多数のファントムを創造し…そして！貴殿が魔法使いとなる要因を生んだ男だっ!!』

『っ!?!』

それを初めて聞いたであろう部長達は驚きを隠せないでいたが——俺は何故だか冷静だった。

「……なるほどな」

『んん?』

……いや、冷静ってのは間違いだ。

俺は自分でも驚くぐらい声に怒りがにじんでいた……ッ!!

「そいつが……あの地獄を生み出しやがったんだなッ!!」

《チヨーイイネ! スペシャル・サイコー!》

俺は激情のままにドラゴスカルを具現化、その口腔内にありつただけの魔力を込める! 「お前をぶっ飛ばして、そのワイズマンの居場所を吐かせるっ!!」

《Explosion!》

力を解放して何時も以上に力を集中させる!

『素晴らしい殺気…いい具合にファントムの力を引き出せているようだな! だがその魔

力……些か危険だな』

ロキは不意に手を翳すと、何やら術式を発動した。

刹那——力が抜けていく感覚が襲い掛かった！

「——ぐっ!？」

な、何だ一体……!？」

『コイツ……俺の魔力を吸収している?!』

ドラゴンの一言は、まさに正解だったようだ。

俺の魔力はあつという間に奪われ、変身まで解除される！

「……くそが、あ!!」

俺はドラゴンの翼を生やして何とか体制を整える。

『フッフ……良いぞ、その憎しみに満ちた瞳!だが、貴殿の憎しみの根本にある感情は

……恐怖。違うか?』

「っ!？」

俺はロキの一言に——何も言い返せなかった。

違う、と言おうにも、口が金縛りにあつたかのように動かなかった。

『ふむ、あのサバトの儀式では数多の人間がファントムへと生まれ変わり死んだと聞く。その唯一の生き残りたる貴殿は人が人ならざる者へと変貌して行くのを見届けたと言うことか』

「……………」

その一言一言は、確実に俺の心に刺さる。

『人がファントムへと変わるのを防ぐ為、貴殿はただ戦い続けていた訳か』

「……めろ」

苦しいはずなのに、耳を塞いで座り込みたい気分なのに、俺は力なくも立ち上がった。

『つまりだ。貴殿は希望が絶望に変わる瞬間を嫌悪している訳ではなく、人が死んでいく瞬間に恐怖している訳だ！そして————いるはずもない者達に許しを請っている

！』

最後のその一言が決定的となり、俺は——吠えた。

「やめろおおおおおっ!!!」

《Welsh Dragon Absolution Breaker
!!!!!!》

ロキの言葉をかき消すように、俺は一気に極手を発動する！

『苦しいか？だが、そんな貴殿も救われる——己が手でな』

飛び出そうとブースターをかけた俺を制止するかのよう、ロキは手を翳した。

「あの術式………赤龍帝！その光の飲まれるな!!」

『もう遅い!!』

オーデインの爺さんの一言で動くよりも速く、妖しい光が俺を包み込んだ——

~~~~~

暗い………只管に暗い、暗黒だらけの空間。

今俺は、そんな真つ黒な場所にいることが分かった。

『ドライグ……ドラゴン……？』

だけど、そこには俺以外に誰もいなかった。

『……そうだ。ロキをつ!』

出口を探そうとした時、俺は何者かに足を掴まれた。

『なっ——』

振り払おうとした時、俺は固まった。

その顔は——

『死ね』

あの時、サバトで死んだ人の一人だ。

俺の隣で、ファントムになった——

それを皮切りに、闇からどんどんと人が作られていく。

その顔のどれもが、サバトで死んでいった人達。

全員、絶望した表情で、怨嗟の言葉を吐いていく。

『死ね』

『憎い……』

『羨ましい、妬ましい……お前だけが、生きてるなんて』

『お前なんて……』

あ、ああ………

『『『『『生きる資格は、ない』』』』』』

～  
～  
～  
～  
～  
～  
～  
～

木場 side

フアントムとなったロキの閃光がイツセー君を包み込んだ後、イツセー君は微動だに  
しなかった。

「ロキ…貴様、何を!？」

『慌てるな。時期に効果は現れるであろう』  
勿体付けた様な態度。

だが次の瞬間には、イツセー君は漸く反応を見せた。

「あ、ああ……………」

『相棒?！』





僕たちは、言葉を失った。

何故なら、イツセー君は……………

「ぐっ……………がはっ……………!!」

自分自身に、アスカロンを突き刺したのだ。

それと同時に、イツセー君の鎧も霧のように消滅した。

『クククク、アツハハハハハハハハ!!これは愉快だ!まさか自らに龍殺しの聖剣を突き刺そうとは!!それほど貴殿の闇は、罪の意識は深かったのだな!!』

僕は呆気に取られていたものの、ロキの哄笑で我に返った。

「イツセー君!!?そんな事止めるんだ!!」

尚も自分の体に深くアスカロンを差し込むイツセー君を止めるべく羽交い絞めにする!

が、イツセー君はそれでも突き刺そうともがく。

「イツセー君!イツセー君!!」

「ぐ、はっ!!!.....ごめん、なさい.....ごめん、なさい.....!!」

イツセー君は血を吐きながら、謔言の様に謝り続けている。

一体どうしたんだ!?

「.....ごめんなさい、イツセー」

それを見ていた部長はイツセー君の腹に魔力を込めた掌底を当てて気絶させる。

.....今のイツセー君は構わず刺そうとするだろうから、英断といえば英断か。

「ロキ、お主……」

『そう。お察しの通り、彼に精神の闇を幻術として掛けたのだよ』

「ですが、それは北欧では禁忌に指定されている筈です！何故貴方がそんな術を!?!」

『一介のヴァルキリーが口を出すか……まあ良い。その赤龍帝も死にぞこなっているのは気の毒だ。せめて楽に逝かせてやろう』

ロスヴァイセさんの質問には答えず、ロキは手を高く掲げた！

『我が呼び声により馳せ参じよ！愛しき息子よ!!』

アオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

天にも届きそうな遠吠えが聞こえた瞬間、僕達は寒気がした。  
今までに感じたことのないプレッシャー………これはっ!?

「マジかよ……あの野郎!!」

アザゼル先生が苦虫をかんだ表情で見つめる先には、一匹の巨大な狼。

美しい銀の体毛に覆われたその狼は、見る者全てを威圧するプレッシャーを放っていた……ッ!

「良いかお前ら……絶対にアイツに手傷を追うな……」

「……何なの?あの動物は……」

「お前らも名前ぐらいは聞いたことはあるだろ……奴は、フェンリル神喰狼だ」

——ッ!?

フェンリルだつて!

「神をも殺す魔狼……もし、その力が本当ならっ」

『本当だ、リアス・グレモリーよ。私の息子の牙はあらゆる神をも穿つ。さあフェンリルよッ!死にかけのその男の喉笛を一思いに噛み切つてやれ!!』

——来るッ!!

「木場!!イッセーを馬車まで引き上げろ!!今のイッセーの状態だと、一発でアウトだ!!!」

アザゼル先生とティアマトが僕の前に立つ!

特にティアマトは龍王の姿になる!

「行け、木場！アーシアに回復を急がせるんだ!!そのままでは、イツセーが……」

——  
ザンツ!!!

その言葉が言い終わらないうちに、ティアマトの蒼穹の鱗に爪が食い込んだ！  
鮮血が迸り、ティアマトは苦悶の声を上げる！

「ぐおおおおお!!?」

「ちい!!」

今度はアザゼル先生が殿を務め、無数の光の矢を放つ！

だがフェンリルは神速のスピードで動くと、一瞬で僕との距離を詰めてきた!!

「木場!!」

「祐斗っ!!」

……こうなったら！

僕は聖魔剣のシエルターを作り、何とか持てるスピードを出してフェンリルを突き放す！

フェンリルはそれを咆哮だけで碎いていき、更に迫ってくる!!

『無駄だ！フェンリルにもファントムの力がほんの少しだが追加されている！貴殿の剣では足止めにもならん!!』

「たえ、そうだとっても!!!」

僕の友達は、絶対に守ってみせる!!

せめてイツセー君だけは守ろうと、体を盾にしようとした時だ。

「彼を倒すのは、俺だ」

《Divide Field!!!》

突如としてフェンリルが何やらもがき苦しんでいた!

そしてよく見てみると、フェンリルのいる空間一帯が歪んでいる……!?

「これは、一体……」

僕達が呆気にと取られていると、

《シックス！ファルコ・セイバーストライク！》

今度はロキ目掛けて魔力で構成された六匹の隼が飛んできた！

『…小賢しい！』

歴は腕を振るうだけでそれを掻き消す！

今の子つて……………

「兵藤一誠は無事か？ 木場祐斗」

「おいイツセー！ どうしたんだよ、血塗れじゃねーか!!」

全身白の鎧とライオンを思わせるマスクをつけた金色の戦士が颯爽と佇んでいた。

イツセー君のライバル、白龍皇・ヴァーリと、魔法使い・ビーストこと、立神君だ。

『ほう！ 白龍皇に古の魔法使いか！ これは珍しいタッグだ！』

「お初にお目にかかる、悪神ロキよ。我が名はヴァーリ。貴殿を葬りに来た」

『…良い殺気だ！ 成程、今代の二天龍はどちらも面白い!!——だが、ここまで混戦状

態になってしまつては興がそれるといふもの。また近いうちに相手になつてやろう』

「よろしいのですか？」

『ああ。それに、あの男への良い土産もできた』

ロキの手に浮かぶのは、紫色の魔力の塊。

恐らくは、イツセー君から吸収したものだろう。

『では我が主神オーデインよ。また会談の日にお邪魔させていただく!! その時こそが真なる黄昏だ!!!』

ロキは指を鳴らして魔方陣を展開すると、それをヘルとフェンリル共々潜って行き、最後にはいなくなつた。

「アザゼル……」

「分かつてる。会談は絶対に守ってみせる………が、今はイツセーだ。アイツには聞きたい事が沢山出来ちまつたからな……」

次回、D×Dウィザード



ドライグ 『お前達には、知る権利がある』

イツセー 「俺は……あの時死ぬべきだったんだ……ッ!!」

ドラゴン 『お前の根底にあるものは……変わっていない筈だろう?』

M A G I C 6 5 『暴かれた真実』

グレイファイア 「私や……他の皆様も、そうでしたから。他の誰でもない、兵藤一誠に、救われたんです」

## MAGIC 65 『暴かれた真実』

木場 side

現在僕達がいるのはイツセー君の家。

そこには、イツセー君を除いたグレモリー眷属と会長率いるシトリー眷属と、白龍皇ヴァーリ率いる「ヴァーリチーム」が一同に集結していた。

「さてヴァーリ、今回の出来事に介入した訳を話してもらおうか。場合によっては、お前をひっ捕らえなきゃならねえ……っつても、お前はテロ組織に加担しているから、捕縛対象なんだがな」

アザゼル先生の発言に、ヴァーリはニヒルに笑って口を開いた。

「ただ強い奴と戦うため……と言う理由では不服かな？」

「ああ……と言つても、こっちは戦力が不足している。他の勢力も、『禍の団』の連中といざこざを起こしてる以上、この町の戦力だけで今回の会談は防衛しなきゃならねえ」

「ならば、俺達の戦力は欲しいところだろう？」

……そう、ヴァーリは今回の戦いにおいて、「タッグを組んでも構わない」と告げてきたのだ。

こればかりは僕達をはじめ、先生達も驚きを隠せなかった。

「まあそりやそうだがな。ファントムになった悪神ロキにその娘ヘル、更にはフェンリル……不安材料のオンパレードだ」

「…アザゼル、気持ちはわかるけど、今はイザコザを起こしている場合ではないと思うの。お兄様だつて了承しているのでしょうか?」

「……はあ、そうだな。取りあえず、ヴァーリの事は置いておく。それよりも——」  
と、ここで扉が開いた。

「はあ、疲れた……」

「もうへ口へ口にゃん……」

立神君と、小猫ちゃんのお姉さん、黒歌だ。

二人には、イツセー君関連で動いてもらってたんだ。

「黒歌。イツセーの容態は?」

「ちよつとは労わつてほしいにゃん、総督さん♪」

「茶化すな」

「はいはい。傷に関してはアーシアちゃんが直してくれていたから大した事はないにや

ん。自然治癒力も活性化させておいたし、赤龍帝ちゃんなら明日ぐらいには全快よん」

「そうか「だけど——」…？どうした黒歌」

「問題は精神のほうよ」

——ッ。

僕たちは黒歌にそう言われて、安心しかけていた体を硬直させた。

「深層心理の奥深くをロキの魔術で食い破られていた……あんな状態で生きていたのが不思議なぐらいよ」

「その為に立神にも動いてもらったんだろ。で、どうだった？」

立神君はイツセー君と同じく他者の精神世界——アンダーワールドへと入れる魔法を使える。

今回はイツセー君の内側に入って起こしてもらおうと思ったんだ。

「それが…その……」

「…何だ？」

「アイツのアンダーワールドに、変なノイズが掛かってて、何も映ってなかったんすよ。しかも、変なドラゴンに追い出されるし」

「変なドラゴン？ドライグじゃないのか？」

「全く違ったわ。全身銀色で所々に金の装飾があつて、眼が赤色だったわ。あ、後——  
—ドラゴンっぽかつたけど、魔力の本質はファントムその物にやん」

『ツ!?!』

黒歌の言つたことに僕達は驚きを隠せなかつた。

イツセー君の中にいるドラゴンは、ドライグだけじゃないのか!?

「だがアザゼル。アンタは疑問に思つてたんじゃないのか？」

「疑問？」

「兵藤一誠の使う……あの四色の、ドラゴンスタイルだったか？その力の元が」

「……ああ。あんな力をドライグが持つていたつていうのは全く聞かなかつたからな。  
イツセーやドライグに聞いても、上手くはぐらかされるし」

……魔力についての疑問は、僕達も思つていた。

イツセー君が使う魔力は、今までに見たどんな魔力よりも、薄暗くて禍々しかつた。  
そして————以前冥界で戦つたフェニックスといつたファントムとイツセー君の  
魔力が、不思議と同じように感じていた。

そして今回の一連の出来事——。

『素晴らしい殺気……いい具合にファントムの力を引き出せているようだな！だがその魔力……些か危険だな』

ファントムの力と、確かにロキはそう断言していた。  
もしかするなら、イツセー君は……。

「皆さま」

「……グレイファイア」

考え込んでいた僕達のもとに、グレイファイアさんが登場した。  
彼女にはイツセー君の看病をお願いしていたんだ。

「どうかしたのか？」

「……赤龍帝ドライグが、皆様をお呼びです」

~~~~~

グレイフィアさんに言われて、僕たちはイツセー君の部屋へと訪れていた。
「イツセー君……」

イツセー君は、死んだように眠り続けていた。

顔色も酷く青ざめ、時折苦しそうに、微かな呻き声をあげるだけだ。

そして、イツセー君の傍に座っていた人物が顔を上げた————つて！

「まだ聖剣と龍殺しのダメージが抜けきってないらしいの……」

「お姉さま!？」

「ソーナちゃん」

そう、魔王セラフオール様だ。

何故ここに？

「グレイフィアちゃんに呼ばれたの。ドライブ君が話があるって」

『いや、天龍を君付けかよ……』

呆れるように突っ込みを入れたのは、イツセー君の左手の宝玉から聞こえたものだ。

「ドライブグ、何のつもりだ？俺達を呼び出して」

『ああ、実は金に困って……まあ、冗談はさておき』

………赤龍帝は今日も平常運航のようだね。

しかも微妙に滑ってる感が満載なんだけど。

「おいおい、お前さん何だか調子悪そうだな」

『うるせえ！……実はな、お前たちに、相棒の事を話そうかと思ったんだ』

——それは、僕達が一番聞きたかったことだ。

僕達は、あまりにもイツセー君のことを知らなさすぎる。

「……っ。随分急だな」

『お前達だからだ。お前達には、知る権利がある』

その言葉を皮切りに、ドライグは口を閉じた。

僕達が続きを待っていると、ドライグは口を漸く開いた。

『単刀直入に言う。相棒の中には……ファントムがいる』
やっぱり……！

「……………それは、ロキが言っていたサバトって奴と関係があるのか？」

『ああ。半年ほど前、日食があったのは知っているな？』

そういえばあったね。

だけど、それとイツセー君に、何の関係が？

『あの時、大規模な魔力の流動があったことは、確認しているか?』

「……ああ」

「ちよつと待って! 私達、そんな話は一度も……」

確かに、それは初めて聞いた話だ。

「そりゃそうだ。確認できたのは三大勢力のトップ陣くらいだからな。とは言え、特に何があつた訳でもなかったから、そこまでの騒ぎにはならなかった」

『あつたんだよ。その騒ぎが』

ドライグは自棄に力を込めて先生の意見を一蹴した。

「……?」

『ロキの言っていた通り、あの日———大多数のファントムが生まれた』

——— ツ!?

「……ちよつと待て。ファントムつてのはゲートと呼ばれる人間以外からじゃ誕生しないんだろ? まさかっ」

『そうだ。それと引き換えに、一人を残して大多数の人間が………死んだ』

『!?!』

あの日食の日に、そんなことが……!?

……ん?でも待って。

「ドライグ。今一人だけ生き残ったといっていたな」

『ああ。それが——ここにいる、兵藤一誠だ』

「じゃあ、イツセー君は……」

『そう。その儀式で、相棒はファントムを生み、魔法使いになった。先程その小僧を追い出したのは、相棒のアンダーワールドから生まれたファントム——ドラゴンだ。そうだろう?』

『……ああ』

今度は、イツセー君の右手の甲が光り、そこからドライグとは違う声が響いた。

「……お前さんが、イツセーがその儀式で生んだファントムか」

『その通りだ。そして、この兵藤一誠が使う魔力は、俺の物でもある』

……そうか。イツセー君の魔力が禍々しかったのは、ファントムの魔力を行使していたからなのか。

「……では、イツセーはゲートだったのか?」

『その通りだ』

「だが、イツセーはあの苦痛を耐えたというのか……?」

ゼノヴィアはこの中では唯一のゲートだった。

事実、彼女も一度はファントムを生みかけた。が、それはイツセー君に未然に防がれた。

『最初はお前と同じように、相棒もファントムを生みかけた。だが……相棒は踏みとどまった。そう……希望を捨てなかつたんだ』

「……希望を」

『ああ。亡き両親との約束——「他人の希望となれ」、その言葉一つで、相棒は生き残った。だが、この出来事は、相棒の心に深い傷を残した』

深い、傷……。

『絶望しかけていた最中でも、相棒は意識があつた。だからこそ、嫌でも脳裏に焼き付いてしまった。——人が死ぬ瞬間が。そしてそれを救えなかつたという後悔……それだけが残った』

「……だが、私にはわかる！」

「ゼノヴィアさん……」

ゼノヴィアは力強く否定した。

「あの痛みは、想像を絶するものだ。イツセーも同じように苦しんでいたのなら、他人を救えなかつたとしても、仕方ないじゃないか！」

『…相棒は、ドがつく程のお人よしだ』

ドライグは、そんなゼノヴィアの啖呵に言い返すことなく語り始めた。

そんなドライグの様子に、僕達は困惑した。

「な、何を……？」

『相棒は、もうその時点で禁手に目覚めていた。だから、力を持つ者こそその責任感も持っていた。例え同じような状況に陥っても、何故救えなかつたんだ……とな。ゼノヴィア、お前の言うように——相棒は割り切れなかつたんだ』

………イツセー君は、責任感が意外にも強い。

普段はへらへらしているけど、自分が犯した過ちはちやんと謝罪するし、ギヤスパー君の事についても責任を感じていた。

力を持つていたからこそ、「そんな場面で自分はどんなに苦しんでも動かなきゃならない」……そう思っていたんだろう。

『…誰か一人でもその場にいれば、相棒はここまで拗らせることはなかつたろうさ。だが——現実は違った。相棒の前には、誰一人としていなかった。その時の相棒に残されていたものは、その代償に得た魔力だけだった』

「……そうだよ。俺は……誰一人として救えなかった」

——ッ！

この声は……

「イツセー君!!」

イツセー君からだった!

驚く僕達を気にすることなく、イツセー君は上半身だけ起こした。

『相棒……』

「……ドライグ。全部、話したのか」

『……ああ。すまん』

「謝るなよ。何時かは……話さなきゃならなかったしな」

イツセー君は力なく笑うと、僕達を見据えた。

「……ごめん。俺、皆を信用していない訳じゃなかった。でも——怖かったんだ」

何か声をかけようとした時、イツセー君はポツリと語りだした。

「大勢の人達を足蹴にしてまで、魔力を得たなんて……………最低な奴だって、拒絶されるのが怖かった。人殺しって、貶されるのが、怖かった」

「そ、そんな事は——ッ！」

「でも本当なんだよッ!!!」

ないと言おうとした部長の声を、イツセー君は強く拒絶した。

その様子は、何時も飄々としていたイツセー君とは、まるで別人だった

「この事実は、ずっと変わらない…………ツ。俺は、皆が思うほどの英雄なんかじゃないんだッ」

その様子は、まるで懺悔のようにも見えた。

「俺は…………助けてやれなかったッ！俺の頭には、今でもその人達が苦しんでるんだ!! けどどうやったって、俺はその人達を救えない……………希望だって、守れないんだッ!!」

一つずつ、イツセー君の仮面が、剥がれ落ちていくようだった。

「今まで戦ってきたのだから……………結局はただの自己満足だったんだって……………救えなくて、気になって誤魔化してるだけなんだってッ!!」

「イツセー……」

部長が声をかけようとするが、何を言ってやればいいのか分からない様子だった。

「俺は……あの時死ぬべきだったんだ……ッ!!」

イツセー君はそう言い切ると、皆を無視して部屋から出て行った。

「……………何が、親友だッ」

僕達は、拳を握り締めた。

僕は……いや、僕達はイツセー君の事を半分も理解してやれなかった……何が、何が仲間だッ!!

「イツセー君……君は、ちゃんと救ってるんだ」……………こう伝えてしかるべきだったのではないのか!?

それは嘘なんかじゃない……………そう、嘘や、同情なんかじゃないんだ

—————行かなきゃ。

「イツセー君の、元へ……………」

だけど、僕達は気づかなかつた。

グレイファイアさんが、いなくなっている事に。

~~~~~

イツセーは現在、自宅の屋上にいた。

頬を撫でる風が心地よく、イツセーはこの屋上を気に入っていた。

「……………」

膝を抱えるイツセーに、声をかける者がいた。

『ふん……………何時もの馬鹿らしさはどうした?』

ウィザードラゴンだ。



『……』

『…おい。何とか言ったらどうなんだ』

何も答えないイツセーに、ドラゴンは苛立つように声を荒げる。

『……結局、希望なんて、俺なんか守れるわけなかったんだ。俺に、そんな資格なんてっ』

『……見損なつたぞ、兵藤一誠』

漸く口を開いたかと思うと、出てきたのは自己嫌悪の言葉。

そんなイツセーに、ドラゴンは吐き捨てるように言い放つた。

『俺の知っている貴様は、そんな弱音を簡単に吐くような奴ではなかったぞ』

『…何が言いたんだよ』

『……俺が言うのも変だがな、貴様は希望を守らねばならん』

ドラゴンから放たれた言葉は、彼からは想像もつかないワードだった。

『……無理だよ』

『無理かどうかは聞いてない。やらねばならん、と言っているんだ』

『何だよっ!?!絶望していった人たちの希望になれなかった俺が、今更希望になんて—

——』

『何時までも過去に囚われるなど言っているッ!!』

『ツ!!』

ドラゴンにしては、珍しく怒声が放たれた。

イツセーは呆気にとられ、茫然となる。

『……貴様は死の間際の両親に何と言われた？ 貴様は、皆の希望なのだろうか？』

『たとえ今まで貴様が自己満足という安心感に充足する為に戦っていたとしても……  
貴様の根底にあるものは……変わっていない筈だろうか？』

『ツ』

その論すような言葉は——小さく、だが確実にイツセーに響いた。

『……そうだろう？ ウエルシユドラゴン』

『……チツ。言いたい事全部持っていきやがって』

『……ドライグ』

今度は、ドライグがイツセーに言葉をかけてきた。

『お前はまだ17のガキだ。そこまで深く考えるな……つて言っても無駄だな』

『……』

『ま、これ以上は俺達が言うべきことじゃない。それに、お客さんも来たようだしな』

「え………!!？」

思わず表立って声を出して振り返った時、イツセーは眼を見開いた。

「イツセー様」

「…グレイフィア、さん」

先程イツセーを探しに、木場達より速く飛び出した、グレイフィアだ。

グレイフィアは「失礼します」と告げ、イツセーの隣へと腰掛ける。

「……グレイフィアさん。俺はっ」

「貴方は……ちゃんと救えています」

「っ」

ピクリと反応したイツセーに構わず、グレイフィアは微笑みながら続ける。

「大人の柵に囚われていたリアスお嬢様、自分の血を拒絶していた朱乃様、教会から追放され独りぼっちだったアーシア様、姉との過去の出来事に苦しんでいた小猫様、心折られ絶望したゼノヴィア様、他人を恐れていたギヤスパー様……そして、私だって幼い貴方の言葉に救われました」

何故だろうか。彼女の言葉は、一言一言すべてが、心にすんと落ちていく。

まるで、待ちわびていたように。

「……俺はただ、背中を押しただけですよ」

「いえ、貴方は確かに皆の心に希望の光を灯していつてます……イツセー様」

「……？」

「自己満足に浸って、安心しない人なんていませんよ」

「！」

イツセーは眼を見開いた。

「大事なのは、そこから次の行動に移ろうか否かだと、私は思います。イツセー様は、そこで満足して終わらず、際限なく人を救っています。そんな貴方を、誰が咎められるのですか？」

「……」

「過去に貴方が救えなかった人達を思つて溜め息を吐くよりも、今を生きてる人達の絶望を払ってほしいと、イツセー様が救えなかった方々も、思っている筈ですから」

優しい声音のグレイフィアに、イツセーは………。

「何で……」

「？」

「何でグレイフィアさんは……皆は……俺を信じられるんですか？俺は、俺は

………っ」

声を震わせながら紡がれたのは、ずっと抱えていた闇……否、本音だった。

それは、叔父の茂にも、相棒のドライグにすら打ち明けた事もなかった。

——— こんなにも自分の事が信じられないのに。

静かに呟かれた本音は、確かにグレイファイアに届いた。

グレイファイアは一瞬呆気にとられるが、次にはクスリと笑った。

まるでそんな事か、とでも言う様に。

「イツセー様」

「…!?!」

ここでグレイファイアは、優しくイツセーを背後から抱きしめた。

急に感じた温もりに、鼓動が僅かに早くなる。

「私や…他の皆様も、そうでしたから。他の誰でもない、兵藤一誠の言葉に、行動に救われたんです」

「!」

「ご両親との約束を守ろうとして、空回る事だっただけとは思いますが、貴方に

よって救われた存在だって、ちゃんといるんです。だから——」

それを忘れないで……………。

「そうよ、イツセー」

「！」

そう告げられたと同時に感じたのは、複数の気配。  
顔を上げると、そこにはリアス達がいた。

「私も、貴方にちゃんと救われた。だからこうして、自由でいられるのよ？」

「イツセーさんは独りぼっちだった私に、色々な物を見せてくれました。そして——  
—お友達だって沢山増えました。私も、イツセーさんに救われました」

「…血に悩んでいた私を、貴方は拒絶しなかった。私、それだけで、どれだけ救われたか  
……………」

「だから、そんなに自分を下卑しないでください……」

「それに、私達はお前を拒絶したりはしないさ。だろう、ギヤスパー？」

「勿論ですう！ イッセー先輩も、もつと馬鹿になった方がいいと思います！」

「今度からは、ちゃんと私達も頼ってね！ 私達がイッセー君の事、一杯癒しちゃうから！」

「イッセー君、君はこんなにも皆の希望になってるんだよ。君は、ちゃんと希望を繋いでいるんだ」

皆からのその言葉により、イッセーは………

「……………うつ……………つくう……………!!」

静かに、泣いた。

唇を噛み締め、静かに、確りと、泣いていた。

その涙は、両親を喪った時以来だった。

次回、D×Dウィザード

ヴァーリ「マシになった様だね」

黒歌「それでこそ赤龍帝ちゃんにゃん♪」

イツセー「俺、ほっとけない程バカなんで」

MAGIC 66 『親子の絆』



## MAGIC66 『親子の絆』

「よお、イツセー。随分マシな顔つきになったな」

皆に真実を打ち明けた翌日、俺の元にアザゼル先生がやってきていた。

「……はい。お陰様で」

「…そうか。で、さっそくなんだが今回の作戦……ヴァーリ達と手を組むことになった」  
「ええ!？」

あいつ等が何でいるのか分んなかったけど、嘘だろ!？」

まさかその為に……!？」

「ま、お前が驚くのも分かる。けどな、こつちも戦力不足なんだ。今回のロキの妨害は、この街にいる連中でなんとかしなきゃならねーんだ」

「はあ」

「だからそこんところは理解しといてくれ」

「…分かりました」

正直、まだ飲み込めてないけどヴァーリの実力は俺が身をもって知っている。

それに先生が決めたことだ、俺は信じよう。

「それともう一つやってもらいたい事があるんだが……それは明日に回す」  
「え？」

「お前、まだ聖剣のダメージが抜けきってないんだろ？なら今日は休んどけ」  
「…良いんすか？」

「お前はたまには厚意に甘えろ」

そう言つて先生は俺の部屋から去つていった。

そうは言われても……

「暇だなあ……」

聞けば部長たちは修行に精を出しており、俺も参加したかったが、こんな体なのでまだ無理だと止められた。

「久しぶりにゲームでもやるか？」

それに最近、部長たちがいるから出来なかつたんだよな。

何がつて？

エロゲに決まつてるだろ？

よし、そうと決まれば早速やるぞ！

俺はパソコンを立ち上げて、以前進めていた新作のエロゲをプレイしていく。

おお、俺の好きな絵師さんだ！

「随分と面白そうな事をやっているね」

「まあ暇だし。それよりノックぐらいしろよな、ヴァーリ」

俺はさも当然という風に入ってきていたヴァーリに答えた。

「……漸く君らしい顔つきになったようだね」

「お陰様でな。それとサンキューな、助けてくれて」

「なに、気にするな。君を倒すのは俺だからね。他の奴に倒されるのが気に食わなかっただけさ。それは兎も角……」

「ん？」

「そのゲームは面白いのか？」

……へえ。

「なら何本か貸してやろうか？あ、つってもお前パソコン持っていないか」

「パソコン？ああ、カイトが以前自作したものか」

「カイト？」

「以前、君が冥界であった男だ。青い隈取をしていた方のね」

「……ああ、アイツか」

あの「ハルトオオオオオ!!」って叫びそうな奴ね。  
アイツカイトって言うのか。

「この戦いを切り抜けたら、貸してもらおうかな」

「おう」

「さて、俺は修行に戻るよ」

「ああ、分かった」

うーん、まさかヴァーリがエロゲに興味持つとはな。

人生何があるか分かったもんじゃねーな……。

コンコン

「はい」

「はろはろ♪」

そう陽気な感じを装って入ってきたのは、黒歌。

「お前、また小猫ちゃんにちよつかいかけたのか？」

「ちよつかいなんて失礼しちゃうにやん。姉妹同士のスキンシップよん？」

「スキンシップしたいなら俺が後で猫じゃらし使ってやつから、それでいいだろ」

「良くないわよ！つていうか私はそんなんで満足するほど安い女じゃないにやん！」

「尻は軽そうなのにな」

「にやんですつてえ!?!」

此奴も何だかんだで分かりやすいな、オイ。

お、確かこの場面はこのセリフ選択で別ルートだったな……。

「つて、聞いてんの!?!」

「にやーにやー鳴くなよ。今良いトコなんだからさ」

「こんなスタイル抜群の女の子目の前にしてエロゲなんてどんな神経してんの!?!」

「おまえの場合ホイホイつていくとドナドナされそうで怖いからな」

と言うか自分でスタイル抜群って言うのかよ。

まあ、強ち間違つてる訳でもないんだが。

「……ま、もうその感じだと大丈夫そうね。心配して損したにやん」

「あー、それに関してはサンキューな」

「べ、別にアンタの為にやった訳じゃにやいんだからっ！ただ白音が可哀想だったからっ」

「ハイハイ、ツンデレ乙」

しかし今小猫ちゃん大事にしていますよ発言堂々としたよな？

だとしたらツンデレ娘じゃんか。

『猫耳爆乳ツンデレとかあざと過ぎるだろ』

『おまけに処女か……卑劣なキャラだな』

「あざとくなんてないわよこのおっさんコンビ!!」

『おっさん言うな!!それは声だけだ!!』

『いや、つい最近生まれた俺は兎も角、貴様はもうおっさんだろ!!』

『はあ!?俺は永遠の二十歳ですから!残念!!』

「うるせーぞお前ら!!」

ガタガタ騒ぐなよ!

今一番良いシーンなんだから!!

「はあ、はあ………あ、あんた達と喋ると疲れるにやん」

「そうかあ?主にボケはドライグの管轄なんだけどな」

『何勘違いしてる?お前もボケ担当なんだよお!!』

『貴様等二人とも大ボケだ!』

「…白音は苦労しそうね。ホントに」

「あ、そうにやん」と黒歌が思い出したかのように手を叩いた。

「赤龍帝ちん」

「何だ？」

「滅びのお姫様のとこの女王ちゃんが呼んでたわよ」

「朱乃さんが？」

何か用なのかな……………けど、俺もこれが終わったら向かおうと思ってた所だったし、丁度良いな。

「向かってみるか」

~~~~~

「朱乃さん？」

「イツセー君」

俺は家の地下に向かうと、その片隅で休憩していた朱乃さんに近づいた。

「ごめんなさい。態々来ていただいたて」

「いえ、俺も丁度用事がありましたから」

俺は「失礼します」と断ってから、朱乃さんの横に腰掛ける。

「…それで、俺に用って言うのは？」

「実は……………どうやったら父と仲直りできるのかと思ひまして」

「……バラキエルさんど？」

「……これは意外だ。」

「でも、朱乃さんは……」

「ええ、確かに父のことは許せませんわ。ですが……本当は分かっていたの。父は何も悪くないって」

「！」

朱乃さんは、そのまま言葉を続ける。

「でも、あの時の私はまだ子供だった。母様を失って直後、私は何かを憎まなければ自分を保てなかった。だから父様を憎むしかなかった！でも……そのままじゃいけないって、このまま喧嘩別れになるのは嫌だって、思うようになったの……でも私、あんな事を言ったのに、今更どんな顔をして言えばいいのかっ」

「——そんな深刻にならなくても大丈夫ですよ」

「っ！」

俺は朱乃さんの手を取ってそう言った。

「お父さんだつて、おんなじ事考えてると思いますよ。どうしてもっと早くに帰れなかったのかつて。もっと歩み寄れなかったのかつて……バラキエルさんは朱乃さんの事、邪険に扱ったりしませんよ。だつて——この世でたった一人の肉親なんですか

ら」

「イツセー君……」

「……実は、俺の用事も、その事だったんです」

「っ！」

俺がそう言うと、朱乃さんは驚いたように眼を見開いた。

「御免なさい。実は先生から聞いてたんです、朱乃さんの事。で、どうやったら仲直りできるかなって考えてて……」

「……どうして？」

「?!」

「どうしてイツセー君はそこまで……貴方は今自分の事で精一杯な筈なのに……」

「…俺、一度関わったら、とことんまで関わりたいんです。それに——」

「……」

「俺は両親に、孝行する事が出来なかった。何時かは、親と別れる日が来る。朱乃さんには、そんな思いを味わってほしくなかったんだ。だ、だから……し、失礼しますっ！」

「!!」

俺は朱乃さんを——抱き締めた。

「一度関わったら、最後まで何とかする。それが俺——兵藤一誠だから。俺が、貴方

達親子の懸け橋になるよ。だから、怯えずに前へ進もう……………朱乃」

「い、イツセー…くん……………」

「俺は最後まで見捨てたり、放り投げたりしない。以前約束したから。俺が君の希望になるって」

「……………バカ。でも、ありがとう、イツセー……………」

……………これで良いんだよな？

———
父さん、母さん。

MAGIC67 『その答えは』

親子間の修復の話をし終えた後、朱乃さんは再び修行へと戻っていった。

……ちよつとは背中を押せたかな、俺。

さてと、

「部屋に戻るか」

俺は部屋に戻ってゲームをしようと階段へと歩を進めた。

すると、

「……ん？」

台所から何やら良い匂いが漂ってきた。

何だろう……俺は気になって台所を覗いた。

「イツセー様？」

「グレイフィアさん……！」

そこではグレイフィアさんが何やら料理をしていた。

グレイフィアさんの手元には湯気の立つ小振りの鍋が。

どうやら良い匂いの根源はそこかららしい。

「丁度イツセー様の元へと向かおうと思ひまして……」

「え？俺の所へ？」

「はい……。その……」

グレイフィアさんは何やら恥ずかしげにもじもじし始めた。
そのいじらしい様に俺の心臓は早鐘を打つ。

……冥界で感じたあの時の気持ちと、おんなじだ。

でも、決して苦しくなく、寧ろ心地良い。

……もしかして、この気持ちは。

「お粥を作ってみたのですが、良かったらどうですか……う？」

等と思っていたら、グレイフィアさんは意を決した様に俺にそう言ってきた。

~~~~~

丁度小腹も空いていたので、俺は快諾した。  
んで現在は、俺の部屋。

グレイフィアさんはれんげで粥を掬うと、息を吹き掛けて冷ましていた。

正直、グレイフィアさんの綺麗な唇から聞こえる吐息に、ドキドキが止まらなかった。  
「はい、どうぞ」

「あ、じゃあ……失礼します」

差し出されたお粥を一口咀嚼。

「……美味しい！美味しいですよ！」

「お気に召していただけで、何よりです」

グレイフィアさんは綺麗に微笑むと、続けて食べさせてくれた。

流石に恥ずかしくなかったので自分で食うと断ると、「もっと頼って下さい」と少し怒り気味に言われ、すごすごと食べさせてもらった。

正直な話……心臓がどうにかかなりそうだった。

「……、御馳走様でした！」

「はい、御粗末様です」

今まで生きてきた中で一番恥ずかしい食事だったな……。

それにずっと心臓が高鳴りっぱなしだった。

「イツセー様」

「はい？」

「あまり御無理はなさらずに。貴方はまだ休まなければならぬ身ですから、ゆつくりなさって下さい」

そう言われ、俺は強引にベッドに寝かされた。

「グレイフィアさん………」

「大丈夫です。眠るまで、私が側にいますから………」

手を握られ、慈愛が籠められたその言葉に、俺はこの胸の高鳴りの正体を悟った。

「……俺はこの人が、好きなんだと。」

もつと、ずつと側にいたい。俺の全てを掛けてでも、守り抜きたいと。

でも、何で好きになったんだろう？

何時からだろうか、この気持ちが始生えたのは。

俺は微睡みの中でそれをずっと考えていた。

『スタイルもルックスも抜群。そんな女に惚れない訳ないだろう？』

違う。って言うか俺は容姿やスタイルで好きな人は選んだりしない。

『自分の闇を包んでくれたからだろう？それにお前は誰より母性愛に飢えていたじゃないか』

違う。……母性愛を欲しがったのは事実だが、闇を包んだのは皆もおんなじだ。

皆俺の闇を受け入れてくれた。誰一人逃げ出さずに聞いてくれた。

『……………それでも辛いなら、俺がーさんの心の支えになるよ。弟さんが見つかるまで』

『死んだ父さんと母さんが言ってくれたんだ。俺は希望なんだって。だから、これからも皆に希望を与えていけて、俺は最後の希望だって、言ってくれたんだ』

『俺、まだまだ弱いけど……………何時か強くなったら、改めて、ーさんの希望になる。そう言うよ！何時か、必ず！』

俺が微睡眠の中で見たのは、幼き日の光景。

子供の頃にした他愛ない約束事。

だが、俺はそれを誰に誓った？

古い記憶は朽ちて枯れていく。そんな言葉を聞いたことがある。



だが——俺は絶対にこの約束事は忘れていなかった。

なら、それを誓った相手を、忘れて良い訳ないだろ!!

ふと見上げたその視線の先には、グレイフィアさんがいた。

その顔と、記憶の中の約束事をした相手の人物像が、不思議と合致していた。

——ああ、そうか。

「……ははっ」

「?どうかなさいましたか、イツセー様」

そうだよ。

普段のクールな表情。

クレープを初めて食べた時の嬉しそうな顔。

たまに見せる少し怒った風の雰囲気。

頬を染めて照れる横顔。

惹かれる要素なんて、探さずとも合ったじゃないか。

「何でも無いです………おやすみなさいーグレイフィア」  
俺は瞼を下ろし、眠りについた。

この戦いを終えて、この気持ちにケリを着けよう。

今はまだ、言うべき時じゃない。

でも、確かな答えが、俺の胸には導かれた。

# MAGIC 68 『悪神、攻略』

よー皆、イツセーだ。

今日俺達は家とは違う特別な場所にいる。

何でもロキ対策について詳しい奴がいるからそいつからご享受してもらおうらしい。

「先生、そのご享受してもらおう奴って誰なんですか？」

「ああ、五大龍王の一角——『スリーピング・ドラゴン終末の大龍』ミドガルムオルズだ」

——ッ。

まさかの龍王か。

ちなみに一緒にいるヴァーリは聞かされていたらしく、特に何も言ってこなかった。

そしてそのヴァーリの隣に控えているのは、先日話に出てきた天城カイト。

そのカイトは別に何か言う事もなくただ前を向いている。

この中だと唯一の人間なんだよな、コイツ。

「二天龍、龍王——ファープニル、ティアマツト、タンニン、ヴリトラ……そして、

そこにいるカイトの龍の力を借りて『ドラゴン・ゲート龍門』を開く」

「成程。だからティアを連れて来いって言ったんですね」

「そう言うこつた」

そして、先生からの要望によりタンニーンのおつちちゃんが飛来してきた。

着地すると同時に響く轟音。

「おつちちゃん！」

「兵藤一誠……アスカロンを自らその身に刺したと聞いた時は冷や汗を掻いたぞ。その様子だと大丈夫なようだな」

「ごめん、心配かけちゃって」

「何、気にするな」

おつちちゃんは気さくに笑った。

だがヴァーリを見た途端、その牙を見せて威嚇した。

「白龍皇か……もし不審な動きを見せればその時は容赦なく噛み砕くぞ」  
対してヴァーリは苦笑いするだけだった。

ホント肝が据わってんなコイツ。

「そつちの小僧はヴリトラ。そして……」

「冥界以来だな。龍王タンニーン」

カイトは動じる事無くそう返した。

「…イツセー。大丈夫なのか？」

「大丈夫だつて、ティア」

「そうか……」

「やっぱ、心配かけすぎたかな……」。

『それはそうだろう。お前は聖剣、それも龍殺しの物をブツ刺したんだ。生きている方が不思議なぐらいだ』

とはドライブグの弁だ。

「そう言えばさ、そのミドガルムオルズってどんな奴なの？」

「そうだな……。簡単に言えばそのマダオと化したドライブグ以上のグータラ野郎だ」

「えっ……」

それは…相当じゃん。

俺コイツ以上のグータラドラゴン知らねえぞ。

『何サラツと人…もといドラゴンをマダオ扱いしてんだよ』

「お前否定出来ねえだろ」

『デスヨネー』

お前自分で言うなよ！

突っ込んだ後、タンニーンのおっちゃんが教えてくれた。

「あやつは基本的には動かん。世界に動き出すものの一匹だからな。使命が来るその時まで眠りについているのだ。最後に会ったのは数百年前だが、世界の終わりまで深海で寝て過ごすと言つて、そのまま海の底へと潜つてしまった。それ以来あやつとは会つていない」

「へえー、良いなあ……」

『えゝっ』

なんだその目線は!?

「さて、魔方陣の基礎はできた。あとは各員、指定された場所に立つてくれ」

先生に指示され、魔方陣の上に立ち、各自指定ポイントに立ったことを先生が確認すると、手元の魔方陣を操作した。

カッ!

淡い光が下の魔方陣に走り、俺のところは赤く光り、ヴァーリのところが白く光った。そして先生のところは金、匙のところは黒、ティアのところが青、おっちゃんのところは紫色、カイトのところが水色に光り輝く。

『それぞれが各ドラゴンの特徴を反映した色だ』

と、ドライグが説明してくれる。

へえ。

『だがあのカイトとかいう小僧の色は……まさか』

と、ドライグはカイトの光から何かを察したのかブツブツと話し込んでしまった。

な、何だ？

魔方陣が発動し、部屋が一瞬、光に包まれた。

すると、魔方陣から何やらが投影され始めた。

立体映像が徐々に俺達の頭上に作られ——俺達の目の前にこの空間を埋め尽くす勢いの巨大な生物が写し出された！

で……………でけええええええええ!!!

明らかにグレートレッド以上あるぞ！

何だこのデカブツ!?





……龍王、なんだよな？

『……ドライグとアルビオン、ティアマツトまでいる。それにファープニルとヴリトラも……それに、銀河の龍も……？どうしたんだい？もしかして、世界の終末なのかい？』

「いや、そうではない。今日はお前に聞きたい事があつてだな——」

『ぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐんぐん……』

あ、また寝やがった！

「全く変わってないな……この寝太郎は……」

ティアアが嘆息してる！

「話の最中に寝るな!!もう十分なほど寝てるだろうが!!」

『ドラゴン版ねてる君だな、相変わらず』

『すかびく……』

今軒変わったぞ!?

コイツ絶対起きてるだろ!!

『タンニーンはいつも怒ってるなあ。それで僕に訊きたいことって?』

「聞きたいことは他でもない。おまえの父と兄、姉について訊きたい」

ん、兄弟？

どういう事だ？

怪訝に思う俺に気づいたのか、ティアが解説してくれた。

「ミドガルズオルムは元来、ロキが作り出したドラゴンでな。強大な力を持っているんだが、見ての通りこの性格だ。北欧の神々もこの性格には困り果ててな。結局は海の底で眠るよう促したのだ。せめて、世界の終末が来たときには何かしら働けと言つてな」

「何かしらつて……。なんとも投げ遣りだな」

「まあ、既に北欧の神々もこいつには何も期待してないだろうがな」

それダメじゃん！

このドライグ以上に残念すぎるぞミドガルムオルズ!!

『ダディとワンワンとお姉ちゃんのことかあ。いいよお。あの三人にはこれといって思入れはないしねえ。あ、タンニーン、一つだけ聞かせてよお』

「なんだ？」

『ドライグとアルビオンの戦いはやらないのお？』

俺とヴァーリを交互に見ながら言ってきた。

「ああ、やらん。今回は共同戦線でロキ達を打倒する予定だからな」

『へえ。二人が戦いもせずと並んでいるから不思議だったよお。今代の赤と白はどちらも実力者みたいだからねえ。面白い戦いになると思うんだけどなあ……それに、赤の方

は変なドラゴン？つぼいの宿してるから、特にねえ』

——ッ。

コイツ、俺の中のファントムに気付いたのか。

『まあ、いいやあ……。ワンワンが一番厄介だねえ。只でさえ強いのに、噛まれたら死んじやうことが多いからねえ。でも、弱点はあるんだあ。ドワーフが作った魔法の鎖、グレイプニルで捕らえることができるよお。それで足は止められるねえ』

「…オーデインから貰った情報では、ロキとフェンリルは強化されていてな。それで前から更なる秘策を得ようと思ってるのだから」

『へえ……。ダディったらワンワンを強化したのかなあ？なら北歐に住むダークエルフに協力してもらって、鎖を強化してもらえばいいんじゃない？確か長老がドワーフの加工品に宿った魔法を強化する術を知ってるはずだよお』

先生がヴァーリの方を指さす。

「そのダークエルフが住む位置情報を白龍皇に送ってくれ。この手の類のことはヴァーリの方が詳しい」

『はいはい』

ヴァーリが情報を捉え、口にする。

「——把握した。アザゼル、立体映像で世界地図を展開してくれ」  
ま、そっちの方はヴァーリに任せるか。

「フェンリルに関してはこれで何とかなるか……残るはロキとヘルか」

『ダデイとお姉ちゃんか……。あの二人は特別厄介だねえ。お姉ちゃんは魔物や死人を何千万と召喚できるからねえ』

「一匹一匹は強くなかったが……数の暴力で来られちゃまずいな」

『お姉ちゃんは大量に魔物を召喚した後は暫く動きが止まるよお。ちよつとの間だけだけど、そこを突けばいいんじゃないかなあ』

「成程……で、残るはロキか」

『ダデイも強化したって言ってたよねえ？』

「ああ。これに関しては考えられる手が無くてな」

『ダデイを倒すとしたら結局は正攻法しかないかなあ。そうだねえ、ミヨルニルでも打ち込めばなんとかなるんじゃないかなあ。通用するかは分かんないけどお』

ミヨルニルって……ハンマーだよな？

『そうそう』

「ミヨルニルか……。確かにそれならばロキにも十分通じるだろうな。だが、雷神ツールが貸してくれるだろうか……。あれは神族が使用する武器の一つだからな」

『それなら、さっきのダークエルフに頼んでごらんよ。ミヨルニルのレプリカをオーデインから預かってたはずう』

「ほう、そうか。助かるよ」

ホントに物知りだなあ。

もしかして地球の本棚に入れるんじゃないやね？

『ううん、良いよお。たまにはこうやって話をするのも悪くないからねえ。それに、まさか銀河の龍に会えるなんて思ってもみなかったからねえ』

「銀河の、龍……？」

「やはり、この小僧は………」

先生が訝しげに呟いたと同時に、おっちゃんも納得したように唸った。

『エタニティ・ブライト・ドラゴン光輝なる銀河星龍』。この地球の外に広がる空間……銀河を司る星龍と呼称される幻のドラゴンだよ。古い文献では幻龍とも言うねえ』

ぎ、銀河……!?

それってつまり、

「闇に輝く銀河よ！希望の光となりて、我が僕となれ！つて奴だ」

「自分で言うのかよ!!」

俺はセリフを盗ったカイトに突っ込む！

『ちなみにねえ、幻龍と呼ばれるドラゴンは他にもいるんだよ』

「確か……水星、金星、地球、火星、木星、土星、月、太陽の八つを司る八星龍。そして天王星、海王星、冥王星を司る三星龍だったか？」

『そうだよお』

「ティア、詳しいな……。もしかして会った事とかあるの？」

俺が聞くと、ティアは苦笑いを浮かべて否定した。

「まさか。そもそもこのドラゴン達は二天龍やオーフィス、グレートレッド以上のレア物だ。数少ない資料はあるが、存在していたかも疑わしい」

『……確実に存在していた』

『!?!』

この時間こえた、この場にはいないはずの第三者の声に俺たちは身構えた！

が、その発信源は直ぐに分かった。

カイトの腕に付けてあった機械のような物からだ。

「……お前が喋るとは珍しいな、ギヤラクシオン」

今のつてつまり……その、銀河龍の声なのか……!?!

『……どうやらお前達は覚えていないらしいな。赤い龍、白い龍』

『!?!』

赤い龍は——ドライブ、白い龍は——アルビオンの事か？

『貴様……一体何を？』

『どういう意味だ……？』

『……………』

ドライブとアルビオンが尋ねるが——帰ってきたのは沈黙だけだった。

『すごいいなあ。まさか生きているうちに星龍の声が聴けるなんてねえ。人生何かあるかわかんないねえ』

「お前はその人生の殆どを寝て過ごしてるだろう……まあいい。すまなかつたな、ミドガルムオルズ。起こしてしまつて」

『ううん、良いよお。僕も楽しかつたし、また何かあつたら起こしてねえ』

それだけ言い残すと、映像は完全に消えてしまった。

うくむ、何ともマイペースなドラゴンだったなあ。

兎に角、俺たちはそれぞれミドガルムオルズから得た情報をもとに動き始めたのだつた。

「兵藤一誠」



「ん？」

俺も家に戻ろうとした時、後ろからカイトに呼び止められた。

「何だ？」

「一つ聞きたい。お前……剣を持つ異形を知らないか？」

剣を持つ……異形？

「いや……知らないけど」

「そうか……。それと、もう一つ。お前は……ファントムと分かり合えると思っているか？」

「ファントムと……？」

その質問を聞いた時、以前までの俺ならば無理だと即答していたところだ。

でも……俺は否定の声をあげなかった。

「分かんないさ。でも……俺もちよつとずつだけど、コイツとも分かり合えてる。それだけは、確かだ」

「……………」

カイトはそんな俺を見て、何か言いたげだったが、特に何も言わずにヴァーリと共に去って行った。

だが、俺はカイトの瞳からある一つの“感情”を読み取った。

俺は以前、同じ感情を目の当たりに行っているから分かったのかもしれない。

それは——憎しみだった。

次回、D×Dウィザード

イツセー「相手は神様かあ……」

ドライグ『何時も通りにやればいい。その方が、ずっと楽だろう?』

グレイフィア「私は……信じてますから」

MAGIC 69 『息抜きと、約束と』

イツセー「もし生きて帰ってこれたら……伝えたい事があります」

# MAGIC69 『息抜きと、約束と』

翌日の朝、朝食を済ませた俺達は地下の大広間にいた。

そこには共闘相手のヴァーリチームもいた。

「ふむ、中々美味だったよ。リアス・グレモリー」

「お褒め頂き光荣だわ……」

ヴァーリの褒め言葉に部長は複雑そうな顔だ。

まあ本来敵対してるテロリストに飯振る舞ったからなあ。

見ればヴァーリだけでなく他の面々もホクホク顔だ。

………コイツら普段どんなの食べてるんだろうか。

等と考えていたら、先生がやってきた。

「ほいよ、ミョルニルのレプリカだ。……しかしあのクソジジイ、ホントに隠し持って

やがったな」

そう言つて渡されたのは何だか日曜大工で使いそうな普通のハンマーだ。

違いとしては何か豪華な装飾とかが飾られている位だな。

「オーラを流してみて下さい」

ロスヴァイセさんに言われて魔力をハンマーに流すと……

カッ！

一瞬の閃光の後に、ハンマーがどんどん大きくなり、最終的には身の丈を越す大きさになった！

「おいおい、オーラ流しすぎだ。抑えろ抑えろ」

「へ、へい……」

言われた通りに魔力のオーラを抑えると、縮小して両手で丁度振るいやすそうなサイズになった。

それでも重いけどな！

「レプリカとは言うが、かなり本物に近い力を持っている。本来は神属にしか使えん代物だが、バラキエルの協力で悪魔でも使える様に術式を変更してる。あんまし無闇に振るうなよ？高エネルギーの雷でこの辺一帯が消えるぞ」

「なんちゅー物騒な……」

そう言われてこれに譲渡したらと考えると………確かに口キ対策にはもってこいだな。

まあ効果あるのかは分かんないみたいだけど。

「うし、作戦の確認だ」

それからはあれやこれやと作戦の確認を改めて行い、この場は一旦お開きになった。

ロキは主に俺とヴァーリ。

フェンリルはグレモリー眷属とヴァーリチームで相手をする。

ヘルは魔法に優れたティアと部長、朱乃さんのトリオだ。

「さーて、後はそうだな……………匙」

確認を終えると、先生が匙を呼んだ。

「なんすか？」

「お前も作戦で重要な役割がある。ヴリトラの神器もあるしな」

先生の一言に匙は驚いていた。

「ちよ、待つてくださいいよ！お、俺、兵藤や白龍皇みたいなバカげた力ないっすよ!?!とて  
もじゃないけど……………つか、てつきり会長達と一緒に転移させるだけかと！」

まあ気持ちは分かるけどな。

匙の能力は確かに優秀ではあるが、流石に神様とフェンリル相手には辛すぎる。

「分かってる。お前に前線で戦えとは言わんよ。オーオーだが、ヴリトラの力でイツ  
セーとヴァーリのサポートをしてもらう」

「サポート……」

「その為にはちよいとばかりトレーニングせにやららんからな。ソーナ、少しばかりコイツ借りるぞ」

「構いませんが……どちらまで？」

「冥界の墮天使領……グリゴリの研究施設さ」

あ、あの顔は……。

あれだ、地獄の扱きだ。

「あの顔は……ろくな事はないな」

ヴァーリも知っているのか、溜め息を吐く。

「匙」

「な、何だよ兵藤。その無駄に良い笑顔は……」

「まあ、その何だ……頑張れ☆」

「は？」

「よし、逝くぞ匙」

訳が分からず狼狽える匙の首根っこを掴み、先生は魔方陣を展開する。

「え、つまりそう言うことか!?俺死ぬって事か!?!」

「匙元士郎。幸運を祈るよ」

あーっと、ヴァーリにまで憐れまれたぞ！

匙の明日はどっちだ！？

「い、嫌だああああ!!!」

『出してくれ！出してくれよお!!』

佐野は止めるドライグウ!!

さよーならー!!

こうして、誇り高き一人の男は消えていった……………。

その後は、各自自室にて思い思いに過ごしていた。

俺の部屋には、何故だかヴァーリがいた。

「……………」

「……………」

俺はゲームを、ヴァーリは何やら本を読んでいた。

「……………何読んでるんだ？」



俺は返事は返ってこないだろうと思いつつ聞いてみた。

「ん？北欧の術式を纏めた物だよ。まあ、あればマシ位な物だけどね」

だが以外や以外、ヴァーリは返事を返してくれた。

「ふーん」

「……よし。一通りは覚えた」

「早っ!？」

今の間で覚えたのかよ!？」

驚く俺に構わず、ヴァーリは此方に近づいてきた。

「ふむ、君は何をしてるんだい?」

「あー……この子の攻略してる所」

「このゲージは?」

「好感度。これを上げればエッチできるシステムだよ」

「ほお、興味深いな……」

うそん。

『どうしてくれるのだドライブグ！貴様の宿主のせいでヴァーリまでスケベな事に興味を持ってしまったではないか!!』

『知るかよ!……あ！寧ろさ、年相応な感じになってるから良くね?』

『良い訳あるかああああ!!』

おうおう、二天龍が喧嘩してるぞ!

何かゴメンねアルビオン!

「……俺は今回の共同戦線、楽しみで仕方ない」

「顔に現れてるもんな」

そう、ヴァーリの顔は本当に楽しそうな様子で笑みを浮かべている。

……そう言った意味では、コイツには裏がない。

ただ強い奴と戦いたい……ってだけの、打算のない思いが、コイツの原動力なんだな。

「それに、君との戦いも楽しみだからね」

「へっ……だったらよ。生き残ろうぜ、この戦いをよ」

「勿論だ」

俺とヴァーリは拳を合わせる。

『お前の宿主は不思議な男だな、ドライブグ』

『だろ? コイツの前だと、見栄や威厳を張ったりするのが馬鹿らしくなる。……』

『だが、俺は不思議と気分が良いんだ』

『……フフ、そうだな』

~~~~~

決戦前の深夜、俺は一人屋上にいた。

『……………どうした相棒』

「ん……………ちよつとな」

俺は昂る気持ちを落ち着けるべく深呼吸をする。

が、それでも落ち着く事はなかった。

「神様でファントムの奴と戦う、か……………」

「緊張してらっしやるのですか?」

「っ!」

誰だと思ひ振り替えると、そこには見知った銀髪が。

そう、グレイフィアさんだ。

「グレイフィアさん……………はい、ちよつと」

グレイフィアさんが隣に腰掛けるのを見て、俺は心中を吐露する。

「俺、ちゃんと戦えるかなとか、またアイツの言葉に惑わされるんじゃないかって思うと……不安で」

……不思議だな。

以前までは五月蠅いぐらいに高鳴っていた胸が今は静かだ。それに……この人の前だと、俺は何も包み隠さずに話せる。

俺は改めてこの人が好きなのだと自覚させられた。

「……大丈夫」

グレイフィアさんは俺の手を握って、そう言った。

「貴方はもう迷ったりりしないです。もし迷っても、貴方の目を、ドライグや、リアスお嬢様達が覚まさせてくれます」

『コイツの言うとおりだ相棒。あまり気負うな。お前はお前らしく、魔法使いとして戦え。もし迷うなら、そんなときは俺のポケでハッキリさせてやつから』

……そうだな。

「俺は……一人じゃない、その通りだ」

何を迷うことがあるんだ？

俺は誓ったじゃないか、仲間を——信じるって。

「ありがとうございます。グレイファイアさん」

俺は立ち上がって、グレイファイアさんに礼を言う。

「あの……」

「？」

「この戦い……生きて帰ってこれたら、貴女に言いたい事があるんです。だから……それまで待っていてくれますか？」

「……はい」

何よりも愛しい彼女の顔は、月に照らされて何時もよりも輝かしかった。

MAGIC70『開戦』

『……………』

時刻は翌日の深夜。

俺達は現在、会談が行われるホテルの屋上にて待機していた。

メンバーは俺達オカ研部員とヴァーリチーム、そして墮天使サイドからバラキエルさん、北欧サイドからはロスヴァイセさん。

そんでもって龍王のティアとタンニーンのおっちゃん、吼介の面子だ。

「…時間よ。会談が始まるわ」

部長の言葉に全員顔が引き締まる。

それと同時に――

「小細工無しとはな。恐れ入る」

ヴァーリが苦笑いで告げた通り、俺達の前方の空間が歪んだ。

そこを引き裂くようにして現れたのは、ファントム態のロキ、ヘル、フェンリルの悪神一家だ。

「おいおい、犬の散歩にしちや大仰だな」

『ふ、良いではないか。これ位大仰でなければオーディンは殺せんからな』

「…引くつもりは、ないのだな？」

バラキエルさんが確認をとる。

それに対しロキは、

『笑止！我は我の為に動くのみ！』

不敵に笑い、それを一蹴した。

そう答えたと同じタイミングで、外で待機していたシトリー眷属による転移が始まった。

「お父様。これは…」

『構わんよ。パーティ会場への案内なのだろう？』

「さあてな…。アンタの墓標になるかもだぜ？」

そう軽口を叩き合っている内に、転移先の採掘場へと転移が終わったようだ。

「逃げないのね」

『貴殿らは嫌が応にも邪魔するのだろうか？ならばここで完膚なきまでに叩きのめすだけ』

の事!』

部長の皮肉にさして気にするでもなく答えるロキ。

……………これ以上の話し合いは無意味だな。

「行くぞ…………ヴァーリ」

「無論だ」

「変身!」

《フレイム・ドラゴン!ポー、ポー、ポーポー!》

バランス・ブレイク
「禁手」

《Vanishing Dragon Balance Breaker!!!》

俺は魔方陣を潜り何時もの魔法使いの姿に、ヴァーリは一点の曇りのない純白の鎧を身に纏う!

その姿から放たれる闘気は以前よりパワーアップしていた!

「さあヴァーリ!姿は違うが、ここからは俺達二天龍のショータイムだ!」

「ふっ!」

『ふははははは!!二天龍の競演とは!!なんとも心が躍るぞ!!』

へっ、偉く余裕だな………だったらその仮面を!

「俺達が剥いでやる!!」

『来るがいい!幻魔宿せし赤龍帝、魔王の血を宿す白龍皇よ!!』

俺達が激突すると同時に、それぞれ戦うべき相手ともぶつかり合った!!

「リアス・グレモリー、姫島朱乃。お前達の力は一級品だ。メインは私だが、隙を見出せば遠慮なく攻撃しろ」

「ええ」

「当然ですわ」

龍王ティアマツトとリアス、朱乃達の前には無数の魔物とグール、そしてそれを従える漆黒の女王、ヘル。

「本当のところはあの魔法使いと戦ってみたかっただのですが……龍王最強のティアマツトと戦えるなんて、滅多にない経験ですわ」

「ふん、お前のような危険な女をイツセーに近づけさせはしないさ」

「それは残念……では、行きなさい」

ヘルルの号令に、大多数の魔物達は一斉に襲い掛かってくる。

ティアは手元に魔方陣、リアスは滅びの魔力、朱乃は雷光を迸らせる。

「さあ……私達も、ショータイムだ！」

「「ええ!!」」

『グルルルルルル……!!』

口元から唾液を漏らしたフェンリルが睨むその先には、グレモリー眷属とヴァーリチーム達。

「へっ、食い応えがありそうじゃねえか！変、身ツ!!」

《セット！オーブン！L・I・O・N！ライオン！》

吼介はビーストに変身すると、ドライバーからダイスサーベルを引き抜き、構える。

それと同時に他の面子もそれぞれの得物を構える。

「良いこと白音。絶対にアイツの爪と牙にだけは触れちゃタブーにゃん」

「……分かっていきます」

「おいカイト。丸腰のままが良いのかい？」

「…俺が最前線に出張るわけではない」

「それもそうか。……危なくなったら使えよ。一々助けてらんねーからな」
「当然だ」

「……来るぞー！」

タンニーンという言葉に力強く構える。

それと同時に——台地が隆起した。

グオオオオオオオオオオオオオツ
!!!!!!

そこから現れたのは長い体躯の、東洋で見られるタイプのドラゴン。

「ツ！ミドガラムオルズの量産体か！」

「だが——引くべきではない！」

「そうそう！纏めてアーメンしちゃうんだから！」

「行くよ………皆!!」

「はあ!!」

ウィザードFDはウィザーソードガンで連続突きを行う。

ロキはそれを片手間で防ぐが、その間にもう一方のウィザーソードガンで射撃を敢行。

『無駄っ!!』

「おりゃっ!!」

ならばと今度は上段蹴りでロキを僅かばかり後退させる。

その隙にヴァーリの魔力弾の雨が降りかかる。

『フッ!』

ロキは不敵に微笑むとその攻撃に向けて手を翳す。

すると刹那——攻撃が消えた。

「っ!」

これにはヴァーリも驚きを隠せない。

そしてその攻撃は——彼らの後方で戦っていた仲間達に降りかかった。

「なっ、テメエ!」

激高するウィザードFDだが、その攻撃は彼らに命中——する前にかき消され

た。

「えっ……」

「呆けてる暇があるのか!」

その声の主は——カイトだ。

「俺の仲間を嘗めないでほしいな」

『そうか。ならば——フェンリル!』

直接攻撃を仕掛けるべく突貫して放たれたヴァーリの手刀を防ぎつつ、ロキは木場達と交戦しているフェンリルへと指示を出した。

それを実行すべくウイザードFDへと襲い掛かろうとするフェンリル。

だが、それは叶わなかった。

「今だ!」

「にゃん♪」

黒歌が笑ったのと同時に地面から鎖が出現、フェンリルを拘束する。

『グレイプニルか!しかし無駄な事を!グレイプニルの対策は万全である!!』

「それはどうかな?」

『何?』

『これだけが我等の全戦力だと思っっているのなら………実に浅はかだということがさ
!!』

ロキはそう言い切ると、天に向かって指を鳴らした。
すると、またもや空間が歪みだした。

「何だ？今度は何が来るんだ!？」

そう言い終わったのと同時に——焰が舞った。

『おらあ!!!!!!』

赤い鳥を思わせるファントム——フェニックスだ。

「なっ！ヴァーリ!!」

「ぐう………!!」

虚を突かれたヴァーリはフェニックスの炎を僅かに受けてしまう。

『ふゝ、漸く暴れられるぜ!』

大剣カタストロフを振るい、好戦的に笑うフェニックス。

「くっ……ロキー！」

『そのファントムは貴殿と因縁浅からぬ仲なのだろう？なればこそ、彼の為に最高の舞台を用意したまでの事よ！』

『さあ魔法使い……俺と遊ぼうぜえ!!』

フェニックスは以前以上の炎をはためかせると、意気揚々とウィザードFDに襲い掛かった。

「ぐっ?!…ヴァーリ！一人でも行けるか!?!」

「…ふ、随分と無理難題だね。だが……やってみよう」

ヴァーリは苦笑いを浮かべると、そのままロキへと迫る。

『フッフッフ！白龍皇だけで我の相手は務まらないよ!』

ヴァーリが放つ無数の北欧の魔術を無効化し、お返しとばかりに極太の魔力砲を放つ。

「ちいっ!!」

《Divide Divide Divide Divide Divide Divide!》

ヴァーリは白龍皇の半減の力でそれを半減させ、腕でかき消す。

が、ロキはそれを見越していたのか肩で息をするヴァーリの四方を囲むように魔方陣を展開。

「っ!!」

「ヴァー……………」

『そうら!!』

バリバリバリバリバリ

!!!!!!!

「ぐあああああああああつ!!」

!!!!!!

けたたましい轟音と共に流れるエネルギーは魔方陣の間を往来し、その間に挟まれたヴァーリに甚大なダメージを与える。

「ヴァーリ！」

『おうらあ!!』

「くそっ！邪魔すんじゃねえ!!」

フェニックスのしつこい追撃を何とかしのぐウィザードFD。

だが異変は更に起こる。

ピシイッ!!

何かが罅割れる音が響く。

バラキエルが見れば、フェンリルを抑えていたグレイプニルの鎖に亀裂が入っていた。

「馬鹿なっ!?!」

「強化したはずでしょ!?!」

ヘルが召喚した魔物の対処に追われていたイリナ達が叫ぶ間にも、グレイプニルの亀裂は大きくなる。

そしてそれだけに留まらず、フェンリルの体も怪しい輝きを放つ。

「な、何だ!?!」

『言ったであろう? フェンリルにもファントムの力を加えてあると!』

「まさか……」

『その時に偶発的に産まれた姿だ! とくと見せてやれ——— 神界獣よ!』

バキインッ!!!

そう告げると同時にとうとうグレイプニルが決壊する。

そして今だ輝きを放つフェンリルのシルエットは何と——立ち上がったのだ。

『ツ!?!』

全員が驚いた顔を作る。

やがて光が晴れるとそこには——

「……………」

暗い銀髪を持った長身の美青年がいた。

「……フェンリル、なのか?」

「…左様だ」

「ツ!」

そう短く答えたと同時に、フェンリルはその爪を側にいた小猫に突き立てようと動いた。

「白音っ!!」

「っ!」

黒歌が走るも、その間には無数の魔物が。

そしている間にも、フェンリルの爪は小猫の細い体に突き――

「おらあつ!!」

「…ツ!？」

刺さる前に何者かによってフェンリルは蹴り飛ばされた。

目を瞑っていた小猫が目を開くと、そこにいたのは、

「間一髪だったね、小猫ちゃん」

「イツセー、先輩……?」

ウィザード・ランドドラゴンだ。

『つ！馬鹿なツ……赤龍帝はフェニックスと戦っているはずでは……』

ロキが見やると、そこではやはりフェニックスと罅迫り合いを続けるウィザードFDの姿が。

だがフェンリルを蹴っ飛ばしたウィザードLDもそこにいる。

「赤龍帝ちゃん……」

「言ったろ？守ってやるってさ」

一方、小猫が無事な事に安堵の域を漏らす黒歌にそう告げるウィザード・ハリケーンD。

「…向こうも片付きそうだしな」

ウィザードLDが向いた先では、

「行くぞ木場、ゼノヴィア、アーサー、カカロット、カイト!!」

「うん！」

「荒れるぞ、止めてみろ!!」

「勿論です」

「だーかーら！俺たちはカカロットじゃねーっつーの!!!」

「光の彼方へと消え去れ!!」

剣士達と妖怪と共に風——否、暴風のごとく暴れ回るウィザード・ハリケーンD
ラゴン。

そして別方向では、

「くっ………私の僕達が!？」

召喚した無数の魔物が凍り付いていくことに焦りを見せるヘル。

そしてそれを行うのは――

「アンタ、俺の相手をしたって言ってたよな？だから、とことん相手してやるぜ！」

「ふふふ、流石はイツセーだ」

「さて、朱乃。私達もこの流れに乗って踊るわよ！」

「当然ですわー！」

ブリザードの魔法を使い次々と凍らせていくウィザード・ウォータードラゴンとその後ろから凍った敵を消し飛ばしていく女性陣メンバーだ。

『隠し種を持っていたのは貴殿だけではないということか』

「そう言う事だ！」

そう告げたウィザードFDの隣に、いつの間にやら脱出していたヴァーリが降り立つ。

「ようヴァーリ。生きてるか？」

「…ああ、何とかね」

『……だが、フェニックスは不死身だ。それは分かっているだろう?』

そう告げるロキと二人の間に揺らめく焰。

それはやがて人型をなしていき、その炎を振り払うように人型は腕を振るった。

そしてそこにいたのは、フェニックスファントム。

『不死身の俺を、嘗めんじゃねえ!!』

『……驚いたな。悪魔のフェニックスとは、根本から違うのか』

「ああ……けど、策はあるさ」

そう言ったウィザードFDの周りに来たのは、それぞれのドラゴンスタイルのウィザード達。

「ヴァーリ、アイツは俺がやる。もうちょっとだけ、あの神様相手に粘れるか?」

「……俺一人では少々分が悪い」

「………そうか」

「なに、戦えない訳ではない。それに、一人で戦うつもりはない………カイト!」

ヴァーリはここで魔物と戦っていたカイトを呼んだ。

それを聞いたカイトは一瞬で二人の元に駆け付けた。

「何だ?」

「俺と共に暫くロキを相手取ってもらいたい。出来るか?」

「……随分と無茶な注文だな、リーダー」

口ではそう言っているカイトだが、臆する事無くロキの眼前に立ちはだかった。

『ふん……たかが人間一人増えたところで、我と戦えるとでも?』

「その慢心は自分を殺すことになる。——それに」

『?』

「俺の仲間は貴様が思っているほど懦弱ではない。このカイトもな」

ヴァーリの言葉が終わった瞬間に、カイトの手元には何かが握られていた。

赤を基調とした鋭利な三叉。

それはまるで十字架のようだった。

「……………ハアツ!!」

訝しむロキに構わず、カイトはそれを天高く放り投げる。

勢いよく回転するそれに、何やら光の粒子が集まってくる。

「一体何を…」

「見ておけ、兵藤一誠。あれが——銀河の龍だ」

「!!」

カッ!!

十字架を核として集まった光は、とある生物を模っていく。

『——我が身に宿りし、闇に輝く銀河よ』

カイトの口から紡がれる言霊により、そのシルエットは鮮明になってくる。

『——幾年層の闇の彼方より、高らかに唄え』

細い腕、群青色の爪、同じく群青色の装甲のように具現化した鱗。

『——遥かなる時を遡り、暗黒を照らす輝ひかりと共に』

光り輝く翼を広げるその威容は、あらゆる影を照らさんとばかりに輝く。

「……随分と待たせたな」

そう言つて地面に降り立つカイト。

それを見たロキの声は、歡喜に震えていた。

『フ……ハハハハハハハハハハッ!!!まさか、こんな少年にあの伝説の銀河の龍が宿つていようとは!!なんとという幸運だ!!』

その様はまるで新しい玩具を買つてもらえた子供のようにだった。

そしてそれは、ウィザード達も同じである。

「さあ、行くぞ。カイト」

「……ああ」

『フツ、ならば見せてみよーその伝説の力を——』

その言葉が言い終わらないうちに、ロキの肉体に粒子を放つ刃が食い込んでいた。

『な、に……?』

何が起こつたかも分からないロキは唯々呆然とするばかりであった。

「今の俺は……誰にも捉えられん」

『ば——』

再びロキが口を開いた瞬間、カイトはロキの視界から姿を消す。と同時に、立て続けにロキに襲い掛かる衝撃。

カイトがその姿を見せたと同時に、ロキの体には無数の切り傷が。

「……………例え、神であつてもな」

「すげえ……………」

その目にも捉えられない高速——否、神速に、ウィザードFDは目を見開くばかりだ。

「さて、俺も行かせてもらうよ。君は君に出来る事をしたまえ」

「…おう」

ロキの元へと飛び出したヴァーリを見送ると、ウィザード達はフェニックスと向き合う。

「部長達は？」

「大丈夫だ。力は譲渡してある」

「ヘルの魔物も随分と減ってきたからな」

「厄介なのはフェニルルだけど………木場達を信じるしかねえな」

ウィザード達の視界の端では、人間の姿をとったフェニルルと戦い、ヘルの魔物を片っ端から消していく仲間達の姿が。

今すぐにも加勢に向かいたい気持ちを抑え、ウィザード達は武器を構える。

「さて、フェニックス……待たせたな」

『…俺と初めて戦った時の事を覚えてるか?』

それを聞かれたウィザードFDの脳裏には、無残に目の前のファントムに敗れる自分の姿がフラッシュバックした。

「……ああ」

彼自身、その時の戦いは忘れられない出来事だった。

今思えば、このファントムと戦わなければ、こうしてウィザードラゴンの力にも手を伸ばしていなかったのでは?と思うほどに。

『あの時テメエに負けた時の衝撃は今でも忘れてねえ。ムカつくと同時によお……俺は嬉しかったぜ。何せ、俺を初めて殺した相手なんだからよお』

フェニックスはカタストロフを担ぎ、語り続ける。

『あれ以来俺はずっとテメエとの戦いを望んでた……。だが、ワイズマンはそれを認めてくれなかった。チマチマ絶望させていくのは、俺は苦手なんだ。……俺は、派手に

暴ればそれで良かった!』

強い語気と共に、フェニックスの周囲には焰が揺らめく。

『あの神様には感謝してるぜ? こうやってテメエと戦える機会をくれたんだからよお!!』

「……………だから、無関係の人達を襲ったのか?」

『ハッ!俺は俺のやりたい様に暴れただけだ!それで誰が傷付こうが、俺の知った事じゃねえ!!さあ、思う存分やろうぜ……………指輪の魔法使い!!!』

「……………良いぜ。お前が二度と暴れられないように、ボッコボコにしてやるよ」

『……………ウオオオオオオオオツ!!!』

フェニックスは力強く駆け出すと、力任せにカタストロフを振るう。

それを受け止めるウィザードLD。そしてその合間を縫うように、空中を滑空するウィザードHDが蹴りを叩き込む。

『そんなもんが効くともツ!?!』

《バインド・プリーズ》

ウィザードHDを叩き落そうと身動きするフェニックスを封じるべく、ウィザードWDは氷の鎖で縛りあげる。

《ビッグ・プリーズ》

「ッ!!」

フェニックスの炎で氷が解けるよりも早く、腕を巨大化させたウィザードFDがフェニックスを叩き潰す。

が、その手の下から炎が溢れ、何事もなかったかのように復活するフェニックス。

『言っただろ？不死身の俺を……………嘗めるなあああ!!!』

先程よりも激しくなった焰を飛ばすフェニックス。

空かさずウィザードWDが前衛に出る。

《ディフェンド・プリーズ》

「全員譲渡頼むぞ!!」

「「ラジャー!!」」

《Transfer!》

赤龍帝3人分のオーラが譲渡され、ウィザードWDの発動した魔法が強化される。

大きな質量となった氷の壁はウィザード達に届く寸前で、炎を打ち消した。

「……………やっぱチマチマやつても仕方ない、か」

《ファイナルタイム!》

このままでは埒が明かないと判断したウィザードFDはドラゴタイマーのレバーを押すと、ウィザードライバーを操作する。

『相棒、お前……』

「大丈夫だつて。コカビエルの時よりは、マシンだろうからさ」

これから起こるであろう出来事を懸念するドライグの諫め、ドラゴタイマーが付いた右手を翳した。

《オールドラゴン・プリーズ》

その瞬間、ウィザード達は魔方陣と共に浮かび上がった。

そしてフレイルムドラゴンを中心に、他のドラゴンスタイルがそれぞれの色を投影した魔力に戻り、ウィザードFDに還元されていく。

風と共に現れる翼、土煙が巻き起こり装備される強靱な両爪、水飛沫と共に噴き上がる様にして顕現する尾、そして燃え上がる炎の如く飛び出るドラゴンの胸部。

その姿は、嘗てコカビエルとの戦いで見せたスペシャルラツシユなるスタイルに非常に似通っていた。

だが、今回のその姿は以前のそれとは比較して明らかに巨大な装備となっている。

「全てのエレメントを一つに………これが最後の希望だッ!!」

以前よりも安定して全エレメントの力を開放した、この戦いのためにイツセーが発見していた形態。

ウイザード・オールドドラゴン

『へっーただでんこ盛りになっただけじゃねーか!!』

フェニックスは背中から焰の翼を展開すると、ウイザードADに向かう。

『そんなんでこの俺を倒せるわけ——』

フェニックスの言葉は、それより先を紡ぐ事はなかった。

何故なら、ウイザードADのオールドドラゴヘルクローによって、引き裂かれていたからだ。

『——ガアアアアアアアアアアッ!!?』

一瞬遅れて苦悶の声を上げるフェニックス。

だがウィザードADは容赦しない。

フェニックスの周囲を拘束で旋回する事で緑色の竜巻を形成、その中にフェニックスを閉じ込めると、オールドドラゴスカルから放たれる火炎放射で焼き尽くす。

『グウウウウウウ……!!ちよ、調子に乗ってんじや』

ねえ!と続けて剣を振りかぶろうとしたフェニックス毎、冷気を帯びたオールドドラゴテイルで打ち据える。

それと同時にカタストロフも碎け散った。

『ツ!?ありえねえ!ありえねえ!!この俺様が負けるとでもおおお!?!』

怒りが沸点を超えたフェニックスは、鳥型の焰をウィザードAD目掛けて撃ちまくる。

それに対しウィザードADはオールドドラゴヘルクローを地面に突き立てると、地面をひっくり返す勢いで振り上げた。

台地を隆起させながら迫る双撃その攻撃をかき消し見事にフェニックスの両腕に命中、彼の両腕を切り飛ばした。

『ツ!?!………だがな、俺は何度だって蘇る!蘇る度にテメエのその力だって超える!!』
自身の力を圧倒するウィザードADの力に気圧されかかるが、何とか自分を奮い立たせ、ウィザードADを挑発する。

「分かってるさ。だからこそ……お前を倒すつもりはない」

『……は?』

ウィザードADの言葉に呆気にとられるフェニックス。

その隙を逃さず、ウィザードADは一気にフェニックスの懐に肉薄する。

『!』

「お前に……ファイナーレはない」

そう言った後にフェニックスの顎にアッパーを喰らわせて空中に打ち上げた後、ウィザードADは足元に魔方陣を展開する。

「永遠に死と再生を繰り返せ……ハアッ!!」

空中に飛び上がると、1回転してフェニックス目掛けて右足を突き出す。

そして足元に展開されていた4色の魔方陣はそれぞれウィザードラゴンとなり、フェニックス目掛けて突進する。

『なっ——!?!』

吸い込まれるように消えていったウィザードラゴンの幻影は魔方陣となるが、それはフェニックスを拘束する枷でもあった。

空中でもかくフェニックスだが、どうやってもその魔方陣は消えることはなかった。

「ハアアアアア………ダアアアアアアアッ!!」

太陽という永遠の牢獄へと葬る……………これが不死身のフェニックスを葬れる唯一にして絶対の方法だったのだ。

『…ば、かな……………こ、の……………俺、が……………』

ボロボロの腕で、眼前に広がる地球の光に手を伸ばすフェニックス。
だがそれは消え、そしてまた復活。そして消える。

彼はもう2度と、その光を手にとめることは——出来ない。

「……………言った筈だ。お前に、ファイナールは訪れない」

天を仰ぎ、誰に言うでもなく呟くウィザードAD。

『ほお……………素晴らしい力だ！赤龍帝!!!』

「ツ!？」

ゆらりと姿を現したのは、ヴァーリ・カイトのタッグと戦っていた筈のロキ。

「ロキ……………!!」

そしてその背後には……………倒れ伏す二人の姿が転がっていた。

次回、D×Dウィザード

ロキ『もう終わりだ！貴殿等は——よく頑張ったよ』

ヴァーリ「この白龍皇……………ヴァーリ・ルシファーを嘗めるな」

イツセー「御免……………皆……………」

MAGIC 71 『消えない希望』

??? 「君も希望の魔法使いなんだろう？ だったら……こんな所で倒れるのは早いと思わな
いか？」

MAGIC 71 『消えない希望』

「ロキ……！」

苦々しくロキを見つめるウィザードAD。

一見すると後ろで倒れている二人相手に無傷で切り抜けたのかと思っていたが、その肉体には幾重もの傷跡が。

『いかに我とて無傷で乗り切るのは至難の業だったさ。だがこの程度！取るに足らん傷だ!!』

「チツ……！」

『それにしても貴殿には驚かされる。まさか纏まりのない四つのエレメントを一つにし、尚且つ安定させるとはな。普通ならばその力は反発しあい、使用者の肉体を崩壊させるまでに増幅するものだが……恐らくはその奇妙な玩具の恩恵か』

奇妙な玩具、とはドラゴタイマーの事だ。

『まあ、だからと言って我が負ける道理は一縷もない!!』

「ツ!!」

ロキは両腕に魔力をまとわせると、勢いよくワイザードADに突っ込む。

ワイザードADはそれを両腕の爪で防ぎ、脇腹に蹴りを叩き込む。

『……良い一撃よ！だがそれしきで我は倒れんよ！』

「うおっ!!」

ロキは手に纏わせている魔力を膨張させると一気に爆発させる。

それを零距离で食らったワイザードADは地面に叩き落される。

「いつてて……。こうなったら最終手段だ!」

ワイザードADは左手の爪を消すと、魔方陣から小槌を取り出す。

——ミヨルニルだ。

『それはミヨルニル……！オーデインめ、そこまでして我を止めようとするかッ!』

「こいつのヤバさは分かってんだろ?これで……フィナーレだッ!!」

《Transferr!!》

ワイザードADが魔力を譲渡すると、小槌は一転して稲光を纏った巨大な鉄槌になった。

「うおらあああああああああああつ!!!!!」

ワイザードADは天高く飛翔すると、「!!」思いにミヨルニルを振り下ろした。

「ガッ……………ハッ……………!!」

苦悶の声を持たすウイザードADと、

『クハハハハ……………危うく死ぬところだったぞ……………!!』

先程以上にボロボロとなったが、確かにその場に立っているロキの姿があった。

「イツセー!!」

「あれは……………!?!」

ウイザードADの体に突き立てられている刃もそうだが、彼の両腕に噛みついていて二体の獣がいた。

それを見て、フェンリルは薄ら笑いを浮かべる。

「我の息子たちだ……………」

「まさか……………フェンリル!?!」

それを聞いたバラキエルは信じられないとばかりに声を荒げた。

だがそれはロキ自身によって打ち消される。

『その通りだ！名はハティ、スコル！共にフェンリルの子供だ！！さあハティ、スコル！父と共に残る者共を殲滅せよ！！』

それを聞いた子フェンリルはワイザードADから離れると、木場達に襲い掛かる。

木場は空かさず聖魔剣を複数産み出すとフェンリルめがけて撃つ。

ハティ、スコルはそれを残像が生まれるほどのスピードで躲すと、一気に木場に肉薄する。

木場はバックステップで素早く距離を取り、その場所に聖魔剣を咲かせるが、そうはさせまいとフェンリルが鎖をふるった。

「くっ!？」

「その技は既に見飽きた……大人しく死ね」

「生憎だけど……死ぬつもりはないね！」

ザシュツ！

フェンリルは足元に違和感を感じた。

下を見ると、自身の足に深々と聖魔剣が突き刺さっていた。

「……」

「ゼノヴィア！イリナさん！」

「任せろ！聖牙天衝！！」

「喰らいなさいっ!!」

デュランダルによる莫大な光刃と光の鞭が一気にフェンリルへと襲い掛かった。

「……少しばかり悔っていたらしいな。お前達への認識、改めさせてもらう」

彼方此方から出血しているフェンリルだったが、それに構うことなく木場へと一気に迫る。

「木場!」

「っ!」

木場は聖魔剣を一本フェンリルめがけて投げるが、フェンリルはそれを片手で上へと弾いた。

「終わりだ——ッ!」

フェンリルの一撃が木場へと突き刺さった——筈だったが、両腕は空を切ったばかり。

ドシュウ!!

「……………!!」

それだけではない。

背後からフェンリルの体には刃が食い込んでいた。

「僕はまだ……手の内全てを見せたとは言っていないよ」

「き、さま……………」

そう言ったのは木場。

そしてその手に握られているのは——先程フェンリルが上へと弾いた聖魔剣であつた。

「ぬ、つうおおおお!!」

「!!」

フェンリルは苦悶の叫び声をあげると、元の獣形態へと戻つた。

それと同時に、フェンリルは一瞬で姿を消した。

「一体何処に……………」

「木場祐斗。今は目の前の関門を突破しましょう」

「……………そうですね」

疑念は残るものの、アーサーに言われた木場はハテイ、スコルへと向き直る。

「ぐっ、はあ、はあ……………!!」

一方、ウィザードADは痛みを無視して再び立ち上がった。

「…無事なようだね。兵藤一誠」

「…ヴァーリ、カイト」

ウィザードADの隣に立ったのは先ほどまで倒れていたヴァーリとカイトの二人。

『……貴殿等に何時までも邪魔立てされるのは少々面倒だな。悪いが、これで終わらせてもらおうぞ！』

そういうと、露機の眼前の虚空が歪み始める。

何か来る、と感じた三人は油断なく構える。

『まずは貴殿だ——白龍皇!!』

「!?!」

ロキの言葉が終わった瞬間、ヴァーリから鮮血が溢れ出た。

ウィザードADとカイトを見ると、ヴァーリの肩へと噛みついていているフェンリルがいた。

「ヴァーリ!!」

『これで残るは、二人だ!!』

勝ち誇ったかのように叫ぶロキ。

だからこそ気付けなかった。

《Divide Field!!!》

自身の周りの空間が歪んでいることに。

『ぬ…………!?!』

「妨害されると困るのでね……………カイト!!」

「…………フォトン・チェイン光子の鎖!」

ロキが脱出しようともがいている間、ヴァーリは次の行動に移っていた。

カイトに命じ、カイトは光を帯びた鎖を生成するとヴァーリ毎フェンリルを拘束した。

「え…………!」

訳が分からず困惑するウイザードAD。

そんな彼に、ヴァーリは告げる。

「兵藤一誠…………フェンリルは俺が片付ける」

「な、何言ってるんだよ!?!」

『フハハハハ! その傷で何ができる!?!』

「天龍を…………ヴァーリ・ルシファーを嘗めるな…………!」

途方もないプレッシャーを放つと、ヴァーリは…………禁断の呪文を唱えた。

「我目覚めるは、覇の理に全てを奪われし二天龍なり……無限を妬み、夢幻を想う……我、白き龍の覇道を極め——汝を無垢の極限へと誘おう」

—————
ジャガーノート・ドライブ
 覇 龍
 !!!!!

鎧が一回り大きくなり、ヴァーリは覇龍を発動。

そのまま圧倒的な力でフェンリルを押しさえつける。

「っ、止せヴァーリ！今のその状態じゃ……」

「大丈夫さ。黒歌！俺とフェンリルを予定のポイントに転送しろ！」

「はっ?」

訳が分からず狼狽えるウィザードADに構わず、ヴァーリはフェンリルと共に姿を消した。

「あの野郎………死ぬんじゃねーぞ………!」

「兵藤一誠！来るぞ……ぐあっ?」

「カイト………ガッ!」

ヴァーリへの心配を他所に、ロキはカイトを弾き飛ばすと、そのままウィザードAD

の首を掴む。

『もう諦めろ。貴殿に残された希望など……ない』

「ぐっ……ふぎ、けんじゃっ」

『フンツ!!』

「ガアアアアアアアアアッ!!!」

凄まじい雷撃をぶつけられ、絶叫するウイザードAD。

「イツセー!!」

「余所見ですか？随分と嘗められましたわね！」

イツセーを心配するリアスに、ヘルが召喚した魔物を使役し、襲い掛からせる。

だがそれも、ティアによって叩き潰される。

「迂闊だぞ！リアス・グレモリー！」

「……ごめんなさい」

「……心配する気持ちは分かる。だが、今は目の前の敵を潰すことだけに集中だ」

「……ええ」

ティアに叱責され、気持ちを切り替えたリアスは無数の魔物を消し飛ばしていく。

「ぐっ、うう………」

ウイザードADは静かに倒れ伏す。

それと同時に限界が来ていたのか、変身まで解けてしまった。

『相棒!!』

『赤龍帝、貴殿はよく頑張ったよ。称賛される事のない地獄を生き抜き、同族をその手で葬り続けた……。だが、そんな地獄ももう終わる！我が起こす黄昏と共にな!!』

ロキの野望を、欲望を大声で掻き消したかったイツセーだが、既に体は動かない。

体に残った魔力も殆ど尽きかけており、変身、禁手もままならない。

『ちく、しょう……………』

そうしてイツセーの意識は、闇の中へと沈んでいった――。

木場 side

僕達はハテイ、スコル、そしてヘルの召喚した魔物相手に奮戦していた。が、そんな最中、僕達は見てしまった。

ロキの前で倒れているイツセー君を。

『フハハハハハ!! 諸君、それ以上の抵抗は止すのだ!』

ロキは僕達を見渡す様にして大きく声を上げる。

その声には隠しきれない愉悦が滲み出ていた。

『最後の希望たる赤龍帝は破れた! そして我の戦力は未だ健在! これが何を意味しているか、分からぬ程愚かではあるまい?』

そんな……………嘘だ!

イツセー君が、負けただなんて!

「イツセー君! 目を覚まして! 戦いはまだ終わってはいない!!」

『ククク、聖魔劍の騎士よ。本当に赤龍帝の事を案じているならば彼を起こさないでやるのが優しきではないか?』

「何……!?!」

僕はロキの言っている意味が分からず、ロキを睨み付ける。

『赤龍帝はこれ迄に何度となく戦つてきた!自らの同族を手にかけて続け!赦される事のない地獄を見つけてきたのだ!!これ以上戦わせるのは、酷ではないか?』

「……ッ!」

……ロキの戯れ言に揺らいだ訳じゃない。

だけど、イツセー君はずつと闇を抱えて戦つてきた。

それをこの間知つた僕達はロキの言葉を否定できなかつた。

確かにそうだ……そしてイツセー君は、これからもその地獄をずっと歩き続けるのだろう。

僕達はそれを止めたい。

君の行く道はそこではない、そう言つて引き戻したい。

だけど………だけど………!

「……イツセー君は、例え一時でもそんな休みはいらないう!!」
『……?』

「……立ちなさい、イツセー!!」

僕の言葉を受けてなのか、部長がイツセー君に呼び掛けた。

「ここで貴方が倒れれば、また罪のない人達が絶望に負けてしまうわ!! そうなったら、またサバトの時の光景が広がってしまうのよ!? 貴方は……それをさせないと誓っているのでしょう!? だから……立つのよ、イツセー!!」

『無駄な呼び掛けを……ヘル!』

ロキの命令に応じたヘルは、巨大な三つ首の獣をけしかける。

部長はそれを、たった一撃で消滅させた……!

「貴方が諦めても、私達は諦めたりしない! だって……私達には、貴方から灯された光が……希望がある! そうでしょう、皆!!」

「……そうだ。」

「一人で立てなくても、仲間がそれを助ければ良い……」

『…………』

「諦めて死ぬぐらいならば、僕達は抵抗して死ぬ!!」

君もそう言うだろうか？

だから、君が立つ間は——

「僕達の、ショータイムだ!!!」

~~~~~

……………暗い。



俺は……どうなったんだ……？

そうか……

俺は……負けたのか……

暗闇の中、俺は一人嘲笑する。

結局、この様だ……皆戦っている中、俺は一人だけこうして無様に倒れてる。

でも……もう良いんじゃないか？

俺だって全力でやったさ。

皆に希望を託せた事だってハッキリした。

このまま……終わったって……

『けど、君はそう思っていないだろ？』

ふと俺の頭上から、そんな声が聞こえてきた。

そう言えば、何か人の気配を感じる……でも、普通の人じゃない……

誰だ？

『俺の事はどうだって良い。それよりもだ、君は本当にここで終わるつもりか？』

何だよ……俺がここで諦めたって……アンタには関係ないだろ……。

『確かに俺は“この世界”に関係はない。けど、同じ希望を守る者としては放つてはおけないからね』

同じ……？希望を……守る……？

それにこの世界って………

『だからそれは今関係ないだろ？君も希望の魔法使いなんだろう？だったら……こんな所で倒れるのは早いと思わないか？』

………だけど、俺にはもう、魔力が。

俺がそう眩くと、その人は呆れた様に嘆息した。

『魔力が何だ？君は守りたい大事な人達がいるじゃないか。人は誰だってな、大切な者

や信念、居場所を守るために強くなれる。何度だって立ち上がれる。俺や君だけじゃない……今までそうやって多くの戦士達が立ち上がってきた』

大切な……人達……。

『君にだって聞こえる筈だ。今も戦う仲間達の声が』

そうその人が言い終わった瞬間、俺の頭には仲間達の声が聞こえてきた。

その声音には、諦めと言う感情はまるで感じなかった。

『まだよ！まだ戦える!!』

『決して諦めたりしないわ!!』

『先輩がそうやって、立ってきた様に……私達もっ!!』

『絶対に、折れたりしないっ!!』

『お前を……斬り殺すっ!!』

『先輩と、約束したんだ！恐れるな、泣き出すなっ!!』

『希望は……決して無くなったりは、しません!!』

皆………。

『どうだい？これでも、君はまだ諦めるのかい？』

………。

『私や…他の皆様も、そうでしたから。他の誰でもない、兵藤一誠の言葉に、行動に救われたんです』

その時、俺の脳裏に銀髪の女性が過った。

その人は、俺が誰よりも、何よりも愛しい人だ。

そうだ……………俺は……………約束したじゃないか……………。

俺の守りたい人達は、希望は……………まだ……………まだ……………まだ……………まだ!!!

「消えちゃ、いない……………!!」

俺は……………漸く立ち上がった。

体はまだ痛む。

魔力だって、雀の涙程度しかない。

けど……………それがなんだ!?

「……………ありがとうございます。お陰で、目が覚めました」

俺は目の前の人に頭を下げる。

もう少しで俺は自分を捨てるどころだったからな。

だが目の前の人は気にするなと言った。

『本来なら俺は干渉しちゃいけないだけだな。こうしてるのもアイツのお陰だし』

「アイツ……?」

『君もその内会えるさ。何てったって、俺達は旅の途中だから……つと、そろそろ限界だな』

そう言うと、その人は光に包まれていった。

「あ、あの!」

『ん?』

「貴方の、名前は……」

その人の顔は、ずっと靄が掛かって確認できずにいた。

でも、俺は何処かその声に懐かしさを覚えていた。

『名前、かあ。まあ……それぐらいは良いかな?』

体が完全に消え、顔も消えようとした瞬間、顔に掛かっていた靄が晴れた。



俺は、言葉を失った。

何故なら、その人は――

『俺は――。お節介な魔法使いさ』

名前は聞き取れなかったが、その顔は俺の父親に瓜二つだった。

「……………ふう、行くぞ。ドライグ、ドラゴン」

俺が力強く言うと、体の底から力が湧いてきた。

『待つていたぜ、相棒!』

『……フン、待ちくたびれたぞ』

はは、そこは謝るよ。

けど……待たせた分、思い切り暴れるからさ。

俺が前を向くと、闇は晴れていった。

くくくくくくくくくくくく

木場 side

「くっ………はあ、はあ」

僕は折れた聖魔剣を捨てて、もう一度造り出す。

既に何度となく行っただろうか？

『ククク……まさかこれ程迄に粘ろうとはな。よほどまやかしの希望にすがりたいらしいな』

「まやかし何かじゃ、ない……！」

正直、体はもう限界に近い。

力を抜けば、今にも倒れそうだ。

けど、絶対に諦めたりしない！

『……愚かだな。ハティ、スコル！殺れ!!』

その命令に従うべく、ハティとスコルは此方へと駆け出す。

だがその進路に、突如として黒炎が立ちはだかった！

『ぬ!?何だこれは!』

ハティとスコルは脱出しようともがくが炎が消えることはなく、寧ろ深く絡み付いている！

「これは……」

すると突如、大地に黒い魔方陣が現れ、中からは黒い炎で形作られたドラゴンが現れ

た！

『木場祐斗君、宜しいですか？』

僕達は突然現れたドラゴンに呆然としていたら、耳に着けた通信機から誰かの声が聞こえた。

「貴方は？」

『私は墮天使副総督のシエムハザです。早速ですが、そちらに黒いドラゴンはいますか？』

「はい」

『単刀直入に言います。そのドラゴンは、匙君です』

————ッ！

あれが匙君だと言うのか！

『実は今回の件に際しまして、匙君に残るヴリトラの神器を移植したのです。そして、4つに別れたヴリトラの魂を結合させ、ヴリトラの意識が復活するのに賭けたのです』

「……そんな事が、可能なのですか？」

『本来は不可能です。ですが、以前匙君は兵藤一誠君にヴリトラのラインを繋げ、一瞬とはいえ天龍の力を吸収しました。それが原因で僅かながらヴリトラの意識が覚醒した事によって、成功したのです』

そうなのか……………。

「では匙君は、僕達の事を」

「ええ。味方として認識出来ている筈です。聞こえますか、匙君？」

『………はい！』

本当だ、匙君の声が聞こえた！

「匙君、大丈夫なの？」

『勿論つすよ！リアス先輩！で、取り敢えずアイツらの動きを止めて良かったですか！』

「ええ、助かったわ」

『………ヴリトラの黒炎は厄介な物だとは聞いていたが、まさかここまでとは……………だ  
がな！』

ロキは腕を一凧ぎすると、炎が掻き消された！

『マジかよ!？』

『我を止めれる程ではない!』

「匙君！」

『ぐああああ!!』

ロキとヘルの魔力弾を食らい、匙君は大きく声をあげる！

『へ、平気だ……………こんなもんで、倒れる程柔じゃねえ!』

『……………理解できぬな。何故そこまでして絶望に抗う?』

ロキは戦いを止めようとしぬ僕達に対し、そう問い掛けてきた。

その声音には、僅かな苛立ちが籠められている。

「言つたはずだ……。僕達は、お前の黄昏なんて受け入れない!」

『笑止! 貴殿らの希望たる赤龍帝はもう起き上がる事はない! この戦いに……勝機などない!』

ロキが確信するかの様に発した叫び。

「……………おいおい。俺が起き上がらないって決め付けるのは早とちりって物だぜ?」

そこへ被さる、僕達が待ちわびた声。

『……………!』

「俺はまだ、生きてるぜ?……………ロキ!!!」

ーーーーイツセー君ッ!!!

木場 side out

イツセー side

……何て、カッコよく立ち上がったは良いけど、魔力も殆どない。

『……懲りない奴だ!』

ロキは苛立ちを消すかの様に、俺に怒涛の攻撃を仕掛ける。

俺はかわそうと横に飛ぼうとするが、突如として地面が陥没し、足を取られる!

ーーーー不味いッ!

「ガアアアアアアアアアッ!!!」

意識が飛びそうになる程の一撃、肉だって焼け焦げているだろう。

だがーーーー

「まだ、まだ……だ……だ……ッ！」

俺は、踏ん張った。

それを見たロキは、有り得ないと頭を振る。

『馬鹿な……貴様の魔力は無に等しい筈だッ！肉体も……当に限界を迎えている……ッ

！なのに何故、何故!!倒れんのだ!!』

「自分の為に他人の命を奪おうとするテメエには、一生分からねーよ」

お前の言うとおりだ。

体力も、魔力も殆どない。

正直、空元気で踏ん張ってるだけだ。

けどよ………

「アンタは俺の希望を奪おうとするんだろ？ だったら……倒れる訳にはいかねえよ。……何があっても!!」







「やらせるかよっ!!!」

だが吼介が放った6匹の雄牛が魔方陣を打ち砕き、無効にする!

「特別サービスですよ」

「これは貸しにしておいてやる……」

『グオアアアアアアッ!!!』

次いで接近してきたアーサーとカイトの一撃がロキの両腕を斬り落とした!

『キ、キサマラ……!!!』

ロキは魔方陣を展開しようとするが……その魔方陣は煙の如く消え失せた。

『ナツ……』

その虚空には、剣が咲いていた。

……木場だ!

そう確信する俺は上段蹴りでロキの体を浮かすと、そのまま回し蹴りで大きくブツ飛ばす!

『グウツ?!』

「聖牙大天衝ツ!!!」

『グギヤアアアアアッ!!!』

次いで放たれたゼノヴィアの一撃でロキの半身を両断した！

『へ、ヘルウ……!!』

ロキがヘルに命令を下し、ヘルが新しく魔物を召喚しようとするも……その魔方阵は消滅した！

「なっ……」

「これで一矢報いさせてもらったわ」

ヘルの驚愕した顔を見て、したり顔の部長。

ナイスです、部長……いや、リアス！

「ふ、ふざけ……」

ヘルが口を開いた時、ヘルの動きが停止した！

「僕だって、やる時はやるんですう!!」

「いい根性だ、ギヤスパ……」

そう言つて俺はロキへと迫る！

『ハティ、スコル！ワレヲマモレ!!メイレイダ!!』

だがハティとスコルは……動かなかつた。

『ナ、ナゼウゴカン!?!チチナルワレノメイニソムクノカ!!』

……同情するぜ。

自分の孫？に見捨てられるんだからよ。

「ウオオオオツ!!!」

『ギャアッ!』

俺は爪先でロキを空高く蹴り上げる!

そして再び、足元に魔方陣を展開する……!

「うっ………」

だが負荷が大きすぎたのか、俺は膝を付いてしまう。

パアアア………

そんな俺に、暖かい光が包み込んでくれた。

「イツセーさん!」

「やっちゃって下さい……!」

「ここで負けたらカツコ悪いわよ!踏ん張りなさい!」

アーシアの癒しの波動が傷を癒し、猫姉妹の仙術が俺の肉体を強化してくれる。

『コ、ココハテツタイスルシカ……!!』

ロキは背後に魔方陣を展開する。  
逃げる気か！

バシユンツ!!

だがそんな音と共に魔方陣は消え失せた！

今のは……………

「ここまでしておいて、逃げれると思うなっ！」

「今ですわ、イツセー君っ！」

朱乃さん、バラキエルさん……………！

「ああ!!」

魔方陣と共に飛び立つ!!

『コ、コンナコトガアアアアアアツ!!!!!!』

「これが……………終わりのファイナー!!だッ!!!!!!」

魔方陣から出現したドラゴンはロキを拘束する枷になる！

そして動けないロキに——



それを最後に、ロキは静かに倒れた。

そして俺も――眠るように意識を手放した。

くくくくくくくくくくくくくくくく

「これで完成した、か」

そしてこの戦いを端から眺めていた白い魔法使いは、静かに呟いた。



次回、D×Dウィザード

イツセー「おい、くすぐったいって……」  
バラキエル「妻の……朱璃の味だ……っ」  
リアス「行つてきなさい、イツセー」

MAGIC72 『果たす約束』

イツセー「俺……俺…………！」

# MAGIC 7 2 『果たす約束』

木場 side

ロキとの戦いを終えた僕達は、事後処理を終えて現在兵藤家にいた。どうやら会談は無事に成功したの模様で、僕達は安堵の息を吐いた。

「んん、よしっ。一応気は整ってあげたわ」

そう言ったのは小猫ちゃんのお姉さん、黒歌。

今この家にはヴアーリの仲間達もいるんだ。

「ありがとう、黒歌」

「気にする事ないにゃん。アンタにも、この子にも、妹がお世話になってるし」

「……姉様」

「やるべき事も終わったし、私達もそろそろ帰るにゃん♪」

複雑そうな小猫ちゃんに構わず、黒歌黒歌がそう言うのと、同意するかのように立ち上がった他の面子達。

「……彼は生きてるのかしら？」

「ヴァーリはあの程度でくたばる奴ではない」

「そうそう。家のリーダーはしぶといからねい」

部長の言葉を否定するカイトと美猴。

その声音には、ヴァーリへの信頼を感じ取られた。

「じゃ、起きたら赤龍帝ちゃんに宜しく〜」

「あばよ〜」

「では、これにて。木場祐斗君、ゼノヴィアさん。また何れ、貴方達とも戦ってみたいですね」

「……………」

アーサーは聖王剣で空間を切り開くと、その中へと消えていった。

……………僕ももつと、強くならないとね。

……………そう言えばまだ言っていなかったね。

黒歌が何をしていたのか。

それはイツセイ君の治療だ。

あの戦いの後、イツセー君は全く起きることなく眠り続けていた。

黒歌曰く「魔力を限界まで行使した結果」だそうだ。

今イツセー君の肉体はその反動から身を癒すべく眠りにについているんだ。

……しかも、一緒にデイドラの件で発動した「覇龍」の力も同時に行使したらしい。それもあつてか、イツセー君の眠りは深いんだ。

……まあその内起きるだろうとのことだから、イツセー君は問題ない。

実はもう一つ問題があるんだ……それは、

「……………」

「……………」

イツセー君の周りをウロウロする二匹の狼。

そう、あのフェンリル……ハティとスコルだ。

あの戦いの後、この二匹は何故か僕達に着いてきたんだ。

追いつ返そうとも最初は考えたけど、二匹に敵意はなく、ずっとイツセー君を心配そうに唸っていたから、今は監視する名目で好きにさせている。

けどやはり牙を剥き出しにすることはなく、イツセー君の顔を舐めている。

すると——

「う、ううん……………」

小さく唸り声を上げながら、イツセー君が目を覚ました！

「イツセーさん!？」

「……………よお、アーシア」

寝ぼけ眼だけど、どうやら異変はないみたいだ……………良かった。

「んっ、うおっ!？」

と、ここでハティとスコルがイツセー君にじやれついた！

「ふ、フェンリル!？何でコイツらが！あ、こら、くすぐったいって……………!」

心底驚いた様子のイツセー君。

と、そんな時、イツセー君の使い魔の龍王ティアマットが近づいてきた。

「この様子だと……………どうやらお前になついてしまったらしいな」

「え?!」

「あの戦いで見せたお前の覇気に魅了されたのだろう。だから主のロキの命にも背いた

……………と言うことだな。イツセー」

「な、何だ？」

「この犬共も使い魔にしたらどうだ？」

「……ッ！」

僕達はティアマツトの提案に息を飲んだ。

でも一番驚いているのは、他ならぬイツセー君だ。

「ええええええええええええ!!」

そして後日……

「兵藤一誠の名に於いて命ず！汝、我が盟友として、契約に応じよ！」

『ワン!』

結局追い払うにはなつきすぎていたので、イツセー君は仕方なくフェンリル二匹を使い魔にした。

一応北歐に確認を取ったところ、「今回の功労者たるイツセー君になら安心して任せ

られる」とのことだ。

まあそれでも神殺しの力は驚異だから力は殆どセーブされてる状態だ。

それでも上級の魔物と同等の力を誇る辺りは、流石フェンリルと領けるね。

「よし、今日から宜しくな！」

『ワン！』

……何だか、大型犬がじゃれついている様にしか見えないね。

微笑ましい光景に僕達が頬を緩めていると、

「もう終わりよっ!!」

悲鳴が聞こえた。

その正体は……北欧のヴァルキリー、ロスヴァイセさんだ。

「酷いです！オーデイン様だったら、私を置いていくなんて!!」

……そうなんだ。

実はこの人、オーデイン様に普通に置いて帰ったのだ。

恐らくは気付いてるんだろうけど……向こうが何も言わない辺りは……

「これ絶対リストラよ！リストラ！どうせ私なんて、彼氏いない歴年齢のダメ女よ!!」

もう自棄っぱちになってるね。

「大丈夫よ、ロスヴァイセ。この学園で働ける様にしたから」

と、部長がロスヴァイセさんの肩に手を置いた。

「ほ、本当ですか……?」

「ええ。でも、良かったの?教師で」

「はい……一応教員免許は持っていますし、母校も飛び級で卒業してるから……でも私、この国で上手くやっていけるかしら……?」

未だに不安そうなロスヴァイセさん。

「ふふ、そこでこのプランよ」

部長が妖しく笑うと、懐から書類を取り出した。

「今冥界に来ると、こんな特典やあんな特典が付くのよ?」

「……ッ!保険金が、こんな……しかも、こっちは掛け捨てじゃない!」

「そうよ。それに、こっちのシステムもお得だとは思わない?」

「……スゴいです!悪魔って、こんなにも貰えるんですか……!基本資金が違うわ!ヴァルハラと比べても好条件ばかりです!」

戦乙女を買収してる……!!

流石、部長です……。

「そして今なら、この駒一つで貴女にこれだけのサービスが付くわ!だから……」



うかしら？」

部長が見せたのは——最後の『戦車』の駒だ。

「……どこか運命を感じます。あの時冥界の病院で出会った時から、こうなる事が決まっていたかもしれません」

ロスヴァイセさんは躊躇う様子を見せずにその駒を受け取り——紅い閃光に包まれた！

そして——無事に悪魔へと転生した。

「皆さん、悪魔に転生しました、元ヴァルキリーのロスヴァイセです。これからも、宜しく願いますね！」

「という訳で、私の最後の眷属は、ロスヴァイセとなりました」

『宜しく願います！』

こうして、僕達に新しい仲間が生まれました。

「木場。何かあったのか？」

「うん。実はね——」

僕はずっとハティとスコルの相手をしていたイツセー君に事の経緯を説明するのだった。

~~~~~

よう、皆。イツセーだ。

「……父様」

「ツー・朱乃か……」

俺は今兵藤家の玄関でグリゴリの施設に帰るバラキエルさんのお見送りに来ていた。

「……」

スツと、朱乃さんは弁当箱を手渡した。

バラキエルさんはそれを受け取り、包みを開くと、色彩豊かな料理が所狭しと並んでいた。

「……?」

「食べてみて下さいよ。ね、朱乃さん」

俺が代わりに代弁すると、バラキエルさんは料理を口に運んだ。すると——涙が一筋伝った。

「妻の……朱璃の味だ……ッ！」

それだけ言うと、バラキエルさんは無言で弁当をがつついた。

ポロポロと泣きながら、噛み締める様に——。

「……また、元気な姿を見せてください」

数分後、朱乃さんは未だに泣いているバラキエルさんにそう言った。

「……兵藤一誠君」

「は、い」

「娘の事を、頼む……」

「……勿論ですよ」

俺が断言すると、バラキエルさんはそのまま帰っていった。

その後ろ姿は、以前見た寂しそうなそれではなかった。

「……ありがとう、イツセイ君」

見送ったけど後、朱乃さんは俺に礼を言ってきた。

「いえいえ。俺は俺に出来ることをやっただけですから」

「それでもですわ……イツセイ君」

「は……ッ！」

返事を返そうとした俺の口に……何やら柔らかい物が触れた。

それは一瞬だったけど、確かな暖かさがあつて……！

「ふふ。私、諦めませんから」

「え……」

「ねえ、リアス？」

朱乃さんがそう言うと、物陰から部長が出てきた。

「ええ、勿論よ」

「部長……？」

「行つてきなさい、イツセイ。貴方には、行くべき所があるでしょう？」

「……そうだった。」

「……ありがとう。リアス」

俺は短く言うと、そのままあの人の元へと向かった。

くくくくくくくくくくくく

くエピローグく

俺は兵藤家の屋上に来た。

そしていたー！ー彼女が。

「……グレイファイアさん」

俺が呼ぶと、グレイファイアさんは此方を静かに振り向いた。

「……イツセー様ー！」

「ツー！」

俺の顔を見ると、グレイファイアさんは憚らずに抱きついてきた。

まるで、俺の存在を確認するかの様に。

「良かった、です……ご無事でっ！」

「……はい。俺、ちゃんと生きてますから。だって……俺は貴女に伝えたい事が、あるから」

グレイファイアさんは俺から離れると、此方を静かに見つめる。

俺は口を開こうとするが、緊張の余り頭が真っ白になった。

「俺、俺……………」

呼吸が荒くなつていく。

伝えたいのに、口が麻痺したかのように上手く喋れない。

『おい相棒落ち着け!』

『そんな様では、伝わる物も伝わらんぞ』

けど、俺の相棒達の言葉で、ある程度緊張が解れた。

……………サンキュー、二人共。

……………こうなつたらヤケクソだ!

「すうー……………グレイファイアさん、いやーーグレイファイア!!」

「っ」

驚く、グレイフィアに構わず、俺はありったけの想いを吐き出した！

「俺は君が好きだ!! ずっとずっと、全力で、俺の全てで守りたい! ずっと君の側で笑って
いたい!! だから、その………俺………」

その先は、言えなかった。

俺の眼前には、グレイフィアの端正な顔が。

そして聞こえる。グレイフィアの鼓動が………。

永遠とも思われるそんな瞬間、グレイファイアが俺から離れた。

「……私も、ずっと、貴方と共にありたい。私も、貴方を救いたい」

「グレイ、ファイア………」

「私も、好きです。イツセー様………いえ、イツセー。世界中の誰よりも、貴方を………愛してる………」

その言葉を聞いた後、俺は自らグレイファイアの唇を奪った。

夜空に栄える月の光が、俺達を静かに見守っていた……。

第七章、終幕

MAGIC番外編 『真・メイドさんとデート!』

よお、皆。イツセーだ。

ロキとの激闘が終わって、翌日の朝。

俺の目の前には……………

「ふふ……………お早う、イツセー」

何故だかグレイフィアさんがいた。

確か……………グレモリー邸に帰ったんじゃ無かったっけ？

「ぐ、グレイフィア、さん？」

俺が戸惑いながら名前を呼ぶと、グレイフィアさんは何故だかしかめっ面を作った。

怒ってるんだろうけど、可愛さの方が圧倒的に強い。

「イツセー」

「は、はい」

ふわりと漂う良い匂いとおっぱいの柔らかさに、頭がくらくらする。
……そうだ。

「グレイファイア」

「なあに？」

……くそっ！何で今日のグレイファイアは一々可愛いんだ！？
朝から俺を悩殺しまくってるぞ！？

ゲフンゲフン！

そんな事ほざいてる場合じゃない！

「今日、一緒に来てもらいたい場所があるんだ。その後……その………で、デート、しようぜ？」

—————

何時もの面子にグレイフィアを加えた朝食の時間を終え、俺達は電車に乗っていた。

「イツセー」

「ん?」

電車に揺られながら、グレイフィアは俺の手元を覗き込んでくる。

「……………あのね、その」

……………ああ、もう!何でそんな一々反応が可愛いんだよおおおおお!!?

内心鼻血を吹き出しながら俺が待っていると、グレイフィアは漸く口を開いた。

「私の何処を好きになったの?」

「……………それは、」

『次はあ、○○駅〜』

俺が答えようとした時、目的地にたどり着いた。

俺達は駅を後にし、そのまま……近くにある花屋さんに訪れた。

「あら。いらつしやい」

「こんにちは」

……この店主のおばさんとは既に顔馴染みと呼べる程に俺はここに来ているんだ。

おぼさんは俺の隣にいたグレイフィアを見ると、意地悪そうに笑った。

「あらあ、こんな美人さんを連れてくるなんて、アンタも隅におけないわねえ」

「か、からかわないでくれよ!」

「イツセー、恥ずかしがる事はないじゃない」

「グレイフィア!?!」

さらりとグレイフィアが発した台詞に度肝を抜かれる!

「外国の方?」

「はい」

「……イツセー君の事、大切にね」

「勿論です」

グレイフィアが力強く返事すると、おぼさんは納得したかのように頷いた。

「……ふふっ。今日はサービスしてあげるわ!」

「えっ」

「イツセー君に彼女が出来た記念よ!」

「おぼさん!／／／」

おぼさんの茶化しに俺はタジタジなのに対して、グレイフィアは微笑ましそうに見つめていた。

………こうして感じるのには、やはりグレイフィアは大人だなあ、と言うことだ。

俺と違って恋人だと言う事実には恥ずかしがること無く堂々としている。

………なんだか、色々叶わないなあ。

こうして俺はタダにしてもらった花を携えて、目的地に着いた。

「(ハハ)は………」

グレイフィアの眼前に広がっている光景は―――無数のお墓。

そう。ここは所謂、墓地だ。

「イツセー………」

「着いてきて」

グレイフィアは無言で着いてくる。

それを確認し、俺は歩を進める。

そして、俺は一つのお墓の前で立ち止まった。

墓石に書かれている「兵藤」の文字。

それを見たグレイフィアは察したらしく、眼を見開いている。

「まだ命日じゃないけど………久し振り。父さん、母さん」

「ここは……俺の両親のお墓。」

俺はここに、毎年訪れているんだ。

おっちゃん忙しいからたまにしか来れないけどな。

「今日はさ、紹介したい人がいるんだ」

俺は花を一旦置いて、側にいたグレイフィアの手を握った。

「……紹介するよ。グレイフィアって言うんだ」

グレイフィアは無言で頭を下げた。

「実はさ、この人が、俺の恋人なんだ。ビックリだろ？こんな美人さんが恋人なんて……
夢みたいだよ」

「……初めまして。グレイフィア・ルキフグスと申します」

グレイフィアは手を会わせると、墓石に語りかける。

「つい先日ほど、貴殿方のご子息様と、恋仲となりました。私は、彼の抱えている全てを、

分かち合って行きます。貴殿方のご子息様の闇を……晴らしてみせます。ですから、どうか見守っていただけると幸いです。これからも……宜しく願います」

グレイフィアは改めて頭を下げると、俺の方を向いた。

「……この人は、俺が初めて希望になってあげたいと思った人なんだ」

俺は静かに語り始める。

「父さん達を亡くしてから一年ほど経ったばかりの時にさ、冥界で会ったんだ。そこで今再会して……多分、初めて会った時から何処かで惹かれていたんだと思う」

それは……俺が先程言おうとした、グレイフィアの好きになった所だ。

「彼女の笑顔、仕草……何より、心に惹かれたんだ。今もまだ、俺は彼女や皆の希望になれるには程遠いけど……それでも、俺は絶対になつてみせる。彼女は……俺が誰よりも何よりも守りたい、そう思える人だから」

……改めて言うと、恥ずかしいな。

「……じゃあ、また命日になったら、来るよ。今度は、俺の仲間達を紹介するから」

俺は墓石を掃除し（グレイフィアも手伝ってくれた）、花とプレーンシユガー、大福を

供える。

大福は母さんが好んでた食べ物だ。

「それじゃ……」

俺が去ろうと背を向けた時——

——見守っているよ

そう、声が聞こえてきた。

俺がハツとして振り替えると、そこには何もなかった。

「だけど、あれは確かに……」

「イツセー、今のは……」

「どうやらグレイフィアも何やら声を聞いたらしい。」

「グレイフィアも?」

「ええ……『息子を宜しく』って」

「……」

「不覚にも、俺は涙腺が緩んだ。」

「俺は悟られまいと前を向き、グレイフィアの手を引いた。」

「……大丈夫。イツセーには、皆が、私がいるから」

「っ」

「……どうやら、歳上の恋人にはバレバレだったらしい。」

「何か手玉に取られまくって癪なので、俺も一矢報いてやることにした。」

「グレイフィア」

「?」

「君は俺が絶対に守ってみせる。心も、その全てを」

「……うん」

——それを聞いたグレイフィアは静かに目尻を光らせていた。

MAGIC番外編『ドラゴンの鳴いた日』

「ねえイツセー」

「ん？」

あくる日の休日、何時もの特訓を終えた俺にリアスが近づいてきた。

「貴方が使っているドラゴンスタイル……だったかしら？あの力はいつから使い始めたの？」

その質問を皮切りに、木場達も俺の元へとやってきた。

「そう言えば、僕達と出会った時にはもう使えていたね」

「まだ一種類だけだったけどな。ってかそんなに気になるのか？」

「…はい」

「もつとイツセー君の過去を知っておかなければいけませんし」

……そう言えば誰にも話してなかったっけ。

知ってるのはドライグとおっちゃん位だもんな。

良い機会だと思って、俺は懐からフレイルムドラゴンの指輪を取り出して、その過去を

思い浮かべながら口を開いた。

「そうだな。あれは――」

~~~~~

それは、イツセーが悪魔となる以前の出来事だった。

「なあ、おつちゃん」

「ん？」

面影堂でのバイトの休憩中、イツセーは叔父の茂にある事を訪ねた。

イツセーの手には、茂が作った魔法の指輪があった。

赤い魔法石で作られたそれには、龍が息吹を吐いている絵が描かれていた。

「この指輪ってさどんな効果なの？」

「それは俺にも分からんさ。お前も知ってるだろ？俺は指輪は作れるが、肝心の効果ま

では分からないって」

「まあ、それはそうだけどさ……これ」

《エラー》

試しに指輪を取り付けてバツクルに翳すが、鳴り響いたのはその三文字だけ。

即ち——使用不可の音声。

「おかしいな……」

「これ失敗作なんじゃないの?」

「馬鹿言うな!俺が失敗作を作る訳ないだろ!」

失敗作というワードが琴線に触れたのか、怒鳴る茂。

急に怒られたじろぐイツセーだったが、負けじと反論した。

「だって何度使ってもエラーだけだぜ!?普通無いだろこんなの!」

「お前の魔力に問題があるんじゃないのか!」

「何だ?!」

「何を!」

遂には子供のように睨み合う両者。

と、そこへ——

コンコン

扉を叩く音が聞こえてきた。

「ん？何だろ」

一旦喧嘩を止めて外を伺うイツセーだが、そこには誰もいなかった。代わりに、足元には小さな箱が置かれていた。

「何だこれ？」

店内に戻って開けてみるイツセー。

その中身を見て、目が開かれた。

「お、おとおおっちゃん!!」

「な、何だどした!？」

「こ、これ!!」

何やら興奮しているらしいイツセーが茂に差し出した箱の中には——赤色の魔法石があつた。

「魔法石……!?!? 一体誰がっ」

「分かんねえ……外見たけど、誰もいなかったし」

狐に包まれる気分に陥る二人。

「と、兎に角、これを指輪にしてみるぞ」

「あ、ああ！」

とはいえ折角手に入れた魔法石。

茂は早速作業室に籠った。

『相棒』

「ん？どしたドライグ」

何やら深刻そうな雰囲気帯びているドライグ。

『あの魔法石だが……何やら胸騒ぎがする』

「は？」

うわああああああああああああああああ  
!!!!!!

そんな意味深な発言の真意を訪ねる前に、響いてきた悲鳴。

「この気配は……ファントム!？」



こうしてはいられないとばかりに、面影堂を飛び出すイツセー。

悲鳴が聞こえてきた法学と魔力の気配を頼りにバイクを走らせると、そこには無数のグルルとそのグルルに囲まれる少年が。

「いたいた！」

《コネクト・プリーズ》

コネクトの魔法でウィザードガンを取り出すと、グルル目掛けて銃弾を撃つ。

放たれた弾丸は見事、少年を襲おうとしたグルルに命中し、グルルは吹き飛ばされた。

「おいおい、今時集団の苛めなんてカッコ悪いぜ？」

《ドライバーオン・プリーズ》

バイクから降りると、ウィザードライバーを顕現させる。

《シャバドウビタツチヘンシーン！シャバドウビタツチヘンシーン！》

「変身！」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

ウィザード・フレイムスタイルに変身すると、そのままグルルに飛び蹴りをかます。

『ヴう……!!』

グルルが突き出した槍を摒を蹴ることで華麗に躲す。

そのまま首を足で挟んで地面にたたきつけた。

『グウ!!』

「おらっ!!」

『グアアアア!!』

立ち上がったウイザードFSはウイザードガン・ソードモードで一閃。

グールは忽ち石のように崩壊していった。

「……ん?今日はこいつ等だけか」

グールだけなのに対し訝しむウイザードFSだったが、「まあいいか」と切り替え、少年へと近づく。

「おい、大丈夫か?」

「ん、んんう……………」

目を覚ました少年。

「君、家何処だい?送っていくから」

「え?」

「また怪物に襲われるかもしれないだろ?」

すると少年は俯いた。

まるで嫌がっているかのようだ。

「どうしたんだ?」

具合でも悪くなったのかと思ひ心配になったイツセーだったが、次の瞬間には、少年は走り去ってしまった。

「あ、おい待ててー！」

慌てて少年を追いかけるイツセー。

とは言え小学生と高校生では、その体力差は歴然。

「わっー！」

あつと言う間に追いつかれてしまった。

「何で逃げるんだよ!?!」

「……………」

対して、少年は無言のままだった。

と、その時だった。

「洋樹!!」

その場に響く鋭い声。

親子喧嘩かと思つたイツセーだったが、目の前の少年が肩をビクつかせていた。

「もしかして、君の名前?」

そう尋ねて、少年と共に声が出た方へと向くと、そこには眼鏡をかけた女性が走り

寄ってきた。

「見つけたわよ洋樹!!」

「……………」

怒り心頭の女性。

だがイツセーには彼女に心当たりがあつた。

「…美紀子さん」

「へ？」

「美紀子さんですよね？」

イツセーが尋ねると、女性は驚いた風に頷く。

「そうだけど……………君は？」

「イツセーですよ。兵藤一誠」

兵藤一誠、その名を聞いた女性——美紀子は思い出した様に納得した。

「一誠君?! まあ、こんなに大きくなつて……………つと、それは兎も角、どうして洋樹を？」

「はい。その事でちよつとお話が……………」

そして、場所は変わって。

「は〜い、どうぞ〜！」

洋樹にはんぐりくのドーナツをご馳走し、イツセーは事の経緯を美紀子に説明した。

「それじゃ、洋樹がそのゲートで、ファントムって化け物に襲われたって言うの？」

「はい」

「しかも、一誠君が魔法使いつて。何が、何だか……」

「ははっ……。まあ、見てもないのに信じるつても、無理ですよね」

「え？」

《クラークン・プリーズ》

イツセーは証拠を見せるべく、使い魔のイエロークラークンを創り出す。

彼女の周りをふわふわ漂うクラークンを見て、美紀子は漸く信じる気になったようだ。

「信じてもらえた？」

「ええ……こんなの見せられちゃね」

「……洋樹君は俺が必ず守るので、安心してください」

力強く宣言するイツセーに、美紀子は感慨深げにつぶやいた。

「ありがとう、一誠君。遅しく育ったのね……。あんな事があったのに。少し、ほつとした」

「はい……」

イツセーの脳裏に浮かんだのは、両親が眠るベッドの前。

美紀子は、その時イツセーの両親を診ていた看護婦だったのだ。

「俺は父さんと母さんの、最後の希望ですから」

そう言うイツセーに、美紀子は苦笑いをこぼす。

「親になって、あの時のあなたのご両親の気持ちが良く分かる。なかなか伝わらないけどね」

そして洋樹の元に行く。

「さあ、洋樹。お家に帰ろう。一誠お兄ちゃんが一緒に来て、あなたの事、守ってくれてるって」

「……嫌だ」

「えっ?」

驚く美紀子に構わず、洋樹は続ける。

「帰りたくない。僕が一誠ん家に行く」

「おい、何言ってるんだ?家でお父さんお母さんと一緒にいる方が、お前も安心だろ」

「パパやママなんか嫌いだ!」

一呼吸すると、

「いない方がいい!!」

「洋樹!?!」

頑ななままでにその態度を崩さない洋樹。

どうした物かと苦心していると、見かねたイツセーが割って入った。

「じゃあ、今日は一旦俺の家に泊めるってのはどうです?」

「だけど……」

「大丈夫。24時間見張っておきますから」

「……じゃあ、お願いするわね。一誠君」

躊躇いは有ったものの、美紀子はイツセーに任せることにした。

———

夜、面影堂——

「……うつ、うつ……」

ベットで啜り泣いている洋樹。

「ほんとは帰りたいたいんだろ？何で意地はってんだよ」

そこに、見張りをしていたイツセーが入ってきた。

「どうやら、ある程度は予想していたらしい。」

「……パパが悪いんだ。いつつも仕事が忙しいって、そればかり。ちゃんと約束したのに……」

曰く、先日は洋樹の誕生日だったらしい。

父親は、洋樹に誕生日プレゼントとしてプラモデルを買ってあげたが、それは洋樹の望んでいた物とは違う物だった。

それで喧嘩になってしまったが、洋樹は別にそこに対して怒っていた訳では無いとの事だった。

「パパは僕の話、ちゃんと聞いてないんだ、って思って。なのに、ママはパパの味方をするし。2人とも僕の事なんて、どうでもいいんだ！」

「んな事ないって」

「あるよ！今日だって、僕、死ぬかと思ったのに、結局、ここん家に預けたじゃん！」

「うーん、しょうがないなあ。ほら」

携帯のメールの履歴を見せるイツセー。



そこにはずらつと並んでいる美紀子の名前が。

「これ……全部、ママから？」

頷くイツセー。

メールの内容を洋樹に見せる。

【襲われたときは一誠くんだけが頼りです。

どうかよろしくお願いします。】

【何があっても守ってやってください。】

【洋樹は無事ですか？】

その内容はどれも、洋樹の事を心配するものであった。

「子供の事が、どうでも良いなんて言う親はいないよ。お母さんは、お前の事が心配だから、俺に預けたんだ。俺がお母さんの知り合いで、俺が魔法使いだから。普通、大切な子供を身も知らない奴に預けたりなんてしないさ。……明日、お母さんにもちゃんと話してあげるよ。洋樹が何に怒ってるのか。なつ。俺もついてやるから」

諭すイツセーに洋樹は弱々しくはあるが、静かに頷いた。

――

翌日。

イツセーと洋樹は、洋樹の自宅に向かうべく歩いていた。

「一誠もプラモ作ってるの？」

「ああ。これでも結構作ってるんだぜ？俺」

「ホント!?じゃあ今日さ、一緒に作ろうよ!」

「おう!」

仲睦まじい兄弟のように見える二人。

が、急に沈黙するイツセー。洋樹の表情も険しいものへと変わる。

その視線の先には、

「美紀子さん!」

「ママ!」

幾つもの傷が付いた美紀子。

だが、限界だったのか、ふらりと倒れる。

その首を掴んで引き起こしたのは――

『ん……？ おお！ 会いたかったぜ。指輪の魔法使い！』

真紅の体躯に、何処か鳥を彷彿とさせるフォルム。

「……ファントム!!」

イツセーが以前太陽まで蹴り飛ばした上級ファントム、フェニックス。

フェニックスは美紀子を担ぎ上げると、無造作に二人の前に放り投げた。

『此奴をやるのは簡単すぎてよお。てめえなら息の根止める前に……思う存分甚振れそ  
うだ!』

外れ落ちていた美紀子の眼鏡を踏み砕くフェニックス。

「……洋樹、お母さんに付いてやれ」

「う、うん」

茂にメールで救急車を呼ぶように連絡した後、イツセーは変身の体制をとる。

《シャバドウビタッチヘンシーン!》

「……変身」

《フレイム・プリーズ! ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!》

《コネクト・プリーズ》

魔法陣からウィザードガンを引き抜くと、静かに構える。

「だったら遊んでやるよ……泣くほどにな」

『さあ、楽しませてもらうぜ!』

フェニックスは炎から大剣・カタストロフを創り出すと、大きく振るいながらウィザードFSに向かって斬りかかる。

「はあっ!!」

ウィザードFSはそれを受け止めつつ、洋樹と美紀子に被害が行かぬように近くの雑木林へとフェニックスを追いやる。

「おらっ!」

『ぬう!!』

剣同士がぶつかり合い、乾いた音を響かせる。

一見互角かと思われるこの戦いだが、徐々にウィザードFSが押され始めていた。

そして、

『おらあ!!!』

「グハッ!!」

とうとうフェニックスの攻撃がウィザードFSのボディに突き立てられた。

今までのフアントムとは違う重みのある攻撃に膝をつくウィザードFS。

『はっ、立てよ!』

振るわれた大剣を足で捌いて跳ね起き、斬り返すウィザードFS。

『おっと、やるねえ』

ソードで受けた大剣を押し返すも、

『おりやつ!』

『うわっ!』

徐々に足元の地面が陥没していく。

「くっそ……………!」

《キャモナスラッシュシユシイクハンズ! フレイム・スラッシュストライク! ヒーヒー

ヒー!》

「おおおおおおおつ!!」

炎をまとった斬撃を見舞う。

襲ってきた炎を纏う十文字の衝撃波を、片手で軽々と弾くフェニックス。

「な……………!?!」

『ははっ、その程度の火じゃ効かねえな。魔法の火を使えんなら、こんくらいやってみや

がれ!』

そう言うと、全身から炎を噴き出すフェニックス。

その炎の圧力は凄まじく、軽々と吹っ飛ばされるウィザードFS。

「がはっ!!」

『これが地獄の業火つてやつだ』

「な、なんつー威力だよ……けどー!」

《シャバドウビタッチヘンション! ウォーター・プリーズ。スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜  
!〜》

炎には水だ、と今度はウォータースタイルに変身する。

《キャモナシユータイングシエイクハンズ! ウォーター! シユータイングストライク!

スイー! スイー! スイー!〜》

「ハアアアアア………でやああああああ!!」

魔力を十二分に込めた一撃を撃ち放つ。

が、

『フンっ!!』

フェニックスの業火で、忽ち蒸発、気化してしまう。

『無理だな。こんなしよぼくせえ水で、地獄の業火は消せねーよ!』

「くそっ!!」

《バインド・プリーズ》

動きを封じようと水で出来た鎖で拘束するウイザードWS。

だが、やはりフェニックスの炎の熱量により蒸発してしまう。

『どうしたあ?もう終わりか!?!』

追い詰めるべくじわじわにじり寄るフェニックス。

『相棒!一旦体勢を立て直せっ!!』

「ッ、分かってる!」

《ランド・プリーズ!ドツドドドドドン、ドンドツドドン!》

『うら!』

大剣を振るうフェニックス。

《ディフェンド・プリーズ》

進路を防ごうと土の壁を形成するウイザードLD。

だが、それをあつかりと斬り壊し、ゆっくり歩み寄るフェニックス。

《ディフェンド・プリーズ》

『無駄だつて言つてんだろ!』

もう一度発動しようとするが、やはり難なく斬り崩されてしまう。

『はあっ!!』

「ぐっ!?!」

もう一度発動しようとするも、それすら叶わずウィザードガンで受け止める羽目に。

『てめえ如きの魔力で、この俺様に敵うわけねえ!!』

「ツ、ガハアツ!!」

何度も斬撃を浴びせるフェニックス。

追い詰められたウィザードLSの背後には川が。

『もう終わりか?』

「うっ……!?!」

ウィザードLSの首を掴み、その身体を差し上げ投げ飛ばすフェニックス。

『だったら……くたばっちまいな!!』

「ツ!!ガアアアアアアアアア!!」

大剣から炎を放出させ、その剣で斬撃。

斬撃を喰らったウィザードLSはその余波で川へと叩き落されてしまう。

『何だこの程度かよ……つまんねー手品師だったなあ』



心底ガツカリした様に、フェニックスは肩を落とした。

――

病院では、緊急処置を受けている美紀子。

「伊藤さん、分かりますか?!」

「ママ、しつかりしてよ!」

手術室へと運ばれて行く美紀子。

「大丈夫、大丈夫だから……」

イツセーからの連絡を受け、救急車を手配し付き添った茂は、洋樹をそう言っ  
て励ますのだった。

「イツセー……」

茂は、それから一切連絡のないイツセーも気がかりであった。  
と、そこへ。

「……おっちゃん………」

「つーい、イツセー!?!」

全身ずぶ濡れで、傷ついたイツセーがやって来た。

驚く茂を余所に、イツセーは足を引き摺って茂の元へと歩み寄る。

「お前大丈夫か!?!ポロポロじゃないか!!」

「へ、へへ……何とか、川に飛び込んだお陰で間一髪ってトコだった……ぐー!」

痛む傷を抑えて呻くイツセー。

「か、看護婦さん!!」

茂は慌てて近くの看護婦を呼ぶのであった。

『サンキュー、ドライグ……お前の機転が遅かったら、真面に受けてたトコだった』  
精神世界でドライグに礼を言うイツセー。

実はあの時——

『もう終わりか？』

「うっ……!!？」

ウィザードLSの首を掴み、その身体を差し上げ投げ飛ばすフェニックス。

『だったら……くたばっちゃいな!!!』

大剣から炎を放出させ、その剣で斬撃。

それを喰らう直前に、ドライグはウィザードLSに叫んだ。

『相棒！川に飛び込め！今のお前だと直撃すれば死ぬ!!!』

『わ、分かった!!』

迫る炎が都合よく目暗ましになってくれるのを利用して、ウィザードLSは自ら川へと身を投げたのだった。

が、直撃は避けたものの、その爆風の余波はウィザードLSの体力を奪うのには十分だったらしく、イツセーの体は川底へと沈んでいった。

が、その時であった。

グオオオオオオオオオオン——

鳴き声と共に漆黒の中から現れるドラゴン。

驚いて目を見開くイツセー。その瞳は深紅に染まっており——

気づけば、イツセーは川の畔にいた。

無意識で泳ぎ切ったのかも定かではなかった。

『いや、気にするな。奴の力は想定外だったからな』

ドライグはさして気にした風もなくイツセーに返答する。

寧ろ、ドライグは別の事を懸念していた。

『だが、あの時重傷だった相棒を助けたのは恐らく……』

ドライグの脳裏には、一つの答えが浮かび上がっていた。

それは半年前の日食の日、イツセーの心と体を破壊しようとしていた、あの——

『ドライグ?』

『——っ』

その考えに辿り着くと同時に、イツセーの声によって現実へと戻される。

『……有り得ないな』

『…何がだ？』

『いや、こつちの話だ。それよりも相棒。奴をどうするかだ』

今後の事を話していく二人。

『魔力、殆ど使いきつちまった……これじゃ、禁手もロクに運用できないな……』

『ああ……。だが、何故ファントムはあの小僧の母親を？』

『そりゃ、ゲートを絶望させる為だろ？』

だが、イツセーの脳裏にフェニックスの呟いた、「ある一言」がチラついた。

—————

『此奴をやるのは簡単すぎてよお』

—————

『……………違う』

『む？！』

『美紀子さんはゲートじゃない。ゲートを殺しちまったら、ファントムは生まれられないだろ？！』

『ああ。つ、まさか……………』

ある確信を得たドライブに領き、イツセーは続ける。

『あいつの目的は、洋樹から永遠に両親を奪う事だ。洋樹を絶望させる為に……………。次は、父親だ』

—————

病院近くの公道。

病院へと車を運転している父親。

『よお』

その車の前に現れたフェニックス。

慌ててハンドルを切ろうとする父親、

だが、車体の下部を蹴り飛ばすフェニックス。

車は道路から外れ、横転してしまう。

「わっ！うわっ！」

『てめえがゲートの親父だな？』

そう言うフェニックスは横転した車から父親を引つ張り出して、投げ飛ばす。

「あつ、がつ……！」

『てめえの事は好きに出来るからな。楽しませてもらうぜ』

負傷したのか逃げ出す事も起き上がる事も出来ない父親の胸板を残酷にも踏み付け、

踏み躪るフェニックス。

「ああっ！うっ！」

『いい声だねえ。ふはは……！』

「おおおおっ!!!」

そこにウイザード・ハリケーンスタイルが風を纏い飛翔、急襲をかける。

「おりゃー！」

『っ!?!』

が、寸での所で躲されてしまう。

『魔法使い！てめえ生きてやがったのか！』

「俺が何時死んだって言ったよ？」

何時も通り軽口をたたくウィザードHS。

が、既に魔力も体力も限界寸前。

『分かってるな相棒？戦おうとするなよ』

「勿論だよ」

『ここそそと喋ってんじゃねえ!!』

フェニックスの猛撃を疲労困憊ながら捌いていく。

が、やはり全て捌ききるのは無理だったらしく、一撃貰っただけで倒れてしまう。

「ぐう!?!」

『ハッハッハ！どうし——グッ!?!』

倒れたフリをしていたウィザードHSから銃撃を諸に食らい、一瞬怯んでしまう。

その隙にウィザードHSは、

《エクステンド・プリーズ》



魔法陣を展開。

そこに腕を入れると反対側から長く伸びた腕がそのまま父親を掴み、ぐいつと引き寄せて抱え込む。

「……じゃあな」

風を纏って飛翔し、そのまま逃走。

『?!?しまった!』

まんまとハメられた事を知るフェニックス。

「体力も魔力もギリギリなんでね。一発逆転、狙わせてもらったぜー!」

そう言い残して、ウイザードHSは悠々と病院の方へと去っていった。

一方の病院では、何とか到着したウイザードHS。

驚く周囲の人に構わず変身を解くと、近くにいた看護婦に父親を預け、自身も倒れ込む。

「頼み、ます………」

「き、君! しっかりして!!」

必死に呼びかける看護婦の言葉に答える気力もなく、イツセーの意識は闇の中へと沈

んでいった。

――

『何故、見ず知らずの他人のために戦う？』

――これ以上、絶望を広げないためだ！

『無駄だな』

――何？

『貴様は結局そうやって根本的なことから目を背けているだけだ。そう――他人が己の目の前で死に行くことに』

——違う!……俺はっ、俺はっ!!!

『違うものか。貴様は自己満足を得るために戦っているだけだ。貴様は結局の所、我等と同じ存在なのだ』

——

「ツ!!!」

勢い良く目を覚ますイツセー。

額には脂汗が。

「……起きたか」

「……おっちゃん」

傍には茂が立っていた。

「洋樹君のご両親は？」

「……まだ、意識は戻らんそうだ。一応、峠は越えたそうだが……」

それを聞いて、イツセーは点滴を引き剥がすと、洋樹の元へと向かう。

「お、おいイツセー!!」

慌てて茂はそれを追う。

構う事無く洋樹の元へとたどり着いたイツセーの目の前には、無傷の洋樹と、横たわる彼の両親が。

その光景は、奇しくも、小学生の時の自分が目にした光景と全く同じだった。

すると、薄っすらと洋樹の父親は意識を取り戻した。

「あ……」

「パパ!?!」

「ああ……洋樹……。お前は、無事だったんだ……。良かった……」

「……僕のせいだ。僕が、パパもママも居ない方が良くなんて、言っちゃったから……」

そんな洋樹の両肩をぐつと掴むイツセー。

「違う！洋樹のせいなんかじゃないし、お父さんとお母さんも、まだいなくなっていない！」

お前が諦めちゃ、駄目だ！お前は、お父さんとお母さんの希望なんだ。だから……！お前が希望を捨てな！！」

「一誠……」

「大丈夫。お前の希望は、俺が必ず守るから……絶対に、断ち切らせやしない」

そう洋樹に言い聞かせると、病室を飛び出すイツセー。

『相棒！』

『あいつはまた美紀子さん達を狙ってくる！なら倒すしかないだろ？』

『その体で何が出来る!?今のお前は重症なのぞぞ!!』

『無理でもやらなきゃ誰も救えないだろ!!もう………そんなのは絶対に嫌なんだ!!!!』  
自らを止めようとするドライブに、イツセーは感情的になって叫ぶ。

そして、病院の椅子にへたり込むように座った。

『如何すりやいいんだよ……禁手だつて今の体じゃ耐えられないし、魔力だつてあいつの足元にも及ばない……八方塞がりじゃんか』

『相棒……』

『なあドライブ……如何すりやいい?如何すりや、洋樹君の希望を守れるんだ……?』  
その問いに、ドライブは答えられない。

「……………だったたら、探せば良いんじゃないか？」

その言葉とともに、イツセーの眼前に差し出されたのは、新しい指輪。顔を上げると、そこには茂が。

「おっちゃん…」

「イツセー。答えは、何時もそこに置いてある訳じゃない。誰だつて、傷つきながら、躓きながらそれを探している。お前だつて、これまでに何度も探してきただろ？」

「…………」

「俺が出来るのは、こうやって答えの道しるべを開いていくことだ。…………だがなイツセー」

茂はイツセーにその指輪を手渡すと、真剣な表情で語り始めた。

「この指輪を作り終えた時、俺は言いようのない不安を覚えた。この指輪はただの指輪じゃない…………俺の感がそう言っている」

「…………」

「本当なら甥っ子にこんな危険な指輪を渡したくなんてないが…………お前は何か何でも答えを知りたいんだらう？だったたら…………手渡さなきゃって思った」

「おっちゃん…………ありがとう」

何かを決心したイツセーは、迷いなく立ち上がった。

『待て相棒！その指輪は恐らく相棒の体内の奴の力を引き出すものだ!!それを使うというのは……!』

「ああ、そうだな……ただじゃ済まないだろうぜ」

『ならば……!!』

「けど、迷ってる暇なんてない。可能性が1%でもあるなら……それが危険な橋だとしても渡らなきゃ、守れる命だって……希望だって、守れないから」

ドライグの制止を振り切り、悲鳴が聞こえた方へと走り出すイツセー。

病院内では、逃げ惑う人々を相手に暴力をふるうフェニックスの人間体・ユウゴ。

「おい」

「ああ?」

呼び掛けられ、振り返ると、そこにはイツセーが。

「やっぱり来たな、指輪の魔法使い。今度こそ、逃がさねえぞ」

「もう逃げねえから、安心しろ」

《ドライバーオン・プリーズ》

「お前はここで倒す……。変身」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

ウィザードに変身すると、取っ組み合いでフェニックスを外へ。

だが魔力の有無にかかわらず、肉弾戦で劣勢に追い込まれる。

『おらっ！』

「ぐう!!」

転がりながら新しい指輪を詰め、ウィザードライバーに翳す。

「ドラゴン、俺に力を貸してくれ！」

しかし――

《エラー》

帰って来たのは、無慈悲な音声のみ。

「なっ!?!」

発動できない事に焦りを見せるウィザードFS。

『余所見してる場合じゃねえぞ！』

「っ、ちい!!」



フエニックスの剣撃をやり過ぎしながらも、もう一度指輪を翳す。

《エラー》

だが、返って来たのは先刻と同じ返事のみ。

「何で発動しねえんだよ!？」

『おらあ!!』

「がっ——!？」

フエニックスからのドロップキックを諸に受けるウイザードFS。

地面を転がりながら立ち上がるも、連続で火炎攻撃を受け、再びぶっ飛ばされる。

「がっ、はっ………!!」

『よくもまあ俺様を倒すなんてほざけたもんだなっ!!』

「ヴッ!!」

今度は膝蹴り。

蹲るウイザードFSの頭を容赦なく蹴り上げる。

『そのキラキラした目障りな頭、俺が粉々に砕いてやるよ!!』

絶体絶命。まさに成す術もないウイザードFS。

もはや最後の希望はこの指輪の力のみ。

《エラー》



そう叫び指輪をドライバーのハンドオーサーに翳すと——視界が突如暗転する。

気づけばイツセーの眼前の世界は、幼い自分とベットに寝かされた両親がいる病室に。

「母さん……父さん……！」

「ここは……俺の……？」

「そうだ。ここは、兵藤一誠のアンダーワールドだ」

そう言つて歩み寄つてきたのは、イツセー自身であつた。

しかし、その瞳は、血のように赤い。

「懐かしいだろう？」

「嫌だ……」

「絶望の時だ」

「嫌だーっ！」

叫ぶ幼い自分の姿に、一瞬間を顰めるイツセー。

だが、それは本当に一瞬だけであった。

「そうだな……。でも、それだけじゃないさ。俺が父さんと母さんから、希望を貰った時でもある」

「ふん……相変わらず、しぶとい奴だ」

「へっ、今更過去の記憶なんかで俺を絶望させれると思うなよ？——ドラゴン」

「フツ……言うようになったな。兵藤一誠」

すると、暗転する世界。

目の前の自分は姿を変え、そこにいたのは一体の巨大なドラゴン。

ウィザードドラゴン。

イツセーがサバトの儀式において生み出したファントム。

「俺に力を貸せ、ドラゴン」

『断る。と、言えば？』

「そんなときやお前も死ぬだけだ」

『ククク……確かに、その指輪を使えば、現実世界で俺の力を使えるようになる。だがそれは、貴様が絶望に近づくと云う事だぞ。これを聞いても尚、俺の力を欲するか?』

「……………」

『相棒、此奴を信じるな』

そのドラゴンを威圧するかのように姿を現したのは、赤い体躯のドラゴン——ド  
ライグだ。

『貴様の力を使わずとも、俺——赤龍帝の力だけで十分だ』

『ふん。この男が今その力に耐えられるとほざくのか?馬鹿も休み休み言え』

『貴様……………!!』

『第一にな、俺は貴様等と馴れ合うつもりは毛頭ない。そんな貴様に、俺が易々と力を貸すと思うか?それならばいっその事死んだ方がマシだ』

ドラゴンを射殺さんばかりに睨むドライグ。

対するドラゴンも、拒絶の意を体全体から発していた。

「——ははっ」

だがイツセーは……………笑った。

『…何が可笑しい』

「分かってないなあ、ドラゴン」

『…何?』

「お前の力も——俺の希望なんだよ」

そう言つて、不敵に笑つて見せるイツセー。

『この俺が……希望だと?』

ドラゴンは訝しげに呟くと、眼前のイツセーを睨みつける。

が、何を思ったのか、大きく笑い始めた。

『ふ…………フハハハハハ!!この俺を希望と宣うか!…………面白、興味が沸いた。なら

ば、どこまで耐えられるか、試してやる。思う存分、俺の力を使うが良い!!!』

ドラゴンは暗黒に向かい吠えると、イツセーの肉体へと戻っていく。

そしてイツセーは感じた。

体の奥底から湧き上がる力を——

《フレイム》

『?』

《ドラゴン!》

『ぐおあつ!!』

突然の強烈な赤い光に眩むフェニックス。

そして、ウィザードF Sが翳した手の先には赤い魔法陣が。

そして、魔法陣からは炎で形作られたドラゴンが飛翔。

そのまま、ウィザードF Sの肉体へと溶け込んでいく。

《ボー、ボー、ボーボーボー!!》

炎が晴れると、そこには漆黒のローブを真紅に染め上げた、新しいウィザードが佇ん

でいた。

フレイムスタイルにウイザードラゴンの力が融合した強化形態。

ウイザード・フレイムドラゴン

諸刃の希望を宿す龍の魔導士が、今ここに誕生したのであった。

「さあ……ショータイムだ」

そう言つてフェニックスに歩み寄るウイザードFD。

『はっ、見てくれが変わっただけじゃねえか!!』

フェニックスはそう意気込んでウイザードFDに格闘戦を仕掛ける。

だが、先程までの力関係は見事に逆転しており、ウイザードFDの掌底であつさりと吹き飛ばされる。



「すげえ……まるで、力が蘇ったみたいだ」

先程までと違い痛みを感じない体に、ウィザードFDは感嘆の声を漏らす。

『があっ!!……て、てめえ!!』

怒りに震えるフェニックスはカタストロフを生成。

《コネクト・プリーズ》

ウィザードFDはコネクトでウィザードソードガンを取り出す。

《キャモナスラッシュシユシエイクハンズ・コピー・プリーズ》

ソードガンのハンドオーサーにコピーの指輪を翳した。

すると、ウィザードFDの右手にもう一刀のウィザードソードガンが生成された。

『おおお!!』

「ふっ、はっ!!」

振り下ろされたカタストロフを一刀で受け止め、もう一刀で反撃に転じる。

怯んだフェニックスに絶え間ない連撃を与え、二刀の切っ先突きで吹き飛ばす。

『ぐはあああっ!!?あ、有り得ねえ……この俺が、指輪の魔法使いごときにいつ!!』

自身が逆に追い詰められていつている事実を受け止めきれずに激昂するフェニックス。

ス。

「言っただろ。ここでお前を倒すってよ」

《ルパッチマジックタッチゴー！ルパッチマジックタッチゴー！》

と、その時、赤い指輪が煌いた。

「成程。この姿の時に使えるんだな」

《チヨーイイネ！スペシャル・サイコー！》

背部に展開される魔法陣と共に、ふわりと浮き上がるウイザードFD。

その左前方に炎を纏って顕現したドラゴン。

そのままウイザードの背後へ回り込み、背中からウイザードの中に飛び込むと、ウイザードの胸部にドラゴンの頭部が出現。

「ファイナーレだ」

口を開け、灼熱の火炎のブレス攻撃。

『うおおおおおおおおおおおおおおおお!!!』

その炎を地獄の業火で相殺しようとするフェニックス。

業火を自身に纏いウイザードに向かって行くも焼き尽くされてしまい、





今日も今日とて騒がしい、兵藤家なのであった。

第八章：異世界事変のソーサラー

MAGIC73『Another World From  
Welsh Dragon』

悪神ロキの野望を挫いて数日が経過したある日――

「おらっ!」

『ふっ!』

俺――イツセーとはとあるファントムと戦っていた。

「イツセー君!!」

「ほっ!」

『ツ!?!』

木場が放った聖魔剣を間一髪で躲すファントム!

その間に駆け出すのは小猫ちゃん!

「…えいつ!」

『ぐっ!』

仙術を纏った拳が炸裂する!

『ちっ、私の気を乱したか……!だがっ!』

「っ!!」

フアントムは小猫ちゃんの頭に手を置くと、魔力を吸収した!

その時、奴の右手が怪しく輝きだした!

『ふん、これだけ溜まれば十分だろう……!』

「どういう意味だ!」

『お楽しみはこれまでだ、魔法使い!』

『っ!』

奴が右手を高く掲げると、その場を光が包み込んだ!

逃げる気か!?

「逃がすかああああ!!!」

「イツセー!?!」

リアスの制止を振り切って、俺は光の中心へと飛び込む!!

~~~~~

とある世界のとある日常——

「行くぜ、木場！」

《Jet!》

俺——イツセーは仲間であるイケメン王子こと木場に突っ込む！

「くうっ!？」

高速で突っ込むが木場にはあと一歩つてとところで躲された！

けど、まだまだだぜ!!

「ドラゴンショット！」

「ふっ!!」

木場が防御用に展開した聖魔剣のシエルターに阻まれる！

その隙に木場はこちらに突っ込んでくる！

《Blade!》

「はあああつ!!」

ギンツ!!

俺の眼前で刃同士が鏝迫り合いを起こす！

ピ——っ！

「ふ、二人ともっ！そこまでですう!!」

と、アラームと同時にギヤスパークからストップが掛けられ、俺たちは腕を下した。

「ふう…サンキュ、木場」

「どういたしまして」

俺たちはドカツと腰を下ろす。

「お疲れ様です！イツセーさん、木場さん！」

「サンキュ、アーシア！」

「ありがとう、アーシアさん」

俺達はアーシアからスポーツ飲料を受け取る。

「二人とも、精が出てるわね」

「ここで、我らがリアス部長のお出ましだ！

くうく、相変わらずいいおっぱいです!!

「……鼻の下伸ばしてます」

小猫ちゃんからの痛烈な突っ込み！

ごめんね、小猫ちゃん！

「どうします部長？例の件は」

「……そうね」

例の件？

「どうかしたんすか？」

「実はね——」

部長の話はこうだった。

なんでも先日から、この近辺に二足歩行をする魔物の目撃情報が目撃されているらしい。
それだけなら異常はない様に見えるが、そいつは夜な夜な不特定多数の人間を攫って

いるらしい。

部長の領内で……………。

「そこで、魔王サーゼクス・ルシファー様からこの魔物についての調査が入ったのへえ。って、じゃあ今こうしている間にも！」

俺の近所の人たちが攫われるかもしれない……………！

「イツセー。気持ちは分かるけど、現段階ではまだ情報はないの。無暗に動くのは得策ではないわ」

「で、でもっ」

「まずはその魔物が出没する場所を調査するのです」

朱乃さんの言葉に俺は漸く納得した。

「成る程！」

「で、あわよくば保護。もし悪質な知性を持っているなら……………」

「討伐、だな？」

いつの間にか来ていたゼノヴィアがそう言ったのに対し、部長は頷いた。

「さて、各自準備できたら再びここに集合よ？」

『はい！』

数時間後——

俺達はその魔物が出没するという廃墟付近にやって来た。

何か、如何にも出そうって感じだな……………。

「はうう、怖いです……………」

アーシアはさつきから震えっぱなしだ。

まあこんな寂れた所、女の子には怖いよな……………。

「……………ですが、彼方此方に魔力の痕跡がありますわ」

朱乃さんの言うとおりに、魔力に乏しい俺でも分かるほどに、微量な魔力を感じる。

「……………部長、何かが来ます」

小猫ちゃんが警戒しながら部長に告げた。

『……………悪魔の侵入者とは、珍しいな』

暗闇から姿を現したのは、異常に隆起した金色の鱗を持った——怪物だった。

「な、何だこいつ……?」

『ん? ああ……この世界の兵藤一誠か』

「……は?」

あいつ、今なんて言っただ?

この世界……?」

『何処から嗅ぎ付けたかは知らんが、私の計画に悪魔は不要だ——消えろ』

「!?!」

そう言うソイツは金色の波動を放ってきた!

いきなりかよ!?

だったらこつちも!

《Weish Dragon Balance Breaker!!!》

俺は即座に鎧を纏う!

「くらえ! ドラゴンショット!!」

俺は掌からドラゴンショットを放つ!

『ふんっ!』

ソイツは腰にぶら下げていた剣を手に取ると、俺のドラゴンショットを両断した!

「ふっ!!」

その合間を掻い潜って潜り込んだ木場の剣撃を容易く弾き、がら空きのボディに蹴りを叩き込んだ！

「ぐ!?!」

「木場!——今度は私だつ!!」

ゼノヴィアはデュランダルを振りかざし、怪物に一撃を見舞った！

『——温いな』

「何っ!?!」

で、デュランダルが体に食い込んでるのに、無傷かよ……………!?!

『カアアアアアアッ!!!』

「っ、うわああつ!?!」

「ゼノヴィア!」

怪物は全身から魔力を放出し、デュランダルごとゼノヴィアを弾き飛ばした！

『目障りだ……………いい加減に終われ!!』

『!?!』

怪物は二振りの剣を交差させて、巨大な魔力の弾丸を作り出す！

それを俺達にぶつけようと振りかぶった瞬間——何処からともなく飛んでき

た銃弾が奴を怯ませた！

『ツ!?!』——だ、誰だ!?!』

怪物が叫んだその時、陰から何者かが飛び出てきた!

「誰……?それはお前がよく知ってるだろ!?!」

そう語るその声は——不思議なほど、俺にそっくりだった。

「よお——ファントム!」

黒いローブに顔は指輪を思わせる派手にキラキラした仮面をしていた。

その人の手には銃が握られていた。

まさか、さっきのは——この人が?

『ふん、しつこいな……指輪の魔法使い』

ま、魔法使い?

……言われてみれば、魔法使いっぽいルックスだけど!

「つたりめえだろ?出張サービスもちゃんと兼ねてんだからよ」

対して、その魔法使いは軽口をたたく。

何と言うか、余裕な感じだな……。

『……ちつ、流石に貴様とまだ戦うのは早すぎるか。今日はこれにて幕引きとさせてもらおう!』

「あ、待てコラ!」

その人が止めるよりも早くに、怪物は姿を消してしまった……。

「はあ、また逃げられたか………つて、ん?」

ガツクリした様に肩を落としたその人は、俺達の事が視界に入るとピタリと動きを止めた。

「……まさかここで会っちゃうかあ」

? どう言う意味だ?

「…助けてくれたのは感謝するけど、貴方は何者なの?」

全員の気持ちを代弁して、部長がその人に聞いた。

「……えくつと、その」

『?』

その人は何だか妙に歯切れが悪く、云々唸っていた。

「………ああく! もう、良いか。……絶対、驚くと思いますよ?」

「どういう意味?」

そう言うとその人は、魔法陣に包まれた。

「俺の名前は――」

光が晴れて、そのシルエットが露わになってくる。

そして顔まで見えた時、俺達は驚愕した。

いや、多分一番驚いているのは俺だと思う。

何故なら、その人は――

「兵藤一誠……………ってやつば驚いてるよなあ。……………よつ、並行世界の俺」
『いや、それは違うだろ』

俺と全く同じ顔つきと髪形をしていたからだ。

そして————その人の左手から聞こえてきた声も、俺にとっては聞きなれたものだった。

MAGIC74 『対面する龍帝』

オカルト研究部部室。

現在ここで、未知との遭遇を体験した俺達と連絡を受けて駆けつけたアザゼル先生は真剣な顔付きだった。

原因は――

「あむっ………んん、美味しいな」

目の前の、俺にそっくりな男だ。

兵藤一誠………俺の名前を名乗ったそいつは現在、俺達の視線を気にする事なくドーナツを食べていた。

「……で、さっきから見てるだけ？」

ドーナツを味わいながら此方を見据える一誠。

……って、自分の名前を言うのって何か変な気分だな。

「……じゃあ、幾つか質問させてもらう」

「ホイ来た」

「お前さんの名前は？」

「兵藤一誠だよ」

「……本当か？」

「嘘ついてどうすんだよ」

「……一誠の言うとおり、コイツは嘘を付いている風には見えない。

自分自身だからなのか、俺にはそれが分かる。

「先生、多分コイツは嘘を言っていないですよ」

「イツセー、何で分かる？」

「……いや、何となく？」

「何となくってなあ……」

先生は呆れた様に見詰めてくる。

でも俺にだってこれだ！って言う確証もない。本当に、本能的に察しているだけだ。

『まあ、人格が違えど本質は同じ兵藤一誠だからな。そこは通じあっているんだろうさ』

そう答えたのは……一誠の方のドライグ。

「……平行世界、か。まさか本当に実在するとはな」

先生は神妙そうに眩く。

「平行世界？」

「あり得たかもしれない、もう一つの世界だよ。パラレルワールドって言った方が分かりやすいか？」

疑問に思った俺に、一誠がそう答えてくれた。

「あり得たかもしれない？」

「そ。……例えば、その一誠がエロ本を道端で見つけたとしよう」

………どんな例えだよ!?

「いや、変態そうだから」

「………ナイスな返答です」

小猫ちゃんがそう肯定した。

もういいよ!どうせ俺は変態エロ猿だよ!

「そこで拾うか拾わないか、でその先の未来が大きく異なる。そこから拾った場合の世界が、拾わなかった場合の世界が……或いは、エロ本が落ちてない場合だってある。それがパラレルワールドの根幹さ」

「へえ………」

「………説明全部盗られた」

丁寧な説明に感心していると、先生が少し落ち込んでいた。

……ドンマイです。

「……で、その平行世界が存在するとして、何故そちらのイツセーはこっちに來たんだ？」

ゼノヴィアの質問。

確かに、俺達はそれが気になっていた。

「……お前達が会ったあの怪物……ファントムを追ってきたんだ」

『ファントム？』

何だそりゃ？

「木場。それって何かの種族か？」

「いや、僕も初耳だ」

「これもパラレルワールドの特徴の一つだな。お前達の世界には存在しないが、俺達の世界には、ファントムが存在してる。俺達の世界は存在した場合の未来だ………つて、話が逸れたな」

咳払いをして、一誠はそのファントムについて説明してくれた。

「ファントムってのは、高い魔力の素質を持つ人間から誕生する怪物だ。その人間が絶望する事で誕生するんだ」

「人間から?」

「ああ。俺達の世界ではゲートって呼ばれてる。ファントムはそのゲートを絶望させる事でファントムの増やしているんだ。そして、ファントムは基本はそのゲートの姿を模している。……俺はあのファントムを追って、気付いたらこの世界にいたんだ」

映画みたいな話だな……。

「お前さんがこっちに来たのは」

「3日ほど前だよ」

「……そのファントムの目撃情報が出た日付と同じ、か」

「……ってことは、本当に別世界から!？」

「だからそう言ってるだろ」

何を今更、と言った感じだ。

「……で、お前さんは何で平行世界に来たって分かったんだ」

「ん〜……初めてこっちに来たとき、何か初めて来たとは思えなくて。それに……ドライグのオーラを感じたから」

「ドライグ……俺の事を!？」

「ああ。赤龍帝が二人いるのはおかしいって思ってたドライグと話し合った結果から、ここが平行世界だって結論に至ったんだ」

『……相棒、本気で泣きたくなってきた』

な、泣くなよドライグ！

『泣きたい時は、空を見上げれば良いよ。そうすればきつと、明日は笑えるから』
「でも雨が降ってたら？」

『涙が隠せて一石二鳥ウ!!』

『……うおおおおおん!!!』

泣いちゃったよ！

向こうのドライグのせいで此方のドライグ泣いちゃったよ！

「ちよ、ちよつと！お前のせいでドライグ泣いたじゃんか！」

「いや、この赤トカゲだろ」

『そう、俺は赤いトカゲ！嘗てはスペードの2に封印されていた……って違うわ!!』

「マニアックなネタどうも……って、そろそろ止めるか」

『そだな』

「自由すぎるだろお前ら!!」

俺の突っ込みを無視して、一誠は「よっ」と立ち上がった。

「んじゃな」

「んじやなって……何処行くんだよ!？」

「決まってるんだろ？野宿場所探し。ドライブ、この辺に公園ないか？」

『俺はカーナビか』

「下手なカーナビより安くて安全なドライブナビだよ」

『因みに定価幾らだ？』

「450円」

『昼のランチより安いじゃねーか!!!……………つと、この近くになら大きめの公園があるな』

「よし、暫くそこで寝泊まりすつか……………じゃ、また何かあったら呼んでくれや」

『すいーゆー』

それだけ告げると、平行世界の俺は悠々と出ていった。

「何て言うか……………」

「平行世界のイツセー先輩は、こっちの先輩より騒がしいですね」

「……………うん。俺もそう思った」

まさか伝説のドラゴン様と漫才染みた掛け合いやるとは思わなかったよ………

MAGIC 75 『その頃の仲間達』

鬱葱と茂った、深い森の中にある洞窟。

『——ワイズマン』

そこに安置された天蓋付きのベッドに向かって発せられた声。

暗闇なので姿まではハッキリとしないが、その闇の中でも輝く六つの赤い目が特徴的だった。

『——ガルムか』

天蓋の向こう側からは、その呼び声に対しての返事が返ってきた。

『…ドレイクが、例の石の試作品をもって、姿を晦ましました』

『……ほう。あの石をか』

ガルムからの報告に対し、さして気にした素振りを見せないワイズマン。

だが、ガルムはそれを疑問に思わない。

『ドレイクの処分は……』

『構わん。放っておけ』

『しかし………』

『恐らく奴は異世界にでも飛んだのだろう』

『異世界……』

つまりは、この世界にはいないと言う事を察したガルム。

『デッドコピーとは言え、かの——賢者の石を模倣したのだ。それが思わぬ効果を発したと考えるのが妥当であろう』

『………』

『何方にせよ、私と言えどそう簡単には干渉できん。お前は普段通りに、ゲートを絶望させ、ファントムを増やせ』

『はっ』

短く答えると、ガルムは闇に姿を消した。

『………』

ワイズマンは、ただ静観するのみだった。

~~~~~

木場SIDE

イツセー君がファントムと共に姿を消してから、もう三日が経った。

「どうだった、祐斗？」

「……………駄目です」

部長の問いに、僕は首を横に振るしかなかった。

「……………そう。アザゼルはどうだったの？」

「……………収穫無しだ」

アザゼル先生も方々に手を打ってイツセー君を搜索しているが、一向に見つからない  
そうだ。

そして今回は——彼等の手も借りている。

「アザゼル」

「……………ヴァーリか」

白龍皇、ヴァーリ・ルシファーとその仲間達。

今回は、彼等が自分の意思でイツセー君搜索に力を貸してくれているんだ。

「そつちはどうだった？」

「…残念だが」

「そうか…」

「でも可笑しくない？この世界の何処かにいる筈なら彼の気配を探知出来る筈なんだけど……………」

「感じないのか？」

「全くよ」

「……………どういう事だ？」

この世界にいるなら、少なくとも気配は感じられて当然だと言う黒歌。

じゃあ、イツセー君が意図的に気配を消していると言う事か？

「皆様、お疲れ様です」

イツセー君の搜索から戻ってきたらしいグレイファイアさんが、お茶を運んできてくれた。

「グレイファイア……………」

「?どうかなさいましたか、お嬢様」

「……いえ、何でもないわ。ありがとう」

……おそらく、この中でも彼女の方がシヨックが大きいはずだ。

でも、グレイフィアさんは悲しみを隠して気丈にイツセー君捜索に全力を注いでいる。

そんな彼女に、僕達が出来る事は何も無い。

……イツセー君、君は一体何処にいるんだい？

君の恋人は、こんなにも悲しんでいるというのに………つ。

「兵藤一誠は、今この世界にはいない」



——ツ!?

突如として聞こえてきた声に、僕達は全員警戒態勢に入った。

そうしながら声のした方を振り向くと、

「貴方は……………」

その正体は、イツセー君が魔法使いになる切っ掛けを作った人物。

——白い魔法使い。

「お前さんが、イツセーが魔法使いになった切っ掛けを作った魔法使いか」

「……………如何にも」

そうか、アザゼル先生は白い魔法使いにあつたのがこれが初めてなんだ。

「お前さんには聞きたい事が山ほどあるんだが、それは別の機会だ。さっきの言葉、あ  
りやどういいう意味だ？」

「言葉通りの意味だ。兵藤一誠は——平行世界に転移したのだ」

「平行、世界……………だど!？」

アザゼル先生は驚いたように声を荒げた。

「どうやら、三大勢力でも話は上がっているようだな」

「アザゼル、平行世界って？」

「……こことは違う、別の神話体系が支配する世界——所謂、別世界って奴だ。だが、まだ存在する確証はっ」

「ならば、兵藤一誠の気配や気が感じられないのは何故だ？意図的に絶っているのなら話は違うが、仙術を扱う二人でも探知できんのはどう説明するつもりだ？アザゼルよ」

「……っ」

白い魔法使いの言葉に、先生は言葉が詰まった。

「だが、その平行世界にファントムはいない。恐らく兵藤一誠が転移したのは、その世界に存在しない異物を消去するために世界に呼ばれたのだろう」

「世界に、呼ばれた？」

「ただの仮説ではあるがな。何にせよ、お前達では手出しが出来ん事だけ伝えておこうと思ってな」

《テレポート・ナウ》

「お、おい待て！」

先生の制止を無視する形で、白い魔法使いは姿を消した。

「……アザゼル、彼は一体何者だ？少なくとも、人間ではないのは確かだが」

「…俺にも分からんさ。あの魔法使いには、謎が多すぎる」  
確かにそうだ。

でも、現状はイツセー君の支援をしてきているから、味方と捉えることもできる。

だけど、異世界にいと分かった以上、僕達に出来る事は——イツセー君の無事を祈るばかりだ。

# MAGIC 76 『赤龍帝の激突』

よつす、イツセーだ。

と言つても、俺は原作？の方のイツセーだ。

俺と部長はもう一人の一誠がいるであろう近所の公園へと向かつてる所だ。

「ホントにいるのかしら？」

「まあ行つてみるしかないつすよ」

「そうね」

そうこう言つてるうちに公園に着いた。

そして——探さずとも俺達は一誠を見つけた。

「んん……………むにゃ」

器用に公園のベンチで寝そべっていた。

まさか本当に野宿していようとは……………！

「おーい、一誠」

「んあ?……あれ、俺がいる。ドッペルゲンガーかおい」

「いや、違うから。ここ、平行世界なんだから?」

「………そーだったなあ、つと」

うーん、と大きく間延びする一誠。

「で?どしたんだ」

「ああ。暫く俺んちで過ごささないか?」

今日俺達がここに来たのはそれだ。

何時までも公園に野宿じゃ怪しまれるだろうし、同じ顔の人間が二人いたら大騒ぎにもなるしな。

「…良いのか?」

「良いって。改築したから部屋有り余ってるし」

「……お前んところもか」

「つて事は、そつちも?」

「ああ。ビツクリだよな」

「うん」

悪魔の技術力はやっぱり可笑しい、それを共感できる人がいようとは!

「んじゃ、お邪魔させてもらうぜ」

こうして、俺の家に一時的にだけど、新しい住人が増えた。

~~~~~

「あらおかえり、イツセー」

……そういや母さんのこと忘れてたああああ!!!

『どうするのイツセー!?!』

『え、えくつと……』

俺達が一誠のことをどう説明するか悩んでいると、

「あら、其方の子は……アンタの友達?」

母さんが先に気づいちまった!

「はい。初めまして!俺は龍魔晴人って言います!」

けど、一誠はにこやかに母さんに挨拶をした。

……つて、晴人?

「りゆうま?変わった苗字ねえ。それはそうと……君、家のバカ息子に似てるわねえ」

「そうですか？でも確かに周りからもよく勘違いされますけどね……そんなに似てますか？」

「ええ！もう生き写しつてぐらいよ！」

「ハハハ……。まあ世の中には似た顔の人間がいるって言われてるぐらいだし、偶然の一致じゃないでしょうか？」

「…それもそうね！」

すっげえ、のらりくらりと母さんを丸め込んだ！

「じゃあゆっくりしていつてね、晴人君」

「はい！」

「じゃあ私、買い物に行ってくるから、留守番お願いね」

「はい。お母さま」

そう言つて、母さんは家から出て行つた。

「すげえな一誠……」

「ま、ちよつとした魔法だな」

そう言つて、一誠は軽くウインクする。

「つて、晴人つて名前は何処から持ってきたんだ？」

「ん？父さんの名前だよ」

「お、親父さんの!？」

「おう。だからこれからは晴人って呼んでくれよな」

「分かった」

俺達は一誠……もとい、晴人を伴って地下空間へと降りて行った。

ここで俺達は修行してるんだ。

「へえ。俺のこととそんなに変わんないなあ」

別段驚く事もなく周りを見渡す晴人。

「やあ、一誠君」

と、修行していた木場が俺達の方へとやってきた。

「えーつと、どっちだ？」

「別世界の方の一誠だよ」

「俺か。あ、これからは晴人って呼んでくれ。こっちにいる間はこの名前使うから」

「うん、分かったよ。晴人君」

「で、どうしたんだ木場？」

「うん。実はさ——イツセー君と晴人君の模擬戦を見てみたいなって思ってたね」

——つ。

俺は木場の提案に息を飲んだ。

「彼はあのファントムが言うには魔法使いだろうか？ だったら、今後の戦いにおいて連携も取りたいし、赤龍帝同士が戦う所も見てみたいと思ってるね」

「成程……」

「俺は別に構わないぜ。イツセーはどうよ？」

言われて、俺も平行世界の自分と戦いたくなっている事に気づき苦笑いを浮かべる。

「じゃあ、戦ってくれるか？ 俺も自分の実力を試してみたいからさ」

「決まりだな」

晴人は不敵に笑うと、俺達から離れた。

「っ！」

それが戦いの合図である事に気づいた俺は戦闘態勢に入る。

が、身構える俺に対し、晴人はリラックスしている様に感じる。

何と言うか、力が入っていない——そんな感じがする。

『気を付けろ相棒』

ドライグが俺にそう言ってきた。

どういう意味だ？

『奴は…かなりの手練れだ』

——つ。お前にそう言わせるほどののか。

『ああ……お前の分析通り、奴の構えには一切の力が入っていない。だが気が抜けていると見くびつていれば、それは大きな間違いだ。それは常時自分のペースを維持できる余裕からきているのだろう。その証拠に、歴代のどの赤龍帝よりもオーラが静かだ……恐ろしいほどにな』

確かに、言われてみればドラゴン特有の荒々しさが無い……。

嵐の前の静けさって奴か……。

『そう言う事だ。それに、ああやって気を抜いていれば、どの角度からの攻撃にも対応できるといふ自信の表れでもある。気を抜くなよ』

分かった。

ドライグのアドバイスを受けて注意深く晴人の動きを観察するが、向こうは動く気配がない。

………誘ってるのか？

———ならっ！

「先手必勝だっ!!!」

俺は足に力を入れると、一気に駆け出す！

そして間合いに入った所で振りかざした拳を放った———と、思っていた。

「っ?!?!」

だけど、気付けば俺の体は宙に浮いていた。

地面に体を叩きつけるまで、俺は何が起こったか分からないでいた。

晴人の方を見れば、晴人はさっきまで俺がいた虚空に足を突き出していた。

そして、遅れて感じてくる胸の痛み。

———カウンターっ!!

「どうした？ほんの挨拶代わりだぜ？」

軽口を叩きながら不敵に笑う晴人。

俺は立ち上がると、再び前進する！

「良いね、その直実スタイル！俺も好きだぜ、そういうの！」

俺が放つパンチやキックを巧みに捌く晴人！

そしてお返しとばかりに放たれる一撃は、直撃こそ避けてはいるが、確実に俺の体に蓄積していく。

「おおっ！」

俺が放ったキックを、晴人は掌で鮮やかに受け流すと、ボディに肘打ちを食らわせたきた！

ドウツ

「……………っ！！」

想像していたよりも遥かに重い一撃を受け、俺は後退する。

が、晴人は続けざまに俺の顎に掌底をぶつける！

「っし！！」

「がっ！！」

それだけでも、俺の体は宙に浮かび上がった！

晴人の攻撃はそれだけに留まらず、今度は無防備な頭に向かって蹴りを放ってきた！

「っ!!」

何とか態勢を立て直し、それを屈む事で回避!!

「はっ!!」

「——ッ!!」

が、蹴りにだけ目を奪われていたのが仇になり、左足を地に付けたと同時に向かってくる右拳をもろに食らってしまう!

俺は勢いよく投げだされ、再び地面に叩きつけられる!

「ハア、ハアッ」

血を拭って立つも、まだ少しくらくらする。

なんつー重い拳だよ……!!

コイツのパワー……サイラオーグさんとも良い勝負をしそうぐらいだ。

「まだやれるだろ?」

「……当たり前だ! ドライグ、禁手だっ!!」

『応っ!!』

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

俺は勝負に出るべく、一気に鎧を纏う!!

「……成程。んじゃあこつちも行かせてもらおうぜ!」

《Welsh Dragon Balance Breaker》
!!!

向こうも同じく、赤い鎧を纏った！

けど、やはりそのオーラはとても静かだ。

『あの状態が自然である事を保っているのか!?……一体どんな修行をすればっ』

ドライグが思わず大声を上げる程、凄いんだな……。

「……さて、ここからがホントのショータイムだ！」

《Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost Boost!》

「っ!!」

「爆裂の龍波動っ!!」

晴人の力が一気に倍加されると、こちらにドラゴンシヨットを放ってきた！

「くっー!」

速すぎて躲し切れない!!

俺はそれを腕ではじこうとし、腕を横に振るった！

が——それが合図であるかのように、俺は爆撃に包まれた!!

「ガッ——!!!」

その一撃は凄まじく、俺の鎧が一瞬にして？がされた！

その間に晴人は此方に接近すると、足を掴んで投げ飛ばした！

「うわっ!!」

当然対処できずに空中に投げ出される！

《Explosion!》

「龍牙雷光ッ!!」

晴人が拳を突き出したと同時に——夥しい数の拳撃が俺を打ち据える!!

鎧の回復がまだ済んでいなかったが為に、俺は生身で拳の雨霰を浴びる!!

「ッ!!!」

言葉にならない悲鳴を上げ続け、漸く解放された俺は地面に叩きつけられた!!

「つく……………!!」

立ち上がろうとする意志とは裏腹に、俺の体は力なく倒れ伏す。

——強い。

力の差は、歴然だった。

俺が立ち上がれないでいると、晴人は構えを解いた。

それは、もう戦う必要はない、と同義だった。

「……………っ」

俺は修学旅行の一件で、更に強くなれたと自覚していた——いや、自惚れていた。

でも、結局は井の中の蛙だった。

上には上が——そして更に上の奴がいる事を、俺は思い知らされた。

MAGIC77 『強さの根源』

パアアアアツ

「大丈夫ですか、イツセーさん？」

「ああ、ありがとう。アーシア」

模擬戦後、負傷した俺はアーシアに回復を受けていた。

ああ、癒される……。

対する晴人は疲れが見られず、普通にドーナツを食べていた。

「晴人は、疲れてないのか？」

「おう」

「……スゲーな。何か特別な訓練でも受けてるのか？」

「別にこれといった訓練はやってないさ。と言うより……」

晴人はドーナツを袋に入れると、俺の戦闘スタイルに指摘してくれた。

「戦って分かったけど、お前の場合力が駄々もれなんだよ。そんなんだったらすぐにバ

「テるだろ？」

「うっ……」

心当たりがありすぎる俺は思わず口を閉ざす。

「もうちよつと力を抑えて、精密なコントロールをすれば、スタミナ面も少しはマシになるだろうぜ。パワーに関しては申し分ないし。だろ、ドライグ？」

『ああ。そこだけは自信を持って良いぞ。オーラそのものも力強いし、後はコントロールだな』

「コントロールか……」

今までには聞かなかった意見に、俺は素直に感銘を受ける。

そんな俺に、晴人は話しかけてきた。

「そーいやある程度はお前の事聞いたぜ。悪魔になるまで全く戦闘経験がなかったんだろ？」

「ああ」

「それなのに、あの力強いオーラはすげえよ。禁手に目覚めるのも大変だったろ？」

「あ、えーと……」

禁手の事を聞かれて、思わず俺は口ごもる。

何故かって？

ドライブグも笑ってるよ!

「お、おっぱいって!お、おまつ、マジで言ってるのかよ!?おっぱい突つついてって……クハハハハハ!!」

『アツハツハツハツハツハ!!』そ、そんな奴歴代の中には誰一人として、い、いなかったぞ
wwww!!』

め、滅茶苦茶バカにされてる……!!

「笑わないでよ!そんなに笑われたら、胸を出した私が馬鹿みたいじゃない!」

堪り兼ねた部長が叫ぶ!

そうだ、部長だって恥ずかしくていたんだぞ!!

けど、二人の笑いが留まる事はなかった!

「い、いやバカでしょwwww!!それって戦場のど真ん中でおっぱい突き出したって事でしょ!」

『ど、何処の痴女だよwwww!そして何で乳房をさらけ出したんだよ!?ば、バカ丸出しじゃ……アーツハツハツハ!!』

「こ、こいつその内おっぱいビームでも浴びるんじゃないか!?そ、そうだったら……ち、乳首から謎ビーム……ブフツ!!」

『お、おっぱいビームとか……wwww。もう止めてくれ相棒!お、俺の腹筋がねじ切

れるからwww!!アツヒヤヒヤヒヤヒヤッ!!!
」

.....

『うう、相棒お……もう勘弁してくれえ。異世界の己にすら笑いの種にされるとは……うおおおおおん!!!』

「私って……ホントに馬鹿……ッ!」

二人の爆笑っぷりに、泣いてしまった部長と俺のドライグ。

何か……ホントにゴメン。

思わず気落ちする俺に対し、晴人は涙を拭いながらこんなことを言ってきた。

「け、けどよ。別にそれで良いじゃん」

「へ?」

呆気にとられる俺に構わず、晴人は語り続ける。

それから暫く、二人の爆笑が俺の家に木霊した。

MAGIC78 『狙われた少年』

「母さんなんて大嫌いだ!!」

明くる日の昼下がりに、一つの家から子供の声が響いた。

「待ちなさい、信彦!!」

母親の制止も聞かぬまま、少年——信彦は家を飛び出した。

『漸く………見つけたあ!』

その様子を、謎の怪物が物陰から見ていたのを、信彦は知らない。

~~~~~

よ、皆！イツセーだ。

俺達は今学校にいる。学生だから、当然授業はあるからな。

あ、因みに晴人は家で寝てる。

流石に同じ顔の俺達が学校にいるのは怪しまれるからな。

と言つても、晴人本人は『一日中ベッドで寝れるとか最高かよ！』つて喜んでいたけどな。

多分今も寝てるんじゃないかなあ。

晴人は最近よく母さんの家事の手伝いをしたり、俺達の特訓に付き合ってくれてる。同い年の筈なのに、何故だか晴人の方が年上っぽいだよなあ。

……俺に兄さんがいたら、こんな感じだったのかなあと思ったり。

今の所は晴人の追ってきたフロントムって奴等は姿を見せていない。

それに関しては殆ど晴人一人で受け持つてるから、俺達も何とかして手伝えないかと模索しているけど、その度に晴人に『その気持ちだけ受け取つとくよ』つて言われるんだ。

でも、このまま何もなかったら良いってのも、全員思ってることだ。そう思いながら、俺は教科書と睨めっこするのだった。

放課後。

俺達は何時も通り、オカルト研究部に集まっていた。

「さて、今日は今度行われる文化祭について話し合おうと思ってるのだけど……」

「悪い、リアス。邪魔するぞ」

と、ここでアザゼル先生が入ってきたので、俺達は一旦会話を中止する。

「どうしたの、アザゼル？」

「……どうも、この辺にフアントムってのが出たらしい」

——っ！

フアントムの情報に、俺達は顔色を変える。

「とにかく、今から言う住所の方へと向かってくれ。場所は——」

アザゼル先生に言われた通りの住所へと向かうと、そこでは――

『さあ、俺と一緒に来てもらおうか!』

「く、来るなあ!!」

手に槍を携えた蜘蛛みたいな怪物と、それに襲われている男の子という光景だった。

「やめろおおつ!!」

『!?!』

黙ってみていられず、俺はそいつに殴り掛かった!

怪物は槍で俺の拳を受け止める!

『何だ貴様は?俺様の邪魔をするな!!』

「っ!?!」

そう言うと、怪物は地中へと潜っていった!

逃げたのか!?

『ヒエアアアアアツ!!』

「がああつ!!」

背後から踊り出た怪物の一撃を受けてしまう!

いてえ!!

「イツセー!このっ」

『おっと、良いのかあ？そんな危険な魔力をこんな所でぶっ放してもよお』  
奴の言うとおり、周りは住宅街！

しかも地中に潜る能力を持っているなら、部長の滅びの魔力が外れて思わぬ物を滅ぼしちまう可能性もある！

部長は悔しそうに魔力を消した。

と、その時だった。

——ブウンツ！

『あ？グギャツ!?!』

俺達の背後から響いたバイクのエンジン音と共に、怪物が何かに轢かれた！  
バイクは俺達と怪物の間で勢い良く止まった。

「おいおい、今度のファントムはシヨタコンか？裁判所が来るレベルだぜ」  
こ、この声は……………！

俺達が誰なのかを察した時、そいつはヘルメットを取った。

「すまねえな、寝てた」

やっぱり、晴人だったか!!

ってか、そんなカッコいいバイク持ってたのかよ！

『な、何だ貴様は!?!』

「問われて名乗るも烏滸がましいが、特別に名乗ってやるよ」

《ドライバーオン・プリーズ》

晴人が腰に手を当てると、何処からか変な音声が響き、晴人の腰に銀色のベルトが巻かれていた！

晴人が左右のレバーを操作すると、

《シャバドウビタッチヘンシーン！シャバドウビタッチヘンシーン！》

……何やらおかしな呪文があたりには鳴り響いてる！

俺達が唾然としていると、晴人は左手に赤い指輪を嵌めて指輪の目らしいカバーを下すと、

「変身！」

そう言つて指輪のついた左手をベルトに翳した。

すると——もつと驚くべき事が起こった！

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

変な呪文の後に、晴人が翳していた手の方向から赤い魔方陣が現れ、晴人がその中を潜ると——晴人は俺達が初めて会った時と同じ魔法使いみたいな姿に変わっていった！

まるで、小さい頃によく見ていた特撮のヒーローみたいだ……！

『ゆ、指輪の魔法使いか!?!』

驚きつつも槍を構える怪物を前に、晴人は、

「さあ、シヨータイムだ！」

大胆不敵に、そう言ったのけた。

# MAGIC79 『動き出した悪意』

「さあ、ショータイムだ」

変身した晴人は左手を掲げ、そのままファントムへと走り出した。

『ヒヤアアアア!!』

《コネクト・プリーズ》

「ふっ!」

ファントムの突き出した槍を、魔法陣から取り出した剣で容易く受け止めた!

「おい!今の内にその子を安全な場所へ!!」

「わ、分かった!」

俺達は気絶した子を抱えて、その場から一旦離脱しようとする。

『させるかあ!』

ファントムは石のような物をばらまいた!

すると——その石は忽ち怪物へと成り替わった!

「何だこいつ等!」



「戦闘員ポジだ！よええけど、数が多いから気を抜くなよ！」  
取り敢えずやるつきやねえ!!

「アーシア！この子を頼む！」

「分かりました!!」

「アスカロン!!」

《Blade!》

俺達もそれぞれ石の怪物相手に奮戦する！

「はっ、おりゃー！」

『くうっ!?すばしっこい奴だ!』

一方の晴人は身軽に動きながらフアントムを翻弄していた。

けど確実にダメージを蓄積させていた!

『はああっ!!』

「!」

な、また地面に潜りやがった!

「おいおい、土竜か?隠れるつもりなら……」

《シャバドウピタツチヘンシーン!シャバドウピタツチヘンシーン!》

だけど晴人は冷静に左手の指輪を、今度は黄色い宝石のついた指輪に変えると、

《ランド・プリーズ！ドッドドドドドン、ドンドッドドン！》

「無理やり出てきてもらおう、ぜっ!!」

黄色い宝石が特徴の姿に変わると、地面を力強く踏んだ！

「うわっ!!」

「じ、地震?」

その時に軽く地鳴りが起こり、俺達は体勢を崩す！

だが――

『うぎやああああああああつ!!』

さっきまで地中に潜っていたはずのファントムは、苦悶の声を上げながら飛び出てきた！

「えっ!？」

「地面の中なら衝撃も直に伝わるだろ？まさに二倍ダメージ！って所だな」

『て、テメエ………!!』

「ほりやつ!!」

『ギャハア!!』

ふらふらと起き上がったファントムを蹴っ飛ばした！

『く、くそつ！こうなりやドレイクにガキの居場所を……!!』

勝てないと踏んだのか、ファントムは地中に潜って逃亡を図る！

「は、晴人!!」

「安心しろつて。逃がす訳無いだろ？」

《ルパッチマジックタツチゴ―！チョーイイネ！キックストライク・サイコー！》

《ドリル・プリーズ》

右手の指輪を二度付け替えて、晴人は魔法を発動した。

そして――回転しながら地中に潜った！

暫くして……

「はああああ!!!」

『ギャアアアアアア!!』

地中から回転したままの晴人と、それに蹴りを食らわされる形で、ファントムが飛び出た！

そのまま晴人は空中に浮かび上がった状態で、ファントムを貫き、ファントムは空中で爆発した！

「つと……………ふい〜」

ファントムを倒して一息つく晴人

「おう、そつちも片付いたのか」

「ああ」

殆どは晴人が起こした地震の影響だけだな！

こつちに近づいてくる晴人——だったが、

《エクスプロージョン・ナウ》

「っ!？」

突然の爆発に巻き込まれ、吹っ飛ばされた！

「晴人!!」

「いつてえ……………誰だ!？」

煙の向こう側に叫ぶ晴人の声に答えるように、そのシルエットが露わになった。

黒を基調とし、黒みがかった金色の装甲。

黒色のマントに吊り上がった爪先。

晴人が変身するそれとは対照的な、ゴツゴツとした黒い原石のような仮面に尖がり帽子のような頭部。

晴人の変身する魔法使いが「正統派な魔法使い」なら、コイツは「悪い魔法使い」と言った印象だった。

そして腰に巻かれているベルトは——晴人の物と同じベルトだった。

「晴人の、知り合いか？」

「…………いや。こんな魔法使いがいたなんて知らねえ。…………お前は、誰だ！」

どうやら晴人も知らない存在らしく、その魔法使いに質問した。

『新たな世界の創造主……………とでも言っておこうか』

「何……………」

『さて、本題に入ろうか……その小僧を渡せ』

『!』

その要求に俺達は驚いた！

何でこの子を!?

『フツ、私はその小僧の命には興味はない。用が済めば開放する事を約束しよう』

「風体からして怪しきMAXのお前の要求を、はいそうですかと言って聞くと思っ  
?」

『フン、貴様らは聞かざるを得んよ』

《コネクト・ナウ》

金色の魔法使いは魔方陣を発動させると、そこから垂れていた鎖を手繰り寄せた。

「うっ………」

そこから出てきたのは、鎖に縛られた女の人だった。

「ただど——酷い傷を負っていた。」

「誰だ……?」

「ううん………お母さん!!!」

『!』

目を覚ました男の子の発言に、俺達は驚愕する！

つて事は、俺達が戦っている間に……

『応じねばこの女を殺す』

「卑劣よ!!この子の母親を盾に使うなんて……っ!」

『なんとでも言え。全ては我が目的の為の駒だ。駒は使い潰して捨てるのが本懐であろう?』

「テメエ………ツ!!」

晴人も悔しそうに手を震わせている。

『翌日まで時間をやろう。明日の同じ時刻、この場にて引き渡してもらおう』

「ふざけんなっ!!誰がテメエの要求なんか——」

『応じなければ大多数の人間が死ぬ事になる。それでも良いのか?指輪の魔法使い』

「………ツ!!」

金色の魔法使いの言葉に、何も言い返せなくなる晴人。

『良い返事を期待しているぞ。フハハハハハッ!!』

《テレポート・ナウ》

耳に触る哄笑を上げて、金色の魔法使いは姿を消した。

# MAGIC 80 『決断の時』

謎の魔法使いによつて男の子——信彦君のお母さんが人質にされ、俺達は家で一旦対抗策を練ることにした。

信彦君には話してないけど、彼は自分が原因でお母さんが危険な目に合つてることを察していた。

「……あの、僕がアイツの所に行つたら、お母さんは助かるんじゃない？」

「悪いけどそれは聞き入れられない。アイツがタダで君のお母さんを解放すると思うかい？」

お母さんを助きたい一心でそう進言した信彦君を、晴人は冷静に諭した。

信彦君もそれは分かっているのか、口を閉ざした。

「一番速いのはアイツの潜伏先を探ってお母さんを助け出す事だな」

「でも、そんな簡単に見つかるのか？」

「今使い魔を探してもらつてる」

流星は晴人、行動が速い。



とは言えこのまま待つているだけじゃな……………

「……………そう言えば、信彦君はどうして一人だったの？」

部長がそう彼に問いかけた。

そう言えば、彼は一人だったな……………。

部長の質問に、信彦君は俯いた後、ポツリと語り始めた。

「……………僕、お母さんと喧嘩したんだ」

「喧嘩？」

「明日は僕の誕生日なのに、お母さん、急に仕事が入ったって……………お母さんは、僕の事なんてどうだって良いんだってっ」

「そんな訳ないだろ？」

涙声になった信彦君に、晴人は違うと断じた。

「どうして分かるんだよっ!!」

「…お母さんはきつと、信彦君の為に仕事を受けたんだよ。ほら、君が欲しがってる物を買ってあげる為!とかさ」

「……………だけどっ」

「それにな、子供の事を蔑ろにする親なんていないよ。もしいたとしたら、そいつは親なんかじゃないし、ましてや人間とも思いたくないな。信彦君、君のお母さんは、君を蔑

ろにするような酷いお母さんなのかい？」

少し間を置いて、信彦君は首を横に振った。

「ホラな。ちゃんとお母さんは信彦君の事を大切に思ってる。だから安心しろ」

「……兄ちゃん」

「一緒に、お母さんを救おう！……な？」

「……………うん！」

さつきと違い、信彦君は決意に満ちた表情をしていた。

「すげえな、晴人は……………」

何か、羨ましいいよ……………こんな簡単に希望を灯すなんてさ。

「さて、それじゃ早速会議と洒落込もうか」

「え？」

「丁度奴さんの居場所を見つけてくれたみたいだからな」

そう笑う晴人の足元には青い一角獣、宙には赤い鳥と黄色いクラゲ？が飛んでいた。

「そいつ等が、晴人の使い魔？」

「すっげえ〜！」

信彦君は純粋に目をキラキラさせている。

晴人が「ご苦労様」と労わると、彼らは誇らしげにじやれ合った。

「具体的な案はあるの？」

「はい。それには皆の協力がいるけどね」

『協力？』

「おう」

晴人から作戦の顛末を伝えられ、俺達は啞然とする。

「……大胆ね、貴方って」

「ま、魔法使いなんですね」

そう言つてウイंकする晴人。

そして諸々の準備を済ませ——翌日となった。

# MAGIC 81 『絶望の魔導士』

——翌日。

金色の魔法使いが指定した場所に、俺達はやって来ていた。

その場にいるのは信彦君と俺、晴人だけだった。

他の皆は物陰にて待機している。

あまり大人数で来て変に勘繰られたら困るといふ晴人の案だ。

「……………来たな」

晴人が虚空を睨むと、その場所に金色の魔法陣が出現する。

そしてそこから現れたのは、昨日見たばかりの金色の魔法使いだった。

そして、手元には信彦君のお母さんを縛り上げた鎖が。

『お前達だけか?』

「俺達が何人来ようがお前には関係ないだろ? さあ、さっさと信彦のお母さんを解放しろ」

『いや、先にその餓鬼を渡せ』

「……………信彦、行けるな？」

晴人が確認すると、信彦君はこくんと頷いた。

そしてそのまま、金色の魔法使いの元まで歩みだす。

『フン、随分物分かりがいいな』

「……………」

『まあいい。約束通り、この女は解放する……………と、思ったか？』

《チェイン・ナウ》

金色の魔法使いは信彦君が近くまで来ると、鎖で拘束した！

『貴様等は本当にお人好しだな！私がそんな口約束を守ると思っていたのか？』

「だろろうとは思っていたさ。だから、ただでは渡さねーよ」

バキンッ！

『何……………!?!』

突然、金色の魔法使いの体が揺らいだ。

「……………一杯、食わせれました」

その原因は、アイツにパンチを決めた——信彦君だった。  
見れば、辺りには砕けた鎖が転がっていた。

『どう、いう……………!!』

最後まで言えず、金色の魔法使いは胸を押さえて膝をついた。  
その一瞬、奴の手が鎖から離れた。

———  
今だ！

「信彦！ 出番だ!!」

晴人の号令で、物陰に待機していた信彦君が駆け出した！

何とか止めようとする金色の魔法使いよりも早く、晴人は魔法を発動した！

《バインド・プリーズ》

『!?!』

「イツセー！」

「おう！」

《Transfer!!》

俺は前もって強化していた力を譲渡する！

すると、信彦君の走るスピードが格段に速くなった！

『貴様等あ!』

鎖を強引に引きちぎった金色の魔法使いは信彦君に襲い掛かる!

「小猫ちゃん!!」

「……………ハッ!」

『ちい、仙術使いか!』

金色の魔法使いはその拳を躲すが、その間に信彦君は部長に保護される!

『……………クツクツク。どうやら、貴様等を侮り過ぎたらしいな』

「誰も信彦君本人を連れてきた、なんて一言も言っていないぜ?ま、ちよつとした魔法だな」

晴人は不敵に投げキッスを飛ばす。

《コネクト・ナウ》

それに対し、金色の魔法使いは大振りの斧を魔法陣から取り寄せた。

『まさかその仙術使いを餓鬼に変化させるとはな』

そう——これこそ、晴人の考えていた作戦だった。

晴人は前もって金色の魔法使いが約束を破るだろうと推測した上で作戦を立てていたんだ。

俺達はファントムの事は詳しくはないけど、晴人曰く、

「ファントムの中に約束を律義に守る奴はいないよ……一人除いてな」

最後の方は聞き取れなかったけど、晴人のこの力強い発言を、俺達は信じることにした。

まずは信彦君を誰が変装するかに関しては、背丈の近い小猫ちゃんが担当する事になった。

そしてそのまま懐に飛び込んで、仙術を使って相手の気を乱し、その隙に信彦君自身にお母さんを救出させる。

相手を騙し、尚且つ信彦君自身の望みを叶える——大胆な作戦に最初は度肝を抜かれたよ。

けど、今こうして信彦君のお母さんは救出できた。

……本当に凄いな、晴人は。

『………ならば、今度こそ貴様等を排除して我が目的を達成するでしょう』

「達成なんてさせると思うか？」



《ドライバーオン・プリーズ》

晴人がベルトを顕現させたと同時に、俺も籠手を出現させる！

「準備は良いか？ イッセー」

《シャバドウビタッチヘンシーン！ シャバドウビタッチヘンシーン！》

「ああ！ 行くぞドライグ！」

『応っ!!』

—— 変身ッ

!!!!!!

《フレイム・プリーズ！ ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

晴人は赤い仮面が特徴の魔法使いに、

《Welsh Dragon Balance Breaker  
プレート・アーマー  
 !!!!

俺はドライグを模した赤い全身鎧を同時に身に纏う!!

………ノリで俺も変身って言っちゃったけど、なんか気分がいいな！

って、そんな感動に浸っている場合じゃないな！

「さあ——ここからは、俺達赤龍帝の……………」

——ショータイムだ!!!!

そう言い放ち、晴人は銀色の剣を、俺はアスカロンを構え、金色の魔法使いに向かって飛び出した！

## MAGIC 82 『極龍乱舞』

「はあっ!!」

『フツ!』

俺が振るったアスカロンを斧の柄で受け止める金色の魔法使い。

何とか押し切ろうと背中中のブースターを吹かすが、金色の魔法使いは、

《スパーク・ナウ》

「うわっ!!」

全身から光を放ち、俺の視界を焼いてきやがった!

突然の閃光に力を緩める俺!

『隙だらけだ!!』

「!」

何とか目を開いた俺の視界に飛び込んできたのは、斧の刃。

何とか防ごうと咄嗟にアスカロンの腹を突き出す——が、衝撃は何時まで経っても来なかった。

「…ったく、油断大敵だぜ? イッセー」

視界が完全にクリアになった俺の目の前には、奴の攻撃を剣で受け止める晴人の背中が。

晴人は相手を押しのけると、鋭い蹴りを数発入れる！

『ヌツ！』

「相手はイツセーだけじゃないぜ！」

《ウォーター・プリーズ。スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜！》

晴人が左手の指輪を付け替えると、今度は青い姿に変わった。

金色の魔法使いの攻撃を後ろに飛びながら回避すると、新しい魔法を発動した！

《リキッド・プリーズ》

「バイオアタック！」

そう、晴人はなんと——水に変化した！

「そんなのもあるのか！」

俺が感激している間に、晴人は金色の魔法使いに絡みつく！

「今のうちにやれイツセー！」

「おう!!」

《Transfer!!》

俺はアスカロンに力を譲渡し、一思いに振りかぶる！

『ふん、馬鹿な奴らだ』

《ヒート・ナウ》

金色の魔法使いはそれに動じることなく魔法を発動した！

すると、奴の体から強力な熱線が噴き出て、絡みついていた晴人は壁に叩き付けられた！

「ガハッ!!」

「晴人!!」

『フン!』

「っ!!」

晴人への心配を余所に、俺は金色の魔法使いと切り結ぶ！

「おおおおおおおっ!!」

『フハハハ！愚か者ほど粘るといふ物だな!』

愚かで結構だ!!

「ドラゴンショット!!」

《バリア・ナウ》

くそ、これも駄目か！

『馬鹿の一つ覚えもいいところだな!』

「馬鹿？一芸特化の間違いだろうが」

この声は……………

《フレーム・ドラゴン！ボー、ボー、ボーボーボー！》

さつきより力強い音声とともに、炎の竜が飛び立つ！

立ち上がった晴人に龍が飛び込むと、晴人の姿は今までよりも力が増したような出で立ちをしていた！

『ほう？まだまだこの私を楽しませてくれると言う事か』

「いや、お前のお楽しみは終わりだ。ここからは……………」

《ドラゴタイム！セットアップ！》

晴人は何時の間にか腕に付いていた機械を操作する。

「俺達のショータイムだ」

《スタート！》

晴人は金色の魔法使いに向かって駆け出す！

『ならば見せてもらおうか！貴様の手品を!!』

《ヴォルケーノ・ナウ》

「っ!!」

魔法陣から放たれた炎を交わし、晴人は右手の機械を操作した!

《ウォータードラゴン!》

『?……!!』

その音声が届こえた瞬間、金色の魔法使いを水龍が襲った!

「火遊びはいけないぜ?俺が消化してやんよ!」

そこには、ローブを青く染めた魔法使い——つまり、晴人がいた!  
ってどういう事だ!?晴人はあそこにいるはず……。

「おりやああ!!」

『ちい!!』

「悪いがもつとお客さんはいるんだな。これが」

《ハリケーンドラゴン!》

青いウィザードが戦っている間に、晴人は再び機械を操作する!

「ヒヤッハーハー!!」

『!?!』

今度は緑!?

どんだけ増えるんだよ!!

混戦状態になった場についていけないでいると、晴人は三度同じことをする。

《ランドドラゴン!》

『なっ!?!』

突然、金色の魔法使いの足場が沈下した!

「地面から出てきた龍といつても、土竜じゃないぞ!!」

『がっ!!』

身動きの取れない金色の魔法使いを蹴り飛ばしたのは——黄色のウイザード  
だった!

「よ、四人に分身した………!!」

口をあんぐりと開ける俺に構わず、四人に増えた晴人はそれぞれ肩を合わせて、

「「「超協力プレーで、クリアしてやるぜ!!」」」



………それ、違うヒーローだろ!!と内心で突っ込むのは、たぶん俺だけなはずだ。

# MAGIC 83 『終局を告げし者』

「二」超協力プレーで、クリアしてやるぜ!!「二」

四人に増えたウィザードはそれぞれ剣と銃を二つ構え、金色の魔法使いに向かっていった!

「はっ!」

「てやっ!!」

「…っ!」

緑色の晴人の剣捌きはかなり速く、金色の魔法使いも防戦一方だった!

そして斧を弾くと、その合間に潜り込んだ赤色の晴人が蹴りを決めた!

『ヌツ!』

「派手に行くぜ!」

「百発百中だオラー!!」

怯んだ所に青と黄色の晴人が銃弾の集中砲火を浴びせる!

『ぐおおおおお!』

よーっし、俺も負けてられないぜ!

「行くぜえええ!!プロモーション・龍<sup>ウエルシユ・ブラスター・ビシヨツ</sup>牙の僧侶ツ!!」

《Change Fang Blast!!》

俺がそう力強く吠えると、背中に二門のキャノン砲が生成される!

「「え、何そのダブルエックス!?ズリい!!」」

「うるせえよ!分身するそっちの方がズルいだろ!」

ああ、もうこうなりややくそだ!!

「ドラゴンブラスタアアアアアア!!」

二門のキャノン砲から赤い砲撃が発射される!

『っ!!』

《バリア・ナウ》

金色の魔法使いは防御するが、じりじりと押されていた。

「うーし、ここでイツセー。一つ提案なんだが」

「何!」

俺今必死で突破しようとしてるんですけど!?

「俺達四人分の力を譲渡したら、アイツの防御突破できると思うんだが、どうだ?」

見れば、俺の背後に構える四人の晴人。

仮面だからわからないけど、恐らくその顔はいい笑みを浮かべているんだろうって分

かる雰囲気だった。

「……乗った!!」

「「ホイ来た!!」」

《Trans fer!!》

四人分の魔力が譲渡され、砲撃の威力が一気に大きくなる!

『ぐぐぐぐぐぐぐぐつ……!!』

「「「いけええええええええええええええええ!!」」」

ピシリ、と奴の魔法陣に輝が入った!

よし、あともうひと踏ん張りだ!!

『……………この私を、嘗めるなああああ!!』

《イエス! バニツシユストライク! アンダスタンド?》

だが金色の魔法使いは咄嗟に魔法を発動!

巨大な金色の光球を放ってきやがった!

「イツセー! お前は奴の防御を突破するのに集中しろ!」

「え?! 晴人達は!?!」

「「「あれをぶっ飛ばす!!」」」

《キャモナシユーテイングシエイクハンス!》

《フレイム!》

《ウオーター!》

《ハリケーン!》

《ランド!》

《シューティングストライク!!》

「行くぜ! ゴー……………」

「…オン!!」

四人の晴人はそれぞれの属性を纏わせた一撃を光球目がけて撃ち放った!

それぞれの弾丸は光球に向かいぶつかっていくと、見事に奴の攻撃と相殺した!

それを受けて、俺は砲撃を止めると、一気に奴の懐目がけて飛び出す!!

「イツセー!」

晴人が驚いているけど、構ってはいられない!

「プロモーション・ウエルシュ・ソニックブー・スト・ナイト龍星の騎士士ツ!!」

《Change Ster Sonic!!!》

先程までと打って変わってスマートな鎧姿になると、俺は高速で奴の懐へと迫った!

『なっ——』

「悪いが、もうお前には何もさせねえ!!」

言っただろ？ここからは——

「俺達のショータイムだっ!!プロモーション・ウエルシュ・ドラゴニック・ルーク龍剛の戦車ツ!!」

《Change Solid Impact!!》

俺は奴が防御の体勢をとる前に、奴のボディ目がけて一気に拳を振りかぶった!!!

「おおおおおおおおおお——っ!!!!」

ズドン!!!……………と、鈍い音が広がった。

『グツ……………ガア……………ッ!!』

金色の魔法使いは、苦悶の声を絞り出していた。

俺は奴の腰からベルトを無理やり剥いで、その場から離れる!

「晴人!!!」

「成程ねえ……………無茶する奴だな、全く」

『おまいう』

「うるせえ!!行くぞ野郎ども!!」

「オーケイ!!」

《ファイナルタイム!ドラゴンフォーメーション・プリーズ!》

音声が届り響くと、晴人はそれぞれ龍の頭、尾、翼、大きな爪を纏う!

「ハアアアアアアア、デヤアアアアアア!!!」

強力な炎、冷気を纏った衝撃波、緑色の無数の鎌鼬、土煙を纏った爪撃が奴目がけて放たれた!!

「……やったか?」

「おいフラグ建てんな」

晴人がそう突っ込むと、煙の中から何かが立ち上がった。

『……く、ククク。まさか、ここまで追い込まれるとはな』

そうやって姿を見せたのは、以前会った事のある金色のドラゴンみたいな怪物。

——つて、あの時のファントムが魔法使いかよ!

「やっぱりお前だったか。ファントム」

晴人は別に驚いた様子を見せず、剣を構える。

『……本気でこの私に勝つつもりか?』

「ああ。もうお前に魔法はねえ。お得意のお楽しみつてやつも——ファイナーレだ」

『……ふ、ふはははははははははは!!まさか本気でこの私に勝てるつもりでいようとは……』

!このドレイクの力、たつぷりと味合わせてやろう!!』

そう言つてフアントム——ドレイクは二本の剣を構えると、姿を消した!

「……っ!!」

姿を消したかと思うと、奴は一瞬で晴人に肉薄していた!

寸での所でドレイクの一撃を受け止める晴人!

『かあ!!』

「っ!ぐあああ!!」

ドレイクが吠えると、晴人はその場から吹き飛ばされた!

「晴人!!」

『他人の心配をしている暇があるのか!!』

「っ、ぐうっ!!」

晴人の心配をしていると、俺は奴のタックルを受けて倒れ込む!

『カアアアアアアアッ!!!』

「!!!「グアアアアアアアア!!!」!!!」



ドレイクの金色の咆哮により、俺達は大きなダメージを受ける！

「くっ……おいイツセー！さっきのツインサテライトキャノン擬きは撃てねえのか!?」  
「無理だ！あれは消費が大きすぎるんだよ！」

つてか何だそのロボットアニメに出てきそうな兵器の名前は!?

『無駄だ！貴様らでは私には勝てん!!………ん?』

と、突然、ドレイクの首に埋め込まれていた石が光を放った。

『……丁度良い。役者は既に揃っているからな！』

そう言ったかと思うと、ドレイクは光を更に強く放つ！

すると、変化が起きた。

「……………あ、うう……………!!!」

信彦君の体に亀裂が走ったかと思うと、巨大な裂け目が生まれた！

「……………っ!!まさかっ」

それを見て恐らく顔を強張らせた晴人は、何か思い至ったのか、ドレイクの元に走っ

ていくー！

『もう遅い、指輪の魔法使い！そこでこの世界の終局を眺めるといい……………ッ!!』

そう高笑いを残し、ドレイクは信彦君の体に生まれた裂け目に飛び込んでいった！

裂け目は直ぐに消えたが、今度は信彦君の体に紫の亀裂が走る！

「な、なんだ一体!?!」

「…………あの野郎、強制的にアンダーワールドに飛び込みやがったッ！」

悔しそうに膝を叩く晴人。

だがその間にも信彦君の亀裂はどんどん酷くなっていく！

「何か手はないの!?!」

「晴人!!」

すると、晴人は懐から指輪を一つ取り出した。

「こうなったら…………直接奴を追いかける」

「行けるのか?」

「ああ……………」

だが、晴人は何時まで経っても動く気配を見せない。

「すまねえ、信彦…………俺がお前を連れてこなきゃ、こんな事にはつ」

気落ちする晴人。

多分、もつと他の作戦を考えていけば、そう思っているんだと思う。

「……まだ終わりじゃないんだろ!？」

俺はいてもたってもいられず、気落ちする晴人の肩を掴んで発破をかける!

「……イツセー」

「お前は希望の魔法使いなんだろ!?! だったら、今もこうして絶望にあらがってる信彦君を助けようぜ!?! それが———今生きている人達全ての希望を守る事に繋がるんだろ!?!」

俺の発破に、晴人は目が覚めたように頷いた。

「……ああ、お前の言うとおりだな。サンキュー、イツセー」

「……ああ」

「……信彦。お前の希望は、俺達が繋ぐ。だから絶望に負けるな———俺達が、最後の希望だ」

《エンゲージ・プリーズ》

魔法が発動されると、信彦君の体の上に魔法陣が展開される。

「行くぞ、イツセー」

「……………おう!!」

こうして俺達は、信彦君のアンダーワールドへと飛び込んだ。

————

『ハッピーバースデー、信彦!』

『俺の欲しかったプラモデル……………ありがとう、母さん!!』

——と、微笑ましい光景が繰り広げられるんだけど、この場所は……………。

「ここがアンダーワールド。その者の一番印象に残っている情景が映される精神世界だ」

「へえ……………」

俺が感心していると、彼方からどす黒い魔力を感じた！

『まさかこんな所まで追いかけて来ようとは……………本当に愚かだな、貴様らは！』

——  
バキィ!!

空を突き破りながら姿を現したのは——

『新たな世界創造の——最初の贄としてやろう、赤龍帝共!!!』

二つの首を持つドラゴンの様なファントムと、その胴体から“生えている”ドレイク  
だった。

## MAGIC 84 『赤き幻魔の龍』

『新たな世界創造の——最初の贄としてやろう、赤龍帝共!!』

巨大ファントムの胴体から生えているドレイクがそう言うのと、独立している二つの罅が一気に襲い掛かってきた!

「うわああ!!」

「ぬおっ!」

俺たちは必死でアンダーワールドの中を逃げ惑うが、二つの首は尚もその手を緩める事はない!

「何なんだよアレ!」

「あのファントムが信彦の魔力の塊だ!」

ファントム………って事は!

「信彦君が絶望したら、あれが生まれるのか!」

「そうだ！まだ意思はねーが、生まれたら知性がつく！それに……こんなに規模がデカいんじや、相当なファントムになっちまう！何としても食い止めねーと!!」

「でもどうやって!!」

あんなデカ物に対抗なんて出来るのか!?

そう聞くと、晴人は不敵に笑った。

「何か忘れてないか？俺は魔法使いだ……希望さえ捨てなけりや、アツと驚くショーを見せれるんだよ……来い、ドラゴン!!」

ドレイクの攻撃を掻い潜って晴人がそう吠えようと、晴人の体から炎が湧き出る！

そして——晴人に応えるように姿を現したのは、銀色のドラゴン!!

そのドラゴンの出現と同時に、晴人の姿が元の魔法使いの姿に戻る。

「な、何だこのドラゴン!?!」

「ウイザードドラゴン。俺のもう一人の相棒だ」

ウイザードドラゴンは大きく吠えようと、そのままドレイクに向けて突貫していった!

二体の巨大ファントムが起こす激突は凄まじく、アンダーワールドに起こる亀裂がど



んどん広がっていく！

「なんかヤバいぞ晴人！このままじゃっ！」

「分かってるよ、だから……………手綱をつける」

《コネクト・プリーズ》

そう言うのと、晴人は魔法陣からバイクを取り寄せた。

「手綱って……………うおっ?」

意味が分からず首を傾げる俺に構わず、晴人は突如としてバイクを走らせる！

「さあーて、行くぜ!!」

晴人は川辺を這うように移動していたドラゴンに向かってバイクをジャンプ！

すると——バイクが二つに割れた！

「はっ!」

驚きのあまり俺がボーっとしてしていると、晴人はそのバイクをドラゴンの背中にくっつけた！

巨大な翼のようにも見えるバイクが合体したドラゴンは、先程までと違って大人しくなっていた！

「よしっ、マジで行くぜ!ま!……………ドラゴン!!」

『……………貴様今マジドラゴンと言いかけたな?』

え、あのドラゴン喋るのか!?

『ドラゴンが喋らないという常識はないぞ、平行世界の兵藤一誠』

「そういうこつた。さ、乗れイツセー!」

「……お、おう」

何だかもう突っ込む気力も失せた俺は一先ずドラゴンの背中に乗る。

「頼むぞドラゴン!」

『……フン、振り落とされるなよ』

「はああ!!」

晴人がバイクのハンドを操ると、それに合わせてドラゴンが動き出す!

『小賢しい悪あがきを………死ねえ!!!』

ドレイクはそう忌々しげに吐き捨てると、此方に向けて夥しい攻撃を仕掛けてきた!

「イツセー! ドレイク本体の攻撃は任せたぞ! 俺はこのファントムの攻撃をどうにかする!」

「分かった!」

《《Blade!》》

俺はアスカロンから光波を飛ばしてドレイクの放つ攻撃を相殺していく!

その間に晴人はドラゴン本体の炎、周りの水や吹雪、風と嵐の波状攻撃に、その余波

で巻き込んだ岩石で攻め立てる!!

『クツクツク………貴様ら蛆虫如きに、このウロボロスを手中に収めた私をどうにかする事など出来ん!!』

「ウロボロス?!」

『そうだ!あの龍神と同じ名を冠すこのファントムの無尽蔵の魔力と、ワイズマンより奪った賢者の石を使い、私は私の望む!ファントムの世界を作り上げる!!』

「そんなの、俺達が許すとも思ってるのか?!」

『貴様等の許しなぞいらん。いい加減に果てるおおおお!!!』

そう言うと、巨大ファントムの首が此方に直接襲い掛かってきた!

「くそっ!!」

俺達は反転して首に食われるのを防ぐ!

アンダーワールドの空を縦横無尽に駆け回りながら、首を落とすべく反撃する俺と晴人!

「流石に、硬いナツ………!」

『消えろっ!虚無の闇に飲まれてな!!』

突如、巨大ファントムの口が大きく開き、その中から大きな闇の塊が生まれた!

そしてそれは——俺達を強引に引き寄せ!!



だが――

『言った筈だ………幻想だとな』

闇は未だに、健在だった。

更に、

『ツ!?ぐうおおおおお………!!!!』

その闇から無数に分裂した龍の首が、ドラゴンに肉体に絡みついていく!

「ドラゴ――ツ!!」

「こ、これは………!?!」

見れば、俺達の体を闇が侵食していた……………っ！

『フハハハハハハハッ!!!これでジ・エンドだな!!!』

まともに動けない俺達は、成すがまま闇へと飲まれていく。

「ちく、しょう……………!!!」

そうして俺達の意識も——闇に落ちていった。

—————

「……………い、……………せ……………っせ……………イツセ……………」

「……………んっ」

薄れていた意識の中、俺は誰かの呼び声によって目を覚ました。

目を開いて頭を上げると、そこには晴人がいた。

「…晴人。俺達、どうなったんだ？」

「さあな。ま、まだ死んだ訳じゃないっほいけど」

辺りを見渡してみると、真っ暗な闇以外何もなかった。

「さて、問題は……どうやってここを抜け出すか、だな」

「殴って突破は出来ないのか？」

「無理だった。と言うより、ここは無限に闇が広がってる空間っほいんだ。殴っても感触がなかった」

一応拳を振るってみたが、晴人の言う通り、何かを殴ったという感触が一切なかった。シャドーボクシングをしているような感覚だった。

「……………ん？」

「どうした、晴人？」

と、ここで晴人が何かに気付いた。

俺も晴人が見ていた方向に視線を飛ばすと、徐々にこの空間が白く染まっていくのが見えた。

『相棒、一ついいか』





「知るかよ!? それよりどうやってここから脱出するんだよ!」

『そんな事より漫才させろ!!』

「『勝手にやつてろ!!!』」

つてヤバイ! このままじゃ漫才やつたままで死ぬ!!

そんな死に方笑えねえ!!

「……一つ、大博打がある」

そう言つて晴人は懐から指輪を一つ取り出した。

「それは?」

「俺の指輪はさ、伯父さんが作つてくれてて。この指輪もこの世界に来る前に渡されてたんだけど、今の今まで忘れててな」

「?」

「…つまり、俺にもどんな効果が發揮されるか分からない」

つて事は……

「この状況を打破できる飛び切りの魔法か、或いは外れか——この賭け、乗るか?」  
指輪には、龍と龍が被さつてる? 様な絵が描かれていた。

それがどんな魔法なのかは、分からない。

これを使った先が、希望なのか……絶望なのか——

「ま、安心しろよ。おっちゃんに限って、そんな事はないだろうからさ」

晴人はそんな俺を見て安心させるように、けど確信の籠った声で言った。

「…何で分かるんだ？」

「俺のおっちゃんだからな」

——その一言を聞いた瞬間、俺は間髪入れずに頷いた。

「…………俺も賭けるよ。そして…………このクソツタレの絶望を変えてやろうぜ!!」

理由なんて、理屈なんていらぬ。

晴人が希望への道筋に繋がってるって信じるなら、俺も信じるだけだ！

「——勿論だ！」

晴人は指輪を付け替え、魔法を発動した——

—————

『さて……さっさとこの餓鬼の体を突き破り、我が悲願を達するのでしょうか』  
アンダーワールドに残ったドレイク極龍態は信彦のアンダーワールドを破壊すべく、  
龍の喙に光を集中させる。

だが、その瞬間は突然訪れた。

ピシイッ!!!

『!?!』

何かの割れる音が聞こえ、ドレイクは咄嗟に振り替える。

『………、これは!?!』

ドレイクの眼には、先程イツセー達を包んだ闇に亀裂が走っている光景が映っていた。

馬鹿な、と思っているドレイクの眼前で、

——  
バキイツ  
!!!!

《Soul Fusion Welsh Wizardragon》

!!!!!!!!!!!!

力強い音声と共に、闇は完全に崩落した。

そして、ドレイクは見た。

闇が佇んでいた場所より、天高く飛翔する存在を。

グオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!!!!!!

天に向かい吠えるそれは

—————

「もうお前の好きにはさせないぜ!!」

「言っただろ? もう——お前のお楽しみはここまでだ、ってな!!!」

赤い鎧のような鱗に覆われた、金色の装飾が目立つ銀色の龍だった。

その瞳——赤と緑のオッドアイが、ドレイクを睥睨していた。

## MAGIC 85 『終わりのファイナーレ』

赤い鎧を纏ったドラゴンに乗った俺と晴人は、驚愕しているであろうドレイクを睨む。

『な、何だそのドラゴンは!?』

「分からねーか? いや、分からないだろうぜ。何せて——俺の方のドライグとドラゴンが合体したんだからな」

そう——あの闇の中で魔法を使った瞬間、あの場所に召喚されたウィザードラゴンと、晴人側のドライグが一つになったんだ。

言ってみれば、ウィザードラゴンが赤龍帝の鎧を身に纏ったような姿だ。

最初は誰か分からなかった俺と晴人だったけど、俺の方のドライグが『肉体を持っていた俺に似ている』……………そう呟いたのを聞いた晴人がそれを察したわけだ。

何より、ウィザードラゴンの瞳は赤かったのに、このドラゴンは左目が緑に輝いてい

た。

緑はドライグの瞳、だからな。

『こいつは俺もビックリだぜ!』

『…おい、人の体で喧しく喚くな』

『いや、すまん。何せ久しぶりの体なもんで……テンションが最高にハイなんだ』

『フン………兎に角今は』

『ああ』

『『貴様を跡形もなく消し去る!!!』』

そう言つてドラゴンは吠えると、ドレイクに向けて急接近する!

『ならば、もう一度貴様らを消し去るまでだ!!!』

ドレイクは近づけさせまいと幾重もの攻撃網を張る!

『『突っ込むぞ!』』

「つ、おいマジで突っ込むのか!?!」

宣言通り、俺達は（無理矢理）弾幕の中へと飛び込む!



ダメーじを覚悟していた俺だったけど……何と、一つもケガを負っていない！  
『何っ?!』

『貴様の生半可な攻撃で、俺を傷つけられると思うなよ。——三下風情があ!!』  
お返しとばかりにドラゴンは翼を靡かせた。

刹那——赤色の大竜巻が意思を持ったかのようにドレイクに襲い掛かった!

『ぐうおおおおおおお!!?!』

ドレイクからは苦悶の声が!

二つの首も苦しそうに唸りを上げている!

「スゲー!滅茶苦茶効いてるぜ!」

「よし!このまま——うお!!」

と、ここで突如としてドラゴンが飛行スピードを上げた!

「何してんだよお前ら!」

『……すまん。今のは、』

『ピヤツハア——

!!!!!!  
最高潮にクライマックスだぜえ  
!!!!!!  
』

「……何か、ドライグの方が滅茶苦茶テンション高いんですけどお!?

『今の俺は脳細胞がトップギアだぜ!! ドラゴンなれどもパーリナイツ! 荒れるぜグオー……!!』

「……お、おい。こんな明後日の方向にハイなドライグ、見たことないんだけど」

『…何でも肉体を久しぶりに得られた事での高揚感云々で、頭のネジが全部ぶっ飛んだらしい』

「って、説明してくれてる間にもスゲエ宙返りしてるんですけど!!」

「一応この体の主導権はお前だろ!?! どうにかして止めろよ!」

『……もうこの勢いのまま倒しても良いんじゃないか?』と言うより、ハイテンション過ぎてウザい……』

「お前今本音言ったな!?! こいつの世話俺達に押し付ける気だなお前!?!」

『……行くぞ!!』

「いや何とか言えやああああ!!!」

とうとう気合で言い切ったドラゴンはドライグのハイテンションに巻き込まれる形でドレイクに接近する!

『小賢しいっ!!』

『行くぜえ!プラスチックベントオオオオ!!』

ドレイクが放った攻撃を、ドラゴンの翼になつていたバイクのタイヤ部分から突風を噴出し、相殺する!

激突した瞬間、ドラゴンは突っ込みながら爪で二つある頭を立て続けに切り裂いた!

『ギャアアア!!……お、おのれえええ!!』

『オラオラお次は岩石封じだああ!!』

逆上して襲い掛かってきた二つの罅を縦横無尽に駆けながら躲すと、周囲に岩石を漂わせ、そのままドレイクに投げつけた!!

岩石の雨霰を首をうねらせながら躲していたドレイクだったが、気づけば体の隅から凍結していつていた!

『H A H A H A H A H A H A!!』寒いのは嫌いかい!』

『……キサマアアアア!!』

ちよ、滅茶苦茶怒らせてるんですけど!』

『お前何挑発してんだよ!』

『ああ、すまん。逆上させる為に挑発したんだが……別にアイツを倒してしまつても、構わんのだろう?』



わば、必殺技だ』

『その特徴は至ってシンプル——有象無象あらゆる物を焼き尽くす。しかも、この体の持ち主の此奴の力も加わっての一撃だ。全盛期以上の一撃だぜ』

「……………スゲエ」

見れば奴の肉体がどんどん小さくなってきてやがる。

『名付けて……………？焱の幻炎！どうだ!?』

『フツ……………悪くないな』

『……………なあ、今度俺とも合体してくれないか?』

『……………何故貴様等とそう何度も合体せねばならんのだ!?絶対に断る!!』

『…俺もおっぱいドラゴンとか呼ばれたり弄られたりでストレス溜まってるんだ

よおおお!!うおおおおおん!!』

『いやー、気をつけろよ?でないと作者みたいに禿げるぜ?』

『俺が思うに、此奴のストレスの一因には貴様も噛んでるんじゃないか?』

『……………ぼく、しーらない』

……………これなら行けるぞ!

『……………ゴホン。相棒!奴をこれ以上暴れさせれば、このアンダーワールドが持たない。

さっさと決着をつけるぞー!』

「……………ああ!」

《チヨーイイネ! キックストライク・サイコー!》

「飛ベイツセー!」

「へ……………うお!?」

そう言われて離れると、突如としてドラゴンが変形を始め、最後に後部にバイクがくっ付き、巨大な足のような形態に!

「ようし、イツセー……………ラストシユート、俺とお前で決めるぞ」

「……………ああ!!」

俺達はずぐさま天高く飛び上がり、宙返りをし——巨大な足状に変形したドラゴンにそれぞれ片足を押し付ける!

『ぐ、うう……………ば、かなあ……………この、私が……………ア!!』



ドレイクが叫びを上げると——肉体が爆散！

そして、ドレイクが消えるのと同時に、アンダーワールドの亀裂も治っていく。

—————

「…つと！」

「ほっ」

地面に着地した俺達は、その爆炎を見上げる。

「やったな」



「…………おう！」

俺達は互いの拳を合わせる。

『これにて一見コンプリート！メガロ……アンダーワールドはあ？』

『…………フン』

『…………ハア』

「…………へへっ」

「っハハ…………」

「『『『日本晴れっ』』』」

!!!!!!

かくして、異世界を巻き込んだファントム騒動は、終わりを迎えた……………

# MAGIC 86 『別れ』

「本当にありがとうございます!!」

アンダーワールドでの激戦を終えた俺達は、その後現実世界へと戻り、アーシア達が手当てしていた信彦君のお母さんから礼を言われていた。

「どうやら二人とも無事みたいで……本当によかった。」

「良いですよ、お礼なんて」

「……ありがとう。一誠兄ちゃん、晴人兄ちゃん」

「気にすんなって。それより、もうお母さんに心配かけちゃ駄目だぜ?」

「……うん!」

それを最後に、信彦君達親子は仲睦まじく帰っていった。

「……もう、大丈夫なの?」

「大丈夫ですよ。信彦の中の魔力は消えたので……もう狙われる心配はないです」

「……そう」

「それにいぎとなったら、ここにいるおっぱいドラゴンが守ってくれるでしょ!」

「そ、それだけは言うなよ！」

ドライグが泣いちまうだろ!?

『う、うおおおおおん!!』

『はあい、坊や〜良い子だねんねしや〜』

『赤ん坊か』

「はは、とつても仲がいいんだね」

『『仲良くない!!!』』

息<sup>ヒ</sup>ツタリじゃんか。

「ま、喧嘩するほど何とやらだよな」

「そうだな……………つて、晴人はこれからどうするんだ？」

俺がそう聞くと、辺りはしんと静まり返る。

「……………」

「晴人？」

だんまりになつた晴人に俺が聞いてみると、晴人は、

「いや〜……………どう帰ろう」

引き攣った笑みを浮かべていた。

「つて、マジでどう帰るんだよ!?このままじゃ俺路上で死ぬぞ!」

『異世界を歩き来できそうなあの変な石は……ファントムと一緒に潰してしまつたからな』

「……やべえ、詰んでる」

その場にへたり込む晴人に、何も言えない俺達。

すると、

「ん?」

ゼノヴィアが何かに気付いた。

「どした?」

「いや、あそこに変な鳥が」

鳥? 怪訝に思い振り返ると——そこには確かに、白い小さな鳥が飛んでいた。

「……つて、あの鳥晴人の使い魔に似てるような……。おい晴人!」

「んあ?……………あ—————つ!!!」

意気消沈しながら顔をそっちに向けた晴人だったが、その鳥を見つけた途端、急に叫びだした！

「おまつ!! 白い魔法使いの………待てコラア!!」

『ペイー!!』

慌てて捕まえようとした晴人だったが、白い鳥はそんなの知るかとばかりに何かを晴人の鼻先に投げた！

「いつ!? つてえ………」

「晴人!? つておいコラ!」

晴人が痛みに蹲っている間にも、鳥は逃げていく!

「だ、大丈夫か?」

「う………あ、これは………」

立ち上がった晴人の手には、さっき白い鳥が投げたと思しき物体が。

「……指輪だ」

『えっ!?!』

驚いて俺達も確認すると、確かにそこには晴人が使っている指輪が。だが中の石はオレンジではなく、紫色をしているのが特徴的だった。

『相棒、これは……』

「ああ……また、助けてもらったって訳だな」

「？」

「……ああ、悪いな。話し込んだりして……多分、帰れる目途が立った」

そう言う時晴人は、その指輪を手に付けて、腰に翳した。

《ディメンジョン・プリーズ》

音声が悪くと、目の前には不思議な穴が開いていた。

「おお、何かそれっぽいな」

「ああ。……んじゃ、お別れだな」

——つ。

そう、晴人は別世界の住人。

これを潜るって事は、晴人とはもう会えないって事になる。

「……………」

「なあに辛気臭い顔してんだよ？もう会えないって決まった訳じゃないんだし」

晴人は俺の肩を叩いて、そう言ってくる。

「……違うんだ」

「ん？」

確かに、その寂しさもあると思う。

でも、それだけじゃなかった。

「……俺、晴人みたいに誰かの希望になるとか、そんな立派な事はまだ出来ない。だから、お前が俺達の世界に来た時から、ずっと考えてたんだ。スケベで変態で、おっぱいの事を常時考えてるような俺と違って、晴人は本当に、眩しいから……俺、もっと晴人を見ていたいんだ。晴人みたいな、ヒーローに……」

「イツセー……」

ずっと、自分の中で比べてたんだ。

ヴァーリの時みたいに。

俺と違って、魔力も、戦闘のセンスだって桁違いなまでに上な晴人。

何時もは飄々としてて、掴み処がないけど、誰かの希望を守る為なら命だって晴れる晴人。

俺も、晴人みたいな、ヒーローになれたら………つて、思わせるんだ。

「……………」

俺がずっと思っていた劣等感を吐き出すと、晴人は小さく息を吐いた。

「それは違うよ、イツセー」

そして、俺の言葉を否定した。

「……え？」

「その発言は、ここまでのお前自身を否定する事になる。俺、お前の事を聞いたつて言つてたよな？ここに居る部長、朱乃さん、アーシア、小猫ちゃん、木場、ギヤスパ……みんなお前が蟠りを説いた。つまり——絶望を払つてるじゃないか。それだけで……お前は皆の希望になれてる」

「……………」

「それに……お前は俺みたいにはなれないよ。俺として生きれるのは、俺だけだからな………それに、お前として生きられるのも、お前だけだ。だから………自分の事だけは、何があつても否定するな。そうやって、人は強くなつていくんだから」

「……晴人」



そこで言葉を切ると、晴人はニツと笑った。

「お前はお前なりのやり方で、これから誰かの希望になっていきや良い。おっばい大好き？そんなの上等じゃねーか。おっばいが嫌いな奴なんていない。俺だつて大好きだからな。……………それがお前の強さなんだからよ。それだけは、忘れるな」

……………そうだった。

俺、何を迷つてたんだ。

俺は晴人じゃない、そんなの当り前だ……………だつたら、俺は俺なりのやり方で、ヒーローになつていけばいい。

俺は、きつとそう言ってもらいたかつたんだと思う。

「……………ありがとうよ、晴人」

俺がそう言うのと、晴人は安心したように微笑んだ。

「……………何かさ、やっぱり晴人って、年上みたいな感じだよな」

「ん？」

「……………俺にも、兄さんがいたら、こんな感じだったのかな」

「……………かもな」

晴人はそう呟くと、俺の胸に拳を当てた。

「イツセー、約束してくれ。この先何があっても、希望を捨てないでくれ。お前は……………四つの希望を託されてここにいる。何があっても、託された物を蔑ろにするのはしないでくれよ……………それが、俺の願いだ」

「……………ああ、分かった」

俺の言葉を聞いて、晴人は俺から離れて、ホールの前に立った。

「それじゃ……………せーのっ」

『?』

最後に、何か呼吸を合わせるかのように息を吸った晴人は、両手の人差し指を虚空に

向け——

「『ぼちつとぼちつと、ずむずむいや〜ん!!!』」

『……………ず、ずむずむいや〜ん……………』

——つてこの空気でおっぱいドラゴンのセリフかよ!?

「——じゃな! また会おうぜ、おっぱいドラゴン!!」

『あばよ、異世界の俺!』

『……………まあ、達者でな』

呆気にとられる俺達を尻目に、「してやったり」な顔で笑うと、晴人はホールの中へと飛び込んだ!

そしてホールは、完全に消失した。

「……………また会おうな。希望の赤龍帝」

「ご苦労だったな。ガルーダ」

『ピィ!』

「……………そうとも。お前は私にとっての希望でもあるのだからな。兵藤一誠」  
《《ダイヤモンド・ナウ》》

—————

「うあああああああああ  
!!!!!!」

ドボシャーん!!!

ホールに飛び込んだ俺だったが、気付けば何かの水たまりの中に落ちた！  
つて熱い!!これお湯じゃんか!!

何処だここは……………つて、なんかこの風呂場、見覚えがあるな……………  
「……………誰かいらつしやるので、すか……………」

呆然としている俺の眼前で、浴室の扉が開いた。

……………つて、今の声は。

「……………イツセー?!」

俺の視界に入ってきたのは、俺の大切な恋人である、グレイファイア。  
しかも呼び捨て……………つて事は。

「……………ただいま、グレイファイア」

俺がそう言うのと、グレイフィアは目じりに涙を浮かべて抱き着いてきた！

「良かった………良かった、無事でっ………!!」

「ごめん、心配かけちゃって…。俺は、ちゃんとここに居るから」

ああ、しかし………やはりグレイフィアのおっぱいの感触は、良いなあ!!

元の世界にかえって来て早々に、天元突破しそうなその時、どたどたと足音が聞こえてきた！

「やっぱりイツセー！帰ってきたのね………って、グレイフィア!？」

「はうっ！先にグレイフィアさんに独占されてますう！」

「ここは………私も本気を出さざるを得ないようですわね」

「今日はイツセーが帰ってきた記念の開戦だな！今日こそ子作りだ！」

「イツセー先輩の膝上は………渡しませんから…」

「つて、ええええええ!?!すっごい場面に遭遇しちゃった！私墜ちちゃう！」

「イツセー君。不純性交友はいけませんよ？」

「さてイツセー。離れていた分、たつぷりとイツセー成分を補給させてもらおうか」

『ワンワン!』

「ここは私も本気を出す時が来たようね☆覚悟して頂戴な、イツセー君!」

—— ああ、やっぱりおっぱいって良いな。

改めてそう確信したのであった。

そんなこんなで、俺の長いようで短い異世界漂流記は、終わりを迎えた。

# MAGIC番外編 『異世界での出来事・Part 1』

「朱乃！またあなたは私のイツセーにつ！」

「あらあら。油断大敵ですわあ」

よつす皆、イツセーだ。

清々しい朝、俺は部長と朱乃さんの喧嘩で目を覚ました。

と言うか怒る度に揺れる二人のおっぱいが素晴らしいです！朝から眼福！！

「つはは。やってんなあ」

『！』

その場に現れた乱入者の声に、俺達は入口の方に視線を向けた。

「飯出来ましたよ。お三方」

そこにいたのは、並行世界の兵藤一誠——こつちにいる間は龍魔晴人——  
だった。



俺以外の異性の登場に、二人は手早く下着を身に着ける。

つて言うか、晴人の奴全く動揺してないな。

リビングに行く途中、その事を聞いてみたら、

「慣れた」

との事。

何でも晴人の世界でもこのやり取りは繰り広げられているんだとか。

「まあ未だにアタフタする事とかはあるけどな」

『根は童貞だからなあ』

「うるせえ！」

なんと言うか、向こうのドライグと晴人のやり取りつて、兄弟みたいだよなあ

『とは言え、あそこまで騒がしいのは考え物だが……』

『そうやって肩張つてるからおっぱいドラゴンで泣くんだろ？もうちよいバカになれつて』

『……相棒、泣きたいんだが』

落ち着けドライグ！

「ま、此奴のスケベぶりはもう周知の事実だし、慣れた方が早いよな」

『だよな』

『うおおおおおん!!』

「うし、朝飯食うか」

「弄り倒して結局放置かよ!？」

フリーダム過ぎる！

「何言ってるんだ？ハイマツトフルバーストは撃てねえって」

「そういう話じゃない!!」

———

オツス、俺、晴人！

イツセー達は今学校だ。

え？じゃあ俺は何してるかって？

イツセーのお母さんの家事や掃除を手伝ってるんだよ。

「ごめんねえ、晴人君」

「いえいえ。下宿させてもらってるし、当然ですよ」

一応俺は高校を卒業し、フリーターをやっているという設定だ。

無理があるかなと思つたが、案外すんなり信じてくれた。

「……………何だか、不思議な気分ね」

「え？」

そうポツリと漏らしたその台詞が、俺の耳に静かに、だけど強く響いた。

「もし、あの子に……………イツセーに兄弟がいたら、こんな日常もあつたのかなつて」

「……………」

「実はね……………私、イツセーが生まれる前に子供を二人宿してたの」

「！」

俺は目を見開いた。

イツセーが生まれる前……………ならもう生まれてて当然の筈ではある。

だがイツセーは一人っ子。

つまり……………

「私、子供を産みにくい体質だったの……………」

「それつて……………不妊体質？」

失礼だとは思つたが、俺はそつと聞くと、お母さんは頷いた。

「あの人と結婚してからの八年間、二回命を宿した……………でも、私の体質のせいで生んであげる事が出来なかつた」

「おばさん……………」

「だからね、もし生んであげれてたら、晴人君みたいなお兄ちゃんがいたら、こんな日常もあつたのかもしれないって」

……………そんな事が、あつたのか。

「……………あの。俺、上手くは言えないんですけど……………イツセーは、凄く幸せ者だと思いますよ」

「え？」

「だって、お二人の元気に育ってほしいって希望と……………生まれてこれなかった二人の、生きてほしいって希望を受けて、育ったんですから」

「希望……………」

　　噛みしめるように呟くお母さん。

「アイツほど幸せな奴はそうそういませんよ。生まれながらにして四つの希望を宿して、今を精一杯生きてるんですから」

「…晴人君」

「それに俺だって、もし弟がいたら、こんな感じかなって思います」

「え……………」

「……実は俺、小学生の時に両親を亡くしてるんです」  
「！」

今度はお母さんが目を見開いた。

「最初は悲しかったけど、俺は父さんたちの希望を、思いを受け継いで生きていかなきゃって思つて。……でも、もし弟とか、兄ちゃんがいたら、もつと楽しかったのかなつて」

「……強いよね、晴人君は。家のバカ息子とは、大違い」

「確かにバカでスケベですけど、俺はああ言う馬鹿は好きですよ。だって、アイツは一番、誠実に生きてますから」

「！」

……誠実つてのは、何もスケベとかつてのは関係ないと思う。

「ご両親の願い通り、真つ直ぐに生きてるからな。」

「ま、自分の性欲に……とも言えますね！」

「……ふふ、そうね。有難う、晴人君！」

さて、とお母さんは掃除機を片付けた。

俺も洗濯物を取り込み終えて、部屋に戻る。

「今日はアイツの好きな食べ物にしようかしら！」

「良いつすね！行きましょう！」

イツセー、お前は本当に幸せ者だよ。

## MAGIC番外編 『異世界での出来事・Part 2』

木場side

やあ皆。今日は平行世界のイツセー君——晴人君が、僕達の特訓に付き合ってくれる事になったんだ。

その理由は彼曰く、『たまには運動しないとな』だそうで……確かイツセー君が、家事を手伝う以外では寝てばかりいるとも言っていたしね。

……で、今の状況なんだけど。

「はああっ!!」

「うおっと」

「うあっ!?!」

ゼノヴィアが振るったデュランダルを上空に飛んで避ける晴人君。

しかも彼女の頭を踏み付けて着地した。

「はっ!」

「!」

着地した隙を付いて僕は騎士の特性を利用して踏み込む!

が、晴人君が足に力を入れたかと思うと、彼の姿が僕の視界から消えた!

一体何処へ——っ!!

「よっ」

一瞬で、僕の背後に………!!

慌てて距離をとる僕を追いかけるでもない晴人君に、ゼノヴィアは悠然と駆け出す!

「おいおい、流石に馬鹿正直すぎるぞ?」

彼は何と——デュランダルを素手で受け止めた!

「なっ!?!」

流石に全員これには動きを止めた!

「一撃一撃はすげーけど、オーラの扱いがお粗末だな」

だが晴人君は暢気にゼノヴィアにそう評価を下した。



彼はデュランダルを上にあげると、蹴りを彼女の手首に放った！

「っ!!」

ゼノヴィアは思わずデュランダルを手放す！

そこから晴人君は回し蹴りで彼女を僕の方へと蹴り飛ばした！

「ゼノヴィア！」

何とかゼノヴィアを受け止める。

態勢を整えている最中、今度は小猫ちゃんが晴人君に殴りかかる！

「えい……！」

「うお。流石に仙術は怖いなあつと！」

彼女の拳を受け流しながら軽口を叩く晴人君。

「当たって、ください……………」

「ハハツ、当たってやるほど余裕はないからさっ！」

そんな事を言っていたら、とうとう彼女の拳が晴人君の体にヒットした……………筈だった。

《リキッド・プリーズ》

『ッ!?!』

ぐらりと崩れ落ちた晴人君の体が、水状に変化したのだ！

思わぬ現象に、小猫ちゃんは固まってしまおう！

「——サヴァア？小猫ちゃん」

「!!」

そんな小猫ちゃんに、気軽に話しかけるようにして背後から晴人君が現れた！

小猫ちゃんは慌てて距離を取ろうとするが、それより速く晴人君が彼女の懐に踏み込み、掌底を浴びせた！

「——！」

それを受けた小猫ちゃんは、そのまま倒れて動かなくなつた！

「っ、小猫の防御力ですら受け切れないのか……!!」

何とかデュランダルを拾い上げたゼノヴィアは額に汗を垂らしていた。

僕も同じく冷や汗が頬を伝うが、対する晴人君は特に息切れした様子を見せていない。

——彼はまだ、全力ではない。

それは誰の目から見ても明らかだろう。

何せ彼は籠手を一応展開してはいるけど、特に倍加などは行つてはいないのだから。「おいおいどーした？攻め込んでこないのか？」

僕達が攻めあぐねていると、晴人君が気楽な様子で此方に声をかけてきた。

「来ないんなら……こつちから行つちやいますか」

《ロック・プリーズ》

晴人君は右手を腰に翳した。

「木場……」

「！」

すると、上空から無数の岩が降り注いだ！

僕達は高速で移動しながらそれらを躲していくが——ある事に気付いてしまった。た。

「エリアが……」

そう、無数の岩雪崩によってフィールドのエリアが殆ど塞がれてしまったんだ！

これじゃ、得意の高速移動を生かせない………嵌められた！

「ならば破壊して！」

逆側にいたゼノヴィアがデュランダルを振るおうとするが——

「おっと、良いのか？こんな逃げ場がなくなつた場所でそんな暴君振るつたら、どうなるんだろうな？」

「——！」

と、不意に目の前に現れた晴人君がそう囁いた！

その言葉に、ゼノヴィアは動きが一瞬止まつてしまう——それが、命取りだった。  
スパイク・ドラゴンショット  
 「放電する龍波動！」

「ガ——ッ!？」

手に電気が迸る魔力弾を無防備な彼女の腹に押し当てた！

僅かな悲鳴と放電の後、ゼノヴィアはその場に倒れ伏した！

「さて……………」

「!」

晴人君は僕を一瞥すると、その場から姿を消した。

……気配も完全に消えている。

しかも、これだけ岩が多いと、視界で追うのも一苦勞だ……………と、不意に視界の隅で影が動いた！

「っ！」

僕はそこに小さい聖魔剣を投げる！

が、そこには僕が投げた聖魔剣以外何もなかった。

「……………」

こうなったら……………僕は眼を閉じる。

視覚が生かせないなら、他の感覚で彼を捉えるしかない。

暫くそうしていると、僕の前方で——空気が震えた。

「——見えた！」

僕は眼前に、聖魔剣を突き立てた！

「……………へえ、視覚を封じて探知か。やるじゃん」

晴人君の声が聞こえてきた。

僕は眼をそっと開くと——自分の首に、銀色の刀身が触れるか触れないか、ギリ

ギリの位置で止まっていた。

「!!」

数秒遅れて眼前を見ると、そこにあつた筈の手応えが消えていた。

いや——地面を見れば、真つ二つに裂けた人型に形成された岩が転がっていた。

そして——僕の背後には晴人君。

つまり、僕があの時感じた空気の揺れは、晴人君を模した岩人形だったということだ。

「——参ったよ。晴人君」

「すまねえな、晴人」

「いや、良いつすよ。いい暇潰しにもなりましたし」

後からやって来たらしいアザゼル先生が、晴人君に礼を言っていた。

って事は……

「晴人君が僕達の特訓に付き合ってくれたのって……」

「そ。アザゼル先生に頼まれたってのもあるんだ」

そうだったのか……。

「さて、イツセーにも言えることだが……お前たちも此奴のペースに乗せられていたな」

『う……』

全員が痛い所を付かれ、口を紡ぐ。

アザゼル先生の言うとおり、なんだかずっと彼に主導権を握られていたような気持ちだ。

「戦いの最中に自分のペースを保つのは大変ではあるが、重要な事でもある」

「実際それぞれペースを保てたら俺だってヤバかったかもしれないねーからなあ」

晴人君はドーナツを食べながらそう言ってくれた。

「ま、時間は有限だが焦っちゃ意味ねえからな。それぞれ、自分のペースを保つように、が新しい課題だな」

『はいー』

――





い、いきなり何聞いてくんだよ此奴は?!  
対する晴人は不思議そうに俺を見ていた。

「何驚いてんだ？」

「え、だつて……………」

本命つて…………つまり、恋愛の話、か？

「あんなに皆アプローチしてるんだぜ？気づいてんじやねーの？」

「な、何が…………？」

「……………いや、やっぱり何でもない」

だが晴人は何も言つてこなかった。

「ど、どうしたんだよ急に？」

「ん〜？…………まあ、こう言うのは自分で気づくべきだなつて。……………けど、お前は遅かれ

早かれ多分選択を迫られる。それまでには、ちゃんと答えは出しといた方がいい」

「な、何だよ急に……………」

俺には話が見えてこないぞ……………。

晴人はそんな俺を見て、まるで言おうか言うまいかといった感じで悩んでいる素振りを見せていた。

「……………だつたら聞かぜ。お前……………なんで部長達からのアピールを受けている時

「……………怯えているんだ？」

「!?」

怯えている——そう言われた俺は、まるで金縛りにあつたかの様に動けないでいた。

「まあ、喜んでるつてのに嘘はねーと思うぜ。けど、そんなお前の目が…時折、いや、女の子達がアプローチかけてる時に限って拒絶するみたいな感じを出してんだ」

「……………」

そう言われて、俺は沈黙する。

嬉しくない訳がない……………でも、そういった気持ちに傾けば傾くほど、俺の中で、アイツの嘲笑う声が聞こえる。

もしかしたらそれが——

「……………ま、何があつたかは聞かねーよ」

「え…………」

「人には言いたくない事だつてお前にもあるだろ?……………けど、お前の中にいる何かを取り除かないと、お前は部長や、他の女の子を泣かせる事になる。それだけは、覚えとい

「た方が良い」

「……………」

俺の中にある……………何か

「……………晴人には、いるのか？」

「？」

「その、好きな人が……………」

いきなりこんな事を聞いてくるから、俺も気になった。

まあ、この空気を紛らわすつてのものもあるけど……………聞けば、晴人も同じ様な環境らしいから。

「……………誰よりも、何よりも守りたい、そう思えるほどに愛する人は、いるぜ？」

けど、帰ってきた応えは、俺の予想を遥かに上回るものだった。



その名前を聞いて、俺は思わず絶叫した。

それが部長達に伝わると、後日晴人は質問攻めにあっていた。

## 第九章：修学旅行でウイザード・プロモーション

### MAGIC 87 『修学旅行・前哨』

さて、季節も秋に差し掛かったこの日の夜……一体俺は何をしているのかと言うと。

「イツセー君……………」

——何故か、ベッドの上で朱乃さんに迫られていた。

えつと……………何だ、この状況。

「イツセー君は、もう少しでいなくなってしまうのですね……………」

が、そんな俺の動揺などこれっぽっちも知らない朱乃さんは俺へと密着してくる！  
柔らかなその肌の感触に、普通なら酔いしれるだろう。

「あ、朱乃さん。大丈夫ですよ……たかだか三泊四日ですよ？」  
そう、俺にはどうしても分かん。

いなくなつてしまふと言うのは修学旅行の件だが、永遠の別れじゃないんだ。  
だから何故こんな寂しそうな表情を……？

そう思っていると、朱乃さんは切なそうに瞳をうるうるさせて、囁いてくる。

「……だって、四日もあなたと触れ合えないのですよ？私、寂しくて死んじゃうかもしれない……」

——大袈裟すぎる！

と言うか、こんな依存ぶり發揮して、俺がもし死んだらどうすんですか!?  
まあ、これは他の部員にも言える事なんだがね！

……それに、俺、もう寝たいんすけど。  
今朝から、どうも体調が悪くて……。

「……朱乃」

……うん、分かった。

このタイミングで、あの人が来るのだろうかと言うのは、何となく分かった。

入口の方へと目を向けてみると、そこにはゆらゆらと怒りのオーラを揺らめかせるリアスがおりました……。

「はう！先を越されてしまいました！」

「……油断、大敵」

げ、このタイミングでアシアと小猫ちゃんもか！

やばい、このままだと——そう思っていた俺の元に、救世主が現れた。

「皆さん、まだ起きておられたのですか？」

——グレイフィア。

もう寝間着へと着替えていた彼女は、溜め息を吐くとリアスと朱乃さんの首根っこを掴んだ。

後、アシアと小猫ちゃんはハティとスコルが服の裾を掴んだ。

「……イツセー様は今朝から体調が優れないそうなので、今日は全員自室にて就寝して下



やん」

「そ、そんな！」

「下僕の体調管理のためです、リアスお嬢様」

「そんなのダメですわ！」

「ダメなのは貴女です、朱乃様」

「で、でしたら私が一緒に！」

「貴女はもうじき修学旅行でしょう？尚の事、アジア様はいけません」

「……なら、私が仙術で」

「小猫様、明日はグレモリー家への用事です」

全員の意見を封殺し、グレイフィア達は部屋から消えていった。

よ、漸く眠れる……………。

—————

んで、次の日。

「将来的にはグレモリー領に北歐魔術の学舎を設立や、悪魔の女性から戦乙女を輩出し

たり、新しい事業に挑戦してみたいと思っています」

冥界にあるリアスの実家にて、ロスヴァイセさんがリアスのご両親の前に、自身が抱いている抱負を語った。

因みに俺もちゃんというぜ！……マスク装備だけど。

リアスのご両親にうつしたらシャレにならんからね。

『今回はリアス・グレモリーの眷属が全員揃った事から、改めてその報告と題してお茶会だ』

解説サンキュー、ドライグ。

「ハハハ。ロスヴァイセさんは事業に関心をお持ちのようで、グレモリーの当主としては期待が膨らむばかりだ」

相変わらずダンディだなあ、リアスのお父様。

と、お茶を口にしていたヴェネラナさんがカップを置くと話題を切り替える。

「そういえば、一誠さん達二年生の皆さんは修学旅行間近でしたわね」

「はい。京都に行つてきます」

「そういえば、リアスがお土産で買ってきてくれた京野菜のお漬け物がとても美味しかったわね」

へえ、漬物か……。

「そういやリアスも家じゃ漬物を好んで食べてたっけ。

「じゃあ、よかつたら買ってきますよ」

「あら、そういうつもりで言ったのではなかったのだけれど……。ごめんなさいね、気を遣わなくてもよろしいのよ?」

と、ヴェネラナさんは口元を手で隠しながら頬を赤く染めていた。

うーむ、可愛いなあ……………

「へっくしょん!!」

っと、クシヤミが出ちまった。

『良いなあ。あんな人妻の笑顔を眺められるんだから、相棒が羨ましいなあ』

『……………良い、のか?』

お茶会も終えた俺達だが、サーゼクス様が魔王領から帰って来ているらしく、挨拶をするべくそこに向かうことに。

「イツセー、大丈夫?」

「大丈夫つすよ、これぐらい」

まあ、鼻水啜りながら言っても説得力皆無だけどね。

そんなこんなで、サーゼクス様が使っているという居住区へと来たのだが、先客がいた。

「む、お邪魔しているぞリアス。そして、兵藤一誠」

そう、先客というのはサイラオーグさんだった。

何でもバアルの特産品を持って来ていたそう。

「それから、今度のゲームについてもいくつか話してね。フィールドを用いたルールはともかく、バトルに関しては複雑なルールは一切除外してほしいとのことだ」

「ああ。俺は本気のお前達と、戦いたいんだ」

……すげえな。こんな事真正面から言うなんてよ。

「……それはそうとイツセー君。そのマスクは？」

「え?! えーつと、実は……風邪を引いてしまいました」

いやー、今度修学旅行だつてのに、面目ない……………。

「風邪か。あまり拗らせると良くないからな。気を付けた方がいい」

「すいません…………」

「なに、気にするな。——お前と本気で撃ち合えるのを、楽しみにしている」

俺の目を見てそう告げると、サイラオーグさんは去っていった。

『相棒、厄介な奴とライバルになってしまったな』

——そうだな。だけど、厄介とは思わないさ。

でもまあ、取り敢えずは………

「ぶえつくしよん!!!」

風邪を治さないとな。

———

『——ワイズマン』

鬱葱とした森林の奥に座するワイズマンの居住地。

その場に現れたのは、両の肩に獣の顔が乗ったファントム——ガラム。

『………奴等が動き始めたようです』

『そうか。——京都での行動は全てお前に一任する。メデューサにもそう伝えてある……くれぐれも、奴らの監視を怠るな』

『ハッ』

一礼すると、ガラムは霧のように消え失せた。

『さて、お前は私に何を見せてくれる？——聖槍使いよ』

誰もいないこの場所で、一人ワイズマンは嗤う。

## MAGIC88 『不運な男』

さて、今日は待ちに待った修学旅行！

天気も快晴で、絶好の修学旅行日和……………なんだけどなあ。

「ゲホッ、ゲホッ！」

——何故だか俺はベッドにいた。

理由は言わなくても分かるだろ？

……風邪を拗らせて、熱が出ちまつたんだよ！

「イツセー、大丈夫？」

リアスは心配そうに俺の顔を覗き込んでくる。

「へ、平気つすよ……………それよりリアス、アジア達に渡さなきゃならない物があるんでしょ？早く行かない……………ゴホッ!!」

あー、ちくしょう……！

駄目だ、全然調子わりい……。

「リアスお嬢様。イツセー様は私が看病しておくので、ご安心ください」

と、ここでグレイフィアが水桶を持ってやって来た。

リアスはそれを聞いて、名残惜しげではあるものの漸く立ち上がった。

「…分かったわ。グレイフィア、イツセーをお願いね」

「はい」

「あ、リアス！ゴホツ……」

転移しようとしたリアスを慌てて引き留める。

「どうしたの？」

「…アーシア達に、俺の事は気にしなくても大丈夫だから、楽しんで来いって……伝えて

おいてくれますか？」

「——分かったわ」

リアスは微笑んで頷くと、今度こそ駅まで転移していった。

「……ではイツセー様。私はお粥を作って参りますので、暫くは眠っていてくださいね」

「……うん」

頭を優しく撫でられ、顔が熱とは違った意味で赤くなる。



そんな俺を微笑ましそうに見届けたグレイフィアは、静かにリビングへと降りて行った。

——修学旅行、何も起こらないといいんだけどな。

——

木場 side

「はい、これが人数分の認証よ」

部長が旅に出る僕達にカードらしきものを渡してくれた。

カードの表にはグレモリーの紋様が描かれている。

「これが噂の？」

僕が訊くと部長は頷く。

「ええ。これが悪魔が京都旅行を楽しむときに必要な『フリーパス券』よ」

京都には名所となる寺が多い。

そして寺は神聖な場所、そんな所に何の用意もなく入っていったら、悪魔の僕達はダメージを受けてしまう。

そこで、このフリーパス券が役立つんだ。

これは京都を裏で牛耳っている陰陽師や妖怪の方々が悪魔でも楽しんでもらえるようにと、特殊な術式を施してくれている。

これがあれば、聖なるダメージから僕達を守ってくれるんだ。

とはいえ、それ相応に信用の置ける悪魔でなければ配布はされない。

「……………」

——つと、なんでアジアさん達がこんなに暗いのか、皆は分かるよね。

実は、イツセー君が来られないんだ。

「…部長、イツセー君の容態は？」

「……大丈夫よ、ただの風邪だそうだから。——アジア、ゼノヴィア」

……アジアさんは特にイツセー君との旅行を楽しみにしていたからね。

その顔はまだ暗い。

「イツセーからの伝言よ」

イツセー君からの伝言と聞いて、教会トリオは顔を上げた。

「俺の事は気にしなくて大丈夫だから、思い切り楽しんで来い——だそうよ」

部長は微笑みながら、そう言った。

そう言えば、学校に行つた事のないアーシアさんとゼノヴィアからすれば、まさしく初めての修学旅行なんだ。

それなら確かに、目一杯楽しんでもらいたいという気持ちもあるね。

「……イツセーさん。分かりました!」

「ああ。こうなれば来れないイツセーの分まで楽しもうじゃないか!」

「そうよそうよ!それに、イツセー君に一杯お土産を買つてあげたら、きつと具合だつて良くなるわ!」

——その理屈はよく分からないよ、イリナさん。

僕は心の中でそう思いながらも、漸く元気になつた三人を見て、安堵の息を漏らした。

「へえ、イツセーの奴休みなのか」

新幹線の中で、僕は立神君と話をしていた。

「イツセー君が休みだと言うと、彼はさして驚いた様子を見せてはいなかった。

「驚かないんだね？」

「アイツ中学の時も来なかったからな」

「……………え？」

「ああ、別にサボりつて訳じゃないぜ？ 確か……………インフルエンザに罹ったんだっけかな」

……………ある意味一番呪われているのは、イツセー君なのかもしれないね。

「ぶえつくしよん!!!!」

## MAGIC89 『赤龍帝の介護』

「へーつくしよん!!」

平日の昼、俺は自室にて盛大なクシヤミをする。

「ちつくしよ……!!」

垂れてくる鼻水を啜りながら、俺は修学旅行に行けない悔しさを存分に味わっていた……!!

「何で俺って、こう言う行事予定の時に風邪引くんだよ……!!」

「呪われてるんじゃないか?」

『運の無い奴だな……!!』

俺だつて好きでこんな不運発揮してる訳じゃねーよ……!! ゲホッ!!

あーあ……今の時間だと、アーシア達はもう京都に着いたのかなあ……。

俺も色々な仏閣を見学したかったなあ……。

『絶対アニメシヨップかカードシヨップ覗いてたろうな』

『あり得るな』

「バーロー！俺だつて歴史のロマンを感じる男……ゴホツゴホツ!!」

叫んだら余計に喉が痛くなつてきた……何か飲み物でも取つてくるか。

そう思つて起きようとした時、部屋のドアが開かれた。

「——お待たせ、イツセー」

そこには、天使がいた。

「グレイ、ファイア……!!?」

俺の部屋に入ってきたのは、恋人のグレイファイア。

手にはお盆が乗っており、上には恐らくスポーツ飲料が入っているコップと、湯気の立つお椀が乗せられていた。

そう言えばさつきお粥を作るとか言つてたっけ……と、何で俺が驚いていたのかつて?

それは——グレイファイアの格好だ。

彼女が何時も来ているメイド服ではなく、何と——ナース服だったのだ!

髪型はいつも通りなのに、何処と無く何時もと雰囲気が違うように感じる………風邪の幻覚でも見てるのか?

「……グレイフィア、滅茶苦茶似合ってる」

思わずそう漏らしてしまうと、彼女の頬が僅かに赤くなる。

ああ、もう………どうして俺と二人きりの時は、そんな可愛らしいリアクション見せるんだよおおお!?

「———ありがとう、イツセー。少し恥ずかしかったのだけど………喜んでもらえて何よりね」

グレイフィアは椅子を寄せてくると、そこに腰かけて、お粥をレンゲで救った。

そして口を窄めて冷ますと、俺の口に差し出してくる。

「………はい、あーん」

「あ、あーん」

相変わらずこういうった恋人同士のスキンシップは慣れないけど、俺は意を決してお粥を口に加えた。

塩分が控えめになっており、喉が痛い俺でも美味しく食べれる——まさしく、グ

レイファイアの味だな。

「ん……美味しいよー」

ニツと笑うと、彼女も花が咲くように笑ってくれた。

そうしている間に、お粥はあつという間に空になった。

「じゃあイツセー、体を拭いてあげるから、服を脱いで」

「ええ!？」

傍に置いてあつたタオルの水気を切りながら、レイファイアはそう急かしてくる。

き、急に脱げつつたつて……!

結局、最後はレイファイアの「……ダメ?」の上目遣いに負け、俺は上を脱いだ。

「じゃあ、失礼して……」

「う、うん……」

レイファイアは丁寧に俺の体を拭いてくれる。

タオルだけでなく、時折レイファイアの綺麗な指が当たり、俺は意味もなく胸を高鳴らせていた。

「イツセーの体、逞しいわね……お陰で、こっちも熱くなつて来ちゃいそう……」

「ツ!？」



普段とはかけ離れた、艶めかしさを感じる声音に、俺の心臓は跳ね上がった！  
「…ふふつ、冗談よ」

ぐう、押揄われてる……………！

俺、多分この先もずっとこうなんだろうなあ……………。

「何から何まで、有難う。グレイファイア」

俺は水を替えに来たグレイファイアに、改めてお礼を言った。

「ううん、良いのよ。それに……………」

「…それに？」

「将来はずっとこうして一緒に歩むんだから、今の内の花嫁修業よ♪」

「!？」

その爆弾発言に顔を真っ赤にする俺。

そんな俺を愛しげに見つめていたグレイファイアは、俺の頬にキスをして、部屋から出ようとした。

と、そんな時だった。

『グレイファイア、ちよつと良いか？』

部屋に、アザゼル先生の声が響いてきたのは。

## MAGIC90 『京の物の怪』

僕達が新幹線に乗せられて京都にやって来てもう数時間が経過した頃……………

「母上は返してもらおうぞ!!」

僕達の目の前でそう威嚇するのは、巫女服を着た小さい女の子。

その頭には小猫ちゃんとは異なる耳——狐のような耳が生えていた。

「余所者めが…………」

そして……………僕達を囲うのは、京都に住まう妖怪だった。

詳しい経緯は、僕達が京都に到着して最初に観光として訪れた伏見稲荷へと訪れてか

らだった。

僕はアーシアさん達とはクラスが違うのだけど、他の班のメンバーに伏見稲荷を見学したいと言つて、付いてくる事に成功したんだ。

……とは言え、この地に着いてからと言うものの、僕達は何者かに監視を受けていた。ゼノヴィアも気付いていたらしく、アイコンタクトで伝えてきた。

取り敢えずその時は、敵意というものが感じられなかったから最初は放置していたんだ。

それに気付いた僕と立神君はその敵意の群れを引き付ける目的で山頂を目指す事にしたんだ。

「……しっかし、俺達敵意を向けられるような事したかねえ」

「それは僕も思っていたんだけど……つと、この辺りで良いね」

「そうだな」

僕達は、辺りに人気がない事を確認すると、その場で立ち止まった。

「そろそろ出てきたらどうだい？」

「かくれんぼは止めようぜ？」

僕は手に剣を、立神君は両手に機械的なグローブを纏っていた。

すると出てきたのは——冒頭で話した通り、女の子が出てきて、今に至ると言う訳だ。

——

「俺達はお前の母ちゃんなんて知らねーよ！」

「嘘をつくな！私の眼は誤魔化せんぞ!!」

立神君は狐の面をした妖怪の錫杖を弾いて殴り飛ばす！

その間に女の子に向けてそう言い放つけど——まるで聞いてはくれなかった。

「不浄なる魔の存在め！」

「これ以上我らの陣を汚させはせんぞ！」

…相手の実力は大了なものじゃないけど、不用意に傷をつけるわけにもいかないからね。

取り敢えず、劍の峰で打ち据えるだけに留めている。

「くっ、中々にしづといー！」

完全に膠着状態となつた僕達。

すると、立神君の方が突如跳ね上がった。

「立神君？」

「何か……………来る……………！」

そう呟いて暫くすると、後方から足音が聞こえてきた。

——まさか、一般の観光客か?!

そう思い振り返ると——

『……………』

その場に現れたのは、獣の頭を持った怪物だった。それだけなら驚きはしないけど、その怪物の両肩には、同じような頭が二つ付いていた。

まるで、ケルベロスの様に――

まさかこの怪物は……………

「ファントムか!!」

――やはりファントム!

でも何でこの場に!?

『……………奴はいないか』

……………奴?

一体誰のことだ?

「貴様、何者だ!?!」

突然の乱入者に、女の子が鋭く吠える!

「まさか、貴様も私の母上を………っ!!」

『………煩い虫けらだ』

ファントムはそう呟くと、一瞬にして僕達の視界から消え去った!

そして――

「きゃっ!!!」

悲鳴が聞こえてきた方向を向くと、女の子がファントムに殴り飛ばされていた!!

「九重様!!」

「よくもっ!!」

周りの妖怪達は怒りに震えながらファントムへと突貫する!

だがファントムは冷静にその内の一人――恐らくは烏天狗の首を掴むと、

ガブツ!!!

『………っ!!?』



そのまま、烏天狗を……………喰ったのだ。

信じられない出来事に僕達は全員固まってしまおう！

だけど、地面に落ちている夥しい羽根と、骨の軋む音が聞こえる咀嚼音、奴が吐き出した血痕を見て、これは現実なのだと自覚させられた。

『……………不味いな』

「……………貴様!!よくも、よくも私の部下を!!」

「っ、九重様!!」

それを見ていた女の子は、目じりに涙を浮かべながら突貫する！

だが攻撃する前に、ファントムが女の子の首を掴んだ！

「ぐ、う……………っ!!」

『……………そんなに死にたいのか』

「っ、やらせるか!!」

ファントムが女の子を食らう前に、僕達は駆け出す！

ファントムは駆け出す僕達を気にも留めず口を開いた——  
!!!

「——おいおい、今度のファントムはロリコンか？」

——と、静かだけど、不思議と響き渡る声の後方から聞こえてきた。

それと同時に、声のした方角から銀の銃弾が放たれた！

『ツ！』

その銃弾は的確にファントムの手だけに命中した！

その衝撃に思わず女の子を手放してしまうファントム！

《エクステンド・プリーズ》

女の子が落ちてしまいそうになった瞬間、何か伸びてきて女の子を引き寄せた！

——って、今の音声は!?

全員が振り返ると、そこには——

「…………ふい。大丈夫か？嬢ちゃん」

女の子を横抱きにした、イツセー君がいた。

「…………へつくしよん!!!」

……………マスク装備で。

# MAGIC 91 『合流』

「へっくしゅん!!」

妖怪、そしてファントムまで現れたこの混迷の状態で——僕達の希望、イツセー君が現れた。

見た感じ熱はなさそうだけど、それでもまだくしゃみが止まっていけない所を見るに、まだ風邪は治ってなさそうだ。

どうやってこの場に——と思っていると、更に驚きの人物が現れた!

「……イツセー様。あまり単独行動はお控え下さい」

——グレイファイアさん!?

魔王サーゼクス様の『女王』にして、イツセー君の恋人、グレイファイアさんが嗜める様にイツセー君の側に行きながらそう言ってきた。

彼女が何故……。

『……ウイザードか』

フアントムはイツセー君を見てそう呟いた……つて、ウイザード？

他のフアントムはイツセー君の事を指輪の魔法使いつて言うのに……。

イツセー君もそこが引つ掛かったのか、フアントムに問い掛ける。

『……変だな。俺はお前らには基本指輪の魔法使いつて呼ばれてんだけど』

『……』

『……はあ、無視かよ。まあいいか』

《ドライバーオン・プリーズ》

溜め息を吐いた後、イツセー君は女の子を下ろしてドライバーを顕現させた。

「直接聞くかな」

『……今のお前と戦うつもりはない。あのお方の命令だ』

「?」

『フンツ!』

ファントムは背中に黒い翼を生やすと、周囲に向かって風を起こす!

攻撃かと思ひ身構えるが——風が止むとそこにいた筈のファントムが消えていた!

……つて、よく見れば妖怪達も消えている。

「……何だったんだ?」

イツセー君はポツリと呟いた。

「……………ぶあつくしよん!!!」

——やはり、盛大なくしやみと共に。

――

よお皆、イツセーだ……ゴホッ。

今俺達は先生に呼ばれて旅行先の近くにある料亭に集まっていた。

そこには匙達シトリー眷属もいたんだけど……。

「やつほー、イツセー君☆」

何故だか知らんけどセラフオルー様もいた。

「……何故にセラフオルー様？」

「いや、それよりも……俺はお前がここにいるのが驚きだよ」

「まあ、ちよつとな……で、何でセラフオルー様がここに？」

俺は気になって聞いてみた。

「京都の妖怪さん達と協力態勢を得るために来たの☆」

「セラフオルーは魔王の中で外交担当だからな」

「……!？」

「こ、こんな超軽い魔王様が、外交担当……!？」

今更だけど、冥界は大丈夫なのか……?」

「だけど……どうにも大変な事になつてるの」

「大変な、事？」

「うん。京都の妖怪を束ねていた九尾の御大将さんが先日から行方不明なの」

行方不明……？

「……そういや、あの子供こんな事言つてたな。母上を返せつて」

吼介が思い出したかの様にそう言つた。

「まさか……」

「ええ。イツセー君達の考えてる通りよ」

「——このドンである妖怪が拐われたつて事だ。関与したのは」

「——禍の団」

俺が呟くと、先生達は静かに頷いた。

……なあるほど。どうやら俺達つて事ある毎に厄介事を引き連れてくるタイプだな。

「じゃああの女の子は……」

「俺達を拐つた相手と勘違いしてたんだろうな」

まあ、それは分かつたから良しとしよう……問題は、もう一つある。

「ファントムが、何でこの地にいるんだ？」



『まあ奴等の事だ。ロクでもない事に荷担してるのは間違いないだろうな』

俺の疑問に、ドライグがそう答えてきた。

「……ファントムもそうだし、まだこの事は公には出来ないわ。何とか私達だけで事を収束しなければならぬ。私はこのまま協力していただける妖怪の方々と連携して事に当たるつもりよ」

「おう。なら、俺も独自に動くか」

——— だったら。

「俺も動いてみます。アーシア達には、旅行を満喫して欲しいですから」

「……イツセー。お前はあまり無茶をするな。今だって、熱を無理矢理押さえ込んでるんだからな」

「大丈夫ですよ。この為にグレイフィア……さんがいるわけだし」

「……あのー、一つ良いですか？」

俺と先生の間に割り込んでくるのは——— イリナだった。

「イツセー君、本来は風邪で休んでる筈ですよ？ だったら、どうしてこの場に來れたんです？」

「……來れた、と言うよりは、來れるようにしただけだな」

『?』

事情を知らない皆に、改めて先生が説明した。

「本当ならグレイフィアだけを遣わす予定だったんだか、イツセーが自分も行くって頑なに主張してな。だがイツセーはまだ熱が治ってない状態だった。そこで——」

先生は懐から錠剤の入った透明のビンを取り出した。

「このグリゴリで最近作った熱を押さえる薬を使った訳だ。まあ熱を押さえるだけだから、風邪の症状は残ってるがな」

「そゆこと。で、俺に何かあつたら不味いから、グレイフィアさんが俺の護衛に着いて、数時間前に京都に来たんだ」

その説明に、皆は取り敢えず納得してくれた。

「まあ、あんまり不用意に出歩くとまた発熱しかねないから、観光とかは出来ないけどな……へつくしゆん！」

苦笑いしながら付け加える。

あ、またくしやみ出た。

「イツセーは一応サーゼクスホテルにいる事になってる。……良いかイツセー。くれぐれも、無茶はするなよ」

「了解つす」

「グレイフィア。その間は、イツセーの様子を逐一報告してくれ」

「はい」

と、色々話し合つて、この場はお開きとなった。

「あー、そうだ。お前ら、あんまりイツセーの部屋に出入りするなよ。他の生徒に見られたら大変だし、何より風邪がうつる可能性があるからな」

その忠告に、アーシア達教会トリオが残念そうにしていた。

まあこれに関しちや仕方ないし……耐えてくれよな。

「ぶえつくしゅ!!!」

# MAGIC 92 『退屈な京都』

さて、この京都に例のテロリスト——『禍の団』が陰で動いていることが発覚して翌日。

「あ〜……暇だ」

俺はホテルの一室でこの退屈な時間をどう潰そうか悩んでいた。

アザゼル先生謹製の薬のお陰で、熱の症状は抑えられているが、激しい運動とかで薬の効果が切れるかもしれない、との事で、俺は基本的に出歩くのを禁止されている。

しかもこのホテルには駒王学園の生徒達が修学旅行で訪れている場所でもあるから、余計に出るのは許されないんだ。

風邪で休んでいる事になって俺がいたら大騒ぎになるからな。

だから基本的にここから出る事はないんだ。

詰まる所………滅茶苦茶暇なのだ。

「出歩けないってのはキツツイよなあ……」

このホテルにはゲーセンなんてないし、慌てて転移したからゲームなんて物も持っていない。

『文明の利器たる携帯があるだろ』

携帯ゲームも飽きちゃったよ……。

あーあ、この時間だとアーシア達は今頃清水寺だったな………何でだろ、ゼノヴィアとイリナの二人が異教徒文化万歳とか叫んでそうな気がする。

ーその頃のシスタートリオー

「見ろ、アーシア！ 異教徒の文化の粋を集めた寺だ！」

「はい！ 歴史を感じます！」

「異教徒バンザイね！」

「……………この神様。怒らねーのかな」

清水寺に踏み込んで早々に失礼な発言をブチかます二人に、口を引きつらせる吼介であつた。

「……………へつくしゅ!!」

―終わり―

いつその事抜け出すか？

なんて思っていたら、グレイフィアが部屋に戻ってきた。

「ただいま、イツセー」

「お帰り〜」

「……………退屈そうね」

部屋に戻ってきて早々に苦笑いされた。

「だつてさ〜……………。つて、グレイフィアは何処に行つてたんだ？」

「このホテルのエステを受けてたわ」

…ああ、だから肌があんなにツルツルになっているのか。

——それにしても。

「…やっぱさ、グレイフィアは狡いよ」

「?」

「元からすげえ綺麗で、可愛いのにさ……更に俺をメロメロにするんだから。……………」

「これじゃ、外で変な男にナンパされまくりじゃん」

最初はキョトンとしていたグレイフィアだったけど、次第に笑顔になり——座つたまま寝転がっていた俺の頭を抱き抱えた。

「大丈夫。私は何時だって、イツセーだけのものだから。安心して?」

そう女神のように微笑んだ後、そのままの態勢で俺の唇を塞いだ。

「……………うん」

俺は恥ずかしくなってそっぽを向いた。

そんな俺の様子に何か触発されたのか、グレイフィアは横になって俺をギュツと抱きしめてきた!

「もう、イツセーつたら…可愛い♪」

「ちよつ、グレイフィア?!」

『やっぱ相棒って受けが合うよな』

『そうだな』

う、嬉しいけどこの態勢は恥ずかしいって！

どう抜け出そうか色々（グレイフィアのおっぱいに顔を埋めながら）模索していると  
—— 何かの気配を感じた。

これは……………フアントム？

それを感じた俺は即座に起き上がり、外へと向かった！

「イツセー?!」

「フアントムが出た!!」

「……………!?!」

そう言ったと同時に、グレイフィアも顔色を変え、俺の後に続いた。

フロントに出て、バイクに跨るのと同時に、俺の目の前にガルーダが飛んできた！

「ガルーダ！フアントムだな?!」

『ペイ!』

「うっし、案内頼むぜ!」

『ペイ!』

エンジンを吹かせ、ガルーダが飛ぶのに続いてバイクを走らせる!



「グレイファイア！しっかり捕まってくれよ！」  
「はい!!」

———

銀閣寺の近郊——。

「きゃあああ!!」

『……貴様の魔力、曝け出してもらおうか』

ガルードの先導でバイクを走らせた先で、先日のファントムが観光客らしき人達に迫っていた!

《ドライバーオン・プリーズ》

「変身!」

《フレイム・プリーズ!ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー!》

『ッ!』

フロントムに直接ライダーブレイクを仕掛けるが、寸での所で気付かれ、躲される！

『……ウイザードに』

「はっ!!」

俺の背後から現れたグレイファイアが魔力の弾丸を放つも、奴はそれを喰らう事で直撃を避けやがった！

『……ルキフグスの女か』

「白昼堂々絶望させようとするなんざ、随分大胆になったもんだな」

《コネクト・プリーズ》

魔法陣からウイザードガンを取り出して切っ先を向ける。

対するフロントムは、武器を構える事無く腰を落として此方へと構えるのみ。

『……行くぞ』

フロントムが地面を蹴ったのと同時に————防御の為に突き出した剣の刀身に衝

撃が走った！

速いな、コイツ………!!

何とか押し返して右足の蹴りを見舞うが、奴は後ろに飛んで回避！

着地点を予測したグレイファイアの攻撃がクリーンヒットする………奴の肉体は煙を上げるのみだった。

——ん？

俺は突如、ここに向かってやって来る気配を感じた。

……………これは、

『食らえ!!』

「はっ!!」

ぼさっとしていた俺に向けて、ファントムは三つの口を開けて火炎弾を一斉掃射してくる!

それをカバーするかのようにはぐれいファイアは即座に銀の魔法陣で防御に徹する——  
——よし!

「今だ!——吼介!!」

『?……………!』

一体何を、と訝しんでいたファントムの無防備な背中に、五匹のカメレオンが襲い掛かる!

流石のフロントムも、これに対応し切れずに膝をついた！

「——よっしゃラッキー！ 闇討ち大成功!!」

ハイテンションな声と共に虚空から現れたのは、緑色のマントを纏ったビースト……つまり、吼介だ。

「気配の消し方が上手くなつたな、吼介！」

「つたりめえよ！……まあ、お前とグレイフィアさんには気付かれてたみてえだけだな」

『……アーキタイプか』

そう言つて立ち上がったフロントム……ま、あれで倒せてたら苦勞はしてないわな。

「ゼノヴィア達は？」

「この辺の人達を避難させてる。この騒ぎで、妖怪たちが来てもおかしくねーから、そつち方面を任せてるよ」

「ナイス判断。……さて、いい加減お前らの目的を教えてもらおうか？——この京都で何を企んでる」

『……フロントムが人間を絶望させるのに、理由は必要なのか？』

ちつ、話す気ゼロだなこりゃ。

『……そうだな。強いて言うなら——』

「……？」

『世界の救済、か』

……へえ。

「無理矢理人を絶望させて殺してはお前らが世界の救済？……ジョークにしちや三流すぎんだろ。うちのドライグの方がまだ面白いぜ？」

『貴様らに我が主の理想など欠片も理解出来る筈がない』

「したくもありませんね。貴方方の理想など」

「碌でもねー野望に決まってるからな！」

『……所詮、希望などという神が作ったまやかしに縋る貴様らとは、相容れないと言う事か』

再び膠着状態となった俺達——だったが、それは奴の方から崩された。

『………奴等の準備が整ったか』

「？」

『………英雄を名乗る人間の覇道を、貴様らがどう絶つか——見物させてもらおう。我が主も、楽しみにしているぞ。ウィザード』

「っ、待て!!」

駆け出したのと同じタイミングで、ファントムの周囲に黒い旋風が巻き起こる！  
そして、風が止んだのと同時に——ファントムの姿は消えていた。

「……………」

逃がしてしまった、という気持ちの中で、俺の頭の中では、奴の言葉がずっと余韻を響かせていた。

『……………英雄を名乗る人間の覇道を、貴様らがどう絶つか——見物させてもらう。我が主も、楽しみにしているぞ。ウィザード』

我が主——恐らく、ロキが言っていたワイズマンの事だろう。

だけど……

『どういう事だ……………？何で、敵の親玉が俺の事を気にかける必要が……………』  
と、そんな時だった。

「イツセー」

背後から聞こえてきた声に反応して振り返ると、そこにはゼノヴィアがいた。

何故か——狐耳のお姉さんを連れて。

「ゼノヴィア、その人達って……あの時の、妖怪さん？」

「の、仲間だろう。近隣の人達の避難を手伝ってくれてな」

成程。——でも、こないだは問答無用って感じだったのに、今は何もしてこないな。

「……えっと、俺達に何かご用ですか？」

代表して俺が聞いてみると、グレイフィアが何か通信を受けていた。

「——ええ。分かりました」

「グレイフィア……さん？」

「……今、ロスヴァイセ様より一報を受けました。どうやら——誤解が解けようです」

——誤解？

あまりの急展開にポカンとしていると、獸耳のお姉さんが前に出て深々と頭を下げてきた。

「私達は九尾の八坂に仕える狐の妖でございます。先日は申し訳ございませんでした。我らが姫君も謝罪したいと申されておりますので、どうか私達についてきてくださいませ」

「……何処に？」

「我ら京の妖怪が住まう裏の都です。魔王様と墮天使の総督殿も、既にそこにいらつしゃいます」

——色々疑問は残るが、俺たちは一先ず、狐のお姉さんの案内で裏の京都なる場所へ赴く事になった。

『次回！相棒が開幕早々ソープでこっそり絞られちゃうZ E!!』  
「嘘を付くな嘘を!!」



## MAGIC 93 『真実』

金閣寺付近に建てられていた鳥居、そこを潜るとまるで別世界だった。

何と言うか……全体的に古風な雰囲気漂ってるな。

江戸時代かここは？

薄暗い空間と独特の空気。

そして、そこに住まう妖怪達が俺達を迎えてくれていた。

一つ目の大きな顔の者もいれば長い首をもった者。

他にも立って歩く狸や河童など様々だ。

それら全てが俺達に好奇の視線を向けてくる。

一度は本とかで見た事あるような妖怪がたくさんいるな……。

で、俺達は今この間の狐の姫様がいるところまで狐のお姉さんに案内してもらっている。

「ここが妖怪が住まう居住区なんですか？」

「はい。ここは京都に住まう妖怪が身をおく場所です。悪魔の方々がレーティングゲームで使うフィールド空間があると思いますが、あれと似たような方法でこの空間を作りだしています」

「へえ、妖怪の世界でもレーティングゲームって知られてるんですね」

「レーティングゲームの試合の様子はこちらでも見ることができなのですよ。中には熱狂的なファンもいます。そして……この場所は他にも裏街、裏京都などとも呼んでいます。大抵の妖怪はここに住んでいますが、中には表の京都に住む妖怪もおります」

へえ、妖怪にも色々あんだな。

家屋が立ち並ぶ場所を抜けると林に入る。

そこを更に進むと巨大な赤い鳥居が現れた。

おお、デカいな。

そこを潜ると、奥には先生、セラフオール様が既にいた。

「ヤッホー☆」

「待ってたぜ」

すると、二人の間に金髪の少女がいた。

あの九尾の娘さんだ。

今日は巫女装束ではなく、戦国時代のお姫様が着るような豪華な着物を着ていた。こうして見ると確かに小さなお姫様って感じた。

「九重様。皆様をお連れいたしました」

俺達を案内してくれた狐のお姉さんはそう言うのとドロンと炎を出現させて消えた。今のが……狐火って奴か？

『だろうな』

まさか実物見れるなんてなあ……へっくしゅっ!!

お姫様は俺達の方に一歩出てきて口を開く。

「私は京都に住まう妖怪達を束ねる者——八坂の娘、九重と申す」

そう自己紹介をした後、深く頭を下げてきた。

「先日は申し訳なかった。お主達を私の勘違いで襲ってしまった。どうか、許してほしい」

「……うーん。実際にやり合ったのは木場と吼介だからな……」

俺が頭を掻きながら言うのと、

「僕は気にしていないよ」

「俺もだ。それに事情があつたわけだし」

二人は気にしてないと言ってくれた。

それを聞いて、俺が九重に言うべき事は一つだ。

「ほら。あいつ等も気にしてる訳じゃないから、そんなに縮こまらなくて良いぜ？」

「し、しかし……！」

うーん、この年で結構真面目ちやんだな。

まあお姫様だからかね？

俺は九重の視線まで膝を曲げる。

「九重はさ、俺達に迷惑かけたって思ったからこうして謝ってるんだろ？」

「う、うむ」

「だったら、もうそれで良いじゃんか。真剣に謝罪している人を咎めたりしないから

……それに、俺がお前の立場だったら同じことしてただろうし。だから元氣出せよ、な

？」

俺が頭を撫でると、九重は顔を赤くして俯いてしまう。

ありや、ちよつと恥ずかしかつたのかな？

「流石は最後の希望、ウィザードラゴン様だな」

「茶化さないで下さいよ……はくしよん!!」

あゝ……鼻水出てきた。

「……私がこのような事を言うのは身勝手だとは思う……じゃが！どうか……どうか、母上を助けるために力を貸してほしい！」

それは、母親を浚われた娘の悲痛な叫びだった——

——

この京都を仕切る九尾、八坂さんは須弥山の帝釈天から遣わせれた使者と会談するために数日前に屋敷を出たという。

ところがその八坂さんは会談の時間になっても姿を現すことがなく、そのまま連絡が取れなくなった。

このことを不審に思った妖怪サイドが調査を行ったところ八坂さんの護衛についていた烏天狗を瀕死の状態で保護した。

「その後、その者が母上が襲撃を受け、さらわれたことを伝えてくれたのじゃ」  
「その天狗は？」

そう聞くと、九重は悲しそうに首を横に振った。

「各勢力が手を取り合おうとすると、こういうことが起こりやすい。オーデインの時は

ロキ。そんなもって、今回はテロリストってことだ。どいつもこいつも面倒な奴らばかりだ。そんなに俺達が入らないのかね？」

『そう言う物だろう。テロリストと言うのは』

ま、面倒な事しないテロリストなんていないわな。

「総督殿、魔王殿。どうか、八坂姫を助けるため、力をお貸しいただけないじやろうか？  
我らに出来ることならば何でもいたす」

この天狗の爺さんは天狗の長で古くから九尾の一族と親交が深いらしく、今回もさらわれた八坂さんを助けるために集まってくれた。

天狗の爺さんは一枚の絵画を見せてくれた。

「ここに描かれておりますのが八坂姫でございます」

俺はそれを見るが………おお、と唸りを上げてしまう。

すげえ美人！

それにおっぱいが実にけしからん!!

内心フィーバーになって叫んでいると、傍にいたグレイファイアに脇腹を抓られた。

痛い、痛いよグレイファイア!

俺が抓られた場所をさすつっていると、先生が口を開いた。

「八坂姫をさらった奴らが京都内にいるのは確実だろう」

「どうして分かるんですか？」

「京都全体の気が乱れてないからだ。御大将——九尾の狐はこの地に流れる様々な気を管理し、バランスを保つ存在でもある。京都つてのはその存在自体が巨大な力場だ。もし九尾がこの地を離れるか殺害されていけば京都には異変が起こるんだよ。まだそれが無いつてことは御大将は生きてこの京都にいるつてことさ。そして、さらったテロリスト共もそこにいるだろうぜ」

「京都つてそんなに特別な場所なんですね」

「まあな。古来からパワースポットつて謂れがある位だからな」

しかしそれが本当なら猶更、八坂さんを助けなきや不味いな。

「セラフオール、悪魔側の調査は？」

「まだ連絡はないわね」

「そうか……。俺ん所にもまだ連絡が来てないからな。……………いざつてなつたら、お前達のも出張つてもらおう事にもなるが、その時は頼む」

『はいー』

この為に風邪を圧して出てきたもんだからな。

それに……

「ファントムの事もありますからね」

「……ああ」

先生が神妙に頷くと、九重と周りの臣下達も手をついて頭を下げてきた。

「……どうか、お願いじゃ！母上を助けるため、力を貸してくれ………お願い、します………！」

九重は声を震わせて、そう懇願してきた。

その綺麗な目からは、ポロポロと涙を溢れさせていた。

「……大丈夫だ」

俺は九重の手を取り、優しく言う。

「お前の母さんは、絶対に助けてみせる。約束する——俺がお前の、最後の希望になる」

どんな理由があるかは知らねえ………けどな、こんな小さな子を泣かせるなんて、絶対に許さねえ。



『何でもするか……それに人妻……ぐへへ』

『…おい』

台無しだよコンチクショー！

「へっくしょん!!!」

俺も台無しにしちやってんじゃんか!!!

# MAGIC 94 『変異』

吼介 side

よお、俺の視線は初めてだな。

つー訳で、今回俺達は九重ちゃんの家内で京都の各所へと向かってる最中だ。

「…そういえば、この間の赤龍帝はおらんのか？」

そう九重ちゃんはもじもじしながらこっそり聞いてきた。

……アイツ、こんなちっちゃい子まで。

アイツのフラグ建築ぶりに呆れつつも、イツセーは風邪で旅行自体は欠席していて参加できないと教えると、少し残念そうだった。

けど、すぐに気持ちを切り替えたのか、張り切って京都案内をしてくれた。

現在は天龍寺を見学中だ。

「天龍寺と言う事は、ドライグさんと関わりがあるのででしょうか？」

確かに。

でも本人覚えてなさそうだけだな。

ー同時刻のドライブさんー

『へつくしよん!!!』

「何だドライブ。急にくしやみして」

『何か出たんだよ』

『……大方風俗行った時にうつされたんじゃないのか』

「何してんだよ……」

ー終わりー

しかし立派だなあ。

それに九重ちゃんの解説も聞いてて微笑ましくなる。

多分誰かから教えられた知識をそのまま話してるんだろな。

だけど一生懸命に俺達が飽きないように解説してくれるから、案外楽しい。

イツセーの奴も残念だなあ。

それにしても、ちっちゃいによくもこんな細やかにルートを考えてたもんだな。元浜達も感心してるし。

そんなこんなで、俺達は彼女おすすめの湯豆腐屋に来ていた。

んー！

「うめえー！」

「そうじやろう！ここの湯豆腐は絶品じゃからな！」

九重ちゃんは誇らしげに湯豆腐を食べてる。

「いやあ、しかしイツセーの奴も残念だよな」

「ああ。こんなにも楽しいというのに」

……はは、言われてやんの。

アイツなら昨日部屋に覗きに行ったら、暇そうに八つ橋食ってたからな。

あれは笑ったぜ。

でもその後やって来たグレイフィアさんのやり取りは砂糖吐きそうになった。

んで、同じく来ていたアーシアちゃん達は対抗心剥き出しだった。

アイツ、本当に罪な男だな……。

ー同時刻のイツセー君ー

「ぶえつくしよん!!!」

ー終わりー

「………って、もう終わりかよ!?もうちよいピックアップしろよ!!クシヤミしただけじゃねーか!!」

「……イツセー?」

「あ、ごめんグレイフィア。続けてくれて良いよ」

「…そう。では、エクセリクス・メサイアでアタック。効果で全ての呪縛カードを解呪ロック  
よアンロック」

「うげー………やっぱかげろうで一斉退却は辛いな」

ー今度こそ終わりー

「やあ、立神君」

湯豆腐を頬張っていると、後ろから木場が声をかけていた。

「よお。そつちも今日は嵐山か？」

「うん。天龍寺は行ったのかい？」

「おう。凄かったぜ」

「僕達も渡月橋を見た後で天龍寺に向かう予定なんだ。今から楽しみだよ」

「ん、じゃあ途中まで一緒に行くか！渡月橋は俺達も行く予定だからな！」

そういうと木場は快諾してくれた。

「おーつす。お前ら、旅行を満喫してるかあ？」

……と、そこへ少し顔が赤いアザゼル先生がやってきていた。

「つーか酒臭っ!？」

「真昼間から飲んでんすか!？」

「そうなんです。この人だったら、何度止めても聞いてくれなくて……」

大変だな、ロスヴァイセ先生……。

「でーじようぶだつて。こいつ等はやって良い事と悪い事の区別はついてんだからよ。

俺達がちよつと目え離しても非行に走ったりはしねーよ。つーか、そんな堅物だから彼

氏も出来ねーんじゃね？」

「……か、関係ないでしょう!?!分かりましたよ、飲めばいいんでしょう!?!飲めば!!」

あーっと、ロスヴァイセ先生も酒を呷ったぞ！

「ぶはー！……だいたいれすね、あなたはふだんからたいどがラメなんですよお！  
たいどがあ!!」

……酔うの早っ！

たった一杯だろ!?

何処のゲジマユだよ!!

「……い、一杯だけで酔ったのか……?」

先生も口元引く付かせてる!

これには予想外だったらしい!

この酔い方は……多分ダメな酔い方だな!

うちの親父もこんなだし!

「……はあ。お前ら、ロスヴァイセは俺が相手しとくから、構わずに京都観光して来い」

先生が殿?を務めてくれるのを良い事に、俺達は逃げるようにその場を離れた。

……後ろからは終始ご機嫌なロスヴァイセ先生の笑い声が聞こえてきた。

——  
すると暫くして、その時俺達を生ぬるい感触が襲った。



## MAGIC95 『陰に隠れた陰謀』

「……何だこりや？」

変な感覚がした後、辺りを見渡してみると、そこには俺達以外誰もいなかった。

そして、足元に立ち込めるのは気味の悪い霧。

何なんだ一体……そう思っていると、アーシアちゃんが反応した。

「……この感覚、以前ディオドラさんに捕まった時のと同じです」

「本当か?！」

あー……確かイツセーが暴走した時の出来事か。

俺も断片的にだけど聞いている。

——ディメンジョン・ロスト  
絶　霧、だね」

そう言つて歩み寄つて来たのは木場だった。

「……確か、空間系の神器——神滅具だったっけか？」

「ああ。飛び切りヤバい奴だよ」

つて事は……

「例のテロリスト共か……」

「うん——禍の団」

「くっそ……折角の修学旅行だつてのに……」

俺が掌を拳で叩くと、前方からアザゼル先生がやってきた。

「お前ら、全員揃つてるか？」

「はい！」

「うっし、なら良いんだ。……にしても」

先生は改めて周囲を確認するように目線を配らす。

「綺麗に俺達だけを転移させやがる……相当熟練してやがるな、奴さんは」

「そうなんすか？」

「ああ。その証拠に、周りには他に人間はいないだろう？」

言われて見渡してみると、確かに人らしき気配はしなかった。

「……そう言えば先生、イツセーは？」

「……一応この異変は察知してはるはずだが」

「呼びました？」

——

突如聞こえてきた声にビビって振り返ると、そこにはマスクを付けたイツセーとグレイフィアさんがいた。

「よお、吼介」

「お、脅かすなよ！」

「ははっ、わりいわりい」

「イツセー、お前はどうかやってここに？」

先生が尋ねると、イツセーは説明を始めた。

「どうやってても何も……なんか薄気味悪い感覚が来たと思って、気づいたらこんな所に」  
どうやら俺達と同じらしい。

「……まあ兎に角。ここぞでジツとしても仕方ねえ。移動するぞ」

——

イツセーside



『oh 槍?のDerivation!』

——聞き間違いじゃなかったあああああ  
!!!!!!

頭を抱える俺と唾然とする周囲を他所に、この馬鹿二人はまだ歌いだす!

『震えるk「もう良いわー!!!」』

駄目だ、こいつ等このままにしてたらfuuで歌いやがる!!

俺は大声でドライグの歌唱を打ち切った!

『何だよ相棒。人が気持ちよく熱唱してたのによお』

「いや、お前馬鹿か!?こんな戦場のど真ん中で何で敵とデュエットしてんだよ!後この

歌二人用じゃねーし!!」

「兵藤一誠。人が熱唱してる最中に割り込むのはルール違反だぞ?」

「うるせーよ!!!何で敵のお前にまで咎められなきやならねーんだよ!?第一乗るなよ!!!」

『『乗せられちゃった?』』

「お前から死ぬね!!!」——「ごほっ、ごほっ!!」

くっそ、喉がいてえ……………!

『おいおい、あんまり叫ぶなよ。風邪引いてんだからさ』

「そうなのか。だったら大人しく寝ていた方が良いだろうに」

「誰が叫ばせたんだ誰が!!後!テメエは一体何もんだ!!」

『俺の中の「シヤラップ!!!」』

そんなコントを繰り返している間に、霧が晴れ、向こうの正体が露わになった。

背丈は俺と同じ位で、制服の上に……あれは、漢服か?を羽織っている。

そして奴の肩に乗っかっているのは、一本の槍。

他にもぞろぞろと出てきたが、俺が一番目を引かれるのは、奴が持っている槍だ。

よくは分からないけど……何やらうすら寒さを感じるやりだ。

体全体で拒絶してするような反応から察するに、聖槍だろうけど……。

『おいアザゼル……』

「ああ、間違いねえ……。よりにもよって、奴等の手にあるとは」

……何だドライグ。あの槍のこと知ってるのか?

「全員、あの男の槍には注意しろ——

トウルー・ロンギヌスあの槍は黄昏の聖槍。

全ての神滅具の大本と

も言える存在だ」

『あのイエスを貫いてアーツ!な目に遭わせた、絶対の槍だ』

い、イエスを貫いた槍!?

「……つてか、その説明もうちよいどうにかならなかつたのかよ」

『分かりやすいだろ?』

変な方向に曲解しちまうわ!!

「……あれが、聖槍」

すると、アーシアの目が虚ろになり、ふらふらと向こうへと歩いていく!

だが寸前で、先生がアーシアの目を塞いだ。

「信仰心の強い奴はあの槍を見るな。下手をすれば心が持たかちまう。あれは聖遺

物——レリックの一つだ」

レリック……確か、十字架とかもその一つなんだっけか?

「……つと、自己紹介がまだだったね。俺は曹操。英雄派のリーダーを務めさせてもらつてる」

「……名前からして、ご先祖様はあの三国志とかで有名な曹操か?」

「ああ」

まあ、そんな事はどうでも良い。

「正直に答えろ。九重のお母さんを拐つたのはお前らか?」

「そうだよ」

「……なら言わせてもらおう。八坂さんを返して、即刻退去を願う」

「それは無理な相談だ。彼女には、我々の実験に付き合ってもらう必要がある」

「お前らの都合で、九重の希望を傷つけさせてたまるか」

「……それともう一つ」

「？」

曹操が指を鳴らすと、陰から新しい増援——グールが姿を現した！

「スポンサー様からの依頼だね。君を倒さなければならぬんだよ」

「……まさかっ」

「——そう、ワイズマンからのね」

「……こいつ等、フアントムと繋がってたのか!!」

『そうか……だから京都に奴らがいた訳だ』

「だけど、それ以外にも、俺は個人的に君に興味がある。禁手の更に上の領域を開拓した

君と、戦ってみたかったのさ」

「……生憎だけど、俺は男には興味ないんでね」

「俺だって男に性的興奮を覚えるものか!!」

「別にホモとか言ってるよ!!」



何だこいつ、情緒不安定なタイプか!?

「……まあいい。お前には聞きたい事が山ほどある。力づくでも聞かせてもらおうか」  
先生が構えたのと同じタイミングで、俺達も臨戦態勢に入る!

それと同時に、曹操の横に眼鏡をかけた男と、小さな子供が立った。

「レオナルド、悪魔用のアンチモンスターを頼む。ゲオルクはレオナルドの力を引き上げてやってくれ」

「了解した」

ゲオルクと呼ばれた眼鏡の青年が頷き、男の子の周囲に魔法陣を展開する。  
すると、周囲に不気味な影が現れて広がっていく。

それは渡月橋全域を黒く染めたと思うと、最終的にはその三倍以上にも膨れ上がった。  
た。

その影が盛り上がり、周りにいたグールを取り込んでいく事で更に形を為していく――  
腕、足、頭が形成されていき、目玉が生まれ、口が大きく避けた。

その数は五百はいる。

『ギューー!』

『ゴギャー!』

『ギヤツ!』

……化けモンのバーゲンセールかよ。

「……ちつ、魔獣アナイレインジョン・メーカー創造まであるのかよ!」

先生は苦虫を噛み潰したような表情になる。

「……もしかして、あの子の神器って」

「察しの通りだ。名前の通り、あらゆる魔獣を生む——と言うよりは、創り出す、と

言った方が正しいか」

「……生命を創造してるって事ですか?」

「ああ。使い方によっちゃ、曹操の聖槍よりよっぽど危険だ」

……って事は。

「もしかしてハイパーゼットンとかも創り出せたりしちゃうんすか?」

「……ああ、そうだよ!下手すりゃスペースビーストだろうがグリーンザみたいなマジキ

チスペックの化けモンだろうが魔王獣だろうが創れんだよ!!」

「なんすかそれ!?!もうそうなつたら光の戦士たち呼ぶしかないじゃないっすか!!」

俺が叫ぶと、曹操は小さく笑った。

「安心しなよ。この子はまだ成長段階だ。頑張ってもタイラントとかだよ」

「タイラントでも十分じゃねーか!!」

『そうだそうだ! ゴファイ隊長呼べ!』

『一番最初に負けたゴファイの事なんか良いよ』

隊長デイスってんじやねえ!!

「……それに、レオナルドは相手の弱点を突く魔獣——所謂、アンチモンスターの創造が得意なんですよ。そして、ワイズマンから得たファントムの情報も得ている以上、ファントムをも産み出せる」

「……つまり、一人サバトって訳か。けどその様子じゃ、神を殺せる魔獣は創れないんだな?」

正解だったのか、曹操は何も答えない。

だが、その代わりに槍の切っ先を此方に向けた。

「——神はこの槍で屠るさ」

それが、開戦の狼煙となった。

# MAGIC96 『投げられた賽』

「拡散する龍波動！」

『ごああああ!!』

手始めに俺はドラゴンショットを拡散させて、周りのアンチモンスターとグールを消し飛ばす！

僅かに生き残った連中は――

「消し飛びなさいっ!!」

グレイフィアが消し飛ばす！

その煙を掻い潜ってやって来るモンスターを、更にぶっ飛ばす！

「肉弾戦も噂以上の程だね、赤龍帝」

「ん？」

と、粗方倒したであろうと思っていた俺の前に、腰に何本もの剣を納刀している白髪の男が現れた。

「…お前は誰だ、って言う前によ。何かやり辛いんだよな」

「と言うと?」

「今までの奴等は俺達を見下していた連中が多かったからさ。けどお前らは違う。こっちの対策は万全にしてるけど、自分達の策に胡坐を搔く事だつてしてない。油断してない奴ほど、手強いって言うだろ?」

俺がそう尋ねると、男はクスリと笑った。

「君達を見下したりなんてしないよ。君達実力者を見下せるのは最上位クラスの強さを持つ者達か、本当に愚かな連中さ。そして…シャルバ達は明らかに後者。——俺達は君達を危険な存在だと常に認識しているさ。ヴァーリもね」

「……本当にやり辛いな」

油断してくれるならそれはそれで有り難かったけど……こうも言われると、絶対に油断なんてしないだろうな。

俺が身構えていると、男は剣を抜いた。

「そう言えば自己紹介がまだだったね。俺は英雄シグルドの末裔、ジーク。仲間からはジークフリートって呼ばれてる。どっちでも呼びやすい方で構わないよ」

「シドの末裔がドラゴンねえ……」

「うん。別に某錠前ディーラーも某カードゲームの竜皇は関係ないからね?」

『って事は最近アルティメットに転生したとか!』

「僕はアルティメットでもないし、スピリットでもないよ」

『なら要塞と合体した転召持ちの……』

「聖皇ジークフリーデンでもないよ。君達のボケの引き出しは一体幾つあるんだい？」

『今更数え切れるか!!』

「そこ言い切るのかい!?!」

と、俺達が会話のドツジボールを繰り広げていると、ゼノヴィアが何処か納得した顔つきになった。

「何処かで見えた事ある顔だとは思ってはいたが……やはりか」

「ええ。あの腰の魔剣……間違いはないわ」

イリナもゼノヴィアの言葉に頷いていた。

「知ってるのか?」

「あの男は私達の元同胞、悪魔祓いだ。カトリック、プロテスタント、正教会、それら全ての機関で最高峰に位置づけられていた男。腰に帯剣した魔剣を扱う事から、『魔<sup>カオス・エツジ</sup>帝

ジーク』——そう呼ばれていたんだ」

「……教会って言うよりは寧ろ」

『悪魔とかにいそうな二つ名だな』

「……まあ、そう思うのが普通だよ。僕だって結構複雑だったし」

此奴も此奴で苦勞してんだな

「けど今は、教会にとつては裏切り者——になるね」

そう言つてジークフリートは魔劍の一振りを構えた。

……魔劍なのは分かるが、何だ？この薄ら寒さは。

『……おいおい。随分御大層な劍を持つてやがるな』

ドライグ、あの劍を知つてるのか？

『……ああ』

「……は僕が行くよ。イツセイ君」

後ろからやつて来た木場はそう言うと、一気にスピードを上げてジークフリートに斬りかかった！

対するジークフリートは、そのスピードに合わせて難なく防いだ！

「この劍は魔劍帝・グラム。君の聖魔劍だろうと、簡単に防げる」

「……魔劍の帝王。ならば、君自身に刃を当てるまでっ！」

そう言つて一旦ジークフリートから離れた木場は、虚空から劍を生み出し奴に向けて撃つた！

ジークフリートはそれを消し飛ばしながら、木場が予め施していたマーキングから睨

く魔剣を躲し尚且つ、高速で肉薄する木場と鏢迫り合いを行うう！

あの野郎、木場のスピードに余裕で付いて来てやがる！

「つはは！流石は聖魔剣の木場祐斗、素晴らしい技量だ！」

「よく言うよ！本気を出さずにっ!!」

……木場の言うとおり、向こうにはまだ余力がありそうだ。

と思っていたら、先生が戦っていた方角から爆音が轟いた！

「ちっ、流石に一筋縄じゃ行かぬーか……………」

「いやはや、それは此方の台詞ですよ」

先生の鎧には傷が幾つも入っているのに対し、曹操の方は服が汚れている程度だった。

「いやー、それにしても貴方方の成長スピードは異常だ。以前までに収集した戦闘データがもう役に立たないとは。これは修行のやり直しが必要だね」

「修行するんだな、テロリストでも」

「当然。いくら超常の力を持っているとは言え、元は弱っちい人間なんでね」

——だからやり辛いんだよ。



「曹操、一つ聞かせてもらおう。お前ら英雄派の目的は何だ？」

「なあに、俺達の活動理由はシンプルだ。俺達は『人間』としてどこまでやれるのか、それが知りたい。そこに挑戦したいんだ。それに悪魔、堕天使、ドラゴン、その他諸々。超常の存在を倒すのはいつだって人間だ。——いや、人間でなければならぬんだよ」

「英雄になるつもりか？……って、英雄の子孫だったな」

「弱つちい人間のささやかな挑戦だ。蒼天のもと、人間のままだどこまでいけるか、やってみたくなっただけさ」

「どうやら本気らしい。」

「でも……………」

「何だよそれ」

俺が静かに口にした言葉。

それは小さかったけど、この場の全員の耳に届いたらしく、喧騒が打って変わって静かになった。

「?」という意味かな、赤龍帝」

「……………最初から堂々と仕掛けずに、テロ行為なんて回りくどいやり方で挑戦してる時点

で、英雄じゃねーんじゃねえのか？ そういうの」

「……言ってくれるね」

「何だよ凶星か？ お前らのご先祖様は確かに英雄だ……けどな！ テロ行為を平然と行い、剩れ無関係な九重の母親まで拉致して——希望を奪っていくのと同じ事やってるお前らが、同じ英雄になれると思ってるんじゃ、つくしよん!!!」

——瞬間、空気が凍り付いた。

『相棒……どうすんだよ、この空気』

「し、仕方ねーだろ!?! クシヤミなんてコントロール出来るわけ……へつくしよん!!」

「……では君は、英雄とは何かを知っているのか？」

「知らねーよ。俺は英雄になりたいなんて、思ったことはないからな。——けどな」

刹那、俺の周囲に赤と紫のオーラが立ち込める。

「俺はお前らを英雄なんて思わねえって事だけだ」

俺の言葉に英雄派の奴らは殺気を強くする。

曹操だけは俺の様子を見て少し考え込むような表情をしていたが、ゆっくりと槍の

切っ先を俺に向けた。

「イツセー、お前……………」

先生が何か言いかけたその時、俺達の間魔法陣が現れた。

見た事ない魔法陣だな……………」

そして俺達の眼前に現れたのは魔法使いの格好をした、外国の女の子だった。

恰好は普通の学生服だけど……………頭には魔法使いのようなとんがり帽子を被っていた。

何か最近見た事あるようなフォルム——何だ、これがデジャヴか。

「はじめまして。私はルフエイ。ルフエイ・ペンドラゴンです。ヴァーリチームに属する魔法使いです。以後、お見知りおきを」

人知れず頭を抱える俺をよそに、女の子は頭を下げた後、ニッコリと笑顔で自己紹介をした……………って、ヴァーリの仲間かよ!?

ひえー、中学生ぐらいなのに!

……………って、ペンドラゴン?

まさかこの子…。

「…お前さん、アーサーの親類か？」

「アーサーは私のお兄様です！何時も兄がお世話になっております、アザゼル総督殿」  
「やっぱりアーサーの妹か！」

よく見たら面影があるわ！

と思つてみると、ルフエイはキラキラとした目でこちらに走り寄つてきた。

「あ、あの！兵藤一誠さん、ですか!?!」

「え、ああ。そうだけど」

俺が頷くと、ルフエイは懐から色紙を取り出してきた。

「私、『魔法龍帝ウィザードラゴン』の大ファンなんです！宜しければサインをお願いします！あ、後握手と、写真も良いですか!?!」

「え、あ、はい」

呆気にと取られつつ、俺は勢いに押されるがままサインを書く。

日本語で良いよな？この子は人間っぽいし……。

サインを渡した後、俺は一緒に写真を撮り、握手をした。

「はわあ……！一生分の感動です！私、もうこの手を洗いません!!」

「いや、飯食う時は洗った方が良くぞ?」

『そこかよ』

俺は相棒二人の突つ込みを無視して、ルフエイに尋ねた。

「で、君は何しにここに？」

「はい！私はここにサインを貰いに……」

「あ？」

「……ではなくて、ヴァーリ様からの伝言を伝えにやつて参りました！」

伝言？

訝しげに思う俺の横で、ルフエイは変わらず笑顔で曹操に言い放った。

「それでは伝えますね！『邪魔だけはするなと言ったはずだ、この性槍野郎』——だそ

うです！うちのチームに監視者を送った罰ですよ！」

「や、最後のそれはホントに言ったのかい!？」

ドウウウウウウウンツ！

ルフエイの発言と曹操の突つ込みの後に大きく揺れる大地！

すると大地が隆起し、地中から岩石に包まれた巨人が姿を現した！

な、何?! 岩石の巨兵か!?

「ゴクマゴクか!」

先生が叫ぶ!

「はい! 私達のチームのパワーキャラ、ゴクマゴクのゴツくんです!」

ゴツくん!?! 何処にそんなユーモラスな要素が!?

寧ろゴツさんと呼ぶべきだろ!

『年端もいかぬ少女がゴツクン………なんか背德的じゃね?』

「ドラゴン此奴を黙らせろ!!…で、先生!あの巨人は一体!?!」

「あれはゴクマゴク。次元の狭間に放置されたゴーレムのものだ。古の神が量産した破壊兵器らしいが、全てが機能停止だったはずだ」

ガツツリ起動してるじゃん!

ちゃんと機能停止しとけよ古の神タイ!……へつくしよん!

「いやつはあ!まさか実物が動くのを生で見れるたあ……心が躍るな!!」

踊らないで!

ゴクマゴクのパンチでアンチモンスターやファントムの類はあつという間に吹っ飛び、渡月橋もあつさり壊れた!

「はっはっは!ヴァーリは相当お冠だな!……まあ、彼が借りていたエロゲを更に借り

たまま返してないし、当然かな？」

「おい!! ヴァーリが借りてたエロゲって俺のдар!! 返せこの性槍魔人!!」

「君までそう言うのか!」

曹操は後方に飛びながらゴクマゴクに光の槍伸ばして切っ先を突き刺した!

ゴクマゴクの巨体がその一撃で体勢を崩して、その場に倒れる!

「なんですかなんですかあ! どったんばったんおおさわぎしちやつてえ!!」

と、その時、呂律の回っていかない大声が辺りに響いた。

「って、この声は!」

「ひとがきもちよくねてるってのにい! どこのばかれふか!?! こんなにさわぎやがってえ!!」

——ロスヴァイセさん!?

「ちよ、先生! あの人酔っぱらってるんすけど!?! 何があったんすか?!」

「あー、ちよつとやけ酒をな……」

何を昼間から飲んでんだよ!!

「……いいれふよ、そつちがそのきならあ！フルバーストじゃあああああ！！！！」

ズドドドドドドドドオオオオオツン!!!

おおい！いきなりブツパかよ！

何考えてんだ!?

炎、光、水、雷などのあらゆる魔法攻撃が町を丸ごとぶつ飛ばした！

あーあ、家屋とか跡形もないぞ!!

……あ、向こうは眼鏡の発生させた霧で防いでやがる。

「おさけはどこじやあああああ!!?」

「うるせえええええ!!」

《ハイドロ・プリーズ》

俺は酔っぱらいに水を浴びせる！

もう黙ってて！

「ちよつと騒がしすぎるな——まあ良いか。祭りはこう派手でないとな！諸君！俺達は今夜、この京都と九尾の御大将を使い、二条城で大きな実験をする！ぜひとも静止



するためにこの祭りに参加してくれ！」

霧が辺り一帯に立ち込め、俺達をも覆っていく。

そして視界が全部、霧に包まれた。

——

霧が晴れると、観光客で溢れた渡月橋の前に俺達は立っていた。

周囲の人達は何事も無かったように観光を楽しんでいる。

ルフエイとゴグマゴグの姿はない。

霧が晴れたと同時に戻ったのだろう。

「……祭りだど？ ふざけやがって……！」

先生は怒りを隠さずに電柱を殴った。

「……母上は、何もしていないのに……どうしてっ」

俺は震える九重の頭を撫でる。

英雄派——お前らの野望、絶対に止めてやる。

「……良い具合だ」

そうやって先程の戦闘を、魔法陣で眺める白い魔法使い。

その中に映るイツセーの瞳は——その身に宿すドラゴンの如く、赤く染まっていた。

## MAGIC97 『作戦会議』

英雄派の宣戦布告の後、皆は一応当初の目的である観光を終えてホテルへと戻って来た。

俺？観光する暇もなく即転移でしたよ。

今この時間は生徒全員の入浴タイムだった筈。

この後の予定としては俺の宿泊部屋にて今後に向けての作戦会議だ。

『……相棒、あまり無茶はするなよ』

……大丈夫だつ、ゲホッ！

心なしか悪寒を感じるのが増えてきてるな………やつぱ無理しすぎたかな？

『そりゃ身重なのにあれだけ激しく動いたらな』

『自分の体くらいいちゃんと考慮したらどうだ』

考慮したくても連中が一切手え抜いてくれねーから無茶してんだろ？

……それに、何の罪もない母娘が苦しんでるんだ。

大人しく寝てちや、希望の魔法使いの名が泣くぜ。

「……なあ、ドラゴン」

『…何だ』

俺は昼間から気になってた事を聞いてみた。

「あいつが言つてた主も期待してる——これって、どういう意味なんだろう」

『………貴様が知らぬ事を、俺が知る由もあるまい』

……そりゃ、そうだな。

『答えの出ない物事を考えていても仕方あるまい。……今は目の前の希望を守る。それが貴様の本懐の筈だ。嘗て古の魔法使いにもそう言つたであろう——明日より、今だと』

——そう、だな。

分からない事で悩んでたって仕方がないよな！

サンキュー、ドラゴン！

『フン………』

『おいおいおいおい！なに俺をほっぽって良い雰囲気作ってるんだよお！』

で、時刻は深夜。

シトリー眷属もこの部屋へと来ていた。

ロスヴァイセさんは……：……昼間の影響か、顔が真っ青だ。  
とはいえ理由は他にもあると思う。

……：……ロスヴァイセさん、グレイフィアに怒られたんだよなあ。

序でに言えばアザゼル先生も。

そのせいか、先生は頭にたん瘤を作っている。

まあ、生徒ほつたらかしにして飲酒してたつて聞くし、自業自得だよな。

「……今から作戦を伝える。二条城と京都駅を中心に非常警戒態勢を敷いた。京都で活動していた三大勢力の関係者および妖怪達を総動員して怪しい輩を探っている。今のところ、これといった報告は上がってきてはいないが、京都の各地から不穏な気の流れが二条城に集まってきたのは計測できている。奴らがこの場にまだいるのは明白

「だわな」

「…不穏な気?」

アーシアがそう聞いた。

「ああ。そもそも京都つてのは陰陽道、風水に基づいて作られた巨大な術式都市だからな。それゆえに各所にパワースポットを持つ。伏見稲荷とかもそうだな。おまえ達も観光でいくつか回ったはずだ。他にも挙げればキリがないほどの力場が京都には存在するが…まあそれは今置いておこう。それらが現在、乱れて二条城の方にパワーを流し始めているんだ」

だから妙な気配が漂っているのか……。

「な、何か起こるんすか?」

「それはまだ分からん。まあロクでも無い事が起きるのは確かだ。何せ向こうには九尾の御大将がいる訳だからな……先ずはシトリー眷属。お前達は京都駅周辺、そしてこのホテルの防衛担当だ。連中はここを狙ってこないって保証はないからな。有事の際は事に当たってもらう」

シトリー眷属が防衛……って事は。

「グレモリー眷属、イツセー、グレイファイア…そして立神と匙。お前達はオフエンスだ。」

司令塔は一応はイツセーだが、何が起こるか分からん。イツセーが体調を崩した際はグレイファイアが司令塔だ……イツセー、体調はどうだ？」

「…大丈夫です」

……………恐らく、今の俺は万全とは程遠い。

節々だつて鈍い痛みが襲ってきてるし、僅かに息も上がってる……でも、やれない訳じゃない。

何とか誤魔化せる筈………グレイファイアはちよい怪しいけど。

「お、俺もですか？」

「ああ。お前の竜王形態の力は使える………ヴリトラの黒炎で連中の動きを縛り、力を奪う——頼むぞ」

「りよ、了解です」

「何だ、今更ビビってるのか？」

俺は匙の緊張を解す為に軽口で聞く。

「び、ビビってる訳ねーだろ!!? こうなったら英雄派だろうがファントムだろうが何でも縛ってやるよー」

「じゃファントム頼むわ」

「あ?!!」

「冗談だっつーの」

よし、この様子なら大丈夫だろ。

「後……これは良くない知らせなんだが、今回支給されたフェニックスの涙は三つだけだ」

「三つって……少なくともいつすか?」

「これに關しちゃどうしようもない。何せ今のご時世テロリストが跋扈してるせいで、涙の需要が上がってるのさ。少なくとも、各勢力への補給すらままならないぐらいにはな。これでも生産元のフェニックス家は急ピッチで仕入れてくれたんだ」

『要はほぼ無傷でクリアしろって事か。コンティニュー出来ればいいのにねえ』

「誰もが新檀黎斗だったらこの世界オワタルトじゃねーか」

「バグヴァイザーも需要爆上がりだな……って!また例によつて話脱線してるう!!」

おっと、脱線しちゃった。

「その代わりと言っちゃなんだが今回はプロフェッショナルも来てくれる……テロリスト専門の助っ人がな」

「へえ……」

『私以外のプロフェッショナルだと……認めてなるものかああ!!』

「お前何時まで引つ張る気だ!!」



『ヴァハハハハ!!』

「……兎に角！作戦としては以上だ。各員一時間後には集合だ——全員死ぬなよ？  
帰るまでが修学旅行だからな！」

『はい！』

先生の言葉で、一致団結した——

『じゃあ相棒修学旅行で来てないから死んでも仕方ないってことだな』

「おーし、ドライグ表出る……へっくしょん！」

と違ってただけどなあ……。

—————

さて、作戦会議が終わって全員が出払った事で、部屋には俺とグレイファイアだけになる。

「……イツセー」

「ん？どうしたの、グレイファイア」

「無理、してるんじゃない？」

「…まさかあ」

「嘘。何時もより反応が遅いわ。それに…少し呼吸が乱れてる」

……………思ってた以上に、俺の恋人は鋭かった。

「…敵わないな、グレイファイアには。——でも、大丈夫だよ」

「でもっ」

俺は人差し指で彼女が言おうとしている事を塞ぐ。

「それ以上は、言わないで。……………あんなに小さい女の子が、一生懸命に頼んできたん

だ…九重には、俺と同じ思いは味わってほしくないから」

それに、と俺は続ける。

「俺は皆を…グレイファイアを置いて死んだりはしないよ。だから、グレイファイア」

「……………あなたの背中は、私が守る。そんなの、言われなくたって、守って見せるから」

「…本当に、敵わないや」

これで俺は、心置きなく戦える。

## MAGIC98 『開戦』

——約束の時間。

俺達はホテルを出て、京都駅のバスへと乗っている。

「イツセーさん、無茶だけはしないでくださいね」

「おう、心配すんなって」

俺は心配そうなアーシアの頭を撫でる。

「で、ゼノヴィア。先生に聞いたんだけど、今デュランダルが手元に無いんだよな？」

「ああ。教会の方へと持って行っててね」

「そっか。んじゃこれ」

俺はゼノヴィアにアスカロンを手渡す。

「デュランダル程の破壊力は出せねーけどな」

「だ、だが……良いのか？」

「いーって！……ただし、あんまり無茶なことはすんなよ？」

「……それはイツセーにも言える事だと思うのだが、分かったよ」

はは、そりやそうだ。

「それにこんな所で死んでしまつては子作りどころではないからね」

「お前なあ……ごほっ！」

「い、イツセー君大丈夫!？」

「だ、大丈夫……いてえからイリナ」

思わず咳き込んだ俺の背中を叩くイリナを制す。

つて言うか結構ガチで叩かれたし！

と、俺の背中に何かが飛び乗ってきた！

「我也行くぞ！イツセー！」

——九重！

「お、お前！」

「母上が苦しんでると言うのに、我だけ大人しくなど出来んのじゃ！」

「……………九重。良いか」

俺は背中に乗ってきた九重を下して彼女に言い聞かせる。

「これは遠足じゃないんだ。これから向かう場所は、お前がお姫様とか、子供とか関係なく攻撃が飛んでくる……半端な気持ちじゃ、死ぬぞ。……………それでも行くのか？」

「……私の決意は誰にも覆せんのじゃ！母上を助けるためなら、この九重！幾らでも傷つく覚悟じゃ！」

「……………」

九重は俺の目を力強く見据える——本気、だな。

「九重様！いけま——」

「…………グレイフィアさん。連れて行こう」

『!?!』

俺は反対しようとしたグレイフィアを制する。

それに対し、全員驚いたように固まった。

「おいイツセー！お前本気かよ!?!」

「ああ。九重だつて、生半可な気持ちで言ってる訳じゃない。…………大丈夫、俺が絶対守るから。——九重！」

「は、はい!?!」

「俺かグレイフィアさんから決して離れない、そして勝手な行動はしない!…………約束できるか?」

「うむ!?!」

俺は頷いた九重を肩に担ぐ。

「マジかよ……」

「ここは九重の思いを汲んでやってくれ……それに」

俺は足元を見る。

すると足元には——黒い霧が立ち込めていた。

直後、俺達に襲い掛かる生温い感触。

「向こうからお出迎えしてくれるなんて……皆、油断するなよ」

その直後、俺達を黒い霧が包んだ。

——

霧が晴れると、俺と九重、グレイフィアは京都駅の……地下鉄？のホームにいた。皆の気配は存在してるが周りにはいない……って事は、分断されたか。

……いきなり転移って、やっぱ神滅具ってロクなのがないな。

『それ程でもないぜ！』

「褒めてねーよバカ」

「イツセー、ここは……」

「向こうの能力で転移させられたんだ。…奴等の作った空間にね」

そう教えると、九重は感心したように唸る。

どうするか考えていると、俺のケータイが鳴った。

「木場か？」

『うん、今僕とロスヴァイセさんと京都御所にいるよ。イツセー君は？』

「地下鉄京都駅のホーム。九重とグレイフィア…さんと一緒だ」

『…イツセー君。別に呼び捨てでも良いんじゃないかな』

「うるせえ！まだ恥ずかしいんだよ！」

俺は小声で茶化してきた木場に怒鳴る！

「イツセー様、今地図で確認しましたが……このフィールド、かなり広大に作られているようです」

グレイフィアが広げた地図を覗き込むと……確かに、俺達と木場達がいる場所はかなり離れていた。

「うーん……地図上の距離を見た感じ、二条城を中心にして作ったっぽいな」

『それもかなり広大にね』

『相棒。これほど広大だと、早めに合流しないとヤバいぞ』

「そうだな……合流地点は二条城で良いか？」

『OKだよ。そうだ、他の人達への連絡はどうする？僕が取ろうかい？』

「いや、俺が取ってみる。木場は先生に連絡してみてくれ」

『分かったよ』

「グレイファイアさん。一応魔法陣での連絡もしてもらえますか？」

「畏まりました」

アーシア達教会トリオは運良く三人一緒だったらしく、匙は吼介と一緒にとの事だ。

「……先生には連絡が取れなかったらしい。

「イツセー様。魔法陣からの連絡にも応答がありません」

「フィールド内なら連絡は取り合えるけど、外への連絡は遮断されてる、か……」

「参ったな、こりゃ。」

外からの援軍は期待出来そうにもないな……ま、皆一応無事だったんだ。

「兎に角行きましょう」

「はい」

「うむ！」



そうして先に進もうとして——俺は歩みを止めた。

怪訝そうにする九重とは異なり、グレイフィアは察したらしく、臨戦態勢を取った。

「……イツセー？」

「そこに隠れてる奴、出て来いよ」

俺が物陰に語り掛けると、そこから一人の男が出てきた。

サングラス、真つ黒なコート装備の男……伊坂？

『えーつと、どっちの伊坂だ？』

「孔雀の方の伊坂……は兎も角、何か用か？」

「……俺を覚えてるか？」

そう語ってくる男に対し、俺は何となく思い当たる人物がいた。

「……何時ぞやの影使いか？」

「嬉しいね、高名な赤龍帝殿に覚えていただけなんて」

「お、おう」

正直うる覚えだったなんて言えねえな……。

「で、用件は？ 新手的勧誘ならお断りだぜ？」

「ははっ、分かってるくせに……この間の俺とは違うところ、見せてやるよ」

その瞬間、男から発せられる波動が力強くなっていくのを感じた。

『相棒……』

「ああ、分かっているよ」

そうこうしている間に、あちこちの影が奴へと集まっていく。

「——  
バランズ・ブレイク  
禁手」

そう低く呟くと、奴に集まっていた影が鎧のように纏わりつく。

「これが『闇夜の大盾』の禁手——『ナイト・リフレクション・デス・クロス闇夜の獣皮』だ。真なる影の力……と

くとお見せしよう」

「そりゃ怖い……ねっ!」

俺は挨拶代わりに何の変哲もないドラゴンショットを見舞う——が、それらは奴から伸びた影に吸収されてしまった。

「ん?!」

「はっ、ボーつとしてて良いのか?!」

男がそう言うと、ドーム状に伸びた影が俺達を覆い、その影から俺が先ほど撃ったドラゴンショットが飛んできた!

「グレイファイア!」

「はい!」

九重を抱えて、俺とグレイフィアはその場から飛ぶ！

何とかドラゴンショットは躲したが、攻撃を転移させるのが更に発展されてるところを見るに、おそらく物理的干渉は無効化される、かあ……………。

どうするか考えていると、突如として地面が大きく揺れ始めた！

「っ、下からもか！」

その場から素早く離れると、土中から茶色いヒトデのような怪物が出てきた！

『やあーっと思っけましたよ、指輪の魔法使い！』

「フアントム……………って、お前は俺が前に倒したはずだろ!？」

物覚えの悪い俺でも覚えてる！

此奴は俺がリアス達と出会う前に倒したフアントムだ！

だが向こうは怪訝そうに手にしたトライデントをこちらに向ける。

『はあ？俺はアンタに倒された覚えなんてないんですけど?』

「…別固体か？まあ良いか。つ兔に角！」

俺は召喚用の魔法陣を発動する！

魔法陣の中央から飛び出すのは、美しい銀の体毛に包まれた、二匹の狼！

「ハテイ、スコル！九重を守れ!!近づく敵は容赦なく反撃しろ！」

『『ワンツ!!』』

「…『神喰狼』<sup>フェンリル</sup>か。成程、これは非常に厄介だ」

『はっ、フェンリルなんて俺達には関係ないですよーだ！』

と嘯く男を喰りながら睨みつけるハティとスコル。

そんな二匹を尻目に、ファントム——確かノームはまた地中に潜り込んだ！

『はっはあ！』

「くっ、鬱陶しい！」

「そおらあ！」

反撃しようとするが、こちらの攻撃はすべて影に吸収されクーリングオフされる！

それを躲したところに、ノームが地中から攻撃を仕掛けてくる！

「どうしたあ！小さなお姫さんが後ろにいて、満身に攻撃出来ないのかあ!?!」

「つるせえ！……ゴホッ、ゴホッ！」

くっそ、喉が痛てえ……！

禁手を使っても良いけど、この後の事を考えると力は温存しておきたい！

「こんなのはどうかなっ！」

「っ！」

影使いが周囲に伸ばした影から、土中のノームの攻撃が飛んできた！

「はあ！」

間発入れずにグレイフィアがそれを相殺する！

追撃で放たれた攻撃もまた返された——防御は間に合わねえか！

「ふんっ!!」

俺は腕で薙いで掻き消す……………ん？

何だ、この感じ……………。

グレイフィアの攻撃をそのままクーリングオフしたにしては……………威力にムラがある？

『…おいドライグ。もしかしたらさ——』

『……………あり得るな。試すのに丁度良いんじゃないか』

——よしっ、試してみるか！

俺はノームの攻撃を躲しながら、ドラゴンショットに炎を吹きかける。

ブレイジング・ドラゴンショット  
爆炎の龍波動！」

影使い目掛けて炎を伴ったドラゴンショットを放つ！

「——ツ！中々の熱量……………だが、返せないわけじゃない!!」

やはり跳ね返されるが——返って来るのに少し時間がかかってしまっていた。

俺の想像通りに。

……今だ！

俺はドラゴンショットが返ってくるまでに、指輪を嵌める。

「グレイファイア、飛べ！ハテイ、スコル！お前達も、九重を乗せて飛べ!!」  
何をするのか察したグレイファイア達は、瞬時にその場から浮き上がる！

《クエイク・プリーズ》

地面に手を当て、地中から大地を揺らす！

その余波で京都駅のホームが轟音を立てて崩れるが——その衝撃を一番直で浴びたノームが飛び出してきた！

『ぎゃあああああ!!?』

「グレイファイア、ファントムを!!」

俺はたじろいでいる男へ向けて駆け出す！

クーリングオフされたドラゴンショットを掴むと、新たに炎を灯す！

「な、何を——」

「燃え盛る龍波動ツ!!」  
バーニング・ドラゴンショット

先程より激しく燃え盛るドラゴンショットを——直接奴に押し当てる！

「…………ぐ、あああああああああああああああああああああ  
影使いは真面に吸収する事が出来ずに燃え上がる！  
!!!!」

「そのままあ、ぶっ倒れてろ!!!」

奴は俺の吸収形容範囲外の熱量を持つドラゴンショットを食らい、京都駅の瓦礫に叩き付けられた！

……………い、生きてるよな？

『あの影の鎧がなければ即死だったろうぜ』

そ、そっか……………まあこれで邪魔立ては出来ねえだろ。

『しかし相棒。よく気付いたな。奴の吸収能力に形容範囲がある事に』

まあな。

だって俺やヴァーリにだってキャパシティあるんだから、向こうにだってあるはずって思っただ。

まあ一番はグレイファイアの攻撃を返した時だな。

あの時、グレイファイアが放った攻撃にはかなり威力が弱かったんだ。

んでもしかしたらあの一撃が形容範囲外のものだから威力が不安定になったって思っただ。

『だがあの女クラスの一撃を撃ったら直ぐにバテるだろう』

おいおい、俺だって一応成長してるんだぜ？

頑張れば出せるっての……まあ、ちよつち体的にきつかったけどな。

後は……爆炎の龍波動を撃った時に、奴が熱を感じてたから、多分熱までは吸収しきれねーんじやねーかなって。

そこで今度は、爆炎の龍波動の残ってた炎に着火して熱量と威力を上げて、クーリングオフのクーリングオフをしたって訳。

『成程。風邪引いてもちゃんと分析できてる。良い成長ぶりだな』

サンキュー。

俺が背後を振り返ると、そこではハティとスコルに両腕を挽がれたノームに止めを刺すグレイフィアが。

銀色の魔力の奔流に包まれ、爆発四散するノーム……ちよつと気の毒に思っちゃまった。

「凄いのじゃな、イッセーの正妻殿とペットは」

……ははは、九重にもバレてやがる。



だが九重ちゃんや、フェンリルをペット扱いとはどないや？

——まあ良いか。

「急ごう」

俺達は悪魔の翼を広げ、二条城へ向けて飛び出した。

『……………』

その後ろ姿を、ガルムはただ静かに見据えていた。

# MAGIC99 『強襲』

影使いを退けて何とか合流地点へと辿り着いた俺達。

そしてそこでは――

「おぼろしやあああああ………」

近くの電柱で嘔吐しているロスヴァイセさんがいた……。

まだ気持ち悪かったのかよ……よくそんな状態で参加したもんだ。

『お前は人の事言えんだろう』

「ごもつとも………ゴホッ！」

と、ロスヴァイセさんを視界から遠ざけて皆を見るが……大した怪我もなさそうだ。

「皆無事で何よりだ」

「イツセー君もね」

「まーな」

……寒気が感じられるのは黙っておこう、要らぬ心配を与えたくない。

そう思っていると、目の前の巨大な門が開いた！

「やれやれ。熱烈歓迎とは参るぜ」

「全くだね」

俺の皮肉に木場が同意する。

まあ止まっても仕方がない。

俺達は中へと歩を進めた。

———

中を進んで暫くすると、幾つかの気配を感じた。

「やあ、待ってたよ」

———  
曹操！

「禁手使いの刺客達を倒したか。……俺達の中で下位から中堅の使い手でも禁手使いに変わりはないが……やはり君達の実力は驚異だね」

「そりやどーも。……ホントーに熱烈歓迎だね」

辺りを見渡すと、隠れていた構成員が姿を現した。

「いや、熱烈大歓迎さ」

「母上！」

九重が叫んだ先には、着物姿の女性が佇んでいた。

あの人が御大将の九尾……すげえ美人だ。

「母上！九重です、お目覚め下され！」

九重が声を掛けるが、八坂さんは全く反応を返さない。

「貴様ら、母上に何をした！」

「言ったでしょう？少しばかり我々の実験に協力していただくだけですよ、姫君」

「何かツコつけてんだ、このロリコン！」

「俺はロリコンじゃない！——まあ、小さな女と言うのはまだ見ぬ無限の可能性を

秘めているから、嫌いではないけどね」

こ、コイツ………魔性のロリコンだ！

「だからロリコンじゃないっつってんだろ!!」

「いや急にキレんなよ!!」

曹操は息を荒げながら槍の石突きで地面を叩く。

すると——

「う、ううう……うあああああ!!」

八坂さんが悲鳴を上げ、その姿が大きくなっていく!

九つの尻尾も大きくなり、巨大な化け狐そのものとなった八坂さんは天に向かい吠える!

だが、その瞳には生気がない。

この状態では、説得は無理か……?」

「曹操!こんな疑似空間を使い、更には九尾の御大将を利用して、何を企んでやがる!」  
「……京都はその存在が強力な気脈で包まれた謂わば術式発生装置だ。各地の名所と呼ばれるパワースポットがそれぞれ霊力・妖力・魔力に富んだ、ね。この都市を生んだ古き陰陽師達が都そのものを巨大な『力』としようとした名残だね。……この疑似空間は京都から限りなく遠い次元の狭間に存在している。本来の京都から溢れる気脈の力もここへと流れ込んでいる。その力と、龍王クラスの存在である九尾の狐を使い——  
——グレートレッドを呼び寄せる」

あの馬鹿デカイドラゴンを呼ぶってか!?

「基本的に無害なドラゴンであるが……俺達のボスにとっては邪魔でしかないらしい」

「オーフィス……奴の願いか。その為に呼び寄せたグレートレッドを倒すってか?」

「おいおい、それは無理ゲーだね。君の目的であるワイズマンですら、グレートレッドに手を出すつもりは無いと言うのに。とは言え、その事は捕らえてから考えるよ。まあ一つは『龍喰者』<sup>ドラゴン・イーター</sup>が何れだけ影響を及ぼすのか……それぐらいかな?今のところは」

ドラゴン・イーター?

ドライグ、知ってるか?

『いや、初めて聞く』

「……まあ、何でも良いや。碌でもない事になるのは確かだからな。お前達の計画は、ここで阻止させてもらおうぜ」

「言うと思ったよ。でも兵藤一誠」

曹操は笑むと、槍の切っ先を俺の背後へと向ける。

”君”の敵は、俺達だけじゃない」

「……?」

君、を妙に強調した言い方に、俺は首を捻る。

が、その時——背後から火炎弾が迫ってきた!!

「散開だ!!!」

《ディフェンド・プリーズ》

俺が全員に言うのと、その場から離れる!

予想通り、俺へと放たれたそれを寸での所で防ぐ!

だが——

『相棒!』

「っ!!」

俺の足に、影から現れた幾重もの蛇が絡み付いていた!

蛇達が妖しく輝くと、俺の両足が石でコーティングされた!

「何だっつてんだ!」

「言っつたろう?——スポンサーからのお達しがあるって」

「なっ——ぐあー!」

動けない俺へと、再び火炎弾が浴びせられた!

何とか寸前で魔力を体にコーティングしたが、いつてえ!

『さあウィザードよ、我が主を満足させよ』

『……………ここでお前を殺す、指輪の魔法使い!』

現れたのは、6つの獣の頭を持つファントムと、女性らしさを残す体つきに、頭部に蛇が蠢くファントム……………!

「ガルム、メデューサ……………!」

「君の相手は、俺とこのお二方だよ」

見渡せば、木場とゼノヴィアはジークフリート、ロスヴァイセさんは大柄の男、イリナは女と相対していた……………。

俺の側にはグレイフィアとハティ、スコル。

向こうは上級ファントム二人と、悪魔の俺達にとっては天敵の聖槍使い……………

「グレイフィア、無茶はしないでくれよ……………」

「……………イツセー様も、ですよ」



これは、無事に乗り切れそうもないな……。

# MAGIC100 『英雄VS英雄』

先ずは先手必勝とばかりに、曹操が持つ聖槍から光の矢が幾重にも放たれ、俺は横に飛んで回避する！

「つたく、一撃一撃が致命傷だったのに、遠慮なしとはな……！」

「お喋りしている余裕があるのかな？」

「！」

目の前の曹操を睨んでいると、俺は目の端で怪しい光を捉えた。

見れば、メデューサが杖の先に光を集めている——が、発射される寸前でグレイ

ファイアの横やりが入った！

「イツセー様はやらせません」

『ちっ、小癩な……！』

「サンキュー……あぶねっ!!」

《ディフェンド・プリーズ》

グレイファイアに礼を言ったのも束の間、今度は無数の火炎弾！

全て防ぎきると、俺の眼前にはガラム!

繰り出された拳を受け止め、俺達は睨み合う!

『ほお、流石はウィザード。体調が優れなくとも戦闘力は申し分なしか』

「風邪だつて分かつてんならもうちよい加減してくんねーかな……ッ? 爆裂の龍波動  
!!」

『っ!!』

向こうの拳を包んでいた掌にドラゴンシヨットを生成し、爆破!

後方に飛んで様子を窺うが、ガラムはノーダメージだった……ま、こんなんでも倒れられちゃ、拍子抜けだけどな。

別の方角から聞こえてくる激しい剣戟!

見れば聖魔剣を構える木場とゼノヴィア……六本の腕を広げるジークフリートがいた………つて!

「腕六本?!」

「彼の神器は、どうやら禁手も変わり種らしいんだ……」

「僕の神器『龍の手』の禁手の亜種——『カヌスエツジ・アスラ・レヴィツジ阿修羅と魔龍の宴』。能力も単純明快さ。腕の数だけ力が増えていくって訳」

「なら……………」

木場が静かに呟いた瞬間、ジークフリートの其々の腕を貫くように剣が咲いた！

「手が付けられなくなる前に切り伏せるだけさ」

「出来るかな？君に」

「いいや、私達の間違いだな」

ゼノヴィアが訂正した瞬間、再び高速の剣戟が巻き起こった！

そして別の方角では、イリナが金髪の子と激闘を繰り広げていた！

「アーメン！」

「へえ、中々の光力の使い手ね！流石はミカエルさんのAってところかしら？」

「私を舐めないでよね、聖女ジャンヌ・ダルク！」

へえ、あの女、ジャンヌ・ダルクの末裔なんだ。

『何だ、銀髪じゃないのか』

『てつきり幼子だと思っていたが……』

「それ違うジャンヌ・ダルクだから！」

突っ込んでる間にイリナの光の鞭でジャンヌの聖剣が弾かれる！

一気に決めようと懐に飛び込むイリナだったが、彼女の手にはまた別の聖剣が！

「っ、どうして！」

「これがお姉さんの神器——聖劍創造。あらゆる聖劍を創り出す能力」

確か木場も同じもんを得てたな………後天的に、だけど。

ジャンヌは木場とジークフリートの剣戟を見て、笑みを深める。

「ジークくんも張り切ってるみたいだし、お姉さんも本気出しちゃおっかな？——禁手♪」

ジャンヌがウインクすると、足元から大量の聖劍が生まれる！

そしてそれは一体の生物の形となっていく………それは、

「ドラゴン!？」

イリナの声に答えるかのように、聖劍で構成されたドラゴンは雄叫びを上げる！

「これがお姉さんの禁手『ステイク・ビクティム・ドラゴン断罪の聖龍』よ。まあ所謂亜種の禁手………さあ、シヨ—

タイムよ!」

「それイツセー君の決め台詞!」

ジャンヌは俺の決め台詞をパクった後、一瞬でイリナの眼前に迫る!

何とか上に飛んで躲したイリナだったが、それを読んでいたかのように聖劍の龍が迫る!

「イリナ!」

俺は聖劍の龍に向けてドラゴンショットをぶつけ、イリナへの攻撃を守る!

「ありがとう、イツセー君！」

「気にすんな…ッ!!」

ま、こつちも集中しなきゃな……………!

ガラムの攻撃を防いでいると、後方から爆音が轟いた!

向こうは確か————

「凄まじいタフネス!私の攻撃がこうも効いてないとは……………!」

「くっそ、かてえなコイツ……………!」

「ハツハツハ!いい塩梅の魔術攻撃だが、火力が足りてねえな!!酔っぱらいの姉ちゃん

!!!古の魔法使い!!」

「余計なお世話です!」

ロスヴァイセさんの魔術攻撃、吼介の攻撃をもともせず突っ込むのは……………

「ヘラクレスだよ、兵藤一誠」

「…そ、そうだ!あの、メガシンカしたら戦法が全く変わるあの…………」

「それはヘラクロス」

「よっしゃあ!ロックブラストならぬ、ロックミサイルだぜええ!!」

ヘラクロス…違う、ヘラクレスが光に包まれると、全身から突起物が生えてくる!

「俺の神器、『バリアント・デトネイション巨人の悪戯』の禁手、『デトネイション・マイテイ・コメット超人による悪意の波動』ツ!!おらおらっ、フルバーストだぜええ!!」

ヘラクレスが二人に標準を合わせると、全身の突起が二人めがけて飛び出した!

「み、ミサイル!?!」

「立神君!」

「っ、皆まで言うなって!!」

吼介とロスヴァイセさんはヘラクレスから距離をとる!

恐らくは俺達への被害を防ぐ為だろう。

「ハッハア!!仲間への被害は抑えようってか!?!良いぜ、その案に乗ってやるよ!!」

ヘラクレスは二人めがけてミサイルを放つ!

吼介は神器により強化された腕で全てミサイルを打ち落とし、ロスヴァイセさんは全

て防御する!

「……なんと言う一撃」

「いつてつて!何で出来てんだよあのミサイル!?!」

だけどロスヴァイセさんの銀髪は血で染まっており、吼介は痛そうに両手を擦っていた。

た。

戦車で防御力を上げてるロスヴァイセさんでもあれほどの怪我を負うとはな……。

『隙アリだ』

「っ、があ!!」

と、気を取られていると、ガルムの一撃を暗い壁へと叩き付けられる。

「……くっそ!」

何とか瓦礫を蹴り飛ばして立ち上がるが、痛みはそう簡単には消えてはくれない。

どうするか決めあぐねていると、曹操が槍をクルクル回しながら俺の前に立った。

「中々に手強いね、君達は。もう以前図ったデータが充てにならないとは」

「俺達は一分一秒成長してるんだよ」

「なら作者の更新スピードももう少し早くならないものかな」

「言ってやるなよ!!……わリーが、無駄話をしてる余裕もねえ。一気に決めてやるよ」

「——何?」

曹操が訝しんでいるが、俺は無視して全身に力を籠める。

「行くぜドライブ!」

『まさかこんな形で試験とはな……まあその方が相棒らしい! やってやろうぞ!!』

「——ワイザード・プロモーション魔龍進化!!!」

《Dual Up!!》



………つて、

「ドライグ！この音声違う!!」

『ああ、すまん。けどこの形態があれに似てるから……』

「いいからもう一回行くぞ!!」——<sup>ウィザード・プロモーション</sup>魔龍進化!!!」

《W i z a r d P r o m o t i o n !! W a t e r D r a g o n  
!!!!!!》

直後、俺の体から蒼い閃光が立ち昇った——

# MAGIC101 『魔龍進化』

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!》

籠手より発せられた音声と共に、俺の全身を蒼い光が包んだ。

やがて光が晴れると、そこにいた俺はさつきまでと全く異なる姿となっていた。

「何だ、それは……………」

曹操は目を見開いて此方を見つめる。

そりやそうだろうな。

ウイザード・プロモーション

「魔龍進化——

カラミティ・ウォーター・ビショップ

「厄災の水龍魔導士ツ!!」

さつきまで赤い鎧だったのが全身真っ青に染まってんだからな。

けど、変わったのは鎧の色だけじゃない。

両肩サイドの砲門、両腰と肩の上に載ったキャノン砲、両腕に備わったドラゴンの頭

を分割した砲撃ユニット——戦艦もかくやって程の砲門が備わっているのが、大き

な特徴だ。

「さあ……………ショータイムだっ!!」

《Full Blast Burst!!》

『!?』

俺の雄叫びと共に発せられる音声!

そして各砲門から、英雄派の奴等目掛けて魔力の砲撃が放たれる!

「っ、ぐあああ!!」

「きゃあああ!？」

「ぐああああ!!!」

「っ、ぐうう……………!!」

「……………!!」

ジークフリート、ジャンヌ、ヘラクレスにそれぞれクリーンヒットするが、曹操とゲオルグには防がれた!

ちっ、やっぱりこの程度じゃダメージは与えられないか……………!

俺は背中のスラストを吹かして曹操に急接近!

だがその前に、ガラムが立ちはだかる!

『新しい力……………やはり隠し持っていたか』

「邪魔だっ!!」

『ぬっ……………!』

立ち塞がってきたガラムを両腰のキャノンで吹き飛ばす！

これで阻むもんはねえ!!

「っ、曹操気をつける！尋常でない威力だぞ!!」

「分かっているさ……!」

聖槍を構える曹操だが、俺は構わずに片手の砲撃ユニットと共にパンチの体制を取る！

訝しげになる曹操だったが、俺の狙いに気付いたのか、素早く後方に下がる！

空を切ってしまったが、俺のパンチと共に手の砲撃ユニットから魔力の砲弾が打ち上がった！

「…冷や汗ものだな。今の一撃、防御していれば俺は消し炭だった訳だ」

「勘が良いな」

「……ならば」

曹操はお返しとばかりに、

「——伸びろっ!」

聖槍の切っ先を伸ばしてきやがった!

速いが——弾けない訳じゃないっ!

俺は両手の砲撃ユニットを合わせ、槍そのものに標準を合わせる！

「撃ち抜けっ!!」

《Welsh Critical Fire!!》

龍の口腔から発せられた一撃は、見事に伸びて来ていた聖槍を弾く！

空かさず縮ませる曹操は、今度は地面に聖槍を突き刺す！

何だと思いい様子を窺っていると、俺の足元から揺れだした！

「っ！」

俺は攻撃と回避の意味で前方に向けて砲撃を放つ！

攻撃は躲されたが、俺はその場から引き下がる——すると、先程俺のいた場所か

ら、聖なるオーラが迸った！

そして俺の背後には曹操！

即座に振り返り、奴の一撃を受け止める！

「…随分奇妙なパワーアップだね。何処の鎮守府出身かな？」

「ジョークとは随分余裕だな……！」

「いいや、これでも余裕はないんだよ。何せその力は全くの初見だからね」

……そりゃそうだ。

この力は俺が平行世界に行った折に開発した力だ。

平行世界のイツセー、アイツが使っていたトリアイナ……っていう力を参考にし、それを俺なりにアレンジしたのがこの『魔龍進化』だ。

イツセーが使っていたのは悪魔の駒とドライグの力が融合した事で発言したらしい。だからあそこまで悪魔の駒の性質が変化していたんだ。

そして俺のは、俺が転生する際に変化した変異の駒とアンダーワールドのドラゴンの力、それらをドライグの鎧に定着するように調整して生み出した。

つまりそれぞれの駒とドラゴンスタイルの長所を組み合わせたって訳だ。

これは僧侶とウォータードラゴンの力の融合体……その特徴は、お互い魔力に優れた形態！

まあ鎧の形態に関しては魔力に優れるならそれを活用できる砲撃形態で良いか……という結構いい加減なものだけでも。

しかも今回が実戦での初使用！

俺以外は全く知らねえのさ！

「そしてこの形態の特徴はこれだけじゃねえ……喰らえ!!」

「……っ!!」

俺が地面を叩くと、曹操の足元から水流が噴出する!

水流はドラゴンの姿となり、曹操へ襲い掛かる!

「…地下の水脈すら利用できるのか!」

「はっ!!」

「曹操!」

「加勢は不要だ。お前達はそれぞれの戦いを!」

あくまで一対一か。

曹操は聖槍で水の龍をかき消すと、俺に急接近する!

「直接君を叩けば良いっ!」

「……魔龍進<sup>ウイザード・プロモーション</sup>化ツ!!」

《Wizard Promotion!! Hurricane Dragon》  
!!!

曹操の一撃が届くよりも早く、俺の全身を今度は翡翠の風が包み込む!

一瞬足が竦んだ曹操の横を——俺は風のように駆け抜けた。

瞬間——曹操の全身に切り傷が生まれた!

「……………っ!」

「へえ、直撃は防いだけ。下手すりゃバラバラだったのにな」

曹操は驚愕の眼差しで俺を睨み付けてくる。

今の俺の姿は、先程までの戦艦染みたものではなく、最低限の鎧姿となっている。

まあ、それを補う形で全身凶器ってぐらい鋭いものだ。

鎧の色は、また変わって今度は緑色。

ウイングロード・プロモーション  
「魔龍進化」——レイダー・ハリケンナイト  
襲撃の旋風龍騎士」

今度はハリケンドラゴンと騎士の駒……………速さに優れた形態の融合体！

俺は肥大化したスラストスターから魔力を爆発させ、風を纏いながら突貫する！

「おおおおおおっ!!」

「ぐっ、ぬううううう……………!!」

四方八方に飛び回りながら曹操に着実にダメージを与える！

「…っ！はっ!!」

「っ、うお！」

曹操は聖槍を構えると、四方にバリアのような障壁を張った！

防御に転ぜられては、決定打に欠けるか……………この形態の弱点は防御と攻撃力の低さだ。



まあ攻撃に関しては高速で動いて一撃を確実に与えて蓄積させていく事で補えるけどな。

曹操も障壁を解くが、その息は先程よりも上がっている。

「どうした？息が上がってるぜ？」

「……君は本当に読めないな。一体幾つ手を隠しているんだい？」

「さあな。でも、何も無いと思ってる相手を出し抜くのも、魔法使いの特技なんぞな」

俺がそう言うと、曹操は「堪らないな」と肩を竦めた。

「で、結局の所お前達は何がしたいんだ？」

「またその質問か。昼間にも言った通り、俺達は『人間』としてどこまでやれるのか、それが知りたいのさ。……それに」

曹操は埃を払いながら、こう言った。

「悪魔や墮天使、ドラゴン、妖怪は人間の敵だ。その人間の敵が協力したら怖いだろう？人間が魔王やドラゴンを倒すのはごく自然なことだ。そして、それを成すのは英雄の力を持つ俺達だ」

「……つまり何だ？強力な力を持ち、異形を倒すのが英雄……ってか？」

「ああ。ファントムと闘ってきた君なら、俺達の行動は理解出来るんじゃないかな？」

「——出来るかよ」

俺は即座に否定する。

此奴の言ってる事は理解できる。

けど——それだけが英雄なんかじゃ、ない。

「お前の語るそれは英雄じゃない、ただの戦闘凶だ。ましてや、一人の幼い子の希望を奪おうとしているお前達は、英雄でも何でもない………ただの、悪党だ」

「……言ってくれるね」

「凶星か？……まあ、今更何をしても関係ない。お前は——ここで俺が叩きのめす」

ワイザード・プロモーション  
魔龍進化——

—————

木場 side

「くつ、赤龍帝が、あんな力を隠し持っていたとはね……」

ジークフリートは血まみれの姿で立ち上がった。

その姿だけで、イツセー君のあの一撃が尋常でない威力だと言うのを嫌でも悟ってしまふ。

あんな力、僕達も見たことがない。

恐らくは修学旅行の前に生み出したんだろうけど……。

「まだ続ける気か？」

「勿論だよ。折角心が躍ってきたんだ」

ゼノヴィアはアスカロンを下す事無くジークフリートを一瞥する。

ジークフリートは静かに立ち上がると、懐から小瓶を取り出した。

……まさか、それは！

ゼノヴィアも気付いたのか、その表情を険しくさせる。

ジークフリートは意に返す事無く、その中身を振りかける。

すると、ジークフリートが負っていた傷が忽ち治ってしまった……！

「フェニックスの、涙……!!」

何故、何故彼らテロリストがあれを……！

本来なら持つてゐるはずがないのに!!

「ちよつとした裏のルートだね。後は金さえあれば、幾らでも手に入るものだよ。まあ、

フエニックス家の者は知らないだろうけどね」

「……その口を閉じろっ!」

ゼノヴィアの怒りは尤もだ!

こんな奴等が本来なら使うべきではないと言うのに……っ!!

「ふふっ、君達の殺気が一段と強くなったね。それほどまでに許せないかな?」

「ああ。その通りだ」

「覚悟しろ、お前は神の名のもとに、断罪する……っ!!」

「良いねえ。ますます心が滾るよ……!」

ジークフリートは笑みを深めながら、今度はピストルのような物を取り出した。

でも一般的なピストルと違い、先端が注射器のようになっている。

「本来なら使いたくはないんだけど、君達に負けてジャンヌ達の笑いの種になっては面

白くないからね」

ジークフリートは自分の首筋のそれを刺そうとした、瞬間だった。

——ドオオオオオオオオンッ!!

「っ、うあっ?!」

後方から何か吹き飛んで来た為、ジークフリートはそれに巻き込まれる形で瓦礫に叩き付けられる！

砂塵が晴れ、そこにいたのは――

「…ガッ」

「…曹操!？」

頭から血を流す曹操だった。

「おい、まだやれるだろ?」

ザンツ

瓦礫の上に立ち、曹操を見下ろすのは――

「まだまだ、ファイナーレには早いぜ?……………まあ、あんまり長丁場にはならないけどな」

両腕と体の鎧が異様なまでに肥大化した、黄色い鎧姿のイツセイ君だった。

## MAGIC102 『希望の戻る時』

「ジークフリートが起き上がったのと同時に、曹操は聖槍を杖代わりにして立ち上がる。

「……そのハルク擬きの姿、どうやらパワー特化みたいだね」

「まあな」

俺は肥大化した鎧に覆われた腕を構える。

その色は三度代わり、今度は黄色。

ワイザード・プロモーション  
魔龍進化

マキシマム・ランド・トルク  
蹂撃の巖龍戦車。

もう語るまでも無いと思うけど、パワーと防御に優れた重戦車みたいな形態だ。

その証拠に、俺のどの形態よりも鎧が分厚い。

「……分かりやすく言えば、曹操の言う通りの超人ハルクか、最大級のパワフルボディみたいな感じだ。

機動力は大幅に下がっちゃうが……それを補うには十分なほどのパワーを持つ。

「だが……そんな形態では素早く動けないだろう」

「どーだろうな？機動力を犠牲にした一撃……受けてみるか？」

俺が拳を構えたのと同時に、動き出した奴がいた。

「……なら、このグラムを受けて立ち上がれるかな？」

——ジークフリート！

「っ、イツセー君逃げて！」

木場が焦ったように叫ぶ。

確かグラムは龍殺しなんだっけか？

そうこうしている内にグラムの刃が俺の鎧に——

ガアンツ！

「!？」

食い込む事無く、グラムの刃は弾かれた！



これにはジークフリードだけでなく、曹操も目を見開いた！

「なっ……」

「…幾ら倍加しようが、お前の筋力じゃどんな聖剣持ってきても破れねーぜ」

「……逃げろ、ジークフリート！」

『Maximum Solid Break!!!』

そう音声が響いたのと同時に、俺は拳を突き出す！

肘部分のスラスタから魔力が噴射され、加速された拳が一気に放たれた！

肝心のジークフリートには命中しなかったが、はるか離れた方角でドラゴン化した匙とレイオニクス……もとい、大怪獣バトルを繰り広げていた八坂さんに放出された空気が命中した！

結果——八坂さんは建物を幾つも崩しながら倒れた！

「なっ——?!」

「ぼさっとしてる余裕はあるのか!？」

「——ぐっ!!!」

呆然としていた曹操に向けてパンチを放つ！

直撃は防いだが衝撃を殺せず、曹操の体は崩壊していたビルにめり込んだ！

「まだまだ行くぞ………お前が起こした事件のツケ、利子付きで払ってもらうぜ!!」  
俺はスラスターを噴出させ、曹操の方へと飛び出した!

――

木場 side

「冷や汗ものだったね。あれを食らってたら俺は間違いなくミンチになっていた」

ジークフリートは魔剣を構えてそう呟く。

…それはそうだろう。

何せ直撃でない、拳で押し出された空気圧だけで地面を深く抉っており、八坂さんに確かなダメージを負わせた。

現に匙君の放った黒炎に動きを封じられている八坂さんは目に見えるほどに弱っている。

間接的なものでこの有様なのだから、拳本体の一撃はどれぐらいの規模なのか………考  
えたくもないね。

「よし……今後はあれぐらいの威力を目標としよう」

…ゼノヴィア、頼むからもう少しテクニクを身に着けてよ。  
そう思っていると、

『『ワンワン！』』

僕達の前に、見慣れた二匹の獣がやってきた——ハティとスコルだ。

「…子フェンリルか？」

「ど、どうしたんだ？」

『ワンワン！（訳：アイツをぶっ飛ばしたいなら、僕達も力を貸すよ！）』

『ワン！（僕達も、お兄さんに負けてられないから！）』

な、何を伝えたいんだろう……?!

だけどゼノヴィアは、納得したかのようにうんうん頷いていた！

「ゼノヴィア、分かるのかい?!」

「——全く分からん！」

……さつきの領きは何なのさ!?

「だが…ジークフリートに一矢報いたいのなら、力を貸してくれる!……そう言っ

いる気がした」

『ワンワン!!』

…この反応から察するに、どうやら正解?のようだ。  
でも、一体どうやって……。

『——アオーンツ!!!』

二匹のフェンリルは天高く吠え、その場から飛び上がった!

僕達が見守る中で、ハティとスコルは光に包まれる!

「一体何が……っ!」

「これは……」

やがて光は僕とゼノヴィア、それぞれの手元に宿った。

光が晴れると、その手に握っているものが鮮明に映った。

「……刀?」

そう呟いた僕の手には、刀身が細く、鐔の部分が狼の顔となっている、日本刀のような剣。

ビジュアル的には、狼が刀身を銜えているような……そんな感じ。

「……私のは違うな」

そう言うゼノヴィアの手には、僕のとは対照的な、デュランダルよりも巨大な大剣が握られていた。

此方は僕のと異なり鍔がなく、持ち手から刀身の根元にかけて施された狼の彫刻に、巨大な銀の刀身が特徴的な大剣……いや、大刀かな？

ちなみにビジュアルは狼の口から剣が生えてきているような、何とも豪快な見た目だ。

『——聞こえる？木場の兄ちゃん！』

……今の声は?!

ハツとなつて僕とゼノヴィアは同時に剣に目を向けた。

見ると、それぞれの狼の目が点滅していたのだ!

まさかと思っていると、再び声が響く!

『おーい、もしもーし!聞こえてますかー!?新聞ですよー!!』

「は、ハテイかい?!」

『せいかい!よく僕がハテイって気づいたね!』

うん、何となくなんて言うべきじゃないよね……それと今のボケに対しても僕は突っ

込まないよ。

飼い主とペットは似るって言うけど、ホントなんだね。イツセー君……………。

ゼノヴィアも同様の事を言われたのか、目をパチクリさせている。

「い、一体何がどうなっている?！」

混乱していたジークフリートが、状況を確認すべく声を発した。

そうは言われても、僕達も何が何だか……。

『説明は後々！今はあそこの白髪をぶっ飛ばそうよ！』

「……………もう、何でも良いか」

…取り敢えずこの疑問は胸に仕舞い、僕とゼノヴィアは剣を構える！

すると、鏢となっていた狼の顎が開いた！

「これは!？」

『戦闘開始の合図だよ！さあ、ショータイムだぜー!!』

『だぜー!!』

「……………木場」

「うん」

イツセー君、このセリフ、使わせてもらおうよ！

「さあ、ショータイムだ!!」

僕は刀と聖魔剣を持ち、ジークフリートへと迫る！

ジークフリートは、先程までの混乱は何処へやら、不敵な笑みで魔剣を振りかざす！  
「…良くは分からないがその勝負、受けて立とう！」

背中から生えた腕に握られた剣を召喚した聖魔剣で防ぎ、僕は手に持っていた聖魔剣を投げる！

ジークフリートはそれを弾くが、僕は同じタイミングでハティが変化した刀を振るつた！

「……………うっ?!」

「ー！」

…断わっておくけど、僕はそこまで強く振るつた訳じゃない。  
いつも通りの加減で振るつた……そう、それだけなのに、

——振り下ろされた刀の延長線上にあった、背後の建物や大地ごと、ジークフリートの右腕が切断された。

一歩遅れて、ジークフリートは苦悶の表情となる！

どうやら彼自身、何が起きたか理解が遅れたんだろう……それは僕も同じなんだけど。

「ハティ……これ、切れ過ぎだよ」

『木場の兄ちゃん次第だよー。切れ味は』

「それは先に言おう！それ一番大事!!」

『だって聞かれなかつたもん』

うぐ……こんな所までイツセー君に似なくても良いんだよ！

恐らく彼は今頃くしゃみを連発しているだろう。

「さあて、私の方は……つとー！」

「!!」

着地したジークフリートに向けて、今度はゼノヴィアの一撃が放たれた！

ジークフリートはそれを交差させた魔剣で防ぐが——その防御を貫通するよう  
に、魔剣越しに衝撃波がジークフリートを襲った！

「——ッ!!!」

更に衝撃波は後方へと拡散し、辺りの瓦礫を細かな石礫に変えた………!!

「……や、普通に振るつたつもりなんだが」

ゼノヴィアは気まずそうに言うものの、肝心のジークフリートは失神していた。

「……今の僕達には、少し……いや、かなり荷が重いよね。これ」

「うーん。だが、制御さえ出来れば中々爽快だと思っう」



……もう何も言うまい。

と思っていると、イツセー君が飛び出した方角から轟音が轟いた！

「イツセー君！」

「行こう、木場」

ゼノヴィアと頷き合うと、僕達は音のなつた方へと走り出した。

—————

イツセーside

「ぶえつくしよんつ!!!」

崩壊したビルの瓦礫から飛び出した曹操は、これまで以上に鋭い槍裁きを繰り出す！

俺はと言うと、機動力が低いため必要以上に動かさず防御に徹していた。

つて、何でさつきからこんなにくしやみが出るんだよ!?

「ハハハ！後手に回っているだけじゃ、守れる希望も守れないぞ!!」

「はっ、言ってくれる……………」

俺は拳を振り上げ——大地を強く叩いた！

曹操の体は揺れに合わせて震えた後、殴った地点から発せられた衝撃波に捕らわれ、その場に跪いた！

「……………重力、か！」

「正解、だっ!!」

俺は動けない曹操に向けて拳を突き出す……………が、急に体制を崩してしまふ。

『相棒、時間をかけ過ぎだ。これ以上は不味いぞ』

マジかよ……………いや、せめて一発だけでもぶん殴る！

と思っていたが、いつの間にか曹操は重力から解放されていた！

「隙アリだっ！」

「っ!!」

勢いよく伸ばされた槍は俺の装甲に突き刺さる！

体から嫌な煙が上がるが、俺は構わずに魔龍進化を行う……………!

「その状態で何を……………!」

「ウイザード・プロモーション魔龍進化ッ!!」

『Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!』

聖槍を握りしめながら、俺は砲撃形態に移行！

返す刃で——俺は片手の砲撃ユニットを勢い良く突き出す！

少ない魔力ではあったが、その一撃は………曹操の右目を貫いた！

「うっ……ぐああああああああっ!!!」

曹操はその場に崩れ落ち、苦悶の声を漏らす！

だがその顔は……狂喜に満ちていた。

「——赤龍帝えええええっ!!!」

曹操の叫びを無視し、立ち上がった奴の懐に潜り込む。

再び鎧の色を変化させ……

「九重の………子供の希望を奪うんじゃねええええ!!!」

『Maximum Solid Break!!!』

今の俺に出せる渾身の一撃を叩き込む!!!

全力とは程遠いが、曹操の体は遙か後方へと吹っ飛んだ!!

「はあ、はあ、はあ………っ!!」

俺はそのまま膝をつく。

鎧も解除され、息を荒く吐く。

「つ、ごほつ、ごほつ!!」

そして咳き込む。

どうやら、思っていた以上に無茶してたみたいだな……。

『今が好機！死ね、魔法使い!!』

「!」

倒れそうになった瞬間、メデューサが攻撃を仕掛けてきた！

なす術がなかったその時——

「言った筈です。イツセー様はやらせない、と」

『うあつ!』

突如割って入った何者かに返り討ちにあつた！

って言うか、今の声は……。

見上げると、俺の前には銀色の鎧を纏った——グレイフィアが立っていた。

背後からなので全容は分からないけど、鎧の形状は何処か赤龍帝の鎧に似ていて、両肩に狼の頭がくっ付いていた。

グレイフィア、いつの間にかこんな鎧を……

『おのれ、余計な邪魔を……!』

『…下がれ、メデューサ』

今にもグレイフィアに襲い掛かろうとしていたメデューサを制止したのは、何とガラムだった……!」

『ガラム、何故邪魔をする?!ここで奴を殺せば——』

『今はその時ではない。それがワイズマンのご意思だ』

『だが……!』

『ワイズマンの意思は絶対だ』

ガラムに睨み付けられ、メデューサは心底忌々しそうに舌打ちした後、姿を消した。それを見届けた後、ガラムは静かに背を向けた。

「…俺を、殺さないのか」

『奴らの実験は失敗だ。ならば我々がこの場にいる必要はない』

見れば、八坂さんは先ほどもでの暴れっぷりが嘘みたいに大人しくなっていた。

…匙の奴、上手くやったみたいだな。

「つて…俺の質問に答えろよ。俺を庇って、お前らにメリットがあんのかよ」

『……お前はあの方の希望だ。ルキフグスの女よ、その男を大切にしろ。………来るべき時までな』

「っ、どう言う……!」

グレイフィアの制止も聞かず、ガルムは風と共に姿を消した……。

「……っ」

「イツセー様!」

ぐらりと倒れた俺を、グレイフィアが抱きかかえてくれた。

鎧は無くなっており、いつの間にかグレイフィアの横にハティとスコルがいた。

ああ、さっきの鎧ってまさか……そう思っていると、

「……やって、くれたね。兵藤一誠っ」

「!?!」

よろよろと、曹操がこちらに歩いてきていた!

後からやって来た木場達も身構える!

が、曹操は力なく八坂さんの方へと首を向けた。

「……どうやら、実験は失敗か。………ん?」

バチチチチッ!

曹操につられて天を仰ぐと、何も無いはずの空間に穴が広がりつつあった。

何だ、何か来るのか……？

『超獣来そうだな』

『ヤプールか』

いや、この感じは以前見た事あるやつ！

そう思っていると、空間の裂け目から姿を現したのは、緑色のオーラを発しながら夜空を舞う、十数メートルほどの東洋タイプのドラゴンだった。

『アイツは……』

「——五大龍王の一角。 ミスチパス・ドラゴン 西海龍童、 ウーロン 玉龍」

ここ、ここで五大竜王か！

何だつてこのタイミングで……と思っていると、曹操の顔が苦虫を噛み潰した物となる。

何だと思うと、目の前のドラゴンから小さな人影が降り立った！

遠目からでも目立つ金色の体毛に……法衣？を纏った小さな猿みたいな爺さんだった。

でも目にかけてサイバーチックなグラサンが何とも違和感バリバリだった。

「大きな『妖』の気流、それに『覇』の気流と『絶望』の気流。それらによって、この都に漂う妖美な気質がうねっておったわ」

小さな背丈の老人は一步一步ゆっくりと近づいてくる。

そして曹操を見つけると、気軽に挨拶をした。

「おー、久しぶりじゃい。聖槍の。あのクソ坊主がでかくなつたじゃねーの」

猿の老人は曹操にそう言うのと曹操は目を細めて笑んだ。

「……これはこれは、鬪戦勝仏殿。まさか貴方がここに来られるとは。…各地で我々の邪魔を、してくれているそうですね？」

「坊主、悪戯が過ぎたぜい。ワシがせつかく天帝からの使者として九尾の姫さんと会談しようと思つてたのによお。拉致たあやってくれるもんだぜい。つたく、異形の業界の毒なんぞになりおつて。『覇業は一代のみ』とはよく言つたもんじゃぜ」

毒、その表現に対し、曹操は特に顔色を変えることなく返した。

「毒、ですか。貴方に称されるなら、大手を振つて自慢できると言うものです」

「と言つても、すでに仕置きはされとるようじゃ。赤い龍にやられたかい？」

「…ええ、手酷くね」

…で、あの人? ……誰なんだ?

「初代の、孫悟空…」



グレイフィアがポツリと呟いたワードに、耳を疑った。

初代の、孫悟空……………って事は!!

「か、カカロットの、カカロット?!」

『落ち着け相棒。そうじゃない』

「かつつか。その理屈だとワシはバーダックになっちまうぜえ。赤い坊や」

「いやその理屈はおかしい!あ、あれ、だろ……………!要は、あれ!さ、さささ、西遊記の!!」

「正解じゃ」

キセルを吹かして、目の前の孫悟空はにやりと笑った

気が動転していると、上空から声が聞こえてきた。

『オイオイオイオイ!!なんかもう終わってる空気なんですけどお!?だったらオイラは帰りにーんだけどよジジイ!!ここ来るまでにチヨ―疲れたん!!』

て、テンションたけえ……………そう思っていると、ドライグから耳を疑う事実が明かされた。

『おー、ウーロンの奴変わってねーな』

「アイツ昔からあんな感じなのか?!」

『おう』

『よーっすドライブグ！元氣しとおや!!』

『魂だけだけどな。まあ元氣にやってるぜ』

「さて、どうする坊主？このまま農らとやり合うか？農はそれでも良いけどねい。だが、その時は容赦しないぜい？」

初代カカロットの言葉に、曹操は首を振る。

「折角のお誘いですが、遠慮させていただこう。今のこの状態では、間違いなく俺達は壊滅する……それはナンセンスなんでね。ゲオルグ、全員を転移させてくれ」

後からやって来たゲオルグは、転移用の魔法を発動した。

「初代殿、グレモリー眷属諸君、そして赤龍帝……再び合間見る時をお楽しみに」

「もう合間見たくねえよ」

「そんなにつれない事言うなよお」

「フランクだなお前！」

俺の突込みに構わず、曹操は視線を俺に向ける。

「兵藤一誠。次に会った時は、この聖槍で君を屠る。——真の、力でね」

不吉な言葉を最後に、英雄派はこの空間から姿を消した。

## MAGIC103 『さよなら京都』

英雄派が去って、俺達は目を覚まさない八坂さんの前にいた。

「母上、目を覚まして下され！」

「……」

九重が必死に呼びかけるが、八坂さんはまるで反応を起こさない。

『相棒、今ならあんな事やこんな事出来るんじゃないか』

「ドラゴン。この馬鹿黙らせろ」

『少し黙れこの腐れ外道』

『ひでぶっ!!』

よし、五月蠅い奴が沈んだ。

「さて、どうしたもんかいの。仙術で邪な気を解いてもいいんじゃないが、ここではちと時間がかかるとお」

「そうなんすか？」

「九尾を縛つとるのは邪な気。それを除いてやれば元には戻るぜい。だが、これほどま

で気が歪んだらからのお」

初代も煙管を吹かしながら思慮しているようだ。

だが何か妙案が浮かんだらしく、顔色が明るくなつた。

「そういやお前さんは確か他者の精神世界に入れる魔法を使えるんだってねえ。どうじゃ、試してくれんか」

「え、でも仙術に精通した爺さんでも難しいんじゃない……」

「なあに、ワシの方でもサポートするさね」

俺はエンゲージの指輪を取り出すが、中々踏み出せずにいた。

そもそもこの魔法は人間にしか使った事がないからな……妖怪である八坂さんに使っても上手くいくのかな。

『問題はあるまい。アンダーワールドは生きとし生ける者達が持つ心の世界だ。種族が違っただけだから、魔法は発動するはずだ』

「そうか……なら、試してみるか」

《エンゲージ・プリーズ》

八坂さんの手を取り、魔法を発動する。

するとドラゴンの言った通り、アンダーワールドに入るための魔法陣が現れた。

「うし……九重、行くぞ」

「え？」

「何驚いてんだよ？言つたろ？……お母さんを助けたいって」

「……うむ！」

……多分俺がこのまま一人で行つたとしても、八坂さんは目覚めないだろう。

ここは肉親である、九重の力が必要だ。

九重は最初こそ戸惑つた声を上げたが、力強く頷いて俺の方に乗つてきた。

それを確認すると、俺は魔法陣の中へと潜り込んだ。

………アンダーワールド？に来たんだよな。

やけに真つ暗だけど……そう思っていると、俺の背後からドラゴンがやってきた。

『この女の意識が混濁しているからだろう。以前の貴様もこの様な状態になっていた』

「以前つて……ロキの時か？」

『ああ』

「い、イツセー。そ奴は一体……！」

九重はいきなり現れたドラゴンに怯えていた。

まあ何も無しに現れたし、仕方ないか。

「此奴は俺の中にいるドラゴンだよ」

「赤き龍ではないのか？」

「それとは別のだ……ってドラゴン、俺お前を呼んだか？」

『退屈だったから来てやったまでだ』

退屈って………なんだかんだで此奴も人間臭くなってきたな。

まあ兎に角、で俺たちは八坂さんのアンダーワールドを歩いていく。

「……母上！」

やがて少しすると、鎖のような物に捕らわれた八坂さんが！

あれは………八坂さんの意識か？

『だろうな。あの鎖はあの猿爺が言っていた邪な気だろう』

『どうしよう………気の扱いは分かんないからなあ』

かと言って下手に攻撃しようものなら八坂さんにも危害が及びだろう。

どうしようかと考えていると、八坂さんを縛っていた鎖が僅かに薄くなつていくのが見えた！

「これは!?!」

『あの猿爺の仙術だろう。意識を縛る枷が緩んでいるのなら、声が届くかもな』

「…母上！起きてください！九重ですぞ!!」

ドラゴンの言葉を受けてか、九重は声を大きくして叫ぶ……が、八坂さんの反応はない。

九重は涙を流しながらその場に跪く。

「お願いですから……目を覚まして下さい……もう悪戯も、しません……好き嫌いも、無くしますから……起きてもう一度、九重の名を呼んでください……母上え!!!」  
「……九重にはまだ、貴女が必要なんです。貴女は九重の希望なんだ！だから、この子の願いを……もう一度叶えて上げてください!!」

俺も一緒に八坂さんに呼びかける！

すると、八坂さんを縛っていた鎖が完全に消えた！

それと同時に、真っ暗だったアンダーワールドにも色が戻った！

これは……

『母上——!!』

『あらあら、相変わらず元気じゃのう。ホホホ』

……八坂さんのアンダーワールドの景色は、九重と過ごした数々の思い出であった。

「これは……」

『ふっ、住みづらい空間だ……』

ドラゴンはその光景を見て、笑いを滲ませながら消えていった。

「九重…帰ろうか」

そうして、光が当たりを包んでいく——

「つと」

「…母上、母上!!」

アンダーワールドから帰還すると、九重はいの一番に八坂さんの方へと走り寄る。

「……ん、ここは」

皆が、九重が見守る目の前で、八坂さんが目を覚ました!

「——母上ええええ!!」

「…九重、どうしたのじゃ。全く何時まで経っても泣き虫じやのう」



感極まって泣き付く九重！

八坂さんは困惑しつつも、優しく九重を抱きとめた。

……………守れて良かった。

やっぱこの笑顔は、奪わせる訳にはいかないからな。

と思った所で——体から一氣に力が抜けた。

「イツセー!!」

グレイフィアや皆が駆け寄る光景を最後に、俺は意識を手放した。

—————

木場 side

英雄派との戦いが終わった後、僕達はアザゼル先生から労いの言葉をもらい、全員が治療を受けていた。

ちなみにイツセー君に関してはまだ何も聞かされていない。

「先生」

「ん？」

「彼らはどうやって逃走したんですか？」

僕はアザゼル先生から英雄派の足取りを聞いた。

先生は頭を掻きながら悔しそうに答えてくれた。

「あいつ等、前もって逃走用のルートを確認してたらしい。お陰で追跡の足取りも分からねえ」

「随分用意が良いですね……」

「ああ。次に戦う時も決して油断はするなよ？ 奴らは自分が負けた時の事も考えてる……これは旧魔王派の連中にはなかったものだ」

「はい」

……僕も帰ったら、もつと鍛えないと。

そう決意する傍ら、アーシアさんがイツセー君の容態を聞いていた。

「アザゼル先生、イツセーさんは大丈夫なんですか？」

「ん、ああ。一気に魔力を行使した反動で倒れたんだろう。……ただ」

……ただ？

含みを持たせた物言いに首を傾げると、先生は酷く微妙そうな顔で口を開いた。

「アイツ、無茶しすぎたせいで薬で誤魔化してた風邪が悪化しちゃって……。今は寝込

んでる」

「……大丈夫なんですか？」

「ああ、一応風邪薬と解熱剤飲ませた。まあ数日で治るだろ。多分」

……やっぱり風邪は自分の力で治す物だね。

そして、修学旅行最終日。

お土産を選び終え、今は新幹線のホームにいる。

いや、この前の戦闘のダメージが残ってるせいで大変だったよ……。

立神君なんて起床時間ギリギリまで寝ていたそうだし…。

ホームには九重ちゃんと八坂さんが来ていた。

「赤龍帝は大丈夫なのか？」

「…多分大丈夫だと思おうよ」

「——俺がなんだって？」

——え?!

聞こえてはならぬ声がしたのでそちらを見ると、そこにはイツセイ君が立っていた

……相変わらずのマスク装備で。

「へっくしょん!!」

「赤龍帝!」

大きくくしゃみを気に留めず、九重ちゃんはイツセー君に駆け寄る。

心なしか顔が赤いけど……まさかね。

「よ、木場達のお見送りサンキューな」

「そ、その……」

「ん?」

「また、京都に来てくれるか……?」

不安そうにイツセー君を見上げる九重ちゃん。

それに対し、イツセー君は――

「……そう言えば、木場達を観光案内してくれたんだってな。風邪治してまた行く機会があつたら、その時は俺にも頼むぜ?」

「う、うむ!約束じゃ!」

優しく笑いながら、九重ちゃんの頭を撫でてそう答えた。

やっぱりイツセー君はこうでなくちゃね。

「おう……九重、何があつても、絶望には負けるな。お前にとっての希望が八坂さんであ

る様に、八坂さんの希望は、お前なんだからな」

「勿論じゃー！」

「おし、良い返事だ！……へつくしゅ!!」

……やっぱり今回、中々締まらないなあ。

「アザゼル殿、赤龍帝殿、そして悪魔、天使、墮天使の皆々、本当にすまなかつた。礼を言う。これから魔王レヴィアタン殿、闘戦勝仏殿と会談するつもりじゃ。良い方向に進めていきたいと思うておる。二度とあのような輩によつてこの京都が恐怖に包まれぬよう、協力体制を敷くつもりじゃ」

「ああ、頼むぜ、御大将」

先生も笑顔でそう言つて八坂さんと握手を交わした。

うん、これでまた心強い味方が増えたね。

「…イツセー様。そろそろ」

「うん。…じゃーな九重！それにみんな、先に帰つてるぜ」

「また来ておくれやす、赤龍帝殿」

「ありがとう、イツセー！」

笑顔で手を振りながら、イツセー君はグレイフィアさんと共に転移していった。

やっぱり最後にくしやみを残して。

その後が続くように、僕達も京都を後にした。

――

イツセー宅

「もうイツセー。風邪の状態で無茶はしちゃだめよ」

「ご、ごめん。体が勝手に動いちゃって」

家に戻った俺達は事の顛末を聞いていたリアスに少し怒られていた。

「…でも、無事で戻って来てくれたのが何よりだわ」

「そうですね。でも、ちよつとは頼ってほしかったですわ」

「……水臭いです」

ほんと、すいませんでした……。

「しかもイツセーは現地で新しい側室候補作ってたけどな」

「え？誰の事ですか」

「あの九尾の娘だよ」

九尾……ああ、九重か。

「何言ってるんすか。俺年下なんて興味ないっすよ！……っつて、うお!」

俺は笑って言うのと、何故か知らんが小猫ちゃんが殴り掛かってきた!

「何すんの小猫ちゃん!?俺病人なんだけど!」

「…何かムカついたので」

理不尽な!

「まあまあ程々にしとけ。取り敢えずイッセー」

「はい?」

「さっさと風邪治せ」

「…じゃあ、もう一眠りしてきますね……へくしよん!」

俺は階段を上って自分の部屋へと戻るのであった……へつくしよい!!!

『…あ!俺が気絶してる間に終わってる!』

『今更起きたのか』

# MAGIC番外編『そして彼は線を越える』

修学旅行から帰って来たその日の夜、俺は再びベッドへとinした。  
……つまり風邪の療養だ。

何て言うか……俺って無茶し過ぎだよなあ。

赤龍帝としても、ウィザードとしても。

『その内過労死しそうだな』

やな事言うなよ。

せめて童貞は卒業してから死にたいよ。

『そこは譲れんのか』

当たり前だろ!?

やっぱり男なら一度でも良いから女の子とHな事したいじゃんか!!

それに今度は文化祭だってあるんだ。

去年は寝坊したから行くの止めたけど、今回は参加したいからな。



『……最低だな』

『だろ』

翌日皆に白い目で見られたぜ！……自慢にもならないけどな。

とは言うものの——

「眠れねえ……」

その前日……しかも帰る前まで寝ていたせいか、全く眠れないでいた。

それに風邪も割りと治ってきてるし、熱も引いていた。

これなら明日には全快だな……そう思いつつ、眼を閉じた。

すると——

トントン

「？……どうぞで」

誰かが扉を叩く音が聞こえ、俺は眼を開いた。

声を上げると、扉が開かれ、そこには見知った銀髪が。

「……グレイフィア？」

「イツセー様。加減は如何ですか？」

「……うん、問題はないよ」

グレイフィア……何だけど、その格好が何時もと変わっていた。

その……リアス達が着ている様な、妖艶なネグリジエ姿だったのだ。

まさかグレイフィアがそんな姿を見せるとは……俺は人知れず生唾を飲んだ。

グレイフィアはそんな俺の様子を伺うかのように、静かに入ってきた。

「ぐ、グレイフィア」

「はい」

「その……その格好は……」

「似合って、ないでしょうか……？」

に、似合っていない事はない……寧ろ滅茶苦茶似合ってる。

でもそれ以上に……直視し辛い！

「に、似合ってるよ……」

「……有り難う御座います」

そう言つて微笑むグレイフィア。

心なしか……距離が近い様な気がする。

グレイフィアはベッドの端に腰掛ける。

そして、俺の顔を覗き込む様に見上げてくる。

「……………イツセー？」

「な、何？」

「顔が赤いけど……………熱が再発したの？」

「っ」

心配そうな表情。

でもそれは一瞬で、

「……………それとも」

——私のせい？

そう耳元で囁かれた声音は、これ迄にない艶があつた。

ハツとなり、俺はグレイフィアの顔を見る。

すると、世界が逆転した。

「……………グレイフィア!?!」

簡単に言えば、押し倒されていた。

思ってもみないその行動に、俺はパニックに陥る!

グレイフィアはそんな俺に構わず、俺の頬へと手を伸ばす。

「貴方は……………何時だって危険の渦中にいる。でも、それは何時も他人の為。だから、不安なの」

「ふ、不安?」

「貴方が何時か……………私達の目の前から居なくなるんじゃないか、と」

……………た、確かに俺は何時もトラブルに巻き込まれてる。

死んだっておかしくない程の危険と隣り合わせの生活で、俺はもし死んだ時の事を考えた事もある。

だ、だからって何故俺は押し倒されてるの?

疑問が尽きないアホな俺を見て、グレイフィアは眉尻を下げる。

「でも貴方は決して目の前の危険から眼を背けない。誰かの希望が零れ落ちそうなら、それを必ず救い上げに行く。……………私達が、それを止める事なんて出来ない。多数の人の絶望を見てきた、貴方だから」

「……………グレイフィア」

「だから、貴方がいると言う証を、刻んでほしいの」

「……………ふえ？」

思わずアーシアみたいな声が出てしまった……………そ、それって、つまり……………っ！

「……………私を、抱いて」

ああ、やつぱり——そう思っていたら、グレイフィアにキスされた！

頬をガツチリとロツクし、逃さないとばかりに、グレイフィアは舌で俺の口内を蹂躪する！

俺はと言えば状況の変化に耐えきれず、ただされるがままとなっていた！

逃れようともがくが、グレイフィアはそれを許さない！と言わんばかりに柔らかい体を押し付けてくる！

不味い……………不味い不味い不味い！！

しかもこの所自家発電すらしてないから、あつという間に俺のそれは——昂つていた。

「ん……………んう……………ぶはっ」

長いディープキスから解放され、俺は荒く息を吐く。

「当のグレイフィアは、まだ足りないと言わんばかりに瞳を潤ませ、此方を見つめていた。」

「……さつき動いたせいで……お、おっばい、が……!!  
グレイフィアは三つ編みにしていた髪をほどき、俺に再び囁く。」

「イツセー……貴方を、私に刻んで？」

俺は——

『……完全に俺達忘れられてるな』

『寧ろ思い出されても今更と言う感じだがな』

『しかし相棒も中々やるなあ』

『……他人の性交を眺めるのは初めてだな』

『明日盛大にからかってやろう。そうしよう』

『……フン』

――

――翌日。

ん……………朝、か。

俺は体を起こすと、脳裏に昨夜の出来事が甦る。

……………つて、俺途中から記憶が途切れてんだけど。

『よお相棒。昨夜はお楽しみだったな』

……………ドライグ!

もしかして、見てた……………?

『でなきやこんな事言わねーよ』

なあ、昨日何があったんだ?

俺、全然記憶がないんだけど……………。

『……………あー、やっぱりか』

『だろうな』

……………え、何そのデスヨネーな雰囲気。

そして俺は、次に聞かされた真実に耳を疑った。

『お前、グレイフィアとのチョメチョメの最中に気絶してたからな』

『貴様が殆ど白目になっても構わずに動いていたな』

…………………………あ？

『あれは凄かったな』

『ああ。気に恐ろしきは女の性欲だと思いき知らされた』

『俺は途中から見るのが恥ずかしくなってきたよ』

『何せ15発も天元突破してたからな』

じ、15発!?

ハツとなり俺はゴミ箱を漁ると、更に絶望した。



——何故なら、そこには大量の避妊具と、避妊具が入った箱が捨てられていたからだ。

ま、マジかよおおおおお!!!

お、俺……つて言うかグレイフィア、そんなにしたの!?

全く記憶にねえ……強いて言えば腰が凄くダルい、ただそれだけだ!

『もうあの女は起きてるがな』

『女つてのはタフだよな』

は、半端ねえ……………。

そう思っていると、部屋の扉がノックされた。

「イツセー様。ご飯の用意が出来ましたよ」

——まあ、良いか。

俺は聞き慣れたその声に笑みを浮かべると、勢い良く起き上がった。

# MAGIC番外編『羽ばたかない不死鳥』

「ライザーが？」

よお皆、イツセーだ。

今日は衝撃的過ぎた夜から一夜明けた次の日の休日。

突然だが俺の家に、今日は珍しいお客さんが来ている。

「……はい」

リアスの質問に答えたのは、金髪のドリル——ゲフン、レイヴェル・フェニツク  
スさんだった。

彼女は冥界に出向く時に、たまに顔合わせする程度だったんだけど……こうして俺の  
家に来るなんて珍しい。

「あの一件以来、兄が塞ぎ込んでしまったのはお耳に届いてると思いますが……」

「まだ凹んでんの？」

「……お恥ずかしながら」

レイヴェルはグレイフィアが淹れてくれた紅茶を飲み、小さく肯定した。

「……本来ならここへ来るのは筋違いなのは重々承知です。ですが、兄の治療に何が良いかと色々な参考意見を集めた所、リアス様に相談した方が良いと言う意見が多くて……」

「私の所？」

「兄の心身……所謂、『根性』と言うのを学ばせるのが良いと、そう意見をいただいたので」

「……、根性か……。」

『根性なんて早々身に付くもんじゃないぞ。あの焼き鳥小僧なんて、根性とは無縁の存在だ』

『俺も見ていたが、あのモヤシ小僧がその様なものを身に付けれるとは思わんぞ』  
「コラー！お前らは黙ってる！」

レイヴェルに態と聞こえる様に意見した俺の相棒二人に突っ込む。

「いえ、お二人の言うとおりです。……兄が情けなさすぎるんです！たった一度負けたくらいでもう半年も塞ぎ込んで！男ならそういうトラウマを糧に前に進めば宜しいものを！一度の負けを経験してドラゴン恐怖症だなんて……本当に情けなくて！」

おお、不満のマシガントークだ。

相当鬱憤溜まってたんだな。

「……でも、一応は私の兄で、家族ですから」

……何だかんだ言いつつも、兄貴が心配なんだな。

「だったら、良い方法があるぜ」

俺が言うのと、全員の視線が俺に集まる。

「こうなつたのはブツ飛ばした俺にも責任はあるし、ほっとけないからさ。それにこの中で根性つて言ったら俺だ。当てもあるからさ」

『ジープでも走らせるのか?』

『それとも崖登らせて岩を落とすのか?』

「そこまではしねえよ!」

有りっちゃ有りだけどな!

けどその場合はフェニックス家の人達の苦情が怖いわ!

それを聞いてレイヴェルは顔を輝かせるが、直ぐに咳払いをした。

「し、仕方ありませんわね。そこまで言うのでしたらイツセー様に頼んで差し上げてよ? 精々上級悪魔の為に粉骨碎身の気で励んで下さいな。……一応、礼を言つて差し上げますわ」

『高慢ちきのツンデレつてめんどくせえなあ』

『ツンデレとはコミュニケーション能力が不足したKY女だと聞いたが……まさにその

通りだな』

「だから黙ってろって!!」

———

数分後、俺達はフェニックス家に来ていた。

しかし……デケエな。

リアスの家も大きかったけど、フェニックス家も負けず劣らずだな。

流石貴族!

レイヴェルの案内でライザーが過ごしていると云う区画へと歩いていると、前方に見知った気配が……。

「これはリアス様。お久しぶり御座います。そして、此方も久しいな、赤龍帝」

「久し振りつす、イザベラさん」

顔の半分は仮面を付けた女性——ライザーの眷属のイザベラさんだ。

「噂は色々聞いてるよ。この間は聖槍の使いを退けたとか」

「まあ、ギリギリでしたけどね」

「だがまたこうして平和の為に一つの驚異を収めたんだ。誇っても良いだろう」

「……別に誇りたいから戦ってる訳じゃないんで」

俺はただ、守りたいから戦った。

ただそれだけだ。

そこにある希望を、そして摘まれようとしている希望を――。

「……イザベラ」

低い声でレイヴェルが促すと、イザベラさんは咳払いをして俺達の前に立った。

「す、濟まないお嬢。では、主の元へご案内します」

イザベラさん先導の元、俺達は広い内部を進んでいった。

「引きこもってるって聞いたけど、普段アイツって何してるんだ？」

「二日中レーティングゲームの仮想ゲームをしているか、チェスの強い領民を家に呼び寄せての一局。殆ど家から出ることはないな」

ほー、マジの引きこもりか。

しかしイケメンの引きこもりって中々インパクトあるな。

ってことはアイツは今、俗に言うプータローって奴か？

『プータローだな』

『プータローだ』

何て話し込んでると、ある扉の前までたどり着いた。

見れば、扉には立派な鳥のレリーフが刻まれている。

……中にいるのは、ライザーか。

「お兄様。お客様ですわ」

レイヴェルが扉を叩くが………反応がない。

寝てるのかと思ったら、中からか細い声が聞こえてきた。

「………レイヴェルか。今日は誰とも会いたくない。嫌な夢を見たんだ………とても誰かに会える気分じゃない」

「………リアス様ですわよ」

レイヴェルが言ったその一言に——一瞬間の間が空いたかと思うと、何かを落とし、音が響いてきた。

「………り、リアス、だと………!?!」

おお、すげえ狼狽してる。

よっぽど予想外だったみたいだな。

「ライザー、私よ」

「………リアス、今更何をしに来た？俺を笑いに来たのか？それとも赤龍帝との仲睦まじ

い話を聞かせに来たのか？」

『だらしねえなフハハハハハハ!!』

『兵藤一誠はリアス・グレモリーと毎晩同じベッドで寝てるぞ』

煽るなって！

表には出してないけど、もし聞こえたら拗れるだろ！

「……少し、お話をしましょう。顔を見せてちょうだい」

そうリアスが言った後、一寸置いてドタドタと此方へ向かってくる足音が。

そして扉が勢いよく開かれ——中から出てきたのは、髪をボサボサにしただらしない格好のライザーだった。

「振った男に君は何を話すと——」

「よお」

ライザーが怒りに満ちた口調で言うも、視線が隣の俺へと映ると、途端に顔色が変わった。

見られたので一応挨拶をするが……

「せ、赤龍帝……」

「おう、俺だぜ」





コネクトでライザーの部屋の中と空間を繋げると、中に手を突っ込み鍵を開けた。

「入るぞー」

「ふ、不法侵入だああああ!!!」

「ちゃんと俺達は来客だつての」

未だにガクガク震えてるライザーをチェインソー持ってたびつくり双子ちゃんが宥めてた。

「ライザーは今まで負けた事がなかったから」

「はい。イツセー様に真正面からやられてしまったのが心身ともに大きく爪痕を残してしまった様ですわ」

「たかだか一度の挫折で情けねえぞ。俺なんてお前のノリで行ったら何回挫折してんだ」

『両親が死んだ時、サッカーの試合で負けた時、テストで赤点取った時、箱買いしたけど目当てのカードが当たらなかった時』

『目の前で多数のゲートが絶望した時』

お前ら少しは遠慮と言うのを学べ、特にドラゴン。

「ほらお兄様！折角リアス様達がいらしたのですから、ベッドから出てくださいー！」

「は、離せえ!!帰ってくれ!!」

こりや話にならねえな。

《バインド・プリーズ》

「うおっ?! 何じゃこりやああ!!」

「レイヴェル、ライザーの荷物纏めててくれるか？俺はライザー引つ張っていくから」

「あ、はい」

「おいつ、これをほどけ!!俺は外へは出ないぞ!!」って、コラ引つ張るなイテテテテテ!!  
擦れてる！背中と床が擦れてるって!!」

ライザーの悲鳴を無視して、俺達はライザーを強引に城の外まで連れ出した。

# MAGIC番外編『拉致されるフェニックス』

数分後、荷物を纏めた俺達はフェニックス家の庭に集まっていた。

『相棒、ティツシユは大丈夫か』

ナニに使うってんだ!?

それはそうと、荷物も全部揃ってるな。

「で、イツセー」

「ん?」

「貴方の作戦って、どういうものなの?」

リアスの疑問に、俺は空を指差した。

それを見て、全員首を傾げていた……まあ、当然か。

「もうじき来るよ」

連絡したのがついさつきだし、直ぐに来るって言ってたからな。

『お、相棒来たぞ』

—— お、ホントだ。

俺達が見ていた空に影が差した。

ズウウウウウンツ!!

大きな地響きを立てて、影の持ち主が降り立った。

「久方ぶりだな、お前達」

「いよつす、おっちゃん!」

ドラゴン——元龍王のタンニーンのおっちゃんだ。

「急に言ったのに、来てくれてありがとう。おっちゃん!」

「兵藤一誠。以前より見違えた面構えだな」

俺達が話し合ってるのを横目に、ライザーは絶叫を上げた。

「た、たたた、タンニーンンンンンンツ!? 最上級悪魔……で、伝説の、ドラゴン……!!!」

ドラゴン恐怖症の坊っちゃんにはキツイわな……ま、THE・ドラゴンだもんな。

おっちゃんの見た目。

ジロリ、とおっちゃんの目がライザーを捉えた。

「ライザー・フェニックスか。レーティングゲームの試合を幾つか見たことがある。将来有望な『王』として注目していたが……その様子だと些か問題があるようだ」

「実はさ——」

俺はおつちゃんに事の顛末を説明すると、おつちゃんも「情けない」と一蹴する。

「そう言う訳で、俺との特訓と同じノリで何とかならないかな？ フェニックス家の人達も根性を付けたらいつて言ってるからさ」

俺の言葉におつちゃんは口元をにやけさせた。

「成る程、根性か。それは良い。では、山に行くと言うのだな？」

「それで良いと思う。荷造りは出来てるよ」

「ほお、準備が良いな」

「俺にはこれがベストかなって思ってたさ。つつー訳でリアス、俺はコイツを山に連れてくんで」

まあこの際細かい事は放棄して、強引に環境を変えて心身を鍛えた方が良いとの判断だ。

「うん、山は良いぞ」

「うんうん、山でドラゴンとフェニックスが修行だなんて幻想的よね！」

それは言葉の上だけだぜ、イリナ。

まあリアスとレイヴェル、ライザーの為だ。

「い、嫌だああああ!!」

あ、逃げた。

そしておつちゃんのデカイ手がライザーを掴んだ。

「逃げるな。男なら覚悟を決めろ」

「ひいひいひいひいひいひい!!!」

おーおー、端から見たらドラゴンに食われそうな鳥だな！

融合、I GO、

『待つのだ剛ー!!』

被るな！

俺はおつちゃんの背中に乗ると、皆を振り替える。

「じゃあグレイフィアさん、皆！暫く行ってくるぜ!!」

「イツセー、困ったら必ず連絡して」

「ああ！」

「イツセー様、御武運を」

「はい！それじゃ——」

「私も付いていきますわ！」

いざ行かんとしたところ、レイヴェルが一步前に出て宣言した！

「……レイヴェル、気持ちは分かるけど、危険も伴うぞ。生半可な覚悟で着いてくるなら止めとけ」

「中途半端な気持ちではありませんわ！兄を……共に立ち直らせたのです！」

「……………」

……決意の眼差しだ。

「こりや、何を言っても無駄みたいだな。」

「良い目をしているではないか。兵藤一誠、お前が守つてやれば良い」

「おっちゃん、他人事みたいに……。」

「ま、そうするのが妥当か。一緒に来い、レイヴェル」

「——はい！」

レイヴェルは嬉しそうに応じると、魔力で自分の衣装を変えた。

探検家風の服装——サファリジャケット姿だ。

「イツセー、レイヴェルも宜しくね」

「おう！」

一方の兄貴はと言うと……………

「い、嫌だぞ！何で俺が山になんて行かないといけないんだ！」



逃れようと暴れもがいていた。

……………妹があんなに健気な姿を見せたと言うのに、コイツは。

「これも貴方の為ですぞ、お坊ちゃん。新鮮な山の空気を吸えば心身も洗い流される事でしょう」

そう言えば、俺を親の仇の如く睨み付けてきた。

「そんだけ反骨精神剥き出しなら大丈夫だな。おっちゃん、頼むぜ！」

「よし！」

「俺の眷属達！主を助けろオ!!」

眷属の女の子達に助けを求めるが――

「ライザー様、今回ばかりは命令をお聞きできません。兵藤一誠、ライザー様を頼む」

「りょーかい！」

『フアイト、オー!!』

「は、薄情者オオオオオ!!」

現実は無情なり。

喚くライザーに構わずおっちゃんが飛び立つ！

「兵藤一誠、どうせならうってつけの場所がある。そこへ行くのはどうだ？」

「え、そんなところあんの？じゃあそこにしようぜ！」

「うむ」

「で、そこって何処なのさ？」

俺の質問に、おっちゃんは楽しそうに答えた。

「——俺の領地だ」

## MAGIC番外編 『羽ばたけ、フェニックス』

「ほらほら、遅いですよー！」

「うぎやああああ!!凍る、俺の炎が凍るううううう!!」

タンニーンのおっちゃんプリザード・ドラゴンの領地へと来て直ぐ様、ライザーはおっちゃんの配下である高位ドラゴン——何でも氷雪龍ぶりざーど・ドラゴンだそうな——に追いかけて回されていた。

『流石高位のドラゴンだな。普通なら凍らん筈のフェニックスの炎がカチンコチンだ』  
いやー、傍目から見ると惨劇だな！

こっから見たら探検家がドラゴンに襲われてる様にしか見えないもん！

「お兄様！このぐらいで根を上げてどうしますの！」

……と、上空から水色ドラゴンの背に乗るレイヴェルは櫂を飛ばす。

見れば分かるけど、トレーニングはこの走り込みからスタートしています。

おっちゃんに「ついでだからお前もやっていけ」と言われ、俺も走り込みをしているけど……中々これは鍛えられそうだけ。

雪に足を取られないように力を入れないと、忽ち転けちまう。

そしておっちゃんの下はもう一体いる。

……上空で超デカイタレットを操作している蒼い鱗のドラゴン。

「どっすか、赤龍帝殿。フェニックスの坊っちゃんは」

「えっ……まあ、ボチボチつてとこっすね」

「パねえスねえー。マジ軟弱っす。上級悪魔のお坊ちゃんつてもう少しエレガントなもんだと思ってたんすけど、案外打たれ弱いんっすねえ。超パねえっす」

「そっすね。万年温室育ちの坊っちゃんですからねえ」

『超パねえっすわ』』

……何を隠そうこのドラゴン、ドライグ並みに性格とか口調が軽い。

軽いと言うか、チャライ。

種族上はアーシアの使い魔であるラツセーと同じ蒼スプライト・ドラゴン雷龍の高位ドラゴンだそうな。

……アイツもでかくなったらこんなチャラ男になるのかねえ。

『どーもアーシアちゃんシクヨロでいーす！』

……ラツセー、お前は真っ直ぐに育て。

「ぎやあああああああああああ!!」

あ、ライザーが飛んだ（物理的な意味で）

——

山籠り二日目。

今日も今日とてライザーはドラゴンに追われて雪山を走っていた。

『因みに読者の皆！君達のイメージ力が高ければ、この雪山ではブレイドがウソダンドンドコドーン!!していたりクウガがダグバと殴りあっているのが分かる筈だ！さあ皆も、レッツイメージ!!』

前者は兎も角後者はここに居る皆死ぬだろ！

……因みに俺はレイヴェルと共に休憩を取っていた。

お、3分経ったな。

俺は石を退かして、最近冥界で発売されたカップ麺を啜る。

んー、良い辛さだ。

「……兄は如何でしょうか？」

「んー、わかんねえな。まあぶつくさ文句言う割にはやってるし、後は慣れかね。多分今まで凹んだままだったのは精神的な甘えもあったからだろうな。そういうタイプって一度挫折したら中々立ち上がろうとしないし」

「……そうですか」

「ま、なるようになると思うぜ。安心しろよ」

汁を飲み干して笑うと、レイヴェルの表情もつられて柔らかくなった。

「あー、旨かった。今度ヴァーリに教えてやろうかな」

「あ、あの、イツセー様」

「ん？」

レイヴェルは恐る恐る、と言った感じで、此方にバスケットを差し出してきた。

中を見てみると、パンケーキが。

「食べて良いのか？」

「か、構いませんわ」

「どりゃ……………うん、美味しい」

思わず率直な感想を述べる。

「ほ、本当ですか……………？材料等はここのドラゴンさん達に頂いたのですが、足りないものもありまして……………その、私としては満足に焼けなかつたと言いますか……………」

割りと芸術家タイプなのね。

俺はまたパンケーキを口に放り込む。

「嘘は言わねーよ、マジで美味しい。レイヴェルはホントにケーキ作り得意なんだな」

「つ、当然ですわ！私のパンケーキが食べられるなんて、イツセー様は幸せ者ですわよ！感謝しながら味わってもらいたいですわ！」

「はいはい」

「な、何ですのその反応は!?……折角朝早くに起きて作ったのに……」

「早起きなんだな」

「い、いえ！こんなものでしたら幾らでも作れます！今日はたまたま目覚めが早かっただけですわ！」

コテコテのツンデレお嬢ちゃんだねえ。

ま、バリバリ高圧的な態度に比べたら可愛いもんだ。

……俺にも、妹がいたらこんな感じなのかなあ。

「そーいやレイヴェルって、人間の学生で言うところの辺りなんだ？」

「では特別に教えて差し上げます。日本のハイスクールで言うところの一年生ですわ」

「あー、やつば後輩か」

初めて見た時から小猫ちゃんと同い年っぽい感じだったし。

『だが一部分は圧倒的な差があるな』

『恐ろしい格差社会だ』

お前ら小猫ちゃんの前でそれ言うなよ。

殴られんの俺なんだから。

「そう言えば、今夜リアス様達がこの山へ来るそうですわ」

「リアス達が？」

「はい。何でもこの近くに良い温泉があるそうです」

へー、温泉か………浸かってみたいねえ。

「あああああああああああああああ!!!」

お、ライザーの悲鳴だ。

アイツ良い絶叫芸人になれるぞ。

—————

「—————ハッ、ハッ!」

ライザー・フェニックスは激怒した。

かの、邪知暴虐なドラゴン達から逃げねばと決意した。

ライザーには特訓の意味が分からぬ。

ライザーは、上級悪魔であった。



「グフツ、グフフフ!! リアスの裸体、何としてもこの眼に焼き付ける!」  
今彼を動かしているのは、風呂を覗く。

ただそれだけであつた。

『良い会話を聞かせてもらつたぜ!』

そう、極限状態であつた彼は、昼間のイツセーとレイヴェルの会話を聞いていたのだ。  
スケベ根性が成せる地獄耳、それによりライザーは確固たる決意をした。

——風呂を覗くと。

……………とまあ、そうそう上手く事は運ばないのが小説なんだよなあ。

「ツ!!」

前方からの魔力の砲撃をかわすライザー!

ライザーが激しく前方を睨み付けていた。

「よお、やっぱり覗きに行く気だつたな」

「赤龍帝……………!」

——何を隠そう、俺だ。

もし多分昼間の話を聞いていたら、コイツは覗きに行くだろうと思つて寝たフリをしてたら、案の定だった。

んで先回りして砲撃したんだけど、見事な動きでかわされた。

ライザーは悪びれる様子もなく、俺にこう告げた。

「ふん、温泉に入る女がいるなら、覗かずしてどうする！それが男つてもんだ！」

「言い分は分かる。けどな……………それが貴族のする事かあああああ!!!」

『Welsh Critical Fire!!!』

両手の砲撃ユニット、全身の訪問を目の前のスケベ貴族に狙いを定める！

フルバースト、食らえ!!

「つ、ちい!!」

ライザーは特訓の時以上の敏捷でかわすが、生憎とこれは追尾式だ!

「な、追尾だとお!?!」

「驚いてばっかか?流星暴雨の龍波動!!」

「ぐうおおおお!!!」

挟み撃ちとばかりに放たれた隕石状のドラゴンショットと共にマトモに食らつたら

「イザーだが、やはりと言うか耐えていた！」

「てめえにリアス達の裸を見せる訳にはいかねーんだよ。覗ける者はただ一人だつ!!」

「俺は元婚約者だ!あのデカイ乳を一度も見ないで諦められるか!!俺の立場で考えてみる!」

「気持ちには分かるが、同意は出来ねーな!リアスは俺の物だからだ!!  
エクスプロージョン・ドラゴンショット  
 爆裂の龍波動ツ!!」

「ライザーが放った炎と相殺し、積もる雪を蒸発させた!」

「……つたく、根性なしとは思っていたが、しっかりと根性持つてるじゃねーか!」

「——スケベ根性つてのがよお!!!」

「……まあだからこそ、コイツの倒し方も簡単に思い付く。」

「あ、リアス達が全裸で此方に来てる!!」

「何だとおおお!!」

「……いや、ここまであつさり釣られるとは。」

「隙を見せたな種馬鳥!ここで果てやがれツ!!」

『Full Blast Burst!!!!』

「ぐあああああつ!!!」

透かさずライザーの懐に潜り込んで、ゼロ距離フルバースト!!

……つてしまった! あつちは温泉の方だ!!

「……………」

俺がぶつ飛ばした方へと向かうと、そこには温泉の近くの雪に犬神家状態のライザーがいた。

『モズアマゾンの早贄みたいだな』

上半身何処に行ったんだよ?

つて、それは兎も角……気絶してるだけだな。

「……………イツセー様?」

「っ!」

聞き覚えのある声にそちらを向けば……………そこには、全裸のグレイファイアがつ!!

「ぐ、ぐぐぐ、グレイファイアっ?!」

「どうして(ハハ)に……………」

や、ヤバい、この間のめくるめく夜の光景が鮮明に甦るっ!!

あの時は部屋が暗かったからあれだけけど、こうして見ると……改めて凄い!!

「どう、グレイフィア……イツセーじゃない。来てたのね」

「ん? おお!」

リアスのご登場!

相変わらず良い乳してますなあ!

「あらあら、イツセー君?」

「イツセーさんもいらっしやったのですか?」

「流石イツセーだ。覗きに来たと言うのだな?」

うおお、凄く絶景ですぞ!

やっぱりライザーの魔の目線から守れて良かったぜ!!

「……イツセー様? お兄様?」

この声は、レイヴェル?!

声のした方へと視線を向けると、そこには全裸のレイヴェルがいた。

……こうして見ると、やっぱりおっぱい大きいな。

一周回って冷静になりながら見つめていると、レイヴェルは顔を真っ赤にして――

「イツセー様のエッチイイイイツ!!」

「あつちいいいいいい!!!」

定番の反応、頂きました!

……まあ、これが普通と言うか、何と言うか。

因みに後日。

「リアスの事は諦める。だから、今度一度だけ、リアスの生乳を見せてくれ!」

「死ね! 焼き鳥!!」

下山した俺達は、その場でもう一度激しくバトるのであった。

## 第十章：学園祭のレグルス・ビースト

## MAGIC104 『ヒーローshowと若奥様』

「さあ、ショータイムだ!!」

「「「「「ショータイムだ!!」」」」」

よお皆。イツセーだぜ!

今日は冥界にて『魔法龍帝ウイザードラゴン』のヒーローショーを行ってる最中だぜ。

この決め台詞は俺が何時も使っているものをそのまま流用したんだ。

因みに他の候補としては――

「絶望がお前のゴールだ」

「心火、燃やすぜ!」

「命燃やして、ぶっ潰す！」

「お前を殺す」

……………他にも色々候補があっただけど、全て断らせて頂いた。

特に最後のは何だよ!?

こんな物真似跋扈したら冥界は色々大変な事になるぞ!!

『今ならオプシオンで「……………何なの、この人……………」って台詞も入りそうだな』  
ってのはドライブの弁だ。

それだったらまだ「正義は俺が決める!」とかの方がずっと良いわ。

今回のヒーローショーは今までのと違い、直接俺が演じてる。

普段は代役の人がスーツ着て行ってるんだけどね。



何故かと言えば、今回はサーゼクス様たつての願いだからだ。

この物騒なご時世だからこそ、ヒーローである俺の姿を見せて、子供達を元気づけてくれ……との事だ。

俺としては特に予定もなかったから、そのまま快諾。

何よりそこまでお願いされちゃ、断るわけにもいかないからな。

「フハハハハハ！来たなウィザードラゴン！今日こそ貴様を塩漬けにしてやる！」  
「だったら、お前を砂糖漬けにして倒してやらあ！」

《ドラゴタイム・セットアップ》

「行くぜ、俺達!!」

《スタート!!》

会場のフィールドで、怪人との戦いを演じながら分身する俺達。

それを見て、会場のボルテージは更にヒートアップする！

「いっけー！フレイムドラゴン！」

「頑張れー！ウォータードラゴン！」

「負けるなー！ハリケーンドラゴン！」

「そこだー！ランドドラゴン！」

……と、各分身達も大人気だ。

小さい女の子の視聴者も多いんだけど、どうも女の子達はウオータードラゴンが好きらしい。

ま、そんな事は兎も角……シヨールはいよいよ大詰めを迎える。

「これでフィナーレだ！」

《チヨールイイネ！キックストライク・サイコー！》

「ストライクウイザード!!!」

断っておくけど、演技だからな！

良い子の皆はライダーキックごっこかするなよ、良いな！

爆発をバツクに決めポーズ！

恥ずかしいけどやっぱり外せないよな！

……とまあそんなこんなで、シヨールは大団円を迎えた。

——

「ふい——」

ヒーローショーを終えた俺は舞台裏で一息ついていた。

……これが終わったら次は人間界で学園祭の準備だもんなあ。

男手が足りないから、結構大変なんだよな。

「お疲れさまです。お飲み物をお持ちしました」

「あ、ありがとうございます」

丁度喉が乾いてたから、有り難く頂戴しよう。

「……では、これよりウイザードラゴンのクイズショーを開始します」

「「「うおおおおお！ヘルキャットちゃん!!!」」」

お、小猫ちゃん扮するヘルキャットちゃんと野郎共の喝采だ。

どうにも小猫ちゃんは大きいお友達に人気らしい。

『どの世界にもこういう血色のオタクはいるのだな』

まーな。

それに愛くるしいからな、小猫ちゃん。

最近ではハティとスコルの二匹と俺の膝を取り合ってる。

こうして見ると、大分心を許してくれたんだなと染々するよ。

「すいません。ちよつとトイレに行ってきますね」

「分かりました」

……数分後。

「スツキリしたー」

『どっちの意味でだ?』

こんなところで自家発電するかよ!!

ドライブグに突っ込みつつ戻ろうとしたところで、通路から騒ぎ声が聞こえてきた。

「やだあああつ!!」

何だ一体?

俺はちらりと隅から覗いてみると、裏口で子連れのお母さんらしき人とスタッフが何やら話していた。

「ウィザードラゴンに会いたいよお!!」

子供が地団駄を踏んでぐずっており、お母さんもどうしたら良いか分かんない……そんな感じだな。

「すみません……握手会とサイン会の整理券配布は既に終了してまして」

「そうなんですか……もう終わっちゃったんだって」

スタッフのお兄さんが申し訳なさそうに言うと、お母さんは子供を宥める様に告げ

た。

でも子供は納得できず、一層眼に涙を溜めて泣き叫ぶ。

俺はそつと立ち去ろうとしたが……その子の手に握られていたウイザードラゴンのソフビが眼に写ると、足が止まった。

「……………」

『…………行けよ相棒。放っておけないんだろ』

…………やっぱ俺って子供の泣き顔に弱いよなあ。

再び変身すると、そのままその場へと歩き出す。

「どうかしたんですか？」

「あ、兵藤さん……………」

俺の声に親子とスタツフさんが振り返った。

「ウイザードラゴンだ!!」

子供は一転して笑みを見せてくれた。

それに手を上げて答えつつ、スタツフさんの説明を聞いた。

「実は、此方のお母さんとお子さんが整理券配布に間に合わなかったそうで……………」

それはさっき聞いてました、とは返さず、俺は子供と同じ目線まで身を屈める。

「君、名前は？」

「……リレンクス」

「リレンクスか、良い名前だな。俺に会いに来てくれてありがとうとな。……すいません、何か書くものとかありますか？」

「え、ああ、ありますけど」

スタッフさんが取り出したマジックペンを受け取る。

俺はリレンクスが被っていた帽子を指差す。

「この帽子、これにサインしても大丈夫か？」

「……うん！」

俺のデザインの入った帽子だったが、リレンクスは何度も頷いてくれた。

まあ未だに下手つぴな悪魔文字だけど、それでも努力を重ねてるんだ。

文字だろうと、こうやって真っ直ぐな眼で俺を見てくれる子供の希望になるんだ。

……頑張らないとな。

俺はサインを書いて、そのままリレンクスの頭に被せた。

リレンクスはキラキラした笑顔で帽子に何度も触れていた。

「有り難う御座います！」

お母さんがお礼を言ってくれた。

俺はそれを受け取り、リレンクスの頭に手を置いた。

「リレンクス、男が簡単に泣いちゃ駄目だぜ？ 転んでも、挫けても、その度に立ち上がった女の子を守る！ つて勢いで、気持ちを強く持て」

「……僕でも、ウィザードラゴンみたいになれる？」

「勿論だ。俺だつて最初は何度も挫けそうになった。でも、君の中にある希望が消えない限り、何処までだつて行ける。……じゃあな」

俺はリレンクスの頭を撫でると、スタッフさんとその場を離れる。

「兵藤さん、なるべくこういう事は控えてください。全ての方に対応するのは無理ですから……そこに特例を作ってしまうと……」

「……ですよね。すいません、軽率な真似をしてしまつて」

確かにこればかりは俺が悪い。

俺は本当に申し訳ない気持ちでスタッフに謝つた。

スタッフもそれを分かってくれたのか、それ以降はなにも言わずに持ち場に帰つていった。

……あの人達だつて、仕事である以上は線引きしている。

全てのの人に夢を与えようとしても、それが叶わない事だと分かった上で、一生懸命にやってる。

特例を俺の独断で作るのは、スタッフ全員の思いを裏切る行為だ。

……………でも、泣き顔を見て去ることも出来ない訳で。

『フン。相変わらず、損な生き方しか出来ん男だな』

『だが、それが相棒らしいと俺は思うぞ』

ありがと……………そう思っていたら、

「かつこ良かったわよ、イツセー」

そこにはリアスがいた。

リアスは俺の方へと歩み寄ると、俺の頬を撫でてくれた。

「確かに軽率だったけど、それでも貴方はあの子の希望になれたわ」

「……………ありがとな、リアス。って、こういう場所じゃ部長の方が良いのかな」

「……………そうね。少し寂しいけど」

複雑そうなりアスに苦笑いを浮かべると、通路の奥から見知った女性が。

「ごきげんよう、一誠さん。どうしたのかしら？」

「お、お母様!?! ミリキヤスも一緒だったの?」



何と部長のお母様だった。

リアスは驚きから声の上擦るが、俺はその横の少年——ミリキヤスに手を上げて挨拶した。

「よ、ミリキヤス。元気そうだな」

「お久しぶりです、イツセー兄様！イベントとても楽しかったです！」

兄様だつて……なんか照れ臭いな。

「あらい誠さん。私の前でもリアスと呼んで構いませんわよ？」

「ぎ、聞いてらしたのですか?!」

さっきの会話聞かれてたのか!?

そう思っていたら、ヴェネラナ様は上品に笑った。

「いえ、この間リアスが貴方に名前で呼んでもらえた嬉しそうに話していましたから」

「あ、そんなんですか……」

最初は他人と壁を作っていたからこそ迷っていたんだけどな。

でもトラウマを何とか乗り越えたので、こうして俺はリアスを名前で呼ぶことにした。

本人もそう望んでいたからな。

「一誠さんから歩み寄ってくれたのは母としても嬉しいですわ」

「いえ、リアスき…リアスや皆が歩み寄ってくれたお陰でもあります」

「ふふ、でもこうして見ると、随分見違えましたわね」

「そ、そうですか？」

「ええ。——やはり、女を知ることが重要ですわね」

「ブフオツ!!」

俺は思わぬ発言に吹き出してしまった。

ち、ちよつと待つて…何でヴェネラ様がそれを!?

「な、何故それを!？」

「先日グレイフィアから聞きましたわ」

グレイフィアアアアア!!!

「な、イツセー!そんな事私達は聞いてないわよ!!」

『まあ聞かなかったしな』

『それにコイツら、一歩進んでも普段と変わらなかつたからな』

まあ、言わなかつたのは聞かれなかつたのもある!

けどこう言うのは何と言うか、あんまりべらべら語ることでもないし!

「一誠さんは問題ないとして…後はリアスね」

「ツ」

おおっと、ヴェネラナ様の雰囲気が変わったぞ。

リアスは一步下がった！

「リアス。あなたがいつまでももたもたしているから出遅れたのですよ？唯一の救いは一誠さんがアレを望むことですが……。彼のような魅力的な殿方に他の女性が心を奪われるのは世の常。今のままではあなたは最後になることも考えられます。そこは理解していますね？」

魅力的と言われた！

そんなに魅力的かなあ？

『アマゾンにレジスター付けたような存在なのにな』

『猿に知恵を付けたような存在なのにな』

うん、取り敢えずお前らが人を貶している事はよく分かったぞ。

例え方は置いといてだ。

「は、はい」

「……………まさかとは思いますが、二人でのお出掛けもないのですか？」

「…………」

この質問での沈黙は肯定だ。

買い物とかとは違うんだろうな。

「誘わなかったのですか？自ら」

「よ、予定が合わなくて……」

「だんだん見えていて可哀想になってきたぞ……」

『まあまあヴェネラナ卿。その女にも自分のペースつてのが……』

「黙りなさい」

『ハイ』

弱すぎるだろお前!!

全然役に立たねえ!

「強引な所は私に似たと思っただら、肝心な所でダメダメじゃない……グレモリー家の次期当主だと言うのに。一誠さん、これからリアスと二人きりで話がありますので、ミリキヤスを連れて席を外してもらえるかしら」

「よ、喜んで!」

この笑顔に逆らったら死ぬ!!

「ミリキヤス! あっちで遊ぼうか!!」

「はい! 僕は眼鏡の人を演じるので、イツセー兄様は氷室さんをお願いします!」

やだ、この子強か過ぎ。

## MAGIC105 『学園祭へのカウントダウン』

『相棒が土下座してから翌日の出来事だ』

してねーよ!!

読者の皆様勘違いしちまうだろ!?

……グレイフィアとの一件は根掘り葉掘り聞かれたけどな。

以下、回想

『まさかイツセーがもうそこまで進んでいたなんて……』

『恋人同士としては当然……でも、やっぱり羨ましいですわ』

女性陣に囲まれ正座する俺。

情けない? 言うな。

寧ろこの光のない目線の、所謂針の筵状態で堂々といれる奴なんているかよ！

『だがこれでハッキリさせなければならぬ事が増えたな』

『は、はい！』

『……これは極めて重要』

え、何かあるの？

一体何が――

『『『』』』――次にイツセー（君／さん／先輩）に抱かれるのは誰か』』』』

………それかよおおおおお！

『で、どんなプレイでしたんだ？』

『ど、どんな?! それ聞く意味あるのか?!』

『当然ですわ! 次にイツセー君とエツチする時の為の予習です……どうせなら今こ  
こで』

『朱乃さん!?!』

服を脱ぎながら怪しい足取りで俺へと向かうのは朱乃さん!

だがそれはリアスと小猫ちゃんに阻まれた!

『させると思う?』

『抜け駆け禁止です……』

『ただ子作りするだけでは味気がないだろう? だから次はどのようなプレイで望むのかどうか、私も勉強しなければならぬからな』

『子作りはしてない! ちゃんと避妊具は付けてます!!』

『でもエッチをしたのでしょ?』

避妊具付けてても確定で避妊出来てる訳ではないけどもな!

エッチはしましたけど!

『だとしてもだ! アーシア、私達も負けてはいられないぞ!』

『はい!……イツセーさん、私も、何時だってイツセーさんに抱いていただけ覚悟です

!』

『その意気だアーシア!』

また間違つた方向で覚悟決めてる教会コンビ!

桐生の奴だな絶対! アイツ今度シめる!!

『そんな心意気いらなくて! せめて学生時代ぐらひは清い青春を——』

『『『『だからこそイツセー(君/さん/先輩)に抱かれない(んです)!!!』』』』

それはおかしいって皆さんんんんんんん！！！！

### 回想、終わり

とまあ大変だった訳で。

今は落ち着いてるけど、気を抜いたら押し倒されてそうで怖いんだよなあ……いや、そんな事はないか、多分。

で、そんなこんなで俺は今何処にいるかと言うと、一年の教室の前にいた。

ここは小猫ちゃんとかギヤスパのクラスだ。

実はこのクラスに今日レイヴェルが転校してきたんだ。

しかし彼女はリアス以上のコテコテのお嬢様、一般Peopleが通う学校は初めてなんだとか。

そんなレイヴェルがこの学舎で馴染めているかどうか、気になって来た次第だ。

「あら、イツセーも様子見？」

「ん？」

ここで後ろから声を掛けられたので、振り返ってみると、リアスが立っていた。



「リアス……部長もですか？」

「ええ、ちよつと気になつてね」

そう言うリアスと共に教室を見てみると——いた。

「フェニックスさん、教科書はあるの？」

「フェニックスつて、珍しい名字だね。かつこいいわ！」

「ギャー君に続いて外国の転入生が入ってくるなんてこのクラスで良かったわ！」

すげえ女の子に囲まれてる。

まあ外国からの美少女転入とあれば、アイドル扱いも免れないか。

『おーほつほつほつ！何でも質問なさい！この私が答えて差し上げますわ！』

……なんて、タカビーな彼女の事だからそう高圧的な物言いでもしてるのかと思つていたら、かなり四苦八苦してるご様子で。

「あ、あの」とか「えつと……」だとかしどろもどろになつていた。

視線もあつちやこつちやに行つて、すげえ困つてるな。

その視線が俺とリアスを捉えると、レイヴェルはクラスメイト達に一言言つてから、俺達の方へと近付いてきた。

レイヴェルは俺とリアスの手を取ると、そのまま教室を出てしまう。

曲がり角を曲がった所で手を離してくれたが……

「どした？」

何が何だか分からないので一応聞いてみる。

するとレイヴェルは恥ずかしそうに頬を染めた。

「……て、転校が初めてですので……どう皆さんと接したら良いのか分からなくて

……。わ、私、悪魔ですし、人間の方々の話題も見つからなくて……」

……確かにそれはそうだな。

悪魔で、しかも上級一族のお嬢様が人間界の平民が通つてる学校にいきなり転校、そ

りや話題探しも四苦八苦して当然か。

「会話をしたくないわけではないのでしよう？」

「も、もちろんですわ！わ、私だって成長しているんです！貴族として、平民の方から何かを学ぶことも大切だと思っっているんです！」

おお、殊勝な心掛けだ。

あんだけへタレてたライザーとは違うなあ。

……まあ、アイツも話によれば今度レーティングゲームに復帰するらしい。

つと、今はレイヴェルだな。

「……それなら」

少し間を置いて考えると、ある一計が浮かんだ。

きよとんとするレイヴェルに一言入れてから教室に戻ろうとした時だった。

「……先輩？」

おお、良いタイミングで来た。

様子を見るに多分俺達を追ってきた……って所かな？

「丁度良かった。小猫ちゃんに頼みがあつて」

「……何ですか？」

「レイヴェルの話し相手……って言うか、学校生活「めわの」フォローをして上げてほしいんだ。同じ学年で、同じ年な訳だし。そうすりゃレイヴェルも会話の調子とかも理解できるだろうから……頼まれてくれるかい？」

小猫ちゃんは学園アイドルの一人だし、クラスメイトとも上手くやっていると聞くから、そんな小猫ちゃんを介して会話を繋げたら、何とか打ち解けるんじゃないかなと思っただよ。

最高でしょ？天才でしょ!?

……が、当の小猫ちゃんはどうにも不機嫌なご様子だった。

眉を寄せ、口が三角になってらっしやる……可愛いけど、何かマズったか？

「……………」先輩がそう言うなら、別に良いですけど」

……微妙に間が大きかったけど、流石小猫ちゃん！

「うし、レイヴェル！暫く小猫ちゃんが君をフォローして……………」

「……………へタレ焼き鳥娘」

と、小猫ちゃんは俺の言葉を遮ってぼそりと呟いた。

……………ん、んんん？

何だこの、お、重たい空気は……………」

「い、今、何と仰いましたか……………」

「……………へタレ」

レイヴェルは青筋を立てながら聞くと、間髪入れずに小猫ちゃんは返した。

ちよ、な、何が起こってるの!?

それに小猫ちゃんも何で怒ってるの!?

内心パニックになる俺を余所に、二人は更に言葉の応酬を交わす！

「あ、貴女ね！フェニックス家の息女たるこの私にその様な物言いを……………」

「……………そんな物言いだから、いざという時にへタレるんじゃないの？もつと決心を持っ

て人間界に来たと思つてたけど………イツセー先輩の手を煩わせるなんて………世間知らずの焼き鳥娘」

ブチン

………何かが切れた。

レイヴェルは変なオーラを靡かせ、ロール髪がその影響でうようよ蠢いている！  
対する小猫ちゃんも負けじと可愛いジト目で睨み返す！

「わ、私はイツセー様の手を煩わせる事なんて………この猫又は………！」  
「………焼き鳥」

ちよ、何この二人？

水と油!?グドンとツインテール!?音也と過去キン!?

何にしても何でこんなにいがみ合う事に!?

「あううううつ………イツセー先輩、こ、怖いですう!」

「おい、俺を壁にナズエミテルンデイスするな!俺だつて隠れたいんだぞ!!」

俺を盾に隠れるギヤスパーにそう突つ込む!

ええい、ここは言い出しつぺの俺がどうにかするしかないか!

「二人とも落ち着いて！同じクラス同士なんだから仲良く！……何か困ったら、何時でも相談してくれて良いからさ」

「どっちの味方ですか!?!」

ハモったよ！

君達実は仲良くなれるタイプじゃね!?!

取り敢えず、リアスが話を纏めてくれたので、何とか場は収まった。

聞けば小猫ちゃんもちゃんとサポートしてくれてるみたいだし、何とか安心。

レイヴェルの学園生活も、悪くないスタートを切れたんじゃないかな？

—————

「それでは、作業を始めましょう」

『おーっ!』

時は流れて放課後。

俺達はレイヴェルの入部挨拶をの後、学園祭に向けての準備作業に取りかかった。

出し物は皆の案を纏めた結果、この旧校舎全体を使った催し物を行うことになった。

旧校舎も中々広いから、教室全部を使えば、お化け屋敷や喫茶店、占いの館にオカルト研究の報告まとめなどを一手に行えるという事で、この案が採用された。

……でも、

「ちえー、ヴァンガード大会の催し物でも良いと思ったんだけどな」

「いや、多分ソーナ会長はイエスとは言わないんじゃないかな」

「まあ家で散々やつてるからな……お前の速攻は中々怖いんだよな」

「それ凌がれたら僕も次のターンが厳しいんだけどね。あ、イツセー君、そっち持つて」  
俺達男子は外で大作業を行ってる。

ギヤスパー？アイツは中で女性陣と衣装作りや模様替え作業に精を出してるよ。

「あー、勇敢<sup>フレイク</sup>つて基本手札三枚以下を維持しなきゃ駄目だもんな」

「現状黒歌さんの使う支配がかなり天敵なんだよね」

「いや、あれは俺から見ても可笑しいからな。ハンデスとコントロール奪取にパワー・クリティカル増加も加わってるから、どのクランから見てもブツ飛んでるって」

俺だつて何度か凌げずに負けたからな。

何て言う（ほぼヴァンガード関連の）会話を繰り返して、俺達は大作業で汗を流す。

「……そう言えばイツセー君、デイハウザー・ベリアルって知ってるかい？」

「あー、棍棒振り回してる闇落ちした光の巨人か？」

「それ違う。それレイオニクス」

「冗談だよ。名前だけなら聞いたことあるぜ。レーティングゲームの王者だっけか？」

何度かリアスと朱乃さんがビデオを見て研究してたのを見たことがあるだけだ。

木場は頷いた。

「うん。正式なレーティングゲームのランク一位。ベリアル家の当主であり、ベリアル家始まって以来の怪物——長きに渡って王座を守っている事から、皇帝エンペラー・ベリアルと称されてる方さ」

『魔王ではないと言うのに、随分と仰々しい敬称だな』

言いたい事は分かるけど、この人の場合その敬称を授かって然るべき人だと言うのは聞くんだよな。

「トップテンに入れば英雄とさえ称されているけど、ランキング五位から上は不動とも言われているんだ」

「確か……三位のビィディゼ・アバドン、二位のロイガン・ベルフェゴール、んで一位のディハウザー・ベリアルは魔王に匹敵する実力を持つ最上級悪魔………だっけ？」

「うん。そのお三方は大規模な戦争でも起きない限りは動かないと言われているよ」

「……中々遠いな。リアスの夢の実現には」



リアスの夢はレーティングゲームの覇者だ。

つまりこのままレーティングゲームを続けると言うことは、何れこのお三方とぶつか  
るって事だ。

「もし仮になんだけど、イツセー君はこのお三方と戦うことになった時、勝算はあるかい  
？」

「勝算……？ どうだろうな。勝負なんて実際に戦ってみると、予想の一つや二つ、覆され  
て当然だからなあ」

まあこの人達の戦い方を詳しくは知らないってただけだけでも。

「それにその時の自分や相手の精神状態次第って所もあるからな。例え格上が相手で  
も、万全の状態で小さな隙を突っついていけば、そのまま倒せることだってあるし」

「精神状態、か……。それは確かにそうだね」

「ま、全部ドライグの受け売りだけだな」

トンカチをクルクル回しながら、俺は苦笑いする。

「デイハウザー・ベリアル、か……。何時かは戦うべき時が来るんだろうな。」

「ま、先の事を考えても仕方がないだろ。今は——サイラオーグさんだ」

「そうだね」

木場もこれには大きく頷く。

「……イツセー君。悪いんだけど、今日も特訓に付き合ってくれるかい？」  
「ん？別に良いけど……けどお前も大概だよな」

俺は修学旅行が終わって暫くしてから、木場との特訓に勤しんでいる。

それだけなら大したことはないんだけど……

「まさか魔龍進ウイザード・プロモーション化まで使わせるなんてさ」

そう、木場は俺の新しい力を使って来てくれと言ってきたのだ。

結果は翻弄されまくりであり、昨日なんてマキシム・ランド・ルーク蹂撃の巖龍戦車のちよつとした攻撃が当たったんだけど、それだけで木場は（疲労もあつたらうけど）気を失った。

「……この間はハティのお陰で何とか切り抜けたけど、恐らくジークフリートは何かを隠してる。あのまま隠し種を使われていたら、僕では勝てなかった」

木場はそう言った。

向こうも恐らくは警戒してるだろうから、同じ攻撃は食らわないだろうしな。

「それに、今の僕の技量ではハティのあの力は大きすぎる。あの力を振るうに相応しい実力——上のステージに進まなければいけないんだ」

「……ま、死なない程度に頑張ろうぜ」

因みに魔龍進ウイザード・プロモーション化に関しては他のメンバーとの特訓でも使っている。

……駒の特性にドラゴンの力を合わせるってのは思ってた以上に合致していたらしい。

ま、その分弱点も明白なんだけどね。

と、

「祐斗、イツセー、作業は順調かしら？」

「……でリアスのご登場か。」

「もうちよつと掛かりそうかな。ゴメン、ちよつと無駄話しちやつてて」

「そうじゃないのよ」

え、違うのか？

「サイラオーグの執事が、貴方に個人的にお願いがあるんですって」

「……ええ」

# MAGIC106 『獅子の過去』

後日、俺はリアスと共にリムジンに乗って冥界の大地を走っていた。走っているのはシトリー領だそうなのよ。

広大な自然を窓から眺めていると、リアスが俺に語り始めた。

「今回の話は、お母様経由なのよ」

「ヴェネラナ様のこと？」

俺がオウム返しに尋ねると、リアスは頷いた。

「サイラオーグの執事が貴方に頼みがあるというのは話したわね」

「うん」

「その話をグレモリー家を経由したのよ。それをお母様が了承したって訳」

「成程」

そう言えばヴェネラナ様ってバアル家だったな、その縁でか。

「それで今向かっているのは？」

「病院よ。シトリーは医療機関が充実していて、今から行くのは冥界でも名だたる病院

の「つよ」

「病院？」

誰かが入院してるのか？

『主の性病を治してくれとか頼まれそうだな』

お前殺されるぞ、ヴェネラナ様とかサイラオーグさんとか。

ドライグの下らないボケに突っ込んでいると、目の前に大きな建物が。

あれが病院か……そう思っていると、送迎用の玄関にリムジンが止まり、俺達は下りた。

そして俺達を出迎えたのは、執事服を着た初老の男性。

「お待ちしておりました」

「案内してもらえますかしら？」

リアスがそう言うのと執事さんは「どうぞ、こちらに」と歩き出していく。

案内についていき、病院内を進んでいるとリアスが口を開いた。

「イツセー、私の母がバアル家の出であることは知っているわよね？」

「ああ。確かバアル家現当主の姉に当たるって聞いているけど」

「腹違いなのだけれどね。サイラオーグのお父様が本妻の息子、私の母が第二婦人の娘」

「腹違い……」

なんて複雑なワードだろうか。

それだけで穏やかじゃなさそうだ。

「そして、私のおばさま——サイラオーグのお母様は元七十二柱であり、上級悪魔の一族、ウアプラ家の出なのよ」

「ウアプラ……獅子を司る名家だったっけ」

「その通りよ」

まあ夏休みの時にあれだけ教えられたら覚えますよ。

獅子って言ったら吼介を思い出すな……案外アイツもウアプラと関係あったりして。

そんな会話をしているとある一室の前にたどり着く。

「こちらでございませす、リアス様」

執事さんに言われて、リアスは部屋へと入っていく。

俺も後に続いていくと、個室のベッドにキレイな女性が眠りについていた。

「……きげんよう、おばさま」

リアスは眠る女性に悲哀に満ちた眼差しを向ける。

『ウホッ、いい人妻……デユクシッ!!』

『止めんかこのエロトカゲ』

良くやったドラゴン。

俺は花束を執事さんに渡すと、執事さんは口を開いた。

「この方はミスラ・バアル様。サイラオーグ様の母君でございます」

……やっぱりか。

サイラオーグさんのお母さんはベッドで静かに眠っていた。

それだけならまだ良いんだけど、呼吸器を付け、傍には物々しい機械が置かれているので、あまり良い状態ではないのだろうと言うのは目に見えていた。

不意に、俺の脳裏には過去の光景が鮮明に蘇った。

………父さんと母さんの時と同じ、だな。

『相棒』

分かってるよ、今はトラウマに使ってる場合じゃない。

「今日、ここへお呼びしたのは他でもありません。赤龍帝殿………ミスラ様を目覚めさせるためにご助力願えないでしょうか？」

「…その前に一つお尋ねしたい事が」

「私に答えられる事でしたら」

「この依頼、どうしてあなた個人からなんですか？」

俺は予てより思っていた疑問を口にする、執事さんは口を噤んだ。

「バアル家の次期当主の母親となれば、この依頼はバアル家が正式に出すはずだと思つて……………それが執事さん個人の依頼となれば、何か事情があるのかと」

すると、執事さんは拳を握り肩を震わせながら答えた。

「…………それは、バアル家の者がサイラオーグ様を疎ましく思っているからでございます…………。シトリー領の医療機関に移したのもバアル領ではミスラ様のお命を狙う者が現れる可能性が高いため御座います…………！」

「…………暗殺？」

ちよつと待て、何で同じ家の人がこの人を殺そうとするんだ？

…………一体どういう事情だよ、それ？

『サイラオーグ・バアルが関わっている事か』

「…………ええ。サイラオーグはこれまでの経緯から疎まれているのよ…………特にバアル家の者から」

ドライグの言葉を肯定したりアスは、そのまま訥々とサイラオーグさん親子の事情を語った。

————



サイラオーグさんはバアル家現当主のお父さんと獅子を司るウアプラ家のお母さんの間に生まれた。

無事に出産されたとき、次期当主が生まれたと周囲は大変喜んだそう。

——だが、それは束の間のこと。

サイラオーグさんは魔力が無いに等しく、バアル家の特色である『消滅』の力を持っていなかった。

バアル家当主は魔力に恵まれ、『消滅』の力を持つことが当然とされてきた……由緒正しき上級悪魔のお家というプライドもあったんだらう。

そのため、そのことを知った周囲の者の反応は一転。

魔力と滅びを持たずして生まれてきたサイラオーグさんと、その子を産んだ母親であるミスラさんは蔑まれるようになる。

……欠陥品を生んだ、バアル家の面汚しと。

当時のグレモリー家もその噂を聞き、ヴェネラナさんが二人をグレモリー領に保護しようとしたが、バアル家がそれを許さなかった。

その頃は滅びの力を色濃く受け継いだサーゼクス様が活躍していたこともあり、バア

ル家としてはグレモリー家が気に入らなかつたとの事だ。

本家の子が特色を受け継がないで、嫁にいった者の方に遺伝した……それに対する僻みも含まれていたんだろう。

それにバアル家は大王。

つまり、世襲でなくなつた現魔王を除けば、家柄的にはトップに位置する家——  
故にプライドも相当高い。

周囲の目も意識してしまう家柄である以上、サイラオーグさんとミスラさんはバアル家にとつて厄介者でしかなかつた。

その後、ウアップラ家がサイラオーグさんとミスラさんの帰還を求めたが、バアル家はそれすら許さなかつた。

家の恥晒しを外へと出す訳にはいかない——それがバアル家の総意だつた。

しかもそれを言ったのが現当主……つまりサイラオーグさんの父親。

実の親、夫にすら見捨てられたのだ。

結局ミスラさんはウアプラ家の援助も断り、僅かな従者を伴ってバアル家の辺地へと移り住んだ。

だけど今まで貴族として生きてきたミスラさんにとっては、大変な生活であったことは想像に難くない。

そして幼いサイラオーグさんは魔力を殆ど持つていなかったが故に、同世代の悪魔達から苛めを受けていた。

悪魔は魔力を持つて当然の生き物、だからこそ魔力を持たないサイラオーグさんは彼らにとっては異端に映ったのだろう。

当然子供であるサイラオーグさんは涙を流しながら家に帰る事もあったそうだ。

だがミスラさんはその度にサイラオーグさんに強く言い聞かせていたそうだ。

——魔力がなくとも、あなたには立派な体があります。足りないとおもうのなら、代わりとなる何かで補いなさい。

腕力でも、知力でもいい、それを補ってみなさい！たとえ、魔力がなかりうと、滅びの力がなかりうと諦めなければいつか必ず勝てるから。

その言葉は今でもサイラオグさんの心に残っている大切なものだそうだ。

その裏、サイラオグさんに見られない場所でミスラさんは何度も謝り泣き続けていたという。

何度も謝り自分を責めていたそうだ。

それを偶然知ってしまったのか、察したのかは定かではない。

獅子は——その日を境に泣く事を止めた。

——

「サイラオグ様は自ら厳しい修行をこなし、ご自身を鍛えられたのです。何度倒れようとも立ち上がり、向かっていくようになりました」

自分の運命を呪うことはせず、ただ自分に足りないものに立ち向かっていく……倒れても倒れても立ち上がり続ける。

言葉で言うだけなら簡単だ、でもそれを実行すとなれば、相当な覚悟が必要だ。

それに、言葉だけで実現するほど、現実は甘くも単純でもない。

「そして、サイラオグ様は夢を掲げたのです。——実力があればどのような身の上でも夢を叶えることが出来る冥界を作りたい、と」

悪魔の世界は基本的に実力社会……とは言われてはいるけど、上流階級やそれ以外となると話は違ってくる。

どれだけの力があるうと、その出自が小さければ望みを叶える事すら出来ない血統社会でもある。

それを変えるため、サイラオーグさんは魔王を志すようになった。

だけど、ある時に異変は起きた。

それは、サイラオーグさんが中級悪魔と良い勝負が出来ようになった頃だった。

「悪魔がかかる病の一つなのよ。その病気にかかると深い眠りに陥り、目を覚まさなくなる。次第に体も衰退していき死に至るの。症例が少ないから原因も治療方法も分かっていないわ。今出来ることは、こうやって人工的に生命を維持することだけ」

リアスが寂しげに目元を細目ながら言った。

治療方法を求めて冥界の名だたる病院を全て回ったそうだが、それは見つからず。

それでも、サイラオーグさんは突き進んだ。

「体を鍛え上げたサイラオーグはバアル家に帰還して、彼の父親とその後妻の間に生まれた弟を下したのよ。そうして、彼は次期当主の座を得た」

『恐らくはその弟は滅びの魔力を持っていたのだろうか』

……もしそれが真実なら、今のサイラオーグさんに敗北は許されない。

誰かに負けたと分かれば、バル家はまたサイラオーグさんに見切りを付けるはず、それに今もこうして安全とは程遠い状態な訳だし。

波乱つて言葉じゃ片付けられないな。

「赤龍帝殿。貴方は他者の精神世界には入れる魔法を扱えるとお聞きしました」

「ええ」

俺が頷くと執事さんは深々と頭を下げて言った。

「どうか……どうかミスラ様の治療にご助力を……。治療方法が分からない今、僅かな可能性でも、それにかけるしかないのです……」

「イツセー。私からもお願いするわ。おばさまを治すために力を貸してくれないかしら？」

「……………分かった。試してみる」

俺は懐からエンゲージリングを取り出し、眠っているミスラさんの指に嵌め、腰のドライブに翳した。

《エンゲージ・プリーズ》

すると、その場に魔法陣が現れた。

「イツセー。私も付いて行ってもいいかしら？」

「ああ。じゃ、行こう」

リアスが頷いたの見て、俺達は魔法陣へと飛び込んだ。

——

「つと」

無事に着地！

立ち上がった俺の隣で、リアスは物珍しそうにキョロキョロしていた。

「ここが……」

「そ。アンダーワールド」

「……不謹慎だけど、何だか新鮮な気分ね」

まあ普通は来ない場所だしな。

……つても、辺り一面真っ白な世界だ。おかしいな、普通は何かの光景が映るはずなんだけど。

だがその空間をじわじわと黒い空間が侵食していた。

「これは……」

『あれがアンダーワールドを満たせば、この女は死ぬ。景色が白一色なのは、この女の意識が眠っているからだろう』

「マジか。じゃあ早いところ目覚めさせないと」

「…ってイツセー！このドラゴンは!？」

俺の隣に現れたドラゴンに警戒の眼差しを送るリアス。

「ドラゴン、行き成り予告なしに現れるなよ。リアスが吃驚しちゃうだろ」

『フン、気付かなかったこの女が悪い。それに予告すれば驚かす意味がないだろう』

「…ってやっぱ確信犯かよ」

「……まさかこのドラゴンが」

「そ、俺がサバトの儀式で生んだファントムだよ」

『こうして面と向かって会うのは初めてだな、リアス・グレモリーよ』

ドラゴンがそう言うと、リアスはまじまじとドラゴンを見つめた。

『……ジロジロ見るな。鬱陶しい』

「あ、ごめんなさい。…ファントムとはいっても、現実のドラゴンとそう変わらないのね」

『…それよりこの女を探すのだろう。さっさと動いたらどうだ』

それもそうだ。



取り敢えず俺とリアス（とドラゴン）は歩き出す。

「でもどうして貴方までここに？」

『ただの暇潰しだ』

「暇潰しって……」

「まあまあ。……リアス、あそこ」

数分後、俺達は椅子に座っている一人の女性を見つけた。

「おばさま……」

「えっと、ミスラさん？」

俺達が声をかけるが、ミスラさんはうんとも言わない。

「これって、病の影響か？」

『…意識まで完全に眠っているのなら厄介だな。強引に起こせば現実にも影響が出ると

も限らん』

「そんな……」

「なあドラゴン。何か方法はないのか？」

『知らん、そんな事は俺の管轄外だ』

と語っていると、突如としてミスラさんの周囲から閃光が迸った！

「なっ——」

驚く暇もなく、俺達はアンダーワールドから弾き出された！

倒れこんだと思ったら、目の前の景色が病室に戻っていた。

「…リアス、怪我はない？」

「ええ、大丈夫よ」

一体何で…そう思っていると、

「大丈夫か、二人とも」

「…え？」

傍らから声をかけられ、そちらを振りむいた。

そこにいたのは——

「母から弾かれるとは、少し驚いたぞ」

なんとサイラオーグさんだった。

## MAGIC107 『決意と進展』

「話は聞いている。母の治療の為にに向いてくれた事、礼を言う」

ミスラさんのアンダーワールドから弾き出された俺達に彼——サイラオーグさんは手を差し伸べてきた。

「いえ、気にしなくても良いわ。それに……」

「そんなに貢献できたとも言えないって言うか……」

リアスはその手を取るが、その顔は冴えない。

かく言う俺もなんだけどな。

だけどサイラオーグさんの声音は明るいものだった。

「いや、その心遣いだけでも十分だ。本当にありがとう」

いやー、ホントに良い人だな。

やっぱり申し訳なさが勝っちゃうよ……。

「だが、ゲームは別だ。今回のゲーム、全力のお前達と是非とも戦いたいからな」

「その為に、イツセーのあの力も許可したのね」

「ああ」

そう、本来ならば公式・非公式問わず俺の魔龍進ウイザード・プロモーションは使えない筈であった。

理由に関しては、本来昇格プロモーションは主の許可がなければ出来ない物であるにも拘らず、俺のこの力はそれを取る必要もなく昇格した駒の力を揮える——所謂チートだからだ。

その為、俺に関しては今後のレーティングゲームにおいては魔龍進ウイザード・プロモーションは使用出来ない事になっていた………んだけど、今回は使用が許可された。

そう懇願したのは他でもないサイラオーグさんだった。

全力戦闘が出来る状態である俺たちと戦った上で勝ちをもぎ取る——それがこの人の願いなんだ。

「俺には肉体こしかなかった。消滅の魔力を持って生まれなかった以上、俺には勝つことしか許されない、負ければ今まで積み上げてきたもの全てを失う………恰好は悪いが、これが俺の戦い方だからな」

「カッコ悪くないですよ」

俺はサイラオーグさんの言葉を否定して、拳を突き出す。

「カッコ悪いって言う奴らは、言わしておけば良いんです。大事なのは、自分の心に決めたものを貫き通す………そうじゃないっすかね？」

俺はおどけて笑うと、サイラオーグさんも釣られるように笑い、俺に拳を合わせてきた。

「その通りだな。今度の試合、俺は持てる全てをお前達にぶつける」

「望む所ですよ。俺も、全力でぶつかりますから」

「いい答えだ……今から試合が楽しみで仕方がない。兵藤一誠、楽しみにしているぞ！」  
その後、サイラオーグさんと執事さんに別れの挨拶をして、俺とリアスは帰路についた。

「リアスもとんでもない人と同期になったな」

「そうね、でも私も負けるつもりはないわ」

そう語るリアスの目には闘志の炎が滾っていた。

「リアス」

「？」

「俺、絶対に君を勝たせてみせる——約束だ」

俺はリアスの手を取って笑みを見せる。

「……ええ。イツセー、私、貴方と出会えて——」

不意にリアスの顔が俺へと近づく。

二人の距離がゼロになる——

「……………電話だ」

「……………電話ね」

前に俺の携帯が鳴った。

リアスはふくれっ面になりつつ離れた。

こうしてみると、やっぱり年相応だよなあとはいつつ携帯の通話ボタンを押す。

『おおいッサーか!!』

「吼介？」

珍しい奴から掛かって来たな。

『聞いてくれよ、大ニユースだぜ!!』

「何だ？」

『考古学の若本って人がキマイラに関係ありそうな物発掘したんだよ!!』

「キマイラに？」

どういう事だ？

だが俺に考える余裕もくれずに、吼介は電話を切ってしまった!

『てなわけで俺さっそく貰えねーか交渉してくるわ!!』

「あ、おい!!…………切りやがった」

「電話、立神君？」

「うん。なんでもキマイラと関係ありそうな発掘品が見つかったとかどうか」  
「キマイラと？…少し気になるわね」

でもそう言う発掘品って簡単に譲ってくれるのかねえ……。

そう思いながら俺達は帰路につくのだった。

「おー、イツセー。丁度良い所に帰って来たな」

「どしたの、おっちゃん」

「ほれ」

帰宅後、俺は作業室から上がってきたおっちゃんに指輪を二つ手渡された。  
指輪って事は……

「新しい魔法か?!」

「いや、それは俺にも分らんけど」

「よーっし、早速実験だ!!」

俺は意気揚々と手渡された二つの指輪を嵌めて、腰にかざした。

《ゴーレム・プリーズ》

《フェンリル・プリーズ》

そして、俺の目の前にはプラモの骨組みが現れた……と言う事は。

「新しい使い魔か」

「今度はどんな使い魔さんでしようか？」

俺は真ん中の窪みに指輪を二つ嵌めると、パーツが組み合わさっていき、あつという間に手乗りサイズの使い魔が出来上がった！

「これは……」

「紫色のゴーレムと、銀色の狼か？」

ゼノヴィアの指摘通り、そこにいたのは紫のゴーレムに銀色の狼だ。

「そういえば魔法石の一つをハティ達が加えてたな」

「もしかして、フェンリルの魔力の影響？」

「ま、難しいことは後で考えるところとして、これから宜しくな！」

銀色の狼——シルバーフェンリルはぴよんぴよん飛び跳ねていたが、紫のゴーレ

ム——バイオレットゴーレムは柵の隅っこに隠れてしまった。

「あらあら、恥ずかしがり屋さんですわね」



「…シャイゴーレム」

「じゃあこの子はハティ君達の弟？になるのかしら」

弟……何かまた騒がしくなりそうだな。

俺は未だに恥ずかしがっているゴーレムとハティ、スコルとじゃれ合うフェンリルを眺め、そう思うのだった。

――

で、翌日。

この日も俺達はサイラオーグさんとの試合に向けて特訓ナウです。

「イツセー」

「ん？」

木場との特訓を終えて一息付いていた時に、リアスが駆け寄ってきた。

下乳が眼福です！

「立神君は大丈夫かしら？」

「ん、どうかなあ。でもアイツも意外としっかりしてるし……電話か」

掛けてきたのは吼介だった。

「もしもし、吼介か………はあ!?!おまつ、何でそんな事に……!!取り合えず、今からそっち行くから待ってる!」

俺は電話を切って玄関へと向かう!

「どうしたのイツセー!」

「…吼介の奴、ピーストドライバーを盗まれたみたいなんだ」

今回は、かなりヤバい事件みたいだ……!

## MAGIC108 『ベルト盗難』

時系列はイツセーがサイラオーグ・バルの母が入院している病院に向かった時まで遡る。

「あー、腹減ったあ〜……」

借りているアパートの一室で、大の字になりながら腹を擦る少年、立神吼介。彼はとある悪魔と人間のハーフにして、古の魔法使い・ビーストである。

吼介は諸事情により、ファントムの魔力を摂取せねば死んでしまう体となっていたのである。

だが最近はまだファントムとも戦っていない、その為彼の中にいるファントムも魔力を求めて吠えてくる毎日。

「いい加減に魔力摂取しないとなあ……………」

新聞を読みながらどうしたものかと思案する吼介。

だが彼はふと、自分が幼少の頃を思い出した。

『良いか吼介。命の次に、魔力も大切にしろ』

それは彼の父親の事であった。

あまり教育に口を出さず、吼介の好きなようにやらせていた父であったが、こと魔力に関しては物心ついた時からきつく教育を受けさせていた。

吼介は何が何だか分からなかったが、取り合えずは父の教えに従った。

理由は分からないが吼介自身、その教えを大切にせねばと幼いながらに感じ取っていたのである。

「何で親父の奴、魔力に関してではあんなに必死だったんだ……」

熟考しながら新聞を読んでいた吼介だったが、ある記事が目に移り、目線を止める。

そこにはこんな事が書かれていた。

「考古学研究者、中本治氏が謎の出土品を発掘。未知なる歴史の開拓……」

未知の出土品が発掘された、その重要性は考古学者を志す吼介にも得難い喜びである事は周知の事実。

だが、吼介が目奪われたのは写真の中の出土品であった。

「……………ライオン、か？」

写真は色がついていないため良くは分からないが、何やら指輪のようなものに、獅子の意匠が彫られているのが確認できた。

何処と無く見覚えのある、そう考えた吼介だったが、その答えはすぐに出た。

「……あーっ!!!」

吼介は直ぐ様懐からビーストウイザードリングを取り出し、その表面を眺める。

やはり、何処か似ている……つまり、

「キマイラに関係してるかもしれないねえ……!!」

喜色満面となった吼介は直ぐにイツセーへと連絡、そしてそのまま中本教授の元へと向かった。

――

海外より帰国した考古学者・中本治は自分の研究室へと帰国するために車を走らせていた。

「すいません、少し宜しいでしょうか？」

「はい？」

と、駐車場を出た中本を一人の警備員が停車を求めた。

中本としては一刻も早く帰りたいのだが、無視する訳にもいかず車を停める。

「どうかしましたか？」

「……駄目ですねえ。そんなに無警戒に他人を信じちゃあ」

が、その警備員はゆらゆらと姿を変えていく。

中本は呆然と変異する様を眺めていたが、目の前にいるのが化け物であると知り、慌ててアクセルを踏み込もうとする。

「ひ、ひいいいいいい!!」

『おっと、逃げようたつてそうはいかねえ!!』

「うわああ!!」

ファントム——スプリガンは強引に車の発進を止めると、中本を無理やり外へと投げ飛ばした。

『さあ、絶望してファントムを生み出せ……………』

「——やらせるかよっ!!」

『ぬおっ!』

だが横からの飛び蹴りに、スプリガンは踏鞴を踏む。

『くそがつ、誰だテメエは!』

「へっへっ、丁度美味そうなファントムだぜ!」

『ああ?』

《ドライブバーオン!》

「変、身っ!!」

《セット!オーブン!L・I・O・N!ライオン!》

乱入者——吼介は直ぐ様ピーストへと変身。

突然現れた少年が変身した、と言うまでもや変わった出来事を呆然と見ていた中本だったが、彼のある一転に視線が止まった。

「ライオンの、レリーフ……………」

「つしゃ、ランチタイムだ！」

小さく呟いた中本を気に留めず、ピーストはダイスサーベルをドライバーから引き抜く。

そしてそのまま、勢い良くスプリガンへと突撃する。

『はっ、古の魔法使いか！このスプリガン様に勝てるかな!?』

スプリガンは召喚した盾でダイスサーベルの一撃を弾くと、右手に構えた剣で横薙ぎに切り付ける。

すかさず距離を取り、剣戟を躲すピースト。

《バッファア！ゴー！バッバ・ババババッファア！》

「盾か……………だったら力づくで突破させてもらうぜえっ!!」

バッファアメントを装着、方の雄牛をスプリガンへと向け、突進を繰り返す。

『馬鹿の一つ覚えかっ!!』

鼻で笑いながら盾を構えるスプリガン。

が、ビーストはそのまま突撃せずに、空中へ跳躍。

『っ!?』

「なんてな」

《ファルコ！ゴー！ファ・ファ・ファ・ファ・ファルコ！》

息つく暇を与えずマントを換装、目にも止まらぬ刺突攻撃を繰り返す。

完全に虚を突かれたスプリガンは真面にそれを食らい、後ずさる。

『ぐあっ!!…舐めた真似しやがって!!』

「うーし、メインディッシュだ!!」

《フォー・ファルコ！セイバーストライク！》

「おっ、良い目だ！くらええええ!!」

魔法陣を展開して剣を振るうと、四匹の隼が現れ、一斉にスプリガンへと襲い掛かった。

『ぐううううっ!!』

堪らずに悲鳴を上げるスプリガン。

だが威力が足りなかったのか、肩で息をしているものの、未だにスプリガンは健在だった。

「うえ、まだ生きてんのかよ……やっぱ運任せの攻撃って駄目だなあ……うお!？」



ダイスサーベルを眺めながらボヤク。ビーストだったが、突然自身に向けられた火炎弾に咄嗟に気づき、何とか躲す。

何だと思いい向かってきた方角を見ると、そこには見覚えのある三つ首の獣がビーストを見下ろしていた。

『……………』

「…お前、修学旅行の時の！」

『ガルム……！』

フアントム・ガルムの来訪にビースト、スプリガン共に緊張感を張り巡らせる。

『アーキタイプは引き受ける、お前はその人間を絶望させろ……！』

「っ、やらせるか——があっ!!」

ガルムは地面に降りると、そのままビーストへと殴り掛かる。

明らかにスプリガンとは別格のその動きに、ビーストは対処できずにダメージを受ける。

『ちっ、テメエに言われるまでもねえ！』

スプリガンは悪態を付きながらも中本へと再び迫る。

「くっそ、邪魔すんじゃねえワンコ野郎!!」

『……………』

ガルムから逃れようと動き回るビーストだが、ガルムはビーストの動く方向へとワープして立ち塞がるため、思うように動けないでいた。

「あの蠅野郎みてえな能力かよ！」

『……私が喰らったフアントムは全て私の血肉となる』

「は?!だってあの蠅野郎はイツセーに倒されたろ?!」

『その魔力の欠片であっても、そのフアントムの力は私のものだ……こんな風にな』  
突如、ガルムの六つの目が妖しく輝く。

何事かと構えるビースト、だが次の瞬間には体にある異変が起きていた。

「……なっ?!」

なんと、ビーストの両足と左腕が石化していたのだ。

何とか抜け出そうともがくビーストだが、石化した個所はびくともしなかった。

「くっそ!!壊れろって!!」

『……無駄な努力は止めろ。その箇所が碎ければ、その碎けた個所は永遠にそのままだ』

「…へっ!こんなピンチのピンチはなあ、でっけえチャンスに代わるんだぜ…ッ!オオツ!!」

固まっていない右腕を動かすビースト。

それを静観していたガルムの目の前で、ビーストを中心に橙色の旋風が巻き起こっ

た。

そしてその旋風は、ビーストの石となった部位の石を破壊した。

『…ッ！』

「うおらっ!!」

僅かに目を見張っていたガルムの隙を逃さず、ビーストはダイスサーベルの切っ先から魔力弾を放つ。

それはガルムではなく、ガルムの足元へと放たれた。

「はっ！」

「うわあああああー！！！！」

ビーストは気配を殺しながら中本へと近づくと、彼を小脇に抱えて飛び去って行く。

『なっ、逃げやがったぞ!!』

『……………』

逃げるビーストを憎々しげに睨みつけるスプリガン。

一方のガルムは、用はないと言わんばかりにその場から消えた。

—————

「つと………ここまで来れば安心だろ」

中本を抱えて飛んでいたビーストは、風と共に着地する。

中本を下したのち、変身を解除する。

「…き、君は」

「ん？あー、そうだな！早速なんだけど中本さん、アンタが発掘したってブツ、見せてくれよー」

「な、何故見ず知らずの君にひけらかさないといけないんだ!!」

自己紹介すらすつ飛ばしていきなりの物言いに、中本も語気が荒くなる。

「あんたが発掘したコレ、俺のじゃないかなと思つてさ……ああ、俺のつて言うかキマイラのだよな。キマイラって言うのは化け物で、コイツすげー似てんだけどコイツが俺の中にガーツてなつて、俺がダーツつてやったらさっきの金色のすげーのになれんだよ」

「…はあ？」

ちんぷんかんぷんな説明に呆れた声を漏らす。

だが中本は、先程吼介が変身した際に見えたベルトのレリーフを思い出した。

「……分かった」

「ホントか!?!」

「ああ。取り敢えずは君の発掘品を調べさせてくれ。そうすればこれを調べても良い。

「どうだ？」

「おーし、それで良いぜ」

中本の出した条件を？む吼介。

偶然にも飛んだ先が中本の研究所の近くだったため、二人はそこへ向かうように。

「どうよ、牙吠！」

研究室の中でポーズを取るピースト。

だが中本は目もくれずにピーストドライバーに夢中だ。

「ライオン……私の発掘品にも薄らだが同じ意匠があると言う事は、やはり関連があるのか？」

「だーからそう言ってるだろ？このベルトン中にいるキマイラに関連してんだって！」  
変身を解いた吼介はそう言い切る。

「だったらこれは一体……」

中本はそう言ってもう一つの発掘品を手に取る。

「こちらは何やら銃のような形状をしていた。

「これもやはりベルトンなのか……？」

「いや、絶対違うだろ」

「待てよ。これはシユメール文明との共通点が……確か資料室に！」

そう言うや否や、慌ただしく部屋を出ていく中本。

そんな様子を、研究資料を見ながら眺めていた吼介は、

「研究熱心なんだなあ。ま、気持ちは分かるけど……」

そうしみじみと呟くと、机上のビーストドライバーに触れる。

「俺もイツセーみたいにな、キマイラと自由に会話できたらなあ……」

——

「……………ん、んあ？…朝か」

眠い目を擦って起き上がる吼介。

どうやら寝落ちしていたらしい、欠伸を溢す吼介の元に、

「た、立神君!!!」

血相を抱えた中本がやって来た。

「どーしたんすか？」

「ふあ、フアントムが!!」

「フアントム!?!」

フアントムと聞き、吼介は顔付を一変させる。

早速ビーストに変身しようとするが、ここで一つの異変に気付く。

「……あれ、ドライバーがねえ」

そう、ビーストドライバーがないのだ。

しかも指輪も一緒に、何処を探しても見当たらない。

「うおっ!?!俺のベルトは!?!俺の指輪は!?!どこ!?!」

「フアントムが盗んでいった!?!私の発掘品と一緒に……!?!」

「はあ!?!マジかよ!!」

思わぬ事態に頭を抱える吼介。

だが悩んでいても仕方がない。慌てて外に飛び出し、フアントムを探す事に。

「くっそー………そうだ、一応イツセーに連絡しとくか。もう冥界から帰ってきてるだろ」

念のためにと、吼介はイツセーに連絡をかける。

「あ、イツセーか!?!大事なんだよ、俺のドライバーと指輪が盗まれたんだよ!!犯人は

フアントム！んで中本さんが多分ゲートだ!!今すぐ来て、く……」

通話の途中だったが、吼介はそこで言葉を詰まらせた。

『……探し物か、アーキタイプ』

目の前にガラムが現れたのだ。

内心舌打ちしつつ、吼介は通話を切る。

「お前か、俺のドライバー盗んだのは！」

『何を言っている……?』

「とぼけんじゃねえ!!」

ガラムに飛び掛かる吼介、対するガラムはそれを簡単に往なして吼介の襟を掴む。

『……変身が出来ないようだな』

「うっせえ！ベルト返しやがれ!!」

『……生憎だが、ベルトばかり気にかけている暇はないぞ』

うわあああああああ!!!



すると、少し先の研究室から中本の叫び声が聞こえた。

「なっ!」

『お前はあの方の計画には不要……ここで殺してやろう』

「がああ!!」

中本の声に気を取られた吼介を、ガルムは無感動に爪で切り裂いた。

一方、一人研究室に残っていた中本の前に、再びスプリガンが現れた

『不用心ですよ。戸締りはきちんとしておかないと』

「ひ、ひいい……!!」

恐怖で足が竦んで動けない中本に一步、また一步と迫るスプリガン。

後一步、と言う所で、扉の向こうから飛んできた銃弾が、スプリガンの歩みを止めた。

『っ、何者だ……』

「——間一髪、つて所か」

肩で息をしながら入ってきたのは、イツセーだった。

ゲートの無事を確認しホツとするイツセーだが、気を抜いている暇はないと腰に指輪を翳した。

「変身」

《ウオーター・プリーズ。スイ〜スイ〜スイ〜スイ〜！》

変身したウィザードWSは研究室からスプリガンを追い出し、中本から引きはがす。

『ちっ、今度は指輪の魔法使いか……』

「さあつ、シヨータムだ！」

《リキッド・プリーズ》

素早く液状化の魔法を発動し、組み合っていたスプリガンの腕から零れ落ちる。

組み合っていた相手が消えた事に驚くスプリガンだったが、青い光が彼に纏わりつき、気付けば逆エビ固めで身動きを封じられていた。

『ぐおおおお、は、離しやがれえ!!』

「そうは問屋が卸さないんだよ」

「——うああつ!!」

と、そんなウィザードWSの元にボロボロの吼介が転がって来た。

「吼介！」

『うおら!!』

「うおっ！」

力が抜けた隙を見計らって、何とか脱出するスプリガン。

一方にワイザードWSは吼介に駆け寄る。

「おい、大丈夫か？」

「…そう見えるかよ？」

「軽口叩けるなら大丈夫だな」

「ああ……」

『……ワイザードか』

静かに歩み寄るガラム。

その視線の先には中本を守るリアス達の姿が映っていた。

「くっそ……ベルトさえありや、フロントム食べるつてのによ………うっ」

悔しげに呟く吼介だが、突然胸を押さえて蹲った。

「…？おい、どうした吼介」

「う、ああ………」

その異変に気付いたワイザードWSは声をかけるが、今の吼介には届いていなかった。



猛々しく吠えた吼介は、静かに場を見据えた。

「…吼介？」

『相棒』

「どした、ドライブグ」

『あの男、今すぐに止めた方がよいぞ』

「は——」

ドライブグの言葉の意味を聞こうとするよりも早く——吼介はグールの群れへと突っ込んでいった。

目にも止まらぬ速さで肉薄し——一瞬で全てのグールの首を引き千切ってしまつた。

『……………ツ!!』

明らかに普段の吼介と違う様子に、その場にいる全員が硬直する。

だが吼介は意に返さず魔力の塊となったグールだった物を、全てその口に入れ、飲み込んでしまつた。

そしてその瞳は、静かにリアス達を見据えた——刹那、吼介は飛び掛かつた。  
「っ、どうしたの立神君！しつかりしなさい!!」

何とかかすでの所で吼介を止めるリアス。

だがリアスの言葉は届いていないのか、ただ唸り声しか発さない。

「…………悪く思うなよ、吼介っ!!」

これ以上は危険だ、そう判断したウイザードWSは吼介を蹴り飛ばす。

煉瓦の壁に激突寸前だった吼介は、逆に壁を蹴って今度はウイザードWSへと飛びついた。

「っ、一体どうしたんだよー——吼介え!!」

それを静かに見ていたガルムは、他人事のように呟いた。

「…………ウアプラの忌み子、か」

次回、D×Dウイザード

イツセー「吼介が、ウアプラ？」

ビーストキマイラ『いよいよお前の命も消えそうだな』

吼介「恐いんだよ……また、魔力を求めて暴走しちゃったらって思うと」

MAGIC109『Evolution Beast』

イツセー「自分が信じられないなら、俺を信じろ。暴走しても俺がお前を止める」

吼介「わりーがもう暴走はしねえ………何てったって、俺は絶望を“喰う”魔法使  
いだからな！」

《ハイパー・ゴー！ハイツ・ハイツ・ハイツ・ハイツ・ハイパー！》

ビーストハイパー「一気に喰い尽くすぜツ!!!」

## MAGIC109『Evolution Beast』

「っ、一体どうしたんだよ！——吼介え!!!」

突然暴走を始めた吼介。

ウィザードWSの制止も聞かず、尚も荒々しく攻撃を繰り返して来る吼介を見て、ガ  
ルムは静かに呟いた。

「……ウアップラの忌み子、か」

ウアップラ——その名に反応したのは、リアスであった。

「っ、立神君がウアップラ？どう言う意味よ!?!」

「…魔力喰い」

「!?!」

「……知っているようだな」

魔力喰い、その言葉にリアスは顔を強張らせる。

そうこうしている内に、吼介は次なる狙いをガルムに定め、襲い掛かった。



「ガアアアアアアアッ!!」

『…ッ!』

手を野獣の爪に見立てて攻撃を仕掛ける吼介。

ガルムはそれを捌きつつ蹴りで吼介を宙へと浮かせるが、吼介は空中で回転しながら体制を整えると、そのままガルムの肩口に歯を立て、噛み千切った。

『ッ!!』

「ヴウウウウウ………ッ!!!」

肩を抑えるガルムの眼前、噛み千切った部位を飲み込む吼介。

飲み込んだと同時に、吼介の肉体に魔力の蒸気が立ち上った。

「ガルムの魔力を、喰ってるのか……?」

「ヴおアアアアアアアアッ!!!」

まだ足りない、そう言わんばかりに吼え立てる吼介。

とは言え子このままではゲートである中本を守る事も叶わない。

「…吼介」

「ガアアアアア!!」

次なる標的をウイザードWSに定めた吼介は方向と共に飛び掛かる。

《バインド・プリーズ》

すかさずウィザードWSが発動した水の鎖により捕らえられるも、所詮は水。

破られるのも時間の問題だが、ウィザードWSにとつては一瞬でも時間が稼げれば充分であった。

《スリープ・プリーズ》

「……………っ」

水の鎖が破られるよりも早くに次なる魔法を発動、その効果により吼介は眠ってしまった。

崩れ落ちる吼介を受け止めるウィザードWS。

「つと……………ファントムは逃げたか」

周りを見れば、既にガラムもスプリガンもいなくなっていた。

どうやら逃げたらしい。

「吼介の事は一先ず置いて、中本さんでしたっけ？事情を聞かせてもらえますか？」  
「あ、ああ」

—————

考古学者、中本から事の顛末を聞いたイツセイ達。

「ファントムから中本さんを守るのも大切だけど……先ずは吼介のドライバーだな」

「ええー。早く取り返さないと、彼の命が危ないわ」

「い、命？ どういう事だね？」

命という単語が引つ掛かったのか、中本はイツセーに尋ねてくる。

「アイツが持つていたドライバーには、キマイラっていう化け物が潜んでいるんです。

吼介はキマイラに魔力……要はエネルギーを与えないと……」

「死ぬと言うのか……？」

中本の問いに、イツセーは頷く。

それを聞いて、中本はイツセーから目を逸らした。

その反応に疑問を覚えたのか、中本に質問しようとするイツセー。

「……待て、イツセー」

「吼介……大丈夫か」

「おう、何とかな……それと、お前が言おうとした事は、俺が確かめる」

すると、隣の部屋から吼介がやって来た。

眠りから覚めたのだが、足取りも覚束なく、顔色も悪い。

「……中本さん。ひよつとして、俺のドライバー盗んだのはアンタか？」

『!?』

壁に手をつきながら、吼介はここで衝撃的な質問を投げかけた。

その質問は、先程イツセーが言おうとした内容と全くの一緒だった。

「……何の事だい？」

一瞬間をおいて出たのは、それだった。

きな臭いものを感じていたのか、イツセーは吼介に続いた。

「中本さん、ハッキリと答えてください。このままじゃ吼介は……」

「違う違う違う……もういい、私を疑うような奴らに守って欲しくなどない！出て行

け！ほら、出て行け！」

「ちよっ……!!」

息つく暇もなく、イツセー達は研究室を追い出された。

「ありや完全に黒だぞ」

「どうしたものかしら……」

研究所の外で、これからの事を模索するイツセー。

そのイツセーを尻目に、リアスとはある疑問を吼介にぶつけた。

「立神君」

「んあ？」

「貴方は———追放されたウアプラ家の者ね？」

リアスの質問に、吼介は答えなかつた。

だがその沈黙は、肯定しているようなものであつた。

「ガラムが言っていた、忌み子……だっけ？」

「ええ。以前お父様から聞かされたの。ウアプラには———突然変異の異能持ちがいた事を」

魔力喰い———それはウアプラ出身の悪魔と、人間の女との間に授かつた子が持つていた異能であつた。

他者の魔力を自分の意志に関係なく喰らい、それが尽きれば命をも喰らう。

まだ幼かつたその子は、力を制御出来ず、ある日———ウアプラの領土にいた悪魔の魔力を残さず喰いつくし、命を喰らつてしまった。

まだ力を制御出来ない子供とはいえ、それにより命を奪われた者達の数は、両手では

数えきれないほど存在した。

ウアプラの当主は、その子に能力抑制の呪いを課し、単独行動を一切禁止、父の監視の下で過ごすと云う処分を下した。

だがそれに異を唱えたのは、他ならぬ父親であった。

『この子の自由を一生許さないと云うのは、体の良い飼い殺しも同然ではないか。それは遠回しに死ねと言っているような物だ』

そう言つて、彼は息子を連れてウアプラを出走し、妻が住んでいた人間界へとやつて来た。

「じゃあ、その子が……」

イツセーが静かに呟いたその言葉に、リアスは頷いた。

「……だから何だよ」

すると、今まで黙っていた吼介が口を開いた。

「例え俺にその力があつたとしても、今立ち止まる理由にはなんねーよ。早いとこドライバーを見つけないと……」

「これ以上戦えば、貴方はまたさっきのようにな！」

「……っ！」

それ以上は聞かないとばかりに、吼介は速足でその場を飛び出した。

「立神君！」

「リアス」

吼介を止めようとするリアスを、イツセーが制止する。

「吼介は俺に任せてくれ。リアス達には頼みたい事があるんだ」

「え……」

————

研究所から走って数分程度で着く河川敷。

その土手で、吼介は大の字になって寝そべっていた。

「……なーにしようぼくれてんだよ」

「イツセー……」

そこに、吼介の魔力を感知して追いかけてきたイツセーがやって来た。

イツセーは吼介の隣に座り込むと、口を開いた。

「…お前さ、ホントは怖いんだろ？」

「……そんな訳あるかよ」

「ほんつと、嘘付くの下手だな」

吼介の嘘をあつさりで見破るイツセー。

暫くの沈黙の後、吼介はぶつきらぼうに吐き捨てた。

「…別にキマイラの事じゃねーぞ」

起き上がった吼介は、河原を眺めながら口を開いた。

「喰われるのはまあおつかねえけどよ、俺はビーストになれてワクワクしてたんだぜ？

未知への探求心っての？………」

「……」

「お前の言う通りなところも、まああるけどよ………恐いんだよ………。また、魔力を求めて暴

走しちまったらって思うと」

吼介は胸の内を吐露する。

それをイツセーは静かに聞いていたが、静かに笑いながら、言葉を紡いだ。

「そんなに深く考える事か？お前ただでさえバカなのによ」

「なっ！」

「お前が初めてビーストになった時のそのワクワク、まだ覚えてるうちは大丈夫だろ。



少なくとも、自分を見失ってないって事だからな。けど……」

イツセーは立ち上がって、吼介を見る。

「自分が信じられないなら、俺を信じろ。暴走しても俺がお前を止める……そうすりゃ、お前も何時か自分を信じれる様になる」

「イツセー……」

「俺もそう教えられたからな。さて……戻るぞ」

「は？」

「お前のドライバー奪還作戦、決行の時間だ」

そう言うときイツセーは不敵に笑った。

—————

「リアス、どうだった？」

「ええ、バッチリ見つかってたわ」

中本の研究所へ戻ってきたイツセーと吼介は、リアス達と合流する。

そしてリアスの手には、ビーストドライバーが握られていた。

「おお、やったぜ!!」

はしゃぐ吼介の様子を、物陰から見つめる者がいた。

「馬鹿な…いつの間に!？」

正体は中本だった。

中本は大慌てで研究室の本棚の裏に隠したビーストドライバーなどを確認したのだが…

「あれ?」

そこにはビーストドライバーがちゃんと置かれていた。

首を傾げる中本の背後から、

「やっぱりアンタだったんだな」

!？」

その行動を見ていた吼介達が立っていた。

驚愕の眼差しで、中本はリアスが持つドライバーを見つめ、口を開く。

「そ、そのベルトは……」

「偽物ですよ。優秀な職員に造ってもらいました」

このドライバーは、イツセーの使い魔であるバイオレットゴーレムが造り出した精巧

な偽物である。

ゴーレムの器用さを偶然知ったイツセーは、リアス達にゴーレムに造ってもらうように依頼し、本物の所在を把握しようとしたのだ。

「どうしてこんな事を……」

「……わ、私だって、認めてもらいたかったんだ!!」

詰め寄ったイツセーに、中本は叫ぶように胸の内を吐露する。

以前自分が発掘した出土品を、自分の手柄を研究所の所長に奪われ、本来なら自分が得ていた称賛を得られなかった事を……。

「あの時の無念を晴らしたかった……。今回の発見が、最後のチャンスだと思った。どんな事しても成果を上げたかったんだ!」

「ですが、だからと言ってやって良い事と悪い事が……!」

「良いんです部長さん……ッ!」

そんな中本を庇う吼介だが、その場で力なく蹲る。

「吼介!!」

「……参ったな。キマイラの奴、思った以上に腹空かせてやがる」

「こうなったら、貴方の中のキマイラをイツセーが……」

「皆まで言うな!!」

吼介を慮って進言したりアスの言葉を、吼介は強い語気で撥ね退けた。

「……確かに、遺跡でキマイラに取り憑かれた時、ヤバいと思ったよ。でも俺、同時にワクワクしたんだ。この得体のしれないバケモノは何だ？この不思議なベルトと指輪は何だ？これから何が起こる？どんな事をしても知りたいと思った。それが例え……自分の命を懸けなきゃならねえってなっても……！」

「立神君……」

「今の中本さんと同じなんすよ……キマイラは俺にとっちゃでつかいチャンスで、俺が考古学者になる為の第一歩なんだ!!」

そう言い切ると、吼介は中本を見上げる。

「アンタなら分かる筈だ……考古学者の先輩なんだからよ」

「………そう、だな」

その答えに中本は静かに、だが力強く頷いた。

『良い雰囲気のところすみませんねえ!!』

だがそこに掛かる無粋な声。

と同時に中本へ向けて魔力弾が放たれるが、リアスが寸での所で防いだ。

「…フアントム！」

「悪いな、心の支えは消させやしない」

イツセーはリアスから受け取った偽のビーストドライバーをスプリガンへとチラつかせる。

それを見たスプリガンは意気揚々と襲い掛かる。

『そいつを壊せば任務完了って訳か！』

「壊させるかって言っただろ！」

スプリガンの剣を受け止めたイツセーは吼介へと振り返る。

「吼介！此奴は俺が下拵えしておく……だから絶対食いに来い！！」

『ゴチャゴチャうるせーよ！』

「お前もな！……変身！」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

組み付いたスプリガンを魔方阵で弾き飛ばし、イツセーはウィザードFSに変身。弾かれたスプリガンに息つく間も与えず、

《フォール・プリーズ》

「下へ参りませーす！」

『は、のおおおおお!!?』

穴を広げる魔法を発動し、自分諸共スプリガンを下へと誘導した。

「…へっ、言ってくれるじゃねーか」

それを聞いた吼介は、本棚に置かれていたビーストドライバーだけを掴む。

「此奴だけは返してもらおうぜ。…すみませんが、中本さん頼みます」

「——待ってくれ！」

ファントムの元へと駆け出そうとする吼介を、中本が呼び止めた。

振り返った吼介の目の前には、中本が自ら発掘したものが。

「中本さん……でも、これは」

「君は、夢のために自分の命を賭けている。でも、私はかつての無念を晴らそうとしていくだけだ。あの時、自分がされたように誰かを犠牲にして！」

「……」

「本当に……すまなかった！」

そう言って頭を下げる中本。

それを受けた吼介は、朗らかに笑った。

「そんな事、もう気にしてないっすよ！俺のピンチは、俺自身でチャンスに変えるんで！」

「立神君……。だからこそ、これを受け取ってほしい。これは、君が持つに相応しい」

吼介は改めて差し出されたそれを見つめ、確りと受け取った。

「今度また、一緒に遺跡調査連れてってくださいね…約束っすよ！」

「…ああ！」

快く快諾した中本の返答に笑うと、吼介は今度こそ駆け出した。

「おらっ！」

『はあっ！』

一方の外では、ウィザードFSとスプリガンの戦いが続いていた。

スプリガンの刺突攻撃を弾き、返す刃でウィザードガンガン切っ先を突き立てる。

『ちいつ、鬱陶しい……………！』

「さあて、先ずは弱火で軽く焙るか……………うおっ!？」

指輪を嵌めようとしたウィザードFSに、火炎弾の雨が降り注いだ。

「予定変更だ！」

《エクステンド・プリーズ》

ウィザードガンガンのハンドオーサーに指輪を読み込ませると、刀身が鞭のようになり、火炎弾を全て打ち消した。

「……………まーたお前かよ」

『……………』

ウイザードFSの眼前に立っていたのは、またしてもガルムだった。

心底嫌そうな声を漏らすウイザードFSに構わず、ガルムは襲い掛かる。

「はっ、おりゃー！」

『……………ッ』

「っ!!」

互いの攻撃を往なし続ける両者だったが、ここで突然ガルムの姿が消え失せた。

自分の攻撃が空振りに終わった事に一瞬動揺するウイザードFSだったが、そこへス

プリガンの攻撃が迫ってきた。

「っー……………ぐあ!!」

それを迎え撃とうとしたウイザードFSだったが、自分の足元の影から爪撃が襲い掛かり、結果両者の攻撃をまともに食らってしまふ。

弾かれるようにして地面を転がるウイザードFSから、ビーストドライバーが転がり落ちた。

『ハッハッハ！此奴を壊せば……………ジ・エンドだ!!』

スプリガンが振り下ろした一刀により、ビーストドライバーは奇麗に破壊されてしま



う。

ゲートの心の支えを壊したことに喜ぶスプリガンだったが、影より這い出たガルムだけは静かにウィザードFSを睨んでいた。

『ウィザード……アーキタイプのドライバーを破壊したと言うのに、何故慌てん?』  
「……その答えは」

「——待たせたな、イツセー!!!」

ウィザードFSの答え——吼介が漸く駆け付けた。

その手には先程スプリガンが破壊したはずのビーストドライバーが。

『な、さつき俺が壊したはずだろ!!』

「偽もんだよ。ノせられちゃった?」

『小賢しい真似を……』

「本物は食い意地がもつと張ってんだよ……早速だけど、食わせてもらうぜ!」

《ドライバーオン!》

腰にビーストドライバーを巻き付け、吼介は指輪をベルトの側頭部へと嵌め込み、半回転させる。

「変、身つ!!」

《セット!オープン!L・I・O・N!ライオン!》

『…行け』

変身したビーストに対し、ガラムは魔石を投げる。

忽ち魔石はグールへと変わり、ビーストへと群がる。

「…くっそ、やつぱり力が出ねえ……！」

何時もなら余裕ではあるのだが、今のビーストは魔力が枯渇した状態。

グールにすら苦戦してしまうほどに疲弊していたのだ。

「……ヴッ」

すると、ビーストの体を再び衝動が襲う。

何とか堪えようとするも、その本能はいとも容易くビーストの理性を飲み込んでいく。

「ウガアアアア!!」

理性が朦朧となりながら、ビーストは組み付いてくるグールを一気に薙ぎ払い、その魔力を吸収。

そしてそのまま、今度はガラムへと襲い掛かる。

『理性のない状態で、この私を二度も喰らえと思うな……』

「っ、吼介!!」

暴走するビーストの腰に組み付き、ウィザードFSは何とか止めようとする。

「ドライグ、譲渡だ！」

《Trans fer!!》

ここでウィザードFSは自身の魔力を譲渡、それによりビーストは僅かだが理性を取り戻す。

「……ッ、イツセー」

「…言つたら。暴走したら、俺が止めてやるつて」

『…その様では、また暴走するのが関の山だッ！』

そんな二人に、ガルムは容赦なく火炎弾を浴びせる。

何とかそれを躲すと、ビーストは右手に中本から貰った指輪を嵌める。

「おいキマイラ……腹減つてんだろ？ここで飢え死になりたくねーんなら……根性出しやがれ!!」

ドライバーのスロットに宛がうと、ビースト、吼介の意識は暗闇の中に。

「(ト)は……」

『いよいよお前の命も消えそうだな』

辺りを見渡す吼介の目の前に現れたのは、様々な動物の顔を体の各所に刻む獣

——ビーストキマイラだ。

「キマイラ！」

『ようやく見つけた下僕だが、別れの時か』

「馬鹿な事言つてねーで教えろ！こいつは一体何に使うんだよ!?今使えるのか使えねえのか、どっちだ!？」

吼介が差し出した石の塊を、キマイラは静かに見つめる。

『ほう、それを見つけれ出したか……。それを使えば、我の力を現実世界で使うことができ。しかし、今のお前が耐えられるかどうか……。』

「使えるんだな」

吼介を揺さぶるかのような発言を口にしたキマイラだったが、吼介はただ使えるという言葉に嬉しそうに微笑む。

その様子を見たキマイラは、声を荒げる。

『聞いていたのか!?己の魔力すら枯渇した今のお前では……。』

「皆まで言うな！俺はな、危険な賭けには乗る主義なんだよ」

『魔力を求めて、再び暴走するとしてもか……。?』

「——俺が暴走したら、俺のダチが止めてくれる。俺は、ただ目の前の食事と謎に食らいつくだけだ！」

その答えを聞いたキマイラは——哄笑を上げた。

『……フハハハハ!! 己ではなく他者を信じるといふのか!』

「俺自身もその内信じる!…それにな、ピンチはチャンスなんだよ。だからお前も付き合え、キマイラツ!!」

『ふっ…いいだろう! 口を開けて待っているぞ!』

そう言うのと、ビーストキマイラは吠え立てながら吼介の体内へと潜り込む。

「さあ——食事の時間だっ!!!」

《ハイパー・ゴー! ハイツ・ハイツ・ハイツ・ハイツ・ハイパー!》

『……!』

『何だあ!?!』

突如、ビーストの体から半透明の獣が飛び立った。

スプリガンとガルムが目を見張る中、獣はビーストの体へと纏わりつき、蒼い閃光が迸る。

閃光が晴れると、そこに立っていたビーストは大きく姿を変えていた。

黒のスーツは鮮やかなコバルトブルーに染まり、胸部のアーマーは獣の顔を模した物へと変化、腕にも紐状のパーツが追加された。

そして、手にしていた発掘品の石部分が破裂し、中からは獣のレリーフが刻まれた拳銃が。

同時に指輪の石も取り払われ、キマイラの顔の指輪となった。

ビーストは手にした拳銃——ミラージュマグナムをクルクルと回し、スプリガンとガルムに突き付けた。

「さあーて……………一気に喰い尽くすぜツ!!」

ビースト改め——ビーストハイパーは勇ましく吠え、フロントム二人へと飛び掛かった。

『ただ色が変わっただけで粹がるんじゃねえ!!』

スプリガンは大して気にも留めずに、ビーストハイパーを迎え撃とうとする。

ビーストハイパーはスプリガンの剣を弾くと、腕についた紐——フリンジスリングーを振り回した。

『なっ、ぐあ!!』

それは簡単にスプリガンの剣を弾き、スプリガン自身の肉体にダメージを与えた。

煙を上げるスプリガンの肉体。それを見ていたガラムは、低く唸った。

『貴様、まさか……』

「ハッ!!」

ビーストハイパーはミラージュマグナムから魔力弾を撃ち放つ。

何の変哲もない一撃、だがその弾丸はスプリガンを大きく仰け反らせた。

『ぬおおおおおおおっ!!!』

「効くだろ? 何せ、お前の魔力をさつき削らせてもらったからな」

『やはりか……貴様、魔力喰いの力を……!!』

制御した、と言う言葉は続かなかった。

何故なら、ビーストハイパーの一撃がガラムへ命中したからだ。

「お前からファントムは基本魔力で出来た肉体なんだろ? そして、今の俺の攻撃は、魔力を

削って、喰うー!」

「つまり……」

『ファントム本体に、常にクリティカルを叩き出せると言う事か』

ウィザードFSは思わず口笛を吹いた。

まるで叶わない、といった風に。

「わりーがもう暴走はしねえ……何てったって、俺は絶望を喰う魔法使いだか

らな！俺自身の絶望だって、喰らってみせる!!」

『…………ツ!!』

駆け出したビーストハイパーの動きを止めるべく、ガルムはメデューサの石化能力を発動させるが、ガルムが視認するよりも早くに、ビーストハイパーの一撃がガルムに突き刺さった。

『…………ヌウ!!』

「はっ、おりゃ!!!」

ガルムを蹴り飛ばすビーストハイパー。

大きく肩で息をするガルムたちに向けて、ミラージユマグナムを構える。

「さあ、そろそろメインディッシュだ!」

そう言ってミラージユマグナムのスロットに指輪を嵌めようとするが、何故だか指輪が上手く嵌らない。

「おいおい、これどうやって発動すんだよ!?!」

『ツカア!!』

「おわっ!!」

まごついている間に、ガルムの火炎弾を食らうビーストハイパー。

「何だよ、キマイラー！協力しろよ!」 口開けて待つてる” つて言った…………あれ? もしや



…

キマイラに文句を垂れていたが、ここで指輪の形状に違和感を覚えた。

上へ引つ張つてみると、指輪がスライドして“口が開いた”のだ。

「おおー、こういう事かあ！んじゃ、もう一度ッ！」

口の開いたリングをミラージュマグナム背面のスロットにセットすると、

《ハイパー・マグナムストライク！》

テンションの高い音声が鳴り響き、マグナム背面の鏡に浮かんだキマイラを模した魔力が背後からビーストと一体化、再度銃口に集束されビーストキマイラの姿を模した強力な魔力弾を放つ。

『ッ!!』

『ッ、ギヤアアアアアア!!!!』

ガルムは咄嗟に影に潜り込み難を逃れたが、スプリガンだけは避け切れずに食らってしまう、大爆発を起こす。

倒したスプリガンの魔力は、ビーストドライバーへと吸い寄せられていく。

「ふう………ごつつあん!!」

「ハハ……凄えな」

| | | |

後日。

「へえ。じゃあ中本さん、また海外に行ったんだ」

「おう。また発掘調査をやり直すんだと」

はんぐりくにて、中本の事を報告する吼介。

あれから中本は再び海外へと旅立っていった。

『私は、また発掘調査からやり直すよ。思い出したんだ。私の夢は、世間に認められる事じゃない。未知の遺跡の謎を解き明かす事だったと。君を見て、改めて思い出せたよ。本当に、有難う』

空港にて、見送りに来た吼介に、中本はそう晴れやかに言った。

「また新しい出発か」

「そういうこつたな。中本さんなら、またスゲーもん見つけれらるだろうしな！」

ドーナツを食べ終わると、吼介は去って行った。

「夢の為に頑張るのは素敵だけど、生き延びる方法も真面目に模索しなきゃね」

「そうだな」

それを見送ったイツセーは、リアスと共に帰路に就く。

帰り道、ふとリアスは気になった事をイツセーに尋ねた。

「そう言えば……イツセーの夢ってどんな夢なの？」

「……今は、フアントムを倒す事、かな」

「……………今は？」

今、と言う言葉が引つ掛かったのか、リアスは追求しようとするが、イツセーは若干強引に話を逸らした。

「さ、早く帰ろうぜ。サイラオーグさんとの試合も近し」

「……そうね」

# MAGIC110 『ゲーム前夜』

吼介が新しい力を手に入れてから数日、もう直ぐ迫りつつあるサイラオーグさんとのレーティングゲーム。

今日も今日とてレッツ・修行だ！

「おらっ!!」

「っ!」

てな訳で現在は木場と摸擬戦中!

俺の砲撃を聖魔剣を盾にして防ぐと、すぐさま背後に踏み込んできて剣を振るう!

「はっ!」

「っ、液状化!」

俺は刀身が触れる寸前で体を水に変化させ、地面に溶け込む!

木場の攻撃は空を切るだけであり、俺は地下水脈を伝って体勢を整える……が。

「っう!」

体を戻した、と思っていたら俺の足には剣が深々と刺さっていた!

再び体を液化化させようとしたが、剣から電流が発せられた！

「うがああああ！」

「おおっ!!」

膝をついた俺に対し、木場は容赦なく聖魔剣のビットを放ってくる！

「ウイザード・プロモーション魔龍進化！」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!!!!》

俺はランドドラゴンの力を開放し、衝撃波で聖魔剣ファンネルを全て破壊する！

だが木場は聖魔剣が浮いてきた箇所からすぐさま精製、俺へと向かわせてきた！

「上等だ……っ！」

迎撃しようと拳を薙いだその瞬間、振るった腕から痛みを感じた。

傍目で確認したら……拳から聖魔剣が咲いていた！

そして地面から生えてくる無数の聖魔剣……！！

「……だつたら」

《Wizard Promotion!! Hurricane Dragon!!!!!!》

《Lightning Raid Acceleration!!!!!!》

クラウチングスタートの構えを取り、背部のスラスターに溜めた魔力を一気に爆発!!  
駆け抜けた瞬間、俺を刺し貫こうと生えてきていた聖魔剣は一気に砕け、木場が回避

するより速くに懐に到達、喉元にアスカロンを突き立てた！

「……やるな」

「そう言ってもらえると嬉しいね……」

俺がアスカロンを構えるのに対し、木場は手に聖魔剣を持ち、俺の腹に突き立てていった。

「予め回避できないと分かった上での迎撃か……」

「ふいー、今日はここまでにするか」

「そうだね」

俺は鎧を解いて地面に座り込む。

「しっかし流石は騎士だな、もうあのスピードに目が追いつくとはねえ」

「追いついてるわけじゃないよ。さっきのも、どうせ回避できないならって言う苦肉の策だし」

スポーツ飲料を呷りながら、木場は苦笑いで告げてきた。

「だが咄嗟の判断とは言えカウンターを食らわせるといふのは悪くない発想だぞ」  
背後からティアアがやって来て木場のスタイルを褒める。

あ、ティアアはリアスと朱乃さんを同時に相手取ってたんだ。

「そうそう。木場ならその内完璧に見切れるようになるって」

「アハハ…ありがと、イツセー君」

そんなこんなで今日もいい汗を流したのであった。

――

「力加減は大丈夫かしら？」

「うん、丁度良いぜ」

修業が終わって、俺はリアスと二人きりで大浴場で汗を流していた。

丁度風呂に入ろうかと思っていたら、タオルと着替えを持っていたリアスと鉢合わせで混浴の流れになった訳ですよ。

「ふふ、まるで新婚の気分だね。グレイフィアにはちよつと悪いけど」

俺の背中を洗ってくれるリアスは嬉しそうに微笑む。

「大丈夫じゃないかな。グレイフィア、さんはあまり怒らないし」

グレイフィアは俺が他の女の子とスキンシップを交わしているも怒らないんだよな。

むしろ微笑ましそうに見守っているぐらいですて……。

『私一人で独占してしまつては勿体ないぐらいですから。……でも、ちゃんと私も構つてくださいなね？』

……たまに見せる甘えの破壊力が抜群すぎるよなあ。

そんな俺を見て、リアスは何故かクスリと可笑しそうに笑った。

「普通に私達の前でも呼び捨てで呼んでも良いのに」

「や、まだ慣れないって言うか……」

二人きりの時なら兎も角皆の前だと未だに恥ずかしさが残るんだよな。

でもちゃんと呼んであげたいって言うのもあるし……。

「……ね、イツセー」

「え……」

真剣な声音となったリアスの問いかけに、俺はまともな返事を返せなかった。

原因はリアスの……おっぱいだ。

「サイラオーグとのレーティングゲームが終わったら……」

「終わったら……?」

そこからは暫く沈黙が続いた。

だが決心がついたのか、リアスは唇を震わせながら、

「……私を、女にしてくれる……?」



と、囁いてきた。

お、女にしてくれるって……………その、つまり……………

「……………」

リアスは何も言わず、ただ抱擁を強くするだけであつた。

だがその腕は僅かに震えており、リアスがありつただけの勇気を振り絞つたのだと鈍感な俺でも察する事が出来た。

「……………リアス」

「え……………ん！」

俺はリアスの腕を優しく解いて、向き直つた。

突然振り返つて驚いていたリアスに構わず、俺は唇を重ねた。

「……………はあつ」

「……………ん」

一分ほどキスをして、漸く離れる。

俺はリアスの目を見て、確りと告げる。

「リアス、このゲームに勝つて……………俺は、君を貰う」

「っ……うん」

リアスは俺の告白に、嬉しそうに抱き着いてきた。  
俺もリアスの背に手を回す。

暫くして離れると、リアスは嬉しそうに風呂場を去っていった。

………はああ。

『何だ相棒。やけに昂っているじゃないか』

言うな!!

しょうがないだろ、リアスの身体すつごく柔らかかったんだから!

……ちよいもどかしいけど、ここで発散していいこうかな。

と思っていたら、背後から新しい来訪者が来た。

「イツセー」

「っ、グレイファイア……」

こ、こんな時にグレイファイアが来ちやったよ!

俺はタオルで股間を隠す中、グレイファイアは優雅に隣でシャワーを浴び始めた。

そんな奇妙な沈黙の後、体を洗い終えたグレイファイアは俺へと接近してきた。

「イツセー」

「!な、何だ?」

「リアスお嬢様と、何かあった?」

「え?」

な、何で急にリアスが?

「さつき外ですれ違った時、とても嬉しそうだったから……」

「……まあ、色々よね」

「……そう、じゃあ」

グレイフィアはそれ以上その疑問には問いかけて来なかった代わりに、俺の股間をタオル越しに撫でてきた!

「うっ!?!」

「イツセーのここがこんなになってるのは……どうして?」

そう問いかけてくるグレイフィアの瞳は、艶めかしく微睡んでいた。

それを見た途端、俺の背筋に冷や汗が流れた。

「え、えつと……」

「ねえどうして? リアスお嬢様と……したから?」

「ま、まだしてない! レーティングゲームが終わったら……あつ」

たまらなくなつて叫ぶと、俺は自分が失態を演じたことを悟つた。

リアス、ごめん………!

居た堪れなくなつた俺の目の前で、グレイフィアは静かに笑つた。

「ふふ、そう。リアスお嬢様と………優しく、してあげてね?」

「え、そ、それは勿論………つて、何してんの!?!」

気づけば、グレイフィアは俺のタオルを取り払つていた!

慌てて隠そうとするが、グレイフィアはそれを静かに制止した。

「まだ処女のあの子に欲情しちゃうなんて………悪い子」

「よ、よくじよつ」

「だから………」

俺は浴場の床に押し倒された!

あ、この流れは………

「お・し・お・きゅ」

その次の日、気づけばベッドの上で意識がハッキリした事だけ言っておく。

## MAGIC 111 『決戦都市アグレアス』

ゲーム当日。

「はあ……凄いです」

「ああ。本当に島が浮いてるんだね」

アーシアとゼノヴィアが、ゴンドラの上から感嘆の息を吐いた。

今俺達に向かってるのは空中都市・アグレアス。

何とこの島、浮いているのだ。

何でも島を浮かせている動力は旧魔王時代の産物だそうだが、詳しいことは分かっていない。

いや、性格には魔王アジュカ・ベルゼブブ様ぐらいしか知らないのだそうなの。

確かにそんな物を見れば驚嘆するだろうけど……如何せん俺にはそんな余裕がなかった。

『相棒、何時までやつれてるんだ』

……しようがないだろ。

昨日のあの情事も途中から記憶無くなつて、気付けばベッドで寝ていたんだから。  
『いい加減慣れろよ』

……慣れる気がしないんですけど。

『駄目だこりゃ』

ほつとけ!!

……因みにこの場所は有名な観光地でもある。

この都市への入り方には大きく分けて三つある。

一つは魔方阵を使った転移、でもこれはVIPクラスか、特別な行事でなければ行き来は出来ない。

まあ世界遺産でもあるらしいから、おいそれと魔力による移動は許可していないんだ。

それに良からぬ事を考えてる悪魔とか来そうだしな。

二つ目は飛行船等の空便、そして三つ目は——今俺達が使用しているゴンドラでの移動。

これは満場一致で皆乗りたい!と申し出た為だ。

リアスは一度これに乗ったことがあるらしく、ここからの景色について言及したのが

切っ掛けだ。

『ゴンドラの文字を入れ換えると?』

『マンドラゴラ』

どっから出てきたその単語。

「実はな、今回のゲーム会場設定は上の連中が相当揉めたらしくてな」

と、漫才繰り広げていたら、アザゼル先生が不意にそう呟いた。

「どういう事っすか?」

「現魔王派の上役はグレモリー領か魔王領での開催を望んだんだが、血筋を重んじるバアル派がバアル領での開催を訴えてな。中々の泥仕合になったそうだ」

「……まさか、トルコ相撲で?」

「……………あのな、悪魔のお偉方がそんな事で物決める訳ねーだろ。不覚にも面白いっ  
て思っっちゃまったぞ」

と、一言突っ込んでからアザゼル先生は続ける。

「…………ゲフン。現魔王は世襲じゃないからな。家柄、血筋を重視する上級悪魔にとっ  
ちや、大王バアル家は魔王以上に名のある重要なフアクターなんだよ。元七十二柱の第  
一位だからな」

「……旧魔王に荷担してた悪魔達も過去にそんな事言つて身内で揉めたつてのに、何でまたおんなじ事をするんすかね」

『それはそれ、これはこれつて奴だろ』

ドライグの言葉に、先生はげんなりしながら頷く。

「そう言うこつた。大人つてのは難しい生き物なんだよ。人間にしろ、悪魔にしろな。体裁、趣、未だ貴族社会が幅利かせてる悪魔業界も一枚岩じゃないつて事だ」

「……それで結局アグレアス領に……」

「それも苦肉の策つぽいよなあ」

「時代は変われど、毎度苦労するお家だ。大公アグレアスは」

乾いた笑いを溢す中、木場は神妙そうに呟いた。

「……僕達のゲームは、魔王ルシファーと大王バアルの代理戦争と言う事かな」

「ま、そう言う風に見る連中は多いな。表向きはウィザードラゴン&プリンセスシュガーVS若手最強サイラオグ……裏じゃ政治家連中がアーでもないこーでもないつて見守つてるんだらうな」

先生は木場に答える。

「……そう言うのは俺達にとつちやまだ関わるべきじゃない。ただ目先の戦いに集中すべき、じゃないすかね」



「イツセーの言うとおりだ。お前達は戦う、ソレだけを考えてたら良い。お前達が負け  
たとしても、サーゼクスが政治的不利になることはない。ただ大王家の連中とサイラ  
オーグの後ろ楯が甘い汁吸うだけだ」

……けどそれでも、

「サイラオーグさんだから、今更政治家の意見に左右されたりはしないでしようね」

「そうだな。アイツ自身はただ、上を目指すためのパイプ作りとしての関係だ」

野望を叶えるには、力だけじゃ駄目ってことだな。

『そりやそうだろ。何時の時代も、爪と牙だけの野獣はただ死んでいくだけだ。己を律  
する事が出来る理性、生き残る為の知恵も揃って、一人の人間は覇者になる。昔の戦国  
武将が良い例だ。……相棒』

何だ？

『恐らくこの試合、お前達が勝てばサイラオーグ・バアルは後ろ楯を全て無くす。奴自  
身、名のある悪魔達に認められるというのは挙げるべき成果の一つだと理解はしてい  
だろう。後は結果次第で如何様にも変わる。勝てば上へ、負ければ失う……だがお  
前にも勝つべき理由がある。だから倒すことを躊躇うなよ』

……分かってるさ。

「そういえば先生。この試合、テロリストに狙われたりする事は……」

木場が先生にそう尋ねた。

先生より先に、俺は木場の質問に答えた。

「ああ、大丈夫だと思うぞ」

「えっ？」

「おいイツセー。何でそう言い切れるんだ？」

「あー……こないだヴァーリからメールがあつたんで」

『はあ!?!』

全員が驚いた声を上げた。

「ち、ちよつと待て！何でお前、ヴァーリのメアド知ってるんだよ!?!」

「こないだ前書きコーナーで交換したんすよ」

「メタい!!」

「そしたらほら」

俺は携帯を操作して全員に画面を見せる。

メールの内容はこうだった。

『バアル家のサイラオーグと君達グレモリー眷属の大事な試合だ。君にはエロゲ等の借りもあるし、俺自身この試合は非常に興味がある。君達の試合の邪魔はさせない』

……と。

「……あの野郎、憎いことしてくれやがるな」

口がにやけてますよ、先生。

「……イツセー先輩、続きがありますよ」

「え、ああ、これはなあ」

「んあ？……アザゼルの積みプラモの処理を後日手伝ってくれると助かる………すまん、イツセー」

「すごいや伝言でカイトが怒ってましたよ。ディープストライカーなんて作らないなら買うなって」

「……すまん」

――

その頃のヴァーリチーム

「未だにこう言う作業は慣れないな……」

「おいヴァーリ！ むやみやたらにパーツ切り取るなよ………つて言つた傍から切り取るな！ まだその部分作らねーから!!」

「アーサー、そのフレーム取ってー」

「はい。……ルフェイ、貴女まで無理をする必要はありませんよ」

「い、いえ、あんなに殺気立つてるカイトさん見たら、私だけ見ているだけにはいかなうかなって……」

「殺す、殺す………」

『……人間の憎悪は時として恐ろしいものだな』

終わり

—————

ゴンドラから下りた俺達を出迎えたのは、入待ちファンとマスコミ軍団だった。

ボディーガードとスタッフに誘導され、一台のリムジンへと乗り込んだ。

「お待ちしておりますわ、皆様」

リムジンに乗っていたのはレイヴエルだった。

聞けば先にここに来て諸々の準備を進めていたんだとか。

すげえなこの子。

……しつかしすげえ人混みだな。

何て言うか、テレビの大物人物になった気分だぜ！

『実際大物だろう』

そうでしたね。

でもこう実際に体感すると言ってみたくなるといっか……

『……人間とはよく分からん』

まあ俺悪魔だけだな。

そうこう言っている内にリムジンはすいーと進み、会場である巨大なドームが視界に入ってきた。

「ひえー、すげえ豪華なホテル……」

今俺達がいるのは試合会場のアグレアス・ドームの横にある高級ホテルだ。

……悪魔になってからこう言う豪華な場所ばかり行ってる様な気がするな。

『気にするな』

そうだな。

気を取り直して専用ルームまで足を運んでいる最中、何かの気配を感じて俺は足を止めた。

「どうしたのイツセー……っ！」

通路の向こう側を睨む俺を不審に思ったのか、リアスが尋ねてくると、リアスも何かを感じ取ったのか、身構えた。

すると奥からはフードを目深に被った怪しげな集団が現れた。

『……ほお。こりやまた大層な連中だな』

……知ってるのか、ドライグ。

『あの真ん中にいる司祭服着た奴をしてみる。驚くぞ』

どういう……うえっ?!

ドライグに言われたので集団の真ん中を見ると、俺は絶句した。

そのローブの下にあったのは——骸骨。

何と骸骨が司祭服を着ていたのだ!

その骸骨は俺達の眼前で歩みを止めると、目のない眼孔の奥を光らせた。

『これはこれは紅髪のグレモリーに、墮天使の総督ではないか』

……喋った感じがしないな。

これは魔法で言葉を飛ばしているの、か？

「おお、これは冥界下層……冥府に住まう死の神ハーデス殿。死グリムリッパ神をそんなに引き連れて上がってくるとは……しかし、悪魔と墮天使を嫌う貴方がここに来るとはね」

ハーデスって……まさか、この骸骨が神様なのか!?

ハーデスって、冥王ハーデスだろ!?

『ああ、死の国を納める冥府の神。人間の生前の悪行を量り様々な地獄で死者を裁く、薄ら骸骨だ』

薄ら骸骨って……いや、骸骨だからってっぺんハゲだけでもさ。

『フアフアフア……言うてくれるものだな、カラスよ。最近上が何かと五月蠅いのでな。視察に訪れたまでよ』

「骸骨ジジイ。ギリシャ側の中であんただけが勢力間の協定に否定的なようだな」

『なればどうするとな？この年寄りもロキの様に屠るか？』

そのやり取りの後、ハーデスを取り巻く集団から殺気が発せられる。

おいおい試合前なんですけど！

「屠るなんて誰が言ったよ。俺はただ寛容になれって言いたいんだよ。特にあんたの周りじゃ黒い噂が絶えないんだからな」

『ファファファ……カラスとコウモリが群れてピーチクパーチク鳴いとると、私とて防音対策もしたくなるのでな』

わあお、隠す気のない蔑みだ。

ある意味好感が持てるぜ。

そう思っていると、骸骨は今度は俺の方を振り向いた。

『赤き龍か。白き龍と共に地獄の底で暴れまわっていた頃が懐かしい限りだ……』

何、お前昔何かしたのかドライグ。

『ま、若気の至りって奴だよ』

どんなはぐらかし方だそれ！

『……今代の宿主は、我らに近い物を抱えておる様だな。ファファファ……小僧、お主とは仲良くなれそうだ』

「……………そりやどーも」

……近いもの。多分、ドラゴンの事か。

どっちにしても俺は仲良くなりたくないっす！

『まあ良いわ。今日は楽しみときせてもらおう。せいぜい死なぬようにな』

それだけ言い残すと、ハーデス一派は俺達の元を通りすぎていく。



「……北欧時代に先輩のヴァルキリーからハーデス様の話は聞いてはいましたが……魂を掴まれているような感覚は、生きた心地がしませんね」

「道理で内側がゾワゾワした訳だ……絶望した時と何か似てると思った」

先生は首をコキリと鳴らした。

『首の骨が折れる音』

「折れてねーよ!!……ま、あんなジジイだが、各勢力の主要陣の中でもトップクラスの実力者だからな」

「じゃあ、サーゼクス様よりも……」

「……多分な。良いかお前ら、絶対に奴らと敵対するな」

ま、近付いたらロクな事なさそうだしな。

『因みに冥府でナニをしたんだ』

『……秘密』

## MAGIC112 『激励』

骸骨神こと冥王ハーデスとの邂逅を経て、俺達は専用の待機室にて思い思いに過ごしていた。

トレーニング機器等も充実しており、もはや部屋というより何処かのスポーツジムのようだ。

体を使うメンバーはジャージに着替えてストレッチなどに勤しんでいた。

え、俺はつて？

俺は瞑想しながら神器の奥深くへと意識を潜り込ませていた。

『珍しいな相棒、お前がここに来たがるなんて』

意識体の体で降り立った時、隣に現れたドライグがそう聞いてきた。

「……なあドライグ」

『ん？』

「今回の試合、勝てると思うか？」

俺が今回訪れたのは、俺が今まで目を背けていたあの力——覇龍。

あの力をどうにかして使いこなせないか、そう思いここに来たのだ。

『……どうだろうな。だが一つだけ言えるのは』

『魔龍進化だけでは勝てんだろうな』

おお、いきなりドラゴンの登場だ。

『……以前から感じていたが、辛気臭い場所だな』

『お前、どうやってここに』

『貴様がアンダーワールドに来る際に作った繋がりを利用した』

『おお、あれか』

そんなもんいつの間につつたんだ。

『作ったつーか、以前発動した覇龍の影響で出来たつーか』

『どっちにしても貴様が原因だろうが』

『無実だつつてんだろーが』

『ほげげ』

相変わらず仲の宜しいこつて……と、俺は仲良く口喧嘩する二人を尻目に神器の奥にあるテーブルへと向かう。

そこには残留思念という形で、歴代の赤龍帝——言うなれば、俺の先輩達が座っている。

とは言え談笑が繰り広げられていることはなく、一部を除き全員俯いて沈黙を貫いていた。

「……しっかし、すげえ絶望の念だな」

どの思念も無念や恨み、憎しみといった絶望の塊であるドラゴンと似た波動を放っている……こりや俺が覇龍発動した時に融合しちまう訳だ。

「ごめんねイツセー君、折角来てもらったのに」

「いえ、気にしてないっすよ。エルシャヤさん」

俺は背後に現れた女性の声に驚く事無くそう返す。

振り返るとそこには赤いドレスを着たお姉さんがいた。

この人はエルシャヤさん。

歴代でも一、二を争うほど強かったそうで、ドライグ曰く『歴代でも最強と呼んで違くない』人だ。間違ってもエルシャヤダイは関係ない。

因みにもう一人最強の赤龍帝はいる……今はいないけど。

「でも珍しいわね。君がここに来るなんて」

「……ちよつと、気分転換に」

「……お姉さんでよければ、話し相手になるけど？」

エルシャヤさんは俺の顔を覗き込んでそう言ってくれる。

「…何て言うか、このままで良いのかなって」

「このままって？」

「俺、ずっと覇龍の事を頭で考えないようにしてたんです。もう皆に心配はかけたくないから……けど、何時までもこのままにしているのもどうかと思います。それに…」

「サイラオーグ・バアルに今のままでは勝てないから？」

「…凄いつすね」

「当然よ。君の事はずっとここから見てたし」

エルシャさんはクスリと笑って俺を見つめる。

「私じゃ君の悩みは解決させてあげられないけど、一つだけなら助言できるわ」

「助言？」

「いざ迷ったら、君自身の信念を信じなさい」

……信念。

「さ、この話は以上！早く表に戻りなさい」

「えっ」

「お客さんが来てるわよ。じゃあね」

エルシャさんとの別れの挨拶もそこそこに、俺の意識は浮上していった――。

――

「…ツセー…イツセー！」

「はっ」

ふと目を開けると、目の前にはリアスの奇麗な顔が。

そしてその背後には懐かしい気配が。

「あ、ライザー来てたのか」

「ついさっきな」

そう、この待機室にはライザーが来ていた。

「様子見の序でにゲームについて少し話そうと思ってな。今日のゲームはプロの好カード並みに注目を集めている。観客も席を埋め尽くす勢いだしな。ゲームの流れもプロの試合と同じだろうな」

「確かにスゲー人の数だったな」

今までの若手のゲームは決まったフィールド内で戦って最終的に王を倒せば勝ちという単純なルールだったけど、プロの試合と同じってことは特殊なルールもつくのだから。

「お前達はほとんどプロと同じ舞台上で戦うことになる。実戦とは違うエンターテイメン

ト性を強く感じて戸惑うこともあるだろう。だが、これだけの大舞台だ。力を発揮すれば当然、評価にも繋がる。リアス、おまえにとつて一つの正念場だ」

ライザーは真面目に語っていた。

プロとして、先人としての意見を向けてくれていた。

「私がここまで来れたのは眷属のお陰よ。今まで守ってもらってばかり……。だから、この子達を上手く導けていない自分の未熟さに怒りを覚えるわ」

リアスは己の胸の内を吐露する。

まあ仕方ないよな……こんな大舞台だし、リアスだつて普通の女の子だ。

それを聞いたライザーは嘆息した。

まるでそんな事かという風に。

「眷属を導く力つてのは俺が嫌いな『努力』と経験を積みめばある程度のもは得られる。今は未熟でもな。だがな、巡り合い——良い人材を引き寄せる才能は別だ。この場にいる面子はおまえの持つ巡り合いの良きで集まった眷属だと思うぞ？」

「けれど、それは赤龍帝であるイツセーが引き寄せた部分も強いと思うわ」

「だが、赤龍帝と出会ったのはおまえの運命だ。違うか？ 確かにドラゴンの強者を引寄せるといふ特性が働いたのかもしれないが、その赤龍帝と出会い、眷属にしたのはお前だろうか？」

ライザーはライザーらしくからぬ真つ直ぐな目でリアスに言い切った。

「自信を持ってリアス。ここにこいつ等を集めたのはお前自身だ。この眷属たちは——  
—お前の宝だ」

……いい事言うじゃねーか、ライザー！

『試合前に肩肘張つてどうする？ 足りない技量はこれから、この試合で得ていけば良い話だ』

『その発言は、貴様を信じてここにいる全員の思いを踏みにじるんじゃないのか』

ライザーの言葉と、俺の相棒二人の言葉にハツとさせられるリアス。

一方のライザーは恥ずかしげに頬を掻いていた。

「ま、前回のゲームで負けた俺が言うのもなんだけだな。とにかく応援してるぜ、リアス。——勝てよ」

「ええ、もちろんよ」

ライザーの激励にリアスも晴れやかな表情で応じる。

上手い事リアスの緊張も解れたみたいだな。

「変わったな、お坊ちゃん」

「茶化すんじゃないねえ。こうなったのはお前のせいだろうが」

ハハッ、そりやどうも。



「お前もさっさと上級悪魔になって眷属を持って。プロの世界で雪辱を果たしてやるよ」  
「プロ、か……。良いぜ、またぶっ飛ばしてやるよ」

「ほざけ！今度こそ俺が勝つ！」

俺とライザーは拳を突きつける。

「あー、それとレイヴェルの事、よろしく頼むな。中々我が儘で迷惑かけるとは思うが、一途な奴でもあるからな。泣かせたら燃やすぜ？」

「おう」

「よ、余計なお世話ですわー！」

レイヴェルは顔を真っ赤にして叫ぶ。

「へいへい。ったく、俺も焼きが回ったもんだな」

そう自嘲気に笑いながら、ライザーは退室していった。

ゲーム開始まであと十分ほど。

俺達はドーム会場の入場ゲートに続く通路で控えていた。

ゲートの向こうから会場の熱気と明かりがさしこみ、同時に大勢の観客の声も聞こえてくる。

俺達の戦闘服はお馴染みの駒王学園の制服。

ただし、耐熱、耐寒、防弾、魔力防御などと、あらゆる面で防御力を高めた特別仕様だ……断っておくけど、界王様は何も関わってない。

因みにアーシアは例のシスター服、ゼノヴィアは教会時代のボンテージ風の衣装、口スヴァイセさんはヴァルキリーの鎧だ。

三人とも、一番落ち着く服装だそうな。

『いよいよか』

ああ……ドライブ、一つ頼まれてくれるか？

『何だ？』

この試合……いざとなれば覇龍を使う。

『…本気か』

マジだよ。この問題は何時までもほったらかしには出来ない……俺も一歩前に踏み出したいんだ。

『相棒。分かっているとは思いますが、ドラゴンを宿している以上お前の覇龍は以前と同様のものになる』

分かってるさ。

……………この壁は、何時かは越えなきゃいけないんだと思う。

俺は、赤龍帝だからな。

『……………わーったよ。せめてチビツ子共のトラウマにならないように怨念を抑えてやる』

『サンキュー』

『そして、西口ゲートからはリアス・グレモリーチームの入場です!!』

その時、入り口の向こう側からアナウンスが響いてきた。

「————行きましょう」

リアスの声に続けて、俺達も歩み始めた。

『大見得切ったは良いが、本当に抑制できるのか』

『最悪ハザードフォームになりそうなのは相棒には内緒にしといてくれ』

『……………俺も怨念に囚われんように努力するでしょう』

そういう不安を煽る会話は奥でやれよ!!!

## MAGIC 113 『Game 始動』

大歓声の中、俺達が目の当たりにしたのは広大な楕円形のフィールドの上空に浮かぶ二つの浮島だ。

フィールドに浮かぶ浮島の一つにサイラオーグさん達バアル眷属が揃っている。

『さあ、グレモリーチームの皆さんも陣地へお上がりください！』

アナウンサーに促されて俺達も浮島へと登る。

陣地には人数分の椅子と謎の台。

それから、一段高いところに設けられた移動式の魔法陣らしきものがあるぐらいで、それ以外は特にない。

これだけ広いつてことは、フィールド全体を使った乱闘なのか？

『え、乱交？』

どう聞き間違えるんだよ今のをよ！

俺は馬鹿な発言をするドライグに突っ込みを入れつつ、アナウンスを待っていると、『ごきげんよう、皆様！今夜の実況は私、元七十二柱ガミジン家のナウド・ガミジンがお送りいたします！どうぞよろしく！』

会場に設置された超巨大モニターに映り込んだのはイヤホンマイクを耳につけたド派手な格好の男性だった。

へえ、実況付とは流石はプロ仕様だな。

『今夜のゲームを取り仕切る審判役にはリュディガー・ローゼンクロイツ！』

宙に魔法陣が出現すると、そこから銀色の長髪に正装という出で立ちのイケメンが現れた。

聞いたことある名前だなど思っていると、会場の女性悪魔から歓声が上がった！

「リュディガー・ローゼンクロイツ……元人間の転生悪魔にして最上級悪魔。しかもラッキング七位の大物です」

と、小猫ちゃんが解説してくれた。

そうだった。俺と同じ元人間のトップランカーだから記憶に残ってるんだった。

『そして、今回の特別ゲストは、解説として墮天使総督のアザゼル様にお越しいただいております！どうも初めまして、アザゼル総督！』

『どうも初めまして、先ほどご紹介にあずかりました墮天使総督のアザゼルです。皆さん、よろしくお願いします』

……はあ？

『「あのおっさん何してんだ？」』』

俺達三人は思わずハモって突っ込んだ。

いや、見知った顔が超絶営業スマイルで現れたんだから吃驚したぞ！

『アザゼル総督はサーゼクス・ルシファア様をはじめ、各勢力の首脳の方々と友好関係を持ち、神器研究の第一人者としても有名ですが、今日の一戦、リアス・グレモリーチームの専属コーチをされた上で、どう注目されているのでしょうか？』

『そうですね。私としましては両チーム共に力を出しきれれるのかという面で——』  
意外に解説らしい事言ってる……意外だ。

『厚顔無恥な解説だな』

『あれどう見たって独身だって分かる面だぜ』

お前ら、そんな煽る事言うと……

『いい加減にしとけよそのドラゴントリオお!!!』

ほら、突っ込み来た。

先生、突っ込むのは良いっすけど会場のお客さんポカン顔ですよ。

『アザゼル総督の激昂はさて置き』

『さて置くな!!』

『更に今回は、もう一方お呼びしております！レーティングゲームのランキング第一位！現王者！皇帝デイハウザー・ベリアルさんですッ！』

「うおおおおおおお！！！！」

会場全体の歓声の振動がこちらにまで届いてくる！

その盛り上がりの中、灰色の髪と瞳を持つ男性——デイハウザー・ベリアルが朗らかに口を開く。

『ごきげんよう、皆さん。デイハウザー・ベリアルです。今日はグレモリーとバアルの一戦を解説する事になりました。どうぞ、よろしくお願い致します』

……あの人が、レーティングゲームの現王者、皇帝ベリアル。

『エンペラーよりカイザーと呼ぼうそうしよう』

『何だ、棍棒は持っていないのか』

違うベリアルになるだろそれ！

「デイハウザー・ベリアル。いつか必ず——。けれど、今は目の前の強敵を倒さなければ、私は夢を叶えるための場所に立つ事すら出来ないわ」

…画面に映る皇帝を真剣な眼差しで見つめていたリアスは、気持ちを切り替えて前を向いた。



確かに、今はサイラオグさんに集中しなきゃな。

『まずはフェニックスの涙についてです。皆さまもご存じの通り、現在テロリスト集団、禍の団の連続テロにより、各勢力間で緊張が高まり、涙の需要と価格が跳ね上がっております。そのた、用意するだけでも至難の状況です！』

此間の騒動でもまさに雀の涙程度しか支給されなかつたもんな。

『しかしーっ！ 涙を製造販売されているフェニックス家現当主のご厚意とパール、グレモリー、両陣営を支持されるたくさんの皆さんの声が届きまして、今回のゲームで各チームに1つずつ支給される事となりました！』

おお、涙は支給されるのか。

レイヴェルも何とか用意したいって言ってっけ。

「つまり、サイラオグ・パールを二度倒す覚悟を持たないといけないみたいだね」

「そう言うこつたな」

それは向こう側も同じだ、まあ俺達はアジアがいるからそこまで重要視するほどではない。

けど、過信は禁物だ。あつて困る事はない。

「王を取られたら終わりって事を考ええると、リアスが持つのが妥当か」

「そうだね」

『そして、このゲームには特殊ルールがございます！』

……特殊ルール？

聞きなれない単語に首をひねっていると、アナウンサーの解説が聞こえてくる。

『特殊ルールをご説明する前にまずはゲームの流れからご説明致します！ゲームはチーム全員がフィールドを駆け回るタイプの内容ではなく、試合方式で執り行われます！これは今回のゲームが短期決戦を念頭に置いたものであり、観客の皆さんが盛り上がるように設定されているからです！若手同士のゲームとは言え、その様式はまさにプロ仕様！』

所謂タイマンか。

ドラゴタイマーは使っちゃダメかな？

『本人だからセーフじゃね？』

『そして、その試合を決める特殊ルール！両陣営の王の方は専用の設置台の方へお進みください！』

実況に促されたリアスとサイラオーグさんがそれぞれの設置台前に移動し、台から何が現れた。

画面に映し出されたのは——何の変哲もないサイコロ。

「…サイコロ？」

『出た目に応じて攻撃力が上がったり下がったりしそうだな』

『深夜バスで人間界に直帰と言う可能性もあるぞ』

天使と悪魔のサイコロでもねーし、サイコロの旅でもねーだろ。

『そこにダイスがございます！それが特殊ルールの要！今回のルールはレーティングゲームのメジャーな競技の1つ！——ダイス・フィギュアです！』

「ダイスフィギュア？」

「またもや首を傾げる俺に、木場が教えてくれた。

「今まで僕達が体験してきたのは特殊なルールのない比較的プレーンなルールのゲームなんだ。本格的なレーティングゲームには幾つもある特殊なルールがあつて、今回はダイス・フィギュアもその一つさ。他にもフィールド中に設置された数多くの旗を奪い合う『スクランブル・フラッグ』と言うルールもあるよ」

「ほーん。色々あるんだな」

奥が深いなと思っていると、解説が続いたので耳を傾ける。

『ご存じではない方のために改めてダイス・フィギュアのルールをご説明致します！使用されるダイスは通常のダイス同様六面、1から6までの目が振られております！それを振るい、出た数字の合計で試合に出せる手持ちが決まるのです！人間界のチェスには駒の価値と言うものがございます！これは基準として「兵士」の価値を1とした上で盤

上での活躍度合いを数値化したもの。悪魔の駒でもその価値基準は一定の目安とされており。勿論、眷属の方が潜在能力以上の力を発揮して価値基準を超越したり、駒自体にアジユカ・ベルゼブブ様の隠し要素が盛り込まれていたりして想定以上の部分も多々ありますが、今回のルールではその価値基準に準じたもので執り行います!」

駒の価値か……ドライグ、覚えてるか？

『女王が9、戦車が5、騎士と僧侶が3だった筈だ。変異の駒に関しては含まれなかったと思うが』

『サンキュー』

『お前は兵士だから、1だな』

へえ。

『まず、両チームの王がダイスを振り、出た目の合計で出せる選手の基準が決まります! 例えば出た目の合計が「8」の場合! この数字に見合うだけの価値を持つ選手を試合に出す事が出来ます! 数字内であれば複数での出場も可能です! 「騎士」なら価値は3なので、2人まで出せますね! 駒消費1の「兵士」ならば場に8人も出せます! 駒価値5の「戦車」一名と駒価値3の「騎士」一名も合計数字が8なので出す事が可能となり、異なる駒を組み合わせて出場させることもできます! そして複数の駒を消費された眷属の方もその分だけの価値となりますので、グレモリーチームであれば「兵士」の駒を8

つ使われたと言う赤龍帝の兵藤一誠選手が駒価値8となります!」

俺一人で八人分か…責任重大だな………つて待てよ、普通なら兵士は複数いるけど、今回のゲームでは両チームに一個消費の眷属なんていないぞ。

2とかでたらどうするんだ?と思っていると、丁度この事に関しての説明がなされた。

『しかし、今回は両陣営とも駒価値1から2の選手がいません。そのため、合計数字が2になった場合は振り直しとなります。また、試合が進むにつれて手持ちも減りますので、当然出せる選手の数字にも変化があります。この場合も互いの手持ちと合致するまで振り直しとなります!』

ほお、つてまあそりやそうか。

…そう言えば、王の駒の価値は?

『王自身の参加は事前に審査委員会の皆様から出された評価によって、出場できる数字が決まります!無論、基本ルール通り王が負ければその場でゲーム終了でございます!』

「評価?」

「ゲームの事前に審査委員会がリアスとサイラオーグ・バアルがどのぐらいの駒価値があるのか、それは主に王自身の実力であったり、眷属の評価、対戦相手からの比較など

から算出しているのです。今回の場合は、恐らくですがロキとの戦いまでの戦闘データが参考になりますわ」

と、朱乃さんが教えてくれた。

そして中央のモニターにその数字がでかかど発表された。

『サイラオーグ・バアル選手が12！リアス・グレモリー選手が8と表示されました！サイラオーグ選手の方が高評価ですが、逆に言いますとマックスの合計が出ない限りは出場できない事になります！』

やっぱりサイラオーグさんの方が高いか……以前アザゼル先生に見せてもらった戦闘データのグラフでもぶつちぎりだったからな。

『それともう一つルールを。同じ選手を連続で出す事は出来ません。これは王も同様です！』

続けて同じ奴を出そうなんてそうしないと思うぞ、スタミナ馬鹿でもない限りは。

「最初の数字が12だとしても、サイラオーグ自身が序盤から出てくるなんて事は無いと思うわ。彼の性格上、きつと自分の眷属をきちんと組み合わせさせて見せてくる。そのために厳しいトレーニングを重ねたのでしようから。でも、必ず彼自身も出てくるわ。タイミングは合計数字次第だけど、バトルマニアなのは確かだと思うから」

「だとしたら、オオトリで出てきそうだな」

数字によってはタイムマンもあるから、直接戦闘が苦手なギャスパーと回復要員のアーシアを出すのは危険だな。

「アーシアは常にこちら側で温存させる事を考えると、こちらの戦闘要員は実質8人ね」  
リアスもどうやら同じ考えの様だ。

まあ戻って回復できる事を考えたら、いい配牌かな。

『さあ、そろそろ運命のゲームがスタートとなります！両陣営、準備はよろしいでしょうか？』

実況者が煽り、審判が手を大きく挙げた

『これより、サイラオグ・バアルチームとリアス・グレモリーチームのレーティングゲームを開始致します！ゲームスタート！』

『ガンダムファイト・レディイイ、ゴオオオオツ!!』  
『仮面ライダークロニクル……』

どっちもちげえ!!!

# MAGIC114 『剣騎士×槍騎士』

『それでは両「王」<sup>キング</sup>の選手、台の前へ』

審判に促され、リアスとサイラオーグさんがそれぞれダイスが置かれた台の前に立つた。

『第一試合を執り行います。出場させる選手をこれより決めるため、両者共にダイスを手に取ってください』

リアスがダイスを手に取った。

……見てるこつちも緊張するな。

『賭け事してる気分だな』

『丁か半か、だったか』

『シュート!』

審判の掛け声の元、二人がダイスを振った!

『何が出るかな何が出るかな』

『それはサイコロ任せだー』



よおい！……つて何で俺まで？

それは兎も角、台の上でダイスが止まったようだ。

その数字は——

『リアス・グレモリー選手が出した目は2！対するサイラオーグ・バアル選手の目は1！合計は3です！この場合、両選手の兵士が大数の為、価値観が3の騎士か僧侶の一名となります！さあ、両陣営の初陣を飾る眷属は誰なのかあ!？』

3………いきなり小さい数字だな。

序盤からどうなるかわかんねえぞこりゃ！

『作戦タイムは5分間となります。その間に出場選手を選抜して下さい。尚、兵士のプロモーションはフィールド到着後、昇格可能となります。試合毎にプロモーションが解除されますので、その都度フィールドでプロモーションを行ってください』

5分か……長すぎ短すぎだな。

作戦タイムと洒落混もうとした時、両チームの陣地が結界で覆われた。

「防音対策だよ。作戦が外に漏れない様にするためのものだね」

木場がそう言う。

「更に外部に口元を読心術で読まれないように、各選手の顔に特殊なマークがつくよう

に加工されるんだ」

へえ……あ、ホントだ。

作戦タイムの間までプロ戦仕様って訳か。

『貴様も加工してもらったらどうだ？主にモザイクで』

『人を放送禁止レベルの汚物だとしても言いたいのかこの野郎』

「うるせえよ。……3と言う事は」

「この場合、出す奴は決まってる様なもんだな。」

「ええ、最初は祐斗を出すわ。最も、向こうは読んでるでしょうけど」

やっぱり。

まあ消去方だよな。

「アーシアとギヤスパーは元々単独では出せないし、ゼノヴィアはテクニックでやられる可能性もあるしな」

「テクニックでくるなら、それ以上のパワーで押し返してみせよう。私の新しいデユラ  
ンダルでな」

ああ、修学旅行の時は無かったんだったな。

漸く教会から帰ってきたのか……それは兎も角。

「そう言うのは序盤で出すべきじゃないだろ。向こうに新しい手札晒す様なもんだし、

何よりゴリ押し過ぎてモリアスの評価が下がる可能性だってある」

「イツセーの言うとおりのよ。ここで評価を下げる訳には行かないから、となればここは手の内を見せても弱味にならない祐斗で行くべきなの」

まあゼノヴィアの場合、ここぞの場面でパワーに頼る可能性もあるしな。

『即ち考え無しと言うわけか』

「む、イツセー。まるで私が何も考えてないと思っていないか？」

「よく分かったな」

「……そこは嘘でも否定してくれ」

ゼノヴィアが目に見えて落ち込んだ……後で励まさないよ。

「読まれても出ない事には変わりはないからね。行くよ」

木場は襟元を直して一歩前に出ていた。

「負けるんじゃないぞ」

「勿論」

俺達がそう交わすと、アナウンスが告げられた。

『まもなく時間です。試合に出場する選手は専用の魔法陣の上に立つてください。その魔法陣から別空間に用意されたバトルフィールドへ転送されます。なお、フィールドに転送されるまでの間、両陣営の陣地は結界により不可視の状態になります』

あの魔方陣はその為のものか……転送まで姿を隠すのは、直前で選手を変えさせない為だな。

後はどんな選手が出てくるのか、観客の想像力を掻き立てて楽しませるのもあるのかも。

「では、行ってまいります」

耳にイヤホンマイクをつけた木場が魔方陣の上に立つ。

その瞬間、魔法陣が輝き、木場の姿が消えていった。

———

木場が転送された瞬間、幾つもの映像風景が現れ、フィールドも緑一面の平原へと変わった。

そして我らがイケメン王子はそこにいた——— 相対するのは、青白い炎を纏った馬に乗る甲冑騎士。

『おおっと！第一試合の出場選手がバトルフィールドに登場です！フィールドは見渡す限りの広大な平原！この緑広がる原っぱが第一試合の舞台となります！そして両陣営から選ばれたのは——— グレモリー眷属の神速の貴公子！木場祐斗選手です！！リアス姫のナイトが、登場しましたア！！』

「「「「キヤアアアアアアアツ!!木場きゆううん!!」」」」

おおっと、いきなり女性陣の黄色い声援が上がったぞ!

流石イケメン王子、もげろ!!

『そして対するバアル眷属は——』

実況が紹介する前にバアル眷属のランスを持った甲冑騎士が馬を歩かせ、兜のマスクを上げた。

あの人は確か……サイラオーグさんの騎士。

『私は主君、サイラオーグ・バアル様に仕える騎士の一人、ベルーガ・フルカス!!』

フルカス……馬を司る悪魔だったっけ。

『僕はリアス・グレモリー様の騎士、木場祐斗です。どうぞ、よろしく』

『名高き聖魔剣の木場祐斗殿と戦う機会を主君からいただき、剣士冥利に尽きるばかり』

『こちらこそ、貴殿との一戦を楽しみだと思えます』

不敵に返すねえ〜!

『アザゼル総督、あの青白い炎に包まれた馬の事です』

『——「青ペイルぎめた馬」、地獄の最下層ことコキュートスの深部に生息すると言われる高位の魔物ですな。名だたる死神が跨がる物として語り継がれております。それ故に、乗りこなすのも容易ではない!気性が荒く、気に入らない者ならば主でさえ蹴り殺して

しまう。それを乗りこなすと言う事は、相応の実力者と言えるでしょう』

解説結構上手いな、あの人。

天職じゃね？

『第一試合、開始して下さい！』

お、始まるぞ！

開始の合図と共に、フルカスの馬が駆け出した！

「速いっ！」

何てスピードだ……こりや目が慣れない内は追うことも出来ねえぞ！

だけど、うちの騎士様も負けてないぜ！

「——っ！」

姿の消えたフルカスの一撃を、微動だにせず聖魔剣で全て受け流した！

木場は一息吐くと、直ぐ様同じスピードで動きだし、神速の世界に突入する！

ギイン！ギイン！！

フィールドに響くのは得物がぶつかり合う音と火花だけ……激突の瞬間は見えても、他の動きだけは認識できない状態だ。

そして、両者が鏑迫り合いの状態で見せた。

『我がアルトブラウの脚を持つてさえも互角が良いところは……恐るべし、リアス姫

のナイト！』

『そちらこそ、馬とのコンビネーションが抜群ですね。馬を斬ろうにもランスが届き、あなたを屠ろうにも馬がそれを許さない。……ならば、足場を奪うまで！』

木場のオーラが激しさを増すと、周囲の地面から聖魔剣が幾重にも生えてきた！

だがフルカスは動じる事なく、馬と共に宙高く飛び上がった！

『咲き誇れ！雷の聖魔剣よ!!』

だが木場も直ぐ様宙に聖魔剣を生成すると、そこから雷が降り注ぐ！

『甘いー』

っ、フルカスはランスを避雷針がわりに雷をやり過ぎた！

そして直ぐ様馬の鬣から——二本目のランスを取り出した！

『ほお、あの馬の鬣は、違う次元に繋がっているのか』

ってことは……まだランスはあるな。

『っしー！』

俺が感心する傍ら、木場は無数の聖魔剣を虚空より咲かせ、豪雨の様にフルカスに向けて撃ち放った！

『聖魔剣の雨霰と言うわけか！』

言葉では焦っている様だが、それをもランス二本で殆ど破壊していく！

だけどそれでも全てでは破壊しきれなかった様で、フルカスの甲冑には幾重もの切り傷が生まれていた。

『素晴らしい技量だ。ならば……今度は此方から!』

『っ!』

フルカスが飛び出したと同時に——馬とフルカスの姿が無数となった!

幻影か………木場の顔が険しくなったと言うことは、本物と同じ気配って事か!

『ならば……っ! 狂い咲け!!』

木場はマーキングしていた中空に聖魔剣を咲かせ、幻影を消し去っていく!

そしてその勢いのまま聖魔剣のファンネルと共に切り裂いて行くが——

『てやあああっ!!』

『っ!!』

背後から現れたフルカスの槍が木場を貫いた——と思われたが、その場に崩れ

落ちたのは聖魔剣!

『弾けろっ!』

そして別の場所に転移した木場が拳を握ると、聖魔剣の破片が爆発した!

それを受けてフルカスの幻影が消え去っていく!

『ほお、その様な妙技もあるのか。まるで奇術士の様だ』



フルカスが後方から歩み寄ってくる……幻影が消えてる所を見るに、自分から消したのか。

『僕の友人の、受け売りですよ。何もないと思わせてアツと言わせる、とね』  
『ホッホッ。赤龍帝殿の事か』

木場は息を吐くと、不敵に笑った。

『僕は貴方よりも強い。この勝負、何れは僕が貴方の動きを捉える。だけど、その為にはスタミナをかなり使ってしまう』

『自信満々の様ですな。確かに貴殿の才能は私とアルトブラウを上回る。だが、ただではやられませんぞ！後続の為、貴殿の手足を一本でも切り落とし、体力を奪う！』

その宣言を受けて、木場は聖魔剣を消した。

——アイツ、ここで使うのか。

『そう、だからこそ、貴方が怖い。覚悟を決めた使い手ほど怖いものはありません。僕は今、貴方にもう一つの可能性を見せます』

そして木場は手元に一本の聖剣を作り出すと、静かにその言葉を紡いだ。

『バンス・ブレイク禁手化』

木場の体を聖なるオーラが包んでいく。

すると、地面から聖剣が無数に生えてきて、同時に甲冑の姿をした異形の存在が創り

だされていく。

それらは手元に生えた聖剣を手にとると、木場の周囲に群がる。

ドラゴンの兜を被る甲冑騎士の中央に立つ木場は、まるで騎士団を仕切る団長の様  
で。

それを見てフルカスは驚愕に包まれていた。

『……っ！ば、バカな！禁手化だど!? 貴殿の禁手化は「双覇の聖魔剣」の筈! 何故、  
違う禁手となれるのだ!?!』

確かに、アイツの禁手は本来なら双覇の聖魔剣だ。

でもそれは、あくまで「魔剣創造」の禁手だ。

そしてあれは木場が後天的に得た力の昇華。

『……まさか、「聖剣創造」の禁手化、か!?!』

合点が行ったかの様に唸るフルカスに、木場は肯定の意を示した。

『……名は「聖覇の龍騎士団」。聖剣創造の禁手にして亜種です』

そう、あれはコカビエル事件の折りに木場が同胞達の魂から受け取った事で発言した  
力。

だからこそアイツは聖剣と魔剣を同時に創り出せる。

切っ掛けは京都で戦った同じ神器を持つルーラー……もとい、ジャンヌの亜種禁手を

見たことだった。

そこからは聖剣だけで俺との修行に望んだ……………何回か殺しかけたけど。ただあの状態では聖魔剣を発現させる事は出来ず、その逆もまた然り。

とは言えこの辺は修行すればどうとでもなると言うのが見解だ。

『これに至るために聖剣一本で赤龍帝に挑んだよ……………まるで魔王にヒノキの棒一本で挑まされる勇者の心境だったし、何度も三途の川だつて見たよ……………だけど、僕は至れた』  
お前が殺すつもりで来いって言つたからじゃねーかよ！

『本来の「聖剣創造」の禁手は聖剣を持った甲冑騎士を創り出す『ブレイド・ナイトマス聖輝の騎士団』』  
ものだが、木場選手は己のアレンジを加えて亜種として発現させた様ですな。しかも龍の騎士団！かーっ、木場！お前イツセーの影響受けすぎだぞ！大きな御姉様方にとっ  
ちや涎もんだぜ!!』

余計な発言するなよこの独身!!

『んだとこの野郎!!独身で何が悪いんじゃア!!』

独身総督の突っ込みが飛ぶ中、木場は龍騎士団を従えてフルカスの前に立つ。

まだあの状態では聖魔剣程の攻撃力はないけど、騎士団と言う形で指揮している分、  
手数が増す。

あれが同時に仕掛けるとあつちやあ……………

『行きます、フルカス殿!!』

木場が騎士団と共に駆け出した!

高速の剣撃がフルカスに襲いかかる!

『くっ、まだここで負ける訳には行かんだ!!』

フルカスも力強く叫び、前に飛び出した!

と同時に複数の幻影を作り出した!

木場の騎士団とフルカスの幻影がぶつかる!

ギイイイインツ  
!!!!

フィールド内に響く、鈍い金属音。

そしてお互いの幻影と騎士団は音もなく消え去る。

無音が暫く場を支配していたその時、フルカスが光に包まれていた。

見れば、フルカスの甲冑が片口から腹部にかけて砕けて、傷口からは聖剣のダメー  
ジによる煙をあげている。

つまり——

『……見事なり、木場祐斗殿』

フルカスは最後に木場を称えると、フィールドから消えていった。  
『サイラオーグ・バアル選手の騎士一名、リタイヤです!!』

先ずは、俺達の一勝を手にした。

## MAGIC115 『ダブル戦車の蹂躪?』

『初陣を制したのはグレモリーチーム! さあ、次の試合はどちらが勝利を掴むのか!!』  
実況が観客を煽る中、魔方阵から帰還する木場。

それと同じくして、結果が薄れた。

試合が終わったからまたダイスを振るのか……次はどうなるか。

再びダイスが転がり、出た目は——部長が6、サイラオーグさんは4!

今度は大きいぞ!

『おおっと! 今度の合計は10! 10までの選手を出すことが出来ます! 勿論、複数での選出も可能であります!』

『一対一か乱交か、つて事だな!』

確かにそうだけと言いたい方もうちよいあるだろ。

俺と朱乃さんとと単独でしか行けないし、リアスも出れるけどまだ出張るには早い  
……となれば。

「……」は手堅く行くわ。ロスヴァイセ、そしてサポートに小猫。二人に任せるわ」

そうなるな。

木場はさつき出たから今回は出せないし、ギヤスパーとだと実質単独勝負になりかねない。

しかし二人の戦車か……珍しい攻めだな。

「分かりました」

「……了解です」

二人とも気合いバツチリだな。

二人が転送されて再びフィールドが映された。

……薄暗い神殿風のバトルフィールドか。

何とも嫌な記憶が蘇るが、まあそれは置いてこう。

さて、二人の対戦相手は……軽い鎧を纏った金髪優男君と——三メートルはありそうな身長の人だった。

『俺はサイラオーグ様の騎士の一人、リーバン・クロセル。此方のデカイのは戦車のガン  
ドマ・バラム。この二人でお相手する』

『……………』

全部あの優男が紹介しちゃったよ。

しかしすげえ威圧感だな、あの巨人。

『本当に悪魔なのか？怪物と呼んでも違和感がないぞ』

『バラムは怪力が特色の悪魔だからな』

記録映像でも伝わってきた程だ、この男の怪力は。

『クロセルは確か、断絶した家の末裔だった筈だ』

『断絶したと言うのに生きているのか』

何らかの形で末裔が現存するのはあるらしいぜ。

旧魔王の末裔のヴァーリ然り、サーゼクス様の奥さんのエリスさん然り。

『第二試合、開始して下さい！』

審判の声により、試合が始まった。

『……相手が相手なので、初っぱなからクライマックスで行きます』

小猫ちゃんがボソリと呟くと、全身に闘気を纏わせ、猫耳と尻尾が特色の現れる。

だがその尻尾は二つに分かれていた。

これは小猫ちゃんの新しい姿——『猫又モードレベル2』。

仙術により、全身に闘気を纏わせる事でパワーを最大限まで爆発させる他、身体能力も向上するのだ。

しかも暴走のリスクもなし！小猫ちゃんが成長した証でもある。

『レベル2だけど病原菌と患者を分離させる機能はないぞ』



それはレベルだ。

とかやっている内に、小猫ちゃんの拳がバラムの顔面を捉えた！

ドゴツ!!!

豪快な音が響くが、バラムは顔色一つ変えていない。

ダメージは窺えない……戦車だから、防御力も段違いなんだな。

とは言え仙術で練られた気を叩き込んでいる筈だから、効果は少なくともあるだろうな。

『……ぬんー!』

バラムが豪快に腕を横殴りに薙いだ!

空気が震えるのが映像越しでも伝わってくるな。

小猫ちゃんはそれをかわし、その後衛からロスヴァイセさんの魔法攻撃が浴びせられた!

炎、雷、氷、風等色とりどりの属性魔法攻撃だが、バラムに目立ったダメージは見受けられない。

『……イツセー君との特訓で京都より鍛え上げられた筈ですが、どうも最近、魔法に対す

る防御の高い相手と出くわしてばかりですね!』

多分ヘラクレスの事か。

アイツも中々タフだったもんな。

『お前の事でもあると思うぞ』

え?

『あの女ヴァルキリーの魔法攻撃、全部ドラゴンスタイルで突破したじゃないか』

そ、それは防御関係ないだろ!?

それは兎も角、映像に意識を向けると——ロスヴァイセさんとその周囲が突然ブレました!

あの感じは……

『重力か』

俺が何時も使ってるのと同じだから何となく分かった。

その証拠に周囲の床が圧されていく!

『隙アリだ、お姉さん』

クロセルが双眸を光らせてそう言う。

その間にロスヴァイセさんは魔方陣を足元に展開しようとするが……

『そうはさせない！おまけに凍り付けだ！』

クロセルが先に魔方陣を手元に発動、直ぐ様ロスヴァイセさんの足元が氷で覆われた！

『そう言えば魔法剣士でしたね……！』

剣を抜いて向かってくるクロセルにロスヴァイセさんは不敵に笑んだ。

『俺はクロセルと魔法使い、プラス人間の血も宿す混血でね。序でに剣術も得意だ！そして重力の方は人間の血により宿した神器の力——「魔眼グラビティ・ジェイルの生む枷」！』

「彼の神器は視界に映した範囲に重力を生み出す！彼が貴女から視線を外さない限り、効力は持続するわ！気を付けて！」

見た範囲か……俺の魔法より使い勝手は上かな？

『お前のは魔方陣の範囲だけだからな』

その横では小柄な小猫ちゃんが大振りなバラムの攻撃をかわしつつ攻撃を叩き込んでいた。

うわ、アイツ柱引っこ抜いたのか！ブン回してやがる！

『ええ、分かってますよ。彼の神器に関しては総督からも伺っています。……視線を媒介にする能力は弱点と分かりやすい』

『っ、抜け出したのか！』

見ればロスヴァイセさんは重力と凍り付けから逃れてクロセルと相対していた！  
あの二重苦コンボから抜け出した！

『おあいにく様ですが、貴方より強力な魔法をこの身に何度も食らってますので！』

ロスヴァイセさんは手元の魔方陣を周囲に展開させ、閃光を放った！

『甘いぞお姉さん！鏡よ！』

クロセルは素早く手元に鏡を召喚させ、閃光を防ごうとした。

そして再び両目を煌めかせる！

『自分の能力の性質状、弱点も当然把握している。そしてそれを補う力もね！』

読まれていたか………いや、これは違う。

敢えて読まれることを想定していたのか！

鏡に反射させられた閃光がバラムに当たり、その瞬間、ロスヴァイセさんとバラムの位置が逆転した！

虚を突かれた表情のクロセルだが、発動させた神器の効果はバラムに掛けられた！

『互いの位置を魔法で交換したのか。鏡に反射させたのはあの魔法の発動条件つて訳だ』

上手く虚を突いたな、これは行けるぞ！

『小猫さん！』

『……魔法に対する防御は殆ど展開出来ない様に、あの巨人さんのオーラと内部は乱れてあります』

『了解です！フルバースト、二人まとめて食らいなさいっ!!』

ロスヴァイセさんは力強く魔方陣を展開し、フルバーストの魔法攻撃を放った!!

『やったか?』

『よっしゃ勝った!第十章完っ!!』

フラグ建てるな!!

攻撃が止んで暫くは塵芥が辺りに巻き起こるが、そこから感じるのは……クロセルだ  
け?  
——ツ!!

「小猫ちゃん、ロスヴァイセさん!離脱しろっ!!」

『えっ……』

『……隙があると、言った筈だぜ……?特に……倒したと思った時が、な……っ  
!』

瀕死の状態のクロセルの目が煌めいた!

『しまっ……!』

刹那、二人の体が重力に侵される!

寸前で気付いたロスヴァイセさんは何とか重力から逃れるが、小猫ちゃんには――

『…………ぬうおおおお!!!』

満身創痍のバラムの拳が突き刺さった……………!

そうしてリタイヤの光に包まれるクロセルとバラム、そして…………小猫ちゃん。

『小猫さん!』

横たわる小猫ちゃんを抱き抱えるロスヴァイセさん。

小猫ちゃんの体は一目で分かる程の重傷を負っていた。

『…………良かった。ロスヴァイセさんが残っていれば、グレモリーはまだ戦えます

……………』

だけど、小猫ちゃんは笑っていた。

その顔はとても満足そうに。

『…………御免なさい、小猫さん』

『…………謝らないで下さい、ロスヴァイセさん。嬉しいんです…………私、お役に立てたから

……………二人も、倒せتانですから……………』

それだけを言い残すと、小猫ちゃんはクロセル、バラムと共に転送されていた。

『相棒、その感情は取っておけ。まだ爆発させるのは早い』  
………わかってるよ。

『サイラオーグ・バアル選手の騎士、戦車各一名、リアス・グレモリー選手の戦車一名、リタイヤです!』

第二試合も勝利したが、その為と言うのか、犠牲も出た結果となった。

## MAGIC116 『ウィザードラゴンだらけ』

『第二試合を終えて、バアル眷属は三名、グレモリー眷属は一名リタイヤ！グレモリー優勢の状況ですが、まだ試合は始まったばかり！ここからどの様な展開を見せるのか、全く想像が付きません!!』

実況がそう煽る。

「冷静だね。小猫ちゃんがやられても感情を表に出さなかった」

「ん、ああ……」

木場にそう言われても、俺は意外と冷静だった。

「油断したって以外じゃ、よく頑張ったって気持ちが大きいからかな。一々仲間がやられただけで怒ってても面倒なだけだろ？それに——」

俺は一呼吸置いてから、言葉を紡いだ。

「怒りつてのは溜めて溜めて爆発させた方が効率良いしな」

「……それもそうだね」

木場が納得する傍ら、王がダイスを振った。



出目は……リアスが3で、サイラオーグさんが5。

『8か』

『王も貴様も出れる数字か』

そうだな。

今回はどうなるのかと思いつつ、作戦タイムに入ろうとした時、サイラオーグさんが思いがけない事を審判に進言した。

「今回の試合、こちらは僧侶のコリアナ・アンドレアルフスを出す」

っ、試合が始まってもないのに選手を決めた!?

俺達や観客、実況の方までがそれに動揺していた。

モニターに僧侶の女性が映し出された。

ウェーブのかかった金髪ロングの美女……出来そうなOLって感じがして良いな!

——ゾクッ

な、何だ、今背筋が寒くなったような……………。

『女の嫉妬か』

『家戻ったら大変だなこりゃ』

何だその不吉な予言は……。

そう告げる二人に呆れていると、サイラオーグさんは更に目を見張る事を言っていた。

「そして今回の試合、願わくば、赤龍帝兵藤一誠の出場を求む」

——つ！

対戦相手まで名指し………しかも俺か！

『相棒を名指しで指定か………何かありそうだな』

確かに、そう言われて「はいそうですか」と出る奴はいないぞ。

これは一体………そう思っていると、

「これは眷属である彼女たつての希望でもある。魔法使いである赤龍帝の実力を真正面で見してみたい、と」

………どう見る、ドライグ。

『うーむ、どう捉えてみれば良いのか流石に分からんな。勝算があるのかは定かではないが………相棒はどうするんだ？向こうがお前を名指ししている以上、決めるのはお前自身だ』

俺か………サイラオーグさんの事だから恐らくは純粋に眷属の意思を優先させ

たつてのは考えられるが……………。

悩んでも仕方ない、か。

「リアス」

「イツセー?」

「俺、出るわ」

「!」

リアスは俺の宣言に眼を見開いた。

が、それも束の間で、次の瞬間には苦笑いを浮かべていた。

「……貴方ならそう言うと思っていたわ。でもどうするの?もし向こうが搦め手を用意していたら」

「その時はその時さ。それにリアスは、俺がいなくても強い。……んじゃ、行ってくる」

「気を付けなさい」

リアスに後ろ手でサムズアップを送って、俺は転移魔方陣へと向かった。

『な、何とウィザードラゴン!大胆にもサイラオーグ選手の挑戦を受ける様です!!』

転移魔方陣に向かう俺を映像越しで見、実況がそう叫んだ。

すると、

『ウィザードラゴン！頑張つてー!!』

子供達の声援が観客席のあちこちから響いてきた。

『見てください、子供達の笑顔を！サイラオグ選手の挑戦を受けて、冥界のヒーロー！  
ウィザードラゴンが今!!フィールドへとやって来ます!!!』

モニター越しの子供達は笑顔で俺の名を呼んでくれた。

……この期待に答えてこそ、だな！

っしー！行くぜ!!

『……コイツが呼ばれているのは納得するとしてそれに俺の名が使われるのは如何なものか』

『まあ良いんじゃない？』

『死ね』

———

転移された後、俺がいたのはだだっ広い花畑だった。  
色鮮やかな花が一面に咲き誇り、様々な花の香りがする。  
先程までと違ってバトルフィールドとは思えない場所だ。

俺の前方には相手の僧侶、コリアナさん。

前情報では確か魔力を用いた戦い方を主に行っているんだっけか。

「私の挑戦、受けてくださってありがとう」

「あ、いえ」

コリアナさんに礼を言われ、俺は慌てて返す。

そして気になった事を聞いてみた。

「そう言えば、何で俺と戦いを？」

「興味と好奇心よ。魔法龍帝ウィザードである貴方と、かねてから一度手を合わせてみたかったの。  
だからこの一戦、私にとっては忘れられない物になるわ」

そこまで言って貰えると此方も照れるな。

それなら……

《ドライバーオン・プリーズ》

相応の答えで示すつきやないな。

俺がドライバーを発現させたのを見て、コリアナさんは眼を見張った。

「……そちらで来てくれるの?」

「勿論。でなきや嘘でしょ」

それに今回の章、ウィザード全然活躍してないしな。

『おおー!!! ウィザードライバーです! と言うことはあー?!』

興奮を煽る実況の思惑通り、観客席は歓声で埋め尽くされる。

子供達の声援と大人達の喝采の中——俺は指を鳴らした。

刹那、静寂がフィールドを支配する。

大きく息を吸うと、俺はこの場にいる全員に声を掛ける。

「レディース&ジェントルメン!!! 今日この場にお越しいただきました皆様、誠にありがとうございます!! 今回私、ウィザードラゴンの御相手は強き獅子の御子、サイラオーグ・バアルの優秀で美麗な僧侶、コリアナ・アンドレアルス!! この戦いの終わりは、私の勝利と言う魔法で締め括るとこの場で誓いましょう!!!」

『『『『わあーっ!!!』』』』』

よおし、良い感じに盛り上がってきたぜ!

『良い塩梅だな』

『魔法使いと言うより奇術士っぽいな』

誰が怪盗キッドだつて？

それは兎も角、俺はドライバーを操作する。

《シャバドウビタツチヘンシーン！シャバドウビタツチヘンシーン！》

「変身！」

《フレイム・ドラゴン！ポー、ポー、ポーポー！》

赤い魔方阵に包まれ、俺はフレイムドラゴンへと変身した！

その姿を見て、観客席が先程以上の賑わいを見せた！

「フレイムドラゴンだー!!」

「カッコいいー!!」

「頑張れーつ!!」

『子供達の声援を背にし、ここに魔法龍帝・ウイザードラゴンが降臨致しましたア!!!』

いやー、こういうのも悪くないな。

俺はコネクトでウイザードラゴンを取り寄せる。

「凄い賑わいね。皆貴方が勝つ事を信じて疑わない……そう言うの、好きよ」

「……そう言えば、何か勝算とかはあるんですか？」

「勝算？無いわよ」

……………は？

「だからこの試合でそれを見つけ出す。私の持てる力を全て使つてね！はっ!!」

「っ！」

コリアナさんは魔方陣から氷の矢を放つ！

俺は足を回して蹴りで矢を砕く……その隙にコリアナさんは再び魔方陣を手元に展開！

そこから今度は獅子を横した炎が向かってきた！

「おおっ!!」

俺は剣を一閃させ炎を両断！

直ぐ様懐へと潜り込み、掌低でコリアナさんの体を浮かせる！

「うっ……………!!」

「てやつ！」

「あぐう！」

怯んだコリアナさんの顎を蹴り上げる！



宙に浮いたコリアナさんは反撃とばかりに、俺の地中から土の槍を生成させた！  
「うおっ！ だつたら！」

《メタル・プリーズ》

足を硬質化させて槍に踏み砕く！

距離を取ろうと下がるコリアナさんだが、そうは問屋が下ろさないぜ！

《バインド・プリーズ》

「っ！」

「まだまだ！」

《エクステンド・プリーズ》

「っああ！」

拘束が解かれるより早く、伸縮させた腕を振り回して殴り飛ばす！

床を転がるコリアナさんに向けて追撃を掛ける！

《チヨーイイネ！ スペシャル・サイコー！》

「くらえっ！！」

「っ！！」

『出ましたあ！ ウィザードドラゴン必殺・滅却のドラゴンブレスッ！！』

『『『『『行けーっ！！』』』』』』

即座に起き上がったコリアナさんは水流を放つ。

が、俺が放ったドラゴンブレスはその水流を逆に蒸発させた！

「っ、ここまではっ……!!」

消火出来ないかと悟るや否や、コリアナさんは手元に雷で細剣を作ると、俺に肉薄してきた！

っ、接近戦か！

《キャモナスラツシユシエイクハンズ！サンダー！》

俺はウィザードラゴンに雷を纏わせそれを受け止める。

「接近戦とは意外ですね！」

「我が主直々に教えてもらいました……付け焼き刃ですがっ！」

「っ！」

今度は炎を纏った蹴りを放った！

それを手で受け止めると、再び距離を取る。

「……流石ウィザードラゴン。魔力の攻撃も私以上の精度で判断力も中々のものだわ。貴方、今すぐにでも上級悪魔になれるわ」

「そりゃどーも」

「……微妙な反応ね」

まあいきなり上級悪魔行けると言われましてもピンと来ないと言うか。

「でもありがとうございます。そのお礼と言っちゃなんですが…」

《コネクト・プリーズ》

「……っ」

コリアナさんの目の前で、魔方陣からタイマーを取り出す。

それを見たコリアナさんは顔を強張らせた。

《ドラゴタイム！セツトアップ！》

「マジで行かせてもらいますっ！」

《スタート！》

起動させたと同時に俺は駆け出す！

コリアナさんに斬りかかると見せかけて、肩を踏んで跳躍！

針が青に到達するとタイマーを押す！

《ウオータードラゴン！》

「おりやつ!!」

「くう!!」

俺の声が二重になったのを感じつつ、ウイザーソードガンを突き出す！

コリアナさんの魔方陣の防御を押し飛ばすと、コリアナさんの目線の先には

---

「貴女、俺に釣られてみる？」

『おおーっ！と！！ここでウィザードラゴンのスタイルの一つ、ウォータードラゴンが乱入しましたあ！！』

「あれってウィザードラゴンの分身だよね！」

「ウォータードラゴン、クールだよね！」

『その通りです！ウィザードラゴンのクール担当、揺蕩う水の叡知、ウォータードラゴンですっ！！』

さあて、どんどん行くぜえ！

《ハリケーンドラゴン！》

「——ビューンツ！！」

「きやつ!？」

一陣の風と共にコリアナさんのスーツに切り傷が生まれた！

舞い降りた風が霧散するとそこには緑のウィザードラゴン。

「やおお姉さん、俺と一緒に踊るかい？答えは聞かねえけど！」

「つくー！」

二丁拳銃でコリアナさん目掛けて撃ちまくる！

コリアナさんは背後へ飛びつつそれをかわしていく中、俺は最後のエレメントを解放

した。

《ランドドラゴン!》

「——俺の強さに!」

「ぐあ!!」

コリアナさんが立った地面の背後からランドドラゴンが現れ蹴り飛ばす!

受け身を取って立ち上がったコリアナさんの眼前には四人のウィザードドラゴンが!

『さあ!ここで何とウィザードドラゴンが四人、コリアナ選手の目の前に現れましたあー!!』

「……貴女が泣いた!」

「ビュビュンと倒させてもらうぜ!答えは聞かねえ!」

「貴女と言う大物、仕留めさせて貰うよ?」

其々ウィザードガンをクルクル回して決め台詞を言う!

「俺達、参上!!!」

そしてメは俺!フレイムドラゴン!!

指輪を煌めかせると、観客席からは怒号にも似た歓声が轟く!

「……壮観ね。でもっ」

コリアナさんは気圧された様に一步後退りするが、何とか踏み留まると、両手に魔方陣を展開した。

「私も負けるつもりはないわ!!」

「「上等!」」

コリアナさんは派手に動き回りながら俺達四人に的確な砲撃をかましてくる。

俺達は各個それを防いだり避けたりしつつ、遠距離から攻撃を返す!

「むんっ!」

ランドラは足元のフィールドを踏み砕くと、その瓦礫を浮かせてコリアナさんへとぶつけていく!

「はっ、やあ!!」

コリアナさんは的確にそれらを凌いでいくが、着地した瞬間に足元が凍りついた!

コリアナさんが眼を見張ると、足元には水が広がっていた。

「これぐらいなら指輪無しでも行けるんですよ?」

「……水分の凍結!」

「おりやつ!」

「っ、きやああ!!」

炎で溶かそうとするコリアナさんに容赦なくハリドラが突風と共に斬撃を放った!

風に流されながら吹き飛ぶコリアナさんの体！

よっし、これでトドメだ——つて、

「ッ!?!」

思わぬ光景が目に入り、俺は攻撃を反らしてしまった！

何とか着地したコリアナさんは、怪訝な様子だ。

「どうしたの？今の攻撃、態と反らしたでしょう」

「……………や、あのお」

「?」

コリアナさん、気付いてないのかよ！

……………しようがねえ。

俺は意を決し、コリアナさんの容態を告げた。

「……………コリアナさん。服、破けてます…………」

そう、さっきのハリドラの一撃で、コリアナさんのスーツが所々裂けてしまっていたのだ。

と云うか裂け方が絶妙と云うか、凄くエロい感じに裂けてるんだよ……………! !

「あら……………」

それに気付いたコリアナさんは魔力で服を直そうとするが、何か思い至ったのか、そのまま俺へと接近してきた！

思わず後ずさる俺に構わず、コリアナさんは斬れて谷間が露出した胸を腕で持ち上げ、俺に囁いた。

「……エツチ」

「ぶっ!？」

轟惑な響きに思わず吹き出す！

それを見ていた各ドラゴンスタイルは、

「お前そんな事で攻撃中断したのか！」

「えー最悪じゃーん！」

「……愚か者！」

非難轟々でした！すんません！

と思っていたら、俺はコリアナさんの攻撃をモロに受けてしまった！

「ぐあ!!」

「……さあて、次の子はっつと」

地面を転がる俺に意を得たりと言わんばかりに、今度はウオドラへと向かった！

「おっとお嬢さん。俺はフレドラみたいには——」



「……いやん」

ウイザーソードガンを突き出そうとしたウオドラの目の前で、コリアナさんは何と自分からおっぱいをポロリした!!

「つうえ!!」

ウオドラは変な声を上げて攻撃を止めてしまう!

その隙をコリアナさんが逃す筈もなく、ウオドラは電撃を直接浴びせられた!

「あばばばばばばばばば!!」

「ウオドラー………こんにやろー!!」

「ま、待てハリドラー!」

ウオドラが黒焦げになったのを見て激昂したハリドラーがコリアナさんに向かっていった!

やべえ、どつかの切断大好きウルトラマンみたく血に頭上ってる!

コリアナさんは華麗に避けると、その風を利用して今度はスカートの奥をハリドラーに見せつけた!

「なっ………」

思わぬパンチラに固まるハリドラー!

そしてそのまま水流攻撃で壁へと叩きつけられた!

「ぐへっ?!」

『なーんと!! コリアナ選手が艶かしい状態になってから、ウィザードラゴンが圧されております!』

実況の言葉通り、今のコリアナさんのエロい状態に俺達は手も足も出てねえ!

あのエロい感じは戦い以外で見たかったよ……っ!

『お前女の裸なんて見慣れてるだろ』

「それとこれとは違うんだ! あの裂けて露出した衣服には、裸とは違うエロスがあるんだ!」

『……まあ、気持ちは分かるけどよ』

『分かるな!』

同意したドライグに突っ込むドラゴン。

そんな漫才をしてる間に、ランドラにコリアナさんが迫る!

「……防御の要たるこの俺が、そう簡単な色仕掛けにつ」

「……見ちゃ、イヤッ」

コリアナさんはランドラの前で自分の体を抱き締める様に蹲った。

その行為によりコリアナさんのおっぱいがスーツと共に柔らかく形を変えたのを見たランドラは………

「……………っ!!」

固まってるうー!!?

ラオウか、お前はラオウか!!

そしてそのままお約束の如く蹴り飛ばされた!

顔から地面にダイブするランドラ!

「……………いってえ。不覚っ!」

「おいどうするよ!?!あのお姉さんの色仕掛け、俺達じゃ突破できねえぞ!」

「第一フレドラー!お前童貞卒業したのに何であんな露出でキョドるんだよ!?!」

「卒業しても慣れないものは慣れないんだよ!!」

あーだこーだと作戦会議を行う俺達。

まあコリアナさんの攻撃を避けつつなんだけど。

「あ、だったら眼を閉じて攻撃するのはどうだ」

ここでウオドラが一つのアイデアを提案した。

「眼を閉じて?……………そうか、心眼か」

心眼——即ち、心の眼!

視覚じゃなく、他の五感で戦うって事か!

「とはいえ四人全員これをやって外したら恥ずかしいから、誰か一人囿にならないと行けない」

「恥とか気にするか？既に恥晒しまくってるぞ。現在進行形で」

「これ以上つて事だろ。つてな訳でランドラ！囿ヨロシク！」

「は、ちよつと待て！何で俺なんだよ!?!」

ランドラは抗議の声を上げるが、これに関しては飲み込んでいただく他ないんだよなあ……。

「いや、だつて防御力高いし、多少の不憫でもへこたれない精神があるし……」

「俺が凶太いつてか、ああ？」

「喧嘩してる場合じゃないだろ？兎に角頼む」

「つ……わーっただよ！」

作戦が決まったことで、ランドラはコリアナさんに向けて走り出した！

「作戦会議は終わったのかしら？坊や」

「そりゃあ、もうねっ！」

《《デイフェンド・プリーズ》》

コリアナさんの攻撃を土壁で防ぐと、それは瓦礫へと変わる。

土煙が視界を覆う中、ランドラは瓦礫と共にキックを放った！

「はっ!」

コリアナさんは後ろへ跳躍してかわした!

……よし、今だ!

「行くぞ!」

《キャモナシューティングシェイクハンズ! フレイム・シューティングストライク!

ボーボーボー!》

「おう!」

《キャモナシューティングシェイクハンズ! ウォーター・シューティングストライク!

ザバザババシャーン!》

「ノリノリで行っちゃうぜ〜!」

《キャモナシューティングシェイクハンズ! ハリケーン・シューティングストライク!

ビュービュービュー!》

土煙が晴れたコリアナさんの目の前には、ランドラと背後に立つ三人のウィザードラ

ゴンが。(全員目を瞑っている)

このまま一気に決めるぜ!

「「シュート!!」」

爆炎、氷結、風雷の弾丸は、見事に命中した――。

「ぐああああああ!!」

そう……前に立っていた、ランドラに。

「ん……？」

目の前の悲鳴に目を開けてみると、地面には大の字で倒れるランドラが！

「おいランドラ！何してんだよ!？」

「お前、千載一遇のチャンスだったのによお！」

「もー、これぐらい避けろよなノロマ！」

最悪だ……この作戦失敗したら警戒されて一度しか決められないってのに！

そうぼやいていると、不意にランドラが立ち上がった。

「デメエ等……人を囮にしといてその言い草かあ……そうかそうかあ

……」

ランドラはウィザードラゴンを拾い上げると、駆け出した。

「野郎、ぶっ殺してやるっ!!」

そう、他ならぬ——俺達の方に。

『な、ななな何と！ランドドラゴンが他のウィザードラゴンを襲い始めましたあー!!』

「うわあ、自分殺し！」

「おい止せって！自分同士の争い程醜いもんはねーぞ?！」

「つて言うかあれぐらい察知して避けるよお!!」

ランドラは形振り構わず俺達を追い掛ける！

何とか止めようと説得するが、ランドラはそれに答えず更に吠えた！

「第一何で俺ってそんな不憫スタイルなんだよ!? 攻撃と防御高いんだからもうちよい優遇されても良いだろー！」

「は、まだ良いじゃねーかお前なんて！俺なんざ本家ウィザードで魔力が多い描写特になくて結局プロレススタイルなんだぞ!!」

「そんな事言ったら俺なんて後半（作者が記憶してる限りでは）殆ど見せ場ナシだ!!」

「お、おいお前ら今はそんな事言い合ってる場合じゃ——」

「黙ってる童貞!!」

その時、俺の中で何かが切れた。

「だあれが童貞じゃゴリアアアア!!お前らよりは少なくとも女体の素晴らしさを理解してんだよ!!」

「はあ!? そんな事言つて毎回気絶してんの何処の誰だよ!」

「その内慣れるから良いんだよ! それよりお前らなんて分身だから一生ウブな童貞のまんまだぞザマーしろ!!」

「童貞を守るから大切な者を守るんですう〜! 童貞を散らした奴が何を守ろうつてんだああん!」

「お前からまだ比較的の出番あるから良いだろ俺なんてロクな見せ場見当たらねえ!!」

もはやコリアアナさん差し置いてフィールドは俺達の喧嘩会場になっていた!

「水中戦なしの水のスタイルよりはマシだろ!」

「予算の都合で飛べない風のスタイルよりマシだろ!」

「どいつもこいつもうるせえな! 出番なんて作者の匙加減なんだから俺が知るわけねえだろ! バカじゃねえのか!」

「バカつて言つた方がバカなんだぞ!!」

「あ、貴方達いい加減に——」

「うるせえ!!!」

怒りに任せてコリアアナさんに攻撃をぶつけた!

が、その寸前でリタイアの光に包まれたのだが、俺達は関係なしにいがみ合う!

『あ、あのー? 兵藤一誠選手? 試合は既に終了したのですが……………』



『あー、こりや暫く止まらねえな。まあ、ガキらしくて良いんだが』

「「余計なお世話だ独身ハゲ!!」」

「俺が何時禿げたんだゴラアアアアアツ

!!!!!!」

結局リアスが無理矢理止めるまで、俺達は子供達の笑い声の中言い争ったのであった。

# MAGIC117 『覚悟決めた吸血鬼』

『お、相棒。今度の数字も8だぞ』

お、さつきと一緒か。

……ちなみに教えとくと、今の俺は控え室で正座している。

原因は言うまでもなく、さつきの試合で失態を演じた事だ。

帰ってきたらリアスに頬を引っ張られてグレイフィアも交えての説教を食らった。  
た。

そんでしばらくはずつとこのままって訳だ。

『自業自得だ』

分かってるよ。でもあそこで童貞だとか言われたら、誰だつてキレるだろ？

『それは貴様だけだ』

俺は信じないぞっ!!

それは兎も角、今回は俺は出られない……リアスはどのカードを切るんだ？

「部長、次は私が出よう」

どの眷属を出すか決めあぐねていると、ゼノヴィアがリアスにそう進言してきた。

「試合も中盤だし、そろそろゼノヴィアの新しい力出しても良いかもな」

「そうね、ゼノヴィアに任せましようか。後は祐斗かロスヴァイセが適任かしら……」

「その人選はあれか。一人だと猪戦法して爆死するかもしれないという懸念か？」

『そう考えると妥当だよな』

少し黙ってろ仲良しドラゴンズ。

ゼノヴィアこう見えて繊細なんだから。

『仲良くねえよテメエの目は節穴かクソ童貞!!』

んだとコラアアアアッ!?

「イツセー、静かにしなさい。それとそこのドラゴン二匹も」

『「アツハイ」』

怒られた、お前らのせいだぞ。

『何言ってるんだ。叫んだお前のせいだろ』

『いい加減童貞呼ばわりされるの慣れるよ。童貞』

だから俺はもう童貞じゃねえっての!!

「あ、あのおく……僕が出ててもよろしいでしょうか？」

「…ギヤスパー？」

と、ここで恐る恐るギヤスパーが手を挙げて試合出場に立候補した。

「祐斗先輩とロスヴァイセさんは僕と違って単独でも戦えますから、後に控えたほうが良いかなって……。それに」

「それに？」

ギヤスパーは一呼吸おいて、力強く宣言した。

「ぼ、僕も、小猫ちゃんの仇を取りたいですう！」

……今の発言だって、此奴は相当の勇気を要したはずだ。

だけど臆さずこんな熱い事言うなんて……。成長したじゃねえか、ギヤスパー！

「いい事言うじゃねーか、ギヤスパー！リアス、ここはギヤスパーの熱意を汲んであげても良いんじゃないか？」

「ええ、勿論よ。ギヤスパー、あなたの力でゼノヴィアをサポートしてあげて」

「は、はいっ！」

緊張しつつもギヤスパーの目には強い光が宿っていた。

これなら心配はないな！

「よし、私の背中には任せたぞ。ギヤスパー」

「はい！頑張りますう！」

今ここに、吸血鬼ハンターと男の娘ヴァンパイアのベストマッチ？なタッグが結成さ

れた。

『主人公が正座つてのはどうなんだろうか』

言うなよ、皆触れないでいたのに！

——あ、そうだ。

「ギヤスパー。ちよつと良いか？」

——

二人が降り立ったバトルフィールドは、岩があちこちに転がった荒地だった。

足場悪そうだな……。

二人の眼前にはひよろ長い体格の男と、不気味なデザインの杖を携えた小柄な美少女……ではなく、男の娘がいた。

まさかの男の娘対決か……。

『グレモリーチームは伝説の聖剣デュランダルを持つ騎士ゼノヴィア選手、一部で人気の僧侶な男の娘、ギヤスパー選手です！』

「うおおおおっ！ ギャーくうううんっ！」「」

おおっと、早速その一部のファンから声援が送られたぞ！

ギヤスパー、人気者だな！（白目）

『対するバアルチームは、両者共に断絶した御家の末裔と言うから驚きです！戦車のラードラ・ブネ選手、僧侶のミステイータ・サブノック選手はそれぞれ断絶した元七十二柱のブネ家とサブノック家の末裔です！アザゼル総督、バアルチームには複数の断絶した家の末裔が所属しておりますが……』

サイラオグさんの眷属って、断絶した悪魔の末裔が多いな……。

そう思っていると、アザゼル先生から解説が。

『能力さえあれば、どんな身分の者でも引き入れる。それがサイラオグ・バアルの考えですからな。おそらくそれに呼応して彼の元に集まったのでしよう。断絶した家の末裔は現悪魔政府から保護の対象にされていると同時に、一部の上役から厄介払いと蔑まれているからね。他の血と交じってまで生き残る家を無かった事にしたい純血重視の悪魔は上に行けば大勢いますからな』

『ハハハハ。ええ、全くその通りです』

成程……そして鮮やかに先生の皮肉に笑って返す皇帝ベリアル。

これぞまさに王者の貫禄だな。

『そうだな。童貞だの独身だの言われてマジギレするどつかの馬鹿二人とは大違いだ』

『一体何兵藤一誠と何アザゼルなんだー』

んだとコラアアアアツ!!!

『んだとコラアアアアツ!!!』

『アザゼル総督?』

『大丈夫でしょう、何時もの事と魔王サーゼクス様からお達しが来ております』

『サーゼクスウウウ!!』

実況席は今日も平和そうだなー。

そう思っていると、フィールドの二人が口を開いた。

『我が主サイラオーグ様は人間と交じってまで生き長らえた我らの一族を迎え入れてくれたのだ』

『サイラオーグ様の夢は僕達の夢でもある。この勝負、負けるわけにはいかない』

そう語る二人の目は熱い使命感に燃えていた。

……荒れそうだな、この試合。

『そうだな。時に相棒、今のお前はどんなに決め顔でカッコいい事言っても正座だからとんだマヌケにしか見えないから注意しとけ』

余計なお世話だ!!

サブノックってあれか、オルガ……いや止そう。違う奴出てきそう。

『止まるんじゃないぞ……』

ほらな！つてかさっさと試合に移れよ!!

『第四試合、開始してください!』

俺の願いが通じたのか、審判から開始が告げられ、両チームが素早く構える。

そしてゼノヴィアの手には以前までとは形状の異なるデュランダルが。

あれが新しいデュランダルか……どんな性能なんだろうか。

「ギヤスパー、コウモリに変化して!ゼノヴィアはその後に攻撃!」

リアスが指示を出し、ギヤスパーは無数のコウモリに変化してフィールド中に散らば

り、ゼノヴィアは幾つものデュランダルの波動を放った。

バアル眷属はその攻撃を躲し、ミステイータが杖から炎を放つ。

『そっちの魔法使いさんには劣るけどっ!』

確かミステイータは魔力による攻撃を得意としていたっけ。

精度は見る限りコリアナさんとどっこいどっこいか?

『させませんよお!』

だがその攻撃は全て空中で停止した。

ギヤスパーか。



そしてその瞬間にゼノヴィアの一撃が炎をかき消した！

『ラードラ！サイラオーグさまの指示が届いた！僕は準備する！』

『了解だ！』

ミステイータが後方に下がって全身にオーラを迸らせ、それを守る様に前に立つのはラードラ・ブネ。

『生きた壁か？』

ドラゴンが訝しげに呟くが、ラードラの体が異様に隆起した！

っ、これは……………！

ゴアアアアアツ!!!

俺が龍化した時と同じ感覚を感じた瞬間、ラードラの肉体は黒いドラゴンとなった！

あれは記録映像には無かった筈……………って事は！

『ブネは悪魔でありながらドラゴンを司る一族だったな。しかも肉体をドラゴンに出来るのは一族でも限られた者にしかなれん筈……………』

「この試合のために……………っ！」

ドライグの解説にリアスは苦虫を噛み潰したような顔になる。

『ドラゴン変化は情報にも無かった！サイラオーグめ…その眷属を鍛え上げて覚醒させ  
たか！やってくれるぜ、大王家次期当主様よ！』

この試合までに時間はたつぷりあった筈…その時間を使つて覚醒出来る様に鍛え  
たつて訳だ！

切つてない手札があつたのは向こうも同じか！

「ドラゴンか…新しいデュランダルの力を試すには申し分なしだ！」

勇ましく言うど、デュランダルの刀身を覆つていた鞘らしき物がスライドしていく。

そしてスライドにより露出した部分から大質量の聖なるオーラが溢れていく！

『ほお、以前よりオーラが安定しているな。あの鞘のお陰か』

確かに。以前までと違つて周囲にも被害が起きていない。

それでいて以前より力強いオーラだ！

『…新しい聖剣か？何にせよ、攻めるのみっ!!』

ラードドラは新しいデュランダルの見ても臆さず、ゼノヴィアへと迫る！

「真正面からか。そういうのは嫌いじゃないっ!!」

ゼノヴィアは不敵に笑うと、デュランダルの切っ先をラードドラへと向ける。

ラードドラは気にせず突つ込もうとするが、ミステイータは何かを察したのかラードドラ  
を止めようとした。

『つ、止せラードラ！』

『もう遅いっ!!』

デュランダルからブウウウン……!と周囲の空気を震わせる音が轟いたかと思うと、刀身から莫大なオーラが放たれた!

それを見たラードラは咄嗟にそれを回避!

目標を失った砲撃は近くの岩場に命中すると、けたたましい轟音を響かせ、その辺一帶を更地へと変えた……!!

『何っつう一撃だ……』

これにはドライグも言葉を失っていた。

そしてそれはラードラも同様であった。

『凄まじい一撃であった……!』

『ラードラッ!!』

ラードラが驚嘆していると、ミスティータがラードラの名を呼んだ。

『どうしたのだミスティー……ッ!!』

振り返ったラードラの体躯に、聖なるオーラの刀身が食い込んだ!

肉体を焦がすほどの痛みに耐えているラードラの眼前には、ゼノヴィアが。

『あまり論理的ではないが、個人的には悪くない作戦だ』

……あの一撃をブラフにしたのか。

それでいてゼノヴィアはまだ息が切れていない。

「あのデュランダルは、教会の錬金術師がエクスカリバーと同化させたの」

新デュランダルの力に驚いていると、リアスから耳を疑うような発言が飛び出た。

「エクスカリバーと、同化：!？」

「簡単に言くと、教会が保管していたエクスカリバーを鞘の形で被せたのよ。エクスカリバーの力でデュランダルを制御しつつ、覆っているデュランダルとエクスカリバーの力を同時に高める事で破壊力を上げてるのよ」

『共鳴させて相乗効果を齎すって事か』

ドライグの言葉に、リアスは頷いた。

「そういやディオドラん時にもアスカロンと共鳴してたっけ。それと同じって事？」

「ええ。それも新しいデュランダルが生まれた切っ掛けだそうよ」

リアスの説明に納得して、視線を映像へと戻す。

ゼノヴィアは息を吐くと、未だラードラの体に食い込んでいるオーラを強く光らせた

！

『——弾けろッ!!』

『——ッ!!!!』

刹那、聖なるオーラが大爆発を起こし、ラードラとゼノヴィアは光の奔流に飲み込まれた！

やがて煙が晴れると、少し黒くなったゼノヴィアと、大きく息を荒げるラードラが。  
『うん？今ので倒したと思ったのだが……』

疑問気になるゼノヴィアの異変に、ギヤスパーが気付いた。

『ゼノヴィア先輩！その体の紋様はっ』

『ん？……これはっ』

『……ギリギリ間に合ったみたいだね』

そう語るのには、こちらもなぜかフラフラになっているミステイタ。

彼の言葉をいまいち呑み込めないでいたゼノヴィアだったが、変化はすぐに起きた。

『…デュランダルが、反応しない？』

——何？

どういう事だよ!?

『あの感じ、相当精神力を使っているようだが……まさか、神器か？』

神器って……あの子は悪魔だろ？

人間の血でも引いてなきや……引いて………まさかつ！

『僕は実は人間の血も引いていてね……。神器の名は異能の棺……ふふ、僕も最近になつて使えるようになった呪い系の神器だよ……。』

異能の棺……どんな力なんだ？

まさか、聖なる力に対してのカウンターとか……。』

『いや。あれは所有者の体力や精神力を極限まで擦り減らす事で特定の相手の能力を一定時間完全に封じる神器。つまりあの僧侶の小僧は自分の持てる力と引き換えにゼノヴィアの聖剣の力を封じたんだろう』

……つて事は。

『くつ、イツセーから借りていたアスカロンもダメか……。』

聖剣を扱う力を封じられたつて事か！

『ラードラがりタイヤする寸前で間に合つて良かった……。ま、本当なら聖剣を封じた余波で、彼女に聖なるオーラでダメージを与えようとも思つてただけど、彼女の聖剣使いとしての才能は想像以上に濃かつたようだ……。でも、これで彼女は戦えない……』

不味いぞ……ミステイータは実質戦闘不能でラードラも満身創痍だけどまだリタイヤまではいつていない。

対してこっちは戦う術を封じられたゼノヴィアにサポート向けのギヤスパ……二

対一だが、ほぼ同じ土俵だ！

『……ぬおおおつ!!』

ラードラは持てる力を全て振り絞るように二人に殴りかかった！

『ツ転移!』

ギヤスパーはラードラの視界を蝙蝠で覆うと、二人揃って何とか別の岩陰に転移した。

『今はこの判断で正解だろう』

『すまない、助かったよギヤスパー。これでは私は役立たずだな』

『そ、そんな事ないです!ゼノヴィア先輩の方が僕よりもずっと部長のお役に立ちますよー!』

ギヤスパーはゼノヴィアを励まし、腰に着けていたポシエツトから小瓶、チョーク等の道具を取り出した。

『僕、この手の呪いを解く方法をいくつか知ってます!』

そう言う手元で小さな魔方陣を展開させ、ゼノヴィアの体に当てる。

どうやらゼノヴィアにかかった神器の呪いを調べているようだ。

その間にもラードラは周囲を隈なく探している……ドラゴン相応の巨体も相まって、ジャックと豆の木状態だな。

『アークとキバだな！』

仮面ライダー未視聴の人分かんねえだろそれ。

「ギヤスパー、ゼノヴィアの呪いは解けそう？」

『はい、手持ちの道具で何とかかなりそうです』

ギヤスパーはゼノヴィアを中心にチョークで魔法陣を描く。

見慣れない紋様を描き、最後に俺の血が入った小瓶を持った。

ギヤスパー強化用アイテムとして予め持たせておいたやつだ。

『今描いた魔法陣にこのイツセー先輩の血を馴染ませる事で、呪いは解けると思いますが。ただ、解呪出来るまで少し時間が掛かりそうですけど…』

『待て、ギヤスパー。その血を使えばお前は……』

あれを使つてしまえばギヤスパーはパワーアップは出来ない。

もう一つはあるにはあるが、あれは直接的なパワーアップではないし、渡してある血は一つだけだ。

困惑するゼノヴィアにギヤスパーは満面の笑みを見せた。

『ゼノヴィア先輩、僕、役目を見つけました。今の僕にしか出来ないことを』

ギヤスパーは魔法陣に俺の血を振り掛けると、描かれた紋様が淡く輝く。

それを見届けた後、ギヤスパーは岩陰から飛び出していった！



アイツ、まさか……！

『ぼ、僕が時間を稼ぎます！呪いが解けたら、そのままデュランダルをチャージしてください！』

「無謀よ！ギヤスパー！隠れなさい！」

リアスがそう指示するが、ギヤスパーは逃げる素振りを見せなかった。

『ダメですう！ぼ、僕が時間を稼がないとダメなんですつ！部長が勝つにはゼノヴィア先輩の力が必要なんですつ!!』

ギヤスパーは目の前のラードラとミスティータを見据える。

『見つけたぞ、ヴァンパイアめ。あの剣士は隠したようだが、貴様がここにいるということは近くにいるのだろうか？火炎を撒き散らせば出てくるだろうか。……いや、いつそ周囲の風景ごと焼き払ってしまおうか……。それぐらいの力ならば残っているぞ』

『あ、暴れさせませんっ!!』

『……震えているが、その勇氣に、敬意を払わねばならんな。勇氣が無ければドラゴンの前に立つことすらできない』

ラードラは口腔から火炎を放つ！

ギヤスパーは片手で拳を握ると、防御魔方陣でそれを防いだ！

『ぐうううううつ……!!!』

『…ぬう!』

先程のダメージがまだ残っているラードラは攻撃を中断した。

対するギヤスパーは、殆どダメージを負ってはいなかった!

『…どういう事だ。確かに先のダメージが残っているとはいえ、貴様に悲鳴を上げさせるのに申し分はないはずだが……』

ギヤスパーの耐久力に疑問を抱いているラードラの目の前で、ギヤスパーの拳から赤い光が漏れだした。

『ぼ、僕は、一人で戦っている訳じゃありませんっ!』

ギヤスパーの覚悟に応えるように、アイツの拳の光が強くなった!

そしてギヤスパーは拳を突き出した!

すると——拳から赤い炎が放たれ、ラードラの肉体を焦がした!

『ぬああああああっ!!!』

あまり大きな規模ではないが、手負いのラードラにとっては傷口に塩を塗るのと同じで、ドラゴンの口腔から悲鳴が漏れ出た!

『どういう、事だっ……!?!』

息を荒げるラードラの目の前で、ギヤスパーは拳を解いた。

その手の中には、俺の指輪が掲げられていた。

『赤龍帝の、指輪…!?!』

そう、俺は試合前に俺がギヤスパーに貸した物だ。

きつかけは、アイツが俺の血を取り込んだ事——俺の血には、少なからずドラゴンの魔力も含んでいたようで、ギヤスパーはこの眷属の中で唯一、俺の指輪の力を引き出せる素質を、この試合までの特訓で開花させたのだ。

あのフレイムドラゴンが齎す力は炎の力、そして炎に対する耐性だ。

そしてその炎は、ドラゴンのものであれば更にその力を殺がせる!

だが俺が扱うものに比べれば付け焼刃同然……本来なら俺の血を服用する事で使用するのが前提だったんだが。

だからこそ、何時までも足止め出来る訳じゃない!

だがギヤスパーは構わず、ラードラの腕にしがみ付いた!

『……っ、離せっ! デュランダル使いは早急に倒さねばならぬ! 呪いの効果は有限だからな! 確かに手負いではあるが、貴様を倒すのは訳ないのだぞっ!!』



…が、フラフラの足でも、立ち上がった。

『…恐れない、逃げない、投げ出さない……僕は、男なんだ……っ！』

能力を使いフラフラになったミスティータがギヤスパを杖で横殴りにした。

『……諦めろ。君では我々には勝てない』

ギヤスパーに、無情な一言がかかる。

だが、ギヤスパーは尚も踏ん張る。

『今は力がなくても……守りたいから……イツセー先輩だって、どんな時だってめない、だから……ゼノヴィア先輩は、僕が、守る……』

フラフラのギヤスパーを、ラードラが踏みつける。

足を上げると、ギヤスパーの状態は尚も酷い事になっていた。

「……リアス」

他の眷属すら見ていられないとする中、リアスだけが目の前のギヤスパーを見つめていた。

「……で私が目を逸らせば、私はあの子を信じていない事になるから。……どれだけの状態になっても、私はあの子の王だから、目を逸らす事はしないわ」

『…そうだな。それが今のお前が取るべき行動だ』

ドライグの声音も何時になく真剣だ。

『僕は……まだ………!!』

『———フン』

目の前のギヤスパーを見て、ドラゴンが息を吐いた瞬間だった。

ギヤスパーの体から黒い靄のようなものが発せられ、ギヤスパーの瞳が赤く輝きを放った！

『僕が、僕が………守ってみせる………!!』

ギヤスパーから発せられる黒い霧は、四足歩行のドラゴンの形となった。

「あれは………！」

この中でそれを実際に見たことがあるリアスは、声を低くした。霧のドラゴンが天に向かい力強く吠えようと、異変は起きた。

『こ、これは、停止の邪眼!?!』

『馬鹿な!?!その様な状態で、我々の動きを止めたと言うのか……!?!』  
土壇場で発動したのか!

ラードラとミステイータは何か足掻こうとするが、停止の力が強く、抜け出せないでいる!

その状態の二人をドラゴンは睥睨すると、目を怪しく光らせた!

『あっ……!!』

『これは……!』

足掻いていた二人の四肢が、徐々に凍り付いていく!

停止の力に加えて突然の氷結に、二人は一転して窮地に追い込まれていた。

『くっ、不味いぞ……このままでは、聖剣使いの呪いが解かれて——』

『ああ、まさに今がその時だ』

短くそう告げて岩陰から出てきたのは、ゼノヴィアだった。

手に持つデュランダルからは先程以上に危険なオーラが迸っており、近づくだけで消滅させられそうな程だ。

ゆっくりと歩み寄るゼノヴィアの目からは、涙が溢れていた。

『済まなかった。私の覚悟が未熟だったばかりに、不甲斐ないばかりに、あんな戒めにかかってしまった』

ゼノヴィアの歩みと時を同じくして、デュランダルの鞘がスライドしていく。

『仲間の為に、主の為に持つべきだった死ぬ覚悟をギヤスパーよりも足りなかった。自分があまりに情けない……！私は自分が許せなくて仕方がないんだ!!』

溢れ出る聖なるオーラは、ゼノヴィア自身をも包み込んでいく！

『お前の思いへの答えはただ一つ……こいつ等を完全に吹き飛ばそうっ!!……それが、お前の覚悟への、私なりの答えだっ!!!』

グオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

ゼノヴィアの言葉に応えるかのように、ドラゴンはフィールド全体を揺るがすほどの咆哮を上げる！

そしてデュランダルへ、赤、青、緑、黄と、四つの光が吸い寄せられていく！



ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴツ

!!!!!!

するとゼノヴィアを中心に地震が起こり、デュランダルは刀身を爆炎、氷、雷が包み込んだ！

ゼノヴィアは目を見開くと、ミステイターとラードラ目掛けて振り下ろした！

「龍牙、絶唱破ッ」

!!!!!!

ドオオオオオオオオオオオオツ

!!!!!!

聖なるオーラと四大元素の反発により起きた大爆発がミステイターとラードラを襲い、二人はリタイアの光に包まれた。

『サイラオーグ・バアル選手の戦車一名、僧侶一名、リタイアです！』

そうアナウンスが告げると、ギヤスパは糸が切れたように倒れた。

ゼノヴィアはデュランダルを仕舞うと、ギヤスパを抱き起した。

『終わったぞ。…お前が、二人を倒したんだっ』

『僕……お役に、立てたんですね……勝てたん、ですね……』

『ああ、ああ……！』

ゼノヴィアの言い聞かせるような言葉に、ギヤスパーは静かに笑った。そのまま気を失ったらしいギヤスパーは、リタイアの光に包まれた。

……ギヤスパー、お前の覚悟、受け取ったぞ。

『…フン。不条理な行動ばかりだな、人間も悪魔も』

…ありがとな、ドラゴン。

『何の事だ』

あの霧のドラゴン、お前だろ？

あの時、ギヤスパーとゼノヴィアに力を貸してくれたじゃないか。

『……あの小僧と小娘が勝手に使っただけだ。あの吸血鬼に俺の魔力が蓄積しているなら、起きてても不思議ではあるまい』

『なら、そういう事にしてやろうぜ。相棒』

…そうだな。

『生暖かい目で見ると鬱陶しい!!』

## MAGIC 118 『女王の女王による女王の為の戦い』

第四試合終了時点で、両陣営そこそこ数が減っている。

此方は俺、リアス、アーシア、朱乃さん、木場、ゼノヴィア、ロスヴァイセさんの七人。

それに対しサイラオーグさんの眷属は、サイラオーグさんとその女王、そして未だ登場していない仮面の兵士の三人。

数では有利だけど、どうなる事やら。

『戦いも中盤を超えようとしているのかもしれませんが！バアルチームは残り三名！対するグレモリーチームは残り七名と現在はグレモリーチームが優勢であります！しかし！バアルチームの残りのメンバーが強力です！巻き返しとなるか必見です！』

サイラオーグさんが出張るなら恐らく俺が出る事になる。

問題は…

『例の兵士か』

ああ、俺達の懸念すべき点はそこだ。

駒の消費は確か七つ……かなりの手練れなのは間違いない。

『ルール上、お前は連続では出られないからな。この後のカードの切り方によつては負ける可能性もある』

……まあ、こういう駆け引きが好き人には堪らないんだろうな。

俺は頭悪いからあれだけだ。

何はともあれ両「王」がダイスをシユートした。

『バットルドオオオムツ!!』

『…ボールを相手のゴールにシユウウーツ』

超！エキサイテンツ!!!……って何やらせてんだよ！

何度か振り直しが行われた結果、出た数字の合計は——9。

「あちらが出せるのは女王か兵士のみ。となると女王が出てくると思うわ」

「何で？」

『この試合、出そうと思えば出せた場面もあったろう？だが向こうは頑なに出さなかった。恐らくは安易に試合に打線事情でもあるのだろう』

「そう考えれば、サイラオーグは可能な限りあの兵士を温存するでしょうから」

って事は相手が出す眷属は……

「——クイーシャ・アバドン。サイラオーグ眷属の女王が出てくるわ」  
アバドンって、確か番外エキストラ・デーモンの悪魔だったな。

今もレーティングゲーム第三位の強豪悪魔。

「私が行きますわ」

すると、朱乃さんがそう言って前に出る。

「相手の女王はアバドンの者よ？ 記録映像を見る限り相当な手練れだったわ」

グラシヤラボラスとの戦いでも見たけど、確かに奴さんは強かった。

アバドン家特有の能力『穴』ホトルって力を上手く使いこなし、相手を圧倒していた。

その『穴』ってのは、聞けば何でもかんでも吸い込んじゃうらしい。

物体にしろ、相手の得物にしろ。

「俺が行ったほうが良いんじゃないっすか？」

『確かに。その方が得策かもしれん』

俺とドライグの提案に、朱乃さんは首を振る。

「いいえ。イツセー君は相手の王、サイラオーグ・バルまで取っておくべきよ。相手の兵士もいる以上、あなたは最後まで控えておくべきだよ。それに、後ろに祐斗君、ゼノヴィアちゃん、ロスヴァイセさん、そしてリアスとイツセー君が控えてくれるからこそ、出来る無茶もあるんです」

……ここまで言われちゃ、止めるのも野暮つてもんだな。

『相棒』

何だドライグ。

『……つて、言ってみろ』

……なあドライグ、前にもそういうの言った気がすんだけど。

あれか、これがデジヤブつて奴か。

『いいから言ってみろつて』

あー、もう！分かったよ。

「朱乃さん」

「どうしたの、イツセー君？」

転移魔方陣に向かおうとした朱乃さんを引き留める。

「この試合が終わったら、俺と二人きりでデートしましょう」

「——っ」

俺はドライグに言われた事をそのまま伝えた。

すると朱乃さんは……頬を赤く染めて震えていた。

「……イツセー」

「は、はい」

急に呼び捨てにされ、思わず身構える。

すると朱乃さんは、上目遣いで俺の顔を覗き込んでくる。

「勇気を、私に頂戴？」

「え……」

ゆ、勇気？

……無難に、手を握ったりとか、か？

『バーカ。そんなんじや生易しすぎるだろ』

『もういつその事唇でも奪ったらどうだ』

この状況でキス?!

マジで言ってるのか?!今だって結構周りからの視線が痛いんだぞ!

『良いからやれって時間ねーぞ』

『You奪っちゃいなYo』

何だその言葉のチョイス?!——あーもう、こうなりややくそだ!!

「…朱乃」

「んう……!」

「「ああああっ!!」」

破れかぶれでキスをすると、リアス、アーシア、ゼノヴィアから非難の声が上がる!

一分ほどキスをすると、俺は朱乃さんから離れる。

「……これで、良いかな」

「……うん。私、頑張る」

何時になく少女チックな朱乃さんは、決意を新たにフィールドへと向かっていった。  
…勇気づけられた、って事でいいのかな？

『相棒……運命から、逃げるなよ』

ふっ、分かっているよ。

俺は背後から紅いオーラが揺らめいているの感じて、その場に正座した。

――

映像に映し出された場所は無数の巨大な石造りの塔が並ぶフィールド。

そのてっぺんに朱乃さんはいた。

相対するのは金髪ポニーテールのお姉さん。

『第五試合の出場選手、グレモリー側は女王、姫島朱乃選手！バアル側は同じく女王、クイーシャ・アバドン選手！なんと女王対決となります！』



『これまでの試合からサイラオーグは兵士を出来るだけ使いたくないと見える。そうなる。と出すのは女王。リアスはそれを読んで朱乃を出したところか。いや、サイラオーグもそれを読んでたかもしれんな』

やっぱそう考えるよな。

まあ今はこの試合に集中だ。

『やはり、貴女が来ましたか、雷光の巫女』

『不束者ですが、よろしくお願い致しますわ』

物腰は何時も通りだが、映像越しでも気迫が伝わってくる。

朱乃さんマジモードだぜ。

『第五試合、開始してください！』

開始の合図と共に両者空中へと飛び上がった！

お互い一步も譲らない属性魔法攻撃を繰り広げる！

見た感じではほぼ互角、か？

『あまり大きな差はないな。となれば後は使用者の力量次第か』

ドライグがそう評した時、空中で大爆発が起こった！

『とはいえ向こうの女王は例の『穴』を使っていないからな。油断してた所に攻撃を返されたら不味いぞ』

どのタイミングで使ってくるか……油断は出来ないな。

『やはり、やりますわね。流石は若手最強サイラオーグ・バアルの女王ですわ』

『そちらこそ。過去の情報からもう少し楽な相手だと思っていました。油断は出来ませんね』

『ええ。悔ってもらっては困りますわ』

朱乃さんは手を空に翳す。

すると、魔力により構成された暗雲から稲光が迸る。

『雷光よっ!!』

力強い掛け声と共に光を伴った雷撃が降り注ぐ！

だが当たる寸前、アバドンの周囲の空間が歪みだした。

そしてそこには巨大な『穴』が発生した！

大質量の雷光はそのまま、『穴』に吸い込まれ、アバドンに届くことはなかった。

が、朱乃さんは既に次の攻撃に移っていた。

『そこですわ!』

再び天空に稲光が走り、次の瞬間にはフィールド全体を覆うほどの雷光が迸っていた

!

『広範囲攻撃か。さて、むこうはどうするのやら』

ドライグがそう言った時、アバドンは『穴』を広げ、更には周囲に複数の『穴』を出現させ、その全てが雷光の乱舞を難なく吸い込んでいった。

『！』

朱乃さんは顔を強張らせた！

対するアバドンは冷笑を浮かべていた。

『私の「穴」は広げる事も複数に出現させることもできます。更には吸い込んだ攻撃を分解して、放つことも出来るのです。——このようにして』

朱乃さんを囲むように無数の穴が出現した。

そしてそれら全てが朱乃さんに向けられていた！

『雷光から雷だけを抜いて——光だけ、そちらにお返ししましょう』

朱乃さんを囲っていた周囲の穴から幾重もの光の線が迸った——

「朱乃さん！」

アーシアが思わず声を上げる。

『まさかカウンターに利用するとはな』

ドライグの言葉に俺達は何も返せないでいた。

彼女は基本あの能力を攻撃だけを吸収してその間に自信の攻撃を決めていた。まさかこんな隠し種があつたなんてな……。

「皆、何を打ちひしがれているの」

だが、その中でリアスだけは冷静だった。

彼女はただ一点——試合の映像だけを睨んでいた。

「朱乃はこの程度で落ちたりはしないわ」

リアスの言葉と時を同じくして、フィールドにも変化が起こった。

朱乃さんに命中した事で巻き起こっていた砂塵の奥から光が溢れ出たのだ。

『な……』

アバドンが驚愕の言葉を上げるより早く、彼女の腹を一筋の雷光が掠めた！

掠り傷だけど、悪魔にとって光は猛毒！

アバドンは命中した箇所を手で押さえて前を睨みつける。

『あらあら、不意を付けたと思つたのですが』

ゆつくりと歩み寄るのは、無傷の朱乃さん！

『おおっーと!!光に包まれたはずの姫島朱乃選手!なんと無傷です!』



『だが口では簡単に言えるが、並大抵の技量で出来る事ではあるまい。墮天使の力を別方向からアプローチしたって事だな』

「すげえ、すげえよ朱乃さん！」

「…つて、まさかリアスは知ってたのか？」

「ええ。因みに朱乃が驚いた顔をしたのもブラフよ」

「な、何でそんな事を」

「だって…その方がアツと言わせれるでしょ？」

リアスはイイ笑顔で、そう言つてのけた！

『私のイツセー君の受け売りですわ。何もないと思わせてから新しいカードを切る…驚いたでしょう？』

『ええ、驚嘆に値します。何とも魔法使いらしいモットーですね』

短い会話を終えると、二人は静かに互いを睨みつける。

そして、そのまま動き出した！

朱乃さんはチャージした魔力の砲撃をぶつ放し、アバドンはそれを穴でかき消す！

その隙を掻い潜つて、朱乃さんは手元に短い光の短剣を作つて接近する！

『接近戦とはっ！』

アバドンの顔が苦渋に満ちる！

木場ほどではないが素早い連撃にアバドンは防戦一方になる。

穴を使おうにも朱乃さんに光は還元されるだけだから、実質封じられたようなものだ。

アバドンは穴を自分に被せるように発生させ、朱乃さんから離れた場所に転移していた！

『今度はこちらからです！』

アバドンはそれぞれ攻撃を両手から発生させると、それを作り出した穴に吸い込まれた！

すると朱乃さんの目の前に不意に先程の攻撃が迫っていた！

『くっ！』

回避が間に合わないと判断したのか、朱乃さんは周囲に雷の防御膜を張った！

『はあ、はあ……っ』

大きく息を荒げるアバドンの眼前、制服がボロボロになった朱乃さんが現れた。

『……流石ですね。今でもリタイヤしないとは』

『私も負けられないので。……どうです？そろそろ終わらると言うのは』

『賛同しましょう。……最後に一撃。それを全力で放ちます』

それを受けて朱乃さんは手刀を形作った手に雷光を、アバドンは手元に魔力を圧縮させていく。

互いに瞑目し、そして――

『ハアアアアアツ!!!』

お互いの最後の一撃がフィールドを揺らした！

勝者は……

『リアス・グレモリー選手の女王一名、リタイヤです！』



## MAGIC119 『消耗戦』

女王対決の後、再びダイスが振るわれた。

リアスが6、サイラオーグさんが6——合計値は12！

ここでマックスか！

『出ました!! ついにこの数字が出ました! この数字が意味することはサイラオーグ選手が出場できるということですよ!!』

『おおおおおおおおおおおお!!』

実況の声に観客が大いに沸くと同時に、サイラオーグさんが上着を脱ぎ捨てた。

……とうとう出るか。

そう思った俺へ、サイラオーグさんは視線を向ける。

「イツセー君」

木場が俺の肩に手を置いた。

「僕とゼノヴィアとロスヴァイセさんで、サイラオーグさんと戦う」

そう語る木場の視線は真っ直ぐだった。

「…本気か」

「うん。君と部長のために、出来るだけ彼を消耗させる。これが僕達の役割だと思う」  
「…ここまで言うのなら、止めるのも野暮つてもんだな。」

「なら頼んだぜ」

「ああ。…それで良いですか、部長」

木場がリアスの方へ眼を向けると、リアスは瞑目していた。

「…御免なさい。主である私が力不足なばかりに」

「これが今の僕達に出来る事ですから。あなたの為なら、命だって掛けられます。ゼノヴィア、ロスヴァイセさん、付き合ってくださいますか？」

木場の問いに、二人は力強く頷いた。

「勿論だとも。イツセーと部長が後ろに控えている…こんなに勇気づけられる事は無い」

「役目がハッキリしている分、分かりやすくして良いですね。——出来るだけ長く粘って、相手を疲弊させましょう」

三者三様、覚悟は固まっているようだ。

「後は頼んだよ、イツセー君」

「出来るだけ応えるよ」

俺がそう返した時、三人はバトルフィールドへと転送されていった。

———

三人が到着したのは湖の湖畔だった。

そしてその目線の先には、腕組をして待っていたサイラオーグさん。

『リアスの案か』

どうやらこっちの思惑は察していたらしい。

木場達は何も言わなかったが、サイラオーグさんは笑みを浮かべた。

『そうか。リアスは一皮むけたようだな』

『相棒だつて一皮剥けたぜ』

やかましいわ！

『お前達では俺には勝てん。良いんだな？』

『ただで死ぬつもりはありません。———最高の状態で貴方を主と赤龍帝へと送り届ける！』

木場の覚悟の程に、サイラオーグさんは打ち震えてた。

『…いい台詞だ。お前達は何処まで俺を高まらせてくれるッ！』

『第六試合、開始してください！』

審判からの合図。

そして、サイラオーグさんの四肢に変な紋様が浮かび上がった。

『これは俺の体を縛り、負荷を与える枷だ。——これを外させてもらう。お前達の覚悟に、全力で応えるっ!!』

淡い光がサイラオーグさんから漏れると、紋様が消えていった。

次の瞬間、サイラオーグさんを中心に周囲が弾けた！

ドンツ!!

風圧が巻き起こり、サイラオーグさんの足元は大きく抉れ、クレーターを形成した！

そのサイラオーグさんの体は白い光に包まれていた。

あれは、闘気か？

『まさか可視化するほどの濃密な質量とはな……』

『と言う事は、サイラオーグ選手は気を扱えるのですか？』

実況の疑問を、先生は否定した。

『いや、サイラオーグは仙術等は習得していない』

『はい、彼は仙術は一切習得してはいません。あれは、体術を鍛えぬいた先に目覚めた闘気です。純粹なパワーを求め続けた彼の肉体に宿ったのは、魔力ではなく生命の根本とも言うべき力です。彼の有り余る活力と生命力が噴出して、可視化したと言うべきでしょう』

純粹なパワーの波動……あそこに至るまで、あの人はどれだけ心血を注いだんだろうか。

『そう簡単に至れる訳ではない。文字通り己を極限まで鍛えぬいたのだろう。それにしても、あそこまで直接戦闘に特化した闘気を見たのは初めてだ。戸愚呂弟と良い勝負出来るんじゃないか？』

それは、どうなんだろうか……？

それは兎も角、サイラオーグさんのプレッシャーに、三人は表情を険しくさせた。

『一切、油断はしない！貴様達は取られる覚悟でここに立つ戦士だ。生半可ではない覚悟——俺もまた取られる事を覚悟して戦うツ!!』

そう啖呵を切ると、サイラオーグさんの姿が消えた！

開幕でこのスピードか！

『やせません！』

ロスヴァイセさんが縦横無尽に魔方陣を展開させ、魔法のフルバーストを何時でも撃

てる体勢を作った。

『…ロスヴァイセさん、そっちです！』

サイラオーグさんの動きをとらえた木場が、その方向に聖魔剣の切っ先を向けた！

そこへロスヴァイセさんのフルバーストが鋭く放たれた！

その先に現れたサイラオーグさんへ大質量の属性魔法攻撃が襲い掛かる！

『——フンツ！』

バンツ!!

空を殴りつけた音と共にサイラオーグさんが向かってきていた無数の魔法攻撃を文字通り拳一つで打ち返した！

魔法すら軽々と弾きやがった！

サイラオーグさんは魔法と聖なる波動の雨霰を掻い潜り、ロスヴァイセさんに一気に肉薄した！

『逃げ——』

木場がそう言うよりも早く、サイラオーグさんの拳がロスヴァイセさんを捉えた！

直撃の瞬間、その辺一帯の空気が振動したのが分かるほどの一発だった。

ヴァルキリーの鎧が無残にも散っていく！

ロスヴァイセさんは苦悶の表情と共に湖の遥か先へ吹っ飛ばされていく！  
体が湖に着水した瞬間、リタイアの光に包まれていった。

『――まずは一人』

『おおおつ!!』

ロスヴァイセさんが消えていく中、ゼノヴィアがサイラオーグさんに真正面から斬りかかる！

だがその刀身が届く寸前、サイラオーグさんの姿が消えた。

音もなく背後に現れたサイラオーグさんの蹴りがゼノヴィアに放たれるが、直前でゼノヴィアのいた位置に聖魔剣が現れた。

ガシャアン!!!

その蹴りは聖魔剣を簡単に砕き、前方の湖を真つ二つに割った！

『相手の動きが、速すぎるッ!』

ゼノヴィアが驚愕する中、サイラオーグさんは笑みすら浮かべていた。

『まずは魔法の使い手から撃破したが…さて、剣士が二人。しかも聖剣の使い手だ』

不敵に笑うサイラオーグさんを目の前に、ゼノヴィアと木場は全身からオーラを迸らせる！

『木場！此奴はやばいッ！全力中の全力でなければ勝てないっ!!』

『分かっているよゼノヴィア！この際後先考えるのは無しだ！余力を残す、なんて事を考えていればやられる…それだけの相手だ!!』

二人の緊迫ぶりに、サイラオーグさんは満足げな笑みを浮かべる。

『それで良い！持てる全てを賭けて、俺の拳を止めて見せろッ!!』

ダンッ!!

その場から勢いよく飛び出し、鬨気を纏わせた拳で木場に殴りかかった!

木場は前方に聖魔剣の壁を幾重にも作り出すが――

バリッ!!

呆気なく拳の一撃で破壊されていく!

『柔いな。これでは俺の一撃を止められはせん』

『…ッ!』

木場は素早く後退すると、サイラオーグさんが駆け出す寸前で拳を形作った!

『――弾ける!!』

刹那、聖魔剣だった無数の破片が爆発を起こした!

だがすぐさま木場は手元に聖魔剣を作ると、煙の中から現れたサイラオーグさんと高

速戦闘を演じた!



『フンッ!!!』

『ッ!』

木場は拳を受ける寸前で転移、代わりにサイラオーグさんの一撃を受けたのは聖魔剣だった。

その最中に、

『デュランダルッ!!!』

ゼノヴィアがチャージしたデュランダルの波動を放つ!!

『———良い塩梅だ。だが、落とせるほどではないな』

首を鳴らしながら現れたのは、無傷のサイラオーグさんだった。

ゼノヴィアはその姿を見て、今度こそ体を震わせた。

『———真正面からデュランダルの一撃を受けて無傷とは……真正銘のバケモノか』

何とかそう口にしたものの、やはりまだ衝撃は大きいようだ。

『…ゼノヴィア、コンピネーションで行こう』

木場はゼノヴィアにそう告げる。

それを受けて立ち直ったゼノヴィアは立ち上がり、二人揃えて剣を放った!

聖魔剣、新デュランダル、二振りの高速の剣劇をサイラオーグさんは最小の動きで避けていく。

木場は距離をとると、聖魔剣を聖剣へと変えた。

『行けっ！』

その声を上げると、出現した龍騎士団は高速で向かっていく！

『新しい禁手かつ！是非もない!!』

サイラオーグさんは嬉々としてそう言うのと、高速の剣劇をカワシツツ、騎士団を的確に屠っていく！

その様は凄まじく、まるで騎士団が紙くずのようにも見えた。

『うむ、数も多く、速さも申し分なし！だが、俺が相手では——』

儂い金属音とともに、最後の甲冑騎士が破壊された。

『硬さが足りんな』

木場はサイラオーグさんの洗練された、いや、常軌を逸した体術に流石に戦慄していた。

…あの禁手に至るまで、木場はかなりの時間を修行にあてた。ただどそれでも、あの男に届かないのか……。

『才気ある動きだ。可能性に満ち満ちた攻撃を肌で感じる——だが、この場では俺の方が上だ』

ドッ！ ゴッ！

二人の攻撃を防ぎ切ったサイラオーグさんの掌底がゼノヴィアの腹部に、回し蹴りが木場の脇腹に入った。

『ガハッ！』

その場で血を吐いて地面に転がる木場とゼノヴィア。

『力の権化だな。その一点に関しては、奴は鬼神とも言える』

ドライグですらそう評するほどだ。

木場は小さく笑みを浮かべると、立ち上がった。

『…体は、まだ動く。まだ、戦える……まだ、相手を削れる……！』

聖魔剣を作り出す木場に触発されてか、ゼノヴィアもまた立ち上がった。

『…まだ、フィナーレには早いと言う事だな』

『さあ削ろう、ゼノヴィア。少しでも部長、イツセー君の為に、剣を振るおう』

剣を構える二人に、サイラオーグさんは心から嬉しそうに笑った。

『まだ楽しませてくれるか……!』

『ああ、楽しませるさ……!』

ゼノヴィアがそう言う中、彼女の背後から——リタイヤしたはずのロスヴァイセさんが出現した!

その手には、透明な刀身が特徴の剣が握られていた。

『油断しましたね! 近距離からの魔法フルバーストならどうです?!』

サイラオグさんに肉薄すると、いきなりフルバーストをぶっぱした!

けたたましい炸裂音を轟かせると、サイラオグさんの体から煙が上がる。

その体は——仰け反っていた!

『…成程。先程倒されたヴァルキリーは、エクスカリバーか』

「え、そうなの?!」

合点がいった様子の子のドライグに、リアスは頷いた。

「ええ。最初に倒されたロスヴァイセは、デュランダルの鞘にしていたエクスカリバーの一本振り、擬態の聖剣が作り出した偽物よ。そして今出てきたのは、所持者の姿を透

明にする透明の聖剣本物のロスヴァイセよ。所有者が承諾すれば、因子を持た

ない者でも短時間なら恩恵を受けれるのよ」

そう言う事か……だから最初の撃破の時点でアナウンスがされなかった訳だ！あのリタイヤの光は多分、ロスヴァイセさんの魔法って事だ！

良い連携プレー……いや、超キョウリヨクプレーだな！

サイラオーグさんは体の表面から血を流しつつ、体勢を立て直した。

『……アナウンスがないので怪しくは感じていた。リタイヤするかどうかのギリギリの状態で、湖の底で気絶していたと思っていたのだが……見事だ、お前達』

サイラオーグさんは木場達の連携をほめた。

だけどその眼光は一層鋭さを増した。

右の拳を握り締めると、ゆっくりと引いていく。

すると全身を覆ってた闘気が拳に集中していき、一気に右腕が盛り上がる！

『敬意を払うと共に、これを送りたい』

『『——ッ！』』

何かヤバいものを感じたのか、三人はその場から距離をとった。

『ゼノヴィア、本当の正念場だ！例の作戦で——』

そう木場が叫んだと同時に、サイラオーグさんの拳が放たれた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!!

映像が激しく揺れ——気付けばサイラオーグさんの前方が大きく抉れていた！

まるで地割れでも起きたような、そんな抉れ方だ。

『リアス・グレモリー選手の戦車一名、リタイヤ』

今の一撃で、ロスヴァイセさんがやられたか！

あまりの拳圧によって生まれた煙を払うと、サイラオーグさんは同じ構えをとる。

『……いつは掠っただけでも致命傷となる。生半可な攻撃では止められんぞ！』

闘気を纏った右ストレートが振り抜かれた！

と同時に、木場とゼノヴィアが斬りかかった——サイラオーグさんの、右腕に！

木場の聖魔剣の刀身は、サイラオーグさんに届く事無く闘気により碎かれる。

が、そこへ空かさずゼノヴィアのデュランダルが振るわれる——だが闘気に阻まれ深くまで斬り込めてはいなかった！

歯噛みするゼノヴィアだが、デュランダルの柄を——木場も握りしめた！

瞬間、デュランダルが莫大な閃光とオーラを解き放ち、サイラオーグさんの右腕を切

断した！

斬り落とされた右腕は消滅せずに、闘気を纏ったままその場に健在だった。

『奴の生命力がデュランダルのオーラに勝っていたのか?!?』

ドライグも思わずそう唸った。

『…見事だ、右腕はくれてやろう。元よりその覚悟だったからな。これで俺は否応なくフェニックスの涙を使わねばならない——万全の態勢で決戦に臨みたいからな』

サイラオグさんはそれだけ言うと、ゼノヴィアを蹴り上げ、宙に浮いた体に左拳と蹴りの連打を浴びせた！

地面に叩きつけられたゼノヴィアの目は…光が消えていた。

意識を持っていかれたか……！

木場は距離を取ろうとするが、そうはさせまいとサイラオグさんの左拳が顔面を捉えた！

『——ッ!!』

悲鳴すら上げれずにバウンドした木場の体に、サイラオグさんの正拳が突き刺さった。

その余波は木場の体を通り抜け、後方の湖の湖面すら震わせた。

崩れ落ちていく中、木場はボロボロの状態ながら——笑っていた。

『これで、僕達の役目は……果たせた……。後は、僕の主と、僕達の希望が、貴方を屠

る……………」

それだけを言い残し、木場とゼノヴィアは静かに消えていった。

『見事、そう言う他はない。お前達と戦えた事、感謝する』

『リアス・グレモリー選手の騎士二名、リタイヤです』



## MAGIC120 『決戦の狼煙』

『この試合で相棒が負けたら上記のタイトル二つが連載されるぞ』

マジで!?

それは作者の負担がマツハで死ぬだろ!!

それは兎も角、振るわれたダイスの目は——9。

『相棒、勝てよ。新連載の為に』

『そうだぞ。俺達の出番が掛かってるんだからな』

まだ言うか!

締まらない出陣だけど、俺は無言でサムズアップを出すと転移魔方陣に乗った。

——

俺が転移されたバトルフィールドは人気のないコロシアムの舞台上だった。

相対するように現れたのは女王、クイーシャ・アバドン。

『疲弊の事を考えたら、あの兵士が出張ると思っていたが』

確かに。

そう思っていたら、向こうの女王は怪訝な顔を見せた。

「どうかしましたか？」

「え、あーいや…：てつきり兵士の方で来ると思ってたんで」

俺が頭を掻きながら言うのと、アバドンさんも納得したように答えてくれた。

「ああ、その事ですか。彼は諸事情があつて、単独で出す事が出来ないのですよ。なので今回は私が出る事になりました」

「へえ」

「…疑問に思っていた割に、気のない返事ですね」

いや、まさか答えてくれるとは思わなかつたので…。

それにしても出せないか…：何かあるのか？

『若しくはただのブラフの可能性もあるぞ』

「いや、サイラオーグさんに限ってそれはないだろ」

あの人は戦いや自分の眷属に関して嘘を言う事はしないだろうから。

「我が主を高く買っていただき、ありがとうございます」

「あ、いえ」

対戦相手、しかも女王に頭下げられるなんて初めてだぞ……この人、それほどサイラオーグさんの事を敬愛してるんだな。

『いや、寧ろ恋の匂いがプンプンするぜえ。奴さんからはよお』  
何のキャラだよ。

「はい。私はあの方を愛しております」

「や、律儀に答えなくても良いっすよ！」

なんか申し訳ないわ！

すみません、こんな公の場で！

「ふふ、今から戦おうとするべき相手とは思えない和やかな方ですね」

「……なんか、すみません」

「いえ、謝る必要はありません。そこが貴方が子供達から慕われる理由でしょう」

アバドンさんはクスリと笑みを浮かべた後、表情を引き締めた。

「……赤龍帝——禁手となりなさい。私の主サイラオーグ様はあなたの本気を所望している。ならば、女王の私もそれを望みましよう」

強い覚悟……木場達に負けたくないほどのものを感じるぜ。

「……」

俺は瞑目して、息を吐く。

「ここでこの人相手に全力を出す必要はない……けど、それだとこの場でこの人の覚悟を踏み躪るようなものだ。」

『良いではないか相棒。見せてやれ、お前の力を』

…ああ。

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

俺は鎧を展開して、一步踏み出す。

それと同時にオーラが周囲に吹き出て、コロシアムの壁を破壊していく！

「これが通常の禁手……そしてこれが——」

《Welsh Dragon Absolution Breaker!!!》

一気に極手を発動、オーラが周囲の瓦礫を跡形もなく消し飛ばした！

「これが『極アブソリュション・ブレイカー手』……俺が今持てる最大の力です」

俺の体を覆うスパークが周囲の空気を焦がす音が響く。

アバドンさんは大きく目を見張っていた。

「これが今代の赤龍帝……ツ！ですが、私も主の為、逃げるつもりはありません！」  
「……」

《Limit Boost!!》

『クイーシャ・アバドン』

俺の限界値まで力が倍加され、俺の右手に魔力が集まっていく。

それを見たドライグは、アバドンさんに静かに告げた。

「赤龍帝、ドライグ……」

『この一撃、防ごうと思うな。相棒は、兵藤一誠はお前を、殺す』

「——ツ！」

アバドンさんは俺との間に『穴』を展開した。

「——デリート・ドラゴンショット消滅の龍波動」

静かに告げて、俺は拳を振りかぶる。

勢い良く放たれた魔力の奔流はアバドンさんの『穴』を消し飛ばし、彼女自身をも呑み込んでいく！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオ

!!!!!!

アバドンさんを飲み込んだ魔力の一撃はコロシアムの城壁のみならず、フィールドそのものを抉り、破壊した……。

『サイラオーグ・バアル選手の女王、リタイヤです』

審判が俺の勝利を告げると、一瞬の出来事に会場が騒然となった。

『良い判断だったな、サイラオーグ・バアル』

ああ、寧ろ安心したよ。

フィールドにサイラオーグさんの映像が映ったが、その顔は苦渋に満ちていた。

『俺が強制的にクイーシャをリタイアさせた。あのままでは、赤龍帝に殺されるところだったからな。いや、殺すつもりだったのだろうか？』

「ええ」

俺はサイラオーグさんの問いに淀む事無く答える。

「彼女が言ったんでしょ？全力で来いつて。だからそれに答えたまです。それにあそこで出さなきゃ嘘でしょ」

『ほお…それは、俺に対してもか？』

「当然つしよ。あんたは俺の全力を望んでこの戦いを待ちわびていた。なら、俺は自分の全てで応える。それに、あそこで自分の眷属を殺すほど、あんたは愚かな王じゃないでしょ」

マスクを引つ込め、俺は人相の悪くなった顔で笑った。それを見て、サイラオーグさんは嬉しそうに笑った。

『いい返事だ……赤龍帝と拳を交える瞬間を俺は夢にまで見た。——委員会に問いたい！もういいだろう？ この男をルールで戦わせなくするのはあまりにも愚だ！俺は次の試合、こちらとあちらの全部で団体戦を希望する！』

——団体戦か。

サイラオーグさんの提案に、ドライグがある事を提案した。

『相棒、ちよいと左手を上げてくれるか』

「ん、ああ」

俺はドライグに言われ、左手を掲げる。

すると左手が輝き、ドライグの声が響いた。

『俺もサイラオーグ・バアルの案に賛成だ！どうせこの後の試合展開は馬鹿でも読めちゃう！そんなのは観客やチビツ子が求めるエンターテイイメントとしてはあまりにもつまらん!! どうだいその事！ルール無しの決戦で決めた方が、盛り上がるってもんだろ!!!』

や、良い事言ってるけどよ、その言い方だと某サテライトの元キングさんが脳裏を

過って仕方ないんだけど。

まあその案には俺も賛成だ。

「俺も賛成だ！それじゃシヨウとしては面白みが欠ける！だったらいつその事派手にやりてえ!!」

俺達の叫びに、皇帝ベリアルはにこやかに微笑んだ。

『彼等の言う通り、このあとの流れは簡単に読めてしまう。連続して出られないルール上、次がグレモリーの僧侶とバアルの兵士。その次がサイラオーグと赤龍帝の事実上の決定戦となるでしょう』

アザゼル先生も顎に手をやりながら続く。

『確かにそれはあまりにもつまらない。それならば、次の試合を団体戦にしてケリをつける。分かりやすいし、このテンションを継続して見られるだろうな。俺としてはサイラオーグの意見に賛成だが……さて、委員会の上役はどうするか』

「…そういうリアス放っておいて決めようとしてるけど、リアスは良いの?!」

俺が待機しているリアスにそう問うと、リアスの呆れ顔がフィールドに移った。

『この流れで嫌だなんて言ったら、相当空気読めない娘になっちゃうわね…』

『『今もそうなんじゃないのか』』

『あ?』



『すんません』

お前から相変わらず弱い！

『私もそれで構わないわ』

『よし相棒。決まるまでカップ麺でも食おうや』

お湯入れた時点で決まりそうなんだけだよ…。

ってかこんな小ざっぱりした場所でカップ麺食えってか!?

荒れ果てたフィールドのど真ん中で漫才をやっていると、実況から一報が齎される。

『委員会から、報告を受けました！団体戦を認めるそうです！次の試合は事実上の決定戦となる団体戦です！両陣営の残りメンバーの総力戦となります!!』

その決定に会場が湧き出した。

『相棒、この流れで負けたら恥ずかしいぞ』

お前、他人事みたいに……。

『安心しろ。俺や此奴、そしてリアス・グレモリーだっている。何も気兼ねする必要はない』

『俺を巻き込むな……だが、宿主として無様に負けるのは許さんぞ』

『力貸してくれるってよ』

『勝手に決めるなアホンダラ!!』

『あやんのかこのドグサレ野郎!!』

『ああ!?!』

『ああん!?!』

喧嘩すんなし仲良しコンビ!

## MAGIC121 『猛き獅子VS勇ましき龍』

俺とリアスは団体戦——最終決戦のフィールドとなる広大な平地に立っていた。

『何も無いんだな』

『聖徳太子も納得の小ざっぱりだぜ』

酷く小ざっぱりしてるう〜…つて、何やらすんだ。

実況がマイクを震わせる。

『さあ、これまで激闘を繰り広げてきたバアルVSグレモリーの若手頂上決定戦もついに最終局面となります！サイラオーグ選手達によってもたらされた提案により団体戦となった最終試合！バアル側は王、サイラオーグ選手と謎多き仮面の兵士、レグルス選手！ 対するグレモリー側はプリンセス・シュガーことリアス・グレモリー選手と魔法龍帝ウィザードラゴン！兵藤一誠選手です!!』

…改めてここまで来ると、壮観だよな。

ついにこの時が来たって感じがしてさ。

『何緊張してるんだ相棒。お前がこの場に立っているのは必然なんだ。胸を張れ』

…そうだな。

あ、因みにアーシアは陣地にて待機している。理由は狙われやすいからだ。

サイラオーグさんの性格を考えると過剰に狙う事はないだろうけど、それでも流れ弾が来るとも限らない。

申し訳ないが、今回は控えに回ってもらった。

『さて、最終試合を始めようと思います』

審判が両チームの間に入り、俺達の準備が出来ていることを確認する。

『…では、最終試合！開始してください！』

ついに、最後の試合の狼煙が上がった。

俺とサイラオーグさんの視線が交差した。

一瞬の緊張が走ったかと思うと、サイラオーグさんは小さく笑った。

「リアス、お前の眷属は素晴らしい。妬ましくなるほど、お前を想っている。それ故に強敵ばかりだった」

「…貴方がそう言ってくれるなら、リタイヤしていったあの子達も戦った甲斐があったものよ」

サイラオーグさんの称賛に、リアスはそう返した。

「この場にいるのは互いに王と兵士のみ。終局に近いな」

サイラオーグさんは真っ直ぐに言うと、次に俺の前に立った。

「兵藤一誠。ついにここまで来たな」

「グレモリー城以来っすね。まああの時は風邪でしたけど」

頬を掻きながら言うと、サイラオーグさんは瞑目する。

「俺はずっとこの日を待っていた…お前と何も考えず、撃ち合える時を」

「……」

「——行くぞ」

サイラオーグさんは足を広げると、一気に俺へと向かって駆け出した！

繰り出された拳を俺は——

ズドンツ!!

「………ツ!!」

「…!？」

何もせず、受け止めた。

手ではない、俺の顔面だ。

…体の芯まで痛みが駆け抜ける。

だけど俺は倒れる事なく、踏み止まる。

「…何故避けなかった？」

俺から距離をとったサイラオーグさんは、不思議そうに聞いてくる。

俺は血を拭い乍ら、口を開いた。

「…これで、スッキリしました。俺は、あんたの拳を受けていなかった。俺のダチや、仲間達は皆あんたの一撃を食らっていった」

「…」

何を言ってるんだろう、そう思うはずだけど、サイラオーグさんは何も言わずに聞いてくれる。

「一度はあんたの拳を受けなきゃ、俺はあんたと真正面から戦う資格だってない。…」

まあ、俺なりのケジメですけどね」

「…そうか。で、どうだった？俺の拳は」

「……………漲ってきましたよ。全力のあんたと、俺の全てでぶつかり合うッ!!」

《Welsh Dragon Absolution Breaker!!!》

俺は禁手をすつ飛ばして極手を発動する。

並の奴ならオーラだけで吹き飛ばされるそれを受けて、サイラオーグさんは歓喜の笑みを浮かべていた。

「それが禁手の先の力かッ！クイーシャに見せた時よりも、オーラが洗練されている……。英雄派の一派に見せた力含めて、俺にぶつけてこいっ!!」

「……じゃあ、遠慮なく!!」

俺はスラスターを吹かして、一気にサイラオーグさんに肉薄!

右拳で顔を殴ると見せかけ、左拳で腹を殴る!

「ツツぐ!!」

サイラオーグさんの顔が大きく歪む。

これまでに見せたどの表情とも違う……。苦悶の表情。

「……ツ!!」

だが、俺の鎧にも大きく亀裂が走っていた。

あの状況で攻撃したのか……いや、この人なら不思議はない!

「……おおっ!!」

「ぬおおおっ!!」

俺とサイラオーグさんは拳をぶつけ合う!

ぶつかり合った衝撃波がソニックブームを生み、周囲の大地を破壊していく!

と、ここでリアスと対峙している兵士の少年が視界に移った。

仮面が取り払われると、そこにある顔は、俺とそう変わらない年齢の少年。

『あの小僧、まさか……!』

ドライグがそう呻いた時、変化は起こった。

ボコツ! ベキツ!

体中から異音を轟かせ、少年の肉体が変異していく!

全身に金色の毛が生え、腕や脚が太くなり、口が裂けて、鋭い牙を覗かせ、尻尾が生えて、首の周りにも金色の毛が揃えていく。

その小さかった体躯も逞しくなっていく。

ガオオオオオオオオオツ  
!!!!

少年だった兵士は黄金の体の特徴のライオンとなり、大きく吠えた!

『おとおつと! バアルチームの謎の兵士、その正体は巨大な獅子だった……!』

何だありや……!!



実況と同じく俺も驚きを隠せない!

だがドライグはどうやら知っている様だった。

『あの宝玉…間違いない、ネメアの大獅子か!!おいアザゼル!』

『…ああ、まさかこんな所で出くわすとは!』

アザゼル先生も納得しているようだった!

だから何なんだよあれ!

『アザゼル総督、あれはいったい?』

『…ネメアの獅子はギリシヤ神話に登場するヘラクレスの十二の試練の相手なんだが……。聖書の神がああ獅子の一匹を神器として封じ込めた。それは十三ある神滅具として数えられて、極めれば大地を割るほどの威力を持ち、巨大な獅子の姿にもなれる。

——神滅具『獅子王の戦斧』!しかし、所有者がここ数年、行方不明になっていたんだが…まさか、バアル眷属の兵士になっていたとはつ!』

マジで?!あのライオンお前と同じ神滅具なのか!?

『ああ、雰囲気からどうも俺に似た感じだったんだが……だが獅子になれるとは言え自立型だと言うのは聞いた事がないぞ』

そうだよ、つて事はああ神滅具は悪魔なんだよ!

神滅具を悪魔に出来るのかよ!?

するとサイラオーグさんは静かに語りだした。

「残念ながら本来の所有者は既に死んでいる。俺が『獅子王の戦斧』の本来の所有者を見つけた時は、既に怪しげな連中に殺された後だ。神器となる斧だけが無事だった。所有者が死ねば神器はいずれ消滅する。その戦斧もそうなるであろうと思っていたんだが……あろうことか意志を持ったかのように獅子に化けて、所有者を殺した集団を根こそぎ全滅させたのだ」

それってかなりイレギュラーなんじゃないのか!?

『ああそうだ！本来なら現存する事すらない……俺も所有者が死ねば意識が落ちて、気づけば次の所有者に行くからな』

「俺が眷属にしたのはその時だ。獅子を司る母の血筋が呼んだ縁だと思つてな」

『成程。ウアプラは獅子を司る家計、なかなか洒落た眷属だな』

そりゃ運命的な出会いだ。

『単独で意思を持つて動く神器……神滅具だど!?更には悪魔に転生できたのか!それを可能にしたのは獅子の力か悪魔の駒の性能か……。どちらにしる興味深い!実に興味深いぞ!そりゃ、所有者を断定できないわけだ!レアだ!レアすぎるぜ!サイラオーグ!今度、その獅子を俺の研究所に連れてこい!スゲー調べたい!』

『おお、水を得た魚の如くだな』

『寧ろ独身が婚約者を得たかのようだな』

『今なんつったあ!!』

なんせ悪魔に転生してるもんな、神滅具が。

はしゃぐ気持ちも分かる。

「所有者無しの状態のせいか、力がとても不安定でな。敵味方見境無しの暴走状態になって、勝負どころではなくなるから単独で出せるものではなかった。出せるのは今回、俺と組めるこのような最終試合だけだ。いざというとき、こいつを止められるのは俺だけだからな」

「成程、だから出せないって訳か」

つまりさっきの試合も、アバドンさん単独で出張る他無かった訳だ。

「何方にしても、私の相手はその獅子って事ね」

リアスは息を吐くと、紅色のオーラを纏う。

それと同時に、四肢に滅びのオーラが纏われる。

「リアス、無茶はしないでくれよ」

「貴方にそっくりそのまま返すわ」

俺の視界の端で、リアスへ向けてライオンが飛び掛かった！

「んじゃ、俺達も続けましょうか！」

「…ああ!!」

俺達も再び戦闘を再開する。

サイラオグさんの拳圧を躲しつつ、俺は背後へと後退する!

「魔龍進化!!」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!》

俺は鎧を青く染めると、全砲門へ魔力をフルチャージさせる!

《Full Blast Burst!!!》

「新しい力かッ!!」

各砲門から放たれたドラゴンショットを拳でぶっ飛ばしつつ、俺に右ストレートを放

つ!

ならこつちも!

「えやあああああつ!!!」

「ていやあああああつ!!!」

右ストレートと、砲撃ユニットにチャージされた砲撃とパンチが交差する!

やはりパワー特化ではないからか、少し後退ってしまうが……

「…ぐっ」

サイラオーグさんは何故か苦悶の表情を浮かべていた。  
見れば、彼の右腕から血が滲んでいた。

あの個所は――

「……ハハッ」

俺は思わず笑みを零した。

木場、ゼノヴィア、ロスヴァイセさん、皆の一撃は、ちゃんと届いていたんだ。

「魔龍進化！」

《Wizard Promotion!! Hurricane Dragon!!!》

風を纏い、鎧が緑色に変わる。

すぐさま両腕に纏わせたオーラを薄く研ぎ澄ませ、大きく振るう！

ウエルシュ・ハリケーンカリバー  
「赤龍帝の旋風剣!!」

「っ!!」

極限まで研ぎ澄ませた手刀を放つ！

一刀目は躲されるが、二刀目はサイラオーグさんの左手の表面を切り裂いた！

「…ぬんっ!!!」

だがサイラオーグさんは怯む事無く、拳の波動を放った！

身を捻って躲したが……

「……ぐっ」

右肩に痛みが走った……躲しきれなかったか！

一瞬ふら付くが何とか踏み止まると、眼前にはサイラオーグさんが！

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》  
!!!

「ぬおおお!!!」

迫るサイラオーグさんの拳を受け止める！

……この形態でも、ダメージはあるか。

だが、耐えれない訳じゃない！

「っおおー！」

「！」

俺はサイラオーグさんの腕をつかむと、空中へと投げ飛ばした！

宙を舞うサイラオーグさん目掛けて、拳を突き出す！

「っちい!!」

サイラオーグさんは空中で身を無理やり捻ってそれを躲す！

標的を失った一撃は平地の地面を抉った！

「はあー！」

そのまま着地しつつ蹴りを放とうとするサイラオーグさんに、拳を突き出す！

《Maximum Solid Break!!!》  
「おっ!!!」

激突のまま肘のスラスターを吹かすと、サイラオーグさんの体は再び浮き上がる！

そのまま駆け出すと、手元にドラゴンショットを作り出しそのまま、

「こいつは、俺の仲間達の方だっ!!ギガンティック・ドラゴンショット大撃砕の龍波動オツ!!!」

「——ツ!!!?」

殴り飛ばす!!

咄嗟の防御として両手を交差させたサイラオーグさんの体は、後方へ大きく吹っ飛んだ！

平地の地面を幾つもの瓦礫に変えつつ、サイラオーグさんは漸く踏み止まった。

「……凄まじい破壊力と堅牢さを維持しているな。枷をしていないにも関わらず、ここまで追い込まれるとはっ!」

「サイラオーグさんこそ、あつという間に対応してるじゃないですか……!」

サイラオーグさんは息を荒げながら、俺を称賛する。

とは言っても結構ギリギリだけどな、俺も!

『闘気を一か所に集中させ、ダメージを半減させたのか。恐ろしく戦い慣れしてる証拠だな』

お陰で隙も見出せねえよ。

『だがお前の一撃は確実に奴へ突き刺さっている。お前の力は、確かに届いている』

「ありがとよ……！」

改めて構えると、

「キャッ！」

リアスに悲鳴が耳に届いた。

見ればリアスは頭から血を流し、膝をついていた。

獅子の体躯にもダメージの後はあるが、未だに戦意は尽きていない！

「リアスはやらせねえ!!」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!》

《Welsh Critical Fire!!!》

砲口に魔力をチャージして、四肢に向けてぶっ放す！

獅子は大きく跳躍するが、軽やかに着地した。

『神滅具だからな、大したダメージではないだろう』



くっそ、面倒な相手だ……!

それは兎も角として、リアスの傷の状態を見る。

ダメージは少なそうだが、出血が激しいな。

『フェニックスの涙を使った方が良いな。このままでは失血でリタイヤになってしまうぞ』

そうだな。

俺は懐からフェニックスの涙を取り出すと、リアスに中身を振りかけた。

「……リアス、大丈夫か？」

「ええ。……御免なさい、貴方の足を引っ張ってしまつて」

「気にする事はないつて。相手は神滅具で、相当な手練れだからな」

さて、回復手段をこつちも使つちまつたが………

『サイラオーグ様!私を身に纏ってください!あの禁手ならばあなたは……!』

その時、サイラオーグさんに向けて獅子がそう進言した。

アイツ喋れるのか……つて、禁手!?

だが獅子の言葉を受けて、サイラオーグさんは怒号を飛ばした。

「黙れッ!あの力は冥界の危機に関してと時のみに使うと決めたものだ!この男の前で

あれを使って何になる!?俺はこの体のみでこの男と戦うのだ!!」

『…ほお、どうやら奥の手があるようだな』

ドライグがそう言った時、この場は一瞬にして静かになった。

『おい小僧。他人に全力を要求しておいて、自分を出し惜しみるのが、お前の礼儀なのか?』

「お、おいドライグ!」

『そんな礼儀が信じるものなら、お前は相棒と戦う資格はねえ!!』

お前なあ…でも、全力を出し惜しみされてムカつくのは確かに分かる。

「サイラオーグさん。俺は全力を出すまでもない、大した事無い奴だつて事ですか?」

「…っ」

少し意地悪な問いかけだが、ここは遠慮なく言わせてもらおう。

「俺は出し惜しみなんてしてません。今、この場に持てる全てをかけて戦ってます。そんな出し惜しみされた状態で勝ても、俺は全く嬉しくない!だから———見せてくださいよ、あんたの全力!」

一呼吸の間の後、サイラオーグさんは口を開いた。

「…すまなかつた、兵藤一誠。確かに相手に全力を求めておいて、こちらが力を出し惜しみるなど無礼以外の何物でもない。それに、これまで俺に着いてきてくれた眷属達に

も顔向けできないな。俺はなんと愚かだったのだろうか」

「……」

「俺は目の前の男を倒したい！俺は負けるわけにはいかんだ！我が夢のために！我が夢のために！の夢に準じてくれた我が眷属のために！レグルスウウウウウウツツ！！」

『ハッ！！』

ゴウ、とサイラオーグさんの力が更に大きくなった！

ライオンの全身が黄金に輝き、光の奔流と化しサイラオーグさんに向かう！

「今日この場を死戦と断定する！行くぞ、兵藤一誠ツツ！！」

黄金の光を全身に纏ったサイラオーグさんは高らかに叫んだ。

「———我が獅子よ！ネメアの王よ！獅子王と呼ばれた汝よ！我が猛りに応じて、衣と化せ！！」

フィールド全体が震えだすその様は、異空間であるフィールドが耐えられなくなってきたようだった。

サイラオーグさんが眩い閃光に包まれていき、周囲の風景をぶっ飛ばす！

『禁手化ッ!!!』  
バランス・ブレイク

閃光が止み、現れたのは金色に輝く獅子の全身鎧だ。

頭部の兜にはライオンのたてがみと思わせる金毛がなびく。

『獅子王の戦斧』の禁手化——『獅子王の剛皮』!!!お前を殺すつもりで行かせてもらうぞッ!兵藤一誠!!!』  
レグルス・レイ・レザール・レックス

「…おいおい、獅子座の黄金聖闘士かよ」

もろ黄金聖衣じゃねーか!

『ある意味あれが直接攻撃を重視した使い手にとつて究極に近い姿だからな。力の権化である鎧を着込み、それで直接殴る。だから、どうしても果てがあのようになる』

「これと同じようなもんか」

『そうなるな。だが、何も無い状態であれだけの力を有してるなんて、とんでもないだろうなあ』

他人事みたいに言うんじゃねーよ!

「…行くぞ」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》

短く告げられた言葉の後に、黄金のオーラを纏った拳が放たれた。

俺は魔龍進化を発動、それを受け止めるが……

「…ッ!!」

だが、受け止めた籠手に亀裂が走った。

ただのパンチで、これかよ!?

籠手越しだつてのに手が痺れてんだけど!!

俺は負けじとパンチを放つ。が、

ガンッ!!!

「この状態であれば、攻撃特化であるお前の一撃も受け止められる!!」

「なっ…!」

簡単に受け止めやがった!

「——— おおッ!!」

「…ああッ!!!」

俺達は連続で殴り合い、周囲の大地を破壊していく!

ほぼ互角に見えるが、実は押されているのは俺の方だったりする…!

『Maximum Solid Break!!!』

「どおりやあッ!!!」

「グッ……!!」

この一撃でも、サイラオーグさんは体を仰け反らせるだけか……そう思っていた俺に、体勢を整えたサイラオーグさんの蹴りが放たれた！

「フンッ!!」

「…ぐっ、があ!!」

蹴りを躲した俺の腹に、サイラオーグさんの拳が突き刺さった！

その余波により、俺は後方へと大きく後退する！

くっそ、防御に回した魔力がなけりや、危なかつたぜ……………。

「ドライブ、今の俺とサイラオーグさんの差って、どれぐらいだ」

『何も無い状態なら、互角ないしお前の方がやや優勢だが……あの鎧込みだとそれが逆転しちまう。だが未だに立っているから、そう簡単に負ける事はないはずだがな』

それでも、何時かは逆転されかねないって事か……それに、この形態の攻撃すら簡単に止められる。

なら……………。

「ドライブグ、覇龍を使うぞ」

『！』

俺は立ち上がると、ドライブグにそう進言した。

ドライブグ端々無言を貫いていたが、やがてフット呆れたように笑った。

『……その様子だと、言っても聞かないな』

「あんな啖呵切つちまったんだ。なら、俺だつて切つてない手札がある」

それが覇龍だ。

ま、これが俺を勝利に導くジョーカーか、それとも破滅を呼ぶジョーカーか……。

『……分かった。俺も出来る限り怨念を抑える。お前はサイラオーグ・バアルを倒す事だけに集中しろ』

「サンキュー。……ドラゴン、お前にまた迷惑かけちまうけど、ゴメンな」

『……フン。無様に負けられるよりはマシか』

……ありがとな。

俺は魔龍進化を解除し、通常の鎧姿に戻る。

「……通常の鎧に戻した？」

「……」

何かあるのかと身構えるサイラオーグさんを見据え、俺はその理を——紡いだ。

「——我、目覚めるは」



## MAGIC 122 『光輝なる希望』

「——我、目覚めるは」

〈始まったよ〉〈始まってしまっうね〉

「覇の理を神より奪いし二天龍なり——」

〈何時だってそうだった〉〈何時だってそうじゃった〉

「無限を噛い、夢幻を憂う——」

〈世界が求めるのは〉〈世界が否定するのは〉

「我、赤き龍の霸王となりて——」

〈何時だって力でした〉〈何時だって愛でした〉

一言、また一言紡いでいく度、理性が流されそうになるほどの力が溢れてくる。鎧が鋭角的になり、手足も肥大化、更に体内より溢れ出る紫色の魔力に中てられ、鎧に紫の輝が走っていく。

俺は何か理性が残っているのを確認し、最後の一説を紡いだ。

「汝を紅蓮の煉獄と深淵なる絶望へと鎮めよう——  
ジャガート・ファントム・ドライブ  
 幻 覇 龍 ツ!!」

《Juggernaut Phantom Drive!!!》  
 紡ぎ終えた瞬間、周りの景色が一瞬にして爆ぜ、俺を中心にクレーターが出来上がっていた。

極手の時以上のスパークを迸らせ、俺はサイラオーグさんを見据えた。

『な、何とお!!ここで兵藤一誠選手、更なる奥の手を出してきましたアアツ!!…しかし、それにしてもかなり禍々しいです!』

『…あの野郎!!またあの力を……っ!!』

『…あれが、禁じられた力』

溢れ出る紫煙の瘴気を振りまくその姿にアザゼル先生、そしてリアスが言葉を失っていた。  
 「イツセー、貴方っ」

「…リアス、離れてくれ。今のこの状態じゃ、加減が効かない。君まで巻き込まれてリタイヤしちまったら、本末転倒だ。…大丈夫、そんなに時間は掛かせない」

「……」

リアスは僅かに躊躇いを見せたが、何も言わずに少し離れた場所へ転移した。

…ありがとう、リアス。

「…それは確か、デイオドラ・アスタロトとの戦いで見せた力と聞く」

「ええ…文字通りの、最後の切り札って奴です。これで、あんたを倒すっ!!」

「っー」

低く構え、そのまま勢いよくサイラオーグさんへ向けてパンチを放つ!

お互いの拳がぶつかり合い、拮抗状態になるかと思つたが、徐々にサイラオーグさんが押されているのを感じた。

——よし、行ける!

「おおおおおッ!!」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》  
《Juggernaut Solid Break!!!》

鎧の色と形状が変わり、左手全体が赤黒い魔力で覆われると、俺はすぐさま力を爆発

させる！

拮抗していた右腕のスラスターを吹かせて無理やり押し込むと、力を溜め込んだ一撃を撃ち放つ！

『壊せ…』『全てを……』

が、頭に流れ込んできた呪詛の声に動揺し、中心線からズレてしまった。

「——ッ!!!」

それでも何とか命中させると、サイラオグさんはさっきの戦闘以上に大きく後退！命中した箇所を抑え、荒く息を吐いていた。

『サイラオグ様！』

「…問題は無いっ！」

…今ので倒せる訳はないか。

ドライグ、覇龍の持続時間は？

『エルシャとベルザードも協力してくれているお陰で、何とか上手くいっている』

エルシャさんに…ベルザードさんも!?

歴代で最強だった赤龍帝に協力してくれるとは、心強いぜ！

『それも要因の一つだが、単にお前が成長したというのが大きい。だがそれでも数十分

が限界だ。それだけは覚えておけ』  
分かった。

俺はドライグとの会話を打ち切ると、再びサイラオーグさんへ向けて飛び立つ。

《BoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoostBoost!》

「うおおおおおっ!!!」

拳を肥大化させ、そのまま振り下ろす!

だが命中はせず、地面にクレーターを作るだけに終わった。

「はあああああっ!!!」

「…ぐ、う!!!」

俺の背後に回ったサイラオーグさんが蹴りを放つ!

素早く旋回しそれを回し蹴りで往なすが、空かさず今度はストレートパンチを放つてくる!

躲しきれないと判断した俺は、周囲の瓦礫を操作し、自分の体に纏わせる。

その一撃で岩の鎧は砕かれたが、俺は何とかノーダメージで済んだ。

「はっ!」

「!」

俺が両手を翳すと、宙に散った岩が全て鋭利な槍に形成された。

そしてそれを全てサイラオーグさんへ向かわせる！

「むうううん!!!」

サイラオーグさんは冷静に腕を横にスイングし、岩槍を全て破壊した！

——そう、そこまでは想定内だ。

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!》

「っー」

腕を横に難いだ事でがら空きになったサイラオーグさんの体に、魔龍進化で生成された両手の砲撃ユニットを密着させる！

多少のフィードバックは覚悟の上だぜ！

「全弾持つてけええええっ!!!」

《Juggernaut Critical Fire!!!》

「——がああああッ!!!」

チャージした魔力を一気に放射し、サイラオーグさんの体に確実にダメージを与える！

だが、それを受けて仰け反っても尚、サイラオーグさんは踏み止まり、俺に逆襲の一撃を見舞ってきた！

「……………おお!!」

「がはっ!!」

想定外の一撃に防御が遅れ、大きく地面を転がる!

何とか痛みを堪えつつ立ち上がる中で、サイラオーグさんも片膝を付いていた。

『す、凄まじいラッシュの応酬です!兵藤一誠選手が一撃を与えれば、サイラオーグ選手がそれを圧倒的なパワーで返す!!まさに一進一退の攻防ツ!!』

『だがイツセーのあの力は何時までも持つものじゃない!アイツも、それは分かっている筈だ……………!!』

『だからこそ、サイラオーグ選手の余力を自分を律せる時まで全力で削ぎ、後を主に託すという手筈かもしれません』

……まあ、確かにそれもアリっちゃアリだが、出来るなら倒せるに越した事はない。

『先の一撃を耐えたのも、闘気で防御したからだろう。だがあれは本人の意思ではない、恐らくはあの男の戦闘意欲が、肉体にそうさせたんだらうな』

とんでもない人だぜ、全く……………!

藪を突いたら獅子が出てきた、つて所だ。

『壊せ……………』『破壊を……………!』『絶望を……………!!』

……うっ！

さつき以上に大きくなった呪詛の声に、思わず頭を抑える。

『…やはり、完全に抑えるのは無理があるか。相棒、もう時間がないぞ』

…分かった。

俺は立ち上がると、既に立ち上がっていたサイラオーグさんと向き合う。

「…どうやら、限界が近いようだな」

「どうします？このまま俺の限界が来るのを待ちますか？」

「そんな無粋な真似はしない。お前の限界の時まで、俺は戦わせてもらう」

「…俺も、自分の限界まで、戦いたいと思います………サイラオーグさん、行きます!!」

《Wizard Promotion!! Hurricane Dragon!!!!》

赤黒い旋風を纏い、シャープな姿になる。

吹き抜ける微力な風をスラストーに取り込み、一気に駆け出す!!

《Juggernaut Raid Acceleration!!!!》

「疾風怒涛…駆け抜けるぜッ!!」

鎧が剣山状に変異し、各部のスラストーを爆発させる!

サイラオーグさんが突き出した拳を躲し、幾重にも切り裂く!

「…ッ!何という素早さ!目で追えんとはっ!!」



「まだまだッ！」

今度は雷を纏い、高速で強襲を掛ける！

肉薄寸前で更に移動、鋭利な装甲をを保った右腕で背中を斬り付ける！

「ぬう……!!」

「よしっ、行ける——」

が、寸前で力が抜け、鎧も通常のものへと戻ってしまった。

「な、何でだよ、ドライグ!?!」

『相棒。これ以上は、限界だ……!お前の体が持たん!』

「それでも——」

それが、命取りだった。

「むんっ!!!!」

「——!!!!  
ツ!!」

殆ど無防備の状態で、拳を食らってしまい、俺は吹き飛んでしまった……!!!!

『相棒、おい!相棒!!!』

ドライグの声が薄っすらと聞こえる中、俺の意識は闇に堕ちていった。

――

「……」は

意識が覚めた瞬間、俺の視界は真つ暗な場所にいた。

ドライグは……いないか。

『…兵藤一誠』

「ん……？」

俺を呼ぶ声が聞こえて振り返ると、そこにはフードを被った集団が。

「……先輩方」

そう、歴代の赤龍帝達だ。

その中の一人が語り掛ける。

『あの男を倒す為には、完全な覇を唱えるのだ…君は、理性を気にしてまだ完全な力を発揮出来てはいない』

「俺にリアス諸共全てを破壊しろってのか…！」

『だが君は勝利の為に覇を求めた……』

痛い所突いてきやがるな……。

思わず口を噤んだ俺に、次々と先輩方が口を開く。

『もう一度、唱えるのだ…』

『貴方の絶望の魔力があれば、完全な勝利を得れるわ…』

『そして全てを、破壊するのだ…』

その言葉のどれもが、深い絶望に包まれていた。

絶望に、ずっと囚われ続けている……。

「いざ迷ったら、君自身の信念を信じなさい」

「…確かに」

以前エルシャさんに言われた事がフツと脳裏を過り、思わず小さく笑った。

「俺は一度絶望した。なら、この歴代の怨念が生み出した力を使うのは当然なのかもしれない。結局逃げても、俺は今こうして向き合ってるしな」

『ならいば…』

「——だから」

俺は、ザっと全体を見渡す。

俺の信念は……

「だから俺は、あんた達が生み出し、受け継いできたこの力を救いたい。そして、あんた達を。それが、俺なりの向き合い方だ」

『我々を……?』

「覇龍を使つて、体験したから分かる。この力は……違う絶望を呼び寄せる。絶望が絶望を呼び、永遠に終わらない」

悲しみや怨嗟、更なる戦火も呼び起こす。

それは……

「希望の魔法使いが止めなきゃならない。いや、止めたいんだ。こんな絶望の連鎖を」

『そんな綺麗事を!』

「ああ、そうだな。……でもな、綺麗事だから、現実にしたらいんだろ!そして俺がやるのは破壊じゃない、希望を守る事だ!これ以上、大切な人を悲しませない為に、そして——

——あんた達をこれ以上悲しませたくないから、俺は覇を越える!」

『越える……!?!そんな事が出来る訳?』

「出来るさ」

動揺する先輩から、俺は目を背けない。

何が何でも、この絶望から逃げない！

「俺一人じゃ確かに到達不可能だ。でも、俺にはドライグとドラゴン、それに、先輩達もいる。皆がここまで繋いできた力を、絶望から救う」

『……』

「そして、その力を次代へ繋ぐ！……だから、恨みのイタチごっこは、もう終わりにしよう」

辺りの闇が、晴れていく——全員の目に、僅かな光が宿った。

「約束する。俺があんた達の、希望になる。だから、絶望の連鎖から抜け出そう」

『兵藤、一誠……』

「……まさか、本当に自分の信念通りに動くなんてね」

今度は誰だ……と思つたら、それはエルシャさんだった。

「エルシャさん」

「答えは初めから君の中にあつたのよ。でも、君は一度暴走したから、無意識にその答えから遠ざかつたって訳♪……流石、希望の赤龍帝だわ」

エルシャさんは俺を抱きしめる。

まるで、礼を伝えるかのように。

「エルシャ、良いか？」

「…ベルザードさん」

エルシャさんは渋々抱擁を解いた。

そして目の前の偉丈夫を見据える。

ベルザードさん。

エルシャさんと並んで歴代で最強の赤龍帝の男性だ。

「兵藤一誠。君は本当に、規格外な赤龍帝だ。ドライグですら手に負えなかった思念すら救ってみせた」

「…俺じゃなくても、きっと出来ましたよ」

「いや、君だからこそ出来たんだよ。絶望を救い、それでも自分の絶望に屈せず、立ち上がってきた君にしか、成しえない事だ」

ベルザードさんの言葉に、俺は胸のつつかえが取れていくのを感じた。  
隣に立ったエルシャさんは、優しく微笑んでいた。

「行きなさい、イツセー君。ドライグが待っているわ」

「ああ。行け——希望の赤龍帝！」

俺は無言で、前に進んだ。

答えはいらないと思つたから。

――

「…ドライブ」

気付けば、俺の目に映る景色はバトルフィールドの空間に変わっていた。

『よお相棒……随分遅い目覚めだな』

「試合は…」

『…まだ終わってねえぞ』

そう言われて、俺に耳に審判や観客の喧騒が聞こえてきた。

『ウィザードラゴン、立ち上がりませんっ!!このまま、終わってしまうのでしょうかアーーーーッ!!?』

『ウィザードラゴン!!』

『立ってー!!』

『頑張れーっ!!!』

子供達の声援も、至極鮮明に響いてきた。

「ドライブ……」

『どうやら、何かに至ったらしいな』

「ああ……今、送るよ」

俺は自分の考えをドライブに伝える。

果たしてドライブの反応は……

『……ハハッ！おいおい、こんなぶっ飛んだもんに目覚めたのか!! やっぱりお前は面白いぜー!』

「……笑うのは、後にしろよな」

『すまんすまん。——さあ、行こうか』

俺はゆっくりと、その場から立ち上がった。

「イツセー!?!」

「兵藤一誠……立ち上がるか!」

リアスと、サイラオーグさんのそれぞれ驚愕の表情が突き刺さる。

俺は籠手を出すと、大きく深呼吸をする。



「……………ドライグ！」

『応！』

そして俺達は、共に言葉を紡いだ。

『——我ら、目覚めるは!!』

籠手から眩い光が放たれる。

それは赤い色ではなく、透き通った水色。

『『覇の理を超越せし赤龍帝なり!!』』

バトルフィールド全体を照らすその輝きは、一説紡ぐごとに大きくなっていく！

『赤き不滅の力と！』「決して折れぬ信念抱き！」

『『天道を征く!!』』

五感がクリアになっていく。

でも、不安はない。

新しい力が、体の芯まで満ち満ちていく！

『我ら、古からの力と信念受け継ぎし龍の戦士となりて!!!』

俺の心もクリアになり——今、一つに!!

『汝の絶望を払い、永久の希望となる事を誓おう——!!!』

《infinity Hope Dragon Evolution Drive》  
紡ぎ終えた瞬間、ダイヤモンド状のドラッグが飛び立ち、俺へと纏わりつく！  
まるで原石のように尖った宝石に包まれ、それを振り払う!!  
!!!!!!!

極手の時のような鋭角な鎧、背部に折り畳まれた四対八枚の翼——そして鎧の色は、透き通った水色。

『な、な、何とおお!! ウィザードラゴンの鎧が、先程とは全く違う色です!! 赤ではない、美しい水色ですツ!! これは一体何事でしょうかアーーーー!!?』

「イツセー、なの……?」

「…進化したというのか?」

『——— さあ、ショータイムだぜ!』

MAGIC123『The Finale Of The  
e Finale』

「——さあ、ショータイムだぜ！」

決め台詞を言った俺達の言葉は、この場に自然と大きく響いた……………って、  
「ん？あれ…何か、俺の言葉が……………」

ここで俺は、とある違和感に気付いた。

さっきの決め台詞、って言うか、今もそうだったけど、

「——俺の声にドライグの声音が被ってる!?!」

何だこれ、一体どうなってるんだ!?

一人でアワアワしていると、急に俺の体の狼狽えが収まった。

「だからお前がこうなる事を望んだんだよ、相棒」

「ど、ドライグ!?!」

そう俺の口から紡がれたのは、ドライグの声だった!

その声には、俺の声音が被っていた……!

『良いか相棒。今の状況を分かりやすく説明してやる。今——俺とお前は一つになっっている』

………は

『はああああっ!!?』

どういう事だそれ!?

俺そんなの望んでない!

『厳密に言えば、俺の魂とお前の魂が同化してる。もっと分かりやすく言えば、二人で一人の探偵みたいなものだ』

『んなもん分かかってるわ! ふざけんなよおい!! 何でお前と一つにならなきやいけねーんだよ!?!』

『んなもんこっちの台詞だボケエ!! お前があああの唄俺の脳内に送ってきたから紡いでみたらこんな事になってた俺の身になってみやがれ!! 訴訟もんだぞ!!!』

『ああ!?!』

『おおん!?!』

試合そっちのけで（脳内で）睨み合う俺達だったが、今が試合中だと言うのを思い出して、サイラオーグさんに向き直る。

「…事情は分らんが、新しい力に目覚めたと言う事で、良いのか？」

『えーつと、はい、そういう事っす』

困惑させちゃってすみません！

まあぶつちやけ俺も事情を呑み込めてないんだけどね！

『…こんなんでもやり辛いとは思いますが、試合再開と行きましようか』

「ああ。新しい力、存分に見せてくれ！」

『はい！』

そう言い、改めて構える『なあ相棒』…つて、

『何だよドライブ？』

『この形態の名前って何にすんだ？』

……

『そんなもん作者が書いてる時に考えるから気になくていいだろ!!』

『ハイここで衝撃の真実！なんとこの作品で登場する用語や名称の大半はその場のノリと勢いで考えられているのでえす!!』

余計な事言わなくていい!!

兎も角行くぞ!

三度構えた時、背部で折り畳まれていた翼が広がり、魔力が噴射口から爆発!

覇龍の時以上のスピードを発揮し、サイラオーグさんに拳をぶつける!

「ぬうつ!!」

だがサイラオーグさんはただではやられず、クロスカウンターの要領で俺に拳を放っていた……が、

「!?!」

俺の鎧に、殆どダメージはない!

いや、微々たる損傷こそあるが、それすらも直ぐに修復されていく!

『——————!!!!』

今度は蹴りを放つが、サイラオーグさんは持ち直し、足を掴んで俺を宙へ投げ飛ばす!

だが俺は宙で態勢を整えると、その体制からドラゴンショットを生成。

「食らえ! 爆裂の龍波動!!」

「はっ!」

サイラオーグさんは拳で消すような真似はせずにそれを躲す。

…やはり一度見られているから、容易に手は出さないか。

だが、俺の攻撃方法はこれだけじゃない！

「『いつけええええ!!』」

俺が吠えると、翼から八つの発光体が分離し、俺の周囲に留まる。

そしてそれらは形を変え、全ての発光体は——

「ッ、これはっ!?何と兵藤一誠選手の翼から分離した光が、小型のドラゴンに変化しましたア!!」

そう、小さなドラゴンに変化したのだ。

因みにこれ等のドラゴンは全てドライグを模している。

そう考えると少し気持ち悪い……ゲフンゲフン。

『俺が制御してやる。貴様はあの男とぶつかる事だけ考えろ』

サンキュー、ドラゴン！

「『行け、ドラグーンツ!!』」

暫定的に決めた名称ではあるが、俺は八体のドラゴンにそう命令すると、一斉にサイ



ラオーグさんへ向けて飛び出す！

「面白い妙技だな！どの様なものか、この体で体感させてもらおうっ!!」

サイラオーグさんは手始めに一番近くにいたドラゴンへ向けて拳を放つ！

ちびドライグはそれを察知すると、ちよこまか飛び回りつつ魔力の砲撃を放つ！

「はぁー！ー！ツツ!!」

迎撃しようとしたサイラオーグさんだったが、その一撃を撃ち消すどころか、逆に大きく吹っ飛ばされていく！

体勢を立て直そうとするサイラオーグさんだが、そうはさせまいとちびドライグたちは次々と魔力砲を放つ！

それぞれ爆炎を伴ったり、雷を迸らせたり、かと思えば魔力砲が幾重ものレーザー線になって襲い掛かったりと、サイラオーグさんを確実に追い詰めていく！

「ぐうおおお!!」

『どうした事でしようかツツ!?サイラオーグ選手、防戦一方だアア!!』

『あのサイラオーグをたじろがせるほどの一撃なのか…!!』

実況は勿論、アザゼル先生ですら驚愕冷めやらぬって感じだな。

その疑問には、ドライグが答えてくれた……俺の口を使って。

『「そいつらには相棒の実力がそっくりそのまま反映されている!」』



全砲門から一斉掃射された魔力の砲撃はフィールド全体を大きく揺るがし、それでいてそれら全てがサイラオーグさんへ寸分の狂いもなく迫っていく!

「凄まじい弾幕……だが、ただでは落とされんぞッ!!」

サイラオーグさんは圧倒されつつも笑みを浮かべ、その身一つで魔力砲の弾幕へと向かっていく!

一撃一撃が必殺級に威力込めたつてのに……被弾しつつもサイラオーグさんは拳で薙ぎ払っていく!

「ぬおおおおっ!!……普通であれば落とされる事必至の一撃!!だがッ!!!」

左手に闘気を纏わせ、横薙ぎにフルスイング!

此方にも伝わる拳圧の波動を感じ取っていると、弾幕は綺麗さっぱり落とされていた……いや、今更驚きはしない。

「『あなたならそれぐらいやってくれると信じていたぜ!!』」

「さあどうした!? お前のショーも、まだまだこんな物ではあるまい!」

「『当然ッ! 魔龍進化!!』」

《Wizard Promotion!! Hurricane Dragon!!!!!!》

荒れ狂う暴風を纏い、今度はシャープなスタイルに。

《Infinity Boost Charge up!!》

《B o o s t

《Infinity Raid Acceleration

『光を超えるゼツ!!!』

!?!』

バチバチと雷をスパークさせ、足を踏み出す——と同時に、俺の目には虚を突かれた表情のサイラオグさんの目の前にいた。

『おおおおお!!!』

「ガッ!!!」

パワーが低下している、そう思ったのかはわからないけど、防御せずに堪えて迎撃しようと思っていたサイラオグさんの体は、大きく揺らぐ!

『生憎だけど、さっきまでとは段違いだぜ!!』

「——フッ!」

確かに普通の魔龍進化よりはパワーアップはしているけど、やはりそこまでのダメージは見込めないか。

サイラオグさんは拳からの波動を放とうとするが、俺はその前に移動…一瞬でサイラオグさんの背後を取る!

「——速いなッ！」

『！』

サイラオグさんは振りほどけないと判断した様で、今度は体から闘気を放出してきた！

僅かに体勢が崩れた俺に反応し、全力の一撃をぶちかました！

『——っ！！』

ズザザツ、と地面を滑るようにして転がる俺だが、何とか無理やり勢いを殺し、立ち上がる。

鎧は何時の間やら修復されていた。

「…修復のスピードが上がっているな。それも赤龍帝ドライグと一体化した影響か？」

『これは相棒の信念が形になっている』

それに答えたのは、ドライグだった。

「？」

『ああ、兵藤一誠じゃなくてドラゴンの方の赤龍帝』

「あ、ああ。丁寧にどうも」

『おう…最後の希望ってのは、どんな事があっても挫けたりはしない。それがたとえ、自分に向けられた絶望であろうと、自分自身が生み出した絶望であろうと……相棒が諦

めない限り、鎧は魔力の有無に関わらず再生される。無限の名の通りにな」  
 へえ、そうなのか。

知らなかった……って言うか、口にされると恥ずかしいな。

でも、それは俺自身そのものなんだ。

「…俺はどんな事があっても絶望したりはしない。そして、どんな絶望からも仲間を、主を、大切な人たちを守り抜く!!その絶望を、打ち砕く!!!」

《Wizard Promotion!! Land Dragon》

音声が終わると、籠手が大きく肥大化する。

グツと構えると、力強い音声が流れる!

《Infinity Boost Charge up!!》

《B o o s t》

「おい相棒。発現したばかりの力だから、安定していないのも大きい。後数分でケリを付けろよ」

「…応!」

強化の影響で、周囲にソニックブームが生まれるほどの力が籠められる!

対するサイラオーグさんも、力強く拳を構える。

「『……行きますよ』」

「……来いっ!!」

勢い良く踏み込んで、俺達は同時に拳を突き出した!

ドゴオンツ  
!!!!!!

「『……ッ!!』」

力強い衝撃に、お互い殴られた格好のまま動けなくなる。

だがそれも束の間で、衝撃から覚めると、拳のラツシュをお互いに見舞う!!

「『うおおおおおおおおおおおおお!!』」

殴り、殴られ、拮抗しあう打撃の世界で、たぐい!!心不乱に俺とサイラオーグさんは撃

ち合う!!

俺が殴れば、サイラオーグさんの拳が突き刺さり、俺の蹴りがクリーンヒットすれば、サイラオーグさんの回し蹴りが鎧に食い込む!

その余波で周囲の瓦礫が浮かんでは塵と帰る!





けた衝撃が辺りを破壊する！

その中心に立っていたままのサイラオーグさんは……静かに倒れた！

『サイラオーグ選手、ダウン……ッ!!!兵藤一誠選手の一撃が、ここにきて若手悪魔最強の獅子王へと深く突き刺さったア……ッ!!!これは、勝負あつたかつ!!!』

実況がそう捲し立て、会場が沸き立つ中、サイラオーグさんはピクリとも動かない。

『中心線を確実に通したんだ。それに、今までの蓄積したダメージも加味すると、動けなくとも不思議はあるまい』

…本当にそうかな。

『何?』

何となくなんだけど、この人はこれだけでは終わらない…そう思っちゃおう。

『その口ぶりだと、この男との戦いを未だに望んでいるかのようだな』

…そうかもな。

そう思っていた俺の目の目に、女性らしき影がゆらりと現れた。

その人は、まるでサイラオーグさんに語り掛けるように、傍らに立っていた。

『俺や相棒以外には見えていないようだな』

お前にも見えるのか。

『ああ。恐らくお前と一つになっているからだろう——おい、相棒』

『ん……？』

ドライグの言葉に、改めて前方を見ると、

『——なさい』

女性は静かに、だけど確かな口調で言葉を発した。

そして——驚くべき光景がもう一つ。

サイラオーグさんが、僅かに体を動かし、そして………立ち上がったのだ。

その顔はボロボロで、目も虚ろだが、瞳の奥には強い光を感じた。

『サイラオーグ』

あの人は、まさか——

『サイラオーグ・バアルの、母親か』

ドライグが言ったとおり、それはサイラオーグさんのお母さんだった。

顔がハッキリと浮かんだ時、それはアンダーワールドで見たのと全く同じだと気付いた。

『まさか、眠った状態で思念を飛ばしたというのか?』

ドライグが俄かには信じられない様子で呟いた。

だけど、その声は確かに聞こえる——。

『立ちなさい、立ちなさい! サイラオーグ!!』

そしてそれは、息子を叱咤激励する厳しいものだった。

『貴方は、誰よりも強くなると約束したでしょう?』

聞こえてはいない……でもその声が紡がれる度、サイラオーグさんの瞳の奥の光が強くなっていく。

『夢を叶えなさい! 貴方の望む世界を、冥界の未来の為に、自分が味わったものを後世に残さない為に、その為に貴方は拳を握り締めたのでしよう!!……たとえ生まれがどうであろうと結果的に素晴らしい能力を持っていれば、誰もが相応の位置につける世界——それが貴方の望む世界の筈です! これから生まれてくるであろう冥界の子供達が悲しい思いを味わわないで済む世界つ! それを作るのでしよう!?!』

サイラオーグさんのお母さんの姿が徐々に消えていく。

でも、最後の一瞬には微笑みが浮かんでいた。



ドライグの声も、震えていた。

戦慄だけじゃない、そこには高揚すらあった。

そしてそれは、俺も同じであった。

「兵藤一誠ッ!!俺は負けんッ!!俺には、叶えねばならないものがあるのだッ!!!」

サイラオーグさんの闘気が、フィールドを揺らしていく。

黄金のオーラが右手に集約し、それは巨大な獅子を形作り、サイラオーグさんを覆った。

ガオオオオオオオオオオオツ  
!!!!

獅子が咆哮を上げ、俺達を睨み付ける。

「俺達も、負けるつもりはねえッ!!!!」

俺の体から赤いオーラが溢れ、それは左手へと集約する。

オーラは赤いドラゴン——ドライグの姿となり、負けじと吠える!



『……俺も、俺達もツ!!!』

今だって聞こえる——皆の声が。

『ウイザードラゴンツ!!!』

『頑張って——!!!』

『イツセーくううんっ!!!』

『イツセーエ!!負けんじゃねーぞオツ!!!!』

『……イツセー様、頑張ってっ!』

『イツセーツ!!!』

子供達の、イリナの、吼介の、グレイファイアの、リアスの声が——

いや、それだけじゃない……ここまで、バトンを、希望を繋いでくれた

『イツセーさん!』

『イツセー!』

『イツセー君!』

『イツセーツ!』

『先輩……!』

『イツセー先輩!』

『イツセーくん!!』

アーシア、朱乃さん、木場、ゼノヴィア、小猫ちゃん、ギヤスパー、ロスヴァイセさ



ん…仲間たちの思いがッ!!!

それを感じた瞬間、鎧から眩い輝きが溢れ出る。  
限界寸前だというのに、その瞬間だけ、体が軽くなった——様な気がした。

「——負けられねえんだよおおおおつ!!!!!!」

ドライグのオーラが、獅子を飲み込んでいく。!!!!!!

サイラオーグさんの体が、徐々に追い込まれていく!

「『爆発しろ!』  
ドラゴニック・フィスト 龍 拳 オオオオオオオツ!!!!!!」

!!!!!!

——力の均衡が、破られた。

ドラゴンが獅子を噛み砕き、無防備なサイラオーグさんに俺の拳が突き刺さった!!!  
サイラオーグさんの体が揺らぐ、俺はその横を、倒れるように駆け抜けた。

「まだだ……まだ、まだだつ……!!!!!!」

だがそれでもサイラオーグさんは、倒れなかった。

その瞳には、未だ戦意が燃え盛っている。

『相棒、これ以上はもう——』

『……うるせえ!!サイラオーグさんが戦えるなら、俺だって、まだ……!!』

ドライグの制止も、絶え間なく響く激痛も無視して、サイラオーグさんを迎え撃とうとする。

だが……

『……赤龍帝、もう……良い……』

サイラオーグさんの胸にある獅子が、レグルスが声を発した。

『……我が主は……サイラオーグ様は……』

『……まさかっ』

獅子は目の部分から、涙を溢れさせていた。

ドライグは、獅子の言いたい事を察したようだった。

俺はサイラオーグさんに改めて視線を移すと、サイラオーグさんは拳を突き出し、俺へと向かおうとしたまま——気を失っていた。

その顔は……笑っていた。

そして気絶しても尚、その瞳には、戦意の光が灯り続けていた。

『サイラオーグ様は……少し前から、意識を失っていた……』

『『それって……』』

この人は、気絶しても、意地だけで……

『それでも……嬉しそうに……ただ嬉しそうに……向かっていった……ただ真っ直ぐに……  
……貴方との、夢を賭けた一騎打ちを、真に楽しんで……』

獅子は、静かに慟哭した。

『『意識を失っても尚、戦おうと意地だけで体を突き動かした……サイラオーグ・バアルよ。俺は、俺達は、お前との一戦を、決して忘れない。お前は誇りある王であった』』

ドライグは、赤き龍は、気を失った獅子王に最大級の賛辞を贈った。

俺は自然と深く頭を下げていた。

そしてそのボロボロの肉体を、抱きしめた。

込み上げてくる思いで声を震わせながら、それでも叫んだ。

『『——ありがとう……ありがとう、ごさいましたあああ!!!!!!』』

『サイラオーグ・バアル選手、投了。リタイヤにより、ゲーム終了です。リアス・グレモリーチームの勝利です!!』

最後のアナウンスと共に、会場から惜しみのない拍手と称賛の声が鳴り響いた。

## MAGIC124 『終わりの後で』

「……………(ハハ)は」

目が覚めると、視界に入ってきたのは知らない天井だった。

周囲を見渡してみると、病室っぽい作りの部屋にいるのが分かった。

って言うか包帯まみれになってるし。

怪我は兎も角、体力が全くない……手に力すら入らねえ。

「起きたか」

「…サイラオーグさん？」

聞き覚えのある声と気配に横を見れば、そこにいたのは同じく包帯姿のサイラオーグ

さんだった。

「…ってか、隣のベッドだったんすね」

「偶然にもな。病室なら余っているだろうに。サーゼクス様かアザゼル総督か、体力が

回復するまでの話し相手としてマッチングしてくれたのかもしれない」

「…もう流石に戦う気はないっすよ」

俺がげんなりして言うのと、サイラオーグさんは「そうだな」と言つて苦笑いを見せると、しみじみと呟いた。

「…負けたか」

自分の敗北を再確認するような呟きだが、そこに悲壮感は一切感じられなかった。

「……悪くない。こんなにも充実した負けは初めてかもしれない。だが、最後の一瞬は残念ながら覚えていない。気付いたらここだった」

「俺もその辺が曖昧なんです……でも」

「最高の殴り合いだった」

お互いに言いたい事が合致していたのに気付き、二人とも吹き出してしまった。

『何だ、あんなに殴り合っていたとは思えんほどの仲の良さだな』

「ドライブグ」

『あー、魂がないってのに、何だかあちこちが痛むぜ。ま、お前と一つになった影響だろうな』

ドライブグの声には疲労の色が滲み出ていた。

擬人化していたら、多分首をゴキゴキ鳴らしていたんだろうなあ…。

「何か、ゴメンな」

『気にすんな。あんなに良い一撃、受けなきゃ逆に損だ。サイラオーグ・バアル、お前の

強さ、確とこの魂に刻ませてもらった』

「伝説の天龍にそう言っていただけなら、これ以上ない誉れだ……そう言えばなんだが」

『『?』』

サイラオーグさんは首を捻りながら、こんな事を言い出した。

「あの時の最後の殴り合い、覚えていないのは確かだ……だがあの時、俺の精神とレグルスの心が重なったような気がしていた。臍気だが、そんな記憶が薄らと残っている」

『……そいつは気のせいじゃねえよ』

「え?」

『あの時、確かにお前とあのネメアの大獅子は一つになっていた。相棒が歴代の思念を絶望から救って至った境地に、あの土壇場で一步だけとは言え踏み込めていた。あれは恐らくよほどお互いを信頼していなければ成しえない境地だ。お前が奴を信じ、そして奴もお前を主として慕っている……あの時の慟哭が、その証拠だ』

慟哭……確かに、あの時のレグルスは、泣いていた。

何か思い当たる節があったのか、サイラオーグさんは感慨深げに言った。

「……そう、か。あれも夢ではなかったのだな」

『無自覚とはいえ、記憶はしていたか。大した男だ』

ドライブグが呆れたように言った時、入室してくる人がいた。

「失礼するよ」

紅髪の男性——魔王サーゼクス様だ。

「どもつす」

「やあ、イツセー君に、サイラオーグ。本当に良い試合だった。私もそう強く思うし、上役も全員満足していたよ。二人の将来が実に楽しみになる一戦だった」

サーゼクス様は俺達にそう激励の言葉を贈ると、近くの椅子に腰を下ろした。

「さて、イツセー君にお話があるんだ。サイラオーグ、暫し彼と話しても良いだろうか？」

「俺は構いません……席を外した方が？」

「いや、そのままで構わないよ。君もそこで聞いておいて損はないかもしれないからね」

サーゼクス様は、真面目な顔でこんな事を仰った。

「イツセー君、君に昇格の話があるんだ」

……………え

言われた事を一瞬理解できず、ポルナレフ状態になってしまう。

だけどそんな俺に構わず、サーゼクス様は話を続けた。



「正確に言えば、君と木場君に朱乃君だがね。ここまで君たちはテロリストの攻撃を防いでくれた。三大勢力の会談テロ、旧魔王派のテロ、異形となった悪神ロキですら退けた。そして先の京都での一件と今回の見事な試合…加えて、イツセー君はこれまでウィザードとして人知れず人間界の守護や襲われていた悪魔を助けていた事で、完全に決定がされたんだ。——近いうちに君達三人は階級が上がるだろう。おめでとう。これは異例であり、昨今では稀な昇格だ。」

そう笑顔で言うサーゼクス様だけど……………

「……………」

俺は未だに混乱状態から抜け出せないでいた。

そんな俺の左手が、勝手に動いて俺の頬を殴りつけた！

『左ストレートオ！』

「いつてえ!!…………おいドライブ!何しやがる!？」

『おー、一体化した影響でこれまで以上にお前の肉体に干渉できるようになったぞ。こりゃ便利だな』

「…もうちょい穏便な目の覚まし方とかあつたらろ」

『この方がらしいだろ?』

厭味つたらしい良い声でそう言うドライグだが、すぐにその声音は真面目なものになった。

『だが性急すぎやしないか？確かに今の相棒の実力は上級悪魔クラスだが…まだ未熟な部分も多々あるんだぞ。本気なのか？』

「ああ。それだけの事を、彼らは示してくれたからね。確かにまだ至らない部分はあるが、将来を見込んだ上でと言う事だ」

『成程な』

マジで本気らしいサーゼクス様に納得がいった様子のドライグ……俺はまだ納得出来てねえ!!

「え、でも俺は…」

「受ける、兵藤一誠」

そんな俺にサイラオーグさんは、こう言つてのけた。

「お前はそれだけの事をやってきたのだからな。出自など関係ない。お前は——冥界の英雄であり、希望になるべき男だ」

「や、随分スケールデカすぎじゃないっすか？幾ら何でも……」

『安心しろ相棒。統治者としちやまだまだド三流だが、戦闘面ならお前は文句なしだ。いや、もしかしたら中級通り越して上級悪魔に昇格出来んじゃね？』

いや、そんな他人事みたいに言うなよ!!

今一釈然としない俺を見てサーゼクス様は苦笑いされていた。

「詳細は今後改めてそちらに通知しよう。異例ではあるが、キチンとした儀礼を済まして昇格といきたいのですね。会場の設置や承認すべき事柄もこれから決めていかなければいけないのだよ。ては、これで失礼させてもらおうよ」

それだけ言い残して、魔王様は退室していった。

「昇格、か……」

俺はベッドに体を倒して、ふと呟いた。

「まだ実感が湧かないのか?」

「え、ええ……いきなりすぎて」

まあ昇格したくないと言えば嘘になる。

でもそう言うのはもつと後になってからだと思ってた。

「……ま、まだ昇格できると決まった訳じゃねえし、良いか」

「…随分消極的だな。赤龍帝ドライブのやコリアナの言った通りお前は上級悪魔でも十分通じる實力を持っているのだぞ?」

「だって、先の事は分かんないじゃないっすか。だから今は…」

俺は傍にあった果物籠から、バナナを取り出す。

そしてサイラオグさんには、リンゴを手渡した。

「腹ごしらえっす」

「……ハハツ、そうだな」

二人して笑った後、仲良く果物を食べるのであった。

「兵藤一誠。リンゴにマヨネーズと言う調味料は合うのだろうか」

「絶対合わないっすよ!？」

—————

アザゼル君視点

「何故に君付けだよ!？」

……と、のっけから地の文に対して突っ込み込んだが、俺はゲームの解説が終わった後、俺は要人用に観戦室の方に足を向けていた。

ゲーム中は解説の仕事で席を外せなかったが、配下からの連絡で「例の者」が要人用

の観戦室に姿を現したと一報を受けていた。

要人用の観戦室は個室になっていゝるんだが、今回俺はある要人の部屋へと進んでいゝ……が、俺が邪魔する前にその「例の者」が部屋から護衛と共に出てきた。

五分刈りの頭に、丸レンズのサングラスとアロハシャツで身を固め、そんなファンキーな姿であるにもかかわらず、首からは数珠を下げていた。

容認にあるまじき格好だが……この野郎が「例の者」だ。

「これはこれは帝釈天殿、ゲームは如何でしたかな？」

「お？ よー、正義の墮天使さん！ イカした試合だったZE！ 現魔王派と癒着してる墮天使さんにとっちゃ『教え子』つてのが勝つて良かったんだろオ？ グレモリーチーム、ありや常軌を逸したメンツが集いすぎだ。並のチームじゃ相手に出来んだろ」

…相変わらず皮肉しか言わねーなこの野郎は！

全勢力のトップ陣でも最高クラスの実力者。天帝。戦いの神『阿修羅』に勝つた武神……インドの神、帝釈天！

「訊きたい事がある」

「HHHHH！ ンだよ、正義の墮天使さん！ 俺様でよかつたらなんぼでも答えてやンゼ？」

「…神滅具所有者の事を、曹操の事を俺達よりも先に知っていたな？」

帝釈天の配下でもある初代孫悟空が、曹操を知っていた事を俺はグレイフィアやイツセーから報告を受けていた。

そう、此奴は——曹操の事を幼い頃から知っていた。

帝釈天は俺の疑問に、意味深に笑みを深めながら軽々と云つてのけた。

「だとしたら、どうすんよ？俺様がアイツをガキンちよの頃から知っていたとして何が不満だ？報告しなかった事か？……それとも、通じていた事か？」

……言つてくれたな、この野郎っ!!

「まさかテメエからバラすとはな……インドラッ!!」

俺は怒気を隠さずにその名を呼ぶが、帝釈天は不敵に笑うだけ。

「HHHHHH……そっちの名で呼ぶなんて粹な事してくれるじゃねーの。そんな怖い顔すんなや、アザ坊。それならよお、冥府神ハーデスのやつてる事なんざ、勢力図を塗り替えるレベルだぜ？」

此奴、ハーデスの事まで……どこまで「通じて」やがる!?

「二つ言つとくぜ、若造。どこの勢力も表面は平和、講和なんてもんを謳つてやがるがな、腹の中じゃあ『他の神話なんて滅べ、クソが!』って思つてんだよ。オーデインのジジイやゼウスのクソオヤジが例外的に甘々なだけだぜ。信じる神が少なきや、人間ど

もの意思を統一できて万々歳だからな！ だいたい、てめえらの神話に攻め込まれて、人間の伝説レベルにまで落とされた神々がどれくらいいると思う？ —— 神つてのは人間以上に恨み辛みに正直なんだぜ？」

…そんな事は百も承知だ。

どこの神々も建前で協力体勢を呑んでも、腹の中では全く違うことを考えている。

いや、恐らく隙あらばなんて事を思っけていても当然だろう。

だがな、今はその建前が大事な時期なんだよ！

勢力図が変われば人間界は簡単に滅ぶんだからな……！

「ま、表向きは協力してやんよ。確かにオーフィス達は邪魔だからな」

オーフィス「達」か……そこに曹操は入ってるのか？

「あ。そーだ。あの魔法龍帝の坊主に言っといてくれ。最高だったぜってな。だがもし、世界の脅威になったら、俺が魂ごと消滅させてやるってよ。『天』を称するのは俺達だけで十分だ」

帝釈天はそう言っけて去ろうとするが、そこで足を止めた。

「あーそれとよ」

「まだなんかあんのか」

「そうカリカリするなって。滅ぼすつていやあ、あの赤龍帝の坊主、気を付けた方が良いZE? アイツは下手したら……世界を滅ぼす器になっちゃうからYO?」

……は?

「おい、どう言う意味だそれは!」

「まあ進んでいく先で明らかになる。それまでは目え離さない方が良いZE? じゃーなー!」

俺の質問に答えず、帝釈天は今度こそ去って行った。

――

レーティングゲーム後の、文化祭当日。

「二列になってお並びくださいー!」

ウエイトレス姿の愛らしい格好のアジアが、廊下に並ぶ生徒達を整列させていた。しっかすげえ長蛇の列だな……。

「はーい、こちらは占いの館とお祓いコーナーですよー! 塔城小猫ちゃんと姫島朱乃先輩が占いとお祓いをしてくれまーす!」



そしてイリナもウエイトレスの傍ら、各コーナーの呼び出しをしていた。オカルト研究部の出し物を見るも大盛況だ。

何せ我が部の美少女達に憧れる男子だけじゃなく、女子までもが沢山来てくれているんだ。

「はい、チーズ」

と、喫茶店で写真を撮っているのは、ウエイトレス姿のリアスだ。

ヒーローシヨミたく部員と写真を撮れるシステムの導入を俺が進言してやってみたら、速攻で学園中の話題の的になった。

まあ高嶺の花の美少女部員と一緒に撮れる写真撮影だからな。

『お前は毎晩一緒に添い寝してるがな』

そうだな、ざまーみやがれはっはっは！

何て心の中で呟きつつ、俺は教室の片隅でジュースを飲んでいた。

「ちよつとイツセイ君、見てないで手伝ってよ」

と、お化け屋敷を構えた教室から木場がやってきた。

あー、そういやこの時間俺はフランケンシュタインか…。

「いやあ、実際こうしてみるとさ、めんどくせえよな」

「主役の言つて良い台詞じゃないよ！ そう言う学生実際にいるけどさー！」

「いや、イケメン王子のお前一人で事足りるだろ」

「足りないから呼んでるんだよ！」

…はあ、しよーがねえか。

俺は重い腰を上げた。

「じゃ、いっちょ頑張りますか」

「とても主役とは思えないや……」

木場の呟きは聞こえないフリをして向かおうとすると、俺の悪友二人が姿を見せた。

「おいイツセー！ オカルトの館、何処も入れないじゃないか！」

「友人枠としての特別優待券とかないのか!？」

「ちゃんと並べバーカ」

俺はにべも無くそう言つてやった。

「サイラオーグさんが、ですか」

校舎一階のチケット売り場、休憩時間を利用して、俺は先生からサイラオーグさんの

今後の顛末について聞かされた。

サイラオーグさんは俺に負けた事で、上との繋がりを幾つか失ったらしい。

『この時点で手を切るなんざ、相当な馬鹿だろ。アイツはどう見ても将来性十分だぜ?』  
「ああ。だから一部のパイプは残ってる。残った連中はそう言った事はちゃんと理解出来る頭を持つてるって事だ」

「じゃあ、大王家次期当主の座は?」

「そこはまだ変動はない。今回の一軒で大王家はどう動くかわからないが、滅びを持っていないとは言えあれだけの実力者だ。世論もあるだろうし、無下に出来るはずもないだろう」

そっか……ちよつとホツとした。

「サイラオーグさんなら、また上つてきますよね」

「当然だろう。アイツはそれだけの実力を有してる…お前もうかうかしてたら、先を越されちまうぜ?じゃな」

そう言つて先生は出し物の見回りに戻った。

あの人、学園祭の総監督なんだよな?

『どう見ても文化祭楽しんでるおっさんだな』

「んなこと言つたらまた突つ込まれるぞ」

と俺が言うと、遠くから「誰がおっさんだ!!」と聞こえてきた!  
「どんだけ地獄耳!」

「イツセー様、新しいチケットが出来ましたわ」

「ん、おおレイヴェル。サンキューな」

新しいチケットの補充が来たので売り切れの札を取り払ったら、一瞬にして客が群がった!

「お前らはハイエナか!」

「はい、占いの券です」

まあ、レイヴェル楽しそうだし、突っ込むのも野暮か。

「い、イツセー様……」

「ん?」

レイヴェルがチケットを売りながら言葉紡ぐ。

「試合、感動しました……。最後、相手選手を抱きしめるイツセー様を見ていたら、私もつい泣いてしまって……」

な、何だ急に……頬も赤くしちやつて……。

俺まで照れ臭くなってきたじゃんか。

「……そんな泣くほどかよ。ただ泥臭く殴り合っただけだけ? それこそ、お嬢様のレイ

ヴェルには過激すぎるっつーか…」

「そ、そんな事ないと思います!!とても素晴らしい、意地のぶつかり合いました!…:そ、そうですわ!私、打ち上げ用のケーキを作ろうと思っついていて!」

「へえ、じゃあ期待して待つとくよ」

レイヴェルの菓子は美味しいからな。

「と、当然ですわ!特別でしてよ!」

「ハハッ、その感じ、何時ものレイヴェルらしくなってきたじゃん。さ、チケット売ろうぜ」

「…はい!」

とは言うけど、お客さんは増えるなあやっぱり。

「イツセー、裏のお店とかないのか!」

「親友よ、エツチな写真撮影会は!」

「よーし、お前ら表出ろ」

俺は拳をバキバキ鳴らして、馬鹿友二人にそう吐き捨てるのであった。

はてさて、そんな学園祭もはや終盤。

現在は校庭でキャンプファイヤーが行われていて、男女が楽しく踊っていた。

『相棒、参加しないのか?』

いや、もう疲れた……。

サイラオーグさんとの戦いの疲れが取れてないのもあるし、今日のお客さんの相手でもうヘトヘトなんだよ。

『まあそりやそうか。…かく言う俺も、疲れ取れてないからちよつと寝るわ』

おう、お休み。

俺はなんとなしに部室に戻ってきた……と、先客がいた。

「あら、イツセー」

「よっす」

我らがリアス部長だ。

「お仕事お疲れ様。何だかんだ言いつつ、サボらなかつたのは良い事よ」

「どーも。リアスの方は?」

「最高の学園祭だったわ。もう思い残す事はないぐらいよ」

「そっか」

部長の席に座るリアスにそう答え、俺は部長席のデスクに腰掛ける。

「……………」

途端に無言が俺達の間を支配する。

視界の端でリアスを見ると、頬が僅かに赤くなっていた……。

…ここは一つ、男を見せるか。

俺はデスクから立ち上がって、リアスへ近付く。

気配を察してこちらを振り向こうとしたリアスの頬を包んで

「リアス」

「イツセー……っ！」

唇を重ねた。

一分ほどのキスを交わした後、俺はリアスから離れる。

リアスは何が起こったか分からず、放心状態だった。

「リアス。あの時の約束、果たさせてもらう」

「それって……」

「君を——貰う」

俺がそう言ったと同時に、リアスは俺の胸に飛び込んできた。

ぎゅうっと、強く抱きしめ、頭を擦り付けてくる。

「……イツセー」

「うん？」

「貴方には、グレイフィアと言う恋人がいる……でも、私は、貴方が好き。大好きっ」  
涙声で震えながら、リアスは俺に告白した。

俺はそんな彼女が愛おしくて、頭を撫でる。

「俺も、好きだ。グレイフィアと同じぐらい、君が好きだ。……俺、結構欲しがりさ  
んだから、君の全てが欲しい」

「……イツセー」

漸く顔を上げたリアスの顔は、赤く染まり、瞳も潤んでいた。

俺達は徐々に距離を近づけた——ところで、

ガチャ

「イツセーさん、ここですか……はうっ！イツセーさんがリアスお姉さまと！」

ここでアーシア達の入室かよお!!

いや、まあ薄々はこうなるかもと察してたよ！



それにしたって綺麗にフラグ成立しすぎだろ！

「あらあら、リアスだけ狡いですわ。わ・た・し・も」

そこへ空かさず朱乃さんが俺の腕にしがみ付いてきた！

うへえ、相変わらず凄い柔らかかモチモチなおっぱいです!!

「ちよ、ちよつと朱乃！今折角良い所だったのに!!」

「私だつてイツセー君と良い雰囲気になりたいんですもの。ねえイツセー君」

「は、はい?」

「…私、試合で負けちゃったけど、デートは無効になるのかしら?」

ぐつ、そんな捨てられた子犬みたいな目で見つめないでください……!」

キユンとしちやうから!

「や、勝ち負けとかは言っていないし、朱乃さんも頑張ってたから……行きましようか?」

「!嬉しいつ、イツセー♪」

朱乃さんは嬉しそうに笑うと、俺への密着を更に深める!

「だ、だつたら私だつて!」

リアスも負けじと、更に強くしがみ付く!

両腕がおっぱいに埋没してるう!!

「はうつ、イツセーさんが満員御礼ですう!!」

「私達だって頑張ったんだ！デートさせてくれる権利だってある筈だぞ！行くぞアーシア!!」

「…私も、一日中イツセー先輩に愛でられたいです……!」

ちよ、ちよまで君達!

もう満員御礼だつて!

「わ、私も混ざるべきなのかしら!?!ミカエル様の為に迫つて……でも、墮天しちゃうし……如何すればいいのイツセー君!?!」

知るかそんなもん!!

それより俺を助ける!

「うわあ、イツセー先輩が埋もれちゃってますう」

「こりや大変だねえ」

そこの男子!!日よつてないで助けると言うんだ!!

「学生なので、慎みのある行動をしてくださいね」

そこで言う事じゃないっすよロスヴァイセさん!!

「皆さん!家庭科室をお借りして、ケーキが完成しましたわ!!」

おおつと、ウエディングケーキみたいなデカイケーキ持ってレイヴェルが入室!

ただどこの状況を見てポカン顔!

「えっと、どういう状況ですか？」

えっと……………カオスです!!

俺はもみくちやにされながら、そう眩く他なかった。

――

アザゼル総督視点

お、やっとまともな紹介？じゃねーか。

俺は今冥界にいる。

用事があったついでにシトリー領にある病院に来ていた。

院内の売店で花を物色している体格の良い男は、俺の来訪を見て驚いていた。

「総督殿」

「よっ、打撃王」

サイラオーグだ。

報告ついでにこの男の顔も見たくなくて、この病院に足を運んだ訳だ。

「兵藤一誠の調子はどうです？」

「あー、自分が至った境地の試行錯誤を繰り返してるよ。案外上級悪魔目指せるかもな」  
アイツは現状で満足したりはしない。

リアス達と出会って、自分の手の届く範囲で力を蓄え、昇華させていく……血統重視の今の悪魔達は、アイツと試合したらどんな反応を見せるのやら。

「楽しみですね。俺も、直ぐに追いついて見せます」

「アイツに伝えとくよ」

イツセーの奴、喜び勇みそうだからな。

と思っていると、サイラオーグの執事が息を切らせて姿を現した。

「サイラオーグ様……」

「どうした？」

執事はサイラオーグの問いに、歓喜に震える声で答えた。

「ミスラ様が……」

その病室に駆けつけてみれば、担当していた医者や看護婦は口々に「奇跡だ」「信じられない」と漏らしていた。

ベッドを覗けば——そこには永い眠りから覚めた女性が窓からの風景を見ていた。

サイラオーグはその体軀を震わせ、下の階で購入した花を床に落としながらベッドに近付いていく。

それに女性——ミスラ・バルも気付いた。

「……母上、サイラオーグです。……お分かりに、なりますか？」

「……ええ、勿論です」

子の頬を撫でようとするとミスラ氏の手をサイラオーグが取った。

「……私の愛しいサイラオーグ……。……やはり、あの時の事は、夢ではなかったのですね……」

「は……」

「夢の中で……。……銀色の不思議なドラゴンが、私を外に連れ出したんです……。……そしてそこには、煌めく龍の様な鎧を纏った人の前で、貴方が倒れていた……。……ああ、あの時と同じ、大きな手……。……」

ミスラ氏はその手の大きさ、そして今までのサイラオーグの歩みを確かめるかのよう

に目を閉じる。

暫くして目を開けると、静かに微笑み、一言だけ続けた。

「……立派に、なりましたね……」

「……っ！」

母親からのその一言で、サイラオグの目から——一筋の涙が流れた。

「まだまだ、です……母上。……元気になったら、家に帰りましょう……あの、家につ  
……」

……これ以上は野暮だな。

俺は静かに病室から去って行く。

なあ、サイラオグ。

お前は、心の何処かでその一言を聞きたくて、ずっと頑張ってきたんじゃないか？

いや、これは俺の考えで、実際の所は分からない。

……分からなくても良いのかもな。

だけど、お袋さんにとっては、お前が自慢の息子である事に変わりはないと思うぜ？

イツセー……お前なんだろ？

魔法使いに払えない絶望はない……まさか、あんな間近で奇跡を見るとは思わなかったよ。

お前が九尾の御大将に使った魔法と同じのを使ったと言うのは聞いていた。

それがどういう結果を齎したのかは分からないが、サイラオーグの母親は深い眠りから覚めた。

…ミスラ氏が言ったたドラゴン、それはお前の中の希望なんだろう。

何でファントムがそんな事をしたのか分からない。

けど、冷酷だったはずのファントムの心すら変えちまうお前の明るさは、絶対に皆の絶望を払える。

俺は、そう信じてる。お前は、冥界と人間界に無くてはならない——替えの利かない希望だ。

だから、お前を破滅の器になんてさせやしない。

俺は懐から取り出した手形の付いたバックルと、黒い宝石が付いた指輪を見て、そう決意するのだった。

第十章：学園祭のレグルス・ビースト — 完 —



## MAGIC番外編 『ご主人様とデート』

学園祭が終わって次の日の代休の事。

俺は近所の大型ショッピングモールの入り口前にいた。

何を隠そう、今日はリアスとのデートの日だ。

『どうせ抱くだけなのだから、こんな事する必要はあるのか?』

いや、やっぱりムードは大事じゃん。

それにいきなり直面したら多分緊張しただろうし。

『人間とは、よく分かんらん』

そういう生き物なんだよ……お、来た。

此方にかけてくる鮮やかな紅髪に、周囲の人達は全員目を奪われていた。

その持ち主——リアスはそんな視線を気に留めず、一直線に俺の元へと走り寄って来た。

「…お待たせ、イツセー」

「ううん。そんなに待ってないよ…」

俺はリアスの格好を見る。

現代の女の子風の格好をした彼女は、お嬢様でなく普通の女の子といった感じだ。

「リアス、すげー可愛い…」

「へっ」

俺がそう胸中で思った時、リアスは間の抜けた声を漏らした。

……って、今の声に出てた!?

『ばっちり出てたぞ』

『バッチリデター!』

「…ご、ゴメン」

申し訳ない気持ちになり謝ると、リアスは首を横に振る。

その頬は朱に染まり、嬉しそうに口角を上げていた。

「ううん…その、嬉しいわ」

「そ、そっか…」

お互い、そこから先は何も言わなかった。

でもリアスはきゅっと俺の手を握ってきた。

「…じゃ、行こうか」

「…ええ」

俺はリアスの手を引くと、そのままデートへと繰り出した。

――

「前から思っていたのだけど、イッセーは爽やかな感じが似合うわね」

俺は洋服店でリアスを選んだ服を試着していた。

スポーティな感じがして、見た人に爽やかな印象を与えるファッションだ。

「そ、そうかな。服とか、あんまり頓着ないから分かんなくて」

「ええ。でもやっぱり何を着ても似合うと言うのも大きいわね」

リアスはそう太鼓判を押してくれる。

今回の服装に関してはグレイフィアが見立ててくれたものだからなあ。

やっぱりちよつとは服装にも頓着持った方が良いのかなどか思ったり……。

『お前は基本動きやすい服装で選ぶからな』

「あ、そうだ。今度はこつちを着てみてくれる?」

リアスはまた新しい服を持ってくる。

『着せ替え人形だな』

まあ、こういう体験も大事だよな。

俺は苦笑いしつつ、試着室のカーテンを閉めた。

因みに気に入った服とズボン一式を購入した。

「ど、どうかしらイッセー」

次に移動したのは…ランジエリーショップ。

リアスは恥ずかしそうに笑みながら、俺に下着姿を披露してくれる。

身に着けているのはちよつと色っぽい紫色の下着…まあ基本リアスの下着ってちよつと色っぽいんだけど。

それでもよく似合ってるなあ。

「わ、悪くないぜ。あ、これとかはどうかな」

俺は真新しさという意味を込めて、今度は水色の下着を手を取った。

リアスは意外そうな顔をしていたが、選んでくれた嬉しさからか、微笑んでくれた。

「……………どう？」

「……………うん、良い」

ミスマッチ感が出てるのかもしれないけど、案外良い。

「…ありがとう。どうせならもつと過激なのでも…」

「い、いや！これでも良いと思う！」

流石にこんな公衆の面前では刺激が大きい！

そんなこんなで昼食タイム。

リアスはカルボナーラで、俺はカレー。

『カレーはどう食っても美味しいよな』

うん、でもリアス達を作った方が美味しいと感じるのは何でだろうか。

やっぱり鼻貞目かな？

「イツセー」

「うん？」

俺はカレーを食べながら、リアスの言葉を待つ。

「今日はありがとう」

リアスは本当に感謝したようにそう言ってくれる。

…面と向かって言われると、照れるな。

「…良いんだよ。俺がしたいと思ってるから」

「イツセー……」

「その、俺だつて君みたいな可愛い子とデートできるのは、凄く嬉しいし」

俺の言葉にリアスは顔を赤く染めて俯いた。

…何時もの凜としたリアスも良いけど、やっぱりこういう女の子らしいリアスも良いな……なんて。

「リアス、あーん」

「あ、あー……」

リアスは恥ずかし気に俺の差し出したカレーを咀嚼する。

やっぱりこういうのもデートには付き物だからな！

「じゃ、じゃあイツセーもー」

「ん、あー」

「…慣れてるのね」

「まあね」

人前でグレイフィアの口元についたクリーム舐め取った俺にもう怖いものはないぜ

！

『よく言うなヘタレ』

――

さて、二人きりのデートも滞りなく終わりを迎えた。

『相棒、緊張してるのか?』

…まあ、してないと言えば嘘になる。

でも、俺まで緊張してたらリアスだって変に力入っちゃうだろ?

『カッコつけめ』

意地があんだよ、男の子にはな。

夕食後、風呂に入ってからリアスに部屋に来るようにと言われたのだ。  
そして今、俺は部屋の前にいる。

……よし。

俺はドアをノックする。

『ぶっぶっ』

俺は扉を開ける。

「いらっしやい、イツセー」

「よっ」

俺はリアスの隣に座る。

リアスは何時を通りのスケスケなネグリジエを着ていた……けど、その体はちよつと振るえていた。

「……怖い？」

「……そうね。ちよつとだけ……んっ」

俺はリアスの口を優しく塞ぐ。

緊張を解す目的で、頭も撫でてあげると、リアスの震えは何時しか止まっていた。

「……あの時と、同じね」

「ん？ああ……」

あの時……ライザーとの婚約騒動か。

確かあの時は無理やり迫ろうとしてたっけ。

「あの時はイツセーしかいないって思ってた。でも消去法だったわ。でも、今は違う」

リアスは微笑みながら、俺の首に手を回して後ろに倒れる。

「心の底から、貴方のものになりたいと思ってるわ。……私の初めて、貰ってくれる？」

「……なるべく、優しくするよ」

俺はリアスにそう答え、体へ手を這わせていった——



## MAGIC番外編 『巫女と逢瀬』

「お待たせ、イツセー君」

よお皆、イツセーだ。

今日は以前約束した通り、朱乃さんとのデートだ。

リアスと同じプランでも良いだろうと思うだろうけど（事実、ドライグとドラゴンからそう突っ込まれた）、やっぱり違うプランを考える方が良くないかと思っただからだ。

それに同じ事の繰り返しだと朱乃さんだって飽きるだろうし……ってな訳で、今日は映画を見る事にした。

あ、勿論映画鑑賞だけで終わらせたりはしないぜ。

「いや、待ってないっすよ」

笑顔でそう言う俺の目の前にいる朱乃さんは、前回とはまた異なる、それでいて可愛らしい服装でいた。

「そう、良かった……ねえ」

「？」

「前回の続きと言う事だから……イツセー、って呼んでも良い？」

そう恥ずかしげに言葉を濁しつつ、上目遣いで言つてのける朱乃さん………可愛らしさが前回のデートより洗練されてる気がするのは何故だろうか？

内心鼻血を吹き出しそうになりつつも、俺は何とか言葉を返す。

「…勿論だよ、その……あ、朱乃」

「っ……」

俺はさんを付けずに朱乃の名前を呼ぶと、朱乃は虚を突かれたような表情になる。

が、次の瞬間には感極まったように俺の腕に飛びついてきた。

「嬉しいっ、イツセー！」

「うおっ」

お、おっぱいの感触がすげえ！

もっちりとしつつ全く重みを感じさせない……これは、芸術品の類だ！

とか訳の分からない事を内心で叫びつつ、俺達は映画館へと入っていく。

今日観る映画は『アマゾンズ』ちげえ!!

普通の恋愛映画だよ！

『シーズン2か』

だから違うって！

あれも一応ジブナイル恋愛ストーリーだけでも！

……まあ、かいつまんで説明すると、ちよつと前に発売された恋愛小説の実写版だ。

俺は確か俺が中学の頃だったかな？

口コミでも中々良い評判を聞くから、デートで見るとこれだろうと思ひ、チョイスした訳だ。

「ふふ、楽しみだわ」

「俺、こういう映画見るの初めてなんだよな」

「そうなの？」

「うん」

何時もアニメとかの映画しか見てなかったからな……それに、

「女の子と二人で映画を見るって、数えるほどしかないからさ」

ちよつと緊張しちゃって、と苦笑いする俺に、朱乃は可笑しそうにクスリと笑った。

「あら、それなら私だって同じよ。好きな男の子と二人きりで映画鑑賞なんて」

「そ、そうなんだ」

「ええ、だから嬉しいわ。女の子の夢だから」

朱乃は嬉しそうに笑うと、俺の手に自分の手を重ねた。

「…始まるな」

「…うん」

周りが暗くなっていく中でも、俺達はずなだ手を放さなかった。

因みに映画は普通に面白かった。

――

「面白かったわね」

「ああ、ああいう映画も良いもんだなあ」

劇場から出た俺と朱乃は、映画の感想を交し合っていた。

「文字でも感動したけど、実際に見ると猶更感動しちゃったわ」

「朱乃、ずっと泣いてたな」

まあ俺もちよつとジーンと来てたけどね。

『いやあ、俺は良い映画だったな』

『さっさと鼻水ふけ。汚い』

お前らも見てたのかよ……って、今は此奴らに構ってる場合じゃないな。

「朱乃」

「？」

《コネクト・プリーズ》

俺はコネクトでバイクを取り寄せると、それに跨る。

「このまま二人で買い物と、洒落込もうか？」

「……うん」

朱乃はバイクの後部に跨ると、俺の腹に手を回した。

『相棒、折角だしウィリー運転しろよ』

こんな公道で、しかも朱乃乗せてるのに出来るか!!

俺はバイクを走らせて、そのままデートの続きを演じた。

「ふふ、今日は楽しかったわ」

夕暮れ時になり、帰路へと急ぐ俺に、朱乃は嬉しそうにそう言ってくれた。

「喜んでいただけで何よりだよ……あ、そうだ」

「どうしたの？」

「ちよつと寄り道、しても良い？」

「?…ええ…」

怪訝そうにしつつも、朱乃は了承してくれた。

それを確認すると、俺はバイクを方向転換させる。

バイクを止めた先にあるのは、少し小高い丘だった。

俺達はバイクを降りると、丘に設置された階段を上っていく。

「イツセー、何かあるの？」

「まあまあ、もうちよいだから」

ちよつと勿体ぶつておいてなんだけど、これでガツカリされたりしたらどうしようか  
?!

『押し倒しちまえよ』

出来るか馬鹿!!

ドライブのアホ発言に突っ込みつつ、頂上へとたどり着いた。

「朱乃、上向いてごらん」

「え……………っ!」

朱乃は言われるままに天を仰ぐと、上空には満天の星空が広がっていた。

「綺麗……」

「昔から、ここの星は綺麗に見えるんだぜ」

そよ風が二人の頬をなで、辺りに響くのは虫の鳴き声だけ。

昔から俺のお気に入り場所だ。

「朱乃」

「どうし——」

俺は此方を見ようとした朱乃の唇を、塞いだ。

一分ほどの時間を置いて、俺は離れる。

「……いつせー」

「…改めて、君に誓う」

俺は朱乃の手を握って、力強く告げる。

「俺は、君が絶望しそうになったら、必ず救う。俺が、君の最後の希望だ」

「……ちゃんと、繋ぎとめてね」

俺は返信せず、キスする事で応えた。

二人の口づけを見守るのは、夜空の星々だけ——

『またこんな女たらしな事を…』

『どーせハーレムエンドになるんだし、今更な問題だろ』

と、このドラゴンズだけだったっ!!!



# 第十一章：進級試験とウロボロス MAGIC125 『忘れぬ記憶』

アザゼル side

学園祭が終わって直ぐの事だった。

その話を持ち掛けられた時、俺——アザゼルは生涯でもそうないであろう間の抜けた顔を出してしまった。

『普段から出してそうなのだが』

「んだとゴラア！」

俺は通信してきた相手に向かってキレる……が、咳払いをして空気を改める。

「…ゲフン！ そいつは本気なのか、ヴァーリ」

相手はヴァーリだ。

見たところ元氣そうで何よりだ……って、一応敵対してるってのにな。

『ああ、彼……いや、今は彼女か。彼女はそれを望んでいてね。俺としても興味があるの

で便宜を図りたい』

此奴は通信越しでとんでもない提案をしてきた。

正直な話、勢力図が塗り替えられてもおかしくない程の報告だ。

「…お前の事だ。それだけじゃないんじゃないか？」

『相変わらず鋭い。他の勢力から疎まれるのも領ける話だ』

「余計な世話だ」

俺の返答にヴァーリはただ苦笑いを浮かべるだけ………そんなの、俺自身が一番よく分かってる。

だけどな。

「…これは性分なんだ。それで背中を狙われるなら、そんな時に何とかするさ」

『損な生き方しか出来ないんだな。変わらないようで、寧ろ安心するかな』

ヴァーリは呆れ気味にそう言うと、不意に呟いた。

『…彼女を狙う者がいてね』

「そりや当然だろう。それこそ星の数ほどいる話だ。だけど、滅する事が叶わないから  
どいつも齒軋りしてるとどまってるんだらうな」

『そう言われれば納得は出来るんだが、どうも身内から出そうだね。恐らく、そろそろ仕掛けてくるやもしれん』

……そう言われて、不意に俺の脳裏に槍を持った若者の姿が過ぎった。

「——これを機に、いぶり出す気か？」

『俺の敵かどうか、ハッキリさせるだけさ』

大胆不敵なこつて。

まあ、「俺の味方」ってオチは望んでないんだろうな。

『十中八九敵だろうさ。——ケリを付けるには、頃合いか』

そう言うヴァーリは、心から楽し気な笑みを浮かべていた。

『兵藤一誠から借りたクソゲーをどちらが先に攻略出来るか、それで勝負を決めようと

思うのだが』

「そつちかい!!」

思わずツツコんだ俺は悪くないはずだ。

——

イツセーside

俺ことイツセーは、早朝からバイクを吹かしてある場所へと赴いていた。

朝も早いと言う事もあるが、俺がバイクで進む度、人氣がどんどんと無くなっていく。

「雨じゃなくて良かったよ。雨だったら行く気起きないよな」

『だがそれでも行くんだろう？ 律儀な奴だよな、お前って』

うるせえ……忘れちゃいけない事だから、俺はこれからも赴く。

ほんつと、器用に生きれないタイプだよな、俺って。

更にバイクを吹かせること数分後、俺が着いたのは切り立った崖のある岩の平原だ。

「……変わらぬいな。あの時と」

俺は誰に言うでもなくそう自然に呟くと、魔方陣から花束を取り出すと、一番大きい岩場にそれを置く。

置いてからその場に屈むと、俺は瞑目して手を合わせる。

『…お前が魔法使いになって、もうすぐ一年か』

……そうだな。

この場所は、俺が魔法使いになった始まりの場所でもある。

…あの日、多数の命を救えなかった、サバトの儀式。

あの日から、俺の戦いは始まった。

俺は数分ほど黙祷してから、立ち上がる。

『…また感傷にでも浸るのか?』

「いや、もう後ろは見ないよ」

救えなかったのは変わらない。

今も、そしてこれからも……でも。

「それでも、進み続ける。これ以上、平穩を過ごしてる人達が傷付かない様に」

『…以前まで怯えていただけの男が、よくもほざける』

「ああ。口を噤んでたって、何も起きやしないさ」

そう言うと、ドラゴンはフツと微笑んだ。

『……そうか』

『お、相棒に今デレたな?今デレたよな?』

「ええい黙れ!!」

二人の喧嘩漫才を聞き流しつつ、俺は帰路に着いた。

『……………』

兵藤一誠が立ち去って暫くすると、そこに一体の異形が現れた。白い体躯に、胸部に輝く紫色の不気味な発光体。

——ワイズマン。

ワイズマンは、先程イツセーが花を添えた場所へと向かう。

『…サバトは終わりではない、次なる始まりを意味する』

ワイズマンがそう呟く中、花は見る見るうちに枯れ果てていく。

その場から僅かに漏れ出る紫の燐光を見て、ワイズマンは笑みを浮かべる。

『……その時が来たら、お前は希望を保てるのか、楽しみだな』

ワイズマンはそう呟いた後、その場から姿を消した。

その場に残されたのは枯れた花束と、灰色の羽根だけであった。

——

「ただいまー」

俺は家に着くと、朝飯を食べる為にリビングへと上がる。

『ワウツ!!』

「うおつと……!」

リビングについて早々に、ハティとスコルがじやれ付いてきた。

ホント甘えん坊だよな、此奴ら。

「イツセー、お帰り」

「お帰りなさいませ、イツセー様」

リアスとグレイフィアが挨拶をくれる。

一応皆には事情は説明してあるから、特に疑問もなく食卓に座る。

「いやー、ホントに皆の食事は美味いなあ。ここに皆が来てから食事の時間が楽しみなんだよ」

「分かるぜおっちゃん!」

昔父さんが言ってた、『女はまず男の胃袋を掴む』って言葉の意味が今になって漸く分かった。

「はいイツセー。今日のお弁当よ」

「サンキュー、リアス」

おつ、今日の弁当はリアスの担当か。

『この場合は側室弁当か』

『上手いな』

…ちよつと同意しそうになっちまった。

そのせいで味噌汁が気管に詰まりかけた！

「…お前らなあ」

「またドライグ達の漫才？」

「うん」

『『漫才言うな!!』』

息ピッタリだな…と思っていると、俺の視界の端に、何時もとは違う弁当箱に料理を詰め込んでいるレイヴェルの姿が映った。

「お、レイヴェル。気になる男に弁当プレゼントか？」

「ひやつ!?ち、違いますわ!これはギヤスパーさんへの差し入れですわ!最近はお一人で朝練してるそうなので」

「ギヤスパーが朝練か……」

それは知らなかったな……と、俺の隣に腰を下ろしたりアスが教えてくれた。

「先日の一件で、自分の力不足を実感したって言って、イツセーと祐斗との合同特訓の他



にも自主メニューでしているそうなの。勿論ハードワークにならない程度に、体を一から鍛え始めたの」

アイツ、そんな事を……。

『あの小僧の筋は悪いものではないからな。訓練さえ怠らなければ、禁手にも至れる筈だ。まあ、それ以外にも強い切っ掛けが必要だが、まあそれはどうとでもなるだろ』

そうだな、やっぱ体の基本作りは大事だぜ。

「…小猫さん？顔色が優れないようですが」

レイヴェルが小猫ちゃんの顔を覗き込みながらそう言った。

……確かに顔が赤く、体調が悪そうな感じだ。

「……何でもない」

小猫ちゃんはいつも通り簡素に返した。

「けどレイヴェルはそれでも心配そうに、小猫ちゃんの額に手を当てていた。

「でも、顔が赤いですわよ。風邪ではなくて？そうですわね…フェニックス家に伝わる特製アップルシャーベットを作ってますわ。実家から地元産のリングゴが届きましてたの、それを使って特別にこの私が作ってますわね」

「…ありがた迷惑」

小猫ちゃんはレイヴェルの申し出をその一言で片づけると、レイヴェルはぶんすか怒

り出した。

「んまー！ヒトの好意を即否定だなんて!!猫は自由気ままでもいいですわね!!」

「鳥頭に言われたくない」

「と、鳥頭？えーつと、日本語で鳥頭とは、物忘れの激しい方をさしましたわよね？」

「…よく勉強しているようだから、ほめてあげる」

「んもー!!この猫娘は!!」

ハハハ、こつちも仲良しコンビだな。

「しかしイツセー」

「ん？」

「この分だと子供の顔も早くに見れそうだな」

「ブツ!!」

不意打ち気味に放たれたその一言で、今度こそ味噌汁を吹き出した!

「い、いきなり何言いだすんだよ!!」

「いや、だってもう童貞は卒業したんだろ?ならば後は子供だけだろうと思つてな」

「まだ作らねえつて!!」

「じゃあ高校卒業してからか。楽しみだな」

全く、いきなり過ぎるだろおつちゃん……!

改めて食事に移ろうとした俺は、不意に小猫ちゃんと視線が交わりあう。すると小猫ちゃんは俯いてしまった。

「……孫、赤ちゃん……………」

そう呟いた彼女の言葉を、この時の俺は然程気に留めてはいなかった。

## MAGIC 126 『昇格試験』

その日の深夜、俺の家に訪れたのは……魔王サーゼクス様だった。後序でにアザゼル先生。

「序で扱いするな……今日は真剣な話なんだよ」

「ホントっすか？」

この人はどうも胡散臭いからなあ。

ま、半分だけ信じとくか。

サーゼクス様は俺、木場、朱乃さん、そしてリアスを自分の前に座らせて正面から切り出した。

「先日も話した通り、イツセー君、木場君、朱乃君の三名は数々の殊勲を上げた結果、私を含めた四大魔王と上層部の決定の下、昇格の推薦が発せられる」

おっと、此間の件か。

まさかこんな直ぐに来るとは思ってたなかつたぜ。

しかも悪魔になってまだ一年も経ってないのに……まだ実感が湧かないよなあ。

「さて、昇格の話になるが、木場君と朱乃君は中級悪魔への昇格試験を受けてもらいたい。そして——」

そこで一旦言葉を切ると、サーゼクス様は何故か俺の方を向いた。何か、嫌な予感がするんだけど……………。

そしてその予感は、的中した。

「イツセー君、君には上級悪魔の試験を受けてもらおうと思っている」

……………は、

「はあああああ!?!」

告げられた内容が信じられず、俺は驚きのあまり大声を上げる!

「ちよ、待つてください! 百歩譲って昇格試験は分かりますけど何で俺だけいきなり上級悪魔試験を!?!」

「うむ。イツセー君の驚きも最もだ…順を追って説明しよう」

未だ混乱から抜け出せない俺の前で、サーゼクス様はその経緯を語り始めた。

「本来であれば昇格のシステム上、君も中級悪魔試験の筈なのだが、君の場合は功績が下級悪魔にしては大きすぎるんだ。墮天使コカピエルを倒し、神であるロキを退け、京都では『禍の団』を撃退した。更には人間界や冥界でファントムから住民を守っていたと言うのと、先日のレーティングゲームで天龍であるドライブと融合し、魔王に匹敵する力を見せつけた。それを見た上で、中級悪魔では君自身をいざという時に動かし辛いだろうという判断なんだ」

「いざという時……？」

「例えば冥界に直接『禍の団』の様なテロリスト集団が襲撃した際、上級悪魔であれば己の判断である程度の行動は可能だが、中級悪魔では下級悪魔の時よりは融通は聞くがそれでも行動が制限される。結局は魔王や大公の指示がなくては動けない場合も多いんだ。……悪い質問をしてみてくださいが、君は指示があるまで待機と命じられてる間に、無作為に目の前で傷つく人達を見ている事が出来るかい？」

「……」

「……そんなの、無理に決まってる。」

「だが上の指示なしで勝手に行動した際は厳しく批判される。それに——」

サーゼクス様の後を引き継ぐ形で、アザゼル先生が口を開いた。

「お前の存在を恐れ、疎んじてる連中も存在する。だからこそ、お前を上級悪魔に昇格さ

せる事で行動の制限をなくし、いざという時の報復に対してもスムーズに対処出来る様にするんだよ」

「え、俺…疎んじられてるんですか？」

初耳だぞ。

『…成程。旧体制に固執してる老害共か』

「そつ。血統こそ全てだと未だに傾いた考えしか出来ない奴等にとつちや、低い血筋——人間からの転生悪魔であるお前の存在は、何よりも許しがたいもんだ。だから連中がちよつかいを出しても守れる体制を整える必要がある」

「どう言う事つすか？」

詳しく説明プリーズ。

「下級悪魔のままだと、連中から何かしらの報復を受けた際、現魔王派である上層部やサーゼクスも介入や擁護が辛い。そんな事をすれば格好の叩き材料を与えちまう」

「……つまり、主から独立した上級悪魔であれば、ある程度の擁護が出来るって事ですか？」

「掻い摘んで言うとうそうなる。…まあ上役の何人かも、お前の冥界での人気ぶりを利用して、体の良い下働きとして確保したいってのもあるだろうがな」

「はあ……」

聞いている限りじゃ結構な陰謀が渦巻いている昇格試験って事か……木場と朱乃さんは違うだろうけど。

如何したものと内心思っていると、今度はサーゼクス様が再び語り始めた。

「イツセー君、君はまだ若い。大人の陰謀や政は、我々大人達の仕事だ。君は難しい事を不必要に考えなくても構わない。ただ君自身の意思で動いていけばいい。それが何であれ、私達は君の味方だ」

「サーゼクス様……」

………悩んでも仕方ない、よな。

『悪魔である以上、遅かれ早かれお前は昇格するんだ。それが早まったって考えればいいだけだろう』

「そうだな。………サーゼクス様。リアス・グレモリー眷属の『兵士』として、受けさせていただけます」

「うむ、そう言つて貰えるとありがたい。木場君と朱乃君はどうだろうか？」

サーゼクス様は二人にそう問いかける。

「リアス・グレモリー眷属の『騎士』として、謹んでお受けいたします。此度の昇格のご



推薦、誠に有難う御座います」

「私も、グレモリー眷属の『女王』として、お受けいたします。この度は評価していただきまして、誠に有難う御座いました」

二人も受ける気満々だな！

これなら心細くないぜ！

「うし、話も纏まった所でお前ら。来週冥界で昇格試験に参加だ」

「ら、来週!？」

早すぎるだろ!?

「中級悪魔の試験は確か……レポート作成と筆記と実技でしたわよね？実技は兎も角、レポートと筆記試験は大丈夫かしら」

「筆記、レポート……かあ」

その辺は俺が一番苦手な部分だぞ……!!

冷や汗が流れるが、ふと気になったので質問してみた。

「そう言えば、上級悪魔の試験も概ね同じなんですか？」

「上級悪魔の試験にはそれに加えて戦術試験があります」

そうグレイフィアが教えてくれた。

戦術か……まあ眷属を率いる以上はそうなるよな。

『実技は問題ないだろ。戦術も……まあノリで何とかなると思うが、一番の問題は筆記とレポートだ。何せお前馬鹿だからなあ』

「うるせえ！分かつてる事一々言うな！」

そんなのは俺が一番よく知ってるわ！

何せこのオカ研メンバーの中じゃ一番テストの点数悪いからな！

『自慢するところかソコは』

「そういうやお前、こないだの数学のテスト……ギリギリ赤点免れた点数だったな」

「いや、危ない綱渡りつすねえ！」

「笑いながら言う事か！他の教師陣も言ってたが、お前の場合得意不得意が明確すぎんだよ」

そう言われると自覚はある。

文系は得意だけど、理数系になると俺はてんでダメになる。

『数学なんざ公式覚えりやイチコロだろ』

「その覚えるのが複雑すぎるんだよ」

「イツセー様、ご安心ください。私達が出来る限りサポートを務めさせていただきます」

「だから大船に乗ったつもりでいなさい」

「あらあら、では私も一緒に勉強ね」

「僕も協力するよ」

「皆……！」

やっばこういう時持つべきものは仲間だよな！

「さて、話が纏まった所で、私は一旦北欧へいったん帰ろうと思います」

と、そう言つてロスヴァイセさんが立ち上がった。

北欧に？ナンデ？

『身売りするのか……』

『悲しい女だ、いくら男が出来ないからと言つて……』

コラお前ら！

聞こえる声量で言うんじゃない！

「どつちも違います!! イッセー君! 飼い主なんですから躰を怠らないでください!!」

「や、俺が言つても黙るタイプじゃないっすよ此奴ら」

『人ペットみたいに言うなこのゲロ吐きバージン!!』

「なっ! わたすだつて、好きで処女やつてるんじゃないやねえつて!!」

ほ、方言出とる!

そしてロスヴァイセさんにまた一つ新しい渾名が増えた。

「…コホン。一度北欧に戻り、『戦車』の特性を高めようと思います」

あー…つまりパワーアップの為って事か。

リアスの様子を見るに、どうやら知ってたみたいだな。

見る限り攻撃面は申し分ナシだから…：…となると防御の方が。

「自ら伸ばしたい点があるのなら、断る理由はないわ」

「有難う御座います。あ、それと学園の中間テストの方は既に作成済みですのでご心配なく」

「…あー。そういやこの季節はそうだった！」

またロクに勉強してねえぞ！

どうするよ!?

「レイヴェル、例の件を承諾してくれるだろうか？」

「はいっ、勿論ですわ！」

突然のサーゼクス様の問いに、レイヴェルは元気一杯に快諾した。

い、一体なんぞや？

「実はレイヴェルにイツセー君のアシスタントをしてもらおうと思っていたのだよ」

『所謂マネージャーか』

ま、マネージャーか…：…そういやそんな話してたような、してないような。

「イツセー君はこれから忙しくなるだろう。人間界の学業でも、冥界での興行でも。今はグレイフィアがグレモリー眷属全体のスケジュールを管理しているが、それでも限界がある。それならば、今のうちからイツセー君にはマネージャーをつけるべきだと思う。そこで冥界に精通し、人間界でも勉強中のレイヴェルを推薦したのだよ」

まさか本当にマネージャーが付こうとは……一気に有名人って自覚が湧いて来たぞ。

あ、でも待てよ。

「レイヴェル、本当に良いのか？」

「へ？」

「如何したイツセー」

「いや、レイヴェルって本来ならフェニックス家の賓客でしょ？それを一個人の俺の為にそこまでしてくれるのは、なんか申し訳ないって言うか……や、別に頼りにならないって言うてるわけじゃないんですけど……良いのかなって」

俺がそう言うのと、先生は呆れたように溜息を吐いた。

「お前ホントに肝心な所でニブチンだな」

「はっ。」

「とにかく、お前はそう言う事気にしないでいいんだよ。本人もやる気なんだし、それで十分じゃねーか」

「そうですわイツセー様。これは私自身の意思で努めたいと思っっているのですからー！」  
「そう、そう言われると照れるな……。」

「そう言う訳だ。早速で悪いがレイヴェル、昇格試験についてイツセー君をサポートしてあげてほしい」

「分かりました！このレイヴェル・フェニックスめにお任せください！必ずやイツセー様を昇格させてみせますわ！早速、必要になりそうな資料などを集めてきますー！」

「そう言うトレイヴェルは早速に部屋を飛び出していった。」

『青春だな』

『…青臭すぎる』

「それが青春ってもんさ。それより小猫、油断していると大好きな先輩がレイヴェルに取られちまうぞ……いって！」

「煽るんじゃねーよ」

「ただでさえこの二人どうもピリピリしてるんだから……って、あれ？」

「……………」

「とうの小猫ちゃん本人は何も答えず、心ここにあらずな状態だった。」

「一体どうしたんだろ、小猫ちゃん……。」

## MAGIC127 『激励』

さて、兎にも角にも中間テストを控える中で俺は昇格試験の勉強も並行してやっていくが……如何せん覚える事が多すぎる。

『まあ根っこの方は馬鹿じゃねえから何とかかなるだろ』

けどなドライブ。

戦術面はまあ何とかするとして、勉強に関してはマジで大変なんだよ。

しかも悪魔の事なんて一年も経ってないからあんまり覚えてられないし……このままじゃ俺の頭パンクするよ。

『なら断れば良かったらうに』

……確かに、もう一年待つてから地道に昇格していつても良いかとも思ったけど、魔王様達が推薦してくれたんだぜ？

それを無下に断るってのも何だか悪いだろ？

……それに、昇格すればそれだけ俺の活動や発言権だつて大きいものになる。そう考えたら、悪い話じゃないと思つてさ。

『駒さえ持てれば眷属だつて増やせるしな』

「そうそう、何も悪い話じゃないんだよ……まあ、勉強は苦手だけど。」

「あれ、兵藤」

「んあ?…よお、匙」

と色々話してると、偶然匙と出くわした。

———

まあ立ち話もなんだと言う事で、俺は生徒会室にお邪魔させてもらった。

「そういう昇格の話聞いたぜ。おめでどう」

「サンキュー。…まあ、まだ実感湧かないけどな」

俺はそう言うが、匙は「いやいや」と首を横に振る。

「俺は妥当だと思っぜ。お前、かなりの死線を潜り抜けてるじゃん。神様との戦いや京都での戦いにも参加したけどさ、あれは何回死んだって可笑しくないじゃん」

「生き残っちゃったけどな。死んでたら楽だつて何回思った事か」

「でもお前はちゃんと生きてる。それが証明だろ?」

…そりゃそるか。



「一本取られたな。あんがと、匙」

「おう。そう言えばお前だけなんだな、飛び級で上級試験受けるのって」

「ああ。何故か俺だけ特例らしい」

木場と朱乃さんも上級悪魔名乗っていい実力だと思っただけだな。

「あーあ。俺も速く昇格したいぜ。ま、当面は強くならなきゃな」

「問題ないだろ。龍王のヴリトラだつて付いてんだからよ」

「いや、シトリーのメンバー全員で強くなりたいんだ。最近会長はグリゴリに相談してんだ」

「グリとゴリに？」

「ああ。人口神器についてさ」

確か先生も使ってるやつか。

「ああ。俺達シトリー眷属はさ、アザゼル先生の実験によく付き合ってるんだ。一つの成果として、今度シトリー眷属の非神器所有者に人口神器を取り付けてみようって話になつたんだ」

「へー、いい話じゃん」

「けど人工物なわけだから、出力も安定しないし、回数制限もあるから、まだまだ改良の余地があるんだ。けど強くなれるのは確かだし、やっておいて損は無しだ。それに人口

神器の研究が進めば近い将来、悪魔の戦力になるかもしれないだろ？」

「確かに、一理あるな」

俺が頷くと、匙は楽しそうに語る。

「俺が貰う訳じゃないけど、結構いろんな種類があるんだ。パワー、サポートとかタイプ別もあれば系統も属性系、カウンター系、結界系とか、種類も豊富なんだぜ。俺達みたいにモンスターと契約、封印したタイプもあるんだってさ」

「封印と契約ってどっちもカード系のヒーローでありそうだな」

「俺もそう思った！」

じゃあ先生が使ってるのは契約系なのか。

『ああ。ファープニルとの契約で体を成してる訳だからな』

俺もちつとは神器について研究してみようかな。

覚えてて損はないだろうし。

「あー、兵藤君だ」

と、ここでお下げの少女——シトリー眷属の『僧侶』草下さんがやって来た。

後ろには他の眷属メンバーも勢ぞろいだった。

「昇格推薦おめでとー！」

「サンキュー。ま、やれる所まで頑張るよ」

礼を返していると、一年の『兵士』仁村さんが匙に何やら言っていた。

「元士郎先輩。会長が例の資料を取りに行けと仰っていましたよ」

「おう、了解」

そこへ更に二年のもう一人の『僧侶』花戒さんが匙に用件を告げた。

「元ちゃん、私の用件も会長からの用事なの」

「マジか、ブツキングしちまつてるな……。取り合えず、近い所から行くか。じゃーな兵

藤」

「おう、頑張れよ」

匙は手を上げて応えると、花戒さんと仁村さんを連れて行った。

そーいやあの二人の女の子、匙を巡っての恋のライバルだつて聞いたな。

アイツも罪な男だねえ。

『『お前／貴様が言うなよ』』

ハモるほどかよ!?!……まあ、否定はしないけど。

と、ここで俺にそれを教えてくれた『戦車』の由良がサイン色紙を差し出してきた。

「兵藤、いきなりで申し訳ないが、サインをくれないかい?」

「俺ので良いの?」

「勿論。この間のバアル戦、記録映像で見て感動したよ。最高の殴り合いだった」

「うんうん。それにあの鎧姿、とっても綺麗だったわ」

どうにも由良は俺のファンらしい。

何でも泥臭い男が好みなんだとか……俺、そんなに泥臭いかな？

『大体殴り合ってるし、間違いではないだろう』

まあ、それもそうか。

けどこう言うファンがいるのは嬉しいもんだ。

由良は美少女だから猶更だぜ。

因みに今褒めてくれたのは『騎士』の巡さん。

彼女はギャスパー派なんだとか……思いつきり兎ポ案件な気がするの、この際置いておこう。

「あら兵藤君、来ていたのね」

ふと見知った気配がしたので振り返ると、そこにはソーナ会長がいた。

「あ、お邪魔してます」

「ええ」

相変わらずクールだな。

『不愛想と言うのではないのか』

コラ、失礼な事言うな！

聞こえてないから良いけども。

「お客さんが来ているけれど、皆に用事を頼みます。椿姫が部活等で苦戦しているそうです」

「「はい！」」

おお、元気な返事。

まるで軍隊みたいだな。

「じゃーね、兵藤君」

「おー、頑張ってるな」

皆速足に生徒会室を後にしていく——つまり今この場にいるのは俺と会長だけになる。

シーンと静まり返る中、会長は自分の席で書類に手を付け始めた。

「えーと……じゃあ、俺もこの辺で……」

「兵藤君」

場違いだろうと思ひ退室しようとしたが、会長に呼び止められる。

「……リアスの想いに、応えたそうですね」

まさか会長から聞いてくるとは。

「え、ええ。……もしかして、リアスから？」

「ええ、貴方がグレイファイア様と恋人になってからは、俄然燃えていました。まあ最近  
はよく惚気話を聞かされますが」

「……なんか、すみません」

まるで俺が悪いみたいな錯覚に陥り、自然と謝ってしまおう。

けど会長は特に意に返さず、俺に視線を送ってきた。

「……あなたは、私が出来そうになかった事を全て叶えるのね」

「……と言うと？」

「婚約——ライザー・フェニックスの件、木場祐斗君の件、ギャスパ―君の件、小猫  
さんの件、朱乃の件……リアスが抱えていたものを貴方が全て軽くしたの。……私は、  
貴方よりも長くリアスの傍にいました」

……確か、二人は幼い頃からの付き合いだつて聞いたな。

「ですが、私には何も出来なかった。『上級悪魔だから』『悪魔の仕来りだから』と、概念  
に捕らわれ、それらの壁を私は越えられなかった。……でも貴方は、それらを意に返さ  
ず解決していった。私はそれがたまらなく嬉しかったし——」

『妬みもした、か？』

ドライグにそう言われるが、会長は否定する事無く「ええ」と言い切った。

「でもだからこそ、お礼が言いたいのです。……リアスを救ってくれて、ありがとう」

「…いえ。でも、彼女を救ったのは俺だけじゃないです。会長だってそうです」  
「…私か？」

会長は呆気に取られた様子だった。

「だって俺がリアスに関わるよりも前に、会長はずっとリアスの傍にいた。例えその立場から救えなかったとしても、会長の存在は、リアスの確かな希望になってたはずですよ。会長は、リアスの心の救いになってたんです。……じゃなきゃ、あんなに威風堂々と出来ないでしょ？リアスにとって会長は、心の拠り所の一つ——希望なんですよ」

「——ッ」

俺の言葉に、会長は暫く沈黙した………が、やがてフツと表情を崩した。

「ありがとう、兵藤君。希望の魔法使いである君にそう言ってもらえると、嬉しいわ。……そうだ、プライベートの時はイツセー君で良いかしら？」

「は、はい。どうぞ好きにお呼びください！」

「…リアスの事、よろしく願いますね？」

「…勿論っす！」

俺の返事に、会長は満足そうに頷いてくれた。

「代わりと言ってはなんだけど、私の事もソーナで良いわ」

「えーっと、ソーナ先輩？」

「ふふつ、呼び方は君に任せるわ。それにしても切り替えが早いわね」

あ、ちよつと可愛いつて思った。

普段がクールなだけに、ギャップが凄まじい……匙が惚れるのも分かるな。

「公私を分ける男性は素敵ですよ？」

「そんなもんですか？」

「そうです……私も彼氏作ろうかしら」

おー、これは新鮮なお言葉。

「あ、じゃあ匙とかは？」

「サジは……そうね、弟つて所かしら。それに彼を慕う眷属の子も多いから、手なんて出せないわ」

『あー、こりや脈ないな』

…匙、道のりは長く険しいけど、頑張れ。

「あ、それと昇格の推薦、おめでとう。私からもお祝いを言わせてもらおうわ」

「ありがとうございます！頑張ってみます！」

「ええ」

会長からも激励とお祝いの言葉をもらったぜ！

「イツセー君！私からもおめでとう☆」



「は……って、セラフォル様?!」  
「お姉様!」

最後にはまさかの魔王様が登場したのであった。

## MAGIC128 『獣の難』

「——だあああ!! 疲れたーっ!!」

勉強会、そして並行して行っていた悪魔家業を終えた俺は自室のベッドに突っ伏して  
いた。

…やっぱり勉強なんて大嫌いだよ!

『夜だからまだ良いだろ』

…まあ、悪魔だから、その辺は助かってる。

今は女性陣がキッチンで夜食を作っている。

何て言うか、皆良くこんな俺に付き合ってくれるよな……リアスや朱乃さんも夜遅く  
まで俺の勉強を見てくれる。

朱乃さんなんて俺と同じ立場だったのに……それでもやはり負担はあるようで日中  
は保健室で寝ちやったりしてるみたいだ。

うっし! 皆がここまでしてくれてるんだ。

俺が弱音吐いたらダメだな、ここは少し仮眠をとろう!

少しだけ寝て、そこからまた勉強再開だ！  
つつー訳でドライブ、アラーム宜しく！

『しよーがねえなー』

サンキュウ！

さて目を瞑ったのは良いが、ここで扉の外に一つの気配を感じた。

俺が気になってそちらを見ると、扉が開かれた。

「…小猫ちゃん？」

訪問者は小猫ちゃんだった。

…何故か白装束を着て、猫耳と尻尾を出していたが。

確か最近は何子が悪いから、悪魔の仕事も休みを入れていた…今日もそうだったし、一体どうしたんだろ。

そう思う俺の眼前、小猫ちゃんは妙に艶のある表情を見せつつ、白装束の裾をたくし上げた。

そこには――

『……わあお』

『……ほう』

「——ッ!?!」

ドライグの驚嘆、ドラゴンの意外そうな声が聞こえる中、俺は啞然とした。

何故なら——履いていないのだ。

その衝撃たるや……俺はもう一度目を擦って見るが、やはりそこには何も纏わっていないなかった。

……つて!

「小猫ちゃん!か、隠して!!」

俺は慌てて声を上げるが、小猫ちゃんはまるで気にした様子もなく、恍惚そうな表情を浮かべ、俺に抱き着いてきた!

訳が分からない俺の耳元で、小猫ちゃんが囁いた。

「……先輩、切ないです……」

「はい?!」

そんな官能的なセリフを囁くと、小猫ちゃんは俺の手を取って自分の胸に押し付けてくる。

掌に感じる柔らかさを実感していると、小猫ちゃんは甘い喘ぎ声を漏らす。

「ッ……にやああ……!」

「ちよ、ちよつと……うひい!」

止めようとしたその時、首筋をざらりとした感触が襲った!

この感じ……こ、小猫ちゃんの舌か!

改めて確認すると、小猫ちゃんは俺の首筋に舌を這わせていた。

な、何だこの舌遣い!? 情事の時のグレイフィアもこんな舌遣いだったけど……そう思っていた俺に、小猫ちゃんは更に爆弾を投下した。

「先輩の、あ……」

「あ?」

「……赤ちゃんが、欲しいです……」

——ッ

『随分大胆な告白だな』

『さあどうする? 応えてやらねば男が廃るぞ』

いやいやいや!!

俺まだ子供とかは早いって思ってるし、そもそも小猫ちゃんの様子が変だ!

……ここは少し荒っぽくなるけど、仕方ない。

「小猫、ちゃん……ゴメン!」

「！」

俺はガツと上体を起こして、小猫ちゃんを布団の上に押し倒す。

そして小猫ちゃんが呆気にと取られている隙に、指輪を小猫ちゃんに嵌め、腰に宛がった。

《スリープ・プリーズ》

「……」

すると小猫ちゃんは糸が切れた人形のように倒れ込む。

魔法がキチンと効いたみたいだな。

……兎に角、小猫ちゃんの異変について調べないとな。

## MAGIC129 『発情期』

「猫又の発情期か」

あれから連絡を受けたリアスが呼び出した先生が小猫ちゃんを診て、そう訊いた。

小猫ちゃんの状態を確認したのは、駒王学園の魔物使い、安倍先輩だ。

すると、「小猫ちゃんは子孫を残したいという本能の状態になっている」と診断されたんだ。

小猫ちゃんは現在、安倍先輩が調査してくれた薬を飲んで自室で休んでいる。

その薬が効いたのか今は落ち着いている。

『確かに、見た感じじやありや完全に猫の発情状態だったな』

「魔力とかを安定させてもダメか」

『生物の本能みたいなもんだからな。だがあの未成熟な状態だったら来るのはもうちょい先なはずだ』

ドライグの言にはアザゼル先生も頷いていた。

「猫又の女は子供を宿せるようになって暫くすると一定周期で発情期に入る。要は猫又の本能が働いて子孫を残すために子作りしたくなるんだよ。その辺は猫と同様だな。

猫又の女の特性上、相手は気に入っている異種族の男ってわけだ。つまりはおまえだよ、イツセー」

「俺っすか……。でも、未成熟な状態だったら来るのは早すぎるんでしょ？それは何で……」

「恐らくだが……」

アザゼル先生は推測を口にした。

「イツセーとグレイフィアが恋仲になって、最近だとリアスとも親密になっただろ？それを見て焦ったんだらう——次は自分だつてな」

『『あー……つてハモるな!!』』

合点がいった様に納得した二人は相変わらず仲良さげにハモっていた。

「では、私達の行動で小猫様を発情期にさせてしまったのでしうか」

グレイフィアは若干気落ちした様子だった。

『そんなもの、勝手にあの猫娘が焦っただけだ。気落ちする必要はなからう』

「お前もうちよつと言葉選べよ」

ドラゴンの辛辣な意見に突っ込みつつ、今後の方針を決める事に。

「一番なのはイツセー、お前が我慢する事だな」

「小猫ちゃんが落ち着くまで……ですか？」



「ああ。エロゲー魔人のお前にや垂涎もんのシユチュだろぅけどな」

「あー、大丈夫つすよ。俺、年下には興味ないんで」

俺が自信たつぷりにそう言うのと、何故か周りがシンと静まり返った。

「アザゼル総督」

「ん？」

「イツセー様のこの態度も一因なのでは」

「今この場の奴ら全員そう思ったよ」

何でだよ!? 今のは理不尽じゃね!?

『いや、お前が言うか?』

「…ゲフン! まあ何にせよイツセー。小猫と子作りはするなよ」

「了解つす」

何か釈然としねーけど……小猫ちゃんの為を思うなら安いもんだ。

「それと朱乃。例の話だが…バラキエルは承諾した。俺もそれで良いと思う。後は、お前の意志次第だ」

「父が…そうですか。分かりました。これ以上、眷属に迷惑はかけられませんから。――

ギヤスパー君も頑張っているのですもの、私も近くに必ず」

先生の言葉を受けて、何やら決意に満ちた表情を見せる朱乃さん。

リアスは……知っているみたいだな。

「分かった。——ま、この話は置いておきましょう。皆、ちよつと良いか」

先生は改まった声音で俺達全員に呼び掛けた。

「明日、この家に訪問者を呼ぶ予定だ。リアス、それについての了解を取りたい」

「……この家の決定権はイツセーと茂さんだと思ふのだけだ」

「茂殿には確認済みだ。後はリアス、それとイツセーだな」

急だな……つてかおつちゃんにも許可取つたのか。

「その訪問者だが……お前達はそいつに不満、いや、殺意を抱いてもおかしくはない筈だ」  
「それ程なの？」

「ああ」

……ドライグ、どう思う？

『ううむ……。なあアザゼル』

「何だ？」

『その訪問者とやらは、今のこの情勢に酷く影響を与えたりする人物なのか？』

「……」

先生は何も答えなかった……つて事は、ドライグの質問は、当たり？

『だとしたら……アイツ辺りか』

「おいドライグ」

『安心しろ、言うつもりはない。それに確証はないし、俺個人の想像だからな』

「ドライグ、心当たりあるのか？」

『ん、ああ……ま、明日になりや分かる。あんまり気張るな』

いや、そうは言われても気になるんだけど……。

ヴァーリ……は、そこまでではないな。

アイツ、普通にエロゲ借りに来たりするぐらいだし、立ち位置がひどく微妙なんだよな。

「……兎に角、明日の朝まで待ってくれ。現段階ではそれしか言えん。だが、俺の願いとしては決して攻撃を加えないでくれ。話だけでも聞いてやればそれで十分なんだ。――

――上手くいけば、情勢が変化する大きな出会いになるかもしれん。俺も明日、ここに来る。――だからこそ、頼む」

先生はそう言つて俺達に頭を下げた。

疑問と不安が絢交ぜになりつつ、俺達は次の朝を迎えた。

## MAGIC130 『無限との邂逅』

次の日の朝、インターホンが鳴らされ、対応すると——黒いゴスロリ衣装を着た女の子が玄関に立っていた。

どこか優さを感じさせるその女の子に対し、俺は既視感を感じた………って、  
「…オーフィス？」

「イツセー、久しぶり」

そう言うが否や、玄関に集結していた眷属全員が臨戦態勢になった！

ただ俺は何故だか冷静だった。

何だろうか、異常すぎて一周回って冷静になるとか、そういう感じかな。

『あー、やっぱお前だったか』

「何だ。ドライグの予想当たってたのか」

『まあ、殆ど消去法だがな』

ドライグがそう言うと、全員の視線が俺の左手に集まった。

「ドライグ、どういう事？」

『昨日の反応からして各勢力に対して碌でもない事してる奴だつてのは分かった。じゃあ誰なんだつて考えたんだが……白龍皇の小僧は殆ど敵対してるとは言えん状態だから多分違うだろうし、聖槍の小僧は論外。となれば後は此奴しかいないだろ』

「だけどこれは明らかに協定違反よ！ここにオフィスを招いたと言う事は、ここを警備してる者達も騙して入れたつて事でしよう!?どうしてそこまでして——」

「リアス」

「……………イツセー」

俺はリアスの肩を掴んで、それ以上の言及を止めさせる。

「先生だつてそれは十二分に理解してるだろうし、何よりあんだだけ和平だ協力だと言つてた先生が招いたんだ。多分この訪問がそのカギになつてると判断したんじゃないのかつて、俺は思うし、リアスだつてそう思つてるんじゃないのか？」

「それは……」

「それに大丈夫だよ。オフィスを妄りに攻撃したりしないし、この状況の危うさも、オフィスを自身も分かつてる筈だ。だろ、オフィス？」

俺はオフィスの方を振り返り、そう聞くが——

「……？」

オーフィスは静かに首を傾げるだけだった。

「リアス、駄目っぽいかも」

「駄目じゃない!!」

リアスの悲鳴のような突込みが響いた。

だけどリアスは漸く落ち着いたらしく、アザゼル先生が改めて説明してくれた。

「お前の言う通りだ、リアス。俺は此奴をここに招き入れるために色んなものを現在進行形で騙している。だが此奴の願いは、もしかしたら禍の団の存在自体を揺るがすほどのものになるかもしれないんだ。……無駄な血を流さない為に、それが必要だと俺は判断した。改めてお前達に謝り、願う。———すまん、頼む。此奴の話だけでも聞いてやってくれないだろうか？」

『ならそれ相応の対応があるだろうお?』

『土下座 k t k r 』

お前ら先生が珍しく真面目シリアスしてるんだから少しは自重しろよ。

「その言い草だといつもボケ倒してるって事かあ?」

『見ろ相棒。本性を現したぞ』

『本当に済まないと思ってるなら五体投地土下座なり焼き土下座でも見せてもらおうか』

「何だその土下座攻め!? お前サイボーグの生まれ変わりじゃねえのか!？」

「先生、例によって例の如く話脱線しまくってます」

駄目だ、このままじゃボケ合戦でこの一話使い果たしちまう。

オーフィスもきよとん顔だ、そりやそうだよな！

リアスは頭を押さえて息を吐きながら、先生に訊ねた。

「…それで、上にあげてお茶でも出せばいいのかしら?」

「我、オレンジジュースが良い」

「我が物顔で注文されても…：そう言えば、オーフィスだけなの? ヴァーリチームは?」

「ああ、それなら——」

先生が言うよりも早く、玄関前に小さい魔方陣が出現した。

そこから現れたのは、嘗ての金色の魔法使いみたいな尖がり帽子にマントと言う出で立ちのヴァーリチームの魔女っ娘ルフエイちゃんと、灰色の毛並みが特徴の巨大な狼だった。

「…フェンリル」

そう、この狼は——以前悪神ロキとの戦いでヴァーリが連れ去ったフェンリルだ。

神（notゲム）をも殺す牙とドラゴンの鱗すら切り裂く爪を持った危険度MAX

の魔獣……ヴァーリチームの一員になったんだっけか。

「こんにちは、以前京都ではお世話になりました、ルフェイ・ペンドラゴンです！そしてこちらはフェンリルちゃんです！」

「ちゃん付けかい……」

フェンリルの品位が下がって行ってるような……そう思っていたら、俺の両脇から小さな影が飛び出してきた！

『ワン！』

俺の使い魔、ハティとスコル——何を隠そう、目の前のフェンリルの子供だ。

久しぶりに父親に会えて嬉しいのか、ピョンピョン跳ね回る二匹と、それを何処か微笑ましげに見守るフェンリル。

…感動の親子対面、って訳だな。

うんうん、良きかなと内心頷いていると、フェンリルが突然光り輝きながら俺の元に歩み寄ってきた！

呆気にとられて見ていると、フェンリルは俺より高身長な青年になっていた。

そして手元には、何やら紙袋が。

「……ええ？」

「…お前には、我の子等が世話になっている」



……つまり、お礼って事？

取り合えず受け取ると、フェンリルはまた獣に戻ってルフェイの傍に向かっていた。

「あ、ありがとな」

お礼を伝えると、フェンリルはフンと鼻を鳴らした。

『良かったな相棒。フェンリルから例の粗品を貰うなんてお前ぐらいだぜ』

俺もびつくりしてるよ。そう思っていたら、魔方陣がもう一つ現れ、そこから何者かが俺に飛び付いてきた！

まず顔面を感じたのは柔らかい感触、そして視界は健康的な肌色が支配していた。

「おっひさく、赤龍帝ちゃん！」

「く、黒歌！」

そう、俺に抱き着いてきたのはグラマーな猫？お姉さん、黒歌！

何を隠そうって言うかも隠す必要もないけど、小猫ちゃんの姉さんだ！

黒歌は楽しそうに俺の抱き着いていたが、やがて鼻をスンスンと鳴らして俺の匂いを嗅ぎ始めた。

「あれ？赤龍帝ちゃん、童貞卒業しちゃった？」

「分かんの?!」

「そう言うのには敏感なの♪……そっかあ」

な、何だ？急にしおらしくなって……そしてオフィスはそんな俺をじっと見つめて  
いる。

「イツセー、鼻の下、伸ばしてる」

「…イツセー様？」

ちよ、オフィスの一語でグレイフィアが静かに怒ってる！

「黒歌、離れてくれ！頼む!!」

「え〜？……まあ、しようがないにゃん」

不満そうに唇を尖らせる黒歌だったが、何とか離れてくれた。

状況が落ち着いたのを見てか、先生が進言してきた。

「兎に角、お茶でも出してやってくれ。さっきも言ったが俺はこの為に他の勢力を騙して  
る。これがバレて悪い方向に進んだら、ホントに俺の首が飛んじまうから」

『それも面白そうだけどな』

「確かに」

『アザゼル危機一髪、か……フツ』

「今鼻で笑ったな!!言つとくが全然上手くねーからな!!」

とまあ終始グダグダではあったが、かくしてテロリスト集団のトップをもてなす事になった。

父さん、母さん。

我が家に、またオフィスが来ました。

# MAGIC131 『無限との対談』

えー、こんにちは、イツセーです。

「……………」

例のVIPルームにオフィスを招いてから、凄く異様な空気です。

周囲の警戒した視線にも構わず、オフィスは差し出されたオレンジジュースを啜っていた。

「イツセー」

「ん、どした?」

この空気の中、唯一俺だけが特に警戒せずオフィスの問いに答える。

オフィスはプレーンシユガーを食べながら、口を開いた。

ああもう、砂糖ついてるじゃんか……。

俺がそれを拭うのを待ってから、

「…ハルトと、コヨミは?」

そう聞いてきた。



皆の絶叫が間髪入れずに響いた。

「な、お前何でそんな事……!!」

「だって聞かれなかつたし……」

『いきなり切り出すのも変だろうし、話すタイミングにも相棒が警戒されかねんからな』

そう、ドライグの言う通りだ。

あの会談の時に言おうとすれば、俺は忽ち今みたいな環境にはいれなかつたかもしれないし。

「……ゲフン！ まあそれはまた追々追及するとして……オフィス、一体イツセーに何の用なんだ？」

「……」

オーフィスはプレーションシユガーを一頻り頬張つてから飲み込むと、俺の方に振り向いた。

「……ドライグ、天龍を辞める？」

……俺の名前じゃなくてドライグを呼んだ、つまり――

「ドライグに質問してるのか？」

俺の問いに、オーフィスは肯定も否定もせず、ただじつと見つめるのみ。

そしてその沈黙を破るかのようには、俺の左手に籠手が出現した。

『…さあな』

「曹操との戦い、バルとの戦い、そのどれも、イツセーは異なる進化をした。鎧も、銀と水色になった。我の知っているドライグの力とは、根本的に違う。だから、訊きたい」  
『そこそ俺には何とも言えん。まあ見てて飽きない宿主なんざ、此奴ぐらいだろう。此奴は、今までのどの宿主とも違う成長を続けているからな』

オーフィスは視線を籠手に向け、話を続ける。

「二天龍、我を無限、グレートレッドを夢幻として、『覇』の力の呪文に混ぜた。ドライグ、何故霸王になろうとした？」

『…力を求めた結果だろう。その末がこの様だがな』

ドライグは自嘲気に笑った。

『あの頃の俺はどうしようもなかった。ただひたすら、力を求め続けた。その先の結末なんて考えもせず、多々真つ直ぐに……『覇』以外の力を高める事に、あの時の俺では一生気付けなかった。俺の赤が色んな色になるなんて、予想すらしてなかった』

「我、『覇』、分からない。禍の団の者達、『覇』を求める。でもイツセーは、『覇』を違う

ものにした。分からない。グレートレッドも『覇』ではない。私も『覇』ではない」

『お前達二人は最初から最強だった、故にわかりやしないさ。：：オフィス、相棒が幼い頃、お前は既に次元の狭間から抜け出てこの世界に現れた。だからこそ知りたい。この世界で何を心得て、そして何をもちて故郷に戻りたいと思つた？』

「私も質問したい。ドライグ、イツセーと共に何故違う存在になろうとする？天龍、辞める？その先に何かがある？」

……………何話してるのか全つ然分かんねえ。

『兵藤一誠』

『何だ？』

『…此奴、昨日おかしなものでも食べたのではないか？こんな真面目な馬鹿は初めて見たぞ』

お前なあ……………珍しくドライグがシリアスやつてるんだからそんな野暮な事言うなよ！

『…質問を質問で返すか。そうだな——相棒は絶望は求めない。だからこそ、先代から築かれていった『覇』を、絶望を否定した。それを己の望む希望へと変えた。そして、力の権化でしかなかった俺でも、誰かを勇気づけ、励ませる希望になれると言うのを、教えられた。……………この、どうしようもないバカにな』



勇気づけ、励ませる希望………多分、「ウィザードラゴン」の事だろうな。  
楽しそうに音声収録をしていたのを思い出して、口元に笑みが浮かぶ。

『相棒が、兵藤一誠が俺の求めた『覇』とは違う存在になろうと言うのなら、俺もそれになつてみたい。確かなのは、それだけだな』

「……やつぱり、面白い。ドライグ、イツセー、もつと見てみたい」

オフィスの表情に変わりはないが、その瞳は興味津々と言った感じだ。

無表情だけど、好奇心旺盛なのは相変わらずだな。

「……つー訳だ。数日だけ、此奴らをここにおいてくれないか？オフィスは今言った様に、お前を見ていたいただけなんだよ。そこに何の理由があるのか分からないが、見るだけなら良いだろう？」

「良いっすよ」

「即答かい！もうちよつと躊躇うとかしろよ！」

いや、だつてオフィスは自分から暴れるタイプじゃないし。

「それに、血い流さずに終わるならそれに越した事はないじゃないっすか。まあ英雄派が大人しくなる訳じゃないっすけど……俺は構わないっす」

「…イツセー様が宜しいのでしたら、私も構いません」

「そうね…、私達よりも、イツセーの方がオフィスの内情には機敏でしょうから。当然

警戒はさせてもらうけど、それで良いならこの条件を呑むわ」

グレイフィアやリアスも、どうやら同意してくれるそうだ。

『…貴様は相変わらずイベント要因として事欠かないな』

「だから何度も謝ってるだろ！」

『じゃあ土下座しろ。土下座』

「お前何時もの感じに戻ってるじゃねえかドライグ！さつきまでのシリアスモードはどうした!？」

『いや、あんまりシリアスやりすぎて肩凝っちまって。だから息抜きに、土下座みせてくれ』

「魂だけの癖して肩なんざ凝るわけないだろ後俺の土下座も安いもんじゃねーんだよおおお!!!」

『『愉悦、愉悦』』

お前らホント仲良いな……あ、そうだ。

「今受験シーズンだから、勉強の邪魔だけはしないでくれな？」

「分かった」

「赤龍帝ちんのゲームでもやつとくから、無問題にやん」

また勝手にセーブデータ進めんのか!?!内心叫んでいると、そんな俺の眼前にサイン色

紙が突き出された。

差出人はルフエイで、もじもじし乍ら、

「あ、あの！この間のバアル戦、とても感動しました！！差し支えなければ、サインを下さ  
いっ！！」

とか言ってきたせいで、肩の力が抜けた。

そういやファンだったっけ、この魔女っ娘。

「りよーかい」

ホントに、俺の周りには変わった奴が多いなあ。

# MAGIC132 『試験勉強+α』

よお皆、イツセーだ。

今日も今日とて試験勉強に勤しんでおります。

でも普段の光景に、何とゴスロリ少女が追加されたのです!!

「……」

何を隠そうこのゴスロリ少女、俺達と敵対するテロリスト集団の親玉にして、最強のドラゴン・オーフィスなのだ。

何でも俺の事を見ていたいんですって奥さん!……って、誰に言ってるんだろ。

皆は集中しつつもオーフィスにチラチラ視線を送っているけど……そんなにな気になるのかねえ。

『そりゃ精神衛生上は落ち着かんだろう。お前は幼少期に交流があるからまだマシだろうが』

そうは言うけどさドライブ、皆だって敵意や戦意は感じてない筈だぜ？

そこまで気にする事ないと思うけどな。

『……お前のその凶太さはある意味尊敬できるよ』

誉めてねえだろお前。

『……駄弁つてる暇があるなら、少しは暗記に勤しんだらどうだ』

これでも結構覚えてきた方だぜ？

……まあ、応用問題とかその辺はまだ完璧じゃないけど。

あ、そうだ。

今日は調子が良いのか、小猫ちゃんもここに顔を出して勉強をしているんだ。

「小猫ちゃん、大丈夫？」

「……うん、大丈夫」

ギヤスパアの気遣いにも微笑んで返していたけど……やっぱりまだ頬は赤いな。

あれから小猫ちゃんが俺の元に来ることは無くなった。

出来る限り顔を合わせない様にお互い気を付けてはいるが……ちよつと寂しいよな。

向こうも寂しそうな顔を見せるし、何とかしてあげたいけど、俺が触れようものなら

また発情しちまうから、何もしないのが俺に出来ることだ。

『それにお前の言動にも問題はあるからな』

問題って……年下のロリっ娘にハアハアする方が問題だろ。

『まあそれはそうだがな。向こうはお前を好いている。女として見られたいと言うのは至極当然の想いだ。なのにお前と来たら……』

……何が言いたいんだよ。

『何時までも子供扱いしてないか？という事だろう』

——それは。

『確かに向こうはお前より年下だ。だけど、それ以上に女でもある。お前だって、何時までもそんな扱いは出来ない事ぐらい、分かってる筈だろ』

………そう、だな。

小猫ちゃんが落ち着いたら、ちゃんと向き合わなきゃ、な。

「イツセー様、ペンが止まってますわよ！」

「はい、すみません」

………兎に角、今は勉強に集中しないと駄目だ！

『今年も理数系で赤点かねえ』

うるせえ!!

———  
そんなこんなで、昇格試験が目前に迫った深夜。

勉強をキリの良い所で終わらせて、早目に寝ようとしたんだけど、階段の上から何やら何時もと違う空気を感じた。

一応確認しておくか、と思い階段を登り、ある部屋の近くまで足を進める。

「ここは……小猫ちゃんの部屋か。」

「」

「」

僅かに開かれた扉からは話し声が聞こえる……この気配は、アイツだな。

気配を殺して様子を伺う事に。

「ふん♪一目で白音が発情期に入ったって分かったにやん。あの男の遺伝子が欲しくて堪らないのかにや？」

「……姉様には関係のない事です。ここから出て下さい」

「そんなつれない事言わないでよー。何だったら、彼を落とす方法でも伝授してあげて

も良いにゃん♪」

……あの野郎は。

溜め息を吐くと、俺は部屋に入る。

「処女だつて言つてた割りには随分口達者だな」

「つ、先輩……………」

「あらあら、赤龍帝ちん。覗きに來たのかにゃ？」

そう目の前の着物猫娘——黒歌と語らう間、俺は横目で小猫ちゃんの様子を伺う。

俺を見た途端、その尻尾は縦横無尽に振り回され、極度の興奮状態だというのが分かる。

けどその顔は赤く、体調が優れないのも見てとれた。

「黒歌。小猫ちゃんの事を少しでも慮つてるなら余計な事を吹き込むな」

「心外にゃ。私は白音を見て発情期に入つたつて分かつたから、様子を見に來ただけよ？」

「その前に面白そうだから、を入れるべきだろ。お前の場合」

「是非もにゃいわね」

舌を出して笑う黒歌だったが、不意に小猫ちゃんの腕を取ると——



「今の白音はとつても敏感な状態にやん。例えば……」

そのまま俺へと小猫ちゃんを突きだした！

咄嗟に俺は小猫ちゃんを抱き止めたけど、直ぐに不味いと悟った。

「っ……………」

その勘は正解だったらしく、小猫ちゃんは顔を歪めて、目を潤ませる。

「……………にやあああ、先輩っ……………」

そう甘く、官能的な声をあげる。

尻尾も振り回されていたのが、俺の右腕に巻かれていった。

「どんなに理性で押さえ込んでも、本能が好き男の肌に触れちゃえば途端に子作りしなくなっちゃうのよ。——赤龍帝ちゃん、白音はあんたの子供が欲しくて堪らない状態になっているのにや」

「……………だからって、こんな状態の小猫ちゃんを抱けるかよ！」

そう言ってる間に、小猫ちゃんは俺の服を脱がそうとしてくる！

何とか止めようと指輪を嵌めようとするが、小猫ちゃんは鋭い動きで指輪を部屋の隅に弾き落とした！

「っ！」

「はあっ……………先輩、私の体じゃ、ダメですか……………？エッチ、出来ませんか……………？私だって、

十分に先輩を受け入れられます……。リアス部長や、グレイフィアさんと違って、ちっこい体つきですけど……ちゃんとした女の子の体です。だから……先輩の赤ちゃんが欲しいです……………」

「小猫ちゃん、落ち着いて……っうお!？」

落ち着かせようとしていたら、小猫ちゃんは俺を床に押し飛ばした!

立ち上がるうとした俺に、小猫ちゃんは覆い被さる様に抱き付いてきた。

「……鳥娘には負けたくない。先輩を取られたくないです……。マネージャーは出来ませんが、先輩の欲求を満たす事は出来ます……………」

……小猫ちゃん、そんな事を。

けど、体で俺の役に立ちたいってのは違うぞ!

君には君の良さがあるんだからさ!

ここで黒歌に目を向けると、心底楽しそうに笑って観戦していた。

「っ、おい黒歌!何とかしろ!お前だつて猫又なんだから、出来るだろ!？」

「そのまま白音を抱いちやわなの?赤龍帝ちんつて案外ヘタレにやん」

『全くその通り』

「ドライグ黙つてろ!据え腹食わぬとかそんな問題じゃないだろ!小猫ちゃんが体壊して、俺との子供を死なせちゃうかもしれない絶望を味わわせても良いってのか!？」

「そう、俺が小猫ちゃんを止めたいのはこれが理由だ。」

まだ成熟仕切っていない体で子供を宿したら、最悪母子共に死ぬ可能性が高い。

もし小猫ちゃんは無事でも、初めて宿した命が絶たれたらと知った時の絶望は、計り知れないだろう。

だからこそ止めたい。そう言うのは、もつと成長してからだ！

それにこれ以上絶望を、小猫ちゃんに味わわせたくないんだ！

俺のこの言葉に押し黙る黒歌。

だが不意に歩み寄ると、俺に迫っていた小猫ちゃん的首筋を指で突つついた。

すると、小猫ちゃんの体が一瞬跳ねると、そのまま力が抜けた様にへたりこんだ。

「い、小猫ちゃん？」

「……白音、これ以上は止めておきなさい。他の女に感化されたんでしようけど、その体で子を宿せば母子共に死ぬわ。……どうしてもこの男がほしいなら、私みたいに発情期をコントロール出来るようになるまで待ちなさい」

発情期ってコントロール出来るのか……。

「まあ、上位の存在ならね。白音だって、何時かはコントロール出来るだろうけど」

「……それは良いんだけどよ、お前その愉快犯みたいな悪癖、止めた方が良いぞ」

「おあいにく様、性分なんだにや♪」

「この悪猫は……と思っていると、新しい来客が。」

「——ちよつと、その黒猫さん？」

「ん？ありやりや、フェニツクスのお嬢さんじゃないかにや」

レイヴェルが来ていた。

「貴女、小猫さんのお姉さんだそうですね？小猫さんは今とても体調が優れませんわ。その子に何か良からぬ事をするのでしたら、クラスメイトの私が許しませんわ！それに、イツセー様からも離れてください！」

おお、レイヴェルが鼻息荒く黒歌に食って掛かつてる！

その理由が小猫ちゃんの為とは……俺感動で泣きそう！

レイヴェルの物申しに、黒歌は暫くきよんとしていたが……。

「白音のお友達、か……。私の知らない間に、この子を心配する子が次々増えてるのね」  
黒歌はそう何処か——安堵した様に微笑むと、レイヴェルのドリルロールを弾ませる様に触れて、部屋を出ようと歩きだした。

「ただどその去り際に——」

「今の白音はとっても不安定なの。だから……無理はさせないであげてね」

「っ」

とても優しげな声で、囁いた。

「……………ああ、勿論だ」

俺もそう返すと、黒歌は安心した様に笑い、今度こそ去っていった。

「小猫さん、大丈夫ですか？」

「つて、何でレイヴェルはここに？」

俺の疑問に、レイヴェルは恥ずかしそうに答える。

「……………一応は、クラスメイトですから。毎晩小猫さんの様子を見に来ていただけですわ！まだ日本に慣れない私の面倒を見るのが、彼女の役目ですし！……………早く復調していただかないと、私の調子もおかしくなるので！それだけですわ！」

……………要は心配だったから毎日お見舞いして、偶然黒歌と鉢合わせたと。  
ツンデレのテンプレだな。

『語るに落ちてるな』

全くだ……………そうだ、小猫ちゃんは!?

「……………ん」

「小猫ちゃん、大丈夫か？」

「……先輩、すみませんでした……私のせいで」

大丈夫そうだな……つて、待て。

小猫ちゃんの顔色、元に戻ってないか？

「ちよつとゴメンよ」

一言断りを入れてから、小猫ちゃんの頬に触れるが……興奮する様子がない。

「……小猫ちゃん。体の調子はどうだい？」

俺の問いに小猫ちゃんは額に手を当てたり、お腹に手を当てたりして、驚いた顔で告げた。

「……普通に戻ってます」

……やっぱり。

「……一体、何が起こりましたの？」

レイヴェルは怪訝な様子だったけど、俺には分かる。

「………つたく、素直じゃねーよな」

ここにはいない気紛れで、それでいて妹想いな黒猫に、そう呟いた。

## MAGIC133 『試験開始』

試験日当日。俺達は兵藤家の地下にある転移魔方陣に集結していた。

服装に関しては何時もと同じ、駒王学園の制服だ。

何しろこれがユニフォームみたいなもんだからな、俺達グレモリー眷属の。

『高校試験の時の様だな』

それは俺も思った。

因みに試験会場である昇格試験センターに行くのは今回試験を受ける俺達3人と、マネージャーのレイヴェルだ。

他の皆は近くのホテルで待機する予定だそうで。

「ん、あれ……………そういやギヤスパーは？」

周りを一瞥すると、ギヤスパーだけいない事に気付いた。

「ああ、アイツなら一足早くここで転移して、冥界にあるグリゴリの神器研究機関に行つたよ」

「一人ですか？」

先生は「ああ」と頷いた。

「バトル戦が終わって直ぐにな、アイツ、泣きながら俺の所に来たんだよ。先輩達のように強くなりたい——ってな」

ギヤスパー……。

「引きこもりの上に臆病だったアイツが、それだけの決心をして一人でグリゴリの門を叩いたんだ。生半可な決断じゃない。今頃、研究員指導の元で、自分の神器と向き合ってる筈だ。それと、あの試合で見せた、お前のエレメントも御せる様になってな」

『基礎だけでなく、自分の能力と向き合うほど切羽詰まってるって事か』

……ギヤスパー。お前がそう決めたんなら、俺は何も言わない。

だから、必ず何かを掴んでこい。

「オーフィス達は？」

「俺達と一緒に。流石に会場まで行ったら俺の首が飛ぶ」

だけどホテルはOKなのか……それも微妙なラインだな。

「それと、お前らの試験が終わり次第、一度サーゼクスの元に出向く。良い機会だからな。オーフィスもお前が行くのなら付いていくと言っている。だから、お前達も試験が終わったらサーゼクスの所に行くぞ」

「マジっすか」



そこまで考えてたのか。

『ここで魔王と出会わせる事には大きな意味があると言うことか』

「ああ。少しでも良い方向に向かわせたいからな。無理だと思われていた話し合いが可能かもしれない。これだけでも大きな一歩だ。オーフィスは何を考えているのかは分からんが、だからこそ、話し合いで戦いを避けられる可能性がある俺は見ている。うまくいけば『禍の団』を瓦解させ、分散できるだろう。そうすれば各個撃破も可能になる。それにオーフィスの『蛇』を失えば、奴らの打倒も早まるだろうさ。この案件を申し出てきたヴァーリには感謝したいところだ」

ヴァーリ様々だな。

「今度お礼言つとかなきゃな」

「礼って……お前、相当オーフィスに入れ込んでんだな」

「そりやそうでしょ。オーフィスは俺の友達ですし」

そう当たり前の様に言い切った俺を、先生はポカンとした顔で見詰めた。

「……ハハッ！まさかテロリストの親玉相手にそう言うとはな」

「だって、前に一度助けてくれたし」

俺が覇龍を使い暴走した時も、アイツは俺を助けてくれた。

だから信じられる、それだけだ。

『もしかすれば、オーフィスを驚異から守ろうとしたのやもしれん』

『……驚異？曹操の事か？』

『ソイツもだろうが……他にも何者かがオーフィスを狙っている可能性も懸念するべきだ。何せ無限の体現者だ、その力を欲する奴は多いし、そういう奴等は縁でもない連中ばかりだからな』

そうか……………。

『ま、今そんな事を考えたって仕方ない。試験に集中しろい』

お前が言い出したんだだろうが！

「じゃ、行ってくるよ」

「イツセー様」

「ん？」

魔方阵の上に乗ろうとした時、グレイファイアに呼び止められた。

何だと思いい振り替えると——ちゅつ、と湿り気を帯びた音が響いた。

「は……………」

「——御武運を。イツセー」

「……………おう！」

グレイフィアからの激励ももらい、俺達は試験会場へと転移していった。

——

……光が止むと、そこは知らない光景だった。

「ここが試験会場か？」

「ようこそお出でくださいました。リアス・グレモリー様の御眷属の方々ですね？ 話は伺っております。一応の確認を出来るものをご呈示ください」

スタッフの人達に言われ、俺達はグレモリーの紋様が入った印と推薦状を見せた。

確認が取れたことで、中へ案内された。

「ここはグラシヤラボラス領にある昇格試験センターなんだよ」

「へえ」

そう言えば試験会場の事全く聞いてなかったな。

……と、そんなこんなで連れてこられたのは、受付みたいな場所だった。

……………思ってたより少ないんだな。

「正面の受付が中級悪魔試験の窓口で、向こうの端にあります窓口が上級悪魔試験の受付になります」

俺は向こうか、そう思いつつ振り向くと……全然受験者がいなかった。

「え、上級って俺だけなのか？」

「そりゃあ、今の冥界じゃ昇格試験は少ない方だよ。イツセー君が受ける上級悪魔試験となると5、6人いたら多い方じゃないかな」

マジかよ……って、そうなったら益々俺達は特例なんだなと実感させられるぜ。

でも冷静に考えたら今の冥界は戦とかなないからな。

稼業の契約でデカいのを取るか、レーティングゲームで活躍しない限りはそうそうないか。

にしたって少なすぎるけどな！

「そうだ、イツセー君」

「んあ？」

木場は真剣な面持ちで、俺の横に立っていた。

「君に出会えて良かった。君に出会わなければ、僕は今ここには立っていなかったらうから」

「……大袈裟すぎるだろ。お前ぐらいなら、俺と出会わなくても余裕でここに立てたつて」

「大袈裟じゃないさ」

木場はきつぱりと言い放った。

「僕はここまで君の生き様、戦いを見てきたからこそ、今ここに立っていると断言できる。僕にないものを、君は沢山見せてくれた。それを知らなかったら、僕はここにはいないよ」

……つたく、キモいこと言いやがって。

「……………そんだけ言うんだ。試験落ちたら殴るからな」

「ハハ、肝に命じておくよ」

木場はそう笑うと、俺に手を差し出してきた。

俺は頬を掻きながら、それに応じる。

「健闘を祈ってるよ」

「お前もな」

そう語る俺達の握手に、朱乃さんの手が重ねられた。

「うふふ、熱い友情ですわね。——皆で必ず、合格しましょう」

「はいー」

「ここまで来たんだ、目標は全員合格だ！」

「皆さん、書類を取ってきましたわ！あちらのスペースで記入しましょう！」

レイヴェル先導の元、俺達は受付用の書類に諸々記入する事に。

父さん、母さん。

上級悪魔試験、始まりました！

## MAGIC134 『目指せ上級悪魔』

上級悪魔の試験会場は中級悪魔の試験会場とはまた別の場所にあるそうで、俺はレイヴェル先導の下、試験会場まで移動してきた。

「ここが上級悪魔の試験会場ですわ」

「随分人が少ないな……」

「恐らくですが十にも満たない筈ですわ、今回の試験は」

「木場も言ってたけど、やっぱり上級悪魔の昇格って限られてるんだな」

さつきよりも疎らになったフロアを眺めていると、レイヴェルも同意するように頷いた。

「…では、私は一旦戻りますわ。試験が終わり次第、お迎えに上がりますので」

「おう」

上級悪魔の試験は中級悪魔試験より内容が多いため、終わるのも遅い。

だから一旦、レイヴェルとはここでお別れだ。

「この日までありがとな、レイヴェル」

「と、当然ですわ！私はイツセー様のマネージャーですので！」

「ここまで支えてくれたんだ。悪い結果は出さないから、期待してくれよ」  
「——はいっ！ イッサー様、ご武運を！」

レイヴェルと別れて、俺は試験会場へと入っていった。

『駒王学園の大学部みたいだな』

確かに、何か既視感があると思ったら、大学部の講堂に似てるな。

試験番号は……『4』か。

『不吉だな』

『落ちるな』

落ちるとか言うな！

何て突っ込みつつ席に腰掛けると、周りのヒソヒソ話が聞こえてきた。

「おい、あれって……」

「ああ、グレモリー眷属の赤龍帝だ……まさか飛び級で受けるって噂がホントだったなんてな……」

滅茶苦茶噂されてるな……噂されるのは好きじゃないんだよなあ。

『そりやお前は冥界じゃ有名人物だからな。お前が望む望まないにも構わず、噂されるんだよ』



いやー、有名になりすぎたな……。

つつーか、俺含めて四人だけで、その中で更にハブられるとか……混じってやろうか？

『辞めとけ、他の受験者のプレッシャーになるぞ』

やっぱり？……と、試験官のお出ましか。

試験官の先導の下、レポート用紙を提出し、その代わりに試験用紙が配られる。

「では、試験を開始してください」

よーし、やってやるぜ！

――

「あー……くっそお」

試験は無事終了……とは言い難い。

『まさか魔王少女レヴィアさんの第一クールのボスキャラの名前が出てくるとはな』

ホントだよ……何だあの試験！

つて言うか、お前ら煩過ぎるだろ！

『『ええ？』』

ええ、じゃねーよ！『やれ間違ってるぞ』とか『合ってるだろ』とかならまだ良いけどな、最終的には喧嘩までしやがって！

俺のテストの間まで喧嘩はやめてくれよ！

『だって此奴が……』

喧嘩してたくせにこんな時まで息合わせるなよ。

他の問題は一応手ごたえはあるから良いけども。

「受験番号4番、お入りください」

お、俺の番か。次は試験官とのチエス対決だ。

俺は出てきた受験者に声を掛けてみた。

「よっ、どんな感じだった？」

「うえっ!?……いや、どんなって、って言うかそれ他の受験者に聞くのか？」

「まあ、同じ受験者なんだしさ」

「んー、まあそんなに気張る必要はないかな。ま、あんたも頑張れよ」

「おうさ」

そんな言葉を交わして、俺は試験室に入室した。

「失礼します」

どうぞ、と言われて入ると、中には眼鏡の美人さんがいた。

「ようこそ、兵藤一誠さん。本日は私が戦術試験の担当をさせていただきます」  
「あ、はい。宜しくお願いたします」

用意された椅子に腰かけると、机にカップが置かれた。  
見れば紅茶だった。

「此方の試験では気軽に望んでいただいても構いませんよ。こうしてお茶を飲みながら、ね」

「じゃあお構いなく」

俺はお茶に口を付けると、試験官のお姉さんから試験の内容を伝えられた。

チェスでの対局、ただし勝敗は問わない。

曰く、ここで見るのは駒の動かし方、つまりは有効な戦術の確認と言う事らしい。

「そしてチェス終了後はあちらのテーブルにて、口頭試問を行います。あのテーブルに様々な地形のフィールドを映し出しますので、私が出した条件下で、あなたがどう行動するのかを聞かせてもらいます。簡単に言えば、レーティングゲームのシミュレーションのようなものです」

「成程……」

「……」も事前に説明を受けた通りだな。

『……で俺の出番だな』

『馬鹿の後を馬鹿が引き継いでどうする。ここは俺が出るのが最良手だ』

どっちも却下!!

「質問がありますか？」

「いえ、大丈夫です」

「では、試験を開始します」

———

「あー……精神的にきつつい」

戦術試験も終えた俺だったけど、どっと疲れた……。

チエスに関しては何とか勝てた……けど、あのお姉さんめっちゃつええわ。

何度も危ない場面があったし、策略に倣いそうにもなった。

リアスとレイヴェル、それにソーナ先輩に感謝だな。

『口頭試験も問題はないだろ。お前に関しては実戦経験が他と比べて多すぎるからな』

うん、そこは淀みなく。

結構突飛だけど結果に結びつく行動を言った時には驚かれたけど。

『いよいよ最後か。……無様な姿だけは見せるなよ』

『問題ないだろ、相棒の場合は』

うっし、時間だな……俺は立ち上がって屋外の試験会場に向かう。

すると後ろに見知った気配が。

「…レイヴェルか？」

「はい、良く分かりましたね」

「おう、まあな。で、どうしたんだ？」

「そろそろ試験も一時間で終わりますわ。ですからお迎えに上がりました」

マジで？…もうそんな時間か。

「実技試験は受験者同士で競い合いますが、上級悪魔試験では受験者が少ないので、すぐに終わりますわ」

「俺含めて4人だもんな」

つと、そろそろ行かなきゃな。

「じゃな、行ってくるぜ！」

「はい！最後まで油断なさらずに！」

屋外闘技場に来て、軽くストレッチをしていると、あつという間に試験官がすぐに来た。「実技試験は中級悪魔試験と同様にシンプルなものです。受験者の皆さんで戦闘をして

もらいます。対戦相手はクジによって決めてもらいます。戦闘は総合的な戦闘力を見るので相手に負けたとしても合格の目はなくなりません。出来るだけ良い試合をするようにしてください。ルールは持てる力で相手と戦ってもらいます。武器の使用も許可していますが、相手を死亡させた場合は失格となります。事故による死亡は我々試験官による審議によって是非が決まります」

いい試合ってなんだよ。

『要するに相手を甚振ったり蹴ったりするなって事だろ』

あー、じゃあ俺は問題ないな。

そんな事を思いつつくじを引いた……………結果は『1』だ。

まさか最初とは……………。

『落ちたな』

お前ら試験受けてる奴の目の前で堂々と落ちたなとか言うな!!

って言うかなんだよ落ちたなって!!

突っ込みながら対戦相手と共にフィールドに立つ。

審判の人が俺達の間立つ。

「受験者両名、準備は宜しいですね?」

俺と相手は同時に頷く、そして――

「では……始め！」

手を振り下ろしたと同時に、対戦相手が開幕早々行動に出た！

炎と氷の獣を生成し、こちらへと放ってくる！

「うおっ」

俺はそれを飛んで躲すと、向こうもそれと呼んでいたのか、俺に向けて手を翳していた。た。

刹那、光と共に——魔力のレーザーが放たれた！

「っー！」

俺はイチかバチか、拳にオーラを集中させ、そのままレーザーの帯へと突貫！

「無謀な真似を！」

そう相手の声が聞こえてくるが……俺の拳は勢いを失うことなくレーザーを2分割しつつ下へと降りていく！

そして地面に着地していた俺は——無傷だ。

「なっ——」

「ファイナーだ！なんつつ………」

冗談めかして決め台詞を挟みつつ、ストレートを決めると、対戦相手は会場の壁を突

き破って飛んで行った！

「「……………」」

シーン、と静まり返る会場。

試験官までポカーンとしている。

因みに俺もポカーンだ。

『あーあ』

『落ちたな』

いや、そういう意味!?

暫くして我に返った試験官が、慌ててぶっ飛ばされた男性を追いかけていった。

マジで、ファイナレになっちゃった……………俺、特に力も込めてないんだけど。

「神器無しであれとか……………もうチートだろ……………」

「インチキめいた強さも大概にしてほしいわ……………」

インチキじゃねーよ!!



## MAGIC135 『再戦』

「あー、やっと終わった……」

試験を終えて俺はレイヴェルと共に先生たちが待機しているホテルへと向かっていった。

「お疲れ様ですわ、イツセー様」

「ありがと、レイヴェル」

俺はレイヴェルが差し出したお茶を飲む。

何とか終わらせたけど……俺がぶっ飛ばしちやった人、大丈夫かなあ。

「何か、ある意味不合格にならないよな？強すぎて駄目だとか」

「そ、そんな事は今までなかったので大丈夫ですよ？……あ、もうすぐで到着ですわ」

お、もうちよつとか。……木場と朱乃さんは大丈夫だったのかな？

「ま、着いたら聞いてみるか」

俺は窓から見える風景に目を向けつつ、到着を待つのだった。

| | | |

「ただいま戻りましたー」

「おつす、イツセー」

ホテルに戻った俺とレイヴエルを出迎えたのは、何故か頭にたん瘤を作ったアザゼル先生とリアス達……何で？

「何したんすか先生」

「いや、ただ酒飲もうとただけなんけどよ。リアスに怒られちゃった」

「引率者なんだから昼間からの飲酒は慎みなさい独身総督」

「お前まで言うのかよ!？」

言われてやんの。

「で、イツセー君。どうだった？」

「いや、別に。強いて言うなら試験会場の壁壊しちまったぐらいか」

『!？』

やっぱ驚かれるよね、そりゃそうだよな。

「しかし改めて実感するよ。イツセー、木場。お前達二人はグレモリー眷属の中でも破格だな」

「破格、ですか」

木場の問いに、先生は頷いた。

「とんでもない可能性を持った若手悪魔って事だ。先ず木場。お前は後付けに得たものがあつたとはいえ、ずば抜けた才覚を持っている。禁手を2つも目覚めさせるなんて、信じられない才能だ。そしてイツセーは天龍を宿す身とは言え、豊富な戦闘経験からくる地力に、歴代赤龍帝とは全く違ったアプローチで力を模索し続け、『覇龍』を全く新しい力に進化させた。しかも禁手の更に上位形態まで使いこなしつつあると来た。……全く、とんでもない若造共だよ」

「…イツセー君は兎も角、僕はまだまだです。それに、環境に恵まれていますから」  
「環境もあるが、一番恐ろしいのは、お前らはまだ発展途上って事だ。まだ磨き甲斐のある原石って事だな」

原石ねえ……そんな実感は全くなかったな。

「ま、俺の場合はあれだな。無限『女王』形態の維持向上つすね」

「現状だとどれぐらいなんだ？ 持続時間は」

「長くて一時間つすね。それ以上は何つーか……俺達の魂が合一化出来ないって言うか、その辺も曖昧なんすよね」

『前例のないイレギュラーな力ってのはそういうもんさ。この辺は手探りで探る他ある

「まい」

「そうだな……と、ここで俺は近くに座るアーシアの様子に気になった。

「どしたアーシア？何か気になる事があるのか？」

「あ、いえ！……先生、2つほどお尋ねしてもよろしいですか？」

「何だ？」

「アーシアは何時になく真剣な様子で先生に告げた。

「私の神器は禁手に至れるのか、私自身が禁手に目覚めるのか、です」

「アーシアの質問に、先生はコーヒを一囅つて語り始めた。

「ああ。おまえが禁手に至る可能性は十分ある。色々なイレギュラーな現象を起こしているイツセーの傍にいるわけだしな。修行しだいでは至れるだろうし、亜種の禁手に至れることもセンス次第では可能だ。……だけどな、アーシア。お前の能力は既に完成の領域に至っていると云っても良い」

「完成、ですか？」

「ああ。お前の回復能力は既に極めて高い。しかも、体外の傷のみならず、体内の傷まで精度の高い回復能力を見せている。恐らく禁手に目覚めても、それらのスケールアップになるか、それ以上のものになる可能性もある」

だが、と先生は一息置いて、また別の事を告げた。

「先も言った通り、お前の回復能力は平均値を超えた大きいものだ。だから、今のお前に必要なのは、自分の身を守る術を身に着ける事だ」

自衛手段……一応軽い防御魔法は教わってはいるけど、それだと心許ないからな。

「お前が回復に専念し、他の攻撃などはイッサーたちに任せれば良い。だが、そうなるとお前の守備が薄くなる。お前の守備の為に前衛のアタッカーか、後衛の奴が防御に回らないといけなくなる。そうなる为本末転倒だ。つまり、お前の今後の課題は自分を守る手段を増やす事だ。今ある防御魔法の上位種を身につけたり、そうだな……壁となる魔物と契約して守護してもらおうとかな」

『……そうだ』

と、ここでドライグ何かに気付いたのか声を上げた。

『アーシア嬢は案外、ティマーとしての才能があるかもしれないな』

「ティマー……使い魔か？」

『ああ。あの蒼雷龍を使い魔にしてるだろ？ありや使い魔にするのは中々難しいんだが、懐いた上で使い魔にしてるってことは、そう言う魔物が心を許しても良いって思われている証拠だ。もしかしたら、より上位の魔物とかとも契約できんじゃないか？』

あー、あのちびドラゴンか。

そういうやティアがそんな事言ってたっけな。

「……そりゃ盲点だったな。今度試してみるか？壁役の使い魔となるとそうだな——」

あー、また一人の世界に入ったよ。

けどここで全員の強化プランが立ったのは良い事だな。

「……………ん？」

「どうした、イツセー……………っ！」

何か違和感を感じた俺だったけど、それは形になって表れた。

空気が一瞬で変わり、まるで違う場所に転移させられた——そんな感覚。

「ありやりや、ヴァーリはまかれたようにや。——こっちに本命が来ちゃうなんてね」

そう皮肉気に笑いながら近づいてきたのは、黒歌だった。

それと同時に、俺達の視界を切りが支配していった——

————

視界が晴れたと同時に、俺達は全員ホテルのレストランを飛び出した。

「はあーあ、なんてデジャブだよ……」

見覚えのある光景と感覚に、俺は溜息を吐く。

そうしつっロビーへと赴くと、そのソファアに座る二人の人影。

それを確認した途端、球状の火炎がアールシアとイリナ目掛けて飛んできた――  
が、その火炎を払ったのは、オフィスだった。

「あ、有難う御座います」

「…気にする事はない」

「………つたく、いきなり不意打ちなんて味な真似してくれるな。曹操」

見知った気配を感じつつ俺はソファへと視線を向けると、学生服の上にローブを纏った眼鏡と、同じく学生服の上から漢服を着た童貞みみたいな野郎がいた。

「久しいな、総督殿にグレモリー眷属、そして赤龍帝。後俺は自分の意思で童貞を維持してるだけだからな！」

「地の文拾ってまで突っ込むなよ。で、何しに来た」

俺達は全員臨戦態勢になる。

「そこにいるゴスロリ系首領にね。…やあオフィス、まさかこちらにいるとは、少々虚を突かれたよ」

「やっぱロリコンじゃねーか」

「ロリコンで何が悪い!?!」

「開き直るなってかロリコンなんじゃねーか!!」

言質取ったぞ今!

『録音もしたぞ相棒』

「よし、これを決定的な証拠にしよう……はいポケ合戦はここまで!」

「ホント緊張感がないにやー。で曹操、てつきりヴァーリの方に向かったんだと思っただけどもねー」

「野郎はノーサンキューさ。……向こうには別動隊を送ってるよ。今頃パーティータイムと洒落込んでるんじゃないかな?」

……全く話が飲み込めん。

「ルフエイちゃん、説明宜しく。後で臨む事何でもしちゃうから」

「ほ、ホントですか!? ツーショット撮影とかもOKですか!? じゃあ説明しちやいますね!」

「アーサーにカリバーンされれば良いのに」

「聞こえてるぞ!!」

ロリコンチェリー野郎に吠えて、俺はルフエイの説明を待つ。

「えつとですね。事の発端は二つありました。一つはオーフィス様がウイザードラゴンさんに大変ご興味をお持ちだったこと。二つ目はオーフィス様を影で付け狙う存在に



ヴァーリ様が気付いたことです」

ルフェイさんは指を二本立てて説明を続ける。

「そこで、ヴァーリ様は確証を得るため、いぶり出すことにしたのです。今回、オフィイ様をウィザードラゴンさんのお家にお連れしたのはこの二つを叶えることが出来ると考えたからなんです。運が良ければオフィイ様を囷にして私達のチームの障害となる方々とも直接対決が出来る、と。つまりですね……」

『……読めたぞ。この龍神を狙っている連中と言うのが、こいつ等と言う訳か』

「正解です！」

ドラゴンが気付いた真相に、ルフェイは肯定した。

「……ちよつと待て。オフィイはお前らの首領だろ。なのに何でその首領を狙うんだよ」

『案外ケツの穴狙いなんじゃね』

『だろうな』

「俺を人外萌えみたいにするな冤罪だぞ!!……まあ、興味はあるが」

あるんじゃねーか!とんでもない事カミングアウトするなよ!!

「……ま、ヴァーリのことだから何かしら策は講じてくるだろうとは踏んでいたさ。それにオフィイが今世の二天龍に興味を抱いていることも知っていたからね。もしかや

と違って赤龍帝の方を探つてみれば案の定だった。こういう形でご対面を果たすことになったのは、そういうことだ」

曹操は槍を肩でトントンとしながら笑みを浮かべる。

「曹操、我を狙う?」

「ああ。俺達にオーフィスは必要だが、今のあなたは必要ではない」

「わからない。けど、我、曹操に負けない」

「真正面で勝てる訳ないだろ重々承知してるよ!!」

「情緒不安定?」

「いや、この空気でビタミン剤の瓶渡されても」

オーフィス、それ何処から出した。

……だけど、なんか違和感があるな。

『ああ。勝てないと言いつつ、何か策のありそうな顔だけありや』

何は兎も角、油断はしない方が良いな……と思つていると、黒歌が足元に魔方陣が展開していた。

「にやはは、ポケ合戦のお陰で余裕で繋げたにゃん。いくよ、ルフエイ。こうなったら、あいつをこつちに呼んでやらにゃダメっしょ♪」

「黙れ遊女!!お前に童貞の苦しみは分かるまい!!」

「私はまだ処女にゃん!!」

魔法陣の中心にフェンリルが位置すると、魔法陣の輝きが一層強くなっていく！その輝きが弾け、周囲を光が覆った！

光りが止んだ時、そこにはフェンリルの姿は無く、代わりにある奴がそこにいた。

「ご苦労だった、黒歌、ルフエイ。——俺、参上。と言ってみる俺であった」

その正体は我がライバル——白龍皇、ヴァーリだった。

## MAGIC136 『龍を喰らう者』

「ほお、ここで招かれざる客が来ようとはね。ヴァーリ」

「お前の主催したパーティがあまりにもつまらなかったんでね。ゲームで言えばクソゲーだ」

曹操の苦笑いに対し、ヴァーリはいけしやあしやあと言つてのける。

どうなってるんだと思つていたら、ルフエイちゃんが説明してくれた。

「フェンリルちゃんとの入れ替わりによる転移法で、ヴァーリ様をここに呼び寄せました」

「キャスリング、と同じ方式さ。フェンリルには俺の代わりに向こうで暴れてもらつて  
いる。お前がこちらに赴くのは予想済みだったんでな。保険は付けておいた。――  
―さて、お前との決着を付けようか。とはいえ、ゲオルクと二人だけとは豪胆な真似を」  
相変わらず目ざといこつて……『王』になるなら上位ランカーに普通に食い込めるん  
じゃね。

「いいや、豪胆なもんか。俺とゲオルクだけで十分と踏んだだけさ、ヴァーリ」

「強気なものだ。『龍喰者』<sup>ドラゴン・イーター</sup>とやらを有してる事の所作、と取っていいのか？英雄派が作り出した、龍殺しに特化した神器所有者か、新たな神滅具所有者と言うオチだろう？」

ヴァーリの言葉に、しかし曹操は首を横に振るだけだ。

「違うんだよ、ヴァーリ。そんな分かり切ったオチを用意しても、観客と言う名の読者には受けが宜しくない。寧ろ座布団を持っていかれかねない」

「何で笑点基準なんだよ」

『龍喰者』<sup>ドラゴン・イーター</sup>は俺達が便宜上付けた、コードネームのようなものさ。新たに生み出した訳じゃない、と言うよりは、既に生み出されていた。——『聖書に記された神』が、あれをね」

それを聞いたローブの眼鏡——ゲオルクが言葉を発した。

「曹操、良いのか？」

「ああ、そろそろ頃合いだ。ヴァーリ、オフィス、赤龍帝と言う豪華なメンツが揃っている。これ以上ない役者だ。——予防。地獄の釜の蓋を開ける時だ」

「了解。——無限を食う時が来たか」

口の端を釣り上げたゲオルクが後方、広いロビー全体に巨大な魔方陣を出現させた。

何を呼び出す気だ、と構えていると——





「…何だつてんだよ」

それを見ていた先生は、目元を引く付かせ、憤怒の形相となっていた。

「此奴は…なんてものを…ツ。コキュートスの封印を解いたつてのか…ツ!!」

曹操は一步前に出て、詩を詠むかのように口遊みだした。

「——曰く、『神の毒』。——曰く、『神の悪意』。エデンにいた者に知恵の身を食

わせた禁忌の存在。今は亡き聖書の神の呪いが渦巻く原初の罪——。『ドラゴン・イーター龍喰者』・

サマエル。蛇とドラゴンを嫌った神の呪いを一身に受けた天使であり、ドラゴンでもあ

る。そう…ある天使同様、存在を抹消されたドラゴンだよ」

「——ツ!?!」

サマエル…確か、アダムとイヴに知恵の身を食わせるように唆した蛇、だったっけ

?

「…ああ。そしてそれは神の怒りに触れた。故に神は極度の蛇——そしてドラゴン

嫌いになった。協会に書かれている書物に登場するドラゴンの大多数が悪として描か

れるようになった由縁だ。奴は言わばドラゴンを憎悪した神の悪意、毒、呪いをその身

で全て受けた存在だ」

「…神聖である神の悪意は本来あり得ない、だがそれだけの猛毒でもある。ドラゴン以

外にも影響が出るうえ、地上のドラゴンを絶滅しかねない理由で、コキュートスの深淵



に封じられていた。……アイツにかけられた神の呪いは言わば究極の龍殺し。存在自体が凶悪な龍殺しなんだよ……!!」

ドライグと先生の説明を聞いて、馬鹿な俺でもその存在の意味を悟った。

俺にとつちや、毒も毒って訳だ……!

「冥界の下層——冥府の神ハーデスは何を考えていやがる……ま、まさか!!」

先生が得た答えに同意するように、曹操は笑った。

「ビング。ハーデス殿と交渉してね。何重もの制限を設けた上で彼の償還を許可してもらったんだよ。とは言え、制限を設けた上でこのプレッシャーとは、少しばかり驚いているけど」

「……んの野郎!!ゼウスが各勢力との協力体制に入ったのがそんなに気に食わなかったっ  
てか!!」

……つまり、本来なら敵対する筈のテロリストに手を貸したって事か!

余計な事してくれやがって!!

曹操は聖槍をクルクルと回して矛先を俺達に向ける。

「というわけで、アザゼル殿、ヴァーリ、赤龍帝。サマエル持つ呪いはドラゴンを喰らい殺す。サマエルはドラゴンだけは確実に殺せるからだ。龍殺しの聖剣など比ではない。比べるに値しないほどだ。兵藤一誠。君のアスカロンなど、サマエルに比べたら爪楊枝

だよ」

「マジかよ。刺した時スゲー痛かったんだけど」

「えっ何それ。何で生きてんの。二重の意味で君には致命傷なのに」

「当たり前が良かったとしか言えねえ。」

「って言うかこんな神聖な爪楊枝があつてたまるか！」

「それを使って何を仕出かす気だ!?!ドラゴンを絶滅させる気か!?!……いや、お前ら、……  
オーフィスを……!?!」

「——喰らえ」

先生の問いには答えず、曹操は指を鳴らした。

すると、空気を切り裂く音と共に何かを通り抜け——バグンツ!という奇妙な音が聞こえてきた。

振り返って確認すると、オーフィスが立っていたであろう場所に、黒い塊が生まれてきた!

その発生源を目で追うと、サマエルの口元から伸びていた!

——舌かつ!!

「おいオーフィス!!返事しろっ!!」

眉のような塊に話しかけるが、返事は返ってこない。  
「祐斗、切って!」

リアスの指示を受けた木場が、聖魔剣を創り出して塊を斬り付けるが——塊は聖魔剣を飲み込み、刃先を消滅させた!

「…ならばっ!」

もう一本創り出した木場は、今度は舌を斬る!

が、結果は先程と同じだった。

『Half Dimension!』

ヴァーリが神器を発動、奴の周囲が歪んでいき、あらゆる物が半分になっていく。

「おまけだ」

《Divide Field!!!》

それと同時に空間まで半減していくが、全く効果が見られなかった。

「ちっ…空間の半減すら意味をなさないとはいな…」

「ならば、これで!」

リアスが消滅の魔力を放つが、それをも意に返さなかった。

攻撃を跳ね除けるのか、恐ろしく頑丈なのかが分かんねえ!

その間にも何かを飲み込むようにサマエルの口元にその何かに向かっていく。

「このままでは埒が明かないな」

「んじや、あの時と同じように行きますか」

俺達二人は瞬時に鎧を身に纏う！

「相手はサマエル、そして上位神滅具所有者が二人。不足はない」

「この状況でよくそんな事言えるよなお前」

俺達の後に続くように、全員が戦闘態勢に入る！

「レイヴェル、下がってろ」

俺の頼みに、レイヴェルは後方へと下がる。

あれだけの呪詛の塊だ、例え不死身のフェニックスといえど影響が出るかもしれないし、何よりレイヴェルは大事な客分で、俺のマネージャーだ。危ない目には合わせられない。

それを見てか、曹操は狂喜の笑みを浮かべた。

「このメンツだと流石に俺も本腰を入れないと不味いねえ。何せハーデスからはサマエルの召還を一度しか許されていないからね。ここで決めないと俺達は即刻ゲームオーバー、だからな。ゲオルク！サマエルの制御を頼む。俺は彼らを相手取る」

「随分大胆な事を言つてのける。一人で相手が務まるのか、曹操」

「やってみせるさ。出なければこの槍を持つに値しないし、この先一生童貞と言う可能

性だつてあるからね」

曹操の決意に応えるように、聖槍から眩い光が放たれる！

「——バランス・ブレイク禁手化」

力のある言葉と共に、曹操の体に変化が現れた。

神々しく輝く輪後光が奴の背後に現れ、曹操を囲むようにボウリング球ほどの大きさの7つの球体が宙に浮かんで出現した！

……随分シンプルだな。

「これが俺の、『黄昏トウルー・ロンギヌスの聖槍』の禁手、『極夜ポーターナイト・ロンギヌス・チャクラ・ヴァルティインなる天輪聖王の輝廻槍』——とはいえ、

まだ未完成だけどね」

「——ちつ、よりにもよって亜種か！普通であれば、『黄昏トウルー・ロンギヌスの聖槍』の禁手は

『真実トウルー・ロンギヌス・ゲッターデメルンク白夜の聖槍』の筈だからな！名称からすると、自分は転輪聖王とでも言いた

いのか!」

「俺の場合は転輪聖王の『転』をあえて『天』として発言させた。そっちの方がカッコいいからね」

「童貞聖王で良いんじゃないかねーか?」

『カッコ悪すぎる!!』

おおう、全員からの総ツッコミ!

すいません、シリアスブレイクしちゃって！

「気を付けろ。あの禁手は『七宝』と呼ばれる力を有している。神器としての能力が7つある。あの球体一つ一つに能力が付加されている訳だ」

「7つ…あらゆる局面に対応する為とはいえ盛りすぎじゃねーか」

「だが俺が知ってるのは3つだけ。後の4つは全くの未知数だ。だからこそ、最強の神滅具と称される。紛れもなく、奴は純粋な人間の中で一番強い男だ…：：：そう、人間の中心で」

…：：：前回の戦いはあくまで向こうの知らない手札で奇襲同然の戦いだった。

けど魔龍進化は無効には既に知らされている。

さて、どう出るか…：：：。

動かない俺を前に、曹操は空いている手を前に突き出す。——球体の一つが、それに呼応して曹操の前方に出ていく。

「七宝が一つ。——『チャツカラタナ輪宝』」

そう呟いた後、フツとその球体が消えうせた。

かと思えば——ガシャンッ!!!何かが派手に破壊された音が木霊した。

音のした方を振り返ると、ゼノヴィアが握っていたエクス・デユランダルが破壊され

ていた。

「…ツツ!!」

ゼノヴィアも突然の出来事に成す術がなかった様だった。

……今、何が起きた!?

「まずは一つ。輪宝の能力は武器破壊。これに逆らえるのは相当な手練れのみだ」

「…ゴフツ!!」

曹操がそう言い切った途端、ゼノヴィアは血を吐いて倒れた!

見れば腹部に大穴が穿たれており、一目で致命傷と分かる傷だった!

「そして、槍状に形態変化させて貫いた。今が見えなかったとしたら、君では俺には勝てないな、デュランダル使い」

「…ゼノヴィアの回復急いで!アーシア!!」

リアスが間髪入れずに指示を飛ばすも、アーシアは暫し上の空だった。

が、直ぐにハツとしてゼノヴィアに駆け寄った!

「ゼノヴィアさんツツ!!いやああああつ!!」

「曹操、テメエ……ツツ!!」

冷静でないきやいけないのは分かっている……だけど、仲間に致命傷を負わされて無

関心でいられる訳、ねえだろっ!!

「許さないよっ!!」

デリート・ドラゴンショット

「消滅の龍波動ツ!!」

木場の攻撃を往なした曹操に向けて放つが、それも危なげなく捌かれる。

そして再び球体の一つを手元に寄せた!

「———『女宝』」  
イツテイラタナ

そう呼称された球体は俺達の横を駆け抜け、リアスと朱乃さんの元へと飛んで行つた

!

「くっ!」

「こんなもので———」

「弾けろっ!!」

対応しようとした二人よりも早く、球体の光は二人を包み込んだ!

それでも攻撃しようとするが———何も起きない!

怪訝そうな二人はもう一度手を翳すも、やはり何も起きない。

まさか、今のは!?

「女宝は異能を持つ女性の力を一定時間、完全に封じる。これも相当な手練れでなければ無効化できない。———これで3人だ」

リアスと朱乃さんがこうなら、他の女性陣も不味いつて事か!



曹操は高笑いをする。

「ハハハ！この限られた空間で君達全員を倒す。派手な攻撃はサマエルの繊細な捜査に悪影響を及ぼしかねないからね。出来るだけ最小限の動きで、サマエルとゲオルクを死守しながら一人で戦う——うん、これ以上ない最高の難易度だ。だが——」

曹操の視界の端では、黒歌とルフエイが手元に魔力、魔法の光を発しながら、そのゲオルクとサマエルの方に突き出していった。

だがそれを見越していたかのように、曹操の球がまた向かう！

「ちよ（ぎ）いにゃんー！」

「馬アッサラタナ宝。その効果は任意の相手を転移させる」

迎撃しようとした黒歌とルフエイの姿が消えうせた！

——そつちか！

俺の予想通りの場所——アシアの目先に現れた黒歌とルフエイに、魔法を発動させる！

「悪く思うな、二人とも!!」

《バインド・プリーズ》

「にゃん!?!」

「ひゃわ!?!」

体に痕が付かない程度の強さで縛り、攻撃を中断させる！

「ほお、目敏い観察眼だ」

「ヴァーリ、イツセーツ!!俺に合わせろッ!!」

「俺としては単独でやりたいところだが…ッ!!」

金色の龍の鎧を纏った先生とヴァーリが、高速移動で瞬時に曹操に肉薄!

二人の光の槍と魔力が籠められた拳を寸前で避けていく曹操。

「ウイザード・プロモーション魔龍進化!!!」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!》

二人が曹操から離れた瞬間に、全砲門から魔力を放つ!

「墮天使総督と二天龍の競演かつ!!これを御せれば更なる高みを目指せるなッ!!」

曹操は全方位に光の結界を張り、俺の砲撃を全て防ぎ切った!」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!!!!》

「オオオオツ!!!」

「ぬ、うっ!!!」

結界が解けた頃を見計らって、俺は肥大化された拳を叩きこむ!

曹操はそれを槍の柄で防ぎつつ後退するが、然したるダメージには至っていない。

「相変わらず凄まじいパワーだ。腕が痺れちゃったよ、つと!!」

その間に殴り込んできた先生とヴァーリの攻撃を避け続ける曹操だったが、その右目が金色に輝くのが見えた！

「邪眼と言うのはご存知かな!? そう、目に宿る異能の力！」

「急に中二病でも発症したのか!？」

「いいや、そうじゃない。これは君にやられた補強のついでに仕込んだ、正真正銘本物の眼だ！」

一息吐いた曹操は空かさず視線を下に向けた！

すると、先生の足元が石化していく！

あれは――

「ッ、メデューサの眼か!!」

どこかで見覚えがあると思っただぜ!!

先生が足元から魔力を噴出させて、石化した個所を開放しようとするが、その前に先生の腹部に聖槍が突き刺さった！

「…ガハッ!!」

鎧の霧散と共に血を吐く先生。

それを見たヴァーリはかつてない程激昂した！

「おのれ、曹操オオオオッ!!!」

「ハハハ！随分ご立腹じゃないか!!」

ヴァーリが撃ち出した魔力の一撃に向かって、またもや光の球が飛来する！

「———<sup>マニラタナ</sup> 殊宝。攻撃を他者へと受け流す。ヴァーリ、君の一撃は強大だ。当たれば

即死は免れないし、防御も難しい。だが、受け流す術ならある」

ヴァーリの一撃が前方に生まれた黒い渦に吸い込まれていった！

やがて渦は消滅し———小猫ちゃんの前に新たな渦が生まれた！

受け流す……そう言う事かよっ!?

俺が動くこうとするより早く、渦から先程のヴァーリの一撃が放たれた！

が、直撃する寸前、何者かが小猫ちゃんの前に躍り出て———

ゴバアアアアアアンツ!!!

けたたましい轟音が響き、小猫ちゃんの前に躍り出た人物———黒歌が倒れた！

「ね、姉様ツ!!!」

「……ほんつと、世話が、かかるわ、ね……」

倒れた黒歌を抱抱き留めた小猫ちゃんの前で、黒歌はそう消え入りそうな声で呟いた。

「曹操………俺の手で俺の仲間をやってくれたな………ッ!!」

ヴァーリから迸る怒りのボルテージが更に上がっていく!

だがそれは……俺も同じだ!

「ヴァーリ、兵藤一誠、君達は仲間を思いすぎる。だがこの場においては君達の致命的な弱点だ。ああ、そう言えばこれで七宝の全てを把握したのは君だけだな。やったねヴァーくん!」

「貴様……その呼び方をして良いのは彼女だけだ!!——我、目覚めるは、覇の理に全てを奪われし二天龍なり!!」

「おいおい……俺を差し置いて盛り上がってんじゃねえよ!!行くぞ、ドライグ!!」

『致し方あるまいッ!!』

『我ら、目覚めるは!覇の理を超越せし赤龍帝なり!!!』

フィールドを白と白銀の光が覆い始める!

それを見た曹操は、ゲオルクに叫んだ。

「ゲオルクッ!!ヴァーリの覇龍と兵藤一誠の例の力はフィールドを破壊しかねないっ!!」

「分かっている!サマエルよっ!!」

ゲオルクが手を突き出して魔方陣を展開させると、それに反応してサマエルの右手の



なつて暴れられたら、サマエルの制御に支障を来すからねえ。こうでもしなければ君には対処出来ないんだ。何せ俺は弱つちい人間なので」

「曹、操……ッ!!」

曹操を憎々しげに見上げるヴァーリ。

「さて、これでヴァーリは無力化出来た。後は……ッ!？」

此方を振り返つた曹操は、驚愕した面持ちで俺を凝視していた。

そしてそれは、他の皆も同様であつた。

同じ天龍のヴァーリは倒れてるのに、俺は殆どダメージなしだからだろう。

いや、俺にも訳が分かんねーんだけど!

「兵藤一誠……何故立っている?」

「は?……つて言うか、何かしたのか?スゲー体力奪われたんだけどよ……!」

大きく肩で息をする俺に対し、曹操は有り得ないとかぶりを振つた。

「同じ天龍であるヴァーリですらこの有様だと言うのだぞ?なのに……体力を奪つただけ

?!——ゲオルク!サマエルの力に異常は!？」

「……いや、全く淀みなく放たれた筈だ。だと言うのに、立っているだ?!」

ゲオルクですら、驚愕した面持ちだつた。

『……相棒、理由は分かんが今の内だ!サマエルを!!』

「…おう!!」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!》

残る体力を振り絞って魔龍進化を敢行、狙いをサマエルに絞る!!

「食らいやがれ化け物!!デリート・フルフラスト消滅の龍撃砲オツ!!!」

「っ、しまった!!ゲオルク、防御を——」

《Divide Field!!!》

「ツ!?!」

咄嗟に防御の指示を出した曹操と、魔方陣を発動しようとしたゲオルクの動きが固まった!

——サンキュー、ヴァーリ!

「ヴァーリツ!!」

『——オオオオオオツ………!!』

全弾サマエルに命中し、サマエルからは苦悶の声が漏れ出る!

「——……ゲオルク、サマエルは!?!」

「無防備な状態で受けてしまったからな……これ以上はサマエルを繋ぎ止められないぞ

!」

「例のものはどれだけ取れた?」



「四分の三ほど、だな」

「…十分か。良くやってくれた」

指を鳴らすと、サマエルは魔方陣の中へと消え去っていく。

それと同時に、オーフィスを包んでいた黒い塊も消えていった。

塊から解放されたオーフィスに、特に変化は見られなかった。

オーフィスは曹操に視線を向けた。

「私の力、奪われた。これが曹操の目的？」

オーフィスの問いに、曹操は愉快そうに笑った。

「イグザクトリー。オーフィス、俺達の目的は貴女を支配下に置き、その力を利用したかった。だけど、貴女を俺達の思い通りにするのは至難の業だ。ならばどうするか？—

——貴女の力を奪い、新しい『ウロボロス』を創り出せばいい」

…オーフィスを、生み出すってのか!?

「俺達は自分にとって都合の良いウロボロスを欲したのさ。俺達にとって、オーフィスの目的であるグレートレッドはそこまで重要な存在でもないからね。それを餌にご機嫌取りと言うのもうんざりしてたんだよ。だからこの計画を始動したって訳。そして、『夢幻の存在は倒し得るのか?』と言う英雄派の超常の存在に挑む理念も試す事が出来た」

「……なあ曹操」

俺は一つ確信を得た。此奴は——

「何だい、兵藤一誠」

「前々から薄々思ってたけどよ……お前ら、馬鹿だろ」

「——何？」

曹操は訝しげに俺を睨む。

「超常の存在に挑む？ そんなもん、引き籠もってゲームの中でやつとけば良いじゃねえか。なのにここまで被害を巻き込んで、剩え死人まで出してる。お前らの馬鹿みたいな計画の為にな……」

俺の籠手から、銀色の輝きが溢れ出る。

それは俺の怒りに呼応するかのように、激しさを増していく。

『平和に過ごしてる人達の希望を奪ってんじゃねえよッ!!!』

《Infinity Hope Dragon Evolution Drive》

!!!!!!

俺の声にドライグの声が重なり、辺りを白銀の光が包み込んだ！

無限女王を眼前にし、曹操は好戦的な笑みを浮かべる。

「ほお、まだ戦えると言うんだね。それは何よりだ！——だが」

曹操は笑みを消すと、静かに背を向けた。

それと同時に、禁手も解除された。

「この場では止めておこう。俺の禁手もまだ完全ではないからね。この戦闘を利用して、長所と短所を確認する意図もあつたんだよ」

『随分舐めてくれるな…ッ!』

「今は此方の方を優先したいからね。そして、君にサマエルが効かなかつた原因も急ぎ解明したい。ゲオルク、死神の一行さまをお呼びしてくれ。ハーデスは絞りかすのオーフィスの方をご所望だからな。それと、前に考案した例の入れ替え転移、あれを試してみてくれ。俺とジークフリートを入れ替えて転移できるか?あとはジークに任せる」

「一度見てみただけだから、精度に不安は残るが…試してみよう。」

「流星は悪魔メフィストと契約したゲオルク博士の子孫だな」

「……先祖が偉大過ぎて、この名前には些かプレッシャーを感じるんだけどね。了解だ」  
「これが終わったら風俗にでも出かけよう」

「何でそうなる!?!それは兎も角、さつき入ってきた情報なんだが…」

ゲオルクが差し出した紙切れを受け取った曹操の眼が細まった。

「…なるほど、助けた恩はこうやって返すのが旧魔王のやり方か。いや、わかつてはいたさ。まあ、十分に協力はしてもらった」

…何だ、何かあつたのか?

そう訝しむ俺達の眼前で、ゲオルクは魔方陣で転移していった。

「ゲオルクはホテルの外に出た。俺とジークの入れ替え転移の準備中だ」

「……?」

「まあどうでもいいか。……もうすぐここにハーデスの命令を受けて、そのオフィスを回収しに死神の団体様が到着する。そこに俺の所のジークフリートを参加させよう。君達がここから脱出できるか、言わばゲームだ」

「『ゲーム、だと……?!』」

「ああ。オフィスを死守しながらここから抜け出せるか、ぜひ挑戦してみてください。俺は君達に生き残ってほしいが、それを仲間や死神に強制はしない。まあ精々気を付けてくれたまえ」

そう言うのと、曹操は悠然と去って行った。

「『曹操……何時か後悔させてやるからな』」

「『そうか——楽しみだ』」

そう言うって笑うと、曹操は今度こそ止まらなかつた。

## MAGIC137 『氷解の時』

「……駐車場に死神が出現していました。相当な数です」

曹操達に手酷くやられた後の事。比較的軽傷だった木場は外の様子を偵察しに行つてくれた。

「……ハーデスの野郎。本格的に動き出したって訳か」

先生は憎々しげにそう吐き捨てる。

取り合えず今はこの疑似空間のホテル上階に陣取っている。

同じ階層の別室に怪我人を休ませて、アーシアの治療を待っていたんだ。

ゼノヴィアと先生の治療は既に終わってるけどな。

黒歌に関しては今は別室で休んでいる。

レイヴェルと小猫ちゃんが一緒に様子を見ているみたいだ……ヴァーリに関しては、傷は治ったが呪いは解けなかったらしく、また別の部屋で激痛と戦っている。

……あのヴァーリですらあんな状態になつてるのに、何で俺は平気なんだ？

まあ、平気って言っても体力とか結構持つていかれたけど……でも被害らしい被害はそれだけだ。

ドライグ、どう思う？

『……そうだな。やはり、以前アスカロンをぶつ刺した事で、ある程度ドラゴン特攻のものに対して抵抗が生まれた、としか考えられん。だが奴に言わせればサマルの呪いはそんじよそこらの龍殺しとは比較にならない……確かにあの存在は俺ですら寒気を覚えたほどだったからな。となると答えが益々分からん。お前が異常な体質だったとしたら……』

『……一つ良いか？』

と、ここで俺達の会話に入り込んできた人がいた。

歴代赤龍帝の中で最強と言われた偉丈夫——ベルザードさん。

『ベルザードか。どうした？』

『兵藤一誠君。君はファントムを宿しているだろう。もしかすれば、彼の存在が君への呪いを阻んだのではないか？』

『！』

……確かに。それは盲点だった。

ドラゴンは確かにドラゴンだ。

ただどあくまでドラゴンの姿をしているってだけで、その本質はファントム。

ベルザードさんの言う通り、ドラゴンの存在がサマエルの呪いを殺した……っていう可能性もある。

ドラゴン、どうなんだ？

『知らん』

…即答かよ。

『俺はそんな事をした覚えはない。だから当然だろう。……あの男なら、知っているかもな』

『あの男？』

『貴様を魔法使いにした、あの胡散な魔法使いだ』

…白い魔法使い。

確かに知ってそうだけど、今はこの場にはいないし……肝心な時に限って姿を見せないもんなあ。

『でも、君がこうして軽症なのは今は感謝するべきじゃない？』

『エルシャヤさん……そうっすね』

分かんない事を何時まで考えていても仕方がないよな、今はこつから脱出する方法を探らないと。

と、休憩中ないし看病しているメンバー以外の者が集結しているこの部屋で、ルフェイチヤンが嘆息した。

「本部から正式に通達が来たようです。砕いて説明しますと……『ヴァーリチームはクーデターを企て、オーフィスを騙して組織を自分のものにした。オーフィスは英雄派が無事救出。残ったヴァーリチームは見つけ次第始末せよ』だそうです」

「…滅茶苦茶言ってるな」

捏造だらけの通達に苦笑いしちまう俺。

本物のオーフィスに関して：十中八九こっちのオーフィスから奪い取った力の事だろうな。

「そう言う事になったのか。英雄派に狙われていた上に、オーフィスの願いを叶えようとしたってのにこの末路か。難儀なものだ」

「…寧ろ、ヴァーリにとつては願ったり叶ったりなんじゃないっすかね」

息を吐く先生に、俺はちよつと違う疑問をぶつけてきた。

「どういう意味だ？」

「いや、ヴァーリから電話とかでよく聞くんすけど。アイツ、テロ組織に所属してるくせに殆どテロ行為してなくて、寧ろいろんな世界の謎を調べたりとかしてるんすよ。そんなだから、多分曹操達にとつても目障りになつてたんじゃないかなって」



「…そうなのか、ルフエイ」

「はい。特にジークフリート様は私達の事が相当お嫌いだったようです。何より、元英雄派でライバルだった兄のアーサーがこつちに來たのがお気に召さなかったようにして」

前に聞いた通りだな。

嫌われてたのは知らなかったけど。

「他にも、ドラゴンの存在の事も調べたりしてたんだよな」

「はい！毎日が大冒険なんです！最近は二天龍が封じられる結果になった大喧嘩の原因も調査しているんです」

「やっぱアルビオンも話さないんだな。家のドライグも全く教えてくれないんだぜ」

『若気の至りなんだよ』

『そればかりか』

そう、何時もこう言つて教えてくれないんだよな。

「でも多分、アイツのそういう探究心は育ての親譲りなんだろな。な、ルフエイちゃん」

「はい、私もそう思います！」

俺とルフエイの擲揄いに、先生は「ほっとけ」とそっぽを向いてしまった。

「それにしても総督様、ここ最近は神滅具祭りですね。——グリゴリにいらっしや

る『黒刃の狗神』<sup>ケイニス・リュカオン</sup>の方はお元気なのですか？」

そう振られた先生は天井を仰ぎ見ながら呟いた。

「…『黒刃の狗神』、刃 狗か。アイツは別任務に当たらせている。そつちも負けず劣

らずに厄介なヤマだからな。アイツ、ヴァーリが嫌いだからなあ」

「はい、お話は常々伺っております」

ルフエイちゃんの笑顔に、俺は気持ちが悪らぐのを感じた。

こりやアーサーが大事にしたがるのも分かるなあ。

「…そういうや先生。一番強い神滅具を曹操が持つてるなら、二番目に強い神滅具も英雄派が持つてるとかはないですよね？」

「ああ、『煌天雷獄』<sup>ゼニス・ニクス</sup>…二番目に強い神滅具は、英雄派の中にはいない。あれは天界が制

御してるんだ」

「ほお、そいつはまたレア物だな」

知ってるのか、ドライブ？

『使い方によっては世界を滅ぼす事も出来る代物だ。英雄派が持つている『黄昏の聖槍』

『絶無』『魔獣創造』そして『煌天雷獄』の四つは上位神滅具と呼ばれてる』

『つまり貴様のこれは落ちこぼれと言う訳だ』

『落ちこぼれじゃねーし！使い方さえ極めたら世界だつて余裕で取れるし!!』

「で、だ。イリナ、『御使フレイブ・セイントい』のジョーカーは何してるんだ？」  
ジョーカー？

「イツセー、最初に言っとくけどどの生物の始祖でもない不死身の怪物じゃねーからな」  
「ボケ潰されたでござる」

「デュリオ様ですか？今は各地を放浪しながら、美味しいもの巡りをしてるとかなんとか…」

その答えに先生は絶句した。

「何で諸国漫遊してんだよ!?ミカエルの野郎、切り札をぶらぶらうつかせるとはどういう神経してんだよ!」

「私に言われましても…」

「切り札って言われてるって事は、滅茶苦茶強いんですか?」

俺の質問に答えてくれたのは、先生ではなくルフェイちゃんだった。

「ヴァーリ様の戦いたい方リスト上位に載っている程の方です。教会最強のエクソシストだそうですよ」

「碌でもないリスト上位に載ってるって事は滅茶苦茶強いんだな、うん」

「あ、安心してください!ウィザードラゴンさんも上位に入ってますので!」

「そこは喜ぶトコなのかな?」

出来ればリスト更新するほどの猛者が現れてくれるのを祈ろう。

「…デュリオ・ジユズアルド、教会でも有数の存在だった。直接の面識はなかったけど、人間であり乍ら凶悪な魔物や上級悪魔を専門に駆り出されていたよ」

へえ、とんでもない人もいたもんだな。世の中って狭いねえ。

とか思っていたら、先程まで外に出ていたオフィスが戻ってきた。

「お、お帰りオフィス」

「具合はどうなんだ」

「弱まった。今の我、全盛期の二天龍より二回り強い」

『うつわあ、弱体化したなお前』

強さの基準が分かんねえ。

どう弱体化したんだよ、それ。

『あんま馬鹿正直に考えねえ方が良いぞ。何せ元は無限の体現者だったオフィスが有限の存在になった、っただけだからな』

「ふーん……。あ、そうだ。なあオフィス、何であの時アーシアとイリナを助けてくれたんだ？」

俺がそう聞くと、オフィスは考える素振りもなくはつきりと告げた。

「紅茶くれた。後、トランプで遊んでくれた」

「——そっか。ありがとな」

俺はポンポンと、オーフィスの頭を撫でる。

「有難う御座います、オーフィスさん！」

「…イツセーの父、困ってる人はなるべく助ける。そう教えてくれた」

…初めて会った時の事、ちゃんと覚えててくれてんだな。

そうしみじみと思っていると、先生は顎に手をやっていた。

「…しかし、二天龍より二回り強くなつたぐらいか。妙だな…絞りかすと曹操が言っていた割には十分なくらいの力が残っている」

『……………あ、まさかお前』

そう呟いた先生の言葉を聞いて、ドライグは何か得心したようだ。

オーフィスは無表情で、胸を張った。

「曹操、恐らく気付いてない。我、サマエルに力取られる間に我の力、蛇にして別空間に逃がした。それ、さつき回収した。だから二天龍より二回り強い」

オーフィスの衝撃的なカミングアウトに、全員度肝を抜かれた。

「…そうか、さつきこの階層を見て回るって言ったのは、別空間に逃がした自分の力を回収する為だったのか!!」

「いぐぐぐとー」

「曹操め、オーフィスを舐めすぎたな。アイツは力の大半を奪ったと見込んでいたが、自分の力を別空間に逃がして、それをさつき回収してある程度回復させた。しかもそれが二天龍の二回り上と来たもんだ。こんだけありや十分つてもんだぜ！」

先生が鼻息荒く笑うのを尻目に、オーフィスは指先に黒い蛇を出現させる。

「力、こうやって蛇に変えた。でも、ここからは出られない。ここ、我を捕らえる何かがある」

「オーフィスが有限になった以上、向こうにもサマエル以外の對抗策があるだろう。死神が来たのは、オーフィスの抵抗を想定してたんだろうからな」

どっちにしても派手な動きは避けなきゃダメって事だな。

この後、脱出作戦を練り、それまでは各自待機と相成った。

――

作戦開始までの間、俺は黒歌の部屋にやって来た。

「よっ」

「イツセー様」

どうやら今はレイヴェルが見てくれたらしい。

「あらら、見舞いに来てくれるなんて嬉しいにゃん」

「気まぐれだよ、暇とも言う。けど……小猫ちゃんを助けてくれたからな」

「それこそ気まぐれにゃん」

…はあ、ホント嘘つくのが下手だよな。

その小猫ちゃんは、俯き気味にベッドの横の椅子に座っていた。

「…どうして、ですか」

小猫ちゃんは小さくそう呟くと、途端に立ち上がって叫んだ。

「どうして私を助けたんですか!?!…姉様にとって私は道具になる程度の認識だったはずですー!」

「…さあ、何でかにゃ」

「茶化さないで下さい!…あの時、私を置いていったのに。そのあと、私がどれだけ周りの人に酷い事を言われたか……冥界でのパーティの時だって、無理矢理連れていこうとしました……」

普段は無口な小猫ちゃんがこれだけ喋るって事は……今まで溜まっていた心情を吐き出しているんだな。

「…私には、姉様が分かりません……ッ!!」

そう言い残すと、小猫ちゃんは部屋を飛び出してしまった。

「小猫さん……」

「レイヴェル」

小猫ちゃんを追おうとするレイヴェルを引き留め、ある事を耳打ちする。

それを聞いたルフエイは一瞬目を見開くも、直ぐに頷いて小猫ちゃんの後を追って行った。

「あのお嬢さんに何を言ったのかにや？」

「態々聞こえない様に耳打ちしたつてのに教える奴がいると思うか？……黒歌、前の主を殺したつて言つてたよな。何があつただよ」

「…別に。気に食わなかつたから殺しただけにやん」

「……小猫ちゃんに、何か強いたのか？」

黒歌はそれを聞くと、顔から笑みを消した。

「猫？の…私達の力に興味を持ちすぎたから、目障りになったのよ。私は兎も角、当時の白音じゃ、私の元バカマスターに仙術を使うよう言われたら断らずに使用して暴走しちゃつただろうし」

「小猫ちゃん、正直だもんな。それに……自分達を救つてくれた奴の言う事なら、猶更か」

そう言うと、黒歌は静かに頷く。



「今考えれば、ホント最悪だった。アイツ、眷属の能力向上だけの為に、無理矢理な事をしまくってたわ。眷属だけならまだしも——血縁者にも無茶な強化を強いたのにや」

「……あの時小猫ちゃんを連れていこうとしたのも、リアスが小猫ちゃんの強化——  
—仙術を使わせるかもしれないって、思ったからか」

黒歌は目を見開いて俺を凝視した。

「どうやら、当たりだったらしい。」

「……赤龍帝ちゃん、私の心でも覗いたの？」

「バー口、んな魔法使えるかっての。不器用なお姉さん心を考えたら、そう至っただけだよ。……そう思ってたんなら、何で小猫ちゃんに歩み寄らないんだ？」

俺の問いに、黒歌は何も答えない。が、やがてポツリと呟いた。

「……あの子に絶望を味合わせておいて、今更どの面下げて歩み寄って言うのよ」

「そう思ってたんなら、何で殺すなんて過激な方法選んだんだよ。他にもっとあつたら」

「あの時の私には、それ以外の手段がなかった!! やつと得られた幸せな生活を、今更手放してまであの子にひもじい思いをさせたくなかった……辛い思いをさせたくなかった……  
……だけどつ」

黒歌はシーツを握り締めて、肩を震わせる。

「だけどそれでも、あの子に死ぬより辛い絶望を味合わせた……心無い誹謗中傷を受けさせた……私が犯した罪なのにつ、全部あの子を追い詰める絶望になったっ！そんな目に合わせた私が、今更白音と向き合うなんて……無理なのよ……」

徐々にその語気は小さくなっていき、やがて敷布団に小さなシミが生まれていく。

黒歌は——泣いていた。

「……………だそうだぜ。小猫ちゃん？」

「ッ!!」

俺は息を吐くと、扉の向こう側にいるであろう人物にそう投げかけた。

黒歌がハツとして扉の方に視線を向けると、扉は開かれた。

その向こうには——レイヴェルに連れられた小猫ちゃんがいた。

「赤龍帝ちゃん、アンタ……」

「お前、俺の家に来てからオーフィスが狙われないようにずっと見張ってたんだろ。だから気付かなかった。普段なら一発で気づいてただろうけどな」

俺がさつきレイヴェルに耳打ちしたのは、至極単純な事だ。

「小猫ちゃんを何とかドアの前まで連れてきてくれ」——それだけ。

でも心中がぐしゃぐしゃだった小猫ちゃんが素直に従ってくれるか分からなかったし、他者の気配に鋭敏な黒歌が気付く可能性だってあった。

でもどうやったかは分からないけど、レイヴェルは小猫ちゃんを何とか連れてきてくれた。

そして黒歌は小猫ちゃんとレイヴェルに気付かないくらい弱ってて、心中を吐露した。

天邪鬼な此奴の事だ、絶対小猫ちゃんが近くにいる時に心中を話したりはしないし、罪悪感もあって適当に遠ざける一方だったろうからな。

敢えて強引な手を取らせてもらったって訳だ。

「姉様……今の、話は………っ」

「白、音……」

震える声で問う小猫ちゃんに対し、黒歌は何も言えないでいる。

まるで自分の罪が身内にバレたかのように。

「黒歌」

俺に出来るのは、そんな不器用な姉妹の背中を押してやる事だけだ。

「確かにお前は小猫ちゃんに絶望を与えた、それは事実だ。でも、小猫ちゃんはそれを乗

り越えて、今お前に近付きつつある。少なくとも、お前がずっと抱えていたもんを共有できるぐらいには、小猫ちゃんは強い。だから——小猫ちゃんから逃げるな。絶望を与えたんなら、それと同じくらい……いや、それ以上の希望を注げるのが、人つてもんだ」

次いで俺は「小猫ちゃん」と名を呼ぶ。

「黒歌は君にとつて辛い境遇を味合わせた張本人だ。でも、君を守ろうとした、それもまた事実なんだ。直ぐに黒歌を受け入れられなくても、それだけは覚えていていいんじゃないかな。何時かは、向かい合わなきや駄目な事だ……ま、俺が言つても説得力ないけどさ。でも、これで少しは、向き合えるようになったとは思うぜ」

お膳立ては済んだ……後は、この二人次第だ。

「レイヴェル」

レイヴェルも察してくれていたようで、黙つて俺に付いて来てくれる。

俺とレイヴェルは、その場を静かに出て行つた。

「小猫さん、大丈夫でしょうか」

部屋の外にいる俺に、レイヴェルは心配そうに尋ねてきた。

「……あの二人、とことんまで不器用だからな。時間は掛かるだろうけど、大丈夫だよ」

「…どうして、そう確信が持てるのですか？」

「——家族、だからな」

俺の答えに、レイヴェルは呆気に取られた様子だった。

でも直ぐに納得したらしく、笑顔で「はいっ」と言ってくれた。

「レイヴェルもありがとな。俺のお節介に付き合ってくれて」

「当然ですわ」。私は、イツセイ様のマネージャですから！

そう胸を張って言ってくれる後輩の姿は、これ以上ないってぐらい輝いて見えた。

—————

もう一軒用事がある俺はレイヴェルと別れて、今度はライバルの部屋に訪れた。

「邪魔するぜ」

ノックして入ると、ヴァーリは上半身だけ起こしていた。

傷はアーシアのお陰で治ってはいるが、顔色が酷く悪い。

汗も掻いており、その呼吸も依然として荒い。

『サマエルの呪いの影響だろう。本当ならお前もああなる筈だったんだぞ』

そう言ったら笑えないな。

…ヴァーリのこんな表情、見るのは初めてだけど、こんな形で見たくはなかったな。

「…邪魔をするなら帰ってもらえるか」

「へいへーい…って何でやねーん」

何てコントをしつつ、俺は椅子に腰かける。

ヴァーリは苦笑い交じりに、ポツリと呟いた。

「…君には、情けない姿を見せてしまったな。曹操を打つべく来たのに、このザマだ」

「仕方ねーだろ、相手は究極の龍殺しなんだからよ。それに、お前がタダでやられるなんて思えねーからな」

俺の言葉に、ヴァーリは意外そうに目を丸くする。

「随分買ってくれてるんだね」

「そりゃーな。お前の強さは良く分かってるつもりだからよ。……で、お前は『覇龍』を超えた力は得られたのか？」

「だとしたら？」

「あるなら何よりだ。一矢も報いないなんて、らしくねーからよ」

ヴァーリは「そうだな」と小さく頷いた。

「曹操はゲオルクとサマルを死守することと、あの場でド派手な攻撃をせずにオーフィスの力を奪い去ること、それを単独で行い、更には俺達を殺さずに攻撃する。この

四つの高難易度の条件を抱えながら、無事に目的を果たしていった。君も奴の力は理解しているだろうか？あれが人間の身でありながら、超常の存在に牙を剥く者達の首魁だ」

「嫌ってぐらい理解したよ」

アイツ、ホントに人間なんだろうな？とは思ったりもするけど、アイツは本当の意味で人間だ。

「…相手をよく観察して、徹底的に弱点を研究する。その上で自分達の武器の特性も研究し続けた。それが英雄派、その中心にいるのが、あの曹操と言う聖槍使い。あの男の禁手は、たとえ独りになっても複数の超常の存在と渡り合える為に、奴が研究に研究を重ねて発現させたものだ」

「それだけじゃねーんだろ？アイツの手札は」

トウルース・イデア  
『覇 輝』———どんなものか全く未知数の代物。

「あれは『覇龍』に近い力だ。極めて遠い、とも言えるがね。それを使えば絶大な力を得られるが、暴走と隣り合わせだろう」

「曹操がそれを制御できると思うか？」

「…分からないな。だが、魔力を持っていないアイツでは、操り切れないだろうと踏んではいるが」

つまり全く分からない……って事だ。

「ま、その方が面白いんじゃないか？ ガチンコでやりあえば、嫌でも分かる。今それを考えたって仕方ないとも言うけどな」

「…それもそうだ」

俺の答えに、ヴァーリはフツと笑う。

「あ、そうだ」

「む？」

「オフィスの事、ありがとな」

俺は礼を言う。

多分ヴァーリとしては、曹操をいぶり出すって目的もあつたと思う。

でも、それ以外の理由もあつたんじゃないかとも思うんだ。

「ああ…君が気にする事はない。オフィスの話し相手だった縁だ。時折、寂しそうだったからな…いや、余計な事を口走ってしまった。忘れてくれ」

「やなことだ」

「は？…!!」

ヴァーリは俺の手に握られたものを見て、絶句した。

録音状態にされていた、俺の携帯だ。

「お前がらしくない事言ったんだ。録音しなきゃ損だろ」



「おい、頼むから拡散してくれるな……うつ！」

「はは、無理すんなよ。重病患者なんだからよ」

俺は苦しげに胸を抑えるヴァーリにひらひらと手を振ると、部屋を後にした。

脱出作戦は、間近に迫っていた――

『……………サマエルの呪いをも跳ね除ける程に馴染んできたか』

だがイツセーは気付かなかった。

死神の一隊の軀の上に立っているファントムの首魁、ワイズマンがいた事に。

『…首尾は怠るなよ。ガルム』

「……御意」

## MAGIC138 『生と死のEscape Game』

さて、ホテルの窓から外を見やるが——真つ黒のローブを着た死神様御一行がこつちを見上げていた。

フードを目深く被っているから表情は窺えない。

だけど向けられている感情は分かる………敵意、殺意がマシマシだ。

手には雑草を刈るには大きすぎるほどの大鎌。

あれが死神を象徴する武器、斬られれば魂を汚染されるらしい。

こうなったらハーデスのこの行動は完全に越権行為だ……まあそれを追求するのはここから脱出してからだな。

兎にも角にも、ゲオルクが創り出したこの疑似空間から脱出するには三つの方法しかないらしい。

『一つ！創り出した術者が解除する！二つ！強制的に出入りする！そして三つ！術者を倒すか、この結界を支えている中心点を破壊する!!』

何でオーズ風なんだよ。

『ジオウにオーズ出演したから祝おうと思って』

まあ分かりやすく纏めてくれてありがとよ。

『ぶつちやけ作者が書きやすくする為にどうするか悩んでたらオーズのナレーション風にしたらどうだ？って発想から生まれたんだけどな』

メタイ!!

「中心点…制御装置に関しては駐車場、ホテルの屋上、ホテル内部の二階ホールの会場、計三つの結界装置が確認できました。ウィザードラゴンさんの使い魔のお陰です！」

こういう時プラモンスター達は便利だ。

小さいから気付かれにくいし、ルフェイちゃんが掛けてくれた気配遮断の魔法も相まって短い間で制御装置を見つけてくれたからな。

「壊すべき結界装置はウロボロスの像か。三つとは相当大がかりだな。この空間はオフィスを留める為だけに作られた特別な専用フィールドって事だ。本来のオフィスのなら問題ないだろうが、力を殺ぐことを前提で設計してたんだろうな」

「装置の傍には死神の数も多数集結しています。駐車場が一番多いですね。曹操様は既にこの空間から離れています。代わりにジークフリート様がいらつしやいますし、疑似空間製作者のゲオルク様もおります」

つまり駐車場が一番の難関って事か。  
けどそーいや…

「ある個所の死神部隊が全滅してたのは何なんすかね」

偶然クラーケンが見つけたのだ。

「ここより下の階層にいた死神部隊が全員倒れていたのだ。」

「…何かのイレギュラーが働いていた可能性もあるな。とにかく、ますます油断できないって事だ」

「…それもそうっすね。じゃあ取り合えず、作戦通り俺が初撃で叩くって事で良いっすね?」

「ああ。…すまん、お前もサマエルで疲労してるってのに」

「気にしないで下さいよ。ヴァーリに比べたら屁の突っ張りっすよ」

それにこんなんでへこたれてたらヴァーリに怒られるしな。

「行けるよな? ドライグ、ドラゴン」

『大丈夫だ、問題ない』

『誰が疲労している?』

よし、行けるな。

「ドライグの奴、死亡フラグ立てたけど大丈夫か?」

「大丈夫だ、問題ない」

「お前から打ち合わせとかしてないよな?！」

さて、脱出作戦の始まりだぜ！

——

ルフエイちゃんの結界で覆われた階層の廊下に、俺は鎧姿で立っていた。

俺の傍には猫又モードの小猫ちゃん。

その近くではルフエイちゃんが脱出用の魔方陣を準備していた。

この空間から先に抜け出すのは、ゼノヴィアとイリナだ。

イリナはサーゼクス様と天界に今回の真意とハーデスのクーデターを伝える役割、ゼノヴィアはその護衛だ。

ゼノヴィアに関しては、護衛の他にエクステュランダルの修理も頼みに行く手筈だ。『まさか全てのエクスカリバーが揃うとはな。修理終わったらとんでもないことになるんじゃないか?』

そう、ドライグの言う通り、実はエクスカリバーが全て揃ったのだ。

今イリナが持っている聖剣がそうなんだ。

アーサーが持っていた最後のエクスカリバー、『エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣』。

それを何と譲渡されたのだ。ルフエイちゃん曰くもういらならしい。

『大方あの親フェンリルの制御に使う為に持ってたんだろう。今は暴走の兆しもないし、力もあの時より落ちてはいるがそれでもあれほどの魔獣はいまい』

ま、何にせよその時が楽しみだ。

「…探知、完了しました。先輩、そこそこです」

「了解つと」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!》

俺は鎧を青色に変化させ、各砲門を指し示された場所に向ける。!!!

「…小猫ちゃん」

「はい…?」

「その…こんな時に聞くのは野暮だけどき、黒歌とは……」

俺の問いに、小猫ちゃんは少しだけ沈黙する。

「……私は、今まで姉様が嫌いでした。恨んでもいました。ですが……」

顔を上げる小猫ちゃん。

その顔は、さつき出て行った時とは違って、強い眼差しだった。

「ちよつとだけ、姉様とも、昔のように戻れたような気がします。本音でぶつかり合つて、ちよつとだけ、姉様がまた好きになりました」

「…そっか」

「…これも、イツセー先輩のお陰です」

「止してくれ。俺はただ背中を押したただけだからさ」

「それでもです…」

照れくさくなつてちよつと顔を背けると、小猫ちゃんは俺に抱き着いてきた。

「先輩がいたから、先輩の言葉があつたから、私はここまで強くなれました。先輩のお陰で、ギャー君も強くなれた。だから、私も今以上に強くなろうと、思つて」

「なれるさ。俺だつてこうして変わったんだ。小猫ちゃんなら直ぐだよ」

「…好きです、イツセー先輩。大好きです。グレイフィアさんが先にいても、他の皆さんが先にいても、必ず追いかけて、貴方の隣に立つてみせます。だから…」

小猫ちゃんは一且言葉を切つた後、真つ直ぐに俺を見上げて、告白した。

「おつきくなつたら、お嫁さんにしてください…!」

『え、そこで逆プロポーズしちゃうの!?!』

小猫ちゃんの逆プロポーズに驚く俺だつたけど、それ以上に周りの女性陣——り  
 アス、アーシア、朱乃さん、ゼノヴィア、イリナ、レイヴェル、そして黒歌。

つて、聞いてたんかい!なんか空気読んで聞こえないふりしてバツチリ聞き耳立てて  
 んじゃない!!



ルフェイちゃんもあわわと顔を真っ赤にしてこちらを見ている！君もか！！  
唯一オーフィスだけだ、この空気でもぼんやりとしているのは！

あ、木場と先生は横見ながら笑い堪えてる…後で殴ろう。

けど――

「……先、越されちゃったな」

「へ……？」

「小猫ちゃん、俺はさ。意外と欲張りなんだ。自分が欲しいって思ったもんは何としても手にしたい。だから――」

俺はマスクをこの時だけ収納して、小猫ちゃんの唇を奪った。

『あ——————ッ!!!』

そして響き渡る女性陣の悲鳴！

この程度は予想の範疇、ここまで来たらいつそ派手にやるのが俺流だ！  
「絶対、君を幸せにする。俺と、人生の最後まで生きてくれ！」

「……は……!!」

小猫ちゃんは嬉しそうに何度も頷いた！

よーし、甲斐性は見せたぜ！

…後ろで女性陣が何やら会議を開いてるのは見なかったことにしよう、うん！

『戦場で告白か。死んだな』

『死んだな』

洒落にならない事言うな!!

「えーっと、術式、組み終わりました！」

そうこうしてる内に準備が出来たようだ。

さあ——

「シヨータムだぜツ!!!」

《Full Blast Burst!!!》

力強い音声と共に、赤と蒼が入り混じったん力の奔流が砲門から放たれ、狙いを付けた場所——屋上とホールに向かう！

俺達の作戦は至極単純、砲撃形態の水嶺僧侶の砲撃で先に装置を二つ同時に破壊、それと同時に群がってる死神を殲滅。

そして守りが一番厚い駐車場の区画を最後に制圧！

それとこの初撃は敵の動揺を誘うため、態と威力を大きくしている。

普通なら燃料切れになるが、魔力特化同士のこの姿なら容易い！

瞑目して確認したルフェイちゃんが告げた。

「屋上とホールの結界装置の破壊に成功！周囲にいた死神の方々もいません！残るは駐車場の一画だけです！———こちらも準備完了しました！」

刹那、ルフェイちゃん達の足元の魔方陣が輝きを増す！

「ゼノヴィア、イリナ！しくじるなよ!!」

「イツセーもな！」

「絶対にこの任務は果たしてみせるわ!!」

よし、これで三人の脱出は成功だ！

「イツセー、外の死神連中は任せたぞ!!」

「了解!!」

先生達を筆頭に、俺を除いたメンバーが駐車場に向かっていく！

残った俺は結界の外に行き、突然の事で狼狽えていた外の死神連中の元へ！

『今のは……!ッ、赤龍帝!?!』

「よー、死神さんよお」

ううわ、ここまで見ると気味悪い光景だな。

薄暗い連中が釜を振りかざしてよ。

『一人とは、舐めた真似を……』

「いや、一人で十分だからさ」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》

鎧を黄色に染めると、俺は右拳を地面に叩きつける！

軽い振動と衝撃の後、その場にいる死神全員がぐくりと膝を付く！

『…重力かッ!』

「あんまり時間かける訳にもいかないんでな。最初からクライマックスでやらせてもらうッ!!」

俺は両拳に魔力を集中させて、地面に叩きつけた。

「まとめてファイナーレだッ!!グランデイス・タイラント龍戦車の蹂躪オッ!!」

叩きつけられた勢いで放たれた暴力的な衝撃波は、辺り一面の風景を死神と共に蹂躪するかのよう破壊していった。

『ちよいと威力大きすぎたな。空間もそうだし、向こうにも被害出てるかも知んねーぞ』

これだったらもうちよつと威力落としても良かったな。

死神がいた事が分からないぐらい、塵一つ残っていないかった。

「さて、向こうに戻るか」

俺は鎧を緑色に染め、風と共にその場を駆け抜けていった。

『……………素晴らしい』

イツセーがいなくなつて直ぐに、空間の何か所が歪み、そこからワイズマンが現れた。その声音は、純粹にイツセーの力量を褒め称えるものだった。

『順当に成長を遂げて行つてくれている……英雄派よ。お前達と言う障害が兵藤一誠を更に強くしてくれる。そう——』

新世界創造の為に——。

## MAGIC139 『終幕、そして――』

高速で駆け抜けつつ周りの死神を諸共発生したソニックブームで切り飛ばして駐車場に駆けつけると、色々とごった返していた。

「うおー！おいイツセー、さっきの衝撃お前か!？」

ソニックブームを躲してそう聞いてくるアザゼル先生に、俺はサムズアップして答える。

「はい！ちよつと本気出しました!」

「アホ！加減を考えろ!!さっきの衝撃だけで死神半分ぐらい怯んだから一網打尽出来たけどよ!」

倒せたなら結果オーライだな!

俺は先生の抗議を無視して、ザつと周囲を見渡す。

リアスと朱乃さんのお姉様コンビは危なげなく死神を殲滅しており、黒歌と小猫ちゃんのお姉妹ペア with レイヴエルも…大丈夫そうだな。

木場と剣撃を繰り広げるジークフリートに――――さつきからアザゼル先生と高速

戦を繰り広げるなんかヤバそうな死神。

「アイツは……」

『確か最上級の死神……名は、プルートだったか』

それを眺める俺に、先生が教えてくれた。

「イツサー！此奴等は俺達がオーフィスと結託して同盟を脅かそうと理由つけて襲って

きやがった！」

「はあ!?何だよそれ!?!」

何だその根も葉もない嘘は!?!

突然の告白に唾然としたそんな俺に——

『赤龍帝、覚悟!』

「ん?」

一瞬の隙を狙ってか、周りの死神よりワンランク強そうな奴等が得物を振りかざして

襲ってきた。

「さあ赤龍帝、まずは彼らの洗礼を受けてもらおうか」

木場の聖魔剣を受け流しつつそう言うジークフリート……指示したのはアイツか。

「よ……つと!」

《Blade!》

《Engine! Jet!》

俺は特に動くでもなく、アスカロンから発生させた高速の斬撃を見舞う。

それを躲そうとするが……躲すモーションを見せた時点でそれは命中し、死神全員が霧散した。

うん、見て何となく思ってたけど、弱いな。

サイラオグさんとか曹操とかと比べると。

「なっ、中級クラスの死神を一撃で……ッ!?!」

「余所見とは余裕、だねっ!」

「ッ!!」

ギイン!!

目の前の光景に驚愕していたジークフリートに、木場は容赦なく刃を突き立てる！  
それを寸前で防ぐが、ジークフリートは大きく後退する！

「爆ぜろ!」

「っ、ちい!!」

木場はジークフリートが後退した場所に聖魔剣を創り出し、すぐさま爆発!

それを跳躍して躲すが、それを追いかける様に新たな聖魔剣が追走してくる!

「――ノートウング、デイルフィング!」



ジークフリートは回転してそれを薙ぎ払い、着地……した瞬間に切り込む木場！

「…へえ、以前より速くなっているね。これは少し本気を出さないといけない、かなっ  
!？」

「っ！」

ジークフリートは背中から腕を四本生やし、新たに得物を握り締めて木場に襲い掛か  
る！

「バルムンク!!」

ドリル状のオーラを纏った魔剣から禍々しい螺旋状の波動が放たれ、木場へと向かう

！

「っはー！」

木場は手に平らな魔剣を創り出し、その波動を受け止める！

禍々しい波動は木場の手に握られた剣に吸収されていく！

木場はその魔剣を地面に刺して、すぐさま龍騎士を生み出し、ジークフリートに嫉け  
る！

「ダインスレイブ!!」

横薙ぎに放たれた魔剣の一撃から巨大な氷の鋭い柱が生まれ、龍騎士達を貫いていく

！

「どうやら君の技量は、この龍騎士団には反映できないらしいね」

「流石だね、確かにその通りだ。ならば――周りの物を利用すれば良い！」

龍騎士の一人がその言葉に反応し、先程木場が突き立てた魔剣を握り、ジークフリートに振りかぶる！

ジークフリートはそれを受け流そうとしたその時、魔剣からさつきと同じ禍々しい波動が放たれた！

「これは――ツ!？」

そうだ、これって……

『先程のバルムンクの一撃か。あの魔剣で吸収して、溜め込んでいたのか』

螺旋状の嵐は大地を抉り、ジークフリートはそれを受けて体勢を崩す！

その反動か、龍騎士と魔剣が崩れ去るが、その甲冑の中から何者かが飛び出し、ジークフリートを斬り落とした！

「馬鹿な……では、先程の君は……ツ!？」

驚愕の眼差しで木場を見やるジークフリートだったが、龍騎士に指示を送っていた木場が、煙のように消えうせた。

……幻術か。

「さつきの僕は幻術ですよ。魔力で作り出した、ね。僕は竜騎士の甲冑を身に纏って、貴

方が油断するのを待っていたんです」

「何時、入れ替わったんだ……!?!」

「さつき龍騎士を生み出した時、ですよ。貴方がたはまず相手の弱点を把握してから攻める——その手法を利用させてもらった」

自分の不得手すら利用したのか……やるじゃねえか!

ジークフリートは自分の過失に怒り心頭と言った感じだが、それ以上の驚愕も顔に張り付けていた。

「……このダメージ。まさかとは思っていたが、君は龍殺しの力を得たとはっ!!」

……え、龍殺し?!

アイツ、そんな剣持ってたっけ?

『いや、恐らくは——』

「ええ。……これは龍殺しの“性質”を持たせた聖剣。あなたの神器が龍の性質を持っている以上、この力には抗い様がない」

「……龍殺しの聖剣、魔剣は神器で創り出すのが一番困難だと言われているんだけどね……まさか君がそこまで至っていたとは。見事、と言う他あるまい」

自分で創り出した……アイツ、どんどん強くなってるんだな。

こりゃ俺もうかうかしてられないな!

「いや、イツセー君に比べたら全然だよ」

「俺の考えを読むな!!」

何時の間に読心術とか学んだんだよ!?

「…赤龍帝、イツセー君との修業は僕を際限のない世界まで誘ってくれる。今度、彼とのトレーニングを受けてみたらどうかかな?…:…ただし、毎回三途の川を見る覚悟はしておいた方がよい。イツセー君は手加減してくれないからね」

「おう。殺すつもりで行くぞオ」

「それは魅力的だが…:…まずはこれを退けてからだ」

ジークフリートの周囲に霧が発生し、そこから夥しい数の死神が現れた!

『ほお、物量で圧そうと言うのか。確かに悪くない考えだ。だが——』

「俺達”がいる”って言うのは、こういう事が出来る”って分かってるよな?”」

宝玉から銀色の光が溢れ出る!

「ちようどさつき童子の童貞野郎との戦いで不完全燃焼だったんだ——」

『そうだな——』

『ぶっ潰す』

俺は手を大きく突き出し、希望への詠唱を読み上げた!

「『我ら、目覚めるは！ 覇の理を超越せし赤龍帝なり!!』」

『赤き不滅の力と!』「決して折れぬ信念抱き!」

「『天道を征く!!』」

「『我ら、古からの力と信念受け継ぎし龍の戦士となりて—— 汝の絶望を払い、永久の希望となる事を誓おう!!!』」

《Infinity Hope! Dragon Evolution Drive  
!!!!!!》

俺達の魂が溶け合い、一つとなっていく!

詠唱は銀の輝きを放つ鎧となり、霧に包まれた駐車場を隅々まで照らしだす!

「それが噂の—— 『無限女王』と言う奴か!!」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!  
!!!!!!》

ジークフリートの感嘆の声を無視し、俺達は魔龍進化を行う!

《Infinity Boost Charge up!!  
Boost》

魔力が最大限まで高まり、やがてそれらは鎧の増設された全砲門へと集約する!

!!!!!!!!!!!!



を開いた。

「…相変わらずとんでもない火力だな。サマエルの力を直接受けたとは思えない」

…はは、まあ実は結構無理してるんだけどね。

気を抜けば倒れる事必至だぜこりや。

『流石の貴様等でも限界が近いようだな。こっちは俺達やアザゼルもいる。これで本当のファイナーだ』

そうドライグが言った時——

バチ、バジツ！

この空間に快音が響いた。

『おいおい、この期に及んで新たな参入か？』

「いや、これは——」

おいドライグ、向こうも知らなさそうだぞ。

次元に穴を開けてまでこの場に乱入してきた人物は——

『シャンプーハット…だっけ？』

『違う違う。ノーパンしゃぶしゃぶだ』

「どつちも全く掠ってねえ!! シャルバ・ベルゼブブだ!!」

あ、それだ。

もうめんどくせえからシャンプーハット付けてノーパンしゃぶしゃぶやってる奴で  
 良くないか?

「相変わらず癪に障る能天気さだな、赤龍帝。それに――ヴァーリ」

俺と、ホテル上階の窓際にいるヴァーリを睨み付ける。

…何で此奴生きてんだ?

話を聞いてた限りじゃ、俺が暴走して発動した覇龍で死んだ筈だろ?

そう思っていると、ジークフリートが一步前に出た。

「…シャルバ、報告は受けてはいたが……まさか、本当に独断で動いてるとはね」

「やあジークフリート。貴公等には大変世話になった、礼を言おう。お陰で傷も癒えた。

……オーフィスの『蛇』を失い、多少パワーダウンしてしまったがね」

「能書きは良い。ここに来た理由は?」

「なあに。宣戦布告をと思ってるね」

……あの野郎、何企んでやがる?

シャルバが醜悪な笑みを浮かべてマントを翻すと、そこから一人の少年が姿を現した。





あの野郎、一体何仕出かしたんだ！

その場で空中に浮き始めたシャルバが哄笑を上げる！

「フハハハハ!! 『魔獣創造』はとても素晴らしく、理想的な能力だ!! しかも、彼はアンチモンスターを作るのに特化していると言うではないか! 英雄派の行動を調べ上げ、人間界で別動隊と共に動いていた彼を拉致してきたのだよ!!」

「他の別動隊はどうした…?」

「無論、抵抗されたので殺させてもらったよ!! それでは作ってもらおうか! 現悪魔共を滅ぼせるだけの怪物をツ!!」

現悪魔を、滅ぼす……!? 此奴何言ってるんだ!?

だがレオナルドの影から、巨大なものが生まれていくのを見て、俺はそれが何なのかを悟った。

規格外の図体に頭部、大きすぎる腕、そしてそれらを支える圧倒的な脚!

『「悪魔を滅ぼす魔獣を、創造させたのか……!!」』

ドライグが低く唸った。

ホントにこんな怪獣サイズの魔獣を生み出せるのか、これ!

『いや、恐らくはあの術で所有者のキャパシティを無視して作らせてんだ! あんな事をさせたら、あの少年は壊れるぞ!!』』

な、マジかよ!?

だけどそうしてる間にも同じ凶体の魔獣が次々と生み出されていく!

そしてその魔獣達の足元に、転移用の魔方陣が出現した!

「ハハハハハ!!今からこの魔獣達を冥界に転移させ、暴れてもらう予定なのだよ!!これだけの規模のアンチモンスターだ、さぞかし冥界の悪魔を滅ぼしてくれるだろう!!」

「『っ、させるか!!』」

《ENGINE!Jet!》

俺はそれを阻止しようと高速の斬撃を放つのを皮切りに、全員が攻撃を放つが表面を多少消し飛ばす程度のダメージしか与えられない!!

「『…うっ』」

俺はがくりと膝を付いた。

思ってたより、無理をし過ぎたか……!

皆の攻撃も空しく、魔獣達は消えていった。

その魔獣達が消えた途端、白い空に断裂が生まれ、空間の軋む音が響いてきた!

「ちっ、装置がもう持たん!シャルバめ、所有者のキャパシティを超える無理な能力を発動させおつて!!」

「…頃合いか。レオナルドを回収して一旦退こう。プルート、貴方も——っ」

ジークフリートはそう言いかけた口を噤んだ。

理由は、その死神本人がいない事に気付いたからだ。

「…成程、シャルバを陰で支援したのは……あの骸骨神の考えそんな事だよ。嫌がらせの為なら、手段は選ばないと言う訳だね。あんな一瞬だけの雑な禁手だなんて、どれほどの犠牲と悪影響が出るか分かったものではない。僕達はゆつくりとこの子の力を高めようとしていたのだが……これでは、赤龍帝ドライブの言った通り……」

そう漏らすと、二人は気絶したレオナルドを回収して霧と共に姿を消した。

逃げ足の速いこつて……つて！

『うおっ!?!』

俺に突然魔力の塊が放たれた！

それを弾いて飛ばし、飛ばされた先を見ると――シャルバが後衛のメンバーに、特にヴァーリに向けて集中的に攻撃を加えていた！

「どうしたどうした!?!」自慢の魔力と白龍皇の力はどうしたのだヴァーリイイイツ!!  
所詮、人と混じった雑種風情が、真の魔王に勝てる道理などないっ!!」

そう聞くに堪えない笑いを上げるシャルバの姿に――俺は疲労を無視してシャルバを殴り倒した！



『蛇』を再び与えてもらおうかっ!!」

『っの野郎……!!』

更に怒りを湧き立たせる俺だったが、そうこうしてる内にフィールドの崩壊は進んでいく!

「もうこのフィールドは限界よ!今なら転移も可能だから、魔方陣を展開するにやん!!  
それで皆で、ここからおさらばするよ!!」

黒歌が魔方陣を展開し、そこにリアス達が集う。

傷を負ったヴァーリは、アーシアが傷を癒していた。

だけど、俺はそこから動かなかった。

いや、まだそっちに行くつもりはない。

「イツセー!何をしてるの!?!早く!!」

「悪い、リアス」

俺は呼び掛けてくるリアスに、ちよつとした我が儘を言う。

『俺、オーフィスを助けてくる。だから先に行つててくれ』

その我が儘に、全員度肝を抜かれていた。

「それなら僕も一緒に!」

「一人だけ格好つけても仕方ないのよ!?!」

「カツコつけて言うかよ」

俺は二人の申し出を遮り、頭だけ振り返る。

「皆この戦いで疲労してるだろ？俺だったらまだ何とかなるし、このままあの野郎を放っておく訳にはいかないし、オーフィスを誰か分かんねえ奴に渡す訳にもいかない。皆はあの魔獣共の脅威を冥界に伝えてほしいんだ」

それにアイツは、希望を根絶する——そう宣いやがった。

それだけは、絶対に許すわけにはいかない！

「もう限界にやん！今飛ばないと転移出来なくなるわ！」

「『もうあれこれ言ってる暇はない!!早く!!』」

「…兵藤一誠」

先に行くように促す俺に、ヴァーリが口を開いた。

先生に肩を貸してもらっているヴァーリは、相当調子が悪そうだ。

「『安心しろ、お前の分まで殴ってやるから』」

それを聞いたヴァーリは、口の端を笑ませた。

「…イツセー！後で龍門を開いてお前とオーフィスを召喚する!!だから、絶対に死ぬんじゃねーぞ!!」

「『勿論っすよ』」

それに……俺の脳裏に、銀髪の愛しい人が浮かび上がる。

俺はあの人を、皆を残して死ぬつもりはない。

「じゃあ、グレイフィアには上手く言っておいて下さい」

それだけ告げて、俺はシャルバの方へと突っ込んでいった！

——

…さて、カッコつけて言うかよとか言ったけど、完全にカッコ付けだよな。

ドライブ、今の俺の状態はどうだ？

「結構ギリギリだぞ」

やっぱり？

「だが、例えどんな状態でも行くんだらう？」

当たり前だろ、オーフィスは——俺の大切な友達だ。

「無限の龍神を友呼ばわりするなんぞ、世界中探してもお前だけだろうな。……相棒」

…ああ。いつの間にか俺の目の前には馬鹿みたいに笑っているシャルバがいた。



シャルバは俺に視線を向けると、不快そうに顔を歪める。

「…ヴァーリならば兎も角、貴殿のような天龍でも悪魔でもない化け物に追撃されようとは……何処までもドラゴンは私を馬鹿にしてくれるッ！」

「『化け物お？お前だっておんなじだろ。狂気、復讐、憎悪……色んな感情に飲み込まれた理性のない悪魔、お前も俺と同じバケモンだ』」

「黙れ!!」

そう言った俺に対し、シャルバは指を突き付けた。

「この私を追撃するのは何が目的だ!? 貴殿も真なる魔王の血筋を蔑ろにするのか!? それともオフィスに取り入る事で力を求めるのか!? 天龍の貴殿の事だ、腹の底では冥界と人間界の覇権を狙っているのだろうか!？」

「『……あー、悪いけど今アンタが言った事に、俺は何も興味ない』」

俺はバツサリと言いつ切る。

「『俺がここに来たのは、オフィスを取り戻すためだ。後序でアンタを倒す。希望を根絶してやる、そう言ったからな。そんなアンタを放っておく訳にはいかない』」

俺の言い分に、奴は嘲笑を浮かべる。

「それがどうしたと言うのだ!? 当然なのだよ! 偽りの魔王が統治する冥界で育つ悪魔など、害虫以下の存在に過ぎない!! 成熟したところで、真なる魔王である私を敬う事もな

いだろう!! そんな塵屑共は、滅んで当然なのだ! 穢れのない冥界が破壊と言う想像によつて蘇のだ——ツ!!!」

長つたらしい妄想をほぼ聞き流していた俺は、シャルバを殴り飛ばした。

「『わりいな。……アンタの醜い妄執は聞き飽きたツ!!』」

「……真なる魔王を何度となく殴るこの不敬!!! 万死に値するう!!!」

激昂したシャルバが手を突き出すと、何も無い空間から大量の蠅らしきものが現れ、俺の周囲を取り囲んだ。

「消え去れツ!!!」

吠えるシャルバは、大量の蠅を操り、幾重もの円陣を組ませ、そこから極太の魔力の波動を無数に撃ち出してきた!

それらは全て命中し、俺の姿は爆炎でかき消された。

「は、はははははっ!! 見たか、真なる魔王の力を——」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》

「——ツ!!!」

その光景を見て狂喜を浮かべるシャルバの腹に、一撃叩き込んだ!

深く食い込んだ拳によつて、シャルバの体はホテルの外壁に叩きつけられた!

「『おいおい、これが真なる魔王の力か?』」

俺は——無傷だ。

掠り傷一つ付いちやいない。

『まあ、こんな程度だったらそりや他人の力に頼りたくもなるよなあ』  
ドライグもそうシャルバを煽る。

例えオーフィスの蛇があつたとしても、此奴の攻撃なんかに、俺達は絶対に屈しない。  
他者を駒のように扱い、見下し、それでいて他者の力に媚びる。

そんな野郎に——

『俺達が負ける訳ねえよツ!!!!ド三流があ!!!!』

体勢を立て直そうとするシャルバを重力で引き寄せると、持てる力を全て奴に叩きつける!!

吹っ飛ばされようとも、奴の体は重力で再び引き寄せ、そしてまた殴る!

《Infinity Solid Break!!!》

「でりやあああああつ!!!」

「がああああああつ!!!!!!」

最後の一撃を叩きこむと、奴の体を突き抜けた衝撃で周囲の空間が震える!  
それと同時に、俺の鎧が通常のものに戻った。

「これ以上は、限界か……」

けど、これでもう終わりだろう……。

「……この私を、魔王を舐めるなアアア!!!」

と思っていたが、寸前でシャルバは踏み止まった。

血みどろの形相でこちらを睨みながら、手元に魔方陣を展開、そこから一本の矢が飛び出た！

それを掴もうとするが、それは俺の右肩に刺さった。

今更こんな物で……！そう思い引き抜こうとするが、途端に俺の体がぐらりと揺れる。

肩を通して、全身に流れるついさつき感じた嫌な感触を思い出した。

この感じ、まさか……サマエルか！

そう思っている俺の前で、シャルバは愉快そうに笑う。

「フハハハハハハハッ!!! 苦しいであろう!? 当然だ!! その矢の先端にはサマエルの血が塗り込まれている!! ハーデスから借り受けたものだ! ヴァーリに使うと思っていたが、まさかゴミのような貴殿に使う事になるうとは、計算外であったぞ……! だが、これで形勢逆転だ! ここで死ぬが良い——」

ズボツ!!!

そう言つて手を振りかざしたシャルバの眼前で、俺は矢を何事もなかったかのように引き抜いてやった。

「な……………!!?」

「……………わりいな。どうやら俺はサマエルの力に耐えられる体質らしいんだわ」

絶句するシャルバに向けて、そう言い放つてやる。…………とは言え、流星に二度も受けたとなると、疲労の度合いがかなり増しているな。

腕とか鉛みたいに重いぞ……………!!

「ば、馬鹿な……………有り得ん、有り得んっ!! 全ての龍にとって呪いであるサマエルの血をその身に受けて、何故健在なのだ!!?」

「知るかよ。…:テメエのせいであつて疲労が増したけど、この状態でも、十分倒せる」  
「そう言い切つた俺は、再びシャルバの腹にボディブローを叩き込む!」

何度目かも分からない血反吐を吐くシャルバの首元を引っ掴んで、頭突きを浴びせる

!

「ギヤああつ!!!?」

「ウエルシユ・エクスカリバー」

「赤龍帝の聖剣ツ!!!」

痛みにもた打ち回るシャルバを蹴り上げ、手刀による斬撃を見舞う！

宙に浮かび上がり鮮血をまき散らすシャルバの体に、蹴りを食らわせ、吹っ飛ばす!!  
「があああつ!!……お、オーフィスよ! 『蛇』だ! あの『蛇』をもう一度私に寄こすの

だ!! そうすれば私はもう一度前魔王クラスの力を得られる!! さあ!!!」

「今の我、不安定。力を増大させるタイプの『蛇』、作れない。それに——」

絶望したシャルバを見つつ、オーフィスは珍しく怒りを感じさせる声音で言い放つた。

「例え『蛇』作れたとしても、イツセーに迷惑をかけたお前に、『蛇』を与えるつもり、ない」

……最後の頼みの綱にも見放されたな。

オーフィスとシャルバの間に、俺は立ち塞がる。

シャルバは震えながら俺を見上げる。

「テメエは冥界の子供達的笑顔を、希望を奪おうとした。だからこうして無残に這い蹲ってる。誰かの希望を踏み躪り、ただの恨み辛みで笑顔を奪おうとするテメエは——

——ここで俺が消し飛ばすツ!!!」

俺は右拳を引き、持てるオ!!ラと魔力を全て集約させる。

赤と紫の力の渦が周囲を迸り、拳が光り輝く!!

シャルバは逃げようと翼を広げて飛び立つが――

「ここままでしておいて!!!今更逃がす訳ねえだろ!!!砕け散れっ!  
ドラゴニック・フィスト  
 龍拳 オオオオオオオオツ!!!」

背を向ける外道に向かつて、俺は拳を突き出す!

莫大なエネルギーの塊は並行世界で顕現したドライグとドラゴンがフュージョンしたドラゴンの形になると、シャルバを飲み込んで大きく爆発する!!

こうして狂乱の悪魔――シャルバ・ベルゼブブは消滅した。

「……はあっ」

拳を突き出したポーズを解くと、俺はそのまま崩れ落ちる。

そこへ、拘束が解けたオーフィスがやってくる。

「イツセー、何故、我を助けようとする?」

徐々に意識が朦朧としてきたが、俺は何とかその質問に答えようと口を開く。

「…何でつて。この前、俺を助けてくれたじゃんか。それと、アーシアとイリナを守ってくれた。そのお礼」

「イツセーが礼を言うべき事じゃない」

「じゃあさ、こう言えればいいか?――友達だから」

その言葉に、オーフィスは目を丸くした。

…へへつ、やっぱこういうところは、可愛いよな……。

「オーフィス……今更だけどき、何であいつ等に手を貸したんだ?」

「グレートレッドを倒す協力をしてくれる、そう約束したから。我、次元の狭間に戻り、静寂を得たい。でも、もう次元の狭間に帰る力、無い」

…あの時と、全く変わってないな。

俺は鎧を解いて、オーフィスを抱き寄せる。

「それだったら……俺の家に来い。一緒に住もう」

「…でも我、イツセー達に迷惑をかけた。今更、イツセーの傍には、いられない」

「…それがなんだよ」

ぼんぼんと、オーフィスの頭を軽く叩く。

……あ、やっぱ、結構フラフラだわ。

ただどどうにか、俺は言葉を紡ぐ。



「お前がいたって望むなら、俺がその居場所を、お前の静寂を守ってやる。……まだまだ半人前、だけどな。……オーフィス、俺達の仲間は誰も、お前の自由を、静寂を奪ったりはしない。皆、良い人達ばかりだから、さ………」

だんだん下がっていく。瞼。

意識も闇の底に沈んでいく、そんな感覚。

『おい相棒！……こんなところで寝るな!!もうじきアザゼルが龍門を開く!!こんなところで寝たら、風邪を引く以前にお前でも死ぬぞ!!』

ハハツ……ドライグ、お前って奴は。

あー、ダメだ。もう、声を上げる気力も……。

『相棒！おい、相棒!!聞こえてるのか?!おい!!!』

「イツセー?」

何度も俺を呼ぶ相棒の声と、俺の名を呼んだ友達の声が聞こえたのを最後に――  
俺の意識は、消えていった。

――

僕——木場祐斗の眼前では、アザゼル先生と元龍王のタンニン様協力の下、召喚用の儀式が執り行われていた。

「召喚用の魔方陣の用意が出来た。——龍門を開くぞ」

先生がそう告げると、魔方陣が輝きを増していく。

中級悪魔の昇格試験センターにある転移魔方陣フロアに、今僕達グレモリー眷属と、その関係者が集合していた。

アザゼル先生が地下の一フロアにドラゴンを呼び寄せる魔方陣を描き、龍門を開いてイツセー君を呼び寄せようとしている。

魔方陣の作成には、小猫ちゃんのお姉さん、黒歌さんも協力してくれていた。

あの疑似空間から脱出後、僕達はイツセー君を呼び寄せるだけの魔方陣を描ける場所に移動し、龍門による強制召喚を執り行う事となったんだ。

元龍王のタンニン様を早急にお呼びして、イツセー君の眷属であるティアマトさんと協力してもらった。

勿論、白龍皇であるヴァーリもサマエルによる呪いのダメージに耐えながらも、魔方陣の隅で待機していた。

……あの後、疑似空間から転移された規格外のモンスター達は現実の冥界に出現し、各都市部に向けて進撃を開始した。

すぐさま悪魔と堕天使の同盟による迎撃部隊が派遣されたのだが……規格外の大きさに加え、凶悪な堅牢さに手を焼いているところだった。

他にも色々な事が起きているのだけれど、魔獣による被害が深刻化する前に、僕達が動かなければならない。

——イツセー君、君の力が必要なんだ。

君の希望を守る力、今こそ使わないといけない……冥界の首都では、君の登場を心待ちにしている子供達が多いんだよ！

だから、帰ってきてくれ!!

「——うし、繋がったぞー！」

先生がそう叫ぶと、巨大な魔方陣に光が走る！

先生の持つファープニルの宝玉が金色に光り、ヴァーリと彼の仲間であるカイトさんの体もそれぞれ白と水色の光を発し、タンニーン様の体も紫色に、ティアマツトさんの体も青く光る。

力強く光り輝く魔方陣はついに弾けて何かを出現させようとした。

そして、閃光がこのフロア全体を包んでいく。

……やがて光が止み、僕達は魔方陣の中央に視線を向ける。

——そこにあつたのは、四つの指輪だけだった。

「……………え？」

呆然とした声は、誰が発したものか分からない。

そこに召喚されている筈のイツセー君はおらず、彼の使う——ドラゴンスタイルの指輪だけだった。

誰も言葉を発せないでいると……………。

「…兵藤一誠は、召喚に応じなかったようだな」

この場の空気を裂くように、何者かの声がした！

僕達は直ぐに声のした方角——後ろを振り返ると、

「……お前は！」

「……」

そこには、イツセイ君を魔法使いへと導いた存在——白い魔法使いが、立っていた。

## 第十二章：補習授業のウエルシュインファイニティー

## MAGIC140『欠落せし希望』

昇格試験から二日が経過した昼頃。

僕、木場祐斗とグレモリー眷属はグレモリー城のフロアの一角にいた。

グレモリー城は慌ただしさの中にあつた。

理由は、現在冥界が危機に瀕しているからだ。

旧魔王のシャルバ・ベルゼブブの外法によつて生み出された『魔獣創造』の超巨大モンスターの群れは冥界に出現後、各重要拠点及び各都市部への進撃を開始。

フロアに備え付けられた大型テレビではトップニュースとして、進撃中の巨大な魔獣が映し出されていた。

テレビにもそれら全ての様子が克明に報道されており、奴等はゆつくりと一歩ずつ歩みを止めずに新睨視続けている。

そして厄介なのは、これらの魔獣達は進撃をしながらも小型のモンスターを独自に生み出している点だ。

魔獣の体の各部位が盛り上がり、そこから次々と肉を破つて小型モンスターが誕生し

ていつている。

大きさは人間サイズだが、兎に角数が多く、一回に数十から百体近くの規模で生み出されているようだ。

奴等を通りかかった森、山、自然を破壊し、そこに住む生き物も食らい尽くしていく。新劇先の町や村の住民は今のところ最小の被害で避難できているようだが、町村そのものは丸ごと蹂躪されていった。

奴等が通り過ぎれば、そこには何も残らないと言う凄惨な状況だ。

余りに異形な生物——これが上位神滅具の一つ『魔獣創造』が生み出した悪鬼のごとき異形……同じ創造系の神器を持つ者として、畏怖するだけばかりだ。

その異形の中でも群を抜いて巨大なのが、冥界——魔王領にあるリリスに向かっていると言う規格外の魔獣だ。

人型であり、他の魔獣よりも一回り以上も上回る巨体を有しており、画面越しでもその強大さが窺えてしまう。

一際巨大なその魔獣を冥界政府は『ジャバウォック超獣鬼』と、その他十二体の巨大な魔獣は『バンダースナッチ豪獣鬼』と呼称されている。

これらはアザゼル先生がルイス・キャロルの創作物に因んでつけたものだった。

テレビの前で『豪獣鬼』バンダースナッチを相手に冥界の戦士達が迎撃を開始していた。

黒い翼を広げ、真正面から、あるいは側面、背面からほぼ同時攻撃で魔力の火を撃ち込んでいく。

周囲一帯を覆いつくす質量の魔力が魔獣に放たれていく。この強力な攻撃を繰り返される迎撃チームは最上級悪魔とその眷属だ。

普通の魔獣ならばこれだけの攻撃を受ければまず間違いない滅ぼされているだろう。

だが――

『何と言う事でしょうか！最上級悪魔チームの攻撃がまるで通じておりません!!』

戦慄しているレポーターの声が聞こえてきた。

そう、テレビに映し出されていたのは――最上級悪魔チームが放った強大な攻撃をまるで意に返さない魔獣の姿だった。

……僕達が疑似空間で魔獣を攻撃した時と同様だった。

ダメージを負っているようには見えているが、それは体の表面だけだ。

致命的な傷は一切加える事が出来なかった。

迎撃に出ている各最上級悪魔チームはどれもがレーティングゲームで上位のチームだ。



そんな彼等でも効果のある迎撃が出来ずじまだった。

次々と生み出される小型のモンスターを壊滅させるだけで手いっぱいと言う状況でもあるのだが……それを加味しても巨大な魔獣達の堅牢さは圧倒的だった。

各魔獣達の迎撃には墮天使が派遣した部隊と、天界側が送り込んできてくれた『御使い』達、ヴァルハラからは戦乙女のヴァルキリー部隊、ギリシャからも戦士の大隊が駆け付け、悪魔と協力関係を結んだ勢力からの援護を受けている。

それによって、現状最悪の状況だけは脱している。

だが、問題は山積していた。

一つはこれよりも強大な『超獣鬼』ジャバウオックの方だ。

昨夜、レーティングゲーム王者であるデイハウザー・ベリアル率いる眷属チームが迎撃に出たのだが……あの『超獣鬼』ジャバウオックにダメージこそ与えたものの、歩みを一時しか止められなかったのだ。

『超獣鬼』はダメージを速攻で再生、治癒してしまい、何事もなかったかのように進撃を再開させた。

その事実には衝撃的なニュースとして冥界中を駆け回り、民衆の不安を更に煽る結果となつてしまった。

誰もが「あの王者とその眷属が出撃すれば強大な魔獣も倒れるだろう」と内心で信じ

切っていたからだ。

皇帝ベリアルとその眷属の力は疑いようのないものだ、万全の態勢の僕達グレモリー眷属でも勝てやしないだろう。

それ程のものだ——それ程のものでも無理だったのだ。

：もう一つの問題は、この混乱に乗じて各地で身を潜めていた旧魔王派がクーデターを頻発させている点だ。

恐らく、この魔獣軍の進撃は彼らの計画通りの事であり、それに合わせて現在各都市部で暴れまわっているのだろう。

そちらの迎撃にも冥界の戦士達が派遣されており、悪魔世界は混戦の一途をたどっていた。

さらに言えば、この混乱によつて冥界の各地で上級悪魔の眷属が主に反旗を翻したという報告も既に此方にも届いていた。

無理矢理悪魔に転生させられた神器所有者がこれを機に今までの怨恨をぶつけているのだろう。

先生風には言えば神器のバーゲンセール状態、かな。

冥界の存亡をかけた戦いに各地のクーデター、更には冥府の神ハーデスや禍の団による襲撃にも警戒をしなければならぬ。

『超獣鬼』<sup>ジャバウオック</sup>や『豪獣鬼』<sup>バンダースナッチ</sup>の迎撃に魔王様方の眷属が遂に出撃されるそうだ」

——この声は。

僕が顔を向けるとそこには、ライザー・フェニックスがいた。

ちようどこの間に戻ってきた部長も、驚いた様子だ。

「ライザー……」

「ようリアス、それに木場祐斗。兄貴の付き添いでな、序でにこつちにも顔を見せたって訳だ。……アイツはまだ、戻ってきていないのか」

アイツ……それが誰なのか分かっている部長は沈痛そうな面持ちで頷いた。

アイツとは、イツセー君の事だ。

この騒動を起こした張本人、シャルバ・ベルゼブブに拉致されたオーフィスを奪還するためにイツセー君はあの疑似空間に残ったのだが……僕達の元に戻ってきたのは、四つの魔法の指輪だけだった。

……指輪だけが戻ってくるという状況だったが、龍門から少し強いサマエルのオーラが感知されたため、恐らくはシャルバとの戦闘中にイツセー君はサマエルの呪いを受けたのだろう、と先生は推察した。

そして——その後に、白い魔法使いがやって来たのだ。

——

「…兵藤一誠は、召喚に応じなかったようだな」

そう言った白い魔法使いは、硬直していた僕達に構うことなく、魔方陣の中央に置かれていた指輪を拾い上げ、魔方陣を展開させ何かを調べていた。

「……そう言う事か」

そして小さく呟いてから、先生の方を振り返った。

「彼はサマエルの呪いでは死ななだろうか……龍門を使ってこの指輪が召喚されたと言  
う事は、恐らくは別の理由で死んでいる可能性がある」

「っ！」

白い魔法使いが告げた残酷な真実に、先生は目を見張る。

「だが」と、白い魔法使いはこうも言った。

「その場合だと彼の中にある悪魔の駒も同時に召喚されるはずだ。彼ほどの意志を持つ者ならば、駒だけでも応じる可能性は高いからだ」

「——じゃあー！」

「だが、希望的観測は捨てる事だ」

アーシアさんが期待を込めて白い魔法使いにそう言うが、彼はそれを否定する発言をした。

「確実な情報もない時ほど、希望的観測が外れた際の絶望は並大抵のものではない。ゲートであれば、強大なファントムが生み出せるほどのな」

「イツセー君の生存を、諦めろと言うんですか…!？」

「……」

白い魔法使いは、無言だ。

「…お前、イツセーの生存を知ってるんじゃないのか」

「——さあな」

先生が睨みつけて尋ねるが、白い魔法使いはどこ吹く風と言った様子だった。

更に彼は、いけしやあしやあとこんな事を言いのけた。

「元よりここで死ぬのであれば、その程度の存在だったと言う事だ」

「っ！貴方は、イツセーの師ではないの!?!自分の弟子のイツセーが行方不明になっているのよ!！」

「…勘違いしているようだが」

白い魔法使いは、激昂した部長に視線を向けた。

「私は彼の師ではない。ただ魔法使いになるのかと導いただけだ。そして彼は私の手を取った……それだけの関係だ。力を与えているのも、私の個人的な事情に過ぎない」

「……っ」

「……そうだな」

白い魔法使いは、先生に指輪を投げ渡した。

「龍門とはドラゴンを強制的に呼び出す召喚術だ。その指輪がドラゴンの力を宿している以上は召喚反応に応じるが、兵藤一誠がドラゴンではないのだとしたら、その召喚術には反応しない——ドラゴンでは、無いのだからな」

—— どういう、意味だ？

僕達は全員、白い魔法使いが言ったその言葉の意味を、理解出来なかった。

「その指輪は持っておけ。私には無用の長物だ」

「……待て」

指輪を嵌めようとした白い魔法使いを、先生が呼び止めた。

「……それはイツセーがサマエルの力が通じないのと、関係があるのか？」

「……答えろっ!!」

アザゼル先生の質問に、白い魔法使い暫し無言だった。

だが数秒後に、こう言ったのだ。

「……………それを知ってどうする？動き出した運命はもう決められた道へと進むだけ、今更止める事など出来はしない。彼は自らに宿るドラゴンを諸刃の希望だと知った上で、その力に手を伸ばした。その先にある結末が何だったとしても、彼は引き返せない、お前達に止める術はない。……そう言う事だ」

《テレポート・ナウ》

「っ、待て!!」

アザセル先生が止めるのも空しく、白い魔法使いはその場から消えていった。

—————

あの時の白い魔法使いの言葉の意味は分からない。

でも、何故かその言葉は僕の脳裏にずっと残っていた。

「…おい、どうした?」

「っ、す、すいません」

いけない、深く考えるのは今は止そう。

「…心配する気持ちは分かるが、今は目の前のこの問題をどうにかする。アイツだって、

そう言う筈だろう」

「…そうね」

あれから僕達は、グレモリー領に魔獣達が現れたと聞いて、すぐさま戻ってきた。

そこからは部長の指示の下、グレモリー領に住む住民を避難したり、小型の魔獣を倒したりした。

少し手古摺りはしたけど、サーゼクス様の奥様であるエリス様の協力もあり、何とか沈静化したんだ。

その後も何か起こる事を危惧して、部長は殆ど寝ていない。

ついさつき部長は、領民の人達を治療していたアーシアさんに休憩を言い渡してきたばかりだ。

アーシアさんの回復能力はこの有事では貴重な存在だ。

特にフェニックスの涙が少ない今の状態だと得に。

一応は負傷者の回復は片付いたので、部長はアーシアさんを優先的に休ませ、他の眷属の皆にもそう命令を下した。

でも部長本人は、部長のお父様から休むように言われても頑として休もうとしなかった。

「…リアス、焦る気持ちは分かるがな、あまり根を詰めるな。肝心な時に動けなくなる



ぞ」

「そうは言っていないわ。…こういう時は、何だか眠りたくないの」

「…全く、変な所で強情なのは変わらん」

説得は無理だと察したのだろう、ライザー氏は溜息を吐いた。

「良いかね、レイヴェル？ 逸る気持ちは分かるが、今は十分体を休めなさい。ここで体を壊してしまつては、元も子もないからね」

フロアに二つの影が現れた。

一人はレイヴェルさんで、もう一人の方は——見覚えのある男性だ。と言つても、テレビでだけだ。

フェニックス家の長兄にして、次期当主——ルヴァル・フェニックス氏だ。

端正な顔立ちであり、ライザー氏のような不良青年の様子とは真逆の、きちんとした貴族と言つた出で立ちだった。

ゲームでもトップ店内に入ったこともある方であり、近々最上級悪魔に昇格するのでとは噂されている。

「ルヴァルさん」

「リアスさん、丁度良かった。貴女にこれを」

ルヴァル氏は部長に近付くと、懐から小瓶を数個取り出して、部長に手渡した。

「これは……」

あれは、フェニックスの涙だ。

「これを貴女方に渡すついでに、妹の様子も見に来たのです。こんな非常事態ですからね、涙も各迎撃部隊の元に出回りこれだけしか用意できませんでした。将来有望な若手である貴女達に申し訳なく思います」

「…いえ、これだけでも十分ですわ」

「そう言ってくれると助かります。——もうすぐ私は愚弟を連れて、魔獣迎撃に向かいます」

フェニックスの兄弟も迎撃に出るのか……確かに不死身のフェニックスは前線の心強い戦力となるだろう。

「…悪かったな、愚弟でよ」

ライザー氏がぼそりと決まりが悪そうに呟いた。

それにすかさず反応したルヴァル氏のチョップが命中した……。

「いつてえ!?!」

「愚弟が失礼致しました。…それはそうとリアスさん、少し休まれてはとうですか？グレモリー眷属の主である貴女が倒れられては有事の際に大変です」

「お心遣い有難う御座います。……ですが、今この状況で休んでなどつ」

「ダメですよ、リアス」

そう強がる部長の元にやって来たのは——エリス様と、グレイファイアさんだった。

お二人共戦闘服に着替えており、もうすぐ出撃するのだろうと見て取れた。

「グレイファイア…お義姉様も」

「その様な顔色で強がってもダメです。体を休めるのも重要なですよ？今はゆっくり休めて、これからの有事に備えなさいな」

「……はい」

エリス様に説得された部長は、「申し訳ないのだけれど、少し休んでくるわ」と言っ  
て自室に向かっていった。

「助かりました、エリス様」

「いえいえ。あの子つたら、何時まで経っても強情っぱりなんだから。ねえグレイファイア？」

「はい。…少しは休められると良いのですが」

…そう相槌を打つグレイファイアさんは、何時も通りの冷静な様子だった。

……イツセー君の一番の恋人であった彼女の心中は、恐らくは僕達以上なのだろう。

でも彼女はそれを表に出さず、現状の解決を図ろうとしている。

「…あの馬鹿の正妻殿がああなんだ。お前らがへこたれててどうする？」

…そうだ、ライザー氏の言う通りだ。

イツセー君が教えてくれたじゃないか、どんな時だつて希望は捨てるなつて！

「お前はもう少し言葉遣いの教養を学ぶべきだな、ライザー。…我が家としても、レイヴェルを赤龍帝君の眷属にしていただけだったのでね。まあ、それはこの騒動の鎮静後にゆつくり話させてもらいたい」

…イツセー君はああ見えて結構目敏い所がある。

恐らくはフェニックス家の意向にも気づいていたのかもしれない。

「…レイヴェルの今後をどうするかだが、今はここに置いてくれないだろうか？折角、仲の良い友人も出来たようだからね。小猫さんとギヤスパー君だったかな？連絡用の魔方陣越しによく二人の事を話してくれていた。とても楽しそうにね」

「はい、レイヴェルさんは僕達がお預かりいたします」

僕の一言に、ルヴァル氏は笑んだ。

「ありがとう。では行くぞ、ライザー。お前もフェニックス家の男子ならば、業火の翼を冥界中に見せつけておくのだ。これ以上、成り上がりとは馬鹿にされたくはないだろう？」

「分かっていますよ兄上。じゃあな木場祐斗、くれぐれも無茶はするなよ」

そう言つて、フェニックスの兄弟はこの場を去つて行つた。

「では、私達も行きましょう」

「はい」

次いでエリス様とグレイファイアさんも退出しようとする。

「グレイファイアさん」

「何ででしょうか？」

僕はグレイファイアさん呼び止める。

止まつたグレイファイアさんに、僕は魔方陣が描かれた紙を渡した。

これはイツセー君の使う魔方陣だ。

その紙には彼の魔力が籠められており、有事の際には彼の使い魔であるティアマットさんとフェンリルの二匹を呼べるんだ。

先生が指輪に残っていたイツセー君の魔力を抽出し、この紙に描いたのだ。

一応部長も所持しており、残るはこの一枚だけ。

「いざという時は、これでイツセー君の使い魔を呼び出す事が出来ます」

「…分かりました。有難く受け取らせていただきます」

グレイファイアさんは微笑んで、その紙を懐に仕舞い込んだ。

イツセー君、君の力で、君の愛する人の希望を、守ってあげてくれ……！

冥界のとある郊外にて。

「……さて、少しばかり様子を見に行くか」

多数の小型魔獣の屍の上に、白い魔法使いは悠然と立っていた。

《ディメンジョン・ナウ》

白い魔法使いは眼前に手を翳すと、魔方陣が展開。

その魔方陣の中には、万華鏡のような世界が広がっていた。

「……」

白い魔法使いは体を光らせながら、その魔方陣を潜っていった。

後に残ったのは、灰色の羽根だけであった。

## MAGIC141 『集いし戦士達』

グレイファイアさん達を見送って戻る途中、廊下で見知った顔に会った。

「よっ」

「匙君」

僕が匙君に気付くと、向こうも手を上げて応えてくれる。

「どうしてここに？」

「リアス先輩の様子見と、今後の方針をな」

成程、つまりソーナ会長も一緒と言う訳か。

「部長ならさつき……」

「ああ、丁度さつき眠ったんだってな。会長も起こすのは忍びないって言ってたよ。木場、俺も今回の一件に参加するつもりだ。都市部の一般人を守る」

——っ。

シトリー眷属も冥界の危機に立ち上がったようだ。

実力ある若手悪魔は招集が掛かっている。

この非常事態だ、実力のある悪魔は若手でも必要だからね。

まず間違いなく大王のバル家と大公アガレス眷属は出張だろう。

魔王を輩出したシトリー家の眷属がそこに参加しても何ら可笑しくはない。

「そっか、僕達も後から合流するよ」

「……ああ。でも、今はちゃんと休んどけよ。……兵藤だつて、そう言う筈だろ」

……そうだね。

『パニックになつてる時こそ落ち着かなきゃ駄目だろ？まあ、俺が言つても説得力ないけどな』

タハハ、そう笑う彼の苦笑いが目に浮かぶ。

「どんなに遅くなつても絶対に駆けつけるよ。……彼が守りたいと願つてる希望を、これ以上傷つけさせる訳にはいかないからね」

「おう。……実は俺さ、兵藤に、憧れてたんだ」

イツセー君に……？

「ああ。俺と同期なのにさ、力もあるし、頭の回転も速い。……けどそれ以上に、イツの背中つて凄く遠くに見えるんだよ。最初はそれが凄く悔しくて、妬ましかつたんだ。だけど、兵藤がどんな思いで魔法使いの力を、今ある全てを積み上げてきたのかなんで、これっぽっちも知ろうとしなかった。アイツの過去を聞いた時、俺は以前までの自分を殴



りたくなつた」

匙君とイツセー君は殆ど同じ時期に転生していた……だからこそ嫉妬や劣等感だつて人一倍感じていたんだ。

でもその時は僕達はイツセー君がファントムを相手に戦い抜いてきた魔法使いだつて事も知らなかつたし、数えきれない人達の死を見届けるしか出来なかつた彼の過去も知らなかつた。

「…木場にも言える事だけどき、そんな過去があつたにも関わらず、兵藤はそれを振り払つて一歩ずつ前に進んでる。そんなアイツの背中を見てたら、いつの間にか目標になつてた。アイツが乗り越えたんなら俺にだつて出来る、そう思つてここまで歩いてこられた。同じ『兵士』の兵藤がいたから、今の俺があるんだ」

そう語る匙君の目は嫉妬の陰りもない、凄く穏やかなものだった。

「だから、今アイツがいらないなら俺達を守りたいんだ。アイツが大切にしてた、希望つて奴をな」

「匙君…そうだね」

匙君の決意は、僕が抱いていたものと全く同じだった。

たつたこれだけの事が、どれだけ心強いか……。

そこで僕はふと、イツセー君のライバルである彼の事が気になつたので、匙君に問い

かけてみた。

「そう言えば、立神君はどうしたんだい？」

「立神か……一応アイツにも話したんだけど、「皆まで言うな」の一点張りです、ずっと焚火見てたよ。立神も、兵藤が生きてるって信じたいんだと思うぜ」

「…そっか」

「もしかしたらいざって時には来てくれるかもな。……その時はお互い、命をかけて頑張ろうぜ」

「うん」

僕と匙君が握手をすると、通路の奥から人影が。

「良い決意の表れですね、サジ。それだけの気持ちがあるのなら、貴方は何処までも強くなれます」

「会長！」

ソーナ会長だ。

「ですが、命をかけても、それを捨てる事は許しません。守りたい希望は、生き抜いてこそ守るべきです」

「——はいっ！」

会長は匙君の返事に軽く笑むと、僕の方に視線を向けた。

「私達はこれで失礼します。魔王領にある首都リリスの防衛及び都民の非難に協力するようセラフォル・レヴィアタン様から仰せつかっておりますので」

「…セラフォル様は、大丈夫なんですか？」

彼女も確か、イツセー君に好意を抱いていたような……。

「その点に関しては心配ありません。お姉様はきちんと魔王としての責務を果たそうとします。そして、イツセー君の生存を、信じてまいります」

「そうですか……。そう言えば、部長とは？」

僕が聞くと、会長は安堵の笑みを浮かべた。

「寝顔だけですが、とても穏やかでした。あの様子なら、次の戦いでも十分に王として戦えるでしょう。では……。ああ、一つ忘れていました」

会長は僕をもう一度振り返り、含みのある微笑みを見せた。

「もう一人、貴方達に会いに来ている人がいます」

もう一人……？

——

僕がフロアに戻ってくると、丁度テレビでは首都の様子が映し出されていた。

そして不意に映し出される首都の子供達。

レポーターの人が一人の子供に尋ねた。

『ぼく、怖くない?』

レポーターの質問に、子供は笑顔で答えた。

『へいきだよ!だってあんなモンスター、ウイザードドラゴンがきてたおしてくれもんじゃない!』

——つ。そう満面の笑顔で応える子供の手には、『ウイザードドラゴン』の人形が握られていた。

それを皮切りに、画面の端から元気な顔と声が映し出されていた。

『そうだよ!ウイザードドラゴンがたおしてくれよ!』

『希望をわすれないかぎり、ぜったいきてくれるっていつてもん!』

子供達は不安な顔一つ見せず、ただただ『ウイザードドラゴン』が来てくれると信じ切っていた。

『はやくきて、ウイザードドラゴン!』

……イツセー君、子供達が、皆が、君が来るのを待っているんだよ。

君がくれた希望を失わず、君が助けてくれると心から信じているんだ……君にもこの声が聞こえているのなら、早くその姿を見せてほしい……!

「…俺達が思っている以上に、冥界の子供達は強い」

——この声は。

「あなたは……！」

「兵藤一誠は途轍もなく大きなものを冥界の子供達に宿していたんだな。木場祐斗よ」

サイラオーグ・バアル……！

そうか、会長が呼んだのはこの人だったのか…。

「リアス部長は——」

「ソーナ・シトリーから聞いている。今は眠っているとな。……兵藤一誠が戻らないと聞いてな、お前達の様子を見に来たのだが…余計な心配だったようだな」

「…有難う御座います」

…正直に言えば不安だ。

でも、イツセー君は生きている——そんな予感がするんだ。

だからこうして、僕は自分達がやるべきことをしている。

「…お待ち、祐斗」

——つ、この声は！

「部長！」

振り向けば、そこには僕達の主であるリアス部長が立っていた。

目元は赤いが、その眼差しは真っ直ぐだった。

「リアスカ、もう良いのか？」

「ええ、十分休ませてもらったわ。…黒歌には借りが出来ちゃったけど」

小猫ちゃんのお姉さんに……？

「そう言ってもらえると嬉しいにゃん♪」

そう思っていると、部長の背後から着物を着た小猫ちゃんのお姉さん、黒歌が出てきた。

…そうか、仙術で部長の気を整えたのか。

「リアスちゃんも信じてるのね、赤龍帝ちゃんが生きてるのを」

「ええ、あの人がそう簡単に死んだりしないわ。…ま、そう言い聞かせてるのも事実だけだ」

静かにそう言い放つ部長に、黒歌は満足そうに笑んだ。

「それでこそ赤龍帝ちゃんの主にゃん。前のバカ主より、あなたの方がよっぽど信頼できるわ」

「…黒歌、あなたは」

「おっと、そこまでにゃん」

部長の言いたい事が何なのか分かった黒歌は、部長を手で制した。

「私の罪はこの先も消えないわ。だから背負っていく、それがあの子を苦しめた事への、せめてもの罪滅ぼしって奴よ」

「…黒歌」

「ま、柄じゃにやいんだけどねん」

にやはは、と黒歌は笑うと、踵を返した。

「ちようどうちのリーダーに尋ね人が来てるにやん。リアスちゃん達もどーお？きつと会ってて損はないにやん」

黒歌はそう言つて、僕達をヴァーリが休んでいる部屋へと連れて行つた。

## MAGIC 142 『深淵の魔人』

黒歌に案内されて訪れたグレモリー邸の一室。

そこには禍の団のヴァーリチームのリーダー、ヴァーリ・ルシファーが秘密裏に匿われていた。

最初の和平会談の時や夏休みの時の冥界侵入以外に特に問題になる事はしていないとはいえ、彼等はテロリスト。そんな彼等をここに匿うのは重大問題だ。

でも彼等が僕達を助けてくれたのも事実。

それを聞いたグレモリー現当主——部長のお父様は彼等の一時的な保護を決めた。

そして今、ベッドから上半身だけを起こしているヴァーリの体に手を当てている、小柄なご老体のお方……初代孫悟空だ。

初代は仙術の気を流して、ヴァーリの体からサマエルの毒を吐き出させた。

それを小さい容器に入れ、上から呪符らしきものを貼ってから、フツと微笑んだ。

「身に潜んでおった主な呪いは仙術で取り出せたわい。これで体も楽になるだろう



よい。全く、大馬鹿もんの美猴が珍しく連絡なぞ寄こしたと思つたら、白い龍の面倒を見るのはのお」

初代を呼び寄せたらしい美猴が半眼になっていた。

話では初代に苦手意識を持っていたようだけど……でもそれ以上にヴァーリを救いたい一心、だったのかな。

「るせえ、クソジジイ。……で、ヴァーリは治るんかよ?」

「ま、こやつ自身が規格外の魔力の持ち主だからのお。儂が切つ掛けを与えりや十分だろうて」

……その言葉から察するに、ヴァーリも何とか快調に向かうみたいだ。

「…礼を言う、初代殿。これで戦えそうだ」

ヴァーリが初代に敬意を払って礼を口にしていた。

あの白龍皇が敬意をもって礼を述べるとは……彼にとっても初代孫悟空の存在は大きいようだ。

初代が美猴の頭をポンポン叩きながら言う。

「呪いが解けて直ぐに戦いの事とは、全くどうして、どうしようもない戦闘狂じゃい」「あんだよジジイ、もうどっか行くのか?」

初代は煙管を吹かして口を開いた。

「そりゃ儂はこれでも天帝んところの先兵じゃからのお。ちよいと冥界にお遣いじやわい。——テロリスト駆除ってやつよ。そのグレモリーのお嬢さん方と同じさね」

初代は僕等を見て、目を細めて笑った。

そう、僕達はこの後市街地に出て旧魔王派の残党と戦う事になっている。

それはそうと、初代も今回の一件に力を貸してくれると言う事か：これほど心強い申し出もないけど……。

僕には一つ引つかかる事があつた。

それを読み取った訳ではないけど、僕と同様の疑問をヴァーリが尋ねていた。

「…初代殿、天帝は曹操と繋がっているのだろう？京都の一件——妖怪と帝釈天側の会談を邪魔した曹操と言う図式は天帝の中ではどういう位置づけになっている？」

そうだ。天帝は曹操と裏で繋がっていると、僕達はアザゼル先生から聞いている。

だけど、京都での一件はその関係と矛盾するものだった。

それが何を意味しているのか——考えれば考える程に、謎に満ちていた。

ヴァーリのその質問に、初代は愉快そうに笑むだけだ。

「さーての。儂はあくまで天帝の先兵兼自由なジジイじゃてな。あの坊主頭のが武神どこまで裏で企んでいるかなんて興味もないわい」

その言葉に裏はない、そう感じられた。この方は基本的に悪意を持ち合わせていない

だろうからね。

美猴と同様のイタズラ心に満ちたものは感じられてしまうが、少なくとも僕等への敵意は微塵も感じ取れない。

……それも卓越した仙術の技だと言ってしまえばそれまでだけど。

初代は顎に手をやりながら言う。

「ただのう、天帝は暴れんと思うぜい？これから先の事は分からんがねい。どちらかと言えば高みの見物だろうよい。ま、今回はハーデスがやりすぎたんだろうぜい」

——ハーデス。

やはり、その暴走が今回の一件を操っていたと見て間違いないのか。……正直、天帝まで出てこられたら、冥界の危機は加速してしまう。

四大魔王全員と相対してやつと互角——そう称されるほどの闘神なのだから。

しかも懸念材料はそれだけじゃない、今はこうして沈黙を保っている——ファントム達の事もある。

今は一時も気の休まる状況じゃない、と言う事を改めて実感した。

初代は「さてと」と言い腰を上げた。

「じゃあな。表に玉龍ウーロンを待たせたまんまなんでねい。——と、美猴はこれからどうすんだい？おめえさん達、各勢力からも禍の団からもお尋ねもんならどろ？」

初代に聞かれ、美猴は首を捻りながらも、ハッキリと答えた。

「俺あヴアーリんとこに残るぜ。何だかんだでこのチームにも愛着湧いてっからよ」

「はい、私も皆様と共にいきますよ！アーサーお兄様は？」

相変わらず静かなオーラを漂わせるアーサーは何時もの笑顔のまま口を開く。

「英雄派に興味や未練は微塵もありません。今まで通りここにいた方が強者と戦えるでしょうから。少なくとも私は曹操よりもヴアーリの方が付き合いますか  
らね。——カイト、貴方は？」

アーサーが視線を向けた先には、目を瞑りながら壁に寄り掛かる天城カイトの姿が。

「…俺も同じだ、このチームにいた方が目的も達しやすいからな。で、お前はどようする気

だ——黒歌」

「っ」

片目を開けてカイトは部長の後ろにいた黒歌に質問を投げかける。

「そうだ、彼女と小猫ちゃんはイツセー君のお陰で少しは仲直りが出来たって……でも

彼女は。

「…なーに言ってるのにな？私は元々あんた達のとこから離れる気はないにやん。私はお尋ね者だしー正義の味方の立ち位置何てむず痒いだけだしー……でも」

へらりと笑ってそう言っていた黒歌だったけど、徐々にその顔からは笑みが消えて

いった。

「…白音と昔のような関係にちよつとだけでも戻れた事は……嬉しい、かな。でもあの子には、今の私なんて」

「……………お前、随分背後に警戒しなくなったんだな」

「へ……………!?!」

全員の視線が黒歌の背後へと向かうとそこには——小猫ちゃん達が立っていた。

「アーシア、小猫……………」

「…姉様」

「…」

小猫ちゃんに問いかけられても、黒歌は黙ったきりだ。

だけど、小猫ちゃんに手を握られ、その体が小さく跳ねた。

「今の私は、まだまだです。でも、もうあの時の、守られるだけの私じゃありません」

「白音…」

「私は、待つてます。今よりもつと強くなって……先輩の様に姉様の弱さを受け止められるようになります」

「…白音、強くなつたね」

黒歌は小猫ちゃんを抱きしめる。

蟠りも確執も、今の二人からは全く感じられなかった——これが、本当の姉妹の姿なんだろう。

「…白音。あんたの惚れた男は、こんな事じゃ絶対に死なないわ。だから信じて、赤龍帝ちんを…待ってあげなさい。あんたの友達にも、そう伝えてあげな」

「…語弊があります」

「？」

「私“達”、じゃないんですか？…：姉様も、イツセー先輩の事が、好きなんですよね」

「——っ」

黒歌は小猫ちゃんの問いに顔を真っ赤にするが、やがて観念したかのようにこくりと頷いた。

「ならば猶更、残って待っていても良いのではないですか？」

「ヴァーリならその程度、とやかく言わんだろうからな」

「…ああ」

「勝手に決めるなし、童貞戦闘狂ども!!」

珍しく顔を真っ赤にした黒歌は、ヴァーリ達男性陣に声を荒げて突っ込む…：ホント、テロリストの一派だとは思えないや。

「ヴァーリ、君はどうするんだい？」

「兵藤一誠の仇を打つ……と言ったらどうする？」

「イツセー君は死んじやいないよ。それに君らしくもない、そう吐き捨てただらうね」

それもそうだ、そう言つてヴァーリは小さく嘖き出した。

「俺は出し切れなかつた全力を振るつて戦いたい、今は特に不完全燃焼でね。これをぶつける相手が欲しい所かな。まあ、俺の狙いは豊富だからな」

「君らしいや。……でも、だからこそイツセー君が信頼してるんだらうね」

「……俺には、もつたいないものだよ」

そうらしくない事を呟いた。

——

グレモリー邸を出発した僕達は、市街地で暴れていた旧魔王派の構成員と戦つた。手練れらしい者はおらず、僕達の敵ではない——が如何せん数が多い。

ただど文句を言つたつて数が減るわけじゃない、そう思い剣を振るつてみると、見知つた白髪の男が現れた。

「やあ、暫くぶりだね。グレモリー眷属の諸君」

「……ジークフリート！」

英雄派の剣士、ジークフリート!

「何故ここに僕がいるか?とと言う顔だね。なに、仕事の帰り道だからだよ」

「どうせロクな仕事じゃないんだろう?」

僕が迫りくる構成員を斬り伏せると、彼は肩を竦めて笑った。

「まあ、君達からすればロクな仕事じゃないな。実は魔王——アジユカ・ベルゼブブ様に同盟を持ち掛けたんだよ。まあ断られちゃったけどね」

「何だって…!?!」

現魔王相手に同盟を……しかもこの状況で持ち掛けたのか!?

「彼は同じ魔王であるサーゼクス・ルシファーとは違う思想を持っていて、しかも独自の権利だってある。何よりその異能に関する研究、技術は他を圧倒し、超越の域にあると聞いているからね。一度声を掛ければサーゼクス派の議員数に匹敵する協力者を得られると思ったのさ」

確かに、現魔王の派閥は大きく分けて四つある。

そしてその中で一番支持者が多いのはサーゼクス様、そしてアジユカ様の派閥だ。

現政府の維持と言う点では、両派閥は一応協力関係にあるけど、その下の細かい政治面では対立意見も多いと聞いている。

僕も知っているところだと、技術体系での意見の食い違いが目立っていた筈だ。



そして何より——アジュカ様はサーゼクス様に唯一対抗できる悪魔である事、だ  
ろう。

あのお二方は前魔王の血筋から酷く疎まれ、そして畏れられるほどのイレギュラーな  
悪魔なんだ。

それに着目して恐らくは手を伸ばしたんだろうけど……………

「僕達の有している情報と研究の資料も提出すると言ったんだけどね、彼にとつては否  
定しなければならぬものだそうだ」

「普通に考えればさうだろうけど……………貴方の口調からはもつと違う理由があると感じる  
よ」

「目敏いね。彼にとつてのサーゼクス・ルシファーとは『友』であるかららしい。彼が魔  
王を務めているから、自分も魔王を務めている、との事だ」

僕には分らない世界だけどね、とジークフリートは嘆息した。

…あのお二方には、二人だけにしか分からないものがあるのだろう。

「で、結局おめおめと帰って来たって事かい？」

「ああ。ただ僕に同伴した旧魔王派の幹部クラスの構成員達が殺気立っていたからね。  
相手をしてもらっている……………まあ、直ぐに片は付いただろうけど」

それはさうだろう。あの方の全ての現象を数式、方程式で操ってしまう絶技に拮抗す

るのであれば、サーゼクス様クラスの実力者を引つ張つてこななければならない。

旧魔王派の幹部と云えど、相手にすらならないだろう。

「とは言え仕事に失敗してとぼとぼ返つてきたようじゃ、僕も部下達に示しがつかないのも事実。そう思っていたら、偶然君達のパーティにホイホイつられてきたと言う事  
さ」

「僕達になら勝てるか？」

「…いいや。君は少し勘違いしているかもしれないけど、僕は君達の実力を軽んじちゃいない。いずれ放つておけば僕をも超える才能を有している。特に木場祐斗、君はね」  
ジークフリートはそう言うのと、僕に剣の切っ先を向ける。

「ここで全力を持って排させてもらおう。……けど、この魔剣グラムの全力は出したくても出し切れない。その理由は分かるだろう？」

僕は答えはしないけど、内心では首を縦に振る。

以前京都で斬りあつた際にもその凄まじい力は犇々と感じていた——けど、彼ではその力の全ては發揮できない。

伝承通りならば魔帝剣グラムは凄まじい切れ味を持った魔剣。攻撃的なオーラを纏い、いかなるものをも断つ鋭利さを持っている。

加えてグラムは龍殺しの特性がある……かの五大龍王『黄金龍君』ファープニルを一

度滅ぼすほどの力だ。

いわばこの魔剣はデュランダルとアスカロンの良い所だけを合体させたものなのだ。だけど彼に宿った神器は龍種のもの——つまり、グラムを全力を発揮すれば、自らをも傷つけ、最悪の場合滅ぼしてしまう。

「禁手状態で、こうやって攻撃的なオーラを完全に抑えて使用する分には切れ味があつて強固な魔剣なんだけどね。それではこの剣の真の特性を解き放つことは出来ない。かといって力を解放すれば……禁手状態の僕は自分の魔剣でダメージを受けてしまう。こいつは主の体を気遣うなんて殊勝なこととはしてくれないさ」

ジークフリートはグラムをくるくる回しながら、懐に手を入れた。

「グラムの力を使ったかつたら禁手を解けばいい、だけどそれだけでは君達には対抗できない。ならば、禁手を解かずともグラムを使えるようにすれば良い。——それが、これさ」

懐から手を出したジークフリートは——ピストル型の注射器が握られていた。

あれは、あの時の……。

「あの時は使えずじまいだったけどね。これは旧魔王シャルバ・ベルゼブブの協力を受けて完成した、ドーピング剤だよ。神器のね」

「神器能力を強化すると言う事か」

「ああ」と彼は頷く。

かの無限の龍神、オフィスが生み出した『蛇』を神器に絡ませる事で所有者の様な特性を無理矢理に引き出す実験をしているのは知っていたけど……そんな事まで研究していたのか。

「聖書に記されし神が生み出した神器。それに宿敵である魔王の血を加えたらどのような結果を生み出すががこの研究テーマだった。かなりの犠牲を払ってしまったが、その結果、神聖なアイテムと深淵の魔性は融合を果たしたのさ」

「魔王の血を……!?!」

「そう。——そして今回は、僕自身にもドーピングを加えさせてもらっていてね。ではお見せしよう。これが……」

ジークフリートは注射器を首もとに近づけ——挿入させていく。

僅かな静寂の後……ジークフリートの体に異変が起きる。

僅かな脈動が徐々に大きくなり、体が紫色の魔力に包まれ、異様に膨れ上がっていく。ミチミチと、嫌な音を立てて背に生えていた四本の腕が太く肥大化していく。

五指も崩れ去り、手にしていた魔剣が手に同化していく……ジークフリートの顔も別の生物——いや、怪物のような形相に変異していく。

そしてその顔は既に人のものではなくなり、鈍く鋭い眼光が光る。

そこにいたのは人間の剣士ではなく——異形の怪物であった。

その胸には紫色の宝石が、妖しく輝きを放っていた。

## MAGIC143 『聖と魔の王』

『どうだい、驚いただらう?』

くぐもった低い声でそう問いかけるのは、先程まで人間だった剣士、ジークフリート。先程までとは違う、濃密なプレツシャールを発しながら、彼は眼光を輝かせる。

「それが魔王の血を受け入れた姿……いや、それだけじゃない。ファントムの力まで……!」

『へえ、やっぱり知っていたのか。…そう、ファントム達と協定を結んだ際に貰ったんだよ。この魔宝石をね』

ジークフリートは胸の真ん中に埋められた魔宝石を指で小突く……その現象は以前にも見ていた。

墮天使コカビエル、悪神ロキ……何れの強敵達も、ジークフリートと同様の変化を遂げていた。

ただど彼の場合、魔王の血をも取り込んでいる。

どうなるのか全く予想がつかない……!

『この現象は「業魔人」、そう呼んでいるよ。先程のドーピング剤は「魔人化」だ。それぞれ「覇龍」と「禁手」から拝借しているんだ』

「自分達の組織名も入れるなんて、随分と洒落ているじゃないか」

『ふふ、だろう？』

「こうやって軽口を叩いてはいるが、僕は彼の予想以上の変化に戸惑いを隠せないでいる。」

何せ人間であつた彼が、魔力を得ている。

魔力は本来であれば、悪魔やファントムが持つ者だ。

なのに何故…：そう思っていると、ジークフリートは僕に説明を始めた。

『ファントムの技術も中々馬鹿に出来なくてね。この魔宝石は埋め込まれた人間に強制的に魔力を宿させる事が出来る』

「強制的に…!?!」

『この宝石が埋め込まれた人体のあらゆる個所に魔力が流通する特殊な経路が、宝石から張り巡らされる。その張り巡らされた経路を通じて、魔力がこの石から供給され、人間でも魔力を扱う事が出来る。本来であれば極稀に存在する魔力の素養がある人間——ゲートと言つたかな？その人物を絶望させ、眠っている魔力を暴走させてファントムは産まれる。これは魔力回路を植え付けた影響で起こる副産物に近いものだそう

だよ。だから墮天使であるコカビエルのみならず、神であるロキをもファントムへと変貌させたと言う訳さ』

……強制的にファントムと同質の存在に変化させ、その力を齎すのか。

一体何故、ファントムはそんなものを……？

疑似ファントムとなったジークフリートが一步足を踏み出す——それだけでこの周囲の空気が一変し、瘴気が渦巻いていく。

——来るッ！

そう判断した僕がその場から飛び上がると同時に、僕が立っていた場所から氷の鋭い柱が生まれ、更に地が抉れて次元の裂け目まで生じていた。

……各種魔剣の相乗攻撃か、少しでも反応が遅れていたら即死だったわけか。

前方からの異様な寒気を察した僕は、聖魔剣を複数生み出して前方へ向けて射出する。

だが剣は前方から生じた凄まじいオーラの奔流に飲まれて、塵も残さず消滅していった。

前方に視線を向けると、ジークフリートの手にはグラムが握られていた。

直撃ではないと言うのに、僕の体全体に攻撃的なオーラの余波が突き刺さり、全身が痛みを走り抜けていく……これがグラムの力か！



溜めを必要としない分、デュランダルよりも厄介だね……。

着地した僕は再び聖魔剣を創造し、彼へと詰め寄る。

周囲に滞空させた剣をマーキング代わりに全方位から攻撃を加えるが、ジークフリートはそれ等全てを的確に裁いていく。

『ツ！』

ジークフリートは鬱陶しく感じたのか、体全体から三日月状の魔力を放った！

何とかそれらを弾いていくが、当たらなかつた一撃は周囲の建物を切り裂き、各魔剣が起こす現象が発生していた。

『今度は、僕から行こう』

ジークフリートが駆け出すと同時に——グラムの切っ先を突き出す！

剣先から発された波動は剣呑なオーラと共に、僕が防御の為に召喚した龍騎士団を消滅させ、ジークフリートはそのまま僕へと斬りかかる！

グラムのみならず、彼が持つ他の魔剣は周囲の背景をあっという間に崩壊させていく。

唯一、彼が持つ光の剣は僕の造る光を喰う聖魔剣で無効化出来るけど、他の得物に關しては、躲すか剣で振り払うしかない。

「……それでもっ！」

僕は諦めず、聖魔剣を飛ばす！

『こう何度も同じ芸を見ると、つまらなさよりも鬱陶しさが勝ってくるねえ』

ジークフリートはそれを振り払おうとするが、それらは全て爆発する！

爆風の煙を利用し、僕は剣戟を掻い潜って懐に聖魔剣を突き立てる！

この聖魔剣の特性は龍殺し！

如何に彼と言えど、それには抗えないだろう——！

そう思っていた僕の幻想は、聖魔剣が砕ける音と共に砕け散った。

「ッ!？」

『…どうやら、強化された僕の肉体は、君の龍殺しの聖魔剣を越えていたようだ』

「——ッ!!」

得意げに笑ったジークフリートは——僕の腹にパンチを叩き込んだ！

「……っが!!」

思ってもみない攻撃への驚きと、凄まじい衝撃で僕の顔は歪んだ。

そのまま僕の体は勢いよく吹き飛び、建物の壁にクレーターを作った！

『どうだい、ファントムの力は？』と言っても、今の君にそれを応えられる余裕はないか』

せせら笑うジークフリートは、手に持った魔剣を僕へと振るう。

何とかその体制から持ち直した僕は、痛む体に鞭打ってそれを躲した——筈だったが、虚空が歪み、魔劍の光波が僕の体を切り裂いていた。

夥しい鮮血が、宙を舞った。

「……ぐ、う!!!」

ドサツ、つと僕の体は力なく倒れ伏す。

意識すらほとんど朧気になった僕の頭上に、何者かが歩み寄ってきた——ジークフリートだ。

『呆気ないね。……そう言えば、君がいると言う事は、他のグレモリー眷属もいるのか。』

——いや、赤龍帝はいないんだっけ』

「……ッ」

僕が顔を上げると、ジークフリートは僕を見下ろしていた。

表情こそ分からないけど、その眼光は僕を憐れんでいるようにも見えた。

『ああ、そうか。君は知らないんだっけ。彼が戦ったアレ：シャルバはサマエルの血を受け取っていたんだ。そして赤龍帝はそれを機に姿を見せなくなった。彼はサマエルの力に耐えたと聞いてはいたけど、日に二度も受け続ければ、兵藤一誠と言えど耐えられなかったんだらう』

「——」

……イツセー君が、死んだ……………？

『希望的観測は捨てる事だ』

不意に、以前白い魔法使いから言われた事が脳裏を過った。

「……そんな、事は……ないっ！」

僕は力なく立ち上がりながら、あらん限りの声で叫ぶ。

イツセー君は、絶対に生きている！

例え残照の希望だったとしても……僕達は、信じるっ!!

『そうか、まあ確かに彼が生きている可能性だってある。それを信じるのは良い事だ。ならば——今ここで彼の希望を、消し飛ばしておくでしょう』

ギラリ、と彼は僕へ凶刃を向ける。

『分かりやすく言おうか。君と、グレモリー眷属、そして彼の希望を殺そう……そう言っているのさ』

「——」

彼は今、何と言った……………？

『どうもファントムの力を得た影響なのか、彼の絶望するところも見てみたくなつてね。君達や冥界の子供達、そして彼の愛する人が死んだと知った時、彼がどんな顔を見せてくれるのか、興味が湧いてきた。——君はどうせそのまま放つておいても死ぬ。次はグレモリー眷属だ……赤龍帝がいない今なら、殺しやすいと言うものだ』  
そう言うと、ジークフリートは背を向けて去つて行く。

「待て……！」

僕は聖魔剣を杖代わりに、立ち上がる。

フラフラの体で、足元も覚束ない……正直、立っているだけでやつとだ。

だけど、彼をこのまま生かす訳にはいかない!!

『……呆れた根性だ。立っているのもやつとだろう?なのにな何故立つ?君はどうせこのまま死ぬ……まあ、早死にしたいのなら話は別だけどね。せめて苦しまずに逝かせてあげよう——無駄死にしたであろう赤龍帝の様に』

無駄、死に………?

ぎりつと、僕は歯を食いしばった。



とある日の鍛錬の終わり、僕はイツセー君とある会話をしていた。

「俺の分まで、って事だよ。俺の方法なんて真似なくても良い……でも俺達はグレモリーの少ない男だからな。何があるか分かんねえ。だから託すんだ」

そう言ったイツセー君は、僕に自分が守りたい希望を語ってくれた。

「まずは身近にある希望——グレイファイアやリアス達、おつちゃん。そして冥界の子供達。お前だって今はいない人達の想いを背負ってここまで歩んできてるんだ。だから、俺がいなくなったら、頼むぜ」

「……僕にも、出来るのかな」

僕はずつと、復讐の為に生きてきた……そんな僕が、希望なんて眩しいものを守れるなんて。

そう零した僕の背中を、イツセー君はバシツと叩いた。

「いつ!?!」

「なあーに言ってるんだよ!お前のその刃だって、希望を守れるよ。だってお前……すげえ優しいじゃないか。そんなお前だから、俺の後を任せるって言ってるんだよ!」

「……立神君じゃないんだ」

「吼介は俺に頼まれなくなつて多分派手にやつてくれるからなー。お前だって俺の後を任せたいって思ってる一人だって事だ……頼んだぜ、ダチ公」

その時の彼の眩しい笑顔に、僕もつられて笑った。

———そうだ。

「貴方が希望を汚そうとする絶望になると言うのならツ!!僕はそれを切り払う希望の刃になるツ!!!僕にだって希望は守れる———そう僕の親友は、僕に教えてくれた!!!ならば応えるしかないじゃないか、そうだろう!!魔剣創造よツ、僕の想いに応えろオー———ツ!!!」

僕の呼び声に応えるように、聖と魔のオーラが僕の体を包み込んでいく。

オーラが霧散していくと同時に、僕の体に鎧が装着されていく。

やがてそれは全身にも及び、顔もマスクのようなものに覆われていく。

やがてオーラの嵐が止むとそこには———

『…何だ、その姿は………!!?』

ジークフリートが驚愕の声を上げる。

全身を覆う禍々しい赤紫を基調とした鎧、風に靡く漆黒のマント、悪鬼の如きマスクに、そのマスクから生える湾曲した角。

まるで魔王のような姿をした僕が、そこにいるのだから。

『力が大きく増している……あの瀕死の状態で、どうやって?!』



「———そうか」

この波動は……イツセー君のものと同じだ。

———ありがとう、魔劍創造。

「今名付けよう。———ヒトレイヤー・ザ・デセル極手、『双覇の聖魔劍王』。僕は希望をもって、絶望を切り伏せる」

『…兵藤一誠と同じ領域に至ったと言う事か!!』

そうだ、でも練度で言えばイツセー君以下。

だけど伸びしろはいくらでもある———今この瞬間に扱える、それが重要だ。

僕は狼狽するジークフリートに向けて手を翳す。

すると、彼の体に黒い霧のようなものが纏わりつき、彼を縛り上げた!

『ぐう?!な、んだ、これは……!———うおっ!!』

翳した手を上に向けると、それに合わせるようにジークフリートの体も宙に浮かび上がる!

僕は左右に手を振れば、ジークフリートも縛られたような格好で周囲の瓦礫軍に叩きつけられる!

『ぐおおおっ!!!』

「……ふっ！」

『ガハッ!!』

最後に手を振り下ろし、ジークフリートを地面に叩きつける!

大きなクレーターを作りながらも、ジークフリートは立ち上がる。

『…凄まじいパワーアップだ。もはや騎士と言うよりは魔王…いや、魔王の力を身につけた騎士と言うべきか?だがっ!!』

ジークフリートは目を輝かせながら僕へと駆け出す!

『身重の状態ですんなら鎧を纏えば、まともに動けまいっ!!』

「——」

僕は手元に聖魔剣を一本創り、彼へと向かう。

そよ風のようにジークフリートの横を駆け抜けた——刹那、彼の肉体に切り傷が生まれていた。

『——馬鹿な。動きが、見えない……ッ!!』

「確かに身重にも見えるだろうね。…でも、違うんだよ」

この鎧に重さは殆どない、寧ろ僕の速度を普段の何倍にも高めてくれる。

それでいて素の状態よりも防御が厚い……防御の薄かった僕としては、丁度良い塩梅の強化だ。



グラムで来る気か……!

身構えた僕の目の前で、グラムが輝きを放つ!

だけど、その輝きの中に先程まで相対してた時の攻撃的な感じはない。

寧ろこれは――

「僕を、迎え入れてくれるのか……?」

「――つ、グラムが! 魔帝剣が呼応している!? 魔人化カオス・トレイカの弊害と言うのか……!」

仰天している様子のジークフリート。

彼がここまで焦りを見せるとは……この土壇場で最強の魔剣は、持ち主を再び選定し始めたと言うのか。

僕はグラムの輝きを見据え、言の葉を紡いだ。

「――グラムよ。君が僕を選定に含んでくれたのなら、僕を選ぶと言うのなら、僕は君を振るう剣士になろう、来いっ!!」

その言葉に反応したグラムは、持ち主のジークフリートを拒絶するかのように輝きを増し、彼の握っている手を焼き焦がしていく!

『ぐうっ!!』

その痛みには耐えかねたジークフリートは、グラムを手放してしまふ。

そうして放り投げられたグラムは、僕の手元に吸い寄せられるように収まった。

…握っただけでも、凄まじい力だと伝わる。これが、魔剣の帝王。  
『…まだまだ。例えばグラムがなくとも、僕は英雄の子孫として——』

アオーン!!!

言いかけたジークフリートの言葉を遮るように、この場に獣の遠吠えが響き渡った。  
この感じは……

『ワンワン!! (木場の兄ちゃん!!)』

「ハティー!」

この子はイツセー君の使い魔のフエンリル、ハティー!

どうしてこの子が…そう思っていると、ハティーの全身が輝き、僕の左手に収まる。

光が晴れると、ハティーは以前見た事のある、細い日本刀に姿を変えていた。

『グレイフィアのねーちゃんに言われたんだ! リアスねーちゃん達を助けて来いって!  
グレイフィアねーちゃんの所は少し落ち着いたから、スコルと一緒に来たんだー!』

「そうなんだ…」

『そしたら木場の兄ちゃんの様子を見てきてくれてリアスねーちゃんに言われたから、来た! そしたら兄ちゃん、なんかクライマックスっぽいじゃん! だったら俺も』

ビューン！と力を貸しに来たって訳！』

「そっか…ありがとう」

僕はグラムを一旦宙に浮かせ、剣の鏢部分を撫でる。

するとグラムがちよつとちくつと刺さる程度のオーラを向けてきた。……嫉妬している、のかな？

「ごめんごめん。じゃあ、グラムとハティ…一緒に行こうか！」

『うん！』

ハティの声に合わせて、グラムの光は強くなった。

僕はダツと駆け出すと、残る魔剣を振るおうとしたジークフリートの四本の腕を斬り落とす！

グラムによって斬り落とされた龍の腕は地に落ちる事無く崩壊し、ハティの変化した刃に落とされた腕も、斬られた端から消滅していった。

…以前と違って、ハティの刃の力を抑えられてる。

この状態であれば、君の力も存分に振るえる！

『ッ!!』

「これで終わらせる。ジークフリート……ッ!!」

僕はマントを翻しながらその場で回転する。

回転が終わると、赤紫の竜巻が巻き起こり、ジークフリートに襲い掛かる！

『ッ、アアアアッ!!!』

満身創痍であったジークフリートは、成す術なく竜巻に捕らわれる！

僕はグラムとハティの刃をクロスさせると、両方の剣から発せられるオーラが僕の右足に集中する！

渦と共に宙に舞い上がるジークフリートの体を見据えて、跳躍！

「これで——ファイナーレだっ!!」

竜巻から解放されたジークフリートの肉体に、右足が突き刺さった。

『——ッ!!!』

声にならない悲鳴を上げながら、ジークフリートは地に落ちる寸前、嘗ての自分の件であったグラムへと手を伸ばした。

が、グラムはその手を拒絶するかのように光を放った。

着地した僕の背後に、ジークフリートの体は墜落した。

振り向くと、彼の肉体は元に戻っていた——見れば、体の中央に埋め込まれていた魔宝石に、輝が入っていた。

「……そう言えば、何故フェニックスの涙を使わなかったんだ？ 君達英雄派は独自のルートで入手していたんじゃない？」

彼等は京都での一銭でフェニックスの涙を使用していた。

でも今回の戦い、ジークフリートは全く涙を使う様子を見せなかった。

ジークフリートは僕の質問に対し、首を横に振る。

「……この状態になると、フェニックスの涙での回復を受け付けなくなってしま……理由は、未だに不明だけどね……」

……この強化状態にそんなデメリットがあつたのか。

つまり彼等は極度のパワーアップと引き換えに回復の手段を捨てると言う事だ。

この情報は、決して小さくはないと思う。

「……やっぱり、あの戦士育成機関で育つた教会の戦士は……まともな生き方も、出来ないのさ……」

ジークフリートはそう言うと、静かに目を閉じた。

「……傷が」

英雄派、ジークフリートとの激戦を制した僕は、ふと自分の傷が癒えていた事に気付いた。

……もしかして、あの鎧が？



「…………回復したのなら、それはそれで良いか」

今は気にする事じゃない、そう結論付けると僕はその場を去ろうと背を向ける。すると、背中越しにほんのりと温かい光を感じた。

「……これは」

振り返ると、そこにはジークフリートが所有していた四本の魔剣が僕に向けて光を放っていた。

そのどれもが、僕を迎え入れるかのように――

「――行こう」

僕はそれぞれの魔剣を手にとると、部長と合流するため走り出した。

――

「…………フフ、全ての魔剣に愛想を尽かされた、か。…………異形に手を出したが故の、咎……かな……………」

木場祐斗が立ち去って暫くの後、ジークフリートは目を覚ました。

だが彼は、己の死期を悟っていた。

もう自分は、助からない――

その間際に彼は、ぼんやりとする意識で、木場祐斗が自分の魔剣に選ばれた瞬間を見ていた。

悔しくもあつた、だが当然だろうと、同時にそう思っていた。

人間のままであれば、魔剣達も見限りはしなかったのではないか、冷静になつて、そう感じていた。

だが過ぎた事を悔やんでも仕方がない。

「…死ぬ間際に悟るとは、本当に……救えない、なあ……」

自嘲気にそう呟くジークフリートだったが、突然首を掴まれ、持ち上げられた。

「うっ……ハハッ、やはり、そう来るか……」

「……」

初めから分かっていたかのように笑うジークフリートをファントム——ガルムは無感情に見上げる。

『……これは必然だ。所詮貴様等人間は、あのお方の筋書きでは唯のカンフル剤に過ぎん。ウイザードのな』

「……」

そう低い声で呟くガルムは、両肩の獣の口を開く。

「……………曹、操……………ッ！」

自分達のリーダーであり、友とも呼べる、そんな存在の男の名を呟いたのを最後に、  
ジークフリートの意識は——消えた。

後に残ったのは、口元を血で濡らしたガルムだけであった。

# MAGIC144 『目覚める龍』

……………んあ、俺、寝てたのか？

眼を開いた俺の目に飛び込んできたのは、一面が万華鏡のような世界と――

「イツセー、起きた」

……………何故か俺の上に乗っているオフィスの顔だった。

「…オフィス？つて、ここは」

『次元の狭間だ、相棒』

……………ドライグ。何か、久しぶりだな。お前の声聞くの。

『そりやお前、あれから数日間気絶してたからな』

気絶……………？

……………！

そーいやドライグ、シャルバは!?

『寝ぼけてんのか？しやぶしやぶ野郎ならお前が倒したじゃないか』

「……ああ、そう言えばそうだったっけ」

『で、お前はサマエルの呪いの影響で気絶してたって訳。流石に二度も受けたとあつちやあお前でもヤバイと肝を冷やしたがな。結局は気絶で済んで何よりだ』

気絶か……みんな心配してんだろいな。

ドライグ、先生が前に言っていた召喚は？

『あつたぞ。けど何故かお前の指輪だけが召喚に応じて消えちまった』

指輪だけ!……って、ホントに指輪がない。

『龍門はドラゴンを強制的に呼び寄せる術式の筈なんだがな。その辺は俺にも分からん』

「で、俺達は今何やってんの？」

俺は何気なくドライグに聞いてみると、耳を疑う発言をされた。

『あ? 今か? ——グレートレッドの上に乗ってる』

………は?!

「えいえいえい」

驚きのあまりポカンとする俺を尻目に、オーフィスは乗っかっている赤いごつごつした何かを叩いている。

「……オーフィス、何してんだ？」

「グレートレッド、倒す」

オーフィスまでそう言うもんだから、俺は改めて自分が何に乗っているのか気で感知した……うん、スッゲーデカイオーラの塊だ！

ってこのオーラは以前見たグレートレッドのものだな………って！

「いや何でええええええ!!?!」

俺はガバリと起き上がって、次元の狭間中に響くほどの大声で絶叫した！

そうしている間にも代わり映えしない景色は流れて行ってるし、ホントに移動中なのねグレートレッドさん!!

『シャルバを倒した後、お前気絶したろ？その後だよ、グレートレッドが偶然ここを通りかかったのは』

「偶然?!偶然無敵のドラゴン様を通りかかったってか?!」

『あの一撃の余波を感じて来たのか、はたまたホントに偶然やって来たのか……兎にも角にも、お前が引き寄せたようにしか思えん。お前やっぱり何か持ってるな』

何か持ってるとか言われましても！

俺はただ日々を平穩に、時折エツチに過ごしたいだけなんだけど!?

『俺を宿してる時点で無理だからな』

『更によえば俺を封じた時点でもな』

そうですね分かってたよチクシヨウ!!……で、これからどうするんだ？

『取り合えずは冥界に向かつてるナウ』

「……皆、大丈夫かな？」

『お前の仲間だろ？ならそう簡単にくたばったりはしない筈だぜ』

……そうだな。

皆、俺に心配されるほど軟じやないし。

そう思っていたら、流れていった景色が急に止まった。

『グレートレッドが、止まった……？』

「どうしたんだ？」

「何か、来る」

来る？一体誰が………ツ！

突如、俺の眼前の空間が歪み始める。

だけどそれは一瞬で、空間が元に戻るにつれて、そこに何者かの輪郭が見え始める。

白い体に鋭利な棘みたいな装飾、胸元で怪しく輝く紫色の宝石。

怪物と呼んで差し違えない奴が、そこには立っていた。

けど――

『……この気配、この感じ、何処かで会ってる?』

そう、俺はこの怪物から以前何処かで会ったような――既視感、と言うヤツを感じていた。

だけど、詳しくは思い出せない。いや――分からない。

まるで、此奴に関する記憶が抜け落ちたみたいに……………。

『…久方ぶり、と言えば良いのかな?』

「な、に…………?」

この口振り…………此奴は、俺の事を知っている!?

『ファントムの敵ともいえるお前の事を知らぬ私ではない。そうだろう、兵藤一誠』

「つー…そうか。お前、ファントムだな」

狐に包まれた感じに捕らわれていたから良く分からなかったけど、此奴のこのオーラはまさしくファントム!

だから何処かであったように感じたのか…………?

『フツ。まさかグレートレッドに拾われていたとはな。道理で探しても見つからん訳だ。偶然が呼んだのか、お前自身が呼び寄せたのか…………だがお前にはそれだけの力があ



ると言う事だ』

「お前……誰だ」

『——我が名はワイズマン。ファントムを統べる者だ』

……此奴が、ワイズマン。

あのサバトを引き起こした、全ての——元凶ツ!!

俺はすぐさま籠手を展開、何時でも戦えるように準備する！

『随分と警戒されているな』

「当たり前だツ……サバトを引き起こした奴を前にして穏やかに出来る訳ねえだろっ

!!」

『止せ。今のお前では私には勝てん。それに——私はお前と争いに来たわけではな

い』

何だと……？

ワイズマンは手で俺を制しつつ、そんな事を言ってきた。きやがった。

『今日はお前と話をしたくてな。態々此処まで赴いたのだ』

「話だと……お前のような奴と話す事なんざ一つもねえよ」

『まあ聞け。話と言っても、簡単な質問だ。……兵藤一誠、お前は这个世界をどう思う

？』

……は？

い、いきなりスケールのデカイ話、だな…。

本当に話をしに来ただけ、なんだよな………俺は一応、拳を下ろす事にした。ただ警戒はさせてもらう、油断はしない。

「どう、つて……」

『お前は魔法使いとなつて人間と接している以上、様々な人間を見て来た筈だ。ほとんどの人間は己の為に他人を利用、裏切り、拳句の果てには命を奪い合う。そんな生命体が跋扈するこの世界を、お前は本当に守る価値があると思うか？』

「……」

『神が産み出したこの世界に、価値ある存在など何一つとしてない。私はこの世界についてこう考えている。お前はどうか？守るべき希望など、所詮は薄汚れた塵芥でしかない。そうは思わないか？』

それは……そう思わない事は、多少はあった。

「…確かにお前の言う通り、綺麗事だけで守れる希望つてのはない。人つてのは弱い生き物だ、誰かを出し抜くために生きてる人なんてそれこそ大勢いる。でも」

『……』

俺が出会ってきた人達は、少なくとも誰かを犠牲にしてまで生きようとする人じゃない。

「だからこそ、誰かの為に何かを成そうとする人達の心が、その人達が尊いと思う希望が、どんな時だって輝いて見える。その生き汚さだって、生きていく上で多少は必要なものだ。俺はそう思ってる。……ちよつとしか生きてない若造だけど、俺はそんな希望があるのを知って来たから、今あるこの世界が好きだ。守る価値があるって、俺は思う」

『……希望が幻想だとは、思わないのか』

「思わないな。だって——俺はその希望に支えられ、助けられて、今ここにいる」  
「どんなに汚くても、醜くても……俺が掴んだ希望は、ずっと俺の中で輝き続けている。それは誰であつても、それこそ神様であつても、何も言わせねえ！」

『………愚かしいな』

だが、ワイズマンは俺のその意見に嘆息した。

『お前も直に思い知るだろう。この世界には何も必要ない。絶望も、希望も』

『………絶望も?』

『その感情は神が産み出したものだ。ならば愚かしいと言う他あるまい。勿論、お前が守る希望もそうだ。私の目に映るこの世界の景色は全て、酷く淀んだものでしかない。価値を見出す価値もない。だから私は——世界を創り直す』

世界を……創り直す……?!?

ワイズマンのその目的に、俺は耳を疑った。

それは妄信でも、虚言でもない。

此奴は、本気でそれを言っている……俺は、そう感じた。

「……それがお前の目的か」

『ああ。私は神が創ったこの世界の一切合切を断ち切る。勿論、お前達と言う存在も消える。神が産み出した生命体など、私の求める世界には必要ない。そして新しい世界を、新しい命で満たす。……そこそが、私の悲願……兵藤一誠、お前が間違いだと思ふのなら、止めてみるが良い。もつとも、無駄な足掻きだが』

「そんな事、俺達がさせると思ふか!？」

『お前達がどう思おうと関係ない。全ての歯車は正しい稼働を始めている。残る最後のピースは……お前だ』

……俺？

どういう意味だよ、それ。

『いざれ分かる。お前は……最後の希望だ。旧世界の因果を断ち切る、最初で最後の――』

『器』

ワイズマンは、そう意味深な事を俺に向けて言うのと、今度こそその場から消え去って行った。

「ドライグ、あのファントム……何処かで会ったっけ？」

『いや……。だが俺は、どうもあのファントムと何処かで会った気がする』

「お前もか……」

『お前もか……って、相棒もそう感じたのか』

ああ。俺は……あのファントムと出会っているのか？

「……イツセー。あのファントムの事、気になる？」

「ん？……ああ。確かに気になるけど……今は、外の世界の事だ」

気にならない訳じゃない、でも今は何も分からない事を考えたって仕方ない。

『……それもそうだな。グレートレッド、冥界まで頼む』

そうドライグが言うと、グレートレッドは静かに動き始める。

すると、俺の傍によって来たオフィスが俺に聞いてくる。

「イツセー。曹操と戦える？」

「……戦えない訳じゃない」

とは言え、今の状態で戦って勝てると聞かれたら、どうとも言えない。

「イツセー、提案がある」

「提案？」

「冥界に着くまで、我と組手、する？」

.....は？

それは、とんでもない提案だった。

## MAGIC145 『若手悪魔連合』

英雄派、ジークフリートを退けてから僕達はグレモリー城に帰還した。

道中、部長に新しい力に目覚めた事も話し、英雄派のパワーアップ、そしてそのリスクも説明しておいた。

あ、因みにハティはいない。

あの後すぐにグレイフィアさんに召喚されたんだ。

「恐らくは首都防衛の最終ラインまで魔獣達が進軍したのでしよう。私達もうかうかしてられないわ。と言う訳だから、いきなり実践で慣らしてもらおうわ。ゼノヴィア」

「うん、問題ない」

グレモリー城に戻った僕達はゼノヴィア、イリナさんと再会した。

何時もの戦闘服を身に包んだゼノヴィアの手には布に包まれた長い得物を携えていた。

布には魔術文字と天界で使用される文字も刻まれている……あの中身は修復の終えたエクス・デュランダルだろうね。

イリナさんも新しい剣を腰に携行していた……剣からは異様で力強いオーラを感じる。

恐らくは、アザゼル先生が仰っていた天界で行われていたという実験の成果なのだろう。

「部長、イツセーは？ある程度の話は家の方に聞いたのだが……」

「……今は何とも言えないわ。と言うより、正確な情報が私達も掴めていないのよ」

……そう、イツセー君に関しては僕達の元に情報が何もない。

イツセー君の安否を唯一知っているであろう白い魔法使いに関しては、あれから全く姿を見せていない。

「……でも、イツセーは生きているわ。グレイフィアを残して、あの人が死ぬはずがないもの」

「……そうだな。私達だってそう信じているとも」

ゼノヴィアもどうやらイツセー君の生存を信じているようだ。

「それで、これからどうするの？」

イリナさんの質問に、部長はフロアに備え付けられている大型テレビに電源を入れる。

映し出される映像は冥界の各領土で暴れまわる巨大な魔獣達だった。



時間の経過的にそろそろ重要拠点にたどり着いた魔獣が出てもおかしくはない。

グレイフィアさんがハティを召喚した事からも、危機の度合いが窺える。

けれど僕達の目に飛び込んできたのは、『豪獣鬼』相手に善戦する悪魔や同盟相手の戦士達の姿だ。

『ご覧ください！魔王アジユカ・ベルゼブブ様を始めとしたベルゼブブ眷属が構築した対抗術式！それによって展開する魔方陣の攻撃が『豪獣鬼』に効果を与えております!!』アジユカ様が魔獣達への対処法を確立してから数時間が経過しているが、形勢は優勢に転じ始めていた。

堅牢なアンチモンスターとして創造された凶悪な魔獣達に対し、ベルゼブブ眷属は独自に対抗できる魔方陣の術式プログラムを構成して前線で戦う悪魔、墮天使『御遣い』などの連合に伝えたんだらう。

変わって別の場面では――

『大怪獣対レヴィアたんよっ!!イツセイ君の分まで、戦っちゃうんだから!!』

セラフォル・レヴィアタン様率いるレヴィアタン眷属と共に『豪獣鬼』の一体に一方的な攻撃を展開していた。

何でも冥界の危機――しかもイツセイ君の不在という一報も相まっていてもたってもいられなくなり、魔王領を飛び出してしまったんだとか。

極大ともいえる氷の魔力が画面いっぱいになり、広大な荒れ地が全て氷の世界と化していた。

……セラフォル・レヴィアタン様の得意魔力だと伺ってはいたけど、いざ面と向かって見ると凄まじい規模だ。

無論、そんな規模の攻撃を受けた『豪獣鬼』も無事で済むはずもなく、半身以上が凍り付いて身動きが取れなくなっていた。

これが魔王レヴィアタン………イツセー君の凍結魔法以上の規模だ。

続いて他のチャンネルでは、丁度タンニーン様が眷属のドラゴン達と『豪獣鬼』の一匹を追い詰めているところだった。

対抗できる術を得た今、魔王級と称されるあのブレスを止められるものはそういないだろう。

『母上！頑張ってくださいー!!』

更に違うチャンネルでは九尾の狐が『豪獣鬼』に強大な火炎を食らわせていた。

あれは———京都の八坂さん！

その背中に乗っている小さな巫女は九重ちゃんだね。…多くの妖怪を引き連れて大暴れしてくれていた。

どうやら、京都の妖怪勢力も悪魔世界の危機に助っ人として来てくれたようだ。イツ

セー君がそれを知ったら喜んでいただけるうね。

情報では巨大魔獣達への優勢が功を奏して、混乱に乗じて各地で暴れている旧魔王派への対抗状況も押し返してきているようだった。

『あーつと！遂に！遂に！巨大魔獣『豪獣鬼』の一体が活動を停止させましたーっ!!』  
レポーターの歓声と共に、『豪獣鬼』が地に倒れ伏していた。

それを最初に仕留めたのは——皇帝ベリアル率いる同盟軍だ！

この状況であれば、『豪獣鬼』も半日しないうちに全て片が付きそうだが、  
ただ問題はまだある。

「残る問題は魔王領の首都に向かう『超獣鬼』でしょうね」

「ロスヴァイセ！戻ってきたのね」

聞き覚えのある声が聞こえ、振り返ると——そこにいたのはグレモリー眷属の  
ヴァルキリー、ロスヴァイセさんだった。

「はい。ただいま戻りました、リアスさん」

北欧から遠路ここまで駆けつけてくれた！

「イツセー君の事は先程伺いました。……彼に関しては未だに不安はありますが、私達  
は今やれる事を成すべき、ですよね」

「……ええ。これからは首都に向かおうと思っているわ。皆、少し休憩を挟んでから出発しましょう」

『はー！』

首都にはグレイファイアさん達がいる。

僕達も防衛に参加———と思っていたら、レイヴェルさんからある情報が入った。

「皆さん！首都リリスで活動中のシトリー眷属の皆さんが都民の避難を護衛している途中で……『禍の団』の構成員と戦闘に入ったそうですわ!!」

「———行きましょう」

部長の宣言と共に、僕達は出陣となった。

## MAGIC146 『英雄と言う名の悪鬼』

魔王領にある冥界の首都——リリス。

面積は日本の首都東京とさほど変わらない規模だ。

文化、文明の両面でも東京とほぼ同じぐらいで、高層ビル群が立ち並び交通機関も発達している。

人間界の発展国の首都と多少の違いはあれど、例外である事に違いはない。

その首都は今、危機に直面している。

例の規格外の魔獣『超獣鬼』が接近しつつあるからだ。

もし到達すれば首都は壊滅的打撃を受け、機能を失うだろう。

現在はルシファー眷属——グレイフィアさんを始めとするサーゼクス様のご眷属の方々、そしてサーゼクス様の奥様であるエリス様が『超獣鬼』の相手をされていた。悪魔の中でも最強と称される眷属の方々でも決定打は与えられていない——ただ、足止めには成功しているみたいだ。

……丁度首都付近に転移した僕達グレモリー眷属とイリナさんの目の前で、巨大な狼

型の魔力の一撃が地形を決り『超獣鬼』を制止させていた。

「あの鎧を纏っているのね、グレイファイア」

あの鎧、とはハティとスコルが変化した鎧の事だ。

装着した者の力を存分に高めるフェンリルの力を、女性悪魔の中でも最強と名高いグレイファイアさんが装着すれば、あれほどの力になるのか……。

イツセー君、君の正妻は凄いな……そう思いつつリリースの区画の中で一番高いビルの屋上に転移した僕達の背後から、懐かしい声が。

「皆さーん！」

——ギヤスパー君！

「ここにいれば皆さんが来るって墮天使の方々に言われたんですけど、中々来なくて寂しかったですう……」

「あー、待たせてゴメンね」

涙目なギヤスパー君を宥める。

……これでイツセー君を除いたグレモリー眷属が集結した。

後は君だけだよ、イツセー君！

「ギヤスパー、トレーニングの成果、たっぷり見せてもらおうわ！」

「はい、ご期待に添えられる様に頑張りますう！……あ、そう言えばイツセー先輩は？」

……そうか、ギヤスパ―君にはイツセー君の事は伝わってないんだ。

「イツセー君は……」

「……あれ！」

僕が詳細を伝えようとした時、小猫ちゃんが何かを見つけたらしい。

小猫ちゃんが指さした邦楽では、巨大な黒いドラゴンが黒炎を巻き上げて暴れている姿があった。

——匙君だ！

全員それを確認すると、翼を広げてその方角へと飛び出していった。

————

龍王ヴリトラと化した匙君の姿が見えた場所へと降り立ったその場所は、すでに戦火に包まれていた。

「グレモリー眷属！」

聞き覚えのある声と気配に引かれてそちらを振り向くと、タイヤが外れた一台のバスを守るように囲むシトリー眷属の姿が。

—— 見れば、バスの中には大勢の子供達が乗っていた。

「状況は？」

「このバスの避難を先導している途中で英雄派と出くわしてしまいました……。相手は此方がシトリー眷属だと分かると突然攻撃を仕掛けて来たんです。バスが軽く攻撃を受けて機能を停止してしまっただのでここで応戦するしかなくて……。会長と、副会長と、元ちゃんが……ッ！」

涙交じりでそう言う巡さん……。匙君がどうしたって言うんだ!?

「っ、あれを！」

ロスヴァイセさんが刺した方角—— ショップが並ぶ歩道で、英雄派の巨漢、ヘラクレスに喉元を掴まれてる匙君の姿が!

既に匙君の状態は満身創痍、意識も失いかけている状態だ。

その近くの路面にソーナ会長が横たわっており、更に英雄派のジャンヌと戦っている真羅副会長の姿が目に入った。

ヘラクレスは匙君をつまらなそうに放り捨てると、事もあろうに倒れているソーナ会長の背中を踏みつけた……!

「ぐうっ！」

悲鳴を上げるソーナ会長を意に返さず、ヘラクレスは嘲笑い吐き捨てるように言う。



「んだよ、レーティングゲームで大公アガレスに勝ったっていうから期待してたのによお。こんなもんかよ」

「ふざけないでツ！子供の乗ったバスばかりを執拗に狙って来たくせに！それを庇う為に会長も匙も実力を出し切れなかったのよ！そうするように仕掛けてきたのは貴方達じゃないのツ!!」

真羅副会長が涙を流しながら激昂していた。

普段は会長よりもクールな真羅先輩がそこまで感情を露にするなんて……よほど悔しかったんだろう。

そしてその理由は……ヘラクレスが子供達の乗っているあのバスを狙ったから……そんな卑怯な事をして会長と匙君を攻撃したと言うのかツ!!

……イツセー君なら迷わずヘラクレスを殴り飛ばしていただろうね。

だけど今は、僕も同じ気持ちだ……ツ。

怒りを燃やす僕の目の前で、ジャンヌは聖剣で真羅副会長を突き返して嘆息する。「私はそんな事するのはやめておけばって言ったけど？ま、ヘラクレスを止める事もしなかつたけれど——ツ!!」

そういけしやあしやあと言うジャンヌ目掛けて、グラムを振るう。

その一撃は躲されたけど、ジャンヌの背後にあった建物は一瞬にして塵と消えた。

「今のはグラム!?……って、その姿は!」

先の一撃がグラムによるものと知ってジャンヌは仰天していたが、僕の今の姿を見て更に驚いていた。

…どうやら無意識に極手状態になっていたらしい。

僕の怒りに、神器が呼応したのだろう。

「どうやらジークフリートを倒したらいいな!ハッ、こんな奴らに負けるなんざアイツもタカが知れてるって訳だ!」

ヘラクレスはそれを見ても特に動じず、ジークフリートを嘲笑う。

「どうやら、彼等に仲間意識と言うのは薄いものなのかもしれない。」

「……兵藤一誠と同質の力を感じる。そうか、君は彼と同じ領域に至ったと言うのか」と、後方から眼鏡をかけた青年が現れ、僕にそう言った。

——霧使いのゲオルクだ。

「……木場君」

僕を見ながら、真羅副会長は消え入りそうな声で名前を呼んでくる。

彼女の気持ちは分かる、自分も戦いたいのだろうと。

「…貴方達の無念は、僕達が引き継ぎます」

「……」

……無力な人達を執拗に狙い、本領を發揮できない会長たちを甚振る。  
そんな真似を仕出かす彼等が、英雄などと呼べるのだろうか？

——否、断じて否だ。

「君達は英雄なんかじゃない。ただの悪鬼だ」

僕は聖魔剣をジャンヌ、ヘラクレス、ゲオルク目掛けて大量に飛ばす！

「多いな……ッ！」

ゲオルクは魔法で対処しようと試みたが、剣の切っ先が魔方陣に触れる寸前で、魔方陣は霧のように霧散した。

「ッ！術式が消えた!?!アンチマジックの類か!!」

舌打ちと共にゲオルクは霧を使って剣の大群を消し去っていく！

……その間に、何とか会長と匙君の回収は終了したようだね。

「ちっ、今のはブラフって訳か」

「出し惜しみをしている余裕はあるのかい？」

「なっ——!?!」

訝しげに僕を見るヘラクレスの巨体を——魔方陣が拘束した！

「何だこりや…ガアアアアアアアアアアッ!!!」

出し惜しみをするのなら構わない——此方は容赦しないけどね。

「うん。木場の奴、随分悪役染みてきたな。あれならウイザードラゴンの幹部役でも箔が更に付くんじゃないか？」

「あれこそ魔王って感じよね！」

…正直、これも悪くはないかなって思っちゃうね。

と思っていると、ヘラクレスは自力で拘束を解いたらしい。けど肩で息をしている……練度さえ上げれば、縛る力も強くなるのだろうか？

「…ホントを言えばジークフリートに対して試したかったのだが、木場が倒したのなら仕方がない。ここは一つ、イリナの借りを返すのに付き合おう」

ゼノヴィアは息を吐いて、剣の切っ先をジャンヌへと向けた。

「そうよそうよ！あの時の借りを返すわ！いくら聖人の魂を受け継ぐ人でもあなたはダメダメよ！」

……全く同じ動きだ。

いいコンビだね、二人共。

「へえ、あなた達がお姉さんと遊んでくれるんだ。良いわよ、楽しみましょう！禁手化つ

!!

ジャンヌは聖剣で形作られたドラゴンを呼び出し、背に跨る。

「ついでにっしやいー！」

「望むところっ!!」

……今のゼノヴィアとイリナさんなら、善戦は出来るだろう。

そう思い、僕はゲオルクとヘラクレスに向き直る。

「……さて、質問に答えてくれるかな？何故あのバスを狙った。それ以前に、何故ここにいる？」

彼等が態々出向いてまで子供達を襲う理由が分からない。

恐らくはそれが本来の目的ではないだろうけどね。

「ふむ、そうだな……まずは後者の方から答えよう。——見学だ。曹操があんな超巨大

魔獣がどこまで攻め込む事が出来るか、その目で確かめたいと言うのでね」

……ならば、彼はその付き添いと言う事か。

肝心の曹操がいないのは良く分からないけど、今は置いておこう。

「で、バスを狙った理由は？」

「偶然、そのバスと出くわしてな。ヴリトラの匙元士郎とシトリー眷属が乗っていたのだ。あちらもこちらの顔を知っている。まあ、相対する事になってしまうのも否めない

だろう?」

……偶然の相対と言うのか?

ヘラクレスは息を整えると、挑戦的な笑みを浮かべる。

「俺が煽ったって面もあるぜ? 偶然あのヴリトラに出会ってよ。魔獣の都市侵略の見学だけじゃ物足りなくなってきたな。『子供を狙われたくなけりや、戦え』って言ったんだよ。——後は、お前の知っての通りだ」

……そんなふざけた理由で、戦いを始めたと言うのか?

「外道が……ッ!!」

怒りの感情と共に再びグラムを抜刀した時、力強い波動を感じた。

「……英雄は異形との戦いを望む者達の集まりだと聞いていたが、どうやら外道な連中の巣窟らしいな。しかも、飛び切りの外道がいたものだ」

そう言いながら対峙する僕達の間立った男は、金色の体毛に包まれた巨躯の獅子を従える、純粋なまでの『力』の権化。

「…サイラオーグ!」

部長がその名を呼んだ。

「首都で暴れまわっていた旧魔王派の残党を一通り屠ったところだな、遠目に黒いドラゴン——匙元士郎の姿が見えたのだな。助太刀させてもらったと言う訳だ」

若手悪魔ナンバーワンの獅子王——サイラオーグ・バアルはそう言つて、ワイルドな笑みを見せた。

## MAGIC147 『牽制と復活』

冥府——冥界の最下層に位置する死者の魂が選定される場所に俺ことアザゼルは数人のメンバーと共に赴いていた。

入って直ぐに死神共が群がり、敵意を隠さない眼差しを向けてくる。

まあそうなるよな、何せ事前連絡なしでの訪問だ。

向こうからしてみれば襲撃に近い来訪になる訳だしな……つと、俺がなぜここに来たかと言えば、今回の騒動に一枚噛んでやがるハーデスに一言物申す為と、好き勝手指せないためだ。

悪魔と堕天使への嫌がらせに関しちゃどんな勢力よりも執念深いあの骸骨オヤジの事だ、今の冥界に絶妙なタイミングで横やりを入れてくるのはほぼ確実だ。

それを防ぐ、牽制の意味も込めての電撃訪問と相成った訳さ。

ハーデス神殿を歩いて暫くして、一際大きい祭壇にたどり着いた。

……お出ましたな。

到着して直ぐに、祭儀場の奥から嫌なオーラを纏った骸骨オヤジ——ハーデスが



死神を複数引き連れて登場なされた。

……こないだの最上級死神のプルートのいないのが気になるな。

まあ今はプルートの事は置いておこう。

「お久しぶりです。冥界の魔王ルシファア、サーゼクスに御座います。冥府神、ハーデス様。急な来訪、申し訳御座いません」

ハーデスを確認するやいなや、俺の同行者の一人——サーゼクスが一步前に出てハーデスに挨拶をする。

…あの疑似空間から帰還した俺は、今回の一件を全て包み隠さず話した。

許してもらおうとも思っていなかったし、許される立場でもなかった。だが俺はそれでもサーゼクスに一言「済まなかった」と謝罪した。

此奴は俺からの情報を顔色一つ変えずにただ黙って聞いていた。俺を一切咎める事すらしなかったのだ。

……リアスや、そのリアスが愛しているイツセーをあんな目に遭わせちまった手前、俺はお前に殴られても良い覚悟だったよ。

俺はそれだけの事を犯したんだ——。

サーゼクスは進撃する魔獣の群れと各地で暴れ出した旧魔王派の対応、民衆の保護優

先を配下に伝達し終えた後で、俺にこう言ってきた。

「冥府に行く。アザゼルも同伴してほしい」ってな。

この混乱に乗じてハーデスが何か仕出かすのではないか、そうサーゼクスも勘ぐっていらしい。

言っても聞かないであろうハーデスを相手にどう出るか……その答えが魔王自らの訪問だった。

ハーデスは眼球のない眼孔の奥を不気味に輝かせて、笑みを漏らす。

《貴殿等が直接ここに来ようとは……フアフアフア、これはまた虚を突かれたものだ》

その割には余裕なこつて……とは言え、此奴の実力は本物だ。

いざ俺達と戦う事になつても勝てる、そう踏んでいるんだろう。

ミカエルもこちらに顔を出したいと言っていたが、流石に天使長が地獄の底まで来るつてのは体裁的に如何なものかと思つて制させてもらつた。

ハーデスの視線が俺達の後方にいる者に向けられた。

《そちらの天使もどきは？尋常ならざる波動を感じてならぬが》

後方にいるのは、神父服に身を包んだブロンドにグリーンの瞳が特徴の青年。

―だがその背には、十枚にも及ぶ純白の翼が生えていた。

青年は視線に気づき、会釈した。

「あ、これはどうも。『御遣い』のジョーカー、デュリオ・ジェズアルドです。今日はルシファー様とアザゼル様の護衛でして。まー、多分いらんとは思いますが、でもね。「いちおう」とミカエル様に命じられたものですから。天使のお仕事つすお仕事」

……噂には聞いていたが、かなり軽い調子だな。多分イツセーとはすぐに仲良くなれるタイプだ。

変わり者のジョーカー……神滅具『煌天雷獄』の所有者にして、空を支配する『御遣い』。

《……噂に聞く天界の切り札か。その身に宿す神滅具は世界の天候を自在に操り、支配できると聞く……。フアフアフア、ミカエルめ、まさかジョーカーを切るとは》

それだけの存在なんだよ、お前は。

一応、表には俺が連れて来た刃狗も待機させているがな。

《フアフアフア、蝙蝠と鳥の首領、それに神滅具が二つ……この老骨を相手にするには些か苛めが過ぎるのではなからうか？》

どの口がほぎきやがる、これだけ用意しても退けそうな実力持つてる癖によ。

……って、表に待機している刃狗も補足されてるのか。

《茶を飲みながらその方らと話すのも吝かではないのだが……敢えて尋ねよう。何用か？》

…んの野郎は、何処まで人の神経逆撫ですりや気が済むんだ…！  
だがサーゼクスはあくまで自然に、質問に答える。

「先日、冥界の悪魔側にあるグラシヤラボラス領で事件がありました。中級悪魔、及び上級悪魔試験を執り行うセンター会場付近に存在する某ホテルにて、我が妹とその眷属、ここに居るアザゼル総督が『禍の団』の襲撃を受けたのです」

《ああ、それか。報告は受けているが》

「そこで総督方は死神からも襲われたと聞き及んでおります」

《何でも貴殿の妹君がアザゼル殿と結託して、かのウロボロス——オーフィスと密談をしていると耳にしてな、調査を頼んだのだよ。折角、どの勢力も協力態勢を敷こうとしている最中、そのような危険極まりない裏切り行為があつては全勢力の足並みが乱れると言うものだからなあ。それが和平を誰よりも謳うアザゼル総督自らとなればこゝとも大きくなるであろう？ 敬愛する総督の是非が知りたくなつてなあ。配下の者に調査を頼んだのだよ。仮にそのような行為があつた場合、最低限の警告をするように命じただけの事》

ハーデスは会話の端々にワザとらしい敬意を払つてそう宣つた。

…：腸が煮えくり返りそうな物言いだな。

正直、この野郎ののど元に光の槍を突き立ててやりたいぐらいだ。

ブルートが冗談半分ではざいてたことをそのまんま言いやがってよ！

あんな殺意と嫌がらせに満ちた最低限の警告があつてたまるかよ！

ハーデスは肉のない顎を摩りながら続ける。

《だが、それはどうやら私の早とちりだったようだ。もしそちらに被害が出てしまつていたのなら、非礼を詫びよう。食材も望むのであればなんなりと言うが良い。私の命以外ならば、大概のものは叶えてやらんでもないが》

……上から目線でのこの物言いと態度、この野郎ワザとやってるのか？

とは言え怒りのボルテージが上がっている俺は、すぐ横で俺と同じぐらい怒っているサーゼクスを見やる。

「そうですか。早とちり……成程。良くない噂を小耳に挟んだもので、その確認をしっかりと参った部分もございます」

…本題に入る気か。

「ハーデス様、貴方が『禍の団』と裏で繋がっていると言う報告を受けております。英雄派、旧魔王派ともに貴方が手を貸している……と。かのサマエルを使用したと言うではありませんか。もしこれが本当だとしたら、重大な裏切り行為です。立場は違えど、あれを表に出さない事だけは各勢力で合意だった筈です。私としてもあなたの潔白を疑うつもりはないのですが、一応の確認としてサマエルの封印状態を見せてはいただけな

いでしようか？」

ハーデスの野郎がサマエルを使用したかどうかは封印されている術式の経過具合、そしてあの時イツセーが与えた攻撃の痕が残っているかで判別出来る。

白ならば大昔に施された封印術式で、サマエルも無傷。黒ならば、最近施された封印術式で、イツセーの攻撃痕も僅かだろうが残っている筈だ。

それさえ確認できれば、この野郎を糾弾できる口実が得られる。だがハーデスはこの質問に対し嘆息した。

《下らんな。私は忙しいのでな。そのような疑惑を持たれている暇などない》

この野郎、自分に都合の悪い事はガン無視かよ！

小学生か!!

追いかけてようとする俺を、サーゼクスが手で制した。

「…分かりました。では、こうしましょう。貴方に疑惑の目が向けられているのは事実。そこで、冥界での魔獣騒動が収まるまで、私達と共にこの祭儀場にいてもらいたいです」

サーゼクスが出した案は、この場にハーデスを繋ぎ止める事。

此奴が冥界の危機に横やりを入れないよう、自らが監視をしようの事だ。

それを聞いたハーデスは、歩みを止めて此方を振り返る。

《面白い事を口にするな、若造。そうだな……ならこれはどうだろう。——おぬしが真の姿を見せると言うのであれば、考えてやらんでもないが》

——つ。

まさかそれを言うか、このくそ野郎は。

ハーデスは眼光を光らせて続ける。

《噂ではあるが聞いておる。サーゼクスと言う悪魔が何故『ルシファー』を冠するに至ったか。……それは『悪魔』と言う存在を逸しているが故だ、とな》

……一瞬の静寂、そしてそれを裂くようにサーゼクスは頷いた。

「——良いでしょう。それで貴方がここに留まってくださるのならば安いものだ。ただし、身辺の者達は離れさせた方がよい。——確実に消滅するので」

《ほう、それは面白い。私の周囲には上級、最上級死神も列しているのだが……それでもお主の元には偽りが無いと思えてならぬ》

サーゼクスはハーデスの周囲を守護する死神達の敵意を意に返さず、上着を脱ぎ捨てる。

そのまま俺とデュリオに、後方に下がるよう視線を配らせてきた。

……本気でやるつもりか、サーゼクス。

見守る俺とデュリオの前でサーゼクスは魔力を高め始める。

滅びの魔力がサーゼクスから発生して、紅く紅く体を染め上げていく。

刹那——この神殿全体が振動し始めていた。

…サーゼクスの魔力を受けて神殿が震え出したのだろう。かなり頑強に作られているであろうこの神殿が悲鳴を上げ始めた証拠だった。

祭儀場の至る所、壁にも床にも天井にも激しく輝が走る。

……いや、この振動は神殿全体じゃない——この辺一帯の地域丸ごと、サーゼクスの魔力で震えている……！

やがてサーゼクスの魔力の余波が周囲を消し飛ばし、体が完全に包まれると——  
莫大な魔力がこの場内全体を包み込んだ！

………神殿の振動が止み、静寂が訪れた祭儀場。

その中央に現れたのは、人型に浮かび上がる滅びのオーラだった。

『この状態になると、私の意志に関係なく滅びの魔力が周囲に広がっていく。特定の結界か、フィールドを用意しなければ全てのものを無に帰してしまう。……この神殿が強



固で幸いでした。どうやら、ここはまだ持つ様だ』

滅びの化身……口調はサーゼクスのもの。

これが…サーゼクスの真の正体か。

とんでもねえ質量の消滅魔力が人型に圧縮された姿とでも言えばいいのか……だがそれにしたつて、肌を感じるこのオーラの性質は……！

この魔力の質量からしても……前魔王ルシファアの十倍に至るんじゃないのか!?

——以前、グレモリー家で厄介になった時、サーゼクスの父、グレモリー現当主が俺に語った事がある。

「自分の息子は、悪魔とカテゴライズして良いのか分からない」——と。

グレモリー卿、貴方の仰つた意味が良く分かつたぜ。

前魔王政府との戦いでサーゼクスが前魔王に血筋を相手にエースとして活躍したと言ふ理由も頷ける。

サーゼクスとアジュカ、二名のバカげた力量の——『超越者』

……超越者と呼んでいい悪魔はもう一人だけ存在する。

それに、悪魔だけじゃない。

嘗ては天界にも、超越者と呼んでいい奴がいた。

まあ、この二人は姿を晦ませて久しいんだが。

今この情勢で出てこれたら厄介極まりないだろう。

「……ハハハ、いやーこりゃ護衛はいらないかな」

俺の隣でデュリオが苦笑い気味にボヤいていた。

まあ、こんなの見せられたらそう感じてても仕方ないわな。

『これでご満足いただけただろうか、ハーデス殿』

サーゼクスの言葉にハーデスは不敵な笑みを漏らす。

《ファアファア、バケモノめが。成程、前ルシファーを遥かに超越した存在だ。魔王と言うカテゴリーすら逸脱するものだ。いや、悪魔であるのかすら疑わしい程の力を感じる。——お主は何なのだ？》

『私が知りたいぐらいですよ。突然変異なのは確かですが。——どちらにせよ、今の私ならあなたを消滅させれます』

《ファアファア、冗談には聞こえない、か。この場で争えば確実に冥府が消し去るな》

ああ、今のサーゼクスの姿を見せられたら、俺も冗談には聞こえないぜ。

この姿であれば、ハーデスに余裕で対抗できる。嬉しい誤算だ。

サーゼクスを見据えるハーデスの元に、物陰から死神が現れ、何かを耳打ちした。

何かの報告を受けたハーデスは祭壇に設置されている載火台の炎に手を向けると、その場に映像が映し出された。

そこではとある連中が死神の大群相手に大暴れしている光景が映っていた。

『おらおらおら！俺たちの如意棒に何処まで耐えられるんない、死神さんよお!!』

如意棒を振り回すカカロット……もとい美猴の姿が。

その横では巨大なゴーレム、ゴクマゴクが剛腕を振るい死神を一斉に吹き飛ばしていく。

対魔獣用の機関銃が火を噴き、その合間を縫うように黒歌とルフェイの合体魔法攻撃が更に吹き飛ばしていく。

その付近ではアーサーが聖王剣を振るい、百単位の死神を一人で屠っていく、神速のスピードでフェンリルが死神を切り刻み、淡い光を放つドラゴンの鎧を纏ったカイトの光の一撃が、死神を塵も残さず消し飛ばした。

——ヴァーリチームだ。

来るだろうとは思ってはいた、やられっぱなしのチームじゃないのは分かり切っていたからな。

仕返しをするなら曹操の一派化、旧魔王派、もしくはハーデスだ。

にしても最高なタイミングで仕掛けてくれやがって、最高じゃねーか馬鹿野郎!!

《…貴様の仕業か。烏の首領よ》

ハーデスの声音が最高に不機嫌になっていた。

……くく、それだよそれ。

俺が見たかったのは。

俺はこらえきれずに、嫌みに満ちた笑みを作ってこう言ってるのさ。

「しーらね」

《……ッ!!》

それを聞いたハーデスはオーラが激情の色となった。

おーおー、随分ご立腹な様子で。万全のアイツら舐めてると痛い目見るとして漸く実感してくれたなあ。

骸骨神よ、ヴァーリチームは今まで各勢力の追撃部隊を全て退けた化け物揃いなんだからよ。

「死神を総動員しなきや白龍皇の一派は仕留めきれないでしょうな。それは貴方がここで指揮でもしなきや駄目ですよ」

これでハーデスが冥界に対して横やりを入れられなくなったのは確定だ。

冥府でヴァーリチームが暴れて、終いにヤサーゼクスまで本気になっているんだ、冥

府への嫌がらせどころじゃないぜ。

ハーデスからしたら事前に打ち合わせしたんじゃないかって気分だよな。

『ええ、ですから貴方はここに留まってもらうしかないのですよ』

迫力と緊張に満ちた空間で、サーゼクスは指を一本立てた。

『一つだけ。これは魔王としてではなく、一個人としてです。ですが、あえて言わせていただこう』

滅びの化身は憎悪に満ちた眼孔で冥府の神を鋭く睨み付ける。

『冥府の神ハーデスよ。我が妹リアスと我が義弟兵藤一誠に向けた悪意、万死に値する。この場で立ち会う状況となった時は覚悟していただこう。——私は一切の手加減も躊躇もせず、貴殿をこの世から滅ぼし尽くす』

ハーデスがただ一つのミスをしたとすれば——この男を激怒させた事だ。

いや、二つか。

「骸骨神様よ。俺も一応キレてるって事、忘れんじゃねーぞ？まあ極めて個人的な恨みなんだけども、それでも一言物申させてもらおう……俺の教え子共を、泣かせんじゃねえよ……ッ!!」

光の槍をハーデスの眼前に突き付けて、そう言つてやる。

ま、これでハーデスの件はクリアした。  
リアス達、後は任せるぜ？

それとイツセー、そろそろ帰ってこないと、主人公の座奪われちゃうぜ？

「へっくしょん!!」

「イツセー、風邪？」

「いや、誰か噂してんのかねえ……」

『お前忘れられてるんじゃないのか？』

「変な事言うな!!……腹減ったけど、漸く俺のショータイムだぜ！」

そして、かの希望が帰還するときは、近い——

## MAGIC148 『帰還』

「……ドライブ、聞こえるか？」

『……ああ』

俺——兵藤一誠の心に響いてくる、多数の声。

——助けて、ウイザードドラゴン！

——あの大きい怪獣を、やっつけて！

無数に響く子供達の声が、俺達の心にじんわりと響いてくる。

心に届くのと同時に、次元の狭間の空——冥界の子供達の笑顔が沢山現れていく。

『……成程な。相棒、どうやら冥界中の子供達の思いを、グレートレッドがここに投射してくれているみたいだ』

…冥界中の、これが全部、俺達を呼ぶ声か。

俺の中に、こみ上げてくる熱い思いがあった。

俺は自然と、拳を握り締める。

『グレートレッドは夢幻を司るドラゴンだ。…誰かが抱いた夢を、誰かが見た夢を、誰かが思い描いた夢を、それらを俺達に見せているんだ』

「夢、か……。でも、この俺を呼ぶ声は夢なんかじゃない。そうだろう？」

『…ああ、そうだな。……不思議な感覚だ、こんなに高揚したのは何時ぶりだろうか……この声に答えてこそ、ヒーローだろう？』

——— ああ！

『グレートレッドよ。この男を、あの子供達の元に帰してやってくれないか？』

ドライトの進言に、グレートレッドは——— 一際高い咆哮を上げる。

すると前方の方角が歪みが発生し、裂け目が生まれた。

そこからは大都市が一望できた——— 冥界の都市だろう。

「さあて……いつちよ行きますか!!」

『応っ!!』



『……フン』

「おー」

そして最後にグレートレッドは同意するかのように咆哮を上げ、次元の裂け目を超えていった。

――

グレイファイア side

私、グレイファイア・ルキフグスは冥界の首都、リリースにて『超獣鬼』の相手をしていく最中にあります。

ルシファー眷属の『騎士』沖田総司さんが『超獣鬼』へと斬り込み、切り裂かれた後にすかさず麒麟の炎駒さんが炎の砲撃を浴びせる。

「やっぱり効果薄いつすよ！グレイファイアの姐さん！」

「怯んではいけません！倒せずとも、首都圏を何としても死守するのです！……ハティ、スコル、まだ行けますか？」

『ちよつちキツイけど、まだ頑張れるよ！』

『俺も！お兄さんだつてこのぐらいいじや諦めないもんね!!』

お兄さん——イツセー様……………そうです、彼はどんな時だつて諦めずに進んできたのです。

彼が守つてきた笑顔を、希望を、彼がいない間……私達が何としても守るツ！

「ハアツ!!」

「穿てっ!」

狼を模した魔力弾と共に、エリス様が大規模な槍の雨を降らせ、『超獣鬼』の表皮に傷が生まれていく。

ですがこれほどの一撃でも、『超獣鬼』の歩みが止まるのみ……………。

「……………やはり、足止めが限界ですか」

『豪獣鬼』は複数体が沈黙したと報告したと聞いていますが、本元の『超獣鬼』は一筋縄ではいきませんね……………。

——イツセー。

「私達に、力を……………!」

余力を振り絞つて、全力を撃ち放つ!……………が、その煙の中から無数の触手が襲い掛かつてきた!

迎撃しようと肘部に折り畳まれていた剣を展開しようとしたところで……鎧が解けてしまったのです。

『ワウウ……』

『グウ……』

ハティとスコルも限界だったようです……ここまで有難う。

私は二匹をグレモリー邸へと転移させ、単身迎撃を試みるますが――

『触手の方が速いっ!』

迎撃を諦め、防御の為に魔方陣を展開した瞬間――赤い剣筋と共に触手が切り裂かれました。

「これは……」

総司さんでしょうか、そう思いましたが、どうやら違うようです。

「姐さん!大丈夫ですか!?!」

「ええ……今のは」

「――間に合ってよかった」

戸惑いを隠せない私の耳に届いたのは、酷く覚えのある声。

心底安堵したという感情が籠められたその声は、誰よりも愛しい彼の声そのもので。

「……ッ」

私は声のした方へと振り向くと、そこには――

「待たせてゴメン。グレイファイア」

赤い鎧姿のあの人……イツセーがアスカロンを携えて、そこに浮かんでいたのです。

イツセーside

ふいふ、ギリギリ間に合った……！

俺はグレイファイアに襲い掛かっていた触手を寸での所で切り刻んで彼女を守った。

グレイファイアの元に近付き、傷がないかを確かめる……うん、無事みたいだな。

「イツセー、なの……？」

対するグレイファイアは幽霊を見たかのような、信じられない面持ちで俺を凝視していた。

「おう。……心配かけて、ゴメンな」

「……イツセーッ!!」

そう言うと、グレイファイアは目尻に涙を浮かべ、俺に勢いよく抱き着いてきた。

「…良かったツ。生きていてくれて…本当に…ツ！」  
「…ああ。俺はちゃんと、ここにいますよ」

……大切な人を泣かせるなんて、恋人失格だな。

俺はグレイフィアの涙を拭って、落ち着かせる為に背中を叩く。

「…あのー、姐さん。お熱いのは良いんですけど、そう言うのはまた、後でにしてみらえますかね……」

「…ツ!!」

と、ここでルシファー眷属の皆さんの生暖かい視線に気付き、グレイフィアはバツと離れる……可愛いなあ。

「ご無事で何よりです、一誠さん」

「エリスさん！」

ニコニコ笑顔で俺に寄ってきたのは、サーゼクス様の奥さんのエリスさん！

『おお、中々エロイ身体つきだな』

ドライブの言う通り、エリスさんの格好は身体つきが良く分かる戦闘服！

ピッチリしたスーツを押し上げるおっぱいに括れた腰、綺麗な生足……有り体に言っ

てエロいー！

「……いてててててっ!!」

何て鼻の下を伸ばしていたら、グレイフィアに頬つぺたを引つ張られた!

「御免なさい」

「いえいえ、殿方ですから仕方のない事です」

エリスさんはニコニコとしつつ、後ろの怪物相手に大質量の槍を投げつけていた! 槍の穂先は怪物の首を消し飛ばしていく!……が、すぐさま再生していった。

何っー再生能力だ……あれ受けて直ぐに回復しちまったよ。

『エロいのはこの際後で歴代の奴等と円卓会議するとしてだ、どうする相棒』

お前先輩方と何やってんの?!………対抗策としては、久々にあれやってみるか?

『あれ?』

二人の疑問に、俺は懐から指輪を取り出す。

すると、ドラゴンの方から嫌そうな声が漏れた。

『……おい、まさかとは思うが』

「うん。——融合すつか」

『嫌だ!!』

嫌だ!!………って、お前そんな事言うキャラか?

『俺はもうこんなドスケベと融合したくないんだ!!』

「キャラ崩れてるって! そんなに嫌なのか!? キャラ崩壊するほど嫌ってか!」

『嫌だ!!』

『…そこまで否定されると俺だって傷付くぞ』

…うん、まあ、ドラゴンの気持ちも分からんではないけど。

でもさ、ここは冥界の危機って事で、覚悟決めてくれよ。

『嫌だ! 僕には出来ない!!』

『甘ったれた事を言うなあ!! ここで俺達が出張らないと相棒に見せ場全部持っていかれるんだぞ!! そんな事になっても良いのかあ!』

『出番なんていらぬ!! 寝かせてくれえ!!』

『そこまで言うなら無理やりにも俺と超融合してもらおう!!———やれ相棒!!』

『何でそんなに乗り気なんだよおツ!!』

「……お、おう」

何か、こんなに嫌がっているのに無理やりさせるのもどうかと思えて来たんだけど

……まあ良いか。

改めて指輪をはめると、俺は魔法を発動させる。

——折角だ、ここはドラゴンの気に乗せるためにも、派手にいかせてもらおう。

「俺は魔力を消費して、魔法——超融合を発動!!俺は、赤ウエルシユドラゴンき龍ウイザードラゴンと幻魔龍を融合!  
わが身に宿りし二つの希望よ!混沌の渦にて交わり、我等の絆の結晶となれ!!」

《Soul Fusion Welsh Wizardragon!!!》

『ヨツシャアアアツ——』

『イヤだああアアツ——』

!!!!!!

気合十分なドライグと、本気で嫌がるドラゴンの声が、詠唱と共に交わっていく!

「融合召喚!!!吼え立てよ、幻魔龍帝!!ウエルシユウイザードラゴン!!!!」

『グオオオオオオオオオオ————ツ!!!!』（オツシャアツ!!／畜生めえー!!!）』

それぞれ異なる感情が籠められた咆哮を上げ、生前のドライグを模した鱗のような鎧を纏ったウイザードラゴンが、冥界の空に降臨した!

「……つて、何でドラゴン実体化したんだ?」

ドラゴンは確かアンダーワールドでしか召喚できない筈だろ?…まあ、ぶつつけ本番でやって今更だけど。

首を傾げていると、ドライグの声が脳内に響いてきた。

『グレートレッドのお陰だな。夢を投影させたのと同じ要領で、お前の中の此奴を一時



的に実体化させたって訳』

「成程な。サンキュウ、グレートレッド!!」

『どうやらグレートレッドが気絶していたお前の記憶を見てな。その中であつた俺達の融合体を見たくなつたらしい』

だから力貸してくれたのか……って、俺の記憶覗いちゃつたの!?

『お前が女と交尾してるのもバツチリ見たつてよ』

「ヤメテ!!」

『相棒がその銀髪メイドに迫られて獣みたいにガツついたのも中々悪くなかつたとよ』

だからやめろつての!!今脳内会話だから良いけども!!

『あ、後リアス・グレモリーの乳房を赤ん坊みたいに吸つてたのm』

「もう良いわー!!!さっさとやるぞー!」

『へいへい』

『…もう好きにしてくれえ』

ドラゴン……すっかり意気消沈しちゃつて。

じゃあドライグ、お前が体動かすつて事で良いか?

『おう!』

「よし。…あ、グレイファイア。皆さんを下げてくださいる？多分アイツが暴れると巻き込まれるから、周囲への被害だけ抑えててくれるか？」

「…分かりました。皆さん！」

グレイファイアの号令を受けて、ルシファー眷属の皆さんとエリスさんがこの付近一带に結界を張ってくれた。

よし、これで思う存分やれるな！

「行け、ドライグドラゴン!!」

『変な呼び方するな!!』

何とも締まらない始まり方だけど、ドラゴンは勇ましく吼え立て、デカブツに向かっていく！

怪獣が迎撃するよりも早く、ドラゴンの爪撃が怪獣を深く切り裂いた！

『オラオラオラオラア!!』

その一撃に激怒したのか、怪獣が吠えながらドラゴンへとブレスを吐くが、ドラゴンは水流のブレスで鎮火させる。

息つく暇もなく、瓦礫を巻き込んだの暴風が怪獣の巨軀を痛めつける！

『オオッ!!』

『グギャアアッ!!』

炎を纏った尻尾の一撃で、怪獣を大きく後退させる！

『さあーて、このままブレスで……』

『アオーン!!』

ブレスを吐こうとしたドラゴンを遮るように、その場に遠吠えが響く！

見れば、俺の足元にハティとスコルがやって来ていたのだ。

「貴方達！疲れていたのでは……」

『ワウ！（折角お兄さんが戻ってきたんだ！僕達もジツとなんてしてられないもん！）』

『ワン！（僕等も戦うよー！）』

そう高らかに二匹は吼えると、輝きを発しながらドラゴンに纏わりつく！

光が晴れると、ドラゴンの両翼に狼の顔が特徴のキャノン砲が装着されていた！

「おお、かつけー！」

『よおし相棒、魔力回せ！一気に決めようぜー!!』

『…フフ、これで俺もボンクラ共の仲間入りだ……笑えよ……ハハハッ』

……よし、行くぞ！

俺はドラゴンの背に乗り、背後に手を当てる。

魔力を流し込み、ドラゴンの口に膨大な熱が、フェンリルのキャノンに魔力がチャー

ジされていく。

「これでフィナーレだツ!! 消し飛ばえええ!!!!」

『燃えちまいな!!』

ドラゴンの炎と、フェンリル砲から放たれた魔力の奔流が、怪獣を塵一つ残さず消滅させた――

――

「……はあ」

怪獣が跡形もなく消し飛んだのを確認し終えると同時に、ドラゴンの姿も消えた。

ハティとスコルと共に、地面に着地して、地べたに座る。

「あー……疲れたあ」

『いや、相棒。もう終わったみたいだな空気醸し出してっけど』

分かってるよ、これからだろ？

「ちよつとはしやぎ過ぎたかな……」

「イツセー、朗報がある」

地べたに座る俺に、オーフェイスが近づいてきた。

何だ？

「グレートレッド、イツセーのオーラを回復してくれる」

「…マジで？」

「マジ」

グツと親指を上げるオフィスを見てから、グレートレッドを見上げる。

グレートレッドの目が俺を見つめたかと思うと、目が赤く輝き、赤いオーラが俺の中に流れ込んでくる。

おお、マジで回復してる！

『グレートレッドに気に入られたな、相棒』

「そりや光栄だ。ありがとな、グレートレッド！」

再び開いた次元の狭間への裂け目に入って行こうとするグレートレッドに礼を言う  
と、グレートレッドは何と俺の方へと振り向いてきた。

何だと思っていると、グレートレッドの口が開き——

『シャバドウビタッチヘンシーン、シャバドウビタッチヘンシーン』

……はっ？

「……………な、何でその呪文？」

『プリーズ。ルパッチマジックタツチゴ、チヨロイイネ。サイコー』

「いや、だから何で俺のドライバーの呪文なんだ!？」

『印象に残っているからじゃないのか?』

いや、印象に残る気持ちは分かるけど何でそれを今言うの!?!……………おい、グレートレッド!! 帰る前にその理由を言っていけ!!

だがグレートレッドはまた呪文を口ずさみながら、次元の狭間に返って行った……………。

「……………最強のドラゴンって、あんななの?」

『いや、俺もあんなだとは思わなかった』

「……………何か、余計に疲れた気が」

そう思っていると、ここからちよつと離れた方角から、懐かしい気を感じた。

——リアス達か。

「イツセー」

俺は立ち上がって向かおうとすると、グレイファイアが声を掛けてきた。

「この後処理は私達に任せて。……………気を付けてね」

「ああ。——じゃ、行ってくる」

俺がバイクに跨ると、オーフェイスが後ろに乗って来た。

「オーフェイス、ちゃんとしがみ付いとけよ」

「分かった」

「……………そう言えば、次元の狭間に帰らなくてよかったのか？」

「考え、変わった。イツセーのいる場所が、我のいる場所。そう考える事にした」

……………そっか。

「よしっ……………行くぜ！」

「おー」

待ってるよ、皆……………！

## MAGIC 148 『徹底抗戦』

木場 side

「首都で暴れまわっていた旧魔王派の残党を一通り屠ったところでな、遠目に黒いドラゴン——匙元士郎の姿が見えたのでな。助太刀させてもらったと言う訳だ」

そう言って、サイラオーグ・バアルはヘラクレスに視線を向ける。

ヘラクレスも彼からの戦意を受けて、嬉しそうに笑みを浮かべた。

「バアル家の次期当主か。知ってるぜ？滅びの魔力が特色の大王バアル家で、滅びを持たずに生まれた無能な次期当主。悪魔の癖に肉弾戦しか出来ないっていうじゃねえか。ハハハ、そんな訳の分からねえ悪魔なんざ初めて聞いたぜ！」

ヘラクレスがそう煽るも、サイラオーグ・バアルは微塵も表情を変えなかった。

この程度の戯言は、彼の半生から察するに幾重にも浴びた罵詈雑言の小さな一つに過ぎないのだろう。

「…英雄ヘラクレスの魂を引き継ぎし者」



「ああ、そうだぜバアルさん」

ヘラクレスの方にゆっくりと歩を進めながら、サイラオーグ・バアルは断ずる。

「———どうやら、俺は勘違いをしていたらしい。貴様のような弱小な輩が英雄の筈がない」

それを聞いて、ヘラクレスの額に青筋が浮かぶ。：今の一言で彼のプライドが沸き立っただろう。

「へっ、赤龍帝との殴打戦を繰り広げたらしいじゃねえか。だつせえな。悪魔つていや、魔力だろ。魔力での超常現象こそが悪魔だと言って良い。赤龍帝は魔力を持つてるつてのに、泥臭い殴り合いを演じやがってよ」

「……」

ヘラクレスの煽りが続く中でも、サイラオーグ氏の眉は一つも動かない。

「元祖ヘラクレスが倒したっていうネメアの獅子の神器を手に入れてるっていうじゃねえか。———皮肉だな、俺と会うなんてよ。それを使わなきゃ俺には勝てないぜ？」

「使わん」

「は？」

そう断じたサイラオーグ氏の発言に、更に青筋を浮かび上がらせるヘラクレス。

「貴様如きに獅子の衣は使わん、そう言っている。鼻貞目に見ずとも、貴様が赤龍帝よりも強いとは思えないからな」

サイラオーグ氏の発言に、ヘラクレスは哄笑を上げる。

「ハハハハ！俺の神器で爆破できないものはねえよ!!例え、あんたが闘気に包まれていたってなア!!俺の神器にかかれば造作もねえツ!!」

ヘラクレスが飛び出し、手に危険なオーラを纏わせると、サイラオーグ氏の両腕を掴んで——神器による爆破攻撃を始めた！

爆音と共にサイラオーグ氏の両腕が爆ぜる！

体の表面だけだけど、サイラオーグ氏にダメージを与えた！やはりヘラクレスの攻撃は侮りがたい！

「成程——こんなものか」

肉が爆ぜ、血が噴き出る程のダメージを負っても、彼は一切表情を変えなかった。

「へへへ、言ってくれるじゃねえか。じゃあ、これならどうよっ!？」

そのまま路面に向けて拳の連打を繰り返した瞬間、路面ごと大規模な爆破が起こり、サイラオーグ氏を包み込む！

二人が相対している路面はその一撃により完全に崩壊し、瓦礫の山となってしまった。

瓦礫の上でヘラクレスは再び哄笑を上げる。

「ハハハハハハツ!!ほら見たか!何も出来ずに散りやがった!これだから魔力もねえ悪魔は出来損ないってんだよ!たかが体術しか出来ねえ奴が——」

そう笑い声をあげていたヘラクレスの表情は、徐々に驚愕に染まっていき、やがて笑い声すらも出なくなつた。

煙が晴れた車道の中央で、その男は——何事もないように立っていた。

「——こんなものか?」

一切表情を変えず、微塵も揺るがない闘気を目の当たりにしたヘラクレスの表情には、軽い戦慄が走っていた。

「…舐めんじゃねえ、クソ悪魔がツ!!」

毒づいてはいるが、先程までの余裕にはどこか陰りが見える。そのヘラクレスへ、サイラオーグ氏はとうとう進撃を始める。

「英雄ヘラクレスの魂を引継ぎし人間と言うから、少しは期待したのだが……どうやら、俺の期待はことごとく裏切られたようだ」

ヘラクレスが再び両手を構えるが——サイラオーグ氏の姿が瞬時に消えた!

その一瞬の間に、サイラオーグ氏の姿は、ヘラクレスの正面にあつた。

あくまで正面から……!

「俺の番だ」

ドズンツ!!!

重く、低く、鋭い大王次期当主の拳打がヘラクレスの腹部に深々と突き刺さった。

その一撃から生じた衝撃は、ヘラクレスの体を通り抜けて後方のビルの壁を難なく破壊する。

「——ツ!!」

予想以上の破壊力だったのか、ヘラクレスは当惑した表情を浮かべて、苦悶に包まれていった。

膝を付いて、腹部を抑えるヘラクレス。その口からは血反吐が吐き出された。

…あの一撃を食らった事のある僕だから分かる。あれを生身で受けて無事な者はそういない。

たったの一撃で、形勢が逆転した……ロスヴァイセさんの絶大な魔法攻撃ですら、彼に致命傷を与えられなかったと言うのに、この男の一撃はそれを容易に破壊していく。

「どうした。今の一撃はただの拳打だ。お前が馬鹿にした赤龍帝はこれを食らっても一切怯む事無く、立ち向かってきたが？」

それを聞いたヘラクレスは、くぐもった声音で不気味な笑い声を発した——と同時に、激情に駆られた憤怒の形相で立ち上がった。

「……ふざけるな……ツ！ふざけるなよクソ悪魔如きがよオオオツ!!! 魔力もねえ！神器も使えねえ！ただの打撃でこの俺が——」

激昂するヘラクレスと共に、全身を光が覆っていき、次々とミサイルのような突起物が形成されていく！

「やられる訳ねえだろうがよオオオオオオオツ!!!」

怒号を上げながら、ヘラクレスは全身のミサイルを縦横無尽に射出していく！

自前の魔方陣で防御する僕等の目の前で、サイラオーグ氏は怯む事無く真つ直ぐに飛んでいく！

「ふんっ!!」

サイラオーグ氏は神器で生み出されたミサイルを、あろうことか拳だけで弾いて吹き飛ばしていく！

彼に向かっていくミサイルは、あらぬ方向へと飛んで行つては空しく散っていく。

だが、撃ち出されたミサイルの一つが、避難を始めていた子供達の元に飛来していく！不味い、あれが当たったら——！

だけど、その心配は杞憂に終わった。

ミサイルが迫る寸前に、ロスヴァイセさんが割って入ったのだ。

ロスヴァイセさんは前方に強力な防御魔方陣を展開させて、ミサイルの爆撃を完全に防ぎ切った！

京都では押されていたロスヴァイセさんの防御力が、増している！

「——新しい防御魔法です。私は『戦車』ですので、それならば特性：防御力を高めようと思ひまして。故郷で強力な防御魔法はあらかた覚えてきました。特性を生かしつつ魔法を使えば禁手化して破壊力に特化した神器の攻撃でも余裕で耐えられるようです。これは大きな成果ね。——ヘラクレス、貴方の攻撃はもう私には効きませんよ。この十倍の威力でも防ぎ切ってみせましょう!!」

あのヘラクレスの一撃を簡単に制したのなら、相当な向上があったのだろう……  
イツセー君、君がいない間に、グレモリー眷属はどんどんパワーアップして言うてるよ！

「……くっそがあッ!!」

怒りと屈辱で全身を震えさせるヘラクレスは、懐からピストル型の注射器を取り出した！

『魔人化』をする気か……!!

「……ッ！」

注射器の先端を首元に持っていくヘラクレスだが、その手つきには迷いが見受けられた。

——そんな時だった。

『……』

ヘラクレスの背後から、三つの獣の頭部を持つ怪物が姿を現した。

あれは…

「ガラム！」

「む？…奴がフアントムと言う魔物か」

僕は無言で頷く。ヘラクレスも、自分に歩み寄るガラムに気付いたようだ。

「てめえ、何の用だ…!？」

『…奴らに勝ちたいのであろう？ならば何故、己を強化しない？』

「つ……るせえ！テメエは引っ込んで——」

そう食って掛かったヘラクレスにガラムは手を翳す。

すると、ヘラクレスの胸部から怪しい光が溢れてくる！

「ぐ、がああああああああ……！！！！」

胸部から溢れる、人間である彼にある筈がない魔力が体を覆っていく。

魔力が全身に行き渡っていくにつれ、人らしい面影は見る見るうちに消え去って行き、魔力による浸食が終えた時——

『オオオオオオオツ……！！』

暗い緑色が特徴の、屈強な魔人がそこに立っていた。

「人間が、魔力を得たのか……？」

サイラオーグ氏も、目の前で起きた光景に目を疑っている様子だった。

その気持ちは分かる、僕も初めて目にした時は驚きに包まれたからね……。ガルムは特に何も言わず、ただ一言……。命じた。

『……行け』

その言葉に従うかのように、フアントムとなったヘラクレスは突起の生えた棍棒を振りかざして此方へと駆け出してくる！

『ウオオオオツ！！』

ヘラクレスが棍棒を振りかぶった瞬間、僕等目掛けて爆風が襲い掛かった！

「ぬっ！」



『オオツ!!』

「サイラオーグさん!!」

爆風を気にも留めずサイラオーグ氏に突っ込んで殴りかかるのを見て、僕はすかさず魔方阵でヘラクレスを拘束……したが、ヘラクレスは強引に拘束を引き千切った!

「つ……ハアアツ!!」

『ゴアアッ!!』

ヘラクレスの攻撃が決まるより早く、サイラオーグ氏の拳がヘラクレスを吹き飛ばした――

『ツ!!』

「!」

つ、押し留まった!?

さつきとは耐久力が全然違う!!

「先程とはまるで違う……これが異形になったが故の力か!」

『オオオオオー……ツ!!』

「!」

ヘラクレスは咆哮を上げ、全身から棘のようなミサイルを撃ち放った!

直ぐにそれを聖魔剣で撃ち落としとしていく中——何処からか飛んできた魔力の弾丸がミサイルの半数を破壊した！

『！』

「一体誰が……」

魔力弾が飛んできた方角を見るとそこには……

「よお、大食い野郎」

「立神君！」

イツセー君のライバルこと、立神君がそこに立っていた。

『…アーキタイプか。何の用だ』

「何の用……知ってるだろ？ テメエ等を喰いに来たんだよ」

《ドライバーオン！》

立神君は怒りを感じさせる声音でそう呟くと、ベルトを展開、指輪を嵌めた手を天に掲げる。

「変、身っ!!」

《セット！オープン！L・I・O・N！ライオン！》

『グガアッ!!』

迫りくるヘラクレスを魔方陣が弾き、立神君はビーストに変身！

ベルトから細身のサーベルを引き抜くと、果敢にヘラクレスへと斬りかかる！

「はっ、おりゃー！」

『オオオーー！！』

「うおっとー！」

「ッー！」

立神君が後ろへと飛んだ瞬間に、ヘラクレスが飛び込んだ位置に聖魔剣を咲かせ、ヘラクレスを突き刺す！

ヘラクレスは一瞬怯むが、それすら構わずに此方へと突っ込んでくる！

「ぬんっ…！！」

『——ッ！！』

ヘラクレスの懐に現れたサイラオグ氏の拳がヘラクレスを吹き飛ばした！

「木場！」

「ああー！」

あれほど暴走した状態だ、これだけで終わる筈はない！

立ち上がったヘラクレスの頭上に聖魔剣を大量に生成、容赦なく降らせる！

『ウウ……ガアアアアッ！！』

対するヘラクレスはミサイルを全身から射出、全てを撃ち落とす事は出来なかったようだ

ヘラクレスの体には幾重もの切り傷が生まれていた。

『オオアアー……ッ!!』

「ただだけタフなんだよ!? 終わりが見えねえぞ!!」

立神君がそう評した通り、ヘラクレスはどれだけダメージを負おうとも全く倒れる気配がない!

まるで神話に登場する狂戦士の様だ……!

『ソイツを止めるには中央部の魔法石を砕くしかない。若しくは……私を倒すか。ソイツを制御するのは私だからな』

「……止める方法を教えるのか?」

何で此奴がそれを僕達に……けど、このままヘラクレスを暴れさせるわけにはいかない!  
い!

「落とさせてもらおうッ!!」

『ゴアアッ!!』

サイラオーグ氏の拳のラッシュを受けても尚、ヘラクレスは倒れる気配がない!

ヘラクレスは受け身を取りつつ立ち上がり……その視線を、子供達へと向けた。

『ヴウウ……アアツ!!!』

そしてヘラクレスはあろう事か、子供達の方へと走っていく!

「やらせるかつ!?!」

『……』

ヘラクレスを止めようとした僕の四肢が、一瞬の間に石化した……ガラムか!

僕が視線を向けた先には、サイラオーグ氏に爪を突き立てつつ瞳を妖しく輝かせるガラムの姿が……!

「やらせるかつての!」

立神君が寸での所で間に合い、ヘラクレスを蹴り飛ばす!

そして時を同じくして、サイラオーグ氏の拳がガラムを後退させたところだった!

「大丈夫ですか!」

「ああ、問題ない……む?」

一息ついたサイラオーグ氏のや僕の耳に、とある歓声が届いてきた。

「ライオンさん! 頑張つてー!!」

「負けるなー、ダークネス・ナイトシユガー!!」

「マヨライオン!!」

……僕達を応援する、子供達の声だ。

「[[……………]]」

思わずキョトンとする僕達……………でも、不思議と体に活力が漲ってくるのを感じた。

「…フハハハハ！成程、これが子供達の応援と言うものか！これは……………良いものだな！」

「はい！」

「あのー…マヨライオンって、俺の事か？いや、まあ良いけどよ……………けど、不思議と負ける気がしねえぜ!!」

マヨライオン……………雑誌に載っていた新しいウイザードラゴンの仲間の事だ。

マヨネーズ好きの立神君としては願ってもない名前だね……………本人は微妙そうだけど。

「よっしや行くぜえ!!」

《ハイパー・ゴー！ハイツ・ハイツ・ハイツ・ハイツ・ハイパー！》

立神君も威勢よく吠えたて、パワーアップする！

それを見ていたガルムは、目を妖しく輝かせる……………ヘラクレスを操るつもりか！  
だが……………

『……………ッ！』

ヘラクレスは、動かなかった。

いや、これは……………

「奴の支配に抗っているのか……」

そう、サイラオーグ氏の言う通り、ヘラクレスはガルムの命令に抵抗している様子だった。

……この瞬間に、自分の意志を取り戻したと言うのか？

『チツ、まだ制御に関しては甘い部分があるか。……まあ良い』

ガルムはそう吐き捨てる、虚空へと姿を消した……今なら、ヘラクレスを倒せるかもしれない！

「サイラオーグさん、立神君！」

「ああ!!」

「皆まで言うなって!!」

《ハイパー!!》

立神君は銃に指輪を嵌めて、銃身に魔力を集中させ、サイラオーグ氏は拳に闘気を集中させる！

そして僕も、赤紫の魔力を右足に集約させる！

「——これでっ！」

《マグナムストライク!》

魔力で形作られた獣がヘラクレスを貫き、間を置かず僕の飛び蹴りが命中——そ

して、

「フィニッシュエンドだツ!!!」

鬨気の獅子が、暴走する狂戦士を食らい、飲み込んだのだった——。

「子供達の声援すら貰えない奴等が、英雄を名乗るな……!!」

既に彼の耳には、届いていないのかもしてないけど……僕達はそう言い放つのだつた。

——

「後は……その眼鏡野郎だけか」

僕達がヘラクレスを倒し、朱乃さん達がジャンヌを戦っているの——立神君の言う通り、残る相手はゲオルクだけだ。

「…強い、これが現若手悪魔か。バアルのサイラオーグ、古の魔法使い、立神吼介。そしてリアス・グレモリー率いるグレモリー眷属。まさか、先日越しだと言うのに力を更に増してくるとは……。この調子では、そちらの猫又やヴァンパイア燃えている情報通り



にはいかないな」

グリゴリに言っていたギヤスパ―君は兎も角、小猫ちゃんに関してはこれからだろう。

話を聞く限りでは、お姉さんの黒歌から仙術と妖術を習うそうだ。…イツセー君の陰で、少しではあるが歩み寄る事が出来た実の姉から教わるのだ、得られるものは大きいだろう。

ゲオルクに視線を向けられていたギヤスパ―君は……何故か顔を青ざめさせていた。

「…ギヤスパ―、どうしたの？」

ギヤスパ―君の変化に気付いた部長は怪訝そうにしていたが、ギヤスパ―君は次第に表情を崩していき……そしてぼろぼろと涙を流し始めた。

どうしたんだ、ギヤスパ―君……？

「…すみません、皆さん……僕……僕……グリゴリの研究施設に行っても……強くなれなかつたんです！」

——つ！

ギヤスパ―君のその告白に、この場にいる全員が驚いた！

「皆さんのお役に立ちたかつたから……強くなりたかつたのに！……今のままではこれ

以上、強くなれないってグリゴリの方に言われて……っ!」

……今のままででは？僕はその言葉に、違和感を覚えた。

その言葉を信じるなら、何か他に別の要因が必要なのか……？

そう思っていた僕の眼前で、ゲオルクはつまらなさそうに息を吐いた。

「亡き赤龍帝もこの後輩の情けない姿を見たら浮かばれないだろうな」

その一言を聞いたギヤスパ―君は――顔だけをあげた。

「……亡き……赤龍帝……？」

ギヤスパ―君は周囲を見渡す……そうだった、ギヤスパ―君だけイツセー君がいない理由を知らないんだ。

「……部長、イツセー先輩は？……先輩は、あの大きな怪物を止めに言ってるからじゃないんですか……？」

「ギヤスパ―、イツセーはね――」

言いかけた部長は、サイラオーグ氏の視線を受けて口を噤んだ。

お二人は、一体何を……？

「そうか。君は知らなかったのか。赤龍帝は現在、行方不明になっているんだよ。この数日、彼の気配を感じとることが出来ない上に彼の姿を誰も確認していない。話に聞けば赤龍帝が最後に戦った旧魔王シャルバはサマエルの血を所持していたという。そう

なれば赤龍帝がどうなったのか、何となくの予想はつくだろう？彼はサマエルの呪いを受けて死んだ……如何にサマエルの呪いを一度は耐えた彼でも、二度目はなかったと言う事だ」

…英雄派の中では、どうやらイツセー君は死んだと言う事らしい。

僕達はイツセー君の生存を信じている……だけど、確固たる証拠はない。

白い魔法使いの言う通り、希望的観測は持たない方が良いのかもしれない……でも、例えわずかな可能性でも、僕達は信じ続ける。

それをギヤスパー君に伝えないと言う事は……

「おい……もしかして」

立神君も、どうやらサイラオーグ氏が目論んでいる事を察したようだ。

そして当のギヤスパー君は、見る見るうちに顔を絶望に覆わせていく。

「……イツセー先輩が、死んだ……？」

呆然とするギヤスパー君の頬を、一筋の涙が伝い、全身を震わせて顔を伏せる。ただどギヤスパー君は、徐々に体を上げ、伏せた顔をも上げた。

「……ッ」

僕は思わず、息を呑んだ……ギヤスパー君の表情には、感情が籠っていないかった。

その瞬間、ぞくりと僕の背を悪寒が走った。

《——死ね》

ギヤスパ―君の口から発せられたのは、彼のものとは思えないほど低く、呪詛に満ちた声だった。

その瞬間——全てが黒く染まった。

いや、黒ではない。それを遥かに通り越した暗黒と言える空間。

暗く、冷たく、光すら消滅してしまうほどの闇。

闇がこの区域全てを包み込んだのだ。

ギヤスパ―君の体から暗黒が滲み出ていき、周囲を黒く染めていく——

「何だこれは……!? 暴走ツ…禁手……いや違う! これは、ヴァンパイアの力なのか……!? だがこれは、あまりにも異常すぎるツ!!」

この現象を目の当たりにしたゲオルクは、ただただ驚くばかりであった……それは僕達も同じだ。

禁手や、極手とも違う……何なんだ、この空間はツ!

暗黒の領域と化した中央でより一層闇に包まれた人型が異様な動きを見せる。

首をあらぬ方向に折り曲げ、肩を痙攣させ、足を引きずりながらゲオルクとの間合いを詰めていく。

その双眸は赤く赤く、闇の中でも不気味に輝いていた……。

《コロシテヤル……！オマエラ全員、僕がコロシツクシテヤル……！》

発せられる声は既にギヤスパ―君とは別物。呪詛、怨念、あらゆる負の感情が込められた、聞くだけで力を持つ危険な系統の声。

それを見たサイラオーグ氏も、予想外だったのか眼を見開いていた。

「……赤龍帝の死と言うきっかけを与えれば化けると踏んではいたが……どうやらギヤスパ―・ヴラディの中に秘められていたものは、俺達の想像を遥かに超えていた。……これは、バケモノの類だ。……リアス、お前は一体何を眷属にした……？」

「……ヴァンパイアの名門ヴラディ家がギヤスパ―を蔑ろにしていたのは……停止の邪眼ではなく、これを知っていたから……？恐怖から……白と離れさせた……？」

部長が声を震わせながらそう漏らしていた。

僕達の眼前で黒い化身となったギヤスパ―君が手を……いや、手らしきものを突き出した。

ゲオルクがすぐに反応して魔法陣を展開するが——その魔法陣は発動する前に闇に食われていった。

「ッ!? 魔法でも神器の力でもない! なんだ、この力は!? どうやって我が魔法を打ち消した!」

思わぬ行動に驚愕するゲオルクを尻目に、ギヤスパ―君の赤い眼が煌めくと同時に、部長の懐が輝いた。

「…イツセーの、指輪……?」

部長が取り出したのは、イツセー君の指輪だった。

ギヤスパ―君の力と共鳴している? ……いや、これはっ

「っ!」

ゲオルクの足元から、黒い炎が放出され、彼の両足を焼き尽くす!

痛みから膝を付くゲオルクは、それでも反撃しようと無数の魔方陣を展開するが――

――その魔方陣は闇に食われてしまった。

「ッ!? 魔法でも神器の力でもない! なんだ、この力は!? どうやって我が魔法を打ち消した!」

ゲオルクはそう叫びながら距離を取ると、無数の攻撃魔法陣を展開した!

そこからありとあらゆる属性の魔法フルバーストがギヤスパ―君に放たれる!

が――

「…ッ!？」

それらは全て、黒い旋風に飲まれて消え去った。

闇の旋風が蠢く中、それでもゲオルクは霧を発生させ抗おうとするが——だが、その霧さえも闇に食われていった。

《喰う……喰ってヤツタ……オマエの霧も魔法も……全て喰ってヤツタぞ……》

そうけたけたと笑うギヤスパ―君は、僕達の知っているギヤスパ―君とは全く違っていた。

これが…ギヤスパ―君の秘められた力だと言うのか?!

戦慄するゲオルクの周囲に変化が訪れる。闇が蠢き、獣のようなものが形作られていく。

それは狼、巨鳥、ドラゴンと様々であるが……眼が一つであったり、足が十本以上あったりとどれもまともな形をしていない。

闇の獣……そして、一際巨大な闇のドラゴンがゲオルクを囲う。

「チツ、一旦引くしかないか……ッ!？」

ゲオルクは形勢を不利だと判断し、転移用の魔方陣を足元に出現させた……その瞬間、黒い炎が彼に絡み付いた。

「っ、これは……!」

「…逃がすかよ……。ここまで好き勝手しておいて、おめおめと逃げれると思ってん  
じゃねえ…ツ!!」

……匙君!

「ヴリトラの、呪いか…ツ!!」

黒い龍王の炎に縛られた彼を、闇の獣が飲み込んでいった——



## MAGIC 149 『希望よ来たれ』

闇が晴れて元の風景——首都リリスに戻った時、ギヤスパ―君は路面に横たわっていた。

ゲオルクの姿は見えない……闇に食われてしまったのだろうか。

僕達が歩み寄ってみると、ギヤスパ―君は安らかに寝息を立てていた。…恐らくは力を一気に出し切ったが故だろう。

部長はギヤスパ―君を抱き寄せて髪をそつと撫でる。

「…この子について、ヴァンパイアに聞かなくちやならない事が色々できたわね。けれど、ただでさえ吸血鬼は悪魔を嫌う。ヴラデイ家が私の質問に答えてくれるかは分からないけど……」

吸血鬼は悪魔以上に階級重視の社会だ、言うなれば仲間を思いやれるものが皆無に等しい程に、純潔とそれ以外を完全に区別している。

現悪魔の様に元人間にチャンスを与えるような事も決してない。

「そう言えば、ヴァルハラに戻った時に興味深い話が聞きました。——何でもとあ

る吸血鬼の名家が神滅具所有者を保有した事で、吸血鬼同士の諍いが勃発してしまったと」

吸血鬼の世界では、そんな事が起こっているのか。

向こうは未だに悪魔や他勢力と交渉すらしない程に排他的で閉鎖された世界だ。その彼等が、神滅具所有者を得た……？

冥界の危機の裏で、一筋縄ではいかなさそうな事が多々起きているようだ。

「…それもそうですが、今はこの状況の打破が最優先事項かと」

「それもそうだな……む？」

目を覚ましたソーナ会長の言葉に同意したサイラオーグ氏だったが、何かの気配を感じ取ったのか、背後へと視線を向けた。

つられて振り返ると、見知った気配がやって来た。

「あらら、ヘラクレスとゲオルクもやられちゃったんだ……これはヤバいわね」

—— ジャンヌ！

その場に現れた彼女は全身に傷を負っており、満身創痍の様子だった。

だけど小脇に何かを抱えていた——よく見れば、その正体は小さい男の子だ！

「待て、ジャンヌ！」

「卑怯よ、子供を人質に取るなんて！」

「……やられましたわね。まさか、あんなところに逃げ遅れた親子連れがいたなんて」

後からやって来たゼノヴィア、イリナさん、朱乃さんが苦渋に満ちた表情で合流する。

「まさかあの女、子供を盾にしゃがったのか？」

恐らくは、立神君の言う通りだろう。

相対するジャンヌは、聖剣の切っ先を子供の首元に突き立てていた。

「卑怯だな」

「貴方達悪魔がそれを言うのかしら？まあそれはそうとして——曹操を呼ばせてもらうわ。貴方達、強すぎるのよ。私が逃げの一手になるなんてね。つてな訳で、この子は曹操がここに来るまでの人質に——」

そうジャンヌが言い切る寸前——空に赤い光が差した。

「つ、これは……」

ジャンヌにつられて仰ぎ見た空には、僅かな轟音と共に赤い光がキラキラと輝いていた。

「——ウィザードラゴンだ!!」

呆然とする僕達の耳に届いたのは、ジャンヌの人質となつている男の子の声だった。

その声音には、一切の怯えも見られない。

「ふふふ、残念ねボク。ウィザードラゴンはもう死んじやったのよ。お姉さんのお友達がね、倒してしまつたの」

「ううん、ウィザードラゴンはきてくれるよ。……ほら！きこえてくるもん!!」  
聞こえてくる……?」

……ウんツ!

その時、僕達の耳に、小さなエンジン音が遠方から入ってきた。

「ゆめのなかでね、ウィザードラゴンが、きてくれるってやくそくしてくれたんだ。ぜつたいにいくから、それまでがんばってこれて!ぼくたちががんばったら、それがウィザードラゴンのちからになるんだって!」

男の子が楽しげに語るたびに、その音は徐々に近づいてくる……そして同じく、見知った気配が近づいてくるのも。

…ギヤスパ―君の変化で気づくのが遅れたけど、さっきの光の正体も、やつぱり君だつたんだね!

ヴウンツ!!!

—— イッセー君！

僕達の視線の上を飛ぶように、その場に一台のバイクが飛び込んできた！  
そしてそのまま着地したバイクの運転手は、僕達とジャンヌの間にバイクを止める。

「—— おいおい、ちょっと見ない間に随分悪役チックになったな。木場」  
運転手はヘルメット越しに暢気に笑いながら僕に話しかけ、そのヘルメットを脱いだ。

「まあ、割と元気そうで何よりだけども……よっ」

そこには変わらない—— ちよつと痩せた、イッセー君の笑顔があった。

それを見た部長、アーシアさん、朱乃さん、小猫ちゃん達が駆け寄って一誠に抱き着いた！

「……よく、帰ってきたわねっ」

「イツセーさん！……イツセーさんイツセーさんイツセーさんイツセーさんつ!!」

「先輩……お帰りなさいっ!」

「…お願い、私を置いていかないで……っ。貴方のいない世界なんて、もうゴメンなのだから……!」

部長達は皆涙を流していた……うん、僕だって同じ気持ちだからね。

でも男の僕が一緒になって泣いたら、格好がつかないだろう?

「うんっ、私は泣いてないぞっ。私が選んだ、男は……死んでも死なないからなッ」

「何よ、泣いてるじゃない!私は無理せず泣くもんっ!うええええんっ!!」

涙ぐんでいるゼノヴィアは、何とか我慢しようとしていたが、ぼろぼろと涙が止まらない様子だった……あ、イツセー君に飛び込んでいった。

そしてイリナさん、子供みたいな泣き声だね……。

「あはは………心配かけてゴメンな、皆」

イツセー君は女性陣の頭を撫でてあげると、次に僕の方へと歩み寄ってくる。

「…随分パワーアップしてみたんだな」

「まだまだだよ。君の背中まで」

「そうか——ありがとなっ!?!」

そう僕に礼を言ったイツセー君の背中を、匙君が叩いた。

そんな匙君は、滂沱の涙を流していた。

「兵藤おおつ!!お前、お前つて奴はよおおお!!」

「おう、やつぱ生きてたか。ま、我がライバルとしちやここで死なれちや張り合いがないからな!」

「うむ。お前は簡単には死なん男だと思つていた。……よく無事で帰つてきたな」

立神君とサイラオーグ氏も、イツセー君の帰還を心から祝福していた。

「どもつす。………つて、今はそれどころじゃないか」

——つ、そうだ!

僕達は全員すぐさま臨戦態勢に戻る……まだジャンヌが人質を取つていたんだ!

「まさか生きてたなんてね、赤龍帝」

ジャンヌは僕達、と言うよりはイツセー君を睨み付ける。

「俺がいつ死んだつて言つたよ?それより、チビツ子返してもらうぜ。——聖女気取りの魔女さん」

イツセー君の軽口に、ジャンヌは顔に憤怒を浮かべる。

「……今、なんて言つた?」

「聞こえなかつたのか?聖女気取りの阿婆擦れつて言つたんだよ」

『いやいや相棒。ここは聖女気取りの娼婦の方が効率的に煽れるだろ』

『それなら単純に股の緩い売女で良いだろ』

イツセー君のみならず、ドライグ、ファントムのドラゴンまでそうジャンヌを煽り立てる！

その煽りに、ジャンヌはますます怒気を強める。

「さつきから黙って聞いてれば、随分好き勝手言ってくれるじゃない……良いわっ！  
だったらこの場で無様に——え？」

そう言つて聖剣をイツセー君に向けようとするよりも速く——イツセー君は人質の男の子を救出してしまった。

……速いっ！

「こんなんで怒ってるようじゃ、心理フェイズはまだまだつてとこだな。……大丈夫か、坊主」

「うん！ウイザードラゴンがたすけてくれるって、しんじてた!!」

「そっか。……良く頑張ったな」

イツセー君は男の子の頭を撫でて、僕達の方へと行くように言った。

「さてと、これで思う存分やれるな。……来いよ、聖女気取り」



「…殺すつ!!」

ジャンヌは激昂した表情で、フェニックスの涙を使って回復した後、ピストル型の注  
射器を首に刺した!

——魔人化だ!

「イツセー君、気を付けて!あれは神器能力を格段にパワーアップさせるものだ!」

僕が説明している間に、ジャンヌの体を幾重もの聖剣が覆っていく!

変化が終息するとそこにいたのは、聖剣で形作られた巨大な蛇だ。

『ふふふ、二度も使うと負担が大きいんだけど……これならば貴方にも追従できる!』

『おいおい、随分と物騒なラミアだな』

ドライブがそう評した通り、その蛇は頭の部分にジャンヌの上半身が露出していた—

——蛇のモンスター、ラミアそのものだ。

『さあ、無様に死になさいッ!!』

「」

《Blade!》

下半身をくねらせて、イツセー君へと迫るジャンヌ!

それと同時に無数の聖剣がイツセー君へと襲い掛かって行った!

対するイツセー君は籠手からアスカロンを取り出すと——鎧も纏わずにジャン

又へと駆け出した！

『聖女擬き。お前は少し勘違いをしている。そんな程度のパワーアップじゃあ……』

ザンツ!!

ジャンヌが聖剣を突き立てた、イツセー君が立っていた場所には誰もおらず、肝心のイツセー君はジャンヌの背後にいた。

そして——ジャンヌを覆っていた聖剣の鱗が、音を立てて崩れ落ちた！

『ツ!?!』

ジャンヌは自分に起こった異常を、飲み込めていない様子だった。

イツセー君は今、攻撃をしたのか……だけど、

『見え、なかつ……!?!』

そう、ジャンヌの評した通り——見えなかったのだ。

予想だにしない展開に僕達まで固まっている間に、ドライグの声がその場に響いた。

『今の相棒には勝てないぞ』

『ツ……!?!』

ジャンヌは、声を上げる事無くその場に倒れ伏した。

……間違いない。イツセー君は、疑似空間で戦った時よりも——強くなっている。

今の戦闘で、一瞬の決着で、僕はそれを確信した。

当のイツセー君は、首を捻りながら、僕達とは別の方を振り向いた。

「いい加減かくれんぼは止めにしねーか？ さっさと出て来いよ……曹操」

イツセー君の発言に、僕達は耳を疑う。

だけど、その返事はすぐに返ってきたのだ。

「——強者を引き寄せる力も、ここまで来ると恐ろしいね」

英雄派のリーダー、曹操がその姿を現したのだった。

## MAGIC150 『極の白龍』

久しぶりの俺視点だぜ！……とお気楽に始められそうもないんだなあこれが。

今俺がいるのはさつきまででつかいバケモンが跋扈してた冥界、しかもその首都。

そして次元の狭間から帰ってきて掃討して皆の元に行ったらあら不思議！

木場は何か魔王チックな姿になってるし、ギヤスパーな何でか寝てるし、しかも俺の目の前にはこの事件の首謀者？…あの魔獣創ったのはシャルバだけど、もういないしこの際全部こいつのせいにしちやおう！

———そう、英雄派のリーダー、曹操だ。

「…僅かな間で超えられたというのか。異常なるは、グレモリー眷属の成長率……。ヘラクレスは兎も角、『魔人化』を使ったジャンヌ、ジークフリートまでもがやられたとは……ジャンヌは二度使ったから、その弊害も考えうるが……どうやらゲオルクもやられたみたいだな」

…仲間の心配よりも、仲間がやられた原因を模索してやがる。

まあ、らしいっちゃらしいか。

曹操の目線が俺の方へと向けられる。……けどそこにあるのは興味の色ではなく、異質なものを見ている、そんな胸糞悪い眼付きだ。

「…兵藤一誠。まさか生きていたとはね」

「誰も死んだ、なんて一言も言ってるよ」

「シャルバはサマエルの血を所持していたと聞いていた。しかも君はサマエル本体の呪いを受けて間を置かない時間でそれを受けた……なら如何に君と言えど死んだっておかしくない。ヴァーリでも十回は死んでいる密度の濃さだ」

確かに食らったな、俺も生きてたなんて予想もつかなかったけど。

とは言え気絶つても楽しじゃないんだぜ？何せ頭はいてーし、関節もあちこち錆びついたのかってぐらいロクに動かなかったもんさ。

……そこで俺のバイクに乗って推移を見守っている龍神様の組手で嫌でも体は動くようになっただけ。

思い返し見ると俺何で生きてんだ？って気持ちになるよな……とまあ、そんな俺の心情を知る由もない曹操は、信じられないって顔になっていた。

「どうした？随分驚いてるじゃん」

「驚かずにいられると思うか……？って言うかサマエルの呪いを受けて無事なこと自体イレギュラーなのだぞ？しかもグレートレッドと共に帰還する……グレートレッド

と会うだけでも、偶然では済ませられないんだぞ……!!」

「知るかよ、そんなもん。……ま、その運のお陰で、俺は今ここにいます。お前達を倒す為にな」

俺がそう言ったと同時に、視界の隅から変な波動が発生した!

黒い靄のような歪みから現れたのは、装飾が施されたローブに、悪趣味な道化師みたいな仮面をつけた奴——確か、

「……ブルース?」

《ブルートですつ!!》

そう、それだ。

突然の乱入者に突っ込まれるというお茶目な一幕もあつたけど、何でこんなところに死神が?

「ブルート、何故あなたがここに?」

《…ハーデス様のご命令です。もしオフィスが出現したら、何が何でも奪取して来いと》

……んだと。

「テメエのとこの薄ら禿骸骨はとことんまで欲しがりさんだなオイ」

《…何ですつて?》

俺がハーデスの事をそう言うのと、プルートの濃い殺気を俺へと向けてくれる。

「…これ以上俺のダチに手え出してみろ。…お前んとこの神様でも容赦しねえ」

プルートも俺の殺気を受けて、臨戦態勢をとるが――

「それはいけないな。兵藤一誠、悪いがプルートの相手は譲ってもらおう」

空から聞き覚えのある声と共に、俺とプルートの間にまたまた乱入者が入ってきた。

「ふむ、元氣そうで何よりだよ」

「まあな――つてか、お前に貸したエロゲを返してもらうまで死ぬるか。ヴァーリ」

乱入者――ヴァーリは俺を見て不敵に微笑んだ。

「ああ、それに関しては少し待つてほしい。今はカイトがプレイ中でね」

「又貸しかよ！つてかお前ら仲間内でエロゲ貸し合うなよ!!しかも俺のだろそれ!!」

「まあまあ気にするな」

「借りてる奴の台詞かそれが!!」

しまった、またシリアスブレイクしちゃった！

見ろ、プルートの奴ポカーンとしてるぞ！

「ま、冗談はさておき…」

「さっさと返せ!!」

「その内な……ゲフン。あのホテルの疑似空間でやられた分を何処かにぶつけたくてな。ハーデスカ、英雄派か、どちらにするか悩んだんだが、ハーデスはアザゼルと美猴達に任せ、英雄派は出てくるのを待っていたらグレモリー眷属がやってしまったからね。……つまり、俺の内に溜まったものを吐き出させるのはお前だけなんだよ、プル―ト」

…あー、ポーカーフェイスだけど、こいつ結構怒ってるな。

フラストレーション溜まりに溜まってるところを見るに、暴れられなかったのがそんなにムカついてたんだな。

《ハーデス様の元にフェンリルを送ったそうですね。神をも殺せるあの牙は神にとっても脅威です。――忌々しい牽制を》

「いざという時の為に得たフェンリルだ。ここで使わずして何時使えと？」

《よくもほごく。各勢力の神との戦いを念頭に置いての考えでしょうに》

「フェンリル以上の交渉材料はないだろう？」

《…まあ良いでしょう。しかし、真なる魔王ルシファアの血を受け継ぎ、なおかつ白龍皇であるあなたと対峙するとは……長く生きると何が起こるか分からないものです。あなたを倒せば、私の魂は至高の輝きに達する事が出来ましょう》

…応じた。ドライブ、どっちが勝つと思う？



『さあな。あの小僧、まだ切っていない札があるだろう？それがどんな代物か分からん以上、何も言えんな』

「…兵藤一誠は天龍と同調し覇龍を進化させたが、俺は違う」

その言葉と共に、ヴァーリーの体を特大のオーラが覆った！

「——歴代所有者の意識を完全に封じた覇龍のもう一つの姿、見せてやろう」

ドウツ!!!

光翼が広がり、魔力が大量に放出されていく。

純白の鎧が神々しい光に包まれ、各部位にある宝玉からは——

「我、目覚めるは——律の絶対を闇に墮とす白龍皇なり」

「っ、これは……」

俺の宝玉がその輝きに共鳴したのか、歴代の白龍皇の意識が流れ込んでくる。

『極めるは、天龍の高み！』

『往くは、白龍の霸道なりっ！』

『我等は、無限を制して夢幻をも喰らう!!』

その声からは恨みや妬みを感じない、その代わりに——圧倒的なまでの、純粹な



これが、俺のライバル——ヴァーリ・ルシファー……。

「——『白銀の極 覇 龍』。覇龍とは似ているようで違う、俺だけの強化形

態。この力、とくとその身に刻めっ!!」

《——面白いっ!!》

ヴァーリのその姿に、怯む事無くプルートを跳躍!

残像を生み出すほどの高速移動を駆使しつつ、赤い刀身の大鎌を振るうが——

バリントッ!

俺達の眼前で、鎌の刃が呆気なく砕かれたのだ。

特に何の力も込めていないであろう、ただの拳でだ。

《ツ——》

「フンツ!!」

驚愕するプルートに構わず、ヴァーリはアッパーでプルートを上空へと浮かせた!

激しい打撃音と共に空中へと投げ出されるプルートへ向けて、ヴァーリは空いた右手を上げ、開いた手を握った。

「——圧縮しろ」



てかそう思いたい。

なんちゅー進化してんだ、コイツは……！

「……恐ろしいな、二天龍は」

曹操は近付きながらそう評した。

「ヴァーリ、あの空間で君に覇龍を使わせなかったのは正解だったらしい」

「…覇龍は破壊という一点に優れているが、命の危険と暴走が隣り合わせ。今俺が見せた形態はその危険性を出来るだけ省いたものだ。しかも覇龍とは違って、伸びしろがある。……曹操、仕留めれるときに俺を仕留めなかったのが、お前の最大の失点だな」

ヴァーリにそう言われた曹操は、無言だ。

そして程無くしてその視線はまた俺へと向かった。

「一つ確認したい……兵藤一誠、君は何者だ？」

は？

……何を聞きやがるんだ此奴は。しかもお前が首を捻るなよ、それは俺がしたいわ。

「やはりどう考えてもおかしいんだよ。今の君は天龍どころではない、だけど真龍、龍神とも違う。君は一体何なんだ？何者なんだ？」

「……さあな。俺は俺だし、何者かって聞かれても、そうとしか言えねえ。まああれだ。難しいこと考えずに、俺は皆のヒーローってやつ……それでいんじゃないやね？」

曹操は間の抜けた表情となるが、直ぐに苦笑いを浮かべた。

「…成程、そちらの方が分かりやすい」

どうやら納得はいったらしい、曹操は聖槍の切っ先を俺達へと向ける。

「さて、どうしようか。俺と遊んでくれるのは兵藤一誠か、それとも——」

「冗談言うなよ。お前と遊ぶのは、俺だ」

俺は曹操の前に立つ。……悪いけど、こいつとは俺が決着をつける。

曹操は、俺の獲物だ。

そう思った俺の元に、ヴァーリが歩み寄ってきた。

何だと思っていると、小さい声で聞いてこんな事を訊いてきた。

「奴の七宝、四つまでは知っているな？」

「…ああ。女の異能封じと武器破壊、それに攻撃の転移と、相手の位置移動だったっけ」

女の異能封じは使えないから、後の六つに警戒すればいい。

「他の三つは、飛行能力の付随と分身生成、最後は破壊力重視の球体だ」

「ほおほお。良い情報収集になった、サンキューな」

ま、後は俺次第って事だな。

「君が自ら相手を務めるとはね」

「言つたら。あの時後悔させてやるって」

借りは返さなきゃ気が済まないんでね——だけど、その前に重要な事がある。

「けど、ちよつと待ってくれや」

「ん？」

「お前との戦いの前に、どうしてもしなきゃならない事がある」

《コネクト・プリーズ》

俺は魔方阵からとある物を取り出す、それは小さな紙袋。

その袋には——はんぐりく、と書かれていた。

俺が中から取り出したのは、プレーンシユガー。

「まずは腹ごしらえだ」

「……は？」

曹操はポカンとして俺を見つめていたが、俺は構わずにプレーンシユガーを頬張る。

「んく、やつぱこの味だなあ！」

「…イツセー君、どういう事？」

「ああ、俺ここに戻ってきてから、って言うかずつと何も食べてないんだよ」

だから腹減っててな……いやあ、何時腹が鳴るか冷や冷やしてたよ。

流石にそこまでシリアスブレイクしちゃう味いしな！

『もう手遅れだろ』

「シャラップ！………うん、ごっつあん!!」

二個ぐらい食べて、俺は口に付いた砂糖を舐め取る。

「待たせたな曹操！いよいよ決着の時だ———ドライグツ!!」

『応っ!!』

俺は左手を掲げ、希望の詠唱を紡いだ。

「『我ら、目覚めるは！覇の理を超越せし赤龍帝なり!!』」

『赤き不滅の力と！』「決して折れぬ信念抱き！」

「『天道を征く!!』」

「『我ら、古からの力と信念受け継ぎし龍の戦士となりて———汝の絶望を払い、永久の希望となる事を誓おう!!!』」

《Infinity Hope Dragon Evolution Drive》

瞬間、俺の周囲は白銀に包まれ、無限『女王』形態に移行する！

!!!!!!



「オーフィスとの組手のお陰か、鎧はこの間以上の輝きを放つ！」  
『さあ、シヨータムだツ!!!』

## MAGIC151 『英雄とヒーロー』

「『さあ、ショータムだッ!!』」

イツセーはそう力強く言い切ると、スラストアを吹かして曹操へと一直線に迫る。拳を突き出して突進してくるイツセーを、曹操は聖槍の柄で受け止める。

「随分と性急だね……そんなにガツつかれると、嫌われるよっ!」

「『ッ!』」

曹操はニヤリと笑みを浮かべて、聖槍全体から光のオーラを発する。

イツセーがそれに反応して距離を取ったのを確認すると、曹操は目を瞑り、力強い言葉紡いだ。

「バランス・ブレイク  
禁手化」

その瞬間、弾けるように曹操の周囲に光が放出される。……静かな変化、だがそれ以上のプレッシャーが、その場を支配していた。

「……つきり俺が禁手を使う前に叩くんだと思っていたんだが」

『そんな味のない真似するかよ。倒すつてなりや、全力のお前を倒してこそ、だッ!!』  
 《Blade!!》

籠手からアスカロンの刃を露出させ、イツセーはすぐさま曹操へと接近する。

曹操はそれに対応しようと七つの球、七宝を動かすが、ここで曹操は目を疑う光景を目にした。

眼前に迫るイツセーへと向けた球体は破壊力重視の球体、それを使いイツセーを迎撃しようとしたが——当たる寸前、イツセーの姿が消えたのだ。

「ッ………ぐっ!?!」

驚き、そしてすぐさま別の衝撃が自分へと降りかかってきた。

それを寸前、ギリギリで受け止めた曹操がそちらへ眼を向けるが、

『………いない、だど?』

そこには、誰もいなかった。

狐に包まれたような気分になる曹操に、再び幾重もの衝撃が襲い掛かってきた。

「———居士宝!」  
ガハハテラタナ

捌ききれない、直ぐにそれを察した曹操は自分の分身を生成し、攻撃を相殺させる。

だがその攻撃が止んだと思えば、直ぐに分身体がかき消されていった。

「どういふ……ッ!？」

何が起こっているのか全く分からないでいる曹操の目の端に、キラキラと光る粒子が映った。——その瞬間、自分の眼前には煌めく鎧が。

「ッ!!」

イツセーの攻撃を弾いて、返す形で槍の穂先を伸ばす曹操。

聖槍の先端は素早く伸縮し、移動しようとしたイツセーの鎧を抉った……筈だった。

確かに手応えを感じた先の一撃、しかも得物は悪魔が食らえば致命的な傷になる聖槍、だが曹操は拭い切れない違和感を感じていた。

「手応えはある……だが刺し貫いたとは思えない……ッ!？」

曹操の顔に焦りが見え始めて来た時、再び曹操の眼前には、自分へと迫るイツセーの姿が。

その鎧からは、煌めく粒子が溢れていた。

「そう言う事、かつ!!」

何かを察した曹操は迫る無数のドラゴンショットの目の前に、大きな渦を発生させる。

それはドラゴンショットを飲み込んだ後、イツセーの周囲へと転移されていた。

「『フッ!』」

だがイツセーは動じることなく背部の翼を展開、赤い発光体が翼の一枚一枚から離れると、それは薄い板のようなものになった。

赤く発光し、先端にはドラゴンの意匠が目を引くその物体はイツセーの周囲を旋回し、レーザーを放つ。

放たれたレーザーはドラゴンショットを撃ち抜き、それでもイツセーへと迫るドラゴンショットは、イツセー自身の機動力で巧みに躲けていく。

曹操はその合間に聖槍の波動を飛ばしてイツセーへと攻撃を仕掛けるが、それらは悉くイツセーが生み出す粒子を撃ち抜くだけに終わった。

イツセーがアスカロンから斬撃の波動を振るうと、曹操はテレポートするかのごとくそれを躲し、一瞬の間にイツセーの背後へ。

だがそれを呼んでいたイツセーは攻撃されるより早く背後を振り返り、アスカロンの刃で聖槍を受け止める。

互いの得物が金属音を奏でて交差する中、曹操はイツセーの動きの種明かしを披露した。

「驚いたよ！まさか質量を持った残像とはね……しかもそれを生み出せるだけの高速移動！君自身の魔力とその粒子が作用して、動く度にその残像を発生させていた訳だっ！！」

「お前にしちや、随分と気付くのが遅いんじゃないの?!」

そう、先程まで曹操が感じていた違和感の正体、それはイツセーが発生させていた残像だったのだ。

イツセーがこの姿で移動する際、背面の翼からは余剰エネルギーとして光る粒子が排出される。

それがイツセーが高速移動するたびに周囲に散布、更にはイツセー自身の魔力と干渉し合い、質量を持った残像と誤認させてしまうのだ。

曹操が決ったと思っていたのはその残像を貫いただけで、イツセー本体は無傷である。

「『まだまだ、お楽しみはこれからだっ!』」

イツセーは曹操から弾かれるようにして離れると、空中を宙がえりをする。

その動きに合わせるように、イツセーの翼から分離した発光体は、無数のレーザーを放つ。

「ちいっ!」

曹操は宙に浮かぶと、的確な槍捌きでそれ等を往なしていく。

その合間を縫うように迫るイツセー、それを察した曹操は自分の攻撃を転移させ、イツセーの背後へと移し替えた。

「『っお!!』」

それに気付いたイツセーは空中で一回転し、それを躲した……が、それでも少し被弾してしまった。

鎧が修復されるのを確認しつつ、迫るイツセー。

「おっ!!」

「『あぶねっ!!?』」

破壊力重視の球体を躲して、イツセーは曹操の顎下へと拳を潜り込ませる。

曹操はそれを身を引いて躲そうとしたが、イツセーは拳を出す事なく、腕を引っ込めてしまった。

「……っ!!」

素早く拳を引っ込めたイツセーは半身を回転し、今度はキックを繰り出す。

フェイントだと察した曹操は自分を転移させ、その場に分身体を配置してやり過ごした。

イツセーの蹴りが分身を打ち砕いたのを見て、曹操は苦笑いを浮かべる。

「全く、君と言いつヴァーリと言いつ力が出鱈目過ぎる!少しでも当たればアウトだって、再三申告しただろう!!」

「『んなもん俺が知るか!!』」

イツセーのツツコミに合わせるかのように、再びレーザーの雨霰が降り注ぐ。それを躲し続ける曹操だが、その間にもイツセーは次の準備に入っていた。

「魔龍進化！」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!》

砲門を増設した魔力特化形態を発現、すぐさま攻撃態勢に移る。!!!!!!

「それはマジでシャレにならないなあっ!!」

曹操は冷や汗を浮かべつつ幾多もの分身を生成し、自分の前方へと配置する。

やがてイツセーの砲門から魔力のフルバーストが放たれ、それは曹操の分身を一瞬で蒸発させた。

《Wizard Promotion!! Hurricane Dragon!!!!!!》

イツセーは再び魔龍進化を敢行。鎧がシャープな形状に変わると同時に、周囲を旋回していた発光体は鋭利な刃状の物体に変わった。

「…行けっ!!」

イツセーの号令と共に、無数の刃が一斉に曹操へと向かっていく。

地面や瓦礫を切り裂きながら迫るそれを、曹操は武器破壊の球体を差し向け、一群体を破壊する。

だがそれはすぐさまその場で再生成され、曹操の漢服に無数の切り傷を生み出す。



《Infinity Boost Charge up!!》  
 《B o o s t》

《Infinity Raid Acceleration!!!》  
 勇ましい音声が周囲に響くと同時に、イツセーのスラストから魔力が爆発したかのよう放出される。

周囲の瓦礫を砕いて一瞬の間に曹操の懐に飛び込んだイツセーは攻撃に移ろうとする。

だが。

『ッ……!!!』

拳を突き出そうとしたイツセーの腹部に、淡く輝く球体が。

それが爆ぜた瞬間、イツセーの体は後方のビルへと吹っ飛ばされていった。

『やってくれるじゃねえか……!!』

「いやいや、これでも結構内心では冷や汗掻きまくってるよ。何せ俺にとつては初見ばかりだからね」

『……だろうな』

「?……ッ!!」

イツセーの発言に何か引つかかるものを覚えた曹操。そんな彼の体に、鈍い痛みが走った。

見れば——四肢に鋭い切り傷が生まれていた。

『一発には……一発だ……!』

血を吐きながら立ち上がるイツセーの周囲に浮かぶのは、先程まで消えていた例の刃。

不意に現れたそれらは、瞬く間に曹操の四肢を切り裂いたのだ。

『こいつは定期的に俺の魔力をチャージしなきゃ分離できなくてな。つい今しがたチャージ完了したんだよ』

「……何時、発射したんだい？」

『ああ、言つてなかったな。これ、俺の意志じゃなくても動かせるんだよ』

「……赤龍帝、ドライグか」

『「正解」』

曹操に応えたのは、イツセーではなくドライグだった。

曹操は懐からフェニックスの涙を取り出し、傷口へと振りかける。

だが、傷口は完全に塞がらず、出血が少し収まる程度であった。

「……?」

『そろそろ、相棒の仕掛けた種が効果を発揮したようだな』

「…何を仕掛けた？」

『この一撃浴びせたら、教えてやるよ』

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!!!!》

三度の魔龍進化により、籠手が大きく肥大化する。

曹操は痛む手で聖槍を握り締めるが、突如視界が眩むのを感じた。

『…ッ、何だ？これは………』

特に右目にその症状が酷く表れている、そう感じた曹操は目の前の男が仕掛けた罠と  
言うものに何か薄ら寒いものを感じていた。

だからだろうか、イツセーがすでに攻撃態勢に入っていた事に、気づくのが遅れてしま  
ったのだ。

「……………ッ!!」

周囲に響く轟音。何とかイツセーの拳を聖槍の柄で受け止めた曹操だったが、その体  
は衝撃に耐えきれず、大きく後退していた。

腕を振って震えを消すと、曹操は後退しつつ聖なる波動を無数に飛ばした。

『ハアッ!!』

イツセーは拳を振るってそれらを全てかき消すと、曹操目掛けて拳を突き出す。

放たれた拳は空気を押し出し、重たい空気砲となって地面を深く抉りながら遅し来る。

「っー！」

『逃がすかッ!!』

転移してそれを躲した曹操の体に、鉛のような重圧が掛かり、膝を付く。

「重力操作……か……!!」

抜け出そうと試みる曹操だが、疲労が溜まってきた体では難しく、見る見るうちにイツセーの方へと吸い寄せられていく。

眼前にて構えるイツセーの拳には、赤黒いオーラが集中していた。

『……何だ、この寒気はっ』

それを視界、右目で捕えた曹操は、背筋がぞつと凍えるのを感じた。

理由は分からない。だがあの一撃だけは受けてはいけない、自分の本能が、何より右目がそう訴えていた。

「く、ううっ……っ!?!」

何とかして抜け出そうとする曹操だったが、イツセーの眼前で重圧が解けたのを感じた。

見れば、イツセーの鎧が通常の赤い鎧に戻っていた。

ここにきて、イツセーの方も限界を迎えていたのだ。

「っ、ああああっ!!!」

それをみすみす見逃す曹操ではなく、震える左手で聖槍を突き出す。

イツセーもここまで来て逃げる、という考えは持っていなかったのか、オーラが集中した拳を突き出す。

互いの繰り出した一撃は交差し合い、そして——

「……ッ!!」

曹操の聖槍はイツセーの肩口を、そしてイツセーの拳は——曹操の右目を捕らえていた。

ザッ、と肩を抑えて蹲るイツセー。

手で押さえた肩口からは、煙が上がっていた。

「フッ、ハハ……どうやら、俺の粘り勝ち……ッ!？」

《Transfer!!》

勝利宣言をしようとした曹操に、イツセーは何と力を譲渡した。

「…何のつもりだ……?」

それを不審に思った曹操だったが、右目から血が流れ出た。

それを触れて感じた曹操の体に、再び変化は起きた。

「…ガフツ!!」

今度は蹲ると、口から大量の血を吐き出した。

せき込む度に血の塊が吐き出され、その体は震えに震えていた。

「う、あ、ああああああ!!!」

まるで激痛に耐えかねる様に地面をのた打ち回る曹操を、ふらふらと立ち上がったイツセーは力なく見下ろしていた。

「…お前、俺の動きを捉えるのに時間かかったのに、違和感を覚えなかったのか?」

「な、にイ……!!」

「実は俺の体には、まだ残ってたんだよ——サマエルの呪いと、血が」

イツセーの発言に、曹操は愕然とした表情でイツセーを見上げていた。

肩を手で押さええながら、イツセーは種明かしをする。

「……次元の狭間で、俺が受けた呪いと血は消えずに、ずっと俺の体内に残留してた。それを何とか出来ないかって思ってたな。……オーフィスの案で、組み手をしつつ、その方法を模索してた」

「……オー、フェイスと……!?!」

「ああ……お前は気付いてなかったけど、俺の攻撃のオーラに、サマエルの呪いを少しずつ抽出して、上乘せして攻撃していた。……当たらなくても、ドラゴン以外のあらゆる生命体に害を及ぼすサマエルの呪いだ。それは少しずつ、お前の体を蝕んでいった。そして最後の攻撃——あれには、シャルバの野郎から受けたサマエルの血を含ませた」

曹操は震える手で右目に触れるが、もう右目は殆ど見えない。

サマエルの血に、侵されてしまったのだ。

「サマエルの呪いは、ドラゴンと蛇を憎む神様の憎悪……そのメデューサの眼、それも蛇。だから、呪いの範囲内って訳だ。それで、さっきの譲渡でお前に蓄積した呪いを増幅させた……これが今回の仕掛けの種、だ」

「ハア、ハア……まさか、異能の力が、ここで足を引つ張るとは……ゴホッ!!」

荒い呼吸になりながら、曹操は血の塊を吐く。

もがき苦しみながらも、その口調は自嘲の念が溢れていた。

「あのヴァーリだってあんな状態になっちまったサマエルの毒だ。聖槍に選ばれて、英雄の子孫のお前は人間だ。だけど……耐えられる訳は、ねえよな」

「ふっ、ハハハ……ああ、もう、体の機能が停止しつつある。……この呪いの前には、フェ

ニックスの涙でさえも意味をなさない……人間が、俺の弱点になるとは……ハハハ  
ハ……」

仰向けになりながら、自分を嘲笑う曹操。

もはや戦う力は残されてはいなかった——だが、曹操は、震える体で立ち上がった。

「——ならば、『トウルース・イエア覇輝』だ」

「！」

思わぬ発言の驚愕したイツセーの目の前で、曹操は槍を構えて唱え始める。

「槍よ、神を射貫く真なる聖槍よ——。我が内に眠る霸王の理想を吸い上げ、祝福と

滅びの狭間を抉れ——。汝よ、遺志を語りて輝きと化せ——」

曹操の呪文と共に槍の先端が大きく開き、莫大な光が輝いていく。

何かが起こる前に倒す、そう足を踏み出したイツセーの目の前で、光が徐々に弱くなっていた。

大きく開いていた槍も普通の状態に戻る——その寸前、一つの小さな光の球体が現れ、イツセーの体内へと入り込んでしまった。

一連の光景を見ていた曹操は——絶句していた。



「な、何だ……もしかして……」

「……発動、しない………?」

曹操が呆然と口にした言葉を受けるように、聖槍のオーラがどんどんと弱まっていた。  
く。

「……成程。それが貴方の『意志』か。——俺の野望よりも、赤龍帝の行く末を、希望を選んだのだな」

何かの意志を感じ取ったのか、曹操は悟った表情となった。

# MAGIC152 『英雄になろうとした者、英雄である者』

「随分派手にやられたな、曹操」

よお、イツセーだ。

あ、因みに今のは俺の台詞じゃなくて、俺のライバル、ヴァーリだ。崩れたビル群の窓から入って来たヴァーリは、痛みへのた打ち回る曹操を見下ろしていた。

「…その様子では呪いを受けたな。感想はどうだ？」

「ふふ……原稿用紙一枚も書けないよ……。君のライバルは…最高だな」

曹操の言葉に、ヴァーリはキザっぽく笑った。

「お前にはやらんさ。——何故、覇輝は失敗した？先程使ったのだろうか？」

それは俺も知りたい。っていうかもし成功していたらどうなったのか。

「…覇輝は聖書の神の意志が関係する。亡き神の意志はこの槍の持つ者の野望を吸い上げ、相対者の存在の大きさに応じて、多様な効果、奇跡を生み出す……。それは相手を

打ち倒す圧倒的な破壊で会ったり……相手を祝福して心を得られるものでもあった。

——だが、赤龍帝に対する覇輝の答えは静観、しかも聖槍の光の一部を彼の中へと送り込んだ……この勝負は、赤龍帝の勝ちであり、槍は俺の野望よりも兵藤一誠の夢を見たいと言う事だ。……もし聖槍が俺の野望を見届けたいのなら、聖槍はここで俺を回復させるか、もしくは絶大な力を発動させただろうからね」

……つまり、聖槍が俺の勝ちを認めたって事か？

それを聞いたヴァーリは、可笑しそうに笑った。

「……に来てその聖槍はお前でなく、兵藤一誠を選んだのか。だから言っただろう？ 手に負えなくなるうちに俺達を倒しておくべきだったと。結果この様だ。……やはり、無限と成りし赤龍帝を倒す権利を持つのは俺だけのようだ」

ヴァーリの皮肉に、曹操は自嘲するだけだ。

「……俺が倒したかったんだけどな」

「お前らな……本人を前にそんなホモ臭い会話するなよ」

「ホモじゃねえよ!!」

息ピツタリだな！しかも曹操、お前死にかけの癖に随分鋭いなツツコミが!!

「ああ、そうだな。兵藤一誠を倒すのは俺だ」

「僕の友達は人気者だね」

「流石は我がライバル！」

ええい、むき苦しさが増した！

華だ、女の子の華やかさを俺にくれ!!野郎の熱い視線なんざいらねえんだよ!!

『暖かい眼エ』

『そおい』

『アアアアアアアッ、眼がああああつ!!』

気持ち悪いぞドライグ！後ドラゴンよくやった!!

「…二天龍、獅子王、聖魔剣……流石にこの状態では分が悪すぎるか。いや、分が悪い以前に、このままじゃ俺は死ぬな……君達にちよつかいを出した時点で、俺の運は尽きていたのかもな……」

曹操がそう言った時、目の前に見覚えのある影が現れた。

「…ゲオルクか」

眼鏡の魔術師、ゲオルクだ。

片目と片足を失い、左足も黒く変色していた……随分ボロボロだな。

何があつたんだ？…後で木場に聞いてみるか。

「…帰還しよう、曹操」

「……その前に、一つ聞きたい——兵藤一誠」

んあ？曹操は俺に向かい、こんな事を聞いてきた。

「君は……ずつと俺の語った英雄像を否定してきた。……だからこそ、君に聞きたい。君にとって、英雄とは何だ？」

「英雄……？」

いきなり何を聞いてくるんだ此奴は………とは言え、このまま此奴に変な英雄論拗らせて襲われても面倒だしな。

「……お前、英雄って自分が名乗るもんなのか？勝手に英雄って名乗って、他人に迷惑かけてテロ行為して、それが本当に英雄ってヤツなのか？テレビの中のヒーローがそんな事してるの見たのか？それに——誰かから一度でも『英雄だ』とか『ヒーローだ』って、呼ばれたのか？」

「……いや」

「……俺が思うに、英雄ってのはさ」

俺は瓦礫に腰掛けると、足元に落ちていたウィザードラゴンのソフビを拾い上げる。表面に着いた埃を拭って、俺は続ける。

「自分から名乗るもんじゃないし、もつと言えれば自分から望んでなるもんじゃない。……これは俺が好きないヒーロー番組の台詞なだけだよ、「英雄ってのは、英雄になろうとした瞬間に失格」ってのがある。お前が言う超常の存在に挑むってのは、ただの結果

だ。超常の存在に挑まずとも英雄だつて称えられてる人なんていくらでもいる、それこそ虚構の、番組の中でも、そのヒーローは確かに誰かにとつての希望になつてるんだよ。それにお前の中には、超常の存在に挑んだ後のビジョンがあるのか？」

「……………」

曹操は俺の質問に何も答えられないでいた。

「明確なビジョンがなくて、ただ自分より強大な存在に挑みたいなら、ゲームでもしてろつてのはそう言う事だ。唯の承認欲求で動いてたのは、お前もどこかで気づいてたんじゃねーのか？……………ま、この台詞もその場しのぎの皮肉だったんだけどな」

「……………英雄の血を引くあまりに、そこに拘り過ぎた。いきなりアウト、つて訳だ」

曹操はそう言うって力なく自嘲した……………お前もその番組見てたんだな。

「……………曹操」

「……………俺達はどうかやら、前提から間違つていたようだ。英雄という言葉の意味を履き違えていた時点で……………」

ゲオルクは曹操の手を取ると、転移魔方陣を発動させる。

だが――

『……このまま、生きて逃げようなどとは都合が良すぎる英雄だな』

俺達の後方から響く低い声と共に、曹操とゲオルクに向けて何か投げつけられた。

「うっ……ジャンヌ!!」

曹操がその名を叫んだ通り、その正体は俺がさつき倒した英雄派の女剣士、ジャンヌ。その息遣いはかなり荒く、俺との戦いで負った傷とは違う傷や焦げた跡が体の各所に出来上がっていた。

ガルムはただ無表情で曹操とゲオルクを見下ろしていた。

『……良くやってくれた、英雄派。お前達のお陰で、器の完成度が更に増した。……もう、お前達に利用価値はない』

「……ッ！」

「っ、ゲオルク！」

ゲオルクは曹操を後ろに突き飛ばすと、ガルムに攻撃を加えようと片手を突き出す……だがガルムは冷静に、ゲオルクの腕を掴んだ。

「ぐっ!!」

『……そこまで死に急ぐか』

ガルムの腕が輝きを放ったかと思うと——けたたましい爆音が響いた！

「——ッ!!!」

声にならない悲鳴を上げるゲオルクの片腕は……跡形もなく吹っ飛んでいた。

今のは……ヘラクレスの神器に似てる？

そう思っていたら、曹操は顔に激情の浮かばせて立ち上がった。

「お前……ヘラクレスを、喰ったのか……ッ!!」

「「!」」

曹操の怒声に、俺達は度肝を抜かれた。

人間を、喰ったのか!? アイツ、ファントムだろ!?

「……」

「……ゴフツ!!」

だがガルムは曹操の怒りに構うことなく、ゲオルクの胸を躊躇なく貫いた……。

「ゲオルク!!」

曹操が駆け寄るが、ゲオルクは何も答えない……いや、答えられなかった。

それより早く、ガルムはゲオルクを喰らったのだ。

耳障りな咀嚼音を鳴り響かせながら、ガルムは挑発するようにゲオルクの眼鏡を吐き捨てた。

「ガルム……貴様ツ!!」

「……」



怒りで体を震わせながら、ガルムを睨み付ける曹操……ガルムはそれをどう捉えたのかは不明だが、今度は背中から腕を六本も生やした！

「……ジークフリートも、喰ったのか！」

『…元より用済みの存在だ。死んだところで誰も嘆きはしまい』

「オオオオッ!!!」

曹操は怒り狂いながらガルムへと特攻を掛ける……ってバカ！アイツ今の自分の状態を分かっているのか!?

ガルムは六本の腕に魔方陣を展開させ、曹操へと魔法攻撃を仕掛けた！

「この攻撃……ゲオルクのかっ！」

『……フン』

先程より動きが鈍くなっている中、曹操は何かガルムの魔法攻撃を凌いでいく……だが、曹操が膝を付いた瞬間、足元に魔方陣が展開された。

「曹操、逃げろっ!!」

ガルムの攻撃だと察した俺は曹操に叫ぶが、魔方陣から這い出るように腕が生え、曹操を拘束した！

『死ね……』

「——ッ！」

曹操を拘束して腕と魔方陣が光を放ち、一瞬の内に爆音が轟いた！

だが――

『……逃げたか』

ガルムが言った通り、そこには僅かな血痕の後はあるが、誰かが死んだとは思えないほど閑散としていた。

もしかして、爆発する寸前に逃げたのか……？

『……まあ良い』

ガルムはさして気にした風でもなく、その場から立ち去ろうとした。

「おい待て！」

『……』

「……何でアイツらを殺そうとした」

ガルムは俺の問いに立ち止まると、振り返る事無く告げる。

『……奴らは既にテロリストの身だ。なのに何故気に掛ける？塵芥以下の命だ、散ったとしても誰も気に留めまい』

「……悪人だからって、命を奪うのは間違ってるっ!!」

『甘いな』

ガルムは俺を振り返ると、感情の籠ってない声で続けた。

『あのような奴らが今ある世界を腐敗させ、生まれ変わっても尚同じ愚行を繰り返していく……そのような奴らにける慈悲など必要ない。ならば一思いに命を奪ってやるのがせめてもの慈悲だ。……それに、英雄派は十分な責務を果たした。それが済めば切り捨てる算段だったのだ。貴様が気にする必要はない』

「……テメエ、それ本気で言ってるのか」

俺の怒りを無感情に見据えるガルトムは、背に鳥のような翼を生やす。

こいつは他のフアントムとは違う、何の感情もなく、作業の様に淡々と人を殺してる……今まで見たフアントムの中でも、感情らしいものが窺えない。

……ワイズマンもそうだけど、こいつも不気味だ。

何を考えてるのか、全く分からない——。

でも、だからと言って人の命を奪うこいつ等を、許す訳にはいかねえ!!

『……元より人間に守るべき価値などない。新世界創造の暁には全ての生命は淘汰される。奴らは一足先に淘汰されただけだ。……十分な量のエネルギーは確保できた。それだけでも奴等にも価値はあった。……塵芥にしては立派な働きぶりだった、とでも言っておこう』

「ッ、待て!!」

俺が駆け寄る寸前で、ガルムは風と共に姿を消した——

——

「……」

ガルムが去つても尚、俺の中にはやり場のない怒りが燻っている。

「……気に病むな。曹操もまともな終わりを迎えないだろうと分かっていただろうからな」

「……おう」

此奴なりに気を使ってくれてるのは分かる、だからこそ俺も後味の悪さを無理やり消した。

「……サンキュー、ヴァーリ」

「君の気持が整理できたのなら、これで心置きなく君に宣戦布告が出来るといふものだ」  
「え？」

「グレートレッドと通じたのだろうか？ならば真剣に、赤龍神帝に挑む前に、君との決着をつけないといけないからね」

……ハハツ、ホントに此奴らしいな。

「ああ、来いよ。まあ何時でもつてのは困るけど」

「安心したまえ。俺も拉麵の名所を巡ったりエロゲをしたりで多忙なんでね」

「お前普段何してんの？」

何か他のメンツが此奴の趣味に付き合わされてる残念な人達に見えて来たんだけど。

「…ヴァーリ、皆こちらに來ています。予定通り、一暴れしてきましたよ」

「そうか、すまん」

お、アーサーお兄さんのご登場だ。

サルにカイト、ルフエイちゃんに黒歌とフェンリルもいる。

「サルって言うない!!」

「良く聞こえたな!結構距離離れてんだろ!」

「誰がお義兄さんですって?」

「言つてない言つてない!!」

どんな聞き間違いですかそれ!?

けどアーサーは俺のツツコミをスルーして、木場に視線を送っていた。

「——木場祐斗。聖魔の王に覚醒した貴方が、私が探し求めていた聖王剣コールブランドの相手として最も相応しき剣士です。ヴァーリが兵藤一誠と決着をつける時、私

も貴方との戦いを望みましょう。それまではお互い、無病息災を願いたいものですね」

「……ええ、その時は」

木場は不敵な笑みを浮かべてそれに応じた。……あの魔王チツクな鎧な事か。

「そういやお前、ジークフリートを倒したのか？」

「うん」

木場の腰には、ジークフリートが持っていた魔剣群を腰にぶら下げていた。

まああの力、パツと見ただけですげえ力だったからな。

『お前の極手と同じだろう』

「…そつか。お前も至ったんだな」

「君に比べたらまだまだただけどね」

こりやホントにうかうかしてられないな……。

「さて、俺も眷属を待たせているのでな。そろそろお暇させてもらおうか…近いうち、お前の昇格祝いをせねばな」

「…合格、してますかね？」

「お前ならば余裕であろう」

サイラオーグさんにはかっつと笑ってそう言っつて背を向ける。

「…サイラオーグさん、有難う御座いました！」

俺が礼を言うと、サイラオーグさんは手を上げて応え、そのまま窓から飛び降りていった。

「……ハアアアーツ」

…全部が済んだ、そう思った俺は、自然と崩れ落ちた。

『イツセー!?!』

皆が俺の名前を呼ぶ声が聞こえたのを最後に、俺の意識は徐々に落ちていった――

――

冥界の魔獣軍の殲滅に成功した事を俺、アザゼルの元に届いたのを切っ掛けに、この緊張状態も収束しつつあった。

サーゼクスもその報告を聞いて、安堵したかのように元の姿に戻った……本当は、あつちが元の姿なのかもしれないけどな。

《ハーデス様、神殿内の死神の大多数が……氷漬けにされております》

《……貴様の仕業か、ジョーカー》

死神の一人の報告に、ハーデスは危険な視線をデュリオに送った。

…当のデュリオ本人は、特に意に介さずに自分の肩を揉んでいた。

「いやー、これぐらいはしないとミカエル様に怒られてしまうんで。怪しそうな気配の死神さんだけ氷漬けにしようと思ってたんすけどね。めんどいんで、まとめて凍らせちゃいました。いやー手際が悪くてすいません。アーメン、つてね」

ハーデス相手にも飄々とした態度は崩さない……しかし、強い。

これが天界の切り札、ジョーカー・デュリオの実力か。

とは言え、ハーデスの横やりだけは阻止できた。これは大きい戦果だ。

肉がないから分かり辛いが、相当悔しがっているんだろうな。

「サマエルの件は追々追及させてもらうぜ。何せ一人だけとはいえ、英雄派の主要メンバーを生きて捕縛できたからよ」

……ジークフリートとヘラクレスは、ガラムによって食い殺されたと聞いていたが、ジャンヌだけは何とか生きていたらしい。

ただひとりだけでも生き証人がいるんだ、これは美味しすぎるぜ。

「ハーデス殿、これで失礼します。今回は突然の訪問、誠に申し訳なかった」

サーゼクスは丁寧に非礼を詫げるが、その直後に強烈なプレッシャーを放った。



「それでもあえて言わせていただく。——二度目はない。次はあなたを消滅させる」

《……フアフアフア、良い目をしよるわ。ああ、よく覚えておこう》

その楽し気な笑みが消えない事を欠片でも祈つとくぜ、骸骨ジジイ。

『奴の消息を捉えました』

『首尾は？』

『魔力による暗示をかけております。……これでウィザードは』

『……ああ。最後の仕上げだ』

薄暗い洞窟の奥、天蓋の奥に悠然と立つワイズマンの背後には、ガルムと別のファントムがいた。

鳥のような東部に、鋭い薙刀のような得物を持つファントム。

——名をレギオン。

最近まで姿を消していた、特殊な力を持つファントムだ。

『レギオンの制御は任せる。……私は冥府に向かう。メデューサにはゲートの探索を行わせている、例の石の鍊成も怠るな』

『御意』

首を垂れるガルムを一瞥して、ワイズマンはその場から転移していった。

## MAGIC153 『砕かれた希望』

おつす、イツセーだ。

曹操との戦いを終えて幾日かが経過した……まあこれと言って特に異常はないんだけど。

あ、そう言えば忘れてた。

実はアザゼル先生が総督を更迭されたんだ。

理由は言うまでもなく、無断でオフィスを俺達と邂逅させたからである。

あの人の肩書は総督からこの地の監督役になったんだ、因みにグリゴリでは特別技術顧問と言う立ち位置……あんまり変わってないな、うん。

………そうだ、さつき異常はないって言ったけど、ありや嘘だ。

心配をかけたと言う事で、俺は眷属の女性陣を始めとした関係者各位にお詫びをしに行った。

そしたら凄い勢いで甘えられた、あのセラフオール様もだ。

それが凄く疲れたのなんの……いや、嬉しいんだけどね？

——夜なんて、もつと凄かった。

一応体の方を初代孫悟空のじいちゃんに見てもらったその日の夜、俺はグレイファイアとリアスに別室（防音完備）に呼ばれ——徹底的に搾り取られた。

凄くエツちな下着姿で押し倒されて、そこからはある意味地獄だった。

お陰でここ最近は興奮するって言うのがめつきりなくなつた程だ……まあ多分逆夜這いされたらまた興奮するんだろうけど。

『情けねえな』

うるせえよ、あんなの耐えられる訳ないだろ！

だつて出したばっかなのにもた責められるんだぜ？ 快樂も感じ過ぎたら猛毒だよ！！

箱で買ってたゴムが一晩で無くなつたなんて、信じられるか!?

『昔から性欲つてのは女の方が強いって決まつてるんだよ。しかしあの様で赤龍帝とは

……泣けるねえ』

そんなんで泣くなよ！ 赤龍帝は性欲がステータスみたいに聞こえるだろ！

何？ 原作もそうだろうって？ 誰だ変な電波を送信したのは…。

とまあ何やかんやとありましたが、私は元気です。

今は久しぶりにハティとスコルの散歩をしてる最中だ。

この二匹も頑張ってくれたからな、いっぱい伸び伸びとさせないと。

「こんにちは、一誠君」

「こんにちは」

「ふふ、ハティちゃんとスコルちゃんも元気ねえ」

『ワンワンツ!!』

……こうして見ると、こいつ等が神様も殺すフェンリルだつてのを忘れちゃうな。

もう普通に犬扱いだもん、家でもご近所さんたちにも。

で、こいつ等もそれを普通に受け入れちゃってるもん。おかしい話だぜ？

ヴァーリンとこの親フェンリルなんてあんなにプライド高そうなのに……あれか？

俺のせいかな？

そう思いつつ近所の公園に向かって見ると、珍しい光景が。

「よし、見てろよ」

「……」

背の高い男の子が小さな女の子に……手品を披露しようとしていたのだ。

見た感じ、兄妹かな？

…けど、上手くいかないみたいだな。

「ちよつち手伝つてあげますかっ」と

《グラビティ・プリーズ》

重力魔法を発動して、少年が持っていたステッキを宙に浮かせた。

急に浮かび上がったステッキに驚きを隠せない兄妹、その視線は直ぐに俺の方へと向いた。

「えつと、貴方は？」

「ん？通りすがりの魔法使いさ」

「魔法使い？」

お、ちよつと信じられないうって顔ですな。

では……

「わあっ！」

今度は妹ちゃんの体を浮かせてみた。

「凄い、凄いよお兄ちゃん！この人ホントに魔法使いだよ！」

「…スゲエ」

ハハッ、ちゃんと信じてくれたみたいだな。

女の子を地面に下ろすと、俺は指輪を嵌めさせて新しい魔法を使う。

《ドレスアップ・プリーズ》

「わあ〜！お姫様みたい！」

女の子は魔方陣に包まれ、可愛らしいドレス姿になっていた。くるくると回って喜びを表現するのを見て、少年の方も顔を綻ばせる。

「あの、有難う御座います」

「良いって。ただのお節介だからさ」

ハティとスコルと一緒に遊ぶ女の子を見ながら、ベンチに座った少年は礼を言ってきた。

「兄妹か？」

「はい。…詩織っていうんです。喜ばせようと思つて何とか頑張つてるんですけど、失敗ばかりで」

そう言つて少年は苦笑いを見せる。

「良いじゃんか。どんな手品師だつて最初は失敗ばかりなんだから。…その気持ちは、詩織ちゃんにも届いてる筈だよ」

「…そうですかね？」

「ああ。自信持ちなつて」

少年は暫くして考え込んだ後、控えめに頷いて見せた。

その直後、何かを感じ取ったのか、ハティとスコルが警戒するかのように唸り声を上げた。

「……兄ちゃん。妹連れてここから逃げろ」

「え？」

「良いから」

ここに向けて——恐らくは俺が狙いであろう——向かってくる人じゃない気配を感じた俺は、兄妹に逃げるように言う。

少年は訝しげな様子を隠せないようだったが、俺の態度を見ておふぎけではないと感じ取ってくれたのか、妹ちゃんを連れて公園を離れてくれた。

「……」

「……やっぱお前か、ガルム」

黒い風と共に現れたのは、三つの獣の顔を持つファントム——ガルム。

ガルムは相変わらず感情を感じさせない雰囲気を感じながら、周囲に霧を発生させる。

『……あの霧使いの技か』



「境界張つてくれるなんて粹な真似してくれるじゃん」

《ドライバーオン・プリーズ》

ドライバーを顕現させつつガルムを見据える中、ガルムの隣に黒い靄のようなものが現れた。

『今日はお前に用があるのでな……あの方を失望させるなよ、ウィザード』

『……』

そう言ったガルムの隣には、いつの間にか新しいファントムがいた。…鳥、か？

そいつの特徴は鳥の嘴みたいな頭に、薙刀を携えた今までに見た事のない奴だった。

って事は、俺が以前倒したファントムじゃないな。

「変身！」

《フレイム・プリーズ！ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！》

《コネクト・プリーズ》

魔方陣から剣を取り寄せて、俺はガルムたちへと斬りかかる！

だが俺の刃はガルムへは届かず、割って入ったファントムの薙刀で止められる。

「邪魔すんなっての！」

『……』

俺は蹴りを入れてそのファントムを後退させるが、すかさず態勢を整えたファントム

は俺へと飛び掛かる！

『……ッ！』

「ちっ！」

……くっそ、こいつもガルムと同じだ、まるで感情がない！

だからこそ、次にどんな攻撃をしてくるか全然予想がつかねえぞ！

終わりの見えない攻防を繰り返す中、ガルムは不意に空間に黒い霧で出来た穴を創り出した。

「っ、おい待て！」

『招かざる客が来たか……レギオン、ここはお前に任せるぞ。——決して、ウィザー

ドの命は奪うな』

俺の制止を無視し、ガルムは霧の結界から姿を消した……！！

「何だっつてんだ!? それにどういう事だ……」

俺の命を奪うなって……アイツらからしてみれば俺は邪魔者でしかない筈だろ?!

それを殺すなって……ガルムは一体何を企んでんだ!?

『相棒! 今は此奴に集中した方が良いぞ!』

「っ、ああ! 分かっている、つての!」

《チヨーイイネ! スペシャル・サイコー!》

宙返りしながら、俺は魔方陣から炎を放つ！

レギオンはそれに対して薙刀を大振りに回して、炎を切り裂いた。

だがその剣筋に沿う形で——空間にも切り傷が走った

「…………次元に、切れ目を入れやがったのか」

俺がハツとして見守る中、以前見た万華鏡のような光景が靦く亀裂は、徐々に塞がっていく。

だがレギオンは再び薙刀を振るい、四方八方に斬撃を飛ばす！

『相棒、この攻撃を受けるな！空間すら切り裂く一撃、生身で喰らえば無事では済まんぞ

！』

「見りや分かるって！」

俺に向かつてくる斬撃を往なしていく中、空間には滅茶苦茶な切り傷が生まれていく

！

そして——

—————

木場 side

僕、木場祐斗は公園にファントムが姿を見せたという知らせを受けて駆け付けた。

駆け付けたんだけど……気付けば僕は見知らぬ空間にいた。

いや、この感じは……以前京都で感じた事がある。

「疑似空間、ですね」

僕と共にいたロスヴァイセさんがそう評した通り、ここは英雄派のゲオルクが以前創り出した結界の中だ。

「小猫、周囲に反応はあるかしら」

「……」

部長に言われて、小猫ちゃんは耳を動かして索敵をしていた。

すると――

「…ファントム、来ます」

そう言って前方を睨み付ける小猫ちゃんの眼前で、空間が不規則に歪み始めた。

現れたのは……ガラム。

「この結界は貴方の仕業かしら」

『……これ以上邪魔されるのは面倒なのでな』

ガルムがそう告げたと同時に、奴の背中から四本の異形の腕が生えた！

『……貴様らの相手は私だ』

「……行きます」

先手必勝と言わんばかりに、まずは小猫ちゃんが仙術を纏わせた拳でガルムへと接近した！

ガルムは宙に飛ぶことで回避し、小猫ちゃんの拳はクレーターを作るに終わった。

「空中では、無防備ですわっ！」

宙を舞うガルムに今度は朱乃さんの雷光龍が襲い掛かるが、ガルムは背に生えた腕そのものを飛ばして、雷光龍にぶつけた！

接触した腕は雷光龍を巻き込んで大爆発を起こし、辺りを黒煙が覆う！

「……見つけましたっ！」

『……！』

煙の中を迷わず突き進む小猫ちゃんの一撃が、ガルムに食い込んだ！

だがガルムは微動だにせず、それどころか小猫ちゃんを囲うように四本の腕の手先に魔法攻撃を発生させていた！

「させませえん!!」

そこへ空かさず、ギヤスパ―君の邪眼が煌めく！

動きの止まったガルム、小猫ちゃんは直ぐに後退すると、そこへロスヴァイセさんの属性攻撃のフルバーストが叩き込まれる！

「木場、今の内に例のヤツを！——行くぞイリナ！」

「オツケー！」

轟音と共にズザザつと後退するガルムに追撃するのはゼノヴィアとイリナさん！

二人が時間を稼いでくれる間に、僕も極手を発動させる。

身に纏う魔力、そして魔剣創造と力のリズムを解け合わせ——言の葉を紡ぐ。

「——幻魔に逢えば幻魔を斬る、絶望に逢えば絶望を斬る。我が魔剣の理、ここに在り」

周囲を赤黒い魔力の渦が覆い、僕の体を包み込んでいく。

「目覚めよ神器の極致——極手」

渦は僕の体へと収束していき、それらは僕を守る鎧となる。

漆黒のマントが風に靡き、力が発現化する！

「おっ！」

ゼノヴィアが横薙ぎに振るったデュランダルを躲し、イリナさんが飛ばした光の槍も

腕をスイングさせ消し飛ばしたところを、僕は瞬時に肉薄する！

『…そうか、そう言えば貴様もその領域に至ったのだったな』

「その余裕がいつまで続くかな……っ!!」

ガルムの元を離れた瞬間、奴の目の前に迫るのは滅びの魔力の大渦——リアス部長の攻撃だ。

そしてさらに奴の足を縫うように僕の魔剣が咲き、体には魔方陣の拘束が掛かる！

「消し飛びなさいっ!!」

部長の勇ましい声と共に、滅びの竜巻が周囲を飲み込んでいく！

瓦礫すら消し飛ばすその一撃、だが——

『…中々やるな』

「ッ！」

再び現れたガルムに殆どダメージは見受けられなかった……！

『貴様の一撃、返してやろう』

ガルムが手を上げたと同時に——奴の影が伸び、そこから先程の部長の一撃が返ってきた！

「皆下がつて！」

それに対し部長は滅びの魔力を横薙ぎに放ち、疑似的な障壁を創り出した。

滅びの竜巻と障壁は互いを滅ぼし合い、消滅した！

「…今の能力、何処かで」

ゼノヴィアはガルムの今の力に何処となく既視感を覚えたらしかった。

「……そうだ！修学旅行前に戦った、英雄派の神器使いに、影を使う能力者がいた。その能力とそっくりだ！」

「貴方……まさかっ」

部長が怒りを感じさせる声で尋ねるが、ガルムはそれに応える事はなく、返答の代わりにドーム状に広げた影から属性を加えた矢を放ってくる！

「はっ!!」

部長が滅びの魔力をドーム状に展開することで、それらの攻撃は僕達には届く事はなかった。

「あのフアントム……以前より血の匂いが濃いです」

小猫ちゃんが顔を嫌悪に染めて呟いた発言に、僕達は確信した。

「英雄派の構成員を、喰ったのか……!」

今の攻撃は記憶違いでなければ、全て英雄派の神器使いが使っていた神器……それを使えると言う事は——喰ったと言う事に他ならない！



『虫けらを喰うのに何を怒る?…奴等は貴様等にとつては、悪、なのだろう』  
「だからこそ相応の償いをさせるんだっ!お前のやっている事は——」

『間違い、か。……愚かしい奴等だ』

ガルムは何の感情も見せず、にそう吐き捨てる、手元に魔方陣を展開する。

魔方陣に映された映像の中では————イツセー君と立神君が別のファントムと戦っていた!

『…結界を破壊したのか』

ガルムはそう呟くと、何故か結界を解除した。

僕達がいたのは元の公園で、イツセー君と立神君が引き続き戦っていた!

「え、リアス!?!いつの間にここに!?!」

『相棒!!』

「ツ!」

結界から出てきた僕達に驚いているイツセー君目掛けて、ファントムが薙刀をもつて跳躍した!

後ろに飛ばうとしたイツセー君だったが、いつの間にか背後に移動していたガルムが

羽交い絞めにする！

「っ！おい、離せコラ！！」

『…やれ、レギオン』

「やらせるかー！ーッ!?」

そうはさせまいと動こうとした立神君と僕達だが、急に体が石になったかのように動けなくなった………メデューサの、石化能力か！

そしてファントムの凶刃が——イツセー君を切り裂いた！

「ガ、アア——！！！！」

「イツセー！！」

その場に倒れたイツセー君！だがファントムによってできた切り傷はそのまま残っており——ッ!?

「ファントムが、亀裂の中に……!?!」

ロスヴァイセさんがそう唸ったのも無理はない、例のファントムはイツセー君に出来た切り傷の裂け目へと飛び込んでしまったのだ。

まるで、イツセー君の体内に入り込んだかのように……。

『…アーキタイプ。止めたければエンゲージの魔法を使え。レギオンはウィザードのアンダーワールドに入り込んだ』

「何だと!?!」

「っ、イツセー君や立神君の魔法もなしに、アンダーワールドに入り込んだのか!?!」

『最も、そう簡単に行かせはしないが』

「ッ!」

「そう言つて立神君へと迫るガルムを僕は魔方陣で拘束して動きを封じる!」

「立神君、今の内にイツセー君のアンダーワールドに!早く!!」

「おう!サンキューな!!」

立神君は苦しげに唸るイツセー君に駆け寄り、エンゲージの指輪を嵌める。

「イツセー、直ぐ助けてやっからな!ちよつと我慢してくれよッ!!」

《エンゲージ・ゴー!》

現れた魔方陣に立神君が飛び込んでいく!

「アーシア!念のためにイツセーの傍にいて!」

「わ、分かりました!」

後方で待機していたアーシアさんが駆け寄り、イツセー君の手を握る。

握った手から回復のオーラが流れ、イツセー君の体を包み込んでいく。

「イツセーさん、死なないうで下さいッ！イツセーさん!!」

魔方陣の拘束を破ったガラムを見据え、僕達は再び構える。

「イツセー君には、近付けさせない……ッ!!」

『……』

——

立神吼介——ビーストが飛び込んだのは、イツセーのアンダーワールドであった。

「つと……何だこりゃ」

ビーストの眼前に広がる光景には、無数の亀裂が走っていた。

明らかな異常事態であることを察したビーストの耳に、龍の咆哮が聞こえてくる。

「ん……あれは!」

アンダーワールドを飛び回るイツセーのドラゴン——ワイザードドラゴンと、それに襲い掛かるレギオンの姿が目映った。

「ロキの時以来か、イツセーのドラゴンに会うのつて……つて、そんな事言ってる場合じゃないな!」

《キマイライズ・ゴー!》

ウィザードドラゴンに加勢すべく、ビーストは己のファントム、キマイラを召喚する。

「行くぜキマイラ!」

キマイラに跨り、宙へと駆け出す。

ウィザードドラゴンはその姿を見て、加勢だと察したのか、キマイラと共に連携攻撃を

レギオンに見舞う。

「おおっ!!」

カメレオンの舌の尾でレギオンを捕まえて、地面に叩きつけ、浮かび上がったレギオンに、ウィザードドラゴンがブレスを浴びせる。

それを食らい地面を転がるレギオンだが、何事もなかったかのように立ち上がり、魔力で薙刀を伸長させ、大きく振り回す。

「うおお、があっ!!」

それを宙に舞いながら躲していくビーストとキマイラだが、レギオン本体から放たれた火球を食らい、地面に叩きつけられた。

レギオンは好機とみて、そのまま跳躍してキマイラへと斬りかかる。

「不味いっ!!」

何とか体勢を立て直そうとするビーストだが、見る見るうちにレギオンが迫ってくる

る。

万事休すかと思つたビースト。だが――

『…………チイツ、まさか……この俺が、こんな真似……を……………』

その一撃を、ウイザードラゴンは自ら受けに行つたのだ。

まるでビースト達を守るかのように。

ビーストがそれに気づいた瞬間、ウイザードラゴンは爆発し……消滅した。

「ドラゴンツツ  
!!!!!!」

――

「あ、ああああ……つつ!!!!!!」

同時刻、現実世界でも異変は起きた。

苦しげに唸っていただけのイツセーだったが、喉が潰れんばかりの絶叫を上げる。

「イツセーさん!どうしたんですか、イツセーさんツツ!!」

アーシアがイツセーにそう問いかけるが、イツセーはぐったりと項垂れる。それと同時に、彼の腰に巻かれていたウイザードライバーも……砕け散るように消滅した。

『……さて、どうなるかな』

それを見てガルムは、誰にも聞こえない音量でそう呟くのだった——

# MAGIC154 『不滅の信念』

木場Side

「……………」

あの後、僕達は気を失ったイツセー君を連れて撤退した。

イツセー君は今ベッドの上で眠っている。

……撤退の際、ガラムとレギオンと言うファントムは手出しをしてこなかった。

イツセー君が気を失った後、何も言わずに姿を消した。

ファントムにとって大敵であるイツセー君が倒れたのに、何もせずに引いていったの

は気にはなるけど……イツセー君に身が第一であった為、僕達もそのまま撤退した。

今は小猫ちゃんが仙術で、イツセー君に異常がないか確認をしているところだ。

「……………」

小猫ちゃんは耳を仕舞い、僕達を振り返る。



「外傷はありません。体内の気にも乱れはありませんでした。……ですが」  
「ですが？」

「……イツセー先輩から、魔力が消えています」

——っ。

その発言に僕達は——特に立神君が——顔を強張らせた。

イツセー君はレギオンに襲われた……アンダーワールドに強引に入り込んだ事が切っ掛けで、魔力を失ったのだ。

立神君の話によれば、自分とキマイラを庇って消滅した……との事だ。

「魔力の残滓すらないの？」

「はい、全くありません……」

「ドライグ、貴方の方でも感じないの？」

『……いや、全く』

……つまり、イツセー君はサバトの儀式に巻き込まれる以前の状態に戻ってしまった  
と言う訳だ。

「……んっ」

「あ、イツセー！」

と、ここでイツセー君が目を覚ました！

彼は目覚めて暫くボーっとしてたけど、自分の掌を見て、悟ったかのように淡く微笑んだ。

「…魔力、無くなっちゃったのか。ハハッ、もう…魔法使いなんて名乗れないな」  
「ッ！」

それを聞いて、居た堪れない様に立神君は出て行つた。

「だ、大丈夫よイツセー君！イツセー君には赤龍帝の…」

「皆出て行つてくれ!!」

イリナさんが元気づけようとしたその時、イツセー君は絞り出すかのように叫んだ。

「い、イツセー?」

「…今は、一人にさせてくれッ」

……………イツセー君。

「…皆、行きましょう」

部長に促され、僕達は部屋を後にした…イツセー君。

「……………クソッ!!」

「……イツセー君、大丈夫かな？」

部屋の外に出たイリナさんは、心配そうに扉を見つめていた。

すると部屋の外に立っていた立神君は、何処かに行こうとしていた。

「……立神先輩、何処に行くんですか？」

「……アイツらを探す」

そう語る立神君の顔は、怖いくらいに真剣だった。

「何も手掛かりすらないのよ？ 闇雲に探してもッ」

「でも探すしかねーだろっ!!」

立神君は悔し気に叫んだ。

拳を震わせながら、彼は決意するかのように言った。

「俺がもつとしっかりしてたら、イツセーのドラゴンが消滅する事はなかったんだ……」

アイツらを倒さなきゃ、イツセーにも顔向けすら出来ねーんだよ……ッ！」

そう言つて立神君は駆け出すようにその場を後にした。

「……どいつもこいつも荒れてんなア」

「……ドライグ！」

僕達の後にやつて来たのは、イツセー君と同じ顔の——ドライグだ。

「相棒に追い出されたよ。……相当参ってるからな」

「貴方まで……」

「混乱してるんだろう、イツセーは」

「……茂殿」

心配してやってきた茂さんは、イツセーの扉を見ながらそう呟いた。

「やらなきゃいけないって言う思いと、魔法を失ったショックがごちゃ混ぜになってる。

……望んで得た力じゃないとはいえ、魔法はイツセーにとってはもう自分の一部みたいなものだったからなあ」

「……イツセー」

「……暫くはそつとしておくしかない、か」

……兎に角、今は僕達出来る事をやるしかないさそうだ。

……イツセー君、こう思うのは傲慢だけど……君が立ち上がってくるのを、僕達は待ってるよ。

「……俺は」

自室にて、イツセーは自分の無力さを呪っていた。

相棒のドライブすら締め出して、苦悩しているそこに、扉を叩く音が。  
「…失礼します」

「…」

入室したのは、グレイファイアだった。

イツセーは一瞥しただけで、直ぐに項垂れる。

「……今は、一人にさせてくれ」

「…また、一人で抱え込むおつもりですか」

落ち込みを隠さずに言うイツセーに、グレイファイアは冷静にそう告げる。

臆せず近付く彼女に、イツセーはしかし動こうとはしない。

「…イツセー様、少し外に出ませんか？」

「……」

「何時までそうしていても仕方ないでしょう。行きますよ」

項垂れるイツセーの腕を掴んで引つ張り上げた。

そしてそのまま引かれるまま、外へと繰り出すイツセーであった。

「……」

グレイファイアに引かれながら外を歩くイツセー。

すると、以前会った兄妹と出くわした。

「あ、魔法使いのお兄ちゃん！」

「…詩織ちゃん」

少女——詩織がイツセーに魔法を見せてほしいと強請る。

制止しようとしたグレイフィアをやんわりと止めて、イツセーは困ったように弱々しく笑う。

「……ごめんな。お兄ちゃん、魔法が使えなくなつたんだ」

「えーっ！」

「詩織、お兄さんを困らせちゃ駄目だぞ」

「…はーい」

立ち話もなんだと言う事で、四人は公園に向かう事に。

詩織とグレイフィアが遊んでいる傍らで、少年——健太とイツセーはベンチに腰かけていた。

「詩織は、ああ見えて結構重い病気なんです」

「病気？」

鸚鵡返しに尋ねるイツセーに、健太は頷く。

「来週、手術が決まって…でも不安でいっぱいだから。何とか元気づけようと思って」

「そっか。それで手品を……」

「はい。……全然下手だけど。だから、今日もお兄さんに会えるかもって、また魔法を見せてもらえるかもって」

そう語る健太に、イツセーは力なく笑う。

「ごめん。魔力が消えて初めて分かった。俺には魔力がなきゃ何にも出来ないって。魔法が使えなくなっただけで、女の子一人喜ばせる事も出来ないって……」

「……そうかな？」

イツセーの自虐を否定した健太に、イツセーは顔を上げる。

「俺が嬉しかったのは、妹を喜ばせようとしてくれた事なんです。……魔法が凄かったって言うのも本当なんですけど、それより妹の為に動いてくれた事が、何より嬉しかったです。——魔法より、その心がさ。だって、俺の下手くそな手品、最後はちゃんと笑ってくれるから」

朗らかに笑う健太に、イツセーは何かを感じたのか、表情が僅かに光が灯る。それを見ていたグレイフィアは、安堵したかのように微笑む。

「漸く見つけたぜ、大食い野郎」

『…何の用だ、アーキタイプ』

一方、吼介は探しに探し回り、漸くガルムを見つけた。

当のガルムは静かに、眼前に立つ吼介を見つめる。

「あのファントムを出せ！」

『…貴様に用はない』

「お前らになくても俺にはあるんだよ」

《ドライバーオン！》

ビーストドライバーを顕現させるも、ガルムは動く気配を見せない。

「変、身っ!!」

《セット！オーブン！L・I・O・N！ライオン！》

『…話を聞かない奴だ』

ダイスサーベルを振りかざして飛び掛かるビーストに対し、ガルムは魔術攻撃で迎撃する。

ビーストは空中で身を捻ってそれを躲すと、サーベルの刃を突き立てる。

『…フン』

「どわっ!?!」



だがガルムは答えた様子を見せず、ビーストを殴り飛ばす。

後退するビーストはバッファリングを徹め、バッファマントを装着する。

《バッファア！ゴー！バッバ・ババババッファア！》

「オラアアアツ!!」

『馬鹿正直な奴だ………ツ!』

迎撃しようとしたガルムだったが、ビーストの背後から飛んできた攻撃を弾いた隙に突進を受けてぶっ飛ばされる。

ガルムが目線に向けた先には、グレモリー眷属の姿が。

「リアスさん……!」

『有象無象がまたぞろと……レギオン』

流石に数が多いと思ったのか、ガルムはレギオンを召喚する。

黒い霧から飛び出したレギオンは、そのまま木場へと飛び掛かる。

「祐斗、気を付けて!」

「ツ!!」

レギオンの薙刀を受け止めた木場は、薙刀を掴んで勢いよく持ち上げる。

浮かび上がったレギオンの体に、ゼノヴィアがエクス・デュランダルを叩きつける。

『………』

だがレギオンは何事もなく立ち上がる。

「何だコイツ…痛みを感じていないのか？」

『…レギオンは痛みを感じない。その様に洗脳している』

「同じファントムを洗脳…!？」

普通ではないその考えにリアスは気味悪さを覚える。

それを気にする事もなく、ガルムはその理由を淡々と語る。

『…奴は自分が美しいと感じた人間の心を破壊する悪癖がある。ただの人間ならまだ良いが、貴重なゲートをも襲ってしまい行方を晦ませた…故にワイズマンが自我を封じさせ、私の支配下に置かせている』

「そんな危険な野郎だったってのか…!」

『今回の作戦にはレギオンの力が必要なのでな…』

「それはイツセーが関与しているのかしら…ツ?!」

『貴様らが知る必要はない…レギオン』

リアスからの質問を一蹴し、ガルムは両肩から咆哮、レギオンは薙刀からの空間断裂を放つ。

ガルムの攻撃は魔方陣で防いだが、空間断裂は魔方陣すら貫通して命中してしまう。

「うっ…!これは!」

「な、何だよこれ!？」

ビースト達は直撃こそ避けたが、腕や足に命中してしまい、その場から動けなくなってしまう。

『空間が修復されるまではそこからは動けん……大人しくしてもらおうか』

「……何を、する気だツ!？」

『……最後の実験だ。ウィザードのな』

そう言つてガルムとレギオンは霧に包まれ姿を消した。

「……イツセーツ!!」

「……………」

ガルムが狙うイツセー本人はと言うと、サバトの儀式が行われたとある海岸へとやって来ていた。

崖の向こう側に広がる水面を見つめるイツセーは、

「……今の俺に、出来る事なんてないのにな」

やはり自嘲気に、淡く微笑んでいた。

吼介がフアントムを発見したと聞いたリアス達が出て行つたと聞いて、気づけば自分

もバイクを走らせていた。

だが途中で自分は魔法使いでない事を思い出し、進路を魔法使いとしての始まりの場所——この地にやって来ていた。

黄昏るイツセーだが、彼の頭には健太の言葉と、家を出る前に、茂に言われたある言葉がずっと離れないでいた。

『イツセー。……命を救う事だけが、ゲートを救う事じゃないぞ。一番は、お前自身の心だ。誰かを救いたいっていう、気持ちだ』

「魔法より、心か………情けねえな、俺」

そう言うイツセーだが、その顔には力強さが戻っていた。

「…今の俺だって、戦えない訳じゃない。………やれるだけの事は、やるさ」

『……魔法も使えない魔法使いが、か?』

「…ガラム！」

だが最悪のタイミングと言うべきか、独りのイツセーの元にガラムとレギオンが到着してしまった。

『独りか。ならば丁度良い』

「…独りだったら倒せる、つてか？」

『いや、実験を容易く行えるのでな……ッ！』

そう言うや否や、ガラムは火球をイツセーへ向けて放つ。

横に飛んで回避するイツセーは、籠手からアスカロンを出して、ガラムへと斬りかかる。

『…』

「ちっ！」

だがその刃はレギオンに弾かれる。

『……禁手すら満足に運用できない状態で、何処まで足掻ける？』

「…ドライブ、まだ出来ないのか？」

『少し時間が掛かる。…魔力があつた時と違って、それ相応に時間がある』

ドライブに言われ、イツセーは軽く舌打ちしつつ籠手の宝玉を見る。

まだ禁手が発動するには時間が掛かる———そう思ったイツセーの足元から、這い出るように腕が絡みついてきた。

「なっ———！」

瞬間、絡みついてきた腕が爆発し、イツセーはボロボロになりながらも何とか足を踏ん張る。

「はあ、はあ……ッ」

『相棒!』

「グハッ!!」

荒く息を吐くイツセーに、ガルムは容赦なく拳打を浴びせる。

倒れ伏すイツセーを蹴り上げ、魔力砲で海岸まで吹き飛ばした。

「うあつ……!!くそ、つたれえ……ッ!」

『……』

「ッ、アア!!」

飛び掛かって来たレギオンの攻撃を躲して拳をぶつけるイツセーだが、レギオンの体は僅かに揺らぐだけ。

振り回した薙刀を伏せて回避するが、地中から生え出たガルムの腕に殴り飛ばされてしまう。

「……まだ、まだだっ」

アスカロンを支えにして、何とか立ち上がるイツセー。

息を荒げるイツセーを見て、ガルムは無感情に見つめる。

『……やはり、そう簡単には折れないか』

「あつ、たりめえだ……ッ!!」

『…それでこそだ。あの方の期待を裏切ってくれるなよ』

ガラムは魔方陣を複数展開させ、邪悪な魔力を放出させる。

それを避けようとするイツセーだったが、先のダメージのせいで足が殆ど動かない。

「や、べえ……ッ」

思わず目を瞑ろうとしたイツセーの眼前、何者かが割り込み、攻撃を防いだ。

「…間に合いました」

「グレイ、ファイア……」

乱入者はグレイファイアだった。

彼女は軽く息を吐いて、イツセーを守らんとガラムとレギオンの前に立ちふさがった。

「リアスお嬢様達も直に來ます。…それまでは、私が貴方方の相手をいたします」

『…ルキフグスの女一人で、私とレギオンを相手取れると思うな』

「…参ります」

グレイファイアは全身から魔力のオーラを噴出させ、ガラムとレギオンへと立ち向かう。

二体のフアントムの攻撃を躲しつつ、的確に攻撃を食らわせるグレイファイア。

だが決定打となる攻撃をガラム達もただで受けず、上手く躲したり同規模の攻撃で相殺してしまう為、大したダメージを与えられないでいた。

加えて徐々にはあるが、グレイフィアのスタミナも削られてきており、持久戦に持ち込まれるかと思ったが――

「…っあ?」

「…イツセー様ツ!!」

ガラムはグレイフィアの攻撃の隙を付いて自身の腕を転移、グレイフィアの背にいたイツセーを縛り上げた。

しまったと思い背後を振り替えるグレイフィア、だがその一瞬が致命的な隙となった。

『…!!』

「っああ!!」

グレイフィアが気付いた時には既に遅く、レギオンの凶刃が彼女を切り裂いていた。次元断裂の線が走ったと同時に、グレイフィアはその場に倒れてしまう。

「…グレイフィアツ!!!」

縛り上げられたイツセーは絶叫する。



愛する人が傷付けられる——それは彼にとってはサバトの時の後悔にすら等しい絶望だ。

自分を縛り上げる腕を力づくで引き千切ったイツセーは、這う這うの体でグレイフィアに駆け寄る。

幸いと言うべきか、命の別状はないようで、イツセーは安堵の息を漏らす。

『…無様だな』

だが安堵の時は直ぐに過ぎる。

ガラムとレギオンは大したダメージを受けておらず、対するイツセーは満身創痍、しかも手負い状態のグレイフィアもいる。

まさに絶体絶命の状態であった。

『…もう諦めろ。今の貴様には、誰も救えない』

「……ッ」

ガラムの言葉に、イツセーは何も言い返せなかった。——だが、齒を食いしばりながらも、彼は再び立ち上がる。

その姿を見たガラムは、歩む足を止めた。

「…確かに、今の俺には魔力はない……魔法も使えない……けどなっ」

『……』

「…例え無くなったとしても、無くしたくないもんだつてある………俺自身の、信念がツ!!!」

『…言葉だけで他者を救うと?』

「…俺はツ、それを教えられた……命を救う事だけが、助ける事じゃない…。魔法が使えなくても、希望になれるつて……だから、守りたいんだつ!!!」

迷いを振り切るかのように叫んだイツセーは、持てる力の全てを込めて、ガルムを殴りつける。

ガンツ!!!

鈍い打撃音が響く——ガルムは微動だにせず、だがイツセーは尚も叫ぶ。

「俺は、諦めない……命ある限り、目の前の希望も、命もツ!諦めねええええええつ!!!」

イツセーの体から、叫びに呼応するかのように溢れる虹色のオーラ。

気迫とオーラに圧倒されるかのように、ガルムはイツセーから離れて距離を取る。

やがてイツセーの体から溢れるオーラは、目の前に一つの指輪を生み出す。

フレイムスタイル、及びフレイムドラゴンの指輪に似た、何処か異なる透き通った赤

い指輪。

「指輪……まさかつ」

『…相棒、そのまさかだ』

歓喜の色を隠さないドライグの声を聞いて、イツセーは腰に右手を宛がった。

《ドライバーオン・プリーズ》

何時も聞いていた音声と共に、イツセーの腰には銀色のベルト、ウイザードライバーが顕現していた。

瞬間、イツセーの目の前が暗転する。

『…心の強さだけで、この俺を蘇らせるとはな』

「…ドラゴン」

重く響くような低い声でそうイツセーに語らうのは、消滅したはずの彼のもう一人の相棒——ウイザードラゴン。

信じられないと言わんばかりの面持ちのイツセーに対し、ウイザードラゴンは心底楽しそうに語る。

『本当にお前は面白い奴だ……今改めて誓おう。——兵藤一誠、お前の希望になると!!』

そう吼えるウイザードラゴンは、イツセーの体内に溶け込むように消えていく。

イツセーは軽く深呼吸をして、ドライバーを操作する。

《シャバドウビタツチヘンシーン! シャバドウビタツチヘンシーン!》

「——変身!!」

力強く言い、左手をベルトに翳す——が、何も起きない。

失敗かと思ったガルドだったが、イツセーの体の輝きは衰えず、寧ろ増幅しているのに気付く。

まるで指輪に反応しているかのように。

《ウエルシュインフィニティー!! ウエルシュインフィニティー!!————プリーイズ  
!!》

指輪に込められた魔法の詠唱が終わると同時に、イツセーの体表に輝が入った。

ゲートが絶望した時と同じようだが、輝は禍々しい紫色ではなく、眼が眩むほどの輝きを放っている。

直後、イツセーの足元に発生した魔方陣から、二体の龍の幻影が飛び立つ。

柱を旋回して再びイツセーへと龍達が戻ると、魔方陣が天へと昇っていくにつれ——  
輝から発生した赤いダイヤモンドが彼の足を、腕を、体を、頭部を覆っていく。

《ヒースイフドー！ボーズバビユードゴーン!!》

赤いダイヤモンドが砕けると、そこにいたのは従来のウィザードと赤龍帝の鎧が混ぜ合わせになったかのような、これまでとは全く異なる姿のウィザード。

白銀のローブに透き通った赤い装甲、その姿を見たガラムと、ガラムの差し向けた  
グルル達を捌き漸く追いついたリアス達は、それぞれに感想を漏らす。

「イツセー、なの…?」

「変身、してますよ…‥‥‥イツセー先輩、魔力が戻ったんだっ!!」

歓喜の声を上げるリアス達、片やガラムの方は——

『…遂に至ったか』

…意味深な事を呟いた。

「——さあ、ショータイムだ……っ！」

己の力のみで発現させた、決して希望を諦めない赤龍帝のもう一つの姿。

——ウイザード・ウエルシユインフィニテースタイル。

『…レギオン』

ガルムの指示の元、レギオンは跳躍してウイザードWISへと斬りかかる。

だが空間は斬れる事無く——寧ろレギオンの薙刀がへし折れてしまった。

『……』

その光景にガルムは僅かに驚愕する。

空間すら切り裂くレギオンの斬撃、それを物ともせず、逆にレギオンの得物が折れてしまったと言う事は——今のウイザードは空間断裂すら寄せ付けないと言う事になる。

事実、ウイザードWISは無傷であり、レギオンを連続で蹴り上げ、大きく蹴飛ばす。レギオンを引き剥がしたウイザードWISの体から、小さな光球が出てきた。

「…行くぞ、ドライグー！ドラゴン！」

何かを察したのか、ウイザードW I Sがそう叫ぶと、体から再び二体の龍が飛び立つ。光球に二体の龍が融合するかのよう溶け合うと——光球は一本の槍になった。

槍は赤色をベースにしたもので、穂先付近にはドラゴンの側頭部が描かれた斧状の赤い刃が付いており、槍の刃が付いた根元にはドラゴンの装飾があり——まるでドラゴンの口から槍の穂先が突き出ているかのようなビジュアル——槍と言うよりはハルバードに近い武器であった。

ウイザードW I Sはそれを手に取ると、臆せず向かってきたレギオンを槍部分で斬り付ける。

長い持ち手の部分でレギオンを突き飛ばし、距離を取ったウイザードW I Sは、ベルトを操作せずに指輪をベルトに宛がった。

《ウエルシュインフィンテール!!》

「ハアアツーーー!!」

ハルバードを構えて突進するウイザードW I Sの姿が——無数の煌めきを残して消えた。

いや、消えたのではない。目にも止まらない高速移動で、レギオンを四方八方から斬

りつけている。

『…時間干渉による高速移動か』

ウィザードWISの高速移動のカラクリを見抜いたガラムは、静かにその場から姿を消した。

ウィザードWISは槍を短く持つ。すると、

《Change! Wizardragon Ax!!》

音声に合わせて槍部分の刃が伸縮、代わりに斧部の刃が拡大し、槍は長柄の斧となった。

言葉もなく、己の意思すらなくただ只管にウィザードWISに挑むレギオンだが、斧による豪快な斬撃を食らい、呆気なく吹っ飛ばされる。

「ファイナーレだッ!!」

《ハイタッチ!》

ウィザードWISはハルバードの持ち手を引き延ばすと、縦になって収まっていたハインドオーサーが展開、そこに左手を宛がう。

ウィザードWISの左手を通じて、ハルバードに魔力が行き渡る。そのまま振り回していると、ハルバードはどんどんその体積を大きくしていき、最終的にはウィザードW



ISの身の丈を超える大きさになった。

《ロンギヌスストライク!!ギラギラア!ギラギラア!》

「ハアアアアアア……デヤアアアアアッ!!!」

巨大なハルバードを持ったまま跳躍、そのままレギオン目掛けてハルバードを振り下ろした。

真正面から斬られた事で、レギオンの肉体からは無数の火花が溢れ出る。

『……………え、エキサイティン、グ……………ッ!!!』

最後の最後に自我を取り戻したのか、レギオンはそう言い残して爆散した——。

《リカバリー・プリーズ》

戦闘が終わると、ウィザードWISはアシアと共にグレイフィアを回復させる。

「…イツセー、様」

「……ああ、俺だよ」

無事に目を覚ましたグレイフィアの前で、変身を解いたイツセー。

「…グレイフィアの、皆のお陰だ——本当に、ありがとう」

「……やっぱり、イツセーは魔法使いじゃなきゃね」

リアスがそう朗らかに言うと、全員が笑顔と共に頷いた。  
イツセーの顔にも、久しぶりの笑顔が戻って来ていた――

――

後日――

「…ほいっ!」

手術が成功したらしい詩織の目の前で、手品を披露する健太。

今回は練習の甲斐あつてか、見事な花束を出して見せた。

「詩織ちゃん、元気になつて良かったですね!」

「手術が成功したからかしら?」

「…いや、それだけじゃないよ」

悟つたように笑うイツセーは、ポケットからピンポン玉を出すと、兄妹へと歩み寄る。

「上手くなつたな。んじゃ俺も……チチンプイプイ!」

そう言つて、両手の間にあるピンポン玉を浮かせるイツセー。

それを見た詩織は、目をキラキラさせながらイツセーへと駆け寄る。

「魔法使いさん！それも魔法なの？」

「ふふん、どっちだと思おう？」

イタズラ気に笑うイツセーに、リアス達も駆け寄る。

「折角だから、皆で手品ショーをしましょうか」

「皆、詩織ちゃんの為に練習したんですよ？」

「そうなの?!」

嬉しそうに満面の笑みを見せる詩織に、朱乃も自然と笑顔になる。

「私の大食いマジック…ぜひご覧ください……」

「小猫ちゃん、それは手品って言うのかな……」

「大食いなら俺も得意だぜ！」

「立神君、大食い勝負じゃないよ。手品だよ手品」

「私もこの日の為に練習したのがある——そう、聖剣ジャグリング！」

「うわあ、ゼノヴィアったら教会に喧嘩売ってる……」

『『ワンワン!!』』

和気藹々としながら、皆思い思いに詩織の為に手品を披露する。

誰かを笑顔にするための行動——それも立派な、魔法なのである。

「皆さま、そろそろ昼食にしては如何でしょうか」

「詩織ちゃんと健太君も遠慮せずに食べて良いぞー!」

『はい!!』

——冥界の深淵、冥府にて。

《ファファファ、以前は烏と蝙蝠の頭が来たと思えば、今度は貴様が来ようとはな……》  
冥府を統べる神、ハーデスは来客を前にして不気味な笑みを浮かべる。

「……」

来客——白い魔法使いは、自分に向かってきた死神を切り払うと、ハーデスへと向き直る。

「…貴様には少しばかり礼を言いに来た」

《ファファファ…お礼参りにしては随分と物騒ではないか。私の死神達をこうも屠つてくれるとは》

白い魔法使いに向かって気味悪く笑うハーデスが視線を送ったのは、白い魔法使いの背後。

そこには無数の死神達の軀が転がっていた。

全て、白い魔法使いが一人で片づけたものだ。

「…貴様が何を企んでいるか等、微塵も興味はない。だが——」

《…本気か。如何に貴様が、嘗て神に反逆した天——》

白い魔法使いの殺気を前に、ハーデスは余裕を崩す事なく彼の素性を語る。

だが、全てが語られる寸前に——

《…！》

ハーデスの胸元に、金色の槍が突き刺さっていた。

「これ以上、貴様に引つ掻き回されるのも困るのでな」

《…この程度の見戯で、神を欺けるとでも思うたか？傲慢な賢者よ》

だがハーデスは神、その程度の事は気にも留めずに、白い魔法使いへと攻撃をしようとした。

だがそれは、刺さった得物が普通のものだったらの話だ。

ハーデスの胸を抉るそれは、通常の得物ではなかった。

《……ムウツ!?》

自分の魂に響かばかりの激痛が走り、思わずハーデスは膝を付く。引き抜こうとその槍——ハーメルケインの刃に手を伸ばした瞬間、手にも激痛が走った。

《貴、様……一体、何を……オオツ!!!》

「神であればそれは誰もが恐れる代物。その刃は……ある悪神との契約により頂いた土産物を加工したものだ。——さて、気分の方はどうだ？ハーデス」

《フェンリル……ツ!!!》

魂を滅ぼす勢いの激痛に喘ぐハーデス。

そんなハーデスの様子を気にも留めずに、白い魔法使いは冥府の更に深淵へと向かうとする。

「貴様は現存する神の中では最も強大だ。そう簡単に死にはせんだろうが……だからこそその痛みは貴様を死にたくさせるほどの激痛として苛む。その様では暫く表へは出られまい。……早い内に隠居すべきだったな」

《貴様……貴様は……何を望むと言うのだ……アアツ!!!》

「知れた事。——神のいない世界。私の目的は、今もその為にある」

そう言つて白い魔法使いは、無造作にハーデスからハーメルケインを引き抜く。

無理矢理引き抜かれた事により痛みは更に強くなり、ハーデスは思わずその場に倒れ伏す。

「…安心しろ。冥府も新世界創造の暁には一つとして統合される。…私の望む世界に、死という概念は存在しないのだから」

白い魔法使いは今度こそ冥府の深淵——コキユートスへと進んでいく。

ハーデスの急変を駆け付けた死神部隊が発見したのは、それから直ぐの事であった。

冥府の深淵、コキユートス。

生前に重い罪を犯した者、現在でもテロ行為を仕出かした者達を収監する独房のような場所。

そこには神話の時代、初めての人類であるアダムとイヴを唆して知恵の身を与えた事で神の怒りを買った天使——サマエルが封印されていた。

「……サマエル」

白い魔法使いの呼びかけに、しかしサマエルは何も返さない。

ただ拘束具の隙間から、不気味に輝く光を放つだけ。

「同じく、嘗て神の怒りを買った者の誼として会いに来た。……安心しろ。直にお前もその苦しみから解放されよう。……その時は、近づきつつある」

白い魔法使いは魔方陣から、紫色の魔法石を取り出す。

淡く、不気味な輝きを放つそれを見つめっていると、何者かが白い魔法使いの元に現れた。

『——様。ウィザードが、インフィニティーへと覚醒しました』

その報告を受けると、白い魔法使いは手元に小型の魔方陣を展開させる。

魔方陣に映されたのは、レギオンと戦うウィザードWISの姿が。

「……とうとう、ここまで来たか。だが」

白い魔法使いは、初めて歓喜を含めた声を漏らす。

だがそれと同時に、懸念すべき材料がある事にも気づいていた。

「……自力で発現させた魔法、か。少しばかり面倒だな」

『排除しますか?』

「いや、そう急ぐ必要はない。いざとなれば私が何とかしよう。……あとは例の石の鍊成だ。何としても完成させよ——ガラム」

『…ハツ』



そう言つて白い魔法使いに跪いたのは——ガラムであった。

# MAGIC155 『合格発表』

「…ふあゝあ」

アサヒが眩しいあくる日の朝、皆様ご機嫌如何でしょうか？

皆さんのヒーロー、イツセーです

『何だその挨拶は』

偶にはいいだろ…って、ドラゴンか。ドライグはどうしたんだ？

『まだ寝ている』

そっか…ドラゴン、ちゃんといるんだな。

『…お前、寝惚けてるのか？』

…いや、夢じゃないんだな、って思ってた。

『残念な事にな』

「残念なんて言うなよ。やっぱりお前がいないと調子狂うし」

『…殊勝な事だ』

よし、起きますか…つと。

「……って、俺床で寝てたのか!？」

今気づいたけどよ、何で俺床にいるんだよ!？」

ベッドの方を振り向くと、足を突き出したゼノヴィアの姿が……。

お前かゼノヴィア!部屋の主を蹴り落とすなよ!

「イツセー様、皆様。お食事の準備が整いました……何故床におられるのですか?」

「蹴っ飛ばされた」

俺は起こしにに来てくれたグレイフィアにそう簡潔に説明した。

「おっすお前ら、全員揃っているか?」

朝飯も食べて鍛錬も終えた午後、俺達はリビングでアザゼル先生に集められた。

「先生、年下にお金借りるってプライドないんすか?」

「年下に借りるほど困ってねーよ!!……先日の昇格試験の結果が先程発表されたからな。忙しいサーゼクスの代わりに俺が代理で告げる」

マジか!事前連絡もないって、スゲー緊張するな!

「まずは、木場。——合格だ、おめでとう。今日から中級悪魔になる。正式な授与式は後日だけだな」

おお、合格か!

「やったな、木場！」

「ありがとう」

そう礼を言いながら木場は書類を受け取った。

先生は次に朱乃さんの名を呼んだ。

「次に朱乃。合格！おまえも中級悪魔だ。一足早くバラキエルに話したが、伝えた瞬間男泣きしてたぞ」

「…もう、父様つたら」

照れながら書類を受け取る朱乃さん……バラキエルさんの男泣きがすつげえイメー  
ジしやすいな。

「んで…イツセー」

「はい!!」

「誠に残念だが……」

え、いきなりそれ!?

俺、もしかして不合格ですか!?

『やっぱ落ちたか』

『根性童貞だしな、落ちても文句言えんだろう』

黙ってくれるかお前ら!?

後根性が童貞なのと試験結果は関係ないだろ!!

「……………なんてな！お前も無事に合格だ！」

「————やっただぜえ!!!」

思わず飛び上がってガッツポーズする！

「おめでとうございます、イツセー様」

グレイフィアは微笑みながら俺の合格を祝福してくれる。

他の皆も変わりばんこで俺に祝ってくれる。

『やったじゃないか、相棒。まさか上級悪魔の赤龍帝が誕生するとはな』

『ま、当然の結果だな……………おめでとう』

お前らもありがとな！

「数日後には上級悪魔昇格の儀式を行う。それに関してはグレモリー家がバックアップ

をしてくれるだろうから、心配すんな」

「ぎ、儀式つすか？それって悪魔と融合する……………」

「デビルマン方式じゃねーよ。まあそんな難しいもんでもないから大丈夫だ……………つと、

サーゼクスからか？」

アザゼル先生の通信端末に、どうやらサーゼクス様から連絡が入ったらしい。

「わりい、急用らしいから俺は戻る。あ、イツセー！茂殿にも伝えとくんぞぞ！」

そう言つてアザゼル先生はリビングを後にした。

———

「ハーデスが……!?!」

俺、アザゼルはサーゼクスからの通信により知らされたとある一報を知らされ、驚きのあまり開いた口が塞がらなかつた。

『本当だ——冥府が襲撃を受け、しかも冥府神・ハーデスが重傷を負つた』

画面の向こうにいるサーゼクスは真剣な面持ちで、首を横に振る。

……どうやらマジらしい。

イツセーの魔力が復活した直ぐ後に、冥界にいるサーゼクスに冥府の死神からの通信が入つたらしい。——冥府が襲撃された、と。

サーゼクスも初めは半信半疑だつたらしいが、冥府の監視映像と、実際に床に伏せるハーデスの元に赴いたとの事で、それが真実なのだと悟つた。

『冥府は現在ハーデスの代わりに残つた死神とハーデスの側近であるタナトス殿が中心になつて運営しているが……この影響は、大きい』

「だろぅな」

だが……裏を返してみるなら、これからはハーデスによる横槍はないと言う事でもある。

まあ不謹慎ではあるから口には出さんか——ぶっちゃけあの骸骨ジジイは嫌いなので、これを機に大人しくしてもらえるとありがたいもんだ。

「……で、肝心の襲撃者については分かっているのか？」

『ああ。——この男だ』

サーゼクスはそう言うと、目の前に冥府の監視映像を俺に見せた。

その映像の中には、金色の槍を刺され蹲るハーデスと……それを見下ろす、白いローブの魔法使いみたいな奴がいた。

「つて、白い魔法使いが襲撃したつてののか!？」

『……この映像を念のため、アジュカに解析してもらったが……改竄されたものではない』  
……つまり、本当に白い魔法使いが襲撃したつてののか。

だが何故だ？此奴にとつてハーデスの野郎が不利益を働いた以外に考えられないが……！

俺は一つの可能性に至った。

「……イツセーか？」

『…アザゼルも、そう考えるか』

やはりサーゼクスも同じ考えだったらしく、神妙な顔で頷いた。

確かにイツセーの奴は今回の魔獣騒動で生死が分からない状態になっちゃったし、騒動の裏にはハーデス達が一枚噛んでいた…奴にとってそれが気に食わなかったから襲ったって事か？

『私は彼の師ではない。ただ魔法使いになるのかと導いただけだ。そして彼は私の手を取った……それだけの関係だ。力を与えているのも、私の個人的な事情に過ぎない』

「個人的な事情……か」

俺は腕を組んで、あの時の白い魔法使いの言葉を思い出していた。

ヤツの言う個人的な事情、というのがあるのは間違いない……だがそれだけではこいつの正体を掴む事は出来ない。

何かこの映像の中にその断片でも良いから何かないものかねえ……そう思いつつ映像を睨み付ける俺の視界の端に、何かが映り込んだ。

「ん？」

『どうした、アザゼル』



「…サーゼクス。悪いがこの映像の——白い魔法使いの足元の部分をズームしてくれるか？」

『分かった』

サーゼクスがズームしてくれた白い魔法使いの足元を注視していると……そこにある物が映った。

——それは、灰色の羽根だった。

「ツ!!」

俺は愕然と、しかしもう一度その部分を見るが、羽根は綺麗さっぱり消えていた。

だがあれは、確かに……。

『…アザゼル、何か見つけたのか？』

「……」

『アザゼル？』

サーゼクスの問いかけに、俺は暫く言葉を返せずにした。

『お前達では私には勝てんよ——アザゼル、ミカエル』

あの羽根は……見間違っう筈がない。

アイツが……アイツが白い魔法使いだったのか?!

あの男が生きていたって事になる………だったら、白い魔法使いの目的ってのは、まさか……!?

「……すまん、サーゼクス。今日はこれで通信を終えたい」

『どうしたんだ?』

「……今は答えられん。まだ確証が持てないからな。………確証が持てたら、連絡する」

俺はサーゼクスとの通信を終えると、別の通信回線を入れる——相手は、ミカエルだ。

『どうしましたアザゼル。あなたから連絡とは珍しいですね』

「ミカエル……もしかしたら、奴が生きているかもしれない」

『ツ!?!』

ミカエルは奴、という言葉だけで顔を強張らせる。

『本当、なのですか……?』

「まだ確証は持てないが……」

『…分かりました。私の方でも、調べてみます』

「…頼む」

ミカエルは頬の傷を指でなぞりながら、真剣な面持ちで続ける。

『……彼は————天界が生み出した大罪ですからね。生きているのであれば、絶対に見つけ出さねばなりません』

「…ああ」

# MAGIC番外編 『上級悪魔昇格の儀』

おつす、イツセーだ。

今日は待ちに待った上級悪魔昇格の日だ。

その為に今日は冥界にいる。因みに俺の他にはオカ研メンバー、リアスのご両親におつちゃん、グレイフィア、ティアもいる。

「緊張するな……」

こんなに緊張したのって高校試験以来……いや、上級悪魔の試験以来か？

『ド派手にやっちゃまえば良いだろ』

出来るか！この儀式って真面目にやらなきゃいけないんだぞ!!

ボケたらえらい事だぞ！

…まあ一応、儀式についてのレクチャーはグレモリーのご両親からみっちりレクチャーを受けてる。

リアスやグレイフィアも協力してくれたおかげで、何とか全部頭に叩き込みはしたけど……いやはや、それでも緊張は抜けないぜ。

「――」で、魔王様が読み上げた承認証をあなたに渡すから、あなたは教えた言葉で返

すの。次に私があなたに王冠を被らせるわ。これは眷属から『王』が出たことを認める儀式なの。そして、最後に『王』の登録をする石碑に移動して、魔王様のお言葉の後に手で触れればOKよ」

……因みに今は、実際にその儀式の流れに沿った練習、というか最終確認をしている最中なのだ。

言葉にするなら単純なんだけどな、ふぎけ無しで行かなきゃならない。

『盛大に俺が秘蔵のオヤジギヤグかましてやろうか?』

冥界グローバルフリーズ待ったなしだから止めてくれ。

『裸踊りだったら問題ないんじゃないか?』

『成程』

成程じゃねえよ!お前も変な事言って煽るんじゃないよドラゴン!!

「しかもお前擬人化したら俺と同じ顔なんだから変な誤解を招くわ!!」

「どしたの、イツセー?」

「あ、ごめんリアス。またドライグが馬鹿な事を……」

「ふふ、でも元気が出て良かったんじゃない?」

「…うん、そうだな」

ドラゴンが消えて、元気なくしてたもんな、ドライグ。

『べ、別にお前が戻って来たからって嬉しい訳じゃないんだからねっ!』  
『そんな悍ましいツンデレを誰がやれと言った』

本番も近くなってきたと言う事で、俺は正装を着こんでいた。

主であるリアスも紅いドレスで、他の皆もきっちり着込んでいる。

親族であれ眷属であれ、例外はないとの事だ。まあ俺とリアスは儀式の為の衣装をも  
う一着着るんだけども。

「お嬢様、イツセー様、お時間です」

そしてグレイフィアもメイド服ではなくドレス姿だ。

何時ものメイド服も良いけど、こういうドレス姿も似合っつて良いな…。

「…」

俺が暫しグレイフィアに見惚れていると、グレイフィアは俺の耳元まで近づいて、こ  
んな事を囁いてきた。

「貴方が望むのですしたら、後でじっくりと見ても構いませんから…ね?」

「は、はいっ」

よし、気合入れないとなッ!!

『やっばいっ根性童貞だぜ』

『だな』

だまらっしやい!!

――

魔王領にある首都、リリスへとリムジンで向かう……けどまあ、凄い嚴重な警備態勢だな。

『お前ほどの有名人が昇格だからな。しかも段飛ばしで上級悪魔だ、万が一を考えるならこれだけやっても不思議じゃないだろ』

「それに一大イベントでもある。一般の民衆にも姿を見せておく必要があるからな。それをするととなると、ドライグの考え方でも間違いないんだ」

成程ねえ……そう思っていると特に異常もなく到着したのだった。

到着して直ぐに、俺とリアスは皆と別れて別室に待機する手筈だ。

控室では男用の化粧を施され、儀式用の衣装に身を包み、髪もオールバックにしてもらった。

『お前……オールバック似合わねえなあww』

『顔立ちがオールバック向きじゃないからな』

うるせえなお前ら、言いたい放題か！

内心で相棒二人に突っ込んでいると、リアスが出てきた。

「お待たせイツセー。…どうかしら？」

少し赤らんだ顔でそう聞いてくるリアスは化粧を施されているらしく、いつも以上に綺麗に映った。

「うん、似合ってる。流星はリアスだな」

「ふふ、ありがとう」

そう軽く話を交わすと、いよいよ式場の入り口が目前に。

リアスが先に入り、俺が後にくるといいう手筈になっている。

『相棒、ギャグの準備は任せろ』

「頼むから儀式中に喋るなよ…！」

「イツセー」

「はい」

イカンイカン、真面目にやらないと…そう思っていたら入場の演奏が始まり、俺とリアスは入場する。

立派な会場には冥界のお偉方が立って拍手をしてくれる。



来客の方にはグレモリー眷属にシトリー眷属にサイラオーグさん……おお、ライザーまでいる。

見に来てくれたのか、なんだかんだで嬉しいな。

……ヴァーリの奴も来てるな。一応連絡はしたけど、まさかヴァーリも来るとはなあ。

『相棒、一回で良いからコケてみてくれよ』

出来るか馬鹿!!……祭壇へと向かうと、そこには魔王の正装に身を包んだサーゼクス様を始めとした魔王の方々。

——いよいよ、か。

「——以上、リアス・グレモリー眷属たる汝、兵藤一誠を上級悪魔とする」

色々と前置きが終わった後、承認証の授与が行われる。

サーゼクス様が承認証に書かれていることを述べ、俺は片膝をついて承認証を受け取る。

「謹んでお受けいたします」

俺は練習通りにそう言うと、係の人に承認証を渡し、今度はリアスに向かって片膝を付く。

リアスは頭を垂れた俺に王冠を被せた……思ってたより重いな。

王冠を被った瞬間、周りから盛大な拍手が起こった。

この王冠を頂戴する儀式が終わったことで、次の儀式が最後になる。

サーゼクス様が再び祭壇の前に立つと手を挙げると、頭上より黒光りする大きな石碑が降りてくる。

『統制者が……俺に戦いを求めてきやがるッ!!』

『俺とお前は……戦う事では分かり合えんと言う事だッ!!』

『『うおーー!!!!』』

うるせえって言うてんだろお前ら!!……この石碑に触れることで上級悪魔、『王』としての登録が済むらしい。

「さあ、新たな『王』、兵藤一誠。石碑の前へ」

サーゼクス様の言葉に従って、俺はオーラを手に纏わせて触れる。

触れた瞬間、俺の心臓——いや、恐らくは『悪魔の駒』が反応した。

『ほお、面白いな。石碑から駒に力が流れ込んでいる』

『駒に?』

『ああ。恐らくは『王』として認める力を流し込んでいるんだろう。王の駒がないのもそれが理由なんじゃないか?』

…そういや、何で王の駒がないんだろうな。

そう思っていると、石碑から俺の手形の光が浮かび上がり、直ぐに戻った。

今ので完了って事か……?

今一実感が湧かない中、サーゼクス様から小箱が渡された。

中には十五個の『悪魔の駒』……俺の駒、か。

「……イツセー君、この儀式が終わり次第、君に話したい事がある。私の元に来てもらって良いかな?」

「……」

俺はちらりと、視界の端でグレイフィアを捉える。

それと同時に、もう一人の気まぐれなお姉さんも……。

「はい。俺も、サーゼクス様にお願いがあるので」

「うん、では待っているよ」

……この駒、早速二つは埋まりそうだな。

まあ、もう一つは微妙なだけだ。

「いやあ、甥っ子がここまで出世できて晴人やコヨミちゃんも天国で喜んでいるだろうなあ……！」

「おっちゃん、泣き過ぎだつて」

「後は子供の顔を見せてくれたら言う事はないんだがなあ……」

「高校生に何求めてんだよツ!？」

「フツに祝ってくれよ、昇格をよ!!」

「イツセー。早くお兄様の元に行つてあげなさい」

「…イツセー様」

「……ああ」

俺はグレイフィアを伴つて、サーゼクス様の元へと向かった。

「失礼します」

「うむ」

扉を開いた部屋には、サーゼクス様とその奥さんのエリスさんがいた。

「…良いんですか、サーゼクス様」

「ああ——イツセー君、私と『女王』の駒を交換をお願いしたい」

『女王』の駒の交換——即ち、グレイフィアが俺の眷属になる。

「グレイフィアの跡を継ぐのはプレッシャーなのだけど、私なりに頑張ってみますわ」

「エリス様……サーゼクス様が大変迷惑をかけるとは思いますが、お願いいたします」

「はい、お任せください」

「あら？これってもしかして……イツセー君、私はあんまり遊べなくなつたかな？」

えーっと、アザゼル先生と言ひ貴方と言ひ、もうちよい自重すべきだと思います。

「……コホン。では、イツセー君」

「……はい」

トレード用の魔方陣を描き、サーゼクス様が手を翳すと、グレイフィアの体内の駒が輝きを放つ。

それに合わせて、俺の持っている『女王』の駒も輝く。

「……今更なんですけど、俺の実力でグレイフィアを眷属に出来るんですかね？」

「問題はないと、私は踏んでいるよ。今の君は鼻肩目に見ずとも、最上級悪魔クラスはあ  
るからね」

そ、そんなにか？と、若干疑心暗鬼になるが、魔方陣の光が消える事はないので、どうやら本当らしい。

魔方陣を介したオーラの流れが若干変わり、俺自身も輝いていく。

サーゼクス様と俺が同調し終わると、儀式は終わったらしく、サーゼクス様は俺の持つ『女王』の駒を受け取る。

「これでトレードは完了だ。今日からグレイフィアは正式に、イツセー君の『女王』だ」  
「結構あつさりしてるんですね……もっと仰々しいもんかと」

「そうかい？それは期待させてしまって申し訳ない」

「い、いえいえ！」

謝る必要なんてないっすよ！

「さて、私の用事はこれで終わりだが……イツセー君の方からも、話があるのではなかつたかな？」

「ああ、それなんですけど——」

俺はある事をサーゼクス様に相談した……何のことだつて？それは、まだ秘密だ。

拜啓、天国の父さん、母さん。

俺、上級悪魔になりました。

赤龍帝眷属

王：兵藤一誠

女王：グレイファイア・ルキフグス

僧侶：空席

僧侶：空席

騎士：空席

騎士：空席

戦車：空席

戦車：空席

兵士×8：空席

## 第十三章：進路指導のワーロツク

### MAGIC156『明け方の訪問者』

「う、うああああああ……!!!」

駒王町のとある辺地、そこでは一人の人間が一体の怪人の前で苦しみながら蹲っていた。

徐々に紫色の亀裂が走っていき、中から突き破るように魔力の塊が生まれる——  
ファントムの誕生で会った。

『ぬうう………』

『…新しい同胞の誕生だ』

妖艶な声でそう呟くファントム——メデューサは、新たなファントムの誕生を祝福する。

『お前の使命はただ一つ、我らが主の為、そしてファントムの為の世界を創造する足掛かりだ。良いな?』

『へっ、良いぜえ。丁度体も動かしたいって思ってた所だからなあ……!!』



双角の魔獣——バイコーンはメデューサにそう言うのと、その場から飛び出していった。

『……』

満足げにそれを見つめるメデューサの背後には——気配を殺したガルムがいた。

『……まだ十分な量ではないな』

そう呟いたガルムの掌には、妖しく輝く魔宝石が胎動していた。

ガルムは翼を広げ、その場から飛び去って行く——それから後に、日が昇り始めていくのであった。

——

おはようございます、皆さん。お久しぶり過ぎて忘れてるかと思いますが、主人公のイツセーです！

……え、さつき似たような挨拶聞いた？ちよつと何言ってるか分かんないですねえ。

あの冥界での魔獣騒動から幾日か経ったあくる日の朝なんだけど……

「……、俺の部屋だよな？」

『『そうだな』』

相棒，sもそう肯定してくれてるんだけど、明らかに俺のベッドではない感じなんだよなあ……。

先ず――

「…すう、すう」

「んんっ、イツセーさん……」

リアスにアーシア……まあこの二人に関しては何時も一緒に寝てるから何も言うまい。

問題はこの後だ。

「…イツセー、くん、もつと強く……」

「ぐう……すう……」

色っぽい寝言を漏らす朱乃さんに腹出して寝てるゼノヴィアに、

「むにや、天界のお饅頭、おいひい……」

「…にゃん」

涎垂らして何やらいやしんぼな夢を見てるイリナに、猫のように丸くなって寝ている小猫ちゃん、

「……」

『あの寝相ずつと保つてたのか……?』

『龍神七不思議だな』

そう二人が言うのも無理はない体勢……死人みたいに手を組んで寝ているオーフィスと——女の子がてんこ盛りになっていた。

…確かに俺のベッドは大きい、ああ大きいよ。

けどな、流石にこの人数は全員寝れないだろ！皆いつの間に忍び込んできたのさ!?  
つっ—か、何で部屋の主の俺は床で寝てんだ!?

『青髪の小娘が寝惚けてお前を蹴飛ばしていたぞ』

青髪……ゼノヴィアか。確かに足が突き出た不自然な状態で寝てやがる。

はあ、例の騒動が片付いて以来、眷属女子全員こんな感じだ。

何つ—か、俺の命の危険があったからか、皆一様に俺と触れたがる……まるで俺がいなくならないように。

まあ迷惑かけたのは申し訳ないと思うし、気持ちだつて分かるよ?

けどさ、余りにも大袈裟過ぎじゃね!?俺何処にもいかねーよ!!

『そつち方面では信用ゼロだな』

『全くだ』

うるせえ!……くそつ、ちよつと否定できない自分に腹立つわ!!

「……ここがモテる男の甲斐性の見せ場だぞ？ イッセー」

「……ティアア？」

何時の間に……俺の勉強机の椅子に腰かけていたのは、龍王ティアマツト、通称ティアアだ。

ティアアは静かに笑うと、俺の横に座り込む。

「小娘たちにとつてはそれほどの事だったんだ。それに、この前お前は自分の魔力を無くして無力感に苛まれていた。だから心配していた分、お前とのスキンシップで繋がりを、温もりを得たいんだろう」

「……うん。それはさ、分かっているんだけど」

「お前は、十分愛される程の魅力を持った男なんだ。もう少し自信を持って」

ティアアは俺を抱き寄せ、そう語りかけてくれる……愛されている、か。

「……うん、そうだな。ありがと、ティアア」

「……」

「あの、ティアアさん……？」

やんわりと離れようとしたが、何故だかティアアは抱擁を更に強くしてくる……ホントに心配、掛けちまったな。

暫くこうしていようと目を瞑ると、扉がノックされ開かれた。

「イツセー様、リアス様、アーシア様、起きてらっしゃいますか？」  
「…おはようさん。レイヴェル」

俺の頼れる敏腕マネージャー系後輩ことレイヴェルちゃんの出場だ。

「す、凄い事になってしまってますわね……私も、参加したかったですわ……」

このノリで君もか!?!止めてくれ、俺の寝る場所がなくなる!

どうせならベッドを大きくしてから参加してくれ!

「……ふあ……………」

と、どうやら我が部長のお目覚めらしい。

リアスは寝惚け眼で抱きしめられてる俺とレイヴェル、そしてベッドへと目配せする。

「凄い事になってるわね、ベッド……………」

いや、ホントにな。部屋主の俺が落ちてるもん。

ティアは漸く俺を開放すると、思い出したかのように言った。

「時にリアス。そろそろ魔法使いとの契約や、吸血鬼がやって来るのではなかったか？」

…そう言えばそんな話してたな。

魔法使いの件は兎も角——吸血鬼は多分、ヴラディ家だな。

「そうだったわね。レイヴェル、魔法使いに関してイツセーのフォローをお願いね。マ

ネージャー、頼りにしてるわ」

「頼むぜ、レイヴェル」

「はいっ！赤龍帝のマネージャーであるこの私、レイヴェル・フェニックスにお任せください！粉骨砕身、イツセー様にふさわしい魔法使いを選抜してみせますわ!!」

おお、頼りになる出来た後輩だ……っ！先輩感動だよ！

「さて、それじゃまずは朝食にしましょう」

「グレイフィア様と茂様が準備を成さっております、さあ皆さん！起きてくださいませー！」

慌ただしくもいつも通りの一日が始まるうとしたその時、来客が扉から入って来た。

「ちやおく、お邪魔してるにゃん」

『エボルトオオオオオ!!!』

朝っぱらからうるせえぞドライブグ!!——来客は着物を着たブラッド族……ゲフン、猫又お姉さんこと、黒歌だ。

「く、黒歌！何であなたがここに!?!」

「にやにや？赤龍帝ちゃんに呼ばれたから来たんだけど……リアスちん聞いてにやいの？」

「イツセー、私初耳なのだけど」

「ゴメン、言うの忘れてた」

「そう言う報告はきちんとなさい！」

リアスは俺のほつぺをつまみながら注意する……ふいましえん。

「あ、あのー、私もお邪魔しております」

黒歌の後ろから現れたのは尖がり帽子の魔法使い、ルフエイちゃん。

……待て、今気づいたけどよ。

「黒歌、ヴァーリ達何してんだ」

「赤龍帝ちゃんのおじちゃんのご飯いただいとるところにやん」

やっぱりか！この間アイツら、エロゲ返しに来たついでに俺んちで飯食ってたけど、  
気に入ったのか!?

おつちやん滅茶苦茶喜んでたからな、絶対嬉々として作つたんだらう……。

「あ、それと空いてる部屋使わせてもらってるから、よろしく」

「あ!?!それは聞いてねえぞ！」

「だって赤龍帝ちゃんには言つてにやいもん。おじちゃんには許可貰つたしね」

「おつちやああん!!」

何で快く部屋貸したんだよ!?!いや、部屋は有り余ってるけどさ！

「あ、後ですね。魔法使いの方々と交渉すると聞きましたので、僭越ながら私もアドバイザーとして滞在させていただこうかなーっと思ひまして……ご迷惑でなければです

がっ」

「ああ、良いよ良いよ。部屋余ってるし」

「私の時と対応が180度違い過ぎるにやん!! 鼻肩は最悪よ!!」

「お前と違つて遠慮があるからまだ快く貸せるわ!!」

それにルフェイちゃんは勝手気ままにしないだろうしな!

「…あのね、ご迷惑も何も、白龍皇側の貴方達にとつてここは敵地に等しいのよ?」

『ちよくちよく相棒のエロゲ借りに来てるのに、何を今更』

『それな』

「だよなー。ぶつちやけ敵つて言うには親しみすぎるし」

メアド交換してるぐらいだし、しかもあいつ等特に悪い事してないし……ああ、会談の邪魔してるわ。結構悪いな。

「イツセーももう少し危機感を持つて! 本来ヴァーリとは敵対関係なのよ?」

「兵藤一誠、サウナを借りるぞ」

「おう」

「ちよつと待ちなさい寛ぎ過ぎでしょ! それとほつぺにご飯粒付いたままよ!!」

リアス、ツツコミの方角がおかしくなってる。

「む、すまない。しかし兵藤茂殿には特製の菓子折りを持参したのでな。それで一つ手



を打つてくれ」

「打てるわけないでしょ!？」

「まあまあリアスちん。そんなに朝から怒ると血圧が悪くなるわよ？」

「誰のせいよ誰の!!」

……いやあ

「このグダグダなノリ、久しぶりだなあ」

俺の眩きは、朝の喧騒に吸い込まれて消えていくのだった。

## MAGIC 157 『契約だよ!契約!』

あくる日の放課後、俺達オカ研メンバーは全員部室に集まっていた。

全員参加——ロスヴァイセさんは職員会議があるから遅れたけど——しているのを確認すると、リアスから説明が入った。

「今日皆に集まってもらったのは他でもないの。——今日から例の『魔法使い』との契約期間に入っていくわ」

契約、か。

魔法使いと悪魔って言うのは、かなり関係が濃い。

それも昔から。

……魔法使いって言う人種は、基本的に自分の魔法研究を生涯に渡って磨き続ける、いわば魔の探究者の事を指すんだ。

間違っても指輪とベルトを使って魔法を操る俺や吼介、白い魔法使いとは違うので、悪しからずご了承願いたい。

この世界に散見している様々な魔法を——魔法使いと呼ばれる人間は自分に合

致、あるいは自分なりにテーマを決めて、一生を捧げる。

研究にて新たに発見した事実を公表したり、あるいは自分だけの秘匿とするか、それもまた千差万別なんだとか。

「魔法使いが悪魔と契約する理由は大きく分けて三つ。一つは用心棒として。いざという時にバックボーンに強力な悪魔がいれば、いざこざに巻き込まれた時に相手との折り合いが付けられるからよ」

「ヤクザみてえ」

「まあ、そういう認識でとりあえずはOKよ」

リアスは苦笑いを見せると、改めて説明を続けた。

「二つ目は、悪魔の技術、知識が得難いものだから。もつと言えば冥界の技術形態ね。魔法使いが研究に使う為に、それらが効力を発揮するの」

『それだけなら、直に冥界に行けば良いのではないのか?』

「まあ、普通はそう考えるわ。でもね、冥界に行くつて言うのはリスクが高いのよ。直接手に入れるにしても、冥界に行くためのリスクというのは限られているから。……イッセーはドライグの力で何度か足を運んではいるけれど」

『ドヤア』

ドヤ顔すんな……俺が今こうして手軽に冥界に行けているのは、俺が「上級悪魔グレ

モリー」の眷属だからだもんな。

ヴァーリは…強すぎるからで片が付く。

「他の陣営経由で得ようにも、仲介料が発生するから、その分値段が契約で手に入れるより高いのよ。もの次第では下手をすれば生涯の研究で得た富を全て投げ売っても足りないぐらいね」

『…成程。で、最後の一つは?』

「簡単よ——己のステータスにするため。強力な悪魔と契約する、それだけで大きな財産になるわ。私のお父様やお母様も、魔法使いと契約しているのよ? 相談事を受けるために召喚に応じるって訳。上級悪魔及び、その眷属ならばそれが義務の一つなの」  
『だとさ相棒』

…そうか。俺も上級悪魔だから、今後はそう言う事も考えていかなきゃならないんだったな。

頭を悩ます俺の近くに座っていたゼノヴィアは、複雑そうに首を傾げる。

「まさか、私が魔法使いに呼び出される側になるとはね。人生とは本当に面白いものだ」  
「俺なんて魔法使いなのに呼び出されるんだぜ? 向こう絶対びつくりするって」

「悪魔にも魔法に携わる者も少なからず存在しているから、そう珍しい事ではないのよ? ゼノヴィアの言いたい事も分かるわ。異能に携わる人間なら、普通は呼び出す側だよ

の。呼ばれる側と言うのは、悪魔や魔物だからね。——だからこそ、皆には契約を大切にしてもらいたい。一度交わした契約はそう簡単には反故に出来ないから、きちんとお仕事するの。でも、程度の低そうな相手と契約したら、こちらの品位が疑われてしまうわ。最高の取引相手を選びなさい。魔法使いにとっては異能研究の延長線上でしようけれど、私達悪魔にとってはビジネスだから。普通の人間との契約、魔法使いとの契約、両立してこそ悪魔よ」

『はい!!』

と、威勢よく返事したは良いけど、どういう奴選んだら良いんだろ……。

『まあ気楽に行こうぜ。それにお前には優秀な正妻メイドにマネージャーが付いてるんだ。怖いもの知らずだろ』

…そうだな。俺一人でやる訳じゃないし、ここはドーンと俺にふさわしい人材を頑張つて選ばう！

……エツチな対価とかアリなのかな。

『お前の嫁連中が許すと思うか?』

無理だな、うん。

そんなやり取りをしているうちに、リアスは部室の時計を確認していた。

「…そろそろ時間ね。皆、魔法使いの協会のトップが魔方陣で連絡を下さるの。きちんと

としていてね」

そう言われてきちつとしたところで、部室の床に大きな魔方陣が出現する。

あの紋様は確か……

『メフィスト・フェレスの紋様か。確かに魔法使いの協会トップと言えば妥当っちゃ妥当だな』

メフィスト・フェレス……確か、番外の悪魔に属する悪魔で、ゲオルク博士が契約した悪魔……で合ってる？

『ああ……来たぞ』

部室に現れた魔方陣は、一人の男性の立体映像を映し出す。

椅子に優雅に腰掛ける中年男性……だけどその紙は赤と青が入り乱れていて、切れ長の両眼は右が赤で左が青のオッドアイという、悪魔らしい風体の、ちよつと恐々とした顔だった。

そんな強面っぽい顔が、リアスを見てにつこりと破顔した。

『これはリアスちゃん、久しいねえ』

……思ったより軽い声音だな。

いや、実力は映像越しでも分かるぐらい高そうなのは伝わるけど、何と言うか、一気に緊張が解けちつた。

「お久しぶりです。メフィスト・フェレス様」

『いやー、お母さんに似て美しくなるねえ。君のお祖母様もひいお祖母様もそれはそれは美しい方ばかりだったよ』

「有難う御座います」

リアスは改めて頭を下げると、俺達にその方を紹介してくれる。

「皆、こちらの方が番外の悪魔にして、魔法使いの協会の理事でもあらせられるメフィスト・フェレス様よ」

『やあどうも。メフィスト・フェレスです。詳しくは関連書物でご確認ください。僕を取り扱った本は世界中に溢れているしねえ』

メタ過ぎんだろ、確かにメフィスト関連の書物はそれこそたくさんあるだろうけどさ！

内心で突っ込む俺に、脇に控えていたレイヴェルがこっそり耳打ちしてくれた。

「∴初代ゲオルク・ファウストと契約した後、初代が亡くなられてからも人間界に留まり、そのまま協会のトップに位置したそうですわ」

成程、人間界が気に入ったのかな…？

『悪魔メフィストと言えば最古参の悪魔だと聞いている。家ではなく、個人だけでそれ程の地位を築き上げた傑物だともな』

『いやー、ヴェールズズの伝説のドラゴンに褒められるなんて、この歳まで生きないと聞けない言葉だねえ』

良く知ってるなドライブ。

『歴代の中に、悪魔関連の調べ物に没頭していた奴がいてな。そいつの受け売りだ』  
『僕の事ですね!』

ドライブの説明が終わると、例の空間からちよつとがり勉つぽそうな風体の少年が現れた。

へえ、しかし何でまた悪魔の事調べてたんだらうか。

『好奇心です!』

自分の欲望に従ったんですね有難う御座いました!!

『…ん?ドライブの声が聞こえたと言う事はもしかして、その少年君が良く聞く噂の魔法使い君かな?』

「は、はいそうです。私の眷属の、兵藤一誠です」

え、いきなり俺に興味を!?

「は、初めまして!兵藤一誠です!!」

『初めまして、一度君とはお話をしてみたかったんだよ』

え、話を?……もしかして、俺の魔法についてとやかく言われたりするのかな……怖



いんすけど。

『君の魔法は決められたアイテムに石を加工した指輪を翳すんだって？非常に興味深い！恐らくは僕が生まれる以前に使われていたシステムなんて、あんまり直に見れないからねえ！いやあ、君が悪魔になってくれて本当に良かった！……実はね、君が人間だった時からコンタクトを取ろうと狙っていたのさ』

「そうなんすか!？」

俺、魔法使いになってつい最近ですよ!？」

そんな時にこの大物に目を掛けられてたんすか!？」

『こうしてリアスちゃんの眷属になって僕と会話が出来るなんて、いやあ付いてるなあ！今度是非君と、君の叔父上にご挨拶に伺っても良いかな?』

「あ、はあ……構いませんが」

『そうか！よし、僕も立場上は中々赴く事は出来ないけど、機会を見つけたら透かさず駆け込ませてもらうよ』

マジか……俺んちにあのメフィスト・フェレスが来るのか。

おっちゃんも流石に……いや、驚きそうにねえな。

『だな』

『寧ろあれが本当に腰を抜かす存在がいるのか知りたい』

それは俺も思った。

それからアザゼル先生も合流し、何やかんやとありながらも俺達と契約したいと言っている魔法使いの詳細データが送られてきた。

因みに契約書が多かったのは——上から順にリアス、ロスヴァイセさん、アーシア、俺、木場、朱乃さん、ゼノヴィア、小猫ちゃん、ギヤスパ……という結果だった。

## MAGIC158 『色々、やっています』

「魔法使いつてのもいっぱいいるんだなあ」

メフィスト・フェレスさんとの邂逅から何日か経ったある日の深夜、俺は兵藤家の空き部屋にて山盛りの書類に目を通していた。

「イツセー様、この魔術文字の解説が済みましたわ。読んでくださいましね」

そう言つてまた新しい書類を渡してきたのは、頼れる敏腕後輩マネージャーことレイヴェル。

何の書類かだつて？言うまでもないだろ、魔法使いの履歴書だ。

こう言つた知識はさっぱりな俺だけど、上級悪魔になつた以上、眷属の関係でこういう事務作業とかも経験するべきと判断して、レイヴェルと二人で作業を行っている。

他の皆はリアスや朱乃さんの意見を取り入れながら選考しているんだ。

そう言う訳で二人で頑張ろうと言つた時、レイヴェルは凄く嬉しそうにしていた。

「っ、はい！私がイツセー様にふさわしい相手を選び抜いて見せます!!」

いやー、凄く意気込んで作業に取り掛かつてくれたからな、俺だつて自然と気合十

分って訳さ。

「この魔法使いの男性は錬金術において、希少なレアアース、レアメタルの魔術的利用方法を研究されていますわ。こちらの女性は——」

素人の俺にも分かりやすく噛み砕いて説明してくれるお陰で、俺の頭にも入ってきやすい。

…小猫ちゃんの話だと、休み時間にも人目に隠れて調べていてくれたらしい。有難い以上に、過労で倒れちゃいそうで心配にもなる。

「レイヴェル」

「はい？何処か分からないところが——」

「何時もありがとな」

俺は日頃の礼を込めて、レイヴェルの頭を撫でる。

するとレイヴェルは——

「い、イツセー様って、他人の心が読めるのですか……？」

嬉しそうにもじもじしつつ、何処か恥ずかしそうに尋ねてきた。

「何で？」

「いえ、その……私の我儘なのでずっと言えなかったのですが、あ、」

「あ？」

「……頭を、一度で良いから撫でてほしいな、と………」

「レイヴェル」

「はい……!？」

なんつつつつつって、良い子やアアアア!!!

俺は万感の思いを込めてこれでもかとレイヴェルの頭を撫でくり回した。

突然の事でレイヴェルは顔を真っ赤にさせてパニックになっていたが、次第に落ち着いていき、そして――

「……えへへえ」

何て、こちらを悶え殺す気ですか？な緩み切った笑顔を見せてくれる！

全く――

『小学生は最高だぜっ!!……っつか？』

いや、小学生じゃねえから。

「…レイヴェル」

「…はいっ」

俺は佇まいを正して、レイヴェルに向き合う。

「メフィストさんが言ってた事だけだな」

「っ」

俺の言いたい事を察して、レイヴェルは表情を硬くする。

この間の邂逅の際、メフィストさんからこんな話を聞いた。

フェニックスの家のものではない、つまり純正ではないフェニックスの涙が新たに裏取引で売買されている、というものだ。

「はぐれ魔術師」なる一派があ、「禍の団」の残党魔法使いと手を組んでフェニックスの関係者に接触しているという事態が相次いでいるらしく、その関係でレイヴェルも狙われるかもしれないと言われたのだ。

「俺はまだ自分が君を守り切れるほど強くなつた、とは言えない。やつぱり何処かで油断しちまうことだつてある。でも——」

俺はレイヴェルの肩に手を置いて、安心させるように、自分に誓うように言葉を紡ぐ。  
「俺は何があっても、絶対レイヴェルを助ける。絶望しそうになったら、迷わず俺の名前を呼んでくれ。必ず駆けつける、俺がレイヴェルの——最後の希望になるからさ」  
「っ……………」

レイヴェルは暫く沈黙していたが、やがて嬉しそうに俺の手に自分の手を重ねてきた。

「はい…………その言葉だけで、私は絶対に何があっても諦めません。それだけの勇気を、イツセー様の今の言葉からいただきました。でも、その時になったら、絶対に手を…………掴んでくださいね？」

「…………仰せのままに。お姫様」

俺は絶対に——守り抜いて見せるよ。

—————

とまあ、珍しく頭を使った場面を見せましたが、それだけだとつまらないので、ここ

からは特訓パートだ！

同時並行して体も鍛えておかなきゃならんのが厳しい現実なんだよね。

「ふんっ!!」

俺が放った魔力の砲撃を、赤い軌道を描いて躲すのは——魔王チツクな鎧を纏った木場だ。

「ハッ！」

「うおっと!?!」

木場は着地すると同時に俺の頭上から聖魔剣の雨を降らせて来た！

すかさず俺は砲身を真上に向けて、聖魔剣を破壊する——と同時に木場が一瞬で俺の懐へと入り込んできた！

「随分大胆になったなっ!!」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》  
!!!

「それ程でもっ!!」

肥大化した拳が当たる寸前で、木場は後方の魔方阵へと瞬間転移する。

転移したと同時に、俺は背後に現れた魔方阵に拘束される！

「ぐうっ!!」

「ハッ！」



「うお?」

バチバチと電気的なダメージが入ったかと思うと、木場が動かしたての動きに合わせて俺は木場の方へと吸い寄せられる!

そして木場の手元には四大元素の力が宿った一本の聖魔剣——多分だけど、刀身は龍殺しの聖魔剣か!?

「そうは、行くかよ!!」

俺は両の拳を叩き合わせ、周囲に重力を発生させる。

自分にかかる重力を集中させ、魔方陣の引き寄せる力と相殺させる。

が、木場もどうやらそれを察していたらしく、俺へと向かって無数の聖魔剣と共に突貫してくる!

「…面白れえ!!」

《Maximum Solid Break!!!》

聖魔剣を突き出した木場に合わせて、俺も力を開放した拳をぶつける!

圧倒的な力と反発し合う四大元素の爆発力は、周囲を爆発で巻き込んでいき——

「やりすぎだよ」

「はい」

結果、俺と木場はリアスに説教を受けていた。

だつて他の皆もいるもん、しょうがないね。

リアスの咄嗟の指示でグレイフィアが結果を張ってくれなきやヤバかつたな……反省反省。

「木場、お前が止めないからこうなつたんだろ」

「いや、僕に丸腰であの一撃を喰らえつて言うのかい？僕死ぬよ」

「お前一人の犠牲で済むんだからめつけもんだろ」

「こんな特訓パートで言う台詞じゃないよそれ！」

「ふたりとも？」

「すみませんでした」

何時の時代でも、男は女に弱いつて決まりなのさ。

「…イツセーと木場はどんどんと強くなつていくな」

「ホント、階段幾つ飛ばしてのパワーアップつて感じね」

正座する俺達の傍でそう話すゼノヴィアとイリナ。

「しかも木場、さっきの試合でグラム使つてなかつたしな」

「…私は最初に洗礼を受けたよ。ふふ、まさか龍騎士団に格魔剣を持たせるなんてね」

因みに最初に模擬戦を行っていたのは木場とゼノヴィアだ。

—とは言えパワー一辺倒の今のゼノヴィアじゃ極手まで会得した木場の相手は厳しすぎたみたいで、最後は龍騎士団によって負けた。

極手は消耗が激しいから、慣れた俺は兎も角、発現させて間もない木場じゃあ負担度も大きいらしく、最後は解除された。

そして暫く休憩を挟んで、俺と模擬戦を行った…っていう流れだ。

まあ、慣れたつつつても俺でも負担は大きいんだけどね。

何せ《魔龍進化》は極手がデフォだから普段より負担は大きいし。

「お前の場合、その鞘になってるエクスカリバーの能力をある程度でも良いから使えるようになった方が良いと思うぞ」

「うん、僕もそう思うよ。君のパワーに当たったら、龍騎士は勿論、僕だってひとたまりもない。だからこそそのパワーを確実に相手に当てられるように、補助として使える程度にはしておいた方が良くないかな」

…ゼノヴィアの性格的には破壊の聖剣の能力しか使えていない。

他に有用なのは擬態とか透明の能力か、速度の上昇は……悪くはないけど『騎士』の駒の特性と被ってるし、それは後回しでもいいだろうし。

「ほら、ミニミックはこうするのよ。要するにイメージよ。使いこなせさえすれば色んな

ものに変化させられるんだから」

エクス・デュランダルを借りたイリナが剣を振るうと、刀身がうねうねと変化して、サイズの大きい日本刀の形になった。

流石元所有者、擬態の使い方に関しちやエキスパートだな。

『よおし、ここで嘗て七つに分かれていたエクスカリバーのそれぞれの特殊能力について解説しよう！』

いや、いきなり出てきて何？

『暇だから』

……さいでつか。

『まずは破エクスカリバー・デストラクション壊の聖剣。この聖剣は文字通り、対象物の破壊に特化した攻撃型の聖剣だ』

ゼノヴィアが持ってた聖剣だな。だから一番使いこなせているし、パワータイプの子ノヴィアとの相性も抜群だ。

『次に擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣。どんなものにも姿を変える事が出来ちゃうトリッキーな聖剣だ』

イリナが持っていた聖剣で、普段は紐状に、戦闘時は日本刀にしたな。

空港検査にも引つかからない、便利な聖剣だ。

『まだまだあるぜ？ エクスカリバー・ラビッドリイ 天閃の聖剣！所有者の速度を強化、更には剣速も高速になる、機動力特化の聖剣だZ E』

何だその語尾は。……皆さん懐かしの、あのフリードが最初に使っていた聖剣だな。

『つ・ぎ・は……透 エクスカリバー・トランスアレンシー 明の聖剣！刀身のみならず、所有者まで透明にしちまう全国の野郎諸君が欲してやまない垂涎の代物だあ!!』

出だしキモいし解説が俗っぽ過ぎる！

『次の商品はこちら！ エクスカリバー・ナイトメア 夢幻の聖剣！主に幻術や夢を司る珍しい聖剣ですよ奥さん！気に入らない野郎にオカマの幻覚を見せて惑わしたり、気になるあの子が眠っている隙に夢を支配！そのままあんなことやこんな事も思いのままという、大変画期的な商品です！そして更に今なら、鍵開け用の工具も付けてお値段！3,9800円で御座います!!』

何でテレビショッピング風!?!お前解説で遊びすぎだろ!!

……この聖剣は魔法が得意な奴の方が相性が良いらしく、そちらに疎い……というか魔法を持っていないか魔法もへったくれも使えないんだけど、ゼノヴィアは習得に難航しているな。

因みに俺と相性の良い聖剣はこれと擬態の聖剣らしい。閑話休題。

『次はアハア……祝福エクスカリバー・ブレスィングの聖剣ウ!!この聖剣は信仰が関与していてなア!主に聖なる儀式に使うと効果を発揮するのさあ!!神の恵みをオ、有難く受け取れええええ!ヴァーハツハツハツハア!!!』

何だそのテンションは!?!何処の檀黎斗神!?!……この聖剣の効果は、エクソシスト中に相手の悪魔や吸血鬼を弱らせたり、祓い師の力を向上出来たり、他にもミサに参加している信仰者に幸運を授けたり……と結構特異な能力が満載だ。

『最後は……支配エクスカリバー・ルーラの聖剣。この聖剣はいかなる存在も己が意のままに、それこそ気になるあの子を奴隷のようにも操る事が出来るのです。この聖剣の祝福と共に、私は……今度こそ人類を救済する』

全然天草に似てねえし女の子云々は言わねえよ!この聖剣は元々アーサーが所有していたものを譲り受けたんだっとな。

アーサーの技量もあつてか、伝説のフェンリルすら支配下に収める事に成功したのが……

「……私はアーサーの様に伝説の魔物を支配できるような才能はないらしい。上手く発動すらない」

この様に、一番習得に苦労しそうな聖剣なのだ。

まあアーサーの技量がぶつ飛んでるつても大きいだろうし、この聖剣の習得は最後

になるだろうとはリアスも、ゼノヴィア本人も予想していたからな。

……そう言えばイリナの方はと言うと、天使用に量産されたという聖魔剣を使って独自の戦闘スタイルを確立させようとしている

最近じゃロスヴァイセさんに魔法を習っているらしいし、分類するならテクニクよりのウィザードタイプか？

「このままじゃ、自称剣士になってしまいわよ。ゼノヴィア」

イリナにそう言われて、ゼノヴィアは「くっ！」と呻いて膝を付いた。

だがゼノヴィア的には言われっぱなしではいられないらしく、ある一言で反撃に出た。

「…自称天使め」

あつと……それはイリナにとつては禁句だ。

そう言われるとイリナは怒ったように頬を膨らませた。

「私、天使だもん！ね、イツセー君！幼馴染のイツセー君なら、私が本当の天使だって分かってくれるよね!?!」

「そーいや幼馴染だったな、俺ら。たまに忘れちゃうわ」

『ぶっちゃけクリスマスまで死に設定っつーか』

『たまにそのワード出てきてはまた埋もれてたと言うか』

『それな』

メタい事言うなよ！……あ、ゼノヴィアがそれを聞いて可笑しそうに笑った。

「なるほど、イリナは自称幼馴染でもあったか。そうかそうか」

あーやつちまった。ゼノヴィアにイリナをいじる新しい餌供給しちまったなこりや。

案の定、イリナも頬を一層膨らませて、目を潤ませていた。

「天使だもん！幼馴染だもん！！酷いもん！！」

「やーい、自称幼馴染い」

「何よ自称剣士！脳みそまで筋肉ウツ！！」

……いやー、ドライブグとドラゴンの口喧嘩並みに低レベルというか。

見た目美少女なのに中身が小学生過ぎるわ！

まあ、そこが可愛いんだけどね。

『アホだ』

お前らが言うな。

――



深夜の駒王町。

兵藤邸を見つめる黒い影が一つ、少し離れた場所から眺める影が一つあった。

『……兵藤一誠』

漆黒のローブに身を包んだそれは、静かに姿を消す。

ローブの切れ端から見切れたそれは——漆黒に染まった、ウィザードリングだった。

## MAGIC159 『ファンガイア……ではなくヴァンパイア』

良い子は寝静まっているであろうド深夜の駒王学園、今日は噂の吸血鬼との会談当日だ。

今日この場に集合したのは俺達グレモリー側オカルト研究部全員、シトリー側のソーナさんに真羅副会長、墮天使代表？のアザゼル先生：

「クエスチョンマーク付けんなー」

失敬、そして最後に天界側からシスターが一人という布陣で臨むのだ。

ベールを深く被ったシスターさんと、北欧的な顔つきをした女優さんも裸足で逃げそうな美貌の美人さん。

……この人、どっかで見た事があるな。

何処だっけなあ……？

「挨拶が遅れました。私、この地域の天界スタッフを統括しておりますグリゼルダ・クアルタと申します。シスター・アーシアとは少し前にご挨拶できたのですが、皆さまとはまだでしたので、改めて今後とも何卒よろしくお願いできたら幸いです」

「私の上司様です！」

へえー、イリナの上司さんなんだ。

「おお、話は聞いてるぜ。ガブリエルのQ！シスター・グリゼルダって言えば、女のエクソシストの中でも五指に入ってたな」

「恐れ入ります。墮天使の前総督様のお耳に届いているとは……光栄の至りですわ」

ガブリエルさんの部下で女性エクソシストでも上位の存在か、すげえ！

「シスター・グリゼルダは『クイーン・オブ・ハート』って呼ばれているの！」

『キング・オブ・ハートじゃねえのか？』

「ドモン・カツシユかよ」

ガンダムファイターじゃねーんだから。

「申し訳ございませんでした。本来ならもっと早くに挨拶に伺うべきでしたの……諸々都合がつかず、今になってしまい、己の至らなさを悔やむばかりです」

「いえいえ、そんな」

丁寧な物腰だなあ、これだけで好感が持てるぜ。

「あらあら？ゼノヴィアったら、顔色が悪いわね？」

けど何故だか、この人が来てからはゼノヴィアの様子がおかしい。

まるで視界に入れようとしないうように、顔を強張らせていた。

そして当のゼノヴィアはイリナのその質問にカチコチになりながらも応えた。

「…椰揄うな、イリナツ!」

おおっと、ここでシスターさんがゼノヴィアの顔を両手でがっちり押さえつけた。

「ゼノヴィア? そんなに私と顔を合わせるのが嫌なのかしら?」

「ち、違う……ただ……」

「ただ?」

「…で、電話に出なくて、ごめんなさい」

…そう言えば、ゼノヴィアが時折着信が来ていたけど無視していたっけな。

あれってグリゼルダさんからの電話だったのか。

でも何であんなにゼノヴィアは怖がってるんだ?

「シスター・グリゼルダはゼノヴィアのお姉さんの存在なの。同じ施設の出身で、いつも

お世話になっていたせいか、彼女には頭が上がらないのよ」

「あー、それでか。じゃあゼノヴィアが悪魔になった時も滅茶苦茶ショック受けたん

じゃないのか?」

「先日お会いした時にお聞きしたんですが…それ以上にゼノヴィアさんに連絡を貰えな

かった事がショックだったそうです」

成程ねえ……まあ、心配する気持ちも分かる。

「今度一緒に食事でもしたらどうだゼノヴィア？」

「な、イツセー何を!？」

「お前にとつても大切な人だろ？ アンダーワールドに映っていたぐらいだしな」

グリゼルダさんを何処かで見た事がある——彼女は以前ゼノヴィアのアンダーワールドに入った時にその景色に映っていた人だ。

幼い時のゼノヴィアと一緒に祈りをささげていた……それだけゼノヴィアにとつては大切な人だつて事だ。

「…その事で、赤龍帝さんには大変感謝しております。ゼノヴィアを助けていただいて、本当にありがとうございます」

「い、いえそんな！ 大した事じゃないですよ！」

「それだけに……ゼノヴィア。赤龍帝さんにご迷惑をおかけしていないでしょうね？」

「だ、大丈夫だぞ？」

何で疑問形? …と、そんなこんなでシスターさんとの挨拶も済ませて、後は吸血鬼の来客を待つだけとなった。

夜もさらに深くなり、外も完全に静まり返った頃——旧校舎の入り口のある方向から異様な冷たさを感じた。

「来たようね……相変わらず、吸血鬼の気配は凍ったように静かだわ」

リアスが木場に視線を向けると、木場は一礼をしてから部屋を後にした。

吸血鬼——彼らは招待された事のない建物に入れない。

鏡に姿が映らず、影もない。流水を渡れず、ニンニクを嫌い。教会のシンボル——

—十字架、聖水に弱い。

そして、自分の棺で眠らなければ自己回復が出来ないらしい。

ハーフのギヤスパーに関してはそれらの制約のうち、いくつかが異なる。

影はあるし、鏡に姿も映る。川も渡れるし、ニンニクも克服しかけている。

専用の棺で絶対に眠る必要もない。

これに関しては人間の方が濃いかららしい。

……さて、肝心の交渉は『王』クラスの俺、リアス、ソーナさん、グリゼルダさんと

アザゼル先生が受け持つ。

俺も『王』だから、今回は事に当たらなければならぬ。

眷属達は来客に備えて『王』の傍らに立つ。

朱乃さんとグレイフィアは給仕係の為か、専用の台車の前に待機している。

「お客様をお連れしました」

木場が紳士な対応で扉を開き、客を招き入れる。

入ってきたのは中世のお姫さまが着るようなドレスに身を包む人形のような少女で、目と鼻、口元まで人間味の感じられない、作られたような美しさがある。

長い金髪はウェーブがかかっている、どう見ても美少女……なんだが、生気が感じられない肌色が目を引く。

何つーか、美少女だけど俺の苦手なタイプだな。

『ゾンビみたいだな』

『吸血鬼ってのはああいうのばっかだぞ』

お前から発声すんなよ、頼むから。

その子の背後に控えているのは恐らく護衛の吸血鬼か。

両方共に生気を感じられず、冷たい気配が漂う……後、刺々しいのも。

少女は丁寧に俺達に挨拶をくれる。

「ごきげんよう、三大勢力の皆様。特に魔王さまの妹君お二人に、墮天使の前総督さまとお会いできるなんて光栄の至りです」

リアスに促されて、リアスの対面の席に吸血鬼の少女は座ることに。

座る前に少女は名乗る。

「私はエルメンヒルデ・カルンスタイン。エルメとお呼びください」

「…カルンスタイン。吸血鬼二大派閥のひとつ、カーミラ派。その中でも最上位クラスの家だ。純血で高位のヴァンパイアに会うのは久しぶりだな」

カーミラ派って確か——

『女尊主義の派閥だな』

ドライグの言う通り、吸血鬼には二大派閥が内部に存在している。

…その前に、吸血鬼の業界についてある程度語っておくか。

吸血鬼は古くから存在する闇の世界の住人…断っておくけど、地獄兄弟とは全く関係ないので、悪しからず。

それは兎も角、吸血鬼の世界は上級悪魔と似たような階級制度を持ち、更には弱点まで共通している。

けど、価値観や文化は全く異なっている。

悪魔と吸血鬼は長年、お互いに縄張りを刺激せずに人間を糧に生きてきた。

天界——神の従僕たちが天敵なのも一緒だけど、共闘する事もなくずっと一定の距離を置いて来ている。

悪魔は今夏に行われた三大勢力の和平に応じ、長い三つ巴の様相を収束させたけど、吸血鬼はまだ和平のテーブルに着こうとすらしていない。



そんな訳で、未だに天界——教会の戦士達と小競り合いがあるみたいだ。

そして肝心の二大派閥。

数百年前に吸血鬼の業界で大きく袂を分かつ事件があつた。

それがツエペシユ派とカーミラ派——男尊主義と、女尊主義の派閥と言う訳だ。

純潔の吸血鬼を残すため、男の真祖を尊ぶか、女の真祖を尊ぶかで長年主張を対立させていた者同士が、拗れに拗れまくつてグループが真つ二つに分かれたんだとか。

先生の説明通りなら彼女——エルメンヒルデは女尊主義のカーミラ派の吸血鬼つて事だ。

「エルメンヒルデ、いきなりで悪いのだけれど、質問させてもらうわ。——私達に会いに来た理由をお話ししてもらえるかしら？今まで接触を避けてきたあなた達カーミラの者が何故今になってグレモリー、シトリー、アザゼル前総督の元に来たの？」  
リアスの質問にエルメンヒルデは一度瞑目すると、静かに頷いて口を開いた。

「——ギヤスパー・ヴラディのお力を借りたいのです」

——マジか。

予想してなかつた答えに、俺達は絶句する。

…当のギヤスパー本人はぶるぶると全身を震わせていた。

『このタイミングで吸血鬼の小僧の力を借りるとなると……例の力か』

…ああ、確か魔獣騒動の折に覚醒したっていう能力だ。

『だが解せんな。何故このタイミングで求める？』

それだ、そこが分からん。

「率直な質問に率直な答え。濟まないが、順を追って説明してもらおう。——吸血鬼の世界に何が起きた？」

「我々吸血鬼の世界で起きたある出来事が、根柢の価値観を崩すほどのものになってきているのです。情報が流出しご存知かもしれませんが、神滅具を持つ者がツエペシユ側のハーフから出てしまったのです」

神滅具、か……そんな話を小耳に挟んだけど、だからって何でギヤスパーを求めるんだ？

それに……何でツエペシユ側から出たというのに、ここに来たのはカーミラ側の吸血鬼なんだ？

理由は分からんないけど、絶対に面倒な事だつて言うのは分かるぞ……！

「それで、ツエペシユ側が所有している神滅具は何だ？」

——この世に現存している神滅具は全部で十三種。

現在分かっている所在は「赤龍帝の籠手」「獅子王の戦斧」の二種類が悪魔側、天界側に二番目に強いと目される「煌天雷獄」をジョーカーが保有し、堕天使側には先生の配下に「黒刃の狗神」こと「刃狗」がいる。

魔法使いの協会——三大勢力と懇意にしているメフィストさんの組織にアップリット・デイズ「永遠の氷姫」、多くの魔法使いから危険視される無法者のはぐれ魔法使いの集団にインシネレート・アンセム「紫炎祭主の磔台」。

他はヴァーリの「白龍皇の光翼」、そして英雄派にあつた最上種の「黄昏の聖槍」「魔獣創造」「絶霧」の三つ……この三つに関しての所在は不明だけど、次の所有者に移ってはいないらしい。

今のところの所在が分かっているだけでもこれらだけ……しかもここまで認識できたのはホント最近になってからなんだとか。

所在が全く把握できていないのは後の三つ——「セワイロト・グラール幽世の聖杯」「イノベート・クリア蒼き革新の箱庭」「テロス・カルマ究極の羯磨」。

『どれも碌なものじゃないな』

知ってるのか？

『「幽世の聖杯」以外はよく知らん』

『流石にそこまで調べられなかったと言いますか……人間の限界って事で』

まあ、そうだよな……人間以上の情報ネットワークを持つている三大勢力ですら補足するのが困難だったのに、人間一人じゃ無理な話だ。

けど「幽世の聖杯」は知ってるんだな。

『はい。そこはキリスト関連の書物を漁っていたら偶然合致するものを見つけちゃったんですね』

合致……？まあそれは置いといて、吸血鬼側が所有しているという神滅具に戻ろう。

「——「幽世の聖杯」ですわ」

エルメンヒルデの答えに、先生は更に目元を厳しくさせた。

『ほお、よりにもよってそれが吸血鬼の陣営にあったとはな』

「聖遺物の一つ——聖杯か」

聖遺物って確か……曹操の聖槍と同じものだっけ。

『イエス関連の物は太抵聖遺物さ』

『……その聖杯って、どんな力があるんだ？』

『イエスの最後の晩餐に使われたとされる杯だ。だがただの器じゃない。生命そのものに干渉できるヤベー代物だ。使い方を誤れば生命の理すら覆しちまう。おい小娘、不死者の吸血鬼がそれで何を求める？』

ドライグの声にエルメンヒルデは少し驚いた様子だった。

「…赤龍帝ドライグ、如何に伝説の龍であつても立場をお考えなさい。貴方はもはや過去の残滓でしかないのですから」

『そうか？俺の宿主は上級悪魔の『王』だ。なら俺の質問は宿主である兵藤一誠のものである……そうは考えられないか？』

「…屁理屈ですが、理には適っていますね、良いでしょう。……絶対に死なない体——杭で心臓を抉られても、十字架を突き付けられようとも、自分の棺で眠らずとも、太陽の光を浴びようとも、決して滅びぬ体をつエペシユの者達は得ているのです。いえ、正確に言いますと、滅びにくい体を得た……でしょうか。聖杯の力はまだ不完全なようですから」

彼女は続けてこう加えた。

「何も弱点のない存在になろうとじているのです。吸血鬼としての誇りを捨てる。それだけならまだしも、あの者達は此方に攻撃をしてきたのです。既に犠牲者も出ております。これら一連の蛮行を私どもは決して許すつもりは御座いません。同じ吸血鬼として肅正するつもりです」

そう語るエルメンヒルデの瞳は暗く、強い憎悪の色を帯びていた。

「カーミラ側は吸血鬼としての生き方を否定して、襲ってきたツエペシユサイドのやり

方が気に入らないって事か。まあ、攻撃されたら誰だつてカチンとくるわな」

「その通りです。そして、私達の目的は——」

エルメンヒルデの瞳は、その赤い双眸は、ギヤスパアの双眸を捉える。

「そちらにいらつしやいますギヤスパア・ヴラデイの力を借りて、ツエペシユの暴挙を食い止める事です」

…散々除け者にしてたギヤスパアを今更吸血鬼の抗争に参戦させるつてか!?

「それはギヤスパアがヴラデイ家の、ツエペシユ側の吸血鬼である事と関係があるのかしら?」

淡々と質問をしているリアスだけど……内心では激情を煮えさせているというのは察せられた。

可愛い眷属を、今まで交渉にすら応じなかつた吸血鬼の抗争に貸せと言われたんだ——情愛の深いリアスが、それを知って黙っている訳がない。

リアスの質問にエルメンヒルデは意味深な笑みを見せる。

『アイツ殺していいか?』

『落ち着けドラゴン』

「それもあります、リアス・グレモリー様。けれど、本当に私どもが欲しているのは、ギヤスパア・ヴラデイの力です。眠っていた力が目覚めたと、小耳に挟んだものですから」

——こいつ等、何処からその情報を!?

いや、俺もまだ見た事はないけど、あのゲオルクを一方的に倒したって言うのは知ってる。

その力が破格なのは間違いないけど……。

「私どもは吸血鬼同士の争いを吸血鬼の力で解決しようと思っ  
ていますわ。その為に、ギヤスパ―・ヴラデイのお力をお借りしたいのです」

「…あの力は何?あなた達はそれを知っているの?」

「…極稀に本来の吸血鬼の異能から逸脱した能力を有する者が、血族から生まれる事があります。今世においてはハーフの者に多く見られておりますわ。ギヤスパ―・ヴラデイもその一人でしょう。カーミラに属する私どもでは、詳細を調べ上げられるほどの資料を有しておりません。しかし、ツエペシユ側には手掛かりになる物があるかもしれませんわ」

…要するに、知りたきやヴラデイ家の門を叩いて事か。

「そして、問題は聖杯について。所有者は勿論忌み子——ハーフではありませんが、名はヴァレリー・ツエペシユ。ツエペシユ家そのものから生まれたのです」

その名前を聞いて、ギヤスパ―は泣きそうな顔をしていた。

「…ヴァレリーが?う、嘘です!!ヴァレリーは僕みたいに神器を持って生まれてはいま

「せんでしたっ!!」

『後天的に覚醒するパターンもある。恐らくその吸血鬼も、幼年期には眠っていたんだろう』

ドライグはそう言ってギヤスパを落ち着かせる……確か、神器が発現するのは個人差があるって言ってたな。

俺は小さい時に気付いたら発現していたし、そのヴァレリーって子はつい最近発現したんだろう。

「俺達や天界が観測、特定が済む前に隠蔽されたと思って良いんだろ。つたく、どうしようもないな。聖なる力を嫌う吸血鬼が聖遺物の神滅具——聖杯を捨てもせず、こちらに預けようともしないで自分達の元に隠すなんてよ」

「私もそう思います」

先生の言葉に、エルメンヒルデもそう同意すると、ギヤスパに再び視線を向ける。対するギヤスパはおどおどしながらも、今度は真つ直ぐに視線を返していた。

「ギヤスパ・ヴラデイ。あなたは自分を追放したヴラデイ家に——ツエペシユに恨みはないのかしら？今のあなたの力なら、それが可能ではないかと思うのだけれど」

「……ば、僕はここにいられるだけで十分です。部長達と一緒にいられば、それだけで



「雑種」

「っ！」

その言葉を聞いた途端、ギヤスパアの顔が曇り始める。

それを確認して、エルメンヒルデは続けていく。

「混じりもの、忌み子、もどき、あなたはどのようにヴラデイ家で呼ばれていたのかしら？感情を共有できたのはヴァレリーだけでしたわね？ツエペシユ側のハーフが一時的に集められて幽閉される城のなかで、あなた達は互いに助け合って生きてきたと聞いておりますわ。ヴァレリーを止めたいと思いませんか？」

「ちよつと良いか？」

俺は内心で溜まった鬱憤を何とか抑えつつ、口を開く。

「ギヤスパアにとつて大切な人が危ない目に遭っていたとしても、最後に決めるのはギヤスパア自身だ。此奴の意思を封じたうえで誘導させるような言い方は止めてもらいたいな」

俺がそう言うと、今まで沈黙を保っていたグリゼルダさんも口を開いた。

「あなた方はハーフの子達を忌み嫌いますけど、元々人間を連れ去り、慰み者として扱い、結果的に子を宿させたのは吸血鬼の勝手な振る舞いでしょう？あなた方に民を食い散らかされ、悔しい思いをしながらも憂いに対処してきたのは我々教会の者です。で

できれば、趣味で人間と交わらないでもらいたいものです」

柔らかい物腰だけど、言葉の端々には毒が満載だ。怒っているのはどうやら俺達だけじゃないらしい。

エルメンヒルデは口元に手をやり、小さく笑む。

「それは申し訳ございませんでしたわ。けれども、人間を狩るのが我々吸血鬼の本質ですが、それはあなたの方、悪魔も天使も同じなのでは？」——我々異形の者は人間を糧にせねば生きられぬ『弱者』ではありませんか」

純粋な吸血鬼、ハーフは『雑種』、人間は『糧』……これがこの少女の考え方か。そんなつまらない考え方で、この先やっていけるのか？

こいつ等の世界には、目に映っているのは、純粋な吸血鬼か、他の種だけしかない。

『古臭い価値観に縛られた哀れな種族だな。これほどつまらん奴等は初めて見た』

『…なんか腹立つな。お前と意見が合うなんてよ』

いや、お前から案外馬が合っているからな？——エルメンヒルデは、後ろで待機していたボディガードを呼び、鞆から書面らしいのを取り出した。

「手ぶらで来た訳ではありませんわ。書面も用意しました」

エルメンヒルデが差し出した書面を受け取り、内容を一瞥した先生は息を吐く。

「…カーミラ側の和平協議について、か。今日のこれは外交——特使として、お前さんが俺達の元に派遣されたって事か」

「はい。我らが女王カーミラ様は墮天使の総督様や教会の方々との長年にわたる争いの歴史を憂いて、休戦を提示したいと申しております」

「順序が逆だ、お嬢さん。普通は和平の書面が先で、神滅具の話は後だろうが。これじゃまるで、力を貸さなきゃ和平には応じないって言ってるようなもんだ」

いけしやあしやあと云つてのけるエルメンヒルデに、先生は青筋を立てながら言い募る。

グリゼルダさんも目元を細めて、先生に続く。

「隔てることなく各陣営に和議を申し込み、応じていた我ら三大勢力がこれに応じなければ他の勢力への説得力が薄まりますね。『各勢力に和平を説いているのに相手を選んで緊張状態を解いているのか』と。しかも停戦ではなく、休戦。こちらの弱味を突かれた格好ですね」

随分やらしい真似してくれるな、和平に応じてほしけりやギヤスパアの力を寄せさせてか……。

けどグリゼルダさんの言う通り、ここで応じなきゃ今後の活動に影響が出るのは確かだし、リアスのお兄さんで魔王のサーゼクス様の信用だって失う。

エルメンヒルデは嬉しそうに口の両端をつり上げていった。

「ご安心ください。吸血鬼同士の争いは吸血鬼同士でのみ、決着をつけます。ギヤスパー・ヴラディをお貸しただければ、後は何もいりませんわ。和平のテーブルにつくお約束と共にヴラディ家への橋渡しも私どもが行いましょう」

この会話の流れが完全に向こう側に移ろうとしていた、そんな時だった。

『——なら応じなければ良い』

と、この状況でそんな声が俺の右手から響いた。

「……ど、ドラゴン?」

俺は戸惑いも隠さずに右手に問いかける……そう、まさかドラゴンがこの会話に首を突っ込むなんて思いもしなかったからだ。

「あなたは? 赤龍帝ドライブではなさそうですねが」

『この赤トカゲと一緒にするな、蝙蝠もどき』

「……下僕ですらないあなたがこの場で発言する権利はないでしょう?」

「いんや、生憎とこいつは俺の魔力そのものだ。だったら『王』である俺としての意見でもある。それで十分だろ?」

「またそのような屁理屈を……」

『黙れ。殺すぞ。今は俺のターンだ』

……こちらを絶望させるほどのプレッシャーが、右手を中心に発せられる。

それを間近で受ける俺は兎も角、向けられているエルメンヒルデは不快そうに顔を歪ませる。

『グレモリー次期当主のリアス・グレモリーの眷属一人を犠牲に吸血鬼側は休戦協定を結ぶ……貴様らの言い分をまとめるところこういう事になる』

「…犠牲になるとは決まっております。曹操と決着が付けばそれに越した事はありませんわ」

『欺瞞だな』

エルメンヒルデの言い分を、ドラゴンはバツサリと切り捨てる。

「……何ですって?」

『犠牲にはしない、とは言ってはいいではないか。俺が貴様らの立場なら早々に決着がつくなら喜んでその女装吸血鬼を生贄にする。人間との交わりで生まれたハーフの吸血鬼なら『雑種』で『糧』にもなると考えは付く。その可能性があるのなら、俺達はその間に應じる気はない。そうではないか?』

「……」

エルメンヒルデは何も答えない……交渉だから、自分達に不利な状況を生み出しかねない事は言わないか。

『沈黙は肯定と捉えるぞ。……次にだ。ならばこちら側の介入の是非は？戦力が不足しているのなら、こいつ等の仲間ないし加勢があつた方が効率的だとは思うが』

「先程の言葉を聞いていませんの？決着は私達が付けます。アドバイザーぐらいでしたら、構いませんが」

『随分と身勝手な物言いだな』

「純血の吸血鬼同士の決着のどこがおかしいのですか？同じ吸血鬼同士ですもの、ギヤスパ・ヴラディはハーフですが吸血鬼です。何も矛盾はしてはおりませんが」

エルメンヒルデの物言いに、ドラゴンは『そうだな』と一言置くと――

『ならばこちらの答えも最初に述べた通りだ。――今回の休戦協定に応じなければ

良い』

――えっ!?

『おいお前何言ってくれちゃつてんの？和平掲げてる三大勢力が和平拒否するって事だぞっ。』

『ああ。だが——信用に足らない者達を相手には応じない、それなら理屈は通る』  
つ、そうか……ドラゴンの言いたい事が分かって来たぞ。

『確かにどの勢力も腹に一物抱えているだろう。だがある程度信用できるのならその休戦協定を受け入れている。だが表面上も信用できない相手きやうけつぎなら話は別だ。上つ面すら嘘と欲望で塗り固めたような奴等の休戦協定なぞ、後から消されて内部から崩される。ならば最初から跳ね除ければいい』

「……私達のどこが信用できないと?」

『全部だ。和平を盾に女装吸血鬼を求め、それを盾にして交渉してくる奴等なぞ欠片も信用できん。——吸血鬼の諍いは吸血鬼同士で解決する、だったよな?ならここにいる女装吸血鬼は今悪魔陣営の存在だ。貴様等の内輪揉めに駆り出す理由などない……そもそも純血の吸血鬼同士の諍いに、普段蔑んでいるハーフの吸血鬼を投入するのかが全く分からん。それが理由だ、言いたい事があるなら聞いてやろう。蝙蝠もどき共』

もう一度の蝙蝠もどき、その前に言われた煽りに近い意見にエルメンヒルデはどうやら我慢の限界らしく、殺気が漏れだしてくる。

「……争いを無くしたくはありませんの?表面上とは言え、休戦協定を結べば、民は安寧に過すごせるでしょう」

『何度も言わせるな。信用できる要素が欠片もない貴様等との和平なぞ結ぶつもりはない。その書面に關しても後で燃やして無くせば幾らでも反故に出来る。後は知らない振りをするれば良いだけだからな』

「吸血鬼の誇りにかけて、そのような真似は絶対にしませんっ!!」

『その辺の埃より軽い誇りでよくもまあほざく。血の気がない割には随分面の皮が厚い種族なのだ、貴様ら蝙蝠もどきは』

三度目の煽りに、目の前の吸血鬼からの殺気が更に強くなる。

「ドラゴン、そこまでだ」

『まだ一万字以上は言えるぞ』

「文字数多くなって読み辛くなるわ!……ドラゴンが無礼な事沢山言ったのは謝る。けど、ドラゴンの言った事の中にも事実はある。今のところあんた達を信用できる要素はない。∴和平は確かに大切だけど、だからこそ二つ約束してほしい」

「∴何をでしょうか」

「俺達も自分の目で状況を確認したい、だから領地内の行動の許可。二つ目は俺達の中から誰かをギヤスパーと同行させる事。自分達の信用に箔をつけたいなら、最低でもこの二つは許可してもらいたい」

俺は一息つくと、ギヤスパーに目を向ける。



「ギヤスパー、お前は どうしたい？この諍いはお前が無理に関わる事はない、殺気ドラゴンが言った通りに、ややこしい吸血鬼の問題は此奴らが解決するだろうからな」

ギヤスパーは一度瞑目すると、次に決意の眼差しで力強く言った。

「僕……行きます!!吸血鬼の世界に戻るつもりはありませんし、僕の居場所はここです。でも、ヴァレリーを助けたいから!あの時、虐められて絶望していた僕の希望が、ヴァレリーでした。だから今度は、僕がヴァレリーを救いたい!!救いたいんです!!」

『……本人はこう言ってるぜ、蝙蝠もどきさんよお』

ああ、良い顔になったじゃねえか、ギヤスパー!!

「後はお前たちの対応次第だ、どうする?」

先生に促され、エルメンヒルデは瞑目して息を吐く。

「では、一度カーミラ様に伺ってみましょう。領内に戻って検討した内容を後日お送りします」

「妥当な所だな。リアスは どうする?」

「ギヤスパーが良いのなら、私はその意思を尊重したいわ」

「ようし。エルメンヒルデ、その連絡に関してはここに頼むぞ」

先生はメモ用紙をエルメンヒルデに手渡す。

エルメンヒルデはそれを受け取ると、静かに立ち上がった。

「それでは、これで失礼いたしますわ。今夜はお目通りできて幸いでした。何よりも自分の根城に吸血鬼を招き入れるという寛大なお心遣いに感謝いたしますわ、リアス・グレモリーさま」

『さっさと失せろ』

お前本当に嫌いなんだな、吸血鬼……。

『あの視線が気に食わん』

『折角の美貌も台無しだな』

『まず血の気がない時点でないだろ、アレは』

俗っぽい会話でめるなよ！

## MAGIC160 『これからの動向』

「……相変わらず、吸血鬼は好きになれない……ッ！」

会談が終わって直ぐ、ゼノヴィアは溜まった鬱憤を吐き出すかのようにテーブルを叩いた。

…此奴の事だから斬りかかりそうな感じもしたけど、よく我慢したよ、ゼノヴィア。昔のあなたなら、迷わずデユランダルで斬りかかっていたところですね。よく我慢しました——成長しましたね」

シスターに褒められて、ゼノヴィアは複雑そうな顔をしつつ頬を染めていた……っ！  
か昔も似たような場面があったのかねえ。

『吸血鬼と言ってもこの女装野郎と随分違うじゃないか。まだこいつの方が面白いぞ』  
「そ、それって僕褒められてるんですかあ……？」

「ドラゴンにしちゃ褒めてんじゃねーかな」

しかしドラゴン、お前凄いやがったな。

『何がだ』

和平を結ばなくて良い、って言った事だよ。

あの空位でそんな事ぶっちゃける奴いないぜ、普通。

『別に俺は悪魔の陣営に興味はない。…ただ、お前に死なれては困るだけだ』

『人、それをツンデレと言う』

『誰が何時デレた』

『え、無自覚なのこわ……』

『何故引く』

何時も通りの軽口のキャッチボールを交わすこいつ等は放っておいて……

『この後の事を決めとかないとな』

『そうですね。向こうからの連絡を待つ身と言っても、何も用意せずに行くわけにはい

きませんから』

俺の言葉にソーナ会長も同意する。

ギヤスパー本人が助けに行きたい、その意思を出来る限り尊重したいところだ。

『行くわ。今度こそヴラディ家とテーブルを囲むつもりよ。まずは私が先に行つて、この目であちらの現状を確認してくるわ。ギヤスパーの派遣はそれからでも遅くないと思ふの』

『俺も同行した方が良いか？』

『いや、相棒は待機しておいた方が良いでしょう』

え、何で？

「前提条件として、ギヤスパアの主たる私が直接訪れるのが道理だし、先方にも失礼がないわ。そしてあなた達に待機してもらう理由を大別すると二つね。一つは有事が起きた際に、私がいなくても直ぐに行動できるようにする為。ここに襲来してくる者がいるかもしれないから、対応できるメンバーが残った方が良いでしょう。二つ目だけ——」

『向こうで何かが起こった際の、増援要因としてだな？』

ドライグの問いに、リアスは頷いた。

「そうはならないのが一番だけれど、今までの経緯やヴァンパイアの問題から推察しても巻き込まれる可能性があるわ。いえ、それを踏まえて行動しても何らおかしくない」

「…そうか。逆にぞろぞろ付いて行っても警戒されるもんな」

大勢で行けば力で解決するつもりか、そう勘繰られる可能性が高い。

今まで他勢力と関わっていなかった吸血鬼の気性を考えると、確かに『王』のリアスが行くのは理に合う。

「でも一人で行くのは危険なんじゃないか？ ツエペシユにカーミラの事情が絡みそうだし、最低限の護衛を連れて行っても良いんじゃないのか？」

「勿論、そのつもりよ。——私の『騎士』は連れていくわ」

木場か、人選としては最適だな。

それに実力だつて折り紙付きだ。

『お前が行ったら野蛮な印象与えそうだしな』

「やかましい!」

「イツセー様は『王』としての経験がまだ不足しているので、向こうを怒らせてしま  
う可能性が高いですからね」

「ぐふっ!!」

グレイフィアのまじりつけナシの正論に俺は膝を付いた。

正論だけに言い返せないのが辛い……。

『さっきの会談でもそうだったからな』

「半分以上はお前だろーが!!」

「お前ら口喧嘩は余所でやれー。……俺も同行しよう。エルメンヒルデから話は聞けた  
が、確認しておきたい事があるからな。リアス、お前はヴラディ家に行け。カーミラ側  
に向かったら、警戒が強くなるだろう」

先生も向かうと……でも待てよ?

「先生つて墮天使の要人でしょ?警戒されるんじゃないっすか?」

「未だに吸血鬼といがみ合いを続けてる天界と教会の者が行くよりは多少はマシさ。そ

れに、神器に詳しい俺が行く、それ即ち交渉の武器になる」

『聖杯か』

「そういうことだ」

そう言うところ先生は天界と教会の者——グリゼルダさんとイリナに向き合う。

「イリナ、シスター・グリゼルダ、このことはミカエルにも伝えておいてくれ。聖杯と吸血鬼、流石にきな臭すぎる」

「ええ、わかりました。こちらは場合によってはジョーカーを切るとミカエルさまも仰っておりますし、最悪の結果だけは避けたいものです」

グリゼルダさんの言葉に先生も軽く驚いていた。

「…そんな簡単にジョーカーを切れるのか？って言うか、俺達への対応のランクが上がってるな。まあ、えらい連中ばかりが狙ってくるから当然っちゃ当然か」

『聖杯と吸血鬼なんて組み合わせ、エボルマッチなぐらい最悪な組み合わせだからな』

「最低限の犠牲で済むようにしたいというのはミカエル様の御意思でもあります。その為にも暇人ジョーカーは存分に使えとの事です。……本当あの子ったら、暇さえあれば美味しいもの巡りで連絡がつかなくなりますから。そのゼノヴィア以上に困った子です」

切り札がそんなザマで天界大丈夫なのかな……。

「イツセー。立神に連絡しておいてくれるか？」

「…連れて行くんすか？吼介を」

「護衛として連れていくなら何とかなるだろ。…もしかしたら、フロントムも絡んでるかもしれないからな」

「…何でそう言えるんすか？」

俺が尋ねると、先生は言いにくそうに言葉を濁した。

「…悪い、それに關してはまだ言えない。まだ確証がある訳じゃねえからな」

「…分かりました。一応吼介に連絡してみます」

なんか腑に落ちない感じではあるけど………。兎に角、降りかかる火の粉は払うだけだ。



## MAGIC 161 『邪なる龍』

「そうだ、おまえ達に伝えておくことがあったんだ。ヴァーリから情報があつてな」

吸血鬼についての話し合いが終わった頃、アザゼル先生が思い出したかのように俺達にこんな事を話し始めた。

「ヴァーリから？」

「あいつが世界中に足を運んで未知のものを探求しているのは知っているな？」

それは知ってる、何でもこの間は絶版になったエロゲの初版を見つけたとか言ってたな。

「いや、それ何処で見つけたんだよ」

「さあ。所有者は表立って語るなって言ってたみたいで」

「それは気になるが……どうにも旅先で『禍の団』の連中と遭遇するらしくてな」

『禍の団』と？

「それって所謂裏切り者の処罰ってヤツですか？」

「概ねそんなところだ」

まあアイツら、オーフィスを俺達に引き渡してから『禍の団』からも追われる身になってたし。

元々色んな派閥から睨まれてたからなあ。

「ヴァーリが探していたのは既に滅んだとされる凶悪な魔物の類いだ。生きているかもしれないという不確かな情報をもとに探しているようだ。それで、だ。その滅んだ魔物、主にドラゴンの生息していた地に『禍の団』の構成員——魔法使いのグループも来ていたそうだな。遭遇は一度や二度じゃないらしい」

そりゃ物騒な話だな。

でも滅んだドラゴンが生息してた地に『禍の団』か……。

「偶然じゃなさそうですね。まあ、あいつらなら余裕で撃退できると思いますが……。……：そういうや、滅んだドラゴンってどんなのがいるんですか？」

「お前が知ってるかは分かんないが……有名どころで言えば『三日月の暗黒龍』クロウ・クルワツハ、ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン『魔源の禁龍』アジ・ダハーカ、エクリプス・ドラゴン『原初なる晦冥龍』アポプス……この三体だ」

「アジ・ダハーカはゲームとかで聞いた事あるな。主にカードゲームで」

「このバカの発言はほつといて、どいつも超メジャーな邪龍だ。相当危険な奴等だった」  
誰がバカだ誰が……お前がそう言うって事は、かなりヤバいんだな。

「そいつらは残虐性が高すぎて封印、退治されちゃったよ。他にも北欧のニーズヘッグ、初代ベオウルフが退治したグレンデル、英雄の初代ヘラクレスが試練で倒したラードゥンは伝説の果実を守護していたドラゴンだったが退治されたな。日本だと八岐大蛇が有名だ」

ファンタジーゲームで聞く名前ばつかな。

「こいつら邪龍に共通するのはどこまでもしぶといってところだな。ヴリトラですら、魂を幾重に刻まれて意識を封じられただろう？」

『それぐらいしないと邪龍つてのは存在を抹消できないんだ。で、邪龍の中でも筆頭格の三匹は頭一つ二つ抜けていた』

ヴリトラですら結構ヤバそうだけど……そいつらはもつとヤバいのか。

生きてなくてよかった、ホント。

「邪龍がヤバいって言われる理由は何なんだ？能力と強さか？…もしかして、二天龍より強いんじゃない」

「それは流石に現役時代の赤白の方が強いだろう」

『訴えるぞ』

分かった、俺が悪かったから左手操って太もも抓るな。痛いから。

『とは言っても、俺やアルビオンですら『邪龍』と戦うのは避けてたよ。一番厄介なのは

な、何度倒しても狂ったように挑んでくるところだ。あれは執念深いとか無限コンティニューとかそんなチャチなもんじゃ断じてねえ。もっと恐ろしいものを何度かやりあつて感じたぜ……」

「誰もポルナレフみたいに語れとか言つてないから。それが『邪龍』の恐ろしさか……」  
「何だ一体。滅んだ『邪龍』共を語り合つてるなど、珍しいな」

そう言つたのは何時の間にかやらソファに座つていた俺の使い魔こと龍王ティア。膝上にはオフィスがいた……俺のプレーンシュガー食べながら。

「地味に久しぶりの登場だな、ティア……」

「そう言うメタいのは受け付けないぞ。ゲフン……力があつて、暴れん坊のドラゴンは例外なく滅ぼされる。お前の中の馬鹿一号が良い見本だ」

「あー」

確かに、言われてみたらドライブはアルビオンと盛大な喧嘩をしてたら三大勢力に封印されたんだつたな。

『酷い事するよな、全く』

『当時の情勢を考えたら、寧ろ消されて然るべしだったんじゃないのか』

『そんなの可哀想だろう！』

自分で言うな、自分で！

「まあ、ドライブは馬鹿だし、アルビオンは……まあ、乙女心の暴走なんだろう。多分、きつと、メイビー」

『なあ、俺サラツと貶された気がすんだけど』

『寧ろ直球ストレートに貶されたぞ』

「その馬鹿二号は実在するドラゴンであれば間違いなく『邪龍』だろう」

『おい、誰が馬鹿二号だこの色ポケ龍王』

じゃあドラゴンも封印される時は四つに魂を分裂されて神器に封印されるんだろうか。

それぞれの神器で火、水、風、土のエレメントを使えるとか？

『人を殺す算段を軽く考えるな』

「でもロマンじゃん」

『訴えるぞ』

痛い痛い、分かったから右手操って耳抓らないで。

「何は兎も角、水面下でテロ集団が何かを企んでいるようだ。また、嫌なことが起こるかもしれないと覚悟だけはしておいてくれ」

『OK牧場』

「お前らそんなだから馬鹿一号二号って言われるんだぞ」

『じゃあ相棒は馬鹿三号だな！』

『寧ろ馬鹿とアホのV3か』

俺達三人トリプルお惚けライダーって喧しいわ!!

――

翌日の朝、俺は朝練を終えてシャワーを浴びようと浴室に向けて歩いていった。

「…何か、ここ数日でいろんな事が起きてるな」

『フェニックス関係者に接触する魔法使いに、フェニックス家産ではない涙の流出、吸血鬼に聖杯、白龍皇の拉麺小僧に接触する『禍の団』の構成員に魔法使い、か。全て偶然なのかねえ』

確かに…全部この短い期間に俺達の身の回りで起こっている。

まるで運命みたいに。

「ま、考えても仕方ないか」

巻き込まれるのなら戦えばいい、元より細かい事を考えるのは苦手だしな。

そう思っていた俺の背後から、誰かが飛び付いてきた！

「うわっ!？」

「ヤッホー、赤龍帝ちゃん!」

「…黒歌、何してんだよ」

飛び付いてきたのは小猫ちゃんのお姉さん、黒歌。

「っつーかあんまりくっ付かないでくれ!汗臭いし、何よりおっぱいの柔らかさに興奮しちまうから!」

「すんすん……赤龍帝ちゃん汗臭いにゃん。ひよつとして今からシャワー?」

「お、おう」

「じゃあ一緒に入りましょ!」

「はあ!？」

な、何でそうなる!?!いや、確かに嬉しいのは嬉しいが!

「それに、赤龍帝ちゃんが私を呼んだ理由、まだ聞かされてないしい?だからちようどいい機会だと思って、ね?」

「…それもそうか。分かったよ」

吸血鬼関連でござたごたしそうだしな、今の内に話しておこう。

そう思ってお互い服を脱ぐと、黒歌はちよつと恥ずかしそうに顔を染めていた。

「何だ?どうしたんだ?」

「……こうして見ると、ちよつと恥ずかしいな……って」

な、何を急にしおらしくなって……ちよつと可愛いつて思っちゃまった。

悶々としながら頭を振ると、風呂場に入り、シャワーを浴びる。

「……でさ、話つて、どういう用件なの？」

「……なあ、黒歌」

黒歌の方を振り返ると、俺は用件を告げようと口を開こうとし——た瞬間に、風

呂場の扉が開いた。

「……イツセー様、黒歌さん？」

「れ、レイヴェル？」

……ここでレイヴェルが入って来たか。

多分気付かなかつたか、入ってたとしても女性陣の誰かだと思つたんだろう。

風呂場で会うのは初めてじゃないけど……やっぱり大きな、レイヴェルのおっぱい

！

程よく実つたそれに、しっかりと女性的なラインを描く体！

いやあ、小猫ちゃんと同年代とは思えないな……いや、小猫ちゃんとレイヴェルを比

べちやダメだな。

小猫ちゃんには小猫ちゃんの魅力があるんだ、反省しなくちや。



「ありや、白音のお友達のお嬢ちゃんが来ちゃったにや。どうせなら一緒にどーお?」  
「で、では失礼します……」

嘘お!?あの清楚なレイヴェルが黒歌に誘われたとはいえ一緒の風呂に入って来ただと!?

「さーとと、それじゃ赤龍帝ちん……」

「し、失礼します!」

し、しかも二人に背中を流される事に!これ一体どうなっているんですか!?

『あ、ありのままに起こった事を話すぜ。黒猫の娘と一緒に入る事になったらフェニックス家の娘と一緒に入る事になった……!』

だからそれはもう良いつて!

背中を泡立てながら、黒歌は俺に問いかける。

「で、赤龍帝ちん。私に何を言おうとしたの?」

「も、もしかして大事なお話だったのでしょうか?で、でしたら私、出た方が……」

「いや、大丈夫だよ。……黒歌、俺の眷属にならないか?」

俺がそう言った瞬間、風呂場がシンと静まり返った。

振り返ってみればレイヴェルは驚いた顔をしており、黒歌もポカンとした顔をしていました。

「…赤龍帝ちゃん、それって何の冗談？何時ものジョークより、質が悪いわよ？」

「ジョークで言うかよ。俺は本気だ」

「……私がイエスって、言える立場じゃないのは知ってるでしょ」

黒歌はスポンジを下ろすと、静かに俺にそう言い返す。

「……お前がした事が許されない程の罪だつてのは知ってる。けど、お前はそうせざるを得ない事を、以前の主はお前に、小猫ちゃんに強いたのは事実だ。だから、『王』に昇格した時、サーゼクス様に直訴したんだ」

「何を…直訴したのよ」

「お前の罪の減刑だ」

「…」

俺は改めて、黒歌に向き直る。

「主殺しは確かに大罪だ。けどそれと同じぐらい、悪魔の世界で約束事を破るのは重い罪でもある。……俺が主になって、お前を眷属として一定期間監視する。その間何も問題行為を働かなければ、お前を赦す。…まあ、お前がテロ組織に加担していたことも考えると、暫くは俺の監視下でいなければならぬのはあるけど」

「……つまり、赤龍帝ちゃんの眷属として活動する＝奉仕活動って事？」

「そうだ。…けど、お前がそれを破らざらなければ、小猫ちゃんとも表立って一緒に行動で

きる」

「！」

小猫ちゃん、その一言に黒歌は目を見開く。

「……まあ、これは俺の自己満足みたいなものだ。それを受けるか受けないかはお前の自由だ」

「……一つ、聞いても良い？」

「ん？」

「何で、そこまでするの？……アンタは、私たち姉妹とは関係ないのに、どうしてそこまでして他人の為に動くの？」

……どうして、か。

「別に大した理由じゃないさ。……ただ、ちゃんと面と向かって小猫ちゃんと過ごしてほしい、っただけだよ。今まで離れてた分な」

「……随分無茶な注文ね」

「今だっしてしてる事だろ？それまで離れてた事を考えたらそれも罪滅ぼしだ。それに小猫ちゃんには、もう泣いてほしくない……それはお前だっしてそうだろう？」

「……私も、小猫さんの友人として、小猫さんには笑顔でいてほしいです。でも、それには黒歌さんにも、笑顔でいてほしい……そう思いますし、小猫さんだっしてそう思ってる筈

ですわ。——姉妹一緒にいるなら、笑顔でいませんと」

それまで黙っていたレイヴエルも、黒歌に自分の胸の内を語る。

黒歌は俯いていたが、やがておずおずと顔を上げた。

「…ちよつと、考えさせて」

「ああ。良いぜ」

「…でも、ありがと」

黒歌はそう言うのと、シャワーを浴びて出て行つた。

「…レイヴエル、ゴメンな」

「イツセー様が謝る事ではありませんわ。私はただ思っていた事を言っただけですから」

レイヴエルは静かに微笑む……やっぱ、レイヴエルは頼りになるな。

「レイヴエルが眷属だったら、大助かりだな」

「……イツセー様にとつて、私は迷惑ではないのですか？」

「んな訳あるかよ。……レイヴエルには助けられてるからな」

「で、では！」

レイヴエルは意を決したように——俺の背中に抱き着いてきた！

「れ、レイヴエル!？」

「…私を、イツセー様の眷属として、一生傍に置いてほしいと、言ったら……ご迷惑でしようか？」

「……」

レイヴェルは顔を真っ赤にしながらも、目は真剣な光を帯びて俺に問いかけてくる。

「……迷惑じゃ、ないよ」

「！」

「まだまだ未熟な『王』で良いなら、けどな」

俺は苦笑いしながら、レイヴェルの顔を見ながらそう言う。

その言葉を受けて、レイヴェルは早口で捲くし立てる。

「わ、私はそんなイツセー様だからこそ、グレイフィア様達と共に支えていきたいと思っていますわ!!だ、だから、私を……」

レイヴェルは意を決したように、俺へと顔を近付けてくる——と、

ザパーン!!

「我、参上」

浴槽に潜水していたらしいオフィスが、ゴジラ宜しく急に浮上してきた。

「……何時からいたんだよ」

俺はそう突っ込むしかなかった。

結局レイヴェルスカウトの件は有耶無耶になり、三人で仲良く湯船につかる事にした。

……オフィスの服が見当たらなかったけど、何でだろうな？

『全裸で来たからだろ』

何であけすけに言うかなお前は!?

## MAGIC162 『出発の時（リアス達が）』

吸血鬼の会談から更に幾日が経過した頃、エルメンヒルデから連絡があり、今日にもリアス達は吸血鬼の領地へと旅立つ。

場所はルーマニアの山奥だそうな……山奥って時点で怪しさ満載だな。

『山奥ってのは古来から碌な事が起きないんだよな』

『獣害しかり、神隠ししかり……か』

神隠しって結局は転落して亡くなったとかそういうケースが多いよな……って関係ないだろ。

とは言うもののまだ準備も整ってはいないし、何より女の子達が準備をしている以上、男の俺じゃ邪魔になっちゃうし……何、今更そんなの関係ないぐらい深い仲になってるだつて？

親しき中にも礼儀あり、だぜ？

そんな訳で俺は今、ティア監督の下でハティとスコルの二匹とじゃれ合い……もとい、特訓をしている最中です！

『ガルウ!!』

「っ!」

ハテイの飛び付きを横に飛んで回避し、掌に魔力弾を生成———すぐさま撃ち放つ

!

「拡散する龍波動ツ!!」

撃ち放たれた魔力弾は複数の弾丸に拡散されハテイへと向かう———が、魔力を込めた咆哮をスコルが奏でそれら全てを相殺してしまった。

「そーら」

『ギャウツ!!』

スコルはダツシユで駆けながら前進の体毛を鋭く尖らせて肉薄、それをアシストするようにティアアお得意の魔法攻撃がスコルを守る様に囲み襲い来る!

「———オオラツ!!」

『ギャン!?!』

俺は全身からオーラを放出して魔法攻撃諸共スコルを吹き飛ばす!

体勢を立て直そうとするスコルを、腕を伸ばして掴むとハテイへと投げ飛ばす!

『ガウツ』

スコルは空中で回転して着地すると、どう攻めるか考えているように唸る。



「にやー、精が出てるわねえ」

「お邪魔してまーす」

と、ここでトレーニングルームに黒歌とルフェイちゃんが入って来た。

黒歌の両手には……珍しい事に分厚い本が乗っていた。

「おう、ゆつくりしてけえ」

「ふむ、丁度良い。イツセー、ここいらで休憩としよう」

了解つと。

俺はティアから手渡されたタオルで汗を拭い乍ら、二人へと近づく。

「何の本だ？」

「……ん、生命に関する本にや。オーラとか仙術とか闘気の事を纏めた物よん」

黒歌は俺の顔を見て、ちよつと気まずそうにしつつも答える……まあ、そりやそうだよな。

……未だに黒歌からの返事はもらっていない。

それを決めるのは黒歌だから、俺も返事を催促したりはしないけど……本人はやつぱり思うところがあるらしい。

こうして付き合ってみると、結構しつかりしたお姉さんだよな、コイツ。

「妹さんにどうやったらよく教えられるか、本を見て研究されているんですよ」

「ほお。随分妹思いじゃないか」

俺と黒歌の気まずい空気を何とか払おうとしてか、ルフエイちゃんは俺にそう教えてくれ、ティアはそれを茶化した。

おー、やっぱりちゃんとお姉ちゃん出来るんじゃない。

最近は何となくゲームとかかしてるのを見たりしてるし、最初の頃を考えるとかなり仲が修復されてるみたいで何よりだぜ。

「仙術の基本は己と他者と自然の気の在り方を把握する事。兎にも角にもまずは精神集中、静かに座禅を組んで己の気を緩やかに揺蕩えて、周囲の気も確認する。基礎中の基礎だけど、これが成長するのに一番にや。だからまずは座禅させてるんだけどねー」

「そーいや座禅させてるの見た事あるけど、そーいう意味があつたのか」

「そゆこと」と言つて黒歌は薄く笑む。

「俺も扱えるようになれるかな?」

「うーん。仙術はある程度の適正も求められる力だから、ちよいと分かんないわねえ。でも赤龍帝ちゃんは自分の絶望だつて乗り越えれたんでしょ? だつたら適正はあるかもねん」

『仙術は使い方を誤れば悪意の気も取り込んでしまいかねんからな。そーいう意味では相棒は悪意の気には強いだろうが……適性があるかは正直やってみないと分かんない』

ふーん……ま、機会があつたら触れてみようかな。

「そう言えば、魔法使いさん達との交渉はどうですか？」

「んー、まあボチボチかな。どれもいまいち……なあ」

『パツとしないらしい』

言い方!!………確かに、これだ！つてくる魔法使いがないのは事実だけど。

「ウィザードラゴンさんの技量を考えると、確かに相応以上の使い手の方でないともリットがないかもしれませんね」

『オマケにメフィスト・フェレスが言うには、相棒は正規の魔法使いの連中から嫌われ気味らしいからな』

そうなんだよな……聞けば「古くからある魔法使いのスタイルを汚している！」と言う事らしい。

それでも俺の力量や魔法に興味を覚えてくれる人達が、俺に履歴書を送ってくれてるんだと。

「ルフエイちゃんだったら結構勉強になるんだけどな」

「ふえ!!」

「ほら、ルフエイちゃんって結構魔法詳しいじゃん。だったら俺も魔法に関する知識だって深められるし、俺の魔法の技術もルフエイちゃんを介して魔法使いの協会に伝

わって技術拡大に繋がるんじゃないか？」

そうすれば俺に対する悪感情もちよつとは和らぐんじゃないかなー…と思つて言つただけど、ルフェイちゃんは納得したようであちよつと残念そうな顔をしていた。

「??」

「ひやはは、赤龍帝ちん夜道には気を付けてにやー」

「こええ事言うなよ!?!」

何それ俺刺されちやうの!?

ぎやーぎやー騒いでいると、トレーニングルームにアジアが入つて来た。

「イツセーさん」

「お、どしたアジア」

「リアスお姉様が日本を発つそうです」

あれ、今日の夜じゃなかったけ？随分早いけど……

「天候が回復したので、小型ジェットが飛べるようになったそうです」

「成程な。わりい二人共、ちよつと出てくるわ」

黒歌とルフェイちゃんは「いってらっしゃーい」と言い、ティアもひらひらと手を振ってくれた。

――

兵藤家の地下にある巨大な魔方阵。

そこにオカルト研究部のメンバーとソーナ会長が集っていた。

理由は言わずもがな、リアスと木場に吼介、序でにアザゼル先生を見送るためだ。

荷物を持ち、魔方阵の中央に向かうリアス、木場、吼介と序でに先生。

「おいイツセー。お前地の文でなんか失礼な事言つてないだろうな」

「気のせいっすよ」

「…何か納得いかねえ」

ブツクサ言いながらも準備する先生を尻目に、リアスはギヤスパーを抱きしめる。

「…貴方の事は私が守つてあげるから、何も心配しなくていいわ。ヴラディ家との事も私がきちんと話を付けてくるから」

「はい、部長……」

ギヤスパーもリアスの抱擁に甘えるようにしていた……ちよつと羨ましいぜ。

つて、イカンイカン。自重せねば！

「木場、リアスの事頼むぜ」

「任せて」

「吼介、先生の介護大変だろうけど、頑張れよ」

「皆まで言うなって。下の世話以外はちゃんとするからよ」

「俺はジジイか!？」

まあ冗談はさておき……序でに先生は会長とロスヴァイセさんに素っ気ない返事をされて不貞腐れていた。

「…例のフェニックス関係者を狙っているって魔法使い共が不気味だ。気を付けろよ」

『はい!』

それも注意しなきゃだしな。

返事をする俺達。

「アーシア、オーフィス」

先生がアーシアとオーフィスを呼ぶ。

「アーシア、例の件だが後はお前次第だ。オーフィスにアドバイスをもらいながら進めてみる。龍神のお前が側にいればなんとかなるだろう。龍神のありがたい加護つてのを頼むぜ?」

「はい、と、とても恥ずかしいけど、が、頑張ります」

「我、アーシアのこと、きちんと見る」

先生の言葉にアーシアとオーフィスが応じていた……何でアーシアが顔を赤くしているのかは気になるけど、まあそれは後でも良いや。

「リアスお嬢様、お気をつけて」

「ええ。グレイフィア達もね」

グレイフィアにそう言うのと、リアスは俺の方を見る。

「大丈夫」——俺はそう意味を込めてサムズアップする。

リアスも微笑んで、無言で頷いた……どうやら、気持ちはちゃんと届いたらしい。

転移魔方陣の中央に四人が並ぶと、魔方陣の輝きが一層増した。

朱乃さんが魔方陣の術式を最後に確認した後、転移の光が室内に広がり、そして——

光が晴れると、そこにリアス達の姿はなかった。

さて……四人が安心して帰ってこられるように、留守番はしつかりしなきやな！

『例の石の実験、ですか』

ルーマニアの山奥——の、更に深部になる森の奥地で、二つの影が言葉を交わしていた。

『エネルギーも初期より蓄えられた……本当に機能するかどうか、その実験だ』

一人は三つの獣の頭部を持つ異形の存在——ガルム。

もう一人は、黒いローブを被っていて良く分からないが、男である事だけは声で分かる。

『貴様はどうする』

『私も実験があるので』

男は懐から、新緑色の宝玉を取り出す。

まるで生きているかのように鈍く輝くそれを、ガルムは無感情に見つめる。

『……邪龍か』

『ええ』

『……まあ良い。実験の邪魔をしないのであれば構わんと、ワイズマンからも仰せつかっている』

『それはどうも。では……お互いに幸運があらん事を』



男は腰を下げてお辞儀をすると、その場から去って行った。

『…己に他者の在り様を投影しようとは………生命体らしい感情、嫉妬か』

———下らない

ガルムは感情の籠っていない声音でそう吐き捨てると、風と共に姿を消した。

# MAGIC163 『何時もと違う夜の一幕』

「いやあ、なんだかんだ言ってもアレだな……」

「?どうしましたか、イツセイさん」

リアス達を見送った夜、ベッドの上にいるのは俺とアーシアだけだった。

同棲を始めてからというもの、俺はリアスとほぼ毎日眠っていたからな……こう言っちゃうのは男の沽券に関わるんだけども。

「ちよつと寂しいな」

何時も以上にベッドが大きく感じる……うん、寂しいな!

三人で仲良く寝ていたのもあつたせいでそれが当たり前になつていたからか、何だか何時もの就寝時間とは違う違和感がぬぐえないでいた。

「大丈夫ですよ、イツセイさん。暫くの辛抱ですから」

「…そうだな」

一抹の寂しさが拭えないではいるけど、さあ就寝に付こうとした時、扉がノックされた。

「どうぞ」

「失礼します」

入って来たのは——グレイフィアだった。

髪を下ろして寝間着に着替えた就寝スタイルで、何時ものメイド服とは違う彼女の無防備な魅力を感じて見入ってしまう……って違う違う。

「珍しいね、グレイフィアが来るなんて」

「イツセー様が寂しさを抱えていると思ひ、リアスお嬢様が返ってくるまでの間ですが……一緒に寝ようかと思ひまして」

迷惑でしょうか？ そう小首を傾げながら恋人に問われて、断れる男がいようか？——

——否、断じて否！

「そんな事ないよ。……ちよつと寂しいから、こつちからお願ひしたい、かな」

「……アーシア様は、宜しいでしょうか？」

「はい、一緒にイツセーさんを癒しましょう！」

「有難う御座います。では、失礼します」

グレイフィアは一礼して、俺の隣にころんと横になる。

「……何か、新鮮だな」

リアスとアーシアに挟まれて眠るのはまた違う新鮮な気分、ちよつと気分が落ち

着いてくる。

「イツセー様は案外、寂しん坊ですから。アーシア様、もつと密着しましょう」

「はい、ぎゅーっしてしますね。イツセーさん」

うおっ、両隣から感じるおっぱいの圧が凄い、凄いです!!

日に日に少ずつ成長しているアーシアのおっぱいに、感触や大きさを全て知っているグレイフィアの大きくも柔らかいおっぱいのサンドイッチ……ベストマッチッ!

今夜の勝利の法則は、決まったぜ!……何てアホな事を考えていたら、再び扉がノックされた。

「失礼しますわ。……あら、グレイフィア様までいらしたのですね」

「朱乃さん?」

お客さんが多いなと思っていたら、透け透けネグリジエ姿の朱乃さんがいらした!

「ど、どうしたんですか?」

「リアスの代わりを務めようと思いましたが」

代わり?どゆ事?頭の上に大量のクエスチョンマークが浮かぶ俺を尻目に、朱乃さんは……ネグリジエを脱ぎだした!?

「…初めてですから、や、優しくお願いしますね……?」

「え……」

ポカンとなる俺の手前、朱乃さんもポカンとなる。

「…だって、今夜からリアスの代わりをするのですもの……違うの?」

「いや、いやいやいやいや! 確かに男と女が一緒に寝るってなるとそうなるのは当たり前かもしれないけど、俺は案外平和に寝てますよ!」

『そうだぞ。相棒は毎日シてないぞ』

「ドライブ黙ってる!!」

確かに毎日シてないけどな!

「はう! い、イツセーさんがリアスお姉様とそこまで進んでいたなんて! で、でしたら私も!!」

「アーシアちゃん?!」

アーシアちゃんも朱乃さんの雰囲気には押されたのか、俺の手をおっぱいへと導いていく!

ああ、最近ご無沙汰だっただけに抗いがたい魅力の感触が……!

「アーシア様、朱乃様。落ち着いてください」

だけどそこへ空かさず、グレイフィアの落ち着いた声がピンクな空気を変えた。

「イツセー様と交わりたいお気持ちには分かりますが、余り色に溺れるというのも問題です。ましてあなた方はまだ学生です。性欲にばかり感けてはいけませんよ」

「…グレイフィア様がそう仰られるのなら、今日は普通に寝ましょうか?」

「そうしましょう。…大丈夫です、イツセー様は絶対にお二人のお気持ちを裏切ったりはしません」

…あれ、何か退路絶たれた気が。

『絶たれたな』

『……ぐー』

軒で返事してるみたいになってるじゃんドラゴン……。

「ふふ、ではアーシアちゃん。その時までお楽しみは取っておきましょう」

「は、はい!」

楽しさを隠さない笑顔で、二人は更に密着を強めてくる!

柔らかいのと温かいのがマザルアップしている最中、グレイフィアがそつと耳元で囁いてくる。

「…責任重大ね、イツセー?」

「……はい」

この後、特に何もせず眠った……寂しさは何時の間にやら、何処かへ吹き飛んでいった。

## MAGIC164 『そして日常は崩れ去る』

リアスが日本を発って幾日かが経過した——俺達はと言うと、リアス達からの吉報を待ちながら何時もと変わらぬ学園生活を送っていた。

…ルーマニアには無事到着したと聞いてはいるけど、人里離れた山奥とあってか、そこまで移動するのに中々骨を折っているのだとか。

転移使えよと思うけど、許可取ったとはいえそんな真似したら一気に怪しまれるしなあ……地道に進んでいると言う訳です。

「なあに小難しい顔してんだよ」

そんな思案に耽っていた俺の頭を小突くのは、悪友の松田。

今は…そうだ。体育だからグラウンドに向かっているとところだったな。

困みにジャージ着用だ。悪魔の身とは言え、寒いからね。

「体育は最近だとイツセーの独壇場になるからな。対抗できるのは立神ぐらいだけど、私用で暫く来れないらしいし」

「ああ。チームを組むなら良いけど、相手にいるとイヤになるんだよな」

松田に続いて元浜もそう嘆息しながらも同意した。

……以前から鍛えてたのと、悪魔になってからの激闘を考えると、俺の基礎体力は此奴等じゃ何も出来ないぐらいに向上してるからな。

これでも結構手加減してるし、何なら日常生活でも極力力まないように気を付けてる身だし……とは言うけど、結局体育は俺の独壇場になる。

『特にサッカーとかな。プロの選手でもお前に適わないんじゃないか？』

バーカ。授業でしか最近じゃ触れてないのに、毎日練習してるプロの選手だと技量で負けるわ。

体力だけが全てじゃないんだぜ、サッカーって。

『だがお前の場合、力技で何とかゴリ押せそうだし』

……否定できない自分がいて酷く情けない。

とまあこんだけ能力が人間離れしちゃった以上、イヤでも自分が異形の存在だって言うのは自覚させられるのは、複雑な気分だ。

……俺、ちゃんとこいつ等と一生友達でいれるのかな。

何てナイーブな思考回路になりつつもグラウンドが近づいてきた頃、松田が不意に口にする。



「そういえばさ、中学時代に田岡っていたろ？」

「あー、女子の体毛に妙に熱かった奴だ。マニアックだったな」

俺の言った通り、その田岡君は女性に生えてる毛についてかなり早口で語りまくつてた男子だったんだ。

かなり濃い趣味してるから、未だに覚えてる……俺にはまだ理解が出来ん世界だけど。

「あいつの兄ちゃんがさ、今度独立して店を持つんだって。でな、一緒に店を立ち上げた仲間が学生時代から仲が良かったマネージャーなんだって」

「ほお、女子マネージャーと共に店を立ち上げた……と。男と女の関係も見え隠れしてしましますなあ」

「エロゲ脳か」

俺も含めて、だけど。

「まあ、それは分からないけどよ。学生時代からずーつと支えてもらっていたんだとき。で、学生の頃から『いつか店をもつて独立するから、付いて来てほしい』って口説いてたんだと。そのマネージャーは敏腕で、他の奴等からも色々誘われてただけで、田岡の兄ちゃんと一番信頼関係が厚かったからか、付いて行くことに決めただってさ」

「ロマンだな。でもいい話じゃん」

……俺にとつちや、レイヴェルが俺の企業に付き合ってくれる、みたいなもんか。

『最終的に決めるのは相棒自身だ。あの小娘も、それは分かっているだろうよ』

まあ、それは分かっているけどよ……でも、レイヴェルといると、心が安らぐつて言ううのも嘘じゃない。

俺の行く道に、ずつと付いて来てくれるなら心強いったららないよ……うん、良いよな。

何て当たり障りのない日常の一コマだったが——そう言うのに限って、脆くも崩れ去るって言うのを、改めて知る事になった。

『相棒』

ああ、分かっている……招かざるお客さんのご登場だな。

「…おい、見ろよ。コスプレしてる奴がいるぜ?」

松田が指差した方向には——フードを被った連中が、こちらへと手を突き出していた。

狙いは……俺だな。

「松田、元浜……校舎の物陰でも良い、隠れてろ」

「え?」

「ど、どうしたんだよイツセー。そんな怖い顔して……え？」

《スリープ・プリーズ》

事情を呑み込めていない二人を眠らせると、ガルーダ達に物影へと運ばせる。

周りに人影がないのを確認して、俺は人のいない場所へと駆け出す！

「仲間を庇うか、赤龍帝！」

「ハハッ！ 甘っちょろいんだな！」

「だが、協会が出した若手悪魔のランクではもう若手の域を超えていた！破格なんても  
のじゃないぜ！」

どうやら連中は俺一人が狙いだったらしく、追って来てくれたが……協会？

あいつ等の格好を見れば魔法使いの総本山の協会だろうけど、あのメフィストさんが  
こんな事するのは可笑しいし、何より自分に不利益になる。

となると……例のはぐれ魔法使いか！

ザっと、俺は人気のない構内の敷地で連中と対峙するが…腑に落ちない事がある。

「お前ら、どうやってこの一帯に入り込んだ？」

俺は確認の意を込めて連中に尋ねる……答えは返ってこないだろうけどな。

この領土一帯は三大勢力の同盟圏内で、頑丈な結界も張られている。

身分や素性をばらせば絶対に跳ね除けられるこいつ等が、何でこの場所に……？

『内通者か』

…まさか、敵方のスパイがいるのか?!

「おいおい、さつきから黙りこくつちやって。俺達はアンタの常識外れのパワーと胡散臭い魔法に挑戦しに来たつてのに」

「…ハッ、胡散臭いのはお前らだろ? 鏡でも見ろよ」

「何ッ!？」

「乗るな…安い挑発だな、噂通りの口達者ぶりなご様子で。…ま、挑戦しに来たのは嘘じゃないけど、他にも理由はあるのさ」

一人が指を鳴らすのと同時に周囲に結界が張られ——新校舎から爆音が響いた

!

…待て、確かフェニックス家に干渉する魔法使いがいて、更には白昼堂々と攻めて

来た——ッ!?

「…レイヴェルかッ!」

「イグザクトリー」

「そう言う訳で、あんたは俺達の相手でもしてくれよなッ!!」

そう言うや否や、連中は俺へと魔法攻撃を繰り返す——相手、だと?

俺は拳を横薙ぎにして、迫ってきた攻撃全てをかき消した。

「…良いぜ。やってやるよ」

「へッ、そうこなくちゃッ……!!!」

俺はまず一人目の懐に潜り込むと、遠慮なく拳打を浴びせる。

そいつは木々をへし折る勢い良く叩きつけられ、ピクリとも動かなくなった。

暫くは起き上がれないだろう——先ずは、一人目。

「……はっ」

「…順番を決めろ。誰から先に——やられるのかをなッ!」

まあ、そんな暇を与えたりしないけどな。

呆気にとられて攻撃の姿勢に移るのにもたついていた二人目の奴に狙いを定め、腹部にドラゴンショットを押し当てる!

「ギガンティック・ドラゴンショット  
大撃砕の龍波動ッ!!」

「!!」

声にならない悲鳴を上げながら、二人目の男は勢い良く地面をバウンドして、倒れ伏した。

内臓と骨が潰れてるから、起き上がれはしないだろう。

「な、何だよその力はッ!?明らかに協会のランク付け以上の力が……」

「知識つてのは、実戦じゃなきや身に付かない時もある……その身で味合わせてやるよ。」

——爆裂の龍波動ッ!!——

その場から動かず、最後の一人に向けてドラゴンショットを投げ飛ばす。

我に返ったそいつは防御しようとして魔方阵を展開させるが——それは悪手だ。

ドドドドドドドオオンッ!!!

連鎖する爆音がそいつ諸共魔方阵を包み込んで唸りを上げた。

煙が晴れると、焦げ焦げになった男が地に伏していた。

「次からはもつと倍の人数で来るんだな」

俺は特に一瞥する事もなくそう告げ、新校舎の方へと駆け出した。

——

「ッ、遅かったか……！」

教室前の廊下。

激しく破壊され、廊下の窓側がぶち抜かれていて、外が丸々一望できるように変わりを果てていた。

外気が容赦なく吹き込んでくる。

ここに来るまでも校舎のいくつかの場所が破壊されているのを確認できた。

窓際が大きく消し飛び、校庭にも穴が空いていた……。

『相棒、あの三人がいないぞ』

…そうだ、小猫ちゃん達は!?

辺りのオーラを探ってみるが、まるで気配を感じない……ここにはいないのか？

釈然としないながらも、俺は廊下に座り込んでいた一年生の子に歩み寄り、話しかける。

「大丈夫か？」

その子は世にも恐ろし気な体験をしたかのように体を強張らせていた。……当たり前だ、こんな非日常とは縁遠い普通の子に、この状況が受け入れられるわけがない。

巻き込まれるべきじゃないのに……ッ！

俺が無意識に拳を震わせていると、女の子はまだ呆然としながらも、ぼそりと呟いた。

「……変な人達に、捕まって……小猫さんとギヤスパー君とレイヴエルさんが、私を助けるために……」

——小猫ちゃん、ギヤスパー、レイヴエルッ！

「小猫ちゃん達、魔法使いみたいな格好をした人達に光に包まれて、急に消えたんです！」

教室の扉から廊下の様子を伺っていた生徒たちが、俺にそう伝えてくれた。

……人質を取られて、連行されたっての catt!!

俺は無力さから歯噛みする……守るって、誓ったのに、あの時と同じだ。

……いや、怒るのは良いけど、ここで自己嫌悪に浸っても仕方ない。



俺はやり場のない怒りを内心で滾らせながらも、何とか冷静になろうと息を吐く。

「あの、小猫さん達は……大丈夫、なんですか……？ 私のせいで、こんなつ……」

「……大丈夫。小猫ちゃん達は絶対に助ける」

俺はその子を安心させるように、そして自分に言い聞かせるようにそう告げる。

## MAGIC 165 『救出開始』

その場にいた生徒達に怪我がない事を確認した俺は直ぐに生徒会の人達が来るから大人しくしておくようにと連絡をすると、校舎の外へと駆け出す。

『ピーー!』

すると、俺が丁度出てきたタイミングでガルーダが飛んできた。

「ガルーダ!……どうやって動いたんだ?」

俺、確か魔力流した覚えはないけど……そう思っていると、ドライグが声を発した。

『俺が仕込んでおいた力を共鳴させて動かしてんだ。僅かな時間しか動けんが、機動力は普段の倍だ』

「何時仕込んだんだよ」

『なあーに、擬人化した時にちよちよいと。奴等の行動目的を聞いた瞬間に、家に置いてあつた指輪を起動させたつて訳』

……けど、このタイミングなら大助かりだ。

ガルーダは目の前で体が分解され、指輪に戻った……俺は自分の魔力を流し込み、ガ

ルーダが見た景色を頭に浮かべる。

俺の使い魔が見たものは、使用者の俺が魔力を指輪に込める事で分解される直前までの光景を脳内に投射する事が出来る……今回のように、偵察に行かせ、魔力切れで途中で分解されても、問題なく情報が得られるって訳だ。

「これがあるのをもうちよい早くに知ってたらなあ」

『言っても仕方ないだろう。……で、連中は何処に?』

「……地下のホームだな、これ」

正確に言えば、最寄り駅の地下に設けられている冥界へのルート線のある場所――

――夏休みに冥界に行った際に使った列車が走ってる空間だ。

「けどおかしいよな。この場所は本来であれば悪魔が使う空間なのに、何で此奴らが入り浸ってるんだ?」

『若しくは一時的に潜伏していた可能性もある』

潜伏……地下から侵入したってのか?

『そこまでは分からん。恐らく列車を調べれば何かしらの痕跡が見つかるだろうが……今は奴等を追うのを優先すべきだろう』

「そうだな」

《コネクト・プリーズ》

俺は魔方陣からバイクを取り出し、すぐさま最寄り駅へ向けてバイクを走らせる。

「あ、そうだ」

走ってる途中で交通違反だけど、俺は携帯でソーナ会長に連絡を取る。

「会長、兵藤です！」

『兵藤君!?!生徒達が外に向かっていったと言っていましたか……今はどちらに!?!』

「奴等の潜伏先が分かったので向かっていると向かっていると」

『!?!』

電話口から会長の驚いた声が聞こえるが、すぐさま冷静になって俺の話に対応してくれた。

『成程……分かりました、スタッフの方に調査してもらおうように連絡をしておきます』

「頼みます。それと、いざと言う事も考えて……」

『ええ。シトリーとグレモリー眷属、紫藤さんも向かいます』

流石会長、話が早い!

『有事の際にはリアスからもそのように任されております。即興ですが、彼女たちの力を利用した戦術を考案します。準備に越した事はありませんから』

「そうっすね」

『兵藤君の方は、グレイファイア様と?』

「はい、さつき連絡をしました」

ガルダ、連勤になってゴメンな！

『分かりました、準備が出来次第私達も向かいます。兵藤君、今の貴方は『王』です。くれぐれも深追いは禁物ですよ』

「…了解つす」

『多分無理じゃねーか？』

だまらっしやい!!

—————

暫くして到着した地下のホームは、静かすぎるくらい無音が支配していた。

広い空間を抜けて進んでいく俺の背後から、白い手が伸びてきた。

「…イツセー様、単独行動はお控えください」

「……いきなりでちよつとビビったア」

肩に手を置いたのはグレイフィアだ。それに——

「随分静かだが……成程、不穏な気配もいくつか感じるな」

『『グウウ……』』

龍王紅一点ことティアと、ペットのフェンリルブラザーズ…もとい、ハティとスコルもいた。

「何でティア達も？」

「イツセー様はまだ私一人しか眷属がおりませんので、お声がけした次第でございます」  
「そう言う事だ」

『『ワウツ』』

確かにそうだけど……ちよつと過剰戦力な気もするなあ。

…いや、相手は直接攻めてきて日常をぶつ壊したんだ。

手加減なんていらぬ、徹底的に叩く。

「……と言う訳だ。邪魔させてもらうぜ、はぐれさん達」

俺達は前方にいる魔法使い共を見据える。

パツと見……百はいるな。しかも召喚した魔物の類も含めると結構な数だ。

「これだけの侵入を許してしまったのですか……」

グレイフィアもそう嘆息する通り、これは後々の交渉で引つ掛かりそうだ……つと、今はそんな事を言ってる場合じゃない。

「おいおい、いきなり赤龍帝が到着とは。ついさつきあんたんとこに招待状を届けたんだが……無駄骨だったか？」

「安心しろよ、俺達だけだ……今はな」

元よりここに招くつもりだったと……会長の懸念は大正解だったって訳だ。

「お前らの目的は何だ？俺達か、レイヴェルか？」

「どっちもだ。ま、フェニックスのお嬢さんは大切に扱ってるぜ？そうしろとリーダーの命令があつたんで」

リーダー……首魁がいるのか。

「フェニックスの件はクリアしたも同然なんで、次はあんたと他のお仲間さん達だ。——気になって仕方ないんすよ。メフィストのクソ理事とクソ協会が評価したって言うアンタ達の実力がね」

「学園に攻めてきた三人も似たような事言ってたな。……そんな事の為に態々白昼堂々襲撃か、よつぼど暇なんだな、お前ら」

「何……？」

「そんなんだから協会から爪弾きに合つて、しかもはぐれ魔法使いなんて呼ばれるんだろ？そりゃ正規の魔法使いじゃなきやただの穀潰し集団にもなつてテロリストと結託もするわな」

「さつきから黙って聞いてれば、言いたい放題だな。第一に言わせてもらおう……俺達は全員、正規の魔法を馬鹿にしたような魔法を扱うアンタが大っ嫌いなんだよ」

随分嫌われてんなあ、俺。

まあテロリストに好かれたいなんて思わないけど。

「で？だからテロ集団になつてまで俺を消したいと……その時間を正規の魔法使いになるための努力に向けるって発想がないのかねえ」

「うるせえ……ただ力を好き放題に振るつていただけで、はぐれなんて呼ばれ方をされる俺達の気持ちだが、分かつてたまるか!!」

「分かる訳ねえだろ。理解だつてしたくない」

『!?!』

俺は逆ギレ発言を一蹴する……俺達だけに喧嘩を売るならまだしも、普通の日常を謳歌してる生徒達まで巻き込んでまで強さの確認？

見ず知らずの他人を絶望の淵に蹴落としてまで確認したい強さなんて——

「ロクなもんじゃねーんだよ、そんなのはな」

「先程から聞いていましたが、貴方達の主義主張には何一つ賛同できませんし、その目的だつて理解したくもありません。……貴方達のような考えの持ち主は、次なる災いを呼ぶ火種となる」

「ならば今の内に摘み取っておかねばな」



『グルウ…ッ！ワオ——ン！！』

交渉の余地なんて、一ミリもない。

俺達が戦闘態勢に入るのを見て、魔法使いの連中も攻撃態勢に移った。

「だったら見せてもらおうじゃねエかア！！もつとも、この数に対してその人数で発揮できるとはどうかだけどな！！」

『馬鹿野郎俺は勝つぞお前』

最後の最後で台無しッ!!!

## MAGIC166 『大乱闘デビルマジシャンズ』

「おらっ!!」

開戦早々俺達へ向けられた攻撃を拳で弾くと、俺は足に力を込めて駆け出す。

「なっ、鎧も纏ってないのに何てスピードだッ!」

「くそ、さっさと迎撃を——ゴフッ!」

驚く奴と迎撃しようとする奴で分かれる中、俺は迎撃しようとした奴に狙いを定めて拳と蹴りで沈めていく。

はぐれ魔法使いの集団が瓦解し始めるのも、恐らくは時間の問題だろう。

「はっ!!」

『ガルルッ!!』

『ガウ!!』

グレイファイアの攻撃が魔法攻撃ごと奴等を飲み込んで爆発したかと思えば、ハティとスコルが防御の構えを取っていた集団に突撃し、容赦なく牙と爪を突き立てていく。

神をも滅ぼすフェンリルの牙——弱体化して力が落ちているとはいえ、その力は

凄まじく、防御魔方阵をまるで紙を引き裂くように何事もなく突破していく。

はぐれ魔法使いが次々と鮮血を散らせて倒れていく中、二匹は猛然と駆けて行く。

「確かに実力はあるようだが……粗が多すぎる。もう一度基礎からやり直せ」

龍王ティアは指パッチンで複数の魔法術式を解除し、更に展開していた魔方阵から自分の攻撃を送り込み、連中を束にして倒していく……一人強さの次元違くないか？

なんて思いつつ雑魚掃討と変わらない事をしているが……流石に人数多すぎねえか？

「死ねえツ!!」

「冗談だつてのツ!?!」

炎熱の刃を砕いて、ドラゴンショットを直接叩き込む。

別の集団に吹っ飛び、隊列が崩れたところに再びドラゴンショットを叩き込み、爆発させる!

『随分多いな』

『これだけ集まっても雑魚には変わらんだろう』

けど、油断は禁物だ。

何処に伏兵を潜ませてるか分からないからな———と思っていると、魔法使いの後方から黒い影が飛び出してきた!

「ツ……お前はっ」

『お前が噂の、指輪の魔法使いか』

そう至近距離で聞いてくるのは、大剣を俺に振りかざす幽鬼のような異形の剣士――

――いや、この魔力は……ファントムか！

「何でファントムがここに!?!」

『なに、人間達の首魁に頼まれたまで。それに……人を斬れば斬るだけ、俺の剣は至高のものになっていく』

「ほざけっ!」

俺は足を使ってファントムから距離を取るが、奴は周りの魔法使いを気にせず魔力で太くした刀身を振り回した。

『俺の剣の、錆となれ』

「……はぐれの連中もお構いなしかつ!」

魔力の刃に触れて消滅する魔法使いに一瞥すらせず、ファントムは俺に剣を突き立てていく!

俺もアスカロンを籠手から出し、奴と切り結ぶ!

『こいつ、強い……ッ!』

『呵々、中々の手前。お前の血肉と命――貰い受けるぞ』

「ツ!!」

大剣らしからぬ高速突きを弾いたかと思うと、ファントムは大剣を分割させ、細身の双剣にして此方へと再び斬りかかる!

『迎撃は——間に合わないかつ!』

迎撃を諦め、防御に徹しようとした俺の後方から——新たな参入者が現れ、ファントムを斬り飛ばした!

見覚えのある波動を放つ剣を方で担ぎ上げた参入者は、俺へと振り向いた。

「ふう、ギリギリセーフだな」

「……中々カッコいい登場じゃねーか、ゼノヴィア」

参入者の正体は、ゼノヴィアだった……って、ゼノヴィアがここにいるって事は。

「イツセー、会長から預かってる通信機だ」

「……レーティングゲームの時に使ったやつか」

俺はそれを受け取って耳に入れると、ソーナ先輩から通信が入った。

『イツセー君、ご無事ですか』

「はい、まだ生きてますよ」

『軽口を叩けると言う事は、まだ戦えますね』

勿論ですよ……と、戦場を改めて素早く見渡すと、匙にシトリー眷属の『騎士』巡さ

んが突撃していった。

『噂の聖剣使いの悪魔か……』

「む、そう言えばお前もいたのだったな。フアントム」

『お前の命も斬らせてもらおうか』

フアントムは手にした双剣……今度は曲がりくねった曲刀を振りかぶり無数の光波をとばしてくる！

だがその寸前で、割り込んできたのは『戦車』の由良さん！

「広がれ、我が盾——『トゥインクル・イージズ精霊と栄光の盾』ッ！」

由良さんの言葉に応えるように盾から輝きが広がり——巨大な光の盾となって、

フアントムの攻撃を全て防いだ！

『何かどつかで見た事あるなこれ』

『あれだ、ロード・キヤメ……』

「言うな」

怒られるぞ。

『ほお、全て防いだか。良い盾だ』

「スゲエなそれ。神器か？」

「ああ。アザゼル先生からいただいたものだ」

先生から？……つて事はこれ。

『ええ、イツセー君の思つてる通り、これはアザゼル先生が開発した人工神器です。――

――効力は精霊と契約し、それを盾に宿らせる事が出来る盾です』

『精霊……つまり宿らせる精霊によつて能力が変わる盾か』

『はい』

防御の盾と『戦車』はベストマッチだし、何より盾自体も堅牢そうだしな。

特製とか見合つてるから想定以上の防御力が得られそうだ。

「けど兵藤の一撃には耐えられんだろうな」

「俺サイラオーグさんみたいなパワーを普段から出せる訳じゃねーぞ……つと、今は

フアントムだな」

「ああ」

改めて俺達はフアントムへと向き直る……が、当のフアントムは剣を背中に背負つて、魔方阵を自分の足元に展開させた。

『すまぬな、お前達の命は今度斬らせてもらう。呼び出しを喰らつた故に』

「何……？」

『赤龍帝、聖剣使い、そしてそんな盾使い――中々粒が揃っている。呵々、次に会えた時が楽しみだ。……我が名はベルセルク。以後、お見知りおきを』

フアントム——ベルセルクは転移する寸前、ゲートであった人間の姿に戻り、不気味な笑みを見せる。

その顔は——天城カイトに非常に似通っていた。

「呼び出して……いや、今はあのフアントムよりこの戦いを制そう」

「そうだな。気になる所ではあるけど——先輩、俺は何をすればいいですか？」

『そうですね。では——』

会長の指示を受けて、俺は戦場へと再び戻っていく。

「兵藤！」

俺は宙を飛びながら、黒炎の牢獄に魔法使いを閉じ込めていた匙の元の急降下する。

『ほお、連中の魔法力を吸収してるのか』

「待たせた！」

「そんなに待ってないって！早速だけど頼むぜ！」

「おっしや！」

俺は群がる魔法使いの連中をドラゴンショットで吹き飛ばしながら匙が伸ばしてい



たラインを掴む。

ラインは魔法使い共とロスヴァイセさんを繋いでおり、吸い上げた魔法力がロスヴァイセさんに流れ売って仕組みだ。

そこへ——力を譲渡する！

《Transfer!!》

譲渡した瞬間、繋がっていた複数のラインが大きく脈動し、先程以上に魔法力が吸い上げられ、ロスヴァイセさんに流れていく！

魔法力を吸い上げられた魔法使いたちは次々と昏倒していく……敵の無力化と味方の強化を同時に行ったって寸法だ。

リアス——次にソーナ先輩と戦う時は、もっとうまく捌手を使わなきゃ駄目みたいだぜ。

俺はソーナ先輩の戦術に舌を巻きつつ、俺は匙と背中を合わせる。

「随分腕を上げてんじゃねーか」

「…お前に言われるとなんか嫌味にも聞こえるな」

「嫌味じゃねーよ」

「分かってるって」

そう軽口をたたき合っていると——連中は何故か降参と言わんばかりに手を上にあげた。

突然の事に、俺達は疑問に包まれる。

「……リーダーからのお達しでな。お前達を通せって」

「何?……どういふつもりだ」

「どうだも何も、俺達の負けって事だ。さあ行けよ……けど、赤龍帝、ヴリトラ、デユラ  
ンダル使い、雷光の巫女、癒しの聖女、ヴァルキリー、ミカエルのA、赤龍帝の『女王』、  
ティアマツト、あんた達は確実に来いってさ」

連中の視線の先には、転移用の魔方陣が現れていた。

「……会長、どうします?」

「……裏はあるでしょうが、行きましよう。私達の目的は、塔城さん達の救出ですから」  
会長はそう言うと、通信用の魔方陣を展開させる。

「ここにいる魔法使いの一人は捕らえます。上で待機している方々を呼びますので」

「な、俺達も捕まえるのかよ!?!ただの冗談だろ!?!『禍の団』の術者だけで——ツ!?!」

俺はそんなふざけた事を抜かず魔法使いの一人を——殴った。

「……冗談だど?お前からからすればゲーム感覚で襲撃したんだらうけどな、それに巻き込まれた一般人はどうなる?これからこの恐怖が消えるまで怯えなきゃいけない、そん

な力のない生徒達を絶望に晒して冗談……う？ガキみてえな理屈こねるのも大概にしろ  
…ツ!!」

俺は呆然とするそいつを睨み付けると、先に進むために背を向ける。

やっぱ俺って、バカだな……。

# MAGIC167 『絶望の魔法使い』

連中が通した先にある魔方陣を潜るのは、俺とグレイファイアの赤龍帝眷属とグレモリー眷属とイリナ、シトリ側からは先輩と匙……奴等の要望通りの布陣だ。

転移した先に広がる光景は——

「酷く小さっぱりしてる……」

見渡す限り、白、白、白——という、真っ白な空間だった。

特に何かある訳でもない、だけど広さはかなりあるその空間に、俺達の知らない声が響いてきた。

「ここは次元の狭間に作った『工場』なのですよ。悪魔がレーティングゲームに使うファイルドの応用です」

「……」

俺達が振り向いた先にいたのは、真っ黒なローブで全身を包んだ誰か。

声からして男なのは間違いないが……

『…何だ、この違和感は』

俺は目の前の男から、何か途方もない違和感を感じていた。

不気味、と言えばそうんだけど、何時も身近で感じているようなオーラを、目の前の男が発していたからだろう。

だからこそ、俺は気付かなかった。

俺の後方にいたグレイファイアも、同じような違和感を感じ取っていた事も。

「…レーティングゲームの技術を知っているとと言う事は、貴方は悪魔でしょうか？」

「…ええ、一応は」

…含みのある答えだな。

悪魔って事は、魔法使いの連中とは違うみたいだが…さて。

「イツセー様！」

どうすべきか思索していると、後方からレイヴェルの声が聞こえて来たので、そちらを見る。

俺達から離れた位置に、小猫ちゃんとレイヴェルがいた。

そして小猫ちゃんが背負っているのは……ギヤスパー！

『手酷くやられたみたいだな』

…遠目からでも分かる。ギヤスパーは酷くぐったりとしていて、無事ではない状態だと。

だが不思議な事に、小猫ちゃんとレイヴェルは拘束されている感じでもなく、見たところ怪我の一つもない感じだ。

服装も制服のままだし、何かされたという感じでもない……ギヤスパー以外は、ただど。

「彼女達を返しましょう」

ローブの男がそう言う。

奴の出方を伺いつつも、俺達は小猫ちゃんとレイヴェルに手招きして、掛けてくるように促す。

…俺達の元に三人が合流する間も、ローブの男は何も手出しはしなかった。

「レイヴェル、小猫ちゃん、大丈夫か？」

「…イツセー様っ」

俺がそう聞くと、レイヴェルは瞳を潤ませて、無言で体を震わせていた。

…肉体的ダメージじゃない、寧ろ精神的なものか？

小猫ちゃんがギヤスパーを下ろすと、アーシアがすぐさま回復させる。

「…私もレイヴェルもギャーくんも、魔方陣で何かを調べられました。体には特に何もされていません……ですが、ギャーくんが……ッ」

小猫ちゃんが悔しそうに唇をかむ。

ギヤスパーは……顔中が腫れ上がるほどに殴打されていた。

「…ギャーくんは、私達を守ろうとして……」

今度は小猫ちゃんが、目元を潤ませる。

悔しい、と言った感情を絞り出すかのように。

「彼に関しては此方の落ち度です。彼がその二人を守ろうと立ち向かってきたため、配下の者が手を出してしまったようでした。それ以外は丁重に扱いましたが」

…ギヤスパー、お前は二人を助けようとしたんだな。

俺はギヤスパーの頬をそつと撫でると、ローブの男に向き直る。

その場にいた全員が、オーラの質を怒りで変えていった。

「…貴方が今回の黒幕ですか？」

「ええ、そうです」

会長の冷たい問いかけにも、目の前の男は即答した。

「貴方は『禍の団』ですか？だとしたら、襲撃の理由はなんですか？」

「ええ、今は『禍の団』をさせてもらってます。今回我々が襲撃した目的は、何点か理由がありました。魔法使いの彼等が貴方方を襲ったのは、彼等の好奇心です。『禍の団』に元々所属していた者達——」

「その者達とはぐれ魔法使いの集団は手を組んでいた、でしょうか？先程の魔法使い達は、協会を追放された魔法使いと、『禍の団』に入った魔法使いの混成チームです。彼等が使う術式は、以前三大勢力の和平会談を邪魔してきた魔法使いが使ってきたという魔方阵の紋様にそっくりでしたから」

男の言葉に続けて言い放った先輩の推察に、男は鷹揚に拍手をした。

「中々お詳しい。その通りです、彼等は頻繁に交流をしていたそうですね」

「今回の襲撃はもしかして、協会が出したという若手悪魔の評価に関連しますか？此方の兵藤一誠君を襲った魔法使いがランクについて言及していたそうですね、彼を気に食わない魔法使いも多数存在しました。先程の集団戦でも、私達の力に関して関心を抱いていましたか」

「ふふふ、私が説明をする必要はなさそうですね。ええ、そうですね。彼等は協会が出した若手悪魔の評価が気になったようですね、自分の魔法が通じるかどうか、試したくなつたそうですね。そして、そこにいる赤龍帝の魔法をあわよくば排除しよう、ね」

魔法使いの協会が出した俺達の評価、そして俺を気に食わないという理由で襲つてき



た……か。

全く持つて身勝手すぎるだろ、それ。

「比較的若い魔法使いが多いのでね、自制が効きにくい所があつたのですよ」

「……『禍の団』で最大派閥を誇つていた旧魔王派、その後には台頭した英雄派、この二大派閥が無くなつたことで、組織の勢力図が混乱、下の者の意見も通りやすくなつたと」

「ええ。もはや組織内で権威と猛威を振るつていたシャルバ・ベルゼブブと曹操はいませんので。今は私が一部指揮をしているのですが……いやはや、これが中々大変です。今回の剣は彼等の我儘を少々叶えた形でした。もつとも、上からの「好きにやらせてみる」と言う意見も多分に含まれてはいますが」

「……つまり、俺達は連中の捌け口に宛がわれたつて事か」

「平たく言えば、ね」

何が平たくだ、ハッキリそう言つてるようなもんじゃねえか……つて、上？

此奴の更に上の存在がいるのか……そいつが恐らく、『禍の団』の残党を纏め上げてるつて事か？

「以上が今回の理由の一点。二点目はこれです」

男が指を鳴らすと、右手側の壁が作動して、下へと沈んでいった。

壁の向こう側が見えてくる、その向こう側にあつたのは————沢山の培養カプセル

が並んだ、実験室みたいな光景だ。

機器に繋がれた数多くのカプセルの中には、何かが入っている様だった。

『…僅かだが生命のオーラを感じる』

生命のオーラ……これは、人か？

カプセルの中にいたのは、人らしき物体だった。……レイヴェルが目を逸らしているのを見るに、何かショックを受けていた様子は、これに関連しているのか？

「フェニックスの涙の製造方法、知っていますか？純血のフェニックス家の者が、特殊な儀式を済ませた魔方陣の中で、同じく特殊儀礼を済ませた杯を用意して、その杯に満ちた水に向けて、自らの涙を落すのです。そうして涙の落ちた杯の水は、フェニックスの涙となるのです。———その際、心を無にして流す涙でなければ、フェニックスの涙にはならないとされています。感情の籠った涙は、『その者自身の涙だから』だそうです。自らの為に流した涙と、他者の為に流した涙では、効果が生まれません」

……待て。つて事は、このカプセルの中身はッ！

「……」が『工場』だと言ったのは、あれを魔法使い達が量産しているからです。———

上級悪魔フェニックスのクローンを大量に作り出し、このカプセルの中でフェニックスの涙を生み出させる。安心してください、この『工場』は既に放棄する予定なので、あの者達の機能は停止させています」

……こいつ等、何処まで腐ってやがるんだッ!?

レイヴェルが精神的ショックを受けていた理由が分かった……あの子は生粋のフェニックス家の生まれだ。

こんな身勝手な理由でクローンを生み出されて、しかも自分達の都合で破棄……こんなもん見せつけられたら、キツイなんてもんじゃないだろ!!

ソーナ先輩が目を細めながら、嫌悪の言葉を吐き出す。

「ここで見み出したものを闇のマーケットで流して莫大な資金を集める……考え自体が悍ましいものです。貴方方がフェニックス家の者に出していたのは、あれを作り出す精度を上げる為ですね?」

「ご理解が早くて助かります、シトリー家次期当主。どうやら魔法使い達の研究でも、フェニックスの特性をコピーするのに限界があったようでして。最終手段として、フェニックスの関係者を攫って直接情報を引き出そうとしたそうです。結局、純血の者から出なければわからない事があつたようで、レイヴェル・フェニックスを連れ去る事にしたようです。ああ、心配しないでください。レイヴェル・フェニックス達の身体には何もしていません。『涙』の精度を上げるために、魔力などの詳細データを取らせてもらっただけですから」

こいつ……淡々と語りやがってッ!

「……酷い、酷いよ……こんなものって……どうして、クローンなんて作ったの……」

カプセルを見るレイヴェルは、ただただ哀しそうに泣いていた。

それを間近で見させられた俺は、ほぼ無意識で目の前の男にドラゴンショットを放っていた。

が——

《バリア・ナウ》

男が手に発生させた銀の魔方陣に阻まれた……いや、阻まれたのはこの際どうでもいい。

『今の音声、白い魔法使いのと同じ……!?』

「ギヤスパーク・ヴラディの情報は、こちらにとっても予想外の収穫でした」

俺が密かに驚愕していたのを余所の、男は何もなかったかのように淡々と語り始める。

「——さて、我々が欲する要求の最後です。貴方達のような強者と戦いたいと願う者がいるので、お相手をしていただきたいのです。今回の襲撃の主な目的はそれでした。魔法使い達の要望を叶えたのは、あくまで『ついで』でして。そして——」

男は何やら巨大な陣形を作り出しながら、スツと静かに——俺を指さした。

「赤龍帝、希望の魔法使い、兵藤一誠。貴方を限界まで追い込め、それも主目的なのですよ」

「俺を……?」

「インフィニティーに覚醒した貴方の实力を見てみたいのと、スポンサーからの要求なのです」

「何で俺が……ってこの魔方陣、どっかで見た事あるぞ。」

ドラゴン・ゲート  
『龍門、だと?』

ドライグがそう呟いた。そうだよ、ミドガルズオルムの意識を招き寄せた時に使ったのと同じだ。

ドラゴン・ゲート  
龍門は召喚するドラゴンによって色が変わるが……今回は緑色の輝きを発していた。

「緑色って事は……玉龍ウーロンだっけ?」

『——いや、違う』

俺の答えに、しかしドライグは否と返した。

『この色は……いや有り得ん! 奴はとうの昔に滅びたはずだ!!』

「な、何だよドライグ!? これ、何のドラゴンが来るんだよ!」

言われてみれば色は確かに緑だけど、色が普通の緑より濃い——所謂新緑色だ。でもそんな色を司るドラゴンなんていたのか？

まさか、ミドガルズオルムが言つてた幻龍つて奴なのか……？

『違う、幻龍ではない。この色は——』

「流石は赤龍帝ドライグ、覚えていたみたいですね。そうです、ここに招かれるドラゴン

は——」

瞬間、ドラゴン・ゲート龍 門の魔方陣が一層深く輝いて——弾けた。

「邪龍です」

グオオオオオオオオオオオオオオオオ——

ツ  
!!!!!!

この空間そのものを震わせる咆哮が、そいつから発せられた。

俺達の前に姿を現したのは、浅黒い鱗をした二本足で圧巨大な怪物だった。

太い手足に、鋭い牙と爪、バカでかい両翼を広げ、長く大きな尾をしながら——

——巨人のようなその怪物の頭部は、よく見るドラゴンそのものだった。

「伝説のドラゴン——『クライム・フォース・ドラゴン大罪の暴龍』グレンデル」

そう言った男の方を見た俺は、いや俺達は——絶句した。

ドラゴンを召喚した際の風圧で、男の頭を覆っていたローブが剥がれていた。

そして、そこにあつたのは——漆黒の魔宝石が特徴の、

「……………ウィザード」

ウィザード・フレイムドラゴンだった。

## MAGIC168 『出揃った役者』

「……………ウイザード」

その場にいた誰かが呟いたその言葉に、誰も反応を示せずにはいた。

が、当の俺自身も、まるで鏡を見ているかのような錯覚に陥っていた。

「……………ふふふ、驚きましたか?」

「お前……………一体何者なんだ?」

「……………もう一人の貴方自身、と言えはどうします?」

質問に質問で返してきやがって……………だが、こいつは本当に一体誰なんだ?

さつきから感じていた既視感のような違和感は未だ拭えぬまま、俺は目の前の漆黒のウイザードを見据える。

『グハハハハハ！ さつきから俺を差し置いて何をつまんねえ話してんだ!? さつきと

戦おうぜ!!』

だがそんな沈黙を破ったのは、目の前のウイザードが呼び出した謎のドラゴンだった。



『どういう事だ……おいヴリトラ!』

『…ドライブ、貴様の疑問は最もだ。だが、この俺ですら予想しえなかつたっ!』

未だに驚愕冷めやらぬ様子でドライブはヴリトラにそう呼び掛ける……って待て。

「確かグレンデルって、先生がこの間話してた滅びた邪龍……だよな?」

『ああそうだ! 奴は俺の肉体があつた頃に暴れまくっていた邪龍の筆頭格だっ!』

『そして暴虐の果て、初代英雄ベオウルフによつて完膚なきまでに滅ぼされたのだ……なのに何故存在している!』

『あぁーん?』

グレンデルは声のした方——俺と、人間サイズの黒い蛇になつて匙の影から出ていたヴリトラ、そしてティアに目を向けた。

『はッはあ!! こいつは面白れえ。あの天龍ドライブに、ティアマットにヴリトラまでいやがる! だが何だ? 随分とお粗末な格好だなオイ』

「二天龍は既に滅ぼされ、神器に封印されていますよ」

興味深そうにこつちを見ていたグレンデルに、ウィザードがそう答える。

するとグレンデルは哄笑を上げた。

『グハハハハッ!! なんだよ、おめえらもやられたのか! ざまあねえ!! ざまあねえな!! なーにが天龍だ!! けど……目覚めの体操代わりには丁度いい相手だッ!!』

『言われてるぞお前』

『クツソムカつく』

おいおい、おちやらけてる場合じゃないだろ!!

このドラゴン、相当ヤバイレベルのオーラを振りかざしてる……………生半可な力じゃ通用しそうにないっ!!

「ティア、行けるか?」

「ああ、どうやら……………久しぶりに本来の力を出さなければならんらしい」

そう言うのとティアは巨大なドラゴンの姿を取り、グレンデルを睨み付ける。

『おっほ!! まずほはテーマエが遊んでくれんのか、ティアマツト!!』

『ああ、楽しませてやるさ……………滅びるまでなっ!!』

そう言うや否や、ティアは一瞬でグレンデルに肉薄すると、魔法を纏った拳を叩きつけた!

『グツ……………何てなツ!!』

『ツ!!』

グレンデルはにんまりと笑うと、お返しとばかりにティアの肩口に噛みついた!

『ツ……………離せ変態!!』

『グハハア! んなつれねえ事言うなよ!!』

『私に嘯みついて良いのはイツセーだけだッ!』

ティアは強引に振りほどくと、グレンデルと距離を取る。

「大丈夫か、ティア!?!」

『問題ない……が、私一人では骨が折れそうなのは確実らしい』

「分かった……先輩、行けますか?」

「問題ありません。……それに」

会長はそう言うのと、アーシアに振り向く。

「アーシアさん、準備は出来ましたか?」

「はい、何時でも出来ます!」

「え、何を……?」

疑問に思う俺を余所に、アーシアは力強い呪文を唱え始める。

すると前方に、金色の魔方陣が出現した!

「一体何を……」

「もしもの事を見越して、アーシアさんに呼び出すように予め手配をしておいたのです

よ」

「呼び出す?……ラッセー、ですか?」

「ドラゴンなのは正解です——ですが、それはティアマットさんと同じ、龍王の位置

に君臨する黄金の龍王」

『……まさか』

「——我が呼び声に応えたまえ、黄金の王よ。地を這い、我が褒美を受けよ」

アーシアが紡ぐ呪文を受けて、一層金色の魔方陣が光を高める！

『まさか、英雄。』

『黙つてろ馬鹿猿!!』

『猿つてなんだせめて蜥蜴にしろ!!』

『それもどうなんだ……』

「龍門……しかも、この光はまさか！」

この光は一度見た事があるぞツ！

『お出でください！』ギガンテイス・ドラゴン『黄金龍君』ファーブニルさん!!』

アーシアが呪文を唱え終わった瞬間、呼び声に応じた巨躯のドラゴンが姿を現した！

グレンデルと同じぐらいの大きさを持った、けど翼を持たない四足歩行のタイプのド

ラゴン！

全身から力強いオーラを放つファーブニルの角には……何やら布みたいなのが括ら

れていた。

『驚いたぞアーシア嬢。何時の間にファーブニルと契約を?』

「アザゼル先生は前線を引かれましたからね。その折に龍王との契約を解除したそうです。ただ、貴重な戦力になりうる龍王をそのまま野に放すのもなんだと言う事で、アシアさんとの契約を促したそうです」

『確かにアシア嬢はドラゴンテイマーの素養は見られたが……まさかファープニルを使い魔にするとはな！』

そう言えば先生は魔物使いとしての才能を見ていたし、それに回復しているときに敵に狙われても良い様に壁役になる魔物を用意しても良いとは言ったけど……それが龍王かよ!?

「リアスから聞いていた通り、契約を結べたようですね。龍神オーフィスの加護を得られたのも納得できます」

「加護って……先生が言ってたやつですか？」

道理で最近、アシアとオーフィスが何か話し合っていたのを頻繁に見かけたわけだ。

「ええ。アシアさんのオーラにオーフィスの神通力らしきものが付与され始めたようです。調べてみたところ、直接の能力向上はないものの、ご利益によって運勢やドラゴンとの相性が底上げされていたそうです」

「…確かに、何かよく見たら、オーフィスっぽいオーラを感じる」

薄っすらとだけど……多分あの次元の狭間で組手していてオーフィスのオーラを間近で見えていたから見えるってぐらいのもんだけどね。

『恐らくだが、オーフィスも無自覚の内に送っていたんだろう。色々と世話もしていたぐらいだし、その感謝の気持ちってどこだろう』

「同様に、紫藤イリナさんも加護を受けているそうですよ」

「運勢がバッチリ上がったわ！ この間もショッピングセンターのくじ引きで二等当たったのー」

何そのすっげー微妙な加護。それは嬉しいのか？

「…そう言えば、俺に加護はないの？」

『お前の場合は憑かれてるって言った方が正しいんじゃないかな』

『だな』

『…恐らく、どの神々でも祓えないだろうな』

神様まで匙投げるレベルなの!?

「…とまあ、オーフィスの仲介もあり、ファープニルはアーシアさんと契約を結びました」

『ちよつと待て』

と、ここでティアが待ったをかけた。

「どうしました?」

『ファーブニルは世界中の秘宝をコレクションするのが趣味ってぐらいのドラゴンだ。契約する以上、代価を払わなければならん筈だ……払えたのか?』

「ええ……しかし、その代償は大きかったようです」

「代価って、何を支払ったんですか?」

俺が聞くと、何故か会長は口ごもってしまった。

「……それは……私の口からはとても……」

「教えてくださいよ、先輩! 大事な家族のアーシアは、一体何を犠牲にしてファーブニルとの契約を得たんですか!? ま、まさか生命力とか……!?」

だとしたら俺はファーブニルを絶対に許す訳にはいかねえ!!

アーシアは俺の大事な家族なんだ、その家族に何か負担を強いるような事があるなら、俺はそれを助けてあげたい!

約束したからな——俺はアーシアの最後の希望になるって!

すると、ソーナ先輩は恥ずかしそうに小さく呟いた。

「そのう………ツ………です」

「え？」

聞こえないつすよ、ソーナ先輩!!

そう思った瞬間、アーシアの口からその代価が告げられた。

「——パンツです!!」

.....

「はあ？」

ば、パンツ？

『.....お前ら、あれを見ろ』

と、ここでドラゴンが何かに気付いたらしく、俺達に語りかけてきた。

「あ、あれって？」

『このドラゴンの角に括られた布だ.....』

角.....って。

『パンツじゃねーか!!』

俺とドライブのツツコミが綺麗に重なったのも無理はない、その布は何と——パ  
ンツだったからだ！



そう、女物のパンツだ!!  
するとファープニルは、その重い口を開いた。

『——お宝、おパンティー、いただきました。俺様、おパンティー、嬉しい』  
.....

「おパンティー」

『おパンティー』

『……おパンティー』

——ただの変態じゃねーか!!!!

あのドラゴン、あんな重々しい見た目しててパンツを代価に要求したってのか!?  
うちのドライグだってあそこまで酷くはねーぞ!?

「おいドライグ、どういふこった!?! このドラゴン、お前以上の変態だぞ!!」

『.....』

「ドライグ!?!」

返事がないぞ!! どうした!?!

『……こいつ、ショックで呆けてるぞ』

「マジでか!？」

ドライグも知らなかったのか!?!……って事は何か、アザゼル先生も自分のパンツを与えていたのか!?

「……いえ、アザゼル先生は恐らく、ちゃんとした宝物を与えていたと思います」  
 ですよね! 見たところ男物のパンツには興味を示さなそうだし!!

「フアーブニルさん! 私達と一緒に戦ってくれますか?!!」  
 恥ずかしさを堪え乍ら、アーシアはパンツ龍王にそう訊く。

『——— 良いよ』

「本当ですか?!!」

『でも、働くのにはそれ相応の報酬、付き物。——— お宝、ちよーだい』

………こいつはっ。

『……酷過ぎて鼻水出て来た』

『傷は深いな……お前の事だから、多分そう堪えてはいないだろうが』

いや、ホントだよ! 俺も何なら鼻水出してえよ!!

「——— け、契約の対価ですもんね。わ、分かりました!」

アーシアは恥辱に耐えながら、肩にかけていたポシエットから——— 水色の可愛らしいパンツを取り出した。

「あ、あれはアーシアのお気に入りの水色パンツ!」

「アーシアさん、それを上げちゃうの!？」

ゼノヴィアとイリナから告げられた事実、俺は戦慄する。

「アーシアあ!!こんなドライブすら霞むド変態ドラゴンにお気に入りのパンツを上げる必要なんてないぞお!!! おいパンツ野郎!! 何で代価にパンツを求めやがったア!!？」

『おパンティー、お宝。俺様、たくさんの財宝と、明日のおパンティー、求める』

臆面もなく言い切りやがった! 後オーズの名台詞?をそんな変態発現の為に交換するんじゃない!!

風評被害も甚だしいからな!!

「なあ、ヴリトラ……ファープニルって、あんなだったのか?」

『知らん』

うわ、匙の質問を則スルーしたよ。やっぱヴリトラにとっても悪夢に等しいんだな、この光景は。

「て、ティアは……」

『……』

ティアもフリーズしてるー!!

やっぱファープニルを知ってる人達は皆こうなっちゃうの!?

「待て！ アーシアが差し出す事はない！ 私のをやるう!!」

そうアーシアを庇うように進言したゼノヴィアを、イリナが制止する。

「何を言ってるのゼノヴィア！ その戦闘服つて下にパンツ穿いてないじゃないの!!」

『穿いてないだとお!!?』

『ハモるなこんな事で復活するなこの同レベルの変態共がア!!』

驚愕の新事実！ 教会は何て変態戦闘服を開発してんだ!?

『俺様、金髪美少女のおパンティーが良い。パンツシスターのお宝、欲しい』

「うちのアーシアはパンツシスターじゃねえつつの!!」

思わず俺はファープニルの鱗を殴る！ けど全く堪えちやいねえ!!

「——あげます!!」

アーシアは顔をこれ以上ないぐらい真っ赤に染め上げつつも、変態の鼻角に水色のパンツを引っかけた!

その瞬間だった——黄金の龍王は鼻の穴を思いつきり広げて、一気に酸素を吸い込み始めたのは。

「…まさか、いきなり力を?」

解放するのか……そう思っていた俺達の眼前。

『アーシアさんのおパンティー、くんかくんか』

「こいつは思いつきり、恥じらうことなく、パンツの匂いを嗅ぎ始めやがった――

「いい加減にしろやこの変態野郎がああああつ!!!」

俺はもう一度殴る!それなりに力を込めて!!

『いい加減にしろフアーブニルツ!!!』

そうだドライブ、お前からと言ってやれ!!

『俺だつてそう言う事を「度はしてみたいんだぞおおおおお!!!!!!」』

Disappears!!!

「もうお嫁に行けません!!」

恥ずかしさが許容量を超えたのか、アーシアは膝を追って泣き崩れる!

「アーシア心配するな!! 俺が絶対に責任を持つてやるから、安心しろおツ!!!」

「うう、イツセーさん……はいつ! 不束者ですが、宜しくお願ひしますツ!!」

「おうさ! こんなくそつたれな運命があつてたまるかよ!!」

神様、あんた残酷すぎるぞ!!

『随分ひどい寸劇を見させられたが……どうやらやつと暴れられるみたいだなア!!』

「ああ……こつちもこの怒りをたつぷりと発散させてもらうぜツ!!!」

お前を屍に戻さねえとなあ!!

「アーシアが安心してお嫁に行けねえんだよお——  
!!!!」

いぎ、邪龍退治の始まりじやああああアツ!!!

## MAGIC169 『邪龍狩りじやああ!!』

「アーシアが安心してお嫁に行けねえんだよお——!!!」

《Welsh Dragon Balance Breaker!!!》

俺の雄叫びに応えるかのように鎧が装着され、力強いオーラが放出される。

そのオーラを見てか、グレンデルはにんまりと笑みを深める。

『ハハッ！ ちびっ子い癪にしちや中々のオーラの強さじゃねーか!! こいつは想像以上に楽しめそうだぜええ!!』

『相棒、奴と——邪龍と戦う時は微塵も情けをかけるな。容赦なく殲滅しろ』  
 そ、そこまでなのか？

『それだけ厄介でしつこいんだよ、邪龍と言うのはな』

『言うじゃねえかよ、ドライブグちゃんよお。天龍なんて煽てられて天狗になってると思ってたが——気が変わったぜ。テメエは一对一でぶつ潰す。手え出すなよ』

「……良いでしょう」

了承して、ローブの男は後方へと下がる。

一対一か……俺は皆の方を振り返る。

「今、この場においての最大戦力はイツセー様です。ただし、危険と判断すれば即座に介入します。宜しいですね?」

「ああ。……ソーナ先輩は、それでも良いですか?」

「……グレイファイア様の仰る通り、この場であの邪龍と張り合えそうなのはイツセー君と、ティアマツトさんです。……ティアマツトさんは、宜しいのですか?」

「ああ」

ティアアは俺に近付くと、鎧を軽く小突いた。

「向こうがタイマンを挑んできてる以上、私が介入するつもりはない。だがグレイファイアの言う通り、危険であれば直ぐに介入させてもらう。……存分にやってこい」

「……分かった。無様な負けっぷりは、見せないようにするよ」

俺は軽く笑うと、改めてグレンデルと向き合う。

「そんじゃま、ご指名通りにタイマンと洒落こもうぜ。——邪龍さんよお!!!」

《Welsh Dragon Absolution Breaker!!!》

俺は極手を発動、先程よりも強い力を感じながら、一気にグレンデルへと突っ込む!

『おほっ! 良いじゃねえかよオオツ!! ドラゴンの喧嘩つてのは、真正面からの殴り合いにかぎるからよオオツ!!!』



「オオオオオオオツ!!!」

俺の拳とグレンデルの拳がぶつかり合い、空間を震わせる!

体格の差で押し負けた俺だけど、直ぐに気持ちを切り替えて懐へと飛び込む!!

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》

「くらえええつ!!!」

ドゴンツ!!!

けたたましい打撃音を響かせつつ、グレンデルは仰け反りながらも持ちこたえた。

「——随分けつたいなパワーアップだな、おい。ドライグ、これテメエの力じゃねえな?」

『……だとしたら?』

『……良いね、良いねイイね良いじゃねえかア!!! ちんけな人間に宿ってるから前より

は大した事ねえと思っていたが——良い意味で悉く期待を裏切ってくれるじゃん

よオオオオオオツ!!!』

グレンデルは哄笑を上げながら息を大きく吸い込み——ドラゴンの十八番、巨大

な火炎弾を吐き出した!

「火には火……じゃなくて水! だな!!」

《Wizard Promotion!! Water Dragon!!!!!!》

俺は各砲門に魔力をチャージ、そしてそれをイメージにより——水流に変化させる。

「ファイナルレスキューツ!!!」

《Full Blast Burst!!!》

凄まじい勢いで放たれた水流は火炎弾と激突し、消火しながら一直線にグレンデルへと向かう!

『しゃらくせえっ!!』

グレンデルは翼をはためかせて水流をかき消すと、凶体に合わないスピードでこちらへと向かってくる!

「何っースピードだ!?!」

『簡単に潰れてくれるんじゃないやねーぜ、ドライグちゃんよおっ!!!』

グレンデルは笑いながら眼下にいる俺へと容赦なく拳を振り下ろしてくる!—

《Wizard Promotion!! Hurricane Dragon!!!》

『ツ!?!』

拳が迫る直前に魔龍進化を発動し、グレンデルの眼下から消える!

『相棒、奴の鱗の硬さは邪龍の中でも指折り付きだ。この形態ではダメージソースにならんぞ!』

「だつたら！」

《Wizard Promotion!! Land Dragon!!!》

俺は空中でフォームチェンジ、グレンデルが気付くよりも早くに俺に掛かる重力を倍加させ落下する！

《Maximum Solid Break!!!》

「ラアアアアアツ!!!」

『——ツ!?』

落下スピードに加えての重力負荷も乗った拳の一撃を食らい、グレンデルは地に叩き伏せられる！

この空間そのものを揺らしながら倒れ伏すグレンデルはしかし——何事もなく立ち上がった！

『ヒャーハハハハハツ!!!』 今のは中々効いたぜ小僧、ドライグ!! それにしても面白

れえ力だ！ 次に何が出てくるか全く分からねえ、だが——滅茶苦茶滾って来るぜえええ!!!』

つ、今の一撃でも奴の闘争本能を更に煽っただけかよ……こいつ、タフとかそういう次元じゃねえ！

『奴は元々あんなのだ。頭のネジが一本もハマっちゃいない、ダメージを受けるのすら

「楽しむイカれたドラゴンだ」

「だからつてぶつ飛びすぎだろっ?」

戦慄すら覚える俺を余所に、グレンデルは嬉々としてこちらへ突貫してくる!

『ヒャーツハアアアアアアッ!!!』

「くそつたれえ…っ!!」

巨体に似合わぬ敏捷性を見せながら拳打や蹴打を放つグレンデル。

しかもその隙を縫うように尻尾をファンネルみたいに縦横無尽にしならせて突っ込ませてくるから、まるで油断できない!

「ドライブ、あれをやるぞ!」

『応っ!!』

俺は拳を天に掲げ、希望への詠唱を紡ぐ!

「『——我ら、目覚めるは、覇の理を超越せし赤龍帝なり!! 赤き不滅の力と決して折れぬ信念抱き、天道を征く!! 我ら、古からの力と信念受け継ぎし龍の戦士となりて!! 汝の絶望を払い、永久の希望となる事を誓おう——!!!』」

《Infinity Hope Dragon Evolution Drive》

俺達の身を包むダイヤモンドの如き殻を破り、銀と水色の戦士となる!

!!!!!!!

『ハツハア! 今度は水色に銀か!! 随分と他の色に染まるもんだな、ドライブちゃん

よお!!!」

『赤以外の色と言うのも悪くないもんだぞ、案外——なッ!!!』

笑い声をあげるグレンデルに構わず、ドライグは挨拶代わりに一発グレンデルの顔面に打ち込んだ!

『グッ……ヒヤハハハア!!! さつきよりも断ツ然強くなつてやがる!!! テメエ等コン

ビ、いや……トリオは何処まで楽しませてくれんだ!!!』

『生憎だが、お前を楽しませるつもりはないし——お前の楽しみもここで終わらせるッ!!!』

俺は翼を展開させ、一瞬でグレンデルへと肉薄し、一発叩き込む!

『ゲハッ!!!』

『まだまだア!!!』

グレンデルが俺の姿を捉える前に移動、一撃叩き込み、また移動!

曹操との戦いでも見せた、質量を持った残像攻撃だ!

『オオオオオオオオオ!!!』

『ちよこまかちよかま、鬱陶しいってんだよオオ!!!』

グレンデルは蚊を追い払うように剛腕や尻尾を振るうも、それは俺の残像を悉く霧散させるだけに終わる。

《Infinity Boost Charge up!! B》

Boost

『残像諸共燃えちまいなアアアアッ!!』

まどろっこしく感じたグレンデルは、先程より広範囲に広がる火炎放射を放つ!

『どうする相棒!!』

決まってる——このまま突っ込むぞ!!!

舐めるように襲ってくる熱量に鎧は焦げ焦げになつてなりながらも再生され、遂にグレンデルの眼前へと辿り着いた!

『マジかよ!! お前、最っ高じゃねーかアア!!! そういう馬鹿は、俺ア好きなんだ

よオオオオオ!!!』

『だったら喜んで受け取りやがれ、龍拳!!!』

籠手に宿るアスカロンの力も含めて倍加させた、全身全霊の力を叩き込む!!!!

ドゴオオオオオンッ!!!!

フィールドをつんざくほどの轟音が響き渡り、グレンデルは青い血反吐を吐きながら



それに構わずグレンデルはにんまりと笑むと、腹部を含ませる!

「っ!!」

『でもなあ、その前に予定変更だツ!! テメエ等全員ぶつ殺死決定イイイツ!!!!』

だが目の前の邪龍は俺ではなく——俺の仲間達へと火炎弾を複数吐き出した!!

「『テメエ!!』」

「…やはりこうなったか。全員、散会しろっ! 距離を取りつつ、遠慮せずに攻め立てろツ!!」

ティアはまるで落ち着き払ったように全員に指示を出し、ドラゴン形態になって火炎弾を魔法攻撃で相殺させていく!

「行きなさいっ!!」

「——フルバーストツ!!」

ティアの攻撃が奴の火炎弾を相殺したのを見越して、朱乃さんの雷光龍とロスヴァイセさんの魔法攻撃のフルバーストがグレンデルの身体に突き刺さるように命中する!

「——匙!」

「了解です!」

ソーナ先輩が操る水によって全身水浸しになったグレンデルを、匙の黒炎が縛り上げる!



そこへ朱乃さんが放った雷光龍がグレンデルに食らいつき、奴の肉体を焼き焦がしていく！

『フアーブニル、合わせろッ!!』

『了解。アーシアたん、守る』

ティアが地面に手を付くと、グレンデルの足元から大規模な火柱が立ち、グレンデルの肉体を更に焼き尽くし、フアーブニルが目を光らせると、火柱から金色のオーラが立ち込め、瞬間——大爆発がグレンデルと周囲を覆った！

龍王同士のコンビネーションに悔しくも、胸が熱くなった！

ちゃんと報酬分の仕事をするフアーブニルに、此奴にならアーシアを任せても大丈夫か、なんて一瞬でも考えてしまったのが更に悔しいけどな!!

「「最後は——私達だ!!」

声のした方を向けば、ゼノヴィアとイリナが二人で莫大な光剣を握り締めていた。

『「量産型の聖魔剣とデュランダルを共鳴させているのか」

周囲の空気を焼き焦がすほどの熱量を誇る光の剣を、勢いよく振り下ろし、黒い煙を上げるグレンデルを容赦なくぶっ飛ばした！

あの力と剣速……破壊と天閃のエクスカリバーの力も相乗させてるのか、けどすげー規模だな。

って言うかそれよりもだ!

『テメエ、そつちからタイムマン仕掛けて来た癖に何で仲間を攻撃しやがったんだ!』  
グレンデルは俺の問いに、血を吐き捨ててから大きな口元を厭味つたらしく吊り上げる。

『ハハ、わりいわりい。俺あぶつ殺すのが好きだからよお。ああやつて適度に殺しを入れておかねえとテンション維持が出来ねえんだよ。けど失敗しちゃった。ゲハハ、テメエの仲間も結構強いじゃねーか!! しかも俺の不意打ちにも対応しやがった! まるで俺がこうするのを予想してたみたいじゃんよお、ティアマツトちゃん?』

『ドライグ以上に頭の狂ったお前の言葉を真に受けるドラゴンがいると思うか? こうなるだろうと予め予想は立てていたさ』

『ゲハハア、良い冴えっぷりだなオイ! それでこそ……ぶつ潰し甲斐があるってもんだぜつ!!!』

この野郎、何処まで狂ってやがんだ……!

『さあーて、第二ラウンドと行こうじゃねーか、赤龍帝……いや! 光の龍帝ちゃんよオオ!!!』

『——ツ!?!』

グレンデルは哄笑を上げて翼を広げると、俺に向かって飛び立とうとしたが——

奴の体の動きが、不意に止まった。

原因はよく見なくとも分かる。奴の足を黒い影のようなものが包み込んでいたせいだろう。

『…あの吸血鬼の小僧と同じ力を感じる』

『まさか……』

ドラゴンの指摘にハツとなって、闇の根源に目を向けるとそこには――

『ギヤスパー……！』

周囲に不気味な闇を生じさせるギヤスパーの姿があった。

ギヤスパー本人の意識はないのか、全身に力が入っておらず、その赤い双眸が妖しく輝いているだけで、まるで人形のようにも見える。

『あれがあの小僧の隠された力か……』

ドライグ、お前は どう思う？

『…過去に吸血鬼に相対した事のある赤龍帝はいたが……あれほど異質な力を持つてはいなかったはずだ。あれは――次元の違う、化け物の類だろう』

『化け物……』

そうこうしてる内に、ギヤスパーから広がる闇は、この空間すら飲み込もうとしていた。

が、全員が言葉すら出せない状況の中で嬉々とする者がいた。

『…あんだ、そりゃ。あれもやって良いのか……良いんだよな!? こんな闇を操る奴は過去にもいやしなかった! 出鱈目に強いクソガキが沢山じゃねえか!! 良い時代に蘇れたもんだぜっ!!』

こいつ、まだ戦おうとして……!? 俺はギヤスパを庇おうと動き出す前に、それに待ったをかけるかのように、

《チエイン・ナウ》

漆黒のウィザードが発動した縛る魔法によってグレンデルの動きが止められた。

「——グレンデル、そこまでです」

『あぁっ!?!』

「実験は成功、と言えるでしょう。本来ならば木場祐斗もここにいればより良い調査が出来たのですが、十分です」

『何だ何だ何だア!! せっかく気分がノッて来たつてのに止めんじゃねーよっ!! こっからが! ぶっ殺してやってだッ!! ぶっ潰し合いをさせやがれてんだッ!!』

グレンデルは俺達のみならず、ウィザードにも敵意をむき出しにして吠える。

が、ウィザードはそれに応じる事なく、冷たくこう言い放った。

「——また、骸と化したいのですか? あなたはまだ調整段階なのです。これ以上

無理をすれば……分かってるでしょう？」

それを聞いたグレンデルは不服そうにしながらも、敵意を抑える。

『……チツ、つたく敵わねえな。それを盾にされちゃあよ。止めるしかねえよ』

……骸？ どういう事だ？ 滅びたのに復活した……でもそれは、何か限定的な術によるものって事なのか？

ウィザードは水晶のような魔宝石を懐から取り出すと、小さく頷く。

「……あなたに良い報告です、グレンデル。白い方で大分苦戦しているとの事です。今度はそちらに行きましょう」

『おほっ！ 今度はアルピオンかよッ!! たまらねえな!!』

ウィザードの報告に、グレンデルは口元をにんまりと釣り上げた。

『『白い方って——ヴァーリか!』』

『おい』

と、不意にグレンデルが俺を指さした。

『クソのドライグ、根暗のヴリトラ、それにパンツのファブニール、ティアマツトちゃん。お前らとの遊びはまた今度に取っておいてやる。そんな時はあれだ、確実に殺すから。楽しみにしとけよ、ゲハハッ!!!』

『『おめーがクソだよ』』

『パンツと言った方が、パンツ』

『ガキみてーな物言いしたとこでテメエはパンツなんだよパンツ野郎!!』

律儀にフアーブニルに突っ込むと、龍門が開き、陣が新緑色の光を放ちながらグレンデルを包み込んでいく。

光が止むと——グレンデルの姿はもうなかった。

「…ふむ。では、私の方もご挨拶をさせてもらいましょう」

ウィザードはグレンデルが転移したのを確認すると、変身を解いた。

魔宝石と同じ、黒い魔方陣をゲートの様にそいつの身体を通過すると、男の全貌が明らかになった。

「——ッ!!」

その顔——銀髪が特徴の美青年をみて、俺とグレイフィアは硬直した。

だってその顔は、グレイフィアの面影があつたからだ。

『…あんた、まさかっ』

「ええ、考えている通りです。私はルキフグス——ユーグリット・ルキフグスです」

「!!」

その名を聞いて、俺と——特にグレイフィアは驚愕した。

まるで金縛りにあつたかのように、動けないでいた。

その名は――

「兵藤、どうしたんだよ?…アイツの事、知ってるのか?」

「…グレイフィアの、弟だ」

『!?!』

その事実には全員が驚愕の表情を浮かべる。

そりやそうだろう、グレイフィアの弟は先の時代の戦争以降から行方が分からなくなっているんだから。

その事はこの場にいる全員が知っていた…だからこそこのリアクションになっているんだ。

だけど同時に、一つの疑問に答えを得た。

「…そうか。この街に侵入し、魔法使いの連中を招き入れたのも、地価の列車に細工したのも、アンタだったんだな」

「っ、そう言う事ですか…! 同じルキフグスの者であれば、グレイフィア様と同質のオーラを有している。であれば結界を素通りできても不思議ではない…」

「姉上」

ユーグリットは冷淡な声音でグレイフィアを呼ぶと、未だ硬直しているグレイフィアへと向き直る。

今にも倒れそうなグレイフィアを、アーシアが支えていた。

「あなたがルキフグスの役目を放棄して自由に生き——赤龍帝の従僕と成り下がるのであれば、私にもその権利はあるのです」

「っ！」

「『っ、おい待て!!』」

その場から去ろうとするユーグリットを、俺は呼び止める。

ユーグリットは俺の方に視線を向けると、淡々と告げた。

「兵藤一誠、貴方との決着ははずれ付けましょう。いえ…つけなければならないのです」

「『どういう意味だ……っ』」

「貴方が希望を照らすのであれば、私はそれ以上の絶望で塗りつぶしましょう。」

「……………デイスペア・ウイザード、とても名乗りましょうか。以後、お見知りおきを」

《テレポート・ナウ》

そう告げると、ユーグリットは今度こそ消えていった。

—————

暫く沈黙に包まれていた俺達だったけど、フィールドが崩れ出したのを見て我に返



る。

『「廃棄寸前だったのと、先の戦闘で大分ガタが来ていたらしい。もう保たんぞ」』

『「ソーナ先輩！」』

俺が呼びかけると、先輩の方は朱乃さんに指示をして転移用の魔方陣を展開させていた。

全員が魔方陣の中央に集まった時、不意にレイヴェルか手元に小型魔方陣を展開し、培養カプセルの方へと放っていった。

魔方陣はカプセルの一つに当たり、一度輝いて直ぐに消えうせた。

「……せめて、これぐらいはさせてもらいますわ」

「成程、そう言う事ですか」

「……? 二人は何をしようとしてるんだ？」

二人が小型魔方陣を投げて行っている間、俺はグレイファイアへと近づく。

「……グレイファイア」

「……」

グレイファイアは俺の呼びかけにも答えず、上の空だった。……やつぱり、直ぐにシヨックは抜けないよな。

無理矢理再起させる訳にもいかない、俺はせめて少しでも安心させようと、グレイ

ファイアの手を握る。

やがて転移の光が俺達を包み、地上へと戻って行った——

## 第十四章：課外授業のデイウォーカー

MAGIC170 『平凡なようで、平凡でない』

魔法使いの集団に襲撃されて数日が経過した頃、俺——兵藤一誠は自宅の自室にて、ルーマニアに発ったリアスからの吉報を待ちつつ契約相手の魔法使いの選抜を進めていた。

「——というふうに、この方はですね……」

隣でレイヴェルが書類を見ながら俺に説明をしてくれるが……

『心ここに在らず、だな』

ドライグの言う通り、今の俺はただボーっとしているように書類を眺めていた。

リアスの方はヴラディ家との会談が進んでいるとの知らせが入って来たので特に心配はしてない。

問題は——ユーグリット・ルキフグス。

ずっと行方知れずだった、グレイフィアの弟の再出現。しかも、今回の事件の主犯格ときた。

先の大戦で滅んだはずのグレイフィアの身内の登場に、冥界の悪魔側上層部は騒然となった。

……ルキフグスと言うのは、前ルシファー直属の配下でもあった番外の悪魔だ。

その滅んだはずの、旧魔王に関する悪魔の登場と言う事があり、身内のグレイフィアは審問にかけられている。

——ユーグリットの生死を偽っていたのではないか、という疑いをかけられたからだ。

勿論グレイフィアがそんな事するはずもないし、本人と再会した時の反応を見るにそれは明らかだ。

俺もグレイフィアへの審問に、主として何度か同行したけど、審問は平行線を辿る一方だった。

……この話に関しては政が絡む複雑なものなので、最終的には前主であるサーゼクス様に任せる形となった。

歯痒くはあるけど、政治事に対して碌に絡んでもいない若造が如何こうできる話でも

ないし、俺自身やる事だつてある。

それをサーゼクス様、ひいては面談したグレイファイア本人にそう説得させられたので、今はこうして自分に出来る事をやっている。

…やつてるんだけどなあ。

『しかし分からんな。何故上役の連中は旧魔王に関してそこまで過剰に反応する?』

それだけデリケートな問題なんだとき。…そして『ルシファー』に関連したものは新旧問わず、冥界でも別格の扱いらしいぜ。

『…ひよつとして生きてるんじゃないか』

誰が?

『ルシファーだよ』

『生きてるって…前ルシファーならヴァーリの親父さんだろ? もう生きてないって聞くけど……』

『違う違う。——もつと前の、とかな』

っ、前任者の、更に前……?

『ああ。ま、これは完全な憶測だが……そこまで『ルシファー』に関して過敏な様子を見るに、『ルシファー』は冥界にとつては腫れものみたいなものだろう。そこから考えるに……何かとんでもない事をやらかしたか、若しくは生存説がある、とか』

…所謂、都市伝説みたいなもんか？

『そう言う事だ。ま、深く気にする事でもないだろう。今のお前にはなんも関係ないんだからな』

『そうだな……一応覚えとくけど』

『…だつたらいい加減現実に戻つてやれ』

『え？』

ドラゴンに言われて意識をアンダーワールドから浮上させると、

「……イツセー様？」

怪訝な様子のレイヴェルが、俺の顔を覗き込んでいた。

やべつ、完全に忘れてた……！

「ど、どしたんだレイヴェル？」

「…グレイフィア様の事、でしょうか？ 先程から上の空だったので」

「…分かつちやう？」

「マネージャーですもの」

レイヴェルは胸を張つてそう言つてのける……スゲエや。

『お前が分かりやすいだけじゃないのか』

…くそつ、否定できねえ。

「…心配するお気持ちは分かりますが、私達では同行できないのが実情ですわ。イツセー様も、そこは理解している筈です」

「…うん。気持ちは、分かっているつもりなんだけどね」

「……眷属への信頼も、主としての大事なファクターですわよ？」

…そうだな。

「……うん、レイヴエルの言う通りだな。——よしつ、気持ちも切り替えて頑張ろう

！」

「はいー…と、言いたいのですが」

おろ？ どうしたのかな？

レイヴエルは洗面を作って、手にした書類を机の上に置く。

「正直に申し上げますと……次回に持ち越していいのではないかとわたくしは考えております」

「…お眼鏡に適う魔法使いがない、つて事か？」

「はい。イツセー様を選ばれた魔法使いの方々の大半が私からの太鼓判を押せない者ばかりなのです。……書類選考後の試験などで詳しく調べてみないと分からない部分もあります。書面で記された経歴や習得技術から見ますと、『天龍』『赤龍帝』『ウイザー

ド』のパートナーとして相応しい人物は見当たりませんわね」

つぶさに書類を見て来たレイヴエルが言うのだから、その評価は大体合ってるんだろ  
う。

…まあ、俺もざつと書類を見た限りではあんまりパツとしないというか。

それならそれで短期間での契約になるんだけど……こつちもパツとしないのが実情  
だ。

それでも契約して良いかなあと考える相手はそこそこいる。

「こうなったら短期で取っちゃうか？ 契約」

俺はレイヴエルにそう訊くが、レイヴエルは可愛い顔を難しくさせていた。

「……短期で結んで、新人故のうっかりミスで変な評価を抱かれてしまい、あちらの業界  
にいらぬ噂を流されるとそれはそれで厄介極まりないと言いますか……。ただでさえ、  
イツセー様は魔法使いの業界ではあまり好かれてはいないようですし……。そのミス  
を盾にここぞとばかりに悪評が広まって、最悪契約相手がゼロになるという悲劇も考  
えられますので……」

そこまでのケースを考えてくれてるんだね、レイヴエルちゃん……。

『お前の場合、好みの良しあしで喧嘩しそうだしな』

うるへえ！ 否定の出来ない事で攻めるのは止めるよな！



「魔法の血色が違い過ぎる！とかで喧嘩しそうだもんなホント……文句に関しては白い魔法使いに言っていたら良かった。」

「悩みどころだな……」

「ですわね……」

とまあ、契約に関してはかなり難航中なのです。

と、そんな俺達の元に、来客が現れた。

「あらあら、お話は進んでいるのかしら？」

「朱乃さん。それに——」

「お邪魔しています」

朱乃さんに——ソーナ先輩が訪れていた！

こりや珍しいお客さんだ！

「珍しいっすね、会長さんが来るなんて」

「ええ。今後について朱乃達とお話ししようと思っただけなんです。後で椿姫もここに来ます。お邪魔かもしれないませんが、少しの間だけお話をさせてくださいいね」

「いえいえ、そんな！ ゆっくりしてゆっくりしてくださいよ。……それよりソーナ会長」

「何でしょうか？」

「天井から気配感じるんですけど、会長のお知合いですか？」

俺が訊くと、会長は目を丸くする。

「……この会話の最中に気付いたのですか？」

「ええ、まあ」

「丁度新しい眷属の紹介と……この子自身がどうしても来たいと言っていたので。……降りてきなさい、ベンニア」

会長が天井に向かってそう呼びかけると、音もなく天井に魔方陣が展開し、そこから蝙蝠みたいに逆さになった髑髏仮面が出てきた！

「うわっ、ガシャドクロ?!」

『……この感じ、死神か』

「……え、死神?」

死神って、あのハーデス配下の死神か？

若干狼狽する俺を余所に、目の前の髑髏仮面はその面を外す。

そこにいたのは——若干眠たそうな眼をした、小柄な女の子だった。

《お初にお目にかかります、ウィザードラゴンの旦那。あつしはベンニアと申します。死神と人間のハーフであります……まあ、ハーデス様についていけなくなつて、こつち側に寝返る事にしたので、元死神と言ったところでしようかね?》

「……これはご丁寧に……もしかして、この子が新しい眷属?」

「ええ。私の新しい『騎士』です。本当は『戦車』もつれてこようと思いましたが、生憎用事が重なっていたので、またの機会にと」

な、成程……でもまさか死神が眷属とは！

「ビックリしましたよ。……でも何で死神を選んだんです？」

「……実は、『騎士』の当ては他の方だったのですが、その方と都合がつかなくなってしまうして。そこに現れたのが、この子だったんです」

『自分を売ったんかい』

「言い方」

相手女の子だぞ、しかも中学生ぐらいの！

「最初はハーデス側のスパイかと思いましたが……こんな大胆なコンタクトを取るだろうかと疑問にも感じたのですが、ある一点から信頼する事にしました」

「ある一点？」

何だと首を捻るより早く、ベンニーアは俺に——色紙を突き出してきた。

《あつし、実はウイザードラゴンの旦那の大ファンでさあ。ほら、マントの裏はウイザードラゴンの刺繍つて具合です。つて事で、サイン一つお願いできやせんかね？》

あ、ホントだ。鎧纏った俺と変身した俺が刺繍されてる。

「俺、死神にもファンが出来ちゃったか……」

取り合えずサインを書いてあげると、ベンニーアは眠そうな顔を輝かせた。

《ありがとうございやす……！ 一生の家宝にしますぜ！》

「お、おう。ありがとな」

「最上級死神の一角、オルクスの娘なので転生できるかと思いましたが……駒一つで足りて幸いでした」

お、オルクス……また分かんない名前が出て来たな。

『大分有名な死神の一角だ』

《ただの娘バカの親父ですぜ。それに、あつしは母方の人間の血が濃いで。そこまで大したことではないでさあ。……ここがウィザードラゴンの自宅。あつしにとっては桃源郷に等しいですぜ》

いや、そんな大層なものでもないと思うけどね。

と、随分個性的な新しい眷属の子と知り合いになったのであった。

「この分だと『戦車』の人も個性的なんじゃ……」

『楽しみだな』

「何が？」

## MAGIC171 『新しい眷属』

お客さんも来たと言う事で、魔法使いの選考は一時休憩と言う事で置いておいて、家の地下にあるプールに場所を移すことにした。

…しかし、ここホントに俺の家なのかねえ。

まあ今更なので多くは突っ込まないけど。

俺は海パンにパーカーを羽織り、レイヴェルは水着だけど上からTシャツを着ている。

……大きいな、マジで。うん。

朱乃さんは肌色成分多めの色っぽい水着！ 過激で眼福なことこの上なし!!

そして一番レアなのが――

「家族以外の男性に水着姿を見せたのは、イッセー君が初めてかもしれませんね」

そう、なんとソーナ先輩だ。

しかも可愛いワンピースタイプの水着を着用してらっしゃるのだ、これはマジでレアな体験だ!!

しかも初めてが俺と来ましたか!?! いやー、すまん匙。お前のファーストをまた一つ奪っちゃったぜ!

……こんな事言つといてあれだけどき、俺、呪殺されないよね?

『ヴリトラだったら出来そうだけどな』

言うなよ、怖いから!

《あつしはここが一番落ち着くんですぜ》

そう言つてテールブルの下にもぐつてお茶を飲むのは、死神っ娘のベンニアー……変わった子だな。

可愛いんだけどね、ダウンナーな所が。

そして、このプール場にいるのは俺達だけでなく、

「イリナには負けん!!」

「ゼノヴィアには負けないわ!!」

先に入っていたゼノヴィアとイリナが水泳対決をしていたのだ。

えらい勢いで水かきをしながら水飛沫を激しく立てている。

『行為の時の女の性器みたいだな』

「そう言う事言うなよ!!」

最低の下ネタ発言だぞそれ！

「どちらも負けないでくださいーい！」

そしてそれを応援しているのは、プールサイドにいるスク水姿のアーシア。

……そのアーシアのすぐ近くでプールに入っているのは、黄金の塊——もとい、五大龍王のファープニル。

前話ぐらいでとんでもない変態だと判明したゴツいドラゴンだ。

『アーシアさんのスク水。俺様、アーシアさんの使ったプールの水を飲み干したい』

……くっそ、このド変態野郎が……！

しかもその変態の頭の上にはオフィス、更にラッセーが乗るといふドラゴン三段構えになっていた。

「我、この三体合体なら、グレートレッドに挑戦できる、と思う」

正当な合体してねえよ！ それ俗に言うおでん合体だよ！

『おいドライブ、あの変態ドラゴンをどう思う。お前の同胞だろ、アイツ』

『あれはファープニルじゃねえ。ありやただの金色の奴だ』

金色の奴ってなんだよ……まあ、受け入れたくない気持ちは分かるけども。

「にゃー、疲れちゃったわあ」

そんな何とも言えない気持ちに陥っていると、新しい訪問者が現れた。

「黒歌…それにルフエイちゃん」

「こ、こんなにちは」

「ただいまにやー」

黒歌はそう言つて俺に近付いてくると、いきなり抱き着いてきた!!

「赤龍帝ちゃん、疲れたんで癒してほしいにやー♪」

「な、な、な……!」

「く、黒歌さん! 駄目ですよお!」

「えー、赤龍帝ちゃんだつて嬉しいでしょ? だつて聞けば赤龍帝ちゃんの正妻メイドさん、今はいないんでしょう? だつたらこう言うの求めてるんじゃないにやーい?」

あー、くそっ! しばらくご無沙汰だから欲望が目覚めつつあるのが凄く物哀しい!!  
でも良い匂いするし、おっぱいも柔らかいので役得だと感じるのが尚悔しい!!

「く、黒歌。お前、確かヴァーリに呼ばれてたんじゃないのか?!」

すりすりしてくる黒歌と煩惱と必死に戦いながら俺は問いかける。

小猫ちゃん、ギヤスパー、レイヴェルを助けるために魔法使いの集団と戦っていた時、こいつ等は俺達の元を離れてヴァーリの所に戻っていたからだ。

恐らくは向こうでも何か起こっていたんだろう……でも黒歌は小猫ちゃん達が危機に陥つたと聞いて気がじじやなかつたつてヴァーリがメールで教えてくれたけど。



「そうなのよー。もうさー、アジ・ダハーカが襲ってきてねー」  
『!?』

黒歌の口から出たその名前を聞いた俺達は、驚愕も隠さずに顔を強張らせた。

「アジ・ダハーカって、滅んだ邪龍の一体だろ?! そいつも蘇ったってのか?!」

『…千の魔法を操り、ゾロアスターの善神の軍勢に牙をむいた邪龍の一角だ』

「…確か、英雄スラエータオナが封印に近い形で滅ぼしたと伝えられていますね」

封印するって、それでやっとなんか出来たって事だろ……。

「その英雄も封印でやっとなんか納得できるぐらいのしぶとさだったわ。……あの邪龍、殴ろうが蹴ろうが斬っても笑って向かって来たわ。血を全身から吹き出しながらよ? 倒れる気配が全くなかったわ……」

「…グレンデルと同じだ」

アイツも嬉々として戦い続けようとしてた……邪龍つてのは、どいつもこいつも頭のネジが吹っ飛んでるのかよ?

『…出来れば戦いは避けたいところだ』

『尻込みでもしたか?』

『破壊衝動と自滅願望を併せ持つ輩つてのは大抵とんでもない奴等ばかりだ。そう言う手合いとは忌避すべき存在なんだよ』

…あのドライブですらこう言うんだ。出来れば関りは避けるべきなんだろうけど……でも俺達が奴等と戦う上では避けては通れない壁だ。

「その後で、もう一体の邪龍——ウィザードラゴンさん達が戦ったというグレンデルとローブを着た男が現れまして…その場でアジ・ダハーカとグレンデルが私達との戦いを巡って言い争いを始めてしまったんです。あまりに混迷したので、私達はそこで一時退散する事にしました」

ヴァーリの所に行くとは言ってたけど……まさか仲間割れを起こしていたとは。

『邪龍つてのは基本的に仲間意識や同族意識はないに等しい。自分を高ぶらせる相手と相対したんだ、そうなるのは明白だ』

「あれとの戦いも喜んで迎えたヴァーリもどうしようもないバカにや」

黒歌は呆れた口調でそう言う……アイツ、根っこは変わってないんだな。

「基本的にはエロゲと拉麺と戦闘大好きな馬鹿にやん、アイツは」

「まあ、戦い以外の事に興味を覚えたのは良い事じゃねえか？」

黒歌はきよとんとすると、「それもそうね」と頷いた。

「で、黒歌」

「にやーに？」

「お前、何時まで俺の膝上に乗ってんの？」

俺も何時までもこの体勢はキツイというか……まるで対面座位みたいで、生殺しにも近い状態なんだよ。

お尻柔らかいし、相変わらず良い匂いするし……！

「にやはは、実はねー。赤龍帝ちゃんに用事があるのにな」

「俺に？」

「んー……ここだと人が多いから、ちよつと別の場所でも構わないかしら？」

別の場所で……？ 引つかかる所はあるけど、俺は朱乃さん達を振り返る。

「構いませんわ。ですが、何かあったらすぐに駆け付けます」

「黒歌さん、余りイツセー様に変な事をしてはいけませんよー」

「にやははー、了解にや。それにそんな物騒な事もしないし、安心なさい」

黒歌はからからと笑うと、俺の手を引いて一時プール場を後にした。

――

「で、何だよ？ 話つて」

プール場から出て直ぐ近くにあつた空き室で、俺は黒歌にそう問いかける。

黒歌はそれに対して、何やら言いにくそうにもじもじとしている……何だ、一体？

「……あ、あのさ」

「うん」

「……前、アンタの眷属にならないか誘って、くれたじゃない？」

「……ああ」

「……そうか……話ってその事か。」

「あれから、さ。ずうっと考えてたの。私みたいなロクデナシが、ホントに日向の道を歩んでも良いのかなって。……自分で考え続けたんだけど、全然答え出なくてさ」

「……」

「でも、白音が言ってくれたの。罪とか罰とか云々よりも、私自身がどうしたいのかって。先の事を考えるより、今の事を考えた方が良いんじゃないか……どつかのお人好しの魔法使いさんみたいな、そんな事を教えてくれたんだ」

「先の事は、またその時に考えれば良い——それは、嘗て俺が吼介や小猫ちゃんに言った言葉だ。」

「……それを聞いたら、なんて言うか、気持ち少し楽になったって言うか。自分の心と改めて向き合えたって言うか。……私自身の本音、聞いてくれる？」

「……ああ」

俺は静かに肯定する。すると黒歌は一息吐くと……自分の本音を、語り始めた。

「私は——白音と、アンタと……イツセーと一緒に生きたい。……私みたいな咎人を救おうとしてくれた、受け止めようとしてくれたあんた達と、一緒に歩んでいきたい。……取り返しのつかない事を、した私の罪をツ、受け入れてくれたイツセー達の、力になりたいっ！　こんな、こんな我儘で、気分屋で、どうしようもないロクデナシだけ……私も、貴方達と一緒に、希望を守りたいっ!!　だから、だから……ツ！」

俺は黒歌を、そつと抱き寄せる。

「……俺は眷属の主だ。眷属になつてくれる奴の罪を、思いを背負えないほど軟じやない。俺は自分の眷属になつてくれる人の、全てを一緒に背負いたい、そう思つてる。傍迷惑だろうし、まだまだ未熟者で、迷惑をかけるだろうけど……」

俺は、懐から『僧侶』の駒を取り出す。

「……俺と、一緒に生きてくれるか？」

「……はい、はいッ……!!」

黒歌はそつと、『僧侶』の駒を受け取る、胸に抱きしめる。

『責任重大だな、相棒』

『……こんな女を引き取りたいなど、お前は本当に物好きな男だな』

……人はやり直すことだってできる。

そりゃ、やり直すのが無理な外道や悪党だつているけど……それでも、その心にある

であろう善性を、俺は信じ抜きたい。

そんな悪魔がいたって、良いだろ？

そんなこんなで新しい眷属を迎え、プール場に戻る俺達。すると俺を出迎えたのは、息を荒げたゼノヴィアだった。

「どした、ゼノヴィア」

「はあ、はあ。丁度いい、イツセー。そこに座ってほしい」

「お、おう」

俺は椅子に腰かけると、ゼノヴィアは「失礼するぞ」と言って…俺の膝上に座ってきた！

「な、な、何してんの君!？」

「イリナと勝負で賭けていたんだ。水泳で勝った方がイツセーの膝上に座る、とな」

俺がいない間にそんな勝負をしたのかよ!？ 俺の意思は無視ですかさうですか!!

けどスタイル良いから競泳水着似合ってるな、コイツ……しかも濡れた感触がいけない気持ちにさせ……イカンイカン！ 自重せねば……!!

同じく競泳水着のイリナが登場して、水泳キャップを外す。

…おお、髪を縛ってないイリナの姿だ。これは貴重だな。

「良いな良いな！ 私もイツセー君のお膝の上に座りたいな！」

心底羨ましそうにそう言うイリナ……男の膝上って、そんなに良いもんなのか？

グレイフィアに膝枕されたりした事もあるから、女性の膝は柔らかいって分かるけど……男の膝上ってのは固いだけだと思うぜ？

そう疑問に思っていると、イリナが俺の背後に回り――

「えいっ！」

「は」

後ろから抱き着いてきた!?

ちよいちよいちよい!! 最近になってこの娘、大胆になりすぎてませんかねえ!?

せ、背中一面にイリナの天使おっぱいの感触が広がって猶更俺の性欲が天元突破しちゃうんですけどお!!

「背中が私がゲットよ、ゼノヴィア！」

「むっ、やるな。イリナ」

何だその勝ち負けは、バカ可愛すぎかこいつ等。

「はう！ イツセーさんが満員御礼状態になってますう！ わ、私も一緒にやりますッ

!!」

「おおっと、この状況でアーシアちゃんまでやって来たぞ!!  
人気者にゃん、うちの主様は」

黒歌はそう言つて、「にやはは」と笑うのであった。



## MAGIC172 『裸でエロゲと言う概念』

「あのー………何で俺、こんなところに呼ばれてんの？」

無数にある我が兵藤家の空き部屋、その内の一つに俺こと兵藤一誠は連れ込まれております、ハイ。

その部屋には何もなく、ただ無造作に床にノートパソコンだけが置かれていた。

そしてその前に仁王立ちしているのは——俺を部屋へと誘ったゼノヴィアだった。

「やあ、イツセー。よく来てくれたね。今日はイツセーに見せたいものがあるんだ」

「…見せたいもの？」

バツの悪そうなアーシアとイリナを放って淡々と語るゼノヴィアに、俺は疑念に駆られてそう訊ねる。

目の前のゼノヴィアは何故か目を爛々と輝かせていたが——俺はそれを見て言えない不安を覚えつつあった。

こう言った表情のゼノヴィアは、碌な事を言わない傾向が多いからだ。今回は一体何

を企んでるんだか……。

若干半目になる俺の眼前に、ゼノヴィアは後ろ手で隠していたものを見せつける。

「…ゲーム？」

そう、それはゲームソフトの箱だった。

しかもただのゲームではない。

「うん、桐生に頼んで新しい『エロゲ』を入手してきたんだ」

ゼノヴィアが言った通り、ゲームのパッケージにはお子様には刺激が強すぎるってレベルじゃないエロエロな女の子が描かれていた。

つつーかまた桐生か…：アイツ躊躇なく仕入れてっけど、ホントに女なのか？

普通この歳の女の子って、こういうのは敬遠する筈だろ。

『時代は進化してるのさ』

「ほーん」

…どうでも良いけど、新作のエロゲだから、またヴァーリが借りに来るなコレ。

貸すのは良いんだけど、暫く返ってこないからなあ…。

そして当のゼノヴィアは、嬉々としてそれを俺に見せつける。

「その名も『墮天使シスターズ く信仰と肉欲の狭間でく』だ！ タイトル通り、敬虔なシスターを次々と辱める内容の『エロゲ』だ」

「さいでつか……」

「…全く、これだから日本人は無宗教すぎるんだ。シスターは尊ぶべき神の従僕なんぞで」

『その従僕を汚すから興奮するんじゃないか』

某ディオドラみたいにな……嬉々としたのに、今度は『エロゲ』の内容を読んで日本への不満を零し始めたぞ。

「…あのよ、そのゲームへの不平不満ならゲーム会社に言えよ。俺に言っただけじゃないだろ」

「それは分かっているとも。別にプレイする上では不満は抑え込むさ」

「……まさかお前、それをみんなプレイしようとかってアホな事抜かすんじゃないよな？」

以前にも似たようなことがあったせいで、俺はその考えに至ってしまう……あの時はロスヴァイセさん以外の女子メンバー全員で俺の『エロゲ』をプレイする羽目になった事があったんだ。

……あれは男子にとっては耐えがたい苦痛だった。逃げ出したいとも切に願った。

—— エロゲやエッチなDVDってのは、男にとってはオアシスでの水浴びにも等

しい、重要なファクターだと俺は思ってる。

誰もが寝静まったであろう深夜、それも一人の空間で興奮を嘯み締めながらプレイして言つて女の子を攻略していく……その瞬間つてのは、まさに天にも昇る心地！

それを……こともあろうに美少女・美女軍団と仲良くファミリーゲームをするみたい  
にワイワイとプレイする時の空しさと恥ずかしさは、例えようがないぐらいの地獄なん  
だぞ!!

俺が内心で誰に向けてるのかも分からない説明をしている前で、ゼノヴィアは無情に  
も嬉しそうに頷いた。

「流石はイツセー、察しが良いね。これを私達三人とイツセーだけでプレイして、研究会  
と洒落こもうと思つたんだ。リアス部長やグレイフィアさんが今この家を開けている  
この時がチャンスだと私は踏んだ！」

——何でそうなる!?

俺はその場で頭を抱える。研究会と言うのは百歩譲つて分かつたけど、何故それに俺  
を巻き込む!?

「だつたら三人だけでやれよ!! 何の罰ゲームで美少女三人とエロゲーしなきゃいけない  
んだよ!! エロゲーつてのはなア、男にとっては秘境にも等しいもんなんだぞ!!」

俺が思わず怒鳴りながら身の丈の思いを語るのを無視して、ゼノヴィアは遠い眼をして訥々と語り始めた。

「最近、私達はグレイフィアさんは勿論のこと、リアス部長や朱乃副部长に後手後手になってる。どうにもあの二人の壁は厚く、イツセーまでの道程が遠のいていく一方だと感じていた。そこで私達三人、手を取り合つてイツセーを拘束する強硬策に出た！  
なあ、そうだろう？ アーシア、イリナ！」

いや、どうい求めてるおふた型、両方バツの悪そうな顔のままなんすけど……。

「わ、私は……イツセーさんと楽しくお話できれば、それだけでも良いので……それに、グレイフィアさんに悪いですし………」

アーシアはもじもじとしながらそんな可愛らしい事を言ってくれる……くう、アーシアちゃんが純粹過ぎて辛いっ!!

イリナも赤面しながら、ゼノヴィアに純情攻撃を仕掛ける。

「わ、私もイツセー君と昔の事を思い出しながらお茶が楽しめればそれで良いかなーって」

そうだそうだ！ 一緒にエロゲーして仲を深めようなんて突飛な事しなくても、お茶とかだつたら何時でもウエルカムだ！

だがそんな二人を前に、ゼノヴィアは語気を強める。

「生ぬるいぞ、二人共！ そんな事だから、私達は年上二人に追いつけず、年下の小猫とレイヴェルにまで先を越されるんだ!! 小猫なんて逆プロポーズをして、しかもイツセーもそれに応じた! レイヴェルだって、イツセーと将来の誓いを立てたと聞くし、小猫の姉もイツセーの眷属になって、一層距離が縮まる一方だ。更に言えばレイヴェルは、常に傍らにいていようになっているじゃないか」

「そうだな……レイヴェルは眷属にしてほしいとも言われたし、多分レイヴェルの家の人もそれを望んでるっぽいんだよな。」

「でもそれを抜きにしても、俺はレイヴェルに傍にいてほしいとも思ってる……確かに距離が近いと言えば、近いよな。」

「何時にも増して饒舌かつノリノリなゼノヴィアに、イリナが諫めるように口をひらく。」

「エッチなゲームをイツセー君と一緒にするなんて……やっぱり、健全ではないわ! もっと他に、イツセー君と交流を深められる術はあると思うの!」

「良いぞイリナ! もっと言ってやれ!!……だがゼノヴィアはそんなイリナを目をキラリと光らせて見つめていた。」

「ふふ、そうは言ってもイリナ。私は知ってるんだぞ?」

「な、何の事……?」

な、何だ……何をゼノヴィアは知ってるんだ？

「天界に聞いているそうじゃないか。——悪魔と一線を越えても堕ちない方法とやらを。ミカエル様が真剣にご一考中という事もね」

な、何だつて……!?!? それを聞いたイリナは、一気に耳まで真っ赤に染まった。

「わ、わ、わ、私はっ!!」

その動揺っぷりから察するに、事実なんだなそれは！

しかもミカエルさんもそれを容認しちゃってるのかよ!?! 良いのかよそれで！

アーシアはそれを聞いて、酷く驚いていた。

「い、イリナさんがそこまでお考えだったのですね！ はううつ、まさか、私が一番遅れを取っているだなんて思いもありませんでした！」

「そうだぞ、アーシア。イリナはもう子作りの事まで視野に入れてるんだ。皆、実は裏で自分を高めようと必死だったのさ。私だつて、こうして『エロゲ』を使って、自分を高めようとしている！」

高めるとして何を!?! そんな女の磨き方聞いた事ねえぞ！

だが俺のツツコミも空しく、アーシアは決心した面持ちになってしまった。

「——分かりました！ 私も『エロゲ』をプレイして、研究していきます！ リアスお姉様、朱乃さん、ゼノヴィアさんにもイリナさんにも負けません！ 勿論、小猫ちゃ

んにもレイヴエルさんにも、黒歌さんにもー」

「流石アーシアだ。私の親友は強い精神の持ち主だね」

友人のねじ曲がりすぎた決意に、ゼノヴィアも喜んでいた。

「……いやいやいや。君らはうら若き女子高生なんだから、もうちよい清い会話しなさいよ！ しかもシスターだって事完璧忘れてない!? シスターって煩惱を持つっちゃ駄目なんじゃないの?!」

「イツセー、掟というのは——時として破らなければ進めない道に立ちほだかる城塞のようなものだ。だったた、私達はその壁をぶち抜いて先へと行かねばならないんだ!!」

意☆味☆不☆明☆すぎる!!

もはや訳の分からん自論まで振りかざすゼノヴィアは、イリナを見据える。

「イリナはどうする? 指を啜えて見ているだけか? 自称幼馴染は自称のまま役目を終えるのかな? 桐生が言っていたぞ。幼馴染ほど、男子に近付ける属性はないが、逆に近すぎて先に進めないと。ふふふ、このままでは、全くその通りになってしまうかもね」

……何だよこのアホくせえ会話は。

この隙に出て行ってもバレないんじゃないかと思ひ、そろーつと移動しようとしたが



…ゼノヴィアに首根っこを掴まれた！

「悪いがイツセー、退出は認めんぞ」

「だから研究するなら君らだけでやりなさいよ!!」

「イツセーがいなければ意味がない。さて、イリナ…どうするんだ？ 自称のまま終わるのかな？」

『自称』はイリナにとっては禁句だと分かっている上でそう挑発するゼノヴィア。

そしてイリナは案の定頬を膨らませて不満を爆発させた。

「もう！ ゼノヴィアだったら、最近私の事『自称』って言い過ぎよ！ 私は真正銘イツ

セー君の幼馴染で、天使だもん！」

「そうだね。自称幼馴染天使だな」

合体しちゃったよ。

「合体させないでよ！ 分かったわ！ 私も『エロゲ』をプレイして、幼馴染としてイツセー君に認めてもらうんだから！」

あーあ、イリナまでその気になっちゃったよ……この子らはホントに、世俗に疎すぎる！

もうちょっと自分で真実を調べようぜ！ 桐生の言った事そのまま鵜呑みにしないとかお姉さま方の誘惑見て学ぶんじゃなくてさ！

あれか、俺が悪いのか？ 俺がスケベなのが悪いのか？

自分のスケベっぷりに若干嫌悪感を抱く一方で、ゼノヴィアは不意に上着を脱ぎだした。

ブラジャー姿を堂々と晒しながら、ゼノヴィアはアホの子二人にこう言いだした。

「ところで知ってるか？ 『エロゲ』は本来全裸でやらなければならぬそうだ。これも桐生から仕入れた情報なんだ」

——あの馬鹿女は何吹き込んでやがんだッ！

確かに一部開幕ではやってるだろうし、俺だつて一度敢行した事はあるが……女子がエロゲープレイするならまだしも、全裸になるのは無しだろ！

「で、ですが前回は皆でプレイした時はそんな事しませんでしたよ!？」

「アーシア、あれは私達がまだ情報不足だったためだ。思えばイツセーが苦い顔をして乗り気でなかったのも、全裸で無かったせいかもしれない。様式美、形から入る事こそ、日本人の美德とされるからね」

「ちつたあ疑うつて事をしろ！ そんな様式美は日本にはねえつつの!!」

ここまで来るとポンコツとかそんなレベルじゃなくなってくるぞ、おい!!

だがイリナはゼノヴィアの言葉を真に受けてしまい、わなわたと震え出す。

「そ、そんな事が!?!:わ、分かったわ! これも自称を撤回してもらおうよ!」

そんな撤回の仕方あるかよ!?! だがイリナは既に覚悟を決めているためか、躊躇なく上着とスカートを脱ぎ捨ててしまった。

「流石イリナ。ここぞという時の土壇場では思い切りが良いね。さて、アーシアはどうする?」

そう言うゼノヴィアはブラを躊躇なく剥ぎ取っておっぱい丸出し状態になる……前から思ってたけどさ、うちの女子陣、脱ぐことに抵抗なさすぎじゃねえか?

もうちよつと恥じらいぐらい持つても良いと思うんだけどね、俺は!

「はうっ! わ、私も負けません!」

アーシアまで脱ぎ始めた!

俺の眼前で三人のアホの子達は上下ともに下着を脱ぎ捨ててしまい、生まれたままの姿となつてしまった……桐生、お前覚えとけよ!

「さあ、イツセーも脱ぐんだ」

「お断りじゃあああ!!」

ずんずんと全裸で迫るゼノヴィアと、服を脱がされまいと抵抗する俺……男女の配役見事に逆転しちやつてるじゃねえか!!

「だ、大体な! 全裸でプレイするのは基本男が一人でやるもんだ! それに、やったけ

ど風邪引くだけだぞあんなの！」

「大丈夫、イツセー君を一人にさせてさせないわ！ 私達が付いているもの!!」

何とか逃げようとする俺の背後を抑えるように、ぴとつと俺の背中に張り付くのはイリナ！ 天使のモチモチな柔肌おっぱいの感触が見る見るうちに広がっていく！

「は、離れるイリナ！」

「離さないわ!! 絶対に！」

「そうです！ 孤独で『エロゲ』をプレイする事なんてないんです!!」

「孤独にプレイさせてくれ!! それに俺は今禁欲中なんだ！ 今この状態でいられると非常に不味いからいったん離れろ!! 頼むから!!」

悲鳴のように叫びながら俺はノートパソコンの前に座らされる……そんな俺の背後から抱き着いてくるのはゼノヴィアだ。

くっそお、グレイフィアに申し訳ないと思いつつも欲望は正直に反応しちまう……!!

「ゼノヴィア……」

「誘惑する為じゃないぞ。こうでもしないと逃げられてしまうからね」

「…この状況で逃げるわけねーだろ」

もうこうなったらどうとでもなっちまえ……。

「イツセー、ソフトのインストールとやらを頼む」

「へーへー」

仰せのままにと……俺は備え付けのドライブにソフトを入れてインストールさせていく……くつそ、マジで生殺し状態なんだけど。

両隣にはアーシアとイリナ、背後はゼノヴィアがぴったりとくつついて来て、おまけに全裸ときたもんだ。

こんなに酷い拷問、世界中探したって見つからんぜ。

そんな地獄のような、天国のような時間を味わいつつ、何とかインストールを終了させる。

「……ほら、インストール出来たぞ」

「では、やろうか」

いや、そろそろ帰らせてくれませんかねえ……ダメ？ あ、そう。

「お前、そこから見るのか……？」

「ああ、特等席だ……しかし、なんだな」

俺の肩に顔を乗せて覗かせるゼノヴィアは、何故か恍惚な表情を浮かべていた……くそ、地味にレアな表情してるじゃねーか。

「……イツセーの、背中、肌触りはやっぱり良いな。毎日、こうしていたいな。……なあ、イツセー」

「…ん？」

「これから学校が終わったたら毎日裸でこうさせてくれ。なんだか、こうしているだけで疲れが取れて癒されそうだな。というよりも今度真正面からぎゅっと抱きしめてくれな  
いか？　そこに女の幸せがありそうな気がしてきたよ」

それは…男の俺には分からん領域だな。

だが、それを聞いてイリナが俺の腕にしがみ付いてきた！

「それだつたら私もしてもらおうからっ！……墮ちない程度に！」

更に逆の腕にはアーシアが抱き着く！

「イツセーさんの抱っこは私が先だつたんですよ！」

両腕+背中を防がれ、ゲームすらままならない俺！

ど、どつちにしてもエロゲーどころではないし、しかも性欲に火が付きつつある！

さっさとこの状況を打破しなければ、俺がビーストモードになっちゃう！！

「き、君達！　エロゲーしたいのかしたくないのかどつちなんだよ！！」

こんな状況、ルーマニアで頑張っているリアスや審問にかけられているグレイフィア  
に見せられん！！

本当にすみません！　でも女体は柔らかいです！！

『欲望に正直なこつて』

ドライブの呆れた声と共に、ふと部屋の扉が開かれた。

そこから現れたのは俺のマネージャー、レイヴェルちゃんだ。

「イツセー様、皆さん、こちらにいらつしやいますか——」

レイヴェルが目にした光景は、裸の女の子三人が男一人に抱き着いてエロゲーをしよ  
うとしている異様な光景だろう。

どう見たつていい訳不可避の乳繰り合いシーンだな、うん！

レイヴェルは一瞬間の抜けた顔になるが、直ぐに気を取り直してこう言つてのけた。

「で、出遅れましたわ!!」

何に!? まさか君もこんな事するのか!? 勘弁してくれえ!!

だがすぐに咳払いをして自身を落ち着けると、本題を告げる。

「つて、違いますわ! イツセー様、皆さん、アザゼル先生から直通の回線が開かれまし

たわ。——事態が変化したそうです」

どうやらバカ騒ぎの時間は終わりを迎えたようだ——

## MAGIC173 『クーデターをやられたー』

俺達オカルト研究所、ソーナ先輩、真羅副会長、天界サイド（シスター7・グリゼル  
ダさんと天界のジョーカー・デユリオ）の面々が兵藤邸上階にあるVIPルームにて一  
堂に会していた。

ルーマニア——カーミラ側の本拠地に赴いているアザゼル先生から直通の回線  
が開いたからだ。

「リアス達が…!?!」

先生から告げられた事実には、俺達は驚きを隠せずに叫ぶ。

『ああ。どうにもツエペシユ側の方で大きな動きがあつたらしくてな。ツエペシユ、  
カーミラ、両陣地の境界線上が一時混乱状態になった。あちらでクーデターが起きたと  
見ている』

「…リアスと木場が、それに巻き込まれたと?」

『ああ…というよりは拘束された可能性の方が高いだろう。こつちからリアスに通信が  
出来る。そつちも同様じゃないか?』



突然の報告に全員が息を呑む。

朱乃さんが小型の魔方陣を描いてリアスへ通信を送るが……反応はなかった。

「クーデター……」

……よりもよってクーデター、しかもリアスと木場があちちに行っている時に起こるとか、マジで最悪だぞ！

『昔流行ったSF映画の……』

『それはプレデター』

『ウォースターに所属してた』

『それはデレプタ』

お前らもうちよい空気読め！

「あううう……そ、そんな……！」

横ではギャー助も顔を強張らせていた……こいつにとっては故郷の一大事だ。心中穏やかではいられないだろう。

『しかももう一つ最悪なニュースだ。……カメラ側側の幹部の話では、今回のクーデターでツエペシユのトップが入れ替わったそうだ』

『!?!?』

その場の全員が、その報告に表情を更に強張らせる。

『つまり、事が終わった後か……』

ドライグが神妙な声音で呟いた……予想してたよりとんでもない事が起きてるじゃねえか！

先生は息を吐きながら続ける。

『…現在、ツエペシユの当主、つまり男尊派ツエペシユの大元たる王が首都から退避したとの事だ』

「…ツエペシユの王が逃げるだなんて、相当な事が起きた証拠ですわね」

先生の報告に、朱乃さんも眉を顰めてそう漏らした。

ソーナ先輩が顎に手をやりながら言う。

「恐らくですが、聖杯に関与した件で『禍の団』の介入があったのでしよう。——  
ツエペシユは『禍の団』に裏から支配されていたとみて良いと思います」

『禍の団』——ユーグリット・ルキフグスが率いる現『禍の団』が、滅んだ邪龍を連れていける以上、生命の理を司るといふ聖杯を持つ吸血鬼側と繋がっている可能性は、極めて高いだろう。

これは俺も報告を受けていて、この見解は先生、ソーナ会長、各陣営の方々の方々の共通してそう考えたとの事だ。

『ああ。裏で『禍の団』が手引きしたんだろうな。それについてはカーミラ側も同意見

だ』

先生も面白くなさそうにそう言うのと、一息おいて続ける。

『…元々、吸血鬼の連中はツエペシユもカーミラも他の勢力との接触を避けて、内々に独自の内政を行っていた。だからこそ、『禍の団』もそこに付け入る隙があつたんだろう。内部に現政権を疎む連中なんざ、どの勢力にも必ず一派はいるもんだ。聖杯の噂を聞き、そいつらを通して裏からじわじわと侵食していったんだろう』

「…反政府の過激派の動きに気付いても、現政府側は他に助けを呼ばなかつたって事か」  
『何処までも閉鎖的な連中だな』

俺がそう言うのと、ドラゴンは呆れたように毒づいた。

『…吸血鬼特有の誇りとやらを重んじた結果だろう。奴等の中では自分達こそ至高の存在、他は掃いて捨てるだけの劣等種、だろうからな』

『或いは、聖杯の存在を意地でもほかの勢力に漏らしたくなかつた…そんなところだろう。つっ—訳でツエペシユの本拠地が気がかりだな。俺と立神はカーミラの根城からあつちに向かう予定だ』

立体映像の先生は、改めて俺達を見回す。

『——お前達を召喚する事になる。てなわけですぐに飛んできてくれ。リアス達と合流しつつ、ツエペシユ側の動向を探らなければならん。お前達の戦力が絶対に必要

だ。何せ、ツエペシユの反政府グループ以上に危険な者が関与しているだろうからな」  
 「言われなくても、直ぐに向かうつもりです！ 主を、仲間を絶対に見捨てない——  
 それが俺達のポリシーですから」

俺が拳を叩くと、オカ研部員全員が力強く頷く。

『だが、この街に待機している戦力が殆どで払うのは拙い気がするぞ』

『ドライグの言う通りだ。そこは一度襲撃を受けている事を考慮して、こちらに来るのはグレモリー眷属とイツセー、イリナだけで良いだろう。シトリー眷属とグリゼルダ、ジョーカー、「刃狗」の鳶雄はその街に待機してもらおう』

確かに先生の言う通りだ、同じ愚を犯す事はないだろうけど、もしもと言う事もある。先生の指示にシスターも応じる。

「了解しました。デュリオ、この街へ来て早々で申し訳ないのですが、守備に徹してもらいます」

それを聞いたジョーカーは、拳手してこんな事を言つてのけた。

「俺が行つてツエペシユの町後とあれた天候で閉じ込めても良いんすけどね、やっぱ駄目っすか？」

『……冗談にしても笑えんぞ。お前の神滅具の事を考えたら』

……ごく短い期間の付き合ひだけ、この人がイリナ以上に天然と言う事は既に承知

の上だ。

あのドライブグがツツコミに回るレベルで、だ。

「その物言いだと本気でやりかねそうなんすけど」

「貴方は天界と吸血鬼の関係を悪化させる気ですか、全く……」

『文字通りの「ババ」になるな、それだと』

シスターがデュリオの額を小突く傍ら、ドラゴンがポツリと美味しい事を言っていた……ちよつと「おお」つて思ったのが悔しかった。

『こちらも重要だが、そちらも重要だからな。神滅具の所有者が複数いる以上、そつちとこつちで分散させた方が良いだろう』

「……もしかして、他に神滅具の使い手がいるんですか？」

俺の問いに先生は頷いた。

『ああ、ヴァーリが吸血鬼の領内に潜入している。……三大勢力の中では、ヴァーリチームに関しては味方と捉えて良いのではないか？という意見もある。実際最初の会談以外で目立った妨害活動をしている訳でもないし、何より『禍の団』から追われているからな』

「難しい立ち位置っすね……」

俺んちにも普通に訪問してらるぐらいだしな。

そう思っている俺の横で、ソーナ先輩が挙手した。

「いい機会です。グレモリーの皆さん、うちの新人に名を連れて行ってもらえないでしょうか？」

「ベンニーアちゃんと……もう一人ですか？」

そう言えばもう一人いるって言ってたな……まだ面と向かって会ってないけど。

「イツセー君と対面できるいい機会ですし、何より彼等はまだ悪魔としての戦いが経験不足な面があります。それに今回の一件では、彼等の力が役立つ可能性も高いと思いますので」

『経験値稼ぎか。確かに実践の方が実力つてのは磨かれやすいからな』

ベンニーアちゃんは死神だけど……もう一人の方は俺は知らないんだよなあ。

以前の魔法使いとの抗争の時に見かけた、大男の事なんだろうけど。

「ソーナ先輩が言うのなら、構わないですよ。それに俺の方は眷属がまだいないですから」

黒歌は投入できるとして、グレイフィアは依然審問にかけられている。

グレモリー眷属とイリナ、吼介がいる以上は過剰戦力になるんだろうけど、『王』が無防備なものも如何なものだしね。

「でしたらイツセー君に彼等は任せます。存分に使ってあげてください」

「はい」

これは背筋に力が入るぜ、先輩の大事な眷属に怪我とかさせれないからな。

『それで『王』が大怪我負ったら元も子もないだろう』

『ま、あんまり肩肘は張るなよ。レイヴェル、今回は流石にそこに残れ。今回は客分扱いのお前さんが立ち会うには辛い局面だ。いくらイツセーのマネージャーと言ってもテロリストが潜伏するであろう場に連れ出す訳にもいかない。分かってくれるな？』

レイヴェルも先生の言葉に素直に頷く。

「はい。心配事もありますけれど、兵藤家と駒王学園はお任せください」

本当に聞き分けの良い子だよ、レイヴェルは。

厄介ごとに巻き込まれるのはよくあるけど、俺が招いている可能性もある以上、申し訳ない部分が大きいんだよな。

それで怪我をさせちまったら、俺はライザーに顔向けできないからな。

『それと、イツセー』

「はい」

『この地で散発的に——ファントムらしき怪物を見かけた』

「っ」

…吸血鬼の領内にもいるのか。

『…おい、ファントムとは吸血鬼からも生まれるのか?』

『知らん。基本は人間から誕生するのがファントムだ。例の人造ファントムではないのか?』

「…けど、人造ファントムがいるって事は、奴等が関わっている可能性がある。放つては  
おけない」

それに、解決すべき事態が一つ増えただけさ。必要以上に気に負う必要はない。

『——詳しい事は現地で話す。準部が出来次第、こちらにジャンプしてくれ。カ—  
ミラ側に受け入れ用の転移魔方陣を敷く。状況開始だ』

——はい!!

————

ルーマニア・吸血鬼領内にある山奥の更に深淵。

『さあ来い———ウイザード』

ファントム・ガルムが、周囲に蠢く影のようなファントムを従えてイツセーを待ち受



ける。

『……………私が、『赤』となる』

それだけでなく、漆黒の魔法使いの到着を今か今かと待ちわびていた。

——デイスペア・ウイザードもまた、イツセー

## MAGIC174 『クーデター撲滅イベント』

各々が出発の準備を進める中、俺は一組の男女と挨拶を交わしていた。

「ルガールだ……今回の間だけ、宜しく頼む」

《ではあつしも改めて……死神・ベンニアです。ウイザードラゴンの旦那の元で戦えるたあ、一生もんの宝ですぜ》

今回同行する事になったソーナ先輩の眷属、死神の『騎士』ベンニアちゃんと——大柄の男性、ルガールさんだ。

ルガールさんはソーナ先輩の新しい眷属の一人で、『戦車』の駒を与えられている。しかもこの人、駒王学園大学の人なんだとか。

つまり先輩にあたるって訳だ……悪魔としては俺の方が一応先輩にあたる訳だけど、そこはちよつと複雑な関係と言う事で。

『ルガール……か』

? ドライグ、ルガールさんと知り合いなのか?

『いや、何処かで聞いた名だと思ってな。……気のせいだろう』

「ふーん」

『…相棒は『王』となつてまだ日は浅い。眷属もロクにいないし、お前達の『主』に比べると頭も足りてない。ぶつちやけバカだ』

「おい」

お前いくらなんでも酷過ぎね？

『だがそこは新人故のハンディとして飲み込んでくれると助かる。……相棒をサポートしてやってくれ』

「…出来る限りは、尽くそう」

《あつしもそのつもりですぜ》

二人はドライグの頼みにも心強く答えてくれる……有難い。

「…改めて、兵藤一誠です。暫く二人の主として、存分に使わせてもらうので、そこんとこは宜しく！」

「ああ」

《ういーつす》

と、挨拶を終えて準備に戻つた俺の元に、来客がやつて来た。

「よつす、兵藤」

「匙……見送りに来てくれたのか」

匙は「ああ」と言つて、俺の部屋の椅子に腰かける。

「…ヴァンパイアがクーデターか。色んな事が起きるな」

「全くな。ホントなら平々凡々と生きてたいもんだぜ」

「……」

「何だよ」

俺がそう言うと、匙は酷く微妙そうな顔をしていた。

「…いや、俺が言うのもただけどさ。ドラゴンなんてもん宿してる時点で、平々凡々と無理なんじゃないかって」

『『確かに』』

「言うなよ、気にしてんだから」

それと同意するなお前らも。半分はお前らが原因だと思つてるんだからな！

「ま、それならそれで何とか生きていくよ」

「…ギヤスパ―君の秘密について、訊きに行こうとしたんだよな？」

「ああ……それどころじゃなくなつたけどな」

肝心のヴァンパイア家との交渉は順調に言っているとの事だけど……。

「…そうだ。兵藤から見て、新しい眷属の二人、どうだ？」

「んー、そうだな。……癖の強そうな面子だなんてのは、何となく」

方や死神、もう片方は良く分からないけど不思議な力を感じた……何となくだけだな。

まあ、先輩の事だから、もう既に他の眷属とのコンビネーションとか考えてそうだけど。

「実はさ、シトリーの方は結構重要な件が本格的に動き出そうとしてんだ」

「？」

「会長が出資した学校の建造だよ。今度、正式に着工する事になってさ」

学校……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～

「すげえじゃん！先輩の夢の足掛かり——上級も下級も関係なく平等に学べるための学び舎、だよな？」

夏休みの折、そう恥じる事なく堂々と宣言したソーナ先輩の姿は、今でもはつきりと覚えている。

「ああ、第一号が漸く、な。サイラオーグの旦那も協力してくれていたから、これでも大分計画は早める事が出来たんだぜ？」

サイラオーグさんも……いや、あの人の境遇を考えるなら、協力したっておかしくはないか。

寧ろ、喜んで協力を惜しまないだろう。

「次以降の学校の建造はまだ先になりそうだけど……。それでも、階級関係なしに広く募集し始めていてよ、魔力に乏しい子供達も受け入れようって話になってる。もう、親御さんたちが子供を連れてきてさ、入学をお願いしてきてるんだってよ」

匙はそれを嬉しそうに話すが：何故だか、語気に勢いがなかった。

「……俺さ、冥界の学校の教師になるのが夢だって言っただろ？ でも、いざ現実味を帯びた話になってくると、怖くなつてさ……。もし、その学校が立つたら、将来ちゃんとした教師になれつかなくて……。最低でも、中級悪魔にならないとあつちで教員の免許が取得できないって言うんだ。俺、まだ下級だし……。さ」

その姿は、何時も気合を入れて学園を駆け回っていた生徒会役員の匙元士郎とは思えないほど気弱な独白だった。

……いや、この姿が、本来の匙なのかもしれない。

匙は頬杖をついて、息を吐く。

「つーか、子供達に何を教えて良いかさえ分かんねえしさ。サイラオークの旦那は、魔力の乏しい子供達に体術を教えて張り切ってる。俺……。何を教えられるんだらうな……」

匙は悩める眼差しのまま、自分の掌を見つめる。

「神滅具所有者との合同訓練でも俺は……禁手に至れないヘタレだしさ」

……匙が言った通り、俺達は合同でジョーカー・デュリオや刃狗・幾瀬鳶尾さんと早速トレーニングをしたんだ。

使い手であるデュリオと鳶尾さんは噂以上の能力を見せてくれて、俺もかなり苦戦させられた。

っていうか三人とも本気になりかけたせいでストツプがかかったほどだ。

『あの時のお前は、柄にもなくスイッチ入ってたもんな』

ホントにな……だんだんヴァーリに毒されてきてんなア、俺も。

……その中で匙は俺達とのトレーニング（ちゃんと実力は調整して）に付き合ったものの、禁手には至れなかった。

「……なあ匙」

「ん……？」

匙は力なく顔を上げ、俺の方へと視線を寄こしてきた。

「お前、先の事ばかり考えすぎ。まだ先生になれるって、完全に決まった訳じゃないんだろ？ だったら焦る必要なんてないと思うぜ？」

「……けど」

「未来ってのは、俺達の歩みによって組み上がっていくもんだ」

匙は黙って俺を見続ける。

「先ずは教師になるために頑張る。それで良いじゃねえか。何を教えられるか、なんてその時になったら案外浮かんでるかもだぜ？ それに——戦う事だけを教える訳じゃないだろ、先生ってのは」

「……」

「お前がこれまで、この先の未来で感じた事、大切にしてほしい事、そんな些細な事だつて立派な教育になるんじゃないか？……だつてさ、俺達だつて大人からそう言うのを学んで、ここまで育ってきたんだしさ」

俺の言葉に何かを感じたのか、匙の顔から陰りが薄くなった。

「確かに、戦う術は大事だし、それを教える事も同じく大切だ。けど、それは人それぞれだ。力が足りないなら、その他の事を教えて行けば良い……誰も同じじゃないんだ。自分が学んできた事、自分がオンリーワンだと思える事、それを後世に伝えていく……それで良いじゃんか。それにっ」

俺は立ち上がつて匙の傍まで行くと、バシツと背中を叩く。

「いつ!?!」

「何かを教えたい、教師になりたい——そんな立派な夢を持ってんだ。だつたら、答えは何時か必ずお前の中に芽吹くよ。だから地道に、気合を入れて真つ直ぐ突つ走れ！」



…何時もみたいに、さ」

匙は呆気にとられた顔をしていたが、直ぐに頭を下げてきた。

「…ありがと、兵藤。そうだよな……今焦っても、仕方ないよな。どうにも、最近焦つてさ」

「匙」

「何だ？」

「俺は俺だ。そして——お前はお前だ……忘れんなよ」

俺は荷造りに戻りつつ、そう言つてやる。

……匙。俺に憧れてくれるのは嬉しい。でも、それで自分の事を卑下しないでくれ。

お前にはお前の良さがあるんだから……俺の真似なんかして、折角のお前らしさを、潰したりすんじゃねーぞ。

「……今度、学校見に行つても、良いか？」

「つ、ああ、皆一緒に身に来てくれよ！ 兵藤達が訪れる頃には良い感じに工事も進んでるだろうからさ」

「楽しみにしとくよ」

「おう！……だから、必ずリアス先輩を連れて帰つて来いよ。ギヤスパ―君の秘密も

探ってさ」

「ったりめーだろ」

誰も欠けずに帰る——大丈夫、俺達はまた笑顔で暮らせるさ。

「……そう言えば」

「ん？」

「兵藤の夢って、何なんだ？」

……。

「……今は、フアントムを倒す事……かな？」

「……そっか。でも、それって今後も続くって訳じゃないだろ？ 何か無いのか？ やり

たい事とか」

「……特にねーな。レーティングゲームで勝ちあがる、ぐらいかな？」

……俺の夢、か。

『まだ引きずってんのか、相棒。——あの事を』

『……さあな』

——

さて、身支度も終わつたと言う事でルーマニア出発組が地下の巨大魔方阵の中央に集結していた。

この魔方阵のジャンプ先は直ぐにカーミラの領土だ。何でも現地までの複雑な経路を行かなくていいように、直接あつちの本拠地の転移魔方阵の展開が出来るよう先方が配慮してくれたんだとか。

……だったら最初からやれよって思わなくもないけど、今回は緊急の召喚だ。

吸血鬼側も危機感を持ったからこそ、特例として俺達の本拠地への直接転移を認めただろう。

「吉報を待っています。ベンニア、ルガルルさん、イツセイ君たちのフォローをお願いします」

《合点ですぜ》

「…ああ」

会長の言葉に偉丈夫と死神っ娘が応じる。

「黒歌、俺の眷属になって初めての仕事兼社会奉仕だ。頼むぜ」  
「了解にゃん」

黒歌は不敵に微笑む……うん、大丈夫そうだな。

「イツセー様……」

「心配しなさんな、レイヴェル。皆一緒に帰ってくるから——」

俺は心配そうな面持ちのレイヴェルを安心させようと言葉をかけたが——

「ハンカチとティッシュはお持ちになられましたか？ あちらで書類や色紙にサインを求められる事もあるやもしれませんから、ペンも常に懐にしまっておいてください。後、ブレスケアと歯ブラシも何時でも使えるようにしておいてください。有名人は歯が命です！ 赤龍帝ハードスケジュールなのでですから時間は有効にお使いくださいましね。それとですね——」

「母ちゃんか!!」

事細やか過ぎるって！ 遠足に行く前の子供ですか!?

「だ、大丈夫だって。心配性だなあ……」

「それもしようがないと思うけどねん」

「シヤラツプ、黒歌」

何てやり取りをしていると、レイヴェルは小包を一つ渡してきた。

「これは先程お兄様から届いたフェニックスの涙ですわ。中に三つほどあるそうです。イツセー様がルーマニアに行くと思ったら急いで送ってくださいました」

「お、おう……」

野郎からの特急宅配便とか、どんな顔して受けとりやいいんだ……？

つつーかこういうのはリアスに送った方が良いだろ！ リアスここにはいないけどな！

「んじやルフエイ。この家は任せたにやん」

「はい、お任せください。あ、向こうでヴァーリ様や兄に会う事がありましたら、よろしくお伝えくださいませ」

「おう」

ルフエイちゃんにそう頷いておくと、今度はオフィスが俺の裾を引っ張ってきた。

「どした、オフィス」

「イツセー、気を付けて。邪龍はしつこいから」

「……ああ」

…予感だけど、俺達は邪龍と遭遇する気がする。

恐らくはオフィスもその予感を抱いてるんだろう……外れてほしい事を祈るばかりだ。

「よっし——オカルト研究部、いぎルーマニアに向けて……飛ぶぞ!!」

朱乃さんが操作する転移魔方陣は一層光を強め、弾ける。

向かうは吸血鬼たちの根城！

歴史の課外授業だぜ！！

## MAGIC175 『吸血鬼の国』

転移が終わった俺達の視線の先には——見知らぬ広い空間が広がっていた。

「よう、来たか」

「おっすー！」

聞き覚えのある声がしたのでそちらを向くと、アザゼル先生と吼介がいた。  
「無事そうで何よりっす、先生。吼介も無事で何よりだ」

「ああ。早速で悪いが移動するぞ。詳しくは車の中です。エルメンヒルデ、案内を頼む」

先生がそう言うと、傍らから姿を現したのは以前出会った吸血鬼の少女だ。

「——かしこまりました。皆さま、カーミラの領地までよくぞ起こしになられました。……手前どもはギヤスパ・ヴラデイだけで宜しかったですが……」

「そう言いなさんなよ」

相変わらず刺々しい対応ですこと……そう言ってられる状況かってんだ。

俺の発言を無視しつつ、彼女は淡々と続ける。

「到着早々で申し訳ございませんが、車まで案内致しましょう」

その発言に従いつつ、俺達は転移した部屋を抜け、地上へと出た。

「どうやら地下だったらしい、だから肌寒いかと思っていたが——外は深夜、そして一面の雪景色だった。」

『四季は同じでもルーマニアの方が寒いというしな。しかも人里離れたこの山奥だ。気温は日本より低いのもやむ無しだろう』

「寒いな……」

エルメンヒルデは……白い息すら吐いちやいない。

これも純血の吸血鬼故なのかねえ……うちのヴァンパイアはと言うと。

「さ、寒いですよ……」

震えてらっしやる……純血とハーフってこういうところにも違いが出るんだな。

「ひゃー、やっぱ日本より寒いにゃん」

「はい、寒いです」

アーシアと黒歌も寒そうだ……黒歌なんてちゃんと和服着て仙術で保温してるだろうにも拘らず、だ。

それにしても……こんな山奥だつてのに立派な城下町があるのは驚きだな。

しかも周囲は雪山だらけの絶景ときたもんだ。



『閉塞的な吸血鬼の生態を現しけると言えるな』

「お前なあ……」

相変わらず吸血鬼嫌いなものな、絶対に発声すんなよそれ。

ゼノヴィアは雪景色の城下町を見ながら呟く。

「あれが教会が長年探し求めていた吸血鬼の本拠地か。教会の戦士だった頃は、尻尾すら掴めなかったのに、まさか悪魔になってからここへ来られるなんてね。ふふ、皮肉も相当効いてるよ」

確かに、でもそれだけ情勢と勢力図が変貌したって事だろうか。

俺達は監視用の塔から出ると、彼等が用意した荷台のワゴン車に分乗して乗り込んだ。

運転手は先生とロスヴァイセさんだ、因みにロスヴァイセさんはちゃんと運転免許を取得してるぜ。

「……………悪魔の趣味は理解出来ませんわ」

エルメンヒルデを始め、吸血鬼達がルガールさんを見た時の反応が驚きだった。

『…胸糞わりい眼付きだな』

ドライグの言う通り、全員が嫌悪と畏怖に満ちた顔でルガールさんを見ていた……一体何だっただけ？

そんな事がありつつも、俺達はカーミラの吸血鬼に別れを告げて出発する。

「——っ！ ツエペシユの新たなトップが……ヴァレリー!？」

先生からの説明に俺達は驚きを隠せずにそう叫んだ。

クーデターが起きた以上、トップが変わるのはある程度予想してたけど……まさかそれが、ギヤスパアの恩人かよ！

「ヴァ、ヴァレリーが……!？」

俺達も驚いたけど、ギヤスパアはそれ以上に狼狽していた。

そりゃそうだ……救おうとしてた自分の恩人がツエペシユのトップになってるなんて、予想できるかよ！

「男性の真祖を尊ぶツエペシユ派のトップがハーフ、しかも女性だなんて……かなりの事があちらで起こっているのは明白ですわ」

朱乃さんがそう言っているけど、それもそうだ。

純血であることに過剰なまでに固執するヴァンパイアがハーフの子を王に据えるなんて、普通有り得ないからだ。

『禍の団』が裏から奴等を誘導してそう言う状態を作り出したんだろう。『禍の団』と手を組んでいるのは、ツエペシユの反政府グループだ。現政権への不満と、聖杯による『弱点克服』の恩恵に目がくらんで、テロリスト共の甘言に乗っかっちゃったんだろう。

強化した吸血鬼をカーミラ側にぶつけていたのもそいつらだ」

：向こう、スゲエ混乱してんじやねーのか？ リアス達は大丈夫なのか？

「流石にツエペシユの政府側もテロリストと結託した反政府グループには対処できなかったのか、カーミラの元に援助を求めて来たのさ。ツエペシユの王に借りを作るのはカーミラとしても願ったり叶ったりだろうからな」

先生が息を吐きながら続く。

「んで、通信でも言ったが……俺はツエペシユの方も気がかりになったから行くことにしたって訳だ。流石に俺だけじゃ何ともし難いもんでな。リアス達を迎えに行くのも含めて、お前達を緊急に召喚したって事だ」

成程ねえ……納得は出来る話だ。

「結構大事になりそうだが、イツセー。何せカーミラ側も今回のクーデター鎮静に参加するらしいって話だからな」

「マジでか……？」

「大マジだ。一応話し合いって体だが、戦闘の事も頭に入れておけ。城下町の周囲には既にカーミラのエージェントが配置されつつあるからな」

つまりその真ただ中に飛び込んで内情を探りつつ、場合によっては中央突破しなきゃいけないって事か……気を引き締める俺を余所に、先生は忌々しそうに眉根を寄せ

ていた。

「……あの野郎が関わってるなら、高い確率でろくでもない事になる」

「あの野郎？」

『どの野郎？』

「……いや、まだ確定事項じゃないからな。この事はあまり考えなくても良い」

……気になるな、先生がこんなに嫌そうな顔をするなんて。

『気にはなるが、今はこのクーデターをどうにかする事を優先すべきだろ』

『それもそうだな』

それにろくでもない事も起きるであろうというのも承知の上でここに来てる。

覚悟は出来てますよ、先生。

「…ハッ。変に若い連中がこの手の荒事に場慣れしちまうのも頼もしいやら申し訳ない

やら。——俺達はリアスと木場と合流次第、あわよくばヴァレリーを連れだせばい

い。後の始末は吸血鬼連中がうまくやってくれるだろうさ」

「うっす」

先生が苦笑いしながらそう言う中、ギヤスパは強く意気込んでいた。

「ヴァレリーは僕が……！」

「あんまり毛負い過ぎるなよ？ みんな一緒だ。だから遠慮なく頼ってくれよな」

「はいー」

随分強い男の子になって来たじゃねーか、ギヤスパー！

そうこうしてる内にワゴン車はツエペシユとカーミラの領土を繋ぐ巨大な橋を抜け、とある山の中腹にあるゴンドラ乗り場に到着した。

「ここがカーミラ側が確保できたツエペシユの城下町に続くルートの一つなんだとよ」「へえ……何かかなり境界敷いてるけど通れるのか？」

「特別製らしいぜ。カーミラ側の大使さんが言うには」

雪山を眺めながら吼介の説明を聞いているが……全く景色変わんねえな。

しかも真つ暗だし、退屈が更に助長されてく一方だ。

そんな中、ちよつと珍しい行動をしてる奴がいたので話しかける事にした。

「ゼノヴィア、何してんだ？」

「ん？ ああ、これは単語帳だよ。日本の難しい文字、漢字を覚えるためのものだよ」

「どら……ホントだ」

見せてもらったが、確かに文字だ漢字だが書かれていた。

「……お前、そんなにテストの結果悪くなかったる？」

「国語だけは苦手だけどね」

「それでも平均点は越えてるもんない」

吼介がからからと笑うが、実際ゼノヴィアの……と言うかオカ研メンバーは俺以外の全員が成績優秀だ。

え、俺？……ある程度の計算できてある程度漢字が読めりやそれで良いんですう。

「やりたい事が出来たんだ。その為にも知識が必要になつてね、必死に覚えているところなんだ」

そりや殊勝なことって。……裸でエロゲしようとか誘つてきた奴と同一人物とは思えんな。

『僻みか？』

『ある種の妬みもあるんだろう』

『……あー、そうか』

うるへえぞお前ら。

「実はゼノヴィアさん、学校の行事にとでも関心を示すようになりまして。…学生という立場をもっと堪能したいと仰つてるんですよ」

「へえ……ま、元々学校に通つてなかつたもんな。それに楽しそうだもんな、アイツ」

「はい」

アーシアが微笑んで肯定する通り、ゼノヴィアは学校の行事イベントに毎度楽しそうに参加している。

体育祭も学園祭も、全身全霊で楽しんでるんだ。

行く末は生徒会かな？ そう思っている俺の傍で、イリナがゼノヴィアに進言した。

「うふふ、私で良かったら日本の言葉を教えてあげるわ」

「遠慮しておこう」

うお、バツサリ断った。

「イリナの日本の知識は怪しい所が多々ある。独学か、リアス部長や朱乃副部長やイツセーに訊いた方が確実だ」

「な、何でよ！ 失礼しちゃうわっ！」

イリナの抗議の声を無視して、ゼノヴィアは嘆息する。

「この間、盛大に四字熟語の意味を間違っていたじゃないか。——『弱肉強食』、弱者でも強者でも平等に焼き肉を食べられる権利を持つ、と堂々と公言していたが全く意味が違うそうだが？ 他国でも同じような言葉があるというのになぜ故国のだけ間違えるんだ……」

「うわあ……」

俺と吼介は揃って引いた声を出してしま……そりゃ酷いぞイリナ。

『相棒ですらちゃんと意味理解してんの……』

『自称日本育ちというのも些か虚言でもなさそうだな』

「イツセーの相棒たちの言う通りだな……自称『日本育ち』か」  
『『そりゃ酷い』』

また称号が増えたな、イリナ。

でも今回は全く擁護できんからすまん、幼馴染よ。

「じ、自称じゃないもん！ 日本で生まれて育ったもん!!」

「はいはい分かったよ。焼肉定食のA」

「うわーん！ ゼノヴィアがいじめるわ、アジアさーん!!」

アジアは苦笑いしつつイリナを宥める。

「え、えーと……今度イツセーさんに日本語の勉強教わりましょうね。イリナさん」

「アジアさんまでえ!!?」

おおっと、アジアちゃんの天然カウンター炸裂。イリナは崩れ落ちたぞ！

「うふふ、微笑ましいですわね」

「そつすね」

「IQ下がって来てる気がするにや……」

黒歌はげんなりとしてる横で朱乃さんは楽しそうに見つめていた。

「朱乃ちゃんは楽しそうにや……楽しいの?」

「ええ。気持ちか穏やかになりますから」



「そうつすね。…ああいう笑顔のさせ方もあるんだなって思いますよ」  
「ふくん……」

黒歌は素つ気なく頷くと、そのまま外の風景に目を向けた。

「そう言えば朱乃さん」

「はい」

「シトリー出資の学校が建てられるって知ってました？」

「ええ。ソーナ会長から聞いてますわ」

ああ、リアスとソーナ会長の親密さからすれば聞いてて当然か。

それを聞いていたロスヴァイセさんも会話に参戦する。

「私も聞きましたよ。会長さんから将来的にその学校の教師にならないかとオファーを  
いただいたほです」

「凄いいじゃないっすか！」

それは知らなかった！ まさか教師のオファーとは……！

「それで、どう返事したんすか？」

「…まだ考え中です。断る理由もなかったものですから。確かに駒王学園で教員になつて教職というもの——人にものを教える事が楽しいと思えているのも事実ですからね。今度、その学校が立ったら一度見学に行こうと思います。その為にも今回の事件

が穩便に済めばいいのですが……」

…確かに、シトリー眷属が出資した学校に行くにも、まずは今回の事件を解決しなきゃいけないよな。

「じゃあ、猶更みんな無事に帰りましょう。その学校を見に行くために」

「ええ。勿論です」

「……そう言えばさ」

そのやり取りを景色を見ながら聞いていたのか、黒歌が口を挟んできた。

「どした？」

「イツセーの将来の夢って、何なの？」

「…そう言えば、聞いた事がなかったね」

「私もです！」

黒歌のその発言に、アーシアやゼノヴィアと言った面々も参加してきた。

「……………」

皆が興味深そうに見てくる中、俺は何と言えいいか分からず、口を噤んでしまった。

「イツセー君？」

「……あ、えっと」

『…どうやら到着するみたいだぞ』

と、ここでドライブが気を利かせてくれた？お陰でみんなの興味がそちらへと移った。

視線の先には確かに、ゴンドラ乗り場があった。

つて事は向こう側はもうツエペシユの領内か……。

『……ドライブ、サンキューな』

『俺あこういう時の為にいるんじゃないんだがな』

――

ゴンドラから降りた俺達を出迎えたのは、数名の吸血鬼だった。

「アザゼル元総督と、グレモリー眷属の皆さまですね？ 我らはツエペシユ派の者です」

俺達は頷いて肯定する。

それを認識して、彼等は此方を招き入れる姿勢でこう言った。

「こちらへどうぞ。リアス・グレモリー様はツエペシユ本城でお待ちです」

本城？ てつきりヴラデイの家にいると思っただが……。

『本城に連行されたのかもしれないな』

『だとしても何のために？』

『さあな』

心チャットをしているうちに、俺達は馬車の元へと連れていかれた。

……因みにこの時点でルガルさんとベンニーアちゃんはいない。

これに関してはこちらに来る前に予め予定していたのだ。

二人は独自に行動——市街の様子を探るのと、いざつて時の為の脱出ルートの確保、この二点の為だ。

だけど音もなく、ツエベシユの吸血鬼に気付かれる事無く行けるとは……こりやかなり期待のルーキーだな、ソーナ先輩。

『吸血鬼の連中も今頃気付いたらしい。だが、それでも俺達を連れて行くだろうな』  
『何で分かるんだ?』

『領内まで入れた以上、ここへ来て門前払いというほど余裕はないだろうからな。何しろクーデターの真つただ中だ。自分達の事で手いっぱいだろう』

成程……おお、馬車に案内させられた。

リアス、木場……待ってろよ。

## MAGIC 176 『聖杯の女王』

「イツセー、皆ー！」

ツエペシユの城へと連れてこられた俺達は、暫し待たされた後にリアス達と漸く再会できた。

「リアス！……無事みたいだな」

俺が安否を確認すると、リアスは頷いた。

良かった……何もされてなくて。

「クーデターの事を察知したのね、アザゼル」

「ああ。何かあると思ってこいつ等を召喚させてもらった。文句なら後で言ってくれよ？」

先生の言葉にリアスは首を振る。

「文句は言わないわ。私もどうにかして皆を呼ぼうと思ってたから。……ただ、この城に軟禁されていて、どうにも動けなかったのよ」

リアスが言うには、王に招かれたにしては今の今まで謁見は出来ず、ついさつき俺達

が来た事を知らされて来たんだそうだ。

「お前も無事みたいで何よりだぜ、木場」

「うん。警戒していた割には、僕と部長には火の粉が掛からなかったよ」

「それだけ内部の情勢が切迫してゐるって事ね。ここに来るまでの道中も、びっくりするぐらい静かだったし」

黒歌の言葉はもつともだった。

この城に来るまでの途中の町並みは、クーデターが起きたとは思えないほど静かだったし、住民だって普通に街を闊歩していた。

先生曰く、「住民に知られないように最低限の行動でクーデターを成功させたんだろう」との事だ。

……内部からも裏切り者が結構出たんだろうな、と俺でも何となくだけ察せた。でなきやそんなスムーズにクーデターなんて成功させれないだろうし。

「……イツセー、一つ聞いても良いかしら」

「ん？」

「何で黒歌がいるの？」

「ああ、実は——」

「イツセーのお嫁さんの一人になっちゃったの♪ これからよろしくねん♪」

黒歌は俺の腕に抱き着きながら笑顔でそう言い放った。

「え……」

「えーつと、俺の眷属になりました、た……ハハ」

「——えええええ!!」

俺の発言にリアスと木場はめったに出さないであろう大声で驚きを露にした……あの、びつくりする気持ちは分かるけど、ここ他勢力の城だからね？

「つていう経緯で、眷属になったんだ」

「所謂社会奉仕ってヤツにゃん」

直ぐに落ち着きを取り戻した二人に俺は改めて事の経緯を説明した。

「そう……だったのね」

「別にアンタが気にする必要なんてないわ。……これからは大船に乗ったつもりで任せにゃさい」

「そう、ね……これからは頼りにさせてもらおうわ」

…悪魔であるリアスからすれば、同族が起こした事件が原因と言う事もあつて罪悪感もあるんだろう。でも黒歌は気にする必要がないと朗らかに笑った。

「小猫ちゃん、良かったね」

「……は？」

木場の言葉に小猫ちゃんも嬉しそうにはにかむ……うんうん、仲良きことは美しきつてやつだな。

「……で、肝心の王様との謁見はまだできないのか？」

「——いや、どうやら漸くらしい」

先生が両開きの扉を見据えていたのでそちらを見てみると、扉の両脇にいた兵士が俺達へと近づいてきた。

『役者がそろったからと言う事か』

「……では、新たな王への謁見を——」

どうやらドライグの言う通りらしく、彼等は巨大な両開きの扉を開けた。

先生が先、次いでリアス、その次に俺達という配置で扉の奥へと進んでいく

広大な室内の床には真っ赤な絨毯が敷かれ、その先には——玉座が一段高い所に置かれていた。

玉座に腰かけてるのは若い女性とその少し離れた位置には側近っぽい感じの若い男性も列席している。

……やっぱり血の気のない顔だ。端正な容姿だけど、血の気のないせいで人形のようにも見える。



……意外に数が少ないな。

『これだけの数なら、確かにあつきりクーデターも成功させられそうだな』

それに他の勢力から距離を取っていた吸血鬼の根城だからこそ、『禍の団』の協力もあつて簡単に計画を達せたんだろう。

つと、玉座の前だ。姿勢を正さないと。

玉座に座る女性は砂色の強いブロンドの髪を一本に束ねた優しそうな雰囲気的女性だ。

端正な顔立ちだけど、エルメンヒルデのような人形染みた生気のない感じもなく、ちやんと人間味もある、まさしく美女と呼べる女性だった。

この人がハーフだからだろう、吸血鬼と人間の両方の美しさを持っているのだろう。

だけどその人の赤い双眸は——酷く虚ろだった。

生気ある輝きを失った正気を感じられない虚ろな眼差しのまま、女性は俺に挨拶をくれる。

「(ぎげんよう、皆さま。私はヴァレリー・ツエペシユと申します」

『…痛々しいな』

同情を滲ませたドライグの言葉通り、彼女の微笑みは儚さと痛々しさが滲み出てい

る。

それに視線はかなり臆気で、この場の誰をも正確に視界に収めてはいないだろう。

……いや、唯一見知った者を捉えて視線を定めた。

「ギヤスパー、大きくなつたわね」

見知った者——ギヤスパーに話しかけるヴァレリー。

話しかけられたギヤスパーは……彼女の状態を把握して悲痛な感情を露にした。

だがそれでもギヤスパーは、無理矢理笑顔を作った。

「ヴァレリー……会いたかつたよ」

「私もよ、ギヤスパー。とても会いたかつたわ。さ、もう少し近くに寄つてちようだい  
な」

ヴァレリーはギヤスパーを招くが、側近の者達はそれを別段止める気配も見せない。

「……元気そうでよかつた」

「うん。……悪魔になつちやつたけど、僕は元気だよ」

「ええ、その事は報告を受けていたわ。あちらでは大変お世話になつたそうね」

「うん、友達や先輩も出来たんだ。もう一人じゃないよ」

そう言うのとギヤスパーは俺達を振り返る。それに釣られるようにヴァレリーもこつちを見て微笑んだ。

「まあ…ギヤスパのお友達ですのね。……あら」  
ヴァレリーはふとあらぬ方向へと顔を向けると、

聞いた事もないような言語を口にして、何も無い空間に話しかけていた。

…何だ、あの言葉は？

悪魔になって全ての言語が共通のものとして聞き取れるようになってるのに、それが全く機能していない。

つまり……この世にはない言葉って事か？

『ひでえな……』

『どういう意味だ。それにあの言葉は何だ？』

『……』

ドラゴンの問いにドライグは黙ったままだ……いや、何を話せばいいか分からないって感じた。

そして彼女の言語を理解できてないのはこの場にいる全員そうらしく、眉根を寄せていた。

何かを話していたヴァレリーだったけど、途端に顔を輝かせた。

「そう、そうよね。私もそう思うわ。え？………けれど、

それはまだ……。——本当？　そうよねえ……。——」

……まただ。また分からん言語が飛び出てきた。

訝しげになる俺達に構わず尚も十二力に話しかけている恩人の姿に、ギヤスパも強い戸惑いを隠せずにいた。

「……お前達、あれを真正面から捉えるな。聖杯に引っ張られる。特にアーシア、ゼノヴィア、イリナ、協会出身のお前達はあれから視線を外しておけ」

……曹操の時と同じか。教会出身の信者を忘我の境地をと至らせる——呪いにも等しい、聖遺物の力。

『なあドライグ。あれって何なんだ？』

『……噂には聞いてはいたが、あれが聖杯を使用した代償か。こればかりは俺よかアザゼルの方が詳しいだろう』

「……あれが聖杯に取り憑かれた者の末路だ。決して見えてはいけないモノが見えてしまふんだよ。……詳しい話は後でする」

先生がそう言った時、俺は不意に何かの視線を感じた……その感じた先には、ヴァレリーが話しかけている虚空があった。

『……相棒？』

ドライグの戸惑いの声が聞こえる中、俺はその場を凝視する。

何もない筈のそこから、確かに視線を感じる——そしてそれは、ナニカは俺をじつと見つめていた。

そして、見えないナニカは俺へと徐々に距離を詰めていき——

『相棒!!!』

「っ!」

俺はドライブの怒声によって、意識が戻って来た…戻って来た?

気付けば全員が俺を心配そうに見つめており、背中には黒歌が掌を押し当てていた。

「陰の気の中てられるところだったわよ、イツセー。気を付けなさいな」

「っ、ああ…ゴメン」

深く深呼吸をして改めてそつと視線を向けると、そこには相変わらず何も見えない。

そして視線も感じない…何だったんだ、今のは。

「ヴァレリー」

すると傍にいた男性が手を鳴らした。

「その『方々』と話し込んでばかりでは失礼ですよ? きちんと王として振舞わなければ

なりません」

男性の言葉に、ヴァレリーも笑顔で相槌を打った。

「うふふ、ごめんなさい、皆さま。でも、私が女王様である以上、平和な吸血鬼の社会が作れるそうなの。楽しみよね、ギヤスパーもここに住めるわ。だーれも貴方や私をイジめる事なんてしないわ」

……誰が聞いても分かる。その発言は彼女の本心ではない、良い様に騙されたものと分かる発言だった。

……クーデターを起こした心無き連中に利用されつくしたんだろう。

神器も、彼女の心も、深く――。

「……ヴァレリー……ッ」

恩人の変わり果てた姿にギヤスパーは涙を堪え切れずに、泣いてしまった。

先生は傍に控えていた若い男の吸血鬼を睨んだ。

「よくもこんなになるまで仕込んだもんだ。それを俺達に堂々と見せるたあ、悪趣味も度が過ぎれば外道のそれだ。お前さん、この娘を使って何をしたい？ 見たところ、今回の件の首謀者なんだろう、お前さんが」

若い男は端正な顔を醜悪に歪めながら肯定する。

「首謀者、確かにそう言うのが適切でしょう。そう言えばご挨拶がまだでしたね。私はツエペシユ王家、王位継承第五位マリウス・ツエペシユと申します。暫定政府の宰相と神器研究最高顧問を任されております。まあ、どちらかと言えば本職は後者の方ですが

……叔父上に頼まれてましてね。一時的ではありませんが、宰相となつております。一応、系図的にヴァレリーの兄でして、ツエペシユの将来を憂いた可愛い妹が王として吸血鬼の世界を変えていくのか、それを見守りたいのですよ」

よりにもよつて王族かよ……しかも、明らかに見え透いた嘘を堂々と喋るんじゃねえつての！

「……こちらがカーミラ側と接触しているのは知つているんだろう？　ここにまで招き入れても良かったのか？」

先生の問いにマリウスは肩を竦める。

「新政府はカーミラだろうと、墮天使の総督様であろうと友好的に交渉していきたくていうスローガンを——ま、半分は冗談ですがねえ」

「言つてくれるじゃねーか……」

先生は静かに言うが、恐らくは内心かなりキてるだろう。

半分煽りみたいなものだろ、これ。

「正直な話、私は別に政治などあまり興味はありません。それに関しては私のクーデターに乗った同士一同に任せるだけです。ただ、今回はヴァレリー女王があなた方に会いたいと仰つたものですし、私もあなた方に興味があつたのですよ。何せ、協力者からよくあなた方のお噂を伺つているものですから」

「……それはこの際置いておくとして、主犯のお前さんに訊こう」

「は……」

「何故クーデターを起こした？ あ野郎の立案か？」

……いきなり核心に触れたか。それを聞いていたツエペシユの吸血鬼達もこのやり取りにはどよめいていた。

先生の問いに、マリウスは別段隠す様子も見せずにごう答えた。

「私が聖杯で好き勝手出来る環境を整えているだけです。ヴァレリーの聖杯は興味の尽きない代物でして、色々と試させているのですよ。はい、本当にそれだけでして。その為には前王——父や兄上達が邪魔でしたので、少々強引に退場していただきまし  
た。『あの野郎』とは、恐らくはあの方の事でしょうが——今回の行動は我々が独自  
に起こした事です」

……つまり、自分の欲求を満たすために国一つを滅茶苦茶にしたのか!?

だがそれを聞いてもヴァレリーは笑顔を浮かべたまま……彼女の心をここまで操つ  
てるつてのか!

今の発言を聞いていた周囲の吸血鬼の貴族たちのどよめきも大きくなった。

「マリウス殿下、それは今ここで話すべき事ではありませんぞぞぞ！」

「……ここは仮にも謁見の間です！ 暫定の宰相ではありますが、それ以上の発言は慎ん



でいただきたい！」

「相手はグリゴリの元総督とグレモリー家の次期当主なのですから、今の発言を総意と取られてしまうと我々の立場がありません！」

マリウスの大胆な物言いに仲間であろう貴族たちが慌てて窘めるが、当の本人は「これは失敬。早く宰相の任を解いてもらいたいぐらいです」と苦笑しつつ皮肉をかます始末だ。

こんな態度を見せる奴を窘めるだけで物理的にも政治的にも抑えられないって、やっぱりこいつが全部を握っているって事か。

こんな外道は久しぶりに見たぜ。

「…酷いです。酷過ぎます」

優しいアーシアには酷だろう、一人の男のエゴで多数の者が不幸に落とされているのだから。

「…ヴァレリー・ツエペシユは解放できないというのね？」

「ええ、当然です」

マリウスはにべもなく言い放った。

「話し合いは無駄だよ、リアス部長」

今まで静かに話を聞いていたゼノヴィアだったが、その顔は今までにない程冷たい表

情を浮かべていた。

ゼノヴィアが何をしようとするのか察したりアスは、ゼノヴィアを手で制する。

「お止めなさい、ゼノヴィア。……相手は宰相よ」

「……ッ！」

今にも斬りかからんばかりの殺意をむき出しにするゼノヴィア……元々吸血鬼にはいい感情を持つてなかつたこいつだ。

マリウスの醜悪さを見て、抑えてた怒りが一気に解放されたんだろう。

だけどゼノヴィア、堪える。彼女の、ヴァレリーの生殺与奪はアイツが握ってるんだ

……！

「怖いですねえ。では、私もボディーパーガードのご紹介をさせていただきます。私がここまで強気になれる要因の一つをね」

マリウスが指を鳴らすと、俺達全員に悪寒が走った——！

『ッ!!』

一瞬で全身が硬直するのが分かった……動けば殺される、本能的に察した俺達はただ一点を睨み付けるしかなかった。

その一点には——黒いコートを着た長身の男が一人、柱を背に預けて立っていた。

金色と黒色が入り乱れた髪に、相貌が金、黒のオッドアイが俺達を捉えたと思うと、視線を床へと移した。

『…まさか、お前がここにいるとはな』

俺の左手に籠手が出現し、ドライグはその男へと語りかける。

男は下げた視線を再び上げ、俺の左手を見つめる。

「……久しいな、ドライグ」

『グレンデルやアジ・ダハーカと同じように、お前も蘇っていたとはな……クロウ・クルワツハ』

クロウ・クルワツハって……滅んだ邪龍の!?

邪龍最強……確かにそうらしい。あのグレンデル以上のヤバいオーラを放ってやがるッ!

今戦つても、絶対に勝てない……そう思わせるだけのプレッシャーを感じていた。

『お前ほどのボディガードがいるなら、確かにクーデターも容易かつたろうな』

「歯応えがなさ過ぎた。……だが、お前の宿主なら或いは——」

「ッ」

『止せ相棒。戦おうと思うな。今のお前ではあいつに勝てん』

分かってるっての……第一こうしてロクに動けないのに戦えるわけないだろうッ。

「…さあ、今日はここまでにしましょうか。お部屋はご用意しております。皆さまも暫しご滞在ください。——ああ、そうでした。ヴラデイ家の当主様もこの城の地下室に滞在しておりますので、お会いになると宜しいでしょう」

マリウスの言葉で謁見は終わりを迎え、俺達は王の間からの退室を余儀なくされた。

今回の事件も——やっぱり一筋縄ではいかなそうだ。

## MAGIC177 『明けの明星（ルシファー）』

王の間から出た俺達は、用意された部屋まで案内されていた。

「…吸血鬼とは思えない異端な男だな」

マリウスとのやり取りで不機嫌な調子だった先生がぼそりと呟いた。

リアスもそれに同意するように頷く。

「ええ、誇りや血統よりも己の欲求を満たすために動いている吸血鬼なんてそういないわ」

確かに……見た感じだとエルメンヒルデみたいな感じの吸血鬼とはかなり違うタイプだったな。

自分の欲望に忠実な吸血鬼か……まるで人間みたいだ。

「だからこそ、あの手合いは厄介だ。種族の定めたルールを全速力で突き破ってくるかな。このクーデターもそこから始まったんだろう。それに乗った者達が——」

『あの貴族共と言う訳か』

「ああ。マリウスが己の欲求の為に、政治家に協力者が必要だった。アイツに乗った政治家——お偉い共は聖杯による強化と、現政府への不満解消を同時に叶えた。聖杯によつて蘇らせた邪龍がいれば王側の打倒も容易かつただろうからな。……それらを行かせた切っ掛けは『奴』なんだろう……。鎖国されている国だからこそ可能な、腐つた貴族とテロリスト共の宴だったわけだ」

鎖国してた国内でお家騒動、更にテロリストが加わつて更に阿鼻叫喚！……うーん、笑えねえな。

「そう言えば、本来のツエペシユの王様つて今は何処に……？」

ふと疑問に感じた事を尋ねてみると、それはリアスが答えてくれた。

「…瀕死の重傷を負い、現在はこの領土から退避しているそうよ」

マジか……いや、あんなバケモンクラスの邪龍がボディガードなんだ。どうしようもなかったんだらうな。

ツエペシユの王様がごんだけ強いのかは知らないけど、あんなのと相対したらと思うと……寒気が止まらないぜ。

「ツエペシユサイドはカーミラ以外に助けを呼んでないんですか？」

この問いには、先生が溜息を吐きながら答える。

「ああ、呼んでないだろう。『禍の団』が裏で関わっている以上、他の勢力も介入しよう

と根強く交渉しているだろうが、今のところそれは叶っていない。特例で俺達は迎え入れられたがな」

『どこまで古臭い価値観に捕らわれる気だ』

ドラゴンの毒舌に、今回ばかりは思わず同意してしまう。

下手したら自分達も滅びちまうかもしれないのに……。

「…あの娘、何と話してたの?」

黒歌の問いに、先生は目元を厳しくさせる。

「……あの世の亡者共だ」

亡者……。

「死んだ人間の魂……って事ですか?」

「それもあるし、それ以外の異形のもの……混在しすぎて元が何なのか、今がどういう状態なのか、それすらも分からない存在と話してたんだよ」

「随分曖昧にや」

「良く分からんモノと話してた、って思つとけば良い。……聖杯を酷使し過ぎたせいで相当な精神汚染が進んでいるな」

それは分かる。あの子の表情……まともなものじゃなかった。

「ええ、私も直ぐにわかったわ。——ヴァレリー・ツエペシユは心、感情を曖昧なも

のにしている、と」

亡者に魅入られたような状態……って事か。恐らく、俺達をちゃんと認識できていたのかも定かじやない。

彼女は何処か、違うナニカを見つめていたのかもしれない。

「……ヴァレリーに一体何が」

ギヤスパーは表情を曇らせる。……一番シヨックを受けているのはこいつだ。

彼女の顔を見た時から、ずっと泣きそうな顔をしている。

『——あれが聖杯の。生命の理に触れた代償か』

「……そうだ。生命の理に触れ、命とは、魂とは、それらがどういふものなのか、神器を使えば使うだけ、その『作り』を強制的に知る事になる。命の情報量つてのは、思っている以上に果てしなく膨大だ。聖杯を使う度に正者、死者、様々な者達の精神、概念、そんなものを取り込んでしまうのさ。自分の心に、魂にな……無数の他者の意識が心に流れ込み、侵食してきてみる……壊れて当然だ」

……以前までの覇龍と同じ、か。

あの時も心がどうにかなくなってしまいそうだった、だけどヴァレリーは——それ以上の強烈なモノに強制的に触れさせられてるって事になる。

残留思念、怨念や無念、絶望といった歴代赤龍帝の先輩たちの嘗ての遺産……それ以



上のものを溜め込んだしまった訳だ。

「では、彼女は……」

ロスヴァイセさんの問いに、先生はちらりとギヤスパーを見て、重くその事実を吐き出した。

「——もう、普通の状態じゃない。亡者が話しかけてくるのもその特性の一端だ。奴等と楽しそうに話してる時点で、精神汚染は致命的なものになっちまってる。マリウスは、ヴァレリーに相当使わせただろう。：滅び去った邪龍を現世に蘇らせる程だ。その使い方は大規模で大胆、乱用も極まらない程にな」

「……ねえ、イツセーは大丈夫なの？」

「え？」

先生の説明を旗で聞いてきた俺に、黒歌は心配そうに尋ねてきた。

「大丈夫って……」

「……あの陰の気、多分亡者が発する独自の気にあ。あんたがそれに中てられる寸前で遮断したけど……」

「何……おいイツセーッ！」

黒歌がそう言った途端、先生は形相を怖くして俺に詰め寄ってきた。

「な、何すか？」

「お前……まさか亡者が見えてたのか？」

「いや、見えてたって言うか……」

俺も良く分かってないんですけど……言いあぐねている俺に痺れを切らしたのか、今度は肩を掴んできた！

「頼む、見たり、感じた事……何でも良い、ちゃんと話せ!!」

「ちよつと、アザゼル……!」

「え、えつと……見えてはいないんですけど……何か視線を感じた様な、気がし、て……」

余りに必死な様子だったので包み隠さずに話すと、先生は肩から手を離れた。

「……そうか」

「ど、どうしたんすかいきなり？」

「……いや、済まない。俺とした事が、つい、な」

どうにも歯切れの悪い返答だ……一体どうしたんだ？

「そ、それよりもだ！ ヴアレリーの事を何とか助けられる方法、これが最優先だろう」

「っ、助けられるんですか!？」

「……まずは聖杯、神器の活動自体を——っ」

そこまで言うとう先生は何故か口を噤んでしまった。

どうやら前方から誰かがやって来たかららしい。

やって来たのは銀髪の中年男性——何故か、俺の脳裏にはヴァーリの顔が思い浮かんだ——だがその男が来ている衣装、それは……

「魔王の、衣装……？」

俺がポツリと呟くと、目の前の中年悪魔はにんまりと笑う。——それだけなのに俺の背筋には何やらうすら寒いものが駆け上がった。

先生の方を見ると……両目を見開き、さつき以上に激昂した様子で睨みつけていた。

「おおよよ？　こいつあ、奇遇だな♪」

軽い口調で先生に気軽に話しかけてくる……知り合い、か？

「……やっぱり、てめえだったかっ!!」

先生は怨嗟に近い声音でそう吐き出すように聞くと、男は嬉々として受け入れた。

「んほほっ！　おっひさあじやないのお!!　アザゼルのおっちゃん、元気そうで何よりじゃん？」

「……アザゼル、誰なの？」

どうやらリアスも知らないらしい。

先生は絞り出すように答える。

「——リゼヴィム。若いお前でも、この名は親から聞いている筈だ。グレモリーであれば知っていて当然の男だからな」

「っ!?……………嘘、でしょ……………!?」

リゼヴィム……………?　だ、誰だよそれ。聞いた事ねーぞ。

「……………くそつたれなテメエの面は絶対忘れられねえよ、なあ——『リリン』、いや。リゼヴィム・リヴァン・ルシファーッ!!」

!?

る、ルシファー!?　このおっさんが、何で魔王の名を……………つ。いや、もう一人いる。サーゼクス様以外にも、この名を名乗る奴は。

まさか、このおっさん……………!」

「そーんな怖い顔しなさんなつて。老けちゃうぞお?」

「……………先生。もしかしてこのおっさん、ヴァーリの……………」

「……………ああ。正真正銘、前ルシファーと——悪魔にとつて始まりの母たる『リリス』の間に生まれた息子。『リリン』として聖書に刻まれた者——イツセー、お前の考えている通り、現白龍皇たるヴァーリの、実の祖父だ」

やつぱり……………!　道理で見覚えがある訳だ。しかも、前ルシファーの息子かよッ!!

『成程。悪魔達の中で、ルシファーの名が当別扱いされている理由が分かった』

……………このおっさんの存在、って事か。

『前大戦以降から恐らく消息不明扱いとなっていて、しかもそれが今の悪魔社会のトッ

プに位置するルシファアの真なる血族、おまけに母が『リリス』なんてビッグネームだ。下手に存在を公表しちゃえば現政権体勢の悉くがあつという間にひっくり返っちゃうほどの劇薬……だからこそ、ルシファアは冥界にとつては腫物でもあるんだろう』

…このおっさんも、シャルバ達と同じタイプなのか？

『そうは見えんがな』

「……いつは、今の『禍の団』の首領だ。俺がここに来るまでの間、ずっと言っていた『あの野郎』が、こいつだ」

——ッ!?

ちよ、ちよつと待て、この短時間でいろんな情報が出てきてパニックなんだけど!!

目の前のおっさんがルシファアでヴァーリの爺さん、しかもそのおっさんが今の『禍の団』を取り仕切ってるリーダー……てんこ盛り過ぎるだろう!!

首領だつていうならここにいろのも分かるけど……。

「過去、まだ前魔王の血族が冥界を支配していた頃、リゼヴィム・リヴァン・ルシファアは当時のお兄様——サーゼクス・グレモリーとアジュカ・アスタロト様と並び『超越者』として数えられていたわ」

『超越者』……悪魔という種を超えた力を持つ者達の総称——今の悪魔社会ではサーゼクス様とアジュカ様がそれに該当する。

そしてその三人目は行方を晦ましていたらしいけど——このおっさんが最後の一人ってか！

「おいおいおい！ アザゼルおじちゃん、ちゃんと教えなきゃノーノーノーでしょ？」

天界にも嘗て、俺達と同じ——『超越者』がいたじゃない♪」

「……え？」

天界にも……『超越者』が？

先生はリゼヴィムの言葉に苦虫を噛み潰した表情になるも、言葉を吐き出す。

「……その話はまた今度だ。お前は元々前魔王一派の中心の一角だった。現悪魔を引張るサーゼクスのように種の存続、平和を願うタイプじゃない。だからこそ決裂した」

……まあ、現在進行形でテロ組織の首領やってるしな。

絶対に話は合わないだろう。

「悪魔側の旧政府と反政府の内戦時、途中で姿を消した男が今になって……今更、旧魔王派の連中の如く現悪魔政府への怨恨じゃないんだろ……テメエが動く理由は」

「ひやはははっ、ま、やりたい事が出来たから帰ってきたっつーだけだ。アザゼルおじちゃんも元氣してた？ なあんか、全勢力と和平結ぼうとか言っちゃってらしいじゃん？ 俺、マジで応援したいわ〜♪」

『……』まで邪気を隠さずにするのはある種爽快だな』

そんな事言ってる場合かよ！ 確かにこんな言動されたら調子狂うけどさ！

リゼヴィムは今度はリアスへと視線を移した。

「よお、紅髪のお嬢ちゃん。お兄ちゃんは元氣かな？」

「…お兄様に何か含むものでもあるのかしら？」

「まあない訳じゃねーな。同じルシファー名乗ってんだしい。けどね、どうでも良いっちゃーどうでも良いんだけどね。いずれ会いそうだからよろしく言っておいてちょうだいね♪」

「……………」

ふざけた発言にリアスも眉間に皺を寄せていた。

……………この周りが敵だらけというのに、当のリゼヴィムは戦闘態勢を取る様子も見せなかった。

いや、コイツから発せられるオーラは今までの奴とは別次元のものだってのは分かる……………俺達なんて相手にすらならないんだろう。

現にこの状況すらケラケラと笑うだけだ。

「ま、シャルバ君や他の前魔王の血族みてーに憎悪やら、怨恨やらで動いている訳じゃねえさ。悪魔の政治なんざ、サーゼクス君たちだけで十分だろうしい？ 俺は俺で別のやりたい事を、この組織を使って実行したいだけなんだよー？」

先生が米神に血管を噴出させながら憎々しげに言う。

「……ここでお前をぶん殴ってその邪魔をするつてもアリなんだが……ここは俺達の取ってまだ正式に協力関係を結んでいない中立の国だからな。簡単に手を出す訳にもいかないか。どうせこの国での表面上は、VIP扱いなんだろうからな」

先生の問いにリゼヴィムは不快な笑みを漏らす。

「うひゃひゃひゃひゃひゃつ、さーすがはアザゼルおじちゃん、大・正・解！俺はマリウス君の研究と革命の出資者でね。今の暫定政権に取っっちゃ国賓扱いなのですよ。ここで俺に手を出すのは得策じゃねーな。ま、負けるつもりもねーけど？」

……背後ツ！

何者かの気配を察すると、リゼヴィムの背後から小さな人影が現れていた。

背が低く、黒いゴスロリ服に身を包んだ——つて！

「オーフィス!？」

そう、それは今兵藤家にいる筈のオーフィスだったのだ。

いや、正確に言えば、オーフィスと瓜二つの少女だ。

『…その娘、まさかオーフィスの』

「そー！奪ったオーフィスの力を再形成して生み出した我が組織のマスコットガール——

——その名もリリスちゃん！俺のママンの名前を付けてみたのよ、良いでしょ、



キュートでしょ〜？」

「……」

オーフィス以上に感情を感じられない、初めて会った時のオーフィス以上に……いや、そもそも感情という概念があるのかも分からない。

「この子、ちっこいけど、腐つてもオーフィスちゃんだから、めっちゃ強いよ？ 僕ちゃんの専属ボディガードでもあるの〜。ユーグリットが留守の間はこの子が僕ちゃんを守ってくれます！ おじさん感激イ！ ちっこい子が強いってロマンあるくない？」

……確かにリゼヴィムの言う通り、僅かに劣るかもだけど、このオーラは間違いなくオーフィスのそれだ。

さつき出会ったクロウ・クルワツハと同じく、俺達じゃ相手にならないだろう。

「んじや、俺はマリウス君にお話があるのでここを通らせてもらおうよ〜ん。ここでは平和に過ごしましょうねえ〜、ここはヴァンパイア君のお家ですから〜。喧嘩はよくありませ〜ん。プライドが高くて、鎖国なお国は最高です♪」

……アザゼル先生の言う通り、VIPとしてこの国に招かれてるこいつに手を出せば、かなり不味い事態になってしまう。

……かなり悔しいが、俺達は何もせずにただ奴が通るのを見るしかなかった。

リゼヴィムが去って行く中で、先生は奴の背中に告げる。

「……リゼヴィム、ヴァーリがお前を狙っているぞ」

「あーあー、そういうやー、俺たちの孫息子君をグリゴリが育ててくれたんだったな」

リゼヴィムは振り返ると、にやけ面を見せる。

「ちったあ強くなつたん？　俺んちの愚息————アイツの父親よりは強かつたけどさ」

「いずれお前の首も取れるだろうさ」

それを聞くと、リゼヴィムは更に笑みを深くする。

「わーお、そりやおじいちゃんも感激しちまうなア」

そう言うと、リゼヴィムは俺を視線で捕える。

「現赤龍帝君かあ、ほーほー………良い感じになつてんじやねエかア？　白い魔法使い

君も嬉しいんじやなあい？」

「っ、白い魔法使いを知つてるのか!？」

何でこいつが白い魔法使いを知つてんだッ!？」

「ま、繋がりがあある訳じやねーさ。個人的な知りあい、つてヤツ。白い魔法使い君も、ユーグリット君も、君にご執心みたいだからねえ。特にユーグリット君なんて君に大分執着してんぜ?……いやあ、ありやおじさんでもちよつと引いちやうぐらいだけだな」

「何……？」

男に執着されても嬉しくねえっての!!……いや違う、何で白い魔法使いといいユীগ  
リットといい俺に執着すんだよ？

俺、そんな特別な奴じゃねーぞ?!

リゼヴィムはうんうんと頷くと、踵を返して先へと進んでいく。

「吸血鬼と結託してクーデター返しをするなら、何時でも良いぜえ♪ すっげえ期待し  
てっから」

リゼヴィムが去って直ぐに——盛大な破砕音が響き渡った。

見れば、先生が廊下の壁を拳で破壊していた。

「……ヴァーリ、お前の気持ちを理解できて仕方ないぜっ」

魔境と化しているツェペシユ本城——。

俺達は、用意された部屋に移動した後で、地下室にいるというヴラディ家の当主——  
ギヤスパーの親父さんに会いに行くことにした。

## MAGIC178 『呪われし血族』

リゼヴィムと出会って暫く後、俺達はギヤスパーのお父さんが幽閉されているという地下室まで足を運んでいた。

リアスとギヤスパーはヴァレリーが面会したいとの事で王の部屋に連れていかれ、先生は護衛の吼介を伴ってマリウスの息が掛かった上役の吸血鬼らしき者についていった。——前者はヴァレリーの話し相手、後者は先生の神器の知識について聴きたいためだろう。

……俺達は待機させられていたが、漸く面会許可が下りたので、会いに行くことになったって訳だ。

石造りの城内を、明かりを持ったメイドさんに案内されて、地下へと進んでいく。

「ここがヴァレリー家当主様がおられる客室に御座います」

『囚人室の間違いじゃないのか』

お前それ絶対発声すんなよ……内心でドラゴンに突っ込みながら施錠された扉を開き、中へと入っていく。

中は思ったより快適そうな空間で、その中にあるソファに、金髪の若い男性が腰かけていた。

——間違いはない、ギヤスパアの親父さんだ。どこか面影がある。

朱乃さんが一歩出たのを確認して、俺も前に出る。

「初めまして、私達はリアス・グレモリー様の眷属悪魔です。私はリアス・グレモリー様の『女王』、姫島朱乃と申します。この度はご挨拶だけでもと思ひまして、この場に馳せ参じさせていただきました」

「……赤龍帝眷属の『王』、兵藤一誠です。急な来訪で申し訳ありませんが、私もリアス・グレモリー様の『兵士』であります故、こうしてこの場に来訪させていただきました」

……駄目だな、こういう挨拶慣れてねえや。変なことか、無かつたよな？

『大丈夫だ、問題ない』

『ありそうな返答すんな！』

けどギヤスパアの親父さんは特に不快な様子も見せず、挨拶を聞いて頷くと、ソファに座る事を促してくれた。

「どうぞ、お座りください。——アレ、いえ、ギヤスパアについて、話をしに来たのですね？」

どうやら用件は直ぐに理解してくれたらしいが………実の息子を、アレ呼ばわり

か。

義憤に駆られそうな感情をどうにか押し殺し、『女王』の朱乃さんと『王』の俺はソファに腰掛け、後の皆はその後ろに控える。

「直ぐにリアス様とは話をしましてね、お互いにアレの情報を交換し合いました。今後、アレの処遇を巡ってグレモリーとヴラデイでどうしたらいいのか話し合いを進める中で、私がこの城に召喚されました……情けない話ですが、ツエペシユ王が退かれるなど、創造もしていなかったものでしてね。私が幽閉された事で、マリウス殿下が我が息子にリアス様をこの城に連れてくるよう命じたようです」

話の内容の割には、親父さんの口調は特に荒くもなく、落ち着いている様子だ。まるでこの状況を受け入れているかのように。

「…アレ、ですか」

「アレは、ギヤスパーは悪魔としては機能しているのですね。リアス様からそれを聞き、正直驚きました」

「…ギヤスパー君のお母様はやはり……」

「ええ、すでに亡くなっております。アレを生んだ直後にね」

朱乃さんの質問に、親父さんは首を縦に振ってそう言った。

「…難産、だったのでしょうか？」

俺の問いに、親父さんは初めて表情を変化させる。…まるで話すべきか迷うかのよう

に。  
暫しの沈黙、そしてヴラデイ家当主は重く息を吐くと、事実を吐き出した。

「……………いえ、ショック死です」

……………ショック死？

この場にいる全員が訝しげに感じる中で、親父さんは恐ろしげに話しを続ける。

「彼女の腹から産まれたのは……………禍々しいオーラの包まれた、何か別のモノでした」

「何か？」

朱乃さんの問いは、当主の言葉の真意を掴み切れずに発せられたものだろう。

だけどそれは俺達も同じだ……………俺達の知るギヤスパーではなく、この人は俺達が知らないギヤスパーを見ているって事になる。

一体何を見たって言うんだ……………そう思う俺の前で、親父さんは絞り出すように口にしていく。

「……………生まれた時、アレは——人の形をしていなかったのです。黒く蠢く不気味な物体が腹から出てきた。形容しがたい何かが母体から生まれ出た。人でもなく、だが吸血鬼ですらない、怪物とも呼べぬモノが自分に宿っていた」

「そのショックで、亡くなったと……………？」

「…はい。あれの母親はそれを目の当たりにして精神に異常をきたし、そのまま死に至ったのです」

怪物ですらない、何か…：明らかに俺達の知るギヤスパーとはかけ離れ過ぎたその話を、俺達は理解するのに時間が掛かった。

『化け物の出産話とはな。まあ相棒も当事者つちや当事者だからな』

俺の場合はちよつと違くないか？…：だけど最近担って覚醒し始めたギヤスパーの力は、話にも出ていた闇の能力だ。

「それから暫くして、出産に立ち会った産婆を含めた複数の従者達も、数日の内に次々と変死しました」

「呪殺…：生まれただけの赤子が、呪いを発していたと言うのですか？」

俺の問いに、親父さんは重々しく頷く。

「無意識のうちに振りまいていた呪いだと認識しております。生まれて数時間たった後に、闇は通常の赤ん坊の姿に変化しました。ですが、もうその時既にアレの母親はシヨック死した後でした」

『…あの小僧の母親が精神に異常をきたしたのも、恐らくは呪いも影響しているのだろう。母体である母親は直接アイツと繋がっていた。故に呪いを濃く受けやすい状態でもあった所に、形容しがたいナニカが生まれ出た。理解出来ないモノが生まれた事によ



る衝撃の大きさが、精神の許容量を遥かに超えた……と言った所か」

……ギヤスパーがそこまでの存在だって言うのか？

「それをギヤスパー君本人はご存じなのでしようか？」

朱乃さんの問いに、親父さんは首を横に振る。

「いえ、知らせてはいません。何が切つ掛けで真の姿に戻るか分からなかったものから。いたずらに刺激したくはなかったのです。……事情を知らない近縁者が時間停止の神器を気味悪がっておりましたが、私も真相を知る者にとつては、時間を停止させる力以上に、アレの正体の方がよほど畏怖すべきものでした」

親父さんは口元を手で覆って、重々しく言葉を発する。

「……グレモリーの皆さん、そして赤龍帝殿。我々はあれを吸血鬼としても人間としても認識出来ないのです……。異形の存在としか、認識できないのです。アレをハーフとして一応の扱いをさせましたが……それが正しかったのかさえ、分からないのです。そして、正体が分からないまま、私達はアレを外部に出してしまつた……」

……確かに、親父さんの気持ちも分からなくもない。生まれ出た自分の息子が正体の分からないナニカであるのなら、アレ呼ばわりしてしまうのかもしれない。

——でも。

「俺達はギヤスパアの昔がどうだったのか分からないです。でも、今のギヤスパアは悪魔で、俺の後輩で、俺達の仲間です。例えば常軌を逸した存在だとしても、その事実は揺るぎありません」

「……ギャーくんは、私の大事なお友達です。初めて出来た、同い年のお友達なんです」  
小猫ちゃんも一歩出て、凜とした態度でそう言い切った。

それを聞いた当主は、俺達に一言訊いてくる。

「…あなた方は、アレの正体をご覧になられたのでしょうか？」

「はい。その上での発言です」

俺がそう言うと、親父さんは苦笑いを見せる。

「…やはり、グレモリー眷属なのですね。リアス様も、同じ事を仰っておりました」

『人間でもなく、吸血鬼でもないと言うのなら、ギヤスパアは悪魔です。何せ、私がこの手で悪魔に転生させたのですから。正体が何であれ、紛れもなく、あの子はグレモリー眷属の悪魔ですわ』

リアスはヴラディ家当主を前に、毅然とした態度で告げたと言う。

——ギヤスパア、お前も、俺達も、主にめつちや恵まれてるな。

当主は小さく笑みを創りながら、ポツリと呟いた。

「……我々には理解しがたい感情ですが、成程。あの力を見た上でそう仰るのなら、アレは少なくともあなたの方に救われたと思つて良いのでしような」

親父さんとの会話はその後暫し続いたけど、ギヤスパアの正体が掴めそうな情報は特に得る事は出来なかつた。

——明確だったのは、ヴラデイ家はギヤスパアの存在を歓迎していないつて事だ。

恐らくリアスとの会談もグレモリー側にあいつを正式に預ける体で話が進んでいたんだろう。

もうこの地に、ギヤスパアの居場所はない……つて事だ。

『まあ元々迫害されていたぐらいだ。純血と混血をヒス気味に分けて生活してるこの地じゃ、居場所なんてあつてなかつただろうぜ』

それは分かつてるけど……実の親子だぜ？もうちよつと情の一つでもあつていいと思ふよ。……俺とは生まれた環境が違い過ぎるから、言つても無駄だろうけどさ。

会談を終えて地下室を出ると、待機していたメイドさんが会釈して、

「兵藤一誠様、塔城小猫様、ヴァレリー殿下がお呼びで御座います」

……どうやら今度はギヤスパアの恩人からのお誘いだ。

「イツセー、白音、気を付けなさいな」

「おう」

「…はい」

まあギヤスパアの恩人だ、そこまで手荒な事はしないだろう。……精神が汚染されてても、そういう荒っぽい事とは無縁みたいだし。

——何も起こらない事を願うしかないか。

## MAGIC179 『ヴァレリーとの約束』

「失礼しまーす……つと」

「……」

俺と小猫ちゃんが連れていかれたのは、城の上階に位置する室内庭園だった。

…窓が一切ないって事を除けば、人工的な明かりと色取り取りの花、穏やかな流れの水音という、いたって普通の空間だ。

庭園の中央にはテーブルが置かれ、既にリアスとギヤスパー、そしてヴァレリー・ツェペシユが席に腰かけていた。……そのすぐ横から感じる異様なプレッシャーは、勿論護衛役でいるだろう邪龍、クロウ・クルワツハだ。

「……」

一瞥しただけか……まあ、下手な行動を打たない限りは動かないって事だな。ヴァレリーがくすくす笑う。

「あちらは私のボディーガードさん。クロウ・クルワツハさんです」

『ボディーガードとしちゃこれ以上ない適役だな、嬢ちゃん』

お前が喋るんかい!?

『良いだろ別に』

「ふふつ、伝説のドラゴンさんともお話が出来ちゃうなんて、今日はずっとも幸運だわ」  
『いやあ、俺としてもこんな美人な嬢ちゃんときータイムを一緒にさせてもらえるなんて、永い事生きてみるもんだな。あ、もう魂だけだから生きてるとは言い難いな』

「アハハッ! とつてもユニークですね、ドライグさんつて」

『ただの口達者なロリコン野郎だろ』

『誰がロリコンだゴラア!!』

「お前から止めろつて!……ホントすみません、うちの馬鹿共が……!」

ヴァレリー・ツェペシユは一応陛下なんだぞお前ら! こんな事してたら不敬罪でしよつ引かれるわ!!

「兵藤一誠さん」

「は、はいっ!」

「うふふ、そんなに縮こまらなくても良いのですよ? リアス様にも普通に接してくれようをお願いしているから、気兼ねなくヴァレリーと呼んでくださいな」

「い、良いんすか?」

「本人がそう言ってくれてるのだから、是非そうなさい、イツセー」

「ご本人に加えてリアスまでそう言ってくれるのなら……遠慮する必要はないな。

「じゃあ、遠慮なくそうさせてもらおうよ。ヴァレリー」

「はい、有難う」

年相応の良い笑顔だ——でも、その顔には何処か陰が差していた。儂くて、痛々しい……その感じから、彼女がどんな環境で過ごしてきたのかを何となく察してしま

う。

そんな胸中は露知らず、ヴァレリーは今度は小猫ちゃんにも話しかけていた。

「塔城小猫さんは美味しいお菓子をたくさん知っているのよね？　日本にはどういうのがあるのかしら？」

「そうですね。私が好きなのは——」

そこからの会話は酷く普通な、他愛もない談笑が続いた。俺達にとつては何気ない日常の一コマも、彼女からすれば新鮮で興味を惹かれるものが多いらしく、予想外な質問が投げかけられたりもした。

「そうなの。ギヤスパーが女の子の格好をするのは小さい頃に私が着させて遊んでいたからなのよ。最初は嫌がってたけど、いつの間にか自分から進んで着るようになって……うふふ♪」

「も、もう！　ヴァレリー、それは言っちゃダメだよ！」





……聖杯の力を通じた、亡者たちとの会話か。俺は小猫ちゃんに耳打ちする。

「小猫ちゃん、何がわかるか分かるか？」

「……いえ。ですがヴァレリーさんの話しかけてる方角に負の気が渦巻いています。姉様ほどの精度は難しいですが、私でも探知は可能なほどには」

「そっか。ありがとう」

「……イツセー先輩は、大丈夫ですか？」

「ん……大丈夫だよ」

……なんて、ホントはじーっと見られてる気がするんだよな。相変わらず何も見えな  
いし感じないけど、その視線だけは感じてる。

とはいえ向こうから接触してくる感じではないだろう、多分。あの時も多分視線を合  
わせたからだと思うんだよな。

だから意図的に無視する……うん、大丈夫だな。

『俺は何も感じぬが……貴様はどうだ、変態』

『俺もてんで感じぬーな。…後、ナチュラルに変態って言うな』

……お前らが感じなくて俺だけ感じるってのは何なんだろうな？ そう内心思っ  
ていると、ヴァレリーはふと天井を見上げた。

「……ギヤスパーは、お日様を見た事があるのよね」

「うん。僕はデイウォーカーの力を持っているから……ヴァレリーだってそうじゃないか」

ギヤスパアのその言葉に、ヴァレリーは薄く笑った。

「そうよね。けれど……私は、お外に出してもらえないから。一度で良いからお日様の下でギヤスパアとお茶がしたいわ。ピクニックって、とっても楽しいものなのでしょう?」

……そう言えば、生まれてからずっと幽閉されていたんだっけか。神滅具——聖杯の力に目覚めてからは、きつと俺達が想像できないような拘束をされてきたんだろう。

俺達が普段何気なくお日様の元で暮らしている事も、彼女にとっては非日常なんだ……。それを聞いていたリアスは、明るい口調でこんな事を提案した。

「それなら、皆で行きましょう。オカルト研究部のメンバーとヴァレリーとで、日本の観光地巡りはどうかしら?」

その提案にヴァレリーは、眼に輝きを宿して笑った。

「まあ、それは素敵だわ! お日様の下で皆とピクニック、とてもとても楽しそう!」

……やっぱどんな人でも、笑っている顔が一番だな!

「……ああ、リアスの言う通りだぜ! 日本の良い所、俺達が紹介してあげるよ! ギャー

助だつて沢山知つてる筈だからさ。な、ギャー助？」

俺の言葉にギヤスパーはうんうんと頷く。

「勿論です！　そうだよ、ヴァレリー！　僕と一緒に日本へ行こうよ！　女王様になつたばかりで大変かもしれないけどさ……混乱が落ち着いたら、お暇だつて貰えるかもしれないし！　ううん、僕が迎えに行くよ！　日本はととてもやさしい人ばかりで、美味いものだつて沢山あつて、四季がとっても華やかなんだよ！」

おお、何時になく盛り上がつてるじゃねーか、この引き籠もり！

「ギヤスパー、普段引き籠もつてるくせに気合入つてんなあオイ！」

「冷やかさないで下さいよ、イツセー先輩！　僕は真剣にヴァレリーに提案してるんですからあー！」

「そうですよ、先輩。ギャーくんは人生初のデートのお誘いをしてるんです。冷やかし禁止です」

「おっと、それもそうだな。わりいなギャー助！」

「小猫ちゃんまでえ!!」

小猫ちゃんにまで揶揄われちゃ面目丸つぶれだな、こりや！

「ふふ、ギヤスパーつたら」

リアスもおかしそうに笑つてた。

…彼女はこうしてまだ笑えるんだ。だったら、精神状態を元に戻すことだつてまだ不可能と決まった訳じゃない。現に今見せてくれてる笑顔は、彼女が生来から持つものだろう。

なら、皆で楽しい事をすれば——そう思つて楽し気な会話を繰り広げる中、それを引き裂くように第三者の声が。

「おやおや、何が楽しいのかな？」

そう言つて歩み寄ってくるのは——マリウス・ツエペシユ。明らかな作り笑いを浮かべてくる様はまさに歩く悪意そのもの、つて感じた。……そしてマリウスが来た事で、ヴァレリーの顔は再び不自然な笑みを作る。

「マリウスお兄様、実はギヤスパールとリアス様達とお話をしていたのです」

「それはそれは、実に素晴らしい。……いえね、ヴァレリーがお客様と面会されていると聞きましたもので。顔だけでも覗かせてもらつた次第で御座います……これはお邪魔をしてしまいましたかな？」

……随分ワザとらしい質問してくれるじゃないの、この野郎は。それに対し、さつきまでの笑顔とは違う、渋めの笑顔でリアスは対応した。

「いいえ、そんな事はありませんわ。こちらこそ、先程は眷属の『騎士』がご無礼を働いてしまい、申し訳ありません」

あー、ゼノヴィアの態度な……まああれは此方に非があると言つても過言じゃない気が、する……多分。

「いえいえ。下界の者がこの世界に飛び込めば、分からない事もありましようや」

……得に糾弾はしてこない、か。余裕からくるのか、それとも別の思惑があるのか。そのマリウスに、意を決した表情のギヤスパーが進言した。

「あ、あのー！」

「ん。何かな、ギヤスパー・ヴラデー」

冷たさを感じる笑みにも臆さず、真つ直ぐに。

「……ヴァレリーを、解放していただけませんか？ 僕に出来る事があるなら、何でも協力します！……だから、ヴァレリーをこれ以上、苦しめないで下さい！」

……男らしくなつたじゃないか、ギヤスパー。最初に出会つた時の臆病っぷりがまるで遠い過去のようだぜ。

「ふむ、そうですねえ……」

マリウスは暫し考えるように沈黙するが、数秒と経たずにつこりと微笑んでこう言つたのだ。

「分かりました。解放しましょう」

……何?!

「ただし、少しでもだけ時間をいただきたい。何せ政権が移り変わったばかりですからね。女王に据えたヴァレリーがいきなり降りるのも体裁が悪い。ですから、暫しお時間をいただければ、ヴァレリーをあなた方にお渡しいたしましょう」

「……直ぐにって訳には行かないですね」

「ええ。こればかりは申し訳ありませんが、早急に済む話でもありませんから。そこはご理解います」

マリウスは俺にそう言うと、今度はヴァレリーの元に向き直る。

「ヴァレリー、日本に行っても良いですよ。あちらで、ギヤスパール・ヴラディと平和を満喫なさい」

「けれど、聖杯は……」

困惑するヴァレリーに、マリウスは肩に手を置いて微笑む。

「気にせずとも良い。貴方はもう使わなくても良いのですよ。十分に役目を果たしてくれましたからね。聖杯から“解放”されても良いでしょう」

「ほ、本当に……?」

「ええ。宰相の名に於いて、二言はありませんよ」

マリウスのその言葉に、ヴァレリーは歓喜を露にギヤスパールの手を取る。

「ギヤスパール！ 私、日本に行けるみたい……!」

「うん、良かった！ 本当に良かった!!」

ギヤスパーも同じく喜びながら、マリウスに頭を下げる。

「本当に、本当にありがとうございます！」

「いえいえ、良いのですよ。ふふふ」

……当のギヤスパーとヴァレリーは、意味深に笑むマリウスに気付いてないみたいだ。その様子に俺、リアス、小猫ちゃんは口を挟むのも憚れた。

………一体何を企んでやがんだ、コイツ。

『解放』か。やけに強調していた二語だな』

『何も無い事を願いたいけど………』

『それはないだろう、奴のあの様子では』

………ああ、そうだな。

胸中に新たな疑念を抱えながら、ヴァレリーとのお茶会は終える事になった。